THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五百號記念

第四十四年 第十號 第五百一號

氏名	受	返	氏名	受	返
荻原勇	9 20	9 24			
岡本一郎	9 24	9 2[illegible]			
兼岩二郎	9 26	9 28			
中原二良	9 28	9 [illegible]			

社會科學叢書

選擇隨意

社會科學叢書刊行の趣旨

社會科學の領域に於て著書はあり譯書はある。然し特種の題目を捉へて研究を公にした企は尠い。我等は現代學界に於ける各方面の眞摯なる學徒に囑して、かゝる特種の研究を叢續的に刊行せんことを着手した。必しも思想の傾向を同じくするものたるを要しない。唯各々が夫々獨自の立場より、學界に寄與せんとする獨創さに於て共通の基礎に[illegible]

書名	著者	價	送料
英國經濟史要	本位田祥男	一・〇〇	・〇六
社會哲學	土田杏村	一・〇〇	・〇六
ギリシャ人の哲學思想	石原謙	・九〇	・〇六
リカアド派社會主義	堀經夫	・九〇	・〇六
法律哲學	高柳賢三	・九〇	・〇六
社會主義サヴェート共和國同盟の現勢	山川均	一・〇〇	・〇六
社會思想史概説	波多野鼎	一・〇〇	・〇〇
經濟學	高田保馬	一・〇〇	・〇六
社會學概論	小松堅太郎	一・〇〇	・〇六
地代思想史	高畠素之	一・一〇	・〇〇
株式會社論	上田貞次郎	・七〇	・〇六
新カント派社會主義	波多野鼎	・八〇	・〇六
行政學總論	蠟山政道	一・二〇	・〇〇
各國勞働黨・共産黨	藤井悌	一・二〇	[illegible]

書名	著者	價	送料
ドイツ經濟史要	小林良正	一・〇〇	・〇六
墺太利學派經濟學	荒木光太郎	一・〇〇	・〇六
獨逸社會學	新明正道	一・〇〇	・〇六
國家哲學	三谷隆正	・九〇	・〇六
法律思想史概説	小野清一郎	・七〇	・〇六
インタナショナルの歴史	山川均	・九〇	・〇六
勞働組合運動	田邊忠男	一・〇〇	・〇六
ユートピア社會主義	土田杏村	・七〇	・〇六
ファッシズム	藤井悌	・九〇	・〇六
人權宣言論	美濃部達吉	一・三〇	・〇六
正統派經濟學	アモン	一・〇〇	・〇六
社會主義運動史	石川三四郎	一・〇〇	・〇六

以下續刊

東京丸の内昭和ビル

日本評論社

電話丸の内(23)自四一三一 至四一三三　振替東京一六

日本地理

書き換へられた新日本風土記

—全日本學界の總動員により完成されんとする—

編輯と執筆とに現代の權威者を網羅し、寫眞と地圖とに現代科學の許す最高技術を盡し、印刷、裝幀、製本とには現代我國最高の出版物たる「萬有科學大系」及「世界地理風俗大系」との刊行に光榮ある經驗を誇り得る吾人の提供せんとする「日本地理風俗大系」が、あらゆる意味に於て我國空前の大出版たる事は玆に喋々するまでもない。先づ内容の精確を期するためには學界各方面の專門家を煩はして、地文的と人文的の兩方面より親しく全國各地を踏査すると共に、優秀なる技師を以て組織せる弊社特設撮影班は、專門學者指導の下に、航空寫眞に一般寫眞に、全國各地を隈なく寫眞化し、記事と寫眞と相俟ち現代日本の生きた姿を活寫せんとするもので、方に之れ書き換へられた昭和日本の新風土記として、從來漫然として眺めてゐたに過ぎない一切の地理的現象—山川、湖沼、田園、都市、建築、名勝、史蹟、政治、經濟、遊樂、行事、衣食住等は、之により初めて玆にその眞の意味を展開し來るべくかくて吾人は玆に眞實の日本を把握することが出來るのである。

全十二卷

1 總論（地文）
2 總論（人文）
3 東京及その附近
4 關東北部及奥羽
5 東海地方

編輯委員

京都帝國大學教授工學博士 天沼俊一
京都帝國大學教授文學博士 石橋五郎
東京帝大名譽教授工學博士 伊東忠太
東京女高師教授理學士 飯本信之
京都帝國大學教授理學博士 小川琢治
前鐵道省運輸局長 筧正太郎
東京帝國大學教授理學博士 加藤武夫
文學博士 喜田貞吉
史蹟名勝天然紀念物保存[illegible]

東洋經濟新報社編纂

明治大正國勢總覽

明治大正財政詳覽

普及版發行

全貳卷（分冊不許）　四六二倍　總クロース　函入　一、五二四頁

一組金拾五圓　送料六三錢

全國書店取次、內容見本進呈

■開國發展史　本書は我が開國以來の國勢の推移、發展の跡を如實に示した開國史にして又僞らざる國勢伸展系圖である。

■統計圖書館　本書は關係數千圖書の湮滅を防ぎ、又數千冊子備付の勞費を省き、且之を一書に纏めて日常の閲覧利用の便に供したは勿論、現在一部しかないと云ふ貴重なる資料を多分に採入れてあるが故に、如何なる圖書館にも、本書に纏めたる丈の資料が蔵してある所は一ケ所もない。從つて本書一組を蔵する時は、宛然統計圖書館を常備してゐるも同様である。

■空前絶後の大出版　本書編纂に要したる時日滿二ケ年半、延人員一萬六百餘人、校正を繰返したること十回以上、而も此の多大の費用をかけたる文獻が世界一の廉價で頒布される、眞に空前にして又絶後の出版。

財政詳覽

本書は中央及び地方財政における、諸會計並に諸團體の收支計算其の他を明治初年以來最近に至るまで、累期對照的に示し、更に之に分析綜合の計表を加へ、なほまた各種税の税率納期並に沿革、財政年表其の他財政關係の必要事項を殆んど漏れなく網羅す。

國勢總覽

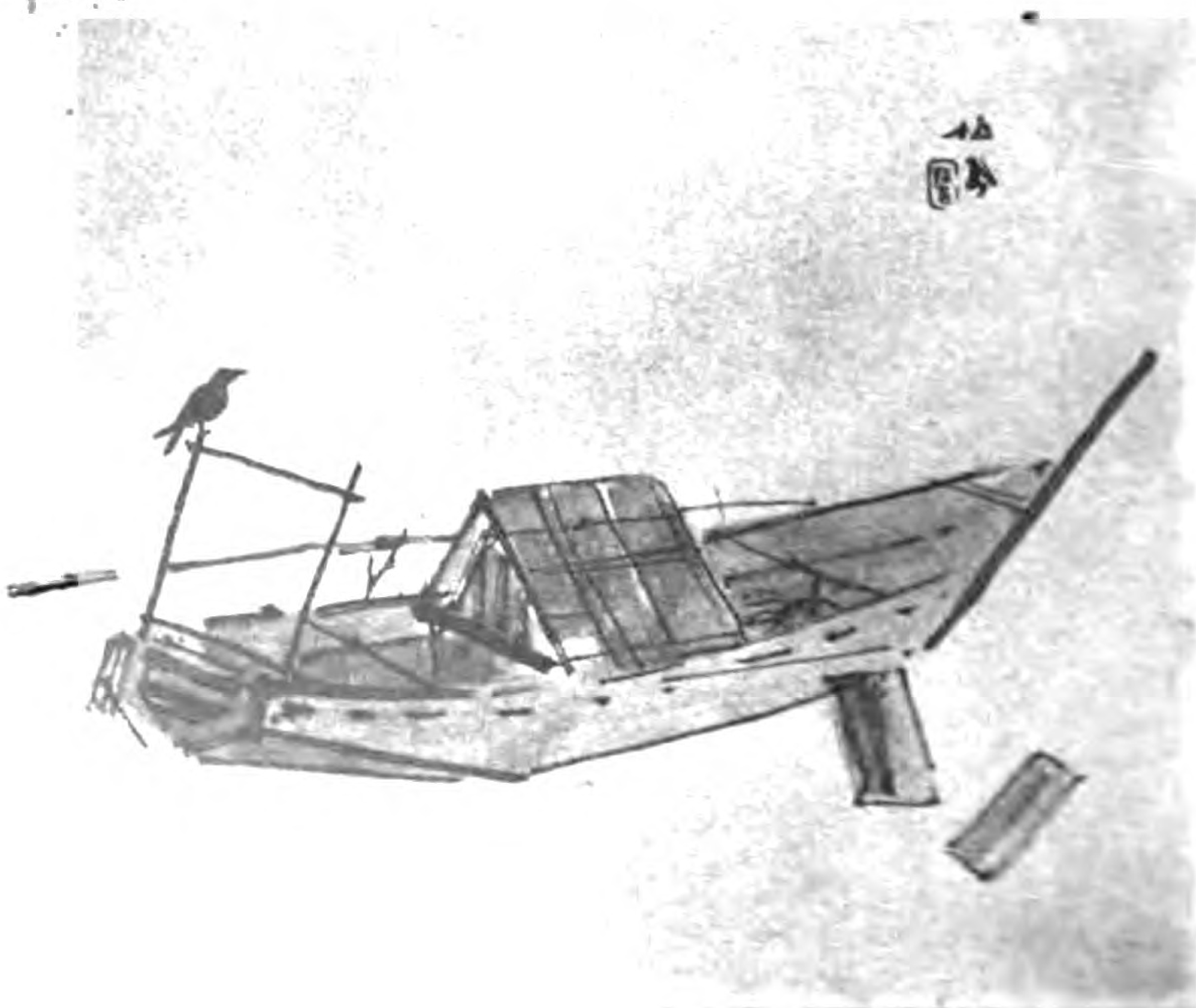
本書は我が開國以來の國勢の推移、發展の跡を窺ふに足るべき、土地、人口、社會、宗教、教育、文化、生活、勞働、所得、賃銀、物價、相場、株式、公債、社債、生産、需給、取引、銀行、信託、貸金、金融、會社、組合、企業、商事、農業、山林、水産、鑛業、工業、貿易、運輸、海運、交通、通信、電氣、瓦斯、鐵道、保險、共濟、財政、政治、軍事、司法、警察、國富に關する、あらゆる種類の統計を蒐集す。

東京牛込天神町　振替東京六五一八

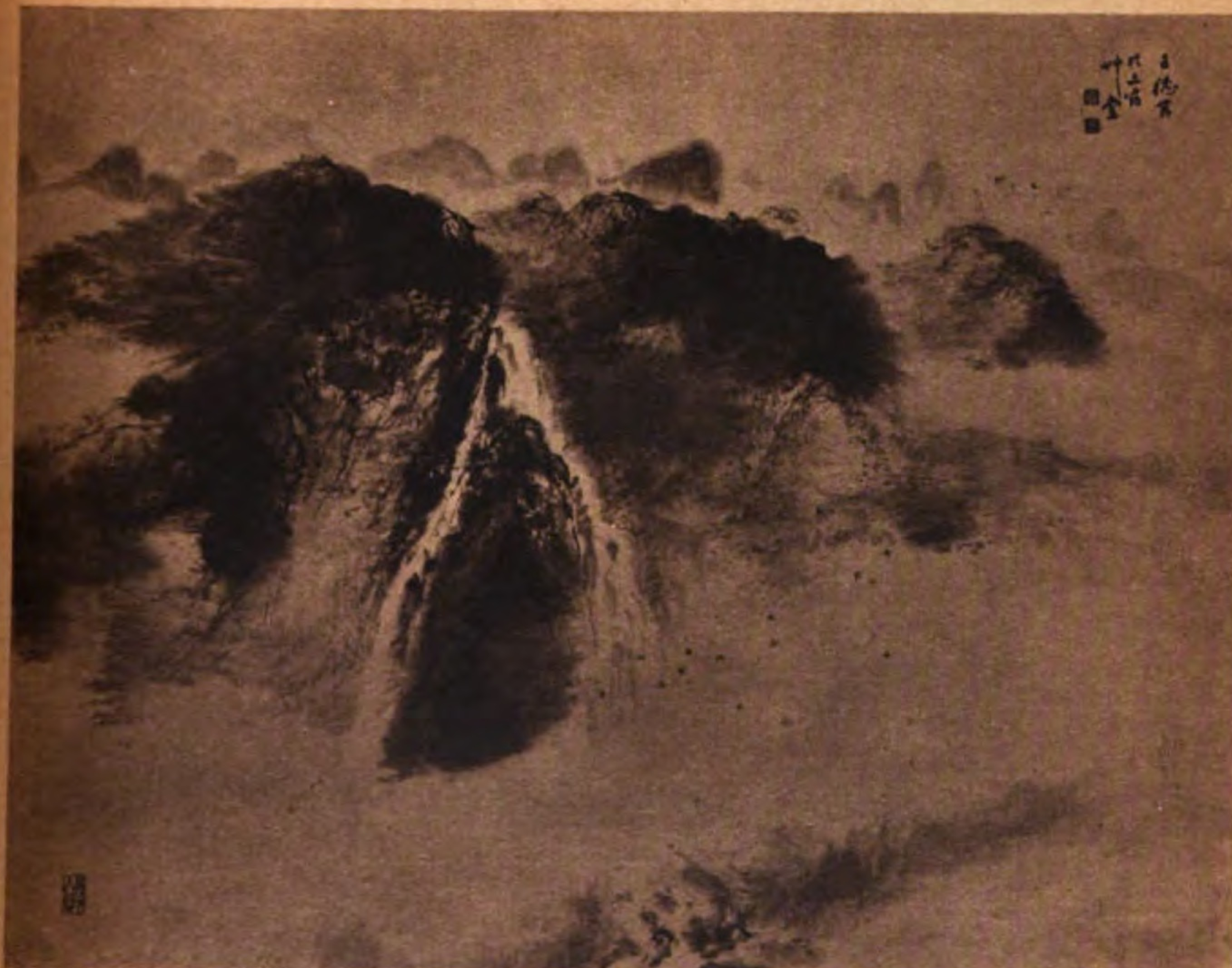
東洋經濟新報社



月明　横山大観



秋　竹内栖鳳



飛泉

平福百穗





やんま　小林古徑





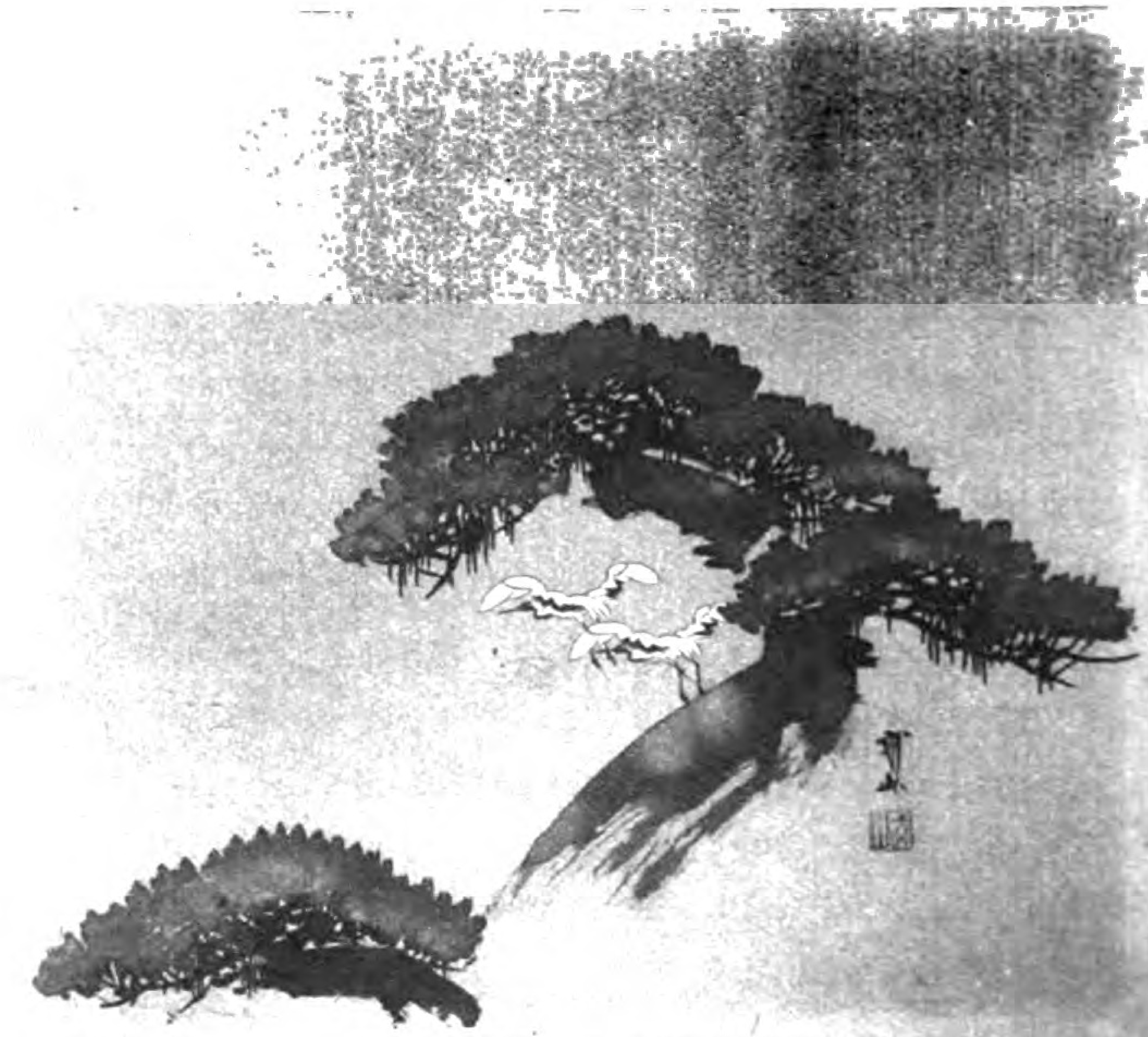
新蔬　安田靫彦



五清圖　小室翠雲



茄子　近藤浩一路



相生の松　木村武山



[illegible]　堂本印象



觀畫　前田青邨



萬峰朝宗圖　飛田周山



行水　鏑木清方



南薫江上　小川芋錢

歸漁　川合玉堂



満獲　小杉放庵



雨後の東山　平井楳仙





内海靜波　山口蓬春



納涼　森田恒友

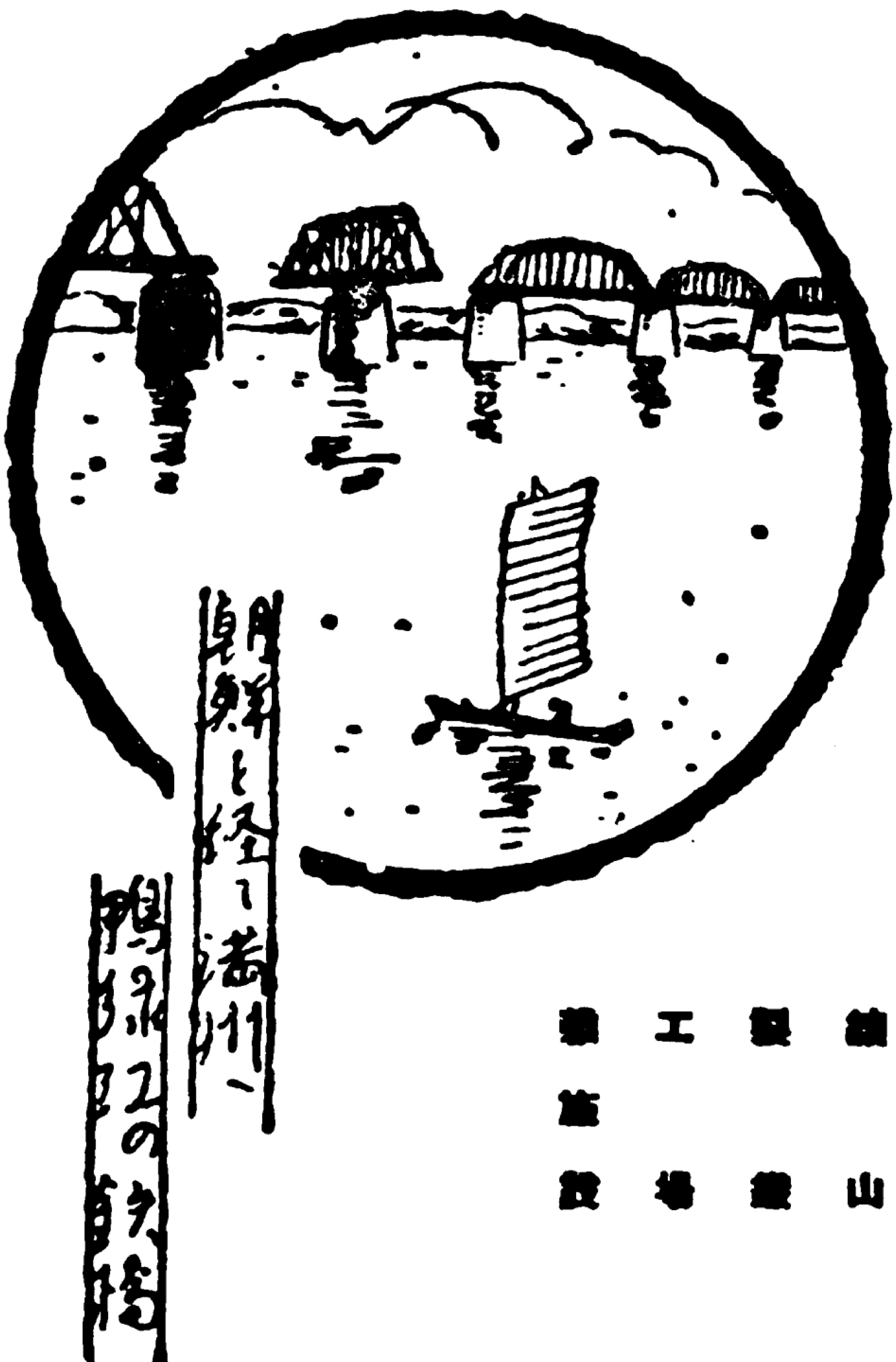


水暖　山村耕花

資本金　四億四千萬圓

從業員　参萬五千人





事業と投資額

鐵道	貳億貳千五百萬圓
港灣	五千萬圓
船舶	四百參拾萬圓
地方（教育・衞生・土木等）	七千五百萬圓
旅館	參百萬圓
鑛山	壹億參千萬圓
製鐵	四千六百萬圓
工場	壹千貳百萬圓
諸施設	五千萬圓

南滿洲鐵道株式會社



高原　石井鶴三



宮島　中澤弘光



日向葵　和田英作



静物　津田青楓



達磨　鹿子木孟郎



九十九里　片多徳郎

松　石川寅治



偶坐漁楽を論ず　中村不折



東海仙果　藤島武二



鮎



川端龍子

北信凸亢山の遠望



山本鼎

やけ瓜



長原孝太郎

えすぱにやぽるつがる記

新刊

木下杢太郎著

四六判四八頁
極美装函入
挿圖四十三圖

定價參圓　送料書留廿七錢

木下杢太郎君は昔からペダンテスクだと云ふ評判だつた。今度の此本の裡にも闘牛、ベラスケス、エル・グレコなどでない、變な掘出物が陣列せられてゐる。世界に一冊しか無い十六世紀の日本文字入の刊本、未だ出版せられざる日本關係の古文書と云つた類である。唯此著者には少し甘いロマンチスムが有るので、蠧魚に食まれた古卷、コルドバ街頭の水瓶も、其本然の姿よりはよほど詩的に紹介せられて居る。本書の外篇は日本に於ける初期吉利支丹に關する雜稿を收めたが、此方面に於て從來閑却せられてゐた源泉的研究の萌芽を看ることが出來る。

内容大要　**西備前記。**リエウ・ド・セエヌ。アンリイ・コルヂエ教授。ボルドオ。**えすぱにや記。**サン・セバスチアン。ハピエルの城。サラゴツサ。マドリイ市。アルカラ。トレド。コルドバ。セビイア。シマンカス。**ぽるつがる記。**リスボア。コインブラ。**外篇。**日本の發見。日本に於ける吉利支丹の運動。アレツサンドロ・ワリニヤニ師の第二回の來朝。千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題。十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版。アジユダ文庫に在る日本關係の未刊書に關する譽書。グイドオ・グワルチエリが日本使節記に就いて。ポルトカルロ・スパニヤよりイタリヤへ。四遺歐使節の歸朝。支倉六右衛門の事實アマチガ「奧州記」。西班牙風物と其國の植民傳教史。

新村出著
南蠻廣記
定價參圓　送料書留拾八錢

新井出著
續南蠻廣記
定價參圓　送料書留十八錢

天沼俊一著
埃及紀行
定價貳圓五十錢　送料書留十八錢

和辻哲郎著
古寺巡禮
定價貳圓五十錢　送料書留十八錢

振替東京二六二四〇番
東京神田神保町

岩波書店

電話九段（三一〇八番・三一〇九番・一〇二二番）二二八一番・二六二六番

日光まで電車全通

十月一日開業。四十分毎に發車。淺草驛より

東武日光驛（日光町中央）まで三時間。賃金二円余

○日光東照宮　中禪寺湖
○鬼怒川温泉　鬼怒渓谷
○伊香保温泉　榛名山
○秩父長瀞　三峰山
○赤城山

東武鐵道

生果三酸　岸田劉生



黒部渓谷　中川一政

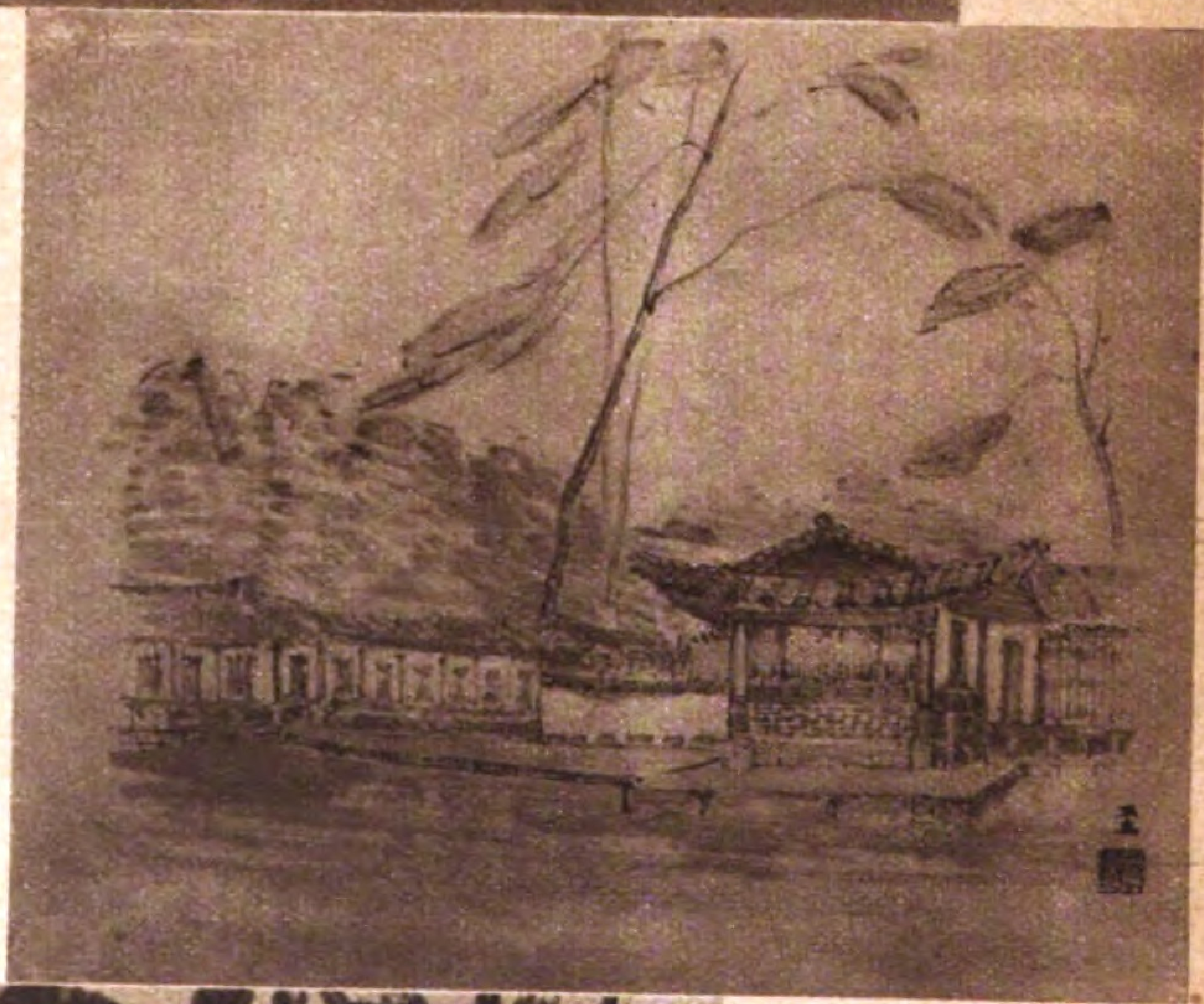


靜物　南薫造





柘榴　滿谷國四郎



逸題　田邊至



枇杷　石井柏亭



雲仙ゴルフ場　―　富田溪仙

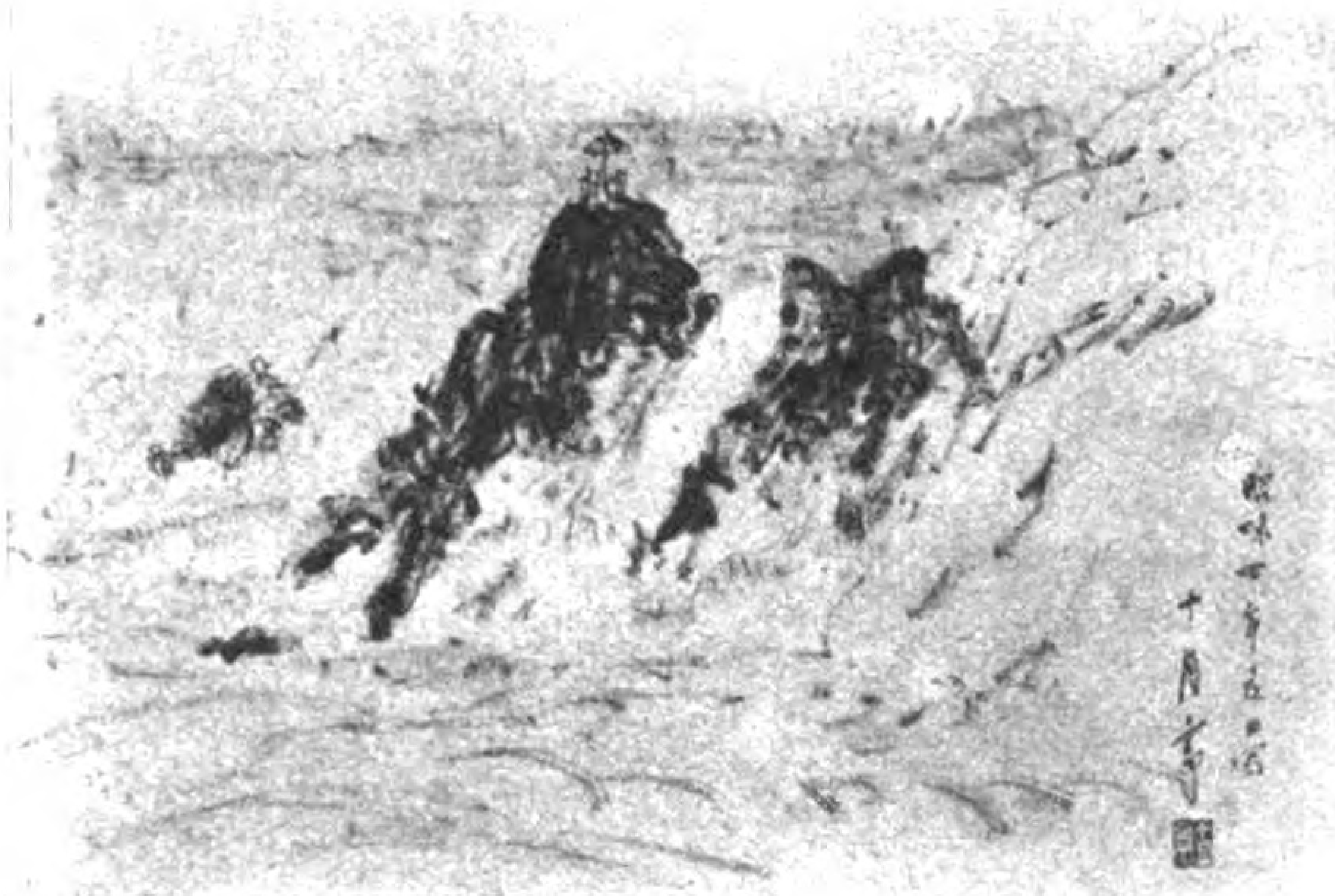


草花　齋藤與里

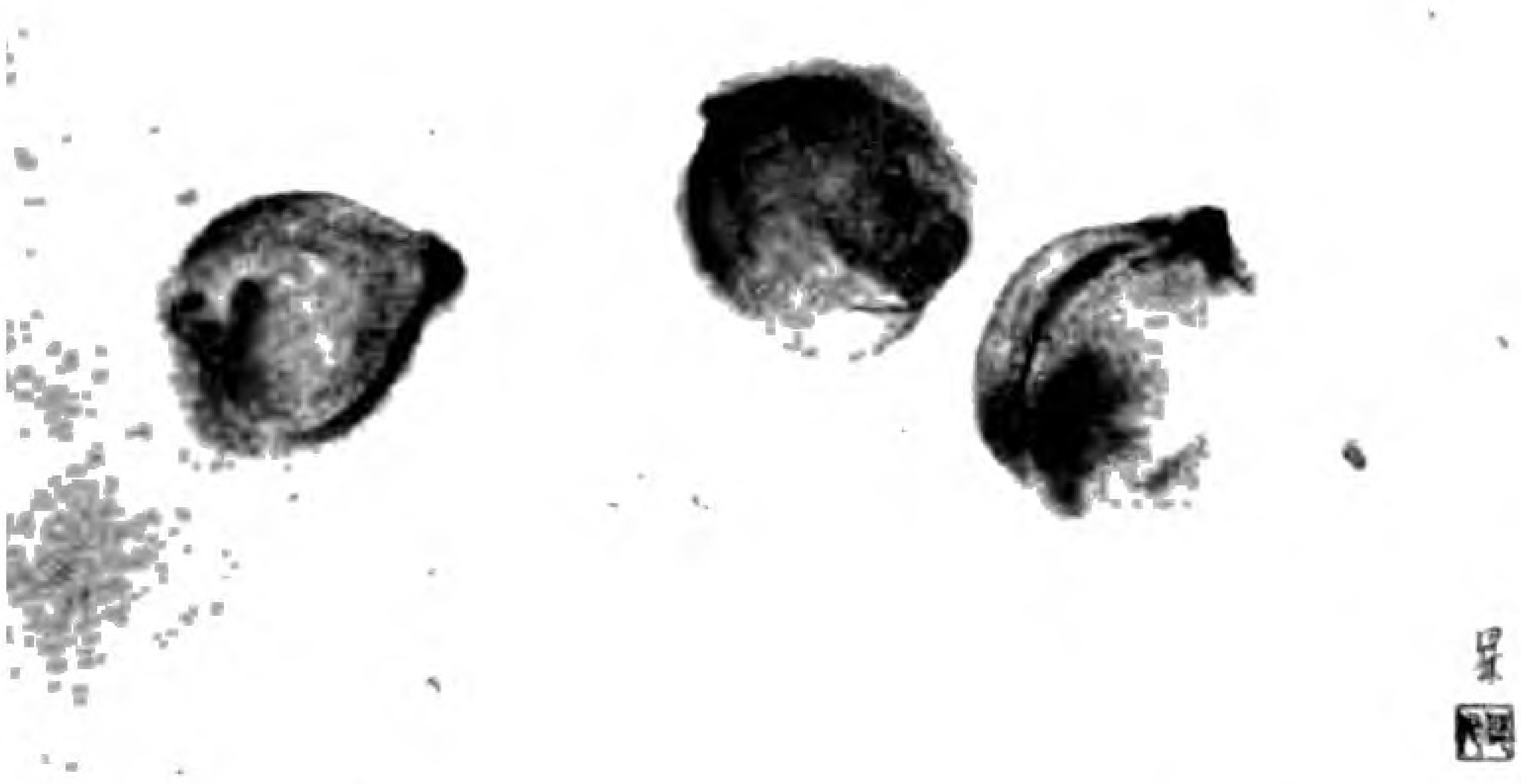


麥　牧野虎雄

ラインの瀑布　有島生馬

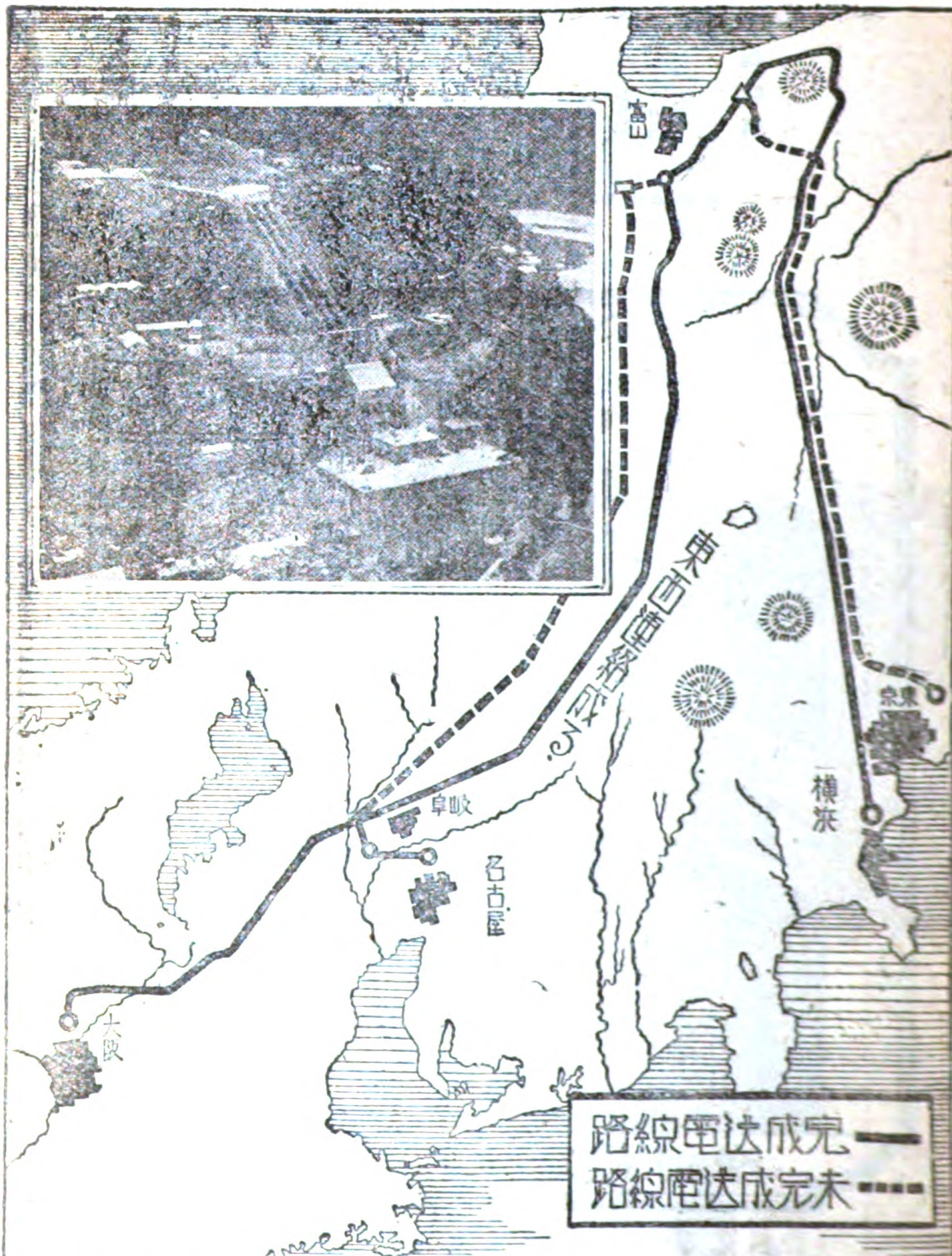


桃　長谷川昇



公園　安井曾太郎





日本電力株式會社

供給區域 東京府 京都府 兵庫縣 愛知縣 神奈川縣
富山縣 岐阜縣 ニ亙リ拾市貳拾五郡

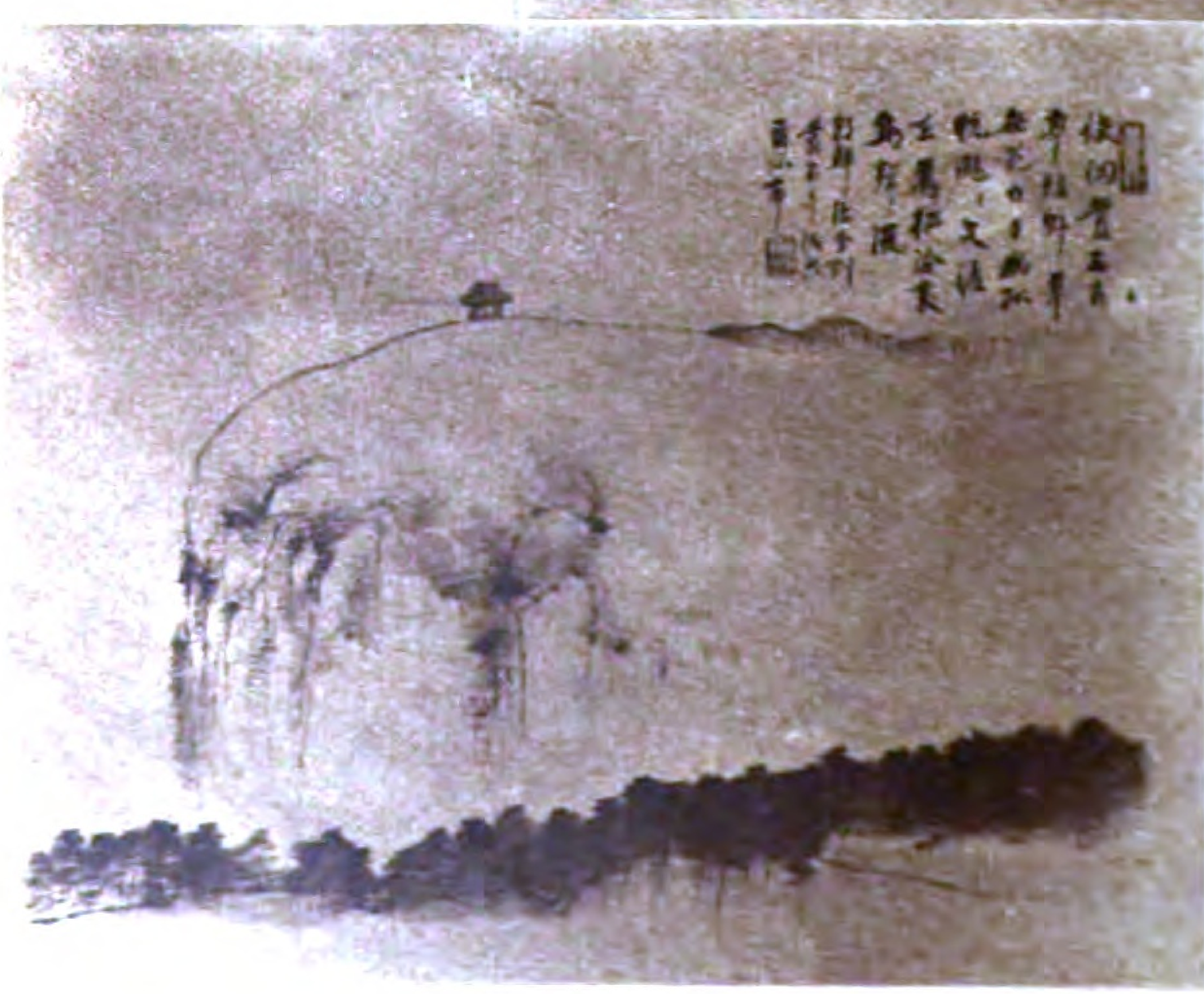

新種保険
最も新しい
最も有利な
安田生命
旧稱 共濟生命
一、掛金の安い加入の容易な「昭和普通養老」
二、配当のいゝ楽しみの多い「昭和特別養老」
三、安い掛金で一生の安心が得らるゝ「昭和終身保険」
東京市日本橋鎧河岸



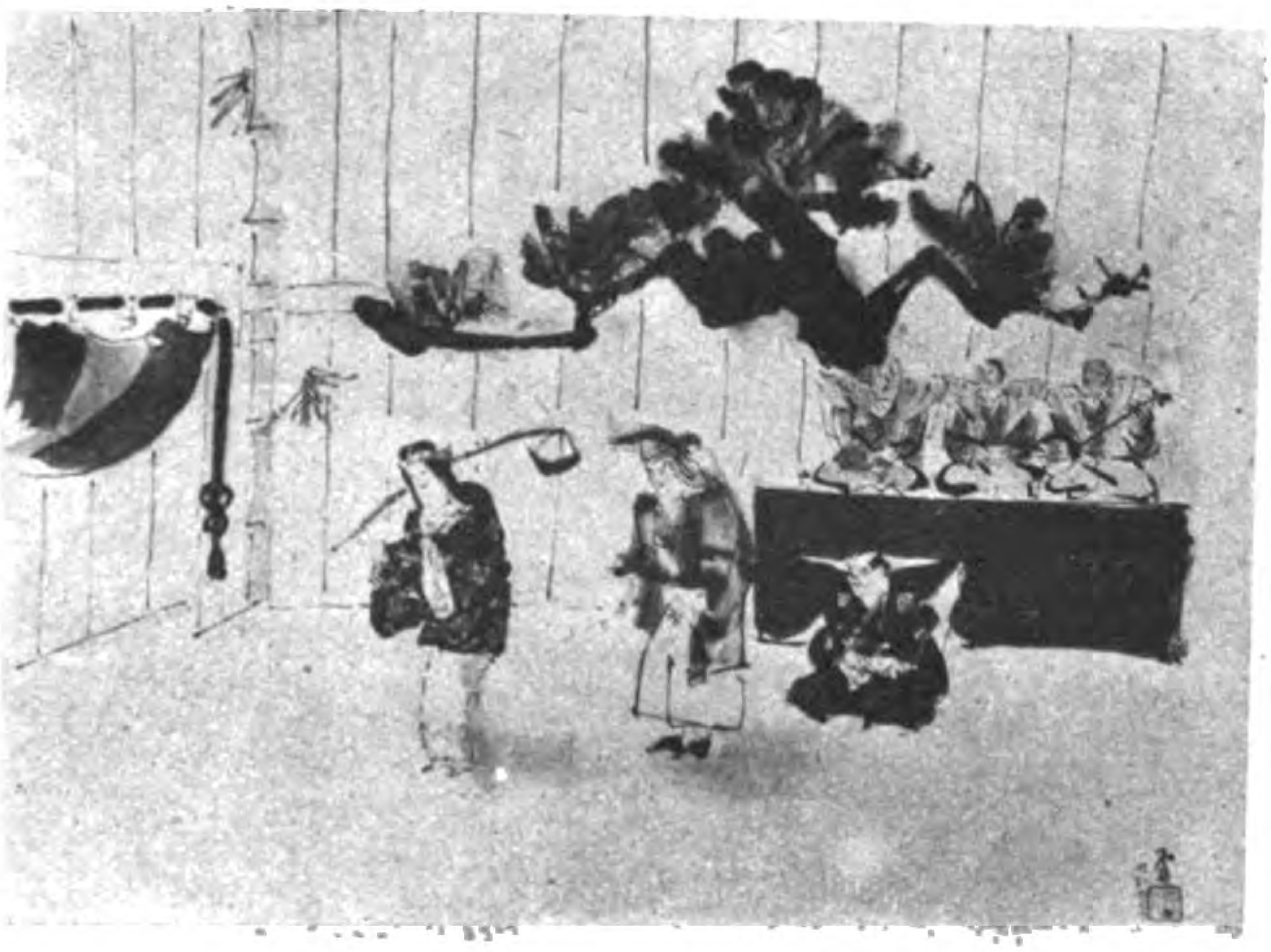
濠端の雨　正宗得三郎



躑躅　坂本繁二郎



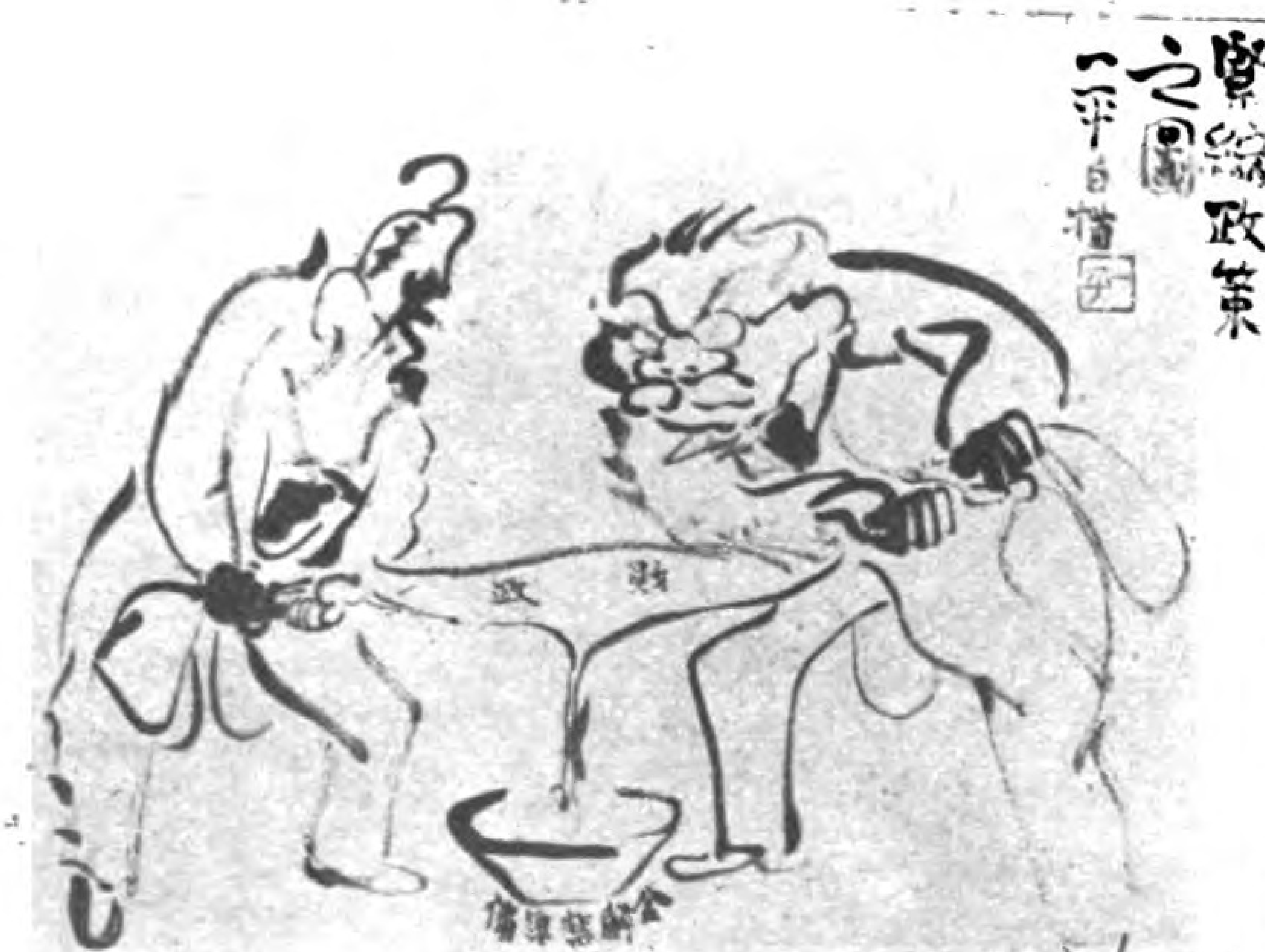
靈石亭　水島爾保布



（歌舞伎十八番の内）
蛇柳　水村莊八



桃　福田平八郎



緊縮政策之圖　岡本一平

水郷伊太利威尼斯風景

山下新太郎





朝暾

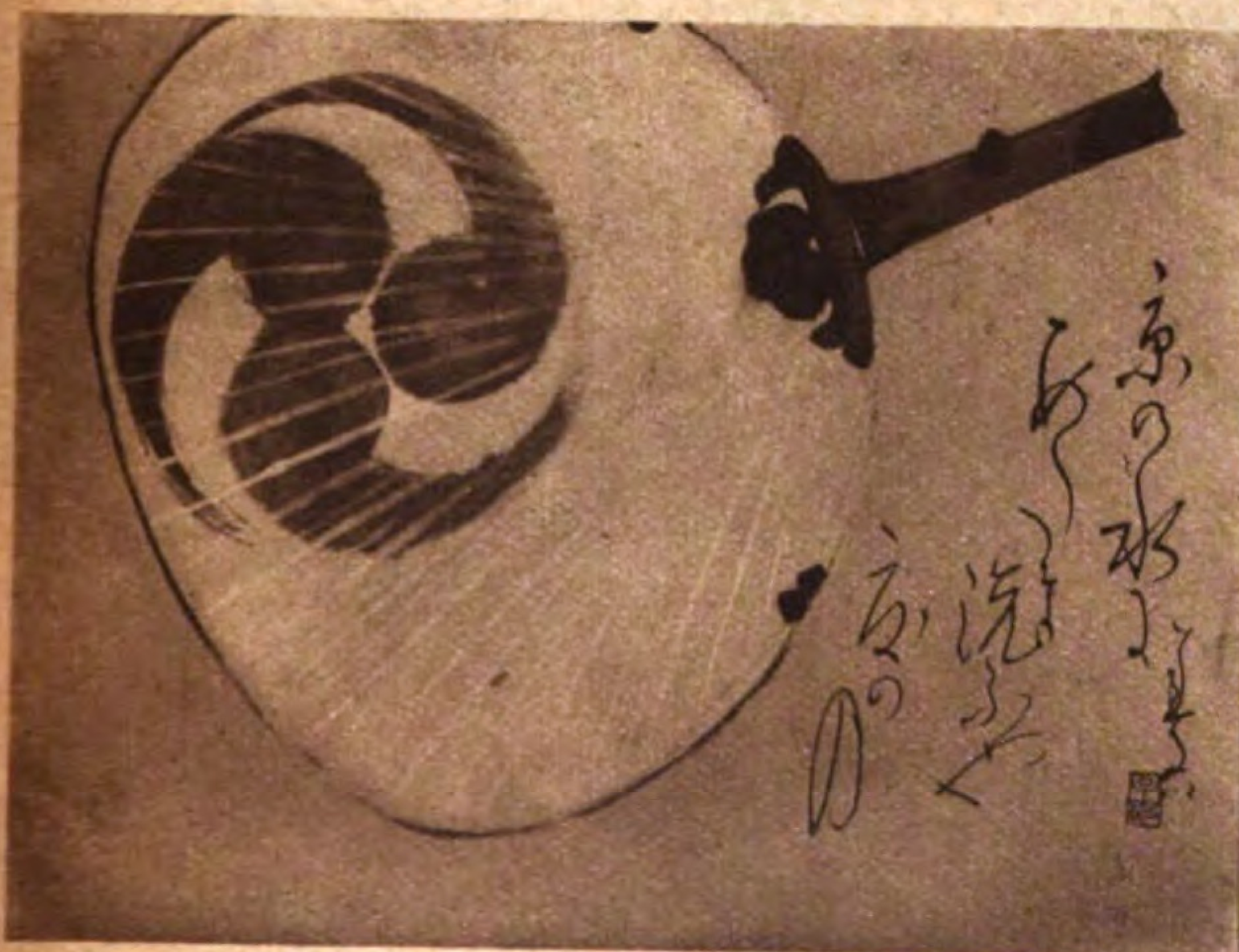
小堀鞆音

紫式部

中村大三郎



祇園團扇　都路華香

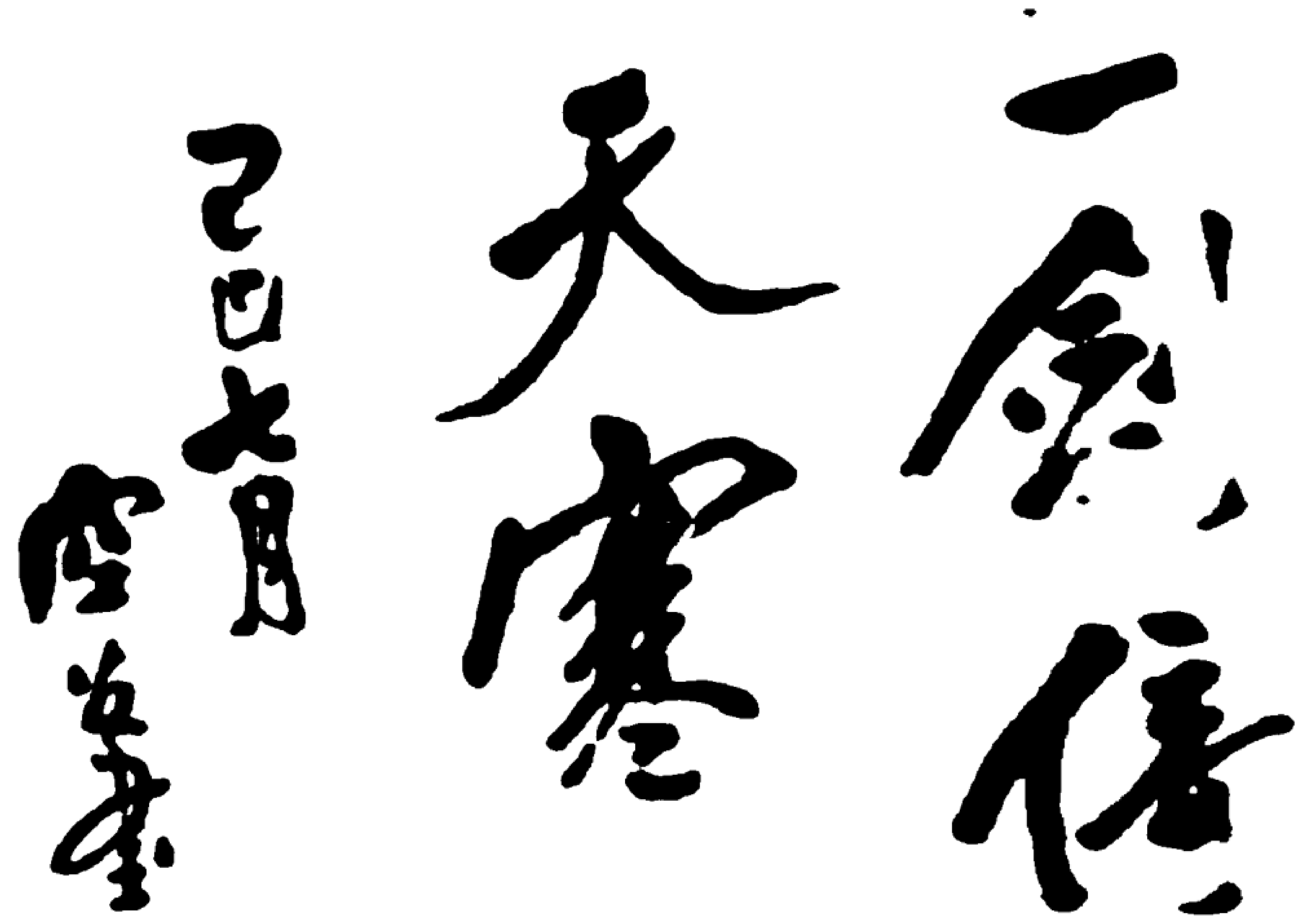


右
秋草小禽
荒木十畝

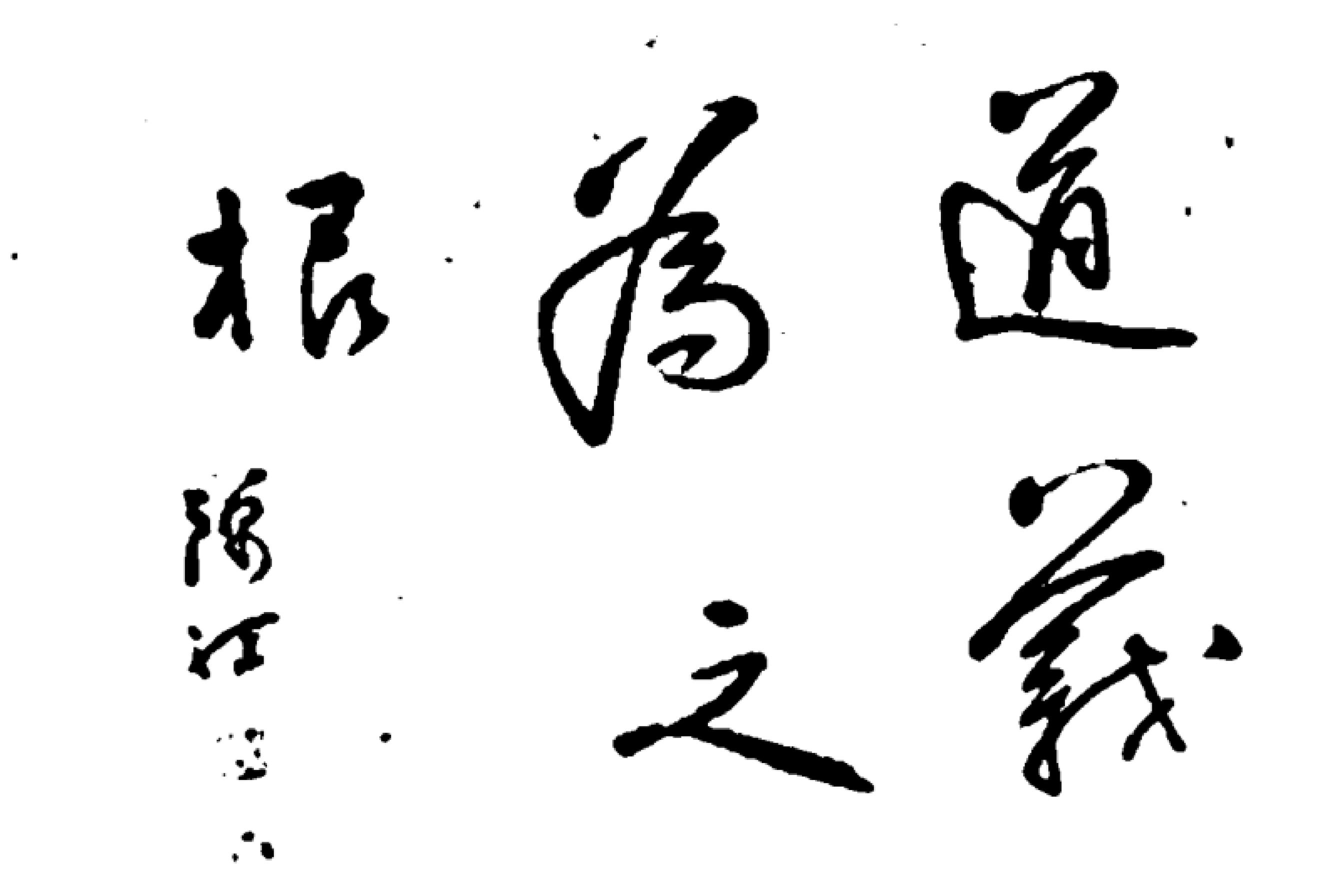




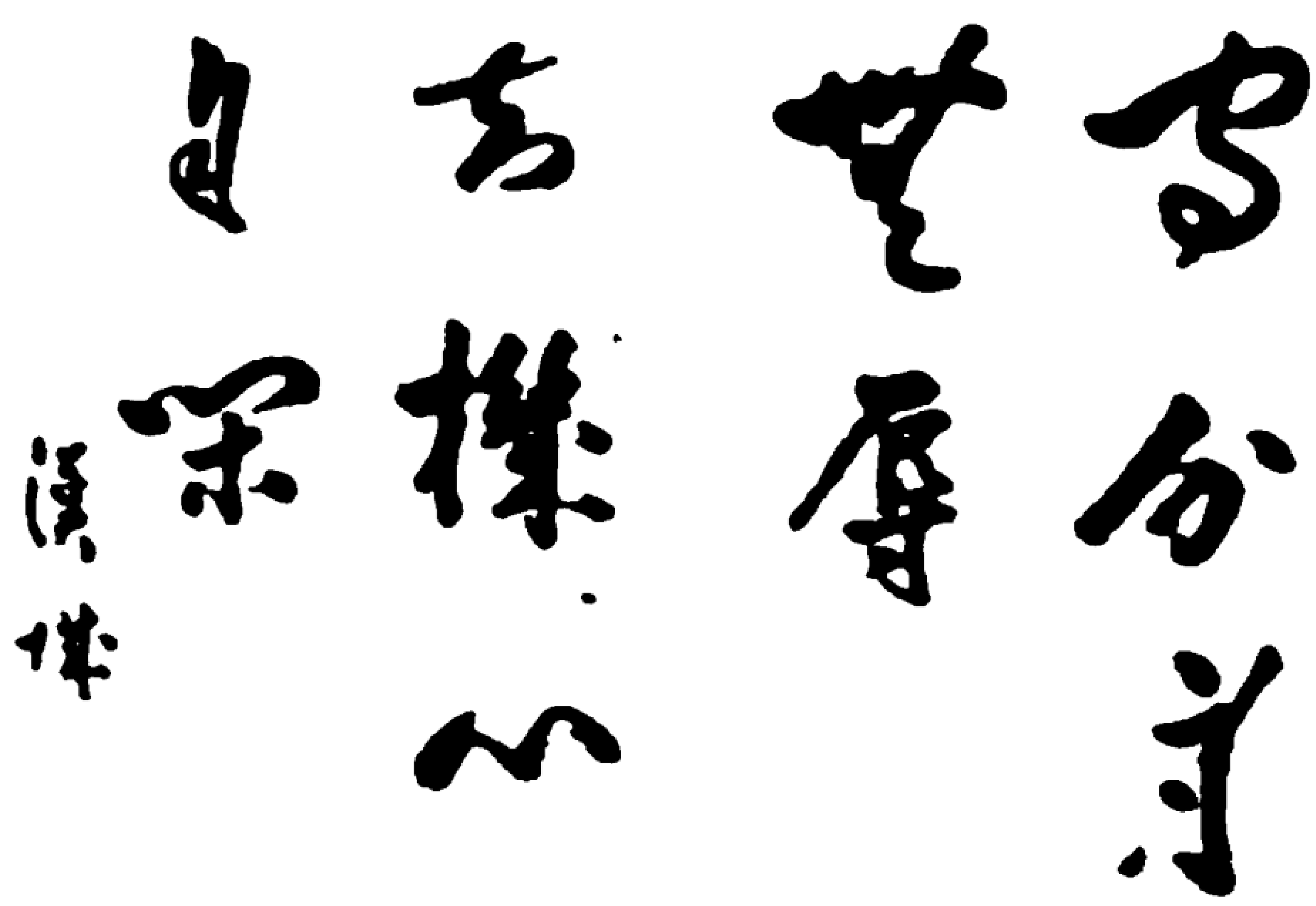
書齋小景　小野賢一郎



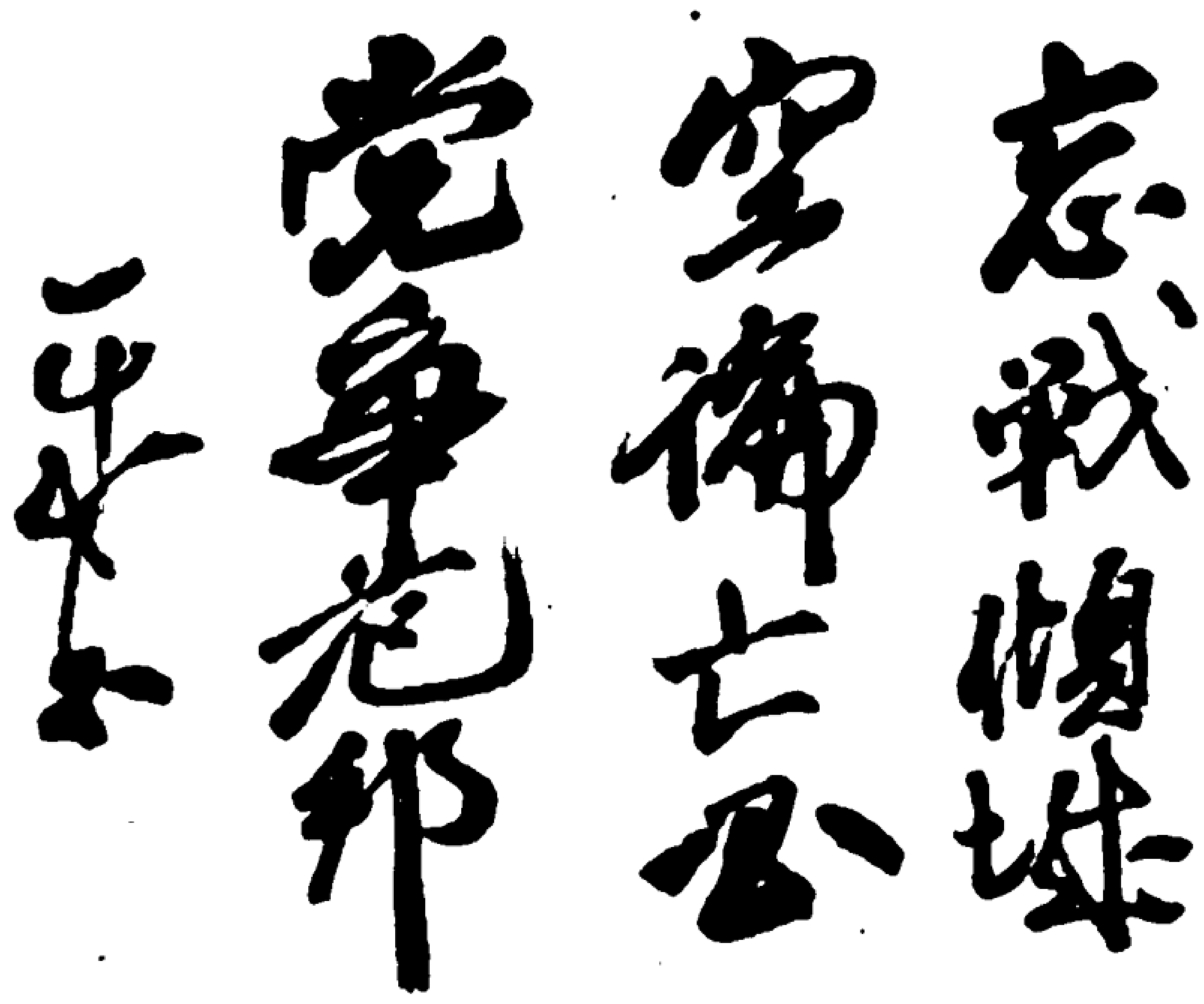
(內閣總理大臣 濱口雄幸)



(鐵道大臣 江木翼)



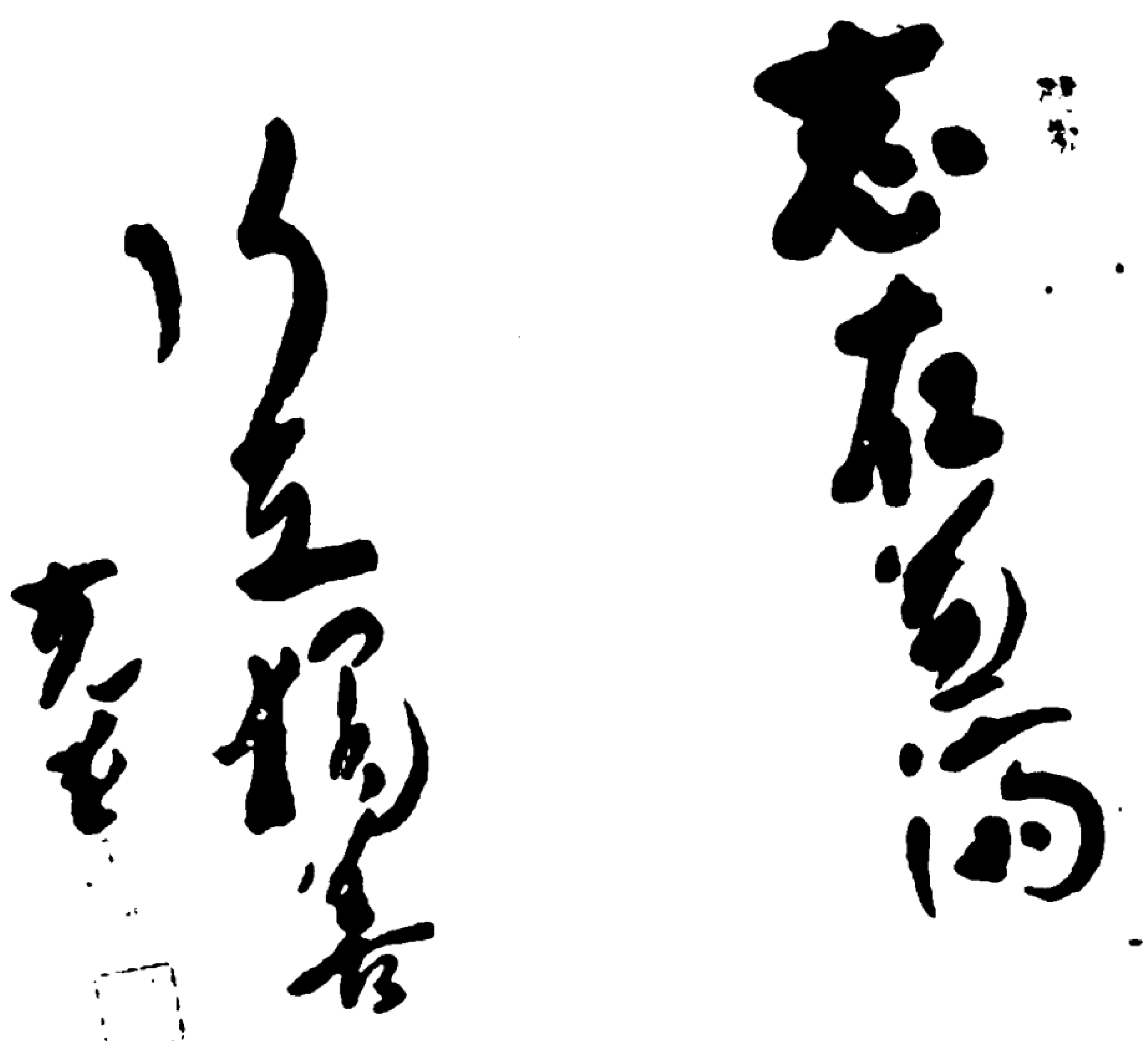
(內務大臣 安達謙藏)



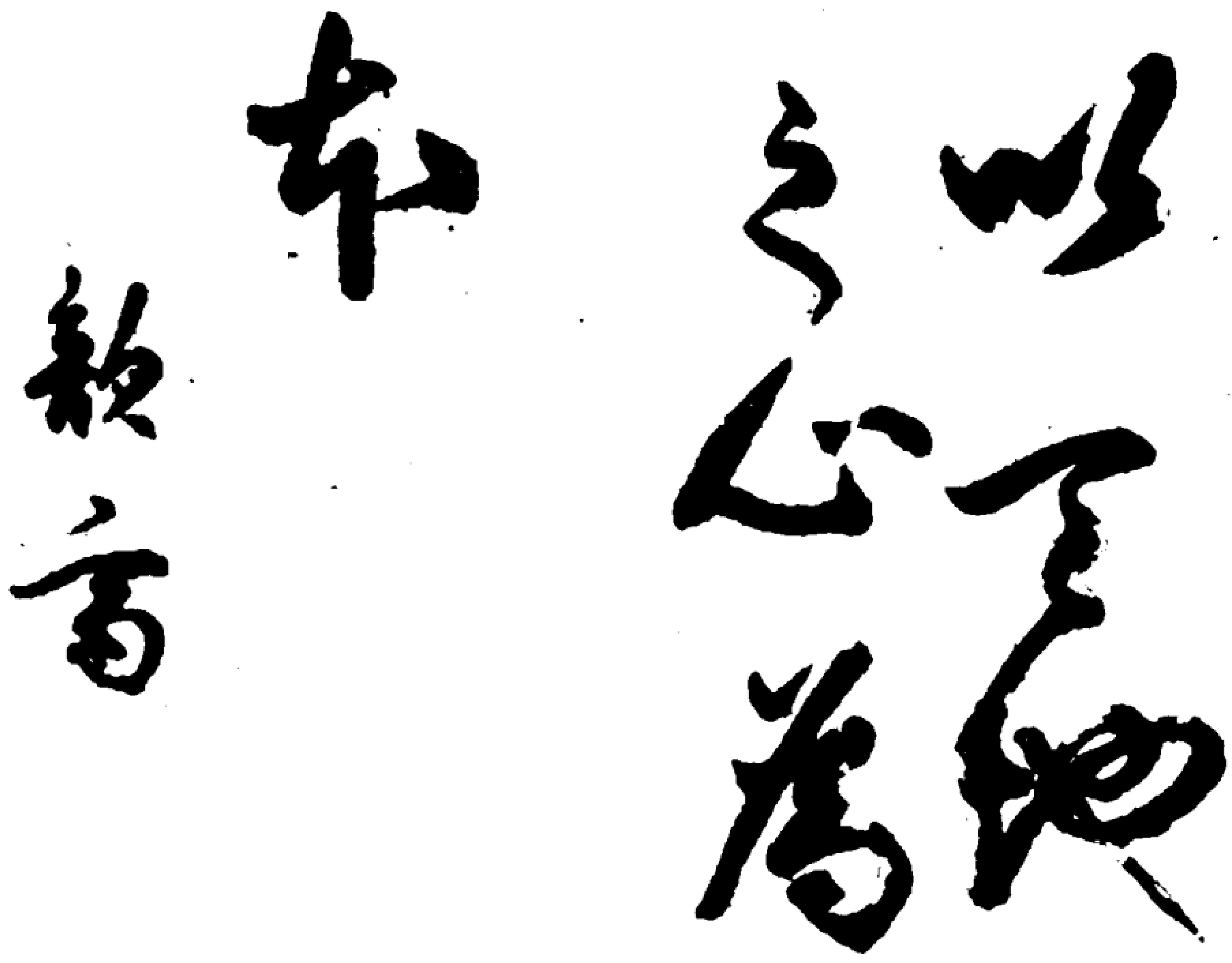
(陸軍大臣 宇垣一成)



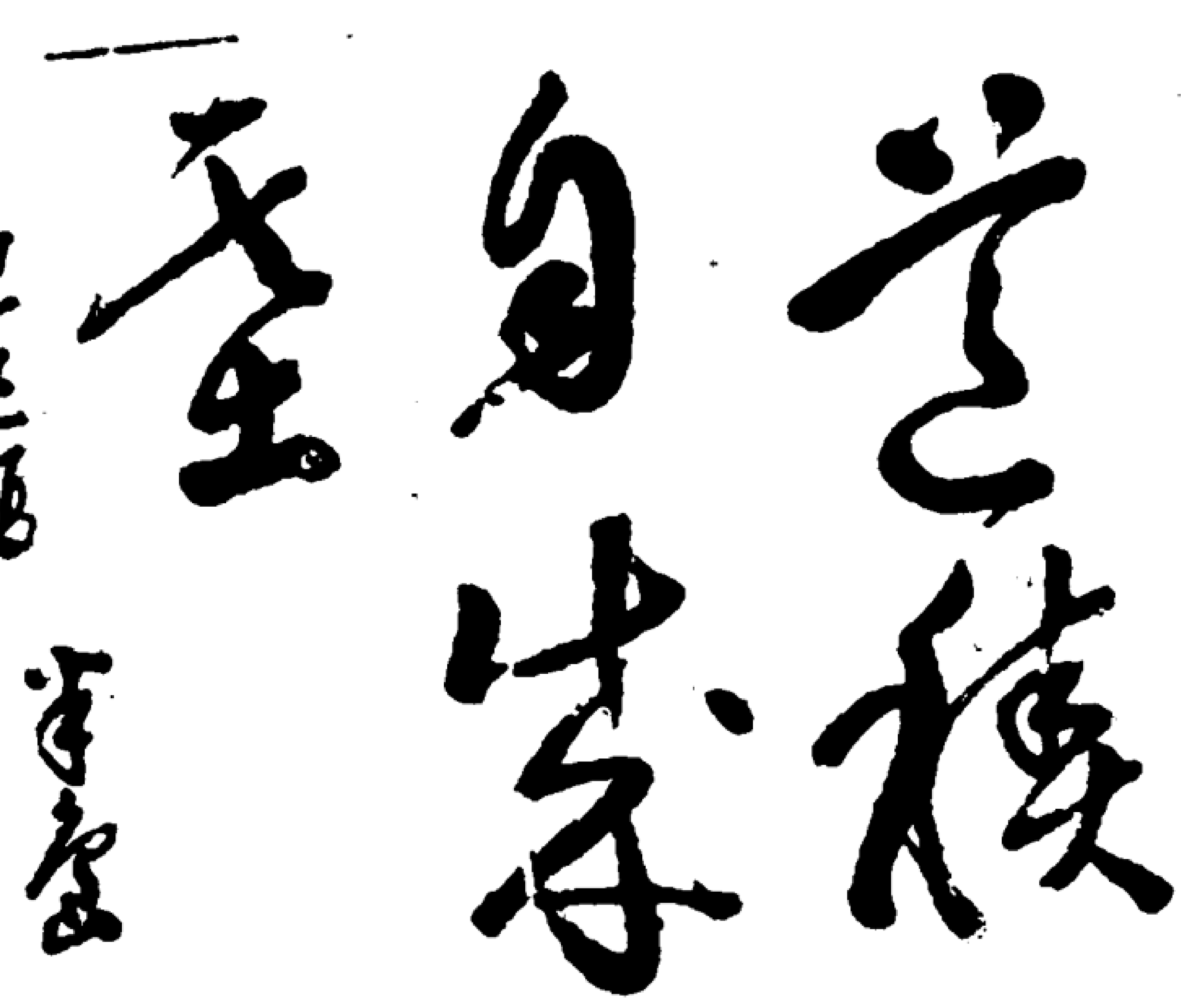
(司法大臣 渡邊千冬)



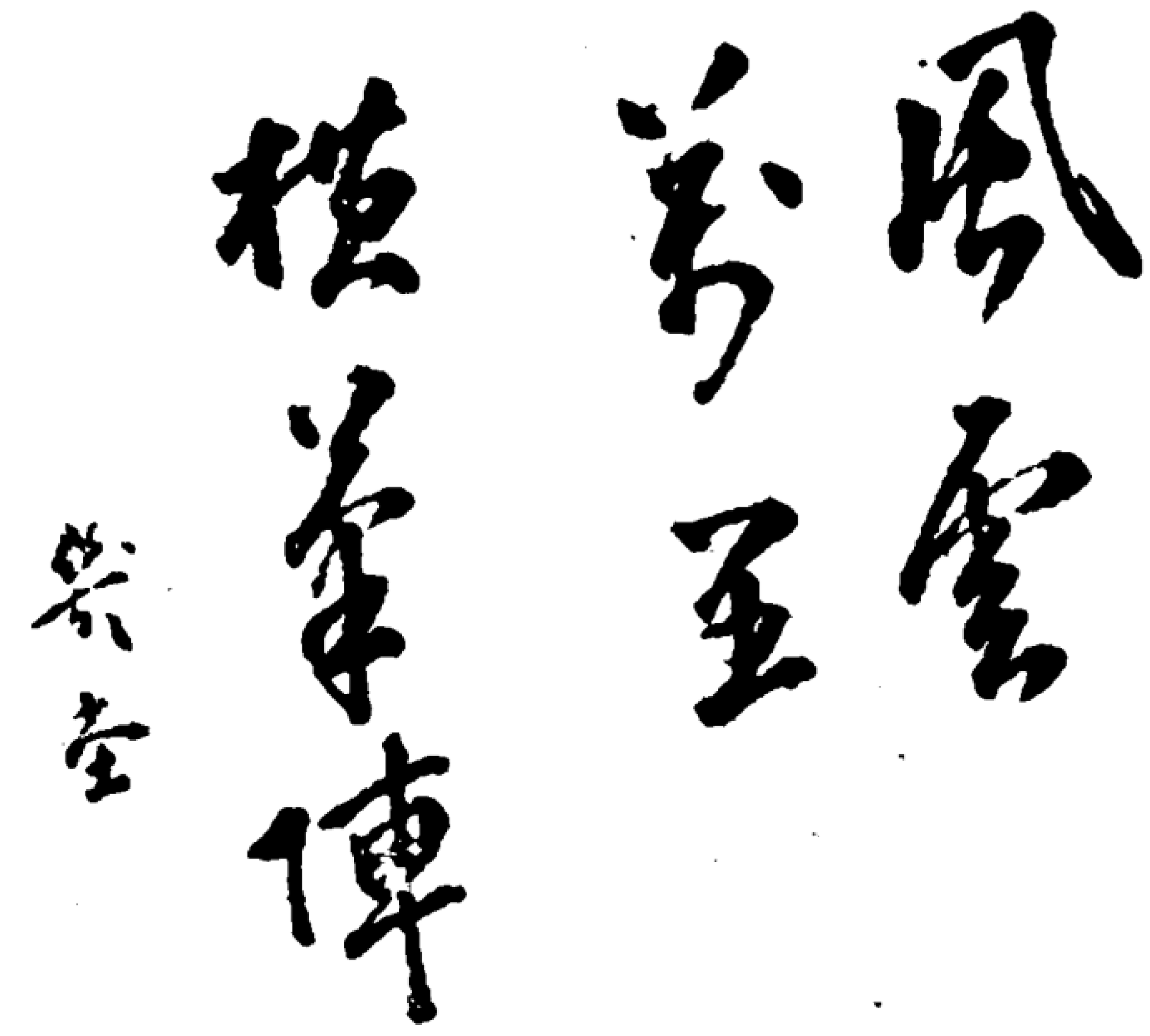
(若槻禮次郎)



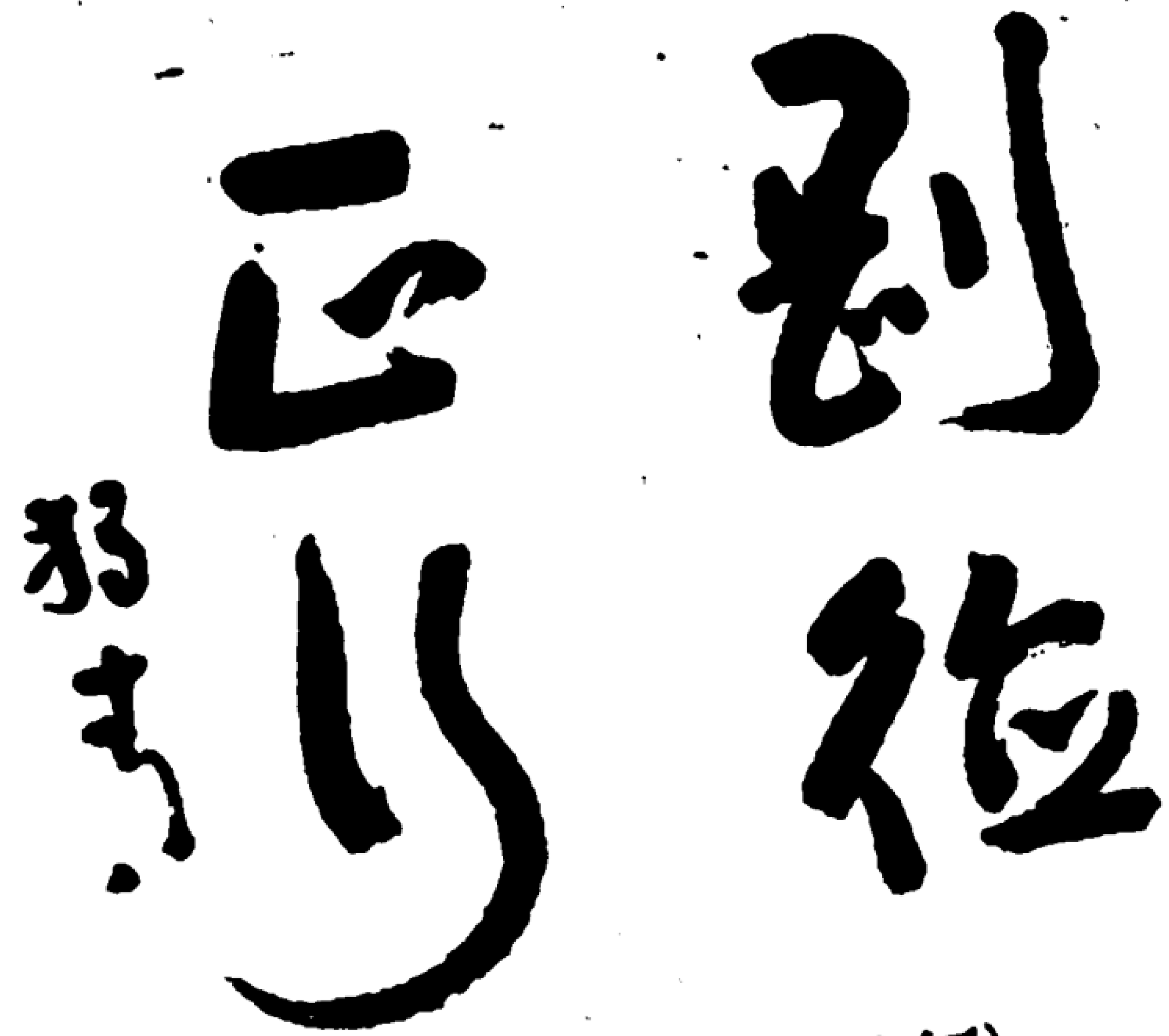
（外務大臣　幣原喜重郎）



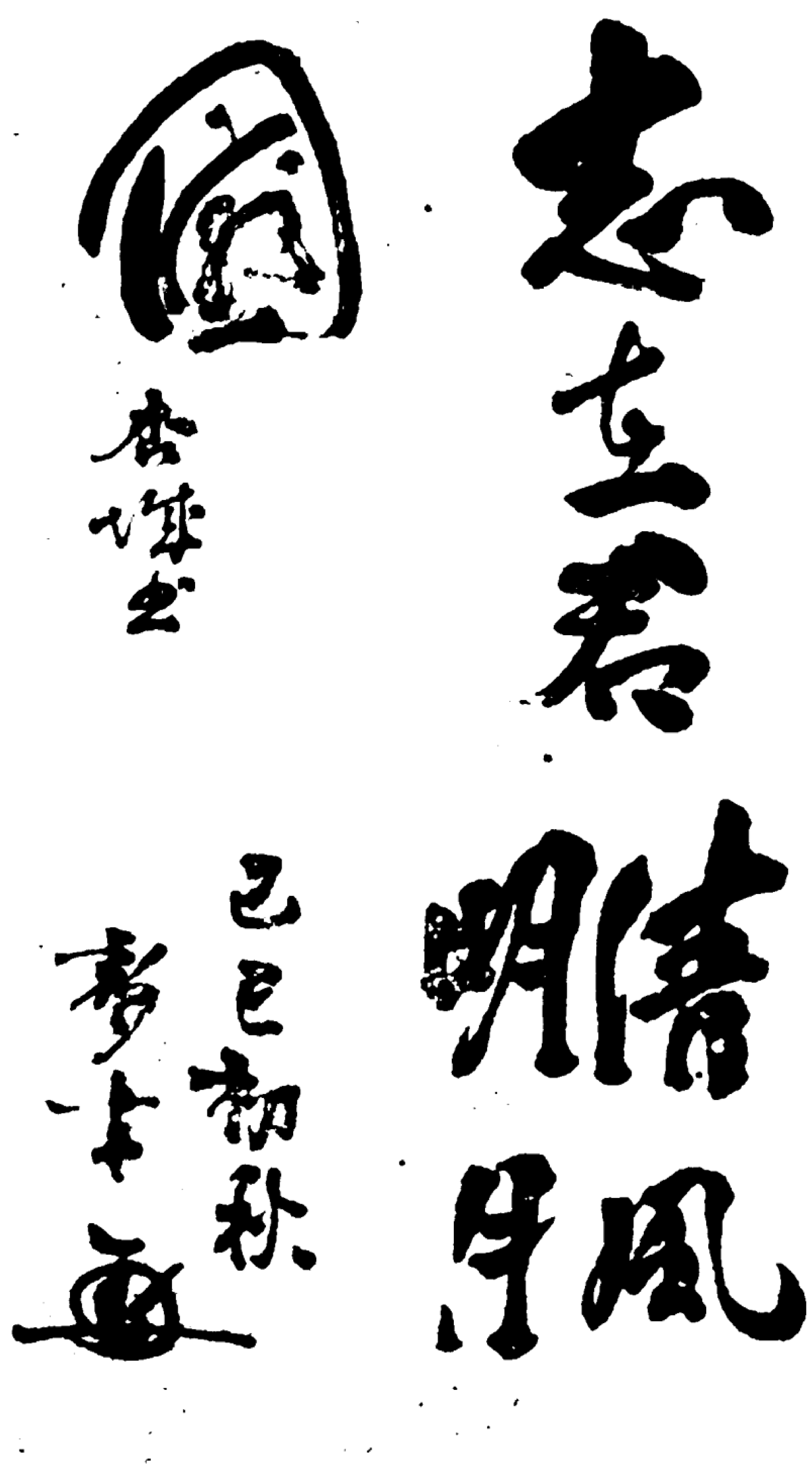
（遞信大臣　小泉又次郎）



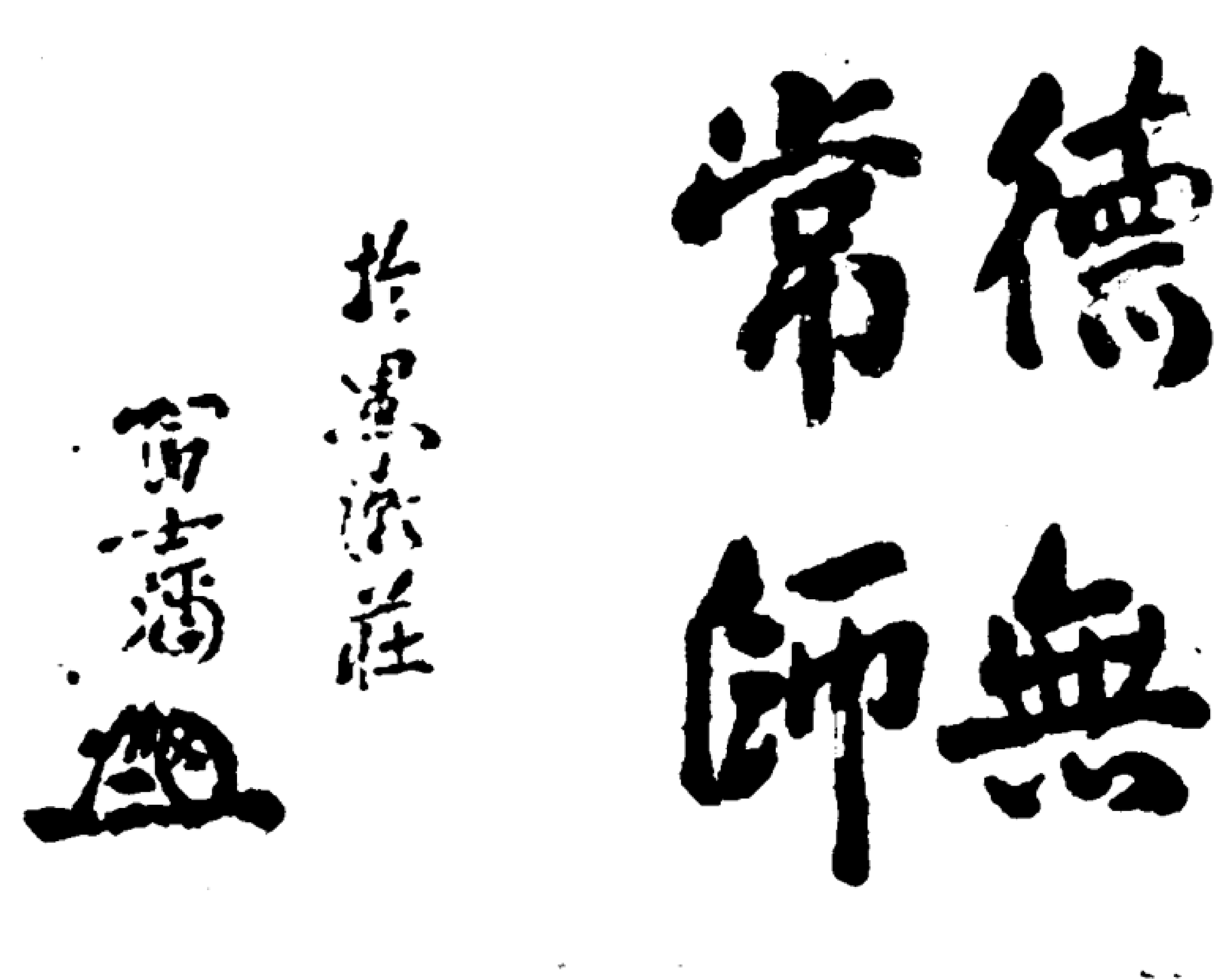
（農林大臣　町田忠治）



（拓務大臣　松田源治）

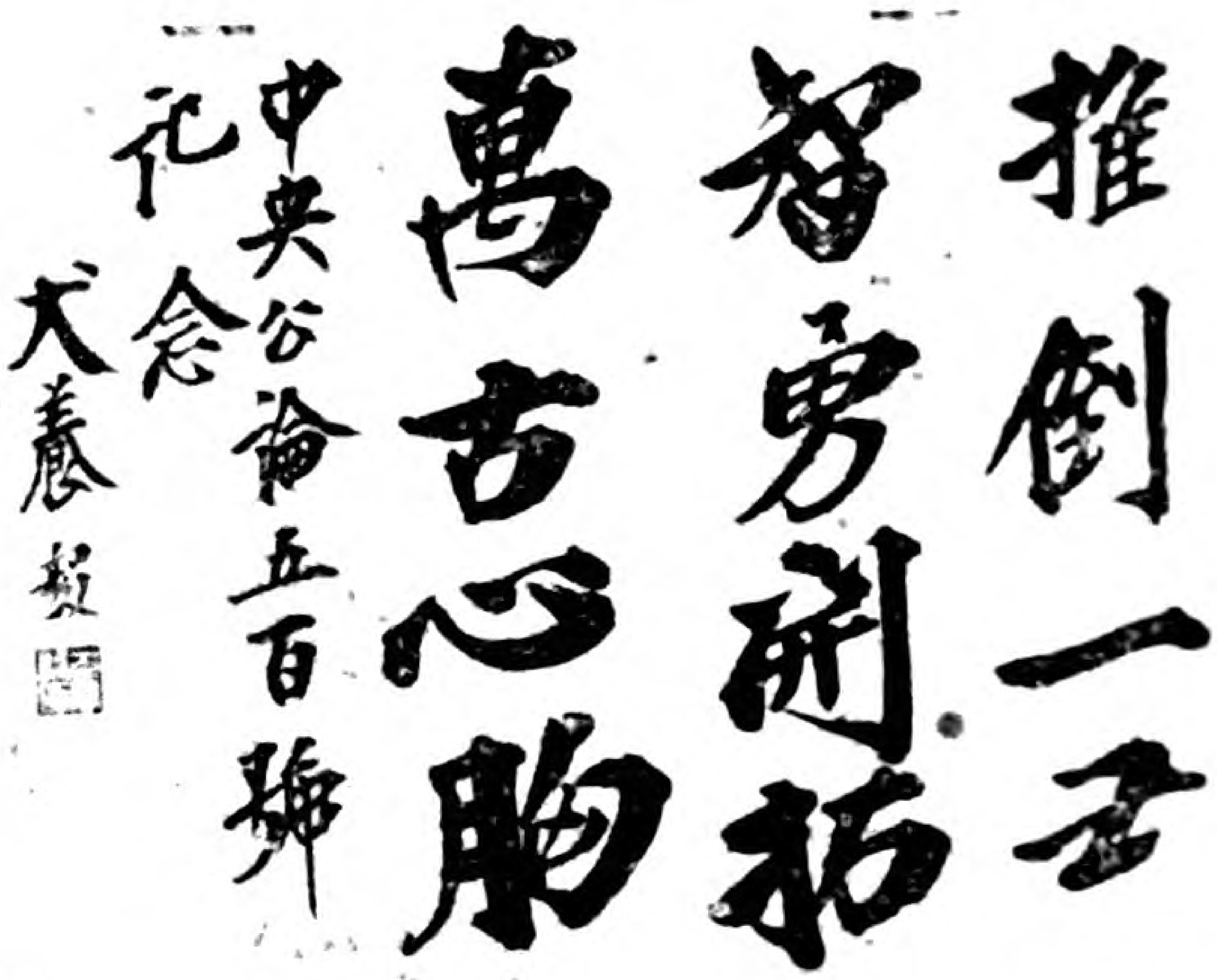


（海軍大臣　財部彪）



（鈴木富士彌）





(犬養毅)



(前内閣總理大臣 田山義一)



(前商工大臣 中橋德五郎)



(前海軍大臣 岡田啓介)



(前大藏大臣 三土忠造)



（前司法大臣　原　嘉道）



（前農林大臣　山本悌二郎）



（前陸軍大臣　白川義則）



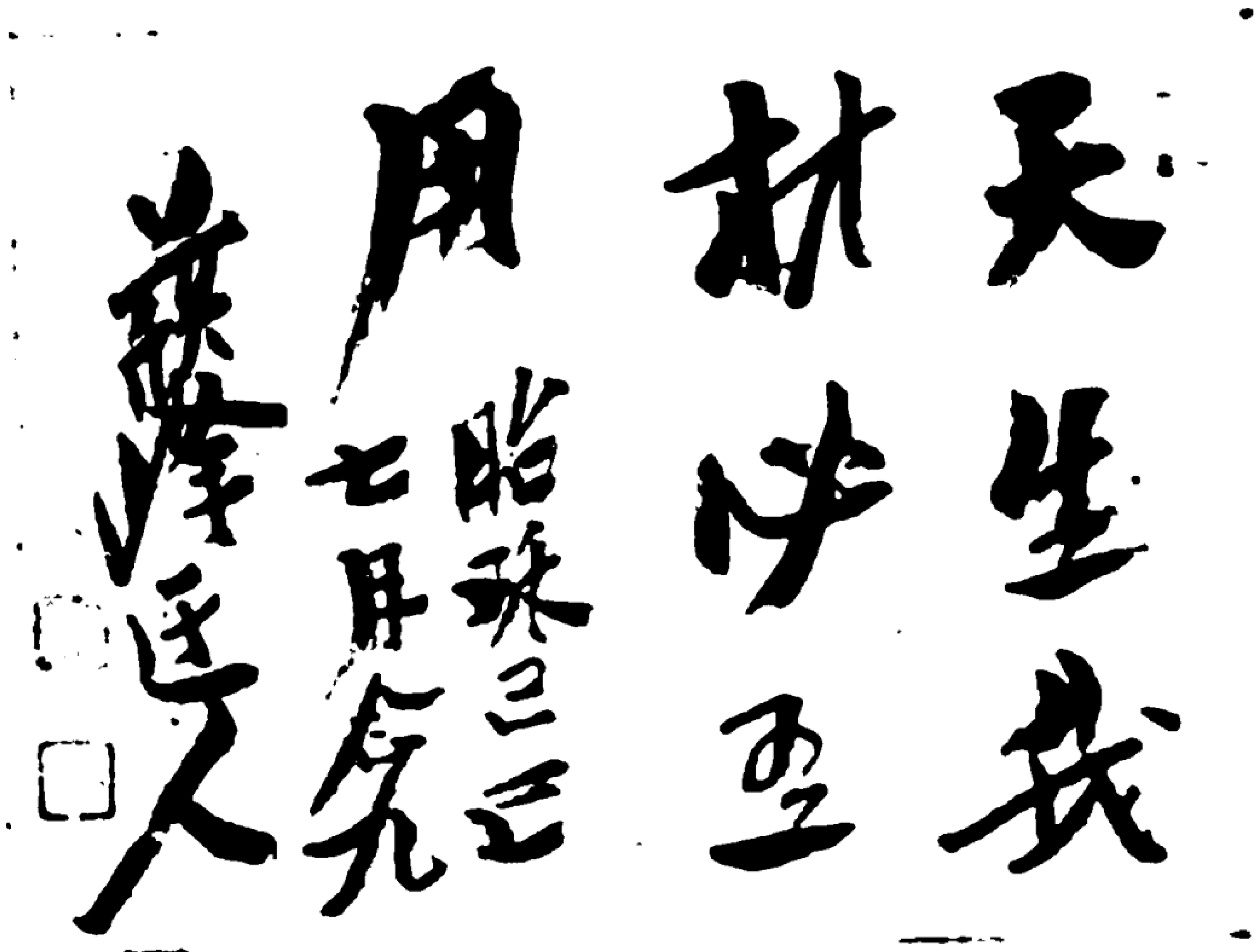
（前内務大臣　望月圭介）



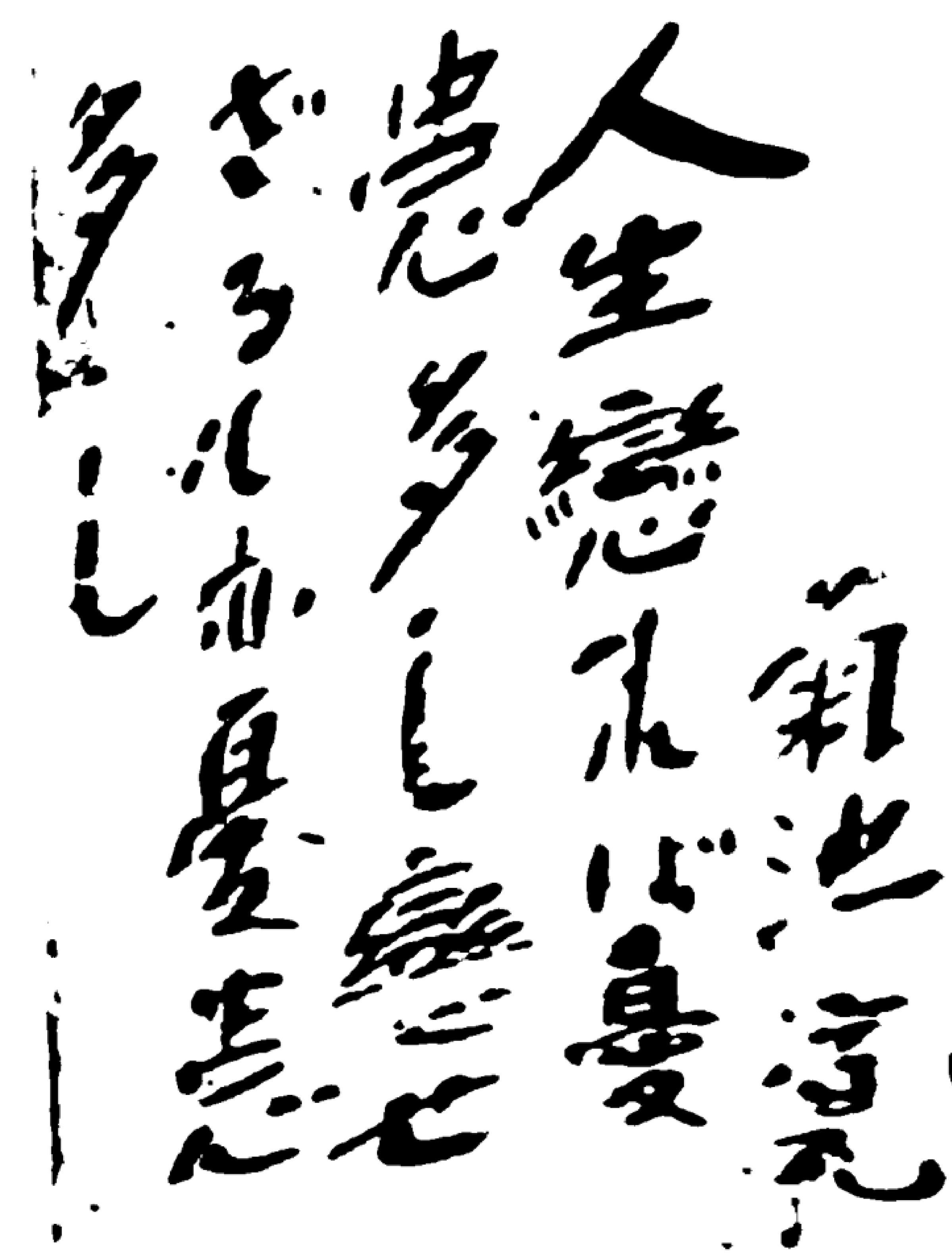
（鳩　山　一　郎）



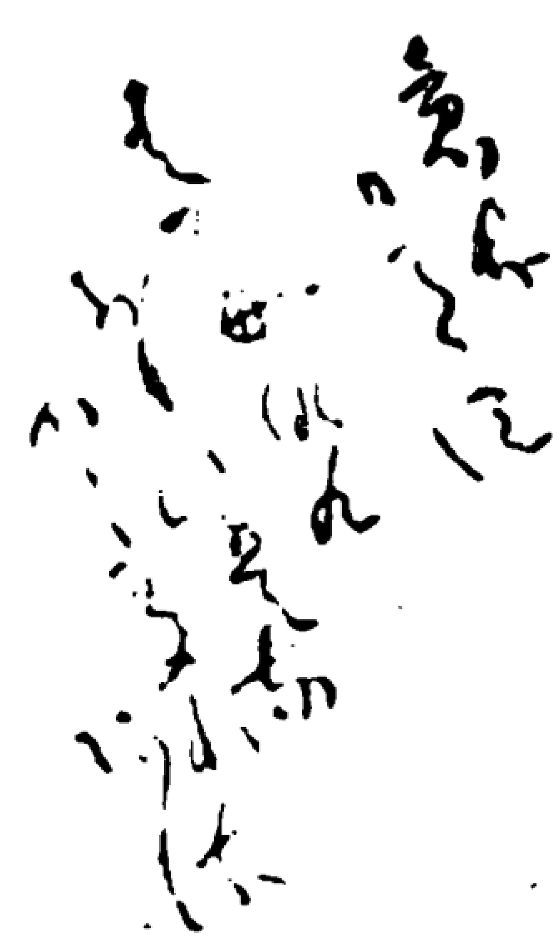
（前逓信大臣　久原房之助）



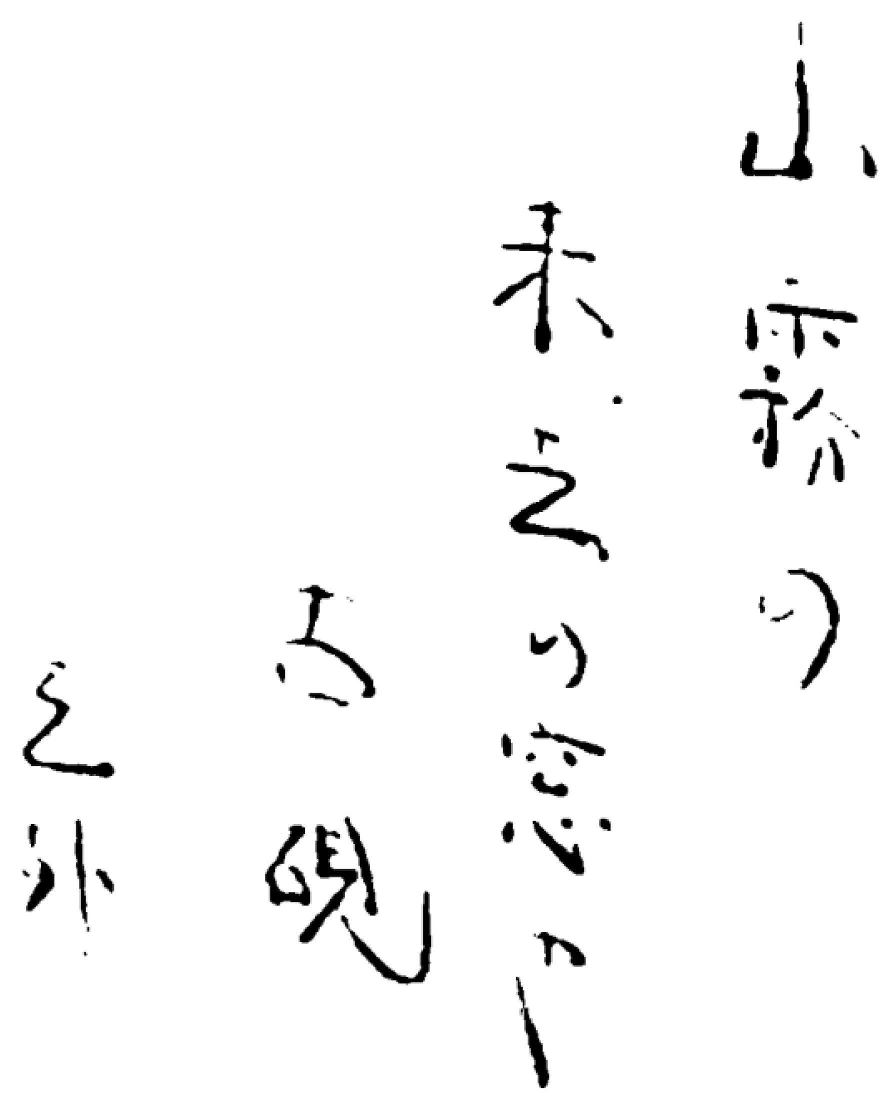
(德富蘇峰)



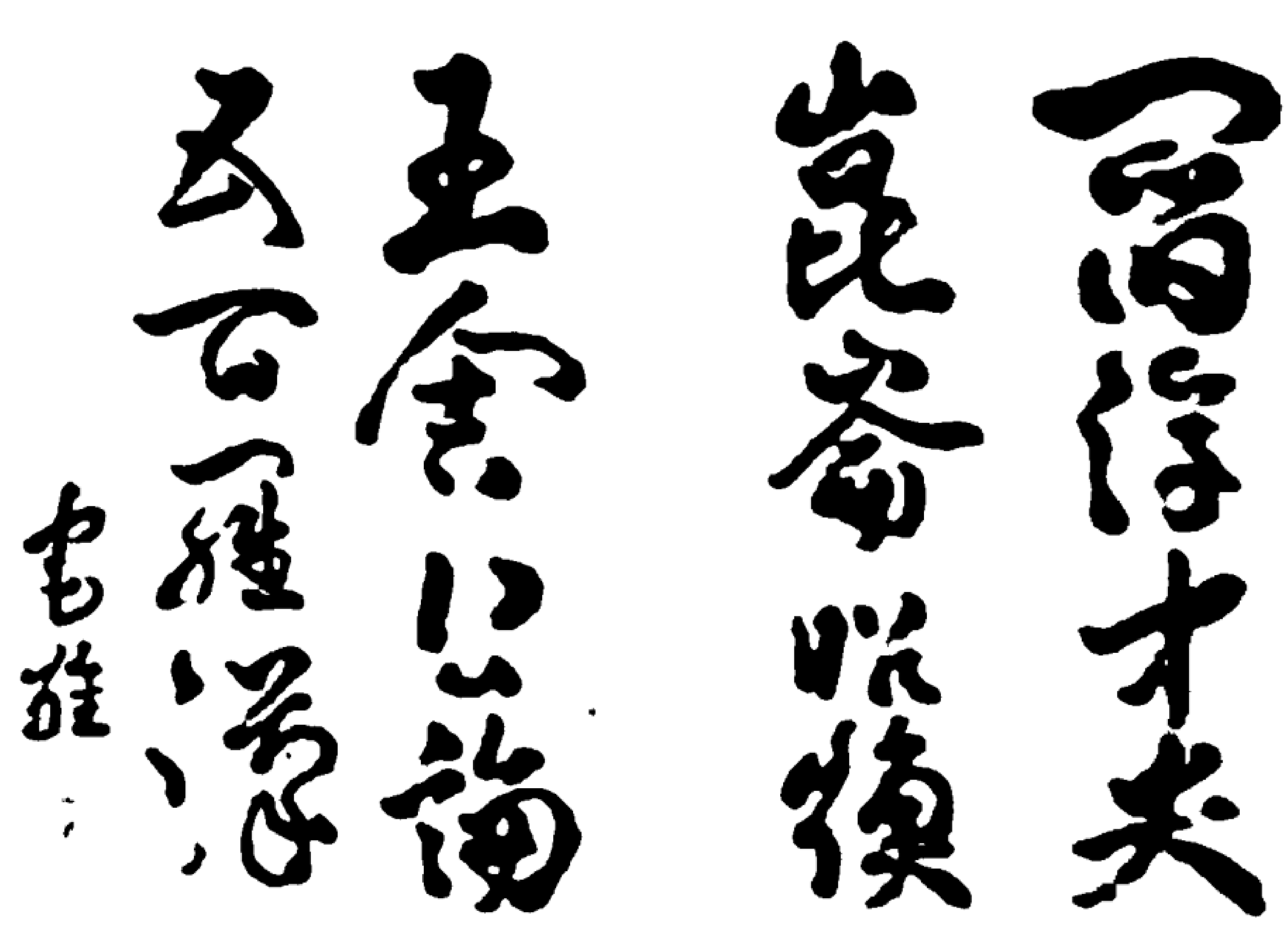
([illegible])



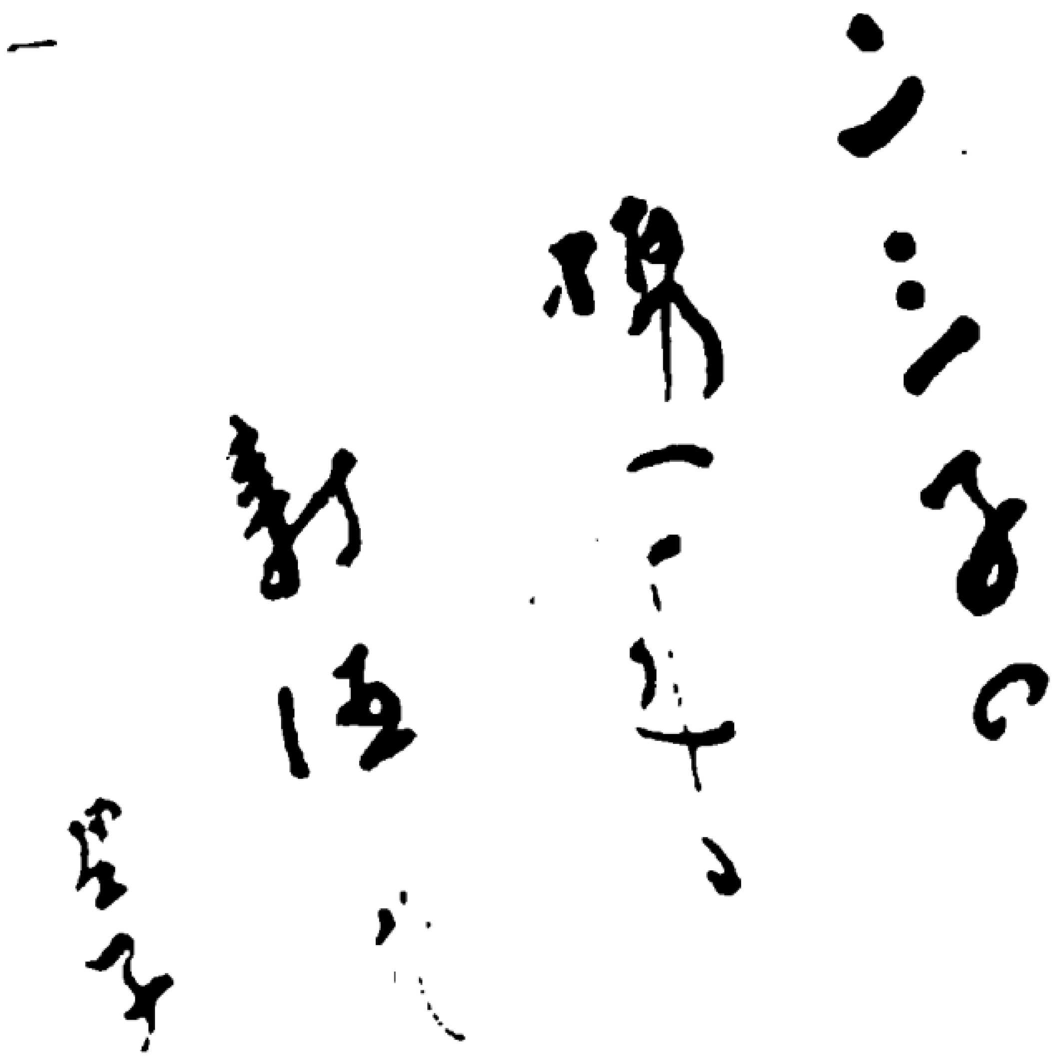
(坪内逍遥)



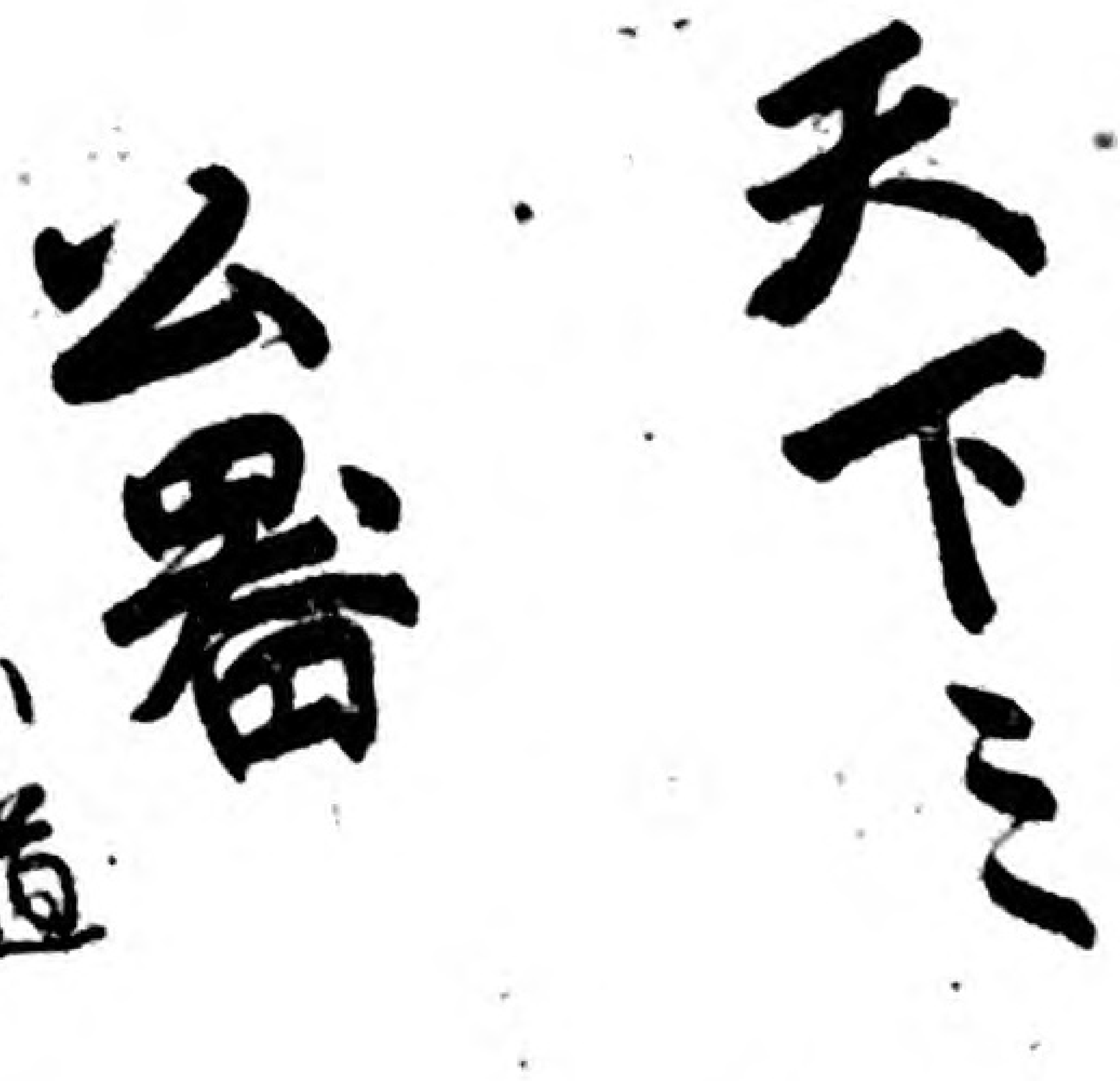
(小杉天外)



(三[illegible])



(高濱虚子)



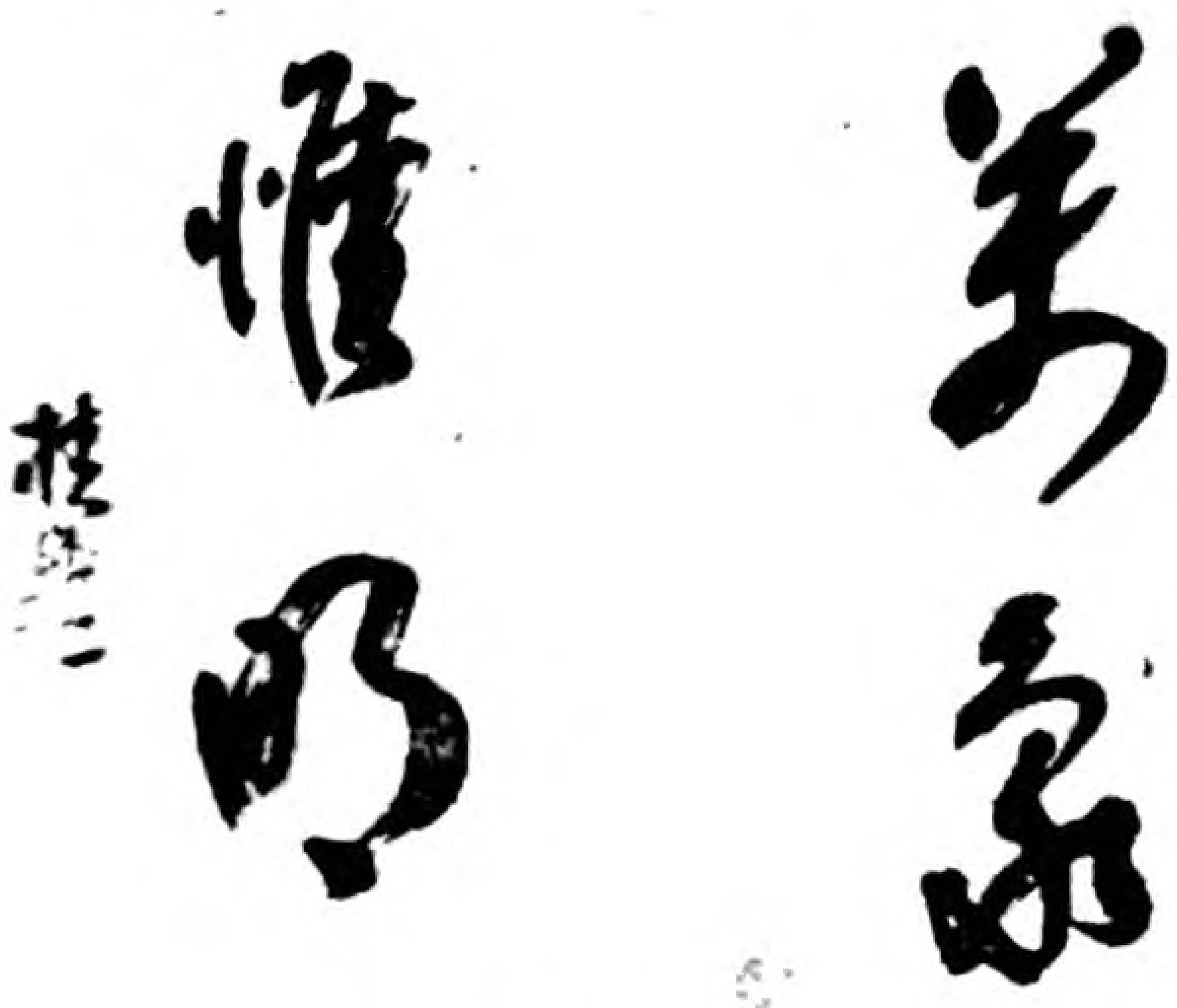
（前司法大臣　原　嘉道）



（前農林大臣　山本悌二郎）



（前陸軍大臣　白川義則）



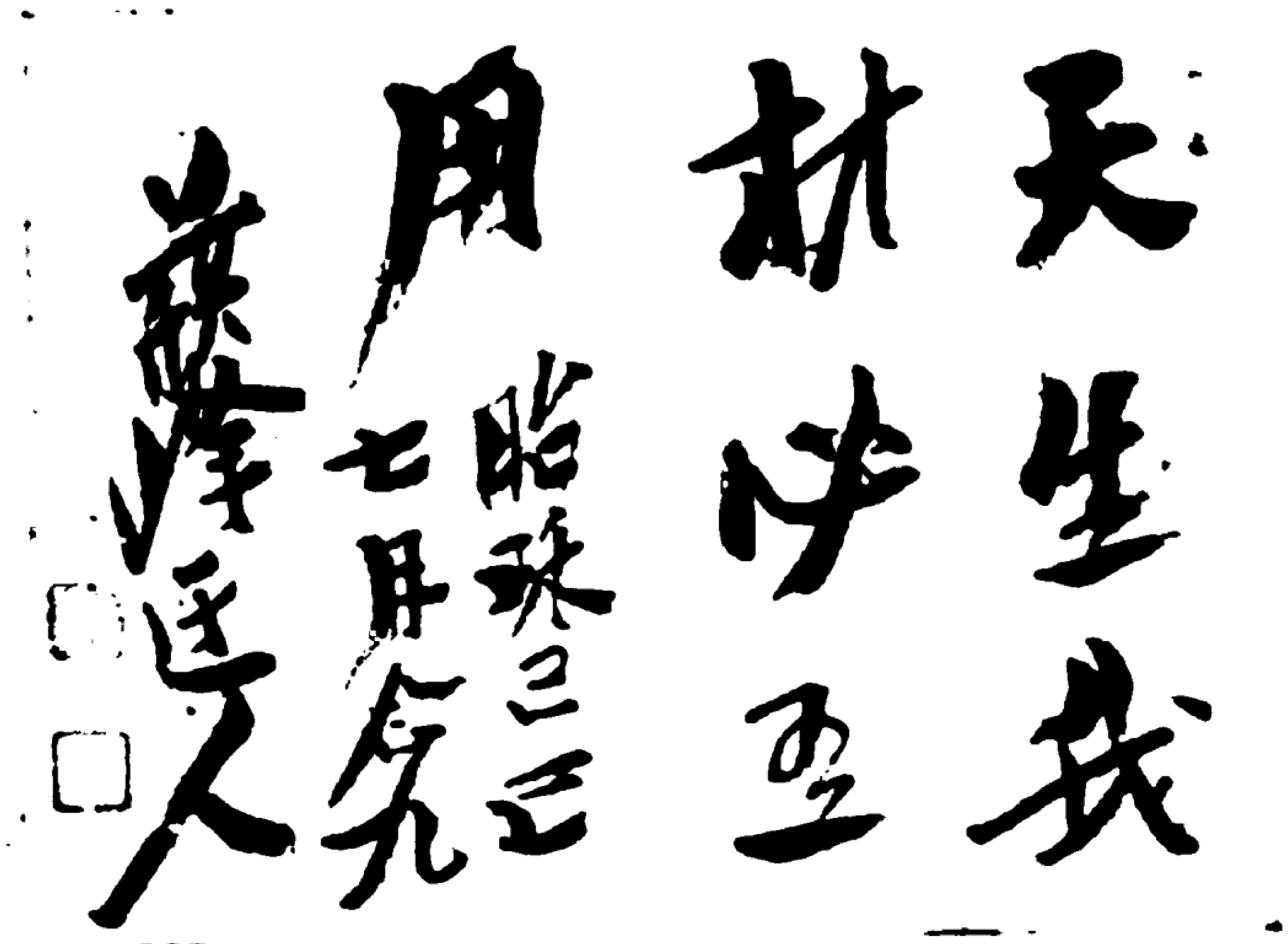
（前內務大臣　望月圭介）



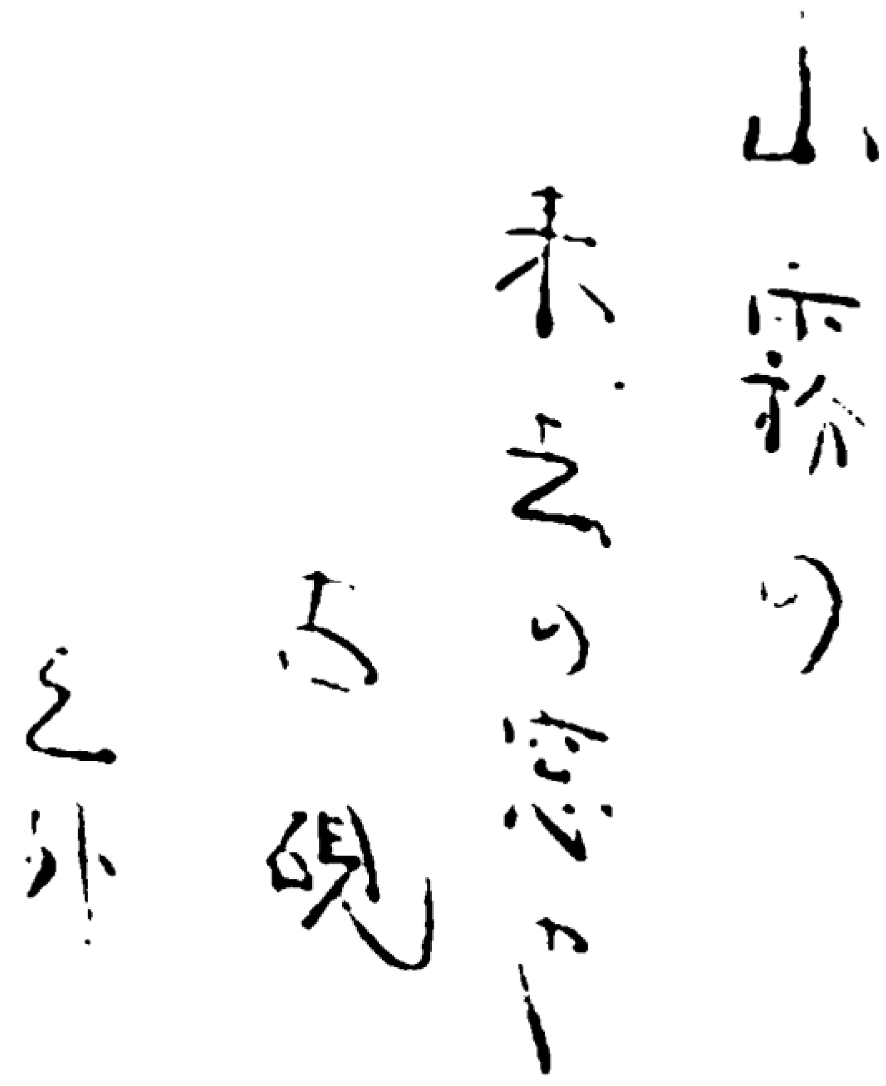
（鳩山一郎）



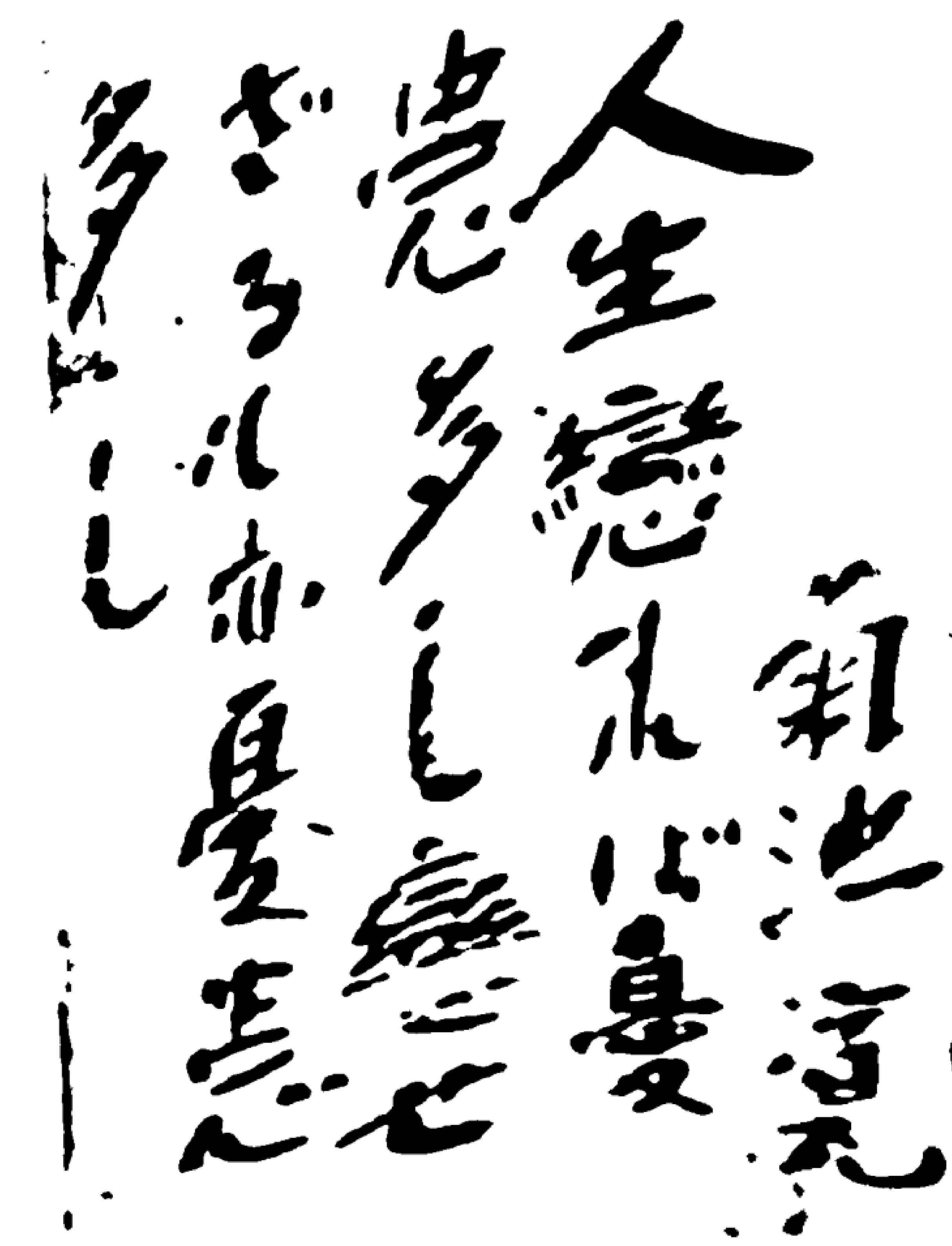
（前遞信大臣　久原房之助）



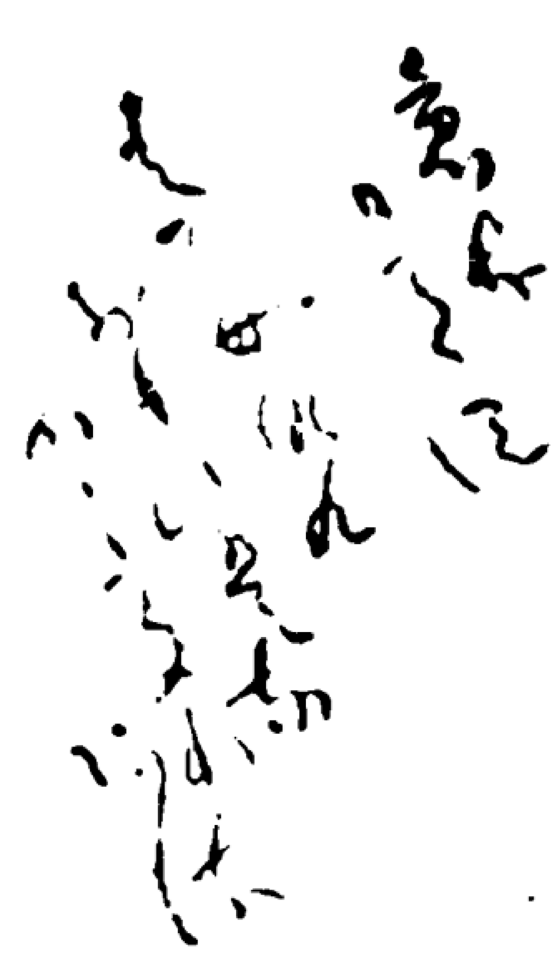
(徳富蘇峰)



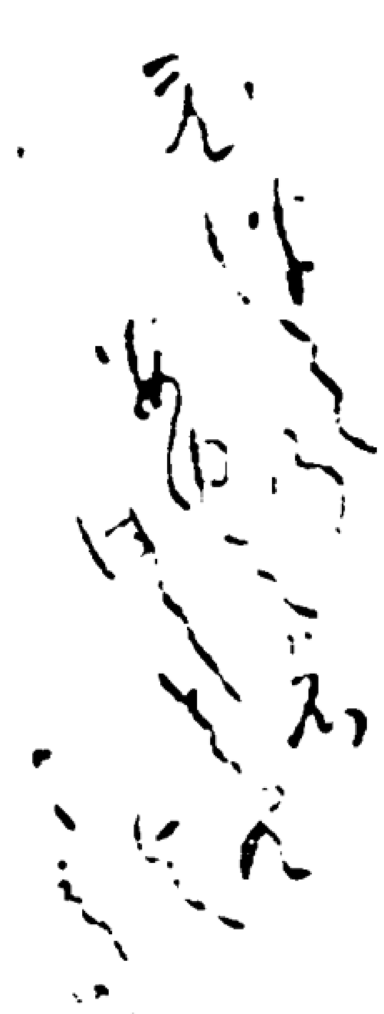
(小杉天外)

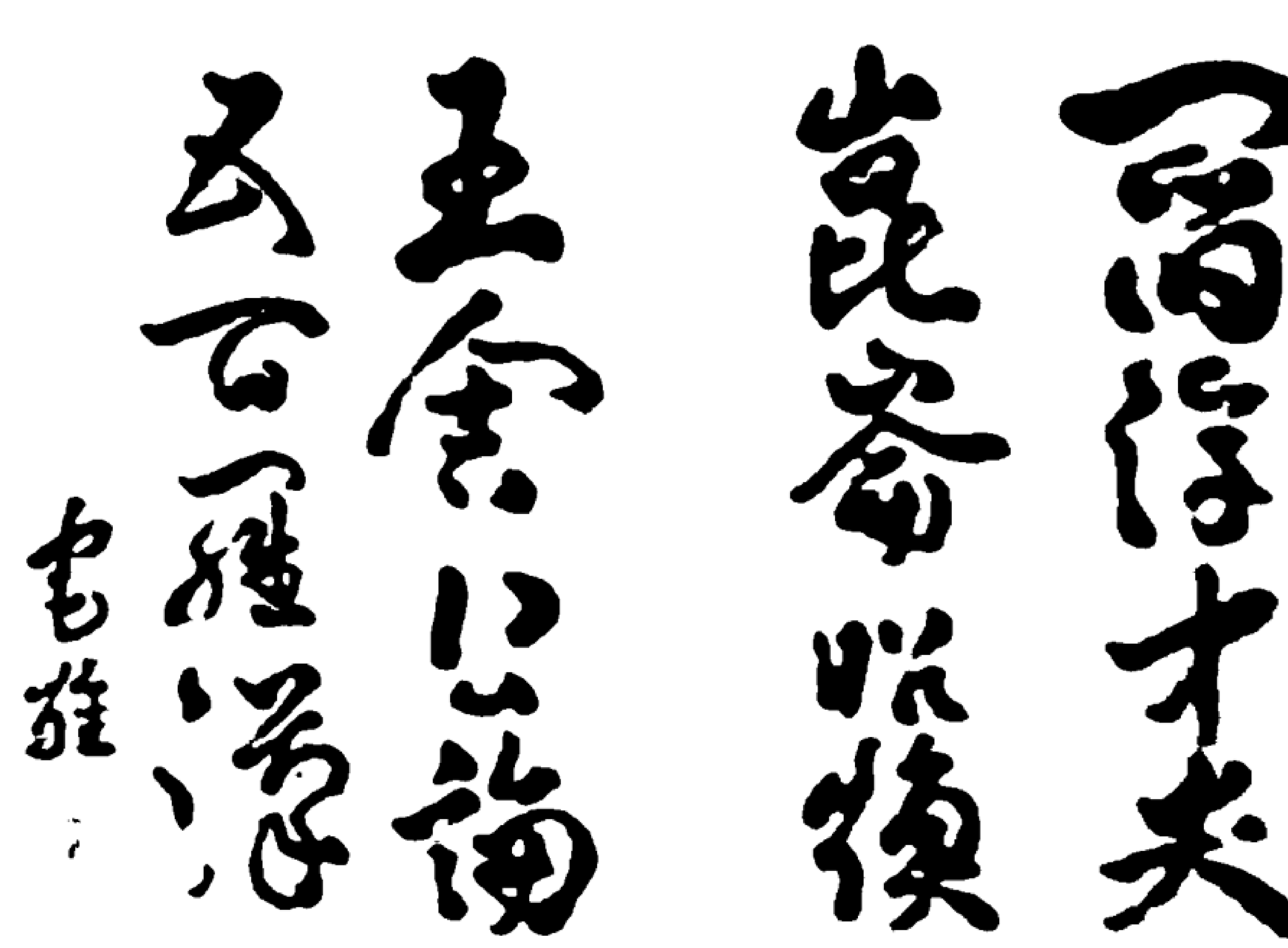


(菊池寛)

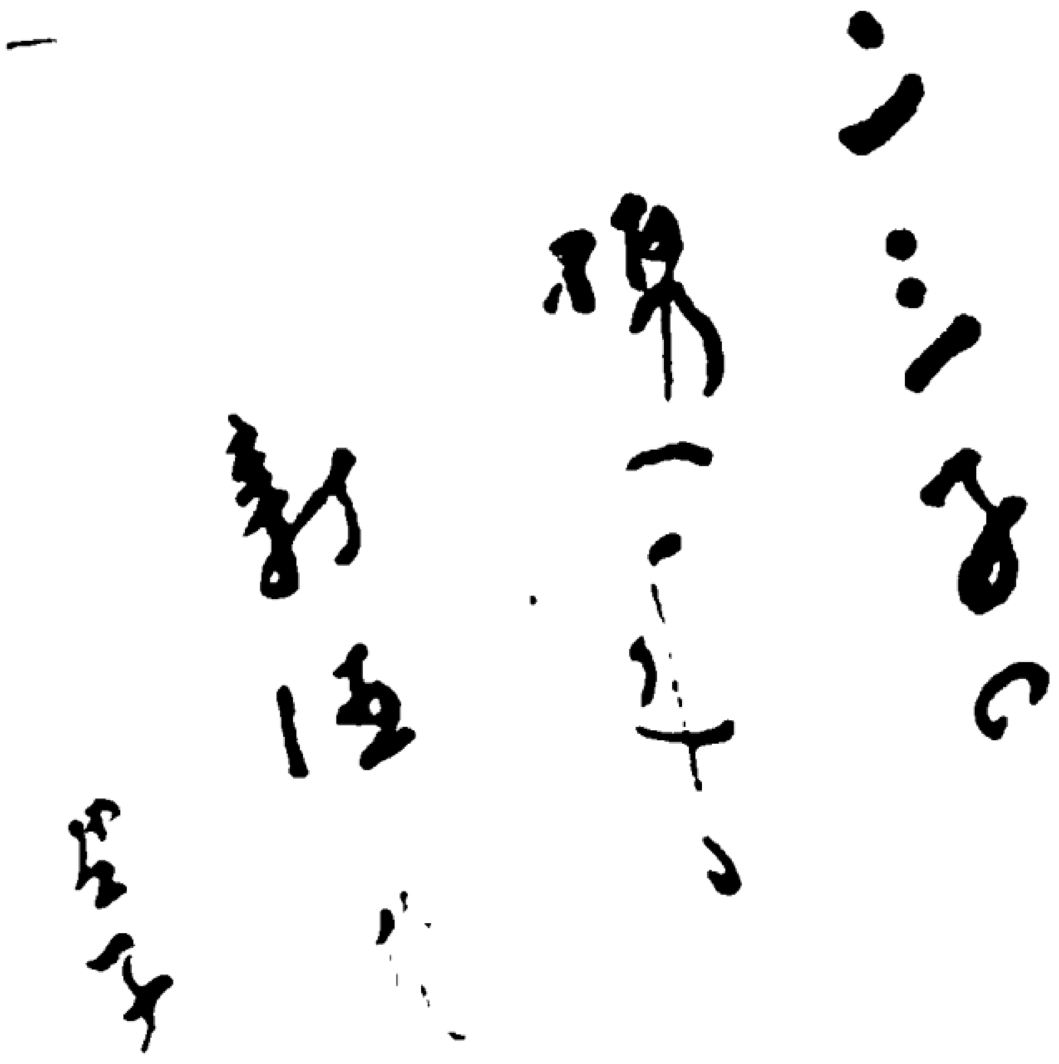


(坪内逍遥)

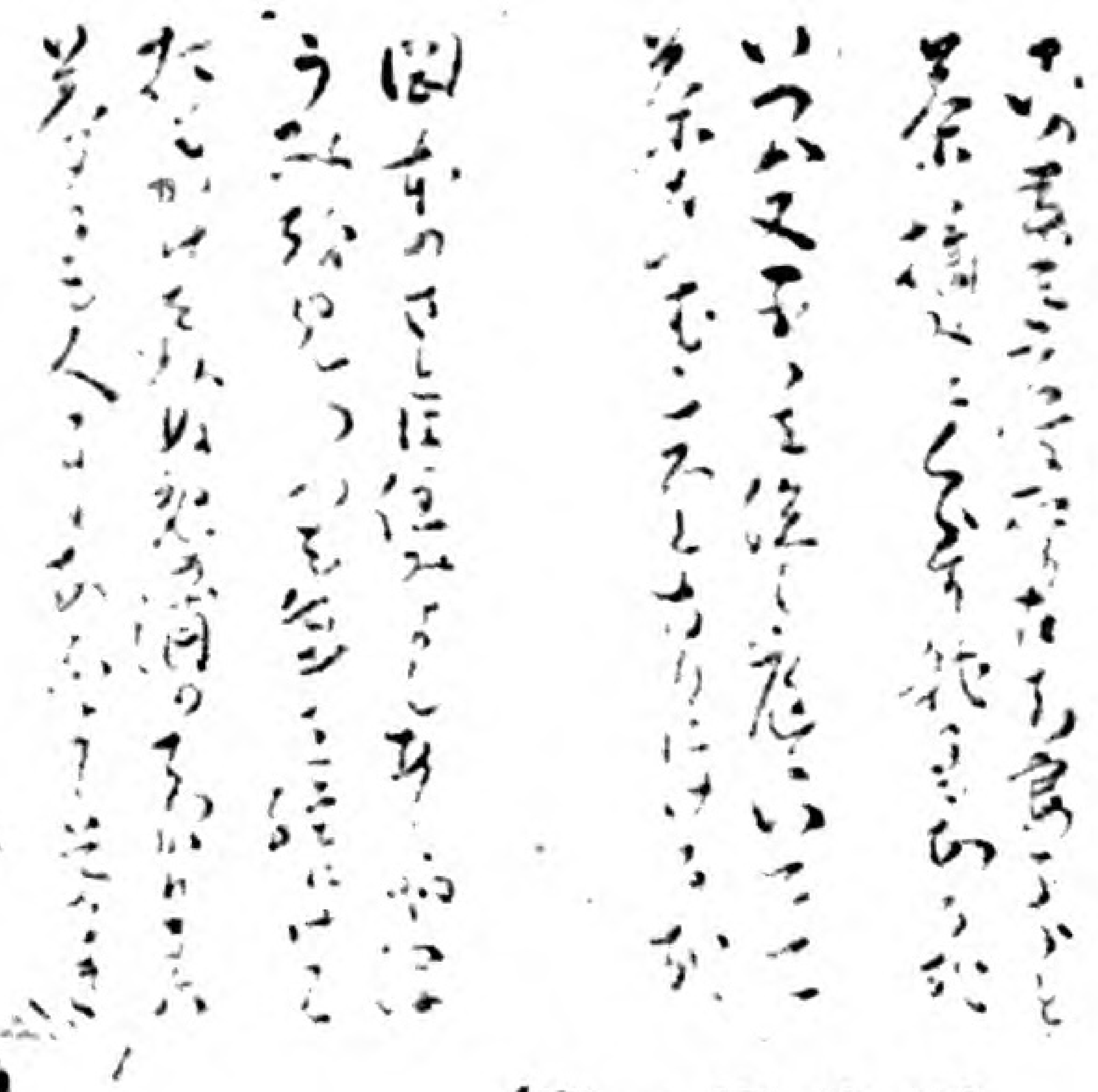




(三宅雪嶺)



(高濱虚子)



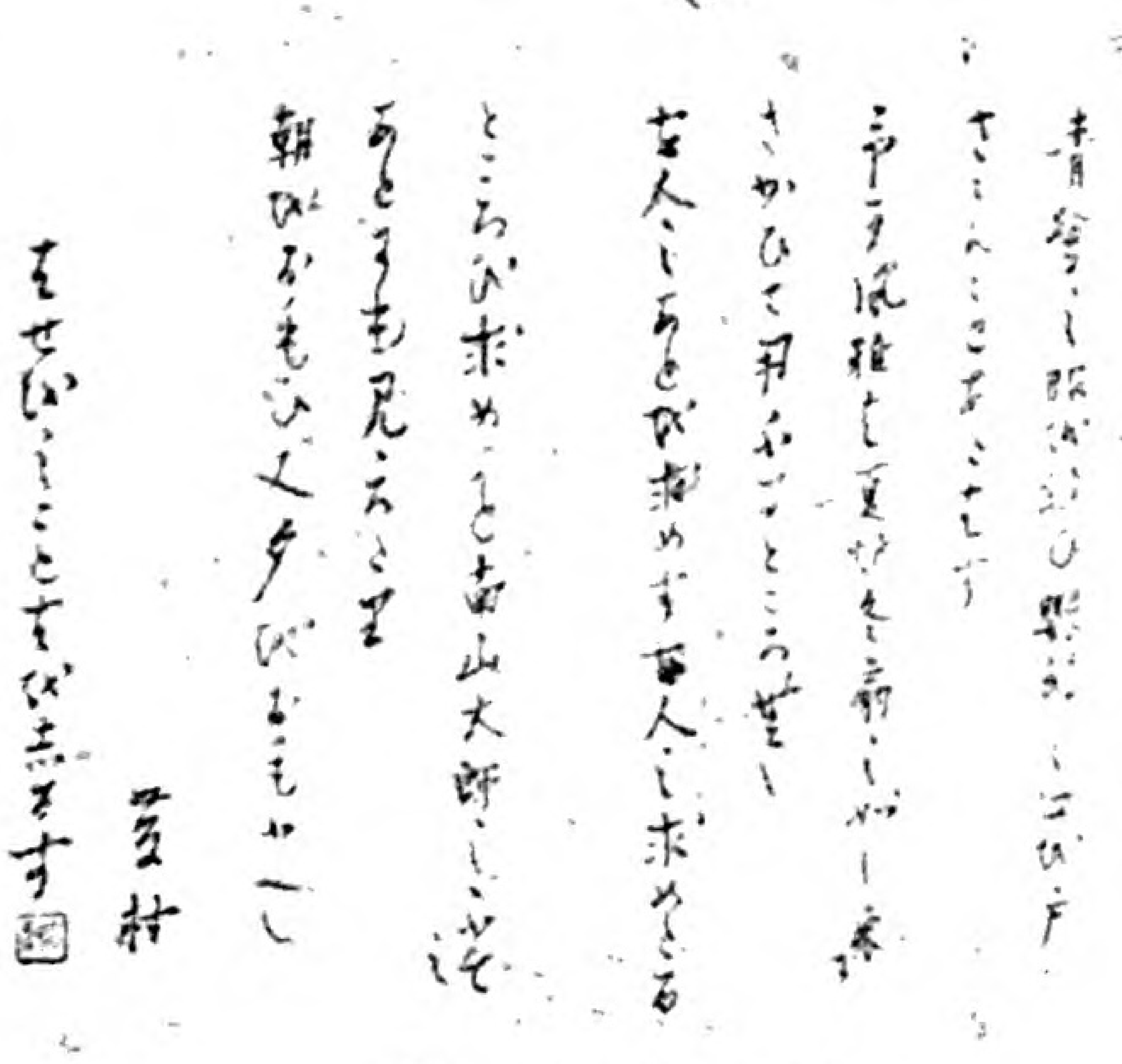
(谷崎潤一郎)



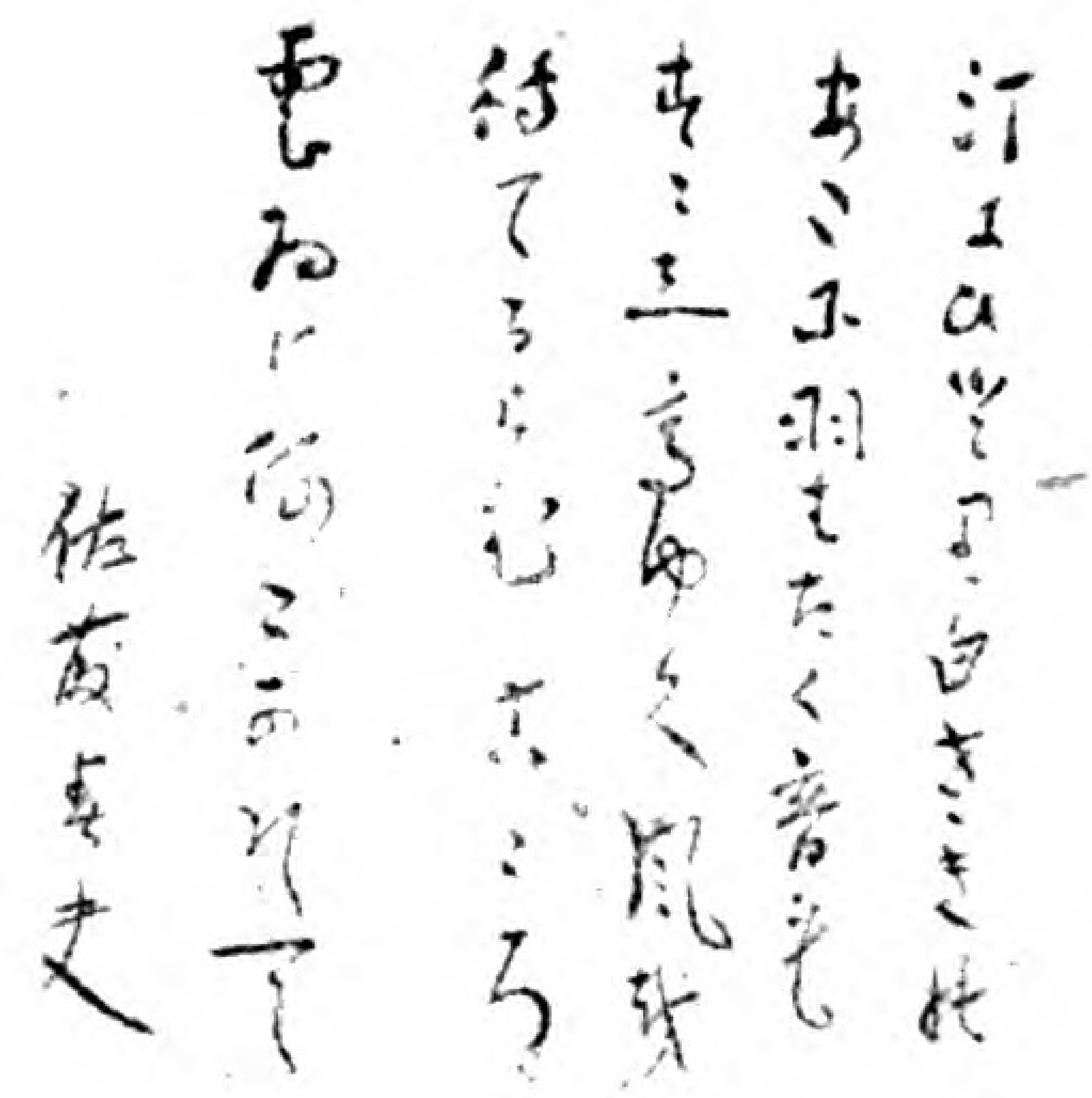
(里見弴)



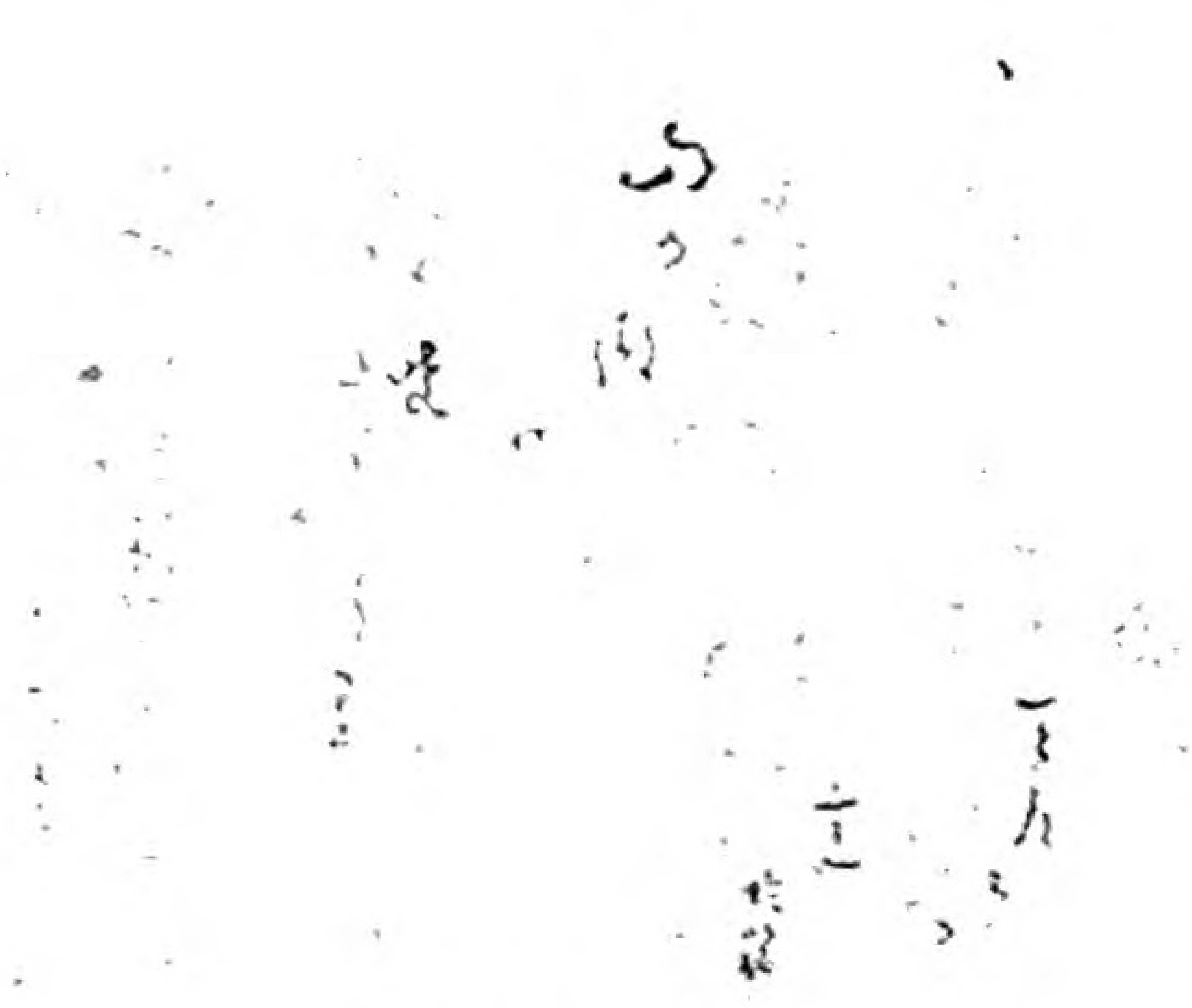
(志賀直哉)



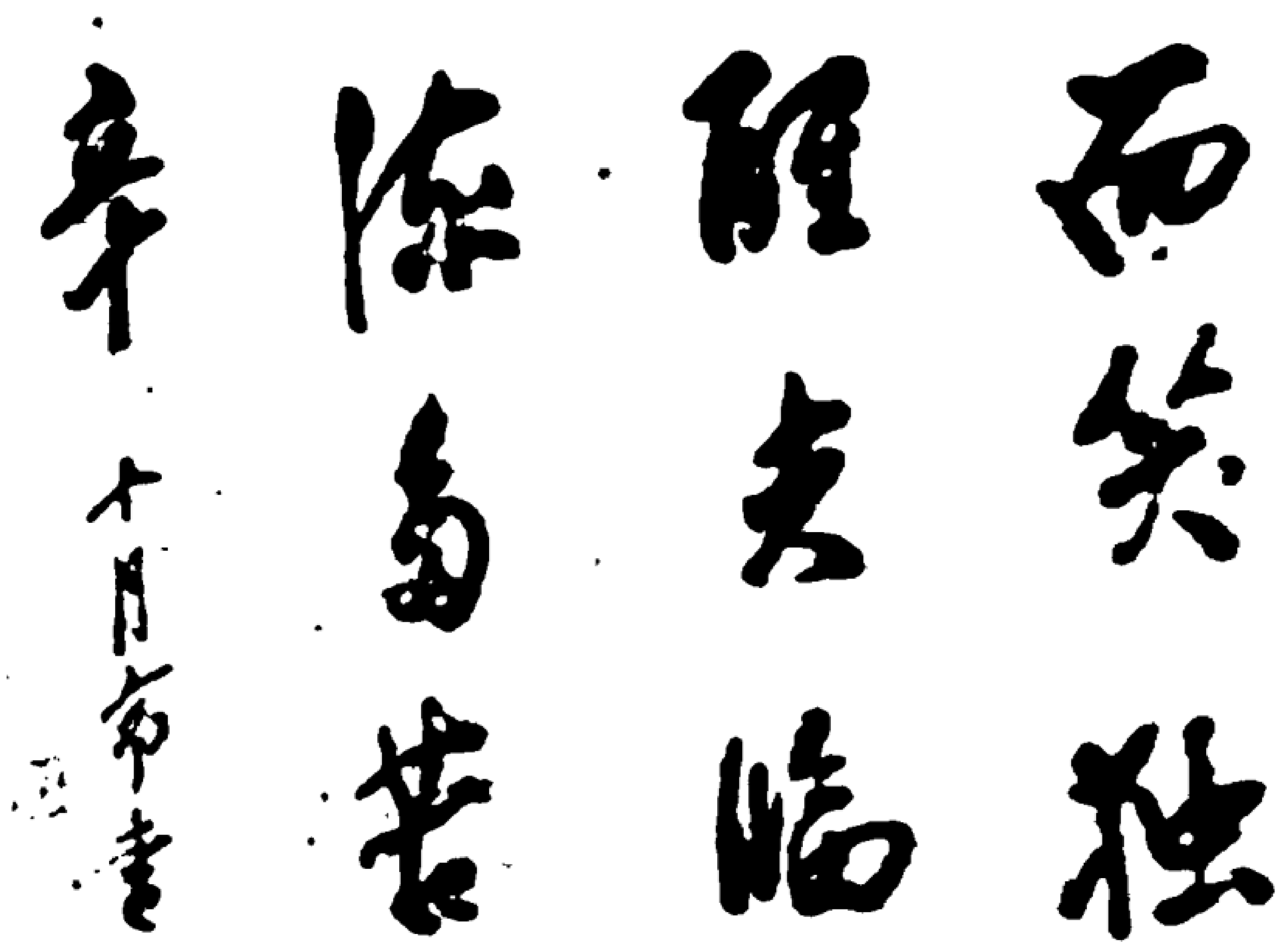
(島崎藤村)



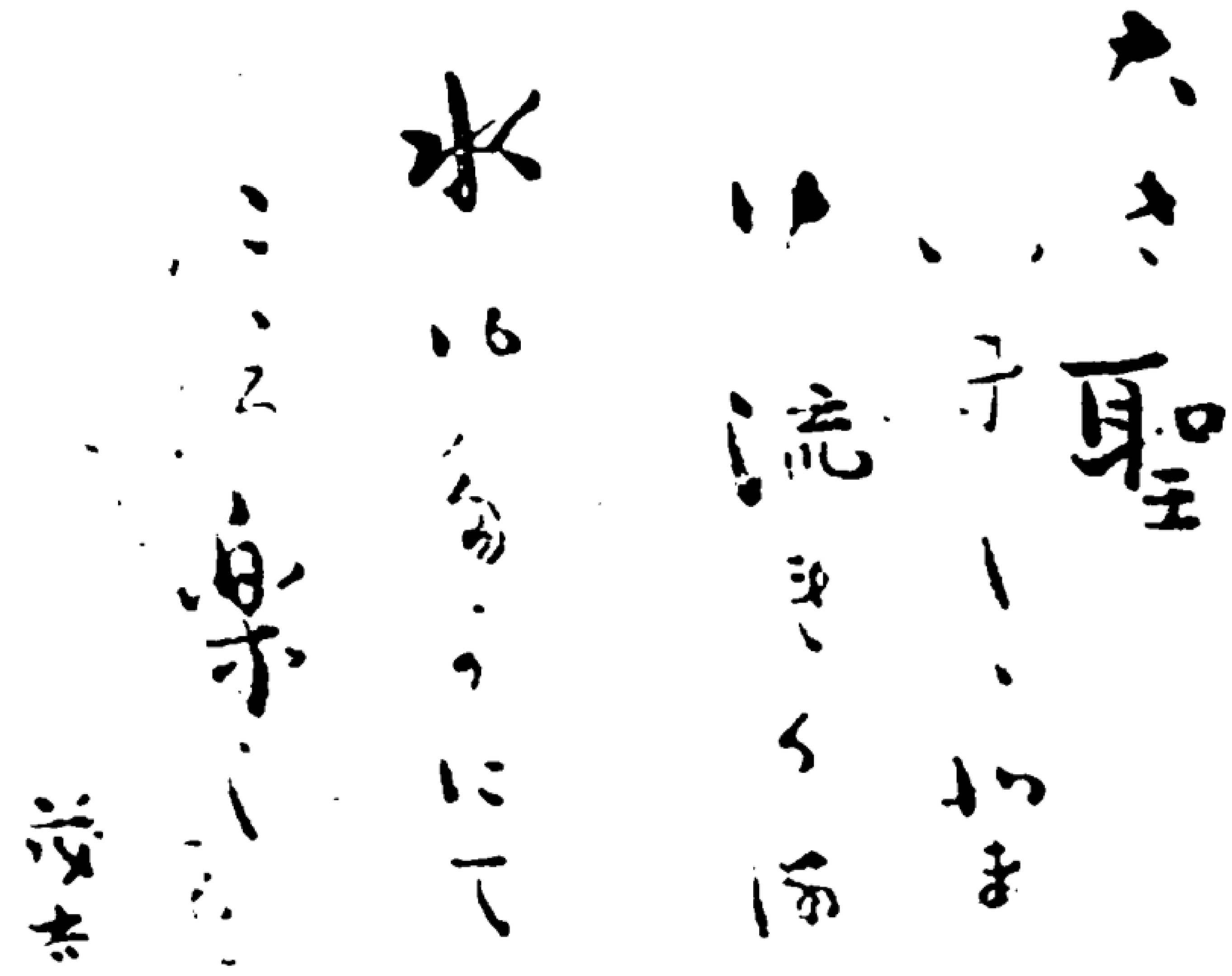
(佐藤春夫)



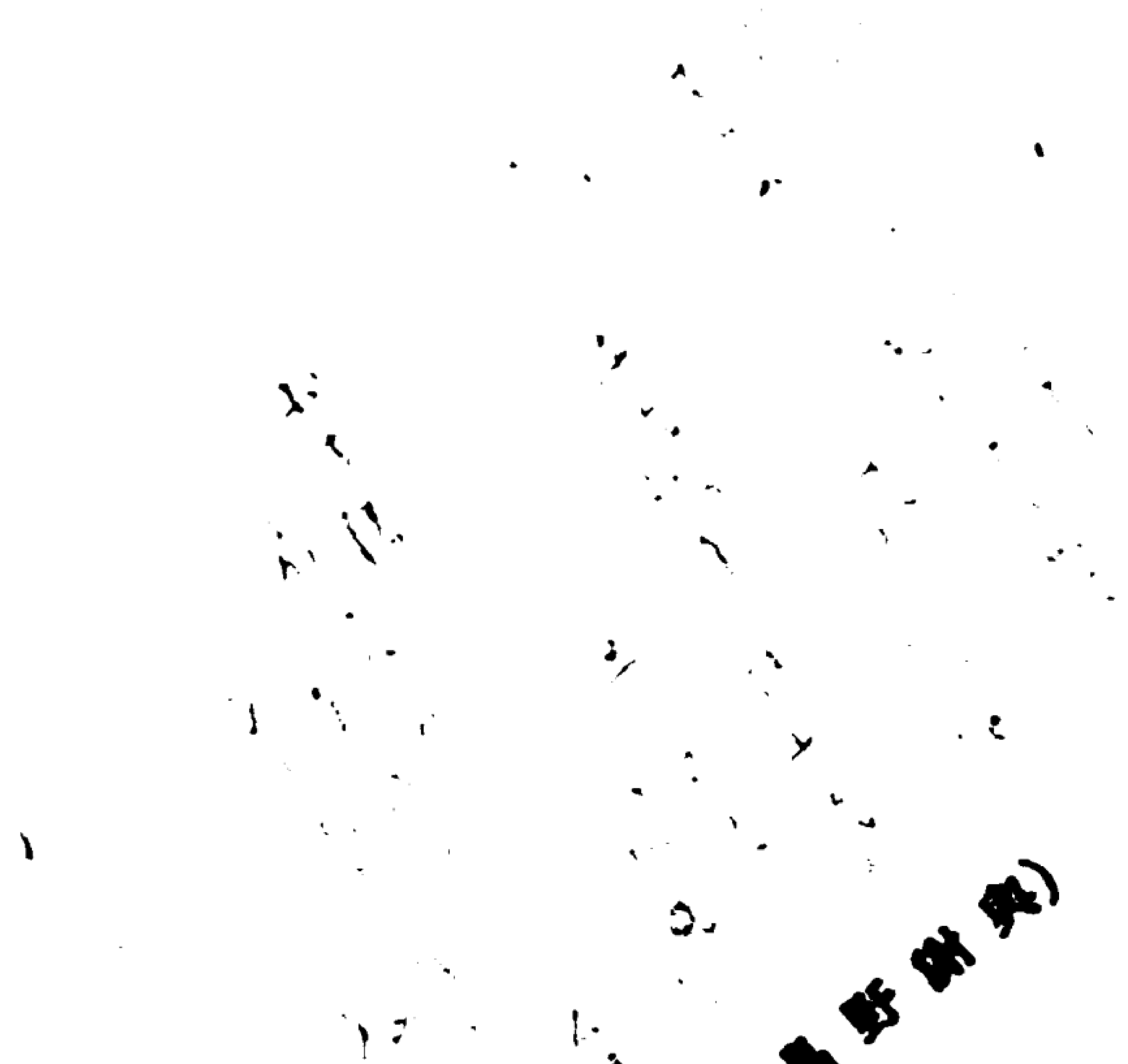
(佐佐木信綱)



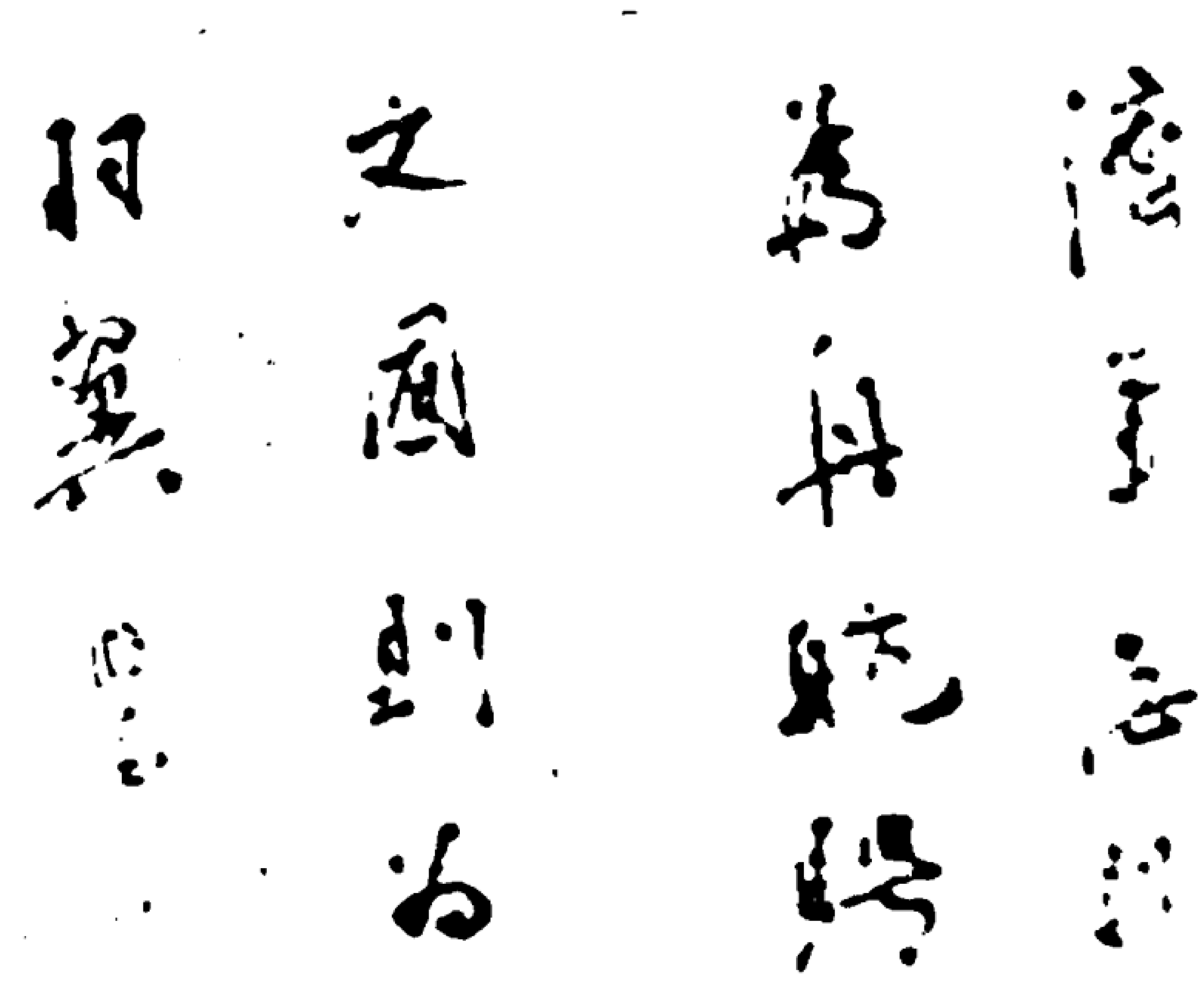
(有島生馬)



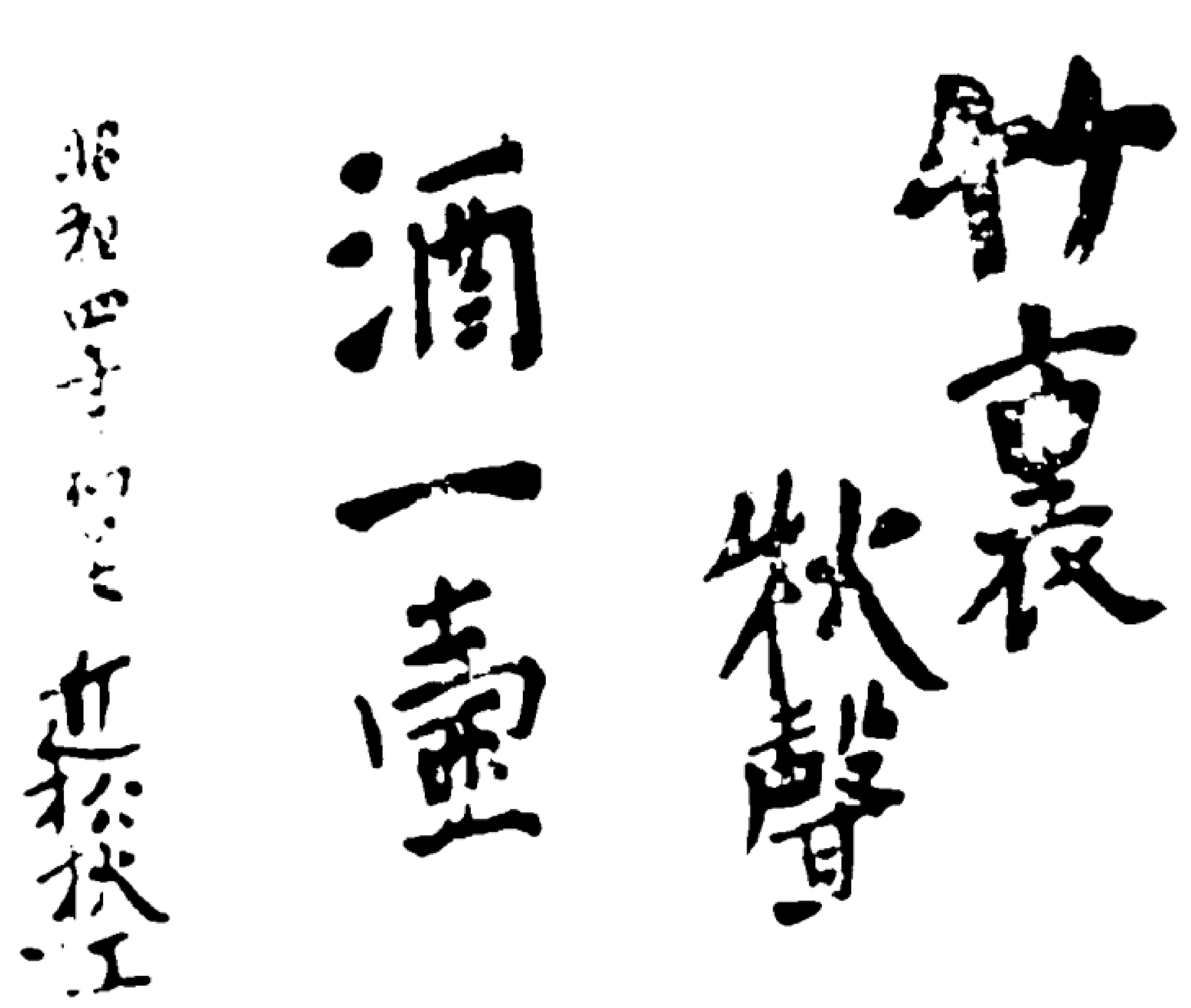
(齋藤茂吉)



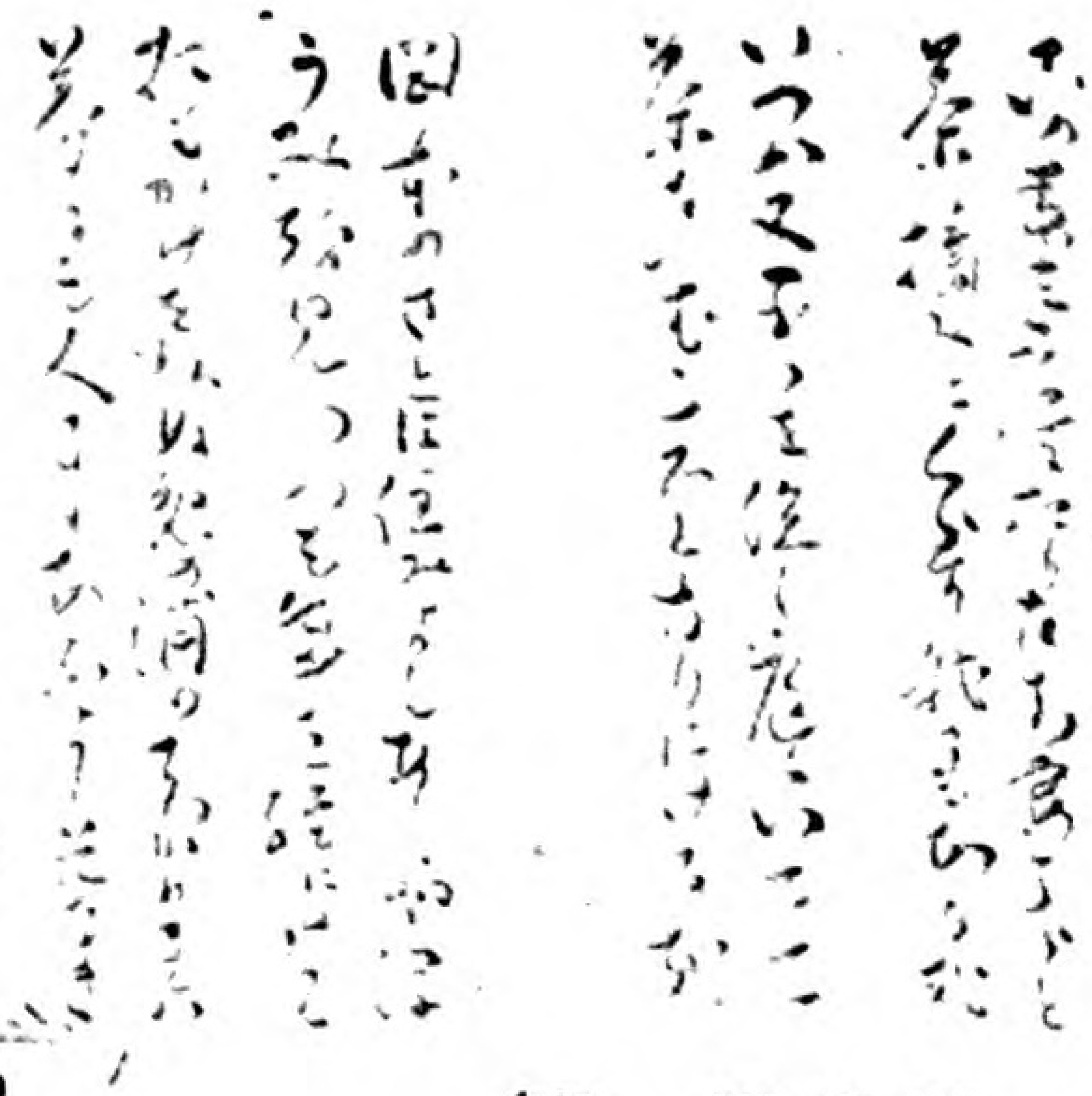
(與謝野晶子)



(寶月[illegible]風)



(近松秋江)



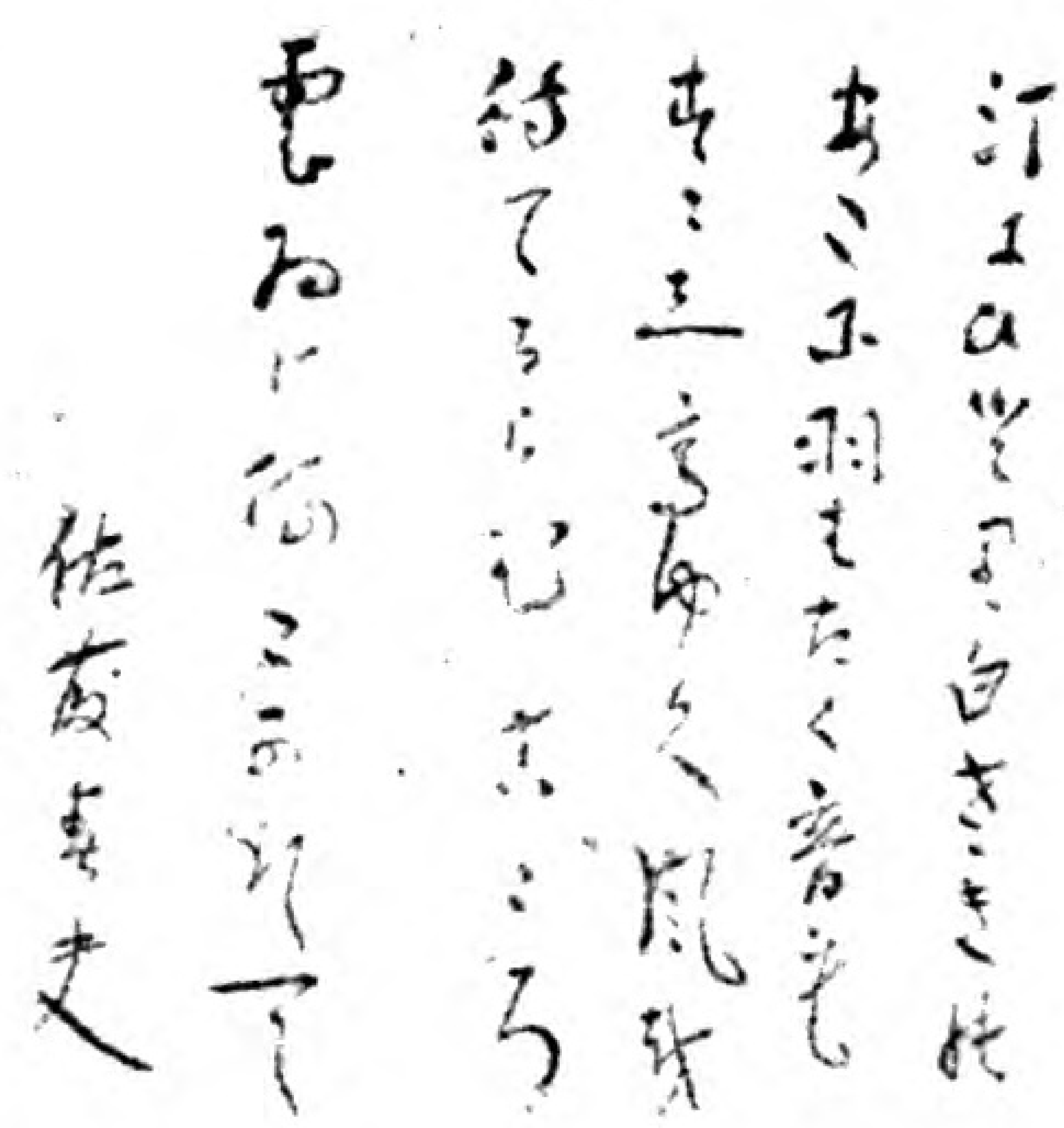
（谷崎潤一郎）



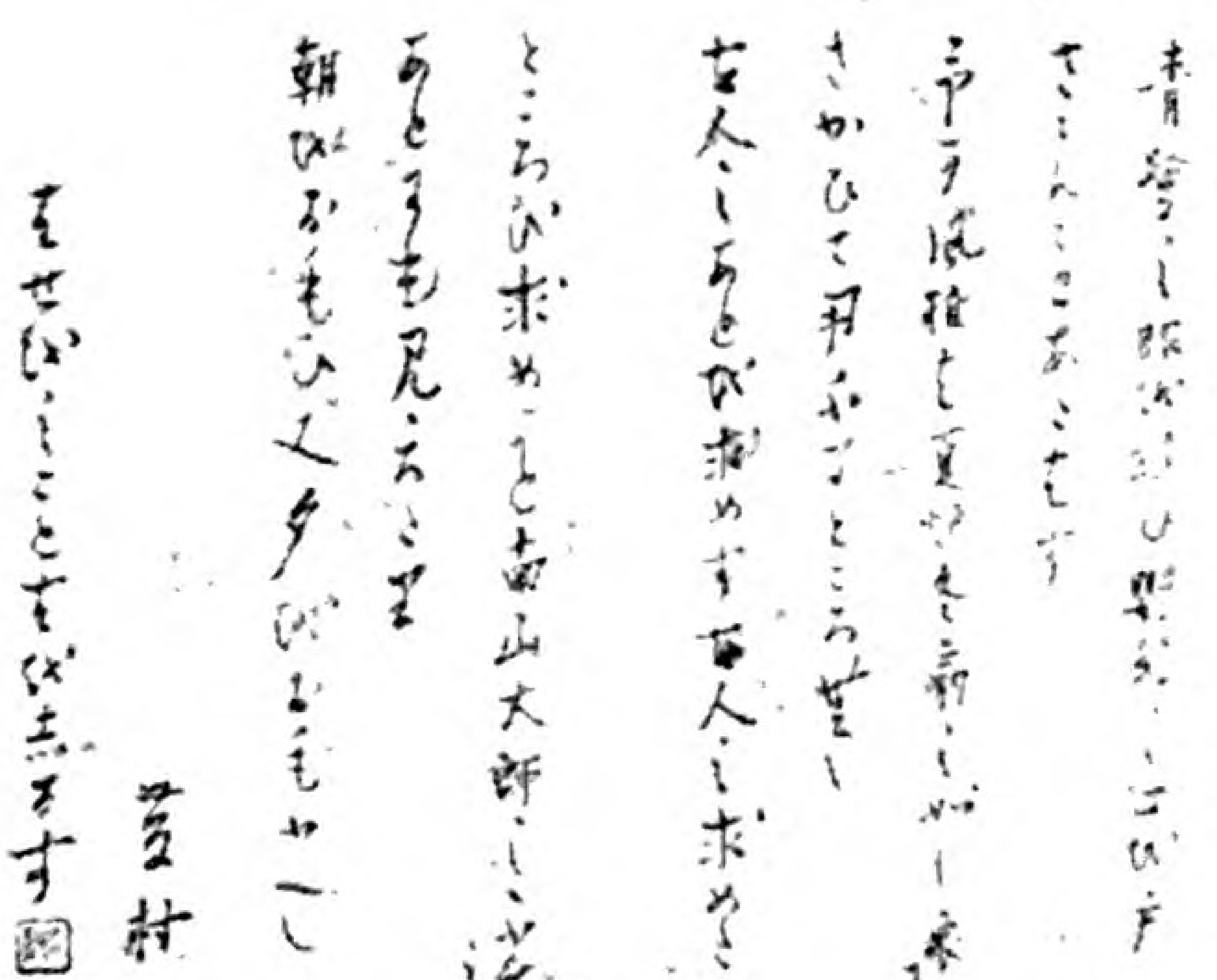
（里見弴）



（志賀直哉）



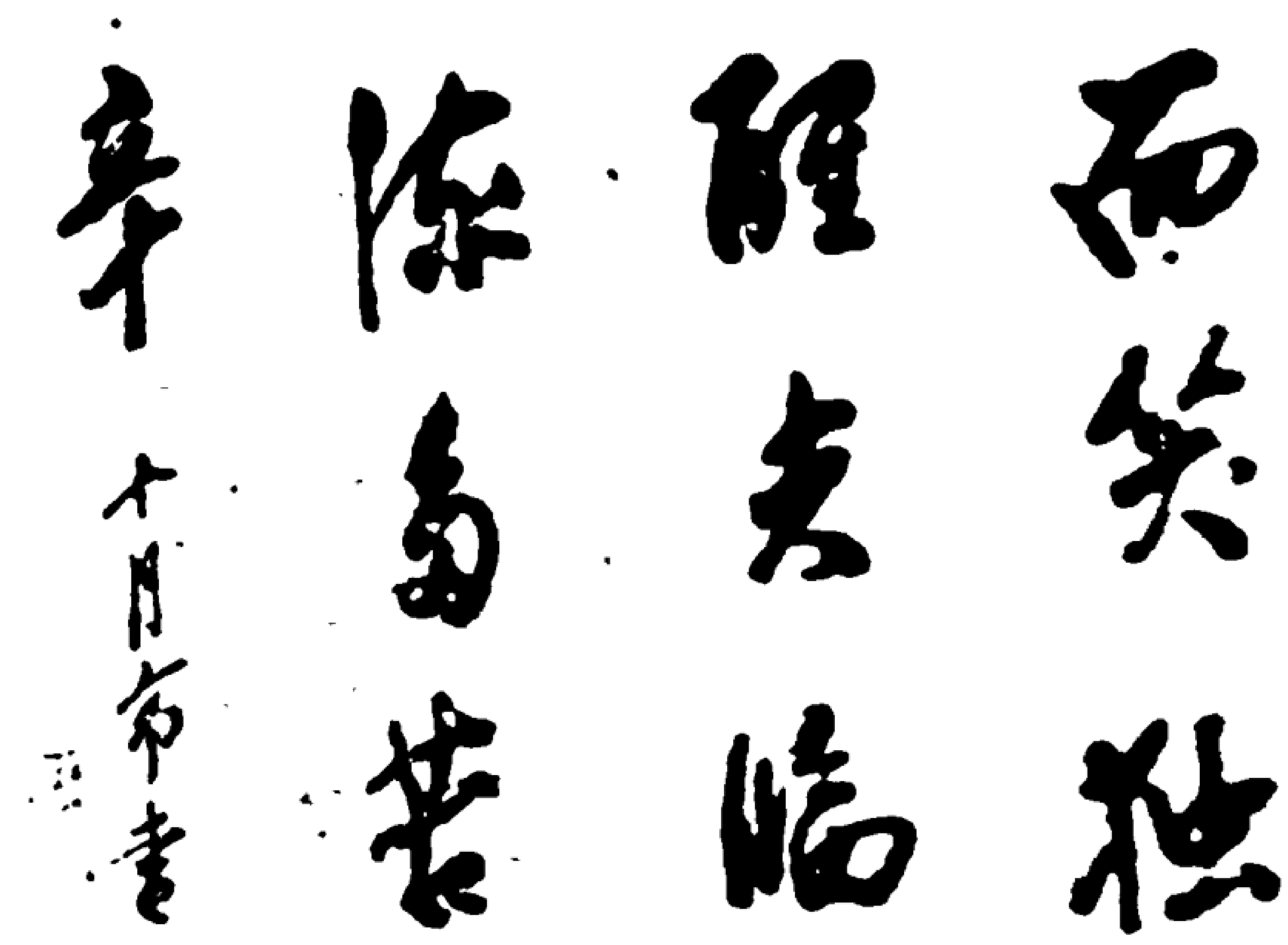
（佐藤春夫）



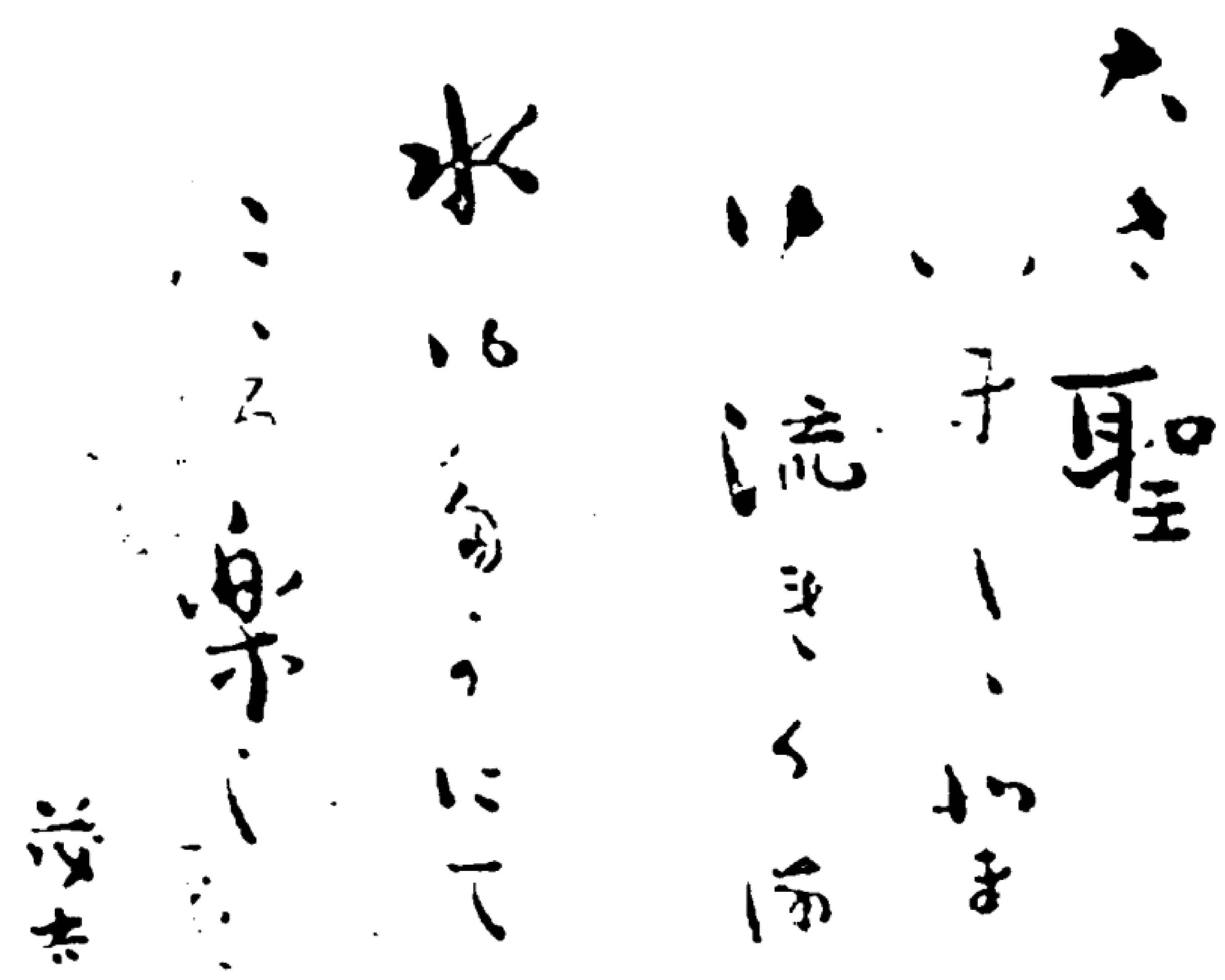
（島崎藤村）



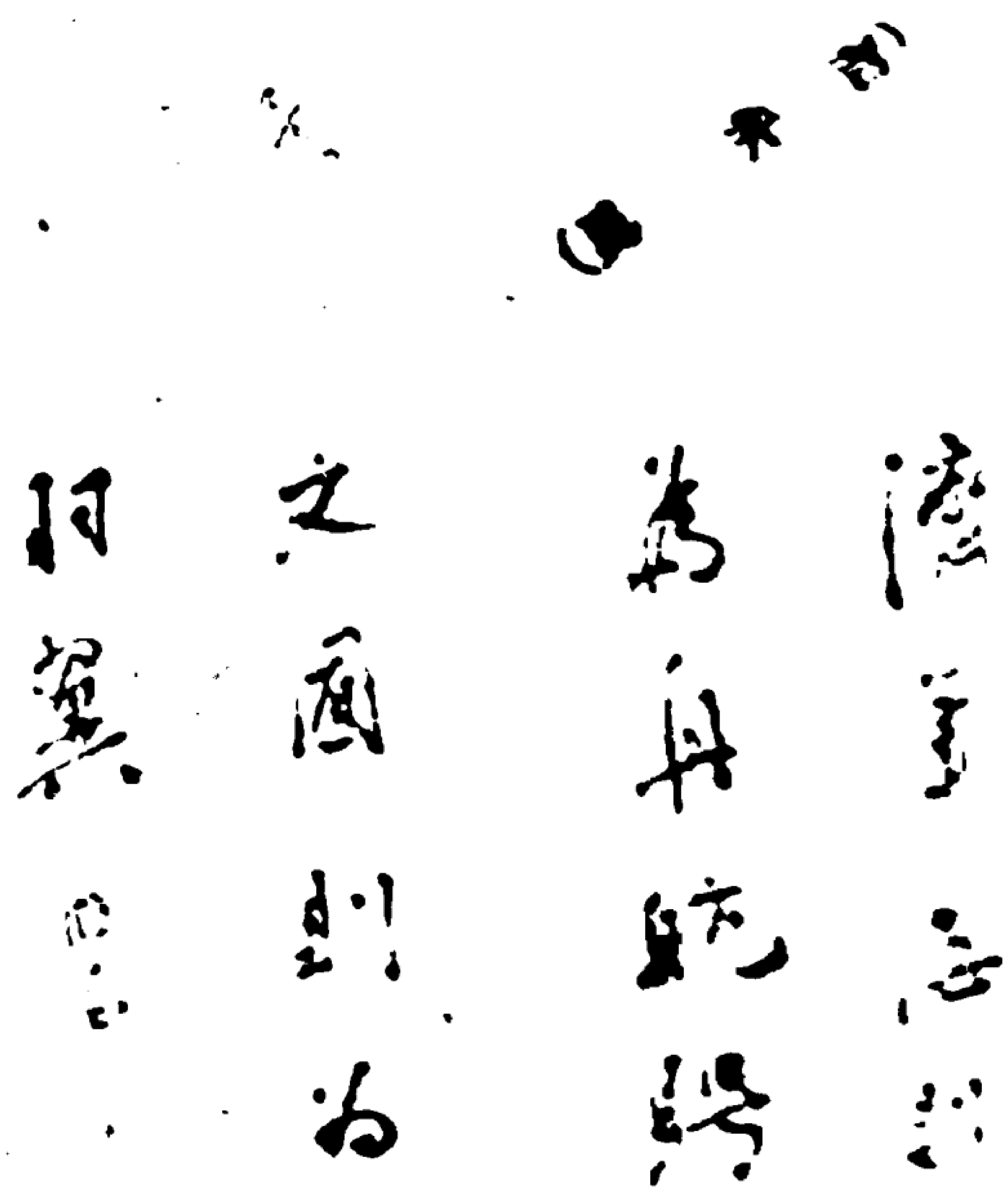
（佐々木信綱）



（有島生馬）



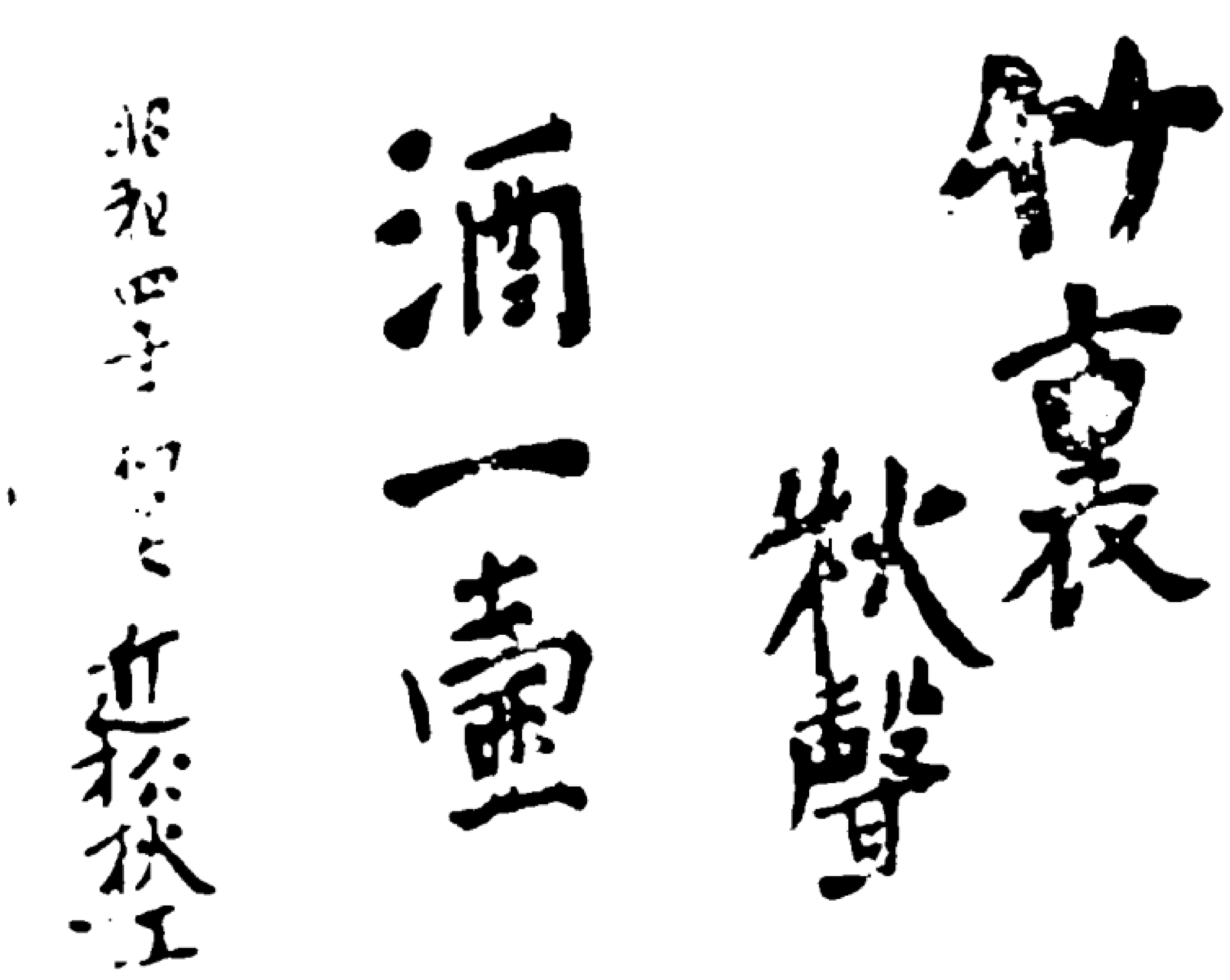
（齋藤茂吉）



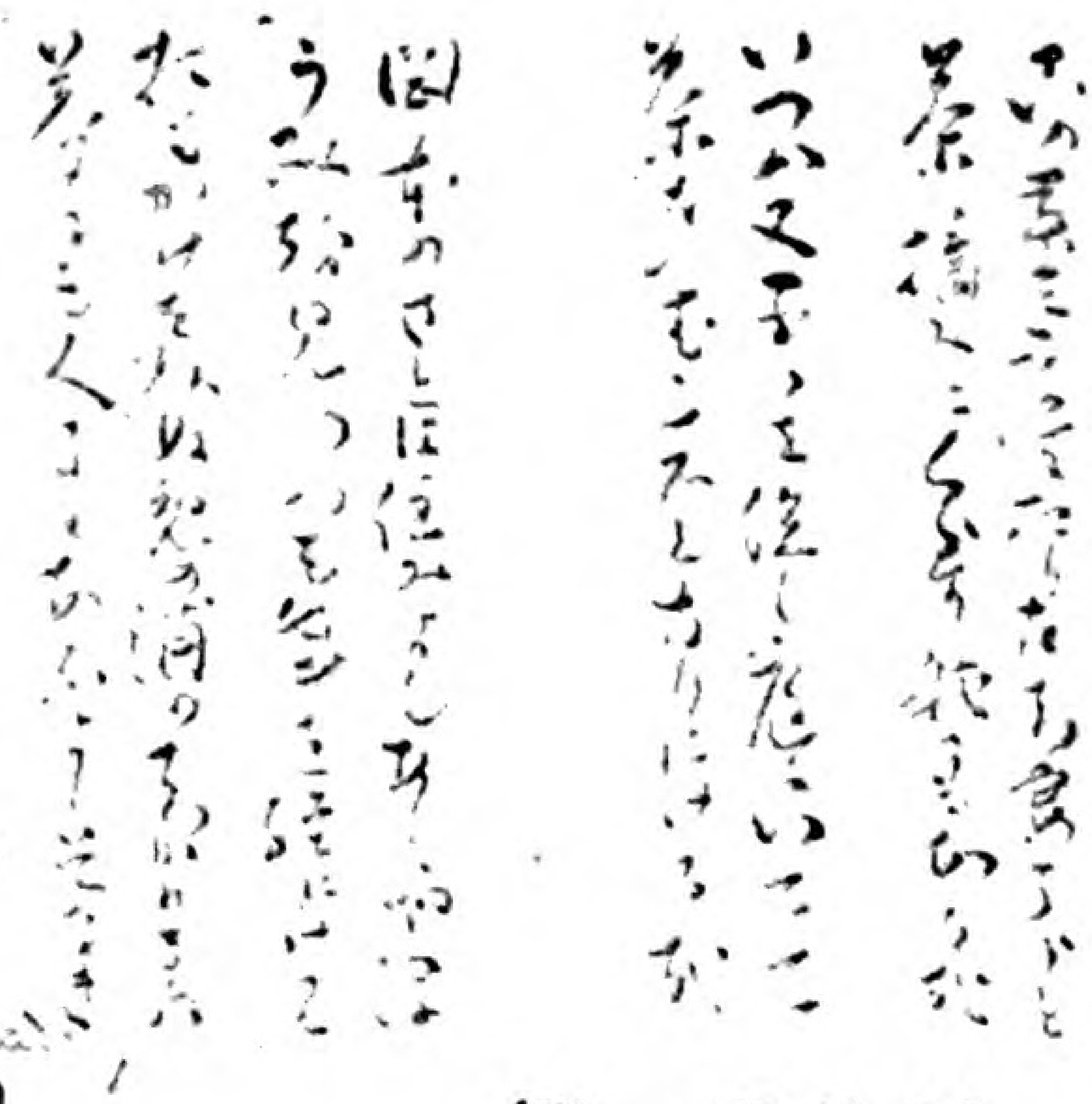
（賀川豊彦）



（與謝野晶子）

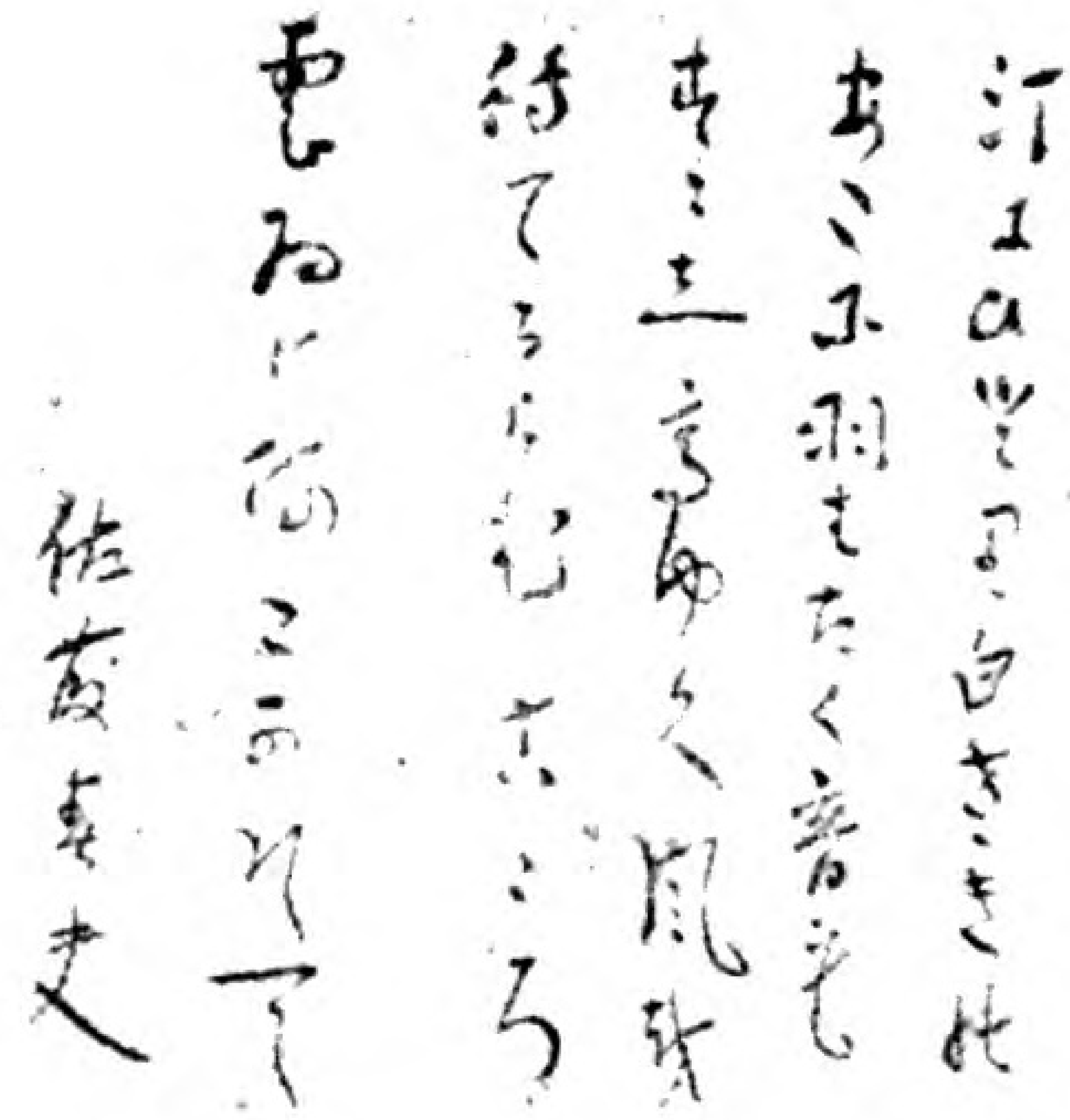


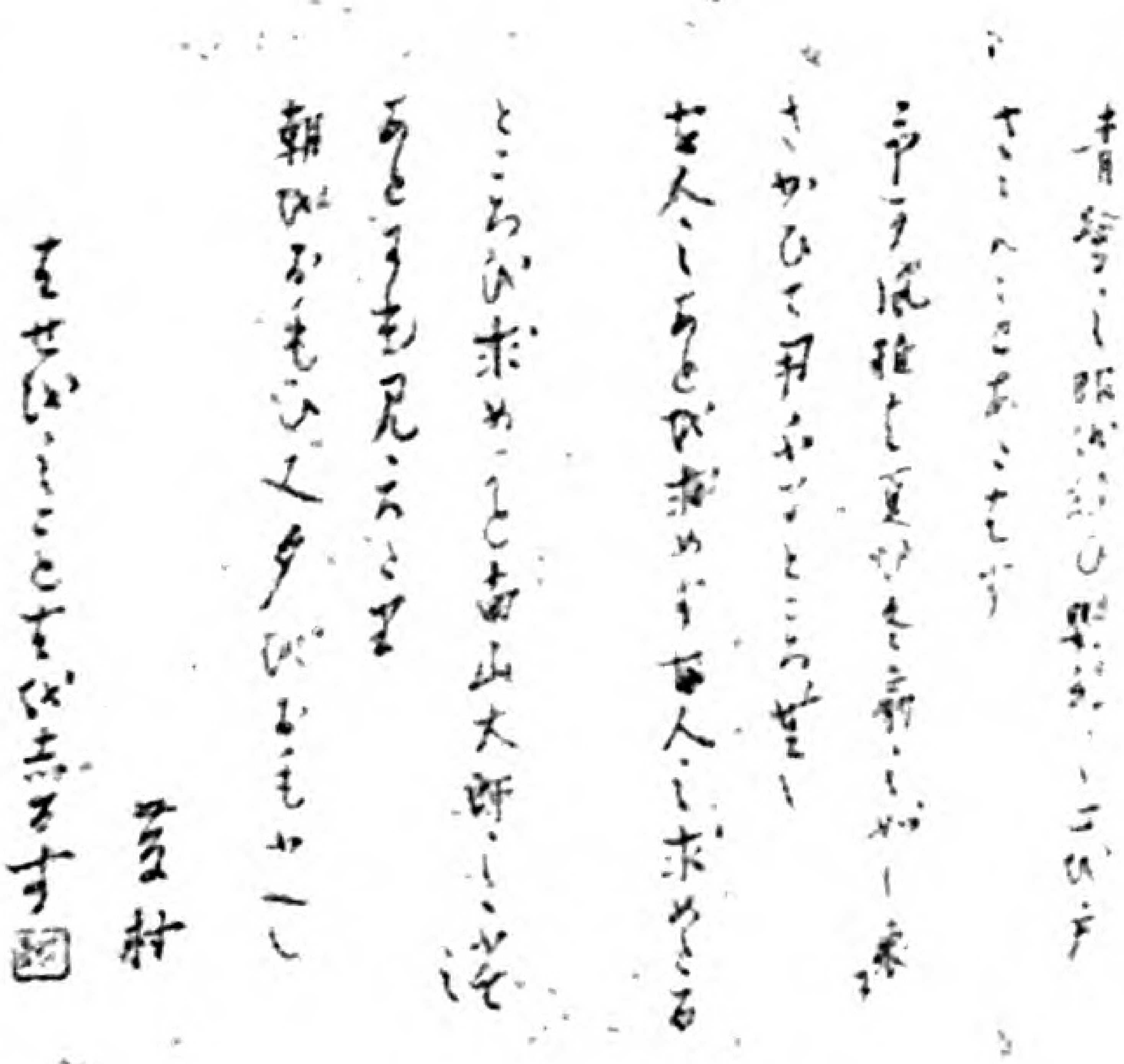
（近松秋江）

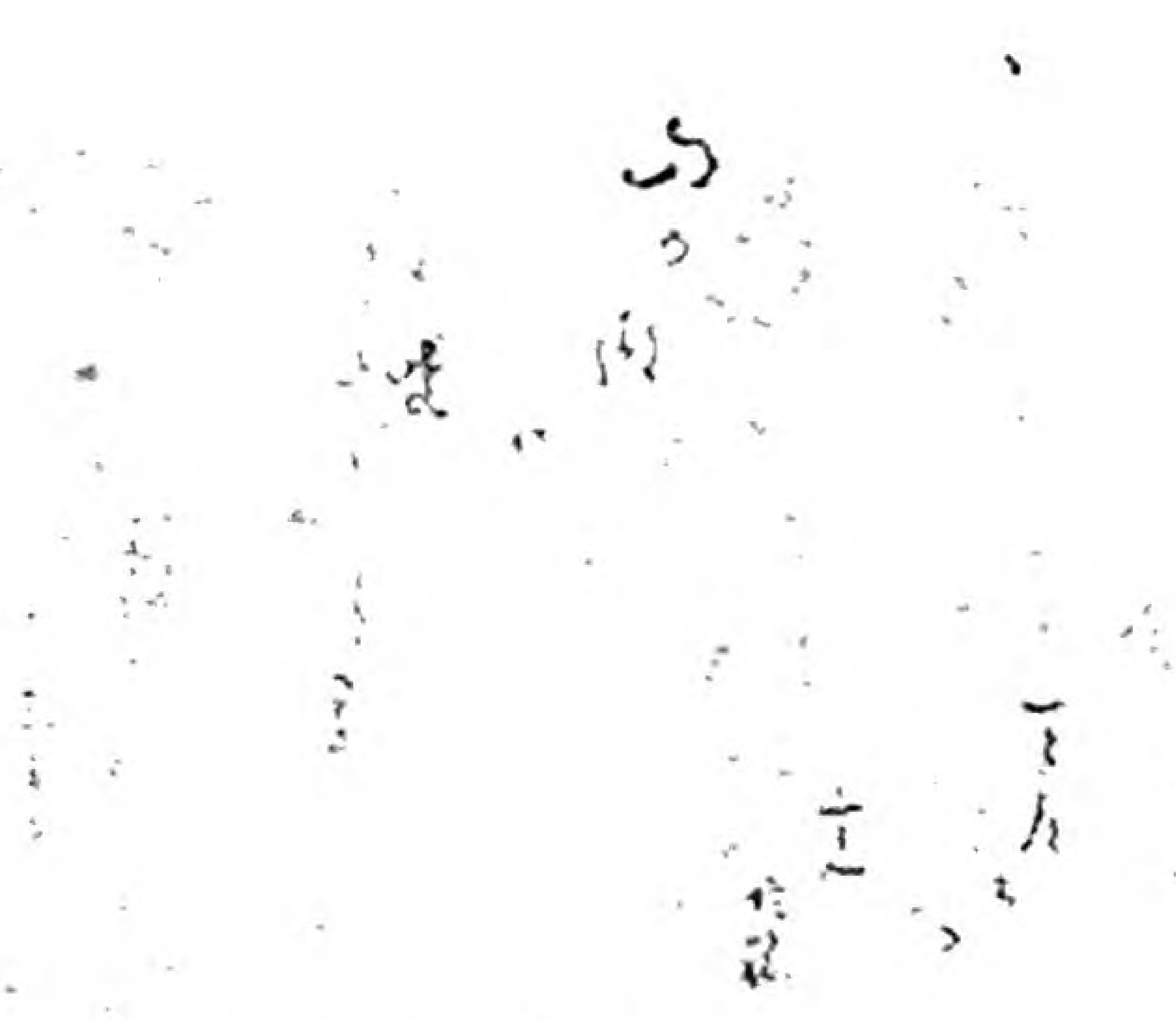

(谷崎潤一郎)

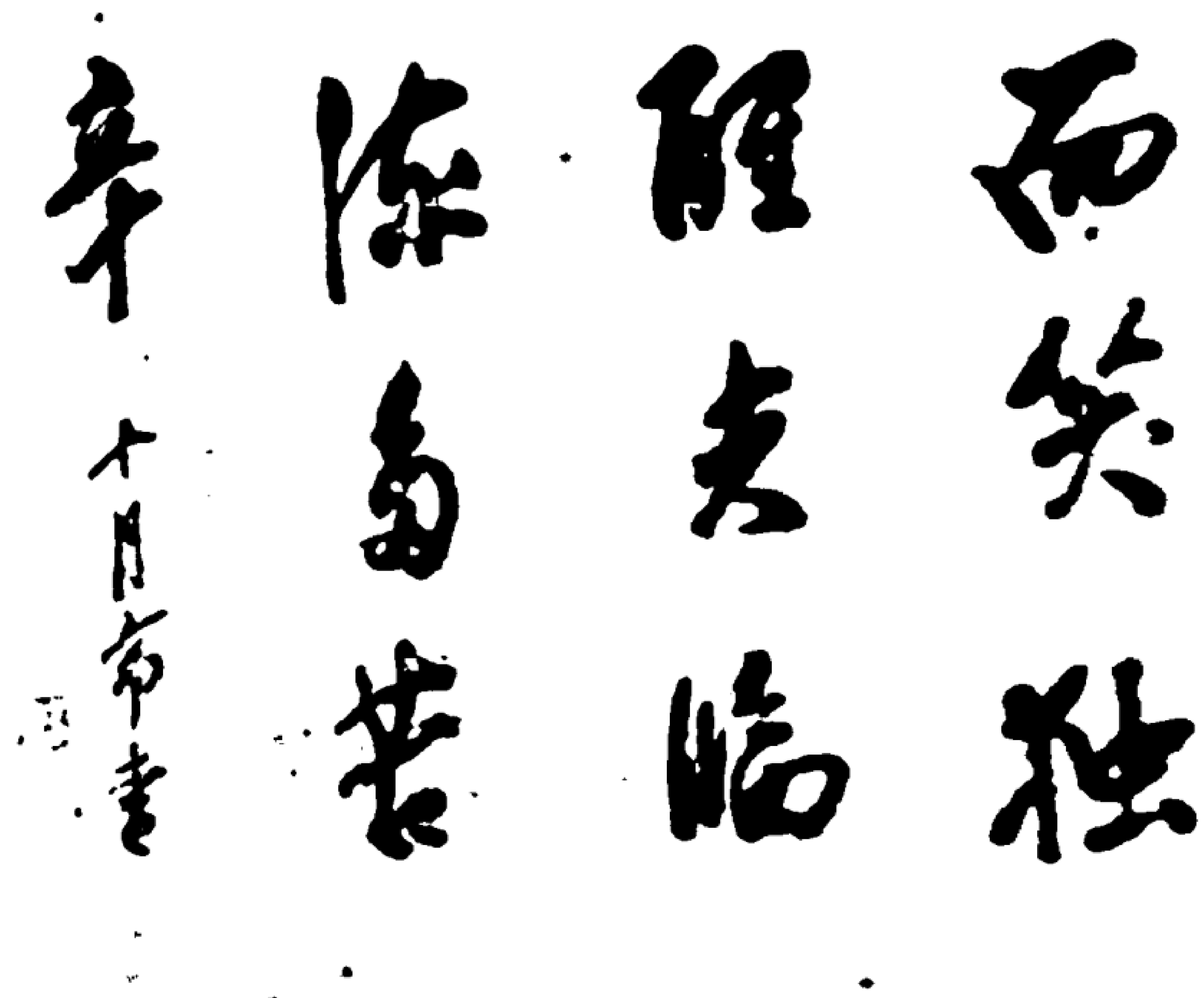

(里見弴)


(志賀直哉)

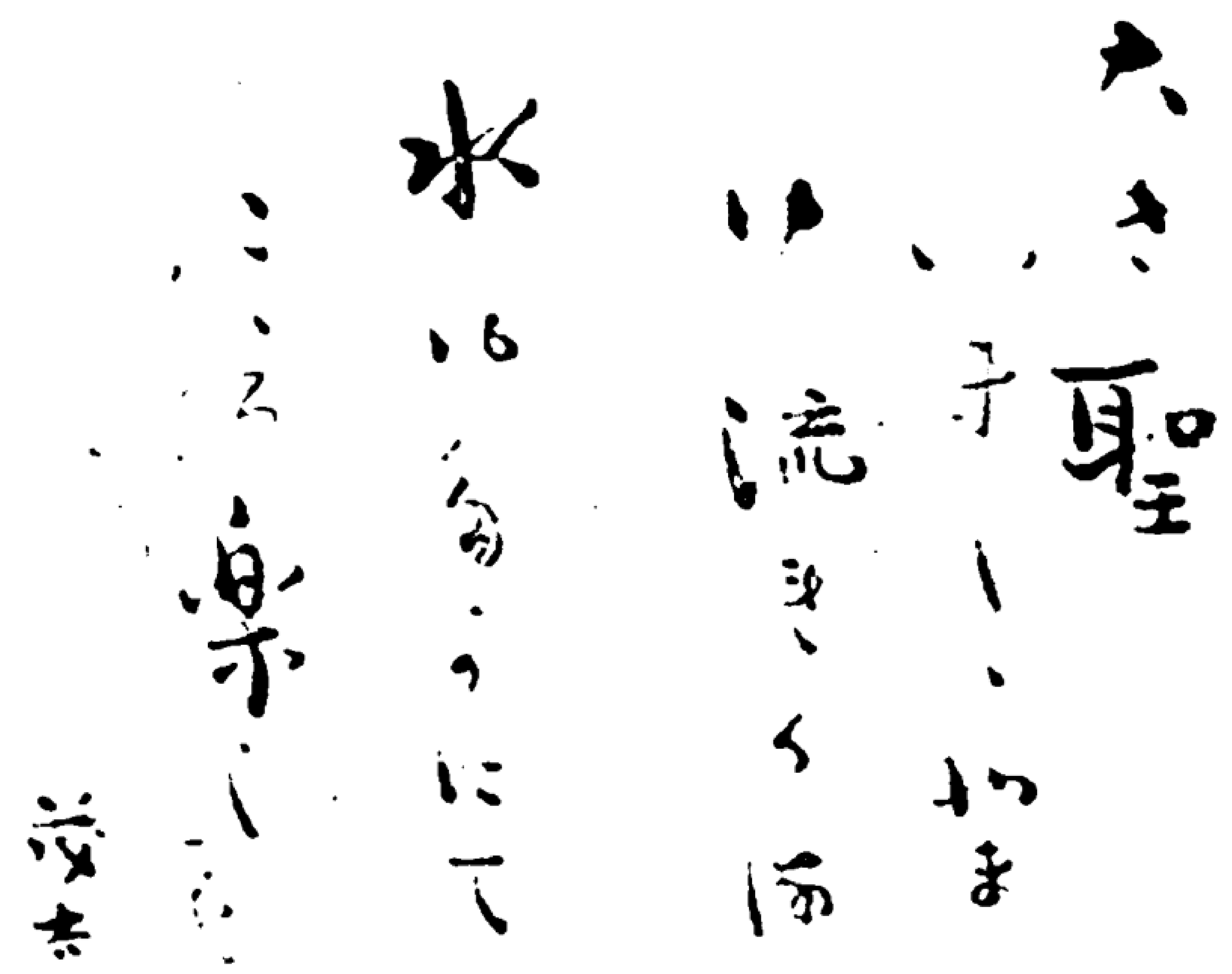

(佐藤春夫)


(島崎藤村)


(佐佐木信綱)



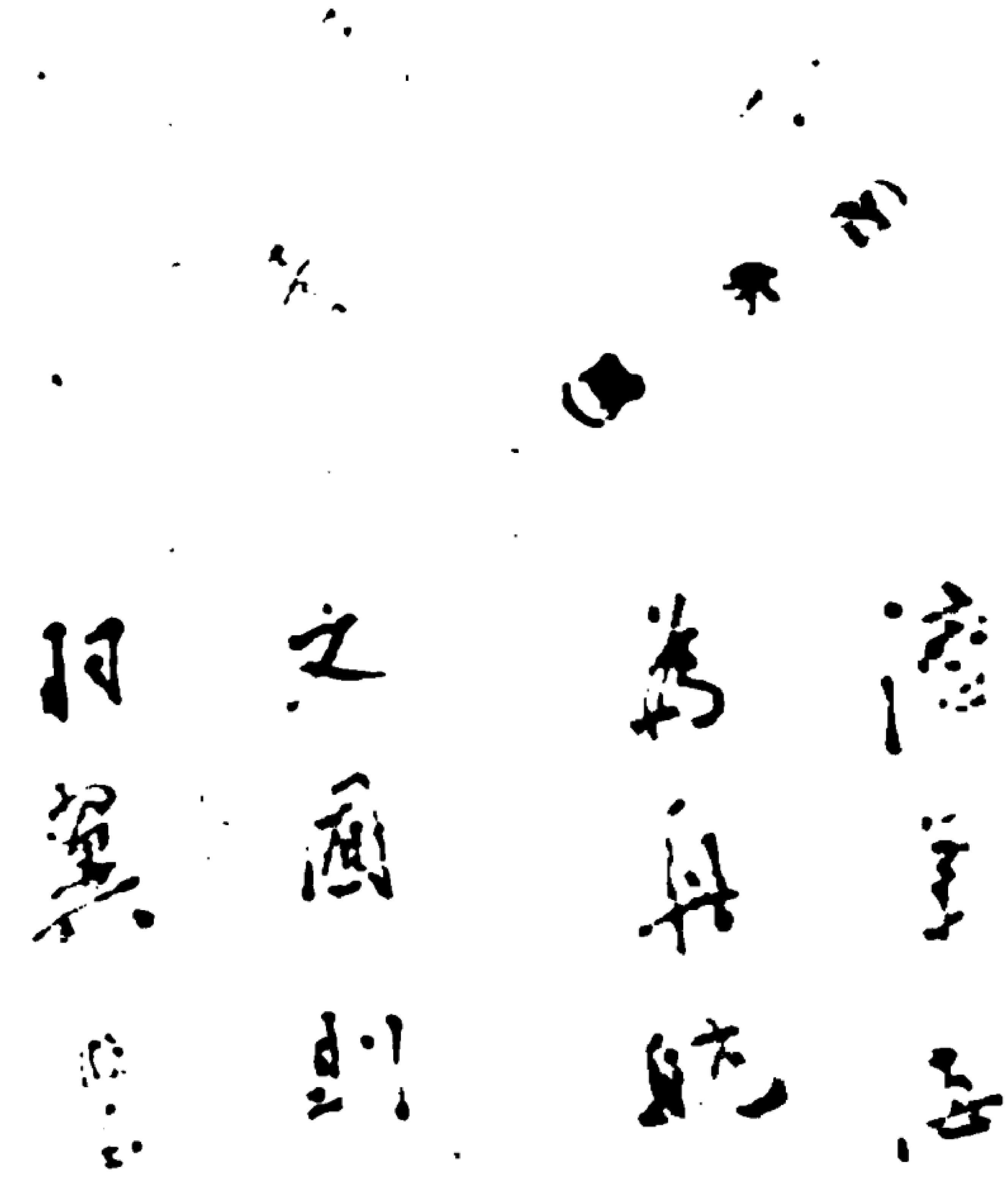
(有島生馬)



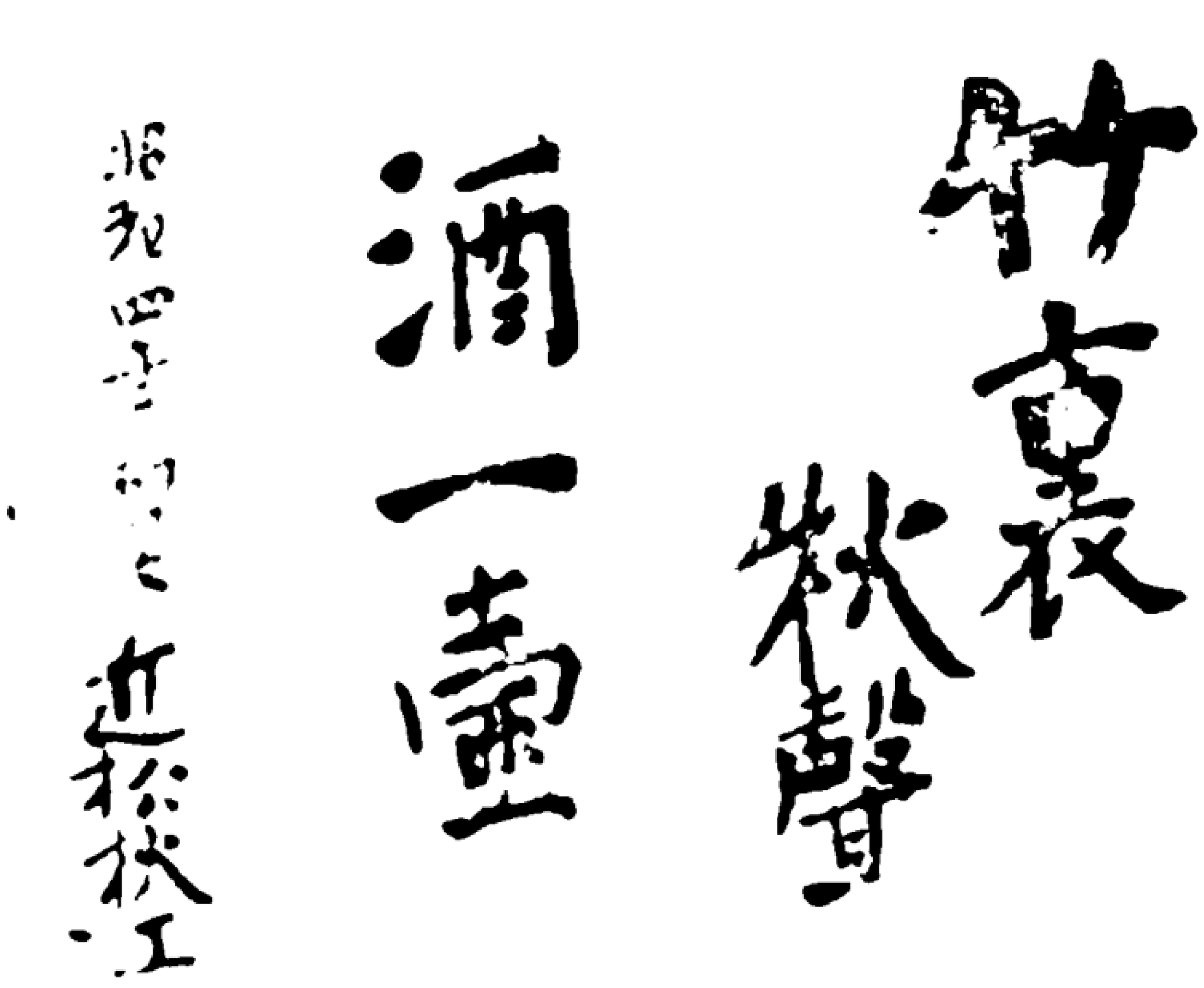
(齋藤茂吉)



(與謝野晶子)

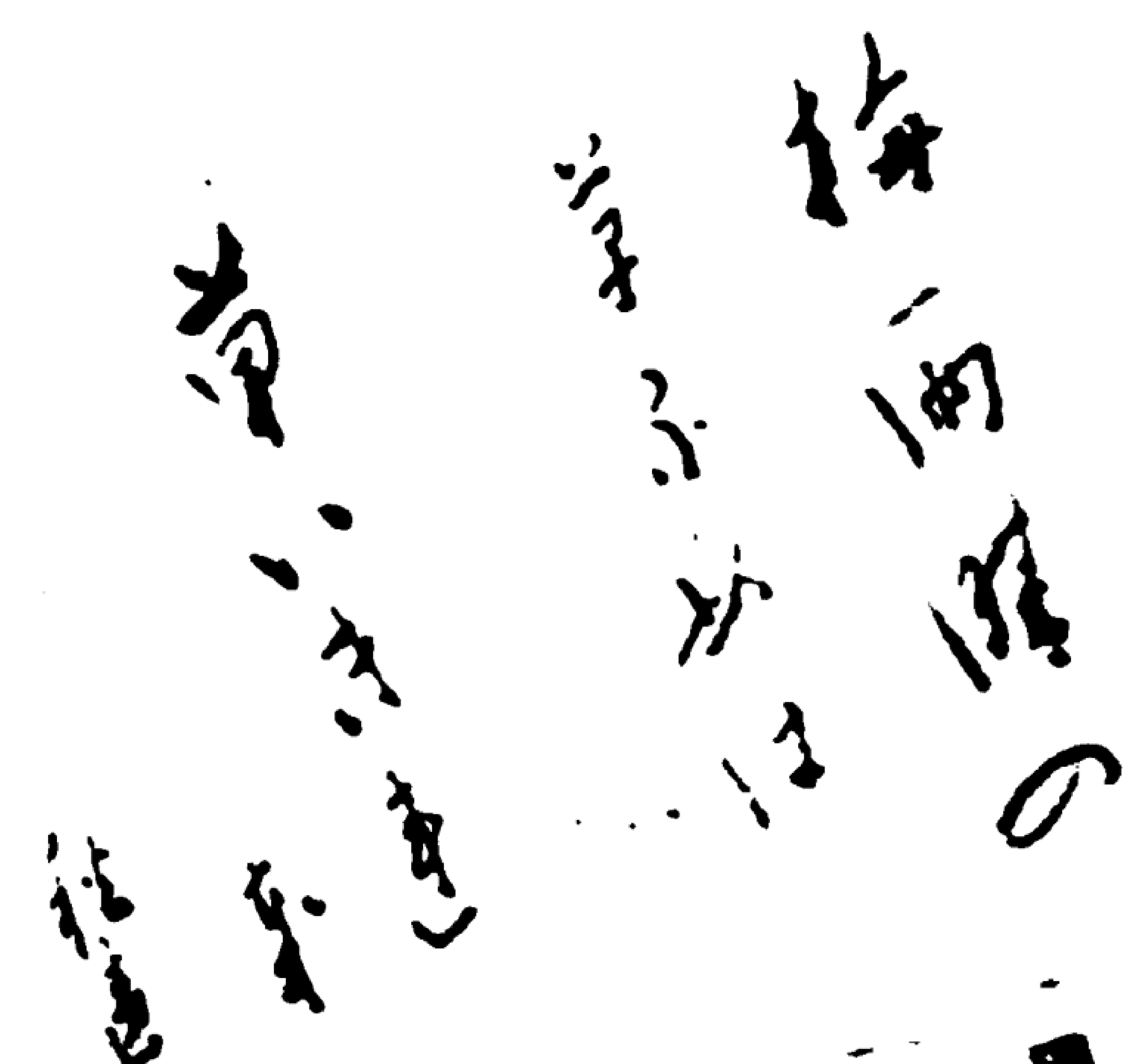


(佐川[illegible]風)

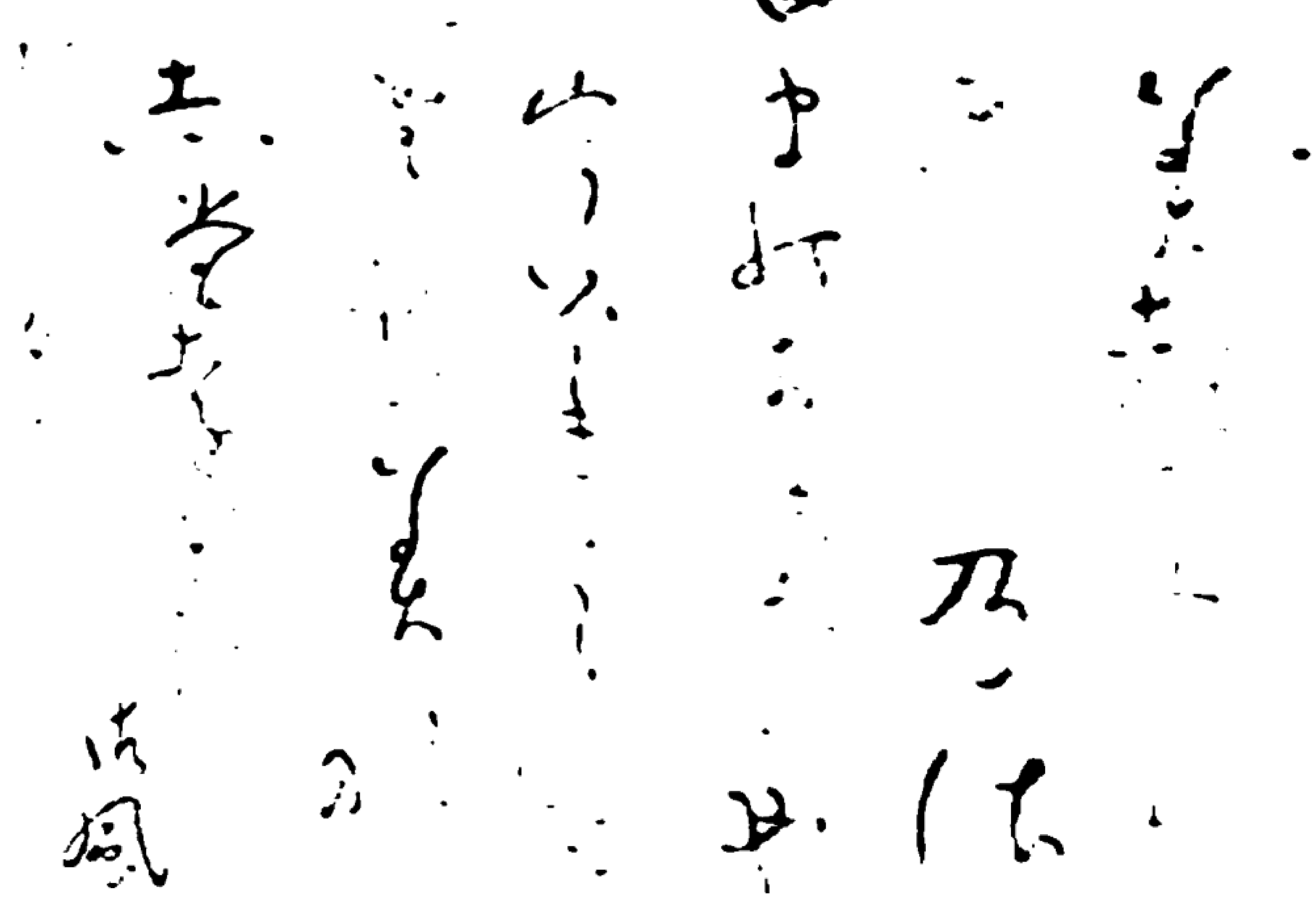


(近松秋江)

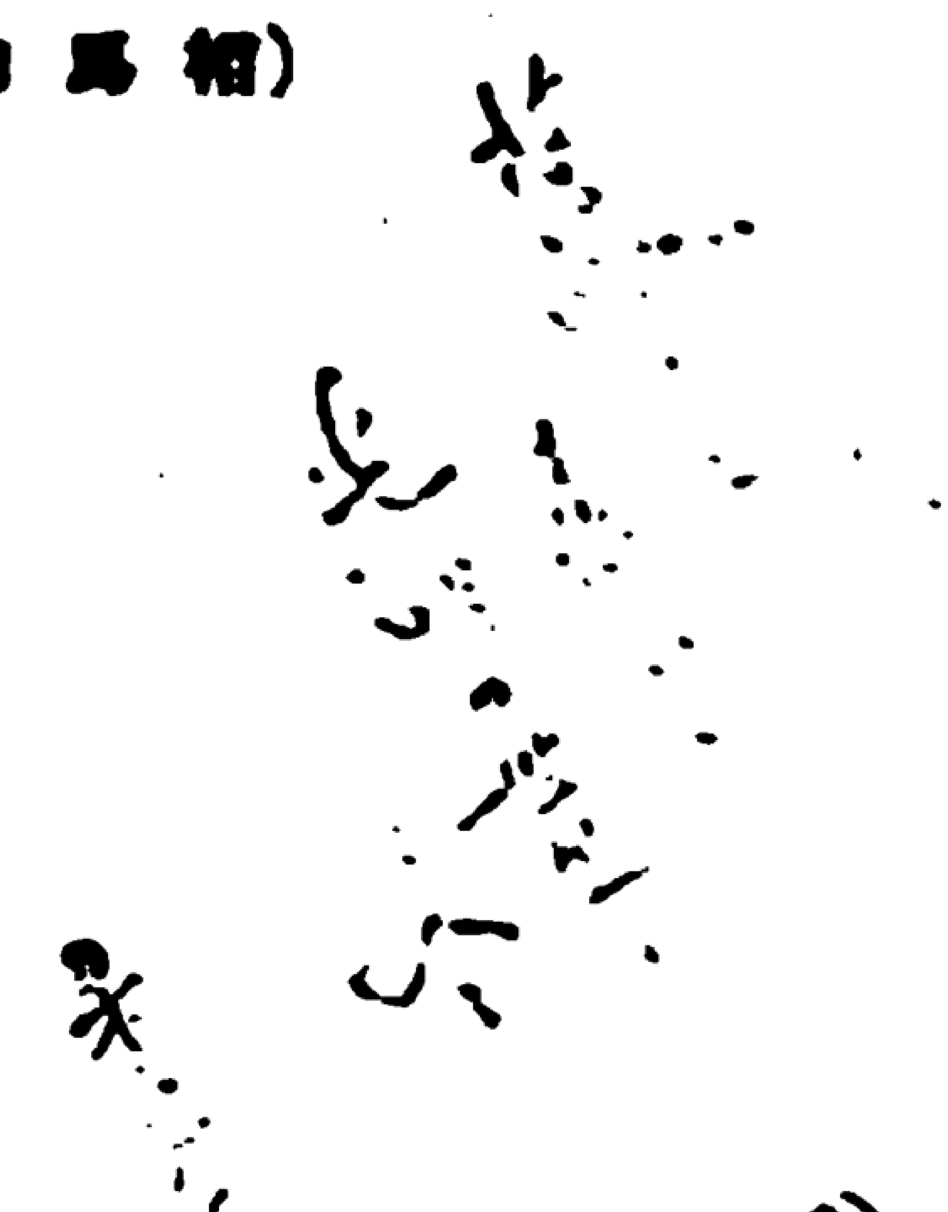

(河東碧梧桐)
(田山花袋)
毎月羅漢をかいたらば
五百の羅漢が出来たはづ
實篤
(武者小路實篤)
無用の文を賣つて有用の書を買ふ
千葉生
(千葉龜雄)
(久保田万太郎)



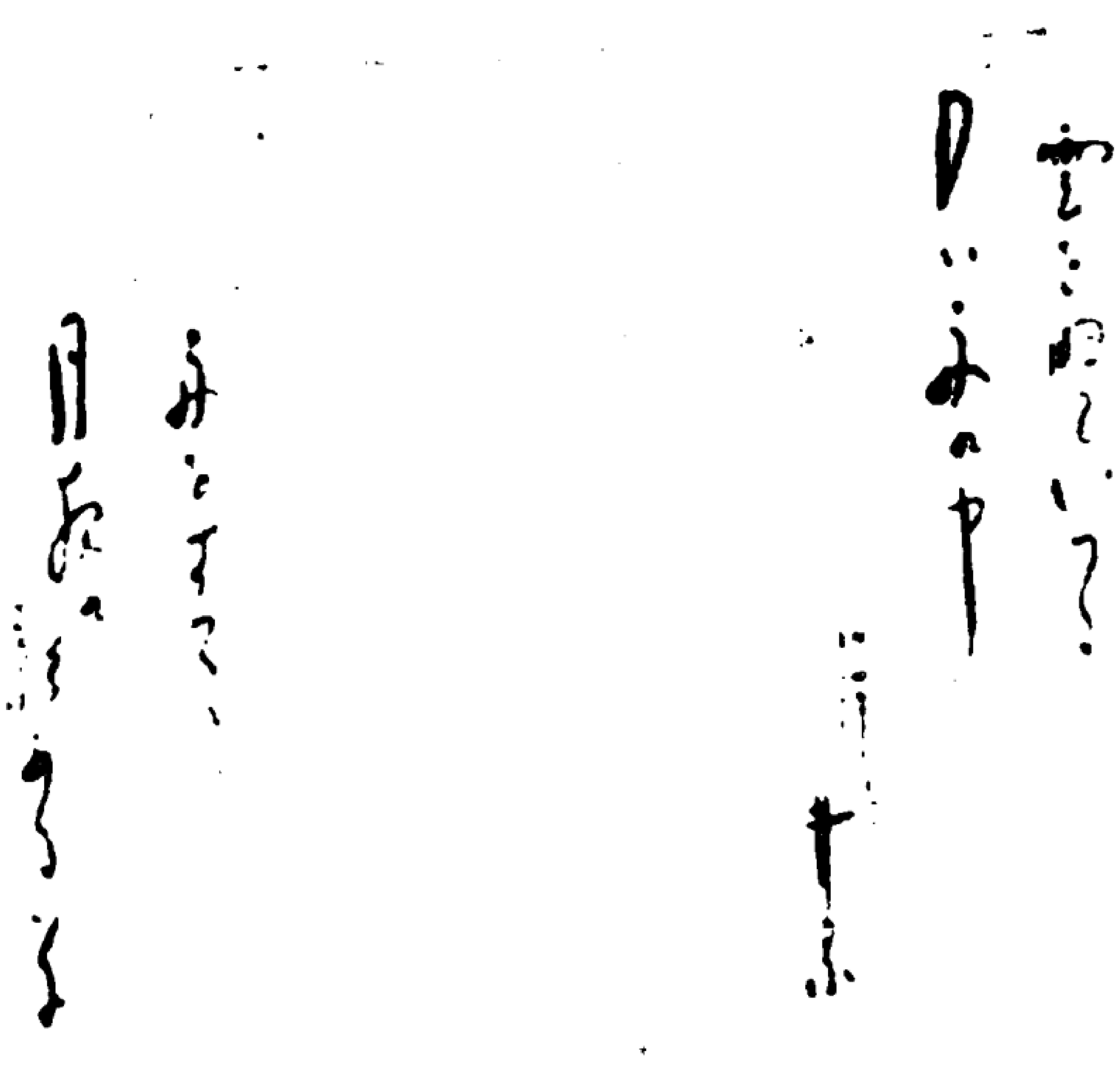
([illegible])



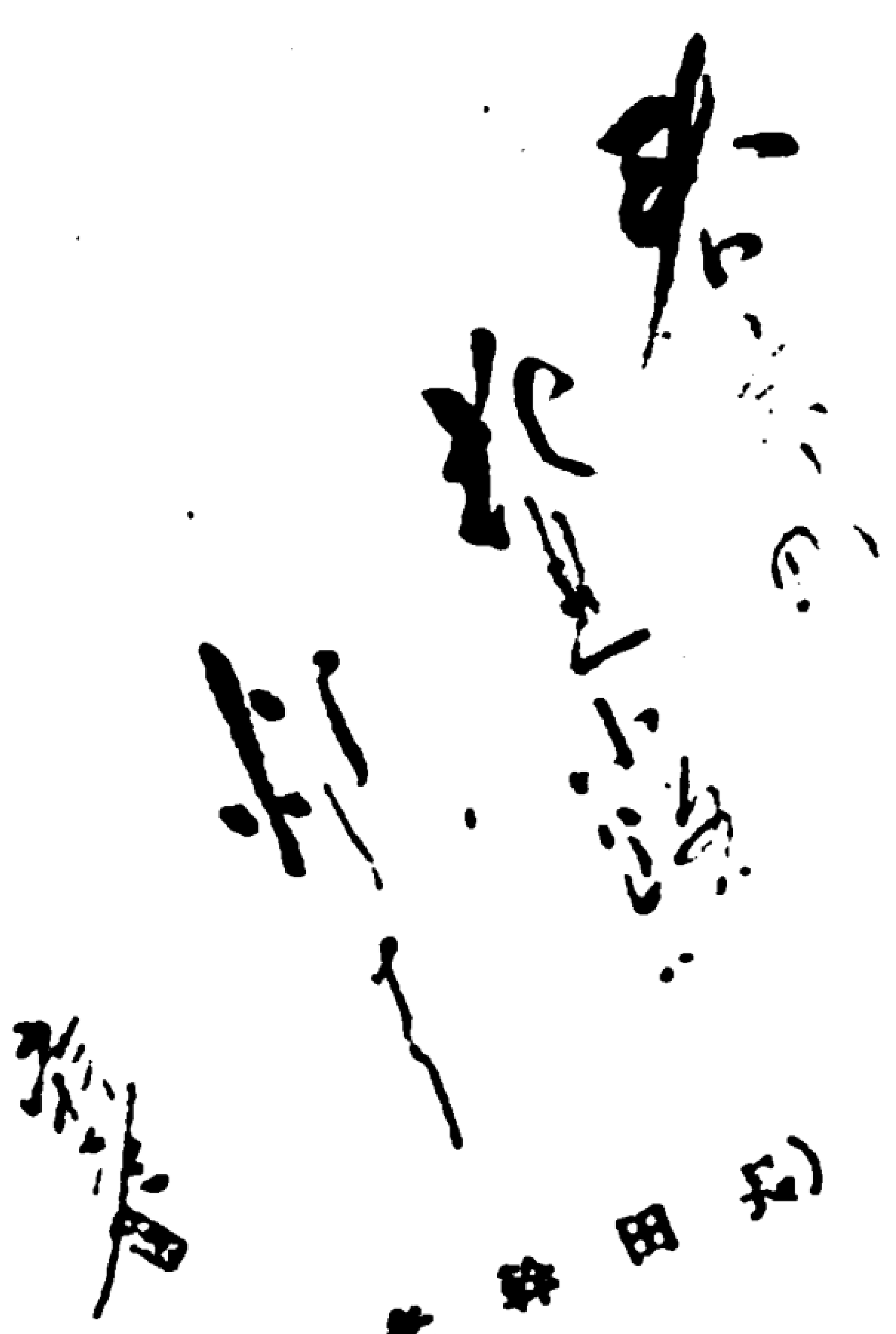
(相馬御風)



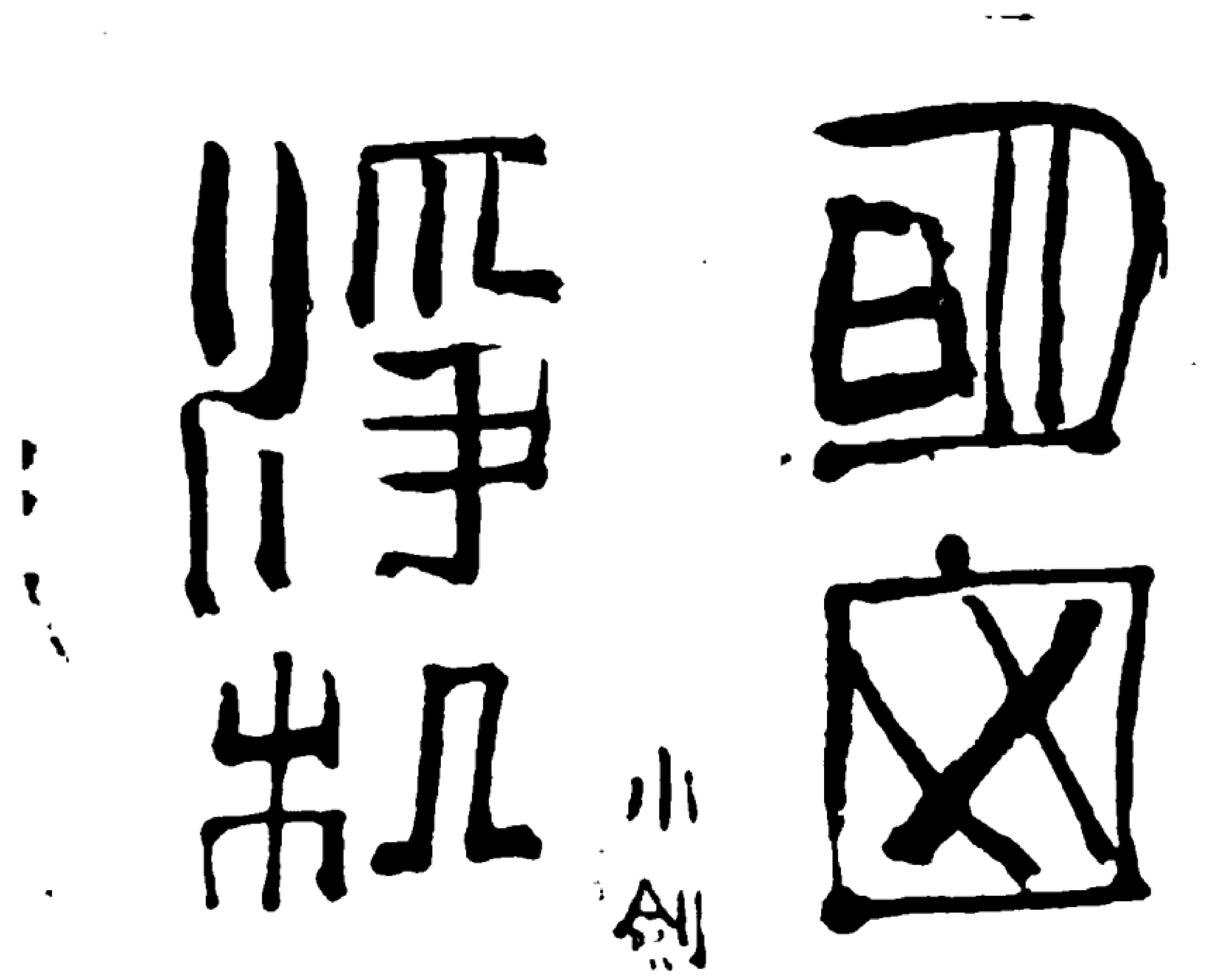
([illegible])



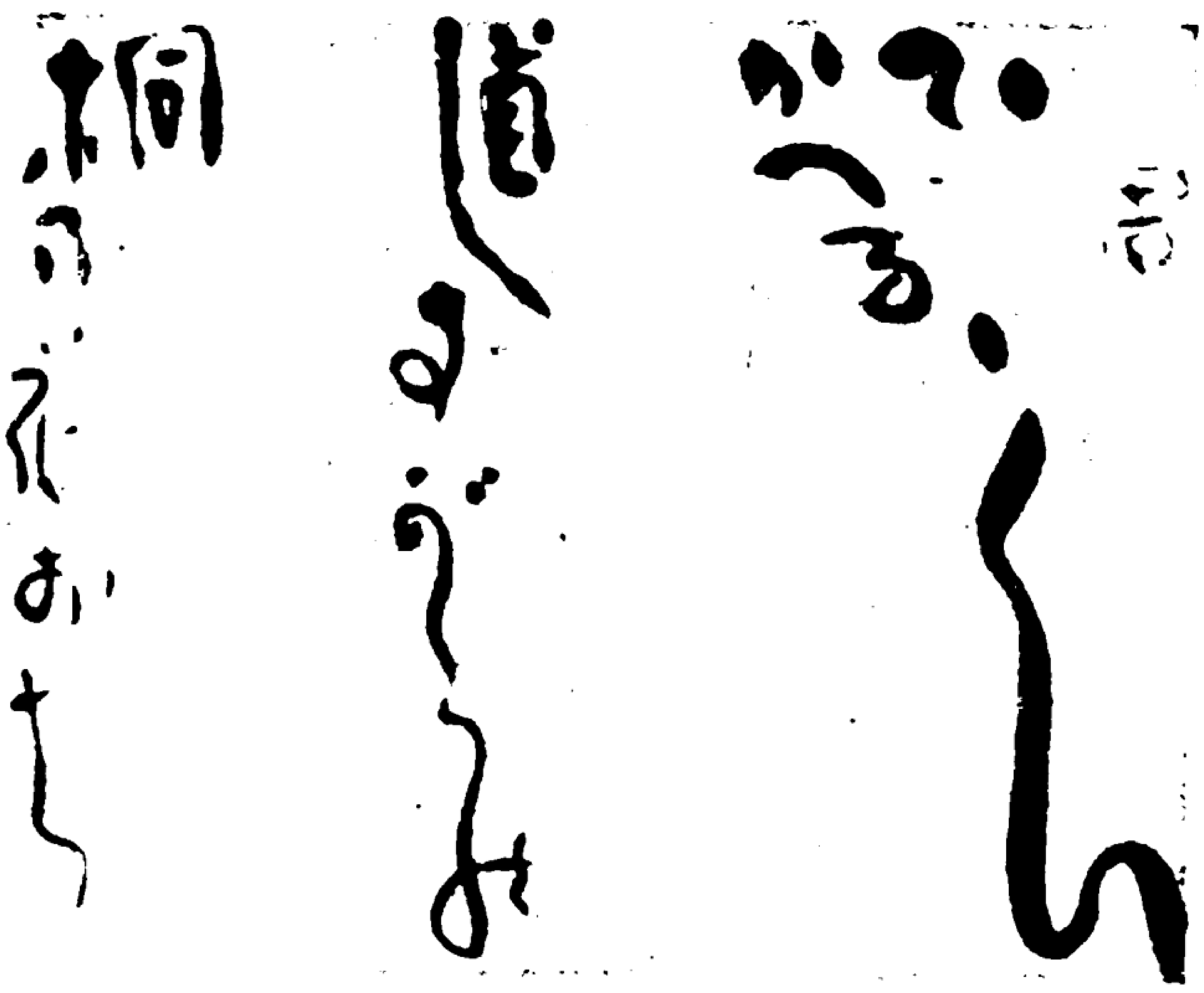
(荻原井泉水)



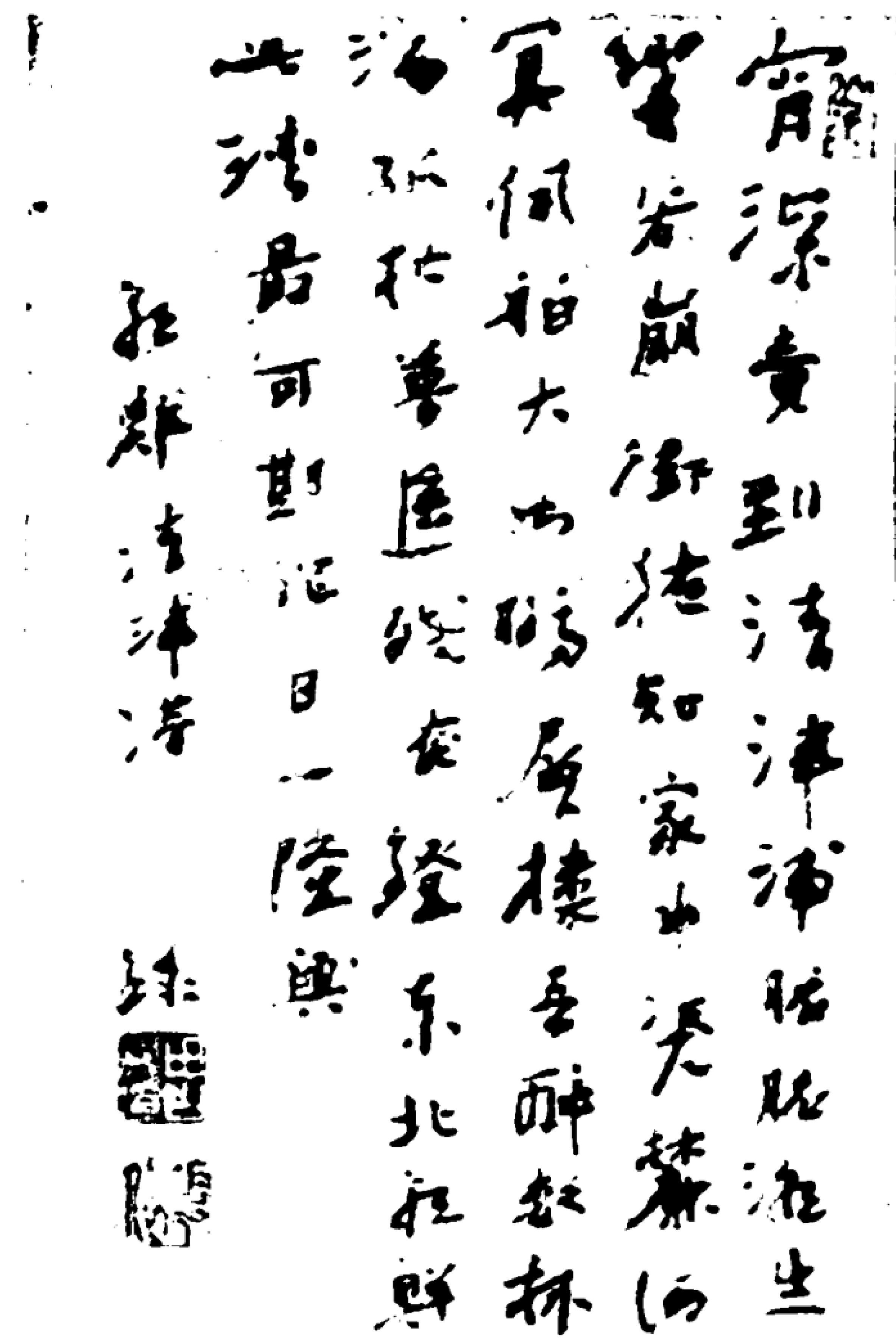
([illegible])



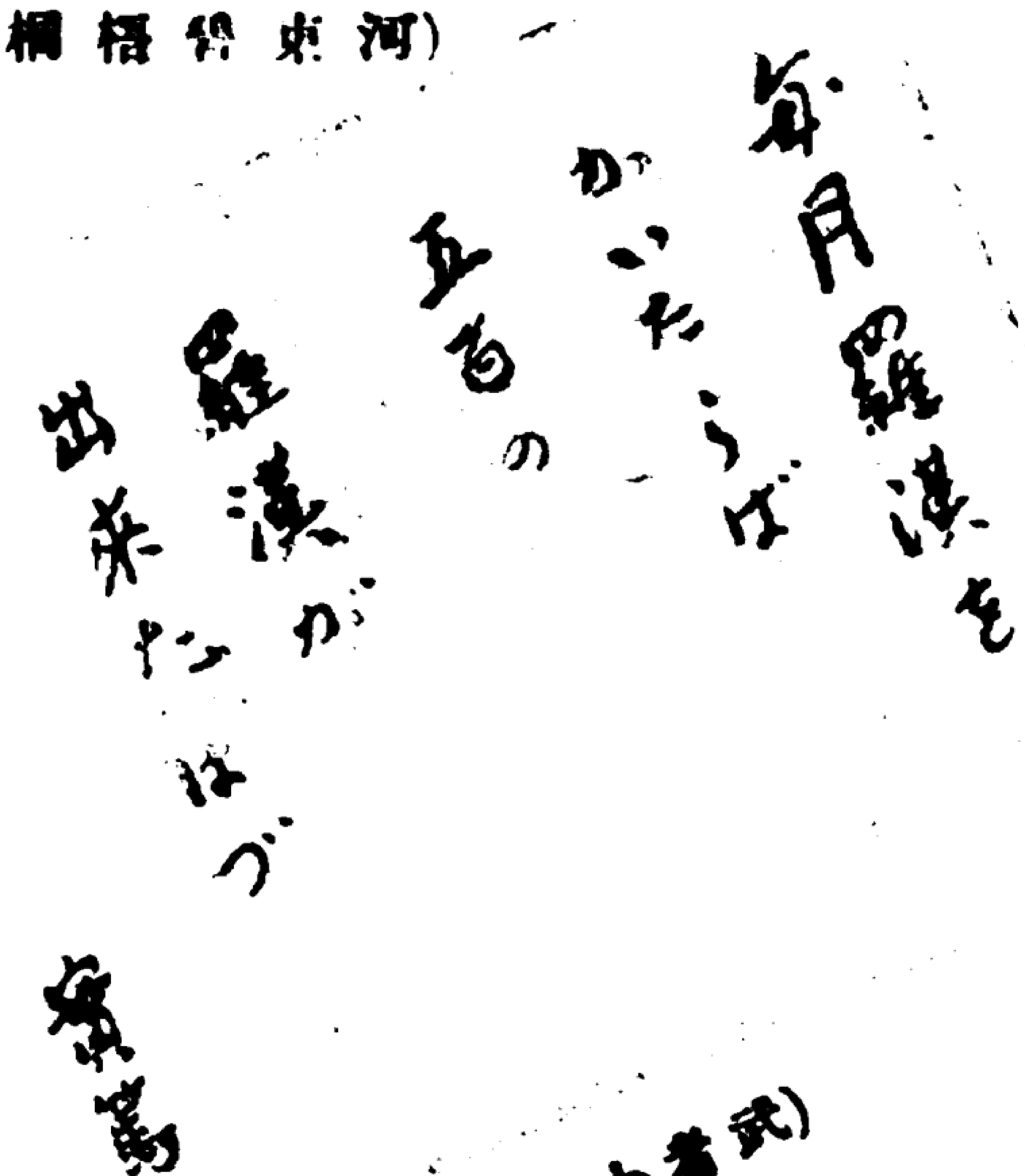
([illegible])



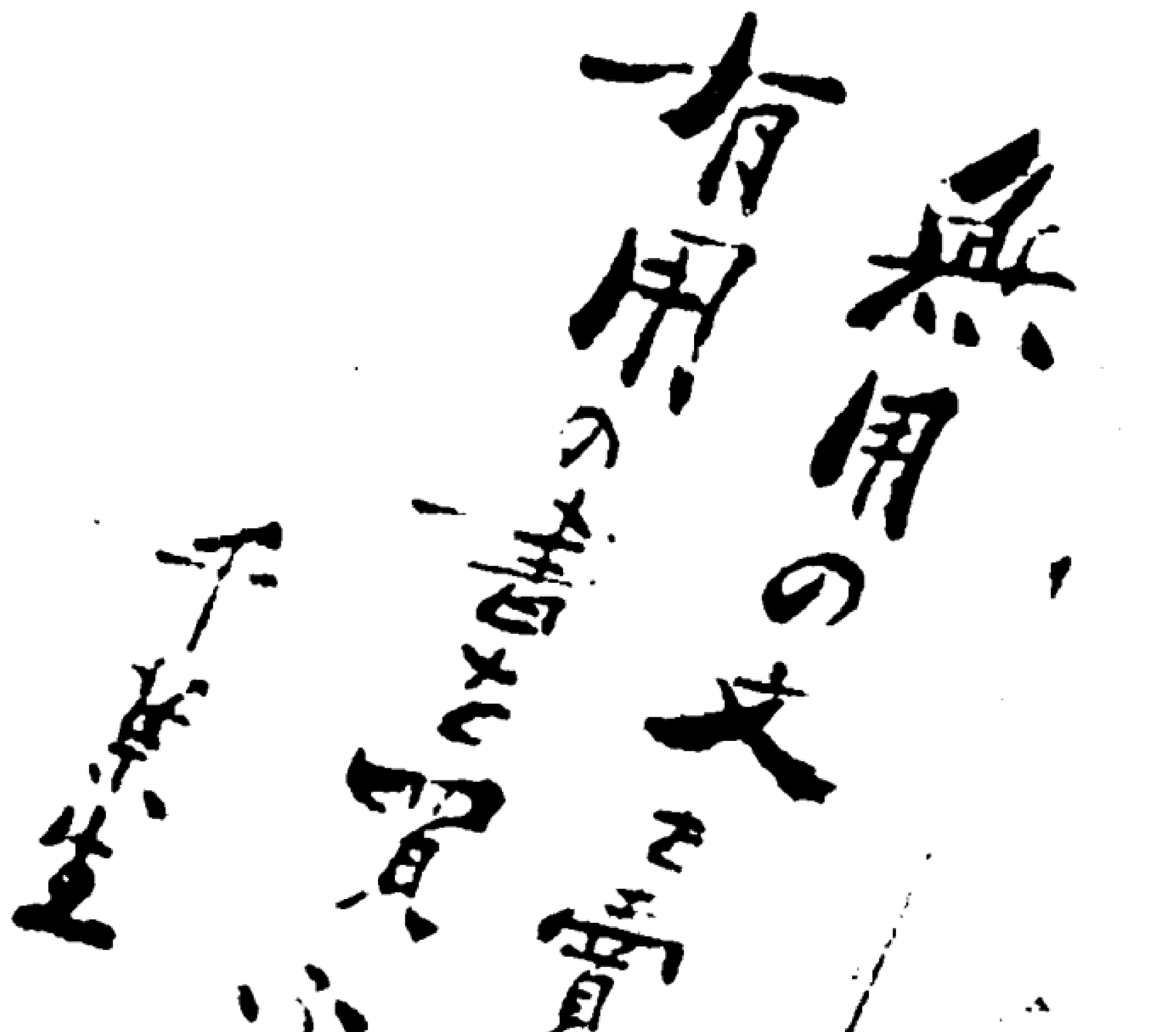
（河東碧梧桐）



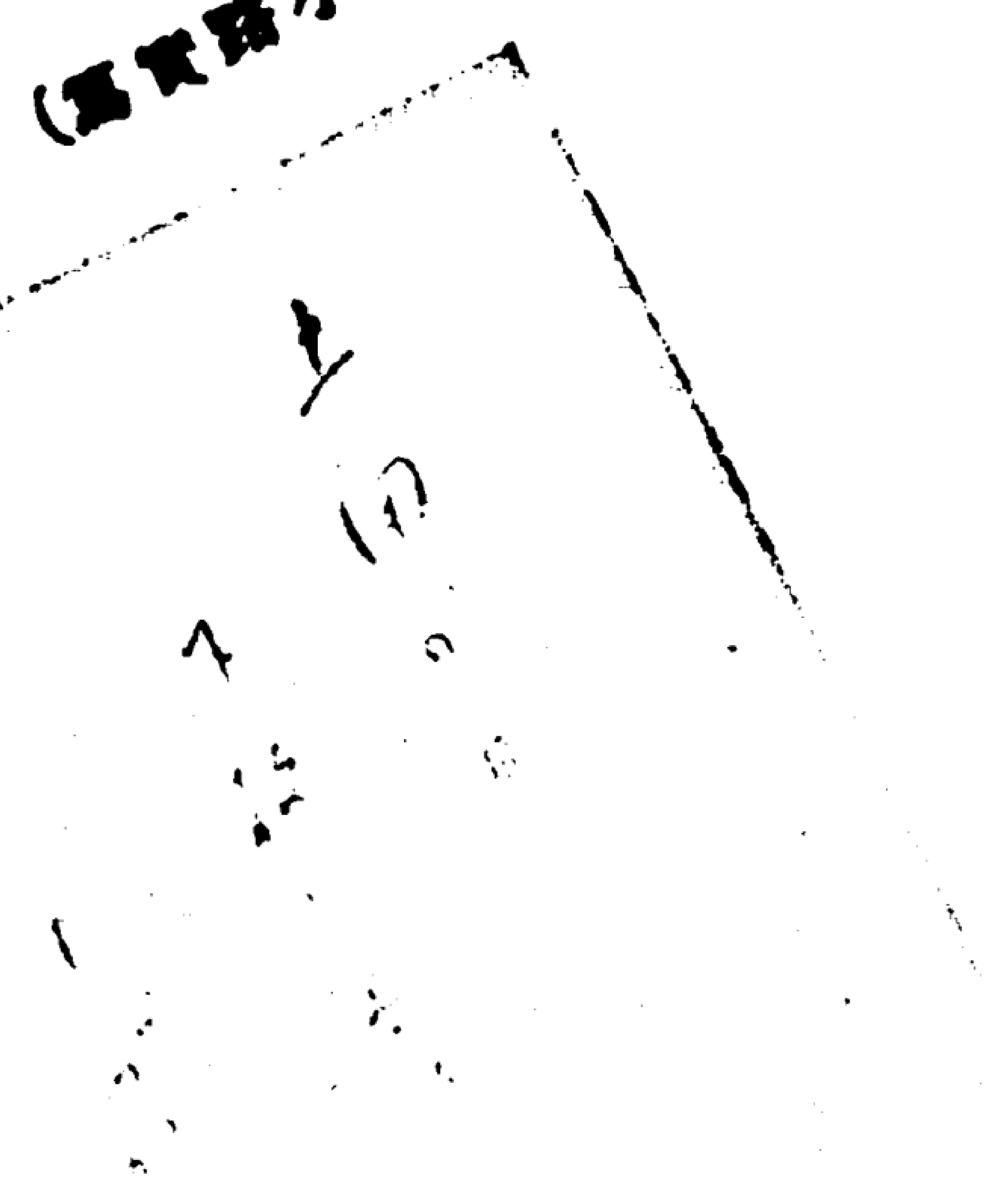
（田山花袋）



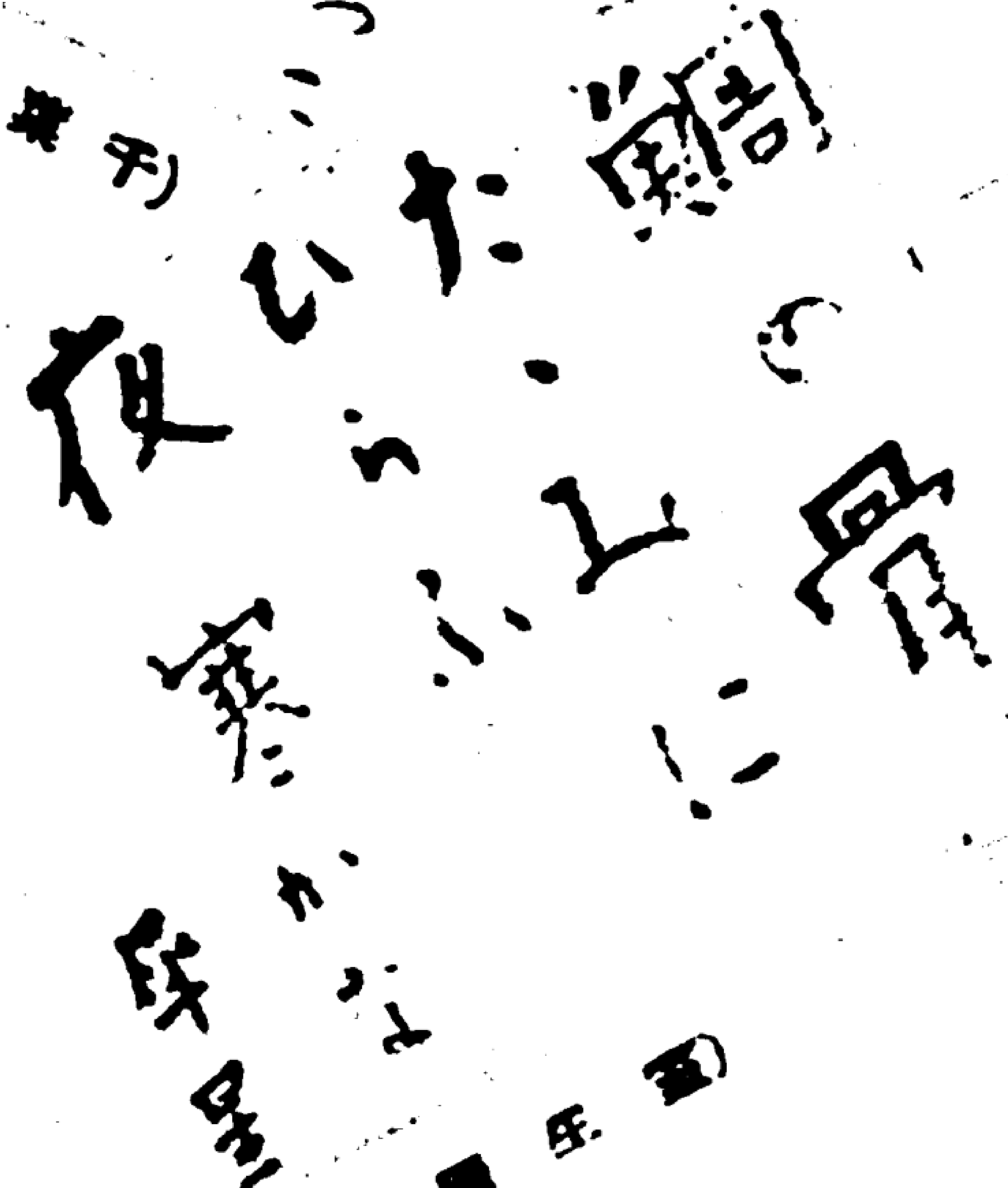
（武者小路實篤）



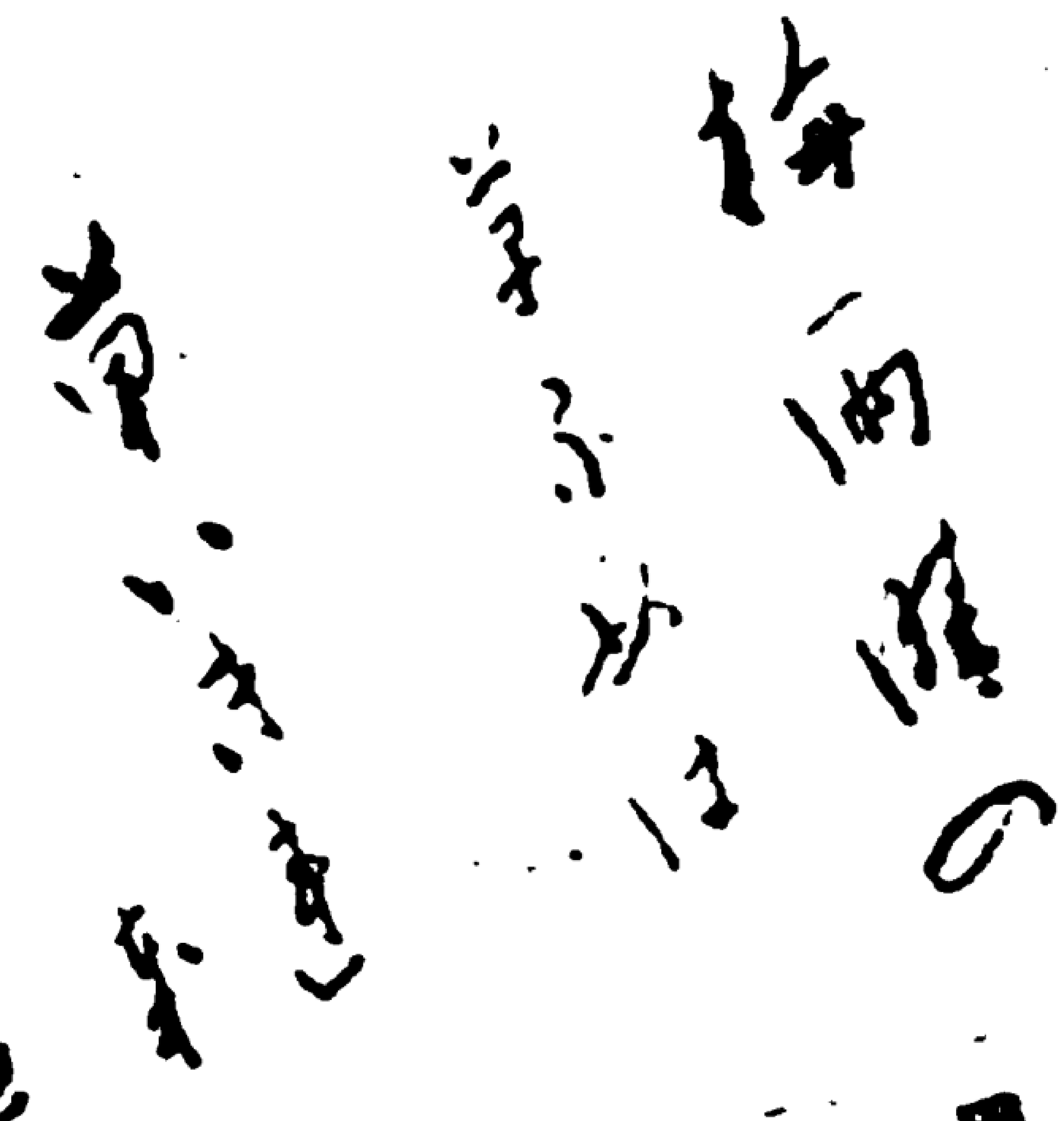
（千葉亀雄）



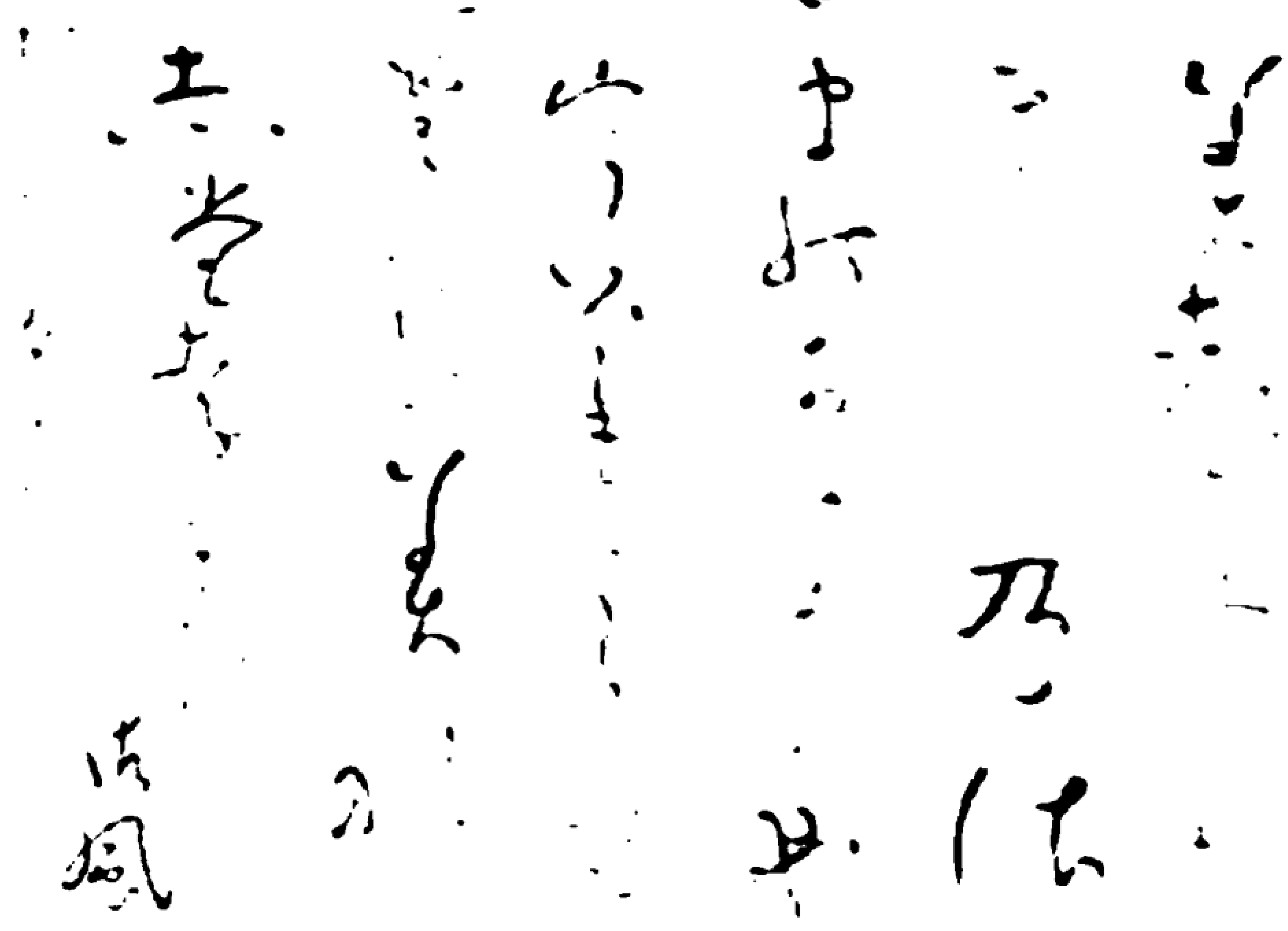
（久保田万太郎）



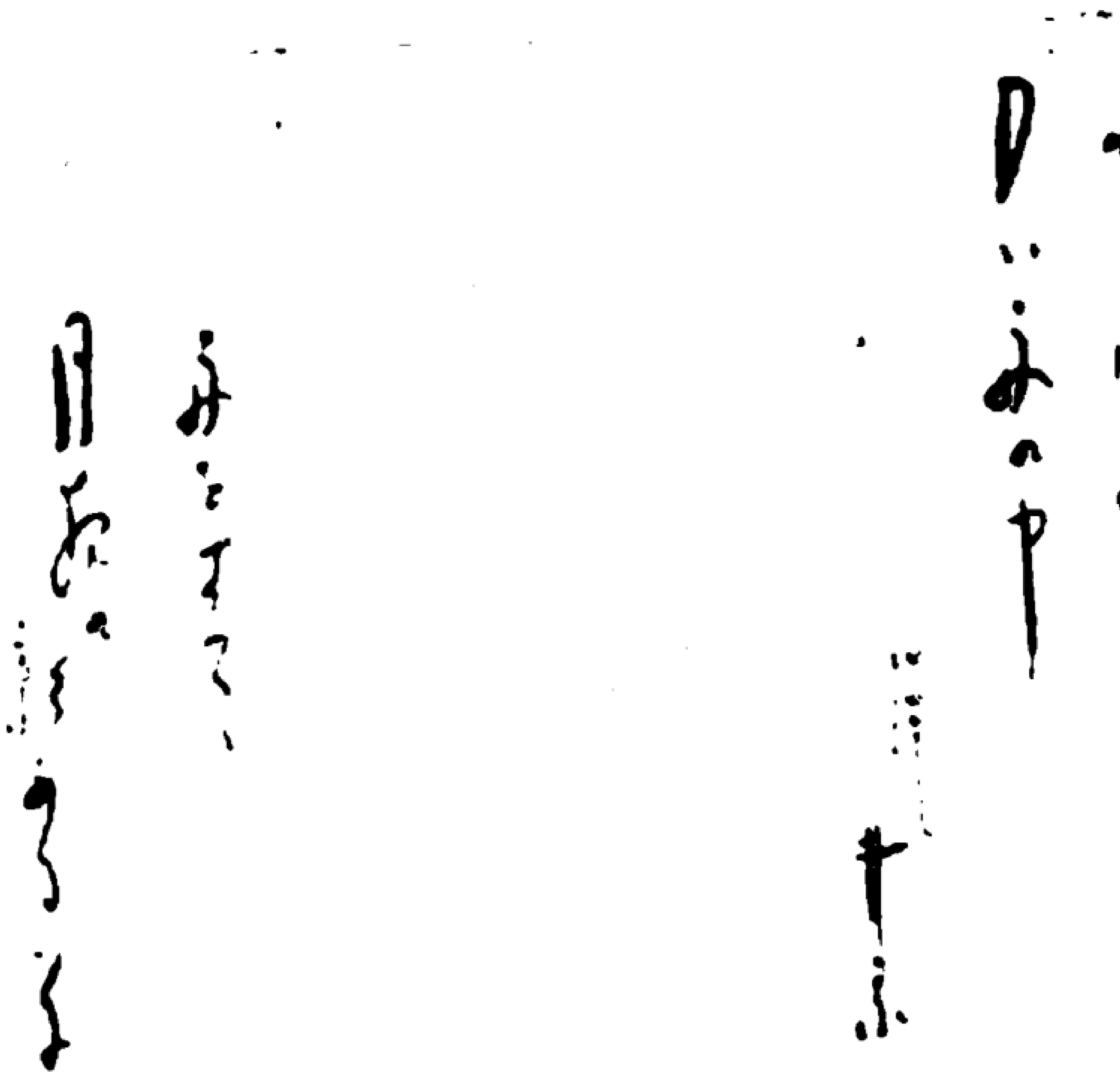
（室生犀星）



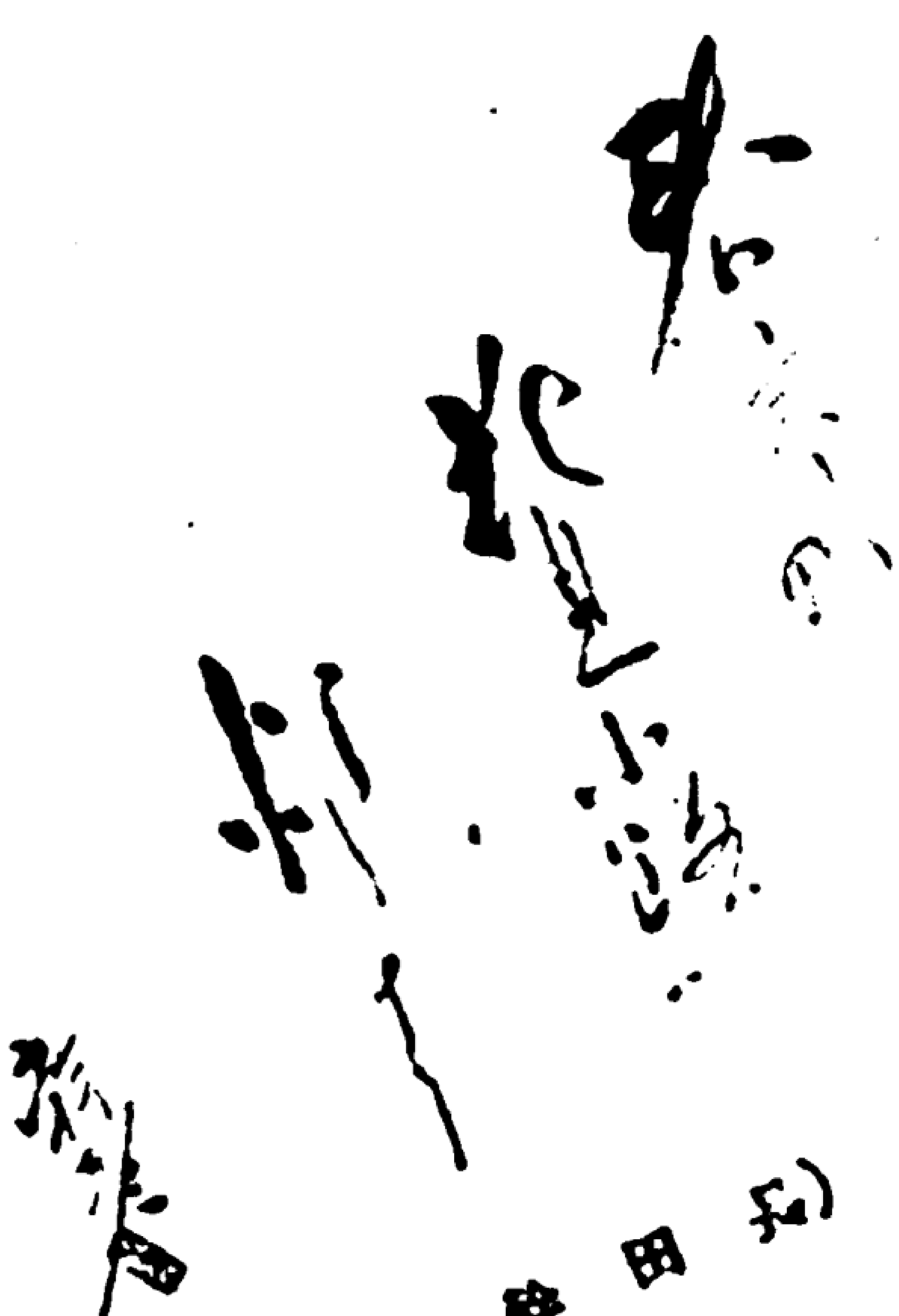
([illegible])



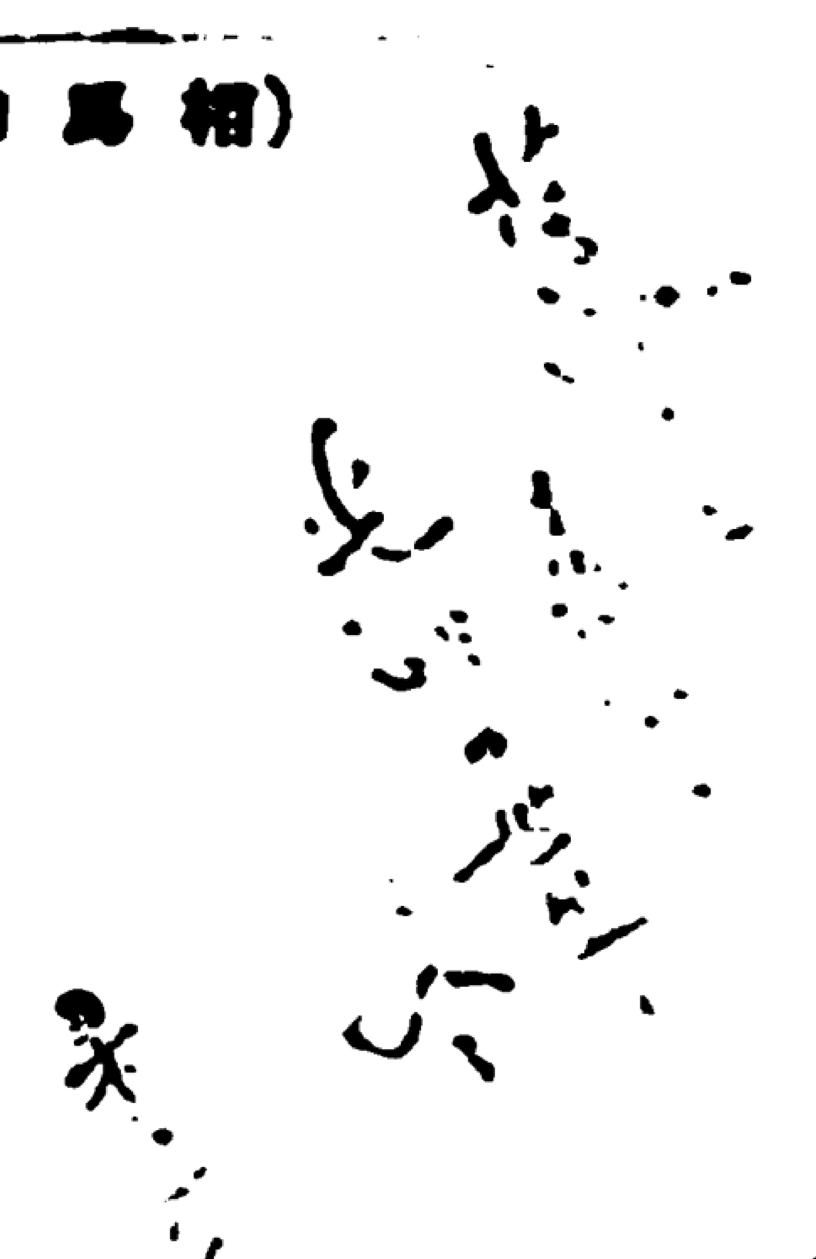
(相馬御風)



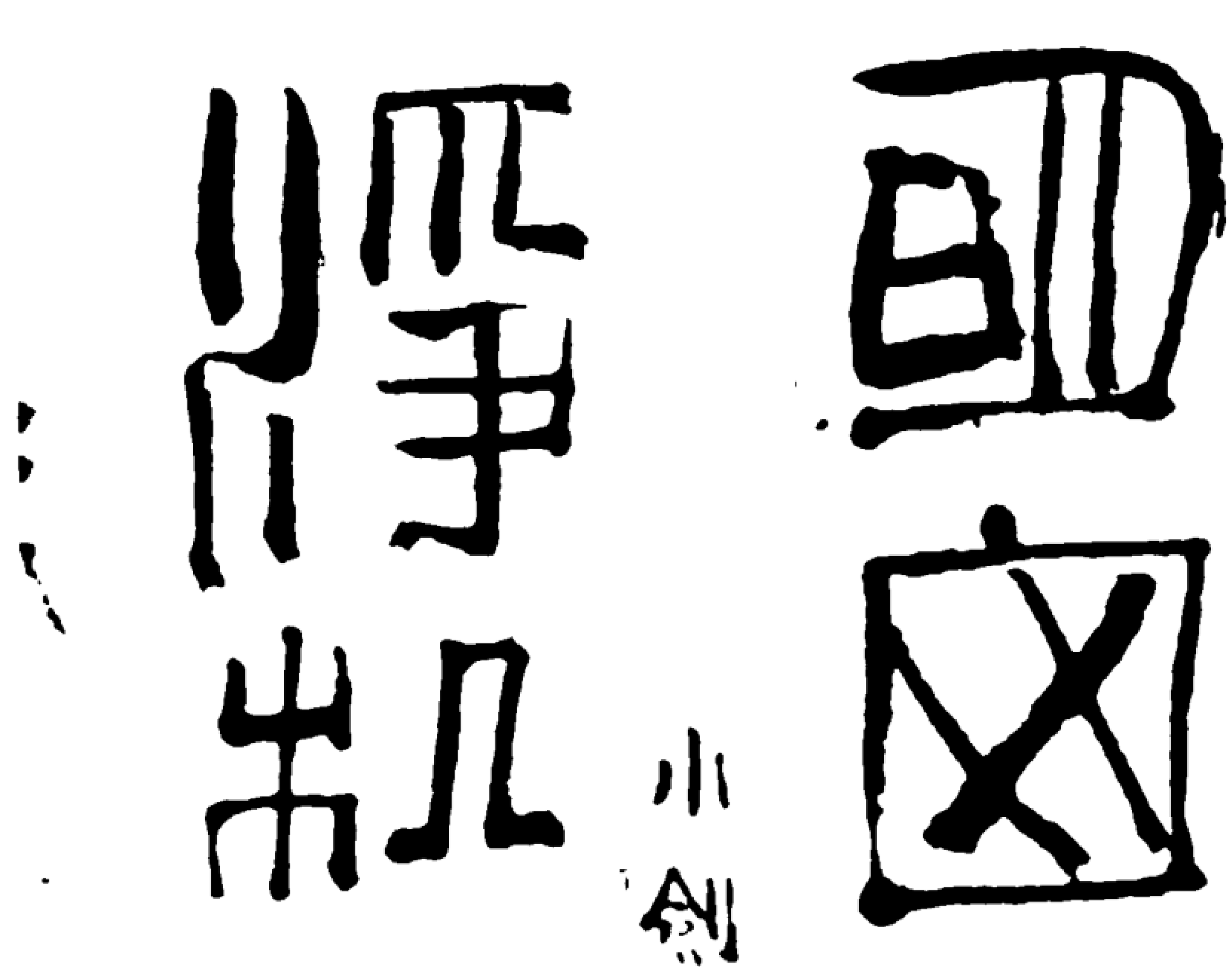
(荻原井泉水)



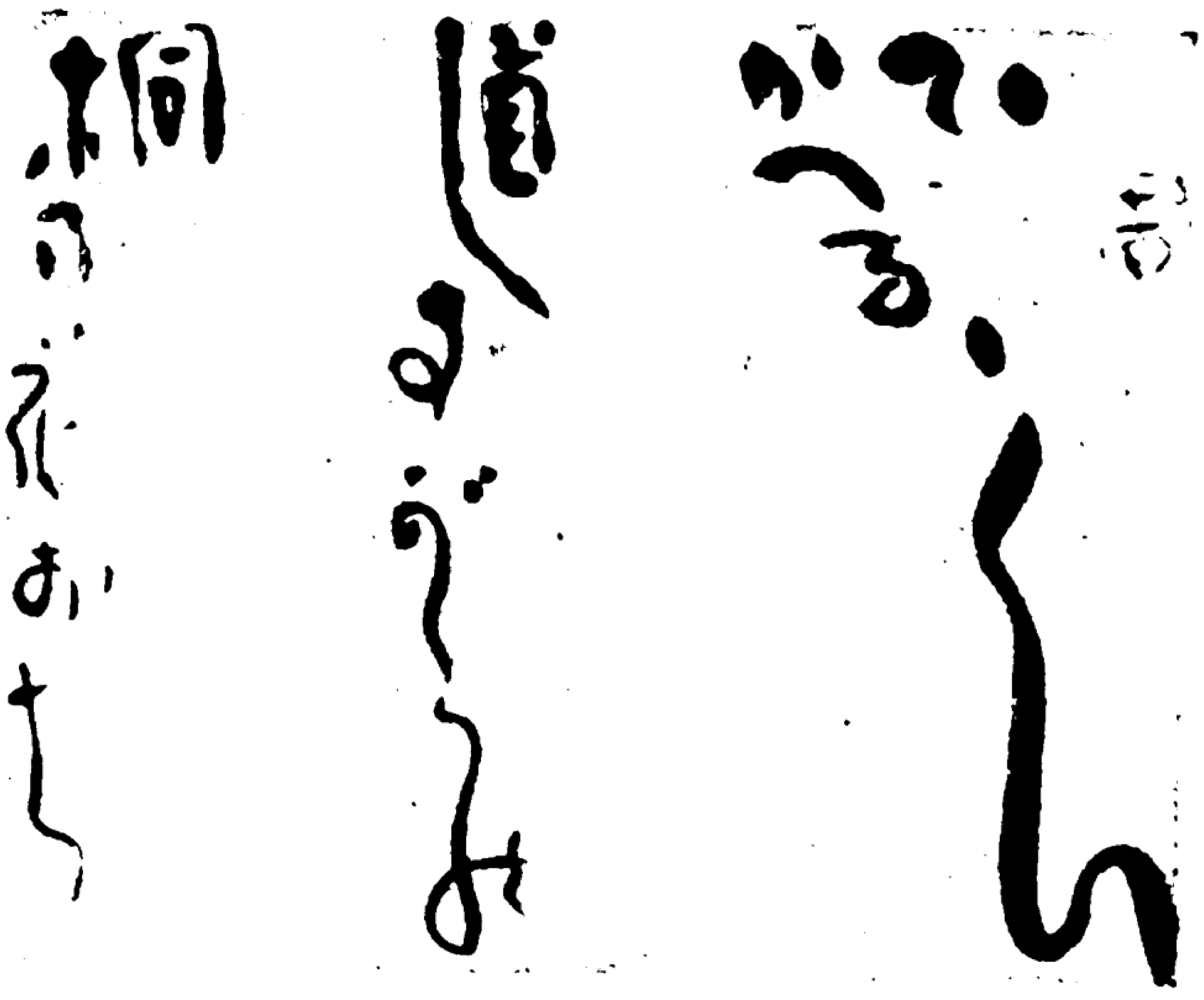
(和田英作)



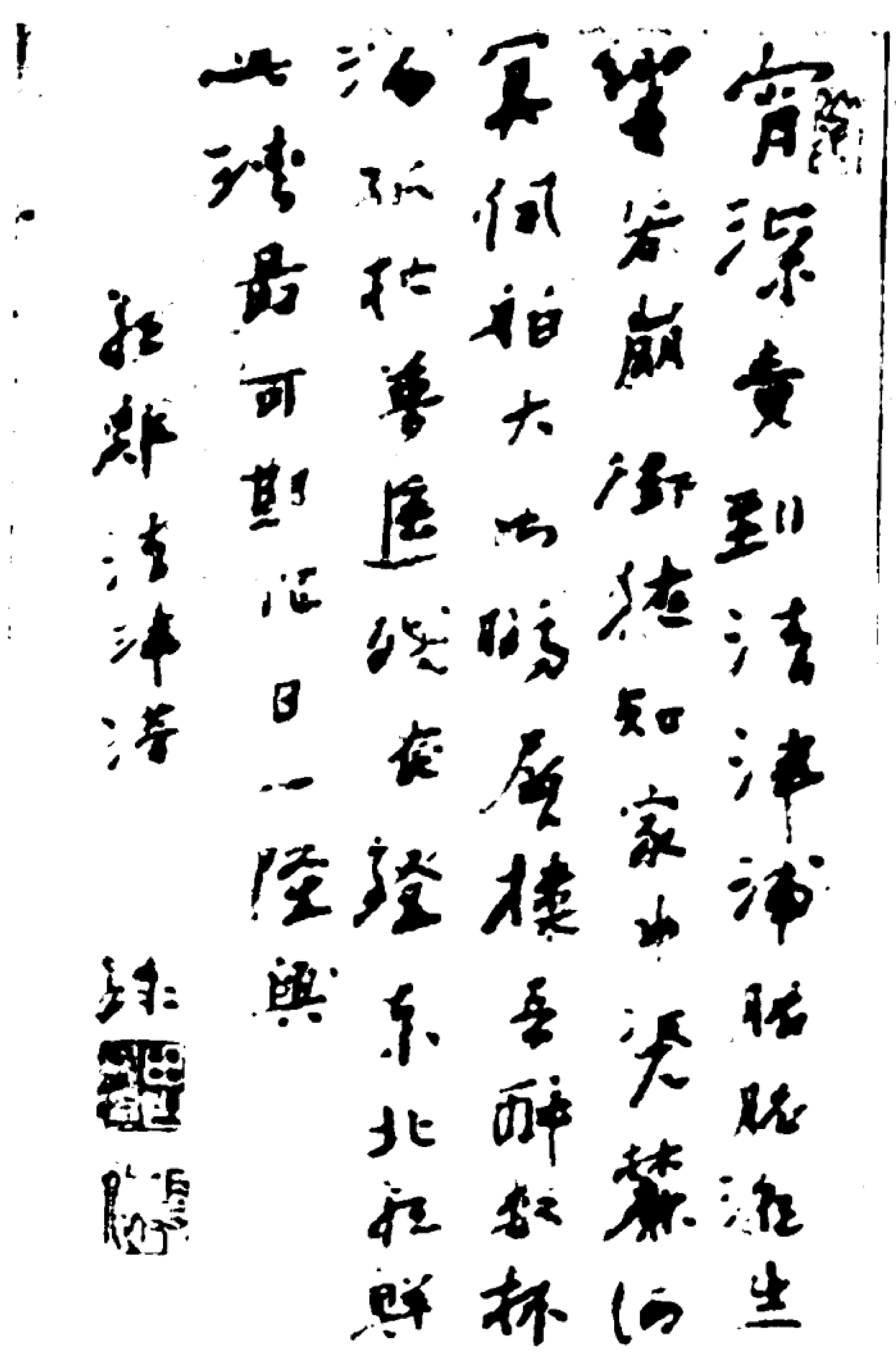
([illegible])



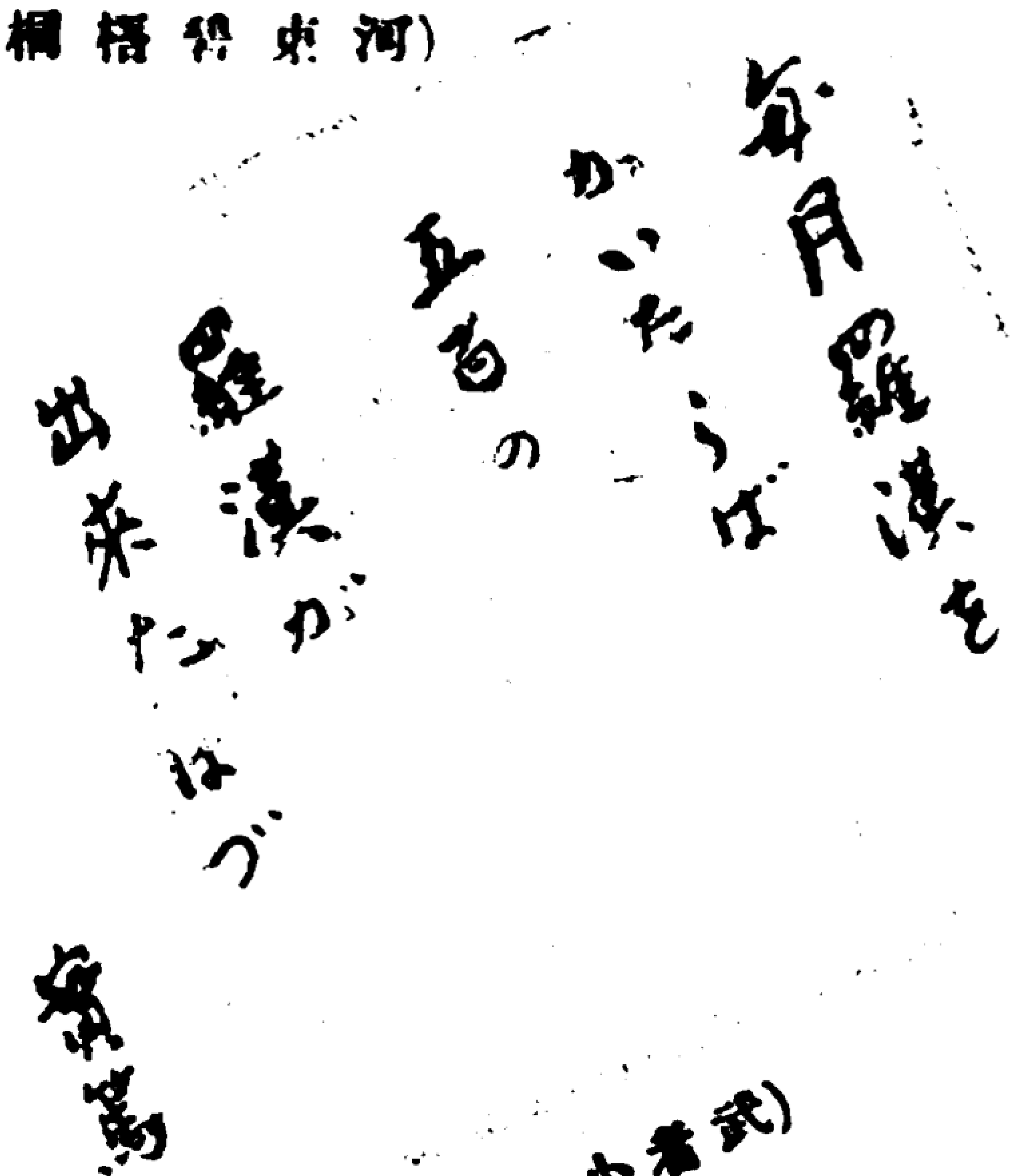
([illegible])



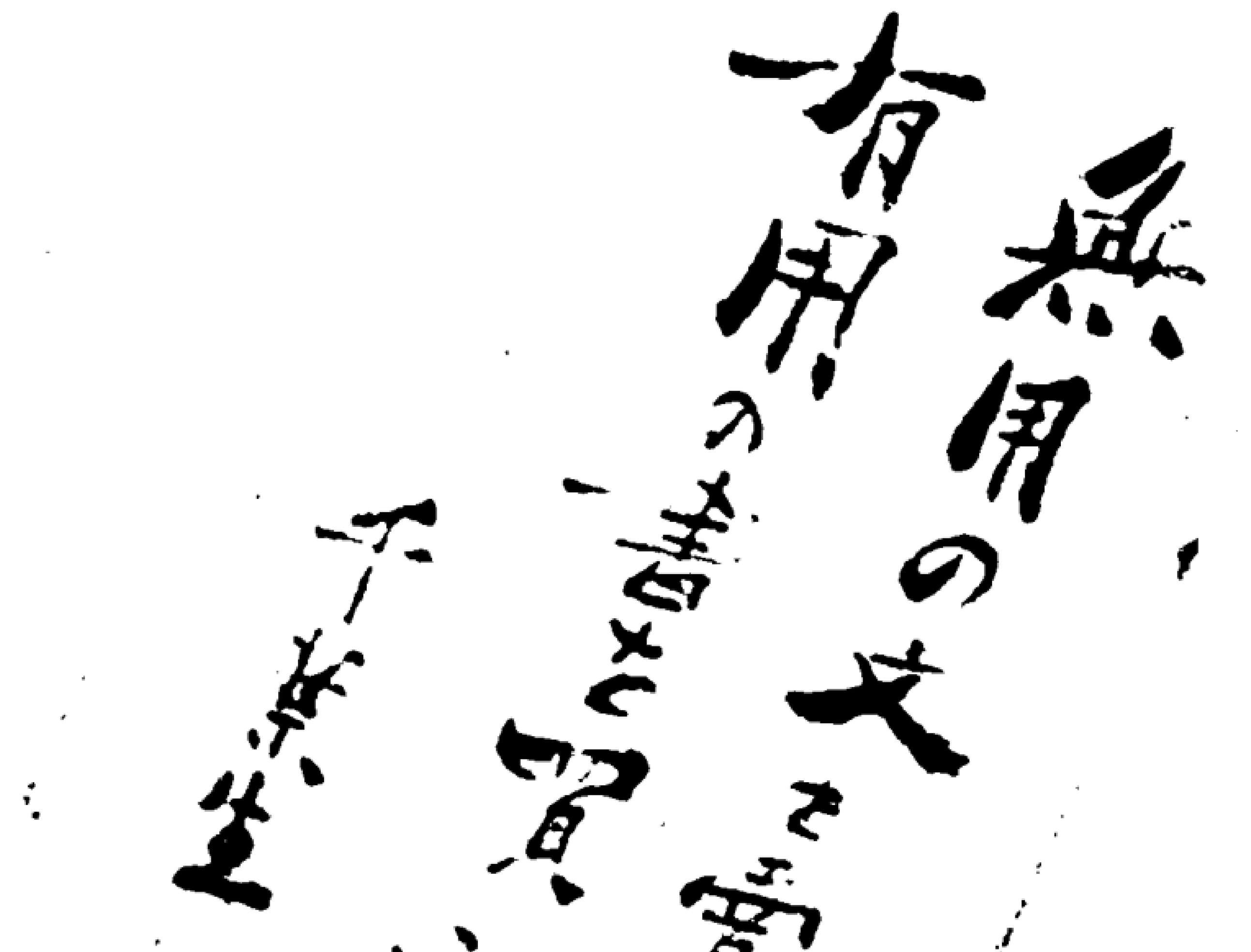
(河東碧梧桐)



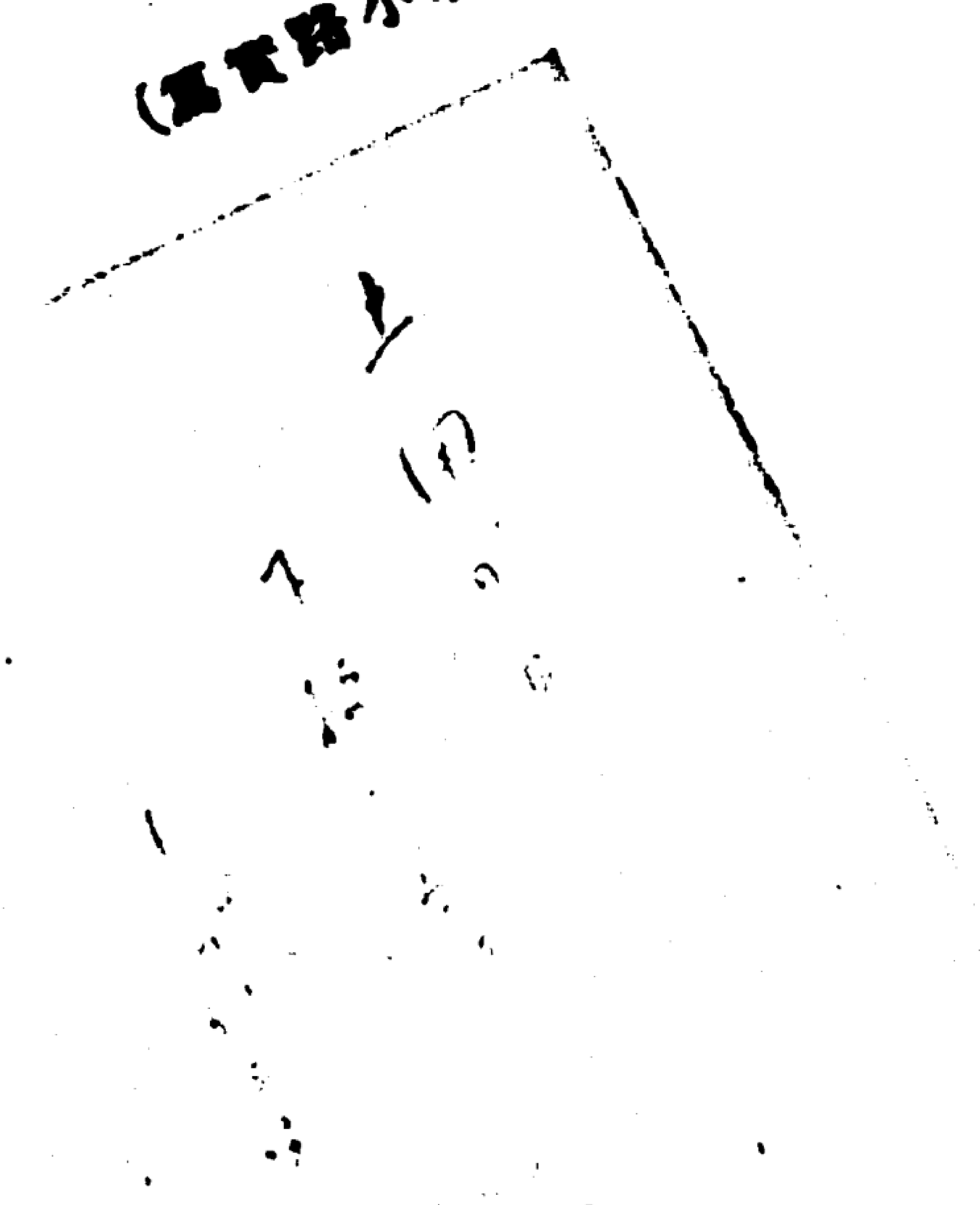
(田山花袋)



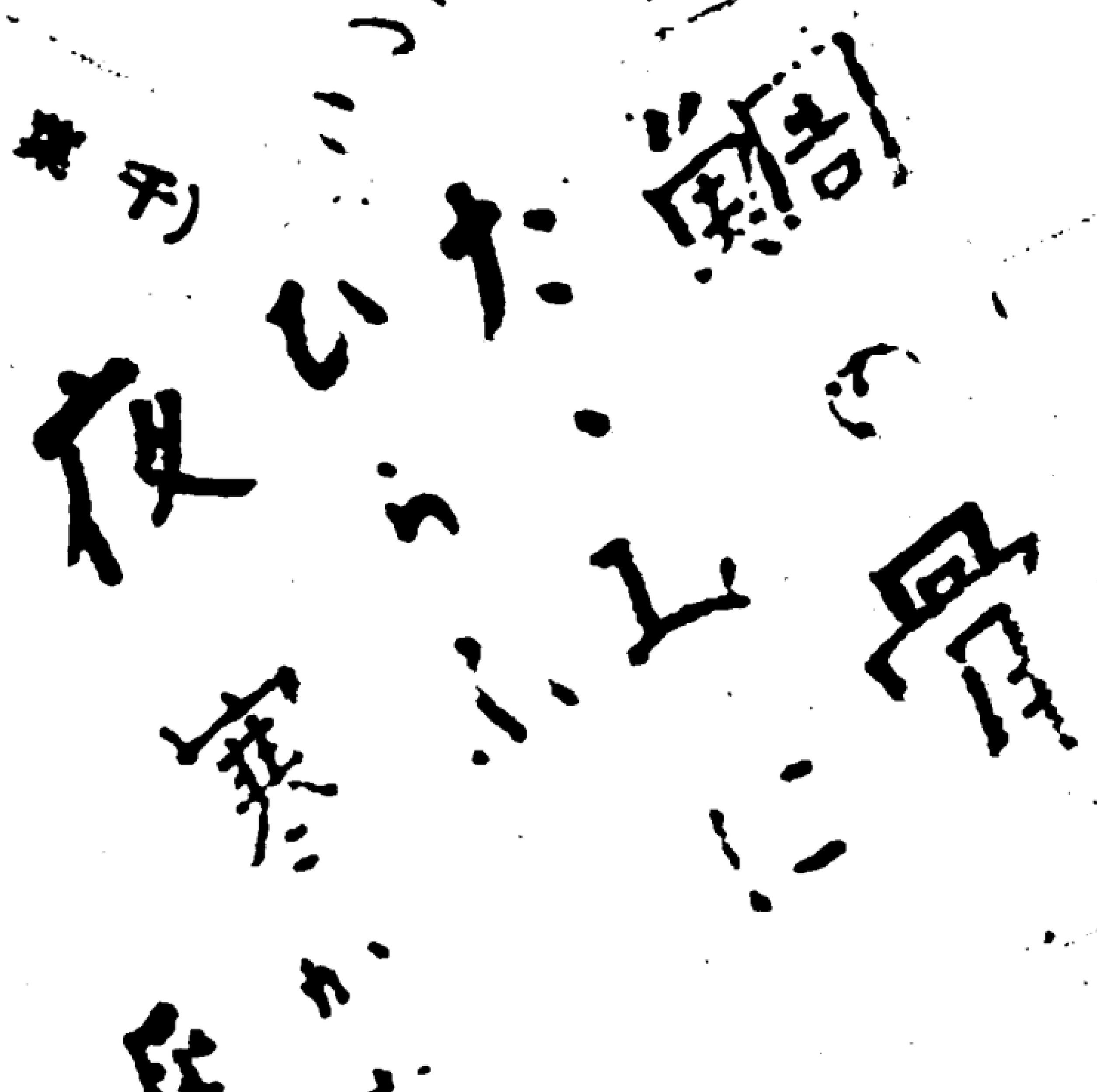
(武者小路実篤)



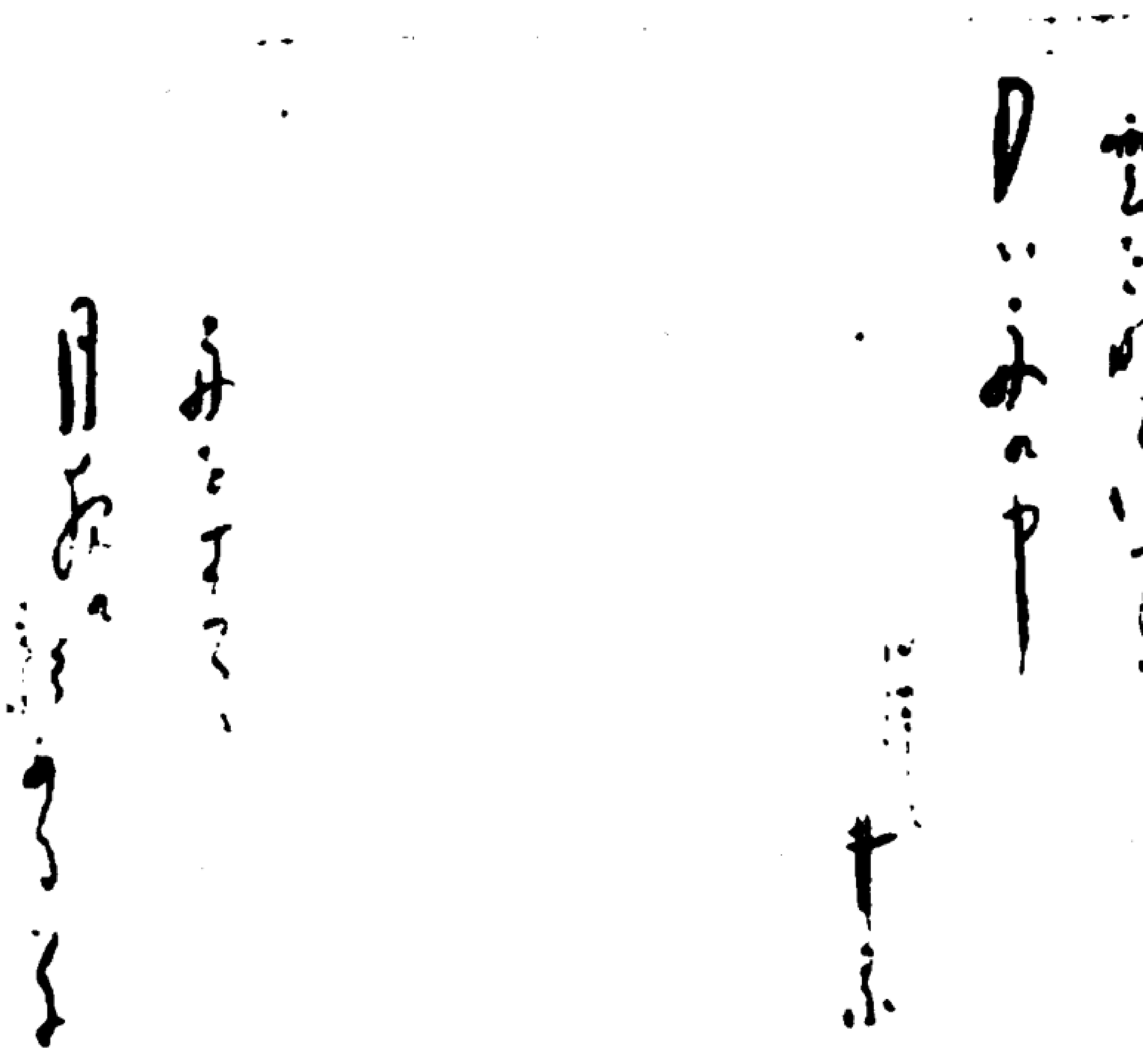
([illegible])



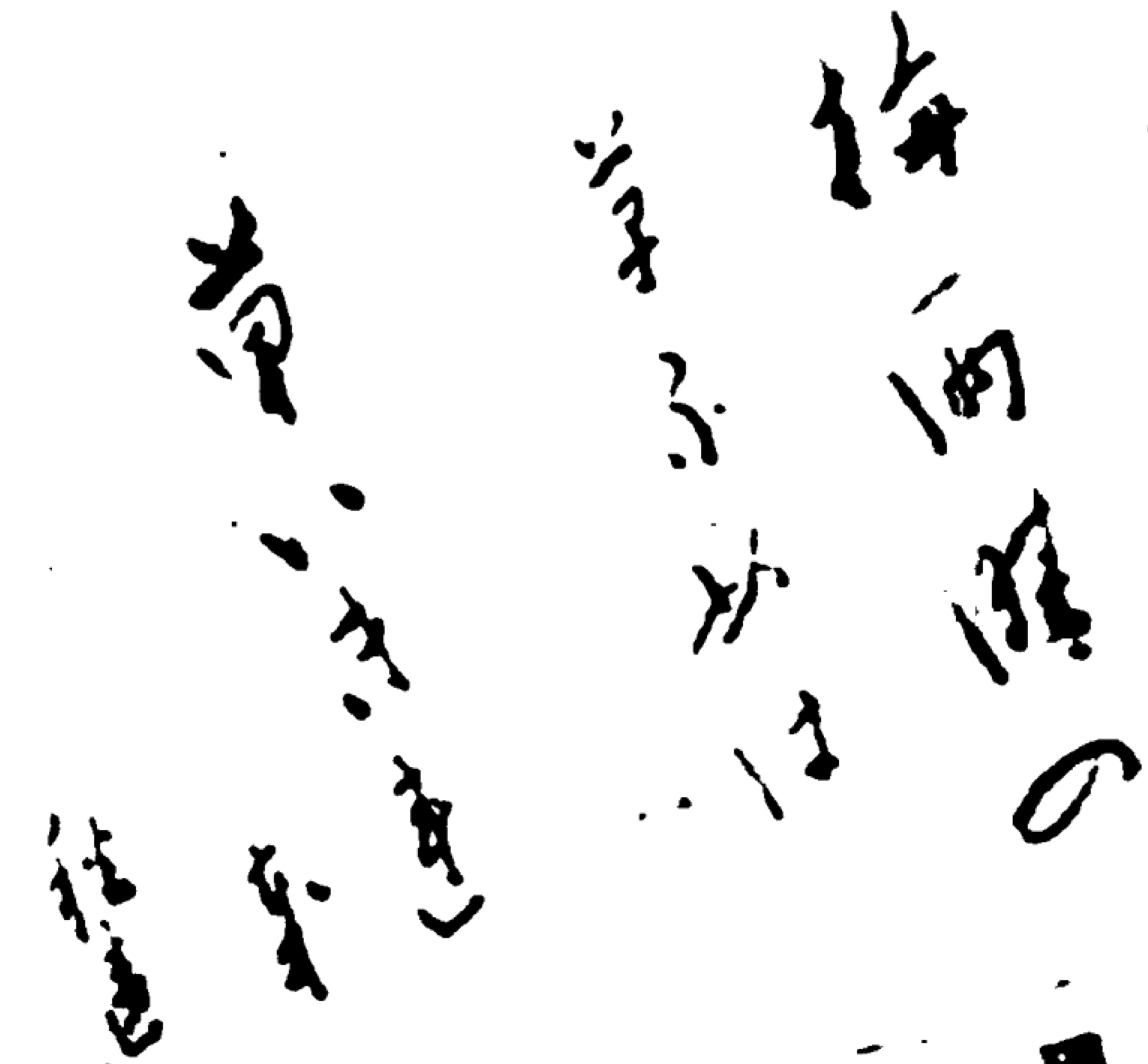
(久保田万太郎)



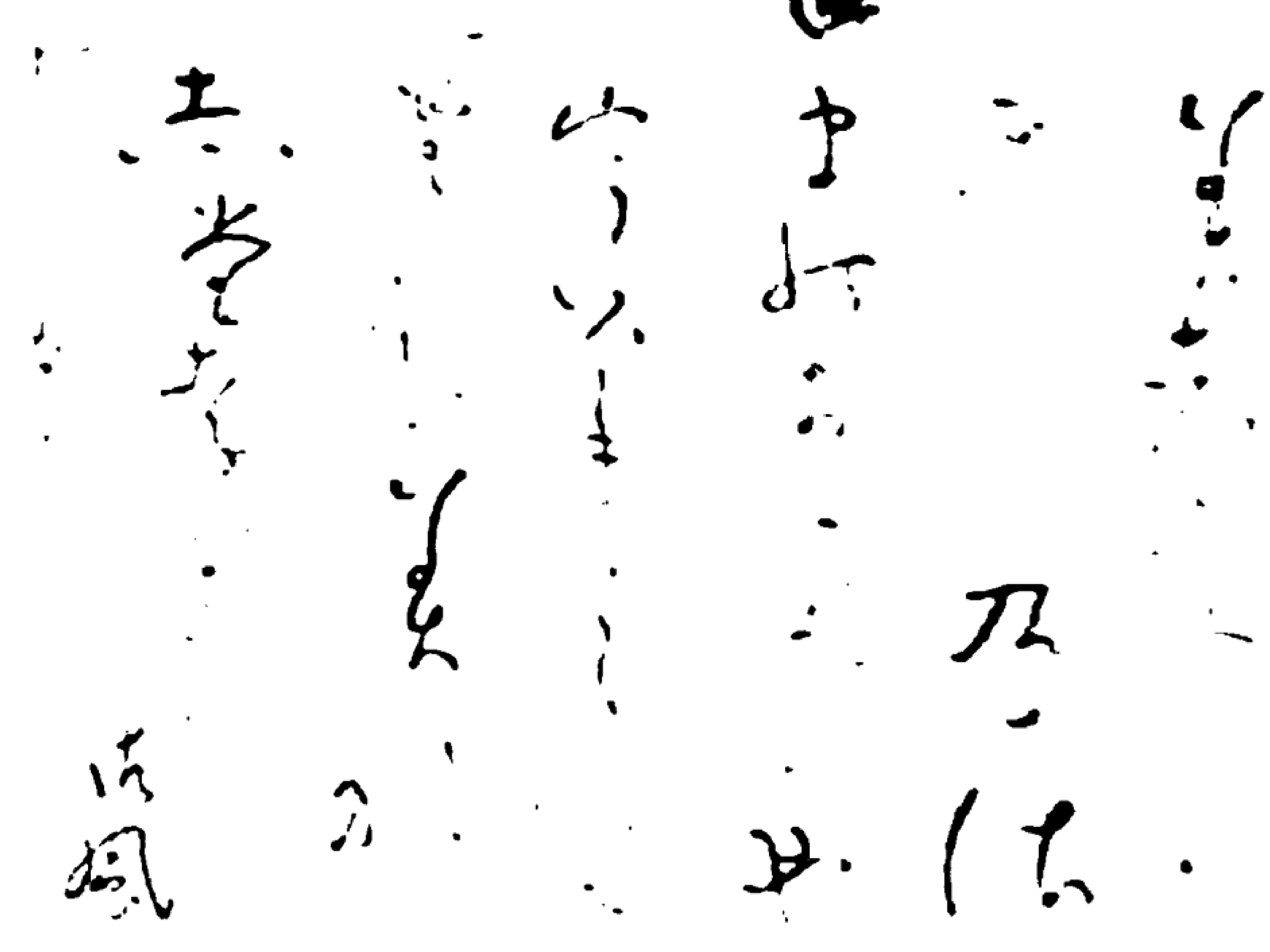
([illegible])



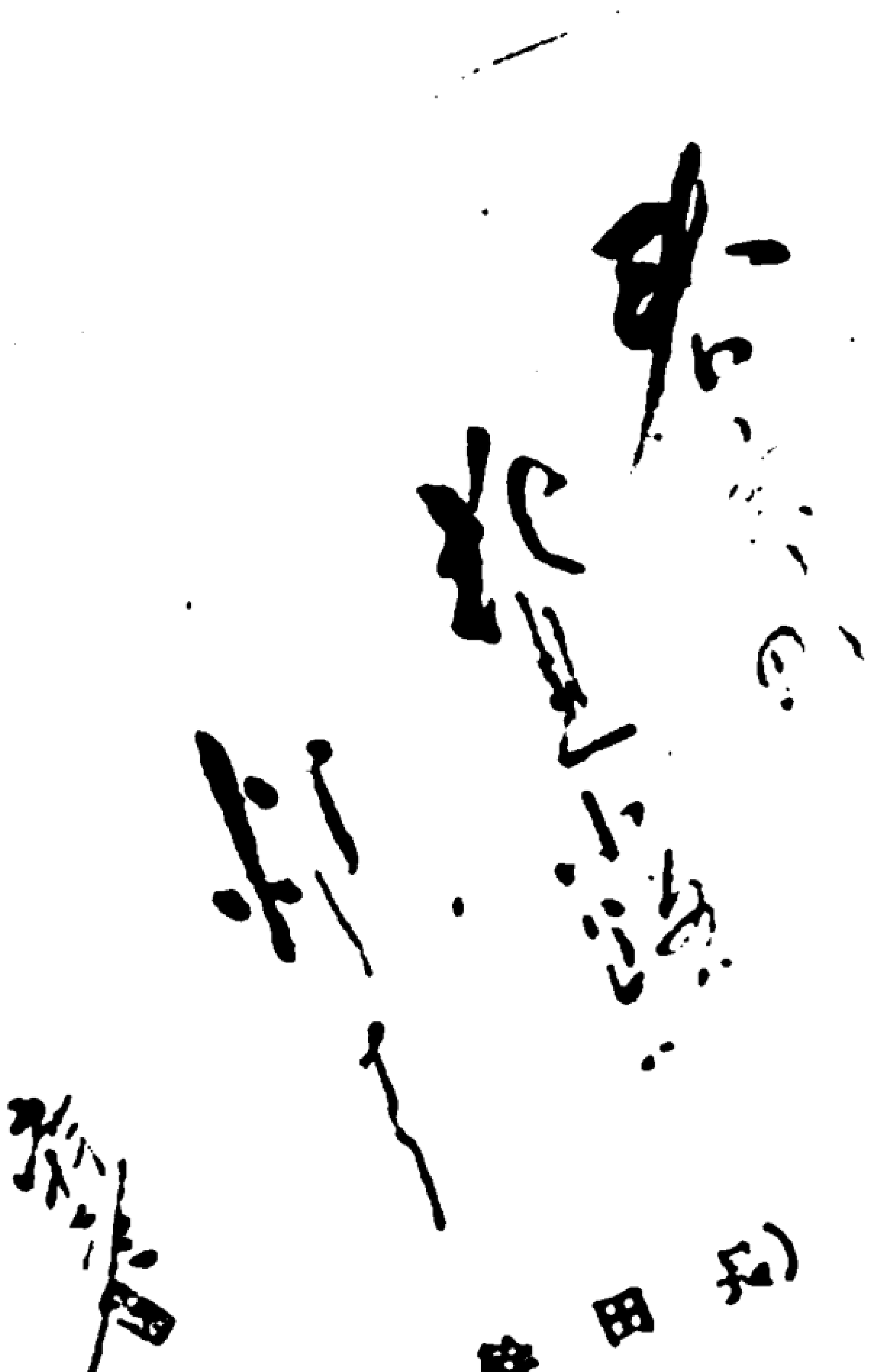
（荻原井泉水）



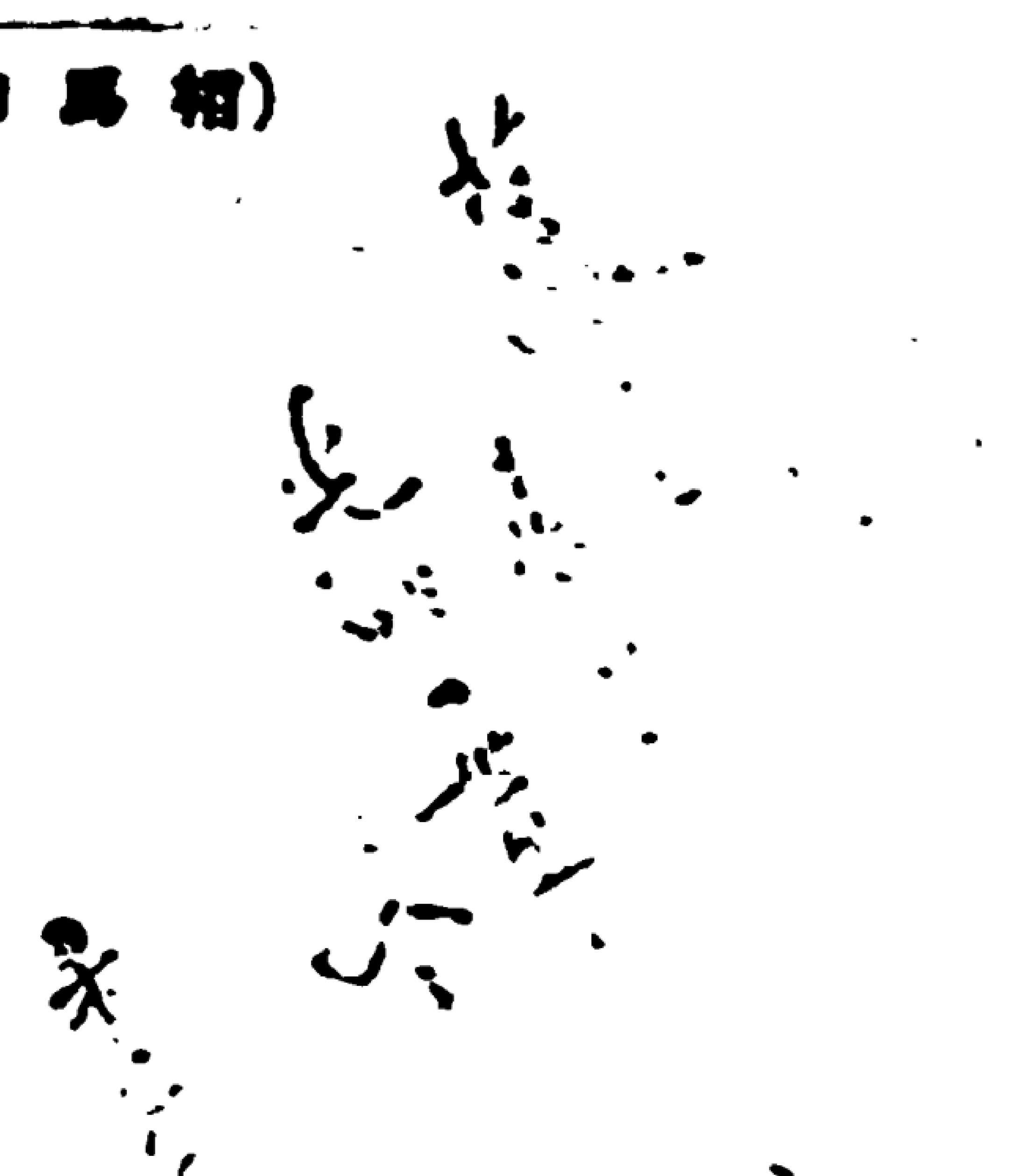
（徳田秋聲）



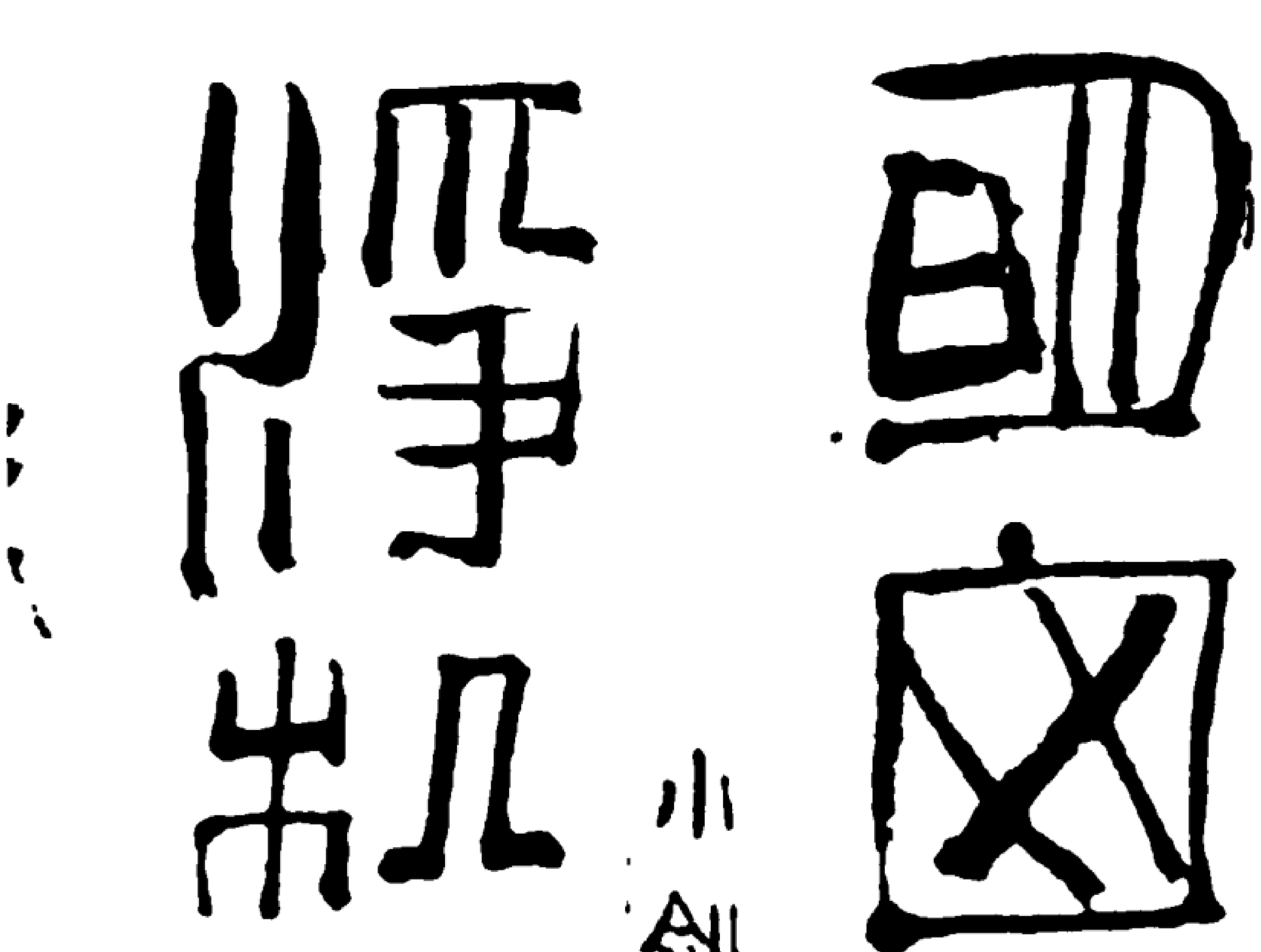
（相馬御風）



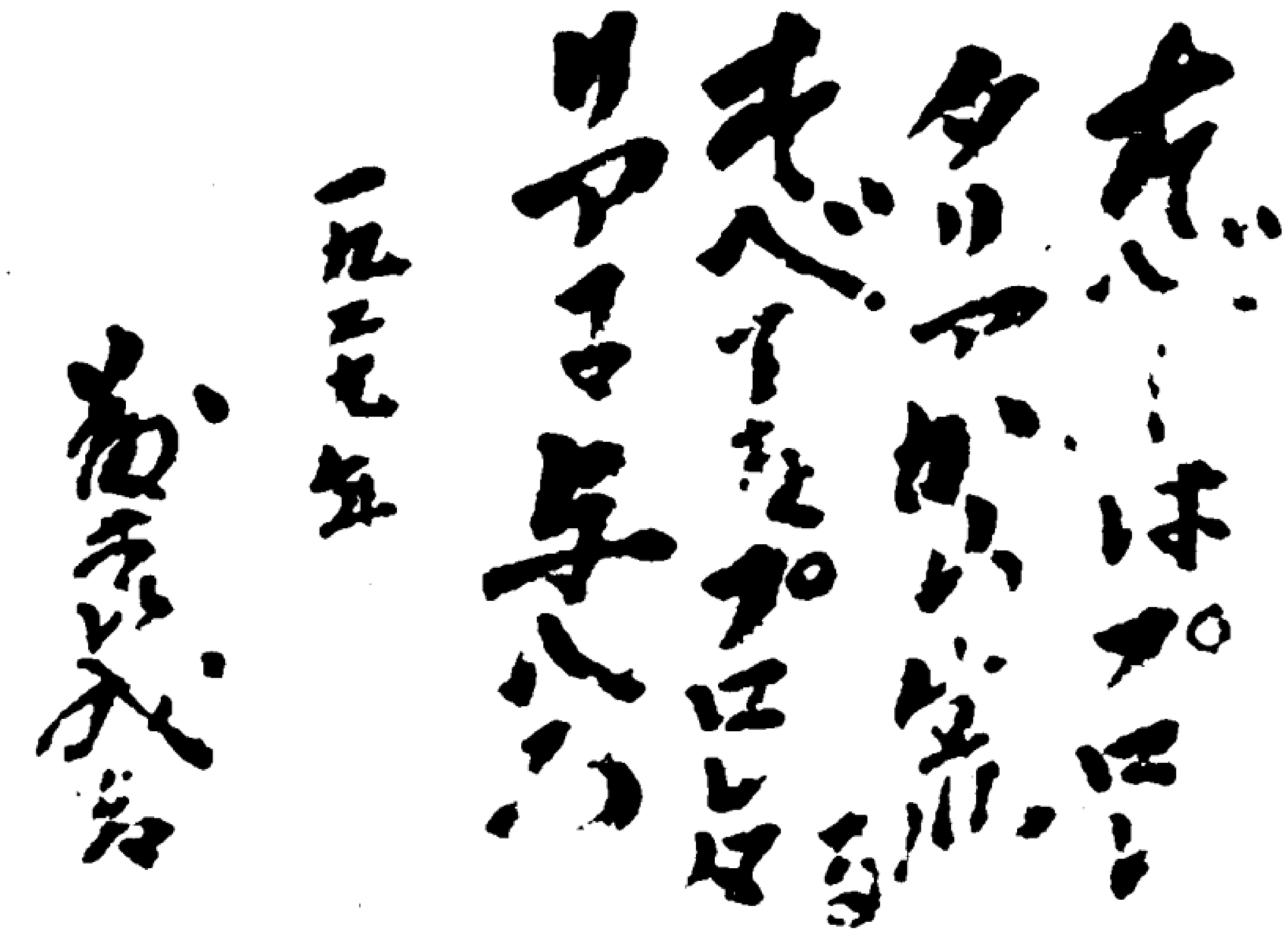
（和田英作）



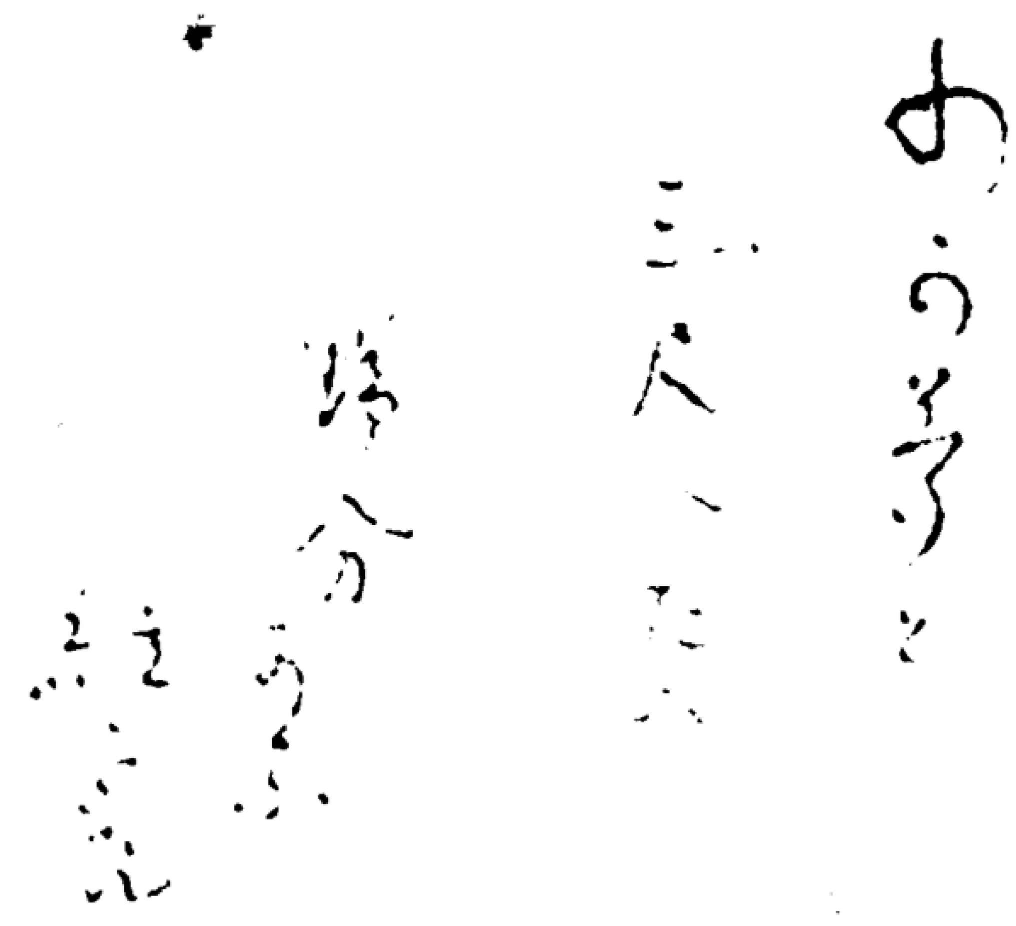
（野口米次郎）



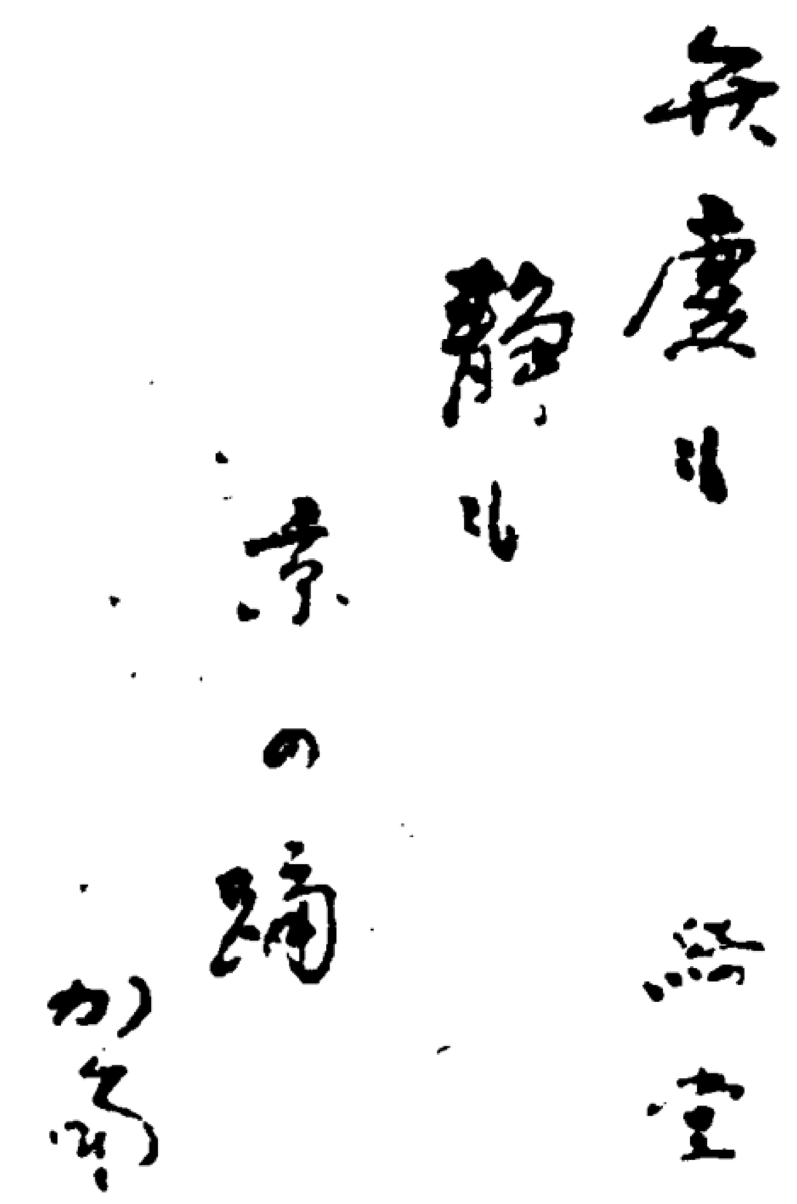
（上司小剣）



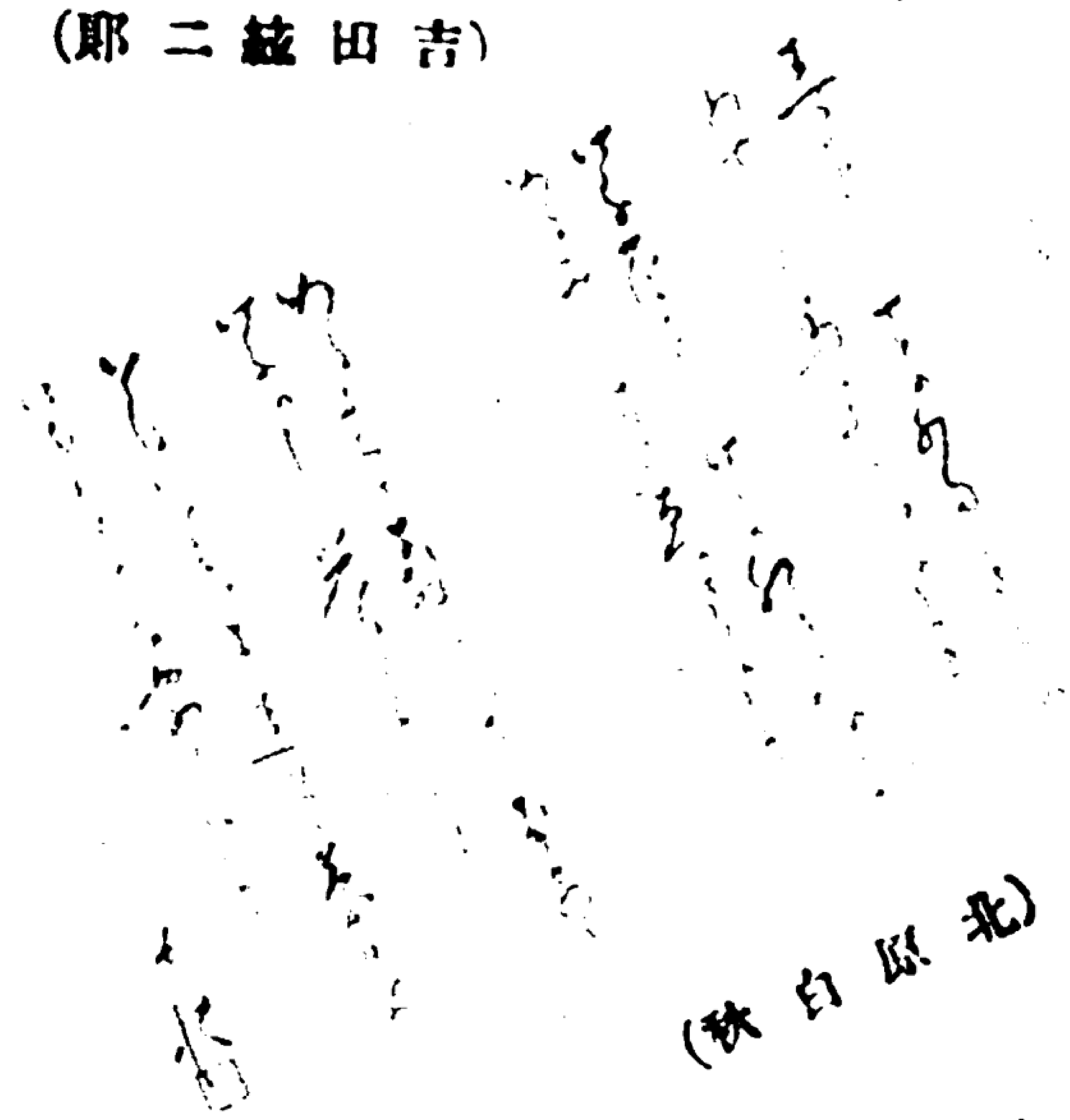
（藤森成吉）



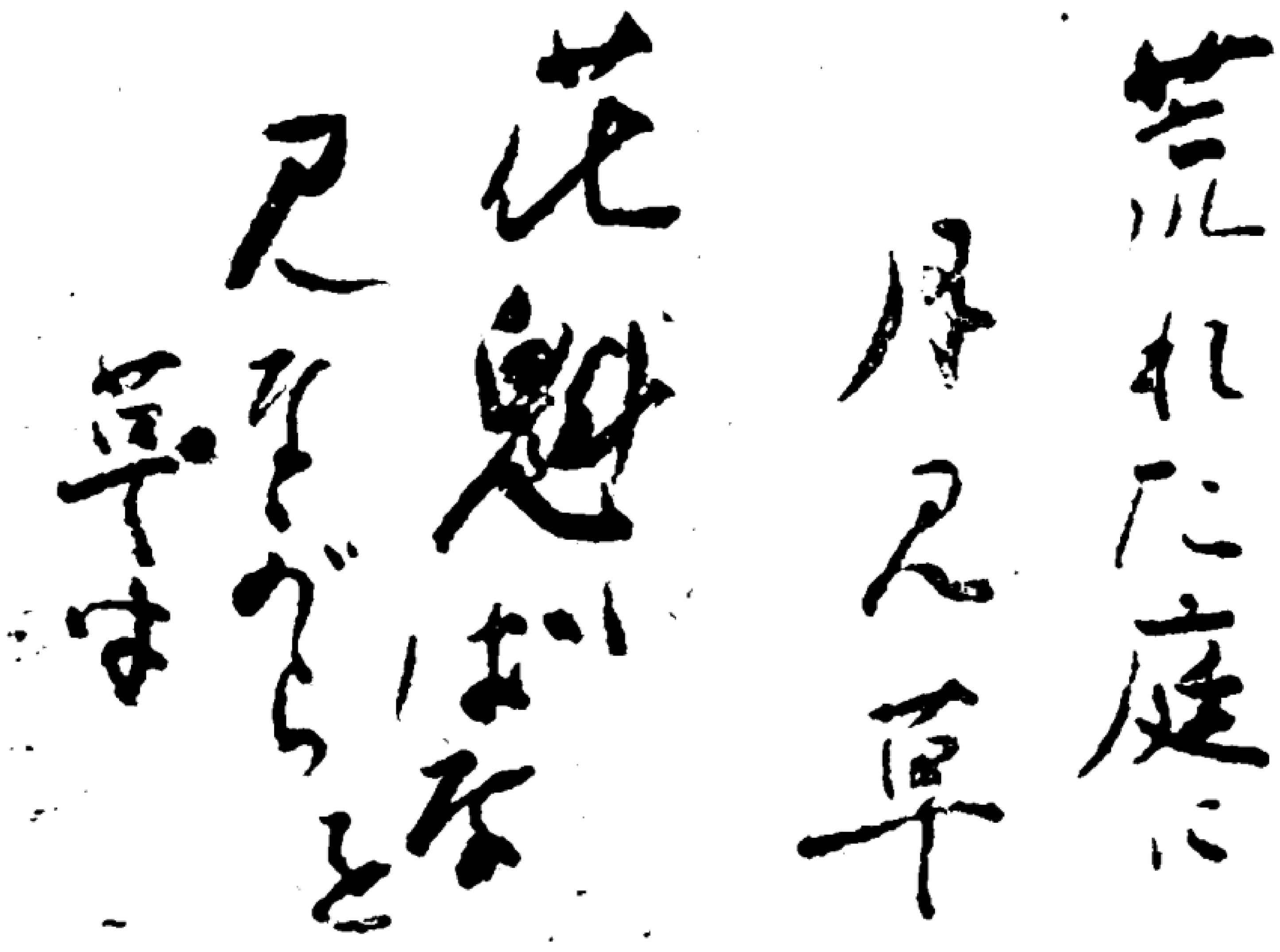
（吉田絃二郎）



（岡本綺堂）



（北原白秋）



（森田草平）



（與謝野寛）

我々に支那を見る心は[illegible]
[illegible]
目くるめく未熟[illegible]
我々に北方の意志[illegible]
[illegible]
未熟の[illegible]に深み[illegible]
閑寂に深み[illegible]
[illegible]
吉江喬松

（吉江喬松）

電火光中
此身を寄す
時々はかうも
思つて
午睡せり

白鳥

（正宗白鳥）

何か遠くの森[illegible]
ごく[illegible]に似る雲の
大きな影うつ
す[illegible]麦の上ろ

小島政二郎

（小島政二郎）

モスクワのメーデー所見
赤い夕日に照らされ、
喇叭を吹き鳴らし、
クレムリンの城壁
を添ふて進む、
うつくしきピオネール
少年の一隊を見た
五月一日のモスクワ
[illegible]
雨雀

（秋田雨雀）

銀紙
生き
雲

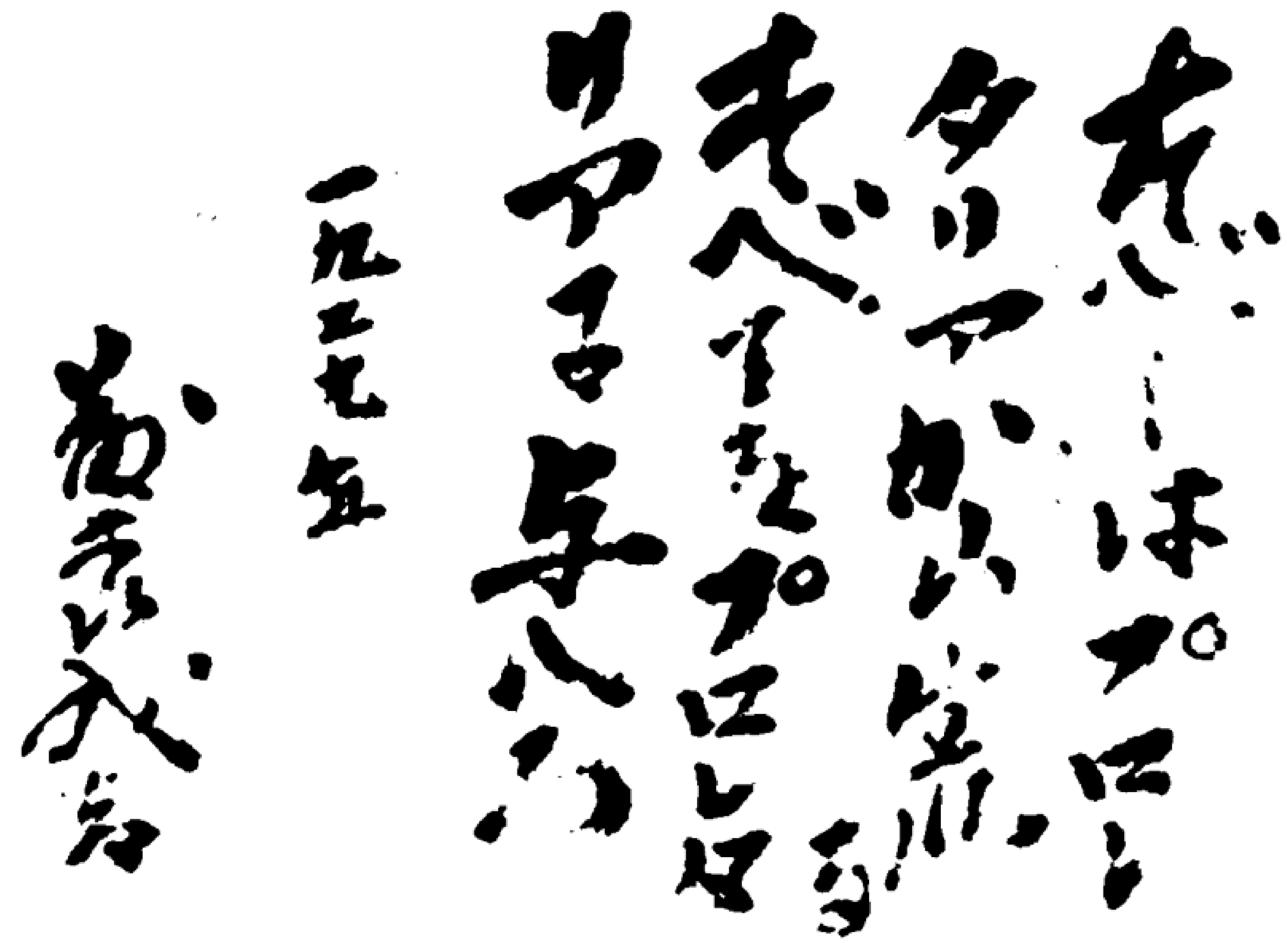
[illegible]

（武林無想庵）

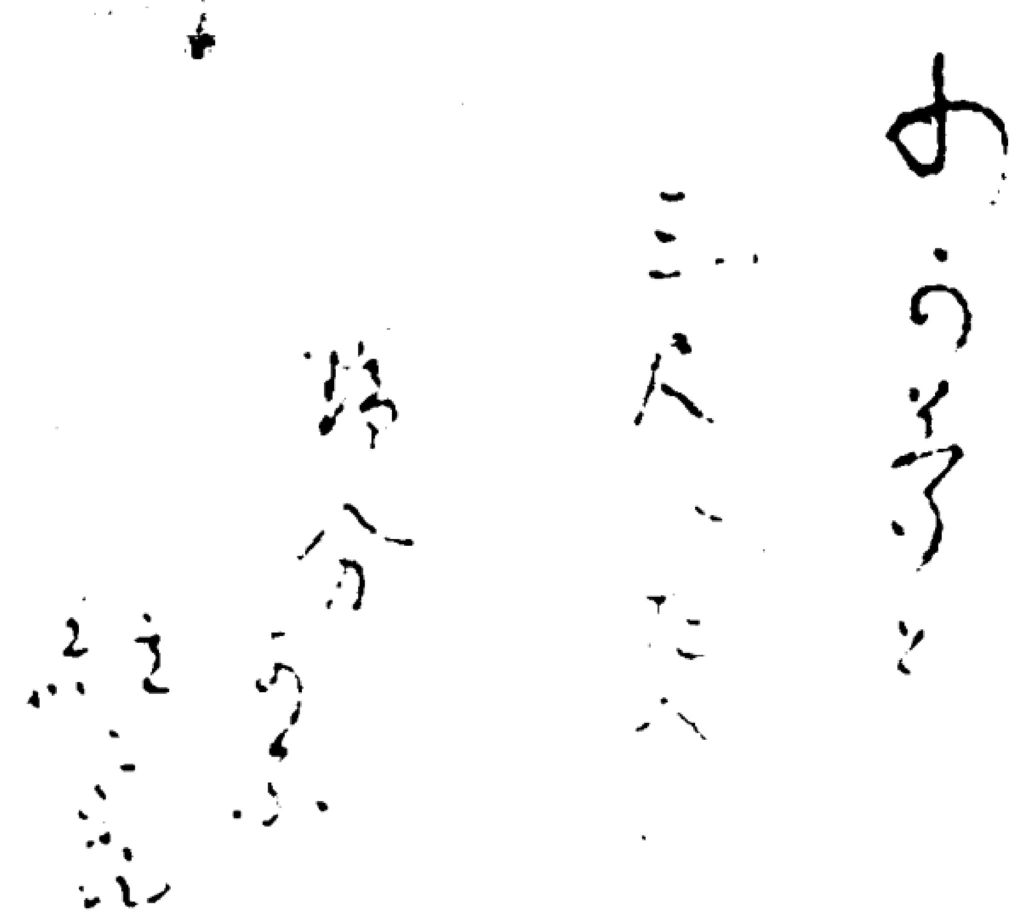
毎日僕ハ銀行ノ
ノ裏中ニデ銭ヲ
テ[illegible]バシテ
支通巡査ニ叱
ラレマシタ

昭和四年[illegible]
十一[illegible]

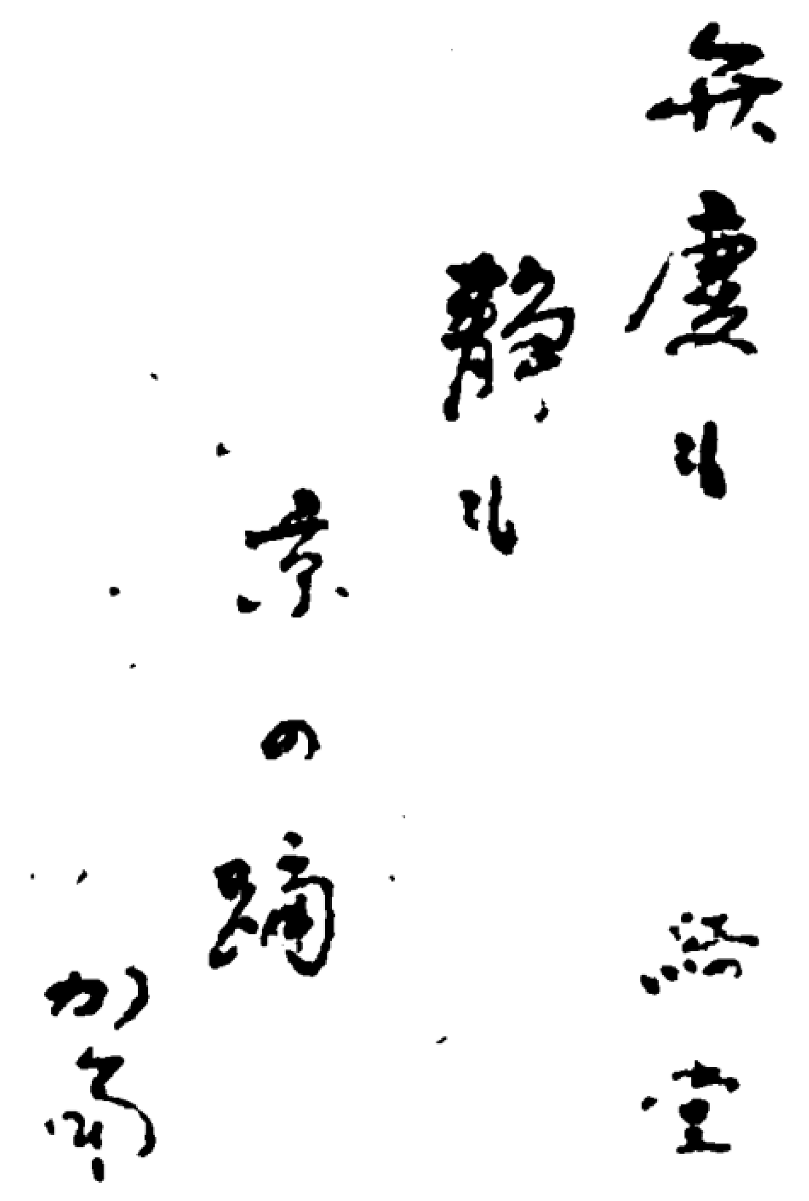
（[illegible]）



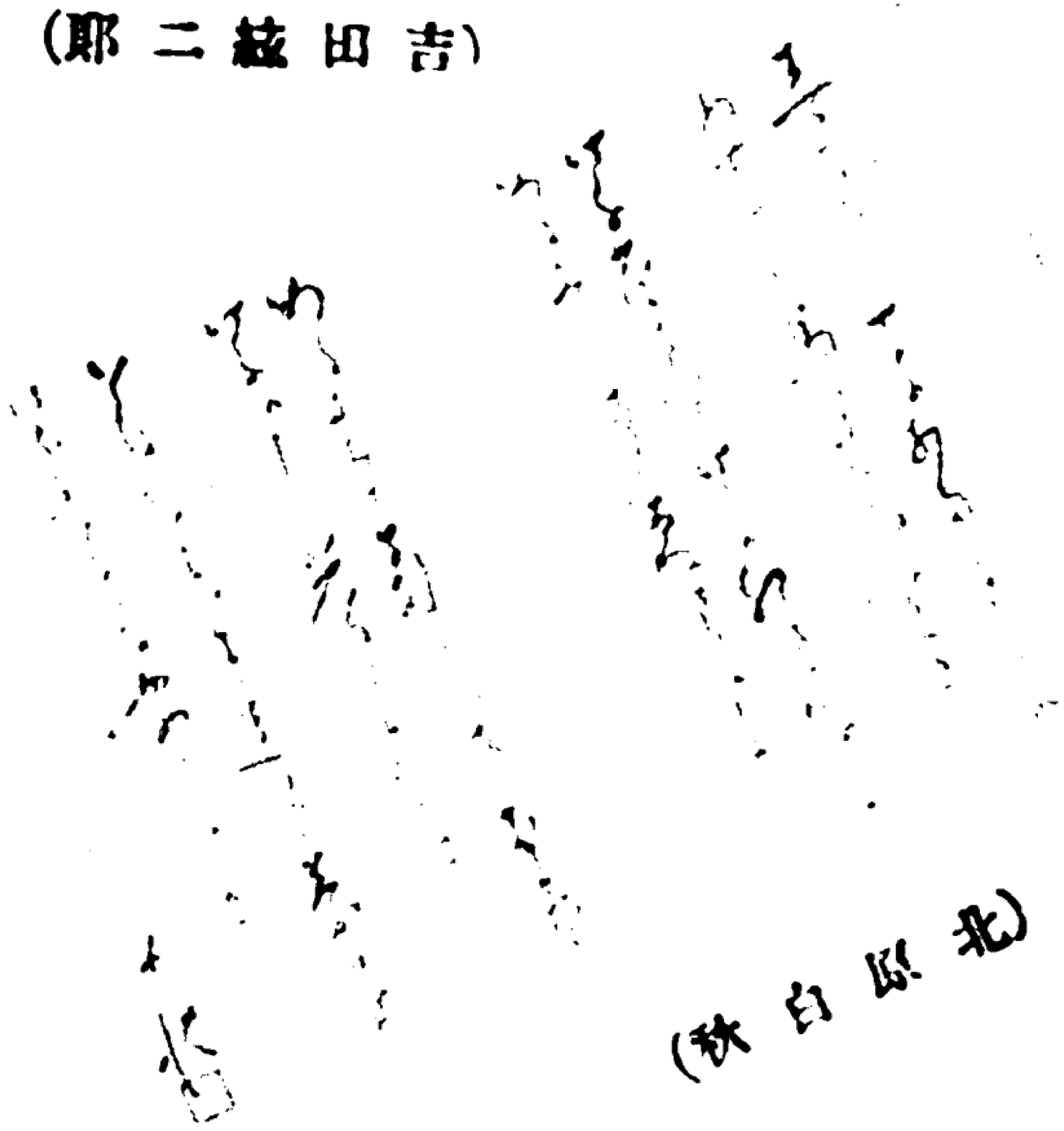
（藤森成吉）



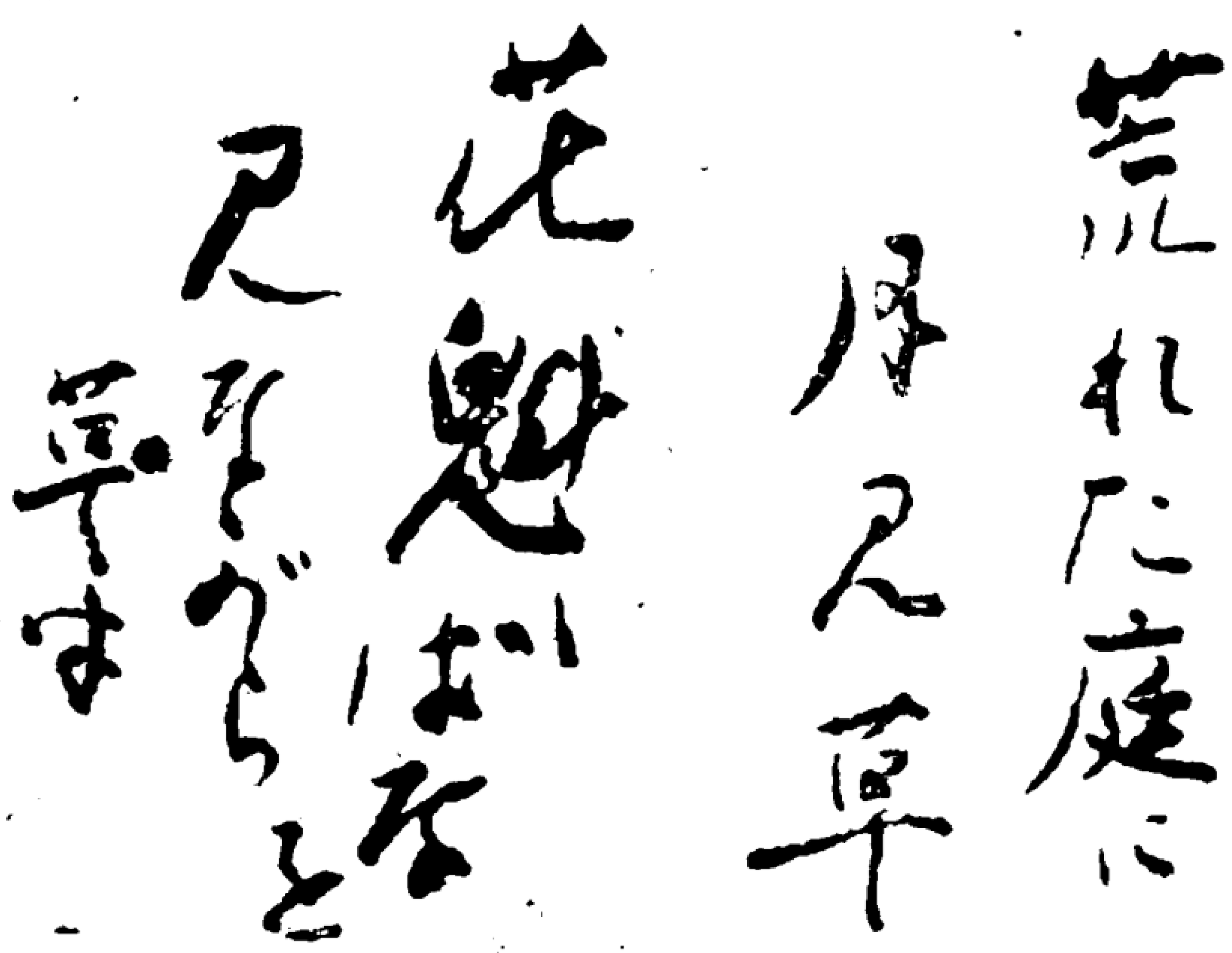
（吉田絃二郎）



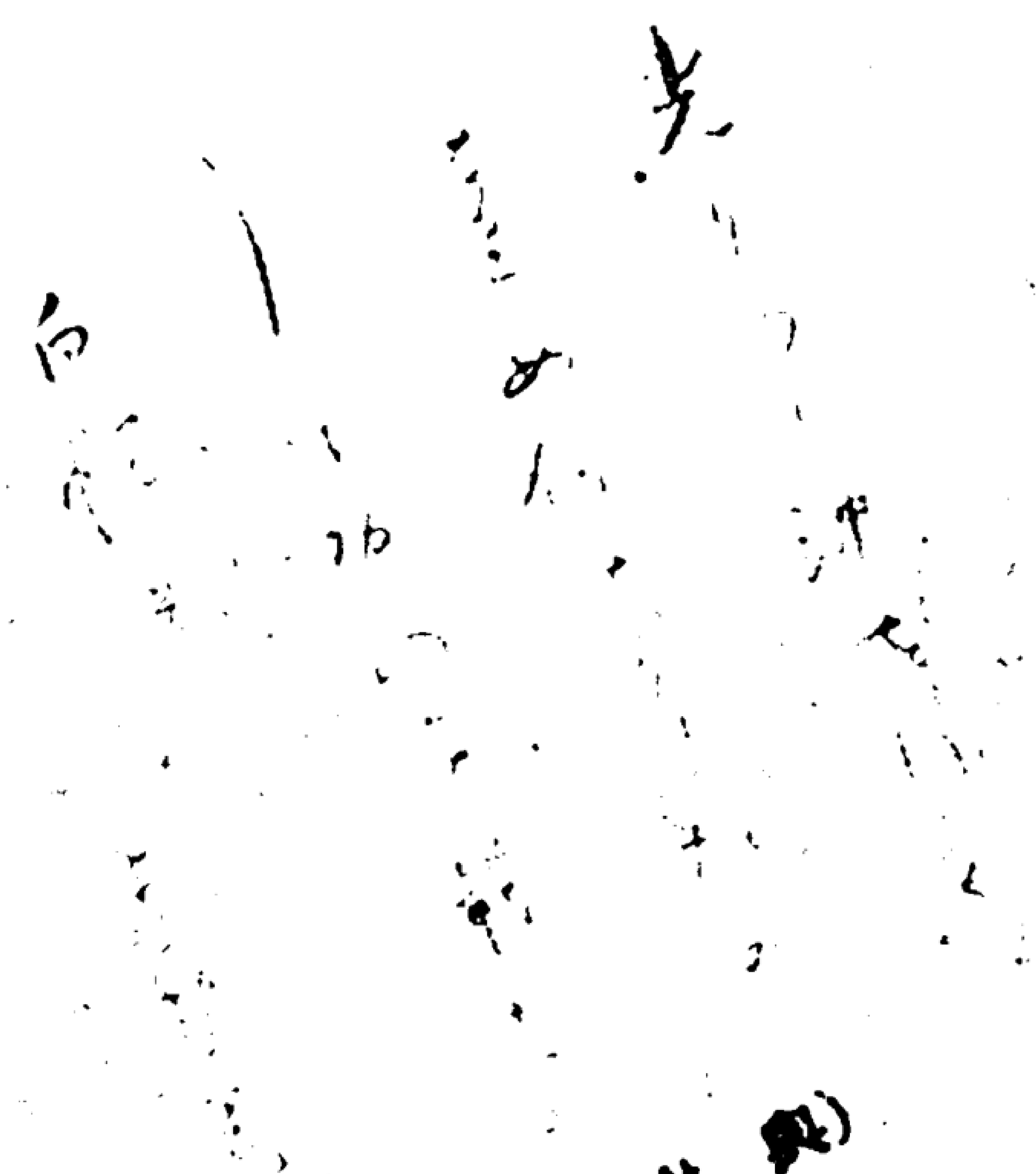
（岡本綺堂）



（北原白秋）



（森田草平）



（與謝野寛）

我[illegible]
待つ[illegible]
目くるめく赤熱を[illegible]
我[illegible]北方[illegible]
[illegible]
我思[illegible]

赤熱の[illegible]深[illegible]静[illegible]
閑[illegible]微[illegible]
[illegible]日[illegible]光[illegible]

吉江喬松

(吉江喬松)

電火光中
此身を寄す
時々はからずも
思つて
午睡せり

白鳥

(正宗白鳥)

モスクワのメーデー所見

赤い夕日に照され
喇叭を吹きあがら
クレムリンの城壁
を添ふて行進む、
うつくしきピオニーロ
少年の一隊を見た
五月一日のモスクワ
おもひ[illegible]モスクワ
の五月一日　雨雀

(秋田雨雀)

何つ峠の青し
[illegible]に[illegible]雲の
大き[illegible]つ
す[illegible]のよう

小島政二郎

(小島政二郎)

銀紙[illegible]
[illegible]雲

[illegible]

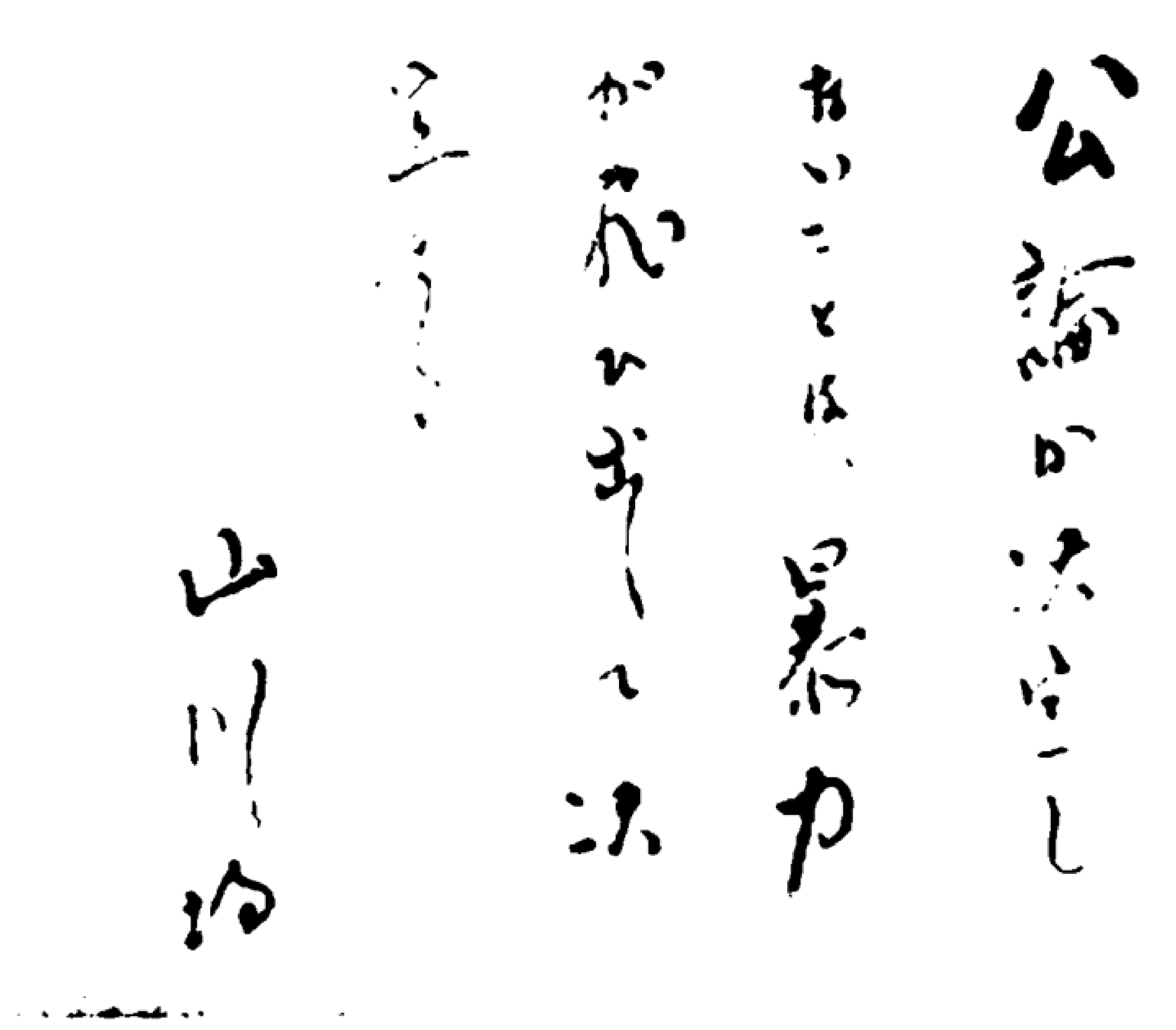
(武林無想庵)

一茶

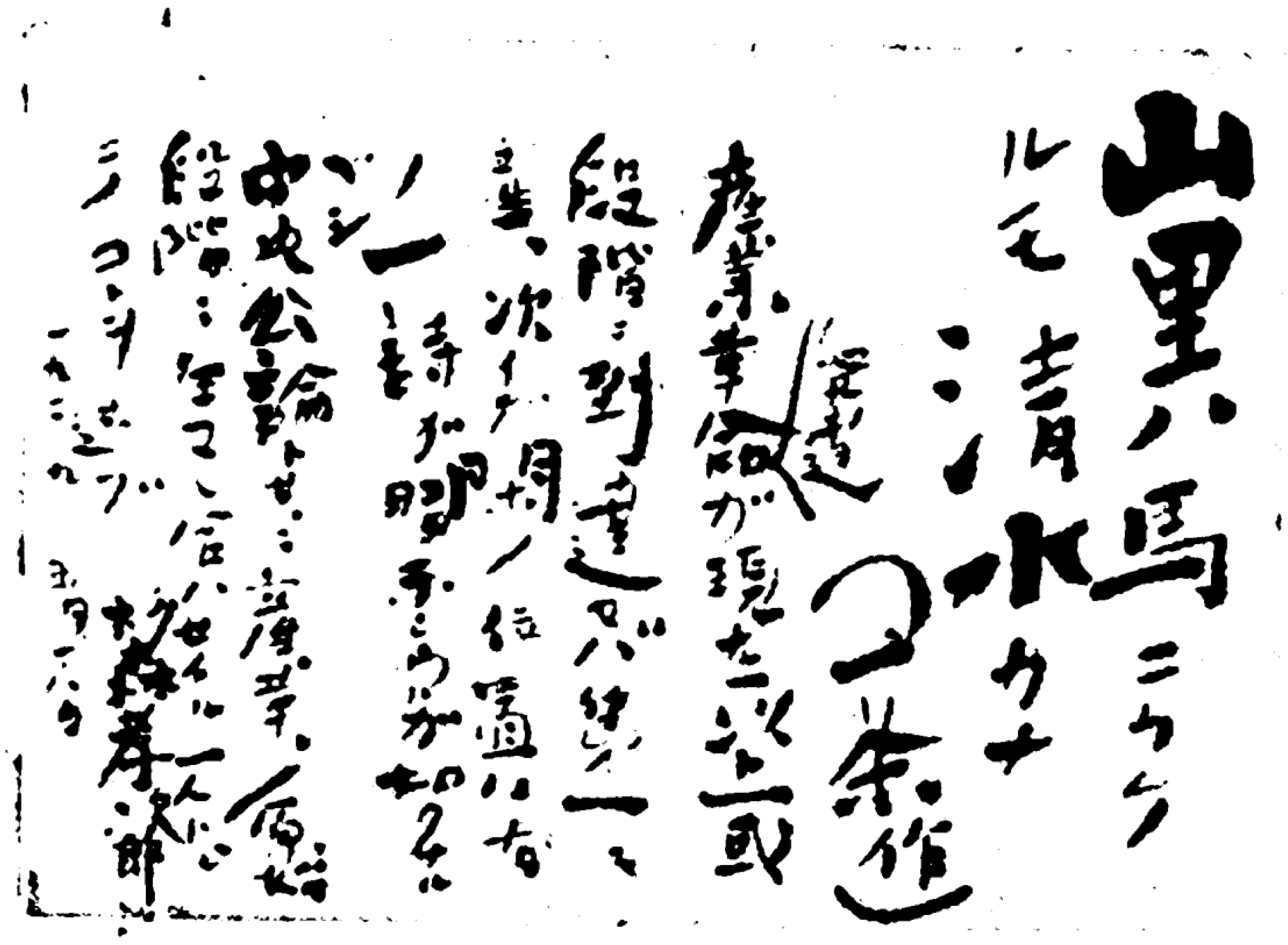
毎日僕ハ保田[illegible]
ノ夫中ニテ[illegible]
テ[illegible]バシテ
交通巡査ニ叱
ラレマシタ

昭和四年[illegible]
十一月[illegible]

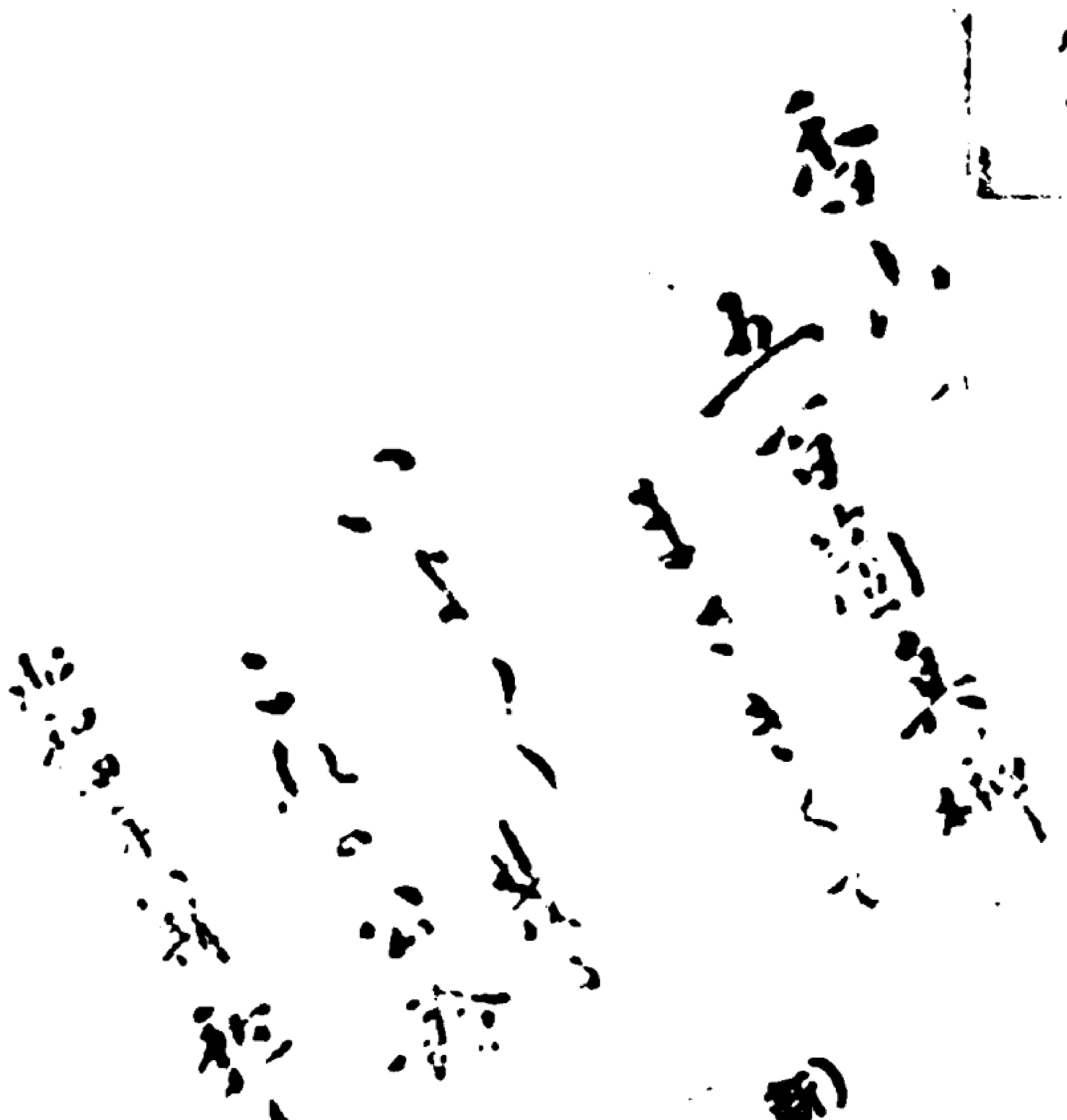
([illegible])



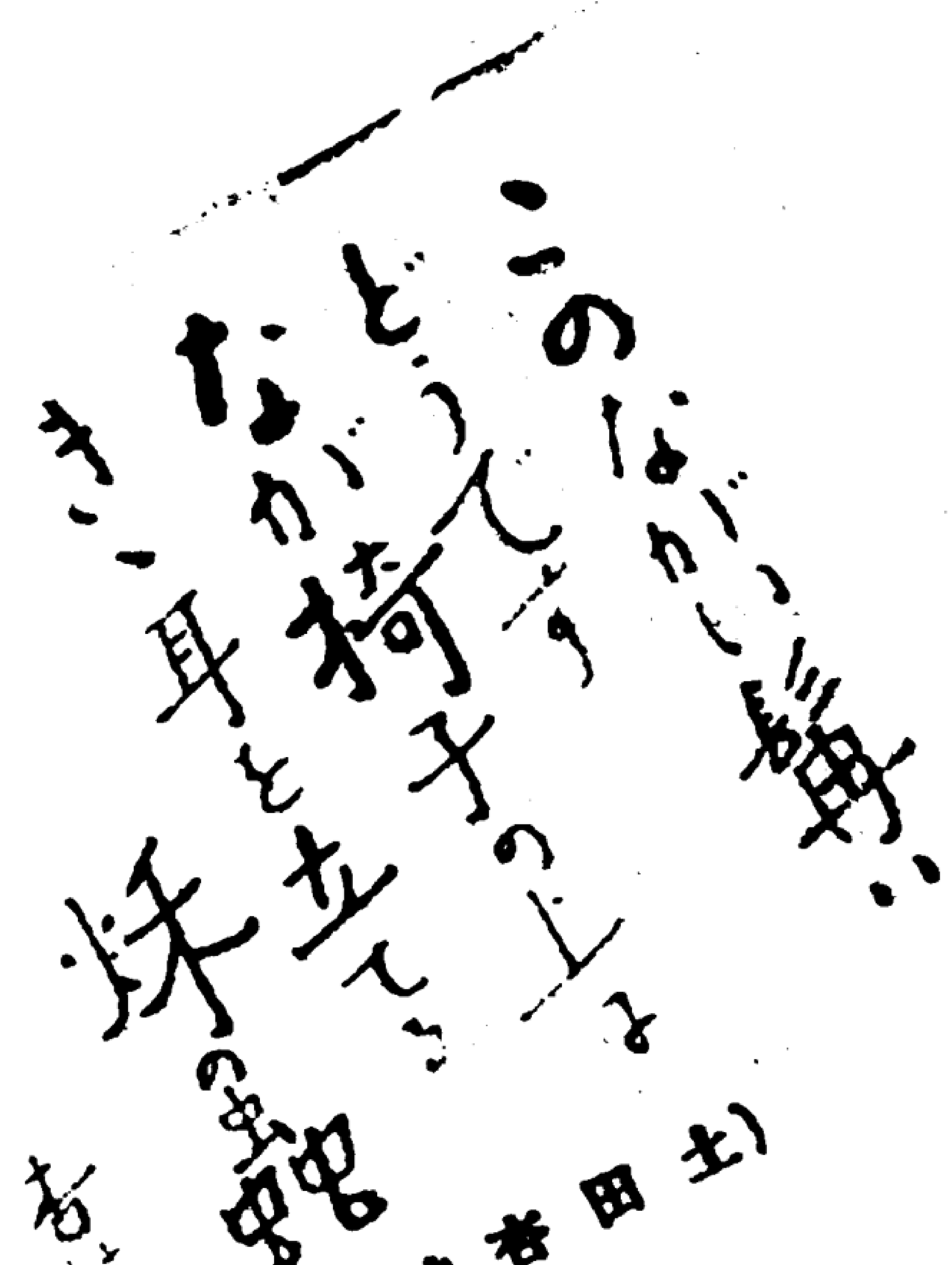
(山川均)



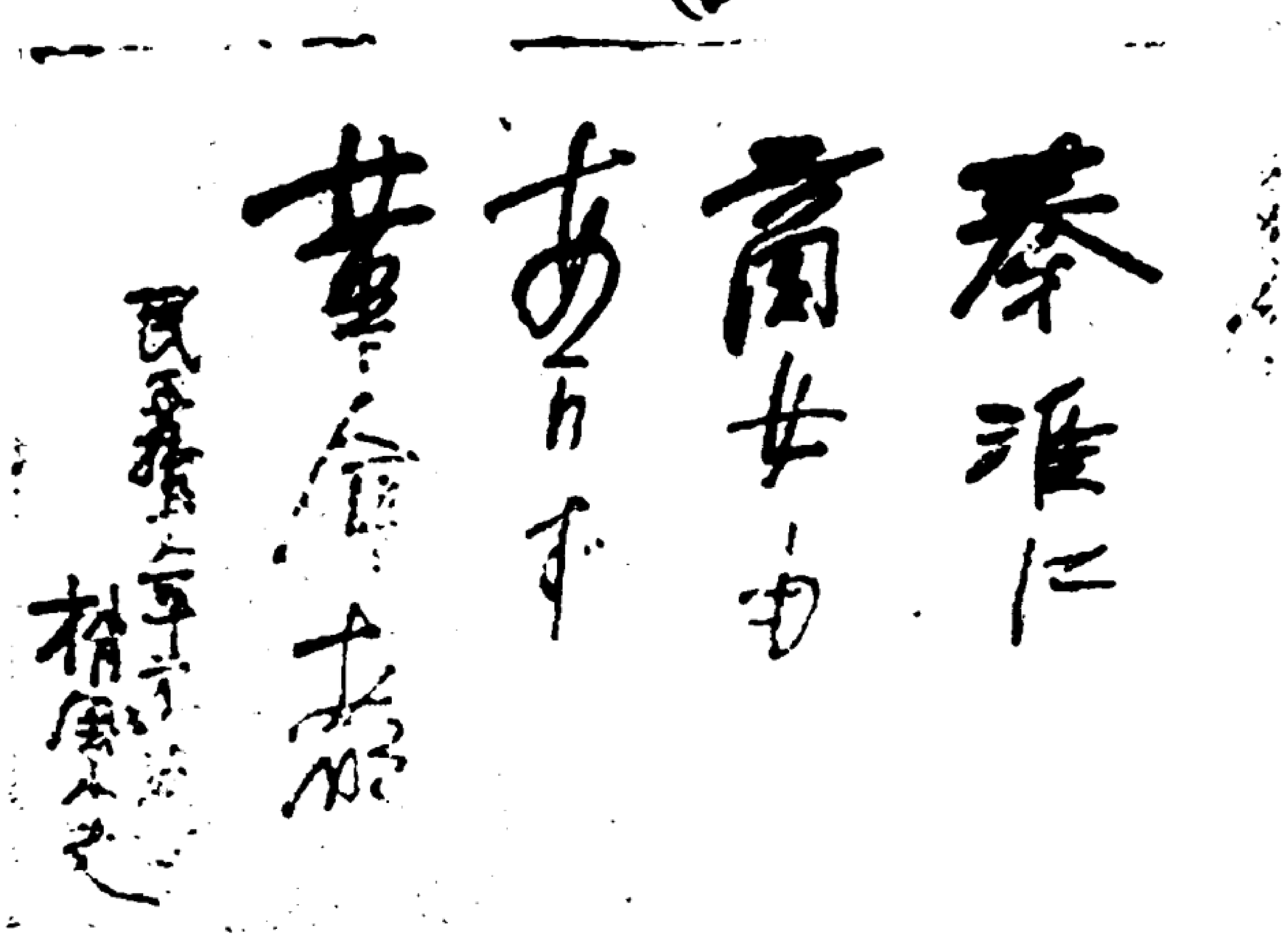
(杉森孝次郎)



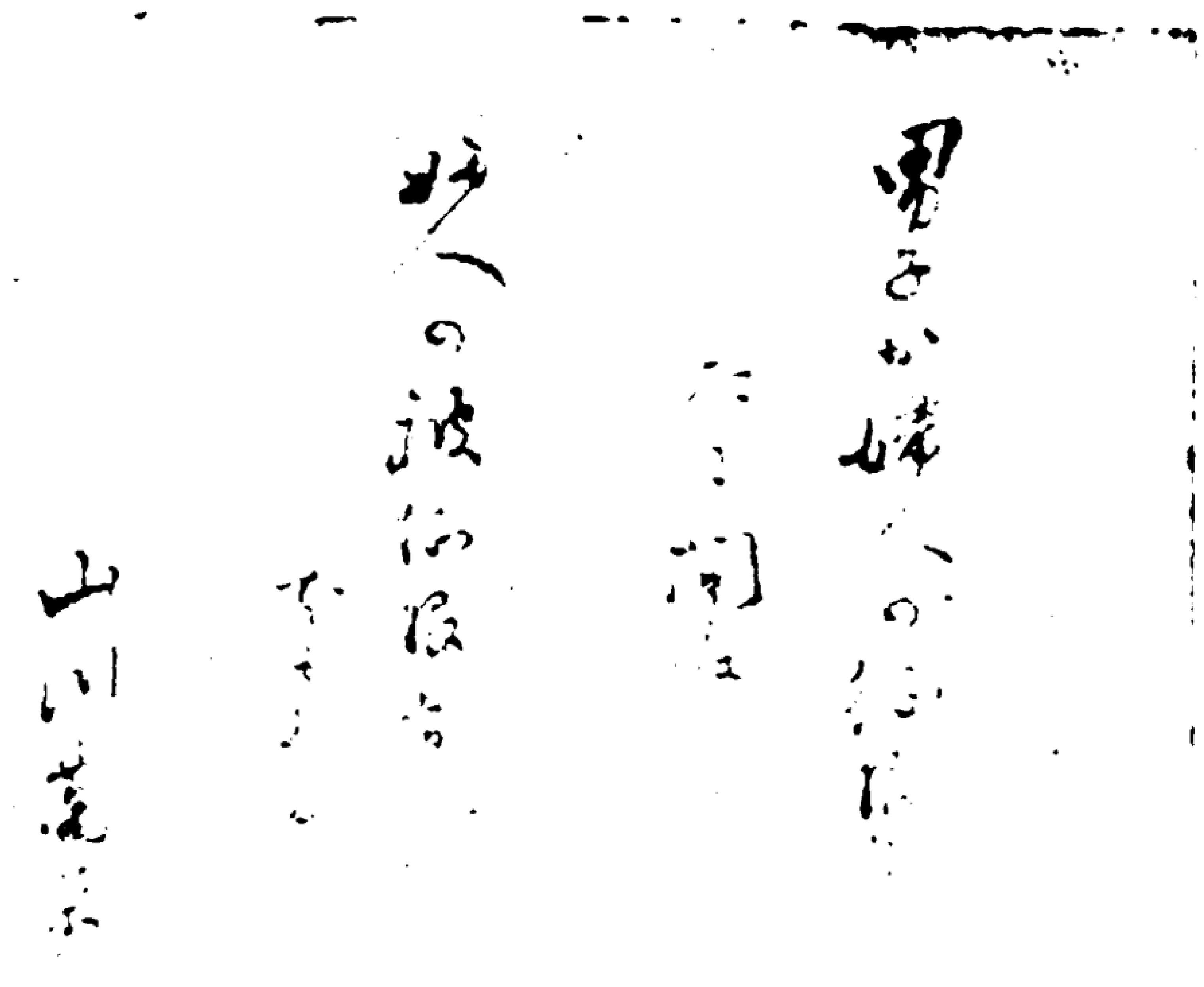
(新村出)



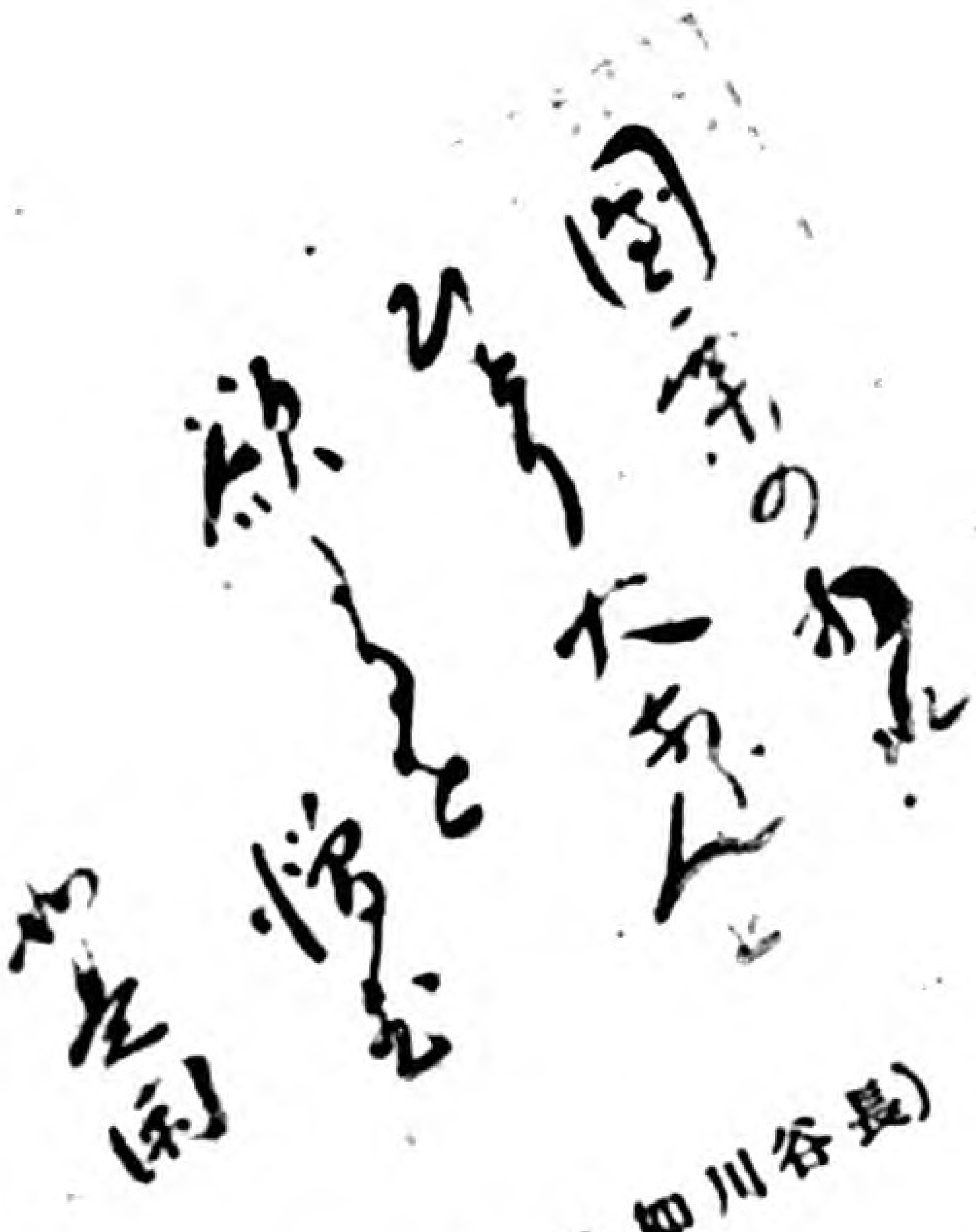
(土田杏村)



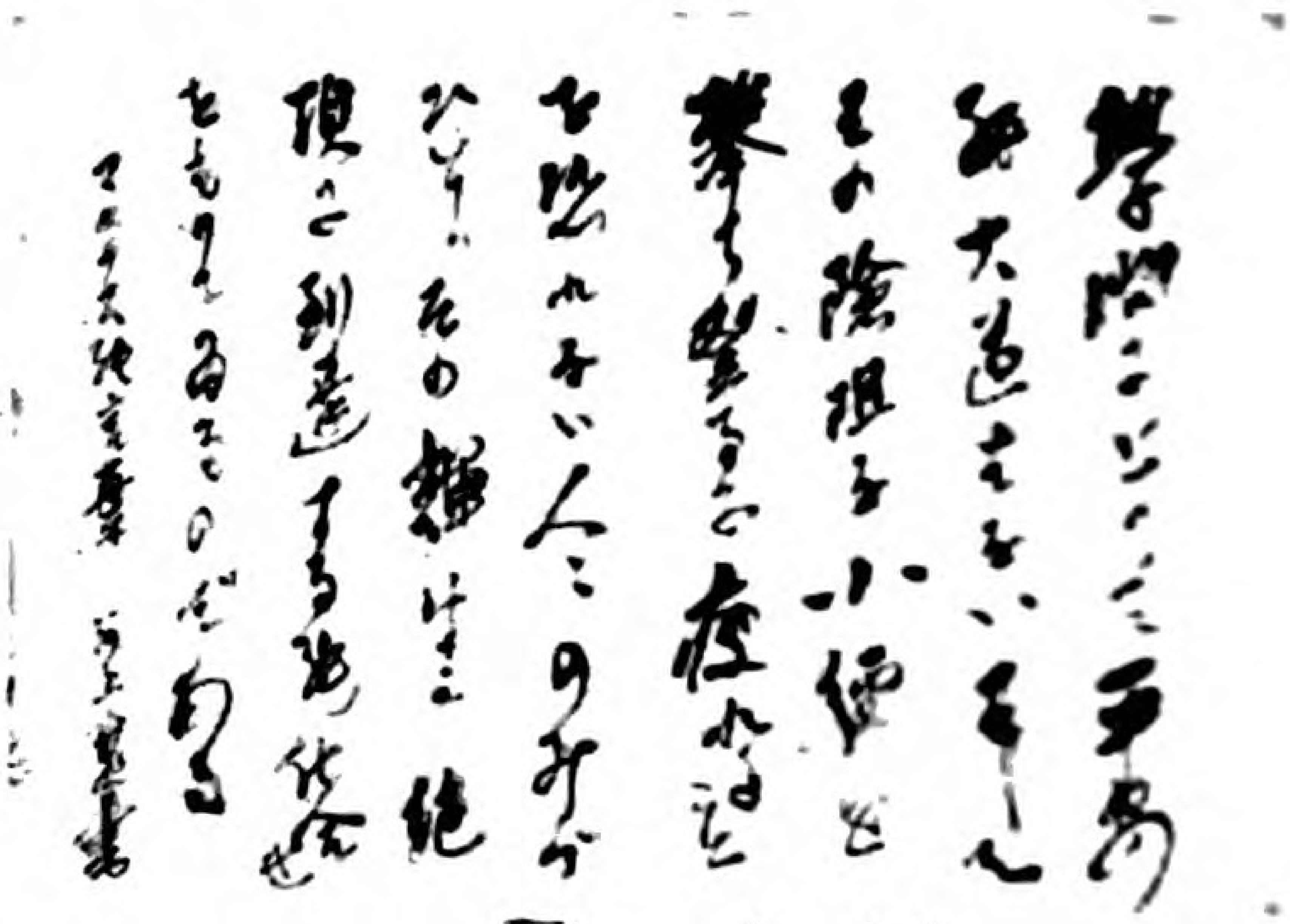
(村松梢風)



(山川菊榮)



(長谷川如是閑)



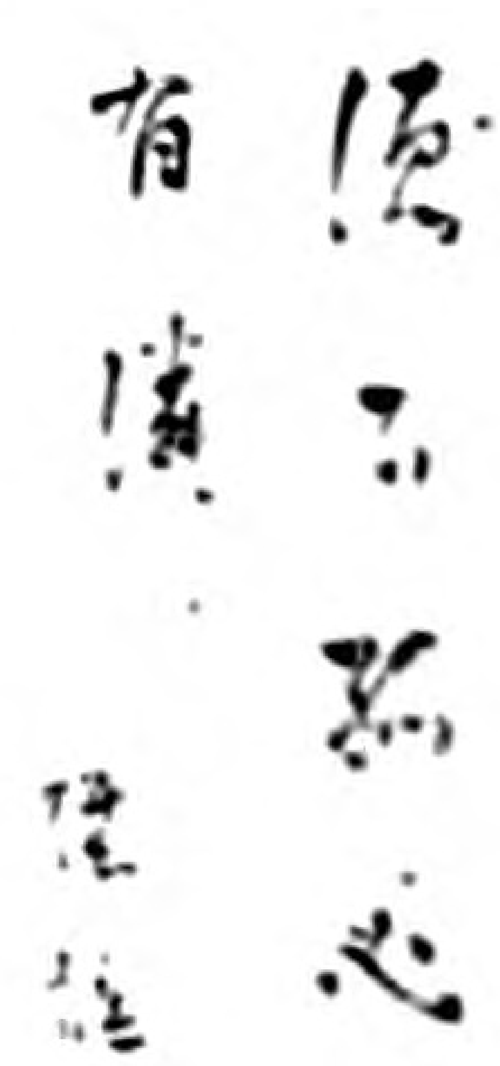
(河上肇)



(大山郁夫)



(吉野作造)



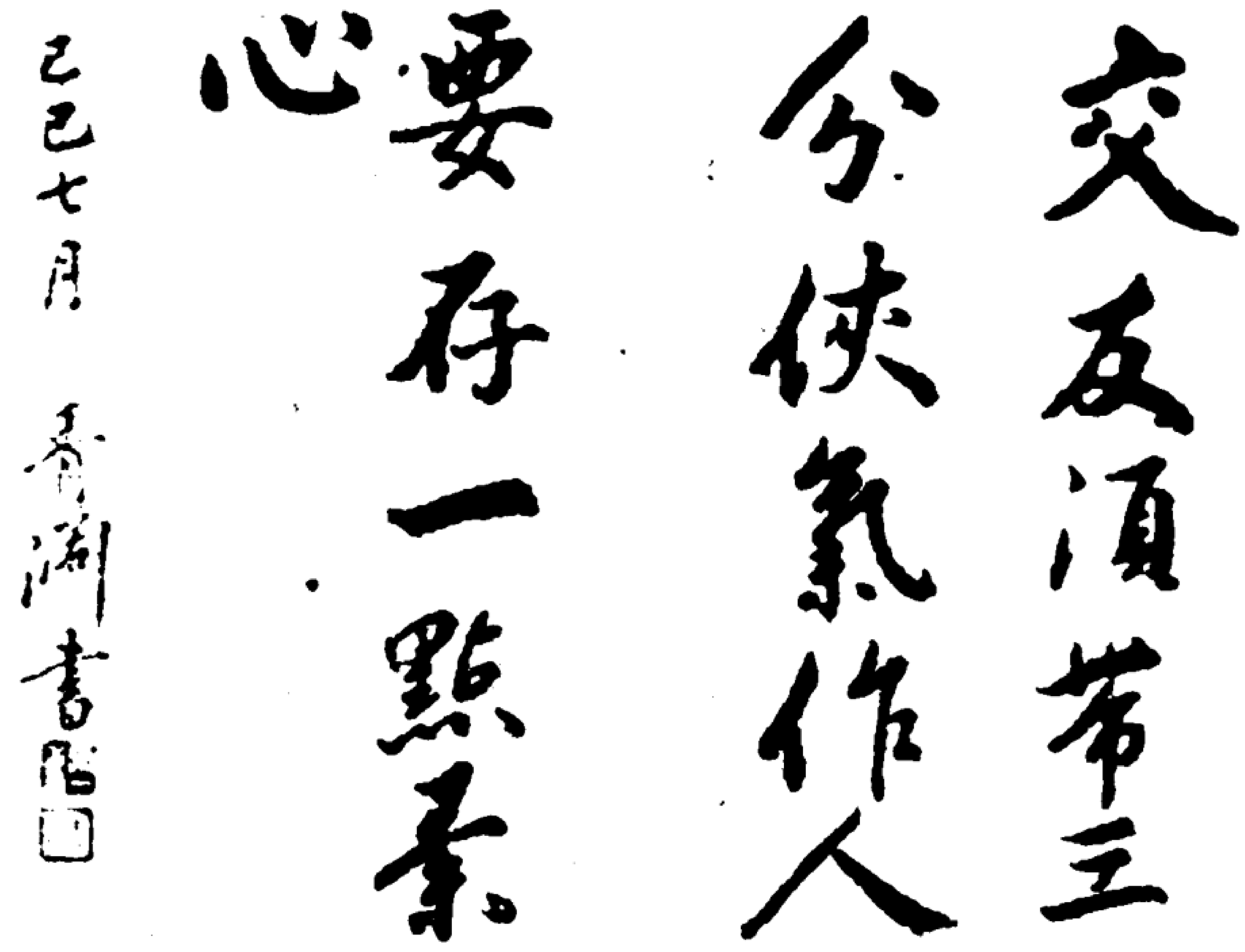
(安部磯雄)



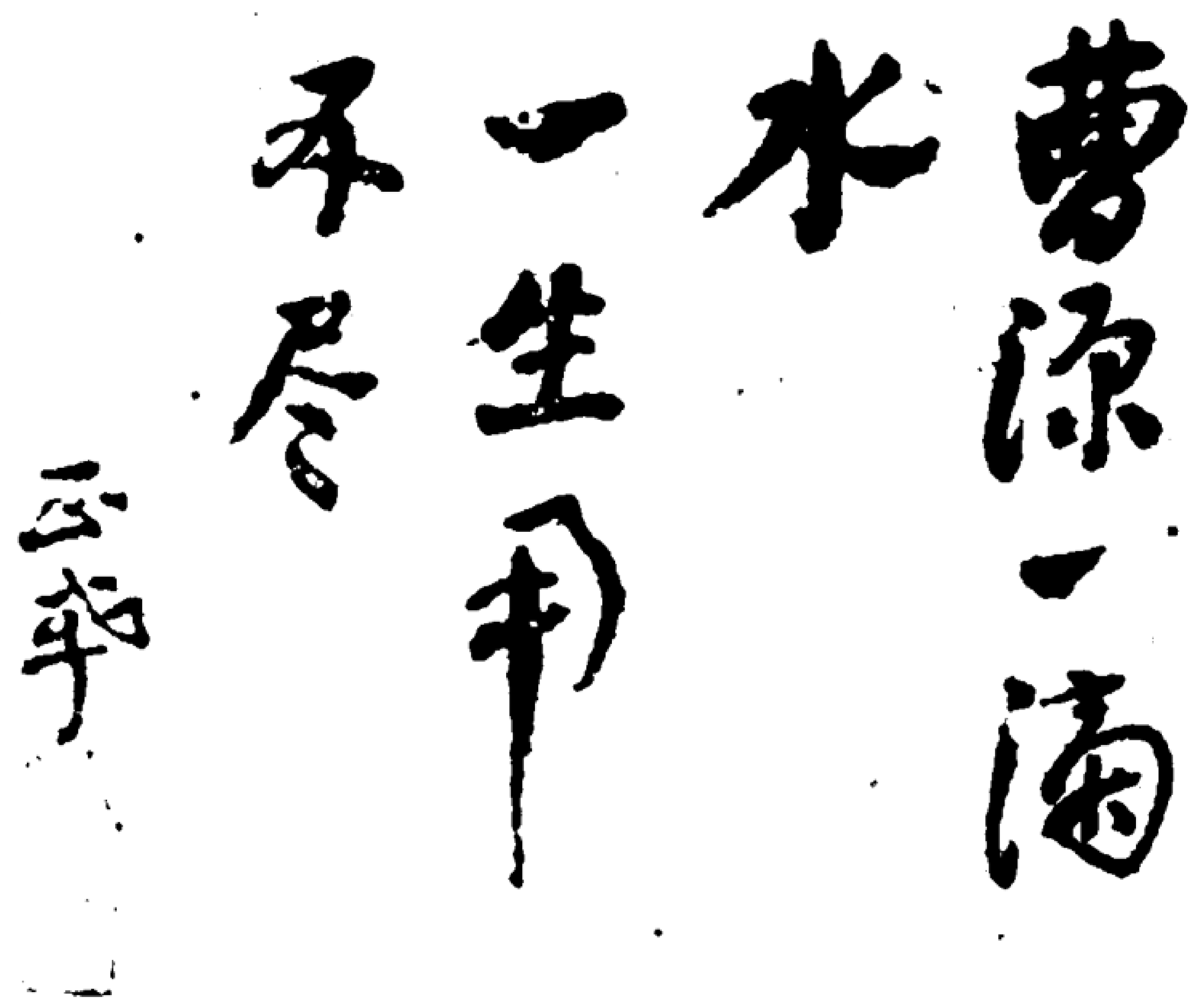
(堺利彦)



(猪俣津南雄)

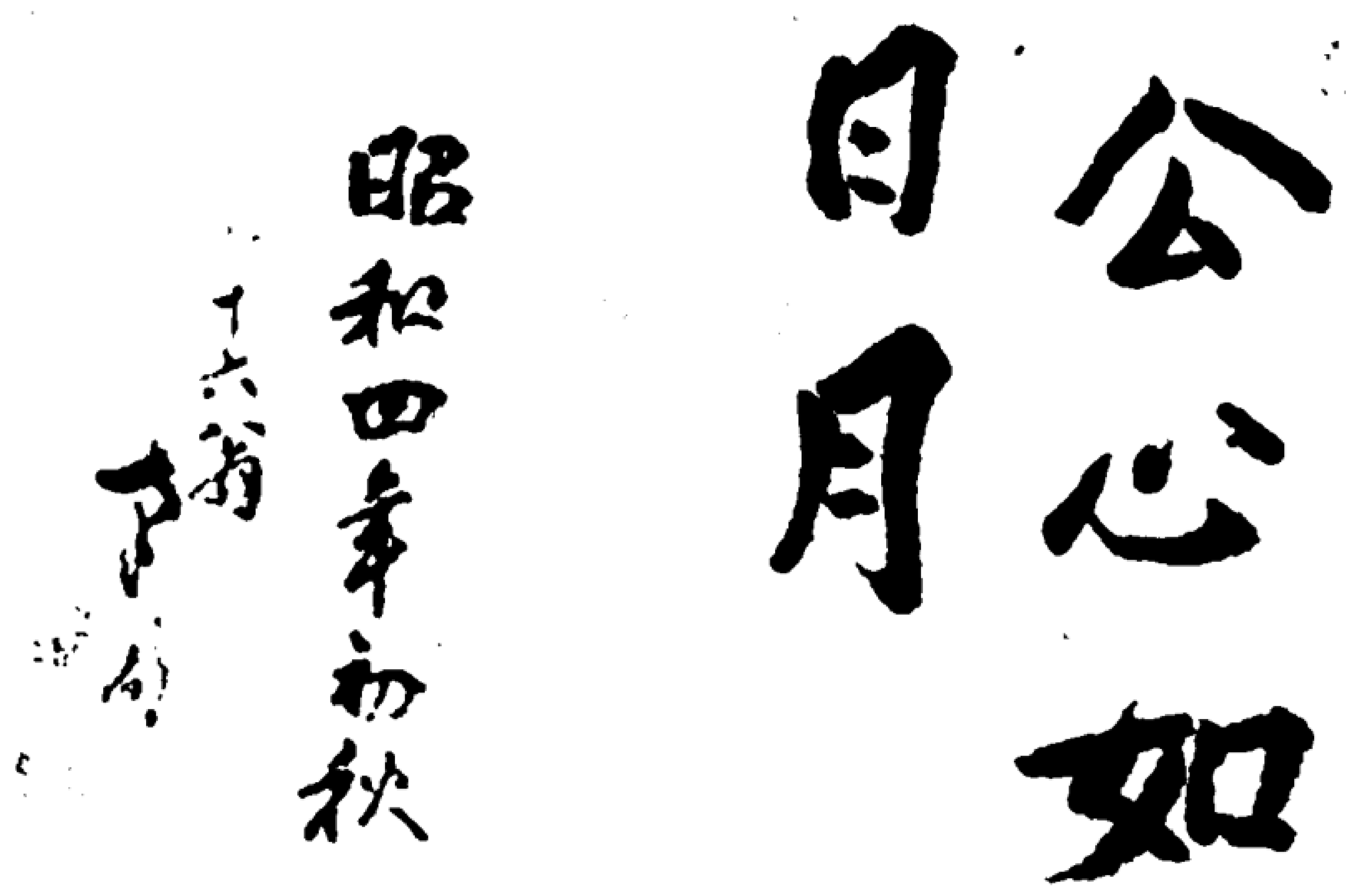


(澁澤榮一)

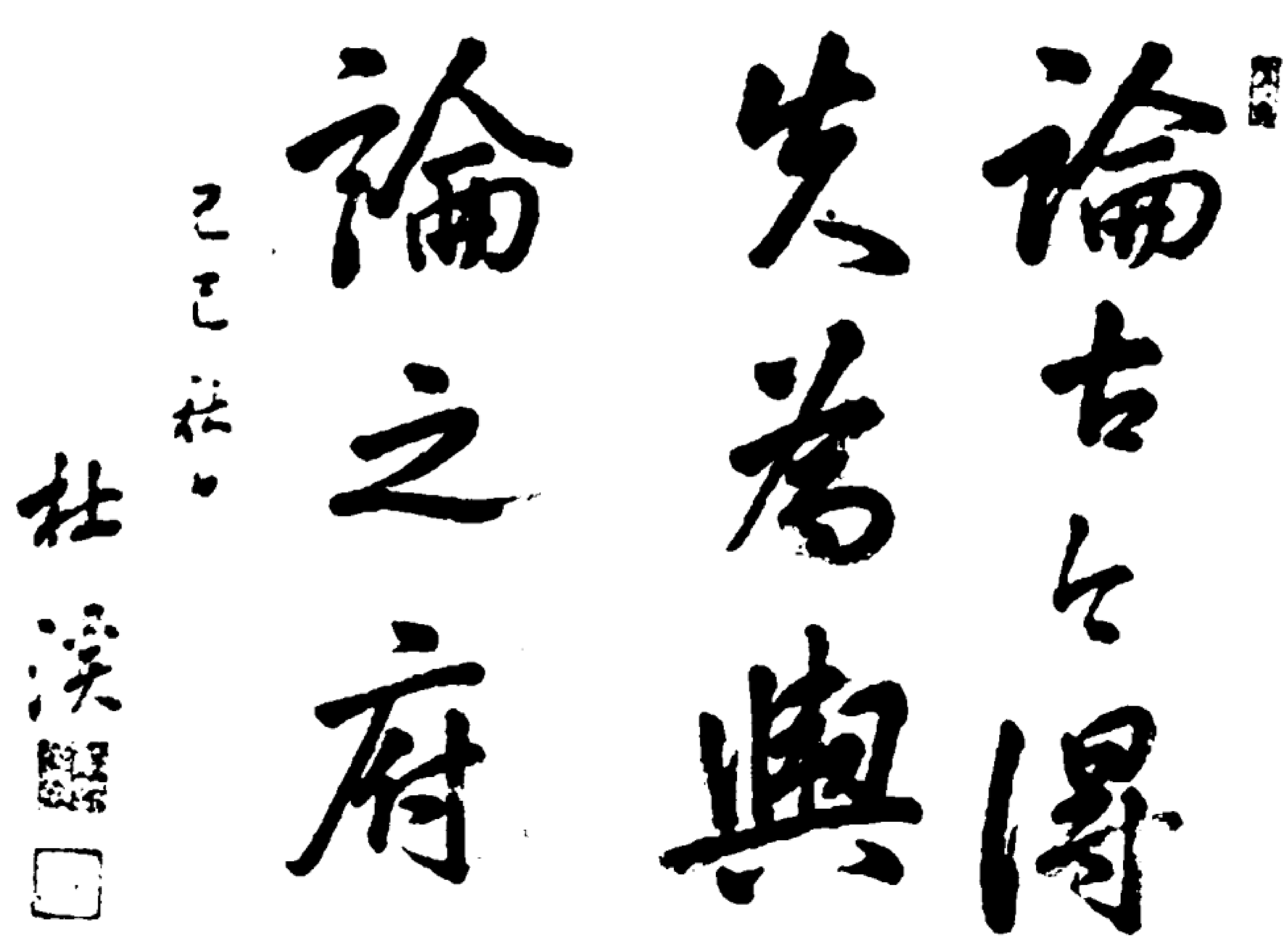


(太田正孝)

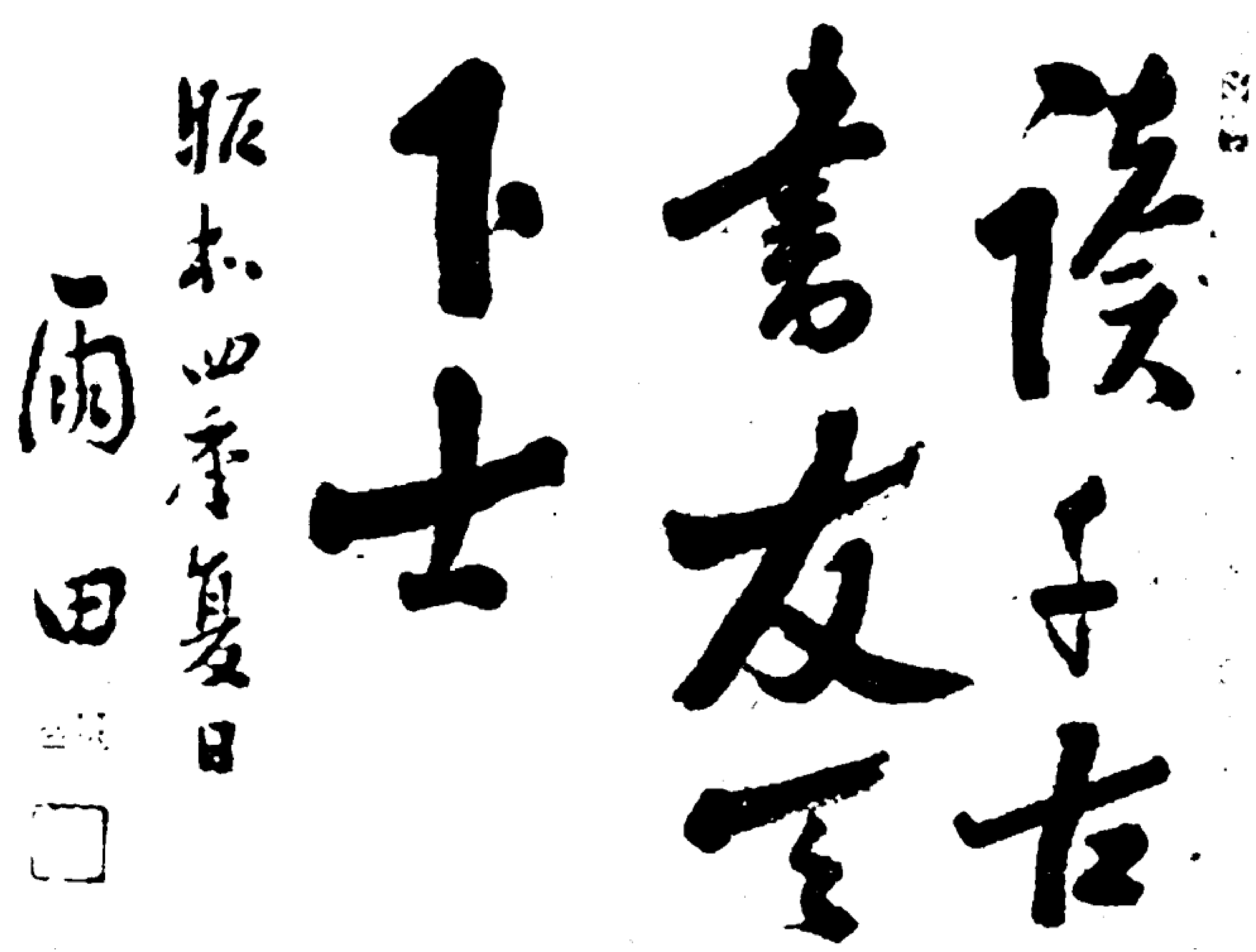

(武藤山治)



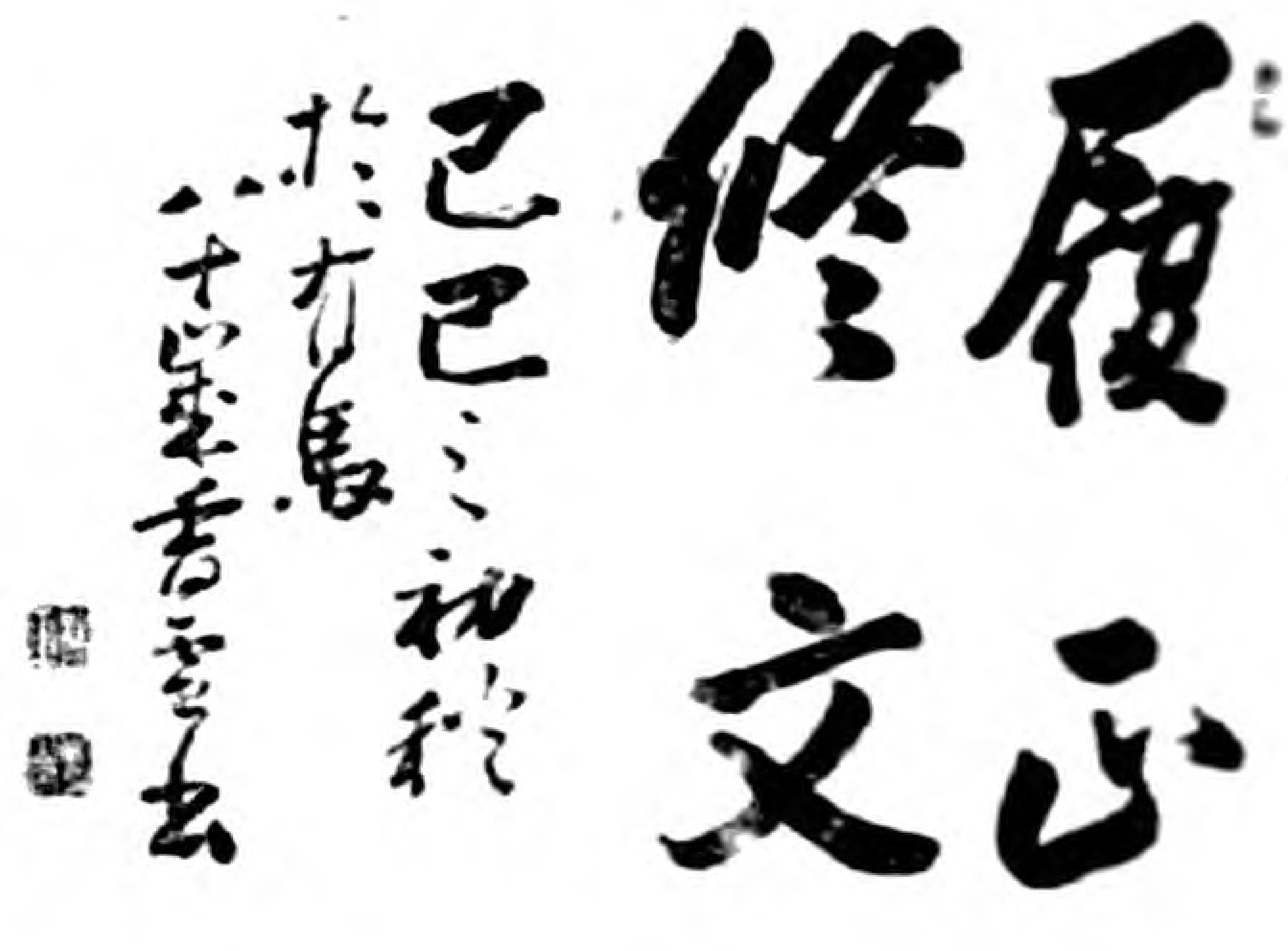
(大谷嘉兵衛)



(服部金太郎)



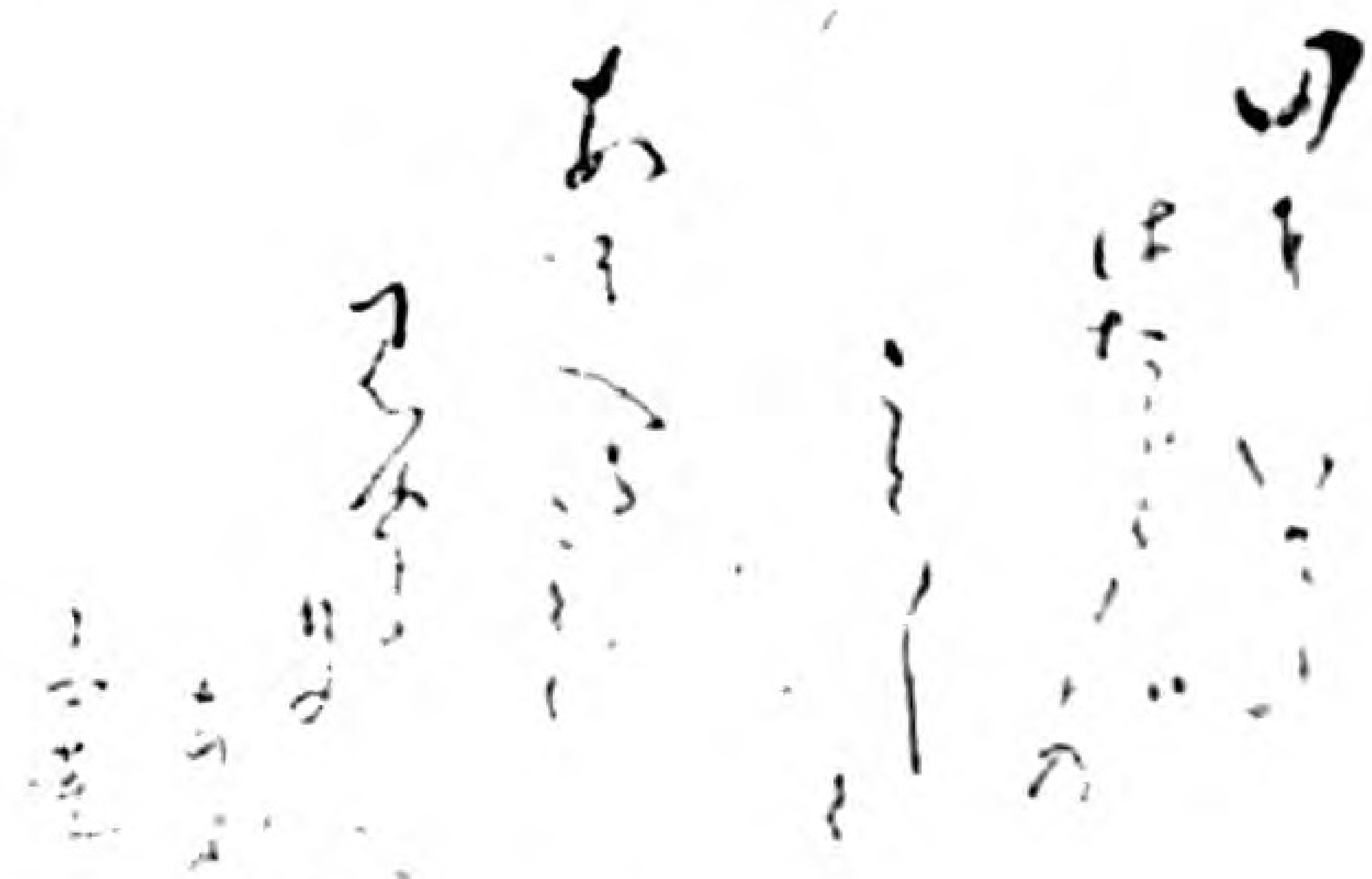
(藤山雷太)



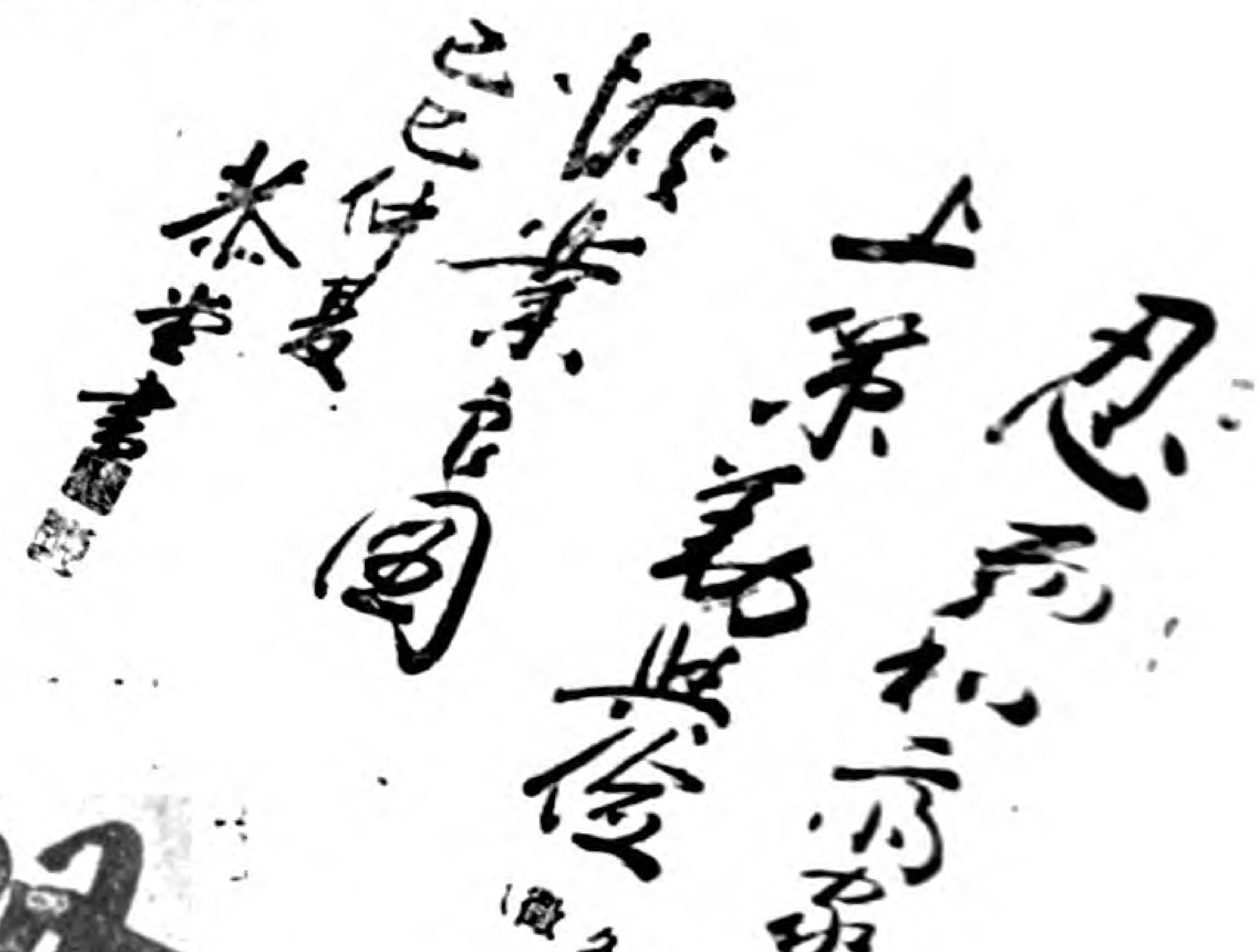
（村山龍平）



（本山彦一）



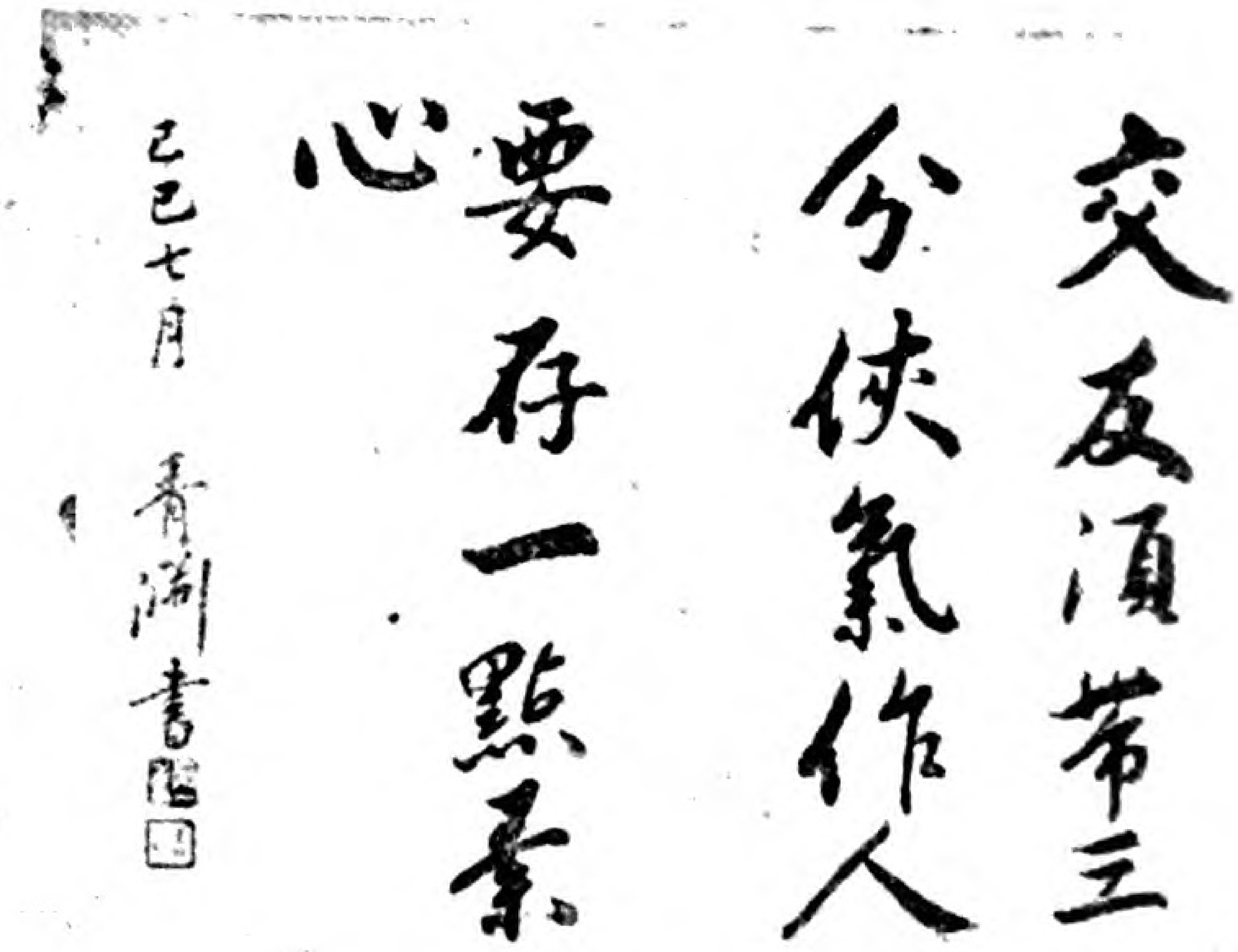
（柳原白蓮）



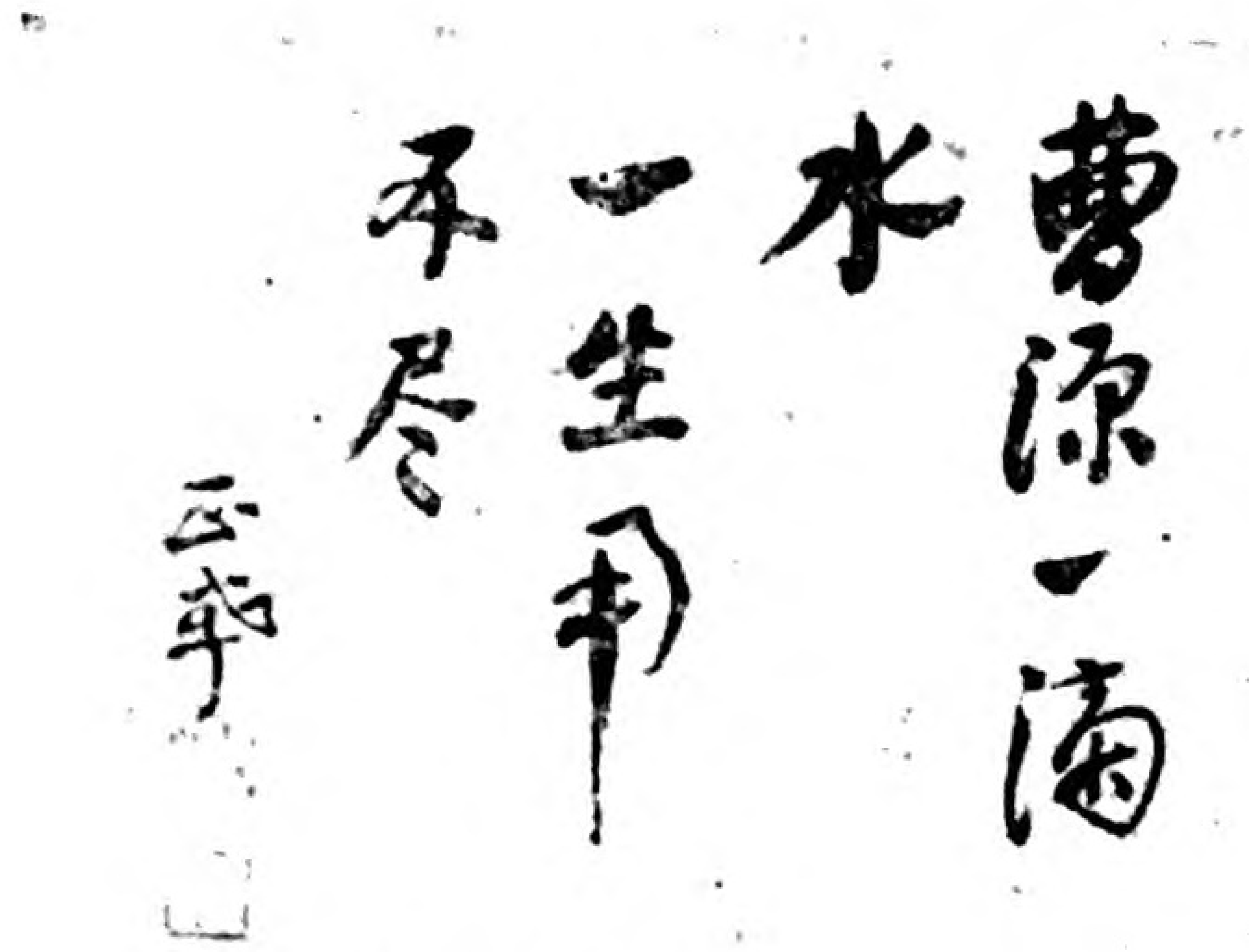
（ユカ久齋）



（淺野總一郎）



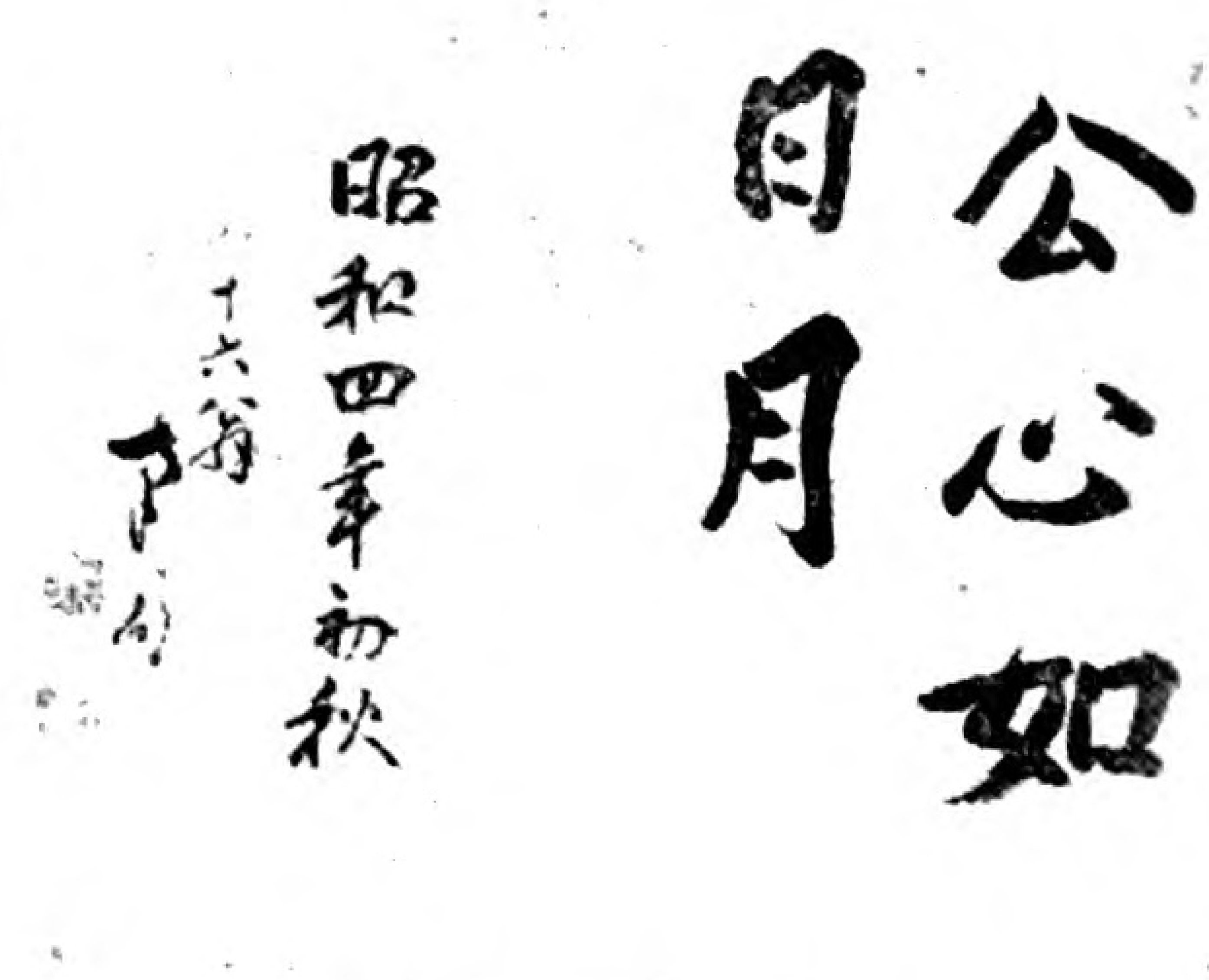
(澁澤榮一)



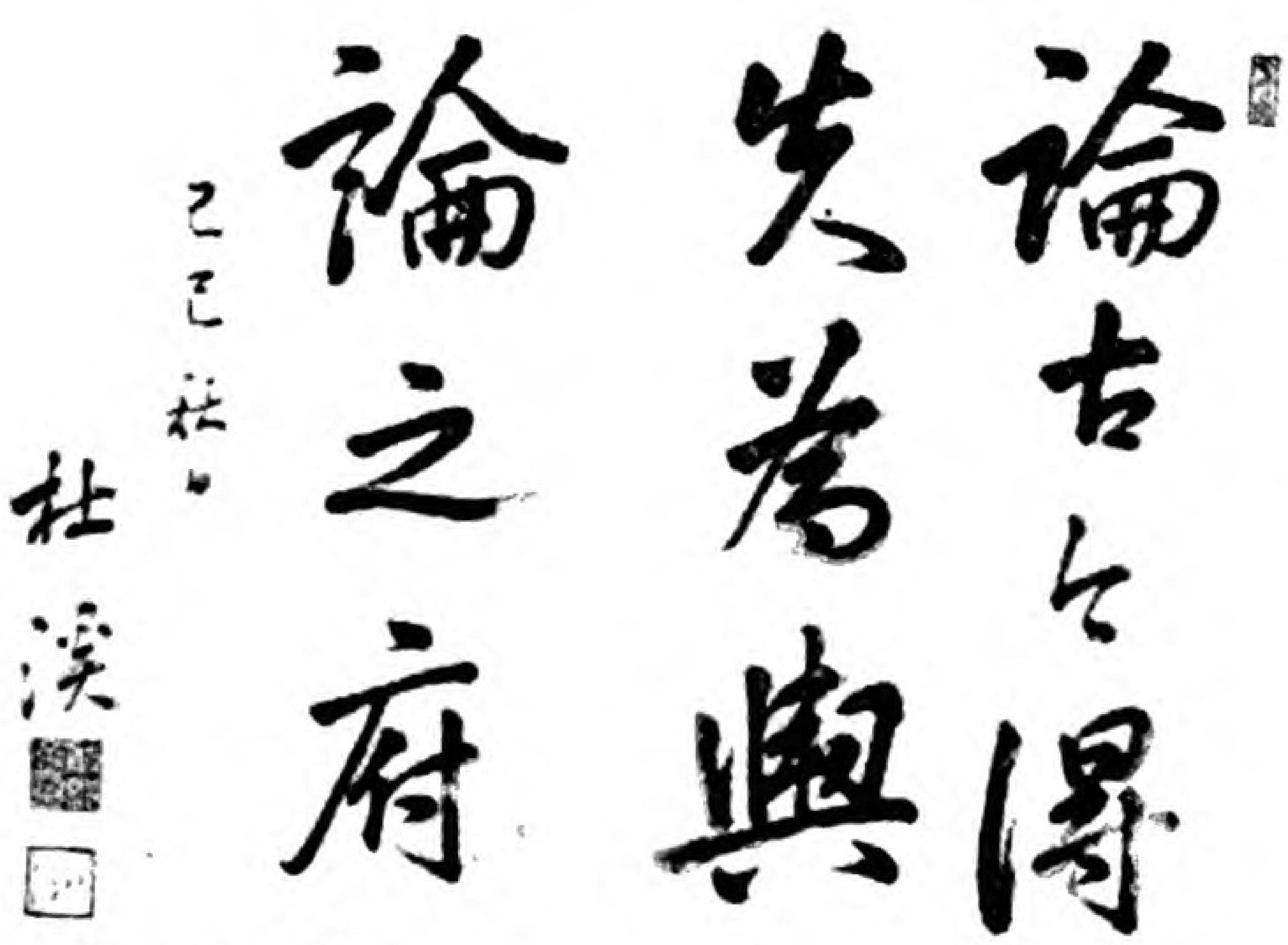
(太田正孝)



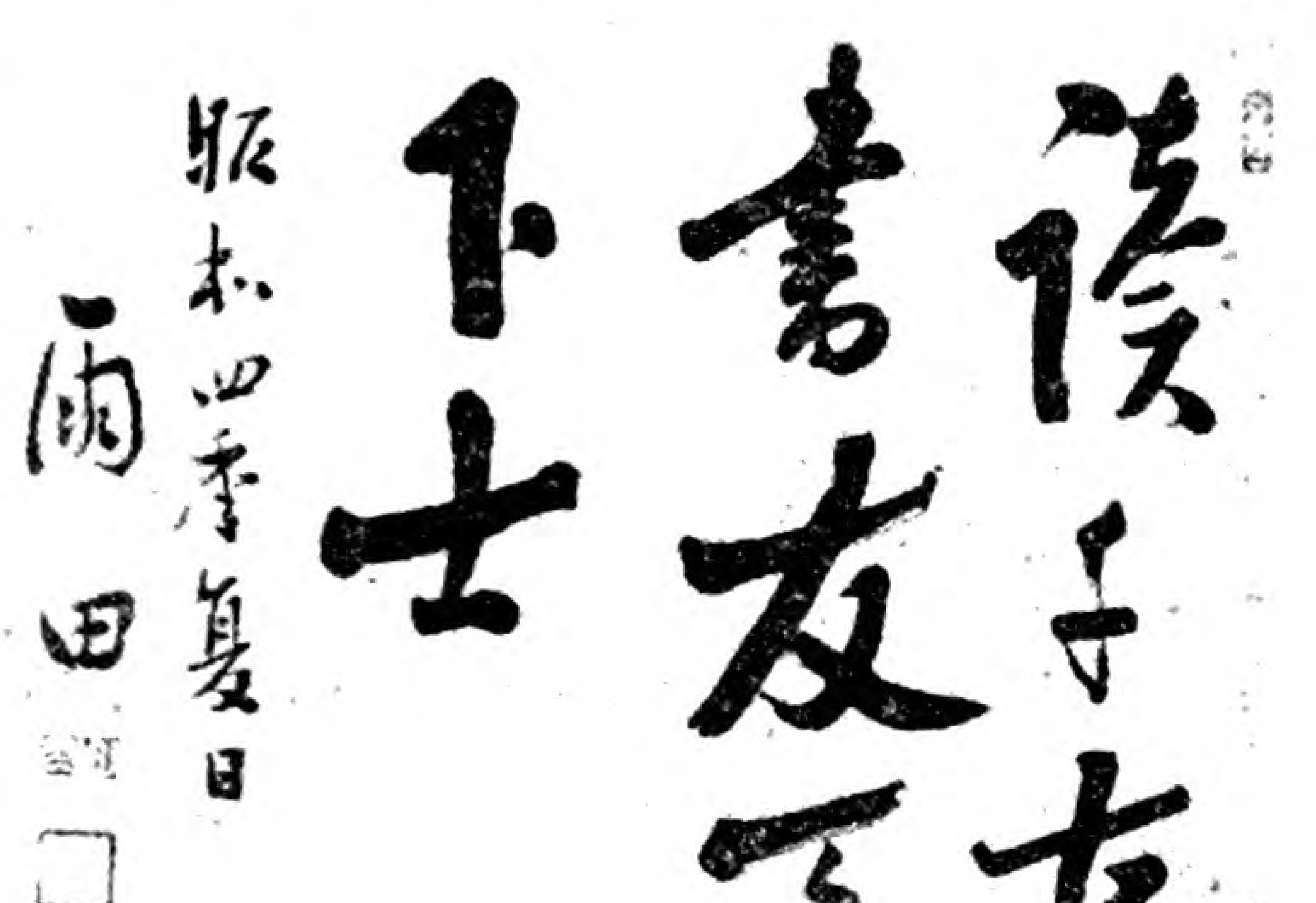
(武藤山治)



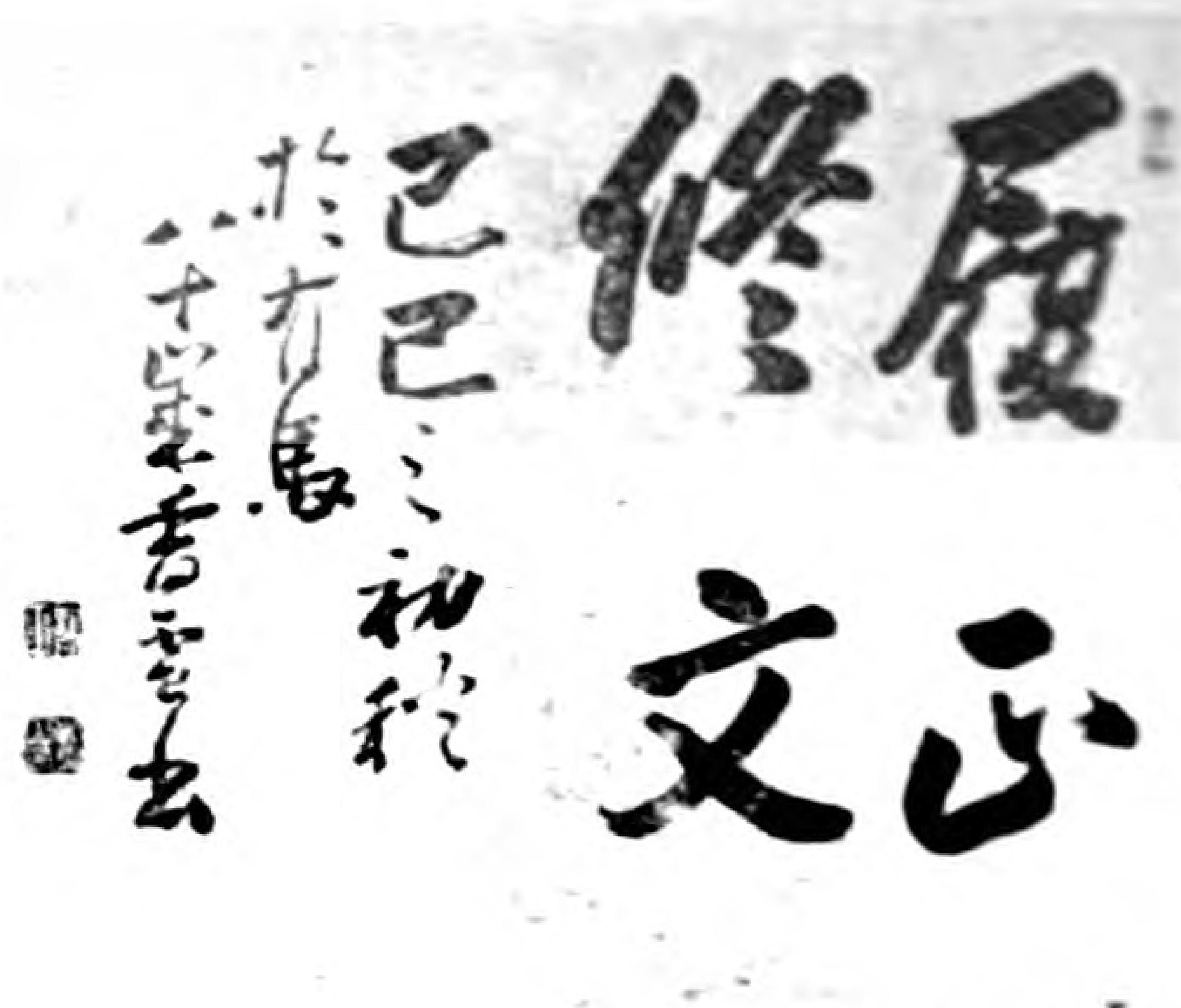
(大谷嘉兵衛)



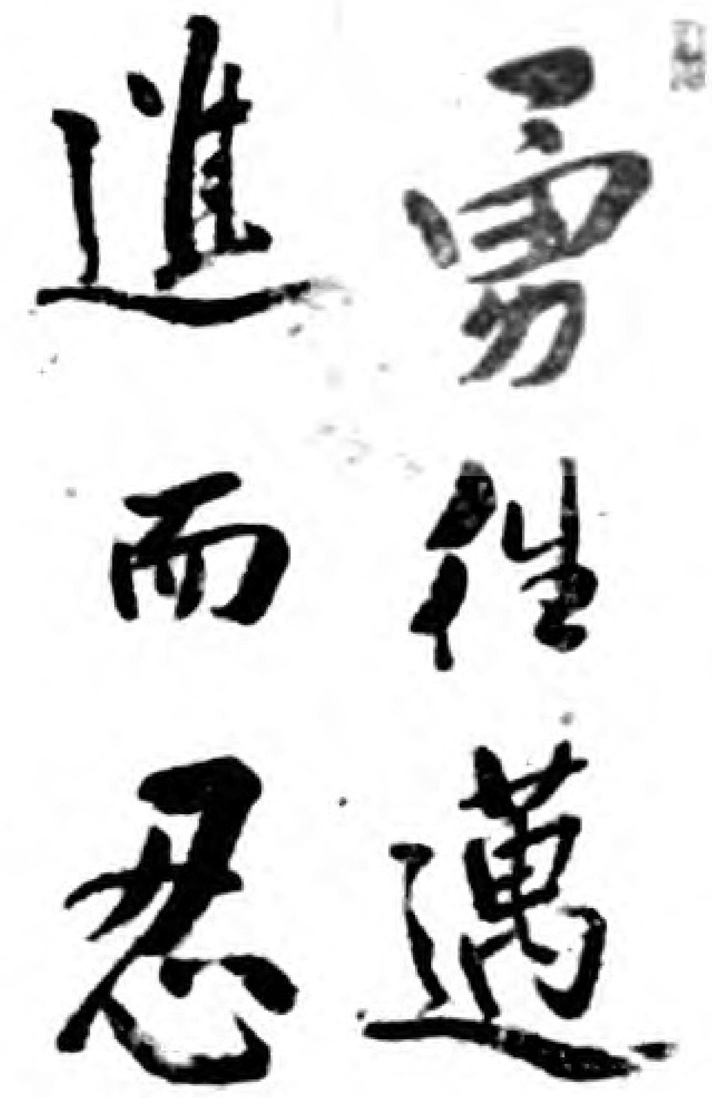
(服部金太郎)

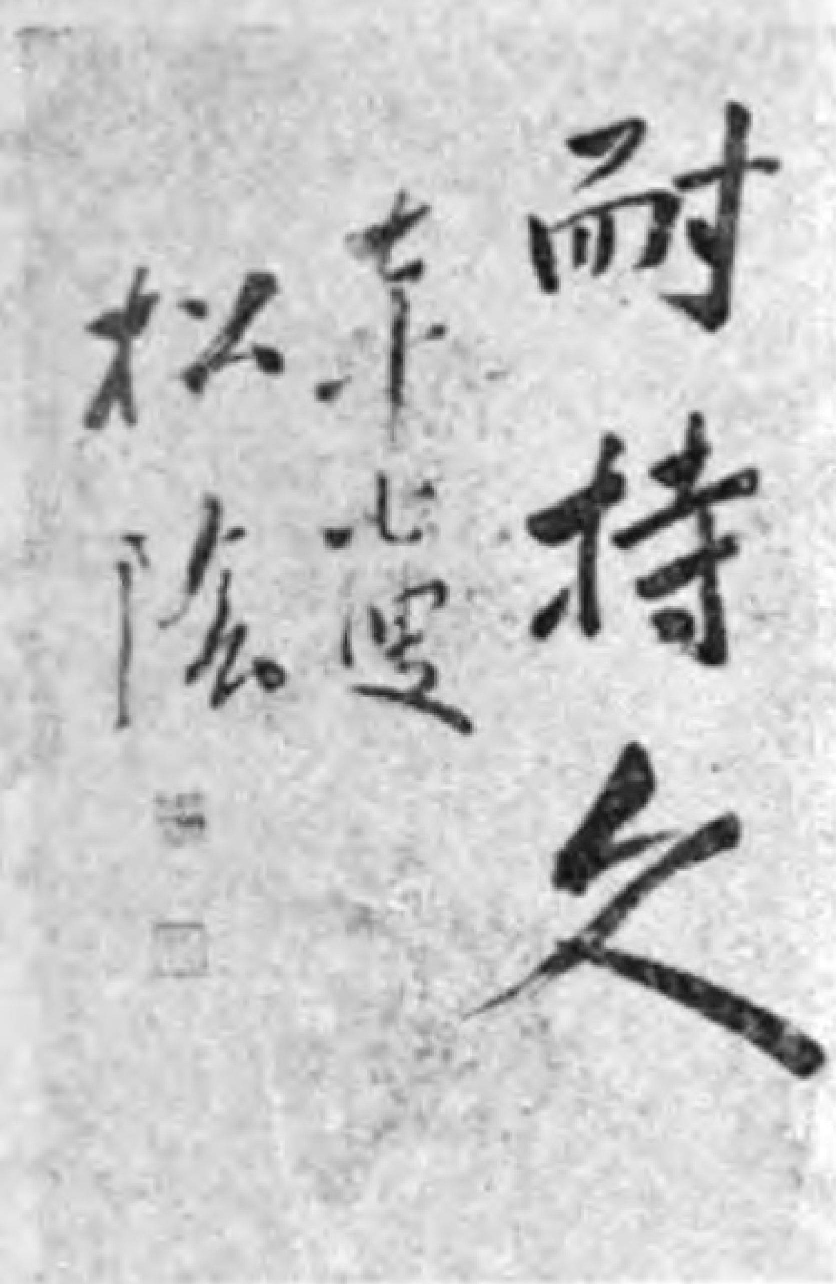


(藤山雷太)

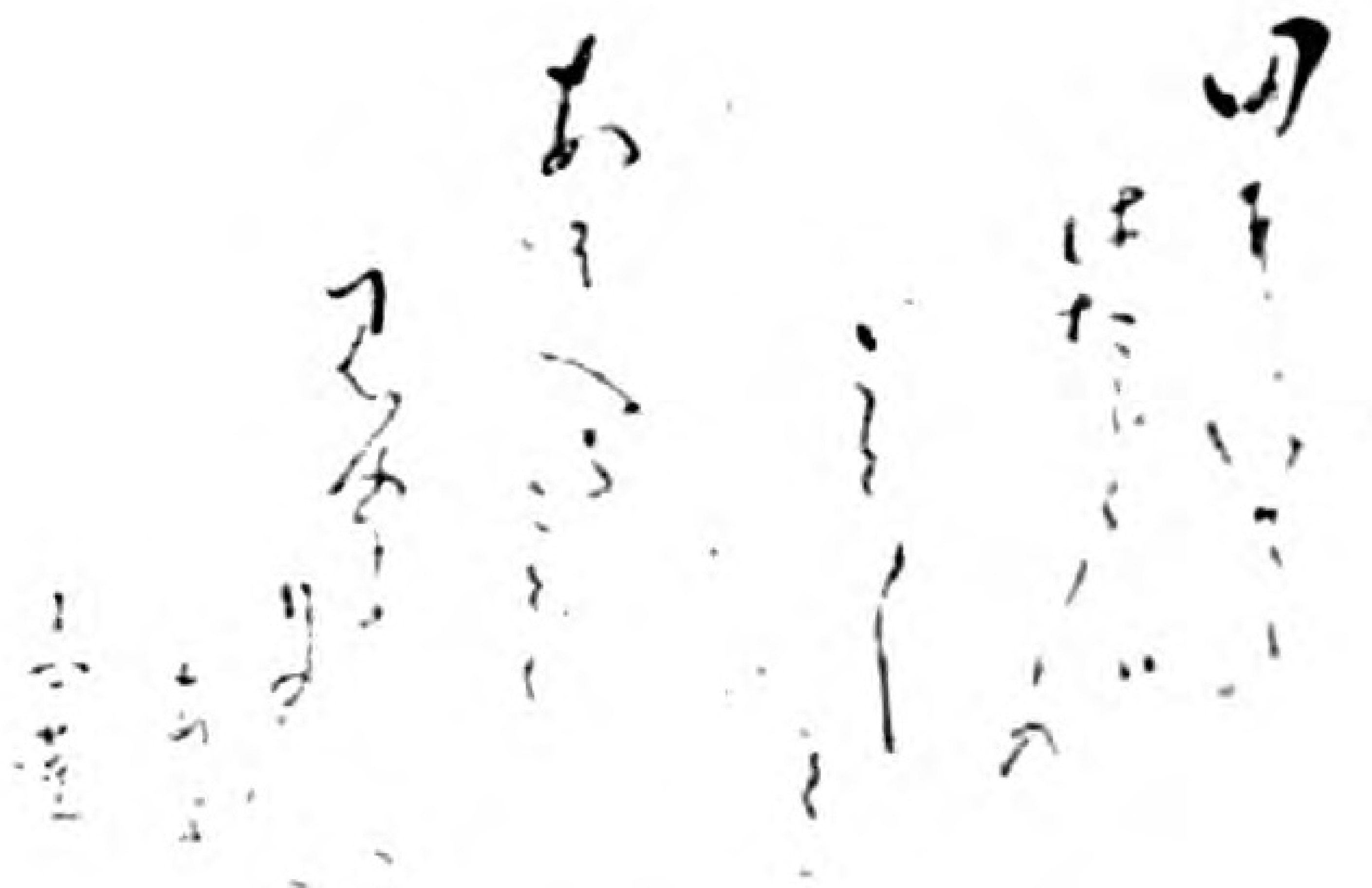


（村山龍平）

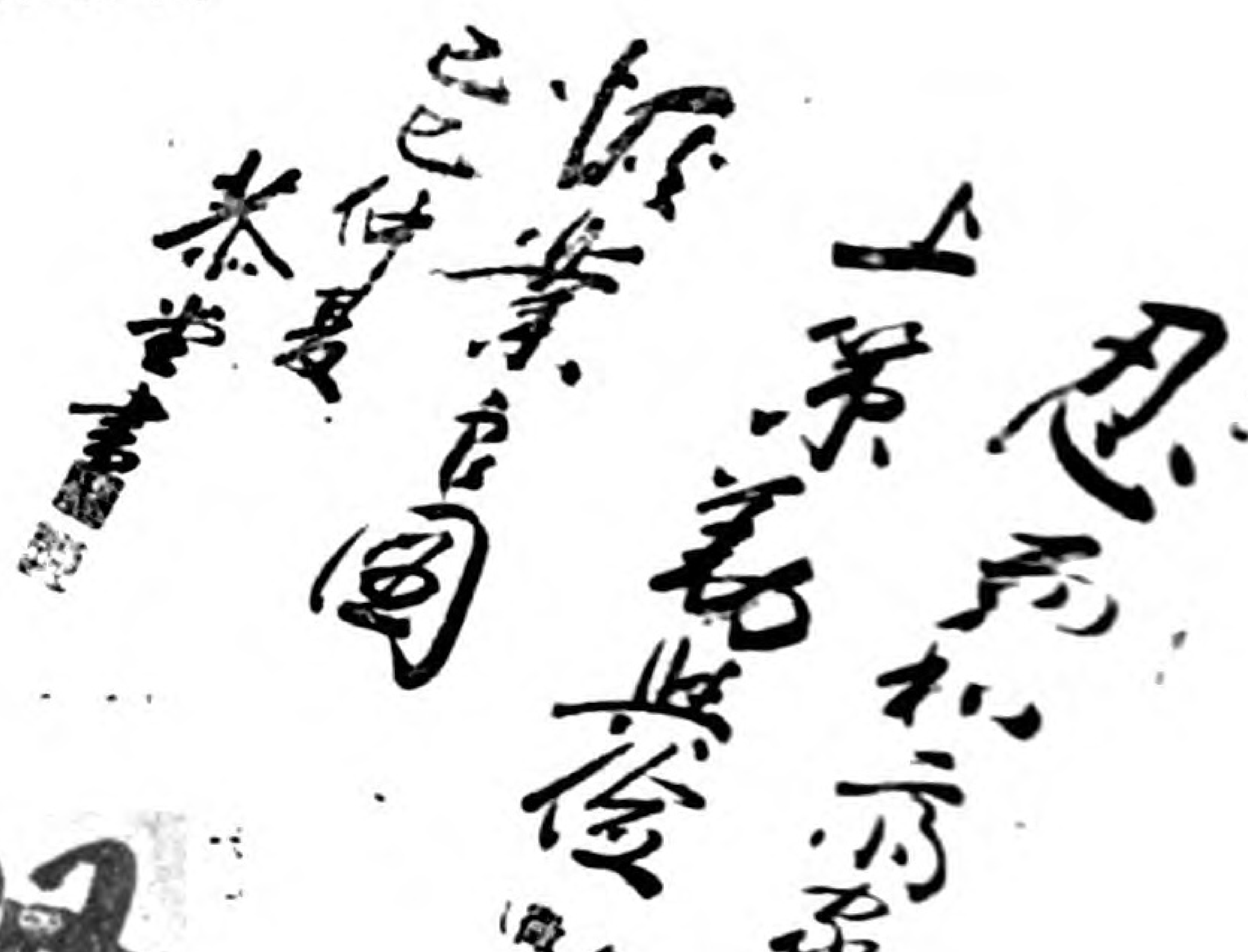




（本山彦一）



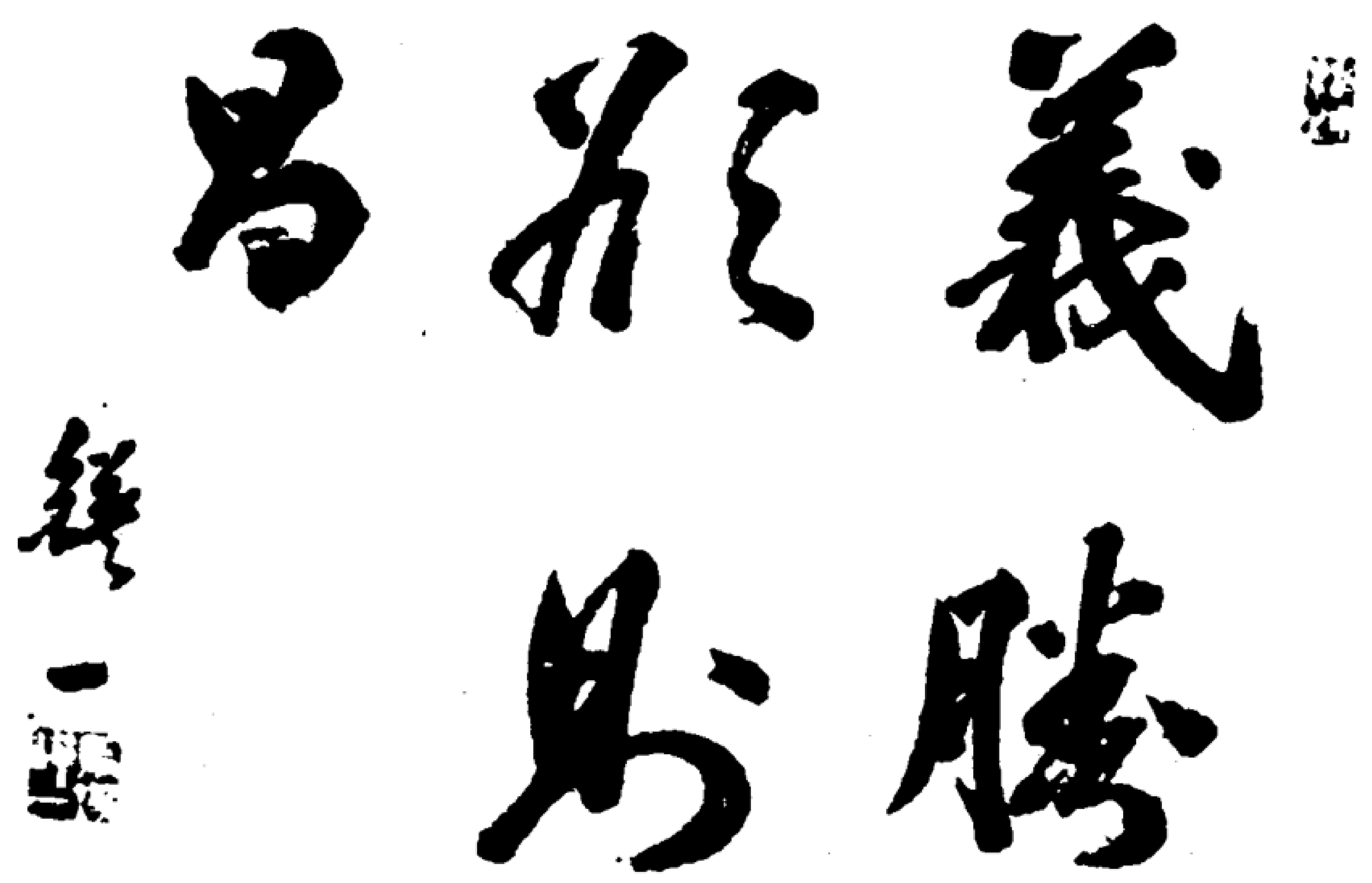
（柳原白蓮）



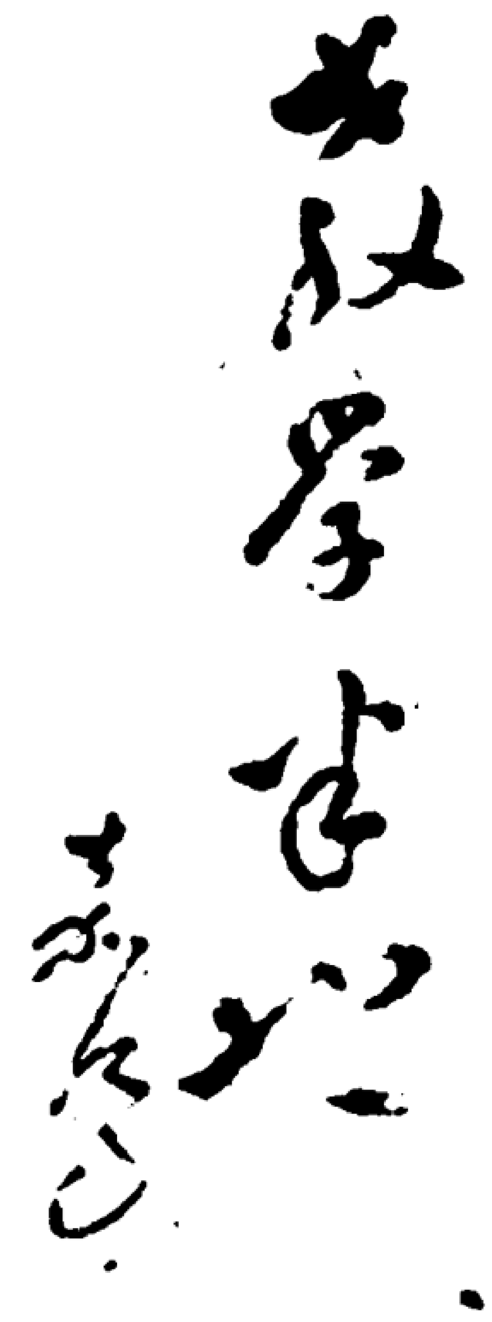
（ユガス徹）



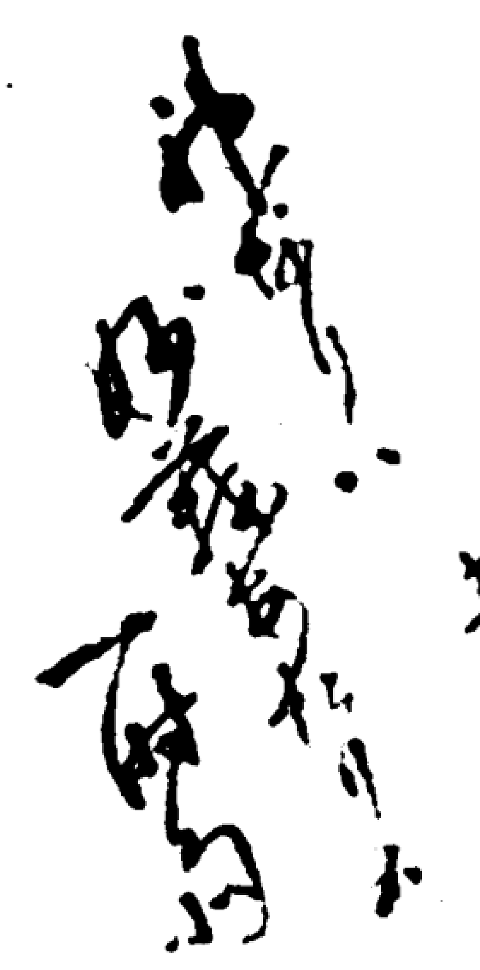
（淺野總一郎）



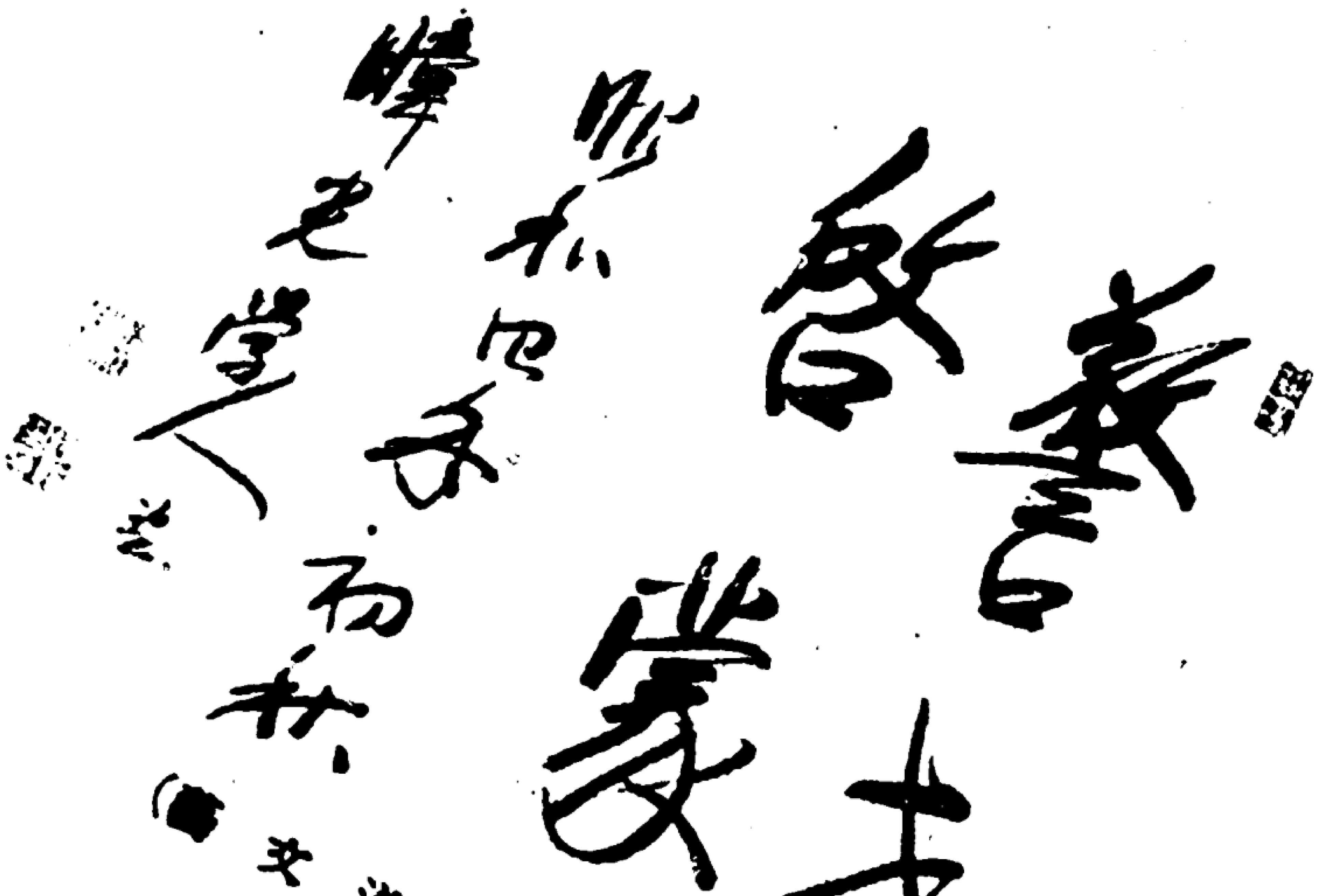
（馬場鍈一）



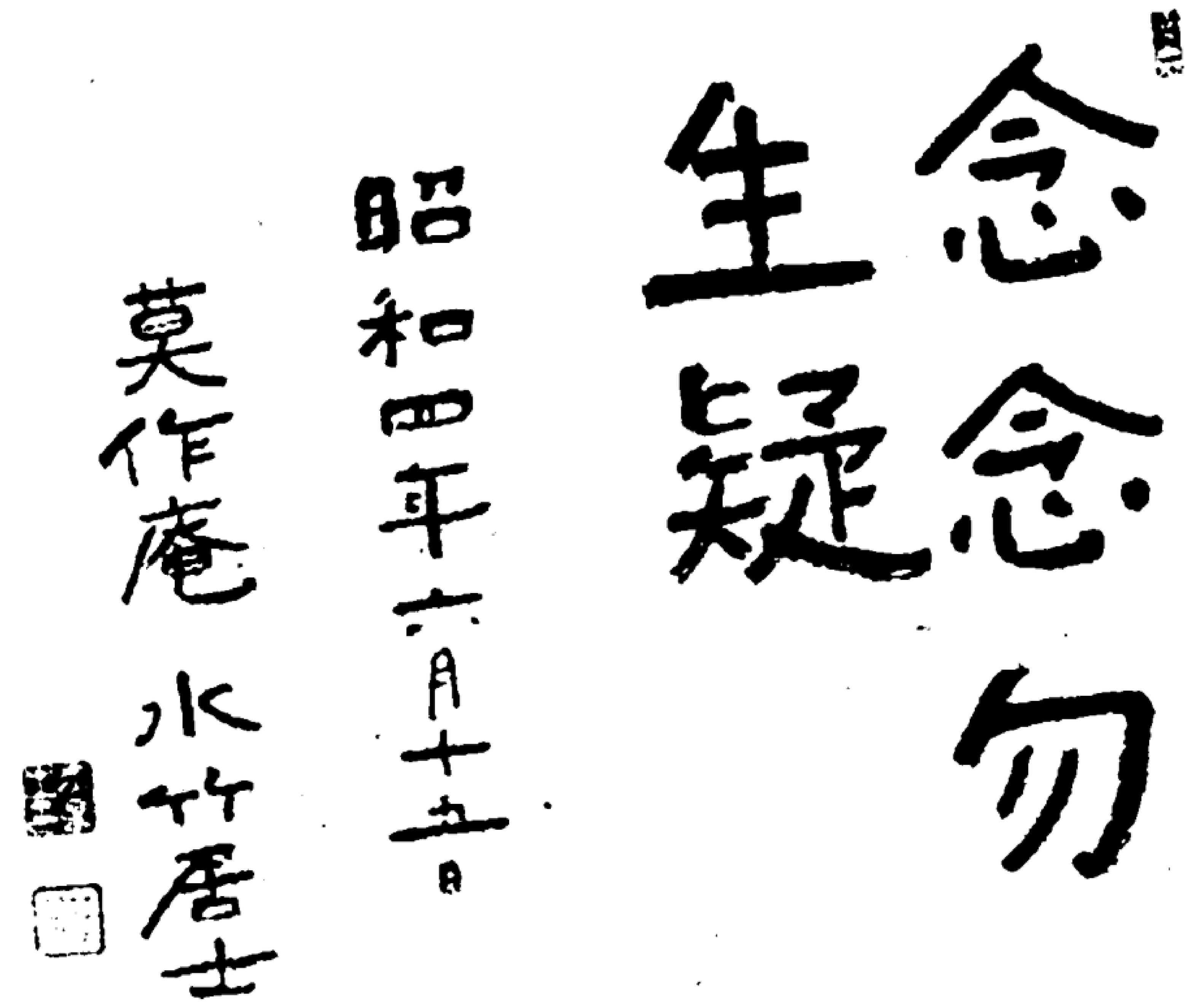
（坂本嘉治馬）



（森廣藏）



（膳道文書）



（赤星陸治）

岩倉具榮

今井五介

市島謙吉

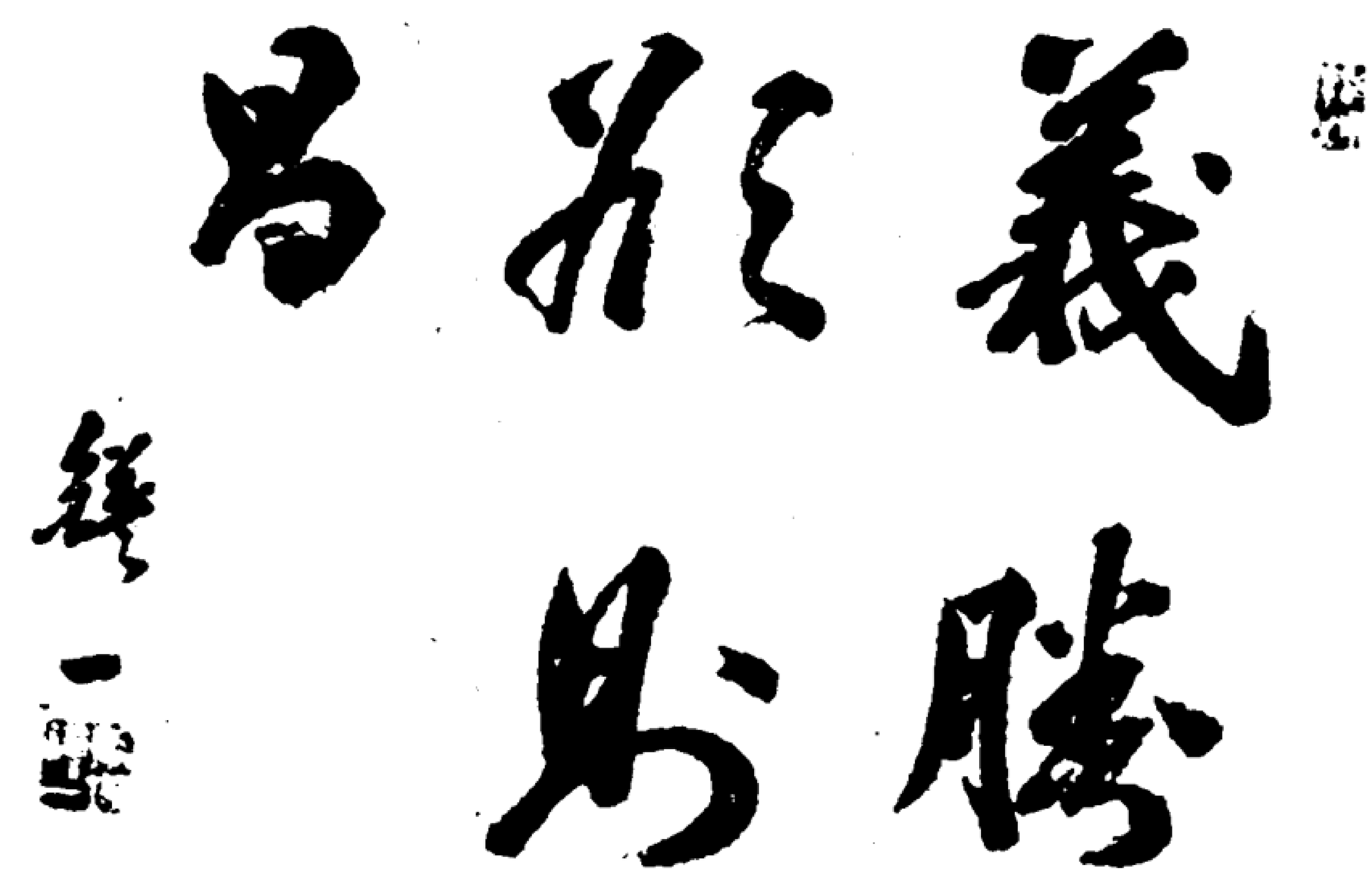
池尾芳藏

原富太郎

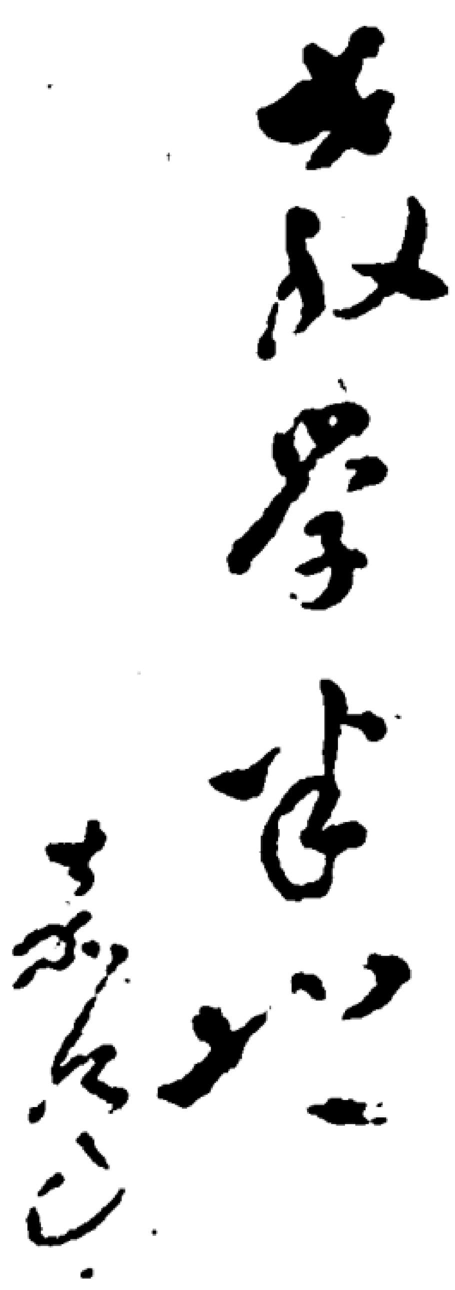
橋本圭三郎

堀切善次郎

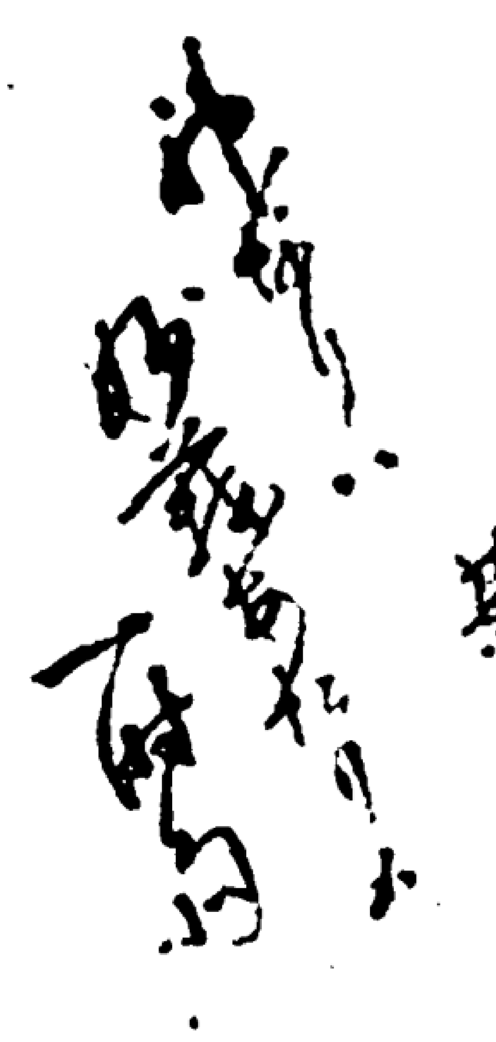
大橋新太郎



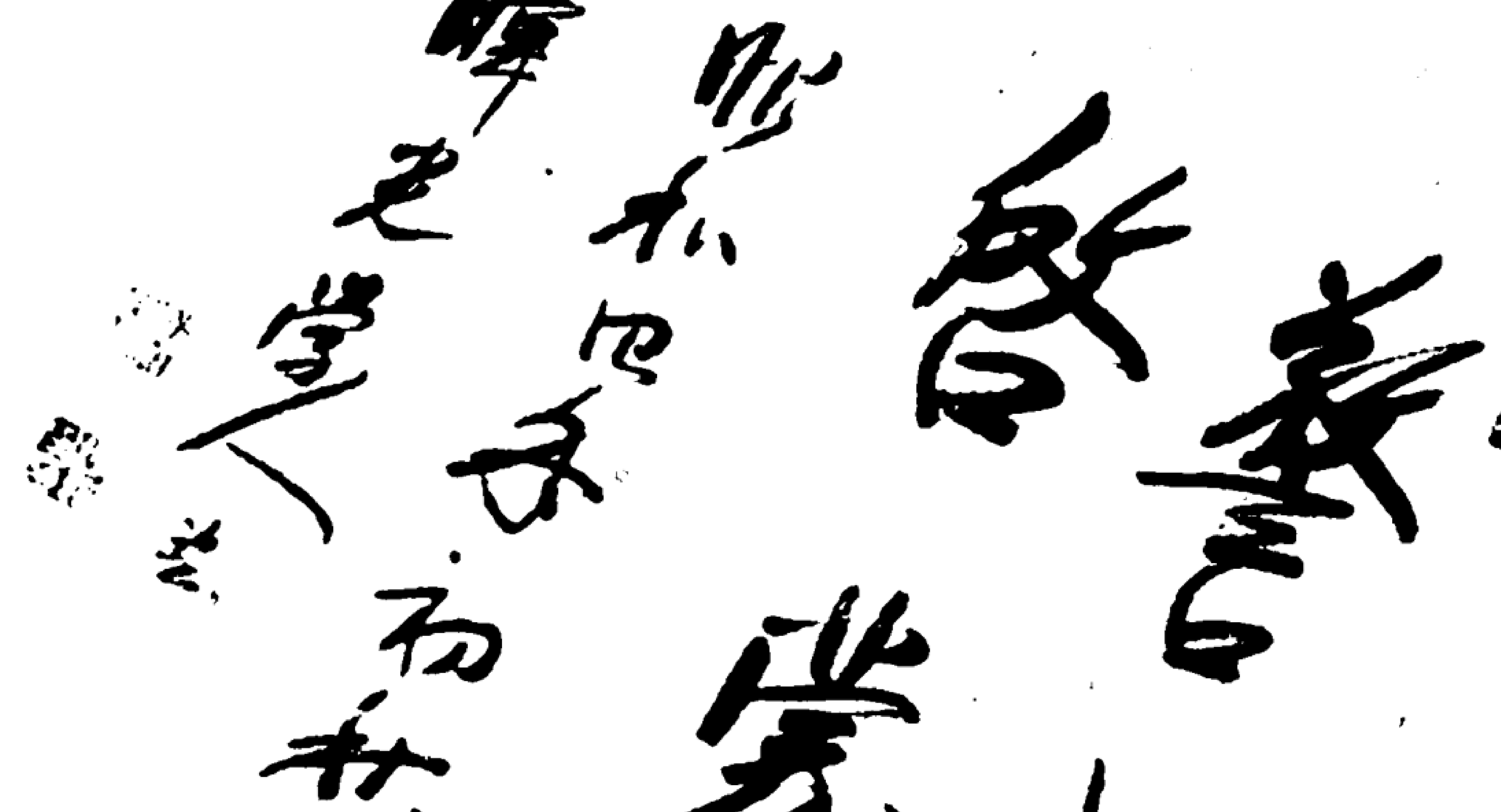
（馬場鍈一）



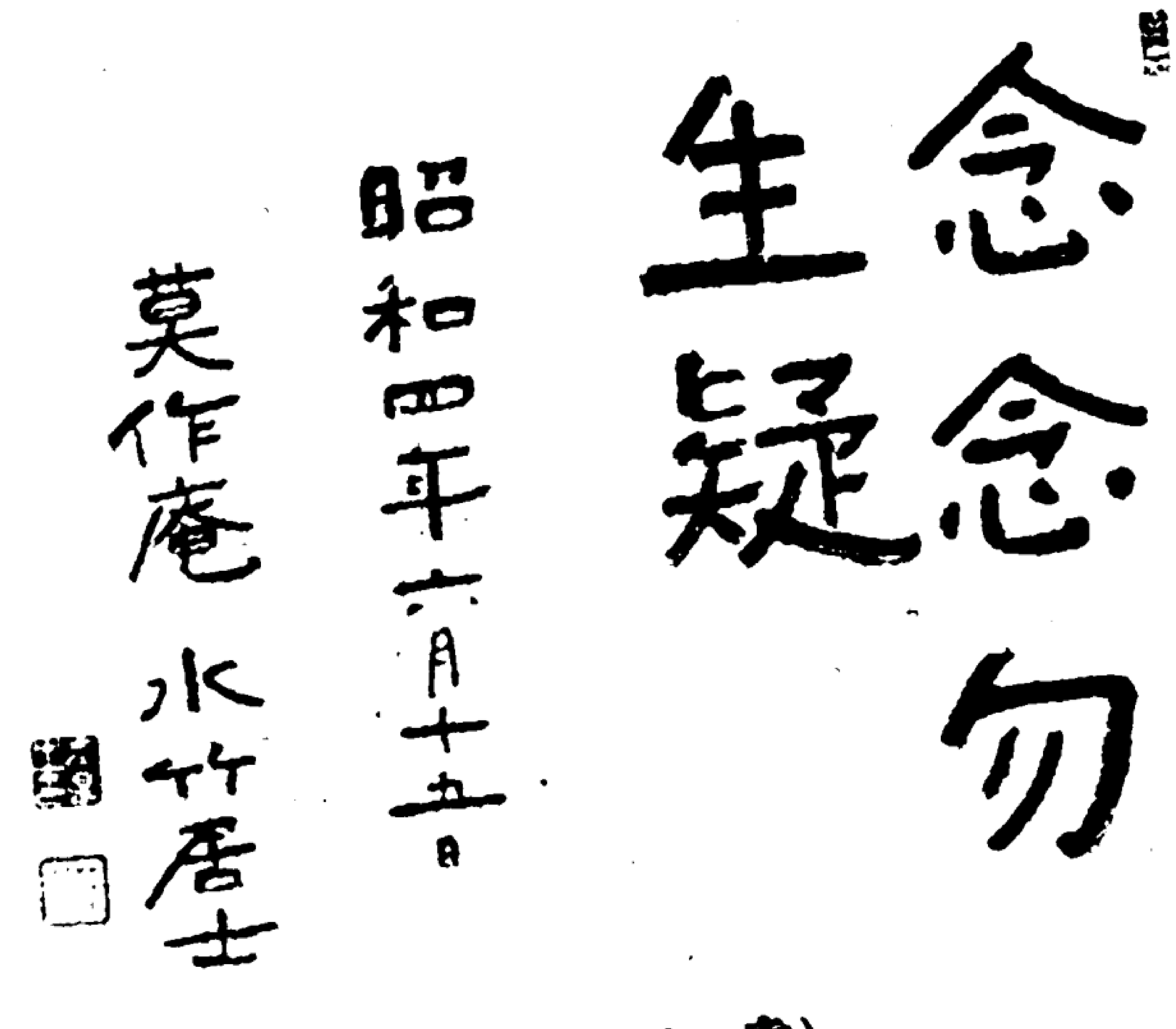
（坂本嘉治馬）



（森廣蔵）



（[illegible]文道[illegible]）



（赤星陸治）

岩倉具榮

今井五介

市島謙吉

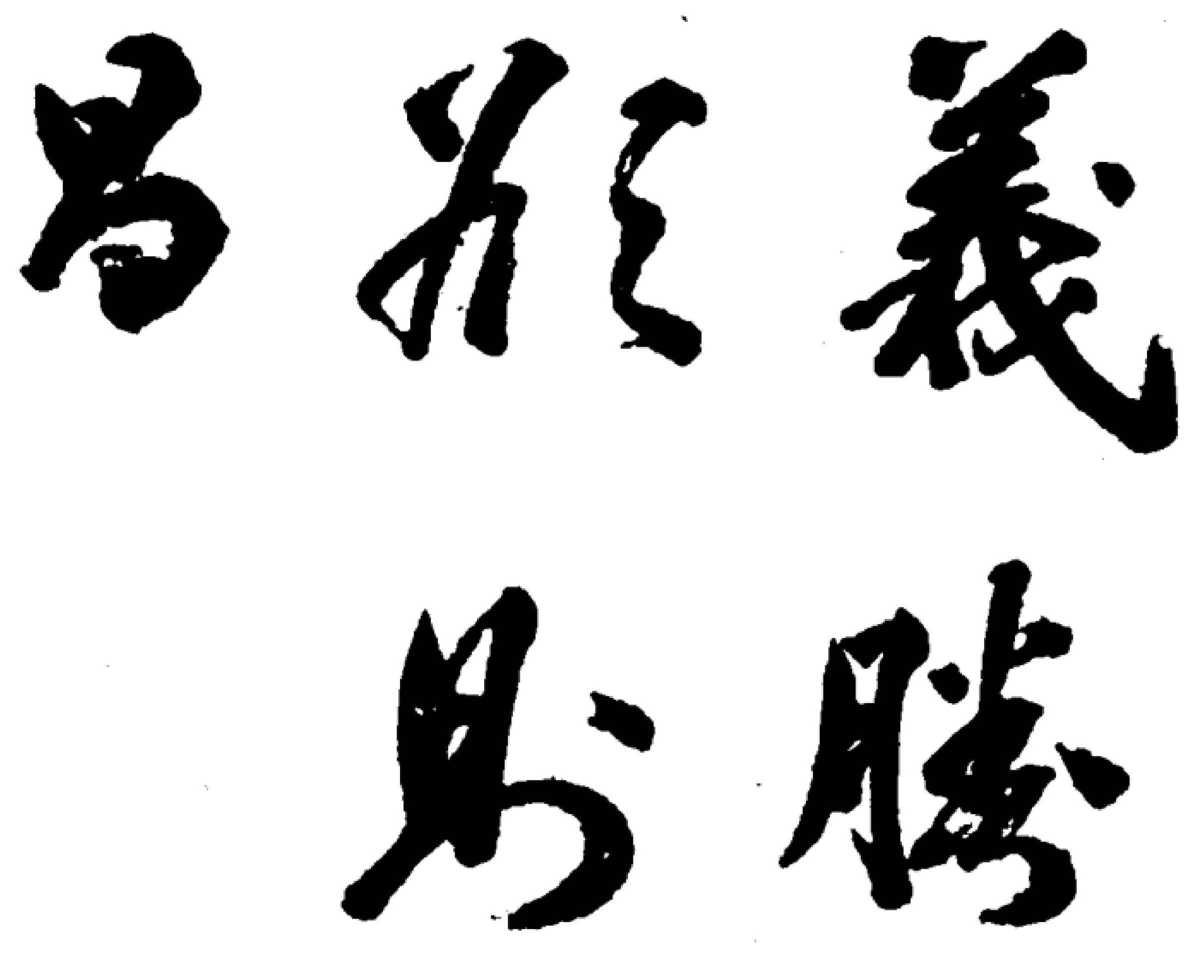
池尾芳藏

原脩次郎

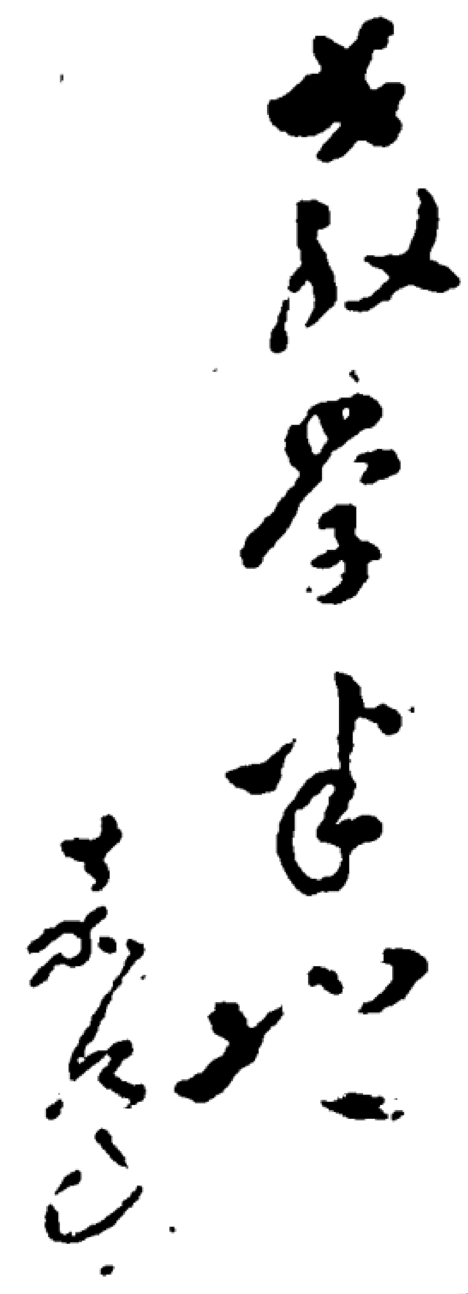
橋本圭三郎

堀切善次郎

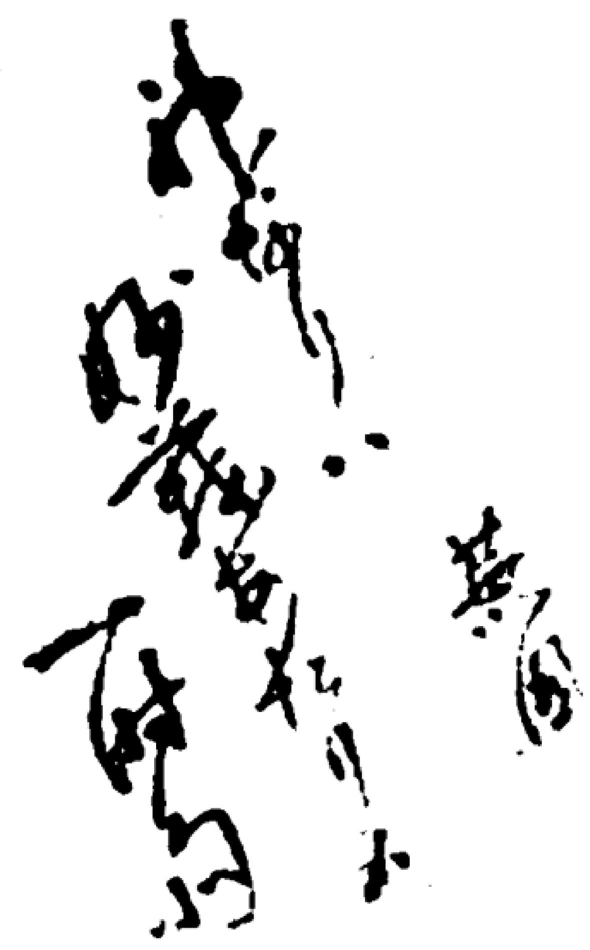
大橋光吉



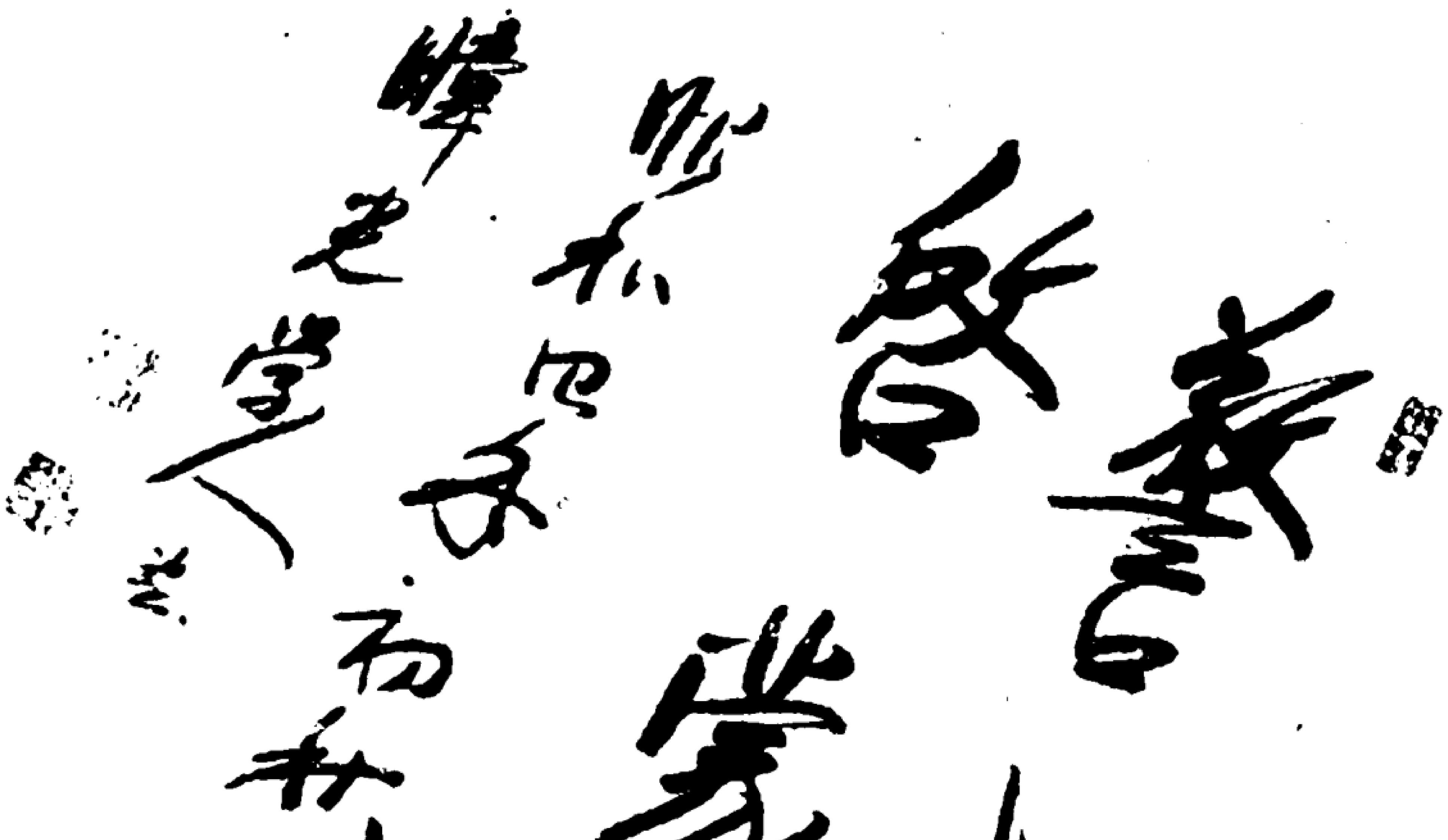
(馬場鍈一)



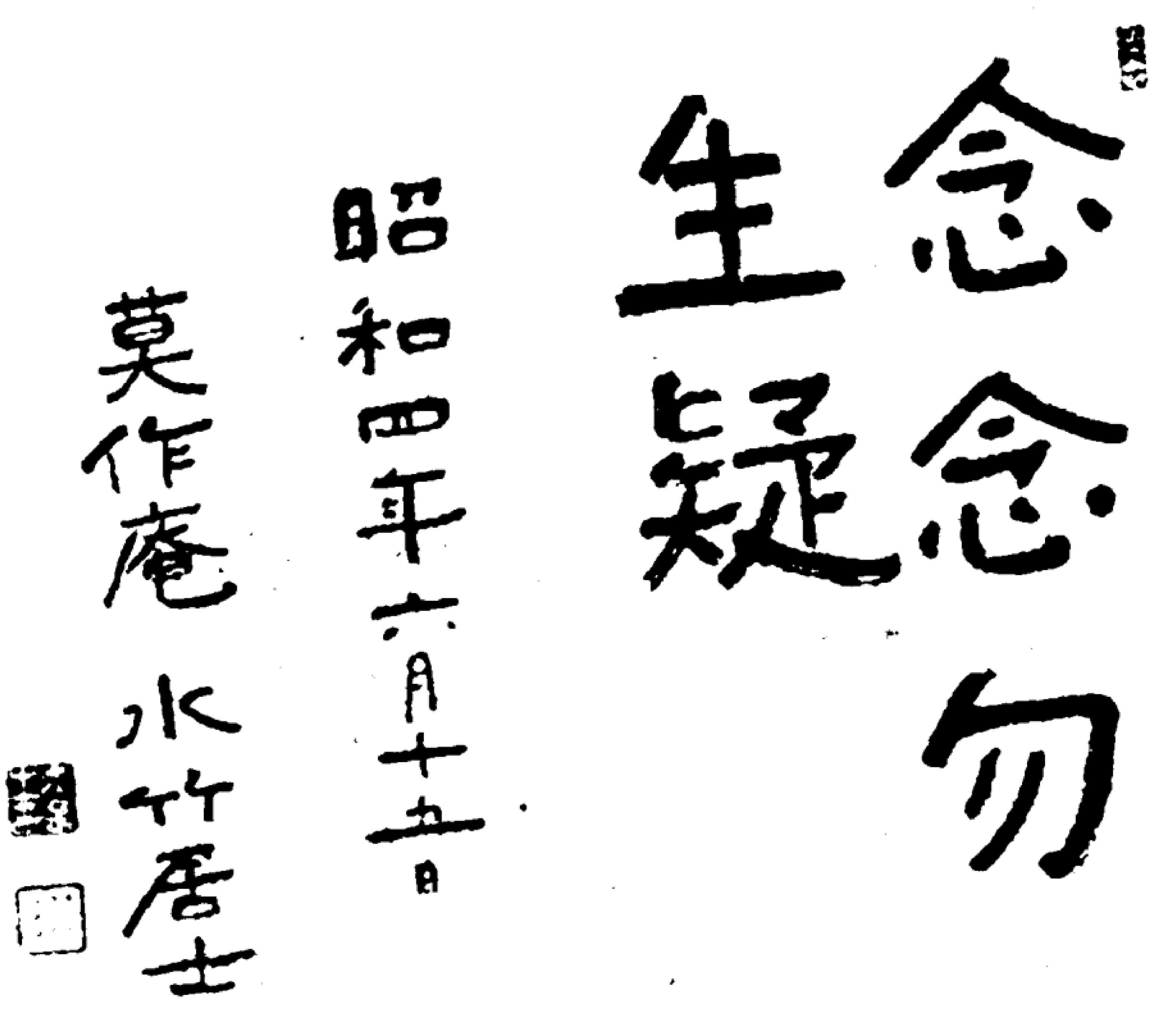
(坂本[illegible]治馬)



(森廣藏)



([illegible]道文[illegible])



(赤星陸治)

岩倉具栄

今井五介

市島謙吉

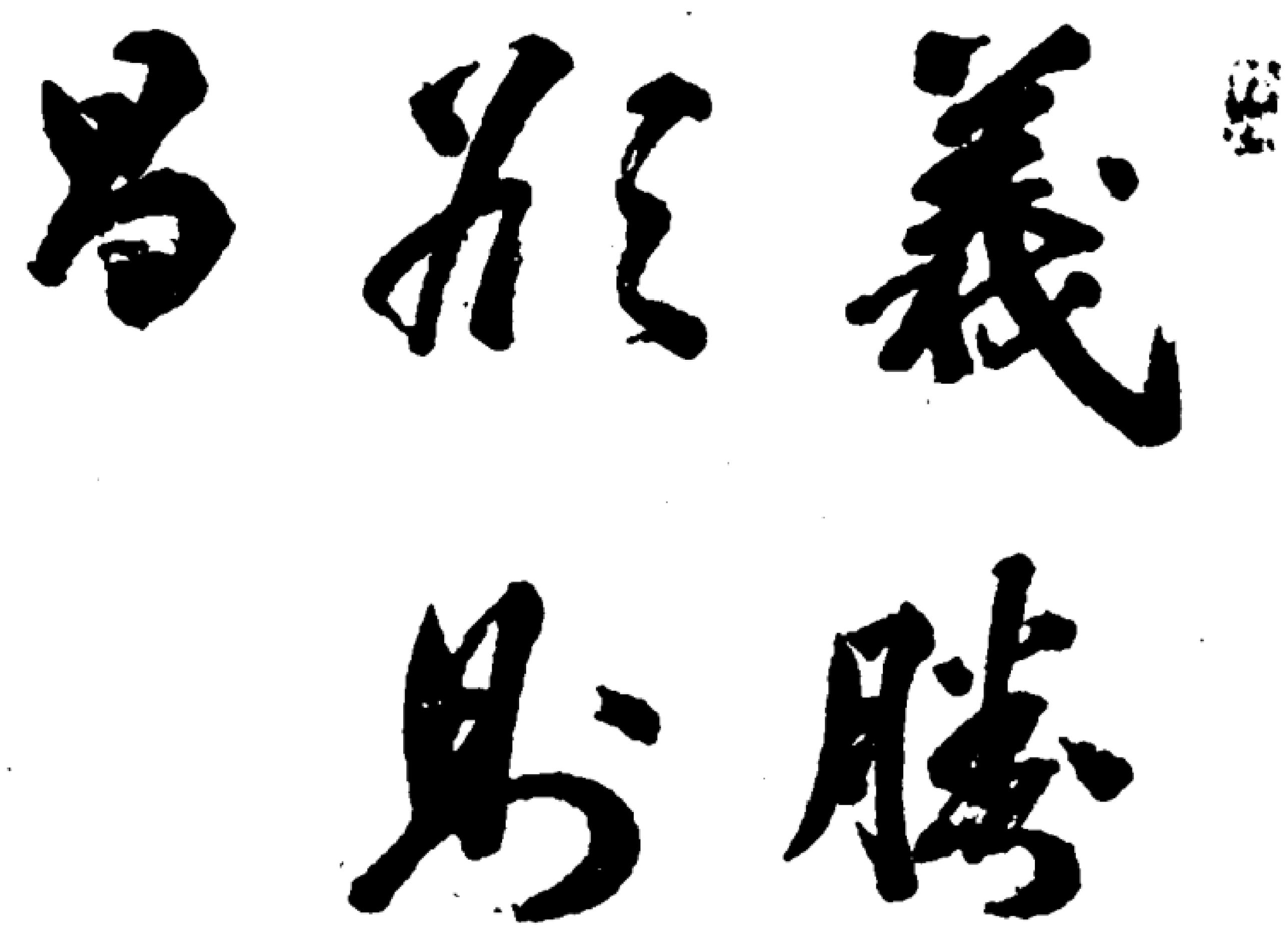
池尾芳蔵

原邦造

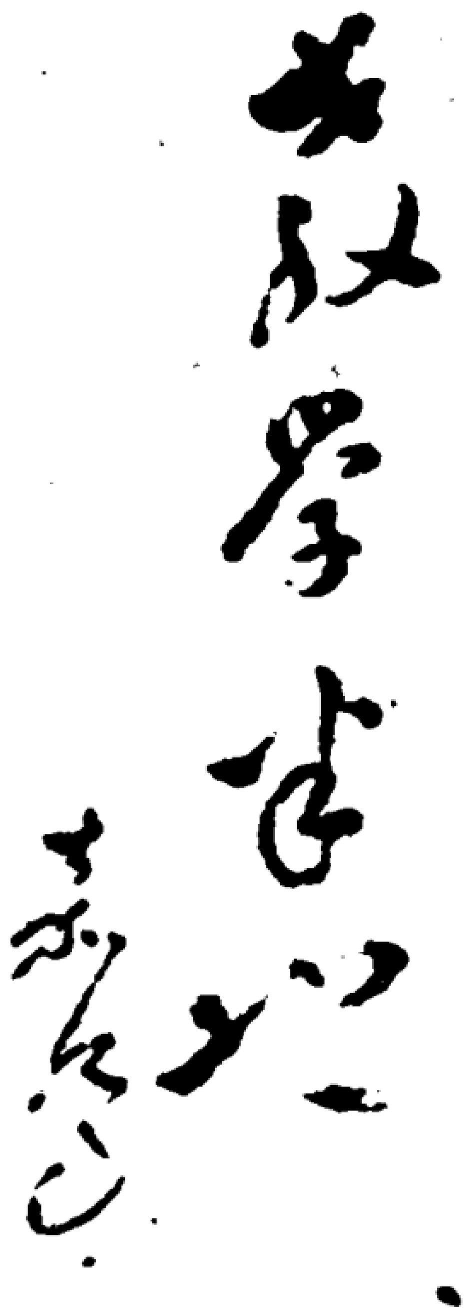
橋本圭三郎

堀切善次郎

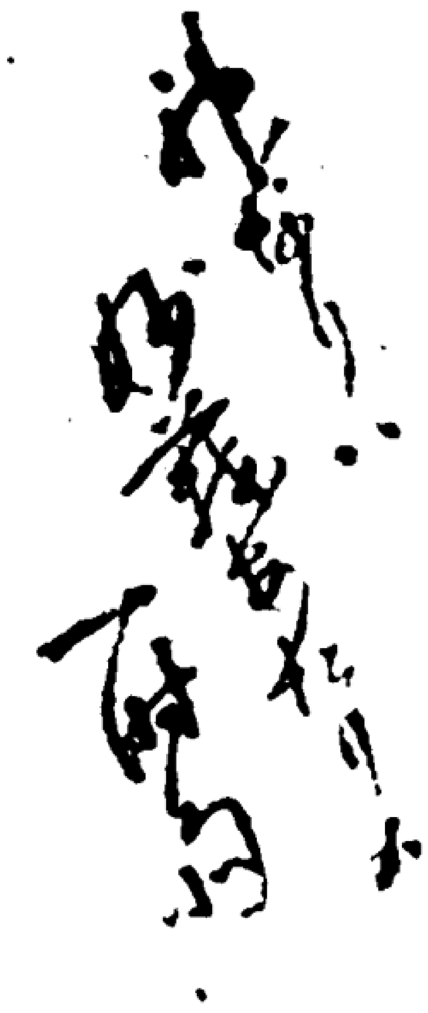
大橋光吉



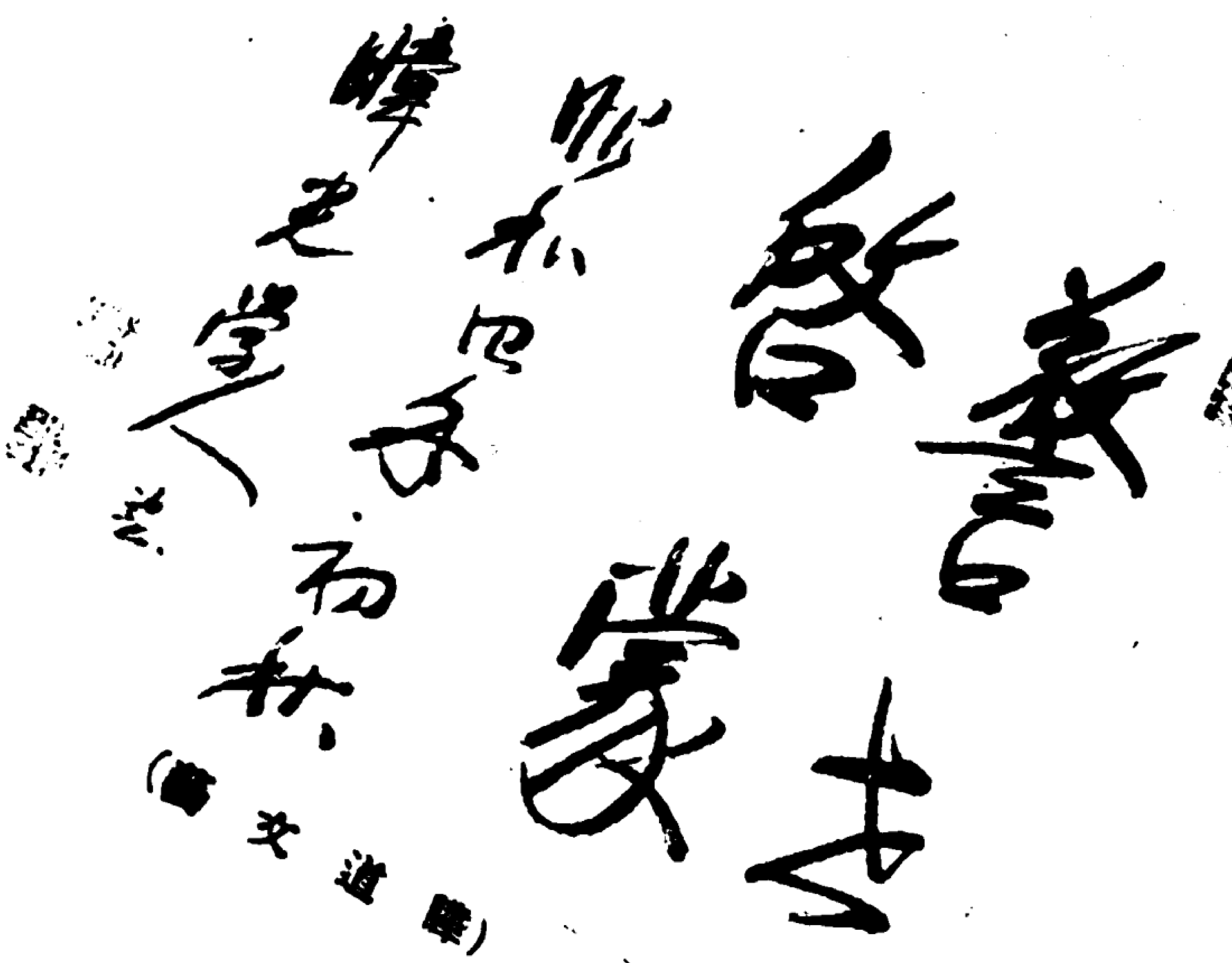
(馬場鍈一)



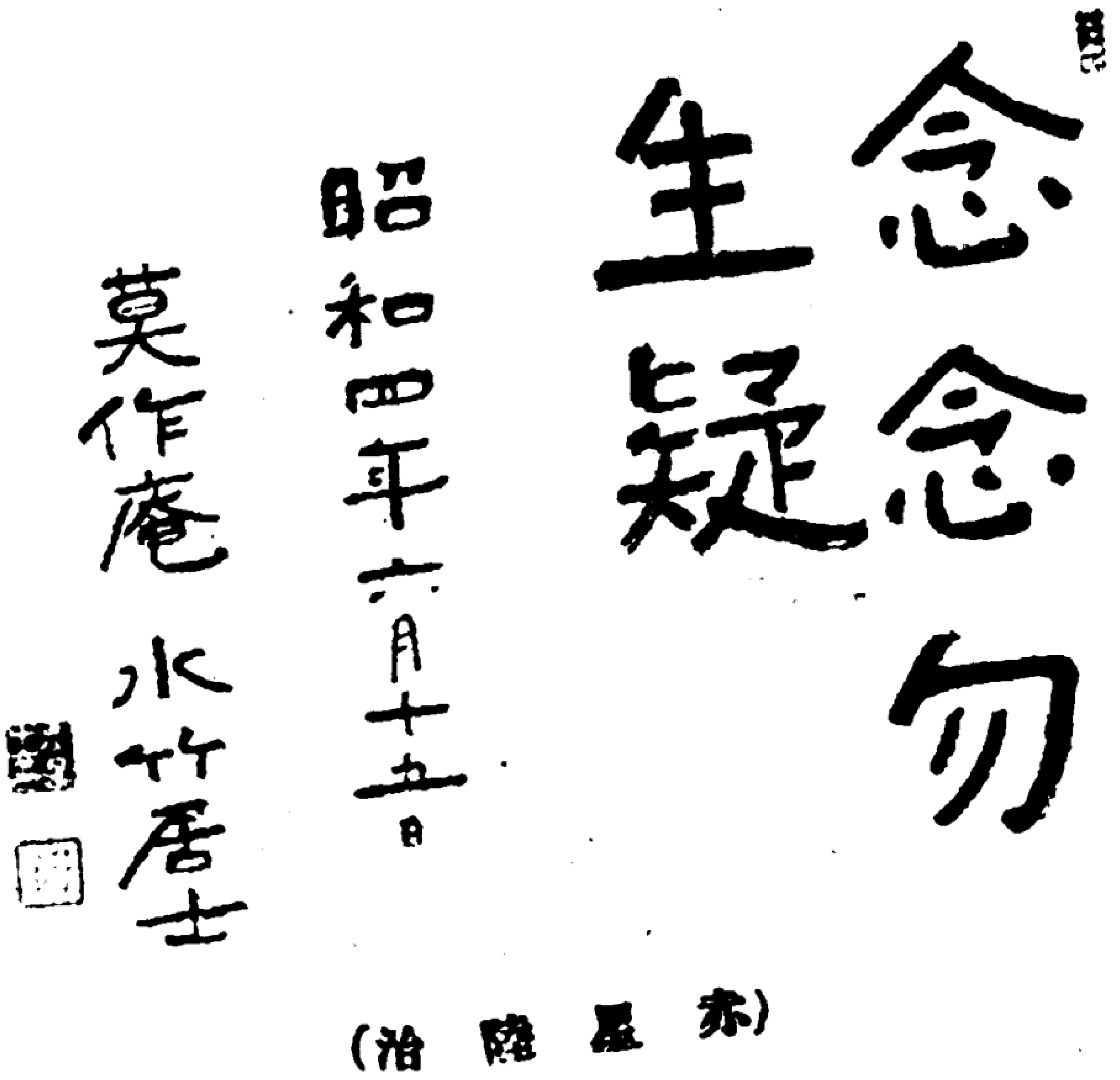
(坂本嘉治馬)



(森廣藏)



(藤道文雄)



(赤星陸治)

岩倉具榮　原嘉道


今井五介　橋本圭三郎

市島謙吉　堀切善次郎

池尾芳藏　大橋光吉

大川平三郎
小田久太郎
加藤小太郎
横出政五郎

四條照信
吉川中吉
竹内林太郎
内藤彦一


駒井久吉
光永筆

三木七郎

三島由雲

一匡阪又一郎

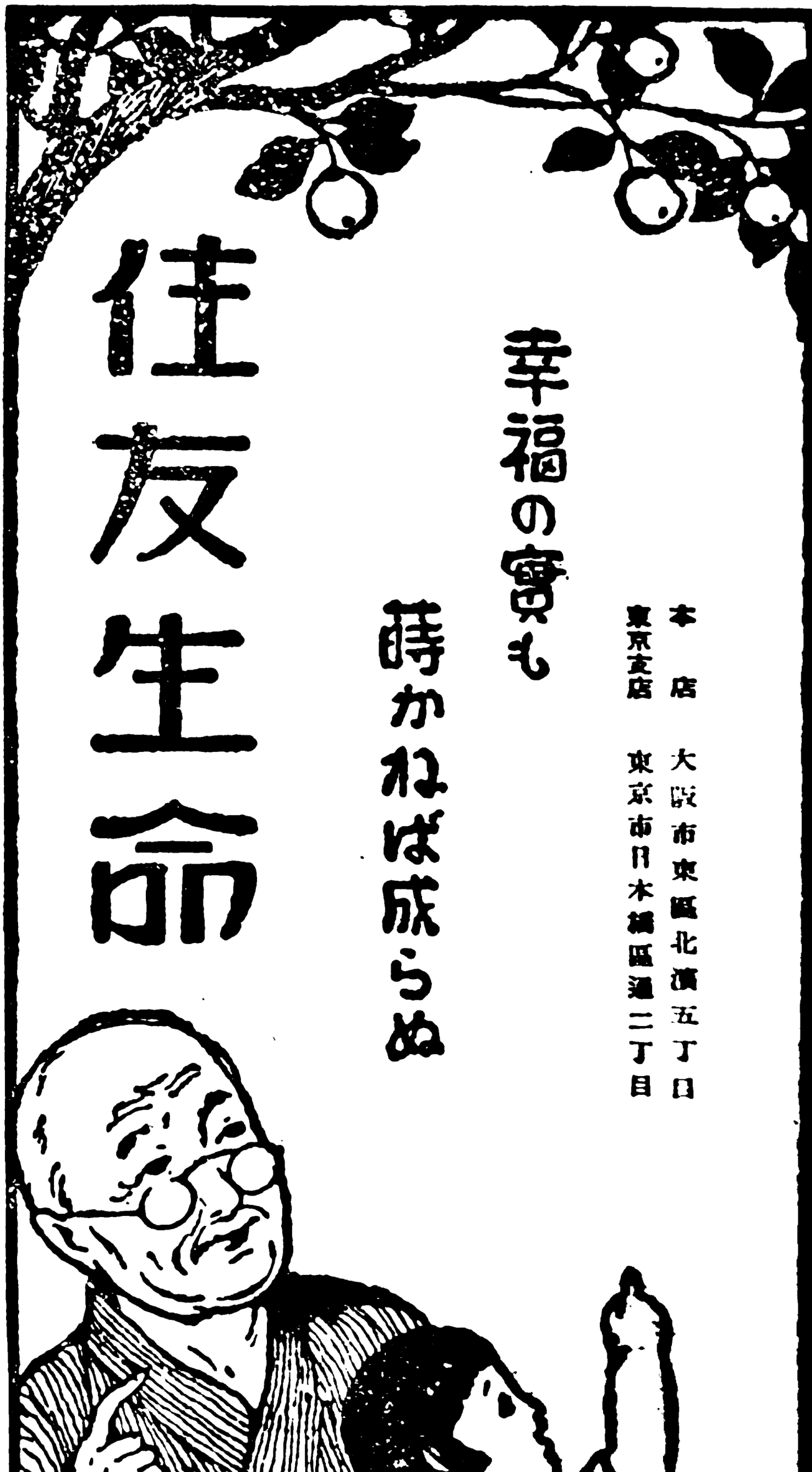
小村耕作

手塚少三文

梅山仁三郎

清三業和

藤波源右


本店　大阪市東區北濱五丁目
東京支店　東京市日本橋區通二丁目
幸福の實も
蒔かねば成らぬ
住友生命

ESTABLISHED
1893

Cable Address:
"IWASAKI"

Mitsubishi Goshi Kaisha

(MITSUBISHI COMPANY)

CAPITAL:—¥ 120,000,000 **HEAD OFFICE:—Marunouchi, Tokyo**

Partners: Baron KOYATA IWASAKI (President), Baron HISAYA IWASAKI

ESTATE DEPARTMENT (Controlling Estates and Buildings)

Cable Address:—"IWASAKILAD"

Mitsubishi Zosen Kabushiki Kaisha.

(Mitsubishi Shipbuilding & Engineering, Co., Ltd.)

Cable Address:—"IWASAKISIP"

Shipbuilders, Engine, Boiler & Machinery Makers.

CAPITAL:—¥ 50,000,000

Head Office: Marunouchi, Tokyo

Dockyards & Engine Works:—Nagasaki, Kobe, Hiroshima.

Arms Works:—Nagasaki.

Mitsubishi Seitetsu Kaisha, Ltd.

(Mitsubishi Iron & Steel Co., Ltd.)

Cable Address:—"IWASAKIRON"

Manufacturers of Iron and Steel.

CAPITAL:—¥ 25,000,000

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

Foundry:—Kenjiho (Chosen).

Mitsubishi Soko Kabushiki Kaisha.

(Mitsubishi Warehouse Co., Ltd.)

able Address:—"IWASAKISOK"

Landing, Shipping & Forwarding Agents, Stevedores, Wharfingers, Custom Brokers; Warehousemen.

CAPITAL:—¥ 10,000,000

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

Warehouses: Tokyo, Osaka, Kobe, Moji, Yokohama.

Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltd.

(Mitsubishi Trading Co., Ltd.)

Cable Address:—"IWASAKISAL, TOKYO"

Importers & Exporters, Manufacturers, Commission Merchants, Brokers, Ship Owners.

CAPITAL:—¥ 15,000,000

Head Office: Marunouchi, Tokyo

Branches & Agencies:—Handa, Kobe, Kure, Moji, Nagasaki, Nagoya, Osaka, Otaru, Sasebo, Yokohama, Berlin, Dairen, Hankow, Harbin, Hongkong, London, Lyons, New York, Paris, Seattle, Shanghai, Singapore, Soerabaya, Sydney, Tientsin, Tsingtao, Vladivostock, etc.

Mitsubishi Kogyo Kaisha, Ltd.

(Mitsubishi Mining Co., Ltd.)

Cable Address:—"IWASAKIMIN"

Producers of Coal, Metals & other Minerals.

CAPITAL:—¥ 100,000,000

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

Mines & Collieries:—Osaruzawa, Ikuno, Sado, Bibai, Takashima, Namazuta, ect.

Metallurgical Works, Refineries & Factories:—Osaka, Naoshima.

Coke Works:—Makiyama.

Mining & Metallurgical Laboratory:—Tokyo.

Branches & Agencies:—Yokohama, Moji, Wakamatsu, Nagasaki, Karatsu, Otaru, Hakodate, etc.

Mitsubishi Kaijo Kasai Hoken Kabushiki Kaisha.

(Mitsubishi Marine & Fire Insurance Co., Ltd.)

Cable Address:—"INSURER"

Underwriters for Marine, Fire, Transport & Automobile Insurance

CAPITAL:—¥ 5,000,000

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

Branches & Agencies:—Osaka, Kobe, London, New York, etc.

Mitsubishi Bank, Ltd.

Cable Address:—"IWASAKIBAK"

General Banking and Exchange Business.

CAPITAL:—¥ 10[illegible],0[illegible]0,000

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

BRANCHES:—Tokyo, Osaka, Kobe, Kyoto, Nagoya, Otaru, London, New York, Shanghai.

Mitsubishi Kokuki Kabushiki Kaisha, Ltd.

(Mitsubishi Aircraft Co., Ltd.)

Cable Add.:—"IWASAKIAIR TOKYO"

Manufacturers of Internal Combustion Engines, Aircrafts, Automobiles, etc.

CAPITAL:—¥ 50,00[illegible]

Head Office:—Marunouchi, Tokyo

Works:—Nagoya.

Mitsubishi Denki Kabushiki Kaisha.

(Mitsubishi Electrical Engineering Co., Ltd.)

Cable Address:—"IWASAKILEC TOKYO"

Manufacturers of Generators, Motors, Transformers & other Electrical Machinery.

CAPITAL:—¥ 15,000,000

Head Office:—Marunouchi Tokyo

Works:—Kobe, Nagoya, Nagasaki.

（本邦唯一の西洋史辭典刊行!! 西洋史の知識及常識用として必備の寶典）

最新刊

山上徳信著

最新西洋歴史辭典

菊判最上製美本 全壹冊五百頁箱入

正價金參圓九拾錢 送料廿七錢

西洋史一般に關する著者は世に多きも完全なる西洋歴史辭典に至つては之が本邦最初にして唯一のものである內容は普通西洋史教科書參考書並に一般高等參考研究書の中にある人名地名史的名辭は細大洩さず解說せるものであるこれを檢索すれば完全無二の辭典であり。之を第一頁より讀了すれば知識の整理となる等實に此一卷は凡百の參考書に勝る各受驗者研究者は勿論各學校圖書館の必備の要書としてすゝむ。

吉村勝治著 近世 **世界政治外交史論** 徳富蘇峰先生が推奬せる最近での名著識者の必讀を希ふ（最新刊）金參圓五拾錢 送料十八錢

大關増次郎 **カント研究** 壹千百餘頁の大册量から云ふても實から云ふても近來稀に見る出版（三版）金七圓八拾錢 送料廿七錢

日高瓊々彦 **國家に及ぼす宗教の害毒** 全宗教を否定せるするどき論文識者の一讀を希ふ（三版）金壹圓八拾錢 送料十二錢

植松安著 改訂 **古事記新釋** 著者は本書を說くに當つて神代の卷に最も力を注いだ事を一言して置く（拾五版）金貳圓五拾錢 送料十八錢

植松安著 註釋 **假名の日本書紀** 上卷下卷 貳冊揃 我國體の淵源を知り國民歸嚮の中心を說けり（三版）正價金七圓 送料廿七錢

吉澤義則 奥里將建著 詳註口譯 **萬葉集長歌全集** 長歌の全部を口譯し評釋を附し研究者に多大の便利を與ふ（最新刊）金參圓八拾錢 送料廿七錢

宇野哲人序 笹松彬雄著 **唐詩選詳解** 唐詩選絕好の註釋書出來大好評を博し五版六版亦々賣切增刷す（七版）金貳圓八拾錢 送料十八錢

大阪朝日記者 山名正太郎 思潮文獻 **日本自殺情死紀** 自殺史を綜れた思想史であり犯罪史話であり亦世相記である（忽三版）正價金貳圓 送料十八錢

山名正太郎 **政談演說仕方と聽き方** 實際物でなく眞面目な研究書開いた頁が直ぐ役立つ（五版）金壹圓五拾錢 送料六錢

東京市神田區西小川町二ノ三 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

記念の五百號を捧ぐるに際して

——(巻頭言)——

我が中央公論も四十有餘年の歳月を[illegible]、茲に記念すべき五百號を[illegible]ることゝなつた。[illegible]いへばさう短い時ではない。此の間の變遷も[illegible]事だつた。我[illegible]ものがあつた。其間ひとり我が中央公論[illegible]終始一貫[illegible]來つたのは、前社長並に編輯主任の努力もさる事ながら、主として本誌の眞摯な[illegible]と支持とを有たる讀者諸君の渝らざる愛顧の賜に外ならない。言ひ方は月並だが、本社は眞に心から十二分の感謝を以て常に此事を考へて居る。

併し乍ら我々は如何に讀者諸君の多年の眷顧を信頼するとは云へ、無爲にして、少くとも唯消極を墨守するだけを以て、漫然諸君の好意を贖はんとするものではない。諸君と我々のこの深き因緣も畢竟するに本社多年の努力と苦心との酬ひられた結果なるを思へば、今後益々意を鋭うして本誌の刷新向上に全力を傾倒するは、啻に諸君多年の愛顧に報ずる所以たるのみならず、又以て本誌の現代社會に占むる地位に應しき使命であり又責任であることを確信するものである。

斯くて我々はこゝに改めて諸君に宣言する。

第一に我が中央公論は常に進歩的日本の大本流に棹さし、正しき前途を見詰めつゝ、忠實なる國民指導の機關たることを期する。中央公論全誌面を貫くこの太い線は、從來と同じく、今後も益々讀者諸君の日常缺くべからざる心の糧として尊重さるるに相違ない。

次に我々は本誌が讀者の心のうちに、何時になつても、本誌を手にした事につき一點の悔をのこさしめざらんことを心掛けようと思ふ。輕佻なる流行を趁ひ讀者一時の感興に阿ねるが如きは、眞に讀者の良友たる所以ではない。雜誌に本當の精神的榮養價値を横溢せしむることは、當世の流行に非るが如くして而も最も努力せねばならぬ要點だと考へて居る。

されぱと云つて、假令一時的のものにもせよ、一世を風靡する特殊の新傾向に對し全く無關心たるも亦讀者に忠なる所以でないことは勿論だ。我々は固より世界と共に動き世界と共に進むものだ。清濁兩つ乍ら、我々の視野に入る限り、一々之が檢討を怠るべからざるは正に我々の任務である。唯問題は之に臨む態度如何に在る。我々は事實の正視と健全の批判とを諸手に提げて、今後最も勇敢に凡ゆる社會の事相に觸ることを辭せぬであらう。

一言にして云へば、高級雜誌としての本領を嚴格に保持しつゝ、飽かれず樂しまれつゝ、快調な僚友として今後も永く諸君に見へたいと期するのである。從來の讀者には分り切つた事であらうけれども、我々がこゝに故らに此宣言を公にする所以は、一つには又一層の公責を感じて今後益々倍感奮鬪せんが爲めに外ならない。

中央公論



今に即して生活の第一義を説く

田中王堂

第四十四年第十號
十月號
五百〇一號

わたくし共日本人は確かに近世文明人であるであらうか。わたくし共日本人は現に近世文明を生活して居るのであらうか。わが同胞の最大多数は（悲しいかな、彼等の中には、比較的に聡明であるがために、指導者を以て自任し、他任される人々をさへも含めて）わたくし共日本人は確かに近世文明人であり、現に近世文明を生活しつゝあると信じて居るのである。

然し、此れは一片の幻想である。一片の幻想の他、何物でもないのである。事實は、冷然、而かも、痛切に正しき意味

に於てわたくし共日本人はまだ近世文明人ではない、隨つて、まだ近世文明を生活して居らない、ことをわたくしは茲に斷言するのである。それでは、其の事實とは何んであるか。こゝには其等の中に就き、最も試驗的のものを一つ擧げただけで十分であらう。

今、わたくし共日本人は近世文明を生活することを強ひられて居るのみならず、進んでさうすることを欣求して居るに拘はらず、近世文明の成立と發展とに必須なるヴエヒクル、若しくは、機關としてわたくし共が日常之れが使用に日夜奔命して居るものは、其れが制度にしろ、構成にしろ、學說にしろ、乃至、いろ〳〵の新らしい運動にしろ、どれ一つとしてわたくし共の理想の發動に依つて創造されたものはなく、わたくし共の要求と力量とからの發言に依りて的確に改整され、改善されて行つて居るものはない。

此の國が近世文明に導入されてから既に七十年の歲月を經過した。その間、世界の態相と勢運とは幾變遷して居る。隨つて、わが國に輸入され、移植される事柄にも、大分に相違を來たして居る。然し、わたくし共が其等を理解する智見の質と、其等を取り扱ふ聰明の程度とに至つては、概して今猶ほ昨のごとしであると言つて差支へない。

若し近世文明の特徵の中の最優なるものは、其れを生活する民族、若しくは、國民である限り、自分の理想の發動に依りて奔放にあらゆる機關を創造し、其等が不便となり、不合理となつた場合には、何時でも自分の要求と力量とを標準として、勝手に、自由に其等を改整し、改善するところにあるならば、わが同胞は近世文明人でなく、彼等は近世文明を生活して居らないとわたくしが斷定しても、決して當を失した觀察ではないと思ふ。

このわたくしの觀察の眞實性を高揚する目的を以て、この機會に於て、わたくしは、多數の俗衆に取りては一つの矛盾語であらうが、極めて少數の有識者に取つては當然一つの自明理であらねばならぬわたくしの意見を提供する。其れは一

見したところ世を舉げて盲目的に習俗や好尙を歐米的にしようとして居るのは、わたくし共の生活がまだ十分に近世文明化されないからである、若し其れが十二分に近世文明化されるに至つたならば、更らに自覺的に其等は民族的にならねばならぬといふのである。つまり其れの由緒と產地とを一切問はず、永遠に互つて總べて善きもの、美しきものの發達を助け總べて惡しきもの、醜きもの、衰亡を急ぐのが近世文明の唯一の使命であるとするのがわたくしの意見である。若し事實さうであるとすると、輕佻にして卑淺なるこの風潮に對して、其れを近世文明の正當なるはたらきの結果と速了して、之れがために、近世文明を謳歌する者と、咒詛する者とは俱に反省するところがなければならない。

近年、世の謂ふところの指導者の間に國難なる言葉が頻りに皮相に、そして、輕薄に唱和される。わたくしの觀るところでは、其等の總べては決して國難などと稱せらるべき性質のものではない。然し、若しわたくし共の行動に依りて結果される狀態、若しくは、出來事の中で、恰當に國難なる名稱を附せらるべきものが一つでもあり得るならば、其れはわが同胞の最大多數が近世文明を生活するの能力を缺くに拘はらず、彼等は濫りに其れを生活することを憧憬し、眞實に於ては近世文明を生活して居らないに拘はらず、彼等は空しく其れを生活して居ると想像する一事であらねばならぬ。何故ならば、かういふことを續けて行つて、其れがわたくし共の生活の異なる側面を代表する統制と衝動と、方式と素材と、若しくは規則と出來事との間に扞格を生ぜしめず、隨つて、結局、わたくし共の生活全體の上に困憊と消耗とを齎らさしめないといふことは、獨り奇績のみが爲し得るところのものであるからである。

さうすると、たとひ刻下わたくし共の或る者は互ひに競うてどんな服裝を飾り、どんな流行を追ひ、どんな言語を操つり、どんな學說を誦し、どんな法制を案じ、そして、どんな運動に從事するとも、決してそんな走馬燈に等しき世相に眩惑さるゝことなく、事實、わたくし共日本人はまだ近世文明人ではなく、まだ近世文明を生活して居らないといふことを諦と會得して、何より先きに、正しき、そして、全き意味に於て近世文明人となり、近世文明を生活するの道を講ずるこ

とを以てわたくし共の最も急務と為さねばならぬ。

この七十年間、わたくし共日本人がわたくし共の生活を近世文明化しようと勞苦、努力して来たことは決して少くない。それにも拘はらず、さうして實現されたところのものは偽似のものであり、甚だしきは滑稽のものであつて、眞實のものでないとすると、わたくし共がわたくし共の生活を近世文明化しようとすることは駱駝を牽いて針の孔を通らうとするに等しき企てゞあらうか。わたくし共日本人は到底わたくし共の力にて近世文明を實現することが出來ない運命を永久に擔うて居るのであらうか。

先年物故したトレルチは當時世界に知れ渡つた歴史學の泰斗であつた。統一された世界歴史が可能であるか、否かの問題に關聯して、彼は「歐羅巴主義」なる意見を抱いて居たのであつた。今日歐羅巴及び亞米利加の主人公たる白晳人種と他の人種との間には先天的素質に於て到底一致すべからざる相違がある。この明白なる事由からして、歐羅巴の天地に發祥し、成長した文明の眞精神を理會して、其れの眞機能を運用することは獨り白晳人種に屬する歐米人に限られねばならぬ。今日、歐米の國民が亞細亞の民族や國民といろ〱に交際を結んで居ることは事實であるが、其等は悉とく單に歐羅巴人の政治上や經濟上の利害の考慮より來たるものである。兩種族の間の精神上の理會の融通といふが如きは、到底夢想することとすら不可能である。そこで、世界歴史の統一はどんなに擴大されても、終に白晳人種の主人公たる境域内だけのことである。此れが大體トレルチの「歐羅巴主義」の要旨である。

トレルチのこの「歐羅巴主義」は今日可成り忠實に教養ある歐米の紳士淑女一般の情操を代表して居るものであることは無論として、現に國際聯盟の仕事に携はつてそこに重要な役を演じて居る歐米の學者、政治家にして、微笑を洩らしながら内心其れに裏書きして居らない者が果して幾人あるであらうか。

言ふにも足らぬほどの貧弱にして、而かも、粗笨なる見聞に基づいて、わたくし共日本民族を含めて、亞細亞民族の上

に下したトレルチの輕率な判斷は姑らく不問に附することゝするも、今日まで近世文明の取り扱ひに對してわたくし共の示した醜體では、彼れの爲したのとは全然別の事由からではあるが、いやくながら彼の結論を認知せざるを得ないのをわたくしは甚だ遺憾とする者である。

然し、これまで近世文明に對してわたくし共の示した醜體はどうあつたにしても、わたくしは執拗にわたくし共日本人はわたくし共の先天的素質よりして、果して歐羅巴に發生し、そして、そこに成長した文明の、特に、其れの近世的樣式の眞精神を理會することも、又、其れの眞機能を運用することも出來ないのであるか、どうかの疑問の解決を追窮せねばならぬ。何故ならば、若しさうだとしたならば、わたくし共日本人が今後これまで地球の如何なる區分に於て建設された文明よりも、質に於て大いに異なり、光輝に於て遙かに優れた文明の建設をどんなに熱心に懷抱しても、其れが實現の手掛りとしては何物もなくなることゝて、折角のその賞讃すべき懷抱も一片の空中樓閣と化して了はなければならないからである。そして、其れは確かにプライドと勇敢とを生命とする一國民に取つては、到底忍ぶことの出來ない一大汚辱であらねばならぬ。

わたくし共はどうしてもこの窮地にあつて一條の活路を見出さねばならぬ。わたくし共はどうしたらよいか。わたくし共にどうすることが出來るか。

この際、わたくしが想起するのは『大凡そ人間の發する問にして、又、人間に依つて答へられないものゝ一つもある筈はない。否、答の半分は既に問の中に含まれて居る』といふエマソンの格言である。近世文明に對するわたくし共の措置の改善は其れが全然誤りであつたことを承認し、其の誤りの性質と由來とを篤く吟味することより始められねばならぬ。

わたくしの所見に隨へば、近世文明に對するわたくし共の措置の誤りの殆ど全部は、其れが一般的であつて、個性的でなく、圖式的であつて創造的でなかつた一事に歸すのである。この一事に其れの改善のヒントは見出だされ、そのヒント

に準據して、わたくし共は近世文明に對するわたくし共の情操と、思想と行動との一大轉向を圖らねばならぬ。

世人はよくシエクスピヤを實例として、大なる創造者はまた大なる借用者であるといふのである。然し、藝術にいふと借用者として始まつた者はどんなことをしても創造者になる筈はない。初めより創造者であつた者が、殘らず最後に至つて、創造者としての大を爲すのである。

若しわたくし共日本人にして眞に近世文明を生活しようとするならば、其れに對する正しき信條はたゞ一つしかあり得ない。

大膽に、然し、大公に近世文明の正當なる繼承者たることを自覺し、全體として其れが在るがまゝに從りと近世文明を把握し、自分の力量と要求とを標準として其れの誤謬を矯正し、其れの缺陷を充塡し、其れの不備を完成して、一層優れた種の文明の創造に努力する。

といふのが、卽ち、其れである。

實に物の道理は天上天下第一義に於ける實在としての近世文明は唯一つであつて、其れはわたくし共に依つて創造されわたくし共に依つて運用され、そして、わたくし共に依つて所有されるものに限られることをわたくし共に告示するのである。

わたくし共は世界の一自由民族である、一自由民族の面目にかけても、この新たに工夫された見地より、もう一度出直して近世文明を生活することを試みねばならぬ。そして、わたくし共は果して其れの先天的素質からして其の任に堪えざるや、否やを決定せねばならぬ。

然し、わたくし共はこの會心の、そして、光榮ある事業を始める前に、わたくし共は一つの準備を必要とする。それはこの事業の達成を妨げる無智と無方針とをわたくし共の身邊より排擊し、そして近世文明の性質と現狀とに對して明確な

る知識を蓄へ、近世文明を運用し、改造するわたくし共の態度に對して精英なる方針を持することである。

今、わたくしは此等の二つの事柄に就いてわが同胞に說明するところがなければならない。

わたくしは近世文明の性質と現狀とよりわたくしの說明を始める。

この地上に於て、太古より今日に至るまで、異なる民族は代はる〲異なる種の文明を建設したのであつた。榮枯盛衰の相異はあるが、現に存續するもの丶中の最も顯著なものだけを擧げても、歐羅巴文明がある、土耳古文明がある、印度文明がある、支那文明がある、そして、日本文明——賢明なる取扱ひ次第では、未來に於て世界と文化共和の中に異彩ある役目を滿たすことも出來ようと思はれる日本文明もある。固より、其等の異なる種の文明の間には一長一短あるを免がれない。然し、何んと言つても、今日までのところ、全體より見て最も優秀なのは歐羅巴文明であるとせねばならぬ。さうすると、いみじくも獨り天荒を破つて其れを創始した希臘民族にまで、人類の祝福者たる月桂冠は永く捧げられねばなるまい。

嘗て歐羅巴文明の特徴を概括し、合理主義の一語を以て其れを表現した一人の學者があつた。若しこの學者にして合理主義なる術語に依りて、雜然たる經驗の中に其れを組織する原理を發見し、其れに準據して生活を統制する知見と仕業とを意味するのであるならば、其れは可なり適切な見解であるとせねばならぬ。此の特徴あるがために、歐羅巴文明が他の種の文明に比して著しく獨異のものとなり、又、他の種の文明の上に長大なる支配力を振つて居る所以となつて居るのであるが、其れは全く希臘が永遠に其れの貴重なる遺産として歐羅巴民族の上に與へたところのものである。

天才的民族希臘人は夙に自然に關し、人生に關して其れの全組織の中に本質と非本質とを識別しようと努力し、そして驚くべき程度に纖細なる審美感と、驚くべき程度に深邃なる辯證力とに依りて學問と、藝術と、道德との根柢を建立したのであつた。經驗全體の中より本質と非本質とを鑑別することに關して、希臘人の天才のどんなものであつたかの一端を

知るのには、僅かに粗雑な測量術に過ぎなかつたものが、一度び希臘人の手に落つるや、忽ち、其れは[illegible]個の精妙なる科學に變化されたのでも十分である。

然し、希臘人は聰明叡智に於て古今に絶して居たが、傳統の保存者として當然保守的であり、宿命的であつた。隨つて、彼等はそこに發生し、沈澱した階級制度と、其れに分配された職業の差別を永久的のものとして肯定して居たのである。彼等の眼中には、一方には單に思索するだけの自由人の階級があり、他の一方には單に勞作するだけの奴隷の階級のあるのは天地の理法であつたのである。この見地からして、理論的に希臘人に取つては知識の役目と技藝の役目とは全然没交渉にまで隔離され、優等の活動たる知識の役目は不變なる實在の眞相を觀照することに止まり、極めて限られたる範圍に於て、極めて簡單なる方法に依つて自然を變更することが劣等なる技藝の役目とされたのであつた。

つまり、社會的制度に關する彼等の保守的見解に起因して、知識の役目と技藝の役目とを離隔して了つた結果として、進化と改造との觀念は全然希臘人の宇宙觀と人生觀とから排除されて居たのが事實の眞相である。アリストオトルの如き素材と形相との關係に關する彼の所説に於て、又、身體と精神との相關に關する彼の所説に於て、あのやうにまだ十分に基督教説の僻見を脱しなかつた近世の多くの哲學者よりも遙かに近世的の思想を有つて居たに拘はらず、矢張り、最高の種の實在は素材を全然超絶した純なる形相であり、最高の種の活動は、專ら活動のための活動たる知的活動であつたのである。

今日に至つても猶ほ何とも説明のつかぬ理由から、謂ふところの文藝復興期になつて歐羅巴人は希臘時代より引き継いで靜止を生活理想として來たのに反し、突如として活動を生活理想とすることになつたのである。これが抑も近世文明の核子であつて、近世文明に於て開展された、そして、現に開展されつゝある總べてのパノラマは文藝復興期に方つて人間が活動を生活理想として來た自然の結果に他ならないと言つてよい。

人間が既に活動的生活を彼の理想としながら、差し當り希臘文明の工夫した生活の道具を用ゐて其の理想を實現するといふことになると、何より先きに希臘文明に在つては全然沒交渉の程度に離隔された知識の役目と技藝の役目との間の障壁は撤せられて、人間の生活全體はこれまで知識の獲得に費やされた技藝を營む方法に應用されて、生活全體が知識であり、同時に技藝である單一なる活動に依りて管領されるといふことになる。『自然を支配しようとするならば、先づ、其れに事へなければならない』といふあの有名なベエコンの格言は、一句にして近世文明の初頭に於て急に變はつて來た人生觀を言ひ表して居るのである。『自然を支配するためには』とは技藝の役目を言ひ表はして居るのであつて、『自然に事へなければならない』とは知識の役目を言ひ表はして居るのである。

希臘文明の知識の役目はたゞ實在の眞相を觀照することにあつたが、近世文明になると、其れの役目は自然のはたらきを把捉して、其れに依つて人間の生活を改造することになつたのである。この結果は嚴密なる意味での、卽ち、近世的の意味での科學の成立である。

斯く變はつた人生觀の上に久しく中世紀を通して涵養された基督教の靈的感化と人道的精神との陶冶が附け加へられゝば、そこにわたくし共は近世文明の産出した制度や、藝術や、哲學や、社會運動の一切を有つことが出來るではないか。

近世文明は卓越して科學の文明である。宗教と、藝術と、科學とは三兄弟であつて、科學は彼等の末弟である。人間の幸福に對して宗教や、藝術の貢獻し得る力量は既に試驗ずみになつたと言つてよいが、其れに對して科學の貢獻し得る力量はまだ全然未知數に屬する。人間の生活を醇化し、靈化することに關して、これより先きどんな驚くべき仕業が科學に依つて爲されるか、實に逆睹すべからざるものがある。

科學が出現して以來、日は極めて淺い。それにも拘はらず、生活の側面にして其れの感化の影響を受けないものは一つも無いのである。隨つて、今日、尠なくとも近世文明國に限り、一般に經驗統一の方法として用ゐられて居るものは主と

じて實驗科學に於て用ゐられて居るもの、なるべく出來るだけ其の理想に副つて作られたるものである。

言ふまでもなく、わたくし共人間に取つて唯一の價値あるものはわたくし共が具さに體驗する享樂、若しくは、滿足だけである。されば、結局、わたくし共に取つての關心事は其れの質を善くし、其れの量を增し、其れのはたらきをして秩序あらしめることであらねばならぬ。然し、事實として、享樂、若しくは、滿足は時々刻々に生滅して、直接にはわたくし共の力ではどうにもならないものである。そこで其れを左右する術として、わたくし共に與へられて居るのは、たゞ其れが依存する其れの條件を把捉し、人間の力の及ぶ範圍に於て、其の條件の組合せを變改することだけである。條件を通して享樂、若しくは、滿足を支配するといふからには、其の條件は、必然に普遍的のものとなされてあらねばならない。この理由からして、近代人の意識の中には心的構造であるところの法則といふ觀念が強くはたらいて居るのである。略說すると、大體、かうしてわたくし共の直接經驗を支配する方法として、わたくし共が用ゐて居るものが科學的のもの、若しくは、其れに順じて作られたものである。これは他のあらゆる種の文明では夢想することさへも出來なかつたものであつて、獨り、近代文明が發明したものとして確かに其れの揩にするところのものである。そして、この方法の中には百の利益と光明とはあるが、一の災害も暗黑も含まれて居らない。

事實さうであるとすると、世間に汎く行はれて居るやうな、そして、其れに對して科學そのものではないが、其れの實驗者、支持者、乃至、被利益者等が其れの幾分かに對しては責任を有たなければならぬやうな、非難は何處から、どういふ理由で來たるのであるか。

眞の實在はまだ直接經驗と其れの條件とが分離されないで合體して居る一つの存在である。其れが直接經驗、及び、其れの條件といふやうに二つに見られるのは、必然に直接經驗の價値を變更する目的を以て分析のプロセスを經過した後の考へ方であるから、どちらも抽象であつて實在ではない。其等は孰れも纔かに實在を構成する一半だけに過ぎない。然

し、兎角、科學の信奉者はこのプロセスの意味を忘却して、(丁度多くの哲學者が主觀と客觀とを始めに於て獨立した二つの存在と誤解するやうに) 直接經驗と其れが依存する條件とを二つの獨立した存在と誤解し、さうして、其等として對峙せしめるのである。近世哲學に於て其れの重要なる一部門とされて居る認識論仕の事の一切は、たゞ觀念の上に於てのみ其れの存在が假定される此等二つの抽象を實在と見做した上、其等がどうして一致するかといふ架空的なる問題の解決に限られて居るのである。

此等の經驗統一のために觀念的に構成された此等二つの抽象が實行的興味の立場から、プレトオ、基督教以來歐米人の心の中に涵養され、磅礴して來た神學的、形而上學的の僻見に依つて、それぞれ色づけられることになると、其の結果はどんなに激越の調を帶びた論爭の、否、鬪爭の材料となるかは想像するに難くない。斯くして、近世文明に特有なるいろいろのイズムが發生することになる。經驗論對觀念論、唯物主義對唯神主義、享樂主義對神祕主義、個人主義對社會主義、そして、最後に、民族主義對國際主義の鬪爭は悉くさうした結果の產物である。特に惡いことには、此等の反目的思想、若しくは、主張が不統一に、斷片的に市井の人々の日常生活の內に植え付けられそこに更らにいろいろと雜糅され、混合されることになると、彼等が一事を考へ、一事を行うに方つても、何等調和されるところなく、否、折衷されるところもなく、生地のまゝで互ひに矛盾しながら、然し、其等の所有者たちは其の矛盾の事實を自覺せず、其の矛盾の由來も條理も理會することが出來ずに居ることである。今日、歐羅巴人の生活の彼等の感じ方の、考へ方の、行ひ方のあのやうにあくどく、騷々しく、それでゐて、內心不滿と懷疑とに滿たされて居る現象も其れの源頭に溯れば、其れは近世文明の主腦機關たる科學の性質の誤解と、其れの機能の誤用とより來たつて居ないと誰れが斷言し得るか。

勿論、歐米人と雖も、この狀態に滿足して居られる筈はない。彼等は彼等の中でも思慮あり、實力ある男女はいろ〳〵とこの惡習俗と惡風潮との改善を圖つて居る。そして、この運動の陣頭に立つて居る者は藝術家と哲學者であると言はね

ばならぬ。然し、歐米に於ては、今でも、猶ほ、そこに沈淪し、淘汰された宗教的信仰や、過去の觀念に邪魔をされゝ、容易に其の效が擧がるやうには見えない。

近世文明がわが國に移植された時に、其れは矛盾する解釋と主張とを伴なつた矛盾する要素を含めて紹介されたのであつた。そして、其れは舶來物の盲目的の謳歌者と、其れの反感的の輕蔑者とに依りて無理會に、たゞ焦眉の念に應するがために受け取られたのであつた。最大多數の世人（彼等の中に有識者、若しくは、指導者を以て自任し、他目される數をも含めて）より喧囂なる、然し、根柢なき非難に出遇ふことを覺悟したから、わたくしは近世文明に對するわが同胞の理會と力量とは今日に於ても其れが始めて移植された當時と大した相違はないとの斷定を再びこゝに繰り返さねばならぬ。

年に月に歐米との交通は頻繁となり、日に夜に其等に於て發生した文物と實利との採用と模倣とは巧緻になりながら、わが國の文明はこの通りに悲しむべく、哀れむべき狀態に在るとしたならば、其れを改善するには唯一つの態度しか有り得ない。其れは、さきに詳しく宣言の形を以て暗示して置いた通り、わたくし共の關はる限り、わたくし共だけが西洋文明の嫡子であり、正當なる後繼者である。されば、若しそこに多くの缺陷や、不備や、矛盾が見出だされゝば、其等を完備し、其等を匡正し、其等を調和するの責任はわたくし共の双肩に懸つて居ることを自覺し、わたくし共の要求と、力量と、環境とを標準として其の事を遂行するだけである。この覺悟を他にして、この悲しむべき、哀れむべき狀態を改善する道は一つもないとわたくしは確信する者である。

わが同胞の宜しく取るべき態度に關するわたくしのこの忠言が纔かに一片の放言に止まるか或ひは、深く物の道理に徹した明察の言であるかを判斷することは極めて少數なる有識者に任せられて居るのである。

こゝに至つてわたくしは徹底的にわたくし共の生活を近世文明化するために、言ひ換へれば、わたくし共の生活を以て現在の近世文明を超越するために、わたくし共がぜひとも用ゐなければならない利器と、其れを運用するに必要なる用心

とに就いて語るところがなければならない。

この論文を通じて、わたくしが絶えずわが同胞が正しく近世文明を生活することが出來るかどうかを一大事件とし、わが同胞にしてこの一事件に失敗するならば、わが同胞に取つて他に一つも救はれる道はないといふ口吻を洩して來たのを見て、わたくしも世間にありふれた盲目的なる西洋文明の嘆美者、隨喜者の一人でありはしないかとの疑ひを生じた者も讀者の中に或はないとも限らない。然し、わたくしは決して近世文明の嘆美者でも、隨喜者でもない。さうであるのにはわたくしは餘りに其れの不備と缺陷と矛盾とを知りすぎて居る。わたくしはたゞわが同胞が一日も早く總べての民族や國民に先立ちて其れを超越することを希望し、期待して居る考であつて、さうするには、わたくしの知見にして誤り無からしめば、それにはどうしても一度はあらゆる民族や國民がさうしなければならない通り、わが同胞も一度は賢く、そして、批判的に其れを通過しなければならないと思ふからである。

現在の近世文化を超越して一層美しき、善き、そして、全き文明をして出現せしむる唯一の方法は生活を統一する方便として科學者に依つて作られた人間の生活の異なる側面に關する二元觀であるから、この二元觀を完全に機能的に統一することを其れの必須なる手順としなければならない。然し、さうすることは歐米に於て現に試みられて居るやうに單に理論的のものよりも一層深く人間の生活に根ざし、そして、一層廣く、そして、強く其れの理論的と、審美的と、實行的との異なれる側面の要求を藝術的―實行的態度であらねばならぬ。

わが國に於て長き歷史に依つて養成され、訓練されて來たわたくしのいふところの象徵主義のカルチユアは最も優れてこの困難なる、然し光輝なる目的を達する世界に冠絕する利器であらねばならぬ。

辯證法的唯物論について

（土田杏村氏に答ふ）

河上肇

本誌八月號には土田杏村氏の「河上唯物論」なるものが載つてゐた。氏が斯かる文章を公けにされた目的はいづこに存するか知らないが、私はたゞ辯證法的唯物論に對する吾々の理解を深めるために役立つかぎりにおいて、こゝにそれについての若干の所見を述べる。

一、

氏の文章の第一節は「河上氏の存在形態の辯證法的批判」と題する。――因にいふ、氏は「辯證法」を「辨證法」としてゐられる。氏の言はれるところによれば、『辨證法なる語をマルキシストは一般に辯證法と書くけれども、これは誤字であるから、私は……すべて辨證法の文字を取る。すべて河上氏の諒恕を乞ひたい』とのことである。だがベンシヨウホウを辯證法と書くのは、マルキシストに限つたわけでもない。「岩波哲學辭典」を開けて見ると、「本來ディアレクティークなる語は、會話の技術・辯論の方法を意味した」云々との書き出しで、それには辯證法の文字が用ひられてゐる。もしディアレクティークなる言葉の由來が此の如くであれば、辨證法と書くよりも辯證法と書く方が却てこの言葉の由來に緣をもつことになるかも知れない。その上、辯と辨とは、もと言と刀との相違があるだけで、どちらにも分析判別の意味があることは、支那人の說明に「辯判別也、其字從言或從刂」とある如くである。辯證法は誤字であると云つて、特にこれを斥けるほどの必要はあるまい。またたとひもとは誤字であつたにしても、今日の如く大多數の人々がそれを慣用することになれば、（現に氏の論文の前に横たはつてゐる杉森孝次郎氏の論文にも、辯證法と書いてあつて、辨證法とは書

いてない)、それこそ辯證法的轉化によつて誤字はその反對物たる正字に轉化したのである。だから私は失禮ながら、依然として『すべて辯證法の文字を取る、敢て土田氏の諒恕をこひたい』。

さて第一節の「河上氏の存在形態の辯證法的批判」なるものは、土田式『唯物辯證法』によつて、河上の思想發展の過程――過去における若干の發展および將來における發展の可能性の限度――を論じられたものであるが、それを見ると、この問題は全く河上のがまぐちの觀察によつて判斷されうるものの如くである。例へば氏は言はれる『大學における氏(河上)の講義が一年每に純粹のマルキシズムに近づかしめられ、最後には全くマルクス學の祖述となつたことも、……大學教授としての氏の地位が進められ、京大經濟學部の重鎭としてもはや他の教授に氣兼ねをしないでよい時に達したことの結果と見なければならない』。どうしてさう見なければならないか、私には合點がゆかぬ。しかし『教授としての地位が進められ』といふのは、月給が段々上がつた上に、恩給年限にも達したことを、意味するのかも知れない。それで場合によつては免職になつても、米代だけはあるといふ安心から、『他の教授に氣兼ねをしなく』なり、何程か『純粹のマルキシズムへ近づく』ことができた、といふのかも知れない。大學をやめた後の河上が、マルキシストとしてモノにたらぬのも、彼れのがまぐちの調子にあるらしい。そこで土田氏は河上の收入源を問題とされる。氏はいふ、『河上氏は今日……國家より恩給を受け取つてゐられるかどうかを私は知らない。しかし云々』。『河上氏が今日氏の謂はゆる文筆勞働によつて得られる報酬が普通熟練勞働者の勞働賃銀に比較してそれの幾千倍であるかを私は知らない。しかし云々』。かくて問題は飽くまでもがまぐちの内に横たはるのである。彼れのがまぐちへ流れ込む貨幣が、國家からの俸給または恩給といふ形態をとるかぎり、あるひはまた資本家的出版會社が會社の利益を講ずるために買ひ取るところの・彼れの文筆勞働の生産物に對する原稿料の形態をとるかぎり、彼れは純粹のマルキシストになりえない。『右の如くにして河上氏の今日の地位はまた依然として大いなる矛盾を含むものである。この矛盾が成熟してその地位を爆發せしめるまでは、河上氏の思想もまた純粹のマルキシストとして成熟したものであるといふことができない』。こういふのが土田氏の意見である。

だが、今日の社會において、國家または資本家から貨幣を受取らずして、吾々はどうして生活してゆけるのであらうか? 私が假に肉體的勞働者であるとしても、私は私の資本家から賃銀を貰ふより外に仕方がない。しかし賃銀を貰つて働くかぎり、私

は私の資本家のために[illegible]勞働を搾取させる。そしてこの[illegible]勞働こそは、正に資本家階級の懐にはいる利潤の唯一の源泉なのである。それとも私が失業してゐれば、濱口内閣は否應もなく計畫に着手するであらう失業救濟のための土木事業にでも雇はれなければならぬが、悲しいかな、この場合には又た、私の受取る貨幣は國庫から出る。かく考へると、私は乞食にでもならなければ『純粹のマルキシストとして成熟したもの』になりえないかの如くであるが、これはまことに心細きかぎりである。

ところで土田氏自身は、ちやんと唯物辯證法を心得てゐられるらしいが、なんと幸運な人であらう。失禮ながら敢て問ふ、氏のがまぐちには、どういふところから、お金がはいり込むのでありますか？

私は以上のやうに、人の思想をがまぐちの規準において批判する方法を、『土田式唯物辯證法』と名づける。それはもちろん、マルクス主義の辯證法的唯物論と、似ても似つかぬものである。例へば、エンゲルスは、『事實上世界體系に關するあらゆる思想的映像は、客體的には社會狀態によつて・主體的にはその創設者の肉體的および精神的構成によつて制限されてをり、且ついつでもさうである』といつてゐる（『反デューリング論』、ドイツ本、二四頁）。彼れはまた、ヘーゲルが人類社會の發展過程の内的法則[illegible]時代における最も博識な[illegible]第一には彼れ自身の智識の範圍に必然的に制限されてゐるといふことによつて制限され、第二には彼れの時代の智識および見解が同じくその範圍と深さとにおいて局限されてゐるといふことによつて制限された。だがなほその上に第三の理由がある。すなはちヘーゲルは觀念論者であつた、云々』と言つてゐる（同上、九頁）。この場合注意すべきことは、或る個人の思想が一定の形態をもつた理由を說明するにあたり、エンゲルスはいつでも當該個人がそのもとに住んでゐた『時代』または『社會狀態』を觀察することを、決して忘れないでゐるといふことである。個別を知るためには、吾々はもちろん、それを自然的な・もしくは歷史的な・聯關から抽き出して、先づそのものだけについて研究せねばならぬが、しかし如何なる物も決して孤立的に存在してゐるのでないから、例へば或る個人を觀察するにあたつても、吾々は當該個人の肉體的および精神的條件のみならず、それらと同時に、彼れがそのもとに住むところの社會——社會狀態の變動——を見なければならぬ。かゝる關聯を無視するところにこそ、形而上學的な・非辯證法的な・考へ方の缺陷が横たはるのである。世界大戰以後の日本におけるマルクス主義的・

もしくは反マルクス主義的・思想の推移を、かゝる推移がそのもとに行はれたところの社會狀勢の推移・なかんづく階級闘爭の激化・との聯關において見ることを、思ひも染めないやうな觀察の仕方が、なんで唯物論的辯證法であらうぞ。或る個人がその生活の資源を如何にして得てゐるかといふことは、もちろんその個人の肉體的精神的構成を規定する主なるエレメントの一つではある。だが、それぱかりを問題としてそれ以外のことを見えざるものは、土田式唯物辯證法であり、がまぐち的辯證法である。それは實際においては、たかぐ\問題の一面を說明しうるにすぎない。試に見よ、もしも或る個人の『大學教授としての地位が進められ、もはや他の教授に氣兼ねをしないでよい時に達したことの結果』として、その人の講義が必然的に『純粹のマルキシズムに近づく』のであるならば、久しき以前から斯かる地位にゐられるであらうところの福田・小泉・土方・高田、等々の諸教授は、何故に今もなほ、あのやうな流儀の講義をしてゐられるのであるか?

麥の種子からでなくては麥はできない。だがたとひ麥粒でも適度な濕氣と熱とをもつた土地の上へまかれなければ、謂はゆる否定の否定によつて自己を數百倍に増加することはできない。麥粒はそれ自身のうちに矛盾を含む。だが冷藏庫のなかでは長きにわたつてその現狀を保つであらう。

二、

土田氏の論文の第二節は『河上氏の唯物辯證法の理解批判』と題する。『唯物辯證法に對する氏(河上)の理解には、なほ多大の未成熟要素が含まれてゐると考へる』此の如くに土田氏は考へる。河上自身もまた左樣に考へる。だがこゝでの問題は、土田氏が前記の如く考へられる理由の當否如何である。私はそれを吟味するために、氏の見解に對し何程かの程度において私の見解を對立せしめねばならぬであらう。もしそれによつて消極的な批評のうちに何程か積極的な敍述を含ますことができたならば、私の目的は達せられたといふものである。

土田氏は六ヶ條の疑問を提出してゐられる。それについて簡單に答へておかう。

一、私は曾て拙稿『第二貧乏物語』の第一回目において次ぎの如く書いた。

「社會の變動は、人間がそれを意識すると否とに關係なく、それを希望するや否やに係はりなく、むしろ彼等の意識せぬうちに、多くの場合には彼等の意志に反して、實現される。そして、如何なる社會的諸關係が結ばれたかは、事後になつて、しかも

極めておぼろげに、人々の意識に反映するにすぎない。……世界經濟のなかにおける個々の各生産者は、生産技術の上にかく／＼の變化を齎らしたことを、意識してをり、各々の商品所有者は、彼れがかく／＼の生産物を他と交換したことを、意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在（人々の間に結ばれる社會的諸關係の全體）を變化することを、意識してはゐない。……彼等は自分たちが一體どういふ社會に住んでをり、その社會がどう動いてゐるかについて、大體の筋道すら心得ずに生きてゐる。

『人間がその上に住んでゐる地球は、人間が頭のなかから考へ出したものではない。それは人間が一定のプランに基づいて構成したものではない。人間の頭はもちろんのこと、人間そのものの乃至その他の生物もまだ存在してゐなかつた頃から、地球はすでに存在してゐたのである。それは人間の意識から獨立に存在してゐる。そして人間がそれを信じようと意識しようと否とに係らず、地球は絶えず太陽の周りを廻つてをり、また人間がそれを豫期しようと希望しようと否とに係らず、自身の内部で絶えず運動を（例へば地震といふが如き運動を）起してゐる。これまでのやうに、人間が彼等自身の社會關係を意識的に統制することができず、むしろ逆にかゝる社會關係の制御のもとに無[illegible][illegible]この地球に對する人[illegible]かくて現代社會の改造は、[illegible]地球の改造と同じである。して見ると、吾々の意識・意圖・意欲からは全く獨立に、與へられたるがまゝの複雜なる諸條件を具ふるこの地球の上に、現に自分が生活してをりながら、この地球の改造が問題となつてゐる場合に、地球自體の研究は全くこれを無視し、たゞ自分の主觀的な要求や希望を規準として、將來構成さるべき地球の設計圖を描くといふことが、如何に愚かであるかは、明かであらう』。

私が斯くも長く自分の舊稿を引用したのは、土田氏の疑問の第一は右の文章に係はつてゐるけれども、その疑問は右の文章そのものが既に解決してゐると信じるからである。『しかし』——と土田氏は言はれる——『この理解は、果して何等の誤謬もなしに、マルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか、また論理的に考へて、右の如き構成の理論形態はそのまゝに許容せられることができるか。私は直ちに次ぎの疑問を掲げて氏の所説を檢討し、氏の明快なる答辯を要求するのである』。かく言ひつゝ、氏はその第一の疑問を提出される。曰く『河上氏は、現代社會の改造は、地球の改造と同じことだと言はれた。その意味は、社會科學上の問題は自然科學上の問題と同じく、與へ

られたるものの解剖から出發し、觀念からは出發してならないといふのであらう。勿論のことである。……しかしこの場合、河上氏が社會科學の科學的性質を自然科學のそれと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特異性を無視せられるならば、それは誤謬であらう。」』

私が先きに引用しておいた私の舊稿の一節において、私が何を問題としてゐるかは、字の讀める人には分かるはずだ。私がそこで地球を引き合ひに出してゐるのも、フォイエルバッハに倣つて『人間以前の自然の視點』から、觀念論の破綻を明かにせんがためであつた。『唯物論一般は、人間の意識、感覺、經驗、等等から獨立の・客觀的に實在的な・存在を（物質を）認める。史的唯物論は、人間の社會的意識から獨立の社會的存在を認める。意識は、この場合、前の場合と同じやうに、たゞ存在の反映にすぎない、よく行つてそれのほゞ正しい反映である。人々は、客觀的眞理から遠ざかることなしには、ブルヂョア反動の虛言の抱擁に陷ることなしには、この渾一的に出來てゐるマルクス主義の哲學から、たゞの一つの根本的前提をも、たゞの一つの本質的部分をも、取り去ることはできないのである』（レーニンはかく言うてゐる。そして私は、先きの文章においてマルクス主義哲學の――唯物論一般および史的唯物論の――かゝる根本命題を說明せんとしたにすぎない。それはたとひ如何に不充分なものであらうとも、私がそこで何を問題としてゐるかは、字の讀める人には分かるであらう。しかるに、土田氏はそれについて、『この場合河上氏が社會科學の科學的性質を自然科學のそれと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特異性を無視せられるならば、それは誤謬であらう』と言はれる。だが私はそこで社會科學と自然科學との特異性を問題としてゐるのではない。尤も、私自身はそれを問題としてゐるのでなくとも、土田氏の見地からは、私がそこで社會科學の特異性を無視してゐると見えたのであらう。しからば暫く氏の言ふところを聽かう。氏はいふ、――

『社會は人間と人間との關係によつて成立した一の意味的存在である。その社會的成立には前提があり、社會の諸活動はこの前提より全く離拔することはできないが、從つてその點で社會諸現象は社會的必然性をもつ一存在形態であるが、この前提は人間の關係が自らの中に內在せしめる意味であるがゆゑに、人間の努力により變革せしめられることができる。……等しく存在形態ではあつても天體自然物としての地球の存在性と社會のそれとの間には、性質の上に根本的の相違がある。……自然物自身としては自然必然的推移があるのみで、その價値關係的存

まを越えて要求せしめられた自由も、一切これをいふことはできない。ひとり人間生活には改造さるる。改造には、われらが希望を離れ、その存在形態を支配しうべき理想を考へることだ。なほ言へば、存在形態としての現に在る社會形態に超越的であつて同時に内在的でありうる理念を考へることだ。」

これは私に對する疑問の提出といふよりも、おしやべりの一觀念論者の獨白にすぎない。それによれば、天體自然物としての地球の存在形態と社會のそれとの間には、性質の上に根本的な相違があるとされる。そしてもし私が斯樣な解釋を受け容れない故をもつて「その理解は果して何等の誤謬もなしにマルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか」との疑惑を蒙るのであれば、私は全くマルクス主義そのものを拋棄せざる以上、土田氏のお氣に入るマルキシストにはなれぬであらう。

先きに掲げた私の舊稿からの引用文が示してゐる通り、吾々は從來の歴史における社會形態の變革を一の自然史的過程と看做すものである。例へば今日存在するが如き資本主義的な社會形態は、何人の意志・意圖・意欲に基づいてできたものでもなく、その點において、それは恰も、今日存在するが如き地球の形態が、何人の意志・意圖等に基づかないのと、全く同じである、といふのである。しかるかぎりにおいて、かゝる種類の社會現象に關する吾々の研究[illegible]は、自然[illegible]ならうし、[illegible]、[illegible]一面では、一方において自然と人間とを對立させながら、他方においては、これら對立物の同一性を認め、人間をもつて自然の產物となし人間そのものを自然の一部と考へてゐるから、吾々にとつては、自然と人間との間に何等越えがたき深淵があるのではなく――總じて辯證法は如何なるところにも斯かる橋渡しのできない深淵を見出さない、――從つて自然科學と社會科學との間にも、決して鐵筋コンクリート式の限界を認めはしない。」

もちろん『意識體たる人間から成り立つてゐる社會』は、かゝる意識體の存在と無關係に存在してゐるものでもなく、發展しうるものでもない。そしてその點においては、社會は無意識物から構成されてゐる地球と異なる。だが、それにも拘らず「社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐる」のであり、この點では、地球の存在が吾々の意識から獨立してゐるのと同じである。詳しくいへば、吾々が「生活をなし經濟を營み、子を產み、生產物を作り、またそれらの生產物を交換する」のは、みな吾々の意識的活動に屬する。「人間を動かす一切のものは、人間の頭腦の中を通過しなければならぬ。」このことはどうしても避けることができぬ。飲み食ひの如きですらそうであつて、そ

れは頭腦の媒介によつて飢渇を感じた結果始まり、同じく頭腦の媒介によつて飽滿を感じた結果終るものである』。だが、それにも拘らず、か丶る個々人の意識的諸活動の結果として、それら個々人の何れもが意識せざるうちに、『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖』が、いつの間にか成立するのであり、それは『吾々の社會的意識からは獨立してをり、吾々の社會的意識は決してこれを遺漏なく把握することはできない』。吾々が、社會的存在は社會的意識から獨立して存在する、それは恰も地球が吾々の意識から獨立して存在するのと同じである、といふのは、そのためである。

すでに吾々の社會的存在は吾々の社會的意識から獨立してゐる。それは吾々が意識する以前にすでに實在してゐる。だから吾々は斯かる社會的存在を後から認識するために科學的研究を必要とするのであり、社會科學はそのために成立するのであるが、この際その社會科學が人間の意志・意圖・意欲等々の意識的事實を出發點とすることができず、またしてはならぬといふことは、自明であらう。

吾々はあらゆる社會的意識を、一の例外もなしに、結局的には、社會的存在から説明する。吾々にとつては社會的存在の研究が根本的の問題であり、爾餘の社會的諸現象はこの基礎の上に説明される。かくてレーニンのいふが如く、『科學的社會主義は、近代的ブルヂョア制度を分析し、資本家的社會組織の發展傾向を研究することに、局限せられた、しかもそれだけである』。だからまたエンゲルスはいふ、『吾々は、かの道義の世界には、歴史および民族の差異を超越するところの・それ自身の永遠的な・原理が存在するといふ口實のもとに、何等かの道德的獨斷を、永久的な・窮極的な・進んでは不變な・道德律として、吾々に強制しようとするが如き、あらゆる要求を拒否する。吾々はこれに反し、すべて從來の道德理論は、結局においては、それぞれの時代の經濟的社會狀勢の結果であることを、主張する。』(『反デューリング論』、ドイツ本、八九頁)。彼れはまたいふ、『吾々の見解に從へば、あらゆる社會的××および政治的××の窮極の原因は、……これを哲學に求むべきではなく、當該時代の經濟に求むべきである』。現存の社會諸制度が不合理であり不正であるといふことについての……目覺めゆく洞見は、いつの間にか全く知らぬうちに生産方法や交換形態のうちに變動が生じてゐて、以前の經濟的諸條件に合はせて裁たれた社會秩序がもはやそれに適合しなくなつた・といふことの一徴候にすぎない。そしてこのことは同時に、發見された弊害を除くための手段もまたこの變動せる生産諸關係そのもののうちに――多かれ少かれ

發展しつゝ——存在してゐなければならぬといふことが、看取するのである。かゝる手段は、頭の中から發明されるといふのではなく、むしろ頭によつて生產に照應する現實の物質的諸事實のなかで發見さるべきものである。（同上、二八六頁）

此の如きが正にマルクス主義レーニン主義の見地である。これを土田氏の見地——「改造とは、存在形態を離れ、その存在形態を支配しうべき理想を考へることだ」——と比較せよ。氏にあつては、人間生活の改造とは、人間生活の理想を考へることだ。——世界を樣々に解釋して滿足してゐる一系列の哲學者なみにと、私はこれに附け加へよう。しかも斯かる理想は、土田氏によれば、社會の「存在形態を離れた」ものであり、「現に在る社會形態に超越的」なものである。——私はそれに附け加へよう、土田氏自身は如何に主觀されてゐようとも、氏の考へられる理想は、決して現實の社會的存在から離れたものではなく、逆にそれに依存してをり、むしろそれは社會的存在の何等かの形における思想的反映であることは、例へば氏が高臥の褥にうづもれて假寐されたる折に結ばれる夢が、たとひ如何に幽玄な高遠なものであらうとも、それは結局のところ、氏がいつかうつゝに見られた現實的存在の諸映像の再生產にすぎぬと同じことなのである。私がかくいふとき、氏は或ひは言はれるであらう、[illegible]「現に在るもの」[illegible]と[illegible]氏はこれに答へていふ、[illegible]「[illegible]際」[illegible]現に在る社會形態に超越的」だとかいふ言葉を棄ててかゝるべきである。存在の反映としての外には何等の意識をも認めぬか、あるひはそれ以外の意識を——存在から獨立してゐる意識を——認めるか、そこに唯物論と觀念論との本質的差異が橫たはる。土田氏が自分勝手の觀念論を振り廻はされるのは、しばらく氏の自由に一任しておくが、しかしそういふ立場からはマルクスもレーニンも分かるはずはないのだといふことだけ、こゝに一言しておかう。

三、

簡單に答辯しておかうと思つたのに、第一項だけで既に思はず長くなつた。以下なるべく簡單に片づけよう。

二、私は「第二貧乏物語」の第二回目で、辯證法を說明するために、醫學博士足立文太郎氏の研究になる・日本人と西洋人との軟部人種學上の比較（それは博士が無數の屍體を解剖することによつて、現實の材料に基づき觀察されたもので、そのために博士は實にその一生の努力を拂はれたのである）に關する・—

結論を利用した。その結論とは、博士自身の言葉によれば、『東京人類學雜誌（第四十三卷第八號）』『人種的の違ひはすべて絕對的のものではない』といふのである。こゝにエンゲルスの言葉によれば、『宥和し和解することのできないものと考へられた兩極的な對立、無理に固定した境界線や分類別、……かゝる對立や區別は、自然のなかにあるにはあるが、しかしたゞ相對的な妥當性をもつにすぎない、といふことの認識、また吾々がかゝる對立や區別やについて考へてゐる凝固性や絕對的の妥當性は、これに反し、全く吾々の考で自然の中へ持ち込んだものである、といふことの認識、――かゝる認識が辯證法的に自然を把握することの核心をなす。人々は、自然科學において集積される諸々の事實に强制されつゝ、かゝる認識に達する』といふことの、極めて適切な一例が存するのである。それは辯證法について多少の知識を有するものが肯定せざるをえざるところであり、そのことは茲に引用したエンゲルスの言葉だけからでも推察できよう。ところで土田氏は、『河上氏があげられた日本人の優劣云々の命題は、正しく唯物辯證法を說明する例であるか』といふことを、その第二の疑問として提出し、それについて『明快なる答辯を要求するのである』と言はれるのである。問題は土田氏が疑問を提出されるに先だつて既に明かになつてゐると思ふが、しかし、どういふ點が氏のために疑問となりうるのであらうか？

私はまた、すでに次ぎの如くにも言つてゐる。――

『西洋人は日本人よりも優れた人種であるといふのは、一の肯定的結論である。だが辯證法は、吾々に命ずるに、かゝる肯定的結論に安んぜず、むしろ之に矛盾した方面がありはしないかを探求することを、もつてする。そこで吾々は、ある一部分だけについてでなく、例へば筋、血管、神經、內臟、等々について、次ぎ〳〵に研究してみる。さうすると果して相矛盾した諸結果が出てくる。すなはち或る部分では西洋人が日本人より優つてをり、また或る部分では逆に日本人が西洋人に優つてをる。そして吾々が研究を進めれば進めるほど、此の如き對立的な關係が無數に生じてくる。そしてそれらを總て綜合するときに、日本人と西洋人との人種としての異同が、全面的に理解される。このことは、現實に向つて極力注意を拂ふことによつて、はじめて實現される。現に足立博士は、過去數十年間、數知れぬ屍體の種々なる部分にわたつて、極めて忍耐强き解剖學的硏究を繼續されたのであり、且つそれゆゑにこそ、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ矛盾を含んだ一の辯證法的結論に到達されたのである』。

君は重ねて[illegible]に私に前稿[illegible]を致したが、それは、そこには疑問の餘地なきまでに問題が明瞭にされてゐると考へるからであり、これをもう一度落ち付いて讀んで貰つたら、話は分かるはずだと思ふからである。

だが、土田氏の疑問なるものを、一應文字通り讀んで見よう。氏は次ぎの如く言はれる。

『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した・諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ。しかるに長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることと長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることとは、如何なる點で矛盾し相對立するか。長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關し日本人が西洋人に優ることとなりうるか。河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない。河上氏は右の命題を「かくて我は彼に優ると同時に劣るといふところの・それ自身に矛盾を含んだ・一個の命題」と呼ばれるけれども、いつの間にか優劣の關說せられてゐる長掌筋と長蹠筋とはわきへ打ち捨てられてゐる。二つの命題は全く別のものについての關說だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾をも含みはしない。河上氏は長い二本の足を持つてゐる、河上氏は短い二本の手を持つてゐる[illegible]の命題[illegible]にすぎ[illegible]するのであらう[illegible]持つ・[illegible]氏は[illegible]念的經濟學者に住まはうとする[illegible]的傾向を持つ、[illegible]の命題にして初めて唯物辯證法的命題の對立になりうるのだ。

河上は普通の形式論理をさへ知つてゐない」と威猛だかになつてゐる土田氏が、こゝでは惜しげもなく辯證法に對する自己の無智をさらけ出してゐられるのは、なかなかの御愛嬌である。

私は先づ絶對的眞理の問題に關するエンゲルスの有名な辯證法的命題を揭げよう。それは次ぎの如き言葉で表現されてゐる『人間の思惟は、至上的であると同樣に、非至上的である。』あるひは『人間の認識能力は、無制限的であると同樣に、制限的である。』これらの命題は、『日本人は、(西洋人に比し)劣つた人種であると同樣に、優つた人種である』といふのと、全く同じ性質のものである。この後の命題を詳しくいへば、『日本人は、長掌筋等々においては、劣つた人種であるが、長蹠筋等々においては、優つた人種である』といふことになり、また先きのエンゲルスの命題を詳しくいへば、人間の思惟は、「その素質、傾向、可能性、歷史的の究極目的よりすれば、至上的であり無制限的であるが、個々の實行やその都度の實現性よりすれば、非至上的であり制限的である」といふことになる。そこでこれに

土田式論理を適用すると、次ぎの疑問が生じることになる。』その素質よりすれば思惟が無制限的であるとの命題は、如何にしてそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、個々の實行よりすれば思惟が制限的であるとの命題となりうるか。エンゲルス氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない。』——かゝる疑問を大上段に構へて持ち出すことが、やゝ滑稽であるといふことは、今となつては、土田氏自身も感づかれたであらう。だから、かゝる馬鹿げた疑問を提出するに至つたのは、何をどう誤解してゐるためであるかといふことは、哲學者土田氏の名譽のために氏自身の解決に一任しておくのが、おそらく穩當であらうと考へるが、たゞ一般讀者の便宜のために、以下少しばかり之に觸れておかう。

この場合何よりも先きに目立つことは、土田氏のへんてこな疑問なるものは、タアルハイマアの言葉を用ふれば、事物の連絡を『狀態として、』または靜的に『觀察することにより、その『橫斷面』を示す場合と・事物の連絡を『過程として、進行として、または動的に』觀察することにより、その『縱斷面』を示す場合・との區別に對する無理解から起るといふことである。

レーニンはいふ、『對立物の同一性は、（精神および社會を含めての）自然のすべての現象と進行とにおける、矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識（發見）を意味する』ところで土田氏はいふ、『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ』前者と後者とを比較して見れば、土田氏が何を誤解してゐるかゞ分からう。氏の命題は、『肯定はその反對物たる否定に云々』といふ最後の句を削り、且つ『諸傾向』の次ぎに『認識（發見）』を加へ、それで打ち切れば正しくなるのである。すなはちそれは次ぎの如きものであるべきなのだ。——『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識（發見）を含む』。

辯證法的命題は『それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して』その反對物になりうるものでなければならぬといふ風に、土田氏が考へられてゐることが、そもそもの間違ひである。最も解かり易い一例を示さう。『商品は、使用價値と交換價値との・この二つの對立物の・直接的な統一である』といふのは、マルクスが商品について立言した『唯物辯證法的命題』である。辯證法は、統一的なものを分解してその矛盾に充ちたる構成分を認識することを、要求する。商品は一個の統一物である。これを分解して、使用價値および交換價値といふ二つの對立物を發見するのは、その矛盾に充ちた構成分を認識するゆゑんである。か

くて『作品に、使用價値と交換價値との二つの對立物の直接的な統一である』といふ一の肯定的な辯證法的命題が生れる。だが、如何にそれが辯證法的命題であり、從つて如何にそれが事物のうちに含まれてゐる矛盾を指摘してゐようとも、この命題それ自身が矛盾を含んでゐるのではなく、從つてこの肯定的命題がそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化してその反對物に推移するはずはないのである。(私が『日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ・矛盾を含んだ・一の辯證法的命題』と言つたのは、言葉が不正確であつた。正確には『矛盾を含んだ』の代りに『矛盾した事實の認識を含んだ』とあるべきだ。これは土田氏を誤解せしめるための一助となつたかも知れないが、もしさうであつたらお氣の毒なことであつた。)

土田氏は私に向つて、『長榮筋に關して日本人が西洋人に劣ること』、長臆筋に關して日本人が西洋人に優ることとは、如何なる點で矛盾し對立するか。二つの命題は全く別のものについての關說だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾を含みはしない』といふ疑問と、『長榮筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長臆筋に關し日本人が西洋人に優ること〻なりうるか』といふ疑問と、これら二つの疑問を提出することにおいて、河上氏は

[illegible]

今年の[illegible]さすがに氏の[illegible]迷では混亂を極めてゐる。

私は氏の第一問に答へていふ、長榮筋に關して日本人が西洋人に劣るといふことと、長臆筋に關して日本人が西洋人に優るといふこととは、氏の言はれる如く『全く別のものについての關說』ではなく、双方とも西洋人との比較における日本人の人種的特徴といふ同一の對象についての立言である。たゞ異なるところは、日本人を西洋人と比較するために抽出された方面のみである。すなはち前者は日本人が西洋人に劣る方面の事實を指摘してをり、後者は逆に日本人が西洋人に優る方面の事實を指摘してゐるのであり、(かく種々なる方面について觀察することにより、吾々の認識ははじめて全面的になる)、かくてこれら二つの事實は、一方は日本人の劣つてゐる方面を・他方はその優つてゐる方面を・指摘してゐるといふ點において、互に相對立して矛盾してゐるのである。この場合、對立と矛盾とは、これ等二つの事實の間に存する。しかるに土田氏が、その第二問において、『長榮筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長臆筋に關し日本人が西洋人に優ることとなりうるか』と質問されてゐるのは、何

としても滑稽である。もし唯物辯證法的命題といふものが左樣なことを要求するものであるならば、例へば、『商品は使用價値であり交換價値である』といふ命題の前半、すなはち商品は使用價値であるといふことは、『それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して』商品は交換價値であるといふこととなりうるのでなければならぬ。もしさうでなかつたなら、『商品は、使用價値と交換價値との・この二つの對立物の・直接的な統一である』といふマルクスの命題は、辯證法的な命題ではないといふことになる。これはなんと馬鹿げた話であらう。

土田氏が斯かる馬鹿げたことを持ち出されるに至つたのは、氏が辯證法における『反對物への轉化』の問題を知つてゐながら、しかも極めて不充分にしか知つてゐられないためである。それ自身のうちに含む矛盾により一定の事物がその反對物に轉化するといふのは、事物の連絡を『過程として、進行として、または動的に』觀察することにより、その『縦斷面』を示す場合のことである。例へば、幼蟲がそれ自身のうちに含む矛盾のために、成長して蛹となり、更に蛹がまたそれ自身のうちに含む矛盾のために、發育して成蟲となる、といふが如きは、すなはちそれである。そしてこの場合、發展過程の全體（それ自身がまた一個の統一物）についていへば、蛹は幼蟲の否定によつて生ずるところの・幼蟲の反對物であり、また成蟲は蛹の否定によつて生ずるところの・蛹の反對物なのである。

かゝる見地からすれば、使用價値および交換價値といふ二つの矛盾物によつて構成されてゐる商品そのものは、それ自身のうちに含む矛盾のために、運動するものたらざるをえない。諸商品の交換過程は、すなはち斯かる矛盾の展開であると同時にかゝる矛盾の一部的な且つ一時的な解決である。この解決は、一定の商品が貨幣となることによつて實現される。この場合、貨幣は商品の反對物である。すなはち一定の商品は、普通の商品たることを否定することによつて、その反對物たる貨幣に轉化するのである。だが、此の如きはすべて商品そのものの發展過程に關する問題である。もしこれを、商品を分析してその矛盾に充ちた構成分を認識することによつて成立つた命題と混同し、かゝる命題自體もまたそれ自身のうちに含む矛盾のために動かねばならぬものの如く考へたならば、それはめちやくちやといふものである。

もちろん一定の事物に關する命題も、その事物に關する吾々の認識が窮極的に完全なものでないかぎり、一定の矛盾のために運動して、最初のものとは異つた或る他のものに轉化するであらう。すべて運動を生むものは何等かの矛盾であるがゆゑに、

運動を理解するためには、吾々はいつもその結果たる矛盾を理解せねばならぬ。かくて一定の命題は、あるひはそれ自身のうちに含む矛盾により、あるひはその命題と現實の事物との間に存する矛盾により、轉化して自分自身以外のものとなるであらう。ヘーゲルの哲學體系は、それ自身の内容を體系を絶對的眞理であると主張することにおいて、あらゆる獨斷的なものを排否する彼れの辯證的方法と矛盾してゐた。そしてかゝる矛盾のために、ヘーゲル哲學の體系は否定された。久しく西洋人の間に行はれてゐたところの・日本人はすべて人種的に西洋人に劣つてゐるといふ・命題は、實際には現實の事實と矛盾してゐる。だからそれは、この矛盾のために否定されて、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ命題に置き代へられた、等々。

およそこれらの場合は、事物の發展過程を『對立物の闘爭過程』として把握することにより、『反對物への轉化』を一の『自己運動』として理解する場合に屬するのである。そして土田氏の奇妙なる質問は、――『長脛筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、果してそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長脛筋に關し日本人が西洋人に優ることとなりうるか？』『結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか？』すなはち、これはまつたくうな・事物の進展を單に矛盾として變化に還元する場合の問題を、少しばかり誤つて、これを異なるところへ轉用されたことから、生じたものに外ならぬのである。

三、土田氏の疑問の第三は、『現實のものの性質を分析すれば、一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば必ずしも二つだけではなくて幾つでも事實の分析に即して得られるはずである。例へば鼻の高さに關しては日本人と西洋人との間に優劣がない、爪の色に關しては日本人と西洋人との優劣は無記であるともいへるのである。河上氏の論理をもつてすれば、これらの命題もみなそれぞれに矛盾し對立する辯證法的命題であるか。結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか』といふのだが、これはつまり前述の第二疑問と同じ誤解に立脚してゐるのだから、特に取り上げて說明する必要はない。たゞ新たな問題は、『一つの命題に矛盾し對立する命題は必ずしも二つだけではなく幾つでも得られるはずである』といふ點にあるかと思ふが、これはそれで一向差支ないのである。例へば、日本人は西洋人に比して人種的に劣等であるといふ一つの命題があるとすると き、それに對して、長脛筋においては日本人が西洋人に優ると

いふ命題、血管のしかじかの點においてはやはり日本人が西洋人に優るといふ命題、更にまた視神經においても同じく日本人が西洋人に優るといふ命題、腋臭腺においてもまた日本人が西洋人に優るといふ命題、等々が對立しうるのである。もしさう澤山にならぶのが氣になるといふのなら、これを一纏めにして日本人は長蹠筋、血管系統の或る部分、視神經、腋臭腺、等々において西洋人に優るといふ一つの命題となし、それをば、日本人は西洋人に劣るといふ命題に對立せしめてもよからう。そんなことは、事物の本質からいへば、どうでも可いことだ。元來、矛盾だの對立だのいふ言葉を形式論理的に解釋すればこそか〻る疑問が生ずる。か〻る疑問を提出するものは、何故使用價値と交換價値とが對立物であるか、何故生産諸力と生産諸關係とが對立物であるか、使用價値の對立物は非使用價値であり生産諸力の對立物は非生産諸力ではないか、等々の疑問をも提出するであらう。これらの疑問はすべて辯證法における『事實の客觀的論理』を理解しなければ解けないのであるが、委細はすでに土方氏の論文を批評せし際説明したことであるから、(『第二貧乏物語』第二回目の終り參照)、こ〻には之を繰り返へさない。

たゞ一言注意しておく。吾々が事物の連絡をその發展において動的に觀察する場合には、すでに述べたやうに、これを對立物の鬪爭として見るのであるが、すでに問題が對立物の鬪爭である以上、それはいつでも『二者鬪爭的』(zwieschlächtig)である。例へば源平は紅白に分れ、圍棋は黑白に分れ、相撲にあつては東西に分れる、等々。その關係をレーニンは次ぎの如く指摘してゐる。『數學においては、正數および負數、微分および積分。力學においては、作用および反作用。物理學においては、陽電氣および陰電氣。化學においては、アトムの結合および解離。社會科學においては、階級鬪爭〔すなはち搾取階級と被搾取階級との對立、あるひは生産關係と生産力との對立、――河上補〕』。か〻る場合にはいつも二つのものが對立する。土田氏が『二つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなくなるはずだ』といふことを、不都合に感じられたのは、あるひは前記の如き場合の問題を履き違へられたのかも知れない。

四、私の舊稿のなかには『辯證法は、一切萬物の前に、たゞ一つの例外をも許すことなく、その消滅性を宣告する。その前には、究極的なもの、絶對的なもの、××なものは、何一つとして存立しない』といふ類の言葉がある。それについて土田氏の疑問の第四が起る。氏の言葉によれば『人間の努力はいかに

偉大であれ、その範圍をひろめるとしても、客觀的世界に存在するすべてを盡くし、今後起るべき現象の一切を盡すことはできない」しかるに河上氏は「一切の事物」について唯物辯證法の行はれてゐることを主張せられる。個々の現象についての分析の結果を一切のものに擴張しうる根據は何處にあるか」といふのが、それである。

この場合にも、私は先づ、「河上のこの理解は、果して何等の誤謬もなしに、マルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか」との、土田氏の疑問をはねかへさう。何故なれば、以上の如き表現は、次ぎに示すが如く、エンゲルスもレーニンも一様に用ひてゐるところであるから。

先きに引用した私の舊稿中の章句は、「この哲學(辯證法)の前には、究極的な・絶對的な・××な・何物も存立しない。この哲學は一切のものの消滅性を證明する」といふエンゲルスの有名な句(佐野文夫氏『フォイエルバッハ論』、一九頁の譯文に從ふ)に、相當するのである。

レーニンはまた、認識の法則および客觀世界の法則としての辯證法をば、例へばプレハーノフにおける如く「實例の合計」と解すること(「例へば種子、例へば古代共産制、――單に分かり易くするためにではあるが、エンゲルスもまた爲せし如く」)を、[illegible]

[illegible]

矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・[illegible]見)を意味する。一切の世界の進行をその『自己運動』において……認識するための條件は、それらをば對立物の統一として認識することである」とも言つてゐる。だから「一切の」とか「すべての」とかいふ言葉を河上が使つてゐるのが土田氏のために疑問となるのなら、氏はその疑問を一と先づエンゲルスやレーニンに向けらるべきである。そしたなら、氏はこれらの偉大なる辯證法論者から、氏の疑問に對する辯證法的解決を得られるであらう。吾々が辯證法について立言するとき、屢々「一切の」とか「すべての」とかいふ類の言葉を用ひるのは、それが「極度に一般的な・正しくその爲に極度に廣く作用し極度に重要な・法則」だからである。すなはちそれは辯證法的な意味において最も絶對的な法則だからである。(辯證法はすべてのものが相對的であることを認める。だが、かくいふとき、その相對的なる言葉もまた相對的に用ひられる。それは絶對を排除しない)。ただが、吾々はかく言へばとて、土田氏の考へてゐられるやうに、「今後起るべき現象の一切」に對し、現實の事實に關する何等の分析をも經ることなしに、辯證法的法則を公式的に・擴張しう

る」と考へてゐるのではない。これについての委しいことは、エンゲルスの『反デューリング論』における辯證法の條下を見ても分かる。私はこゝにたゞ次ぎの章句だけを引用しておかう。

『マルクスは、かゝる進行(資本主義的生産樣式の沒落の過程)を否定の否定と名づけ、それでもつて斯かる進行を一の歴史的に必然的なものであると證明しようとしたのではない。反對に、彼れは斯かる進行のある部分は事實上すでに生じたし、ある部分はこれから生じなければならぬといふことを、歴史的に證明した後に、それをば一定の辯證法的法則に從つて行はれる進行だと名づけたのである。それだけのことである。……だが、もしデューリング氏が、辯證法をもつて、恰も形式論理學や初等數學が限定された仕方でさう考へられうると同じやうに、單なる證明のための一道具であると解するならば、それはすでに辯證法の性質に關する理解の完全なる缺如である。……辯證法は、形式論理の狹隘なる視界をつき拔けるがゆゑに、より包括的な世界觀の萠芽を藏してゐる。』(『反デューリング論』、ドイツ本、一三六―七頁)

この際土田氏がデューリングと同じやうな考へ方をしてゐられるのなら、それは實際に『辯證法の性質に關する理解の完全なる缺如』である。問題はこゝでもまた、辯證法的に解決されることを必要とするのである。

なほ土田氏が以上述べたるが如き疑問を提出しつゝ、更に自身の意見を述べて『我々は思惟形式の或るものの客觀世界に對する先驗性を主張するのだ』と言つてゐられるのは、完全なる一の觀念論的囈語にすぎない。これについては、旣にエンゲルスが、『反デューリング論』第一篇哲學の冒頭『先驗主義』の條下で、徹底的にやつつけてゐる。もしそれに異論があれば、それを批判されんことを希望する。觀念論の決まり文句を投げ出しただけでは、問題にならぬ。

五、疑問の五は、前項と同じ性質のもののゆゑ、こゝには略する。

六、土田氏の第六の疑問にいふ『一切のものが自己の消滅を齎らすべき要素をそれ自身のうちに包含するものならば、……それ自身一個の觀念形態である唯物辯證法は、またマルキシズムは、結局消滅し、他に轉化しなければならぬではないか。自己の消滅を豫想するものが、どうして自己の眞理性を主張しうるか。』これが土田氏の最後の疑問であるが、順次を追うて茲まで來ても、氏の疑問は依然として、辯證法的唯物論に對する單なる素人の疑問にすぎない。これらの疑問は、すべて辯證法的にのみ解決されうるものであり、それゆゑに、それらはすべて

辯證法に對する態度から生じるのである。

レーニンのいふところによれば、マルクスは一八四九年に、エンゲルスは一八八八年と一八九一年とに、實踐の規準を認識論の基準となした。」そして『この規準もまた、人間の認識を一の「絶對的なもの」へ轉化することを妨げるに足るだけ「不決定的」であるが、しかし同時にまた、觀念論および不可知論のあらゆる種類に對し容赦なき闘爭を遂行するに足るだけ「決定的」である。』（このレーニンの命題そのものがまた、一の辯證法的命題である）。土田氏の提出された眞理の絶對性に關する疑問は、たゞこの規準から辯證法的にのみ解決されうるであらう。『客觀的絶對的眞理への吾々の認識の接近の限界が歴史的に條件づけられてゐる』といふ點においては、如何なる眞理もみな相對的であり、新たなる事實の發見される毎に、それは絶えずその姿を改める。だが『客觀的絶對的眞理そのものの存在は無條件的であり、吾々がこれに近づくことも無條件的である。』そして吾々の智識が、かゝる客觀的眞理の一部を把握してゐるかぎりにおいては、それは絶對的である。だからレーニンはまたいふ、『注意せよ、主觀主義(懷疑主義、詭辯論、等)と辯證法との區別は、なかんづく次ぎの點に・すなはち(客觀的)辯證法においては相對と絶對との區別そのものが相對的であるといふ點にたいする。客觀[illegible]されてゐる[illegible]それが以上の意味において相對的眞理であり且つ超歴史的眞理であるといふことを主張するものである。

なほマルクス主義的××が完了したならば、社會は資本主義的に構成されたものではなくなるのだから、マルクス主義のうち特に資本主義的社會の構造を分析したマルクスの經濟學は、吾々が現に住む社會を說明するための經濟學ではなくなり、かゝるものとしてはそれは他の學問に席を讓るであらう。だが、例へばボグダーノフの如く、『マルクスの貨幣流通の理論に對し、たゞ「吾々の時代にとつて」のみ客觀的眞理たることを承認し、この理論をもつて「超歴史的」客觀的眞理と認めることを「獨斷論」と呼ぶのは、また一の混淆である。この理論が實踐に適應するといふことは、何等將來の事情によつて變更されえない、しかもそれは、ナポレオンが一八二一年五月五日に死んだといふ眞理が永久的であるのと同じである。』問題は實に此の如く明白である。

× × ×

土田氏の論文の第三節は「河上氏經濟學の方法論的批判」と題し、第四節は「河上氏經濟學の內容的批判」と題する。だがこれ

らは暫く批判の外におかう。何故なれば、氏は哲學者としてこそ大衆の間に影響を與へうるであらうが、經濟學者としての氏に對する信用は、氏が如何なる議論をされようとも、それが大衆に有害な影響を及ぼすであらうほどに、さして大なるものではありえない、と觀測されるから。

この論文を終るにあたつて、私は最後に一言する。讀者諸君は、私が以上述べ來つたところによつて、要するに土田氏の疑問なるものは、盡く氏が辯證法的唯物論を理解せざるよりして生ずる疑問に外ならぬことを、恐らくは理解されたであらう。そしてこのことはまた、氏の提出されたるが如き疑問が、辯證法的唯物論に不案內なる多くの讀者たちにとつて、何故に一應は尤もらしく見えるかといふ理由を、說明するものである。

しからば、氏は何故に、かゝる幼稚なる疑問を提供することを敢てされるのであるか？　答へは極めて簡單である、それは哲學すらが(否な哲學こそは)最も黨派的な學問であるから、階級鬪爭が尖銳化するにつれて、ブルヂョアジーの御用を(意識的に又は無意識的に)つとめる觀念論的哲學者の全系列は、今やプロレタリア的××的唯物論の勃興を鎭壓すべく、それ／＼觀念論の錆びついた青龍刀をひつさげて、バリケードの彼方に動員されざるをえざる時代であるから。現に形勢不利と見ゆる場合には、土方博士の如き經濟學者すらも、かゝる哲學論の領域にまで有り合はせの武器を携へつゝ、飛び出してこられるのである。

「大體において、經濟學の教授連は資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもなく、そして哲學の教授連は——神宮僧侶たちの學識ある番頭以外の何物でもない」(レーニン)。否な大學教授には止まらない、大學からは一文の月給をも貰つてゐない土田氏も、今ではこれら大學の諸教授と完全に手をつなぎつゝ、吾々唯物論者を征服しようとされてゐるのである。だが、私をつかまへて「氏(河上)が最初より教授でなかつたものならば、唯物辯證法に對する氏の理解も、もつと早い時期に徹底せしめられたであらう」といふ土田氏自身の理解は、——氏は仕合せにも最初から教授でも何んでもないのに、——徹底どころか上滑りにすら達してゐない。このことは、私がこの文章の冒頭で取扱つたがまぐち哲學そのものの破產を、早くも玆に證明してゐるわけであるが、これなどは、この際における拾ひ物の御愛嬌の一つであらう。

資本王國の財産調べ

——三井王國論——

高橋龜吉

一、三井王國の産業支配網

我が五大資本王國、三井、三菱、安田、住友、大倉の諸財閥中、三井は、有ゆる點に於て、斷然他に傑立してゐる。例へば、その資本の巨大なる點に於て、その支配産業種類の廣汎なる點に於て、且つそれ等支配産業の優秀なる點に於て、從つて又日本産業全體に對する支配的勢力の強大なる點に於て、三井財閥は他の諸財閥とは丸で格を異にしてゐる。尠くとも、日本財界に對する支配力の點から云へばさうである。これ等の諸點は、しかし、本論の進行すると共に、やゝ具體的に漸次讀者の前に展開せられるであらう。

三井王國産業支配力の基礎をなすものは、云ふ迄もなく、その莫大な所有資本である。しかし、三井王國が、今日見るが如き一大産業支配力（その詳細は後述する）を掌握するに至つた根因は、それだけに止まるわけではなく、實に、左の如き諸條件を具備してゐるからである。（その各項の具體的事實については後述する）

（一）巨大な資本を掌握してゐること。

（イ）莫大な所有資産を擁してゐること。

（ロ）その銀行、信託、保險業を通じて、巨額の金融資本を支配してゐること。

（ハ）以上（イ）及（ロ）の信用を通じて他の銀行その他の資本を自由に利用し得ること。

（ニ）政黨を通じて諸種の財政經濟政策に對し多大の決定權を持つてゐること。

(イ)隠然と最高政策を動かす方法に出るもの。(政友會に出本悌次郎、山本条太郎、森格、松野鶴平等の幹部あるを見よ)
(ロ)諸種の調査會に委員を出す方法に出るもの。現に三井は政友系なるにも拘らず、民政黨内閣の下に於てすら、三井物産の安川氏は、今度の三大調査會の一たる關稅調査會の委員長である。
(ハ)貴族院に於ける勅選議員の推薦を贏ち得ることに出るもの。現に最近も、田中内閣は三井の磯村豐太郎と藤原銀次郎兩氏を勅選議員に推薦してゐる。
(三)人材を網羅してゐること。
(四)日本産業の支配的事業の多くを掌握してゐる。例へば三菱の如く、如何に巨額の土地建物を所有してゐても、それの産業支配力は殆んど云ふに足らない。しかし、三井に於ける「物産」の如く、全國の販賣網に決定權を持つてゐれば、その資本の高は假令三菱の土地建物の半分に足らなくとも、その産業支配力は數十倍大である。
(五)財閥内の事業經營が縱斷的一大トラストを形成してゐること。

加ふるに、三井王國は、更に、左の如き諸點を通じて、自己直系以外の諸會社に對しても、強大な支配力(或は決定的な、或は準決定的な)を擁してゐる。

(1)投下資本を通じて。
(2)資金の融通を通じて、而して之は銀行及信託に出るのみでなく、物産その他の直系、傍系の諸會社を通じて行はれる。
(3)三井系重役に出る支配力。(他の一般投資資本家の場合と異り、三井王國の出資はその額の比較的小なる場合と雖も多くは重役の位地を占め得る。さうする方が當該會社にも信用其他の點から便宜であるからだ)
(4)販賣機關(主として三井物産)の獨占的乃至支配的地位を通じての産業支配力。
(5)原料供給力を通じての産業支配力(原料の購買が現金でなく掛買の際に於て特に此の作用大である)
(6)加ふるに、以上の諸支配力は、更に、カルテル其他の獨占的諸團體に於ける三井の勢力を通じて強化せられてゐる。

然らば、以上の如き諸勢力に由つて支配せられてゐる、所謂三井系諸會社は、實際、幾何に達し、それが如何に統制せられてゐるか。その總數は、筆者の調査し得たるものだけでも(調査漏れがある筈だ)百二十七社の多數を算し、その資本金二十八億四千二百萬圓、拂込資本金二十三億一千三百萬圓の巨額に達する。しかし、これ等の諸會社に對する三井王國の支配關係は色々であつて、必しも、一様ではない。それで、いま、その系統を一目瞭然たらしむるため、圖解に由つて示せば別表圖表の如くである。即ち、之に由ると、三井合名の下に、直系會社

三井系諸會社系統圖

（備考）表中＊印は三井の"支配力"が大體に決定的なもの、"無印"は同じく準支配的なもの、△印は三井系の勢力未だ以上の如くならざるもの。要するに三井系諸會社關係中の子會社は"物產"の重要なる部分を占め、便宜此處に併せ掲げた。東京電燈及び日本電氣證券等は主として三井合名の金融關係が主たるものである。

三井合名

直系諸會社

- 三井物產
  - 船舶部
  - 造船部
  - 直系會社：＊東洋レーヨン。＊東洋棉花。＊獨逸物產會社。＊佛蘭西物產會社。＊滿鮮企業株式會社
    - 東洋棉花――＊天滿紡織。＊內海紡織。＊上海紡織。＊東洋ポプリン紡織。＊南北產業。＊東京モスリン紡織。＊滿洲棉花。豐田紡織。豐田紡織廠。菊井紡織。
  - 傍系會社：＊日本製粉。＊東洋バブコック。＊三機工業。安全索道。青島電氣。△富士製鋼。＊(臺灣製糖)。＊三泰油房。＊日華蠶絲。撫順炭販賣。日本煉瓦製造。＊(郡是製糸)。＊湯淺電池。日本電氣。朝鮮生糸。△朝鮮無煙炭。＊極東煉乳。＊橫濱撚糸。三菱煉炭。豐田式織機。△鶴見臨港鐵道。＊日本樟腦。＊東京計器製作所。岩田煉炭原料。國際無線電話。△戸畑鑄物。
- 三井生命
- 三井銀行――△昭和銀行
- 三井信託――＊三信建物。＊神中鐵道。△三共株式會社
- 三井鑛山――＊釜石鑛山。＊神岡水電。＊基隆炭鑛。＊臺灣炭鑛。＊太平洋炭鑛。＊北海道硫黃。＊北海曹達。＊大日本炭鑛。＊松島炭鑛。＊彥島製煉所。東洋窒素工業。△磐城炭鑛。△山東鑛業。△北樺太石油。△北樺太鑛業。△大源鑛業。△矢野鑛業。
- 東神倉庫――＊大正運輸。＊南洋倉庫。

傍系諸會社

- 王子製紙――＊富士製紙。＊大淀川水力電氣。＊共同パルプ。＊共同洋紙。＊共榮起業。＊樺太鐵道。＊南樺鐵道。＊北海道鐵道。＊北海水力電氣。＊樺太電氣。＊樺太木材。＊日本フエルト。＊朝鮮殖產電氣。金福鐵路公司。日露木材。函館水電。露領林業。
- 北海道炭鑛汽船――＊夕張鐵道。＊共立汽船。＊日本製鋼所――＊价川鐵道。
- 鐘淵紡績――＊上海製造絹糸。＊錦華紡績。＊南米拓殖。
- 芝浦製作所――＊內外電熱器。＊東京電氣。
- 臺灣製糖(物產)――＊南國產業。森永製菓。
- 郡是製絲(物產)――神戸生糸。
- 電氣化學。大正海上火災。小野田セメント。三越。熱帶產業。臺灣拓殖製茶。臺灣電力。大日本セルロイド。
- 中島製作所。

關係諸會社

日本銀行。東京海上火災保險。日本航空輸送。日本無線電信。東亞興業。東洋製鐵。帝國劇場。帝國ホテル。都ホテル。復興建築助成。安田信託。住友信託。(日本電氣證券)。(東京電燈)。

が六社、傍系會社が十三社、關係會社が十四社ある。最後の關係會社は大體に、三井が重役を出し又は大株主たるものであるが、しかし未だ支配權の無きもので、直系傍系何れも三井が支配的であると見做されるものである。加るに右直系及傍系會社は、その下に更に子會社又は孫會社九十三會社を支配してゐるが、その內容及び支配關係は大凡圖解の如くなつてゐる。因に別揭圖表中＊印は三井の支配的なもの、無印は準支配的なもの△印は重役又は大株主等として關係せるも未だ支配的でないものを現はすものである。さうすると、直系會社の子會社には、支配的のもの三十七社、準支配的のもの十五社、關係會社十二社、合計六十四社となり、傍系會社の子會社には、支配的のもの二十二社、準支配的のもの六社、關係會社一社、合計二十九社となる。

三井王國は、以上の外、更に三井合名直屬として、山林、農園、市街地及建物事業を經營してゐる。現に、三井合名の營業目的には「有價證券及不動產取得利用、及農林業並に製茶業」と明記しあり、又、三井合名內には、不動產課、山林課がある。更に、三井合名自ら、臺灣には出張所を置き、朝鮮には農林事務所を設け、北海道には斜里農場を特置して事業を統制してゐる。だが、こと三井合名に關する限り、一切が祕密であつて、外間から之を窺知し得る餘地なく、それ等の事業が果して幾何に達してゐるか、之を推知することすら出來ない。

しかし乍ら、以上に由つて、三井王國の支配する產業勢力が如何に巨大であるかの輪廓を窺ふに難くないのであらう。(個々の事業に關する詳細は別に後述する)。扨て、問題はこれ等產業の統制であるが、周知の如く三井王國の總本部は三井合名である。その資本金は表面上三億圓(實際はその少くとも倍以上)社長は三井總本家八郎右衞門であるが、實勢力は、理事長の團琢磨、常務理事の有賀長文、福井菊三郎の握るところである。しかもそれ等の勢力と雖も、直系及傍系の各種事業に對し、中央集權的强大な支配權を持つてゐるわけではなく、各直系及傍系事業は、それぐ\著しく分權的に獨立した經營と財政とを保持してゐて、三井合名を通じて、三井王國としての團體的連絡が或る程度まで維持せられてゐる。かくて、例へば、信託の米山と銀行の池田とが睨合つてゐるために、三井信託がその資金の利用を海外に於て試みるに際し、三井銀行支店に之を依賴する代りに、某外國銀行に依賴してゐると云ふが如きことが屢々發生する。

かゝる財閥的制度の下に於ては、一般の場合の如く、銀行家勢力は必ずしも支配的とはならない。何となれば、各直系及傍系事業は、その所要資金の供給については、萬一の場合には、三井合名を通じて、同系統の銀行又は信託に之を命せしめることが出來るわけ故、資金供給の活殺力は最早銀行家の手に無くなるからだ。しかも、內閣に於て大藏省が常に支配的位地を

占め得るわけは、年々、その所要經費の總出入を支配するからであるが、三井王國の各種事業に於ては、一旦與へた資本は最早永久に銀行の支配を脱したもので、各種事業はそれ〴〵獨立して收支計畫を立て得るのである。斯樣なわけで、財閥内に於ては、資金の債權者が、それの利用者よりも支配的位地に立つと云ふ資本主義一般の公式の代りに、資金の債權者よりも、資金を最も有效に利用する者が勢力を得る、と云ふ社會主義的經濟原則の方が、寧ろ有效に動く傾向に在る。現に、三井王國内に於ては、物產の勢力が、後述の如く寧ろ支配的である傾向を示してゐる（銀行勢力の擡頭著しき傾向を看のがしてならぬこと勿論であるが）。これ、三井王國に限らず、他の大財閥の直接間接經營する產業が、他に比し、著しく成功してゐる主なる原因の一つである。

二、三井王國の人的支配網

三井王國の人的支配の陣立は、表面上は、各種中心事業の首腦に、三井一族を据ゑてゐるが、實際は、その下に配置せられてゐる優秀なる幹部番頭に由つて統率せられてゐる。だが、先づ三井一族に敬意を表して、その肩書と三井合名に對する出資額とを見れば左の如く、各直系會社の最高首腦は何れも三井一族の占むるところである。

三井一族出資額及重役名表

氏名	出資額	出資割合	重役名
三井八郎右衛門	六九、〇〇〇	二三・〇	合名會社代表社員、社長。
三井源右衛門	三四、五〇〇	一一・五	三井銀行取締役社長、合名會社代表社員、物產取締役代表
三井元之助	三四、五〇〇	一一・五	三井鑛山取締役社長、合名會社代表社員。
三井高精	三四、五〇〇	一一・五	三井物產取締役、三井銀行取締役會長、三井生命取締役代表。
三井壽太郎	三四、五〇〇	一一・五	東神倉庫取締役社長、三井合名會社監事
三井高修	三四、五〇〇	一一・五	三井鑛山取締役
三井高達	一一、七〇〇	三・九	三井鑛山監査役
三井守之助	一一、七〇〇	三・九	三井物產代表取締役社長。三井合名會社監事。
三井高昶	一一、七〇〇	三・九	
三井辨藏	一一、七〇〇	三・九	三井物產監査役。
三井高光	一一、七〇〇	三・九	大正海上火災保險取締役。
合計	三〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇	

しかし乍ら、三井王國を統率する實際の首腦及び閣僚、將軍等は團、有賀、福井、池田、米山、安川、牧田、兒玉、等の合名及直系會社の首腦、及び藤原、磯村、岩原等の傍系會社の首腦である。而して、三井王國の總理大臣格の團は鑛山出、閣。

格の有賀、福井兩氏とも物産出であつて、又、傍系に在る岩原、磯村兩氏は物産出で、藤原は銀行出である。以て、物産出の勢力の特に大なることを窺ひ得る。次に、これ等三井王國の最高幹部を、その重なる配置について見れば、左の如くである。

三井合名

社長	八郎右衛門
相談役	益田孝
理事長	團琢磨
常務理事	有賀長文
同	福井菊三郎
理事兼秘書課長	阪井徳太郎
理事兼文書課及檢査課長	大島雅太郎

三井物産	安川雄之助
	南條金雄
三井銀行	池田成彬
	菊本直次郎
三井信託	米山梅吉
三井鑛山	牧田環
三井生命	野依辰治
東洋棉花	兒玉一造
東洋レーヨン	林徳太郎
王子製紙	藤原銀次郎
芝浦製作	岩原謙三
北海炭礦汽船	磯村豐太郎

これ等の最高幹部は、啻に、前記の如き三井王國の中軸的部所を擔當せるのみならず、更に又、他の多くの三井系事業に重役として君臨してゐる。之に加ふるに、此等最高幹部の配下に於ける他の多くの部將格を、三井系各種事業に重役として配置してゐる。斯様にして、資本王國三井の支配下にある産業は、少數の最高幹部の下に統制せられてゐるのである。試に、三井王國の最高幹部級及び部將格が、如何に多くの會社に重役として配置せられてゐるか、その一班を示すため、その重なる人々の重役名を列擧せば左の如くである。

[illegible]　琢[illegible](三井合名會社理事長)—三井鑛山取締役、芝浦製作所取締役、北海道炭礦汽船取締役會長、三井信託取締役會長、三井生命保險取締役社長。

有賀　長文(三井合名會社常務理事)—王子製紙取締役、東洋製鐵監査役、熱帶産業取締役、日本製鋼所監査役、三井信託取締役(代表)、關東水電取締役、三井生命保險取締役。

福井菊三郎(三井合名會社常務理事)—臺灣拓殖製糸取締役、東神倉庫取締役、三井鑛山取締役、三井信託監査役、三井銀行取締役、東洋棉花監査役、三井物産取締役、三井生命保險取締役。

岡島　與喜(三井合名會社參與)—東神倉庫監査役、電氣化學工業監査役、東京海上火災保險取締役。

池田　成彬(三井銀行常務取締役)—三井信託取締役(代表)、三井合名會社參與。

菊本直次郎(三井銀行常務取締役)—昭和銀行取締役。

米山　梅吉(三井信託代表取締役社長)—三井銀行取締役、日本電氣證券取締役、三井合名會社參與。

牧田　環(三井鑛山取締役)—松島炭鑛取締役、電氣化學工業取締役、基隆炭礦取締役會長、日本製鋼所取締役、神岡水電取締役會長、山東鑛業取締役、釜石鑛山取締役會長、北樺太石油取締役、關東水電取締役、東洋窒素工業取締役。

南岡　淨吉(三井鑛山取締役)—北樺太鑛業取締役。

岩田鍊三郎(三井鑛山取締役)—大正鑛業監査役、北海曹達取締役、神岡水電取締役。

中井　四郎(三井鑛山取締役)—北海曹達取締役(代表)、東洋窒素工業取締役、彦島製煉所監査役。

不破　熊雄(三井鑛山取締役)—彦島製煉所取締役(代表)。

安川雄之助(三井物産取締役)—東洋棉花取締役、東洋レーヨン取締役社長、山西興業取締役、日本[illegible]取締役、日本電氣取締役、芝浦製作所取締役、金福鐵路公司取締役、日本製粉取締役。

南條金雄(三井物産取締役)—大正海上火災保險取締役社長、東洋レーヨン取締役、東京計器製作所監査役、東洋バブコック取締役社長。

小林正直(三井物産取締役)—基隆炭礦取締役、東洋レーヨン監査役、松島炭礦取締役、朝鮮無煙炭監査役、日本製粉取締役(代表)。

瀬古孝之助(三井物産取締役)—豐田式織機取締役。

平田篤次郎(三井物産取締役)—東洋レーヨン取締役、大日本セルロイド監査役。

井上治兵衛(三井物産取締役)—帝國蠶絲倉庫取締役、朝鮮生絲監査役、東洋バブコック監査役。

奥村久郎(東神倉庫取締役)—大正運輸取締役社長。

岩原謙三(芝浦製作所取締役社長)—矢野鑛業取締役、小野田セメント製造取締役、足利紡績取締役社長、内外電熱器取締役社長、東京電氣取締役、京濱運河取締役、鶴見臨港鐵道取締役、臺灣製糖取締役、南國産業取締役會長。

磯村豐太郎(北海道炭礦汽船專務取締役)—山東鑛業監査役、日本製鋼所取締役、夕張鐵道取締役社長、共立汽船取締役社長。

樺山愛輔(日本製鋼所取締役社長)—函館船渠取締役、千代田火災保險取締役、泰昌銀行取締役社長、三光紡績取締役、千歳火災海上再保險取締役。

藤原銀次郎(王子製紙專務取締役社長)—關東水電取締役、電氣化學工業取締役會長、大淀川水力電氣取締役社長、共同パルプ取締役、藤[illegible]合[illegible]取締役、[illegible]取締役、南樺[illegible]取締役、樺太鐵道取締役社長、北海水力電氣取締役、[illegible]取締役、樺太電氣取締役社長。

高島菊次郎(王子製紙常務取締役)—共同パルプ取締役、樺太鐵道監査役、共同洋紙取締役、南樺鐵道監査役、樺太木材監査役、滿鮮殖産電氣取締役。

小笠原菊次郎(王子製紙常務取締役)—富士製紙常務取締役、日本フエルト取締役、共同パルプ取締役、共榮起業常務取締役、樺太鐵道取締役、共同洋紙取締役、南樺鐵道取締役、樺太木材常務取締役、滿鮮殖産電氣取締役、北海水力電氣取締役、日露木材取締役、露領林業取締役、樺太電氣取締役。

兒玉一造(東京棉花取締役社長)—豐田紡織取締役、三井物産取締役、豐田紡織廠取締役、南北棉業取締役、新井紡織取締役。

大谷泰助(東洋棉花取締役)—南北棉業取締役社長、上海新紡織取締役。

槇野健三(東洋棉花取締役)—上海紡織取締役社長。

高橋利喬(電氣化學工業常務取締役)—大淀川水力電氣取締役(代表)。

武智直道(臺灣製糖取締役社長)—日本不動産取締役、共同保全監査役、森永製菓監査役、日本徵兵保險監査役。

三、三井王國の資本網

三井王國の巨大なる資本力の核心をなすものは、云ふ迄もなく、三井合名の資本である。合名の資本は既述の如く壹億圓である。しかし、筆者の調査し得たる合名所有の株式拂込

金だけでも、三井系の支配的會社十七社で二億八千十五萬六千圓である。(その算出の仕方については後掲第二表の備考參照)ところが、三井の支配的事業の多くは、後述の如く、斯界第一のものの多く、從つて、その實價は拂込資本の數倍してゐるものが多いのである。故に、いま若し、その實價を二倍と見ればこれだけで約五億六千萬圓であり、二倍半と見れば約七億圓である。外に、三井合名の關係する株式が筆者の調査し得たるものだけで十二社、三百九十四萬三千圓ある。(以上の詳細は後に表示する。)その他、山林、農園、市街宅地、ビィルヂング等、合名直轄のものが巨大の額に達する。又、合名以外、三井一族各個が所有してゐる財産も少からぬ高に達するであらう。しかしそれ等を全部加算しても、恐らく、十億圓内外を多く出でないであらう。尙ほ、三井合名の純資産を見るためには、以上の中から、合名が銀行其他から借入てゐる金を差引かねばならないが、恐らく、それは大した額ではないやうである。

しかし乍ら、三井王國の核心的資本源は、單に右の三井一族の資産だけではない。この外に、三井銀行、三井信託、三井生命を通じて、その支配下に掌握せる中小資本家其他の國民大衆の巨額の預金及び準備金がある。その合計は別掲第一表の如く九億七千萬圓餘の巨額であり、之に株主勘定を加算すると約十一億二千萬圓になる。然るに、此の中、合名の出資額は僅かに四千四百二十八萬圓であるから、要するに三井は、その銀行、信託、及び保險事業に由つて、その投下資本の實に二十五倍餘を、その支配下に置いてゐるわけである。尙ほ、各個に於ける詳はしきことは表示の數字を參照せられよ。

(一)三井支配の金融資本高表(昭和三年末現在)

	三井銀行	三井信託	三井生命	合計
株主勘定	千圓 一一七、〇〇八	千圓 二三、五〇〇	千圓 五九〇	千圓 一四一、〇九八
預金又は責任準備金	六〇五、六二〇	三六四、九八四	六、九八五	九七〇、五九四
(A)合計	七二二、六二八	三八八、四八四	七、五七五	一、一二八、六七五
(B)三井系資本	四〇、九八〇	三、八一一	三六一	四五、六五三
(A)に對する(B)の率	五%五九	一%〇一	四%七七	四%〇八
(B)に對する(A)の率	一七八%八	九九%九	二〇九%八	二四五%〇
(C)三井合名資本	四〇、四七〇	三、五六三	一五〇	四四、一八一
(A)に對する(C)の率	五%五九	〇%九四	一%九八	三%九一
(C)に對する(A)の率	一八一%〇	一〇六二%六	五〇%九	二五五%六

(備考)三井系所有資本の算出の仕方については第二表備考を見よ。

此の金融資本と、三井合名の資産とが大體に、三井王國の資本力の源泉である。卽ち、三井王國の資本力の過半は、預金其他の金融資本であるわけだ。之に由つて、銀行、信託、保險等の金融業を支配する財閥の資本勢力が、驚くべき膨大の高に達するに反し、これ等の金融資本の支配力なき財閥勢力が、停頓乃至凋落の傾向に在る所以を窺ひ得るであらう。又我が財閥の多くが、銀行、信託、保險業への進出に全力を擧げてゐるわけ

もあるであらう。

扨て、三井合名の資本は多く三井合名自らの出資となつて現はれるが、三井支配の金融資本の多くは、三井系諸會社の出資、金融力等となつて、諸會社を支配してゐる。例へば、三井合名の出資の外、三井物産その他の直系又は傍系會社の出資してゐる會社の數、及び金額は少からぬ高に達するが（前掲三井系諸會社系統圖に於ける子會社は主としてその出資關係を示すものである）、それ等の資金の多くは金融資本を利用せるものである。例へば、最近も王子製紙は、富士製紙の故穴水一派の所有株二十一萬を買入れ、以て、富士製紙を三井の支配下に置くに至つたが、その所要資金千何百萬圓は三井銀行の手から出てゐる。その他、王子製紙は、その拂込資本金其他株主資産七千百萬圓餘に對し、他會社に約三千五百萬圓の多額を出資をしてゐるが、その資金の全部は銀行よりの借入金、又は社債（三井銀行引受）に依頼してゐる。

更に、三井王國の資本力を形成するものとしては、三井系幹部の資産がある。これが又、一角の富豪たるものが多いのだから、その額も少くないが、しかし、以上二大資本源に比較せば殆んど云ふに足らない。が、兎に角、三井系の資本力と云ふ場合には、以上の如く、合名の出資、支配的直系及傍系會社の出資、並に三井系幹部の出資を包含してゐる。

扨て、然らば、三井王國は、これ等の資本力を以て、幾何の[illegible]に資本を支配して[illegible]か、[illegible]持續するであらう。こゝで一寸細目に亘るが、本文の内容にわたるため、その詳しき内容は後回を略して表示することにしたい。從つて、一寸の間、表が多くなるが、暫く、御辛抱を御願ひする。

直系會社は三井合名の資力が最も集中して投資せられてゐるもので、その總拂込資本二億四千二百萬圓中、その九割までは合名の出資である。第二表の示す通りである。

（二）直系會社資本支配表（大體昭和三年末）

會社名	拂込資本（千圓）	三井系所有	同上割合	三井合名所有	同上割合
三井銀行	六〇、〇〇〇	四〇、八六〇	六八・一	四〇、四七〇	六七・四五
三井信託	七、五〇〇	三、八一一	五〇・八一	三、五六二	四七・四九
三井生命保險	五〇〇	三六二	七二・五	二五〇	五〇・〇〇
三井物產	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇
三井鑛山	六二、五〇〇	六二、五〇〇	一〇〇・〇〇	六二、五〇〇	一〇〇・〇〇
東神倉庫	一二、五〇〇	一二、五〇〇	一〇〇・〇〇	一二、五〇〇	一〇〇・〇〇
小計	二四二、〇〇〇	二一九、一六五	九〇・六六	二一八、六八八	九〇・三七

（備考）三井合名、及三井系所有資本高は、總株數に對する三井所有株の割合を求め、その割合を拂込資本に乘じたものである。從つて、實際のそれとは多少異る。蓋し、新舊株を必しも同數づゝ所有してゐないからである。以下諸表に於ける三井系所有の分皆同じ計算法に由り算出す。

以上の直系會社は又、前掲系統圖の如く、少からぬ子會社叉は孫會社を支配してゐる。その中、三井の支配力の決定的な會社は既述の如く三十七社であるが、うち、資本金の分明の分三十三社の拂込資本金は別掲第三表の如くにて、その合計は一億七千七百餘萬圓である。この中、三井系の資本は、表示の如く著しくその割合を異にするが、その分明の分のみの平均は四八％五三であつて、第三表の示す通りである。

（三）三井直系會社の支配的子及孫會社表（昭和十二年末）

會社名	公稱資本	拂込資本	三井系所有	同上割合
東洋棉花	千円 三五、〇〇〇	千円 三五、〇〇〇	千円 三一、三五九	％ 八九・〇六
東洋レーヨン	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇
内海紡織	二、五〇〇	二、五〇〇	一、二二四	四八・九八
日本製粉	二四、九三八	二四、九三八	一四、九五〇	五九・九四
臺灣製糖	六三、〇〇〇	三八、一〇〇	二、三五五	六・一八
郡是製絲	二〇、六六七	一二、七一七	四五三	三・八七
釜石鑛山	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一八、九五〇	九四・七五
神岡水電	五、〇〇〇	三、〇〇〇	一、四八八	四九・六〇
基隆炭鑛	一〇、〇〇〇	七、七五〇	四、一九六	五四・一四
臺灣炭礦	一、五〇〇	一、一二五	四八六	四三・一八
大日本炭鑛	一〇、五〇〇	一〇、五〇〇	二、九九九	二八・五七
太平洋炭礦	二一、〇〇〇	五、五〇〇	四、五一四	八二・〇七
三機工業	二、五〇〇	六二五	五七四	九一・八〇
以上小計	一八五、六〇五	一三九、七五五	六七、九九八	四八・五三
天滿紡織	二、七五〇	二、七五〇		
上海紡織	六、〇〇〇	五、〇〇〇		
南北棉業	一、〇〇〇	五〇〇		
東京モスリン紡織	一五、二五七	一〇、三八一		
滿鮮企業	二五〇	二五〇		
極東煉乳	一、五〇〇	一、二〇〇		
日本樟腦	九、〇〇〇	六、七五〇		
東洋バブコック	一、七五六	一、七五六		
三泰油房	（銀）三〇〇	（銀）三〇〇		
湯淺電池	五、〇〇〇	一、七五〇		
横濱撚絲	一、二〇〇	九〇〇		
東京計器製作所	三、〇〇〇	二、一〇〇		
北海道硫黄	三、〇〇〇	二、二五〇		
北海曹達	三、〇〇〇	二、一〇〇		
松島炭鑛	五、〇〇〇	三、六〇〇		
彦島製煉所	一、五〇〇	四五〇		
大正運輸	二、〇〇〇	一、五〇〇		
南洋倉庫	五、〇〇〇	一、四五〇		
三信建物	二、〇〇〇	五〇〇		
日華蠶絲	二、五〇〇	二、五〇〇		
以上小計	七一、〇三三	四七、九八七		
合計	二五六、六三八	一七七、七四二	＊八六、五四一	＊四八・五三

（備考）資本金不詳の爲本表より除外せるものに次の四會社あり。東洋ポッター紡績。滿洲棉花。獨逸物産會社。佛蘭西物産會社。

＊印は三井系所有分明の分の割合に從つて推算す。

直系六社に又、三井持分の僅少なる會社に投資してゐるが、その會社數十五社で、その各資本高は第四表の如くにて、合計拂込額は約二千五百萬圓である。この中、三井系所有の割合は、分明の分四社の平均で僅かに七%七六である。第四表を見られよ。

（四）三井直系會社の準支配的子及孫會社（大體昭和三年末）

	資本金	拂込資本	三井系株式 高	同上割合
	千圓	千圓	千圓	%
豊田紡織	八,〇〇〇	七,〇〇〇	四一〇	五.九六
豊田紡織廠	一,〇〇〇	七五〇	三八	五.〇〇
豊田式織機	三,〇〇〇	二,二七五	三五八	一五.七三
日本煉瓦製造	七〇〇	七〇〇	三三	四.六四
小計	一二,七〇〇	一〇,七二五	八三二	七.七六
菊井紡織	四,〇〇〇	四,〇〇〇		
日本電氣	三,〇〇〇	二,五五〇		
三鱗煉炭	二〇〇	一二五		
岩田煉炭原料	三〇〇	一五〇		
安全索道	二〇〇	二〇〇		
撫順炭販賣	三,〇〇〇	一,五〇〇		
朝鮮生絲	一,〇〇〇	七五〇		
國際無線電話	五〇〇	一二五		
青島電氣	一,〇〇〇	一,〇〇〇		
神中鐵道	三,〇〇〇	二,五一八		
東洋窯業工業	五,〇〇〇	一,二五〇		
小計	三,[illegible]	[illegible]		[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]		[illegible]

以上の外、直系會社の關係せる諸會社にして、しかも、三井勢力の左程支配的でない諸會社が前掲系統圖の如く十二ある。その外に、同樣三井關係と見られるものに傍系のそれに東京電氣がある。以上一々の資本額は簡潔のため省略するが、その合計は公稱一億一千六百八十五萬圓、拂込七千百九十五萬圓である。外に、三井關係と目され得るものに東京電燈があり、その資本金は公稱拂込同額にて四億七百十四萬九千圓である。以上合計實に四億七千九百九萬九千圓に達する。

次に傍系諸會社十一社の資本であるが、詳細は第五表の如くにて、その合計拂込資本は二億三千三百萬圓餘に達する。しかし、三井合名所有のものは（それの分明の九會社合計に由る）、僅かにその二六%一七にして、三井系所有のものは二六%七四である。即ち、傍系諸會社に於ては、三井王國は自己の資本の約三倍八割の資本を支配してゐるわけである。委はしくは第五表を見られよ。

（五）傍系諸會社表（大體に昭和三年末）

會社名	拂込資本金	三井系所有株式	同上割合	三井合名所有	同上割合
	千圓	千圓	%	千圓	%
王子製紙	四八,六八三	一五,九九九	三二.八四	一一,六六四	二三.九六
北海道炭礦汽船	四三,六七四	一九,五一八	四四.六九	八,六〇四	一九.七〇

鐘淵紡績	二八、五九六	一、九一九	六・七一	一、五三〇	五・三五
芝浦製作所	二〇、〇〇〇	一一、六七一	五八・三六	一一、二六〇	五六・三〇
電氣化學	一七、五〇〇	二、五八三	一四・七六	一、二〇〇	六・八六
小野田セメント	一八、六〇〇	二、〇五〇	一一・〇二	一八、四一四	九九・〇〇
熱帶產業	五、五二五	二、四一四	四三・六九	二、一五九	三九・〇八
大日本セルロイド	一〇、〇〇〇	二、七八六	二七・八六	二、七八六	二七・八六
臺灣電力	二八、二〇〇	一六四	〇・五八	一五八	〇・五六
以上小計	二二〇、七七八	五九、〇四五	二六・七四	五七、七七五	二六・一七
大正海上火災	一、二五〇	＊一、二五〇	＊一〇〇・〇〇		
三越	一二、〇〇〇	一、〇六四	九・八七		
總計	二三四、〇二八	六一、三五九	二六・二二		

（備考）＊印は不詳なるも決算報告書の形式其他に由り一〇〇%と假りに推定す。

傍系會社も亦、支配的子會社を持つてゐる。その資本金分明の數二十二會社、拂込資本一億七千萬圓餘である。この中、三井傍系會社所有の分明のものの十二社について見れば、その割合は平均四一%三六である。然るに、親會社たる傍系會社に於ける三井關係の資本は二六%七四であるから、右に之を乘ずると三井系所有は僅々一一%になる。三井系からその子會社に進むに從つて、三井系資本が如何に僅かの割合を以て、絕對支配權を掌握しつゝあるかの狀を窺ひ得るであらう。詳はしくは第六表を見られよ。

（六）傍系會社の支配的子會社表（昭和十年末）

	資本金	拂込資本	三井系所有	同上割合
	千円	千円	千円	%
富士製紙	七七、七〇〇	五八、九一五	七、五二五	一二・七七
樺太鐵道	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	四、八七九	九七・五七
南樺鐵道	一、二〇〇	九〇〇	八〇一	八九・〇五
北海道鐵道	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	一、二〇〇	三〇・〇〇
北海水力電氣	三一、一二五	一二、四五〇	六、三一八	五〇・七五
樺太電氣	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	四、八七九	九七・五七
樺太木材	五〇〇	五〇〇	四七五	九五・〇〇
日本製鋼所	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二二、三七四	七四・五八
夕張鐵道	●三、〇〇〇	二、五四九	一、七二四	六七・六三
南國產業	二、五〇〇	二、〇〇〇	六六八	三三・四一
內外電熱器	三、二五〇	三、二五〇	七六四	二三・五〇
日本フエルト	二、〇〇〇	一、二五〇	四三四	三四・七五
小計	一八一、二七五	一三五、八一四	五三、〇四一	四一・三六
大淀川水力電氣	五、〇〇〇	一、二五〇		
共同パルプ	三、〇〇〇	七五〇		
共同洋紙	五、〇〇〇	五、〇〇〇		
共榮起業	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		
共立汽船	五、〇〇〇	二、七五〇		
上海製造絹絲	×一五、〇〇〇	一五、〇〇〇		
錦華紡績	七、〇〇〇	七、〇〇〇		
南米拓殖	一〇、〇〇〇	二、五〇〇		
滿鮮殖產電氣	五〇〇	一二五		

小計	六〇,五三〇	四四,五七五	●	●
合計	二四一,七七五	一〇〇,一九五	●七〇,六六八	●四一・三六

（備考）本表の外价川鐵道の資本金不明。●印は資本額は兩なるも一兩一圓五十錢として圓に換算す。●印三井系所有株分明の割合に準じて、不明の分を推算せるものである。

以上は傍系會社の支配的子會社であるが、尙ほ他に準支配的小會社が第七表の如く六社ある。その拂込資本の合計は二千九百萬圓で、うち、三井の傍系會社所有の割合は分明のもの四社の平均で六%二四である。

（七）傍系會社の準支配的子會社表

	資本金	拂込資本	三井系株式 高	同上割合
	千円	千円	千円	%
函館水電	一三,五〇〇	八,三〇〇	八八三	一〇・六四
森永製菓	一五,〇〇〇	一三,八〇〇	四六〇	三・三三
神戸生絲	三,〇〇〇	二,五五〇	二〇一	七・八七
金福鐵路公司	四,〇〇〇	二,〇〇〇	一一八	五・八八
小計	三五,五〇〇	二六,六五〇	一,六六二	六・二四
日露木材	一,五〇〇	一,五〇〇		
露領漁業	五,〇〇〇	一,二五〇		
小計	六,五〇〇	二,七五〇		
合計	四二,〇〇〇	二九,四〇〇	一,六六二	六・二四

以上は、三井王國の直系及び傍係會社、並に、それ等會社の子會社であるが、その他、三井王國は又、合名自ら、各種の事業に投資してゐる。しかし、是等の投資會社に於ては、三井は單に或は重役を出し、或は大株主の地位を維持してゐるに止り未だ支配的ではない。假りに之を三井の關係會社と呼べるなら、その會社は第八表に列擧の如く、日本銀行外十四會社（外に一社）にして、その拂込資本金は實に約二億九千萬圓の巨額を算する。しかし、その中、三井合名の投資せるものは、分明のもの十二社平均に於て僅かに一%六二を占むるに過ぎない。

（八）三井合名の直接關係せる諸會社表（昭和三年末）

會社名	資本金	拂込資本	三井合名所有株式 金額	同上割合
	千円	千円	千円	%
日本銀行	六〇,〇〇〇	三七,五〇〇	四〇九	一・〇九
横濱正金	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	六五〇	〇・六五
東京海上火災保險	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	九三九	三・一三
安田信託	三〇,〇〇〇	七,五〇〇	六二	〇・八三
住友信託	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	三八	〇・七五
日本無線電信	二〇,〇〇〇	六,七二五	一五	〇・二二
東亞興業	二〇,〇〇〇	一三,〇二一	八四〇	六・四五
東洋製鐵	三六,〇〇〇	三〇,六〇〇	四一六	一・三六
帝國劇場	三,四五〇	三,四五〇	一六一	四・六六
帝國ホテル	六,〇〇〇	五,七〇〇	二三七	四・一六
都ホテル	二,〇〇〇	一,七五〇	八八	五・〇〇
復興建築助成	一〇,〇〇〇	二,五〇〇	八八	三・五〇
小計	三二七,四五〇	二四五,七四六	三,九四三	一・六〇
日本航空輸送	二,〇〇〇	八七五		

日本電氣證券	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇		
小　計	一三、〇〇〇	五、八〇五		
合　計	三九、四五〇	・二三九、六三一	＊四、〇四四	＊二、〇三三
外、東京發電×	六八、三〇〇	四四、八一七		

(備考) ×印東京發電は、次節の綜合表作成後、執筆後に發見したもの故、綜合表の資本から漏れてゐる。その三井合名の持株五萬株(五十圓拂込)である。又、日本航空の三井合名持株は五千株(十二圓五十錢拂込)である。

三井王國の資本網の大體は、以上に由つて略ぼ鳥瞰し得たつもりである。尤も、未だ調査漏れのものも少くないであらう。現に、第八表備考に附記せる東京發電は調査に漏れておつた。又、王子製紙が最近その子會社として東洋製紙に投資したことも本文諸表作成後に於て分つたことで、從つて、本文の諸表からは漏れてゐる。又、支配的、準支配的、關係會社の三大區分の仕方についても、粗漏があるであらう。だが、以上に由つて、資本王國三井の資本網の大輪廓は、可なり具體的に之を示すことが出來たものと思ふ。

四、三井王國の資本的支配力

各種産業に對する三井王國の資本網は前節既述の如くであるが、それ等資本の總計は、一體、幾何に達するか。いま三井王國の支配的諸會社について、前節記述の分類に從ひ之を總括すれば別掲第一表の如くにて、その總計資本は、公稱約十六億七千萬圓、拂込十二億八千萬圓餘である。この中、三井の支配が決定的のもの、拂込資本約八億二千三百萬圓、同準支配的のもの四億六千百萬圓であつて、それ等の直系、傍系、及び子會社別は第一表に示す通りである。

(一) 三井支配の諸會社資本表

	(A)三井の支配一に在るもの 公稱資本	(A) 拂込資本	(B)同上準支配下のもの 公稱資本	(B) 拂込資本	以上合計 公稱資本	以上合計 拂込資本
	千圓	千圓	千圓	千	千圓	千
直系六社	三〇七、〇〇〇	二四二、〇〇〇	—	—	三〇七、〇〇〇	二四二、〇〇〇
傍系十一社	三四〇、四一七	二三三、〇六八	＊四〇七、一四九	＊四〇七、一四九	七四七、五六六	六四〇、二一七
直系子會社	二五六、六一八	一七七、七四三	三一、〇〇〇	二四、九七五	二九〇、六一八	二〇二、七二五
傍系子會社	二四一、七七五	一七〇、一九九	四二、〇〇〇	一九、四〇〇	二八三、七七五	一八九、五九九
合計	一、一八五、八一〇	八二三、九六九	四八三、一四九	四六一、五二三	一、六六八、九五九	一、二八四、四九一

(備考) 資本金不詳のため、本表の計算に漏たるものに直系子會社Aに三社ある。＊印は東京電燈會社である。

しかも、三井の支配會社の多くは、[illegible]秀にて、その[illegible]は拂込の二三倍乃至それ以上するものが少くない。故に、三井の實際資本力を見るためには、單なる拂込高に由らず、その實際價値に由らなければならない。株價の左程高くないものも多少あるので、いま之を考慮して、大體に拂込資本の平均二倍がその實際價値と見ても過大評價ではないであらう。さうすると、三井王國の支配(決定的及準支配的の合計)する會社資本の實價は實に約二十五億六千九百萬圓の巨額に達する。

此の外、三井合名の關係せる會社（或は大株主として、或は重役を配置して）にして、未だ三井勢力の支配的ならざる會社資本が、公稱約三億五千萬圓、拂込約二億五千萬圓に達する。他に、直系及傍系會社の關係せる會社にして未だ三井勢力の支配的ならざるもの、資本が、公稱約一億一千七百萬圓、拂込約七千二百萬圓を數へる。

斯くて、以上の合計は、公稱資本二十一億三千五百萬圓、拂込資本十六億六百萬圓、同上實際價値（三井の支配的會社の拂込だけ二倍する）二十八億九千萬圓である。即ち、三井王國の支配又は關係してゐる諸會社の實際の資本は、大體に三十億圓の巨大の額を算するわけである。第二表を見られよ。

（二）三井支配及關係諸會社資本高表

	公稱資本	拂込資本	同上實價
三井支配諸會社	千圓 一、六六八、九七九	千圓 一、二八四、四九二	千圓 ＊二、五六八、九八[illegible]
三井合名關係[illegible]直系及傍系[illegible]會社	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]
三井合名	[illegible]	[illegible]	[illegible]
總計	[illegible]	[illegible]	[illegible]

（備考）＊印は平均拂込額の二倍の株價ありと見做して拂込資本を二倍す。

以上の外、三井王國關係の會社資本と云ふ場合には、三井合名の三億圓をも加算せねばならぬ。さうすると、三井王國の關係會社資本實價は三十一億九千萬圓に達する。しかし、三井合名を加算することは、明かに、資本の二重計算である。又、直系又は傍系會社の子會社の資本を、そのまゝ合計することも、直系傍系會社の投下資本だけ二重計算になる。が、この分はその高が左程多額ではなく、且つ、他に未計算に漏れてゐる三井系會社もあるわけ故、そのまゝにして計算しても大過ないであらう。

扨て、次の問題は、斯の如き巨大な資本の中、三井王國それ自らの投下資本は幾何に達してゐるからである。先づ、各種系統の會社資本中、三井系、又は三井合名の投下資本の割合を一表に纏め見れば第三表の如くなる。

（三）三井系會社資本と三井の投下資本

諸會社の位地	公稱資本	拂込資本	三井系所有	同上割合	合名所有	同上割合
三井合名	三〇〇、〇〇〇千円	三〇〇、〇〇〇千円	三〇〇、〇〇〇千円	一〇〇・〇〇	三〇〇、〇〇〇千円	一〇〇・〇〇
直系六社	三四七、〇〇〇	二四二、〇〇〇	二一九、一五三	九〇・五六	二一八、二八三	九〇・二〇
傍系十一社	三四〇、四一七	二三三、〇二八	六一、三五九	二六・三三	五七、七六九	二四・七九
支配的直系子會社	二五六、六一八	一七七、七四二	八六、二四一	四八・五二	—	—
支配的傍系子會社	二四一、七七五	一七〇、一九九	七〇、三九四	四一・三六	—	—
以上小計	一、一八五、八一〇	八二二、九六九	四三七、一四七	五三・一二	二七六、〇五二	三三・五四
準支配的直系子會社	二四、〇〇〇	二四、九七三	一、九三八	七・七六	—	—
準支配的傍系子會社	四二、〇〇〇	二九、四〇〇	一、八三五	六・二四	—	—
以上合計	一、二六一、八一〇	八七七、三四二	四四〇、九二〇	五〇・二六	二七六、〇五二	三一・四七
合名關係會社	三四九、四五〇	二四九、六二二	四、〇四四	一・六二	四、〇四四	一・六二

之に由ると、三井系の資本は、平均して、直系六社に於ては九〇%五六、傍系十一社に於ては二六%三三であり、直系會社がその支配的子會社に投下してゐる資本は、その子會社全資本の四八%五二、傍系會社の同上は四一%三六である。而して、以上の表面的平均は、合計約八億二千三百萬圓の拂込資本の中、その五三%一二を三井系資本が占めてゐることになる。大體にその投下資本の割合が、少からず高率であり、從つて、その勢力が如何に決定的であるかを容易に伺ひ得る。之に反し、直系及傍系會社の投資してゐる準支配的子會社のそれは、僅かに六%又は七%臺である。だが、これ等は、資本關係以外に、本文第一節に既述の他の諸條件に由つて、三井の準支配權が確立されてゐるわけである。轉じて、三井合名の「關係會社」に對するそれを見るに、その率は僅々一%六二に過ぎない。

三井王國系の諸會社資本中、三井王國それ自身の投下資本は幾何に達してゐるか、換言せば、三井王國はその投下資本の何倍に相當する資本を支配してゐるか、と云ふ以上の説明は、しかし、單なる表面上の見方である。何となれば、子會社に對す

る三井系所有資本は、三井王國それ自身の投資ではなくして、三井王國がその幾割かを占むるに過ぎない直系及び傍系會社の投下資本に外ならないからである。

されば、三井王國は、自己の投下資本に比し、何倍の會社資本を支配してゐるかを見るためには、右の點を考慮せねばならない。斯様にして作成したのが別掲の第四表である。之に由れば、直系會社及その子會社に於ては、三井王國は、その投下資本の約二倍の會社資本を支配してゐる。詳はしくは第四表の上段に算出し置ける各種の割合について見よ。

(四)三井の支配會社資本と三井の投下資本との割合

	直系會社	傍系會社	合計
(イ)親會社拂込資本	千円 二四二、〇〇〇	千円 *二三三、〇〇八	千円 四七五、〇〇八
(ロ)支配的子會社同上	一七七、七四一	一七〇、二一九	三四七、九六〇
(ハ)以上小計	四一九、七四一	四〇三、二二七	八二二、九六八
(ニ)準支配的子會社同上	二四、九七三	二九、四〇〇	五四、三七三
(ホ)總計	四四四、七一四	四三二、六二七	八七七、三四一
(ヘ)親會社に於ける三井系所有高	二一九、一五三	六一、三五九	二八〇、五一二
(ト)同上三井合名所有	二一八、三一八	●五七、七七五	二七六、〇九三
(ヘ)に對する(ハ)の%	一九一%五	六五七%二	二九三%三
(ト)に對する(ハ)の%	一九二%三	六九七%九	二九八%〇
(ヘ)に對する(ホ)の%	二〇二%九	七〇五%一	三一二%七
(ト)に對する(ホ)の%	二〇三%七	七四八%八	三一七%八
(イ)に對する(ホ)の%	一八三%八	一八五%六	一八四%七
(ハ)に對する(ヘ)の%	五二%二一	一五%二一	三四%〇八
(ハ)に對する(ト)の%	五二%〇一	一四%三二	三三%五四
(ホ)に對する(ヘ)の%	四九%二七	一四%一八	三一%九七
(ホ)に對する(ト)の%	四九%〇九	一三%三五	三一%四七
(ホ)に對する(イ)の%	五四%四一	五三%八六	五四%一四

(備考) ●印には大正海上火災のもの不詳につき含まず。

かく、直系及其子會社關係に於ては、三井王國は僅かに、その投下資本の二倍の資本を支配してゐるに過ぎない。しかし、之を傍系會社について見れば、平均大體に七倍内外の會社資本を支配してゐることになる。例へば、三井合名は、その投下資本に對し、傍系の決定的支配會社に於ては約六倍九八、準支配會社迄を合計せる同上に於ては約七倍四九の資本を支配してゐる。又、之を三井系投下資本について云ふも、前者の場合は六倍五七、後者の場合は七倍〇五の資本を支配してゐる。換言せば、三井王國は、その傍系會社に於ては、一億圓の資本を以て七億圓内外の資本を支配してゐるのである。大財閥の資本支配力が、如何に、累進的に增大するかの狀を窺ふに難くないであらう。

かくて、以上直系及傍系平均に於ては、三井王國はその投下資本の大體約三倍内外の資本を支配してゐることになる。その各種の場合に於ける詳はしき割合については、本文の簡略上別

掲第四表について參照せられたい。

轉じて、三井王國の支配する資本が、日本全國の會社資本のどれだけを占めてゐるかを見る。先づ、三井關係會社資本合計が全國會社資本に對する割合を見るに、實に一八%三二である。所で、三井關係事業は專ら、鑛工商業であるから、いまその全國合計に對する割合を見れば二〇%七四に達する。しかも、三井の支配會社はその實際價値が他に比し遙かに優れてゐる。故にいまその實際價値を以て全國會社資本に比較せんか、その割合は實に二四%八四即ち約二割五分に達し、同じく鑛工商業合計に對するそれは二八%一三に達する。實に、三井王國一手にて全國の重なる鑛工商業(會社組織の)資本の約三割近くを掌握してゐるわけだ。三井王國の資本的支配力の如何に强大なるかに驚かざるを得ないであらう。

尤も、右は三井の支配未だ届かざる關係會社迄をも含めたそれであるが、いま三井王國の支配的資本のみについて見るに、尙ほ、その支配的位置は、その實際價値に於ては、全國會社資本の一三%四六、東京電燈を加算せる同上一六%六八である。而して、之を三井が專ら關係せる全國商工鑛業の會社資本に比すれば、前者一五%二三、後者一八%八八である。尙ほ、各種の立場から見た三井支配資本の全國會社資本に對する割合については第五表を參照せられたい。

(五)三井支配の資本と全國會社資本との割合

拂込資本出資額計	三井關係會社資本(百万円)	全國會社資本總計に對する%	全國商工鑛運輸業計に對する%	全國商工鑛業に對する%
(イ)三井關係諸會社計	二、三二五	一八・三二	一八・六二	二〇・七四
(ロ)同上實際價値*	三、一三八	二四・八四	二五・二四	二八・一三
(ハ)三井合名及同支配會社	八二三	六・五一	六・六二	七・三七
(ニ)同上實際價値*	一、六四六	一三・〇三	一三・二四	一四・七五
(ホ)三井支配及準支配會社	八七七	六・九四	七・〇五	七・八六
(ヘ)同上實際價値*	一、七〇〇	一三・四六	一三・六七	一五・一三
(ト)(ホ)に東電加算	一、二八四	一〇・一六	一〇・三三	一一・五一
(チ)(ヘ)に東電加算	二、一〇七	一六・六八	一六・九四	一八・八八

(備考) 三井關係のものは多く昭和三年末、全國會社資本は昭和二年末現在。而して、本表中の全國會社資本總計は百二十六億三千四百萬圓。同じく鑛工商運輸業計は百二十四億三千五百萬圓。同じく鑛工商業計百十一億六千萬圓である。*印實際價値とは、(ハ)の高を假りに二倍したものである。

以上に由つて、全國會社資本(それが重なる我が産業資本の全部であると見て大過ない)に對する三井王國の資本支配力が、如何に强大なるかを推知するに難くない。しかし乍ら、三井王國の關係事業は、既述の如く、專ら、商工鑛業であるが、しかし、同じく工業中に於ても電燈瓦斯水道等の公共事業には殆んど手を出してゐない。又、運輸事業に對してもその投資極めて

僅少であるとも、或は、直接にも多少關係してゐないことはない。しかし、それ等は、專ら、主たる事業の附隨事業として行はれてゐるのが大部分である。故に、全國産業に對する三井王國の資本的支配力をヨリ正確に見るためには、專ら、三井關係の事業別内に於て比較せねばならぬ。斯様な考慮に基いて作成したのが別掲第六表である。第六表は、全國商工鑛業會社資本の合計から、三井の關係薄き瓦斯、電氣、水道事業を控除し、三井系會社からも、電氣及び運輸事業の資本を除外し、以て、兩者の割合を求めたものである（參考のため三井の分からは右電氣及運輸事業の資本を除外せざるものをも併記しておいた）。

（六）三井關係事業に於ける三井支配資本と全國會社資本との割合

拂込資本及出資額計	(A)三井關係諸會社	(B)全國商工鑛業會社計（但し瓦斯電氣水道控除）	(B)に對する(A)の%
	百萬円	百萬円	%
(イ)三井合名及同支配會社	一、一二三	八、六八五	一二・九三
(ロ)同上實際價値＊	一、九四六	八、六八五	二二・四一
(ハ)三井支配及準支配會社△	一、一七七	八、六八五	一三・五五
(ニ)同上實際價値＊	二、〇〇〇	八、六八五	二三・〇三
(ホ)(ハ)より電氣及運輸業控除	一、〇四三	八、六八五	一二・一五
(ヘ)同上實際價値＊	一、七三二	八、六八五	一九・九三
(ト)三井關係諸會社計	二、三二五	八、六八五	二六・六六
(チ)同上實際價値＊	三、一三八	八、六八五	三六・一三
(リ)(ト)より電氣及運輸業控除	一、七七三	八、六八五	二〇・四一
(ヌ)(リ)より同上控除	一、九六六	八、六八五	二二・六四

（備考）三井各會社の分は大部に昭和三年末現在。但し昭和二年末その他のものを含む。全國會社の分は昭和二年末現在。＊印實際價値とは假りに(イ)の高を二倍したるもの。△印中には東京電燈會社を含ます。

之に由ると、三井王國の資本力が、全國商工鑛業（瓦斯電氣水道控除）會社資本に對して占むる位地は、三井の支配的諸會社資本だけで、一二%一五、同上實際價値に於て一九%九三である。之に三井關係會社の資本迄も加算せるものに於ては、表面額で二〇%四一、實際價値で二二%六四である。即ち、三井王國は全國の商工鑛業（瓦斯電氣水道を除く）の約二割の資本を支配し、約二割四分近くの資本に關係してゐるわけである。三井王國の資本的支配力が、如何に強大であるかに再び驚かざるを得ない。

しかも、斯くの如き三井王國の資本支配力は、その強大なる資本力と、獨占時代の潮流と、我が財界の恐慌的混亂とを利用して、愈々急激なるテンポを以て強大化しつゝある。現に、昭和二年の金融大恐慌後、三井の傘下に併呑せられたる重なる諸會社のみにても、日本製粉、大日本炭礦、日本樟腦（以上鈴木系より）東京モスリン紡織、富士製紙等あり、又、三井物産は鈴木、高田の倒壊に由つて愈々貿易上の獨占力を強大にし、受

國生命系の高砂生命亦、三井に買收せられて著しく飛躍しつゝある。思ふに、金解禁を中心とする次の我が財界混亂期に於ても、三井王國の產業併呑は、更に飛躍的であるであらう。現に弱少會社の淘汰の名に於て、我が大財閥は、何れも、平價金解禁に由る財界の衝擊を、右の意味に於て寧ろ歡迎してゐるのである。

五、三井系事業の各產業別に於ける優位

三井王國の產業支配力は、以上、全體的に見た場合よりも、更に、個々の產業別に見た場合に於て更に顯著である。何しろ、三井は諸財閥中第一の商賣人であり、事業經營の玄人だ。他の財閥の多くが、殿樣商賣の嫌あるのとは丸で趣を異にしてゐる。而して、三井王國第一の特色は、その關係事業が極めて廣汎に亙つてゐることゝ、それ等の何れも相當の成功を收めてゐることゝである。此の點、三菱が主として重工業、銀行保險、土地に、安田が銀行、信託、保險に主力を蹈踏して居るのと非常な相違だ。それだけ三井のわが財界に於ける活躍は華々しく、正に千兩役者の感がある。

三井の支配下にある事業はこれを大別すると、(一)銀行保險信託、(二)商事貿易、(三)纖維工業、(四)食料品工業、(五)機械工業、(六)製鋼製煉業、(七)化學工業、(八 陸海運業、(九)鑛業、(十)電燈電力業、(十一)建物倉庫業及び雜の十二に分れ、その統制下にある公稱資本の總額は十二億六千百八十一萬圓の多きに上る。而してこれ等の資本中、その第一位を占むるは化學工業の二億四千三百六十一萬七千圓、次は鑛業の二億一千百萬圓であつて、以下纖維工業、商事貿易、銀行保險信託、電燈電力業、食料品工業、機械工業、陸海運業、雜、製鋼製煉業、建物倉庫業の順序となる。これを表示すると次の如くである。

三井支配各種事業の產業別大分類表

	公稱資本金（千圓）	百分比（%）
銀行、保險、信託	一三七、〇〇〇	一〇・八六
商事、貿易	一四三、〇〇〇	一一・三三
纖維工業	一五九、八〇四	一二・六七
食料品工業	八三、四三八	六・六一
機械工業	七二、二〇六	五・七一
製鋼製煉業	二二、一〇〇	一・七五
化學工業	二四三、六一七	一九・三一
陸、海運業	三八、二〇〇	三・〇三
鑛業	二一一、〇〇〇	一六・七二
電燈電力業	九六、二一五	七・六二
建物、倉庫業	二二、〇〇〇	一・七四
雜	三三、三五〇	二・六四
合計	一、二六一、八一〇	一〇〇・〇〇

斯く廣汎な事業を、然もその何れの一つをとるも立派な大事

業を統轄する本營は云ふ迄もなく三井合名だ。併し、合名はその作戰本部に過ぎない。三井系のあらゆる事業を總轄しつつ、第一線に立つて戰ふものは三井物産である。三井銀行、三井信託、及び三井生命はその兵站部だ。從つて三井の事業界に於ける位置、乃至三井系各事業の實狀を實感するには、先づ三井物産の正體を突きとめることが最も捷徑である。

普通わが國に於ける會社企業の大なるものとしては、南滿洲鐵道や東京電燈が擧げられる。前者は公稱資本金四億四千萬圓、內拂込資本金三億五千五百十五萬六千圓、後者の資本金四億七百十四萬九千圓で全額拂込濟である。共にわが國最大の會社である。三井物産は全額拂込濟資本金一億圓の會社だ。從つて資本金と云ふ一點から見ると、これらの二つの會社に及ばない。併し乍ら、その取扱ふ金額から云ふと、物産は斷然此等二つのものを凌駕する。滿鐵が年々一億七千八百萬圓を費消して二億三千萬圓の收入を擧げ、東電が年々八千三百萬圓を費して一億二千六百萬圓の收入を得て居るに對し、「物産」の最近一ヶ年間に於ける商內（アキナイ）は大約十五億圓に達して居る。而して東電が主として東京附近を、滿鐵が南滿洲を地盤として、獨占の權益に依つて事業を經營してゆく時、物産は全日本否全世界を相手に商戰を戰つて居る。即ち物産の約十五億の商內高中、約五億一千萬圓は純然たる內國商賣、約三億圓が純粹の外國間貿易、殘る約六億九千萬圓がわが對外貿易に於ける取扱高である。これを表示すると次の如くである。

對外貿易	輸出	[illegible]	[illegible]
	輸入	[illegible]	[illegible]
內國商賣		五一〇	三四
外國間賣買		三〇〇	二〇
計		一、五〇〇	一〇〇

三井物産がわが對外貿易中、輸出で三億七千五百萬圓、輸入で三億一千五百萬圓を取扱つて居ると云ふことは、物産がわが輸出貿易の一割九分、輸入貿易の一割四分を取扱ふと云ふことになる。殊に大正九年三井物産棉花部が獨立して、東洋棉花なる子會社を組織してからは、物産では全然棉花、綿絲、綿布、綿製品を取扱はないことになつた。從つて總輸出額から綿絲、綿織物に關する部分を、總輸入額中から棉花に關する部分を差引くと、わが輸出貿易の二割三分、輸入貿易の一割九分迄が物産の掌中に握られて居ることになる。

更に物産が取扱ふ個々の商品に付て見るに、輸出品としては輸出生絲の三割、同石炭が六割、同砂糖が三割、同セメントが二割五分、同魚脂が五割、樟腦の如きは日本全體の輸出額の八割からが、物産の司る所となつて居る。次に輸入品に付て見やう。輸入小麥の三割五分、同羊毛トップの二割五分、同機械の二割五分、同銅の三割五分、同砂糖の三割五分、同肥料の三割乃至五割、就中亞鉛引板の如きは全輸入額の八割を取扱つて居

る。斯くの如き、三井物産の貿易上に於ける獨占的優位は、高田商會倒れ、鈴木商會沒するに及んで益〻著しくなりつゝある。

所が、三井物産は以上の如き單なる商事機關に止つてゐるものではない。それは同社の營業目的が、物品販賣業、問屋業、運送業、代理業、製材業、造船業、並びに附帶事業とあることに依つて明かだ。同社の組織は可成り複雜である。社長の下に常務取締役が居り、常務取締役の下に支配人の居ることは型通りだが、支配人の下が更に人事並びに文書課、調査課、會計課業務課の四課に分れ、その更に下に砂糖、石炭、機械、金物、木材、生絲、船舶、造船の八部があり、又全世界に跨つて支店二十五、出張所十二、其他常置員、派出員、出張員が世界中隈なく配置されて居る。

物産が如何に巨大な怪物であるかは、上述せる所に依つて一通りは了解されると思ふ。併し物産に就ては更に今少しく語らねばならない。物産は世人の想像し得る以上に巨大な存在だからだ。先に示せる三井系會社系統圖に依つて、物産が六の直系會社、二十一の傍系會社、及び十の孫會社を持つて居ることは明かであり、而してこれらの子會社乃至孫會社に對して、或は原料機械を供給し、或はその製品の販賣を司つて利益を舉げて居ることは容易に想像される。併し物産が原料機械を供給し、その製品の販賣に從事するは、單にその子會社や孫會社に對して行ふばかりでない。大部分の三井系諸會社に對して行つて居る。商内高の巨額に上る根因も茲にある。現に三井鑛山は物産を通じて機械を買ひ、物産を通じて石炭を賣り、東神倉庫は物産取扱ひの貨物だけを貯藏して居ても、尚ほ相當の利益を舉げ得る由である。從つて或る意味に於て三井物産は三井系諸事業の太陽である。

觀點を變へて物産それ自身を檢討することに依つて、その怪物たる所以を明かにしやう。物産の營業が、八部に分れて居ることは前に述べた。今その一つ一つに就て語るは餘りに煩はしいから、茲では代表的に、その船舶部に就てのみ語ることにする。遞信省發行の昭和四年日本船名錄を見ると、本年七月に於ける一千噸以上の物産所有船は二十八隻で、總噸數九萬八千噸となつて居る。それ故物産は日本郵船、大阪商船、國際汽船、及び近海郵船に次ぐ大船會社である。然るに八月末には物産所有船は三十三隻、總噸數は十七萬八千二百二十二噸となつた。これで近海郵船を追越して、物産はわが國第四位の大船會社となつた。然も物産の船舶は原則として二十年償却を嚴重に實行して居るばかりか、その二割六分以上がディゼル・エンヂンである。ディゼル・エンヂンを備へた船舶、即ちモーター・シップの多いことは日本一である。物産船舶部は元來物産の取扱品輸送を目的として生れたものであるが、次第に膨脹して來て、今日では上記社船の外に十八隻九萬四千五百噸の定期傭船を運航し、獨り物産の取扱品を輸送するばかりでなく、社外の貨物

をも近迄に至る迄最近まで[illegible]六社と云ふ位ものであるから、物産船舶部はその規模よりいふも、取扱品より云ふも、一個の大船舶會社と見るべきである。然も物産船舶部は事實物產附屬の「一部」に過ぎないのである。

三井物產が色々の意味で日本一であることは一通り述べた。併し三井系の事業會社の內で日本一のものは三井物產に限つた譯でない。他にも澤山ある。第一に三井系事業の兵站部を承はる銀行及び信託何れも亦ナンバーワンである。三井銀行はその外形から云ふと安田銀行に及ばない。併しその內容から云ふと段違ひに良い。大體、安田、三井、三菱、住友、第一の五大銀行には夫々の特色と優れた點があるから、遽かにその優劣を斷ずることが出來ないが、均勢のとれた內容とそのスマートな營業振から云つて、三井銀行を五大銀行の第一に推しても大した反對は起るまい。三井信託となるとわが國信託會社中、何處から見てもナンバーワンである。例へば昭和四年四月末に於ける全國信託財產在高は十三億四千三百二十六萬五千圓であるが、此內三井信託一社の信託財產總額は三億六千三百六十九萬圓に上り、全體の二割五分を占めて居る。然も信託財產の增加は止むべくもない。一方資金運用難は愈々激しいので、三井信託では流入して來る黃金の浪を堰き止めるに骨折ると云ふ、全然僞のやうな事實である。銀行信託に比べると保險はスット落ちる。三井系の保險會社としては三井生命と大正海上火災があるが、共に大したものでない。[illegible]しい。例へば、三井生命は[illegible]た高砂生命の改稱したものであるが、その經營が三井に移つてから急速に進步して來て、その契約高は昨年九月末には全生命保險會社中三十一番目であつたが、本年九月には二十三番目に飛躍してゐる。

鑛業は三井系の事業中でも重要な位置を占めて居る。俗に三井の財產は三池から掘り出されたと云はれる。この意味は三井の家運が明治維新後一度衰へた時、それを恢復し向上させたものが、三池炭鑛にあつたことを云ふのである。それ程三池炭鑛は良鑛である。數ある我が國炭山中、今日でもその出炭高に於て、三池に優るものはない。而してこれを經營するものは資本金一億圓の三井鑛山であるが、他に三井系の鑛山會社としては傍系の北海道炭鑛汽船を始めとし、三井鑛山の子會社である基隆炭鑛、臺灣炭鑛、大日本炭鑛、太平洋炭鑛、北海道硫黃、松島炭鑛の諸社がある。從つて三井の鑛業界、殊に我が鑛業の過半を占める炭界に於ける位置は頗る高い。商工省鑛山局の編纂に成る「昭和二年本邦鑛業の趨勢」により主要鑛山のみに就て通計するに、三井鑛山の出炭高四百七十九萬三千佛噸、北海道炭鑛汽船の出炭高三百九萬九千佛噸、其他三井系の鑛山出炭高百七萬二千佛噸となるから、三井系鑛業會社の總出炭高は八百九十六萬四千佛噸となり、わが國總出炭高三千三百九十三萬瓩に對

する割合は二割四分となる。其他金、銀、鉛、亞鉛等の産額も亦尠くないのである。

化學工業は三井系の事業中最大のものである。うち、製紙會社としては王子製紙、富士製紙があり、肥料會社としては電氣化學、東洋窒素工業と三泰油房とがある。又窯業會社としては小野田セメントと日本煉瓦製造があり、ゴム會社としては熱帶産業と南國産業がある。他に鈴木系から三井系となつた日本樟腦や大日本セルロイドもあれば、王子製紙の子會社である共同パルプや三井鑛山の子會社である北海曹達もある。

王子製紙は從來九つの子會社の支配權と、五つの投資會社を持つて居たが、更に今春美事富士製紙の支配權を握つて、完全に製紙界を牛耳ることになつた。昭和三年に於ける王子製紙と富士製紙の洋紙製造高を合すると八億七千三百六十餘萬封度となり、わが國洋紙製造高十三億五百七十餘萬封度に對する割合は五割九分となる。加之、王子富士の兩社の外は樺太工業を除けば、他は何れもパルプマシンの設備がなく、一人歩きも出來ぬものである。斯くて製紙界はトラスト所か、完全に三井王國の統制する所となつたのである。小野田セメントはその規模乃至生産高から云ふと淺野セメントに及ばないが、固定資産の安いこと、從つて生産費の安いことは、正に日本一である。能力一樽當り固定資産に付て云へば、淺野セメントの五圓二十錢、大分セメントの五圓七十四錢、磐城セメントの五圓三十三錢、土佐セメントの六圓五十七錢に比し、小野田セメントのそれは四圓三十六錢に過ぎない。其他熱帶産業や大日本セルロイドも夫々の産業に於てナンバーワンである。

三井系の纖維工業會社には、紡織會社として鐘淵紡績、内海紡織、天滿紡織、上海紡織、豊田紡織、豊田紡織廠、菊井紡織、上海製造絹絲、及び錦華紡績がある。製絲會社としては帝國製絲と神戸生絲、レーヨン會社としては東洋レーヨン、モスリン會社としては東京モスリン紡織、又撚絲會社としては横濱撚絲會社がある。此内紡織會社はこれを東洋棉花の子會社と鐘淵紡績の子會社に分つことが出來る。内海紡織、天滿紡織、上海紡織、豊田紡織、豊田紡織廠、菊井紡織は東洋棉花の子會社であり、上海製造絹絲と綿華紡績は鐘淵紡績の子會社である。然るに上海紡織、豊田紡織廠、及び上海製造絹絲は何れもその工場が支那にある。そこでその三社を除き殘る六社の設備を全部精紡機に換算して通計すると、その總錘數は百三十九萬九千餘錘となり、わが國全體の約一割九分に當ることになる。就中、鐘淵紡績は公稱資本金に於て日本一であるばかりか、財界不況の今日も尚ほ三割五分と云ふわが國第一の配當を行ひ、綿絲布、加工綿布、絹絲布、及び生絲と種々な方面に巨腕を延べて居ることに於ても亦、確かにナンバーワンである。

食料品工業會社としては臺灣製糖、日本製粉、極東煉乳、及び森永製菓がある。此內森永製菓がわが國製菓界の第一人者であることに關しては說明を要しないであらうが、臺灣製糖がわが糖界切つての巨人であることに就ては多少の說明を必要とする。臺灣製糖が糖界のナンバーワンであるのは、單に資本の點ばかりではない。例へば所有耕地である。臺灣製糖が小作と自作を合せて二萬六千餘甲を持つて居るに反し、明治製糖及び大日本製糖のそれは何れも僅々五千餘甲に過ぎない。加之、臺灣製糖の蔗作地は(一)一ヶ所に纏まつて居ること、(二)氣候の良いこと、(三)米作の競爭的影響なきこと等、頗る自然的條件に惠まれて居り、將來糖業地として益々發展するの可能性がある。從つて如何に糖界が不勢であつても、商賣中心の他の砂糖會社程の打擊を受けない筋にあるのである。

三井系の事業としては上述せるものゝ外に、尙ほ機械工業、製鋼製煉業、陸海運業、電燈電力業、建物倉庫業、及び雜がある。而して機械工業會社としては芝浦製作所、日本製鋼所、內外電熱器、豐田式織機を始め十一會社があり、製鋼製煉業には釜石鑛山外三會社、陸海運業には樺太鐵道、北海道鐵道、共立汽船等八會社あり、電燈電力業には臺灣電力、北海水力電氣、大淀川水力電氣、及び神岡水電等八會社、建物倉庫業には東神倉庫、南洋倉庫、三信建物の三會社、雜の部には三越外六會社がある。これらの內、芝浦製作所が機械工業會社としてその規模に於てわが國第一であり、釜石鑛山が銑鐵生産力に於て官營八幡製鐵所を除けば民營としては日本一であり、三越は百貨店中のナンバーワンである。これ等について記せば際限がないが餘り紙數を喰ふので此邊で擱筆する。併し以上記述せる所によつて、三井の各種產業が、それぞれの產業界に於て、如何に優越し、如何に之に君臨し、支配してゐるかの一班は、一通り理解してもらへたことゝ思ふ。

常識講座

金解禁への正確なる把握

牧野輝智

（一）

今日に於ける財界政界の中心問題は何といつても金解禁問題である。この問題は決して新しい問題ではない。大正十年頃から可なり論議されてゐる問題であるが、それが昨今に至りて特に重大視されるやうになつたのは、現内閣が金解禁問題の解決を中心的政策として聲明し、頻りに其の解決の準備を進めつゝあるからである。豫算の緊縮、消費の節約、國際貸借の改善、其の他幾多の事項が金解禁決行の準備として採擇され實行されつつあるものである。今日の場合豫算の緊縮は色々の意味に於て必要である。公私經濟に於ける消費の節約も同樣である。國際貸借の改善も亦然りである。斯くて此の種の幾多の問題と關聯して、世上一般の注意は金解禁問題に集中されてゐるのである。

然しながら私の見る所では財界でも政界でも餘りに金解禁なるものを大きく考へ過ぎてゐるやうに思ふ。少くとも金解禁の影響を餘りに大きく見過ぎてゐるの嫌を免れない。勿論金解禁は相當の大問題には相違ないけれども、問題が餘りに喧しく論議され、政府當局者なども問題の重要性を頻りに力説する爲め、徒に問題の影響を過大視し、一言にして之を云へば昨今の財界は金解禁に怯えてゐるといふ狀態である。之は金解禁に對する正確なる理解を缺いてゐるからであると思ふ。

日本が金輸出禁止をなしたのは大正六年九月であつたが、其の當時此の禁止が何等政界の問題とならなかつたのは勿論、財界でも殆ど注意を惹かなかつた。それは當時の經濟事情特に對外貸借關係から見て大した影響を惹起する問題でなかつたからであるけれども、幣制の問題からいふと金輸出の禁止は一種の

兌換停止である。而も斯くいつた意味をもとして輸出禁止を行つてゐた國も世間にあつたとはいへ、兌換停止と同一の性質を有する金輸出禁止の施行は一般國民の何等の注意をも惹かないでもよい程に輕微な問題ではなかつた。斯の如く何のざうさもなしに實行された金の輸出禁止を解除せんとするや、今度は非常に重大なる問題となり、國を擧げて金解禁の影響に怯えてゐるの感じがある。私は之は兩方とも稍極端であるやうに思ふ。私は金解禁の影響に怯えてゐる人々に反問したい。今日世界の各國は殆ど皆金解禁を實行してゐるが、どこに金解禁の爲め財界の大混亂を來した國があるかと。

（二）

金解禁は我國の幣制を金本位制へ復歸せしむることである。我國の日銀兌換券の對外價値を金貨と一致せしむることである。名目上兌換制度を維持してゐても、金貨金塊の對外輸出を禁止して居れば、兌換券は事實に於て不換紙幣である。其の理由は今日の貨幣流通の實際に考へ、國内の使用としては別に金兌換を請求する必要なく、紙幣にて十分其の用を辨ずるけれども、對外決濟となると正貨でなければならない。從つて金兌換制度といふことは金の自由輸出を認めてこそ始めて其の效果を發揮し得ることである。今輸出禁止一つをしたのでは金兌換は既に停止されたと同じことであるから兌換停止の一種に屬するのである。私が金輸出禁止は事實に於て兌換停止であると稱したのは此の意味である。今日に於て金兌換停止が非常な變則な制度であることは改めて云ふまでもないことであるから、是を本則に引戻すことに就て主義として反對を表するものは殆どない。が、たゞ其の影響を憂慮して金解禁そのものに反對する人は尠くない。金解禁は幣制の本則であるから其の實行は止むを得ないと觀念しながら、其の影響に恐怖してゐる人々に至つては其數が非常に多い。私が國民の大部分は金解禁に怯えてゐると稱したのは此の種の人々を指していつたのである。

我國の財界の實際からいふと金解禁問題の影響は既に可なり深刻に各種の方面に現はれてゐる。就中有價證券市價の暴落は其の顯著なるものである。試みに本年三月末（未だ金解禁が實行的の問題とならなかつた當時）と本年の九月と重要株式に就て市價の變動を示せば左の如くに暴落してゐるのである。

	本年三月末	本年九月五日	低落
新東株	一五七・四円	九八・八円	五八・八円
新鐘紡	一四一・八	一〇六・七	三五・一
郵船	七〇・七	五七・四	一三・四

東京電灯	五二・七	四四・四	八・三
日本石油	六五・七	四四・七	二一・〇
滿鐵	一四三・〇	一二九・二	一三・八
日本麥酒	一二五・五	一〇四・三	二一・二
日本銀行	六七・〇	五四・〇	八六・〇
正金銀行	一二二・八	一〇三・〇	一九・八
三井銀行新	一〇九・〇	八九・四	一九・六

右の如き暴落は金解禁の問題にのみ原因したものではあるまいけれど、其の主因は金解禁を見越しての暴落である。それは本年春前内閣が金解禁を近く實行するであらうといふ風說が傳はつた爲め急に有價證券市價の暴落が始り、其の後現內閣が成立し、金解禁の決行に主力を注ぐことを聲明したため、更に崩落を甚しうした事實に徴し容易に首肯されることである。金解禁の實現ではなく金解禁が遠からず行はれるであらうといふだけで財界景氣のバロメーターと目せられる新東株は五十九圓も暴落してゐる。日銀正金のやうな堅實な銀行株までが前者は八十六圓、後者は二十六圓といふ工合に暴落してゐる。今春新東株が百二十圓臺に崩落した時、株式シンヂケートの設置により證券市價の維持を提唱した財界の連中も、更に低落を甚うした昨今は手を拱いて大勢如何ともし難しと諦めてゐる模樣である。

金解禁が實現したのでなく、其の聲だけで是程市場に響くとすれば、いよ〳〵それが實現した曉には如何に大きい動搖を起すであらうか。それが財界政界を通じて更に又社會一般を通じての憂慮であるやうに思はれる。併しながら私は此の憂慮に對し全然杞憂とは云はないが、餘りに取越し苦勞が過ぎてゐるやうに感ずるのである。金解禁が實現しない限りは此の程度の混亂は屢々繰り返されるのであらうが、私は此の點からいつでも金解禁が成る可く實現することを希望するのである。何が故に餘りに取越し苦勞が過ぎるといふのか。私は此の點を說明して金解禁への正確なる把握を努めたいと思ふ。

（三）

金解禁により財界の動搖を憂慮する人々の主張は大體次の如きものである。

（一）爲替の昂騰
（二）物價の急落
（三）正貨の流出
（四）金利の昂騰
（五）不景氣の深刻化

是等の現象は互に因果關係を有するもので、理論的には各獨

させるものと[illegible]

である。先づ第一の爲替の昂騰といふ點について考へて見ると、なる程金解禁が實現すると爲替は平價附近に昂騰し大體この附近に安定することになるのである。對米爲替に就ていへば金解禁の結果我國の爲替相場は四十九弗附近にて小高下するに止ることになるのである。是は金解禁による利益の最も大なる點であるけれども、解禁當時の過渡的の事情として幾分の不利益を釀成することは免れ得ないことである。爲替急騰のために輸入ストックの所有者は其のストックの値下りの爲め損失を蒙るであらう。是等が一部の人々に金解禁の決行は一定の期間を置いて事前に明示しなければならないと主張される所以である。しかし必ずしも發效期限附解禁でなくても、既に政府に於て遠からず金解禁問題を解決するの意ある旨を聲明してゐる以上は、輸入ストックに就ては其のつもりにて處理法を講ずることが當然である。此の意味に於て私は此の際期限附の金解禁が必要だといふ主張には必ずしも同意し得ないのである。爲替の激動は忌む可きことであるけれども、既に爲替相場はパーに對し五六分の下値といふ所まで接近してゐる。本年七月濱口内閣が成立した時の爲替相場に比し今日は既に三弗即ち約六分の騰貴をなしてゐる。更に是と同一程度の昂騰をなせば爲替相場は平價附近[illegible]

最近二ヶ月間に[illegible]にそれ程著しい障害を起さなかつた。否[illegible]出超は著しく増加し、現に八月のごときは一ヶ月に六千一百萬圓の出超といふ近年に稀な好轉振を示してゐる。もとも前に述べた如く有價證券の市價は著しく低落したけれども是は爲替が五六分昂騰した結果ではない。此の間には殆ど因果關係はないと見てよろしいのである。斯く考察して見ると、僅か二ヶ月間に爲替が三弗から急騰したことは、特に取立てゝいふ程の悪影響を貿易其他一般財界に及ぼしてゐないのである。金解禁をしても爲替が平價以上に昂騰することはあり得ないことであるから、爲替が如何に急騰するといつても其の程度は最近二ヶ月間に經驗したのと同程度に止まるのである。從つて其の財界に及ぼす悪い方面の影響も最近二ヶ月間に經驗した程度であるから結局大したことではないといふことになるのである。更に之を別な言葉でいふと、金解禁による爲替の急騰貴は今日に於ては其の開きが輕微であるため、取立てゝ云ふ程の悪結果を財界に及ぼす要はないといふことになるのである。

然らば第二の物價の急落はどうであるか。金解禁が物價の低落の傾向を助長することは否み難い事理であるが、しかしながら多くの人々が憂慮するやうに金解禁したならば物價が急落するといふことは私には信ぜられない。金解禁と物價との關係を考ふると、そこに二つの原因となる可き事情がある。一つは爲替關係、一つは通貨關係である。金解禁による爲替相場の回復は物價低落を幾分助長する傾はあるにしても、爲替の五分や一割の昂騰は、輸入品の市價こそ其の程度に低落せしむるであらうが、物價全般に及ぼす影響は案外輕微なものである。大正十三年秋から翌年にかけ、我國の爲替相場は三十八弗半釘付といふ状態に慘落してゐた。二割三分以上の慘落である。然るに物價との關係はどうかといふと大した影響が現はれてゐない。當時爲替相場が二割三分以上も慘落したことは外國書籍のやうなものこそ明確に二割三分以上騰貴せしめたけれど、爲替の一般物價を昂騰せしむる力は案外輕微なものであつた。更に之を最近二ヶ月の爲替急騰と物價との關係を物價指數によりて考察して見ても、是が一般物價を低落せしめた力は極めて輕微なものである。最近二ヶ月間に爲替が六分程も昂騰してゐるに對し、一般物價の低落は僅に一分五厘に過ぎないのである。爲替の急騰と物價との關係を過大視する人々は爲替が一割昂騰すれば、一般物價は一割も低落するかのやうに考へ、本年四月頃の爲替相場は平價に比し一割程度の低落であつたから、金解禁を行へば本年四月頃に比し物價は爲替關係からだけでも一割は低落するやうに考へてゐる。しかしそれは甚しい間違である。爲替相場と一般物價との關係は過去の事實から見ても、又理論として考へても、それ程までに密接ではない。一般物價を支配する原因は幾何となく存在してゐる。爲替關係は其の内の僅に一つに過ぎない。手近い例として目今の米價に就て考へて見るに、米價は著しく低落してゐるが、それは昨年、一昨年の豐作につゞき今年も可なりな豐作らしいため烈しく低落してゐるのである。米價が斯く低落した時、假令爲替が一割だけ有利になつたからとて外米の輸入を促進する程の力を有するものではない。從つて現在及び近き將來の我國の米穀市價は爲替相場とは何等關係を有しない次第である。

生絲の如き輸出品に就ては、爲替の恢復が輸出を困難ならしめ、其の市價を崩落せしむるやうなことはないかと懸念する人も少くないけれど、それは事實に反し又道理に於ても首肯し難いことである。最近の事實を見ても爲替は昨年の今頃（八月九月）の相場に比し一弗ばかり昂騰してゐる。然るに生絲の輸出は昨年の同期に比し著しく增進し、本年八月の生絲輸出は九千

四百萬両といふ額に達し、[illegible]に比し、四千二百萬両の[illegible]六分程度の昂騰が必ずしも生絲輸出の妨げとなるものでないことを事實に於て語るものである。又貿易政策として考へても金輸出禁止の下に於ける動搖極りなき爲替相場は決して生絲の輸出を盛にする所以ではない。製絲業者が金解禁決行の必要を決議し政府に陳情したのも是が爲である。金解禁の爲に爲替が今日より更に幾分昂騰しても、爲替相場が平價附近に安定することは、生絲貿易の堅實なる發展に資する所以で、決して生絲市價を低落せしむる原因にはならない。金解禁による爲替の恢復が生絲市價を低落せしむる理由にならないことは、是等の事情により納得されることであるが、實際問題としても昨年の八、九月頃と今年とは爲替相場が一弗騰貴してゐるに拘らず、生絲市價は低落しないばかりか却つて騰貴し、昨年九月の横濱市場清算建値百二十八、九圓であつたものが、今年同期には百三十九圓に騰貴してゐるのである。農村經濟の立場から金解禁の影響を考ふる人の内には、金解禁は農村の主要産物たる米穀及繭の市價を低落せしめ、既に窮乏の極にある農村經濟をして更に窮迫せしむるであらうと憂ふる者があるけれども、私は以上に述べた理由により金解禁の爲めに農村經濟が更に一層惡化するものとは考へ得ないのである。

[illegible]其の原料たる棉花を全部外國から輸入してゐるものでも、爲替が五分昂騰し原料たる棉花の内地市價を五分騰貴せしめたからとて、それが綿製品特に綿織物類に及ぼす影響は著しく稀薄となるのである。是等の複雜なる物價事情に考へ私は金解禁の爲に今後更に爲替が二弗程度昂騰（本文起草當日の爲替相場は四十六弗半である）しても、それが總物價に及ぼす影響は極めて輕微なものと見ることが妥當であると思ふ。

金解禁が物價に及ぼす第二の問題たる通貨關係は、金解禁を行へば正貨が流出し、通貨の收縮となり、それが物價の低落を誘致するといふのである。是も傾向としては爲替關係と同樣斯くある可き道理であるが、此の原因による物價の低落の程度に就て、世上の人々は餘りにそれを大きく見過ぎてゐるの嫌があるやうに感ずる。之は前掲第三の項目として次に述べんとする「正貨の流出」と極めて密接なる關係があるから、其の場合に併せて述ぶることにし、茲には單に通貨關係から見た物價の變動は、それ程憂慮す可きことではない。而してそれは通貨の調節により惡影響を避ける手段もあることを一言するに止めて置く。

（五）

是より第三の正貨流出の問題に移る。我國は毎年輸入超過である。貿易外の受取超過が幾分あるにしてもそれは貿易上の入超に充當するには足りない。斯かる事情の下に金解禁が行はれたならば、正貨は頻りに國外に流出し、兌換制度の基礎を危險ならしむるといふのである。勿論此の考察にも一應の道理はある。國際間の收支關係が支拂超過である場合に正貨の流出の起ることは當然考へられることである。然しながら我國の入超は昨今始つたことではない。而して是等の入超の決濟は金輸出が禁ぜられてゐると否とに拘らず行はれて來たのである。又決濟せなければならない性質のものである。金解禁のため支拂勘定が特に急増する事情があるならば、それだけ正貨流出が急増する譯であるけれど、國際收支關係に變りないとすれば、金解禁によりて正貨勘定が急激に變化する譯はない。尤も今日は在外正貨も激減してゐる。此のことは國際貸借の決濟上不利な事情といふ可きであるけれども、之は金解禁をしないでも同様である。此の場合慶幸とす可きことは、本年の貿易が餘程改善され、一年を通じての支拂超過は大して問題とする程の金額でないことである。貿易統計に現はれた八月までの入超は一億九千萬圓で昨年同期よりか幾分減少してゐる。今後三、四ヶ月間は出超が、つゞくであらうから、貿易關係の入超は一億圓以内となる可く、それを貿易外の受取超過と差引けば内地の對外收支關係は大したことはない結果になり、朝鮮臺灣の入超分が支拂超過の主なるものとなる位である。斯樣な事情であるから、金解禁の曉に國際貸借關係に原因して財界を混亂するやうな正貨流出が起るとは想像し得ないのである。

正貨流出の問題としては右の外に現在の特別事情として米國の金利高が我國の正貨流出を誘導しはしないかといつてゐる人がある。此の事情を重く見てゐる人は此の關係から、一億五千萬圓位正貨が流出するかも知れないなどと云つてゐるのである。併し此の點に就ても私の見る所は違つてゐる。幸か不幸か、我國の國際金融事情は未だ尚ほ幼稚なものである。英米のやうに國際金融關係の發達した間柄では米國の金利高は英國の資金を米國に流入せしむる結果となるのである。其のため昨秋來英國銀行は金利政策によりて英國資金の米國に向け流出することを防止するに努めてゐるのであるが、我國の金融界と米國との關係は事情が大に異つてゐる。もし彼我の間の金利の開きが我國の資金を續々流出せしむる力があるならば、それは金輸出禁止の下にありても實現し得ることである。今日我國の大銀行は巨額

の運行を妨いてゐる。[illegible]金は低利子である。若し國際間の金利の開きそれ程機敏に資金の流動を誘致し得るならば、今日既に相當巨額の資金が流出してゐる筈であるが、それが實現しないのは、ウォール街とロムバード街の金融關係のやうな密接な聯絡がないからである。是等の事情に考へて私は金解禁をなしたからとて我國の資金が金利關係から日に立つ程流出するものとは信じ得ないが、若し幾分かの資金流出が起るとすれば、それは我國の弗貨外債の買戻し位のものであらう。假りに此の事が起るとしてもそれはそれだけ我國の外債を償却するやうなもので決して憂慮す可きことではない。個人經濟にありて金庫の金の一部を拂出して借金を返したからとてそれが惡い結果を來すものでないと同樣である。

英國の金解禁の例に見ても、一九二五年四月の金解禁決行の際、一部では著しい正貨流出が起りはしないかと憂慮し、政府でも萬一に備ふるため、米國に三億弗のクレヂットを設定して置いたが、實際は目に立つ程の金流出は起らず、折角設定されたクレヂットも利用されないで濟んだ。當時の英國の正貨事情を示せば左の如し。

英國金解禁直後の正貨狀況

	[illegible]	[illegible]
一九二五年四月(金解禁決行)	一五六、七〇〇千磅	[illegible]千磅
同　年五月	一五八、六九〇	四三九、六六九
同　年六月	一五七、一八五	四三七、六四八
同　年七月	一六四、二五七	四四九、七六〇
同　年八月	一六五、一九四	四三八、二五五
同　年九月	一六〇、四六七	四三七、七六八
同　年十月	一五〇、一八五	四三四、五九六
同　年十一月	一四六、七五四	四三一、〇〇五
同　年十二月	一四四、五九六	四四一、九〇七
一九二六年六月	一五〇、三五〇	四五六、七四一
一九二八年十二月	一五三、七八五	四三三、七八五

金解禁をしても正貨の減少を來さなかつた實例は列擧するに遑ない。其の最近の實例は佛蘭西である。佛蘭西は昨年六月の金解禁後正貨準備は却つて増加してゐる。しかし是等は正貨政策其他複雜なる經濟事情の結果であるから、外國の實例がさうだから日本も亦然りといふのではない。たゞ參考として引用しただけである。

我國で金解禁を爲したからとて財界を攪亂するやうな正貨流出の起るものでないことは以上陳べた通りであるが、萬々一正

貨流出が相當巨額に達するにしても、我國の日銀正貨準備は大正三年に二億圓臺に過ぎなかつたものが、近年激減したと稱しても尚十億圓を超えてゐる。兌換券流通高に對する日銀の正貨準備は九割に近いといふ狀態である。斯の如き高率の正貨準備を有する國は米國の外にはない。(米國でも聯邦準備券の法定正貨準備率は四割である)。英國の如きは通貨の流通高に對し三割五分の正貨準備を有するに過ぎないのである。各國の正貨事情に考へて私は正貨の流出を非常に恐怖する人の氣が知れないのである。思ふに是はメタリスムスの貨幣思想に囚はれた一種の妄想的恐怖に過ぎないのであらう。

以上陳べたやうに金解禁をしても急激なる正貨流出は起るものでないとすれば、通貨關係からした物價の急激な低落も起る理由はないのである。萬々一正貨が急激に流出し物價の急落が實現しやうとする場合には、日本銀行の通貨調節によりて通貨の不足を補充し物價の急落を阻止することも出來るのである。尤も是を遺憾なく實行するには、發券準備法の改正が必要である。私は我國でも比例發行法を採用することが有利であると信ずるけれど、保證發行限度の擴張によりても此の目的に於ける通貨の調節を整ふることが出來ると思ふ。要するに金解禁の爲の正貨流出といふ問題は、それ程心配す可きことではない。兌換制度の基礎を破壞するといふが如き心配は前言我國と各國との貨準備の比較を一考するだけでも容易に氷解し得ることである。

(六)

第四の金利昂騰の問題は正貨流出の問題と關聯してゐるやうに思ふ。金解禁により正貨が流出すれば通貨の收縮となり、金利の昂騰を招來するといふのである。是も單なる抽象論としては一應承認されることであるが、實際の事情はそれ程簡單なものではない。先決問題として金輸出禁止を解除したとて著しい正貨流出の起らないことは前に述べた通りである。然るに金利昂騰論者は金解禁後著しい正貨流出通貨收縮が當然來るものとして金利は必然的に昂騰するものと斷定してゐる。近來の有價證券市價崩落は主として此の理由に原因してゐるやうである。金利が昂騰すれば有價證券市價の低落するは當然であるけれども、近來の證券市價崩落は金解禁と金利との關係を餘りに過大に見てゐるの嫌を免れない。尤も我國の今日の低金利は寧ろ變態的の現象で、何時かは今少し金利の昂騰すべき時期の來るは何人も意見を同ふする所であるけれども、金解禁が非常なる金利昂騰即ち今日の有價證券市場で想像してゐるやうな金利高を直に招來するとは何としても信ぜられない。金解禁が金利高を

招來する原因を有することは否み難いとしても、思ふに過賞のそれ。金利政策の作用にても相當に調節し得るのである。

倘ほ茲に看過してならない一つの矛盾がある。それは金解禁に怯えてゐる人々は次項に陳ぶる如く金解禁は今日の不景氣を更に深刻化せしむるものと斷定しながら、他の一方には非常な金利高の來ることを信じてゐることである。不景氣の深刻化と金利の昂騰とは果して同時に發生し得る現象であらうか。假りに正貨の流出が實現したため、通貨が收縮され金利高の原因を造つたとしても、一方に於て物價の暴落不景氣の深刻化が實現するとすれば、資金の需要を減少し金利高を抑制することになるのである。つまり二つの相反する原因に相殺され金利現狀維持か、然らずとも大した昂騰はないことになるのである。是は金解禁の影響を極度に重大視してゐる人々の觀測を其のまゝ採用して生ずる結論である。私は此の觀測を信じ得ない爲め此の理由によりて金利昂騰を否定するものではないけれども、兎に角金解禁のため金利が、當然昂騰するものと論斷するは謬見たるを免れないやうに思ふ。

（七）

[illegible]あらうと思はれる。しか[illegible]大[illegible]する代りの原因である。[illegible]我國の[illegible]は今日ところ金解禁しないでも好くなる見込はない。もし我國が既に金解禁をなしてゐたならば、多くの人々は今日の不景氣は金解禁のためであるといふであらう。私は金解禁をなしたからとて物價は今日より更に著しく低落するものではない、正貨流出の如きもそれほど恐る可きものでないと信ずるが故に、なる程不景氣は今後倘ほ續くであらうけれども、それが金解禁のために更に著しく深刻化するものとは信じ得ないのである。

繰り返していふまでもなく、金解禁は我國の貨幣制度をノルマルの狀態に復歸せしむるものであつて、相當重大な問題には相違ないけれども、其の影響に就ての財界其の他一般の觀察は之を餘りに重大視し、之に怯えてゐるため、有價證券市場などは未だ金解禁をなさない今日、既に金解禁をなした時以上の影響が發生してゐるのである。案ずるより生むは易しといふ俚言は我國の金解禁の問題に對して最も良く當て嵌つてゐるやうに感ずるのである。

（八）

正貨の急激なる流出、物價の急激なる低落を信ずる人々は是

私は最後に平價切下論に就て一言したい。貨幣の價値切下は歐洲の幣制の極度に紊亂した諸國が、何としても他に幣制を建て直すの途がなく採用した非常手段である。之を最初に行ふたのは墺地利である。新單位一シリングを一萬クローネの割合にて換算する旨を定めた。しかも新單位の一シリングは戰前の一クローネの約十分の七であるから、事實に於て墺國のクローネ紙幣は一萬四千分の一に切下げられた計算である。次に獨逸は一九二三年の幣制改革で紙幣一兆マルクを一レンテンマルクと交換することゝし、一九二四年に同樣一兆マルクを一ライヒスマルクと交換することにした。卽ち獨逸のマルクは一兆分の一に切下げられたのである。露西亞でもルーブル紙幣は三回の價値切下げで、五百億分の一に切下げられた。佛蘭西や伊太利などは何とかして價値切下げを行はないで幣制を建て直さうと苦心した爲め、戰後永らくの間幣制改革、金解禁を解決し得なかつたが、獨逸や墺地利などの程ではないにしても、兎に角戰爭による財政上經濟上の打擊が甚しく、通貨價値の低落亦甚しいため遂に平價切下げの外には幣制改造の手段ないと觀念し、伊太利はリラ紙幣の金貨價値を三六六分ノ一〇〇に切下げ、佛蘭西もフラン平價を約五分ノ一に切下げて幣制改革金輸出禁止解除を解決した。此の外にも平價切下によりて金解禁を行ふた國は少くないけれど、何れも平價切下の外には幣制改革を完了する方法のない國ばかりである。

我國でも平價切下を主張する人々は金解禁を行へば財界に非常な惡影響が起ることを信じ、それを除去少くとも緩和するために、平價切下による金解禁が最も賢明の政策であると主張してゐる。玆には此の問題を主題として論ずる餘裕がないが、我國の通貨事情は獨・墺・露・佛・伊等の諸國とは大に事情を異にしてゐる。對外爲替相場が低落したといつても最も極端なる場合が二割三分、昨今は六分か五分の低落といふ所である。歐洲諸國で採用された平價切下などの非常手段に倣ねる必要はないと思ふ。旣に縷ゝ敍述した通り、爲替が今日よりか五分か六分恢復した所で、其の爲めに總物價が目立つ程低落することはあり得ない。若し又金解禁のため正貨が非常に流出することが起り得るならば、それは平價を切下げたところで防止し得可きことではない。更に又平價切下論の主張は、學理論としてはメタリスムスの誤謬を其のまゝ受入れてゐる嫌をも免れ得ないのである。それは兎に角とし私は金解禁の影響はそれ程恐怖す可きものではないと信ずるが故に、此の際平價切下のやうな非常手段を採用して之を防止せんとする提案には贊同を表し得ないのである。

失業救濟と紙・インキの汎濫

猪間驥一

失業問題は、論壇の流行問題、と云ふには餘りに深刻であるが、どの雜誌も近來殆ど出る號毎に、慢性的に此の問題を扱つて、論ぜらるべき點は大概もう論じ盡されたやうな氣がする。論じ盡されても、解決策の名案は一向出ないやうだ。永遠に憂鬱な此の新しからぬ問題を、今更論ずるのも、實は甚だ氣が進まないことであるが、統計的事實の報告を兼ねて一個の側面觀をこゝに提出しよう。

一　深刻な失業状態

失業問題を論ずるに當つて先づ第一に問題となるのは、一體失業者は現在何人あるかと云ふことである。民政黨内閣が新設した社會政策審議會でも、眞つ先に此の問題に出ッ會して、推定材料蒐集に關係官公吏を轉手古舞させたやうだが、結局わからない、と云ふのが本當であるらしい。事些か舊聞に屬するが、最初の憲政會內閣の下で失業問題が囂々たる世論を喚び起した時にも、矢張り失業者の數が議會で問題になつて、貴族院の豫算委員會で次の樣な問答があつた。

○伯爵柳澤保惠君　極めて簡單に伺ひます、簡單な御答辯で宜しい。全國商業會議所が調べた失業者の數が現れて居ります。或は二百五十萬などと云ふことであります。承る所に依りますと、若槻內相が、赤坂御所で先般失業に關する御話をなされたと云ふことでありますが、其時にも失業者の數を云はれたやうに伺つて居りまするが、其二百五十萬と云ふやうな數は當局者に於ては稍〻信憑すべき數と御考へになりますか。……

之に對して政府委員內務政務次官片岡直温氏が答へた所は左の如くである。

○政府委員（片岡直温君）……今失業の勞働者が內務大臣は二百五

十萬と言つたか知れませぬが、私の考としては、それ程な失業者は無いと思つて居ります。各種の失業者を合せました所が四十萬には足りますまいと思ひます。…………

大臣は失業者の數を二百五十萬と云ひ、次官は四十萬位だらうと云ふ。えらい相違だが斯うした珍問答の結果が、失業者の正確な數を先づ調べねばならぬ、と云ふことになつて、大正十四年の國勢調査に附隨して失業者調査が行はれるに至つたのである。併し全國大都市工業地並に鑛業地五十二ケ所を通じて失業者數十萬五千六百、有業者に對する失業率四・四八%と結果を報告されたその調査は、多少專門的な見地からすれば、實に杜撰なものであつた。けれども失業者數と云ふものは、如何に努力してもはつきり摑めないのが當然である。大體失業者とは何を云ふかゞ明瞭でないのだから。

「勞働せんとする意志と能力を持ちながら、勞働する機會を得ないもの」と云ふのが、國際統計上で定まつた失業者の定義だが、これだけでは統計が取れる程に明確でない。それで前記の失業者調査の時には、まづ「嘗て就職した事のある者で」と云ふ制限を附した。それだけで既に、一旗擧げるべく親許を離れて田舍から都會を憧憬れ出て來た若者や、學校を出たまゝブラくしてる青年など、我々が普通に「失業者」と考へて（文字だけから云へば斯う考へる方が間違ひとも云はれるかも知れないが）問題にする範圍の者が、すつかり除外される。その上に「失業前月收が二百圓以上だつた者は除く」とか「失業後一時凌ぎにでも兎も角仕事を現に持つてる者は、その地位收入に如何に不滿であらうとも、除外する」と云ふ樣な除外例を持つて來たのでは、所謂失業者の範圍は愈ゝ狹まるばかりである。而も統計數字に正確に包攝しようとするならば、斯うして失業者の意義を限定するのも已むを得ないであらう。

普通に考へる失業者の意義と、統計技術から制限を受けざるを得ない失業者の意義とが喰ひ違つて、到底その數が判らないとすれば、勞働供給の過剩か否か、所謂失業者が多いかどうか、を知るのには、現在のところ矢張り職業紹介統計によるのが一番良い。失業者全部が職業紹介所に行く譯ではないし、又一人で數ケ所の紹介所に口を掛ける人もあるのだから、その數字も決して失業狀態全般を語るものではないが、勞働市場の動きは、大約之で見當がつくし、も一つ好い事には、此の統計の中には所謂失業者のみでなく、轉業希望者も含まれるから、一層如實に勞働市場の景況を觀取することが出來るのである。元來失業者とは、働く機會を得たがつてる者に違ひないが、誰だつて働く以上は愉快に報酬の多い仕事がし度いに違ひない。

現に仕事がある者だつて、その心持に變りは無い。さう考へて來れば、議長總裁にたり損ねて不平滿々の前大臣、參與官の地位が得られなくてワイ／＼騷いでる陣笠も、現に代議士であるにも拘らず、失業者の同類と見て差支へは無い。さう云ふ「失業」代議士は民政黨本部に集つてブー／＼云つてゐるのだが、同じ不平を持つたプロレタリアは、職業紹介所に群り來つて、職業紹介統計の上に現狀不滿の人心を物凄き迄に反映するのである。

ところでその職業紹介統計の上に現れた數字だが、こゝ數年來、今日の樣な惡化狀態を見た事は無い。全國の代表として東京のを見ると實に左の如くである。

東京附近公設職業紹介所の紹介成績

年期	殺到率 %	就職率 %	焦燥率 %
大正十四年下半期	九七・一	二五・九	二六・五
大正十五年上半期	九九・四	二六・一	二八・三
大正十五年下半期	一〇七・六	二八・八	二八・五
昭和二年上半期	一一三・三	二六・八	三四・一
昭和二年下半期	一〇九・二	二七・四	三七・九
昭和三年上半期	九八・七	二七・四	三七・八
昭和三年下半期	九三・一	三〇・〇	三五・一
昭和四年上半期	一二〇・二	二五・二	三九・七

(註) 中央職業紹介事務局調の數字より計算

表は煩を避けて實數を除き、比例數だけを掲げたが、一寸その說明をしよう。

「殺到率」と云ふのは、要するに紹介所へ人を求めて來る、その求人數に對する求職者數の割合である。一體普通の場合は此の率は一〇〇%以下なのである。即ち求人の方が求職よりも多いのが當り前である。と云ふと一寸妙に聞えるが、實際雇主は常に賃銀の低下を志して、舊使用人を新勞働者で入れ替へる事を考へて居り、紹介所へ向つて絕えず、勞働力の買繫ぎをするものなので、勞働市場が多少安定してゐれば、求職者の方が比較的少い、と云ふ事になる。それが一朝不景氣が深刻化して失業者が激增するか、又は逆に景氣が一寸好くなつて、多少好條件の働き口があるとなると、忽ち轉職希望者が激增して、一〇〇%を拔き文字通りの殺到率となるのである。右の表で最近の殺到率は一二〇%と云ふ未曾有の高率である。此の前殺到率が一〇〇%を越したのは、若槻內閣下に金解禁氣構へから不景氣の深刻化した大正十五年下半期から、昭和二年金融恐慌後に至る期間だつたが、現下の殺到率の狀況は、それに一層輪を掛けた程度で、推移が酷似してゐる。

次に「就職率」と云ふのは、求職者が紹介されて職業に有りついた割合で、之も景氣が惡くて勞働條件が惡いと率が低く、一層不景氣が深刻で、もうどうにもならないとなると、求職者

が折れて不利を忍んで就職するので、率は割合高くなる。逆に多少景氣が持直して見えると、求職者應職者が僅かな口に殺到して率を低下し、も少し景氣がよければ、好い口が殖えて就職率の多少の昂上を來す。今年上半期の就職率は數年來曾てない低率である。

上の二つの率で勞働市場の大體の見當はつくのであるが、失業の深刻さを見るが爲めには今一つ比例數を見ねばならない。職業紹介所で求職する者は先づ氏名をその紹介所で登錄し、紹介所から紹介狀を送つて來るのを待つのだが、なかなかその通知が來ないので、ぢつと待つてゐられない者は、まだ口はありませんかと紹介所へ催促に行く。又紹介狀を貰つても、駄目だつた者は、もつと他に紹介して見れとせがみに行く。その登錄數と再出頭數との割合を見ると、求職者が如何に紹介所に御百度を踏むか、彼等が如何にあせつてゐるかゞ窺はれて、勞働市場の明暗を察知する一資料となる。私は之を「焦燥率」と名けてゐるが、此の率も、最近は以前に無い高率を示してゐる。要するに統計的に如何なる方面から見ても、今年位勞働市場の沈衰した事は曾て見られない所である。

それでも一般勞働市場の景況を現す上記の數字は、まだ好い方なので、官公吏教員事務員と云ふ樣な知識階級だけの數字を擧げると、そんな生ま易しいものではない。

東京市の知識階級職業紹介成績

年期	殺到率%	就職率%	焦燥率%
昭和二年上半期	七〇七・八	六・四	五〇・六
昭和二年下半期	七四三・二	五・〇	六一・四
昭和三年上半期	八四八・七	四・三	六六・八
昭和三年下半期	九八一・〇	四・六	五九・一
昭和四年上半期	九七三・二	四・六	六六・九

(註) 東京市調

前の表と比べて見れば、知識階級の殺到率は一般求職者に八倍し、就職率は遙かに遙かに低く、焦燥率に現れた所では、普通の求職者が比較的あつさりしてゐるのに、知識階級求職者の半分以上は必ず紹介所に再來すると云ふ有樣で、而もすべての率の推移から見て、前途轉た暗澹とのみ信ぜられるのである。

二　失業救濟の對策と自らなる失業者消化組織

數年來の失業増加は上述の如く本年上半期に於ける著しい狀況惡化に陷つてゐる。民政黨內閣の緊縮政策は、一層の不景氣を來し、一層の失業者を出すであらうと云はれ、また實際さうなるに違ひない。下半期の職業紹介統計は一層の物凄さ、悲慘

されて見せるであらう。從つて政府も何等對策が練つてゐるやうで、項目社會政策審議會の参考に資するため、對策として注目さるべき事項を書き抜いた一つ書きが發表された。

一、失業防止方策

一、職業供給量の增進

イ、國家的産業の選擇樹立

ロ、國産の奬勵、保護

ハ、發明の奬勵

ニ、能率の增進

ホ、職業教育の普及改善

一、職業供給量の減少防止

イ、輸出補償その他の事業保障制度

ロ、物價金融の調節、統制

ハ、公共企業のくり上げくり延べ

ニ、授産および小資融通

一、人と職業との結合の圓滑、敏速、適正、周到を期すること

イ、公益無料の職業紹介制度の普及發達

ロ、紹介所の專門化

ハ、紹介所の活動範圍擴張

ニ、紹介所職員の向上

一、人の地域的産業的分配を適正ならしむること

イ、都市集中の防止

ロ、工業の地方分布

ハ、失業救濟事業の普へん化

ニ、國外移住、渡航を奬すること

A、北海道、樺太等への移住奬勵

B、渡航移入に關する方策の樹立

二、失業救濟方策

一、授職事業

イ、失業救濟事業の施行

ロ、再教育、授産、小資融通

一、失業緩和

イ、勞働時間の短縮

ロ、解雇の豫告等

一、金品給與

イ、保險制度の確立

ロ、共濟組合の普及發達

ハ、解雇手當の慣行助長

一、知識階級應急策

現下我國の思想問題、社會問題に重要なる關係を有せる知識階級の失業者に對してはほとんどなすところなきは遺憾なるをもつてこれが專門職業紹介所の增設、再教育および授産施設海外渡航等の應急施設を講ずる必要を認む

一、失業統計

失業問題の重大なるに關らず對策の根本基礎たる全國的失業統計を缺くは甚だ遺憾なるをもつて速にこれが作成收集の方途を講ずべし

何れもこれ、若し單に紙の上に書いてあるだけに終らないならば、適正な結構な方策と云ふ事が出來よう。但し現代に於て

人口の都市集中の防止と云ふ樣なことは果して出來得べきであるか、空想に類する項目も入つてゐる樣であり、失業救濟事業の施行など内閣の緊縮政策と何處迄矛盾せずに行けるか興味を惹くものがある、片隅に目立たぬやう小さくなつてゐるが公共企業の繰上繰延、保險制度の確立の二者は、近き將來に實行に移さるべき政策として、最も注意さるべきであらう。渡航朝鮮人に對する方策の樹立も、現に内地勞働者が、彼等のため勞働市場から驅逐されつゝあり、昨年の六大都市冬期救濟土木事業も被救濟勞働者は過半渡航朝鮮人である事實を見る時、今後一層深刻化すべき問題である。

併し斯く失業救濟のため積極的に働きかける方策の外に、我國の社會では、おのづからなる失業救濟の組織がある事を認めねばならぬ。これ結果の善惡は別にして見逃すことの出來ないところである。

その第一は、甚だ陳腐ながら、家族制度である。産業革命の進行の結果、我國に於ける家族制度が崩壞を來しつゝあるとは云つても、なほその傳統的の力は強く働いてゐる。疲弊した農村の何處に都會の失業者を收容する餘裕があらう、と云はれながら、失業者の少からざる部分が所謂歸農するのは明かな事實である。家族親族を頼つて厄介になつてゐるあぶれ者の數は、警察の戸口調査などを通じて見ると、意外に多い。或る大學地區の、經驗に富んだ警察署の此の夏に於ける觀察によれば、夏中は管内の知識階級失業者は甚だ少い。九月になれば、まづ二千人は殖えるだらうとのこと。これは經濟界の夏枯時の間は失業者求職者も學生と一所に休暇を取つて歸鄕してゐるので、新秋職業市場の活動が始ると共に、再び歸つて來て奔走を始めるのである。その歸鄕する先は何處、奔走する間の費用の出所は何處、皆家族親族故舊に外ならない。

第二に、おのづから失業救濟の作用をしつゝあるものに、副業或は内職と云ふものがある。堅乎とした判任官が妻君の名義でパン屋を出したり、小商人が僅かばかりの庭を利用して鷄を飼つたり、公然非公然の副業は實に多く、上は大學の醫學教授の自宅診療から、下は勞働者の女房の狀袋貼りに至る迄内職の數は種々雜多である。斯る副業内職が特に日本に於て外國より多いか、どうか、比較し得べき適當な統計が手近に見當らないのは殘念だが、日本國民の甚だ多數が一人一業でゐられないのは確かである。最近堺市に於ける内職調査なるものが公表されたが、昨年夏同市内の中以下の階級で内職を營んでゐる者の數は、一六九四名に達した。その家族總數は六四四〇名である。何故に内職を營むか、と云ふ事も同時に調査されたが、家計の

補助と云ふ者八萬、是等の[illegible]を占めてゐる。理由の[illegible]一山[illegible]にて役きと、何れ[illegible]難しい[illegible]は、[illegible]手輕さと云ふことは、或は日本の勞働階級に於てできるのかも知れない。その內の六千四百と云ふ數は決して少い數ではない。而も斯る調合の當然の困難からして脫漏は甚だ多く、六四四〇名と云ふのは恐らく全體の內職による生活者の小部分に過ぎないに違ひない。東京大阪の如き、貧困と飢餓多きと共にジョップ・ワークの機會も亦多い大都市に於ては、其の數を調べて見たら、恐らく一般人の想像を絕する程度に上るであらう。

此の副業及び內職が、勤勞者・勞働者の一旦失業した際の本業となる。それは場合によつては、失業者の開運の機會となる事もあらうが、大部分は口を糊するに足らず、不安の日を送らねばなるまい。けれども兎も角全然職業が無い者ではない、と云ふ意味で政府の作る失業統計からは省かれるのである。また失業後の本業とならないまでも、女房の細腕、子供の細腕に賴つて、無論一年はおろか一ケ月の將來の生活に對しても皆目見當がつかないが、三日四日のところはどうやら斯うやら遣繰りがつくと云ふ意味で、失業から救濟される譯なのである。

最後に我國に於て失業救濟を、恐らく最も大規模に行つてゐる制度は、小賣商の制度である。尤も小賣商にもピンからキリまでである。こゝで云ふのはそのキリの方ばかりの事なのだが、失業者で再び以前の樣な勤務・勞働に從はうとせず、解雇の手[illegible]

陸海軍工廠とか造船所とか[illegible]工所とか大きな工場で、事業緊縮の爲めに大解雇が行はれた後で、被解雇者が悉くに職業紹介所に押し寄せるかと云ふに、必ずしもさうではなく、極めて著しい現象は、其等の人々の住む區域に最下級の小賣商たる小商人の店開きが續出する事である。さうして暫く彼等新米商人の間に、また新來の商人との間に、顧客の爭奪戰があつた後に、元手を耗り減らした者が續出して、一通りの整理がついた頃、先の大解雇から程經た後になつて、初めて勞働市場を賑する求職者が出るのである。此の點に於て、實際ホンの一時的ながら、此の小商人の制度が失業救濟をしてゐると云はねばならない。

斯樣に販賣者になると云ふ方面で我が小賣制度が失業者救濟を行つてゐるが、失業者が商品の供給を受けると云ふ方面でも、我國の日用品小賣制度が救濟的働きをしてゐる事を看過出來ない。食料品、薪炭等の小賣は、我國では掛賣り月末拂ひの制度と並行してゐるが、この掛賣りに貸倒れが多く、その危險が小賣値段の低下を阻止する事は人の知るところである。貸倒

れとならない迄も、代金の回收が圓滑に行かないと、それだけ危險負擔を一般消費者に轉嫁する事になる。小賣物價を通じて貸倒れ代金遲滯の危險の轉嫁を受けた正直な一般消費者は、その轉嫁を受けた限度に於て、借り倒し拂ひ澁りの不心得な者に給費してる譯になるのだが、此の借り倒し拂ひ澁りは果して如何なる者に多いか。天成の不心得者も多いに違ひないが、失業のため若くは失業に擬すべき營業失敗から來た一時的不可抗的不義理者が、其間に少からざるを察せねばならぬ。つまるところ、斯うした失業者は、日用品小賣制度を通じて、おのづから失業保險の給付を受けてる樣な格好になる譯なのである。

さて私は以上に我國に於ける獨特の自然的失業救濟組織を三つ數へ上げた。何れも甚だ持つて廻つたこぢつけ的議論に見えるので、書いてゐても氣がさす次第なのだが、實際のところ我國にはこれ以上有力な失業救濟制度は無いのだから仕方がない。氣がさゝなければならない筈なのは「現實」そのもので、どうも私の議論ではない樣に思はれる。と同時に、私が斯樣な立派な制度があるから、失業救濟はちやんと行はれてゐる、これで結構だ、と云ふ者でない事も、讀者には十分諒解して頂いた事と思ふ。私の云はんとするところは次の一事なのである。……働かんとして働き得ざる者が、上に擧げた樣な組織の中に潛り込んで、どうやら斯うやら日を送つてゐる。失業の[illegible]は、前年の失業統計調査の時も、失業者に數へられる光榮を有しなかつたがために、當時我國重要勞働市場の失業者十萬五千六百、失業率四・四八％と云ふ意外に少い數字を示して人を驚かしたのであつた。恐らく失業者の數を調べると云ふ樣な場合には、今後とても斯う云ふ意外にぶつかるであらう。けれども、失業問題そのものは、斯る人々を除外した問題ではない。上に述べた樣な潛り穴にゐる人々の心の底の不安と不滿とを、重要な要素とする問題である。爲政家がこの事を考へないならば、大變なことになる……と。

私は上に自然的失業救濟組織を三つ擧げたが、實は知識階級に關するものをもう一つ數へ上げたいのである。それが紙とインキの汎濫である。

三　紙とインキの汎濫

我國が出版事業の盛なる點で世界有數の國なる事は、人の知るところであるが、一九二七年（昭和二年）中の各國出版統計を見ると次の如く、實に世界第三位、世界に廣く話される英語の國の何れよりも多數と云ふ事になつてゐる。

各國出版圖書部數

國名	誌數
露西亞	三六、六八〇
獨逸	三一、〇二六
日本	一九、九六七
英國	一三、八一〇
佛國	一一、九二二
米國	一〇、一五三
波蘭	六、八八八
伊太利	六、五三三

（註）Droit d'Auteur, Berne 1928 に據る數字。

出版事業と云ふ時は、中央公論社が今秋から出版事業に手を出す、など、云はれる通り新聞雜誌定期刊行物の發行事業を含まぬらしい。上の統計には各國共之が除いてあるが、今ジャーナリズムの本場と云はれる米國と我國との新聞雜誌の種數を比べると左の如くである。

米國と日本の新聞雜誌數（大正十四年）

刊	米國	日本
日刊	二、二八〇	一、〇一二
月四回以上	八、六二二	四五五
月三回以下	三、一六三	五、四三二
計	一四、〇六五	六、八九九

[illegible]

國の種數では我國は米國の半分以下だが、その差違を來す主たる點は、米國で週刊が盛であるのに我國ではそれが僅少なるに依る。日刊は米國の大約半分で、人口の割合から云へば、まづまづ同じ比例にならう。然るに月三回以下、と云つても月刊雜誌が過半を占めるものに至つては、我國は米國を遙かに拔くのである。之によつて、我國は、定期刊行物の多い事に於ても、世界有數たることが確かである。

ところで此の圖書新聞雜誌の出版發行數が、最近十年間にどう變化して來てゐるかを知るため、面倒ながらもう一つ統計表を見て頂かう。

最近十年間の我國出版數

年	圖書（部）	新聞雜誌（種）時事評論的	新聞雜誌（種）非時事評論的
大正九年	九、八四八	二、七[illegible]四	八二八
十一年	一三、〇八一	三、四〇三	一、一五九
十三年	一四、三六一	四、一八四	一、六七〇
昭和元年	二〇、二一三	五、〇八九	二、五一一
三年	一九、八八〇	五、四八二	二、九六三

飜譯出版が昨年は昭和元年より減じてゐるが、之は圓本の大量出版と云ふものを考へ合せて見れば、單純なる減少と見る事は出來ない。實に十年間を通じて少しの停滯も無き增加、超倍加と云ふ凄じい勢である。私が之を紙とインキの汎濫と、幾分の恐怖を以て呼ぶのは、必ずしも無理ではあるまいと信ずる。

さて出版が斯く我國に於て汎濫的であり、愈々其の勢が增して停る所を知らない有樣なのは、抑も何を意味するのであらうか。文運の進步を示すとか、教育の普及知識慾の一般的向上を示すとか、隨分いろ／＼の而も間違つてはゐない解釋があらうが、併しこれでは餘り抽象的でピンと來ない。其の解釋を如何に表現しようかと、私が考へてゐる丁度最中に、八月十九日藤井健治郎博士が、東京朝日に一篇の隨筆を寄書されて、私の云はんとする所を美事に道破せられた。

「……他の方面はしばらくおいて、外國文學、外國思想の飜譯圓本だけについて語つて見る。こんな飜譯圓本がどうして出來るやうになつたか。飜譯する者があるから。然らば飜譯する者は今日になつて急に現れて、昔にはなかつたのであるか。その點を考へて見るとかうだ。昔でも、今日飜譯圓本に出てゐるやうな原著を讀んだ者乃至讀み得るだけの力を有つて居る者は無くはなかつた。が、その數といふものはさう多くはない。社會はその少數識者を、飜譯等の事よりも、もつと重要な而して緊急な事をやらせねばならなかつたのである。だから飜譯は必要だと誰も感じて居ながら、その方へ回す手が無かつたのである。然るに其の後高等の教育は普及もし、進步もしたので高等の學校や大學を出たものが非常に澤山輩出するやうになつた。その中には適當の位置を得かねてゐる者も多分にあるやうになつた。これ等の連中があるひは自ら進んで、あるひは他から頼まれて飜譯をやるやうになつた。否一日何ページづゝか義務的に飜譯でもしなければ飯の食ひかねる連中が澤山現れるやうになつて、外國文學や外國思想の圓本が出るやうになつたのである……」

博士の述べられたところは、飜譯圓本の洪水だけに關するのだが、同じことは他のあらゆる出版の著者筆者についてもまた云ひ得ることであらう。もとより私は、大學教授になると云ふ事だけが、社會の要求する「重要な而して緊急な」得業であり飜譯著作は重要さの少い、失業者の仕事であると云ふものではない。新聞雜誌への投書からライフ・ワークの著作に至るまで人が果して讀んで與れるかどうかは別問題として、己の考へたところを活字印刷にして見ると云ふことは、現代の知識階級にとつて、斷ち難い强い强い誘惑である。況やそれで人が動くと

云ふ事になつたら、既に文學は男子一生の事業とまで云はれて、自己の天職として之に從つてゐる人も少くないに違ひない。けれども、さうした信念から出て來た出版が、あの夥しい數字の中に果してどれだけあるであらうか。菊池寛氏の小説に「灰色の檻」と云ふのがある。陸軍の下級將校が軍隊生活を主題とした「灰色の檻」と云ふ小説を書いて寛氏自身らしい小説家の所へ送つて來る。勤務の傍ら純文學に心を寄せる殊勝な志とあしらつてゐると、そのうちに、その原稿を何處かの雜誌に載せる樣周旋を頼む、と來た。それでも暫くほつて置くと、軍人さんとう〳〵自身訪問して來て斡旋を懇願する。あの懇願をとう〳〵引受けたのだつたか、拒絶したのだつたか、何しろ古く讀んだ記憶だから忘れたが、最後のドン詰りへ行くと、作品の發表と云ふ事はまあどうでもいゝ、それよりは、生活の足しにする原稿料が欲しいのだ、何なら貴方が幾らかでも立て替へて見れないか、とやつて來て、主人の小説家を面喰はした、と云ふ筋なのだが、紙とインキの汎濫の裏に、蓋し多かりさうな話である。つまるところ、前節に述べた副業内職と同じ意義の、小賣商制度と同じ意義の著作が、現代出版文化（或る出版業者の廣告用語に從ふ）の過半の内容を形造つてゐるのである。

此の汎濫的な著作出版に對して開かれたる市場は果してどれだけあるか？ 私は[illegible]は[illegible]大きい數字を[illegible]たゞ大[illegible]から、昭和元年迄一年間大規模に行はれた家計調査の結果の中から、新聞雜誌圖書費の統計だけを擧げて、あとは讀者の推測に委さう。

家計費一〇〇中新聞雜誌圖書支出の割合（%）

月收階級	給料生活者	勞働者
八〇圓未滿	一・七〇	〇・八四
一〇〇〃	二・〇五	一・一三
一二〇〃	一・六一	一・〇四
一四〇〃	一・八二	一・〇九
一六〇〃	一・七九	〇・九三
一八〇〃	一・六〇	〇・八九
二〇〇〃	一・〇五	〇・七九
二〇〇以上	二・二一	〇・八五
總計	一・八一	〇・九九

（註）東京市家計調査統計報告による、總世帶數三九三の調査。

この統計の收入階級別で、百圓二百圓と云ふのは一家一年間の收入一切合切を平均しての額だから、通常云ふ月收を標準として見れば、もつと内輪に考へなければならない。その標準に對して割合を取れば、パーセンテーヂはこゝに現れた比較的少

い數よりは多少大きくなつて現れるであらう。それに此の統計は圓本による出版革命以前の統計であるから、現在では多少變化を來してゐるだらうが、兎も角斯うした消費者の懷勘定を狙つて、出版著作は行はれる。その懷勘定は決して豐かなりとは云へない。併し全體として市場が廣くないにしても、一出版者、一雜誌發行者が、一著作者が他を排して此の懷に喰ひ込む割合は、豫め定まつてゐる譯ではない。こゝに幸運を豫期し、自己の才能を信じての失業的雜誌經營者、失業的著述家が群り來るべき隙間がある。

知識階級の生產は、大學專門學校の卒業生だけで、大正十四年九千二百、昭和二年一萬二千八百、今年は二萬三千と云ふ數字であつて、年々加速度的に激增して行く。その消化の口は到底十分に見付りさうもない。さうとすれば私の所謂「紙とインキの汎濫」は、當分その勢を休めないであらう。

最後の結論として、私は第二節の末段に書いた事を、知識階級の過剩と出版の盛況との關係に就ても類推適用して頂くやうに希望して筆を擱く。

今秋の太平洋會議

高柳賢三

一

今秋十月の終りから十一月の初旬にかけて、太平洋問題調査會の第三回大會が京都で開催せらるゝに就て、太平洋問題調査會の由來、性質、その大會で取扱ふべき問題、並にその社會的意義に就て、解說をするやうにとの依賴であるが、この依賴の主旨に應ずべき最も簡單なそして最もよき方法は、既に公刊せられて居る「太平洋の諸問題」(澤柳政太郎編、大正十五年有斐閣)及び、「太平洋問題」(井上準之助編、昭和二年日本評論社)の二書の閲讀を推薦することである。前者は大正十五年ホノルルに於て開催された太平洋問題調査會第一回大會の報告書であり、後者は昭和二年に同じくホノルルで開かれた第二回大會の報告書である。此等の二書を通して此の會の性質、その活動の狀況の一般を窺ひ知ることが出來る。そして又より詳細な文獻を求めらるゝ方々は英文で書かれた "Institute of Pacific Relations, Honolulu Session, 1925, History, Organization, Proceedings, Discussions and Addresses (1925) 及び Problems of the Pacific, Proceedings of the Second Conference of the Institute of the Pacific Relations, Honolulu, Hawaii, July 15, to 29, 1927 (edited by Condliffe, 1928) を參照せらるゝことが適當であらう。然し本誌讀者の大部分は、此等の公刊物を熟讀するの勞を取らるゝものとは推定出來ないのであるが故に、左に極めて簡單に說明を試みようと思ふ。

二

太平洋問題調査會は、太平洋を繞る諸國家、諸民族の有識者が

ら成る私的の國際的團體である。そして二年に一回大會を開いて太平洋の諸問題を討議するのが、その主な活動である。然しその「組成」から着眼するも、その「目的」乃至「活動」から着眼するも、それは一の流動的な團體である。それが如何なる形で發展するか、又如何なる機能を太平洋を繞る諸國家諸民族にもつのであるかは、その將來の開展に依て漸次確立して行くものと見るのが事實に即した見方であると思ふ。一九二七年の第二回大會で制定せられた太平洋問題調査會の基本規約第二條には「本會ハ太平洋諸國民ノ相互關係改善ノタメ其事情ヲ研究スルコトヲ目的トス」と規定せられて居る。この規約の制定に當つて、私も關與したのであつたが、此の目的に就ての右の條項は其起草に當りて相當に議論があつた後決定せられたのである。そしてその議論は大體に於て、本會を純研究的な國際團體としようと云ふ潮流と、本會を以て一の非公式外交機關たらしめんとする潮流とに分れたのであつた。そして右規約第二條は「研究」を本會の活動方針とすることに決定したのではあるが、取扱はるべき論議が主として現時に於る生きた國際經濟問題、政治問題に集中せらるゝ結果として、會議に參與する代員の屬する國家、民族、及びその屬する宗教的、經濟的集團の「政策的」見地が不可避的に代表せらるゝこととなり、殊にその代員が各國に於て輿論の指導者であり、又は政治的に有力な人達を網羅する場合に於ては、非公式的外交的色彩が右の基本規約の明文に拘らず發生し得る可能性が事實上存在するものと云はねばならぬ。殊に例へば日本側はこの機關を通じて移民問題や人口食糧問題等を解決せんと試みるものもあるであらう。又支那代員中にはこの機關を通じて、その國權回復運動を有利に導びかんとする者もあるであらう。斯くの如き態度は勿論それ自身として差支ないのであるが、之を巧に指導しない場合にはこの機關が價値の低い各國の「宣傳交換所」と成る危險性は在るのである。斯くの如く本會の取扱ふ問題の性質上から、又代員の性質上から、それが非公式外交機關へ轉化する可能性が多分に包藏されて居るのであるが、それを宣傳交換所たらしめないで、太平洋問題の眞の科學的研究に於ける國際的協力の機關たらしめることは本會指導者の絶えざる努力に俟たねばならないものと思ふ。この點に就て一昨年以來永久的な「調査機關」が設けられ、諸種の問題について各國に於て客觀的研究が漸次爲されつゝあることは、この會の會合をして「お祭騷ぎ」「國際雄辯競技會」「國際宣傳交換所」たらしめざることに就て、そして又、會議の內容の質を向上せしむる上に於て重要な要因をなすのであらう。しかし、事實上に於ては、太平洋問題の客觀的な事實調

[illegible]

[illegible]會に[illegible]と共に、非[illegible]、[illegible]に行はれた

るのではないかと私は見て居るのである。從て我政府も我國民もこの會の活動について、國際政治的重要性をも認めねばならぬと私は思ふのである。

三

太平洋問題調査會は初めY・M・C・A關係の人達がハワイを中心として、太平洋沿岸諸國から參加する宗教運動家の國際會議を開かんとした議(一九二二)から發展したものである。そしてその目的は太平洋に面する諸國相互の間に存する人種的、經濟的、國際政治的問題に對する理解促進にあつたのであつた。然し此等廣汎に亙る問題を論議するに就て、之をキリスト教關係の人達のみの會合とすることは、充分の結果を得る所以でないことが自覺され、廣く各國の識者を網羅することに努力したのである。そして一九二五年の第一回の大會には、日、米、支、カナダ、オーストラリヤ、ニュージーランド、ハワイ、フイリッピン、朝鮮から有志者が集つたのであつた。そしてその成立の關係上宗教關係の人が相當多數を占めて居つた。一九二七年の第二回總會に於ては、右の外英本國が太平洋に重大な利害關係[illegible]はこの[illegible]つた。そして第一回大會に比し、政治家、實業家、[illegible]等の數を增すに至り、會議はより國際政治的色彩を帶ぶるやうになつた。そしてこの會議で採擇された太平洋問題調査會規約に依て太平洋問題調査會の永續的國際團體としての組織が、より明確な形態を取るに至つたのであつた。そして今回開かるゝ京都の第三回大會に於ては、右の外勞農ロシヤ、フランス、及びメキシコもオブザーヴァーを派遣することゝなつて居る。そして將來に於ては、此等の國々に於ても「國內理事會」が組織されて、會議に正式の代表者を送ることになる可能性がある。

右の如く本會を組成する單位に於ても、未だ流動的の狀態にある。そしてそれは漸次增加の傾向にあるのである 右の中ハワイ、フイリッピン、朝鮮等が代員を送るのは稍々變態と見る向きもあるが、それはこの團體がY・M・C・Aの企てから發達したといふ沿革的理由及び各國內に存する人種的又は自治的諸團體の完全な自己表現をなさしむると云ふ技能的理由から、各國理事會の同意を得るかぎり會議に參列せしむることになつて居るのである。そして此の意味で、アメリカ黑人の代表を送るべしと云ふ議論がアメリカ側から、又印度に於ける國民主義者か

ら代表を送るべしと云ふ議論がイギリス側から提唱せられて居るのである。

今回京都で開かれる會議に參列する外國の代表者は、未だ全部確定しては居らないが、それぞれの國に於ける一流の學者、政治家、實業家、社會運動家、宗教家、等を網羅するらしく見える。そして有力な政治家を漸次網羅せんとしつゝある點は殊に注意を要する。例へば英國の代表者として來朝するヘールシヤム卿の如きは、ボードウィン內閣の大法官（ロードチャンセラー）であつた人で、政治的見識及び政治的手腕に於て、ボードウィン氏に代つて首相となり得た人であると云はれて居るのである。

四

會議の議題は文化、宗教、產業、交通、移民、人口食糧問題、支那問題、移民統治問題、國際教育問題等々廣汎に亙るのが大會の常例である。そして又今回開かるべき京都大會に於ても、その議題は太平洋の國際關係に影響あるべき廣汎な範圍に涉る諸種の問題が取扱はれるであらう。

然しそれにかゝはらず毎回の大會で全員の注意が特に向けられる問題がある。第一回の會議では米國移民法を中心とした所謂移民問題並に支那の國權回復運動を中心とする所謂「支那問題」であつた。日米移民問題は現在でも依然として解決されて居らないけれども、米國の識者の意見がこの問題に就て漸次好轉しつゝあることに對し第一回大會の討議はたしかに一貢獻をなしたものと見るべきであらう。

第二回大會に於ては、支那問題、不戰條約問題、及び人口食糧問題が最も注意を惹起した問題であつた。支那問題に就ては特に、支那代表者と英本國代表者との間に忌憚なき意見の交換が交はされ、ホノルルに於ける談合の結果が英國政府の對支政策に重大な影響を及ぼしたことは既に周知の事實である。それは一の非公式外交の最も鮮な形であつた。又不戰條約問題、殊に日米間の不戰條約問題は先づこの會議に於て日米代表者の間に忌憚なき意見の交換が行はれたのであつたが、米國政府が日本政府に向つて、不戰條約案を提議して來たのは、此の會議の結果が日本の民衆の前に報告せられ、これを中心として雜誌新聞等に於て賛否の論議が戰はされた後であつた。そしてこの條約が御承知の如き幾多の迂餘曲折を經て遂に成立するに至つたのであつた。日米の關する限り、斯くの如き重要なる條約案が私的會合である太平洋問題調査會第二回の大會に於て先づ論議され、政府への公式な提議でその後に於て提議されて遂に成立するに至つたことは英國の對支政策の場合と均しく一種の非公式

外交であると見られ得るのであらう[illegible]日本の人口食糧問題は在留日本人の待遇を[illegible]、この問題が一國の關心事である許りでなく、國際的問題として研究せられ、解決せられねばならぬのであることが深く意識せられ、太平洋問題調査會の繼續的研究事項として、それは選び出されたのであつた。

しからば、今回京都で開かるゝ第三回の會合で討議せらるゝ諸問題中如何なるものが最も注意を惹起するであらうかと云ふに、私の見る處では、それは「滿洲問題」と「不戰條約」を如何に發展せしむべきやの問題とであると思ふ。

滿洲に於ける日本の利權は、我國大多數の人によつて、日本の生存自體に密着するヴァイタル・クエスチョンであると見られて居る。そして支那の國民主義者の人達の多くは國權恢復の一對象として滿洲に於ける日本の利權をも包含せしめて居る。そして其處に、勞農ロシヤは勿論、諸列强も此地域の運命について多大の關心――色々な意味での――をもつて居るのであるが故に、この地域に關する爭鬪が導火線となつて太平洋の平和がかき亂される要因が多分に包藏されて居る。從て、本年の會合に於ては「滿洲問題」が討議せらるゝことが一昨年から明かであつたので、我國の理事會に於ても滿洲問題に精通する人達の[illegible]究して居る[illegible]表せらるゝことゝなる[illegible]であらう[illegible]と共に、問題の國際的形相は相當にはつきりと浮び出して來るであらう。

不戰條約を如何に發展せしむべきかは、非常に重大な問題であると共に、非常に困難な問題である。不戰條約が單に道德的效果をもつのみでなく、法律的效果に於ても、一般世人の想像する以上に大きな事情の變化を國際政局に及ぼしたものであることは少しくこの條約の法律的效果について考へた人のよく認識しうる處である。しかし此條約は極めて空漠たる嫌があるので、國策の具としての「戰爭」と「正當防衛」との限界如何の問題、平和的處理機關の問題、違反者に對する制裁の問題等の諸問題、平和確立の定石的問題の外、殊に歐米とは事情を異にする東亞の地域に於て、それが如何に適應せられねばならぬかの問題が數多くある。例へば不戰條約後に於て、排外貨物も一方的な「エコノミック・ボイコット」を國際的に如何に處理すべきであるかと云ふ如き問題は相當に會議の注意を惹くべきものと私は思ふのである。

太平洋問題調査會の京都大會で取扱ふべき諸問題はみな國際的に極めてデリケートな問題許りである。しかし、是等問題を解決する唯一の途は、あらゆる偏見を捨て事實を如實に直視することである。問題の所在を、困難の所在を眞にありのまゝに理解したときに、それは既に半分は解決されたものである。そして私は其處に國際的協力機關としての太平洋問題調査會の社會的意義があると思ふ。そして會議に於て何等の決議が許されぬことはその最も賢明な根本方針の一であると思ふ。勿論其處には悪い意味での宣傳的な言論も行はれるであらうし、忌憚なき意見の發表の結果外界から誤解を受けないとは限らない。して私の特に我國の言論機關に要望したき點は、是等の宣傳、意見發表は假令それが誤である場合に於ても、それは眞相に到達する一過程に過ぎないのである點を充分に理解し、大國民たるの寛容的襟度を以て、あらゆる種類の議論を傾聽せられんことである。そして、各國人による眞相の把握は決して究局的には我國の進運を妨害するものでなく、反て之に資する所以である點を了解されんことである。

（昭四、九、五）

東西兩文明の相剋

——亞細亞文明と西歐文明と——

柳澤健

○

所謂社會科學の名に依つて稱ばるる資本主義の分析、社會主義乃至共産主義の提唱、並びに其等各主義を形作る諸思想の檢討・研究は、相變らず日本の思想界に於いて最も大きな題目をなしてゐるかの如くに見える。この傾向乃至事實は、世界大戰終了前後から生じて、引續き今日に立ち到つてゐる。思想問題については特に流行・變遷の度の激しい日本に於いて、この種題目の齎らしたこの永續性は異常のことゝ言はねばならぬ。しかもこの趨勢は容易には衰退するらしくも見えぬのである。

自分は晩近日本に於けるこの現象を目して、特に日本だけに見らるゝ事實であると見るものでは固よりない。深淺濃淡の差こそあれ、世界各國共にこの種問題の解決に苦しみつゝあることは同じであるからである　殊にヨーロッパのおしなべての國々のごとく内に數萬乃至數十萬の共産黨員の結合を有し議政壇上に於いてすら時に數十名にも達する夥しき共産

黨議員を送り込むで居るほどの狀態に達し居る所に於いては、この種問題が、一層の無遠慮さと現實味とを以て論議せられてゐることは言ふまでもないことであらう。

然しながら、これ等ヨーロッパの諸國にありて、この種問題が實際政治の上に於いて、乃至は所謂社會科學の名の示す如き嚴正なるアカデミックの研究の上に於いて、日本よりは一層の自由な且つ公正な取扱ひを受けて居らうとも、所謂純正思想界の圏内には日本に於いて見らるゝがごとき現象は、鮮くとも自分の見聞の汎圍からは、これを觀取することが出來ないのである。

こゝに言ふ自分の見聞なるものは、特にフランスに於ける經驗を指してゐる。然しながら、この種の概括的な事實に於いては、イギリス及びドイツもこのフランスと大差なき狀態にあるものと推斷して差支へはあるまい。

まつたく、日本の思想界が數年來倦くことを知らずマルクス主義の解剖に努めブルジョア思想プロレタリア思想の識別・鑑定に熱中してゐるがごとき現象は、今日のヨーロッパの諸國に於いては(ロシアをのぞく)容易に見られざる所であると言つていゝ。殊に日本に於けるこの思潮は文壇にも波及し、小說家と言はず詩人と言はず、口を開いて時勢を論ずるとなれば、必ずブルジョアとプロレタリアとの合言葉が發せらるゝのを見ないことがなく、近時小說家の某氏のごとき、今後小說に携はるものは先づマルクスの『資本論』を精讀することを必要とすべき旨を述べたとさへ仄聞する。これがフランス邊で『わが國に於いて文人が社會問題に熱中せるは既に百年以前も昔時のことに屬する。その折の經驗に加ふべき新らしきものが今何處にあらう!』とて殆んど文壇全體が沒し込んでゐるのさへ何人も不思議としない狀態に較べて、隨分と鮮明な對照を作り居るものと言はねばなるまい。勿論、バルビュスのやうな人はゐる。ピエル・アンプのやうな人もゐる。またロマン・ローランのやうな人もゐると言へやう。然しこれ等の人々は、言はゞ例外中の例外をなしてゐると言つても過言ではあるまい。兎も角この國に於いて思想界乃至文壇を通じ、社會問題が決して最大の題目の一つをなしてゐないこ

とだけは、はつきりと斷言できる。

〇

それならば、輓近ヨーロッパの國々の思想界に於ける最も大きな題目は何であるか、若しくは何であつたか。

この質問に應へるのは容易ではない。世界大戰前から、「近代思想」の名稱がそのまゝに示してゐるやうに、極度な混亂と不安との渦を醸しつゝあつた思想界は、史上無比の大殺戮戰を經過して益々その混亂不安の度を高めるに到つたことは、言ふまでもあるまい。どれが主潮であり、どれが傍流であり、どれがアクシオンであり、どれがレアクシオンであり、どれが進歩であり、どれが退歩であるか、この雜然として渦を卷いてゐる戰後の思想界に面接したものは、誰しも暫らくは茫然として空しく拱手傍觀するの外はあるまい。

然しながら、この雜然たる混亂のなかから何人もはつきりと聽き取ることのできる叫びは、「ヨーロッパはこれでいゝのか？」といふ聲である。「ヨーロッパの文明は吾々が豫期してゐた幸福をこの地上に齎らす代りに、見よ、この夥しい屍體とこの慘めな貧困とを齎らして來た。これでいゝのか？　これでもこの文明は存在の價値があるといふのか？」といふ聲である。「ヨーロッパ文明は、神の試練に見んごと落第してしまつた。人類を救ふには、否ヨーロッパを救ふには、ヨーロッパ以外の別種の文明が要る！」といふ聲である。「そら、こゝにほんとうの文明がある。アジアの文明！」といふ聲である。「光は常に東から來る！　アジアの古文明こそ、ヨーロッパを、否人類全體を救ふべき神の福音であらう」といふ聲である……。

日本の思想界がそのアジアの文明――印度と支那との文明を享け繼いでゐる筈でありながら一向それに眼を向けんとはせず只管ヨーロッパ文明の生んだ社會科學の研究とその解決とに依つて問題解決の鍵を得やうと努力してゐる間に、ヨー

ロッパ自身は、社會科學研究の效果に愛想をつかしマルクス主義實現に依る新文明の樹立の可能性に絶望し、遠くアジアの不動な姿を眺めて、救世主の到來を望まうとしたのである。

○

ヨーロッパ文明の「沒落」を說いてアジア文明の不滅を最も雄辯に物語つた者に『西洋の沒落』(デルウンテルガングデスアーベントランデス)の著者オスワルド・スペングラーがあり、所謂ダルムスタッドの聖者ヘルマン・カイザーリングがあり、さては『ガンディ論』の著者ロマン・ローランがある。

この三人の口を通して提唱されたアジア文明讃仰の言葉は、たちまちの間に數多い共鳴者を戰後のヨーロッパに見出したことは言ふまでもない。殊に、戰敗國として最も困窮と絶望との悲境に立つてゐたドイツ人の間に、この種の思想が闇のなかに耀やく光りのやうに一般から迎へられたのは、想像にあまる。前記オスワルド・スペングラーの著書『西歐の沒落』が上梓されたのは戰爭終了直後で、當時ドイツ人の大半は一日三度の食事にさへ事缺いてゐた程の激しい貧窮のなかにゐたわけなのに、この著書が忽ちにして五六萬の部數を賣り捌くことができたといふ、その事實はこの消息を語つて餘蘊があるまい。

先づスペングラーの言葉を聽け。『……各文化を比較研究せる結果、吾々はヨーロッパの老衰を知るに到つた。運命の鐘は既に鳴りひゞいた。この冷酷なる運命に反抗せんとするがごときは、蟷螂の斧をふるふの勇に過ぎない。この書―『西歐の沒落』―に描かるゝは、實にヨーロッパの最後の哲學でしかあり得ないのである。しかも歴史的にそが必要なるが故に止むを得ず描かるゝものに過ぎない。兎もすれば危險なるイリユージオンに誘はれがちなるも、既に死すべく定められたる文化をば、語るものに外ならない。―』

更に、自分[illegible]

いたガンヂー[illegible]自分[illegible]

その持ち合せはない。それなら自分の造ることは何かといへば、人間の身を變へるといふことなした。それ[illegible]と言つた方がよろしいかも知れない……「その藝術とは、靈氣のために於いて自らを完全に實現することであつて、古き印度が數千年の昔これに到達したものに外ならない。即ち今日までヨーロッパが誇つてゐた知識・科學・物質の文明を以てしては、批評と分析との文明を以てしては到底到達し得ない「實體の認識」こそ、それなのである。

更に「ガンディ論」のロマン・ローランに聽け「……西歐にある一切は狹隘である。ギリシャは小さい。自分は憧憬する。ユダヤは乾燥してゐる。自分は喘ぐ。自分はあの高きアジア、深き東邦の彼方を翹望するの念に堪えない。そこには印度の海洋のごとく廣大なる詩がある、汲めども盡きぬ乳がある。」彼は進んでかうも豫言する「アジアはその精神力をもつて、わがヨーロッパに打ち勝つであらう。恰かも昔時ローマやアテネやが打ち勝つたやうに！」

これ等の思想家の口から出たアジア讃仰の言葉に加へるに、日々の新聞紙は毎日のやうにアジア民族の怨嗟を――印度の反亂を支那の騷擾を書き立ててゐる。そこでは、ヨーロッパの帝國主義が資本主義が攻撃の對象となつてゐる計りではなく、病院・學校・教會等の人道的施設までもが憎惡と反感との對象とされてゐる。言はゞ一切のヨーロッパが敵となつてゐるのだ。それに、マルクス主義に依る社會革命と言ふもの丶、實際はヨーロッパ文明に對するアジア文明の勝利とも見られるロシアが、數億の人口を擁して衰頽のヨーロッパを虎視してゐるのである。ヨーロッパ文明の將來といふ問題が、ヨーロッパ文明對アジア文明といふ問題が、路傍漫歩の人の頭にも何等かの形で映らずにすむはづはない。

自分は、大戰直後から今日にかけてヨーロッパの思想界が取扱つた最も大きな、また最も普遍的な題目は、實にこの「東洋文明か西洋文明か」の問題であつたと觀察してゐるのである。

然しながら、この重大な題目も、大戰直後から起算して既に十年に近き時日を經過してゐる今日、各自々々の意見は既に吐露し盡されたかの觀があるのである。言はゞ、その結論に到達せるやの觀があるのである。現にフランスの思想界の一部に於いては、今後來るべき問題は、ヨーロッパ文明とアメリカ文明との比較・檢討なるべしとさへ說き出してゐる者の鮮なからざるを見る。

○

東洋文明か西洋文明かの問題に關する討論の終結期を示すものとして最も代表的なるものに、フランスのアンリ・マシス Henri Massis が近著「西歐の防禦」Défense de l'Occident（巴里プロン書肆出版）を擧げるに若くものはあるまい。ドイツの哲學者スペングラーの「西歐の沒落」に依つて擧げられたる狼火がヨーロッパ全體――否更に廣く世界各國のうへにも――にその波動を及ぼし、衆議紛々終に約十年を經てこゝにフランスの一哲學者の手で集約的にその反駁文が描かれ、茲にヨーロッパの關する限りはこの興味ある問題も一應討論終結となつたものと見ることができるやうに、自分は思惟する。

自分は固よりアンリ・マシスのこの文明觀に異議なく同意するものでないことは、スペングラーの文明觀に同意し難かつたのと同じである。自分自身のアジア觀、ヨーロッパ觀は別にあり得る。然しながら、スペングラーの「西歐の沒落」が大戰直後のヨーロッパ人（殊にドイツ人）の暗憺たる心理を反映したものに間違ひがないやうに、マシスの「西歐の防禦」は大戰直後の絶望と幻滅とから漸く恢復しかけた今日のヨーロッパ人の共通の自覺と反動とを物語るものと見ることができるであらう。況んや、アジア文明對ヨーロッパ文明の問題は我等日本人にとつて一般アジア人乃至一般ヨーロッパ人にも増し興味を寄せてもよい理由を持つてゐると言つてよいではなからうか。日本に渡つた多くのヨーロッパ人は「今日の日

本にアジアでもなければ亦西ヨーロッパでもない［illegible］といふ觀を受け［illegible］時代はその最も［illegible］てゐるのだ。アジアでもあり同時にヨーロッパでもある［illegible］に於いては、この二つの文明の消長に關する一切の問題は取りも直さず自己自身のなかにある最もデリケートな問題であると言つてもいゝではなからうか。

自分がこゝにマシスの著書について稍詳しい解説を企てやうとしてゐるのは實にこれ等の理由に外ならないのである。

○

マシスがこの「西歐の防禦」の初めの方に、ヨーロッパ文明の消長を論議せんとする者に對し先づその出發點とすべき好論文として、ポール・ヴァレリーが一九一九年英誌「アセニアム」に寄せて一方ならず世の反響を惹起した「精神の危機」La crise de l'esprit を擧げてその精讀を勸めてゐるのである。この論文は、更に彼が一九二二年スウィスのチューリッヒ大學に於いて行つた略々同趣旨の講演を併せて、その名著「ヴァリエテ」Variété（一九二四年巴里・ガリマール書肆出版）の卷頭に收めてある。（スペングラーの「西歐の沒落」の上梓されたのが一九一八年で、この「精神の危機」がその直後に公表されてゐるのは最も興味がある。）ヴァレリーが本國フランスに於ける名聲は言ふに及ばず、廣くドイツ、イギリスの知識階級の間に於いて有する今日の異常なる人氣にも顧み、この際先づ上記論文及び講演のうへに簡單なる一瞥を與へることにしやう。

ヴァレリーは先づヨーロッパが戰爭前から既に極度の混亂時代にあつたことから說いてゐる。近代と稱ばれてゐる時期は取りも直さず混雜矛盾を意味しさへもする。しかも戰爭を經過してこの趨勢は更に急激に促進さるゝのを見るに到つた。一般の經濟の問題について見よ。國家の政治のうへについて見よ。各個人の生活それ自體について見よ。戰爭に依つてこ

れ等が如何にはげしく攪亂されたかは、既に何人も知る所だ。然しながら、その錯亂も、精神の受けた夫れに若くものはあるまい。實に精神はそれ自體の存在さへか疑はしくなつたのである。……

こゝに言ふその精神とは抑々何を意味するか？　ヴァレリーはそれを説くに當つて、先づ以下の如き考察を世にも美しく正しき言葉を用ゐて語らうとする。

人間が他の一切の動物と相違し且つそれ等の上に位するのは、その「夢」Songes に依つてである。その「夢」の強さ、連がりに依つて、その多樣多種に依つてである。この「夢」の力たる、人間をしてその性質を變へしめるのみに止らで、人間を取卷く自然自體をさへ變へんとする。畢竟人間は自己を自然を執拗にも已れの「夢」の配下に置かんと努むるものなのである。

この説明を換言すれば、人間は絶えず且強いてゐるがまゝならざるものに變へんと努力し居るものである。努力に依つて又は天才に依つてその夢に現實の強力と正確とを賦與せんとするものなのであり、同時に、この現實に夢の將來する次第に增大する變性を強制せんとするものなのである。

この人間に對し、他の一切の動物はたゞ外部の變移に依り動かされ且つ變り行くものであるに過ぎない。彼等は適應する、換言すれば、彼等の存在の主要なる特性を維持せんが爲めにのみ變形する。要するに彼等は、その周圍の狀態と平均を保つことに身を任せてゐるのである。

此等動物は、この平均を自發的に破る習性は有してゐない。例へば、自己が適應した氣候から離れるといふ場合は、何等か特別の動機があり、外部的の壓迫なり必要なりがあることを常とする。然るにこれに反し、人間は自己の内部にこの平均を破るべきあるものを包藏してゐるのである。換言すれば、已れを滿足せしめたるものゝなかに不滿を感ずべきやうのものを包藏してゐるのである。常に滿足のなかから更にある強い力を抽き出して來てその喜悦をば顚覆してしまうので

ある。人間はその身體、その欲念が認められると、今度は更に一層の深みから何物かを引き出して來て、驚かし、惑はせ、命じ、刺激し、動かせる。それこそ、こゝに言はんとする『精神』である。盡くることなき一切の問題を與へる精神なのである。——

この精神は、我々のなかに永遠に問ひかける。——『誰が？』『何故に？』『何處で？』『如何なる時期に？』『何を？』『如何なる方法で？』この精神は、現在を過去に反かせ、未來を過去に反かせ、可能を現實に反かせ、幻を現に反かせる。この精神は進むものであると同時に遲るゝものである。築くものであると同時に破るものである。偶然のものであると同時に計算するものである。(2)……

かくして、ヴァレリーは、眼を轉じてこの人間の住まふ世界のひろい地圖を眺める。そこで、この『精神』の實現の跡を辿らうとする。その揚句、彼は言ふ。——

『この世の一切の實現のうち、最も數多く最も驚ろくべく且つ最も豐かに爲し遂げられた部分を求めるならば、それは全人類中の極めて局限せられた少數でまた比較的矮少な土地のうへで爲し遂げられたものなることを發見する！』

こゝに言ふ少數の人類、矮少な土地が、ヨーロッパ人、ヨーロッパを意味してゐることは言ふまでもない。ヴァレリーは、人間と他の一切の動物との區別を說いて、結局一切の動物と最も遠き距離にあるものとして言はゞ人類全體の最高峯にヨーロッパ人を位置せしめんとしたのである。

しかも、ヴァレリーに從へば、このヨーロッパの持つ精神の仕上げに最も效果あつた人類及び土地はと言へば更にこのヨーロッパの一部をなすに過ぎない地中海沿岸の外に出ないのである。この燿き渡る綠りの海洋を中心として、人類の多種多樣の夢が最もすばらしく實現されたのだ。ヨーロッパの生まれるまへに、既にエヂプトがあつた。フェニキアがあつた。それは、言ふまでもなく東邦の文明に外ならない。そのあとへ、ギリシア人が來た。ロマ人が來た。アラビア人が來た。

イベリア半島の住民が來た。かくしてそこには、東西の文明が流れ込んだのだ。否北方にゐたセルト人種、スラヴ人種、ジェルマン人種までも、この空の碧きと麗しさと太陽の下に聚まる、激しい生活とに惹かされて遠くこの地方へ遣つて來たのだつた。數世紀に亙つてこの沿岸は、實に人類の最も大いなる活動の中心地であつた。經濟のうへの活動、知識のうへの活動、政治のうへの活動、宗敎のうへの活動、藝術のうへの活動、——かゝる一切の活動はこの蒼洋の岸を繞りて行はれ、若くはそこから直接に生れ出るといふ觀を呈したのである。不安と斷え間なき追求とは、そこに於いてはげしい渦を卷いてゐた。交易は增大し、雜多を極めたる諸種の問題は胸中に動搖し、生きんとする方法、知らんとする方法、爲さんとする方法は無際限に增加し行くのみであつた。ヨーロッパはかくして、自然己れの外にもその活動の地を求めんとするに到つた。ヨーロッパの世界に亙つての土地征服は、その爲めに外ならないのである。然もこの土地征服の爲めに、ヨーロッパの狹き土地に於いて精神物質一切の事物の交換、各人種間の意識的無意識的協力、各種宗敎・制度・利害の競爭は更に激甚を極めることゝなつたのは言ふまでもない。かくしてヨーロッパは——地中海を中心とせるヨーロッパは、生命と知的豐饒と富裕と野心とのマクシマムの程度にまで到達するに至つたのである。

かくのごとき歷史に依つて說明さるゝヨーロッパ人なる明確なる型をこゝにヴァレリーは明示しやうとする。彼に依れば、ヨーロッパ人とは其の歷史の經路に於いて實に以下のごとき三個の影響を蒙つた一人種を意味するものに外ならないのである。

第一にロマの影響を蒙つた人種である。ロマは、組織的にして安固たる强國 la puissance organisée et stable の永遠のモデルである。ヨーロッパ人はこの行政の下にあつて、制度と法律との威嚴を感じ、司法官職の壯麗と高貴とを認めたる人種である。ロマに依つてヨーロッパ人は、寬容と善良なる行政との幸福を知り、法律的精神、軍國的精神、宗敎的精神、形式的精神の喚發を知るに到つたのである。

第二にヨーロッパ人とはキリスト教の影響を蒙つた人種である。このキリスト教の普及せる地圖が略々ローマ法律乃至シイザー帝國の有せる版圖と一致せるは、特に注意するを要する。思ふに、この二者の征服はその外觀の相違にもかゝはらず、その間一種の類似せるもののあるを見逃してはならない。そは、ローマが、昨日の仇敵に對しても容易にローマの市民たるを認め、結局あらゆる異人種を一様に包容して一の偉大なる國家をなしたやうに、キリスト教も一切の人種に對し容易に洗禮に依つてキリスト教徒たり得ることを認め、且つローマ帝國の諸制度を巧みに採用し、その行政的分權さへも襲用するに到つたのである。キリスト教は實にローマにありて一切の採り得べきものを採つた。その首都は、ジェルサレムに置かずしてローマに置いた。神を語る言葉をローマ(ラテン語)に借りた。かくしてヨーロッパ人は、共通法律を持つとともに共通の神を持つに到つたのである。

キリスト教がヨーロッパ人に與へた主要なる結果は先づその道徳を主觀的のものとしたこと、殊に道徳の統一化を來さしめたことを擧げなければなるまい。而してこれはローマ法が與へた法律の統一化の結果と相俟つて、ヨーロッパの一切の法律規定(プレスクリプション)の統一を形作つてゐる。それのみではない。キリスト教は、ヨーロッパ人に自己の吟味(エクザマン)を求めた。即ちインド人が、さてはアレキサンドリアの聖者たちが既に數世紀の昔各自獨特の方法で實行してゐたやうな内部の生活なるものをキリスト教は初めてヨーロッパ人に知らしめることゝなつた。それのみではない。キリスト教は、精神に對して最も微妙なる最も重要なる且最も豐饒なる問題を提供した。それは、表象の價値についてだ。諸教文(テキスト)の批評、認識の根源並びにその保障についてだ。理性と信仰との區別についてだ。信仰と行爲と結果との間の衝突についてだ。自由、服從、聖寵についてだ。精神界の威力と物質界の威力、その兩者間の紛爭、人間の不平等、女性の境遇についてだ。……實にキリスト教は幾世紀に亙つて何百萬の魂を訓へ勵まし搖り動かしたのであつた。

ヴァレリーは、ヨーロッパ人を形作つた第三の影響としてギリシア思想を擧げてゐる。

ギリシアは、ロマとキリスト教とが與へ得なかつたものをヨーロッパに與ることができた。その微妙で且つ力強い思想のお庇でヨーロッパ人は、その叡智の最良なるものを、その知識の纖巧と堅牢とを知ることができるに到つた。美術・文學の明晰と清淨と且つその區別とを知ることができるに到つた。要するに、精神の訓練を、――その完成の意味を知るを得るに到つたのである。

この訓練――綿密なる批評と分析とに依つて、合理的の判斷と形體の整頓とに依つて、吾人を數々の過度から幻想から空想から護つて呉れたこの精神の訓練は、こゝに科學なるものを生むに到つた。これこそ、我等の精神の最も特質的なる最も頌讃せらるべき且つ最も獨自的なる特質である。科學の創造のみは、嚴としてヨーロッパのみに歸せらるべき光榮であると言つていゝ。藝術は、ヨーロッパを離れてもある。然し科學は、ヨーロッパ以外にはなかつた！

勿論ギリシア以前、エヂプトにシャルデエにある種の科學はあつた。然しながら、此種の科學は、ある職業のテクニックとして用ゐらるゝの程度を出ないもので、科學としては極めて不純のものであつた。觀察もあつたし、推理も行はれてはゐた。然し、それ等が功を收める爲めには常に何等かの實用がそれに伴はれねばならなかつた。そこへ行くとギリシアの有つた科學は、それ自身が一つの存在一つの建造物であつたのである。

このギリシア科學の最も代表的な例は、幾何學に於いて見出せる。おゝこのギリシアの幾何學こそは、ヨーロッパ人の有つ叡智の最も典型的なモデルだと言ふことを得るであらう。實にこの幾何學のモニュメントの建造こそは、世にも最も稀有な才禀、世にも最も複雜せる才禀を以てしてのみ爲し遂げることを得たものなのである。勞苦を厭はず然かも頭腦透

識せる職工の手に依つて、深遠なる思索家の手に依つて、さては、完成に對するいみじきチャンスと誠實さこそ有する藝術家の手に依つて、漸く爲し遂げることを得るものなのである。

試みに思へ、明確なる推理をなすに世の並の平なる言葉を用ゐて、かくもデリケートにしてかくも「有り得べからざる」規正をば一律するを得たるその緻密さとその意志とを！ さては、緊密に結び付きし想像と觀覺との相互の活動に依りて爲し得たるその分析の效果を！ 空間に言葉をもて、その言葉の組立をもて立てられたるこの壯麗なる建造物を！ 空間に無限に擴がり得べきこのおどろくべき「寺院」を！ その「寺院」の美しさと淨らかさとを！

定義、公理、補題、定理、問題、命題…爾來これ等の類無き武器を用ゐてヨーロッパが進み來つた跡を、今更らしくヴァレリーは眺めやうとしてゐるのである。

○

ギリシアの幾何學に現はれたこの精神の訓練は——この科學的精神は、ヨーロッパをして終に一切の探求・一切の經驗・一切の冒險の途に進ましむることゝなつた。近代科學は實にこゝに於いてか生れ出た。ギリシア當時に見たやうな科學それ自體のなかに目的を見出すことから、さては藝術的の活動といふことから離れてしまつて、富を資本の獲得を對象とする近代科學が生れ出づることゝなつた。かくして、往時は完結の價値を表はすものであつた知識は、交換の價値を表はすことゝなつてしまつた。知識の效用は、終に知識を一の商品としてしまつた。商品となつた以上は、手にし口にし得るものとなつて、漸次增加し行く顧客に行き亙ることゝなるのは當然であると言はねばならぬ。

この結果はどういふことになつたか？ ヨーロッパの優越といふ「不平等」の原則が、——機械學の點から、應用科學の點から、戰爭乃至平和の科學的方法の點からヨーロッパを明かに他の一切の土地と區別してゐたこの「不平等」の原則

が、漸次崩壞することゝなつたのである。かくして世界の表面は、往時と異つて未開の物質的偉大とか人口・原料・面積の大小とかいふ數學的關係に依つて區分さるゝ結果を招致することゝなつたのである。然かも、この結果を生み出した抑々がヨーロッパそれ自身にあることは言ふまでもない。——

この現象は、ヨーロッパ對他の大陸についてのみ見られる計りではなく、一國の内部についても一樣に見らるゝ所である。文化の分布乃至特級分化への多數個人の參加こそはこれに他ならないのである。

この『分布』の結果、必然的に來るものは墮落（デグラダシオン）か否かといふ問題は、解決するに最も難かしい。たゞこゝに水を盛つたるコップのなかに、ほんの一滴の葡萄の赤酒を落すとする。刹那ばらいろの煙は一面に散るが、たゞちに跡形もなきやうに消え失せる。が暫く經つうちに、透明な水のこゝそこに薄黑い然し清らな赤酒の粒が出來るのが見られる。……このカナの法則が正（まさ）しく一般知的な社會的な現象にも適用されるものであるか否かは、更に深い攻究を俟つの外はない。——

それよりももつと問題は、今までヨーロッパ精神と稱（よ）んで來たものが、——ロマとキリスト教とギリシア思想との三箇の影響に依つて形成せられて來たこの精神が、鮮くともそのうち最も貴重なる部分が、全部分布さるゝものなりや否やである。

この重要なる問題に對してわがヴァレリーは、その『精神の危機』の末尾でたゞこれだけ言つてゐるに過ぎない。——

『……ヨーロッパに對するこの種の脅威に反抗する爲めにヨーロッパは何等かの『自由』をも有し居らないであらうか！おそらくこの自由を求むることが、この自由を創り出すことかとも思はれる。それにしても、この種の探求をなすが爲めには、暫らくの間全體に亙るの考察を捨てゝ、思索する一個性の内部に於ける個人的生活と社會的生活との爭ひを觀測することを要しやう。』

ヴァレリーの考察はこゝで止る。要するに彼は、スペングラーの、カイザーリングの、ロマン・ローランの、さては、

ラビンドラナート・タゴールの、マハトマ・ガンディの、ヨーロッパ文明に對する呪咀乃至輕侮にもかゝはらず、依然ヨーロッパ文明の本質の他の文明と比し優れたるものなることを確信しやうとしてゐるのである。その文明に對する各種の陰謀・脅威に對してすらもつとめて微笑を失はうまいとしてゐぬものである。ヨーロッパの「沒落」のごときは固より彼の冀ひとする所ではない。

アンリ・マシスの『西歐の防禦』は實にこのヴァレリーの施こしたる『ヨーロッパ人』の定義を踏襲してその『光輝』あるヨーロッパ文明擁護の爲めに最も怖るべき仇敵たる『アジア人』の脅威に對する戰鬪の必要あることを說かうとするのである。

○

マシスは、ヨーロッパに對するアジアの侵入を三つの事實について見やうとしてゐる。第一は、スペングラー、カイザーリング等に依つて最も雄辯に代表せらるゝドイツのアジア熱、ひいては所謂ジエルマン文明の本質そのものについてゞある。第二は、マルクス主義の革命と稱しながら實はヨーロッパ主義に對するアジア主義の反動に外ならないソヴィエット・ロシアの出現についてゞある。第三は、ロマン・ローラン等の園を通じて世に喧傳せらるゝがごときインド思想のヨーロッパ侵入についてゞある。

この三つの事實を通じて、マシスは、そこに二個の異つた文明の、——ヨーロッパ文明とアジア文明との、頑強な對立と相剋とを見やうとするのである。マシスに從へば、二個の文明は、決して融和し混合し得ないものである。一方が勝つて他方を滅ぼすほかに行き道がないものである。ヴァレリーがヨーロッパの精神の世界にわたる『分布』の問題を說いてゐるのに對して、マシスのヨーロッパ文明觀は、遙かに消極的で悲觀的である。彼は、ヨーロッパの爲めに、むしろア

ジア文明の分布を虞れる。その分布が、這般の世界大戰の流血を經て昔時の光輝と活力とを失ふに到つたヨーロッパ文明をやがてこの地上から全く掃蕩してしまうであらうことを虞れる。その文明の『防禦』は、ヨーロッパにとつては、眞に生死を決する焦眉の問題でなければならないと見るのである。

『防禦』さるべきヨーロッパ文明が、ヴァレリーの定義せる『精神』を意味することは前にも書いた。たゞ、マシスは更にこれに更に明確な語彙を用ゐて、ラテン文明と稱んでゐる。ヴァレリーが漫然とキリスト教をヨーロッパ精神の形成者と稱んでゐるのに對して、マシスはカトリック教とドイツのルーテルに依つて『改革』された所謂新教とを明瞭に區別し、新教がヨーロッパの文明に與へるに到つた涂毒を指摘して、カトリック教こそ眞のヨーロッパ文明の特質を形作るものであるとなしてゐるのである。そのことは追つて說かう。兎も角もマシスにとつては、ラテン文明こそは、ヨーロッパ文明の本質をなすものであり、同じヨーロッパにありても、スラヴ文明乃至ジェルマン文明と稱せられるものは、むしろアジア文明の要素をそのなかに多量に包藏するものと解するのである。

先づ、ドイツについて見て行かう。

○

戰敗のドイツが、スペングラーの鳴らしたヨーロッパ沒落の鐘の音にカイザーリングの揭げた東邦文明讃頌の辭にどれほどの慰藉と鼓舞とを受けたかは既に書いた通りである。ドイツを救ふものは、最早キリストではなかつた。ましてギリシアでもロマでもなかつた。科學でもなかつたし、カントやヘーゲルの哲學でもなかつたし、さては物質の偉大な力でもなかつた。それは、暗いインドの森のなかからひゞいて來る佛陀の敎か、さては際涯のない平蕪の黄河の邊から遠く聽えてゐる支那古聖の言葉かであつた。當時のドイツ人の屈辱と苦悩と絶望とに疲れた眼は、一せいに東方をアジアを眺めた

ちのであつた。

今この前後ドイツに於いて出版せられたアジア關係の圖書だけ見ても、如何に彼等の心が東方に向いてゐたかが因るに足りやう。カルル・ノエマン Karl Neumann の手で「論語」の全譯の出たのもこの時だ。レオポルド・チエグラー Leopold Ziegler の「永遠の佛陀」が數萬の讀者を得たといふのもこの時だ。ドイッセン Deussen のあの大部な「印度哲學史」が版を重ねることゝなつたのもこの時だ。マルクの低落が底の知れなかつた危機の眞中に、イエナの書肆デイトリッヒが孔子・孟子・老子の著書を飜譯した十冊續きの叢書を出版したのもこの時だ。ボンセルス Bonsels の「印度遊記」が、ヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse の「シッドハルタ」が出たのもこの時だ。こう言へば、ラビンドラナト・タゴールがドイツに來て他のヨーロッパの諸國では到底見られなかつたすさまじい歡迎にあつたのもこの時ではなかつたか。

この熾んなアジア熱の興隆の理由を明確に理解する爲めには、戰後に於ける彼等の絶望と反抗とを知ることを必要とする。のみならず、ドイツ人の特質そのもの――換言すればジェルマン文明それ自體をも知ることを必要としやう。

第一にドイツは古來からフランス、イギリス其他の國々と異り純粹にヨーロッパの正系文明のもとに育てられたものではなかつたのである。例へば、『伯林の浪漫主義』（一九二一年出版）の著者バドラー Badler も說明してゐるやうに、ドイツの西南部こそロマの文明に浴して居つたれ、東北部は全く北に面しスラヴ文明の特色たる個人主義的神祕主義乃至浪漫主義の下に扶育せられてゐたのである。（興味あることは、ドイツの地圖面にありてカトリック教と新教との分布の區劃が、このロマ文明の及べる地方と然らざる地方との區劃と殆んど一致し居ることである。）卽ち、半身はヨーロッパに屬するも、他の半身はスラヴ――卽ちアジアに屬すると言ふがごとき特質を有して居るのである。

この結果ドイツは思想のうへに於いてまた政治のうへに於いて時にヨーロッパに傾き時にアジアに傾き、或ひはその間に巧みに平均を保ち、常に動搖を持續する歷史をば有してゐるのである。卽ち、自己の利益と合する場合にはヨーロッパに

傾くも、然らざる場合には惜しげもなくヨーロッパに背を向けアジアに向はんとするのである。ヨーロッパとアジアとの中間に位しその輕重に依りて動かさる、秤が取りも直さずドイツなのである。トーマス・マン Thomas Mann の所謂『ドイツの精神とその未來とはスラヴの神祕主義とラテン文明とのなかにある』のである。更に今から百数十年の昔ドイツの哲學者フィヒテがナポレオンの軍隊の太鼓の音を外に聽きながらベルリンの講堂のなかで叫んだその『ドイツ國民に告ぐ』の中の言葉を聽け。――『ドイツ人の特質とは、古きアジアの中に樹てられたる社會秩序を結び直して、全く新らしき時代を用意することを使命とするものである！』と。西方から來たナポレオンの馬蹄の下に跪づかざるを得なかつた當時のドイツがその眼をかくして東方の『古きアジア』に向けたやうに、今次フランス、イギリスを中心としたヨーロッパの國々の聯合軍の爲めに敗北の浮目を見なければならなかつた二十世紀のドイツは、狐疑する所なくその救ひの眼をアジアに向くるに到つたのはその傳說を知る者にとつては些かも不思議な現象ではなかつたのである。

ドイツのこの不斷の變心・動搖は、彼が如何にヨーロパ文明に對して眞の愛と理解とを有せざるかを物語るものであると言つていゝ。一八七一年フランスがプロシアの軍隊に依つてパリ城下の盟を結ぶのを餘儀なくせられたとき、今日のドイツのごとく敗殘の浮目を見なければならなかつたとき、フランスの何處に、ヨーロッパ文明を、グレコ・ラテンの文明を呪ひ悲しんだものがあつたらう。現に、ドイツ人自身その著述家オットー・フラーケ Otto Flake の口を藉りてかう言つてゐるのを見る。――『フランス人は、その傳統のなかゝら自己を見出だせばそれでいゝのだ。他を探す必要はないのだ。彼女の傳統はそれほど充ち滿ちてゐるから。そこへ行くと、ドイツは過去に何にも有してゐないと言つていゝ。凭りかゝれる過去が無いのだ。それで結局は『未知』のなかへ探しに出なければならないことになる。……』まつたく、フランス人の辿る進步が常に『內部から完成されて行く進步』――『土着の進步』(『古代都市』の著者フュステル・ド・クーランジュの言葉) であるに反して、ドイツ人の辿る途は、常に外來のものであり、外からの借りものである。ドイツ人のなかにも、

勿論ギリシアを口にする人はある。ラテンを讀む人はある。然しそれは一般からは隔離されたる地方と僅かな人々とだけで、それも、心からの愛と執着とを以て取扱つてゐるのではなくて、古い骨董品として乃至は教科書の資料として取扱つてゐるに過ぎないのを見るのである。我に利あらずと見れば、惜しげもなく捨てゝしまうのを遲疑しないのである。

護るべき過去を自己の内部に有せざるドイツが、かくして不變よりは變化を求めんとするのは當然であると言へる。彼等は容易に彼を捨て此を採つて、その時々の文化を建立する。一切の人類の文明を研究し分類し標札をかゝける。そしてこのなかから適當の資料を取り出し、所謂歴史哲學者の協力を藉りて、こゝに生命に關する新組織なるものを創り出す。レッシングLessingのドイツ人觀は、この點で正に肯綮に當つてゐる。彼は言ふ。――『吾人ドイツ人は、全く組織的の著書には缺かぬと言つていゝ。他人が何等か言葉のうへで二三の説明を吾人に與へるとする。吾人はこの簡單な説明から吾人を悅ばし得る一切のものを抽き出す方法を知つてゐるのである。かゝる特質は吾人ドイツ人外には多く有せざる所のものだ。』この變化性――進化性は最もドイツ的なる觀念である。權利の自然・永遠・神聖を信じ、人類の單一なる決定性（デテルミナシオン）を信ずる一般西歐羅巴の觀念とは、およそ遠いものなのである。

前記した數々のドイツ人の特性が、今次の世界大戰の結果、常日頃に增して一きは鮮明なものとなつたことは想像に難くない。

ドイツ人が大戰に依つて、――敗戰に依つて知つた絶望、悲嘆の大きさは、到底外部の推測を許さぬほどだつたと言つても間違ひではあるまい。彼等はその精銳なる軍隊のまへには如何なる國の軍隊も匹敵するものはあるまいと信じてゐた計りではなかつた。その精巧・壯大な科學文明、物質文明のまへには、敢へて抗爭し得るものもあるまいと信じてゐた計りではなかつた。その精神文明すらも、ドイツ人は、「宇内に冠（ウーヴエル・アレス）」たるものと信じ、「頽廢」せる世界を救ふことが、ドイツ人の使命であると信じてゐたのであつた。そのドイツが、敗れたのだ。それも、世界に於いて文明國の名を以て自他共に許

してゐる殆んど全部の國々の聯合攻撃に依つて敗れたのだ。小說家トーマス・マンの言葉は當時のドイツの悲痛なる心情を充分に傳へてるやう。――『一九一八年に於けるドイツ人は、その底の底まで打ち砕かれたのだつた。まるで嬰兒のやうにぐにやぐにやであつた。一八七〇――七一年にフランスが味つた敗戰の味も、今度のドイツの經驗に較べれば、兒戯に類すると言つてもよからう。ドイツ人は、精神的にも肉體的にも『虛脫』の狀態にあつたのだ。思へ、戰前に於いてドイツは偉大なる文明國として、その卓逸せる獨創的の奉仕を以て人類にめざましく貢獻し來れるものと自信し來つたものである。それが、他の一切の文明國から寄つて集つて叩き擲られ終に死にも頻する狀態に墮さるゝに到つたのである。どうして靜かな反省を以て、自己の過失、過誤を矯正しやうなぞといふ餘裕のある心が起らう。彼等は、自己の力に失望するとともに、一切のその歷史その過去に絶望してしまつたのだ。……』この狀態がそのまゝドイツの思想界、哲學界にも反映したことは言ふまでもない。シャイデマン Scheidemann がその追憶記のなかで敗戰のあと、ドイツ殊にベルリンは宛然『氣違ひ病院』だつたと述べてゐる。歷史家ヤンセン Jansen が『散亂、崩壞、渾沌、疾病、無政府狀態――これがドイツ哲學の現狀である』と述べてゐるその通りであつた。

かゝるなかに提唱されたのが、アジアへの『復歸』であつたことは些かも不思議はない。ヨーロッパから獲た軍隊・科學・物質は、さてはこの精神文化は、見よ、ドイツを結局破滅に導く原因を作つて呉れたに過ぎないではないか。ドイツを救ふものは、――さては世界を救ふものは、アジアを措いては他にない。光は常に東から來る！ワルター・ラテナウ Walter Rathenau でさへも、あの悲劇的な最後を遂げる數ケ月まへに以下のやうなことを書いてゐる。――『黃昏はヨーロッパのうへに落ちて來てゐる。漸次我々の眼は東邦を向かざるを得ない。西歐の空氣のなかで育まれ、その過去、その傳統、その偏見を持つてゐる我々ジェネレーションにとつては、この西歐よりの別離は、心を緊めつける。……が今はそんなセンチメンタルな感慨に耽るときではない。生き死にの問題が眼前に橫はつてゐるのだ。――』更に、ボン大學の

クルチュウス Curtius 教授の言葉を讀め。——『若いドイツは東部に眼をそゝぎ西歐に背を向けてゐる。今こそ、眞に決定的の時機に際會してゐるのだ。ドイツ精神なるものは、自己の彼方にある力を摑み出し、自己の本性に適する外物を吸收して生育するのを常とする。今やこの精神は潑剌として、ロシアに臨み更に豐かなるインド及び支那に臨みつゝあるのだ。……デカルト以來、ヴォルテール以來、さてはフランス、イギリスの諸々の哲學者以來、一切の精神的解放乃至一切の社會的改革は常に西方から來たのを見た。然し、吾人ドイツ人にとつては、今やその時期は過ぎ去つてしまつたのだ。……』更にその頃書かれたパケット Paquet 博士の言葉を聽け。——『ジェルマノ・ラテンの文明の柱はよろめいてゐる。それに反して、スラヴ・ジェルマンの再建事業は著々と進捗しつゝある。……ドイツ人の心のなかに、原始インドの感情とその數千年を閲せる叡知が眼醒めつゝある。このオリエント精神の感化の下に、西歐には一の新らしい道徳が形作られ行くのである。……』

これ等の數々の言葉に依つて示さるゝ當時のドイツの思想的潮流を背景として、はじめて吾人は完全に、スペングラーの『西歐の沒落』の成功を了解することができ、カイザーリングの創つたダルムスタッド學園の繁昌を悟ることができるのである。ヨーロッパで失つた所のものを、——『機會(チャンス)』を、當時のドイツは、アジアで摑み出さうとしたのだつた。アジア以外では、到底手も足も出ないことを感じたからだつた。

かくしてヨーロッパにそむいてアジアに眼を向けたドイツは、果して彼等が望んだやうな『機會』を獲ることができたのであらうか？　それともその東から來る『光』は彼等の絶望・苦惱・野心の焔を永久に靜めるに役立つたであらうか？

それを事細かくこゝで檢討することは、餘裕もないし、またその必要もあるまい。といふのは、今日のドイツが、再びヨーロッパに戻つて來てゐるといふことは誰の眼にも一點の疑を容れる餘地すらもない炳かな事實であらうから。彼等は、一度捨てやうとした物質文明を科學文明をまた摑み直した。ドイツを恢復させるものは矢張りそうした科學であり物質で

あることを知つたのである。事實それに依つてドイツは日一日と當時の絶望・苦惱から恢復して行つた。政治のうへから見ても、ロカルノ條約をフランスやイギリスやと結んだドイツは、——さてはジュネーヴの國際聯盟に公然と加入するに到つたドイツは、最早、ヨーロッパ諸國にそむいてロシアとの握手に專心だつたベルリン條約締結當時のドイツではないのである。あゝもヨーロッパから離れて行かうとしたドイツは、今日は再びそのヨーロッパに戻らうとしてゐるのだ。かう見て行くと、倒れかゝつたドイツを起たしめたものは、矢張りヨーロッパに外ならぬのではなかつたか？

結局アジアは、ドイツの『恢復』にとつてはヨーロッパ以上ではあり得なかつたのである。——

○

次にロシアだ。

ドイツがヨーロッパとアジアとの中間に介在して其時々に自己に都合のいゝやう兩者の間にバランスをとつて生存しやうとしてゐるにも增して、更に一層その傾向を露骨に示してゐるものは、ロシアであると言へやう。否、ドイツは、結局はヨーロッパへ戻るものとも言はれやうが、ロシアに到つてはヨーロッパはほんの借り物で、アジアこそ間違ひのない故郷であるかの觀がある。殊に、ボルシュヴィズムのロシアは、何と言はうと、明々白々なるロシアのアジア復歸を示したものに外ならない。ヨーロッパの借り物をかなぐり捨てて、本然のアジアに戻つたものに外ならない。

ボルシュヴィズムの革命を目して依然マルクス主義に依る革命だと解釋してゐる人々には、ロシアがヨーロッパから背叛してゐるといふことは、腑に落ちぬかも知れない。それは單にヨーロッパの資本主義に反抗してゐるのであり、さてはその帝國主義に挑戰してゐるのに過ぎないのであつて、アジアの爲めにヨーロッパを、——その一切の文物制度までも敵としてゐる譯ではあるまい、と見做してゐるかも知れない。然しながら、これは極めて皮相の觀察であつて、『ボルシュヴ

イズムの革命とマルクス主義とは實際上何等の關係がない」のである。（カイザーリング伯の言葉）ボルシェヴィズムの革命とは、要するにピイター大帝の事業たるロシアのヨーロッパ化に對して、――約二百年に亘つてロシアを改心しやうとしたヨーロッパ化の運動に對して、爆發した國粹運動の――アジア主義運動の烽火に過ぎないのである。ニコライ二世が過激派の手で敢へなくなつたことは人も知る通りであるが、實は過激派の暗殺したのはペイター大帝それ自身に外ならなかつたのだ。

本然のロシアが如何にアジア的であり、從つてヨーロッパの外來文明を攝取することに決して熱心になれなかつたことは、彼の歴史とその地理・人情について見れば誰しも首肯できる所である。

先づピイター大帝のこのヨーロッパ化の事業について見る。當時この事業に對する朝野の反對といふものは豫想の外であつた。夥しい反對者を所刑してから、漸く大帝の事業はその緒につくことができたのである。その反對者のなかには、皇子アレクシスの如き人もゐる。然も、その爲めに皇子は多數の同志とともに刑場に敢へなく最後を遂げてさへゐるのである。

然しながら、大帝のこの權力に依る强制もアジアに糊着する本然のロシアを如何することもできなかつた。當時から引續いて近代にまで及んでゐるロシアのかのスラヴ主義の運動なるものは、實にこのヨーロッパ化に對する反抗の聲に外ならないのである。「……吾人は、東洋の寵兒たちなのだ。何の理由があつて西歐を持つ必要があらう。西歐は科學及び一切の深遠なる事物の祖國だといふのか。然し東洋こそは、吾人の在所に觸れ、吾人の信條、吾人の規範、吾人の德性を生み出した場所なのである。……古き東洋は逝かしめよ。吾人こそはその自然なる後繼者ではなかつたか？　今後吾人のなかにこそ、その讃嘆すべき傳統は永遠に生き榮え、その偉大にして神祕的なる一切の眞理は實現するであらう。……」この言葉は、今から百數十年まへにチャーダイェフ Tchaadaieff の記したものだ。更に百年餘を隔てゝこの言葉に木魂をなしてひ

いくダニレヴスキイ Danilevsky の口から出てゐる別の言葉に聽け。——『ロシア民族はヨーロッパ民族と正反對(アンチポード)の地位に立つ。從つてロシアはヨーロッパ化させられて、一の陷穽に陷ちたものである。ロシアがヨーロッパの軌道に引きずり込まる丶ことになつて以來ロシアの遣つたこと丶言へば、大陸諸國のお先棒になり夫等の國々の利益の爲めにアジアのヨーロッパ化を圖つたといふに過ぎぬではないか。……』小說家ドストイェフスキイの繰返し叫んでゐる『偉大なるアジア思想』は『偉大なるスラヴ思想』に發すとの箴言は、かくして外觀のヨーロッパ化にも係はらず、依然、ロシアの心の底を動かしてゐたライトモーチフに外ならぬことを、吾人は知り得るのである。

ロシアがその底に於いて畢竟ヨーロッパではないことを理解する爲めには、その地理その歷史乃至その國民性が如何にヨーロッパの夫れと緣が遠いものであるかを知るを要する。

北方に介在するこの國は、從來諸國を照してゐたあらゆる文明の源からは最も隔絕したところにあつて、常に佗しい孤獨の生存を續けて來た。それに廣漠としたアジアの草原(ステツプ)と直接連がつてゐるこの不格好な大きな身體は、その內部にしやんとした、きちんと極つた何等のものをも、持つてはゐなかつた。一切が平盤(へいばん)でごつちや〱だつた。ソロヴィエヴ Soloviev の言葉を借りれば、そこには『石(いし)』が無いのだつた。——吾人の建造物に强固さを賦與し、吾人の國家並びに國民の內部關係に明確さを加へしむるところのその『石』がこのロシアにはないのだつた。持續並びに努力の觀念がロシア人に缺けてゐるのはこの爲めに外ならないのである。その土地は徒らにだだつぴろいだけで、地方々々を分つ何等の區劃もない。去るに當つて心を牽かさる丶やうな安定した住居とてもなく、あるのは常に火事に脅かさる丶木の茅屋に過ぎない。か丶るなかにあつて、彼等が個人財產に無關心なのは當然である。今から百數十年前既にフランスの歷史家ミシュレー Michelet は『ロシアの生活といふものは、畢竟共產主義(コムミュニズム)である』と喝破してゐる。それは、無私無欲の爲めといふよりも、向ふ見ずであり投げ遣りであるといふことから來たものに外ならない。從つて、彼等はこの地上にさして執着を持たないが、何か

何ら不明瞭な中間段の途なしに自己の心を結び付けるもの、あるのを感じる。この無限性、この明るさ、この平たさを變へんとする欲望、——これこそロシアの特性である。ブリアンシャニノヴ Brianchaninov は、ロシアの百姓は、ヨーロッパの百姓よりも遙かに支那人や西藏の仙人やインドの乞食たちに近い」と言つてゐるのは、甚だ當つてゐると言はねばならない。

小說家マクシム・ゴルキーはその著書『レニンとロシアの農民』のなかで、かゝるロシアとヨーロッパとの明瞭な相違を、最も雄辯に語つてゐるのを見る。——

「…西歐の人間が、はいはいはいはい立ちができるやうになるとすぐその眼に映るものは何かと言へば、所在にあるその祖先たちが遺つた仕事の結果だ。オランダの運河から始まつてヴェスヴィアス火山の麓にある葡萄畑に到るまで、イギリスの開墾地から始まつてシレジアの熾んな工場に到るまで、ヨーロッパの全土といふものは、人間の組織的な意志の壯大な權化で蔽はれてゐるのを見る。その意志たるや、人間の合理的利益のために自然の原始的能力を克服するといふ、勇猛なる目的を決定してゐるのである。かくして、大地は人間の手の間にあり、人間こそは大地の眞の主人なのである。西歐に生れたる者は、先づこの印象を吸ひ込み、その印象は彼に敎ふるに、祖先の偉大なる事業を繼承し居れりとの自覺と共に、人間の價値の意識、勞働の尊重並びに自己存在に重要なる意味ありとの感情を以てするのである。然るにロシアの農民の間に於いては、かくの如き思想、かくの如き感情、かくの如き判斷は全然生れ出づる餘地がないのである。際涯もなき曠野、そのうへに點在する藁葺きの、木造の村落、——それは、人間をして空虛ならしめ、たゞ自己の内にのみその欲望を汲み盡さしむる害毒を包藏してゐるのである。今農夫がその村落のはづれに立つて、四方を眺め渡したとする。數刻ののち、彼はこの空虛がその魂の底にまで流れ込むのを感ぜずにはゐられまい。如何なる場所にも、勞働の永續的な痕跡が、創造の永續的な痕跡が見當らないのである。…四周はすべて無限の野原だ。その眞中に憐れな矮小な人間が懲役囚人の

やうにこの退屈な大地のうへに働くやうにとて投げ出されてゐるのだ。かくして、人はどうして無關心の感情に捉はれずにゐられやう。而してその結果は思索の能力を殺し、人間が今まで生きて來たといふことを回想する能力を殺し、數々の思想から經驗を抽き出すといふ能力を殺すこととなるのである。――』

これがロシアなのだ。中世紀もなく、ルネッサンスもなく、近代もなく、――要するに一切の傳統一切の歷史一切の經驗を持たないのが、ロシアなのだ。ヨーロッパの國々が夫々持つてゐるやうな幼年期も青年期も壯年期も、ロシアにはないのだ。不動な昏睡狀態はその生存のはじめから續いて、近代に及んでも、混沌たる醱酵の狀態を止めないのが、ロシアだ。小說家ツルゲネーフの言葉は正しい。――『吾人は常に瓦斯狀時代 la periode gazéiforme に住んでゐるのだ！』

一般文化がロシア民族の間に行き亙つてゐぬことも忘れてはならない。ヨーロッパの諸國が旣に千四五百年も昔時に蠻族の覊絆を脫したのに反して、ロシアはついこゝ四五百年前までは蠻族の侵入のなかにあつたのだ。この相違が、ロシアを他の一切の文明國から一層孤立せしめることとなつてゐることは言ふまでもあるまい。この不幸な民族の運命を、チャーダイェフはかうも書き記してゐるのを見る。――『われ〳〵ロシア人は、言はゞ私生兒のやうに、遺產もなく、前からこの地上に住んでゐた人々とは何の連鎖もなく、この世のなかに投げ出されたのだ。われ〳〵は心のなかに先人から與へられた何等の敎訓も持つてゐないのだ。他の民族にとつては、習慣でもあり本能でもあることが、われ〳〵ロシア人にとつては鐵槌で打ち込まれなければ頭腦にははいつて來ないのだ。……この結果は、われ〳〵の文化といふものは一切輸入品であり模倣品であるといふことになる。われ〳〵のなかには內部の發展とか自然の進步とか言ふものはない。新らしい思想が古い思想を掃き出す、何故と言つてそれはこれから生じたものではないし、それにこれは何處から生れ出したかを知る人もないからである。從つてそれ等の思想はいつでもレディ・メードの思想だ。……われ〳〵ロシア人は大きくはなる、然し成熟はしないのだ！』

従つて従來のロシヤの歴史に現はれた事件といふものは、常に外部から移せられた事件であり、その背景思想なるものはひとしく外から撤入せられた思想に外ならないのである。ヨーロッパの國々で見るやうに、各自の魂の深みのなかに相衝き相刻み合ふ思想の連がりが表面に現はれてそれぞれの事件となつて歴史を作つて行くといふやうな現象は、まつたくロシアでは見られないのだ。ピイター大帝の事業さへもロシア人の魂の發展とは何等の關係もない。再びチャーダイェフの言葉に見やう。――「ピイター大帝は彼のまへに眞白な紙があるのを見ただけだつた。その紙のうへに強い手で彼は書いた、――『ヨーロッパ』。かくしてその時からわれ〳〵はヨーロッパ人となつた……。」

○

グレコ・ラテンの思想を土臺として建てられたヨーロッパ文明が、如何に根本からロシア文明の夫れと違ふかは、上述の通りである。然し世上の論者のうち、或ひはキリスト教がロシアに及んでゐる現象を目してこれがロシアをアジアから離してヨーロッパに結び付けて置くものであると見做す者があるかも知れない。がこれもよく觀察して見れば、ロシアのキリスト教とヨーロッパの國々の夫れとは殆んど類似點のないのを見出だす。それはむしろヨーロッパにロシアを近附けるものではなくて、益々これから遠ざけるものであることを知らしめるのである。

ロシア人――殊にその農民の所謂宗教心について、何人も念頭に思ひ浮べるのは、小說家ドストイェフスキーに依つて數々描かれてゐる彼等の信仰、彼等の敬虔の念であるに相違あるまい。彼は言ふ。――「吾人が西歐の源泉から汲み取ることを必要とせぬ一のカルチュアがある。それは直接ロシアの源泉から來てゐるからだ。……わが民族は古くから、――一般に同化し合つてから、引き續きキリストの教理の眞髓に培はれて來たことを自分は確認するものである。そう言へば世人のうち、ロシア人にはキリストの教理の理解がないこと、說教なるものを全く聽かうとしてゐないこと、等々を以て自分

の說に反對するかも知れない。然しこの反對は意味のない反對だ。なるほど彼等は敎理問答の試驗には落第するかも知れない。然しながら、彼等は一切を知つてゐるのだ、知らねばならぬ一切を知つてゐるのだ。彼等は數世紀に亘つて祈禱をきゝ聖歌をきゝながら敎會のなかで敎育されて來たのだ。……』更に彼は別の場所でもかうした言葉を書いてゐる。――『……ロシア人は聖書をよく知つてゐないし、また信仰の根本的な規準にも無知であると言ふ人がある。然しながら、彼等はキリストを理解してゐる、且つそれを常にその心のなかに持つてゐるのではないか。……敎理を知らずとも、眞のキリストは理解できる。……』

これだ、これこそロシア人の所謂キリスト敎なのである。漠たる宗敎的情念・感動、その神祕的情操、ひたむきな信心――そして、そこにはキリストの敎理が無視され、敎會の敎義が顧みられないのである。この結果は、彼等の爲めに精神的に嚮導する者がないことになり、眞に赫灼とした敎理の光りがないといふことになつたのである。あるのは極めて外面的な儀式・形態に過ぎず、彼等は言はゞ野に放たれた羊も同樣道德的にも宗敎的にも彼等を强く導く者を持たずに打ち過ぎたのである。ウィブーロフ Wybouroff が、『ロシアには敎會はあつた、然し宗敎は曾てなかつた』と言つてゐるのは、この意味で實に正しいと言つていゝ。然かもこの敎會は、パガニズムを漸次壞して行つたのは手柄であつたが、それに代る何物をも創りはしなかつたのである。かくしてロシア人は一切の迷信・一切の奇異にのみ左右さるゝこと、なつたのである。ブリアンシャニノヴの所謂『ロシアは事實眞にキリスト敎に歸依したこともなく、また眞に正敎(オルソドックス)となつたこともない』のである。ラテン語を解せず、聖書を繙かず、たゞ目を通すはスラヴ語にて綴られたる諸聖者の殉敎傳『チェチア・ムネイヤ』"Tchetia-Muneia"に過ぎず、またローマ敎皇の敎權を知らず、これを以てどうしてヨーロッパの國々の辿つた道と均しいものであると見ることができやう。

これのみではない。敎理を排し敎義を斥けてゐる彼等のなかに神學者も出でず、さては獨創的な哲學者も出るに到らな

かつたことは、言ふまでもあるまい。彼等はそれ等を呼ぶに『ラテンの合理主義』なる侮蔑の言葉を以てした。キリスト教が、人類の道徳と叡知との進歩に貢献した布教・教導等一切の制度は、彼等にとつて無用の物に外ならなかつたのである。彼等の理想はむしろ西藏のラマ僧のそれであつた。――この世を捨て、無人の境に隱遁することであつた。知能の力、手足の働きに依つて世を益し、また慈善に依り傳道に依り人道に貢献するといふがごときことは、毛頭念とするところではなかつた。ロシアに教會はあるが宗教はないと言ふと同じく、そこには僧侶はあるが宗教的義務なるものは全然存在しないと言つてい、のを發見する。

ロシアに、ヨーロッパが經驗したやうな激烈な宗教的討論がないのも、こゝに原因する。勿論ロシアにも、所謂宗教爭亂はあつた。然しながらそれは、決してヨーロッパに於いて見たやうな教義のための道徳のための問題から起つた爭ひではなかつた。かゝる意味の論爭はとうの昔のロシアでは終つてしまつてゐた。かくしてヨーロッパが――カトリックが、この論爭に依つてその深さを増しその力を豐かにしその廣さを加へて來たのに反して、ロシアではそのまゝ重々しく停滯してしまつた。信仰が人間の最も精緻なる理性に依つて益々その輝きを増して來たのが、ヨーロッパであるならば、ロシアはこれに反して、その信仰のうへにできるだけの不合理を積み重ねて置くことゝしたのである。……

キリスト教はかくしてロシアとヨーロッパとの類似を示すよりもその相違を示す實例の一つとなつてゐるのである。

○

かくのごとく見來れば、ピイター大帝の事業なるものが如何に本然のロシアとは縁の遠いものであつたかを諒解することができやう。然も、この事業の遂行が至難なるべきのみならず決して永續し得べきものでないことも、本人のピイター自身が誰よりもよく知つてゐたのであつた。彼のこの改革は要するに一時の便宜の爲めに外ならなかつたのだ。彼は言つ

てゐる。——『ヨーロッパは吾人にとつて何十年かの間は必要だ。然しその後では背をそむけなければなるまい。……』ピイター以降ロマノフ朝に依つて人爲的に支へられて來たこの脆弱なヨーロッパ化事業が、今日挫折するに到つたのだ。それは實にピイター自身の豫見してゐるところでもあつたのである。

それにしても、ピイターのこのヨーロッパ化の事業の結果は、ロシア社會の混亂を最も完全にしてしまつたかの觀がある。先づ、この『改革』に依つてロシアに導き入れられたヨーロッパの文物といふものは、最早既に衰頽(デカダンス)の色を帶びたものが多かつた。何等の批評なく何等の選擇なくこれ等の世紀病までも取り入れたロシアは、やがてその病毒の全身に回るのを止める何等の抵抗力をも持つてゐなかつたのである。こゝにヨーロッパの國々が持つ傳統力と精神の訓練とがこの國に缺如してゐたその結果が如實に現はれたのである。ルッソーの『民約論』からカントの二律背反論にいたるまで、スチルナーの絕對自我論からマルクスの唯物史觀論にいたるまで、彼等は嬰兒が物を受取るやうに世にも無邪氣な無批判的な態度と熱情とで何もかもごた〴〵のまゝに受取つたものであつた。

悪はそれ許りではなかつた。この結果はヨーロッパの影響を受けた所謂上流階級乃至知識階級と一般ロシアの民衆とは全然相互の理解のない二個の對立となつてしまつたのである。否、この種上流階級乃至知識階級は『蠻族の眞中に孤立してゐるヨーロッパの移民(コロニー)』となつてしまつたのであつた。

斯くして取入れられたるヨーロッパの諸思想は、他方ロシアに於いて特異の現象を結實することゝなつた。それは、元來ロシア人の頭腦には整頓(オルドナンス)の思想がない許りではなく抽象的觀念なるものを容れる下地も先天的に出來てゐないがために、西歐に於いては夫々單なる理論に止まつてゐたものを、彼等は、矢庭に實際の現象と結び付けんとしたのである。未知も不可能も全く彼等の念頭にはなかつたのである。こゝから一切の破壞的行爲が現はれて來るのだつた。

ロシア人の破壞性については、既に十九世紀の半ばにわが史家ミシュレーが下のやうに書いてゐるのを見る。——『人

はよく西歐人は懷疑的だといふけれど、 ——ほんたうではない。ある一つのものには懷疑的であつても、他のものに對しては確乎たる信念を持つてゐるのが彼等の全體だ。歷史は信じないが、化學は信じ、生理學は信ずる。——と言つたのが彼等だ。そこへ行くとロシアの世界では、人が一度懷疑の坂を滑り出したら、それを途中で支へる何物もなくなる。均衡もバランスもあつたものではない。見よ彼等が近年ヨーロッパへと傾いて來る物凄い光景を！　それはまるで人間の屍體に電流でも通じたやうに、魂も意志もなく單に怖るべき自働機(オートマート)そつくりに盲目的な力で進んでゐるのだ。そこには、思想もなく、原則もなく、感情もないのだ……」ここでミシュレーは結論として、かくも秀れた豫言を敢へてしてゐる。——「……昨日ロシアは吾人に語つたものだ。『私はキリスト教ですよ』と。然し明日彼は吾人に語るであらう。『私は社會主義ですよ』と。……」

ミシュレーが見た十九世紀のロシアが西歐を指してゐたやうに、二十世紀のロシアは同じ物凄い光景で東洋へと流れ出してゐるのである。『我々はアジアに向はう。そしてアジアを通つてヨーロッパへ這つて來やう。』——このレニンの言葉でこの團體の大きな自動機(オートマート)はまた柔順に西から東へと動き出したのだ。

何は兎もあれ、破壞の限りを盡したボルシュヴィズムなるものは、決してレニンの發明でもトロツツキイの發明でもなく、勿論マルクス主義の結果でもなく、それは全くロシア人全體がそれなのだからであつた。ドストイエフスキーが既に同じ意味のことを書いてゐる。——『虛無主義(ニヒリズム)なるものがわが國に出來たのは、我々がすべて虛無主義者(ニヒリスト)だからである。從つてこの主義の源は何處にあるかなぞと眞面目に研究してゐる學者を見ると噴き出したくなる。それは何處からも來たものではない。何時だつて我々とともにあり、我々のなかにあり、我々の間にあつたものなのだ！』

○

兎も角ロシアはアジアに戻つたのである。「腐つたヨーロッパ」の羈絆を脱して、こゝに本然のロシアに還り、アジアの盟主たる使命の下に世界を一新しやうとしてゐるのである。「今日に於いて神の唯一の民族は何れなりや。この世界を一新し、新らしき『神』の名に於いてこの世界を救ふべしと命ぜられたる唯一の民族は何れなりや。その民族こそは實にわがロシア民族……』――このドストイェフスキーの言葉こそは、レニンの信念でありトロッツキーの誓約であり、結局ロシア人全體の希願に外ならぬものであつた。彼等の夢は實にアジアの盟主として、やがて全世界に君臨すること、なるのであつた。モスコーの雜誌『新東洋』"Novii Vostok"は書いてゐる。――『新らしいロシアは、何よりも先づ、道德的經濟的に奴隷となつてその軛の下に呻吟してゐる『東洋』全體の盟主であり教導者であるのだ。モスコーこそは、實に一切の被征壓民族にとつてのメッカでもありメディナでもあるのだ。』

今から數十年まへ、かの『耶蘇傳』の著者ルナンが豫見したやうな時代が今やそこへ現はれつゝあるのではなかつたか？ルナンは言ふ。――『その尾が數多い星辰の第三の部分を蔽ふてゐる默示錄の龍のやうなスラヴ民族は、そのうしろに、中央アジアの羊の群を、――ジンギスカンとタメルランとの古い華客を引き連れて遣つて來ることであらう……』

○

アジアがドイツ竝びにロシアをその先驅としてヨーロッパの城塞に迫つてゐることは今や說いた。然らば、問題はこゝに攻擊軍の本部隊であるべきアジアの本隊は抑々如何なるものであるかの題目に移つて來る。

インドなり支那なりが從來ヨーロッパのある哲學者たちにとつて詩と神祕とにつゝまれた新世界のやうに考へられてゐたことは、既に說いた通りである。ルッソーが、アテネの廢頹ロマの衰廢を叫び原始ペルシアの美とタシット時代のジェルマン民族の力とを讃賞したと同じ調子で、これ等の哲學者は、ヨーロッパの文明の黄昏を說いて、これに代るべき新文明がア

ジアに存することを強調したのであつた。老境のヨーロッパを生かすための青春期の聲がかなたに、そのガンジス河の流域の森林のなかに、黄河の流域の曠野のなかに隱されてゐることを、彼等は叫んだのであつた。

然しながら、果してアジアはこの論者の言ふやうに清新で原始的であつたらうか？　印度學者の一人であるオーギュスト・バルト Auguste Barth はその著書のなかで書いてゐる。——「リグ・ヴェダ Rig-Veda の讃歌に現はれてゐる思想並びにその言語を研究して見るのに、自分は世人が言ふやうな素朴さ（ナイヴテ）を認めることはできなかつた。むしろ反對にその詩章全體は、おそろしく洗練され、皮相的で、暗示や隱語やが多く、如何にも神秘らしく神に交渉があるらしく出來上つてゐることを發見する。……」

それのみではない。アジアの最も大きな「光」である佛教自體が實に混沌として無數の教義・教理をそのうちに包藏し居り、結果ヨーロッパの哲學者をして各自その好む勝手なる定義をそれに下さしめ居ることは、同じ現代の印度學者シルヴァン・レヴィ Sylvain Lévi（同氏は數度日本に渡り、最近も暫らく東京に滯在したやうに思ふ）の言葉を借りれば、かうである。——「不可知的相對性論 Relativisme agnostique の論者にとつては、佛教の所謂「人間の一生は無限悠久の世に於けるほんの一時的な出來事に過ぎない」となす觀念がそのまゝに自個のテマであることを發見し得るし、進化論者にとつてもそこに絶好の現象を見出すわけであるし、汎神論の論者にとつても「自然は一の飾り一の單なる額縁にはあらで、人間・禽獸は勿論一介の木石に到るまで生命の永久變化のなかに於ける一時の見習ひをつとむるものである」と見做す佛教が自己の哲學の最も有力な味方となるわけである。人生悲觀論の論者にとつても佛教の因果應報說が——「天の高きより地獄の底の深きに到るまで一切の存在は一度冒せる行爲の道德的結果を永劫に負はせらるる」とするその教理が飛び付く程酷く思はるるのは言ふまでもない。しかも一方決定論の論者から見れば、かゝる法則は自己の主張する盲目的の力なるものと全然合致することとなつて眼に映る。そうかと思へば無爲主義 Quiétisme の論者は、この教理のなかから

『寂滅怡樂を永劫に確保せんが爲めに、無智と慈愛と憐憫との諸德』をのみ捉まうとしてゐるのである……』

しかもこの種の哲學者――カント、スピノーザ、ショペンハウェル、シエーリング、ヘッケル、スペンサー、オーギスト・コントから現代のベルグソンさてはカイザーリングに到るまでいづれも佛敎を自己に都合よく利用した人々である――の企てたことは、要するに從來ヨーロッパ文明の核心をなしてゐた人間の實體 Atma の思想、實體の哲學なるものを否定したといふことである。彼等はこの點に於いて全く一致して佛敎の敎理と『同盟』してゐる。人間の實體なるものは、現實の存在を有せず、從つて最早絕對の認識もなく、客觀的の眞理もないのだ。宇宙なるものは、原もなければ終りもなく、人生はまことに假の住居に過ぎず、善・惡の觀念、自由の思想もまた存在する筈もない。個性の觀念も失はれざるを得ない。我々の肉體自身が最早『諸々の魂の一のコロニー』に過ぎないのだ。雜多なる傾向と本能との凝集に過ぎないのだ。自我なるものは、單に、他よりも强い本能を指すに外ならないのだ。……

○

アジアの特徵は、――『毒』は、個性を人格を消滅させることにある。アジアを理解し得んが爲めには、先づ人は、ものを確定する考を捨てるを要する。ヨーロッパの精神に獨特なる正確を求むるの欲望、識別を區別を求むるの欲望を捨ててしまつた後でなければ、人は到底アジアの科學なるものに參加することはできぬのである。

東洋と西洋との根本的な肝要な對峙は實にこの人間とその宇宙に對する關係との考へ方の相違に存すると言ふことができる。西洋に於いては、人間は實體であることを求める。人間が諸事物のなかに沒入してしまふとか、さては人間が自然の一部でしかないといふやうなことは、吾人の忍び得るところではない。然しアジア人は、萬物が同じ價値で生きてゐるといふ幻想のなかで樂しんでゐるのだ。そこでは一切の生物がえたいの知れぬ無限のなかに混り合つてゐるのだ。事物の

區別、事物の標準を古い時代から教はつたヨーロッパ人にとつて――アナクサゴーラの古い言葉のごとく「初めには、いつさい物は混沌たり。されど知識來りて一切を夫々その地位に据へたり」――秩序の觀念、それから生れた知識的區別の觀念、類似と相違との觀念、一般科學の觀念、更に詮じ詰むればこの人格・個性の進歩の觀念は、實にその生命に外ならないものなのである。

その點に到るとアジアの思索なるものはその往古より「全部」のなかに於ける同一の『一』の冥想に耽り、人格の限界をばコスモスの無數の力の潮紛せる波濤のなかに沒入させてゐたものと言ふことができる。斯くしてアジアの賢者の認むる處は、自己と世界との間の密接不斷なるコレスポンダンスであり、その『自我』とこの宇宙を動かし充たす絕對・隔絕せる『實在』との同一視觀なのである。かくして彼等は、自己の生命自身を觀るに無常にして且惱ましき一のアクシデントに過ぎぬとなすのである。この世の存在は一の惡であり、その人格は根本の惡であり、彼岸の幸福に到達せんが爲めには先づ其れ等を破壞することが必要であるとさへ、彼等は思惟するのである。

そはひとり佛教にのみ見らるる哲理ではない。見よ、ウパニシャード若くはヴェダーンタに於いては、外界の觀念乃至宇宙萬象現存の信條をば排擊してゐるのである。サムキアに於いては、神の思想を抹殺してゐるのである。ヨガに於いては、理性のみならず、思索の使用までも禁じてゐるのである。卽ち一切のアジアの哲學なるものは、人格の完全なる壞滅に到達することを目的としてゐるものだと言ふことができるのではないか。

かゝる哲學の必要の結果は、人間的な活動を無にし、行動の神經を壞すといふこととなる。物質的な感覺的な知的な「自己」から解放されて、聖魂の深淵のなかに飛び込むといふこととなる。

而して斯くの如き一切の哲理が、汎神教（パンテーイズム）に歸着することは言ふを俟たぬ。卽ち、主觀と客觀とを同一視し、各個々の魂を同一視し、更に人間と神とを同一視することは、あらゆる神祕的汎神教に共通せる觀念に外ならぬからである「波羅

門を識る者は、波羅門自身となるべし』――これこそ、單に波羅門教徒の箴言である許りでなく、すべてのアジアの哲理の合言葉ともなるものなのである。

死の勝利――涅槃の期待が、こゝに根ざし來れるは言ふまでもない。彼等は微笑を泛べつゝ世にも靜和なる態度を持して、この死の到來を俟つのである。聽け佛陀の言葉を。――『われに苦しみを與へたる者、われに喜びを與へたるもの、これ等すべての者に對して予は變ることはない。予は愛慕も識らずはた憎惡も識らない。快樂のなかにあるも苦惱のなかにあるも予は動かされることはない。名譽のなかにあるも不名譽のなかにあるも、常に予はひとしい。そこにこそ、わが魂の統一の完成が存する！』

このアジア哲理に對して、キリスト教の訓ふる哲理は全くその反對とも言へる。即ちキリスト教徒にとつての完成は生きたる神の愛であり、無限なる實在であり、欲望の最高なる目的であるのだ。その完成に達する爲めには、個人のエネルギイに依る克服に依るほかに途はない。『神は行動を止め給ふことなし。われ亦行動すべし』――これこそ聖書のライト・モーチフに外ならぬといふことができやう。この行動、努力に於ける信念、現實に面しての活動的態度、實在の至善を碍ぐる一切のものに對する不斷の戰鬪、更に高く更に廣く生きんとするの願望、自己を超えて至高に到達せんとするの願望、――これこそキリスト教の眞諦と言ふを得る。即ちキリスト教徒の信仰は、一の勞働的眞理なのである。

言はゞ、キリスト教徒は競技場（スタディウム）を馳ける選手にもたとへ得やう。自己のまへ、自己の外にあるものに達せんとして彼は渾身の力を籠めて馳ける。彼はへとへとになつて倒れる、――が同時に彼はその目的に達する。敗北の、――然しそれは死以上のものに依つて酬ひられるのである。

ヨーロッパの一切の道德的・社會的・政治的の生命の源泉は實にこれから迸り出でるものに外ならぬのである。アジアの有つ哲理とは正に宵壤の差が存すると言つていい。

マッシスは、斯くしてアジア思想とヨーロッパ思想とを根本的に相違あるものと見做すのである。從つて、アジア思想がヨーロッパに浸入することは、ヨーロッパの崩壞なりと爲すに躊躇しない。しかも、このアジア思想の浸入に對してヨーロッパを防禦するものは、ヨーロッパ文明の眞髓を「再發見」する以外にあり得ないこと、而して、このヨーロッパ文明の眞髓こそは取りも直さずキリスト教――それもカトリック教に外ならぬものであることを、闡明しようとする。

ヨーロッパ文明――狹義に言へばヨーロッパの敎義とは何か？　グレコ・ラテンのカルチアの遺産のなかに包藏せられたるユダヤ・クリスト的一神論に外ならぬ。唯一なる神、唯一なる眞理、唯一なる人道、而して同時に唯一なる法規、唯一なる權利、唯一なる理性、唯一なる世界共通の道德――これこそ、ヨーロッパの文化の根柢をなすものである。この原則を外れたる思想は、ヨーロッパの思想とは言ひ難い。かくして、精神は感覺界を支配せんが爲めに、神は人類に命令せんが爲めに、一生は永遠に從屬せんが爲めに作られたものであることを信じ、萬物は一切自己の地位を確然と有し明瞭なる限界をもつてこの地位を定めしめることを疑はぬのである。卽ち、一切の現實は相滲透し相維持する。はた一切は聖められ且つ獻げられてゐる。空と地との間、地上の都市と神の都市との間には、不離不隔の渾然たるコムミュニカッションが樹立してゐる。人間はその正しき基準のなかにあつて、眞の自由をもつて聖與を享有しまた已れ自身とその行爲とを處理することができる。この秩序、この理性、この自由こそ、イギリスのチェスタートンの所謂『一つの坩堝に總てを溶かしこみ、廣大なる沼澤に總てが覆沒してゐるアジア』とは、徹底的に相違するところのものなのである。

ヨーロッパに見るが如き人間社會なるものをアジアに見得ないのも、この理由の外には出でない。卽ち、ヨーロッパにありては、社會は神の創造的並びに基準的なる力の下に、敎會の統括の下に、劃然と組み立てられたる建造物である。こ

ゝでは、孤立した人間の存在は認め得ず、また信じ得ないのである。人間卽ち社會である。宗教的の人格に於けると知的乃至道德的の人格に於けるとを問はず、一切の人格の發展には、社會竝びにそれを指導する神の援助と協力とを求めようとするのが、ヨーロッパである。社會の存在を離れては、個人の存在は到底あり得ないのである。これに反してアジアに於いては、かゝる意味の社會は存在してゐない。社會の代りに存在するものは、孤立せる個人の徒らな集團に外ならない。そこで認められるものは、暴君の意志でしかなく、道德・正義を缺いたある權力でしかない。かくして東洋を交互に支配してゐるものは、二つの政治形式――共產主義と獨裁政治とであるとさへ見做すことができるのである。そこには權利の思想なく、法的關係の思想なく、況んや人間に對する正義觀の樹立の如きはこれを探すべくもないのである。

○

然しながら、ヨーロッパ文明の敵は單にアジアにあるのみではなく、ヨーロッパ自身のなかに伏在してゐることを、マッシスは說かうとする。

ドイツが從來アジアとヨーロッパの間に介在して時に東に時に西に傾轉するのを躊はないことは旣に言つた。然しこれをキリスト教自體のうへに見るときに、彼女の擲けた古い毒矢は、今日に到るまで恢復できない激しい痛手を、ヨーロッパ自體に負はしてゐることを知るのである。

それは、先づカトリックに反抗して立つたとするマルティン・ルーテルの毒矢だ。それから、カントの哲學の毒矢だ、ヘーゲルの哲學の毒矢だ、シェリングの哲學の毒矢だ、これ等がヨーロッパの高貴な文明を、やがて瀕死の狀態に陷れやうとさへもしてゐるのだ。

見よ、ルーテルを。彼は、從來渾然と融合してゐた物質と精神とを、自然と聖寵とを、社會生活と內部生活とを、それぞれ對立せしめて、これ等に魂を注ぎ込むと稱しながら事實は最も慘酷なる原始的本能を煽動するに終つたのである。彼

は、人類に至要なる生活に參與せんとする希望の途を鎖した。彼は、信仰の至兒自體でさへも教會の財産を殺いで了つた。或は、天啓の受託者たる教會がわれ等の爲めに示して呉れてゐる眞理を、聖禮を、儀式を、總ゆる超自然的な方法を、一緒くたにして排撃した。かくしてこの「宗教改革者」は、世の人を誘うて土地の所有者たらしむることとしたのである。更に、國家を神と同一の地位に置き、偏狹なる國家主義のイデオロギイすらも發明したのである。かくして、國家は強力を附與せられ、今日見る如く所謂非宗教的の聖權を自任する源をなすにさへ到つたのである。あらゆる方面に於いて彼の企てたことは、統一を不統一に代へたとの語に盡くるのである。

ルーテルの作り上げた純粹理性と實踐理性との間の拮抗鬪爭に、更に油を注いで完全に兩者の間の斷絕を齎らすに成功したものは、エマヌエル・カントの哲學である。人も知るごとく彼の哲學は、實體の哲學なるものは科學として取扱ふを得ず、從つて實體のうへに基礎を置ける一切の神裁說は根本的に誤謬なることを說いたものである。故に、彼の哲學の範圍は、要するに經驗主義及歸納法に從屬する諸現象に限らるることとなり、人間は一に具體的にして有用なる存在しか具備し得ないものとなり終つたのである。

かくしてルーテルによつて培はれ、カントによつて花を咲かしめられたこの理想主義なるものは、一切の精神的目的觀を侮蔑するかの實證哲學乃至決定論を生む胎となつたのである。近代の科學的唯物主義はこゝに生ずる。神學の不可知論は最早全く斥けられ、一切の宇宙の疑問は科學に依つて解かれざるものなしといふまでの趨勢を齎して來た。宗教の問題、道德の問題までが、その檢討のメスの下に横たへさせらるることとなつた。……

○

然も十九世紀に於いて猛威を振つたこの科學絕對論も、批評の發達した今日に於いては著しくその勢力を失ふに到つたのは人の知る通りである。彼が過去に於いて攻撃した神學絕對論が參るよりももつと容易にこの批評に參るに到つたので

ある。

かくして今や唯物論的障壁は倒壞した。原子論も打破されたし、決定論も搖ぎ出し、宇宙機制論(メカニズム)も打ち捨てられることとなつた。懷疑論自身は、『その疑ひを失つたあと再びそれを見出し』て、未知のなかに彷徨をはじめて居り、超自然を見事に倒した筈の實證哲學はと言へば、今度は已れ自身の手で已れの學說を倒すに到つたのである。科學的宇宙は、かくして再び神祕でつゝまれることとなつてしまつた。嘗て科學は吾人に合理主義を齎らせることと信ぜしめてゐたのが、今やそれは非合理主義をさへ齎らせるに到つたのである。

これが實に今日吾人の見るヨーロッパなのである。

かかる現狀に於いて、唯物的官能に唯心的混亂を交錯してゐる無數の得體の知れぬ神祕說が横行し出すのは當然と言へる。その精神力たるや最早人はこれを明確に知悉することを得ず、徒らに醫師の機械を以て化學者の實驗用具を以てこれを量り定めんと焦つてゐる。それに、精神分析(プシコアナリーズ)と稱するもの、半意識(スユブコンシアン)と稱するもの、乃至は夢——これ等が今の思想界に横行してゐること亦人の知る通りである。チェスタートンの『新らしきエレサレム』のなかの文句の通り『キリスト教とは關係なき神祕主義が今や戻つて來たのだ。獨りでにこの神祕主義は遣つて來たのだ。がそれは已れよりもずつと強い七つの惡魔を引つ張つて遣つて來た』のだつた。

從つて現代を目するに、超自然なるものに事缺いてゐるとは言ふを得ない。それどころかあらゆる種類のあらゆる變つた超自然が現はれた、と言ふことができやう。故に今日の大いなる惡は、最早唯物思想乃至懷疑思想ではなくて、鎖から解き放たれた唯心思想だとさへ言ふことが出來やう。然も眞の正しき超自然に到つては、これが認められやうとはしてゐないのである。

現代のヨーロッパが、東洋からの叫び聲に足を爪立てして耳を傾けてゐるのも、この一つの現象に外ならないと見ることができる。卽ち、インドはヨーロッパに先つこと數世紀既にカントの說いた哲學の世界をば生み出した所として眼に映

る許りではなく、これはエクゾテイズムと浮華と頽廃との甚はしき野蛮として〻眼に映るのみだつた。

然しながらこのインドからの誘惑の叫び聲が如何にヨーロッパの文明にとつて怖るべきものであるかは、前に述べた如き來つた通りである。まことに人類の歴史のうへに於いて、文明と文化のこの大いなる爭闘ほど悲劇的な性質を帯びてゐるものは他に無かつたとも言へやう。これ、思想のあらゆるサイエンスをば危殆に陷し入れしめ得るこの兩者の葛藤こそは他日戰爭のあらゆるサイエンスをも危殆に陷し入れしめ得るが故である。生か死か、――問題の要約はそこにあると言へる。

かゝる故にこそ、ヨーロッパは今まで見失へる自己の再發見を必要とする。自己を明確にすること、――全くこれにも增して緊急な問題は今日のヨーロッパに無いと言へやう。雜種の思想、雜種の科學、雜種の道德、雜種の教育――ヨーロッパの惱みはこゝにある。然も反對に行動の魂を汲み出すべき一の整均せる眞理を有さぬといふこと、眞の惱みはこゝにある。教義なく、共通の精神なく、同じ名を事物に附與すべき哲學がないといふこと、こゝにある!

グレコ・ラテンの文明とカトリシズムとの完全なる復興、――これこそヨーロッパを救ひ得る唯一のものと言ふことができる。――かうマッシスは結論するのである。

○

マッシスが、約三百頁に互る「西歐の防禦」のなかで取り扱つたドイツとロシアとアジアとの問題は、大要右の通りである。彼はこれに加ふるにその結論の形を用ひて、カトリック教皇の統率の下にヨーロッパが形に於いても心に於いても見事に統一せられてゐた中世紀――特に第十三世紀の歴史を回顧して、現代のヨーロッパの惱みを救ふものは中世紀の昔の如くカトリック教會を中心とする文明の樹立に努むる外に途あるまじきことを強調してゐるのである。現代をその不統一と混亂とから救濟する爲めのこの新中世紀主義とも名付け得べき主義主張は、勿論マッシスの專賣ではない。なんとなれば自分はロシア人ニコラス・ベルディアエフ Nicolas Berdiaeff の手に依つて書かれた「新中世紀」がマッシスの議論に相當重大

な影響を與へたる形跡があるやうに感じさへするのである。千九百二十三年にロシア語にて脱稿せられたるこの「新中世紀」は、數年を經過した今日英・獨・佛夫々の國語に飜譯せられてゐるから、わが邦でも讀んだ人は皆無ではないかも知れない。現代の廢頽・混亂の源をルネッサンスの所謂解放運動に持つて行つて、人類の眞の燦かしき文明のタイプを從來暗黑時代とさへ稱せられた中世紀に見出だしてゐるこのロシア人の見方には、獨創と許りは言へない大きな眞理のあることが感ぜられる。フランスの王制復古運動の首唱者であるシャルル・モーラスが、現代の國家・社會の頽廢と無力とから吾人を救ふ爲めには、現代の民主主義思想のうへに立つ議會・政黨其他一切の制度を倒壞せしめて新らしき封建時代に還るにあるとなすその主義主張も亦その史觀の立場に於いて獨創以上のものがあると言はねばならない。ヨーロッパが從來そのヴィジョンを未來へ未來へと追ひ廻してゐたことから漸くそのコースを轉換して、過去の經驗のなかにその眞實を新たに聽かうとしてゐることが、今日の大きな傾向の一つであるとさへ言へると思ふ。マッシスの書の結論はこの意味で今日のヨーロッパの新らしい傾向を僅かながらも明瞭に示してゐるものとも見られやう。

なほマッシスはその最後の頁に於いて、アジアも亦キリスト教化せられねばならぬことを說いて、キリストのみが東洋と西洋とを融合し得る唯一のものであることを斷言してゐるのである。（昭和四年七月東京青山にて）

追記。この稿を起したのは一昨年の冬ストックホルムに於いてであつたが、三分の二許り續けて其儘打ち捨てて置いた。今五ヶ年に亙るヨーロッパ生活から久し振りで歸朝しこの未完成の舊稿を閲し忙中更に後半を繼いで茲に本稿も成つたのである。筆者は旬日餘のうちにアメリカ大陸に渡らんとしつゝある。ヨーロッパにあつて、ヨーロッパとアジア、ヨーロッパとアメリカの文明の關係の檢討に興を覺えてゐた自分は、今次はアメリカに於いて更にヨーロッパとアジアを遠望することを樂しみとなすものである。本稿は主として一フランス人の著書の解說に過ぎなかつたとは言へ、自分にとつてはこの種の獵書中最も興を惹きしものの一であり、またわが邦の一般讀者にとつても必しも無用の閑書でもあるまいと信じ、茲に稿を了へてそれを公にすることとした次第である。


新マツダ
六個入
ホームカートン
御進物用に
電球御保存用に
殊にお子供衆のおもちゃに
電球は「ホームカートン入り」で
お買ひ下さい
内面艶消
新マツダ
もちよく明るく
電氣がお徳
新マツダランプ
ランプ


東京日日新聞

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

性慾增進と現代化學

性慾の衰退は厭害に言へば老衰現象の一部に過ぎない。しかし乍性慾は人体に於ける宛も活力の水源地の如き役目を勤めてゐるので水源地の枯渇は直ちに水道（精力頭腦）に影響するが如く、性的能力、頭腦精力の機能的障害を齎らすので、被害甚大といはなければならぬ。

性慾回春の法は古來あらゆる方法によつて行はれたが、いづれも不滿足の裡に消滅してゐる。しかるに現代化學は遂に之に合理的解決を與へ、內分泌の補給と神經系統の強健化によつて手術或は強壯品の如き狂混補劣なる方法を避けて端的に迅速に、精力、性慾の復活を可能ならしめるに到つた。

その代表的藥劑として世界的に著名なるトツカピンを推奬し得ることを吾人は光榮としなければならぬ。トツカピンは進步せる現代化學の更に實驗を行くものとして、斯界注視の的となり、世界的に聞えとなつたたけあつて、其の効果は既に實驗者によつて瞭然、特に左記症狀にその特能を發揮する。

人生は順當にゆくならば何人と雖百歲の告齡を謳ふべきである。しかるに何ぞ四十五十にして既に老衰の苦汁を嘗めるとは八十にして青春たれ、六十にして處女の如かれ、トツカピン愛用こそ人生無上の樂みでなくて何であらう。



トツカピン

●全國到る處の有名藥店にあり
品切の節は本舖へ――即刻發送す

主治効能

陰萎で不能の人　不眠症健忘症の人
早漏で不感の人　根氣喪失老衰の人
遺精、夢精の人　精力增進の望む人
神經衰弱の人　貧血發育不良の人

藥價

三十錠　一円
五十五錠　五円（携帶容器付）
百廿五錠　拾円（携帶容器付）
二百七十錠　廿円（携帶容器付）

發賣元 丁子堂藥房
東京市銀座新肴町八
振替口座東京七二二一番
大阪市西區新町通一丁目二
振替口座大阪一〇六番

新勞農黨の樹立を評す

猪俣津南雄

一

舊勞農の全盛時代ともいふべき昭和二年において、否な舊勞農黨が成立した時からすでに、この政黨は如何なる政黨であるか、また如何なる政黨たらしめねばならぬか、從つてまた他の無產政黨と如何なる關係に立たねばならぬか、といふ根本問題に關して、二つの見解が對立した。

その一つによれば、勞農黨は、日本無產階級が當面の××××における戰略的鬪爭の主要目的として「ブルヂョア民主主義の徹底」を戰ひとるための全政治鬪爭の主體である、言ひ換れば、勞農黨は、その本質に從つて前衞黨——即ち唯一のプロレタリアート黨——の役割をも演ずべきものであり、また飽くまでも斯かる役割を持つものとして強大化せしむべきである、從つて勞農黨は、かゝる役割を演じ得ざる他の無產政黨——日本勞農黨、社民黨、等——に對しては、たゞ徹底的な對立鬪爭の一途あるのみである。他の無產諸黨はいづれも「エセ無產政黨」として容捨なき鬪爭によつて之れをコッパ微塵に粉碎するか、然らざれば全く屈服せしめてもつて勞農黨の旗の下に「統一」せんのみである。

最近に至つて新勞農黨の樹立を提案した諸氏は、當時この見解を主張した。もしくは少くとも此の見解に追隨した。これは、實に、舊勞農黨を壓倒的に支配した見解であり、その意味において舊勞農黨多數派の見解であつた。

だが、これに對して尖銳な批判的立場をとつたところの吾々は次のやうに主張した。

——當面の××××における日本無產階級の戰略的鬪爭の主

要目的は、「ブルヂョア民主主義の徹底」ではない。それらは、戰略的闘爭における派生的・副次的な目的に過ぎず、帝國主義×××こそが主要目的である。と同時に一方、勞農黨は、その本質において、日本無產階級の戰略的闘爭の主要目的を戰ひとるための全政治闘爭の主體たり得るものでは決してない。かゝる主體たり得るものは、たゞ前衛黨あるのみである。勞農黨は、前衛黨ではなくて合法的大衆政黨であり、しかもそれは勞働者を主要成分とする勞働者黨でさへもなく、黨員としては勞働者分子よりも遙かに多く農民分子を包容してゐるところの、勞働者・農民の共同戰線黨である。卽ち、少數の、意識の高い勞働者もしくは農民分子を强固に結合する組織ではなくて、絶えず新らたに眼醒め來て多かれ少なかれ反ブルヂョア的な闘爭に投ぜんとするところの、未だ極めて意識の低い廣大な勞働者大衆及び農民大衆の政治的共同戰線を體現する組織である。かゝる組織體としての勞農黨は、黨員大衆及び未組織大衆の意識相應な現實當面の政治的日常要求のための闘爭機關であらねばならぬ。そこに此の黨が、歷史の發展の各瞬間に演じ得る本質的な役割の限度がある。勞農黨をして前衛黨の役割を演ぜしめんとすることは、——卽ちかの「百戰練磨」の、一粒選りの戰闘分子を「鐵の如き紀律」の下に結合して、無產階級の全的政治闘爭の最先頭に立つて最後までこれを戰ひぬくところの、前衛黨の役割を演ぜしめんとすることは、合法的大衆的共同戰線黨としての勞農黨本來の特殊の闘爭機能を喪失せしめてそれ自身を破滅に導くものであると同時に、前衛黨そのものを合法的大衆政黨の中に融け込ますことにより、前衛黨の獨自性をも失はしめるものである。

——日本無產階級の戰略的闘爭の根本的見地より、勞働者と農民の結合が絶對的に必要であり、しかも此の結合が絶えずます〱廣汎な勞働者農民大衆の日常闘爭を通じて擴大强化せられることが絶對的に必要である限り、更にまた當面の歷史的段階においては此の必要を有效に充たし得るものは合法的大衆政黨をおいて外になく、しかもこの勞働者農民の共同戰線黨としての合法的大衆政黨が當面の段階においては發展の必然性を有する限り、勞農黨は飽くまでもさうした政黨として發展せしめらるべきである。すべての前衛分子は、勞農黨に前衛黨の役割を演ぜしめることによつてではなく、却つてかゝる役割を演ぜしめないことにより、——卽ち飽くまでも合法的大衆政黨本來の特殊の機能を演ぜしめることにより、かくしてそれを、廣汎な大衆を組織し動員する機關もしくは場面として積極的に利用することによつてのみ、獨自性ある眞の前衛そのものの結成及

び強大化をも實現し得なければならぬ。

——ひとたび此の見地に立つたらば、他の無産政黨——舊日勞黨、社民黨、等——に對する舊勞農黨の態度、即ち徹底的對立鬪爭の態度もまた必然的に誤謬でなければならぬ。何故ならば、舊日勞黨、社民黨その他の無産政黨もまた、その本質においては舊勞農黨と同樣に、合法的大衆的共同戰線黨としての機能・役割を演じ得るものであり、また左翼分子の力によつて演ぜしめねばならぬ。かうした大衆的政治組織體の間の對立鬪爭は、反ブルヂョア的意識に眼ざめ始めた最廣汎な大衆の政治的日常鬪爭の戰線の、眞に無意味な分裂を惹起し、たゞ支配的ブルヂアジーへの最大の奉公となるのみである。現在までの我國の勞働者農民の組合及び無産政黨の分裂は、指導者利己主義に基づくところ甚だ大である。就中、意識的無意識的にブルヂョアジーと取引するところの、改良主義、日和見主義の指導者等は、勞働者農民の組合や政黨を、自己の繩張りと見做し、ますく自己の繩張りに固めあげやうとするが故に、本質的な分裂主義者である。たゞ支配的ブルヂョアジーに對する階級鬪爭の見地から、無産階級の全戰線を擴大強化することに自己の使命を見出すところの、階級的な左翼分子のみが、この指導者利己主義や分裂主義を克服し得て統一戰線を實現する。分裂したる無産政黨は合同し統一されて、[illegible]常鬪爭の[illegible]、合法的大衆[illegible]どれだけ容易に、また效果的に、前衛分子はこれを前衛そのものの結成及び強大化のために利用し得るのである。わけても、直接にか間接にかブルジョアジーに奉仕するところの協調主義者・日和見主義者・社會民主主義者の指導と影響とから大衆を解放するためには、左翼分子は自ら先づ、彼等の横行する組織それ自體の内部に入込まねばならぬ。さうして彼等の指導下にある大衆そのものの鬪爭の先頭にみづから立たなければならぬ。社會民主主義者を含む組織體の外部から、彼等に對して遠吠的な罵倒を浴びせてゐるだけでは、彼等に對する鬪爭にさへもなり得ない。

——以上の理論的根據に基づいて吾々は更に主張した。勞農黨は、その誤れる獨善主義を捨て、速かに統一戰線運動のイニシアチヴをとり、他黨との合同を敢行すべきである。この合同運動は、他黨の屈服を條件とするものであつてはならぬ。それは、事實において合同を不可能ならしめるものであり、從つて合同反對の立場となる。勞農黨が主張し提唱する合同は、攻勢的支配階級に對して勞働者農民の現實當面の日常の利害を擁護し伸張するために戰ふといふ、合法的大衆的共同戰線黨の[illegible]

れにも共通な特質及び立場の故に必要であり、可能であるところの「指導精神にこだわらざる合同」でなければならぬ。そして、かゝる合同こそは、舊勞農、舊日勞、社民その他の諸黨の大衆の眞實熾烈の要求を具體化するものであり、從つてまた此の大衆の要求の壓力こそが、かゝる合同の事實化を保證する。

二

吾々の主張したところの、日本無産階級の、戰略的闘爭の主要目的、日常闘爭における廣汎な勞働者農民大衆の共同戰線の黨としての勞農黨の本質、大衆組織としての組合及び政黨に對する分裂主義的政策の誤謬、從つてそれらの組織を合同によつて統一し擴大し强化することの必要、――これらすべての點は、やがてまた國際的權威ある文獻においても强調されるに至つた。卽ち、××××××の「日本に關する決議」は言つた――

『××××の任務は、かゝる(戰線の)四分五裂を克服するための、且つ日本プロレタリアートの大衆組織をつくり出すための、闘爭を遂行することにある。それ故に、勞働總同盟、農民組合の如き組織體の分裂を眼ざしたところの××××××の政策は、根本的に誤謬であつた。プロレタリア的大衆組織の存在は、×××の正常な健全な發達のために絶對的に必要なる前提條件である。日和見主義的、改良主義的指導者に對する闘は、左翼分子が組合及び大衆政黨から分離せしめられることなく、却つて組織内においてその指導者が暴露せられ、大衆が獲得されるやうに遂行せられねばならぬ。これと反對の場合には×××××自分自身を勞働大衆から孤立せしめる危險を冒かす。×××××は、勞働階級の日常闘爭に能働的に參加し、この闘爭における指導に向つて努力しつゝ、たゞ自分等のみが、執拗な、最後まで一貫したるプロレタリア利益の擁護者であり、擔ひ手であることを、實踐によつて立證しなければならぬ。このことは、現に進行しつゝあるところの、勞働者に對する日本資本の熾烈な攻勢の時期においては特に全く當面緊急の必要である。』

『勞働組合を强大ならしめること、及びこれを内部から戰ひとることを眼ざす政策は、廣汎なる勞働者・農民の諸政黨に對する戰術においても遂行せられねばならぬ。特に×××は、今や全力をあげ、××××××××××勞農黨を、現に中間派分子の勢力下に立つ日勞黨と合同せしめることに努力しなければならぬ。中間派分子が、この合同に對してなすであらう絶望的な抵抗は、勞働者の壓力によつて打破せられねばならぬ。これこそ、×××××××の最も緊急な任務の一である。』

大衆に於ては、一方では[illegible]迫ではない、他方では×××を全勞働大衆と結びつける傳動ベルトである。……大衆組織の分裂を眼ざす政策は、それ故に、自己の貯水池の減少を、自己の活動範圍の縮少を、自己と大衆との結合の薄弱化を、そして大衆から自己の孤立化を眼指す政策である。」

これらすべての理論の打克ちがたき説得力と、現實に合同統一を要求した大衆自體の壓力とによつて、舊勞農黨指導部は遂に「急旋回」を餘儀なくされた。卽ち昭和二年末に至つて舊勞農黨指導部は、それまで頑強に主張したところの、他の無產政黨に對する徹底的對立鬪爭主義とは全く反對に、——卽ち他黨を粉碎または屈服せしめてもつて全戰線を勞農黨の旗の下に統一するといふ『戰鬪的統一』主義とは全く反對に、『指導精神にこだわらざる無條件合同』をやり度いといふこと、突如として舊日勞黨に對して提議したのである。

この「指導精神にこだわらざる無條件合同」の提議は、何を意味し、また意味せねばならなかつたか。それは、(一)勞農黨をして前衛黨の役割をも演ぜしめることの誤謬の清算、(二)卽ちまた、それ自身一つの合法的大衆的共同戰線黨たるところの勞農黨に、他の同樣の無產政黨とは本質的に異る優越を賦與することの[illegible]清算、(三)從つてまた[illegible]無產政黨」と對立したことの誤謬の清算、(四)從つてまた他の無產政黨を粉碎するかまたは屈服せしめてもつて勞農黨の旗の下に統一するといふ「戰鬪的統一主義」の誤謬の清算、を意味し、また意味せねばならなかつた。事實において當時の舊勞農黨指導部は、それらの點を公然と理論的に清算することを避けたにも拘らず、「實踐において清算しつゝある」といふことをしば〳〵強調したのであつた。そしてこの「實踐における清算」の實踐的結果は、當然に、舊勞農黨が有したる比較的多くの左翼分子を他の無產政黨の大衆から引離しておくことをやめ、また他の大衆政黨內の協調主義者・社會民主主義者に對する遠吠的な罵倒をやめると同時に、彼等と同一の大衆組織の內部においてます〳〵多くの左翼分子が彼等の惡傾向と抗爭して大衆組織の階級性を擁護・發揚せしめ得んがために、またそれと共にかゝる廣汎な大衆組織內における左翼分子の活動によつてそれを眞實の前衛の結成及び强大化のためにます〳〵有效に利用し得んがために、「指導精神にこだわらざる合同」による戰線の統一を押進めることが、舊勞農黨指導部及び左翼分子の一貫した努力の的とならねばならぬ筈であつた。

三

昭和二年末における舊勞農黨の「急旋回」による「無條件合同」の運動は、まさにその「急旋回」の樣に、挫折し終つた。だが、舊勞農黨員の絶對多數を組合員としたところの日本農民組合は間もなく、舊日勞黨員の絶對多數を含む全日本農民組合と合同した。かやうに二つの大衆政黨の黨員の大半が一つの組合に結合し、日常闘爭に於いて緊急に結びつくに至つたことは二つの政黨——舊勞農黨と舊日勞黨——の合同の必要をますます必要ならしめた。と同時に、その前後から、階級的誠意をもつて合同統一運動を促進し、この運動において階級的左翼の旗幟を高揚すべしとする主張が、次第に舊勞農黨内に結晶した。即ち、舊勞農黨の幹部のうちにさへ、この主張を支持する者が現はれ、理論的にも實踐的にも尚ほ過去の誤謬を清算し切れなかつたところの多數派幹部に對して公然と對立するに至つた。

四

昭和三年の謂はゆる「三・一五事件」の暴壓に續いて田中反動内閣の兇手が勞農黨の解散を強行した時に、この彈壓に對する抗議および奪はれたる勞農黨奪還をめざす戰術に關しても又左翼陣營内の二つの見解が對立した。

當時における少數派としての我々は、暴壓に對する抗議を單なる抗議に終らしめざるために、そして奪はれたる組織を現實に奪還することにこそ抗議を體現せしめんがために、そしてまた大衆の政治的日常闘爭の寸時の休止をも避け得んがために、勞農黨の先進分子は、あらゆる合法的可能性を利用して最も急速に勞農黨の大衆を再び勞働者農民の合法的大衆的共同戰線黨に組織すべきであると主張した。

然るに舊勞農黨の本質に就いての誤まれる見解を尚ほ清算し得てゐなかつた多數派は、かの有名な「百度解散・百度結黨」を叫び、我々は決して「官許黨」はつくらぬと云ひ、たゞ「戰闘的政黨の戰闘的獲得」のみを目指して一意そのための闘爭を戰ひ抜かねばならぬと主張した。

だが、云ふまでもなく、かゝる主張は單なるえらがりであり思ひあがりであり、浪漫的極左翼主義の小兒病的發作に過ぎなかつた。かゝる主張が一貫して實踐に移された結果は、事實に於て結黨の放棄となるべき事は、當時に於ける具體的情勢に即して階級間の力關係を正しく認識し得た者にとつては、餘りにも明白な事柄であつた。しかも結黨の放棄——もしくはその遲延でさへも——は、漸くにして政治戰線に進出し得たる低意識

の勞働者農民大衆を再び政治的無關心に陷らしめ、他方では左翼政黨に於ける協調主義・社會民主々義・分裂主義の傾向の彈壓に助けられて急激に擡頭したこと、相俟つて、新勞農黨の左翼分子を完全に大衆から孤立化せしめる現實絶大の危險を意味するものであつた。その結果は左翼陣營の決定的潰滅であり、またそれこそはかの彈壓が根ざしたところのものであつた。——かくして急速なる結黨に依る勞農黨の再組織は、字の如く緊急焦眉の必要であつたのである。

昭和三年八月に於ける無産大衆黨の結成は、まさにこの緊急焦眉の必要に應じたものであつた。そしてこの必要の故にのみ階級的に正しき行動であつた。と同時にこの無産大衆黨の結成は、新勞農黨大衆が再び合法大衆政黨を持たんとする現實の要求を強く反映したものであつた。そして、當時の左翼陣營に於ける少數派としての我々の主張こそが、無産大衆黨結成の理論的根據をなしたのであつた。

從つて無産大衆黨は、二つの緊急任務をもつて生れたものであることを明白に宣言した。その一つは、反動支配に對する抗爭として大衆的規模に於ける日常鬪爭を遂行し得る合法的大衆政黨の急速なる再組織であり、他の一つは、同時にこの政黨を合法的主體として合同統一運動を押し進め、もつて全勞農大衆を前進せしめることであつた。

一方、事實上結黨を放棄しつゝあつた新黨準備會の指導者諸氏は、一方では未だ合法性のない新黨準備會を日勞黨に合同させるといふ不可能事を主張し、他方では無産大衆黨の結成及び擴大を極力妨害し、それが「官許黨」であり「合法主義」であり「裏切り」であるといふやうな中傷誣謗をおびせることに終始した。これらの指導者諸氏は、新黨準備會もまた「政黨」であり、日常鬪爭を遂行しつゝあると唱へたけれども、當時においての緊急必要事であつたところの、大衆的規模に於ける日常鬪爭を展開することは、たゞ合法政黨の再組織を通じてのみ可能であり、合法性のない新黨準備會によつては事實に於て不可能であつた。

無産大衆黨の結成は、彈壓に抗しての合法政黨再組織が必要であり可能であることを活きた事實をもつて立證したことにより、新黨準備會の內部における結黨派の勢力をも著しく強めた。かくて新黨準備會の指導部もまた十二月を期して結黨すべき事を宣言するの餘儀なきに至つた。我々はあらゆる機會と可能とを捉へ、この結黨を極力促進した。

しかしながら、新黨準備會の指導部のとつてゐた實際の行動は、依然として結黨を不可能ならしめる行動に外ならなかつ

た。かくして十二月の結黨大會は、新黨準備會そのもの、解散をもたらした。かくして、また遂に新黨準備會指導部による結黨の放棄は、實踐的に確定したのであつた。

　それと同時に、この結黨放棄の理論づけとして、突如、一つの主張が現はれた。曰く、『プロレタリアートの黨は唯一つしかない。そしてこのプロレタリアート黨の「大衆化」こそが左翼當面の任務である。しかも今日の力關係の下に於て作り得られる合法政黨は、社會民主主義の政黨以外のものではあり得ない。故に吾々は結黨してはならぬ』（！）

　舊新黨準備會の指導者諸氏は、この「理論」（！）に從つて結黨の放棄を強いて合理化したのみならず、またすべての合法的大衆政黨に對して「社會民主主義の政黨」の烙印をカッキリと押し、それらすべての粉碎を宣言し、そして自分自身は「政治的自由獲得勞農同盟」――「謂ゆる政獲同盟」――を組織した。

　これに關していま特に強調を要することは、この政獲同盟なるものは斷じて合法的大衆政黨へ發展せしめらるべきものではなく、却つて反對に次第に「解消せしめらるべき組織」であり、この政獲同盟の「解消」によつてのみ、唯一のプロレタリアート黨は大衆化せられ、擴大強化せらるべきものであるといふことを、その指導者諸氏がハッキリと規定してゐたことである。

　だが言ふまでもなく、かくの如き結黨の放棄、かくの如き法政黨無用論、かくの如き政獲同盟の組織＝解消によるプロレタリアート黨の大衆化なる方針は、大衆からの左翼分子の孤立と、左翼陣營の潰滅とをまさに完結せんとするところの方針であり、理論であり、行動であるにすぎなかつた。

五

　かやうにして、結黨が決定的に放棄され、政獲同盟の組織＝解消の過程が始まつてから、倘ほ僅かに半年餘の短かい月日が流れたに過ぎない。しかるに此の時、さきには新黨準備會の指導者であり、最近まで政獲同盟の指導者であつたところの諸氏によつて、突如「新勞農黨樹立」の提案がなされたのである。

　それは、合法的大衆政黨の否定と破壞とからその肯定と樹立への「急旋回」以外のものではあり得ない。

　この急旋回の理由として「新勞農黨」樹立の提案者諸氏のあげてゐるもの、第一は「客觀的情勢の急激なる變化」である。そしてその變化の一つとは、舊勞農黨に屬した大衆が合法的大衆政黨を要求するに至つたことである！

　だが、合法的大衆政黨としての舊勞農黨が解散されたその瞬間から今に至るまで、同黨の、大衆がかつて合法的大衆政黨を

要求しなかつたことがあつたであらうか?!

「急激なる變化」の他の一つとは、政獲同盟なる日常闘争が「ハタト行詰つた」ことである!

だが、政獲同盟こそは、始めから、「解消」せらるべき組織ではなかつたか?! 從つて政獲同盟による日常闘争なるものは、「ハタと行詰る」ことをこそ既定の運命とするものでなかつたか?!

「新勞農黨」樹立の提案者諸氏は、いまや、合法政黨によらなければ「大衆的規模における政治的日常闘争」の展開は不可能であると主張する!

だが、その主張こそは、吾々結黨派の主張であり、勞農黨解散以來一貫した結黨派の主張ではなかつたか?! また、現在の提案者諸氏が、「官許黨」、「合法主義」、「裏切り」と罵罵したところの、無產大衆黨の結成を正當づけてゐる主要根據ではなかつたか?!

新勞農黨提案者諸氏の一人は云ふ——

『或は無產大衆黨系の人は、我等の一年前に云つたことだ」と先見の明を誇るかも知れぬが、われ等の主張は闘争の中から生れて來た點に於て、又彼等はこれから大いに意氣込みを以て進出しようとする際に分裂して戦線を攪亂したに對し、我等は最後まで闘ひ、然る後に[illegible]してゐる點に於て、彼等とは決定的に異るのである。』

だが、しかし、帝國主義世界戰爭後十年にもなる此の一九二九年の日本において、無產階級運動の戰術や、方針に関する意見や主張がいちいち「闘争の中から生れて」來ることによつて始めて正しいものとなり、また正しいことが知り得られるとしたら、マルクス主義の理論は無用の長物であらう。マルクス主義の理論こそは、一國一時代の少數者の一年や半年の闘争の中から生れたものではなくて、萬國のプロレタリアートの幾十・百年の長き苦難の闘争の中から生れたものである。そしてか、る闘争の全經驗の綜合であるが故に、マルクス主義の理論のみが常に『實踐への案内』として、無產階級運動に確信を與へ、見透しを與へ、運動の内外のすべての事件の内的関聯を理解させ、現在及び近き將來に於ける階級闘争の發展の過程と方向とをハッキリと理解させる、のであつた。か、る理論の指示する正しき方向を方向とせざる限り、いかに『大いに意氣込みをもつて進出しよう』としてゐたとしても、その意氣込は實踐の破綻をもつてむくいられるのみである。そして最後まで闘ひぬかんとすればするほど、全陣營を潰滅に導くのみである。吾々は決して「先見の明を誇」らない。だが、吾々は、勞農黨解

散の瞬間から今に至るまで、——否々、それに先だつてかの「福本イズム」の悪理論が全左翼運動を風靡してゐた頃からすでに——大衆組織の破綻と左翼分子の孤立化とに導くところの、一切の危險と戰ひ、すべての悪傾向を克服すべく、或は理論的に、或は實踐的に、一貫したる努力と立場とに終始し得たる點において、——卽ち、決して追隨し、盲從し、動搖し、突變し、また再突變するところの御都合主義に陷らなかつた點において、たしかに我が左翼陣營内の或者とは『決定的に異るものである』。

六

以上によつて明かなやうに、いま吾々の前に突如として投げ出された合法政黨樹立の提案は、提案者諸氏の主張するが如く「客觀的情勢の激變」に基づくものではあり得ない。

却つてそれは、諸氏の主觀的狀態における急變に基づくものでなければならぬ。言ひ換へれば、諸氏が、その過去の方向についての根本誤謬を認識し得たことに基づくものと言はねばならぬ。また、事實において諸氏は、その誤謬の一部はこれを卒直に承認してもゐる。

卽ち諸氏は、『新黨準備會が結黨方針を放棄せずに、合法政黨として結黨するには、當時の力關係の下において、或る程度の讓歩をしなければならなかつたこと』を認め、しかも結黨したる政黨は、決して社會民主主義の政黨となるものでなかつたことを認め、なるかの如くに當時考へたことは、一つの根本的誤謬を犯したものであることを承認する。また、さうした讓歩を拒んだことこそが、「左翼小兒病的」誤謬であつたことを承認する。

それと共にまた、かの『プロレタリアートの黨は唯一つしかない。そしてこのプロレタリアート黨の「大衆化」こそが左翼當面の任である。しかも今日の力關係の下において作り得られる合法政黨は、社會民主主義の政黨以外のものではあり得ない。故に吾々は結黨してはならぬ』といふ「主張」を、現在の新勞農黨樹立の提案者諸氏が最近まで肯定してゐたことの誤謬であつたことをも諸氏は承認する。そしてかの『プロレタリアートの黨は唯一つしかない』といふのは、公式的な眞理ではあるにしても『日本の刻下における客觀的狀勢は、この公式をそのまま適用すべく餘りに特殊的で』あり、從つて『眞理はつねに具體的である』といふ『辨證法的認識の原則』に照す時には必然的に却つて誤謬となると諸氏は主張する。（『新勞農黨樹立の提案』三八——四五頁。「中央公論」九月號の河上氏の論文その他）。

すなはち[illegible]この主張は一つの一般的命題に他の一般的命題を對置することに終つてゐる。それは問題解決の端緒をさへも與へてゐない。いま與へられた問題をマルクス主義的に解決するために吾々のなさねばならぬ第一のことは、現在においてつくり得られる合法的大衆政黨はすべて社會民主主義の政黨であるといふやうな命題の、わかり切つた誤謬を、ただ形式論理的に證明することではなくて、唯だ一つしかないこといはれるそのプロレタリアート黨を大衆化するといふ、まさにその目的のために、現代日本の勞働者農民大衆の合法的大衆的共同戰線黨たる諸政黨の本質的機能をいかに認識し、いかなる方向にそれを導き、いかにそれらを利用すべきかを、具體的情勢のマルクス主義的分析に基づいてハッキリと規定することにある。そしてかゝる規定こそは、吾々がこれまで、あらゆる機會を捉へて體系的に展開し、此の小論の冒頭においてさへもすでに要約しておいたところのものである。

合法政黨無用論者・破壞論者の極左翼的誤謬の核心は、大衆的規模における政治的日常闘爭の組織を、眞實の前衞の結成及び強大化のために積極的に利用することを拒否せんとする點にあるのである。

いまや漸く合法政黨の樹立を企圖しつゝある「新勞農黨」提案者の諸氏もまた、依然として、現段階における合法的大衆政黨の諸機能・役割・方向に關する正しき認識を缺いてゐる。何故なら、諸氏は、作らんとする新勞農黨を「左翼」合法政黨！として規定し、「[illegible]」として「社會民主主義の政黨」(！)と規定し、この規定に基づいて「新勞農黨」は他の諸政黨を屈服せしめて自身の旗の下に統一するところの「戰闘的統一」主義に立つべきであると主張してゐるからである。

諸氏は言つた——「眞理はつねに具體的である」と。

だが、果して諸氏は、新勞農黨に關する諸氏の規定と主張とを「具體的眞理」たらしめるために必要な努力を拂はれたであらうか？　果して諸氏は、無產階級運動の普遍的法則の認識に立脚しつゝ、まさに現段階における日本無產階級運動の諸現象の特質を觀察し、よつてもつて現象のくさりにおけるかの最重要な特殊の環——それこそ與へられた諸事情の下に普遍の本質的なモメントであり、普遍そのものを表現するところのものをしつかりと摑み得てゐるであらうか？——だが、そのことなくして「具體的眞理」の把握は不可能であつた。

つくられんとする新勞農黨は、勞働者のみを黨員とする政黨ではない。勞働者を多數黨員とする政黨でさへもない。本質的には決して小ブルヂョアジー以外のものではあり得ぬところの農民が黨員の壓倒的多數を占める政黨である。かゝる政黨は、提案者諸氏の「觀念」においてのほかは、決して「左翼」政黨たり得ない。卽ち、諸氏の意圖する如き、無產諸黨の屈服による「戰鬪的統一」主義の主體としての「左翼」政黨たることは、諸氏の欲すると否とによらず不可能である。

然るに一方、社會民衆黨、日本大衆黨等において、多かれ少なかれ協調主義・社會民主主義的傾向の强いこと、――この現象の特殊の本質は、まさにさうした傾向の强さにも拘らず之等の政黨がまだ「社會民主主義の政黨」ではないことにある。言ひ換へれば、社會民主主義的指導者等の意識的努力にも拘らず、彼等の意圖に對するプロレタリア大衆の意識的無意識的反抗が、社會民主黨への發展を喰ひ止めてゐることにある。しかも大衆の此の態度・傾向が、現代日本の經濟・政治狀勢を反映することにある。謂ふところの經濟、政治狀勢は、かの一九〇五年前のロシアのやうに、自然發生的政治的ストライキの巨浪をつくるほどに、それほど革命的では決してないが、しかしながらまた、歐洲大戰前の英、獨、佛のやうに、協調主義・社會民主主義の大なる勝利を確保するほどの、タンマリとした剩餘利潤を生み出すやうな、さうした繁榮や安定性は斷じてない。日本資本主義はまだ、有力な勞働貴族層をつくつてをらぬ。かくして、社會民主主義の壓倒的勝利のための本質的條件は、客觀的にも主觀的にも缺けてゐる。

この事實が事實である限り、勞働者農民大衆の合法的大衆的共同戰線黨として發足したる無產政黨が、その階級性を喪失してブルヂョアジーの利器たる社會民主黨に變質し結晶せんとする傾向と戰つて勝つことは可能であり、また決定的に必要である。そしてその勝利は、たゞ左翼分子による、內部からの戰ひ取りによつてのみ保證されてゐる。從つて、これまで、社會民主主義的傾向のある大衆組織から引離されてゐた左翼分子は、同一組織內において社會民主主義者等と戰ひ得んがために、一人でも多く彼等の組織內に入込まねばならぬ。

他方において、帝國主義戰爭の危機をも含む恐慌克服過程としての慢性的不景氣は、熾烈なる資本攻勢を必然ならしめてゐる。そしてその彈壓の尖端は、まさに左翼孤立化を目指してそれに集注されてゐる。之れに對する左翼戰術は、左翼分子を含む大衆組織を、他の大衆組織から引離すことではなくて、反對にこれと密着させることでなければならぬ。

だが、かゝる事なら、内部分子の戰ひとりは、いかにすれば可能となるか？

吾々は卒直に、あらゆる努力を通じて大衆組織の合同を實現することによつて、と答へる。

現段階の我が無產階級運動における大衆組織の分裂といふ現象の特殊の特質は、その分裂がすでに、各大衆組織のヨリ以上の擴大強化にとつて桎梏となつてゐることにある。組合の分裂が政黨の擴大強化を、政黨の分裂が組合の擴大強大をさまたげてゐると同時に、組合の分裂、政黨の分裂が、おの／＼の組合おの／＼の政黨のお互の擴大強化をさまたげてゐる。しかも、かくの如き分裂状態そのもののうちから、分裂状態を克服し得る力が増大し結集しつゝある。大衆の共同闘爭への要求、合同への要求の結晶がそれである。桎梏は爆破されざるを得ぬ。分裂状態は揚棄されざるを得ぬ。

そして、さうであればあるほど、協調主義・社會民主主義・分裂主義の指導者等における矛盾はいよ／＼深刻化する。彼等の焦燥は増大し、彼等の抗爭は激化する。かゝる場合に、彼等の矛盾そのものを促進しつゝ、大衆の合同要求の意識的尖端となり、分裂克服の「歴史」をつくり得るものこそは、階級的左翼分子をおいてほかにない。

吾々が大衆組織の合同統一を主張するのは、たゞその決定的な場合に從つて主張するのではない。また單なる「一命題」としても主張するものでもない。吾々はたゞ、かの最重要な特殊の條件をつかみ得たる正しき左翼戰術としてこれを主張せざるを得ないが故に主張する。

大衆組織の分裂を克服することこそは、いま、日本無產階級運動の左翼分子の一貫した努力の的でなければならぬ。この努力の線に沿うてのみ、社會民主主義に對する闘爭は最も成功的に遂行される。この努力の線に沿うてのみ、勞働者と農民の政治的日常闘爭における共同戰線は最も效果的に實現される。この努力の線に沿うてのみ、絶えずます／＼廣汎な未組織的大衆を反ブルヂョア的政治戰線に動員することが出來る。そしてその努力の線に沿うて進むことなくして左翼分子は、大衆の信頼を我物として前衛の結成及び強大化をかちうることは不可能であり、やがてはかの唯一のプロレタリアート黨の文字通りの大衆化を事實化することは不可能である。

八

左翼分子の指導する合法的大衆政黨を「左翼政黨」として他の諸政黨から本質的に峻別し、「戰闘的統一」の獨善的任務をそ

れに與へることの根本的誤謬は、今次の新勞農黨の提案者諸氏が早くもかの昭和二年末の「指導精神にこだわらざる合同」への「急旋回」によつて「實踐的に清算」してをられた筈のものである。

舊勞農黨時代に次いで、かの新黨準備會時代に於ける諸氏は、まさにその新黨準備會の合法性不十分の故に、他黨との合同は事實上不可能なりし狀態の下に「指導精神にこだわらざる無條件合同」を舊日勞黨に對して提唱し、主張した。しかるに今や、合法性十分の「新勞農黨」が樹立されんとし、從つて他黨の分裂主義者と雖も最早やそれとの合同を拒否する口實を持ち得ぬと云ふ狀態の下において却つて諸氏は、「戰鬪的統一」主義の古看板を持ち出して來る。だが、最惡のことは、『指導精神にこだわらざる合同』を、今にしてにわかに諸氏が放棄するに當り、その理論的根據を毫も示さぬことである。

つくられんとする新勞農黨の黨員の壓倒的多數を占めるであらうところの各地の農民大衆は、すべて全國農民組合員として日本大衆黨の黨員の大半を占める各地の農民大衆と全く同一の農民組合に組織されてゐる。かやうに同一組合の下に、日常鬪爭の主要戰線においてすでにしつかりと腕を組み合せてゐる農民大衆を、組合による日常鬪爭と密接に關聯する政治的日常鬪爭の戰線において敢へて分裂せしめ、しかもその分裂の固定化と不斷に増大する對立鬪爭とを意味するところの「新勞農黨」の「戰鬪的統一」主義——この古く新しき分裂主義を若し新勞農黨の提案者諸氏自らが速に清算しなかつたならば、左翼分子をもつて任ずる諸氏の主張こそが却つて分裂主義として、大衆の手によつて清算されるであらう。

「眞理は常に具體的である」！！

大山・河上一黨の退却始まる

赤松克麿

一

社會運動戰線の分裂現象は、近頃各方面に頻出し、殊に左翼戰線に於いて甚しいやうであるが、その中で最近一個の異常なるセンセーションを起したのは、大山郁夫、河上肇氏等による「新勞農黨樹立の提案」である。

何が故に新勞農黨を樹立しなければならなくなつたかといふに、大山氏等の説明によると、從來續けてきた「政治的自由獲得勞農同盟」の運動は、所謂四・一・六事件以來、重大なる障礙に行き當つて、全く行き詰つてしまつた。換言すれば非合法主義的なる大衆鬪爭は、彈壓の嵐のために致命的打撃を蒙るに至つた。しかし大衆的規模に於ける強力なる鬪爭は、當面に於いて最も必要を感ずる。そこで從來の勞農同盟の組織形態を變へなければならなくなつた。こゝに於いて新しい運動組織を持つ必要に迫られた。この新組織は、

(イ)、完全なる黨内デモクラシーの上に、
(ロ)、獨自の指導部を持つところの、
(ハ)、恒常的政治的組織を確立し、
(ニ)、合法的左翼政黨として、公然の舞臺に於ける活動に進出するものである。

表面的に觀察すれば、從來の非合法政黨主義が合法政黨主義に轉化したことが、大山氏等の提案のポイントの如くであるが、實質的に觀察するならば、そんな簡單なものではない。今日までの大山氏一黨の運動形態に於いては、完全なる黨内デモクラシーがなく、且つまた獨自の指導部がなかつた譯である。それは彼等の運動形態が日本共産黨の完全なる指導下に置かれたからだ。大正十五年十月勞働農民黨が分裂して以來、殘留の勞働農民黨、勞働農民黨が解散されてからの新黨準備會、新黨準備會が解散されてからの政治的自由獲得勞農同盟、これらの運動は終始一貫して×××黨の完全なる指導下に行はれたのであつた。また現に引きつゞいて行はれつゝある。

今回の大山・河上一黨の新勞農黨樹立の提案は、明かに日本共産黨の

指導下を離れやうとする企圖の現はれである。大山氏等の説明を他の言葉を以て表現するならば、日本共産黨の運動方針は、現下の社會狀勢に於いて全く行き詰つて居る。この難局を打開するために、左翼大衆は黨内デモクラシーの上に立つ獨自の指導部を持つところの、即ち日本共産黨の天降り的指導を離れたところの、新しい合法的左翼政黨を組織して、強力なる大衆鬪爭を開始しなければならないといふのである。

大山・河上一黨の日本共産黨からの離叛！　問題のポイントは正にこゝにある。

二

大山・河上氏等が共産黨の運動に行詰りを感じて、共産陣營から退却を開始したこと、この事實は大山・河上氏等の個人の立場にとつていふならば、認識上の一進歩といふことが出來る。共産黨の運動方針によつて大衆鬪爭を展開することの不可能なるは誤りなき事實であつて、大山氏等は今漸くこれを正しく認識したのである。若し大山氏等にもつと聰明さがあるならば、もつと客觀狀勢に對する洞察力があるならば、もつと早く共産陣營から退却すべきであつたのだ。

抑々第三インターナショナルの世界××運動が最も活潑に進出したのは、大戰直後約三個年の間であつて、一九二〇年に世界經濟が一大反動期に入るや、形勢は一轉して強烈なる資本の攻勢となり、世界革命のテンポは著しく緩漫化するに至つたのである。當時第三インターナショナルを指導しつゝあつたジノヴイエフは、一九二一年の第四回××黨世界大會の席上に於いて、歐洲の共産黨は長くはあるまいがファシズム時代を通過するであらう、そしてその時代には共産黨は地下に追ひ込められるであらう、と説いて居る。即ち共産黨の運動が、世界資本主義の安定時代に於いては、甚しい苦境に立つであらうことは既に八年以前に於いて共産黨指導者によつて正確に豫見されて居る事柄である。

我國に於いても、大山氏等に一歩先んじて、共産陣營を退却した人々は少くない。これを勢力別にいふならば、山川均氏一派、猪俣津南雄氏一派、水谷長三郎氏一派の如きこれである。大山氏等は退却以前に於いて、これらの先行退却派に對し有らゆる侮蔑を浴びせかけたものである。共産黨指導下にあつた大山氏等が、これらの先行退却組に對して「裏切者」の烙印を押すことは、共産陣營の立場からすれば當然であつたであらう。しかし今や大山氏等は、先行退却組を非難する資格を完全に失つてしまつたのである。むしろ先行退却派が先見の明を大山氏一黨に誇るべき時が來たのだ。そして大山氏一黨が自らの血の廻りの惡るさを恥づべき時が來たのだ。

しかるに大山氏等の辯明書を見ると、依然として先行退却派に對して惡罵を續け、我れ獨り清しといふ態度を取つて居る。特に無産大衆黨に向つては「彼等の多くは一種の口舌の雄であるだけに、その實踐と主張との間には萬里の長城が横つて居る。何よりも彼等の特徴をなすものは、その餘りにも慘めな無力さである」といひ、勞農大衆黨に對

しては「[illegible]」[illegible]階級から[illegible]一點にある[illegible]員たち」と云つて居る。我々に大山一黨の退却戰いの醜さを[illegible]せざるを得ない。自らの退却を辯解するために、先行退却派を罵倒し彼等と自分等との間に一つの線を引かうとするのは、愚かなるそして無益なる努力であつて、往生際の惡るいこと夥しい。それよりもあつさりと出て、自分達は大學教授として長い間學問的象牙の塔に立てこもつてゐたので、社會運動の實情に通ぜず、ひとたび意を決して實際戰線に乘り出しては見たが、理論と實際とは簡單に一致しなかつた、そこで今漸く過去の非を悟つて、こゝに潔く共產黨から退却する次第である、と神妙に告白した方が男らしいではないか。

三

共產黨の運動なるものが、到底本格的なる大衆運動化する可能性のなきものであることは、多少なりとも社會運動の實情を知つて居るものの誰しも認める所である。しかし××黨運動が一個の少數派運動として、階級戰線の一隅に××することは、決して××すべきものではなく、むしろ全階級戰線に對する一個の刺戟劑として××することが望ましいといふのが私の持論である。客觀的狀勢如何にかゝわらず、現實の運動効果如何にかゝわらず、××的感激の動くまゝに氣一本に直進する一派にも××權を與へていゝ譯である。現に歐洲諸國に於いては、××黨は合法的存在權を獲得して居るのである。

我々は大山、河上兩氏等が[illegible]と思つて居た。[illegible]運動に追ひつめられても、「プロレタリアの政黨は[illegible]得ない」といふ信條の下に、苦難の戰ひを續けるのであると[illegible]て居た。そこにまた大山氏等の人氣があつた。大山氏が「かれらの[illegible]長」として、病的な××青年群の陣頭に立つて奮戰[illegible]けることは、見方によつては大人氣ないともいへるが、しかしその態度には一種の英雄的輝きがあつた。全く近頃の大山氏は、××陣營に於いて殆んど偶像化されて居た。そして共產黨反對の陣營に於いても、大山氏に對しては一種の敬意を惜しまなかつたことはたしかである。

昨年末に本所公會堂で催された新黨準備會大會に於いて、大山氏は「合法政黨を作らんとするのは支配階級と妥協することだ」と喝破し、河上氏は「非合法政黨は合法政黨よりも十倍百倍千倍の力がある」と歡呼した。これらの言葉は、「プロレタリア政黨は××黨ひとつあるのみ」といふ原則に立つたものであつた。それはまだ九個月以前の出來事である。また山本宣治君の葬儀に於いて、大山氏は「われらの行く所は牢獄であり墓場である」と絶叫して、滿堂の××青年から盛んな歡呼を浴びたのであつた。これらの事實から推して見て、大山河上兩氏は、いかなる迫害をも物ともせず、××黨の非合法運動を敢行して行く決意があるのだらうと、誰しも考へて居たのであつた。

ところが今回突如として、大山河上兩氏等は「大衆的[illegible]行き詰つたから、合法政黨が必要になつた」と宣言した。この合法政黨の方向轉換

に對して、聞くものに等しく啞然たらざるを得なかつた。ついこの間までの大言壯語は、一體これをどう始末するのか。共産黨指導による大衆運動が行き詰つたからだといへば、それも一個の辯明にならぬこともないが、彼等が今日まで極左翼戰線の尖端に立つて一種の英雄的光彩に包まれてきた人物であるだけに、折角の多辯な聲明書も、苦しい言譯の響しか持たないのである。ともあれ新勞農黨樹立の提案が、「大山郁夫」、「河上肇」として今日まで持つてきた人格的聲望に對する致命的打擊をもたらしたことだけは明かである。

四

社會運動者にとつて必要なる人格的條件は、思想的理解力、實際的判斷力、實踐的意志力である。この中で思想的理解力は最も容易に獲得し得る條件である。殊に知識階級にとつて、××主義を理解する位ひのことは一擧手一投足の勞である。まして完備した研究室と豐富な書籍と有りあまる讀書時間とを宛てがはれた大學教授にとつて、××主義を理解する程度のことは茶飯事に過ぎない。しかしながら實際的判斷力と實踐的意志力とを具備することは、しかく單純には行かない。大山河上の兩氏は、××主義思想の所有者としては、立派な資格を有することを認める。しかし現實の客觀狀勢を適確に認識する判斷力に於いて、缺くるところ多きことは、彼等の從來の言動がこれを立證して居る。今回の方向轉換にしても、現實的判斷力に於いて「血の廻りの惡るさ」を遺憾なく暴露して居る。

河上氏は「濱口内閣が、田中内閣の解散を命じた勞農黨の更生を、如何に取扱ふであらうかは、極めて興味ある問題である。今や客觀的諸事情は、勞農黨解散當時または新黨準備會解散當時と著しく變化して居る。そのことのために、こゝに宣言の起草者たちが提唱して居るやうな政治的結社に對しては、それがたとひ徹底的ではなくとも兎も角勞働者農民の利益を代表せんとするものであり、資本家地主の利益のため甚だ好ましからざるものであるとの理由を外にしては、これを禁止する理由が見出されない。憲法の第二十九條には『日本臣民は法律の範圍内に於いて結社の自由を有す』と規定してある」と述べて、濱口内閣の自由主義に對して、可成りの結社許可に關する期待を持つて居る。(中央公論九月號參照)

勿論田中内閣と濱口内閣とが同一物とはいへない。しかし若し勞農黨の更生であるならば、これに對しては田中内閣も濱口内閣も全然同一の態度――結社禁止――を取るであらうことは容易に推察し得る。何んとなれば勞農黨の結社禁止理由は、それが日本共産黨の指導下にあつたからである。そして濱口内閣といへども、共産黨の指導する運動を許可することはあり得ないからである。それが濱口内閣は自由主義的色彩を有するから、田中反動内閣とはちがつて、勞農黨の更生を許すだらうとか、今や客觀狀勢が著しく變化してきたとか考へるのは、まことに甘つたるい觀察といはねばならぬ。我々は河上氏の觀察に反して、むしろ濱口内閣は最近の財政方針によれば最も典型的な金融資本家内閣ではないかとさへ考へる。大山河上氏等の今回の企擧

は、濱口内閣に對して、[illegible]大反感をもた
とこに一回[illegible]すると思はれた。ここに[illegible]い
不足が露出して居る。

更にまた、新勞農黨の樹立を以て、舊勞農黨の更生であると考へるのは、甚しき認識の誤謬でなければならぬ。舊勞農黨は共産黨の指導下にあり、新勞農黨は共産黨から退却したものである。故に濱口内閣は或は新勞農黨の結社を許可するかも知れないと思ふ。しかしたとひ新勞農黨が結社を許可されても、それは相手の内閣の本質に著しき變化があつたのではなくて、御自分達の××精神に著しき變化があつたからだ。變化は客觀に存せずして主觀に存する。河上氏の見解の如きは、地動説から天動説へ逆轉したものだ。

[illegible]
[illegible]
のしないことになりはしないか[illegible]に
立つてこそ發揮されるのであつて、××陣營を去つた大山氏一派は、まるで牙を拔かれた獅に等しい。[illegible]有したいこの二人の大學教授及びその一黨は、[illegible]無産大衆黨と同じやうな微力なる一存在で社會運動分野の一隅に存するに過ぎないであらう。

有爲轉變の世の中である。昨日の英雄は今日の[illegible]者となる。時は秋だ、いつれか秋にあはで果つべきと歌つてしまへばそれまでだが、大山河上一黨の退却は、一脈の寂寥を我々の胸裡に傳へてくる。

五

大山河上氏等と苦艱を共にしてきた者を同じ黨は、果して新勞農黨の旗の下に參ずるであらうか。目下の形勢に於いては馳せ參ずるものが極めて少數であらうと見られて居る。××陣營の主勢力をなす勞働組合・農民組合・無産青年同盟等は悉く新勞農黨に反對の意志を表明して居る。若き××戰士達は、あくまで××黨の旗を死守することを誓約して居る。無産者新聞の如きは、大山氏一黨に對して、卑怯者去れ！と激語を浴びせて居る。かつてはわれらの委員長として英雄的聲望を一身にあつめた大山氏も、今は少數の手兵をつれて、××陣營から「卑怯者」「裏切者」「資本家地主の奴隷」等々の罵りの雨を受けつゝ、新しい合法政黨の城廓に立てこもることになつたのである。

ブハーリンの失脚

――コミンテルンの報告に基きて――

茂森唯士

ブハーリンの失脚！　もしも之がブルジョア新聞の報道であつたとしたら、吾々は之を彼等一流の例のごとき反ソヴエート的デマと見做し、「又か」と一笑に附し去つたであらう。少くも、誰しもこの報道の眞に疑念を挾まない者は無かつたであらう。ことほど左樣にこの事實は意想外である。吾々は強く衝撃する。有り得べからざることのやうにすら思へる。考へても見給へ、一九〇六年來、十八歲の若年時代から、ボリシエヴイキ黨の有能なる鬪士として、組織者として、理論家としてレーニン等と共に最も困難な條件の中を鬪爭し來り、十月革命後は殊に、政治的指導の實際に、世界的革命政策の實現に、財政經濟計畫の立案に、マルクス主義理論の展開に、プラウダ紙の指導論說に、藝術政策の正しき樹立にまで、卽ちプロレタリア國家の凡ゆる重要なる部局の全線にわたつて激鬪し來り、殊に近來レーニン逝き、トロツキー、ジノヴイエフ等失脚後は、コミンテルン執行委員長、ソヴエート共產黨政治部員、プラウダ紙主筆等の要職に就き、スターリンと共に現ロシヤを背負ふて立つ二大巨柱として、又國際××運動の最高指導者として、世界の無產階級運動者の深い信賴と、世界のブルジョアジーの恐怖の標的となつて來た彼である。この彼が失脚した！――而もソヴエート共產黨の政策に反對し右翼日和見主義の陣營に移行し轉落したと云ふ名目の下に――といふ事實が、有り得べからざる事として、吾々の耳目を衝撃するのは無理からぬことではあるまいか。

だがこれは有り得べからざることではなくて、有り得ることである。正に現實に任つた事である。これはブルジョア新聞のデマではなくて、ソヴエート共產黨機關紙プラウダ紙（一九二九年八月二十一日一九一號）がコミンテルン中央執行委員會プレヌームの決議として世界に齎らした事實である。吾々はよしそれが如何に悲しむべき事件にせよ、事實が事實である限り、耳を蔽ふことなく大膽率直にこれを認めなければならぬ。そしてブルジヨア新聞のデマを通してでなしに、最も權威あるコミンテルンの報告を通して、事實の眞相を――何が彼をかくあらしめたかを――知らねばならぬ。

左は前記新聞によるコミンテルン中央執行委員會プレヌームの報告の全文である。

「コミンテルン中央委員會常任委員會は、一九二九年四月二十三日、全ソヴエート聯邦共產黨（ボリシエヴイキ）中央委員會及び中央統制委員會の合同常任委員會に於ける、同志ブハーリンをコミンテルンの仕事から罷免せんとする決議を審査するに當り、次の如く確證するものである。

コミンテルン第六回世界大會に於て、早くも同志ブハーリンが黨と對立しつゝあることが認められた。この對立たるや、實に、ブハーリン及び彼と意見を同ふする一派が、實質に於ては右翼の政綱たる特殊な日和見主義的政綱に基き、黨の根本政策に鬪爭せる、その過程に於て形成されたものである。

全ソヴェート聯邦共產黨(ボリシェウイキ)は、ソヴェート聯邦國民經濟の社會主義的改造の任務に應じ、國家の工業化のコースを具現しつゝ、資本主義的要素に對して成功的攻勢を展開して來たのであつた。而して又、黨は國民經濟の最も遲れたる部分、農業に於ける經濟の社會主義的形態の發展を決定的に保證しつゝ、貧農層及びプロレタリアートと貧―中農大衆の結合せる新たな廣汎に亙る生產形態の動員に基き、富農に對する强力なる鬪爭を指導し來つたのである。資本主義的要素に對し强力なる攻勢を示すこの政策並に正しく前進しつゝある農業の集團化と相俟つて、資本主義的要素を抑制する政策の實施、また機械―トラクター製造機關を發展せしめつゝある國民經濟建設の大なる困難と[illegible]ーは農民間に於て階級鬪爭の激化を來さざるを得ない。即ちそれは、資本主義的要素の側よりする、反社會主義的建設企圖の增大並に小ブルジョア層の動搖の增大することによつて反映されたのである。この黨の政策に對して、同志ブハーリンが移行せる右翼一派は、事實に於て資本主義的要素の前に克服せられたことを意味する處の他の政策、即ち、資本主義的要素に對する攻勢を拒否する政策、富農に對する强力なる鬪爭に反對する政策、社會主義的建設形態を歪曲する政策を對立せしめたのである。全ソウエート聯邦共產黨の政策に反對したる同志ブハーリンは、新經濟政策に對する自由主義的解釋に轉落し商品取引の緩和によつて資本主義的要素の發展を解放し、富農層の有害なる穀物投機に對する黨の壓迫政策を解き、富農に對する課稅の必要に反對し、黨によつて採用されたる資本主義的要素に對する累進課稅制への反對等々に向つて旗を進めつゝある。この事實は、同志ブハーリンが事實に於て資本主義的要素との階級的鬪爭に讓步し、富農に對するプロレタリアートの『戰時共產主義』政策か、若くは富農の社會主義への『延び込み』政策にすり替へることを意味する。

同志ブハーリンのこの誤つた見解は黨によつて導かれたる國內工業化の急速なる發達テンポを歪曲せんとする、彼のコースと密接なる關係を有つ。全ソウエート聯邦共產黨が社會主義建設の基礎的勝利となつてゐる國內工業化の發展に對して正しき政策を實現せんとしてゐるとき、同志ブハーリン並に彼と意見を同ふする一派は、困難の前に克服し、社會主義建設上の、この根本的課題に於て、プロレタリヤの立場から退却し、小ブルジョア的要素の壓力が黨の或る部分層に反映しつゝある。勞働階級の先頭に立てるソウエート聯邦共產黨が、全力を傾倒して社會主義の建設に熱中し、愈々益々廣汎に亙る勞働大衆が結束しつゝある、此時に當つて、ブハーリン及びその一派は、小ブルジョア的悲觀論及び勞働階級の持つ威力に對する不信を、言ひふらしつゝある。これを克服すること無しに社會主

義建設の勝利を確保するとは不可能である。

最後に、全ソウエート聯邦共産黨の情勢、及びそれの指導方法に對する評價に關し、同志ブハーリン及びその一派は、單にトロツキイストの古い轍を繰り返すのみである。

全ソウエート聯邦共産黨が自己批判と黨内デモクラシーの展開をスローガンとして官僚主義との闘爭の爲めに、解黨主義的要素を清算する爲めに、成功的に最も廣汎に亘る大衆を動員せんとした瞬間、ブハーリン及び彼と意を同ふする一派は、官僚主義者との闘爭の言葉に隱れ、それと同時に黨の指導下に、黨機關勞働組合、協同組合、ソウエート機關の活動を大衆と結び付いた强固なる新形態の基礎の下に改革せんとしたのに反對し、それによつて黨の政策に反對しつゝある官僚主義的有害分子の傾向を反映せんとしたのである。

全ソウエート聯邦共産黨の政策に關する問題に於て、同志ブハーリンの犯せる誤謬は、國際政策に關する、彼の誤謬と不可分的に結び付いてゐるのである。資本主義の安定を覆す根本動因たる、全ソウエート聯邦共産黨によつて指導されたる社會主義の攻撃に關し、評價不足を來すことに依り、同志ブハーリンは、エムベル・ドロ・セーラ・エウエルトム其他と共に、共産黨インターナショナル内に於ける右翼要素の爲め、事實上政策の理論的基礎を造り與へるものである。コミンテルンの政策、就中第六回會議の決議に反對することにより、同志ブハーリンは、資本主義の安定の益々動搖しつゝある事實を、日和見主義的に否定することに轉落したが、そのことが不可避的に彼をして、革命的勞働運動の新なる擡頭の成長を否定せんとする方向に導いたのである。同志ブハーリンのこの立場の基礎には、彼によつて、特に世界市場に於ける資本主義の無政府狀態は緩和されたとする名目の下に、持つて廻られつゝある資本主義の内部的矛盾は緩慢であるとの、非マルクス主義的『理論』が横はつてゐるのである。

かくの如き種類の『理論』は、コミンテルン内のあらゆる右翼的要素にとつての理論的基礎となるものであるが、資本主義のあらゆる發達によつて駁撃され、且つ事實に於て改良主義的イデオロギイ(ヒルファーヂングの『理論』『資本主義の復活』)の前に兜を脫ぐことになるのである。

同志ブハーリンの論文『組織されたる非經濟』の理論」(六月卅日附プラウダ紙所載)は彼が資本主義の内部的矛盾の緩和に關する非マルクス主義的『理論』を依然として棄てないのみならず、更に益々、その誤謬を深めつゝあることを暴露する。

これと關連して、同志ブハーリン並に彼と意を同ふする一味の、コミンテルンは『腐蝕』したとする悲鳴は、左翼分子の臆病なる支持となること、明瞭であり、それ故に彼等との闘爭はコミンテルン内に於ける根本的中心任務をなすものである。黨を社會民主々義の要素から淨化することの健全なる過程は、成熟化しつつある革命的運動の新なる擡頭の情勢にあつては、特に必要である。何となれば同志ブハーリン及びその一味はあらゆる手段を持つてコミンテルンを非難し、それによつてコミンテルンの右翼的裏切者に對する闘爭を弱めんとしてゐるからである。コミンテルン内に

於ける右翼要素の中堅となりつゝある同志ブハーリン及その一味は、自からの右翼論、即ち、勞働階級の勢力の低落と不信を説教することにより、あらゆる反レーニズム的傾向の擡頭を助くるばかりでなく、ボリシェヴィキ的信條の覆滅へと導かんとしてゐる。

同志ブハーリンの凡て、これ等の日和見主義的動揺は彼をして、黨の背後に於て、全ソウェート聯邦共産黨と闘爭する爲めに、トロッキストとの無條件的ブロックを結成せしめんとするまでに至つた。

以上凡ての事實に鑑み、コミンテルン中央執行委員會プレヌームは、全ソウエート聯邦共産黨中央委員會竝に中央統制委員會の合同プレームの決議、即ち同志ブハーリンをコミンテルンの仕事より罷免するの件を支持し、彼のコミンテルン常任委員たるの職を免ずることを茲に決議するものである。」

民權運動彈壓側面史

吉野作造

一

西南戰爭後、明治政府に快からぬ天下の人心は自ら土佐に高踏隱棲せる板垣退助に望みを囑し、血の氣の多い全國各地の青年にして高知に來り謁づるもの陸續として絕へず、中には前年から來て永逗留して居る者もある、何とかして與れとせがぬものもあつたらうが、少くとも早晩何とかなるだらうとは彼等すべての期待であつた。その結果出來たものがかの愛國社の再興である。

愛國社再興趣意書には明治十一年四月の日附がある。九月大阪に於て其の第一回大會を開いたが、其間栗原亮一・杉田定一・植木枝盛なんど云ふ人達は有志家の間に同志を求むべく畿內・北陸・山陰・山陽・四國・九州の各地に遊說した。所謂民權自由の風潮が發祥地の土佐から動き出て漸次全國に擴がつて行く端緒は、實に之に依つて始められたと謂つていゝ。

右九月の愛國社第一回大會は決して盛會とは云へなかつた。遊說の效果がまだ十分に擧つて居ないのである。併し乍らそれが十二年になると段々に現はれて來る。之には此年春から府縣會が開かれたと云ふ樣な事情も助けて居るが、我々のこゝに見逃してならぬことは遊說に依る民衆煽動が他の何物にも增して豫想以上に有效であつたことである。恐らく之は政府でも民間でも實地にやつて見るまでは深く氣付かなかつた所であらう。

明治政府が其始め謂はゞ薩長の武力に由てやつと作り上げられたものだけ言論の自由に對して決して寬大であり得なかつた事情は、細論するまでもあるまい。或は公議輿論を尊重すると

云ひ又或は博く言路を洞開すると云ひ、天下と倶に政を爲すの聲明は何遍となく繰り返しては居る。併し之を文字通りに請取つてはいけない。尤も心にもなき聲明が自縄自縛となり、何だ彼だと文句を云ひ乍らも、彼等政府者をして終に公會政治の大勢に隨從せざるを得ざらしめたのではあるが、少くとも當初の動機に於ては、公議輿論言路洞開等の御題目は、天下の同情を得んが爲めの看板に外ならなかつた。但し考へ樣に依つては、彼等政府者の這の態度を以て天下を瞞着する狡智の致す所とするは聊か酷に失するかも知れない。何となれば博く群言を民間に求めても百姓町人に政治上の意見などあるべくもなく、彼等と多少でも接觸して政府の有り難き方針を說き聞かせるのは却て治道に大益ありと、彼等政府者はその當時考へたであらうから。民衆が何時までも曖昧ならそれでいゝ、やがて開發して來ると、いろ／＼面倒な文句を云ふ樣になる。公議輿論言路洞開のお題目には一面さうした內容のあることに、政府者は始め氣が付かなかつたらしい。必ずしも之を彼等の無識に歸するわけにも行かないが、彼等の從來の政治經驗は、いろ／＼新しい事を西洋の本などで讀んで居るに拘らず、到底民衆其自身の政治的進出など云ふことを考へさせなかつたのであらう。

百姓町人はまだ可いとして、舊幕臣乃至佐幕諸藩士中の讀書階級はどうする。此種の人達に對し明治政府は大體に於て快く政柄を執つたら、例へば勝と榎本を引揚げ伴食ながら相當の地位を與へて優遇して置けば舊幕臣の多數は始末出來ると云つた風に、拔目なく閨閥の網を各方面に張つた。併しそんな事で到底天下人心の不平は抑へ切れるものでない。唯幸にして當時の我國は封建時代を距ること遠からず、仍ほ未だ處士橫議を治安の妨げとするの習風を存して居たから、胸中の鬱結を容易に外に現はすと云ふ風潮は起らなかつた。が、機會があれば事は必ずや之等の連中の間から起るに相違ない。達觀の士は決して斯う云ふ形勢を看逃しては居ない筈だ。

遂に機會は來た。明治七年一月板垣・副島・後藤・江藤等諸氏の民選議院設立建白書の公表がそれである。先是前年の十月には征韓の議合はずとて以上の四參議に西鄕隆盛までが加つて連袂辭職した。此頃の政界の離合集散は（この後同じ樣な形勢は十數年も續いたと云へるが）昨今の無産諸政黨間に往々觀るが如く、味方か否らずんば敵かの關係で、やめた以上は謀反せぬとも限らぬとは世人一般の考であつた。それだけ西鄕以下四元勳の連袂辭職は明治政府の威望を傷くること言ふべからざるものがある。之も機會の一つに數へていゝ。超へて七年一月西鄕を除いた四參議は由利公正並に參人の青年論客を誘つて政治

上極めて重大なる建白書を左院に呈し、剰へ之を「日新眞事誌」と云ふ新聞に登載せしめたのである。政府も之には困つたが、相手が相手だけに手軽に壓迫し去ることも出來ず、已むなく加藤弘之をして長文の反駁文を公にせしめた。之より後此問題に關して如何に多くの論戰が新聞雜誌を賑はしたかは、餘りにも周知の事實であるから玆處には述べない。唯一言以て讀者諸君の注意を喚起したいのは、之が導火線となつて虎視耽々たりし不平士族階級の讀書人が憚る所なく筆劍を研いで政府反對の猛烈なる一大論陣を布くに至つたことである。怖いもの見たさに、もぢ〳〵して居た連中が、板垣後藤と云ふ名だゝる猛者が先頭に立つて呪れたのに俄に勇氣付いて、我も〳〵と飛躍邁進すると云ふ形であつた。民間の出版物の調子も此時を機として著しく違つて來る。

出版物に對する取締は云ふまでもなく維新早々からあつた（之等の詳細に就てまで今こゝに說き及ぼす遑はない）。概して云ふに、七年頃までの明治政府は進んで民間の出版刊行を奬勵し又奬勵せしめた傾向がある。この早き時代に各地で作られた稚拙な地方新聞の多くが直接又は間接に地方廳の保護奬勵の結果として出來たと云ふ事實を見てもそれが分る。所が明治八年になると様子ががらりと變つて來る。今までに見たことのない民間操觚の徒の間もそれぞれ一の[illegible]――（又は日刊ならざる新聞）の數次第に增加されて來る。遂に此年七月二十八日政府が突如「讒謗律」と「新聞紙條例」とを發布施行するに至つたのは、一面に於てその跋扈を語るものでもあるが、他面に於て民間政論が如何に急激なる轉回をなせしかを想像せしむるに十分である。

但し此時代の勇敢なる反政府的論陣は、頗る政府者を嫌がらせたと同じ程度に於て、亦民間の自由權利思想（又は之に類似したもの）を刺戟普及せしむるにも力あつたかと云へば、その方は大に疑なきを得ない。民間の論客は無論天賦の權利を說き自主自由を說き又國會開設の急要を唱へぬではない、併し乍ら彼等の最も力を入れたのは現政府の專擅壓制なること、壓制政府を倒すは天命に忠にして同時にまた吾人の幸福を完うする所以なること等を縷說するに在つた。理窟は第二、先づ主として政府に對する民間の反感を激發すればいゝ。其處から來る民間論客第二の戰術は、無遠慮に高位高官の人達の惡事醜行を面白をかしく摘發することであつた。だから政府の人は困る、が、民間の一般大衆は興がつて讀むもの、之に依つて何等深酷なる教訓を受くるに非ず、その殘せる印象は至つて稀薄なもの、様であつた。それに頒布の範圍も狹い。故に單に此點から云へ

ば放任して置いても差支ない程度のものであるのだが、それな政府がムキになつて怒り驚くべき苛酷なる法律を以て取締るに至つたのは、官吏の威嚴の濫りに傷つけられることは、少くとも當時に在ては、治安上大に支障があつたからに外ならない。縣令が昔の大名を氣取つた時代である、又氣取らねば人民の取締りが出來なかつた時代である。「讒謗律」「新聞紙條例」の適否其事の論は別として、當時の政府が之等法律の發布施行を急要と認めし理由は敢て想像に難くない。

　そこで明治八年筆を以て始められた政府對抗の民間運動は「讒謗律」「新聞紙條例」の發布施行を促した程政府を狼狽せしめた出來事ではあるが、後年に於ける所謂自由民權運動の端緒を爲すものでないことは明かだ。讀書人が笛を吹いても民衆は一向跳らないのである。否、その笛は民衆の頑くなな心を浮き立たせて自ら跳らずには居れぬといふ風には響かなかつたのである。それには色々の理由があるが、紙上の言論だと云ふことが其の最も大なる原因でなければならぬと考へる。

　私は獨り民衆を動員するに最大の效果あるものは演説だと云つた。近くは我國の社會主義の發達に付ても同じ樣なことがいへると思ふ。社會主義が幸德とか堺とかの一部専門家の論題であり之等の言説に對する政府の手厳しい彈壓をば國民一般が自分達と直接の關係のない事件として傍觀した時代も、考へ一見れば相當に長かつたと思ふ。之が歐洲戰爭の結果、種々の事情に倖ひもされて、兎や角文句を云はれつゝも、普ねく國民の各層にもぐり込んで親しく主義を語るの機會が惠まれてから、急に所謂長足の進歩を遂げ、社會主義は最早國民の常識となつたのではないか。今日は時代が進んで居るだけに文筆に由て大衆を動かし得る餘地も相當にある、五十年の昔とすると、此點今日とはウラハラで、文筆の效は言ふに足らぬ割合に、演説に動かさるゝ度合はまた今日の想像に及ばぬ程大なるものがあつたのだ。從て明治八年頃の民權運動は謂はゞ後年の社會主義發達史上の前期に該當すると觀るべく、歐洲大戰後の大飛躍にあたる時期は、彼に在ては恰度十二年の遊説流行に始まると謂ふべきである。

　演説を流行させた本は云ふまでもなく愛國社の人達である。愛國社は「政府ヲシテ公議輿論ノアル所ヲ知ラシメ」る爲に「各地人民相互ニ會合シ國政ノ利害得失ヲ公議シ國會ニ代フルノ議會ヲ起立セサルヘカラス」とて（愛國社再興趣意書）、全國の民衆を各縣に分つて結束せんことに努めたのだから、其の遊説の目標も略ぼ想像がつくが、それよりも大事なことは、各縣に於て所謂有志家數輩を擢き之に縣下民衆の組織動員を托したこと

である。最近の社會運動が先づ工場其他に鬪士を發見養成することに依て始めて異常の進展を遂げしの事實と對照せば、其の效果の決して尠少に非りしことが判知されよう。一々文獻に徵するまでもなく、之等の有志家は皆競つて各々其の鄕里に演說會を開いた。隣接の町村へ遊說に出掛けるものもある、自分で演說の出來ぬものは遠方から辯士を雇つて來る。この爲めでもあるまいが、少し大きな都會では演說に依て民智の啓蒙をはかることを目的とする社團が澤山出來た。而して演說の效果はと云へば、處女地だけに盛んに受け、一回の演說は大抵數十名を糾合する一團體の創立を到る處に見ると云ふ有樣であつた。

當時の辯士の講說の內容はどんなものであつたか。大抵は一定の型にはまつたものであつた。曰く天賦の自由、曰く多數の幸福、其處まではい〻。更に夫より一步を進め、自ら進んで之を獲取することを知らざるは卑屈だと怒鳴る、古來の因襲に縛られ奴隷的屈從に甘んじて一體どうするのだと煽てる。現に虐げられて居る地位に目覺めよと云ふは政府に對抗する意味での一種の階級意識の鼓吹と觀られぬでない、權利の恢復の爲めに猛然として起てと云ふは正に鬪爭意識の激發に外ならない。愛國社再興趣意書の說く所を冷靜に讀めば、政府の到る能はざる所を補ふものに過ぎぬ樣だけれども、民間論客の意氣込みを聽けば、正に民衆を背景とする一大政黨を組織し全然政府を孤立無援の地に陷れんとするものである。政府の驚いたのも無理ではない。

殊に政府の驚いたのは演說の效果頗る大なることであつたそこで先づ之を取締ると云ふことになる。次に民衆組織の計劃が着々として其の目指す所を實現しつ〻あることであつた。之も無論放任するわけに行かぬ。人文の未だ開けない時代の事だから、民間の運動にも常規を逸するものが甚だ多かつた、それだけ官憲の取締も煩雜苛烈を極むるは致し方がない。無智な地方の警察官の度を過した干涉が事端を不當に紛糾せしめると云ふ樣な例も亦澤山ある。之等の事實に興味を有たる〻諸君には、是非其頃の新聞をお讀みなさいと勸めたいが、其の便宜と遑のない方々には、少くとも友人外骨翁の名著「明治演說史」を一瞥されんことをお願して置く。

二

政府が演說の效果にびつくりし積極的に之を取締つたのは明治十一年七月十二日の太政官布達第二十九號が初めである。その要領は斯うだ、近來各地に於て何某社と稱し國事政體を議論するの目的を以て或は演說會を開き又は多衆を集合する者があ

ると聞くが、右は警察官に於て能く視察を加へ、萬一その舉動民心を煽動し國安を妨害するに渉る樣なことがあると認めたら、東京府下に在ては警視長官より、各地方に在ては其長官より、之を禁止することにしたい。其際は其事情を内務卿まで具申して貰ひたい云々。

警視長官又は地方長官は其認定に依り演説集會を禁止するの權を與へられたけれども、他方に於て此種の會合には能く視察を加へ萬遺漏あるべからざるの責務を負ふことになつた。如何して此責務を完全に果たすことが出來るか。それには民間の主催者をして屆出でしむるの外はない。東京警視局は大警視川路利良の名を以て同年十二月九日次の意味の布達を出した。各地方に於ても亦略ぼ同樣の事のあつたのは云ふまでもない。(一)政談講學の目的で演説若くは論議の會合を開かんとする者は豫め警察官廳へ屆出づべきこと、(二)この屆書には會合の趣意場所時日を明記し會主の外會員三人以上の連署を要すること、(三)右の會合には警察官吏をして臨監せしむること。猶ほ警視本局は此月二十五日に至り、更に各分署に對し、取締規則に違背せる集會には即時解散を命ぜよと通達した(以上外骨翁の「明治演説史」に依る)。

斯う云ふ雰圍氣のうちから如何云ふ結果が生れたか。外骨翁の本にも這般の情質が面白く説き示されて居るが、私は最近に讀んだ二三の文獻に依り、その洩れたる事實を語り旁々當時の世相を偲ばうと思ふ。

三

第一は大和の郡山に起つた「演説紛議」である。十二年十月の出來事だ。此年三月には東京府會の開會に依つて我國初めての地方議會が政海に纜を解き、又之と相前後して愛國社の第二回大會は大阪に開催され、共に民權自由主義の爲めに大に氣を吐くの概があつたが、不幸にして初夏の頃から虎列刺病がはやる、やがて全國に蔓延して人々は官民を分たず其の豫防に忙殺されることになり、諸興行は申すに及ばず學校すら休業するものもあつた。從つて演説會の流行も自然其の出鼻を挫がれたのであるが、それでも全然見合はされたのでないことは、六七月の頃惡疫流行の際多數會同するは宜しからずとの理由を以て演説會の差止められしと云ふ報道がちよい／＼當時の新聞に見へた事でも分る。併し大體に於て去年の暮から燃え出した火勢は惡疫流行の爲に幾分その鋒先きを抑へられたことは疑ない。その代り秋に入り、虎列刺も絶滅に近づき檢疫所も取拂になつたと來ると、待ちに待つたる連中は時こそ來れと盛に演説會を開く

と云ふことになつた。

大和國郡山の有志も九月の末頃より相談をはじめ、愈々今井町の日出座と云ふを借受けて十月六日より八日まで三日間大演説會を開くことにきめた。辯士は大阪より招聘しようと云ふことになり、恰度彼地の田尾貫吾なる者が滯在中なるに依り此人を通じて大阪民政社員篠原藤三郎及び交詢社員西村三郎へ書面を以て周旋を頼んだ。兩名は承諾の上人選をなし其の結果右兩人の外善積順藏、城水兼太郎、村山泰助、瀧谷恒壽、門野又藏、藤堂榮作の諸氏が聘に應ずることになつた。但しこの中には餘り後代に名の聞へた人はない。篠原は準備の手助けをもしようとて先發し、他の諸氏も開會の一兩日前郡山に着き、共に鍛冶町の俵本屋（丸毛金吉）といふに落ち付いた。

同地では豫て、演説會を開くには辯士の住所姓名竝に論題を明記して三日前に警察署に屆出づべきことになつて居た。そこで會主飯田高榮は十月三日に要件を具備した屆書を郡山警察署（奈良警察署の支署になつて居る）に呈出した。警察では預り置くとの事だつたので其儘引き退がつたところ、四日に至り、御用有之卽刻出頭すべしの召喚狀が會主飯田の許に屆いた。往つて見ると、一等巡査坂田某が警部代理として應接して云ふやう、今度其方が會主となり演説會を開くに付ては、かねて警視廳より内務の達示もあつたに一々演士の草稿を差出して置ひたい、且つ屆書人名中に西村三郎と云ふのがあるが、之れは先きに大阪に於て演説差止めとなつた者で、當縣へも照會になつて居るのだから何の上でなければ演説を許すわけに行かぬ、差當り之れ丈けを除いて屆出でたらよからう云々。因に云ふ、西村三郎は此年三月十五日大阪京町堀上通圓宗寺に開ける政談演説會に於て、河村海軍卿が英人リード接待の爲め賤を醸うして全國を巡遊せるを責め、言頗る激烈に渉れるの廉を以て直に現場より拘引され、五月二十日大阪裁判所に於て政府及大臣を誹謗せるの罪に問はれ禁獄七十日に處せられた。之と同時に彼はまた行政處分を以て大阪府廳より備後管内に於て演説會主となり且自ら演説することを禁ずると云ふ申渡を受けた。斯う云ふ猛者が來たといふので郡山警察の神經を異常に過敏ならしめたのも實は怪むに足らないのであつた。

右の申達に對し會主は答へた、演説と申すものは心に思ふことを其儘暢演するものにて大體草稿などを作つてやるものではない、人に依つては話の順序を誤らぬ爲めにと簡單なものを作ることもあるが、此度の辯士中には一人も草稿などを用意する者はないと思ふ、就ては草稿の事に關係なく開會の御許可を得たいものであると云々。坂田巡査は、さる情實もあるだらうが内

達の趣旨に悖るわけに行かぬから草稿を添へざる以上屆出は斷じて聽屆け難いときつぱり言ふので、飯田はやむなく屆書を引取り、一應辯士の面々とも相談しようとスゴ〳〵として旅宿に歸つて來た。

警察が縣廳の內達を口實に豫め演說の內容を知りたがるに就ても多少の理由がある樣に思ふ。そは前記の田尾貫吾この夏六月二日此地九條町の妙差寺で演說會を開いたとき「アンナ巡査モ亦タ官員カ」の題を揭げて警察官の嘲罵を試みんとしたからである。尤も演說を始めたばかりの所を彼は臨監の警官から國安妨害の理由で中止を命ぜられたのであつた。但し斯くして警官は辯士の口を箝することは出來たが、警察の橫暴を罵る千餘の聽衆の騷擾を鎭めるには大變に骨が折れたさうだ。斯う云ふ苦がい經驗があるので、警察としては何とかしてこの演說會を流產に終らしめようと企らんだものと見へる（「近事評論」第二〇一號十二年六月十八日發行）。

俵木屋に歸つて相談を始めると、そは怪しからぬと血氣の面々はいきり立つ。乃ち篠原藤三郎、西村三郎、田尾貫吾の三名が會主に蹤いてまた警察へ出頭することになり、連れ立つて坂田一等巡査に面會を求めた。口の達者な連中の事とて陳述は頗る微細に亙り、坂田巡査も之には一寸返答に困つた樣である。

一々書き寫すのは煩はしいから茲には議論の荒筋だけを個條書きにして出すことにする。

（一）演說は文章と異り聽衆の模樣とか辯論の都合などで言ふ事が變り豫め內容を一定し難きものである。從つて演說その儘の草稿といふものはあり得ない。

（二）新聞紙著作物に在ても何か容易ならざる大事の出來せし場合か又はいぶかしき標題を揭げし時でもなければ官に於て一々草稿を調査されぬ、就中著述翻譯に至つては草稿を差出さずして出版免許を得るを常例とし、圖書局より草稿の提出を沙汰せらるゝが如きことは滅多にない。

（三）新聞や演說につき一々草稿を調査するとなつたら、官の手數人民の不便實に容易ならざるものがあらう。

（四）西南戰爭の時でも各新聞社の草稿を檢閱せられたのは單に軍事に係るものだけに止まつた、それをすら輿論は大に非としたのみならず、新聞社でも刷方遲延して大迷惑だと叫んだので、間もなく檢閱はやめとなつたのであつた。

（五）今太平の世の中に於て、新聞紙ならまだしも、演說の草稿までを檢査するとは餘りに時代の逆行ではないか。

（六）且今から書くとしても明後日の開會までには到底間に合はない。

（七）假令間に合ふとしても、我々には之を作成するの意志は毛頭ない。我々は政府の法令には義務として遵ふも、法令に根據せざる官吏の言葉には必ずしも服從すべき理由を認めぬからである。我國には未だ演說會は草稿調査の上で開會を許すと云ふ樣な規則はない。たとへ其方が縣令の內達であつても私共に於て遵守すべき義務はないものである。

坂田巡査は之を聞き終つて後、大要を書面に認めて出して吳れと求めた。乃ち彼等は大要を認めて出した。

それから今度は西村三郎と坂田巡査との一問一答が始まる。

「拙者に付ては何の上でなければ御縣下に於て演說は罷り成らぬと云ふのでござるか。尤も拙者は大阪府下に於ては演說を差止められて居る、併し未だ曾て堺縣下に於て差止められたことはない。」

「それは西村三郎なる者が演說する由を届出でた節は伺出でて指揮を乞へとの達があるからだ。伺濟の上でなければ其方の演說は許し難い。」

「お達とあれば是非もないが、さらば其次第を書付としてお下げ下さる譯には參らぬか。」

「明日渡さう。」

夜も既にふけたので一同は之で警察の門を出た。翌朝西村はひとり警察へ出頭、約束の書面を置いて一旦大阪へ引揚げた。

翌五日又々會主石田に呼出狀が來た。早速出頭せるに、例の坂田巡査が出て來て、演說草稿の儀は評議の上最早差出すに及ばぬことになつた、但し届書は三人以上の連署にして欲しい、左すれば七日から演說會を開いてもいゝとの口達であつた。警察の態度の豹變に訝りつゝも、形勢の頗る有利に展開し來れるを喜びつゝ、直に會員三名の氏名を連ねて出した。之でよし、七日より開會苦しからずと申渡されたので、會主も始めて安心し、歸つて之を一同に告ぐれば、皆々その好首尾を喜び合ひ、一日延びたことを呟やくものもなかつたのであつた。

所が六日午後になり、又もや即刻出頭の召喚が來た。何事やらんと會主は早速出て見ると、昨日預り置ける届書には總代の奧印が無いからとて一應却下して吳れと事務所より上申して來た、依て一旦届書を持歸つて吳れと云ふのである。當時堺縣はまだ郡區改正にならないので、事務所と云ふものがあり、それが戸長役場に附設され、そして總代は戸長の上に位するものとされてゐた。先きの届書は戸長の奧印のみを貰つて差出したのだが、後に總代が故障を唱へたので却下のことを申請したものかと想はれる。いづれにしても會主はこの突然の處置に一驚を喫し、歸つて之を會員に諮つた。一同亦且驚き且怪み、一

當事務所より却下を願出でそれを警察が採用するといふのか解らないとて、今一應警察へ伺出た方がよからうと云ふことになつた。會主は風邪の氣味だつたので篠原藤三郎が會主代理となり、會員城水彙太郎外一兩名を連行して警察を訪ねた。相手は例の坂田一等巡査である。先づ篠原が口を切つた。

「届書は一旦聞濟になつたものである。事務所より却下を願出でたからとて差出人の會主に一言の沙汰もなく卒然却下するとは如何なる理由に依るか。且つ總代の奥印が是非とも必要なものなら昨日届書呈出の節其事を申聞けらるべき筋と考へる。何の御沙汰もなく聞届けられた以上、今更却下せらるゝ譯はないではないか。」

「いや唯戸長よりの申出に任せて却下するのである。」

「一體戸長と云ふ者は人民の願伺を取次ぐものではあるが之を進退すべき權限を有するものではない。戸長の方で總代の奥印を得てから取次ぐことの內規であれば、之れ無くして當署に取次がれたのは戸長役場の失態である。その不始末を棚に上げて人民の届書を勝手に取下げしめるのは甚だ其意を得ぬ次第だが、御當署はこの戸長役場の處置を正當とお認めになるのか。それとも總代の奥印を要すとの內規が御當署にもあるのか、それなら何故昨日其事の御指圖がなかつたか。」

「當署では總代の奥印は無くてもいゝのである。たゞ戸長よりの上申に基いて却下するのだから、夫れに申分があるなら戸長の方に掛合つて貰ひたい。」

「承知いたした。就ては念の爲めに伺ふが、戸長より却下請求の上申を取消すことになつたら御署に於ては豫定の如く開會することに御異存はあるまいと思ふが如何。又戸長と總代と納得の上双方の調印があつたら是亦無論差支なきことゝ心得てよろしきや。」

「それなら差支ない。」

更に篠原は大阪などでは戸長の奥印を要せず會主より直に警察署に届ける丈けでいゝのに、當縣にては戸長と總代と兩人の奥印が入るの、いや戸長だけでいゝのだが却下を申出でれば何時でも下戻さるゝのと、印判一つで事が馬鹿に面倒になるのは誠に天下の異例であるなどと、皮肉を浴ひせて引揚げた。

時は既に夜の八時頃であつた。篠原城水の兩名は其足で直に事務所を訪うた。副區長河村某に面會するを得たので、兩名は交も々々、(一)一旦明日開場の儀を聞届けられ諸般の用意を整へ四方へ公告もせる故聽衆も定めて多かるべく、今更延期するわけに行かぬこと、(二)警察では當事務所よりの上申さへなかつたら明日の開場更に差支なしとの事であつたから、明日の開

堂の故障は全く當事務所の爲めなること、(三)それに會主但し疎漏が因を爲すのならまだしも、全く當事務所の事務取扱上の缺點に出で而も會主へ一言のことわりもなく屆書の却下を申請するとは他の迷惑を顧みざるの甚しきものであること、(四)付ては拙者等は之より總代の奥印を貰ひ請け直に當事務所へ書類を差出すに付き、警察に對する手續は迅速に取計はれたきこと、(五)さも無くば拙者共も多忙の身で態々大阪より當地に參り何時までも便々として居る譯に參らず、我等は一人として徒手遊食するものはないのだから、貴方の手落の爲めに無用の光陰を空費せしめらるゝ以上一同の者へ滯在日當を下附せられたいこと等を懇々として説いた。河村副區長は大に辟易の體であつたが、一應問合せの上何分の返答に及ぶから暫時待つて呉れと言ひ殘して、大急ぎで警察署へ驅けつけた。やゝあつて歸つて申すには、總代の奥印を請け其書類を警察へ廻はす上は前の上申は取消し明日の開會は苦しからず、此事よく警察と打合せて來たから安心あれとの事であつた。二氏は大に喜び、城水はそれから分れて宿に歸つたが、篠原だけは直に轉じて今度は總代堀川貞を訪ね、之れまでの經緯を詳しく述べて奥印の儀を懇願に及んだ。所が總代には種々の情實を並べ兎角調印を拒まんとするの色が見へる。其處へ又々警察から會主代理篠原藤三郎ことに宛てた呼出し状が届けられた。何事にかと早速出頭して見ると、

「先刻約束の屆書の差出方何故に斯くも遲滯に及ぶか。當署に於ても夫々手續もある事だから、差出すのなら大至急に出して貰ひたい。就ては明日午前六時まで待つことにするが、其刻限を過ぐれば受理しないからさ樣心得られたい。」

と云ふのであつた。之には篠原も面喰つた。

「之は思ひもよらざる御達である。拙者が御署を退出したのは午後八時、夫より事務所に參つたのであるから、相當の時刻も掛るは御承知の筈。幸ひ副區長總代も在宿であつたからよい樣なものゝ、左もなかつたら御呼出に遇つても斯くの通りオイそれとは出頭もできなかつたらう。萬事がいつも斯う都合よく早く運ぶものではない。それに總代との話はなかなか面倒にて、今から往つて懇談を續けると彼是明朝になつてしまうかとも考へらる。それを午前六時に是非間に合はせよとは甚だ無理ではござらぬか。」

と云つたが容易に聽き容れない。篠原は重ねて

「一體あの屆書は一旦御署にて不備の點なしと認めて受理されたものである、唯戸長の申出であつたばかりに一應却下と云ふことになつたのではないか。されば總代の奥印を取り戸長よりの

上申取消しがあれば差支ない筈で、此事は先刻もはつきり仰せられたのではないか。元來斯かる願伺屆等は成るたけ人民の不便がなく官の御手數も省ける樣の御取計ひあつて然るべき筈、明朝六時まで差出せなどと夜中狼狽奔走させるやうな事はなされぬでもよからうと思ふ。畢竟警察官吏の職務は演說會を十分に監督するに在るので、屆書の形式や時間の制限やで妨害に類するが如き取計をなさるのは如何の御趣意に出づるものか、甚だ了解に苦しむ次第である。」

と懇々辯じ立てたけれど、警察官は前說をかたく執つて多くを語らず、已むを得ず辭して總代方へ戻り、再び奧印の儀を迫つた。總代も遂に強て拒むべき口實もなく漸々調印することになつた。斯くて屆書を事務所に廻はしたのは七日の午前五時三十分頃であつた。之でやつと開會の手順も整うたのであつた。

明くれば七日、朝の七時頃から聽衆は日出座へ集つて來る。いよ〳〵開會しようと云ふ九時頃、會主飯田は又々警察の召喚を被つた。そこで會員篠原が壇上に現れて代つて開會を宣し、續いて何か說き出した所、一等巡査某棒を小脇にかい込みたる部下數名を引率して慌しく會場に繰りこみ來り、篠原には即刻警察署に出頭すべきの命を傳へ又演說會開場の儀は相成らずと嚴達した。篠原は大に怒り

「演說會を開くこと相成らずとはどう云ふわけか。既に御指圖に從ひ戶長總代の奧印も濟み屆書も受理となつてつまり許可濟みで開いた今日の演說會である。それを今になつて突然止めろとは餘りにも人民を愚弄するものでないか。會主及び會員に於ては官に對して運ぶべき順序は完全に踏んで居る、何處に我々の不行屆があるか。見らるゝ通り公告を信用して聽衆も斯く澤山集つて居る、此儘閉場しては遠來の聽衆諸君に濟まない。一旦受理したものを却下し又差許して今度は罷成らぬと來る、それでも人民を愚弄したのでないと云はるゝなら、どうか會員並に聽衆の面前に於て何故閉場を申付けられるかの理由を辯明して貰ひたい。左なくては閉場の御命令は斷じて御請け出來ぬ。」

と威丈高になつて警官に詰め寄つた。

「其事に付ては先刻より會主飯田を呼び出して申達した筈だ。」

と逃げるけれども篠原はなか〳〵承服しない。

「郡山の警察署では一旦受理したものを故なく無效にすると云ふ樣な亂暴な事をなさる筈はないから、之には何か重大の理由があるのだらう。此會合をわざ〳〵差止めに出張された貴官がその差止めの理由を知らぬと云ふ方はあるまい。さア其理由を承らう。」

と迫つてどうしても壇を下らうとしない。

「否、其屆書は手に受取つただけの事で未だ受理したのではない。」

「そんな馬鹿な事はない。戸長總代の奧印さへあれば當署の方は差支ないと何遍も言はれたではないか。」

「…………」

「それはそれとして此會同を開いて相成らぬとする理由を早く承りたい。」

斯んな問答が續いた後、斯くては果てじと篠原は理由のない閉場命令はお請致し難しと刎ねつけ、其理由は警察で承らうとて一等巡査に同道を求めて一所に警察署に赴いた。所が警察の答辯は單に今朝の屆書は受理し難きに付却下したのだと云ふだけに得心の行く理由を告げない。篠原はそんな馬鹿な事はないとて、現今演說會が各府縣に於て流行し、其辯論の國安妨害と認められざる限り何處でも自由に開催を許されて居ること、警察官でも縣令でも濫りに此自由を犯してい〻と云ふ成規は無いことなどを說き、兎に角昨夜來の御談示で我々は今朝の屆出は受理せられたものと認むる故、改めて詳細の理由を承らざる內は却下の儀は斷じて御請け申し難しと言ひ放つた。然らば御請けの出來ぬと云ふ趣旨を書面に認めて出せと云ふので、彼は直に筆を執り書面を差出して會場へ引返し、直に演壇に登つて演說をはじめた。

すると間もなく其處へ同等巡査が四五名やつて來た、命に依て篠原陸三郎を拘引すると云ふのである。拘引狀があるかと訊くに、それに構はず巡査は篠原の手を把り無理に引立てんとするので、篠原は頑として壇を離れず、暫し揉み合つたが、聽衆も之に伴れて動搖しさうに見へたので、巡査は一旦警察署に歸り、拘引狀を持參して改めて篠原を拘引し去つた。

斯くて演說會はめちやくちやになり、會主側は聽衆に詫びて其日は無事に散會することを得た。

田尾城水の兩名は警察署へ出頭して篠原拘引の理由を詰問した。

「取調の儀あつて拘留を申付けたのである。」

「然らば御取調中本人儀は我々共へ貰付申し付けられたい。」

「それは出來ぬ。」

「何故であるか。」

「奈良警保課へ伺の上でなければ出來ぬのだ。」

「然らば至急伺の上成否の程御沙汰を賜りたい。」

「いづれ郵便を以て伺を出さう。」

「序に伺つて置きたいが、篠原の拘引は當署の獨斷を以て決行された事と存ずる、奈良まで照會を往返するの餘裕があり得な

いから。果して然らば当署には伺はずして人を拘引する權ありと思はるるが。それなら責付を許すと許さざるとも亦同様伺に及ばぬ儀と考へらるるが如何なものか。」

相手の巡査は一旦奥へ引ッ込んで往つた。暫くすると外の巡査が出て來て。たゞ「責付は許すこと叶はぬ」と云ふ。之に對して又種々文句をならべたが。「成らぬ」「出來ぬ」を繰り返すのみなので。今度は篠原への面會の儀を願ひ出た。それも成らぬとて巡査は又奥へ引揚げてしまう。據なく兩名は受附の男を捕へ。切めて面會だけでも許して貰ふやうに頼んだが。暫くあつて前の巡査がまた出て來て。「其許達が幾ら願つても責付も相成らず面會も許さず」と荒々しい言葉を投げるのであつた。

「責付は伺の上との儀なればそれは據なしとして。面會を許さぬと云ふは如何の理由でござるか。」

「達があるからだ。」

「何れの御達か。」

「縣令の達だ。」

「拘引人を他の者に面會させては成らぬとの達でござるか。」

「如何にも其通り。」

「その御達を拜見さしていたゞきたい。」

「其達書の原は當署にはない。」

「然らば其達は拘留人の取扱のみに關する達でござるか。」

「拘留人のみに限らず一般の囚人に就ての達、即監獄則であつて。縣令より届けられたけれど其本は大政府より出た大事な達である。」

この説明を聞いて田尾城水は得たりと突き込んだ。

「之れは飛んでもない事を承るものかな。監獄則と申すは既決囚を取扱ふ規則で。罪の有無の未だ判然せざる拘留人にも及ぼすものではない。まさか未決囚にも柿色の衣物を着せ足を鎖で縛らるゝ譯でもござるまい。監獄則が既決囚の面會を許して居ないからとて。罪の有無の定まらない篠原の面會をも阻まるゝとは心外である。」

「何と申しても許可は出來ぬ。」

「我政府は少しでも人身の自由を尊重せんとの考から保釋條例を設け。有罪と決した者にすら保釋を許して居るではないか。」

とて熱心に面會の許可を迫つたけれども。警察の態度頑として動くべくも見へず。是非なく其儘退出した。猶ほ篠原は翌八日に至り奈良より出張せる警部八條隆吉の取調を受け。命に依つて提出した手續書で事分明になつたからとて拘留を解かれた。つまり下らぬ事で拘留されたことが明になつた譯だ。

鼻先を挫かれた連中は此儘そめ／＼演説を中止するも癪の

候、何ともして一會開かではと、安く借り入れらるる廣い場處を探し求め、丁度恰好な一寺院を見付けた。住職と檀家總代と町内總代と三人の契印を取つて警察へ屆けた所、お寺は縣廳より病院に借上げたいとの事で目下評議中なのだ、今急に病人を運んで來ると云ふのではないが、明日にも縣廳の方から沙汰あるやも分らぬから、假令關係者一同に異議なしとするも、今他に貸渡すことは相成らぬとの申渡であつた。それから更に色々尋ね廻つたが何處へ往つても同じ樣な故障に出會する。遂に已むなく野外演說をやらうと云ふ事になり、同地榜裏町の空地を選び、十月十二日開會の事に手筈を定め、會主前田宗平より其旨の屆書を差出したのは九日の事であつた。所が之にも又故障が起つた。演說者姓名中の城水兼太郎は本縣管内では演說を許さぬことになつたから之を除かねば聽屆けぬと云ふのだ。この點は此節の指圖に從つて無事に濟ましたが、濟まぬのは城水本人の肚裏であつた。

城水は直に警察署に出頭して詰問した。丁度奈良警保課より臨時出張して來た警部南保太郎が應接した。

「何の理由で拙者は演說相成らぬと申さるゝのであるか。」

「とにかく篠原藤三郎の處分濟むまでは演說相成らぬと云ふことになつて居る。」

「一體演說の禁止と云ふものはその言論が政治に涉り治安を妨害する場合に始めて禁令あるものにて、未だ一言も吐かぬ内から禁止せらるべき筋のものではない。夫にも拘らず拙者に演說禁止の御命令あるは如何なる成規如何なる法律に根據するものなりや、明細の御說明を承りたい。」

「何か篠原に關係のある事なのだらう。」

「篠原藤三郎の處分の濟むまで日出度での演說を差留むると云ふのなら、連累の嫌疑と云ふ事もあらうから我慢も出來るが、當縣管内に於ては一切罷成らぬと達せられては、拙者到底之を會得することが出來ない。」

「此儀は縣令よりの内達に基いて申渡した事だから、其理由の如き人民に對して辯明するの限りではない。」

「然らば縣令閣下よりの内達とは如何のものであつたか、其達文を拜見いたしたい。」

「成らぬ。」

「拜見が出來ないなら一囘讀んで聞かして貰いたい。」

「それも成らぬ。」

「そんなら縣令の内達の趣意をも一度聞かして貰いたい、それを貴官の面前で書き取つて置きたいから。」

その最後の願だけは聞屆けられた。彼が旅宿に歸つたのは夜

の十二時であつた。

因に云ふ、翌十日早朝城水は奈良警保課へ出頭し、南警部との問答の顛末を報告し、警部八條隆吉よりの口達で全管内に渉つて差止めたのではない、日出座限りの事なるを確かめ、郡山に歸つて南警部を責めた。南は飽くまで前言を飜さぬので、今度は直接縣令に遇つて事情を聞いて見ようと、態々堺まで出掛けることにした。郡山より堺までは九里、縣令の邸宅は更に一里を隔てた市村に在る。はるぐ\往つて見ると生憎留守だ。堺町に妾宅が二軒あると云ふを耳にし、宿屋に落付き主人に頼んで在否を問合せて貰つたが、是亦不在。依て彼は翌日大書記官を訪ねて見た。重病人ありとて面會拒絶。今度は警保課長の邸を尋ね、やつと見付かつて胸撫で卸すと、門内に本日不在の大標札が立ててある。飛んだ骨折損と諦めて遂に郡山に歸ることにした。すると途中黑塗にて泥除けのある俗に謂ふ奏任車に遇ふ。乘者か官員かと近づく紳士をよく見ると、身分の低きものに非ず、丁寧に頭を下げて堺縣令税所公に在さずやと問へば然りと答ふ。何か用かと先方から車を停められたので、城水は我が姓名を名乘り、細かに兩三日來の顛末を告げて聊か鬱憤を洩した。演説の事はすべて警保課長に委してあれば自分には分らぬ、モ一度一所に縣廳へ來て見ては如何との事であつたが、堺縣管内に於て拙者の演説を禁止するといふのは閣下の内達に出づると云ふ南警部の言葉が眞實かどうかを聞けばいゝので、其點は如何と尋ねると、自分が内達に及んだ事は斷じてない又警保課よりも左樣な達は出さぬだらうとの事であつた。それで彼の目的も達したので、縣令と分れて急ぎ郡山に歸つた。明くれば十二日、之から警察署へ押し掛けようと云ふ城水へあべこべに出頭の通知が來た。往つて見ると今日より演説差免すといふのだ。折角許されても今日の演説會には間に合はない（三日以前に屆出でたものに限るのだから）、之も鬱憤の種だつたので、彼れは南警部を捉へ堺出張の顛末を詳述して散々油を取つてやつた。

十二日の野外集會の準備は滯りなく運んだ。恰度町内のさる神社の祭禮に當り近郷よりの人出も多かるべく豫想されたので、會場の混雜を防がんと「無錢」と記した通券を前以て撒布し、之を所持する者でなければ入場を許さぬことにした。天氣もよかつたので來衆意外に多く、午前十時頃には早や二千人を超へると云ふ盛況であつた。

然るに午前十時頃會主前田宗平に宛てて又もや御用有之卽刻出頭の呼出狀が來た。度々の事なので衆皆期せずして眉をひそめるのであつた。なかぐ\歸つて來ない。時刻も移るので開會

してもいゝから聞きにやると、も暫し待てと云ふ。何時まで經つても埒明かず、聽衆會員共々飯も食はずに午後二時まで待つた。其時警察署から更に田尾貫吾に對する呼び出しが來た。之も往つた切りいつまで經つても歸つて來ない。しびれを切らして今度は篠原藤三郎が警察に押し掛けてゆく。田尾が恰度まだ控所に居たので話しかけると、忽ち田尾は奥の方に呼び込まれる。此時田尾に應接したのは奈良警保課より出張せる池田警部であつた。池田の田尾に申聞けた要領は斯うだ、通券等發行の儀は相成らざる旨豫て會主に申渡し置きたるに、之に背いて通券を出したばかりでなく、實は之を賣買した者もあるとの事、由つて右取調中開場の停止を申付ける云々。田尾は通券を賣つては成らぬとの御達しは承知して居るも、無錢の通券までの事は御指圖がなかつたと頻りに辯解したが、更に聞届けらるべき氣色は見えぬ。離れてこの光景を見てゐた篠原は齒痒くや思ひけん、受付を通じて田尾との同席を願出た。許されたので早速池田警部の前に出て、堂々たる雄辯を振つて次の趣意の事を陳述した。

此度の演説會に就き會主側に於て通券を賣買した事實は全くない。賣買した者があると云ふなら、其關係者を呼出して吟味を遂げたらよからう。それが爲めに演説會其ものを停止せねばならぬと云ふ理由は何處にある。一[illegible]一片の届書の事で今日まで既に一週間以上も經過し、或は御留守中とない或は管内演説禁止の申渡を受けたものもあるに種々の意見を蔽り狼狽奔走の極漸く今日開會の手順となり、既に聽衆も朝から二千餘人も集まつて來て居るのだ。飯も喰はずに今か〳〵と待つて居るのを又もや閉會を申付けられたと何の面下げて云ひ得よう。聽衆にしても貴重の時間を割き遠方より多大の望みをかけて來て居るのもあるのに、再び徒勞に屬したとなつたら如何なる感情を起すだらう。官民の情誼といふものも少しは御察しを願ひたい。抑も警察官は人民の安寧を保護する者、徒らに人民を束縛する者ではござるまい。人民の害となるべき事の豫防は聞えるが、民智を啓き頑見を除く效能のある演説講談の如きは成るべく保護し努めて其の流行を助くべきものではないか。それを通券を賣つた者があるとて直に閉場を命ずるとは何事であるか。よしんば賣つたとしても、是れもと人民相互の約束に成立つもので聊かも官憲の干渉すべき筋のものではないと考へる。現に東京などでは畏くも　天皇陛下の御膝元なるに拘らず、嚶鳴社にしろ共存同衆にしろ、演説會の開催に方つては通券の前賣りを例として居る。東京では通券の前賣り差構ひなしとある。警視局でも亦之を咎めない。當縣だけ之がいけないと

は拙者の大に其理を疑ふ所である。加之新聞にしろ著述にしろ、何れも之を賣買することが一般に公許せられて居る。演說と申すものは口から出まかせの法螺を吹くのではない、それでは第一聽き手が承知しない、矢張り歐米和漢の典籍に眼を曝らし相當の素養ある者が多年巨額の學資を費して學び得たものを手短かに說くものである。されば痕跡を紙上に留むると否らざるとの別こそあれ、之をやる者の辛勞に至つては演說と著述新聞と更に異る所はないのである。官員がそれ〴〵等級に應じて月給を取り人足が米を搗き車を挽いて手間賃を得ると同じく、又著述家新聞記者が其の稿料を收むると同樣に、演說者が通券を賣つて其の勞に對する報酬を得たとて、其間毫末の不都合もない筈である。無錢は演說者に取つて寧ろ多大の犧牲である。其上無錢の通券を出したのは會場の雜踏を防ぎ少しでも警察のお手數の掛らぬやうとの用意に出でたものだ。理由には承服出來ぬも、固より始めから金錢を得る考が無かつたのだから、お達の主意は嚴重に之を守り、會主會員一同申合せて唯の一枚も賣買は致さなかつた。券面に無錢と明記したのでも其點は一見瞭然でござらう。その無代價で幾らでも得られる通券を賣買したものがあつたとすれば、そは必ずや馬鹿か否らずんば狂人に相違ない。その一二人の馬鹿狂人の爲めに、旣に集つた二千餘人の聽衆を空しく歸らせるとは、是豈に官吏人民を保護するの趣旨に適ふものであらうか。

始終を聞き終つた池田警部の冷然たる答は斯うである、其方が何程辯解しても、旣に通券を發行し且之を賣買せるの事實ある以上、當署保安課の豫ねての決定に基き直に停止申付けるの外はない、法は何としても枉げるわけには行かぬ。篠原は重ねて情理を盡した懇願に及んだけれども、法の枉ぐべからざるを楯として何うあつても許可は與へぬとある。已むなく引揚げて彼は會場の休息所に歸つて來た。

斯うなつては百計盡きた。一刻も早く此旨を聽衆に告げて退散して貰ふの外あるまいと云ふ事に相談一決し、篠原藤三郎穗積順藏の兩名が演壇に現はれて聽衆に謝し、一切の事情を細かに報告して退散を求めた。此頃の聽衆は今日に比しまだおとなしかつたと見え、斯う云ふ場合に有り勝ちの大混亂は起らなかつたが、流石に聽衆胸中の不平不滿は其儘では治まらなかつたものと見える。聽衆の間から種々の叫び聲が聞へるのであつた。

「我々は通券を買つた者ではない、賣買した者があると云ふなら其者を嚴しく調べたらよからう。會主會員の中に賣買した者があると云ふなら格別、全然無關係の何處の誰やらが賣つた買つたで此會合を停止するとは怪しからぬではないか。」

[illegible]き訳も有たない、切めて[illegible]ある人に接して智見を[illegible]今回の演說を幸ひ十年の讀書にも勝る利益を得んとわざ／＼仕事を休み樂んで參會したのだ、而も食事もせないで今まで待つたのである。此儘空しく歸れるものか。是非とも警察に迫つて演說を聞かせて貰ひたい。」

「我々は通券を買つた覺えはないんだ、差止められる譯はない。會主會員方の願を聞届けぬと云ふなら、我々共より直接に歎願に及んで見ようではないか。」

「通券を買つた者があるとて演說會を差止めるなら、掏摸に物を取られた者があると云つては、其都度芝居の興業も差止めねばなるまい。」

「これ程多勢の者を五時間も待たせて置いて、今更開場罷り成らぬとは沒分曉にも程がある。」

この形勢を見て篠原は善積と打合せ、起つて聽衆に向ひ、諸君が自ら一人として通券を買つたものなしと斷言せらるゝなら、夫れが何よりの證據になるから、今一度其旨を以て警察署に歎願して見ようと諮つた。一同賴む／＼と云ふので、篠原は直に警察に馳け付けた。聽衆も聞届けられようと期待しなかつたのか、會場に留らず篠原の跡を追うて警察に押し掛けるもの[illegible]太郎、村田[illegible]助、[illegible]の門を潜るに大部骨が折れたと云ふ　さて尚ほ[illegible]警部に會ひ、聽衆のなか／＼退散しないこと、多數警察署に押し寄せて直接許可の歎願に及ばんとして居ること、斯くては開會を許す外に鎭靜の途なきことを陳じ、取調べは取調べとして本日のところは枉げて御許しを願ひたいと賴んだが、矢張り法に悖るべからざるを楯として頑として聽かない。なほ押問答を續けるうち、門前の群集は段々其數を增したと見え、騷ぎが刻々に大きくなる、不穩の怒號も聞へて來る。そこで池田警部は暫く席を外づして群集の鎭撫に出掛けて行つた。こゝは往來の妨げとなるから兎に角演說會場へ行つて吳れと諭したのを、群集は演說の許可と解して大に喜んで引揚げた。やがて警部は會場へ往つて改めて退散すべき旨を告げたので、豫期に反した群衆は大に憤慨し、喧々擾々鼎の沸くが如くになつた。非常召集で用意してあつた巡査を場内へ入れ、一人々々虱潰しに摘み出して辛と場内を明けることが出來たのであつた。なれども押出された群集の大部分は、歸宅はせで又もや警察の門前に集ひ、[illegible]前に數倍する有様となつた。警官の彌次馬も加つたらうことも亦想像にあまりある。其の證據には酒氣を帶びた者も大部其中に交つ

て居つたから。

その中に段々日は暮れ掛る、人は增す彌次は喜ぶ。人の顏もはつきり判らぬ頃になると、型の通り石や瓦を投げ付ける者がある、警察署の窓がこわれる。それが嵩じて將に狂風暴雨の騷ぎにならうといふ形勢が見えた。池田警部は巡查數名を率ゐて鎭撫に出る、群集は益々昂奮する、巡查は擲られる。警部拔劍するを見るに及んで群集は幾分鳴りを鎭めた。

先きに警部に伴つて警察に來てゐた主催者側の數名は、事態穩かならずと觀、警官に代り自分達が鎭撫の任に當らうと申出でた。池田警部は取合はない。再三の懇願に對しやッと一等巡查某が其代理として現れた。此人を通じて重ねて願つたが矢張り許されない。察する所之は警部の傲岸一轍な所爲ばかりではない、迂つかり許して火に油を注ぐ樣な結果になるを怖れたからであらう。併し斯んな場合、少し頭のいゝ警官が主催者側に說諭を賴んで完全に鎭靜の效を奏した例は、此時代でも決して尠なくなかつたのである。

其處へ署外の一會員から連中へ宛てた一通の密書が屆いた。其要領は、郡山警察署のスパイを勤むる小松山なる者、何某と呼ぶ藪馬鹿の男を使ひ、柳町の櫟野卯兵衞方へ遣して合力を求めしめ、金二錢を貰つた證として通券一枚を置いて來さした、それから其の藪馬鹿の男を連れて大工町の筆耕業忠藏方へ赴き、小松山の指圖を以て通券を賣渡の覺書を認めさせた、之は丁度其場に居合せた吉岡淸一なる者の直話だから間違ひはないと云ふのであつた。面々もさてはと疑團はじめて氷釋せしの思ひをなし、强ひて池田警部に會見を申込んで逐一其始末を述べ嚴しく詰問に及んだ。警部も之には閉口し、怪しからぬ話だから取調べる、其際は諸君にも立會つて貰はうと云ふので話は一旦打ち切つた。

先是主催者は此儘泣寢入りになるを心外に思ひ、此頃の人が能くやつた樣に、懇親會を開いて聊か溜飮を下げんとした。演說會はいけない懇親會はいゝと云ふ理窟で、後者は官憲に取つては一種の安全瓣であり、民衆に取つては一種の拔け穴であつた。郡山の連中は特に交際會と云ふ文字を使つて居る。明日交際會を開きたいと願出て之には既に許可を得て居たのである。所が十時頃になつても門外の喧擾はやまない、池田警部は先きには其方等の差構ふべき所に非ずと頑張つたが、今や餘程弱り切つて居る色が見える。そこで今晩之より元の會場で交際會を開き、會員相互の意見の交換を傍聽さすと云ふ事にしたら如何

のものかと切り出して見た。其頃の民權論客はさだ口では猛烈、に官憲を罵倒するが、イザと云ふ時には進んで之と衝突すると云ふしほらしさを有つて居た。警察も喜んで許したので、群集は始めて退散し、會員數氏を取圍んで會場に向ふことになつた。そこでは隨分悲壯慷慨の演說もあつたが、流石に警察も放任し從つて傍聽人も頗るおとなしく（此時代でも會場の喧擾に亘るは警官の臨監乃至干涉ある場合に限り、警察の放任せる場合は辯士の演說が如何に過激でも常に必ず平穩無事に終るを例とした）、十二時を過ぎた頃何事もなくて退散した。

之で筆を留めると最後の交際會が大に光るのだが、少しく其の內容を述べると、流石に當時の青年論客の頭の程か思はれて微苦笑を禁じ得ない。――後から見たら今日の青年論客だつて同じ事だらうが。

交際會では之も當時の常例に倣ひ討論の問題が三つ提出された。之を警察の監査に附し、其の許されたる者に付き會員各自意見を闘はすのである。出張の一等巡査は次の三題中の第三のみを許可したのであつた。

第一　人の性は善か不善か。

第二　區長田村忠政は余輩等の止宿所丸毛金吉を呼出し、余輩等を止宿せしめて迷惑なきや、又余輩等は如何なるきやの事を尋問せられたいと、區長時に[illegible]吉又は後任の村長をも尋問するに及ぶものなるか、或は余輩等を嫌疑せしか、抑も亦嫌疑する所ありて然るか。

第三　欧西亞にて虛無黨の少女出沒不思議にて警官も之れが踪跡を捜るに苦む。一日此少女其伯母の家に寄宿す。警官は早くも之を探知し、嚴重に逮捕の用意を爲し、目前之を捕ふる手筈なりしが、其伯母の家の後庭より小さき輕氣球の飄々然として飛騰するありしが、警官の其家に入りし時は少女の姿も見えず。必ず輕氣球に乘て逃去りしならん。之を捕ふるの法如何、又其少女をして政府に自首せしむる方便なきか。

さて右騷擾の始末は早くも堺縣の聞く所となり、同縣警保課より課長代理吉田三等警部臨時奈良に出張を命ぜられ、十四日篠原藤三郎、城水兼太郎、田尾貫吾、菩積順藏、村山泰助、藤堂榮作、前田宗平の召換となつた。（一）十二日演說會停止申付けたる所多人數警察署前に集り瓦礫などを投けたのは其方等の教唆に出でたのではないか、（二）交際會とは如何なる趣旨の會同か、（三）其席上で討論した問題は何事なりしや等を訊問さ

れ、それ〴〵手紙書を取られた。其中の交際會の趣旨に關する答辯が一寸振つて居る。曰く「交際會は西洋に所謂「クラブ」に模擬したるものにて、有志相集り或は棋を闘ひ或は書畫を作り、或は思想を吐露し知識を交換し、或は國家の急務等に關する問題を設けて得失を討論することある等、是れ「クラブ」の性質にて、交際會は之を模したるものに外ならざる也」と。取調べの上以上の七名は更に堺に移されて同様の訊問を受け、十餘日拘留の上、田尾・村山・藤堂・城水の四名は放免となつたが、篠原・善積・前田の三名は猶ほ數日間の拘留を續けられ結局起訴されて裁判所へ廻された。不幸にしてその結果は聞き洩した。

趣の違つた話をもう二ッ三ッ書く積りであつたが、餘りに長くなるので今回は之でやめる。退屈でなかつたら近き機會に於て更に續稿を書かして貰はうかと考へて居る。最後に一言したいのは、私は此稿を草しながら、歴史は繰返へすといふ諺の洵に吾人を欺かざるをつく〴〵感じたと云ふ事である。(九月二日)

萌芽期の政黨と其資本

馬場恒吾

(一) 政黨評價の基準

金なくして起り、金があつて滅びる。これが日本の初期の政黨が吾々に殘した教訓である。如何にして私がこの教訓を引き出したかは後に述べる積りであるが、若し此教訓が眞實であるとするならば、金なきに苦しむ今の無産政黨も敢て悲觀するに當らず。金の有り餘る如く見える既成政黨こそ卻つて秋風落日の感を懷いて然るべきだ。尤もこれが眞理であることは常識でも判る。苦難の道を辿る人々が生殘り、歡樂の道を行く者が死滅する事は、歷史の事實が證明する。

日本に生れた政黨らしき政黨は明治十四年板垣退助(後に伯)の率ひた自由黨、翌年大隈重信(後に侯)の建てた改進黨を以て初めとする。それが嚴密な意味で政黨と云へるか否かは疑問である。それらの成立したときには、まだ議會が存在しなかつた。議會が存在しない時に於て、政治的に大衆を動員すると云ふ事は強訴、内亂、戰爭と云ふ方法を取る。議會が存在すれば、それが選擧と云ふ形式になる。強訴、内亂、戰爭を起すものを政黨と云ふならば、源氏、平家、其他封建時代のお家騷動の一味徒黨をも皆一列に之を政黨と云はなければならぬ。明治初年に於ける佐賀の亂、西南戰爭などを起した人々も此意味に於ては政黨である。併しそれは現代人の了解する政黨とは其内容に於ける距離が遠い。自由黨、改進黨はそれほど迄に封建的ではなかつた。そしてそれは明治廿三年には國會が開かれると云ふ物議が出た事を機會として作られた政黨であつた。だから、其政黨組織の意識の中には國會の存在を前提條件として居り、黨の信條も亦議會的である事を包めたやうであるが、實際の事實としては議會がまだ存在しない。從つて選擧もなく、議會を通しての政權の移動もない。だから如何に此等の政黨に共鳴してゐる大

衆がありとするも、それは其共鳴に政治的の效果を與へる何等の手段を有たない。即ち陰ながら共鳴すると云ふ範圍を出でる事が困難であつた。議會が存在せざる時の立憲的政黨といふものには、其存在そのものに已に矛盾が含まれてゐる。初期の自由黨、改進黨は兩黨共に、議會の開かれるを待たずして解散して了つたが、例令彼等が解散しなかつたにしても、議會が存在せざるときに、政黨が政黨らしき働きをなすは不可能であつたであらう。

扨もさう云へばとて、議會が存在してゐるときの政黨が悉く嚴密な意味に於ける政黨となつてゐるか、否か。これも亦疑問の餘地がある。少くとも、日本の政黨が今日に於ても理想の政黨には距離の遠い事は爭はれない事實である。政黨とは政治上に共同の目的を達するが爲めに、共同動作を取る所の、黨員の共同團體でなければならぬ。其黨員間に主從とか上下とかの關係の存在すべき理由がない。然るに、現在吾々の眼前にある二大既成政黨を見るに、選擧民は代議士の家來の如く、代議士は黨首の家來の如く、彼等の關係に於ける地位の上下、權力の相違が著るしく目立つ。それは誰れも否定出來ない現在の實情である。そして何故にかゝる上下主從に類する關係が生じて來たかと云へば、黨の幹部が選擧資金を作り、それを代議士候補者に與へ、候補者の或者はそれを選擧民に與へる。即ち金を出す者に權力が生じ、金を貰ふ者に從屬の意識が生ずると云ふ所の、極めて普遍的な平々凡々たる社會原則が政黨界に現はれてゐると云ふ迄である。これが普通ではあるが併しそれが爲めに政黨は黨員の共同團體でなければならぬと云ふ理想は大部分消滅せしめられてゐる。金の存在する時に權力の存在する所も免れ難い。だから、政黨が理想的になる爲めには、金は黨員、即ち苟くも何黨かに贊成しそれに投票せんとする黨員が自から醵出する所の金でなければならぬ。金は他人をして出さしめる。權力は人並みに所有せんとするのは、黨員として餘りに蟲の良き考へ方である。然らば日本の一般國民の大部分が黨費を捻出するや否やと云へば、それは彼等が其所迄痛切な政治的關心を有つてゐるか否かに依つて決せられる。現在の選擧民の大多數は投票と共に政黨資金を提出すると云ふ程に政治的關心が深くない。それ故に政黨の經營は現在の黨首若しくは代議士の一家經濟を少しく擴大された形式に依つて行はれる。黨員自身の政黨と云ふ事は有名無實になつてゐる。

此立場から見て、理想に近い經營は英國の勞働黨であらう。其黨代議士の選擧運動費は大低勞働黨を支持する所の勞働組合の會費、地方支部の會費から捻出される。それ故にこそ、勞働

黨內閣の首相マクドナルドは『我等のマクー』である。勞働者が金を出して、勞働者が投票して作つた內閣であるが故に、勞働者が眞實の意味に於て、これを我等のものだと思ふのも無理でない。此意味に於て、日本の政黨は現在でも黨員のものになつてゐない。反對に黨首のもの、代議士のものである實證は限りなく存在する。それ丈け理想の政黨への距離が遠い。日本の初期の政黨を研究するに當り、日本の政黨は現在でも未だかくの如き發展過程に彷徨してゐる事を記憶しておかねばならぬ。

(二) 十四年の政變

日本に國會を開くと云ふ勅諭は明治十四年の政變の結果として出されたものである。十四年の政變とは其時の內閣から參議大隈を追ひ出した政變である。其眞相は今日も尚充分にハッキりしてゐない。普通に行はれる說に依ると、これを大隈の國會開設に關する密奏事件と。黑田淸隆に關する北海道開拓使の拂下げ事件の結果だと云ふ事になつてゐる。其前から國會開設に關する民間の要求が熾烈になつて、政府にもそれをどうにかせねばならぬと云ふ議が起り、各大臣參議をして各々意見を上奏せしめた。其中で大隈のみが最後迄上奏しなかつた。十四年三月左大臣有栖川宮が大隈に催促せられると、大隈は各參議が御前に召される時、親しく言上すると云つた。併しそれは天皇に依つて許されなかつたが故に、大隈は意見書を出した。同時に有栖川宮に向つて暫く祕密にされるやうにと願つた。此大隈の意見書は日本に政黨內閣制を採用すべき事を述べ、今年(十四年)中に憲法を制定し、十五年に議員の選擧を行ひ、十六年に國會を開設すると云ふ趣旨のものであつた。有栖川宮はそれを太政大臣三條實美右大臣岩倉具視に示された。岩倉は之を伊藤博文に示した。伊藤は七月二日付けの手紙でこれは『實に意外の急進論にて、とても伶鈍の博文驥尾に隨從候事は出來申さず』それ故に參議を辭職すると岩倉に申出てゐる。

北海道開拓使長官は薩州出身の參議黑田淸隆であつた。開拓使は明治二年に設置されて、それ以來北海道開拓の爲めに千五百萬圓に近い金を投資してゐた。今それを同じく薩州出身の參議五代友厚、元山口縣令であつて、井上馨の子分と云はれた中野梧一等が組織する會社に拂下げると云ふのである。其代價が三十萬圓、而かも三十ヶ年賦と云ふのであるから、恰かも只で與れてやるやうなものだ。官有物の目錄としては、永代橋側物產取扱所、函館船場官有地、函館敦賀東京大阪の藏所、根室札幌の牧畜場、汽船、帆船、養蠶所、麥酒製造所、葡萄園、葡萄酒製造所、罐詰製造所、製毛所、製網所、膃肭獸猟場等が列擧され

てゐて、此拂下願書が七月二十一日に出で、黒田長官は此願書を聞屆けると云ふ指令を八月二日付で出してゐる。これが世間に漏れると天下の輿論が猛烈に政府を攻撃した。其攻撃軍の中には御用記者の錚々たる福地源一郎すら之に加つた。慶應義塾の福澤門下、政府部内に於て大隈派と見られるものゝ其中にあつた。大隈は　陛下の東北御巡行に扈従して七月卅日から十月十一日迄、東京を留守にしてゐた。開拓使問題は其留守中に起つた事である。併し政府は之れも大隈の煽動と見た。それで、陛下が歸京せられたる十月十一日の夜御前會議を開いて、國會を明治廿三年に開くと云ふ勅諭を發する事、北海道拂下を取消すこと、大隈を罷めさす事々決定したのである。其夜十二時過ぎに、伊藤博文と西郷從道が大隈を訪ねて辭職を要求した。大隈は其當時を語つて『伊藤と西郷とが我輩の所へ遣つて來て唯單純の言葉で「容易ならざる事だから」とだけでトウ〳〵辭表を出してくれと云ふ。此方は多く聞かずとも其間の消息は大概分つて居る。明日我輩が內閣に出る。辭表は陛下に拜謁してから出すと云つたら、これには兩人一寸當惑したらしいが、直ぐに之を止める譯にも行かぬ。然しそれはいかぬと止めはしなかつたが、我輩が宮中に行つた時は、モウ門衛が嚴重に遮つて入れさせぬ。有栖川宮、北白川宮とは御還幸中同行であつたが、有栖川宮樣に行けば矢張こゝにも門衛を置いて固く門を鎖し、供奉の入るを拒絕すると云ふ始末、昨日まで供奉申し上げた宮樣にも、今日は固めの門衛から拒絕されて、御會ひすることすら出來ないと云ふ、急轉して體のいゝ罪人扱ひとなつて了つたんである。御免の辭令は司法卿の山田が友人として持つて來て渡して吳れた』と。かうして大隈は國會開設の急進的意見の爲めに、開拓使問題で黒田を苦るしめた爲めに、內閣から放逐されたかの如く解釋されてゐる。併し實際は今少し込み入つた事情であつた。

　此政變の根底の事情はかうである。伊藤井上大隈は皆國會開設論者であつた。何日國會を開くかの時期に關しては意見が一致してゐなかつたが、大體に於て進步主義者たることに相違はなかつた。此三人の仲間に福澤諭吉が加つて、日本に立憲政治を布くと云ふ計畫を建てゝゐた。所で此計畫は極めて祕密に運ばれてゐたのであるが、其中に福澤門下の一人が、此計畫のある事を薩州政治家に漏らした。それは薩閥に取つては驚くべき陰謀であるかの如く見へた。何となれば大隈と伊藤井上が連絮したる力に依つて、日本に憲政を布くと云ふ事は、肥前と長州が同盟して、薩摩を排斥すると云ふ事になる。薩摩は將來の日本の政權から除外される危險に瀕してゐると思つた。

これで徒等は必死の運動をして、伊藤井上を抱き込んで大隈を排斥する作戰に出た。即ち薩長連合を固めて、肥前排斥の祕策であつた。それが成功して十四年の政變になつたのである。それ故にこそ福澤は彼れを裏切つた門下生に對しては彼れが死ぬる迄それを許さなかつた。恨み骨髓に徹したと云ふ事が彼れの言行に現はれた。其代りに其門下生は藩閥政府に取り立てられて、後に男爵になり、重要な官職に付いた。と丈けで其名前は今も知る人が少ない。

政變のあつた後には福澤は政府から睨まれて國賊の如く扱はれたが、政變前には彼れが伊藤井上と同腹であつた事は、此頃出版された『朝吹英二君傳』に出てゐる。其中に『同年（十三年）の暮井上から大隈伊藤の三人で親しくお話したい事があると面會を求めて來たので、大隈邸に（福澤）が出掛ると、三人は口を揃へて先生に新聞紙を發行し民論を指導して貰い度いとの希望である。先生は政府の主義が定らないのに其機關紙を引受くるなどは眞平御免だと直に斷らうと思つたが、一應考へた上でと云つて別れ、翌年一月早々井上を訪うて謝絕の意を述べた其時、井上は容を改めて「然らば打明け申さん、我々三人の間には國會開設の相談を決し、遠からず實行する覺悟で、目下薩摩の連中を説得中だが、是れは必ず同意させる積りである。即ち國會開設は政府の決定で我々當局者として新聞紙發行を先生に御賴みするのである」とくわしく内情を話した　先生はこれを聞いて自分の意見に合致したのを喜び「それ迄の御決心とは知らなかつた。斯くては明治政府の幸福、日本も萬々歲である。諭吉も國の爲め一臂を振ひ申さん」と即座に快諾夫より内々新聞發行の用意に取掛られた』とある。其内に政變が起つて政府側では大隈が政府部内で陰謀を企て福澤が謀主、三菱が金主であると云ひ之が爲めに慶應義塾出身の官吏は大小となく總て免職してしまつたとある。現代語で云へば政府は盛んに逆宣傳をしたのである。

例へば大隈の國會開設の意見書は福澤が起草したものと宣傳された。然るに大隈の參謀であつた矢野文雄氏は『東京朝日』の『其頃を語る』の中に自分が起草したのだと語つてゐる。即ち『隈侯は憲政の大綱と其運用に關する具體的の仕組を一の意見書としてまづこれを有栖川宮、岩倉の兩大臣に示し内閣の議をまとめる階段たらしめるが良いと考へられ、專ら私等に執筆させて出來上つた一書を、まづ有栖川宮に差出した』とある。

北海道開拓使事件も大隈が使嗾したとなつてゐる。然るに『大日本憲政史』に引用されてゐる矢野文雄氏の談話の中に十四年に北海道開拓使拂下事件が起つて、民間に内閣攻擊の聲が

盛んになつた時に、大隈は、陛下の東北御巡幸に供奉して、東京に居らぬ。予も其當時郷里に歸つて居つたが、恰度、慶應義塾の末派のものが先づ政府攻撃の矢を放つたので、予は惡いことを始めたものだと心配して居る中に、攻撃の鋒は漸く鋭くなつた。此時大隈に不快を感じて居つた仲間が、離間中傷の目的を以て、大隈は慶應一派と其氣脈を通じて、憲政を立てゝ現政府を轉覆する、即ち薩長排斥の陰謀を企だてゝ居ると言觸らしたのである。……我等は始めより薩長政府轉覆の考などがあるべき筈はない。政府は即ち我々の政府であつて、既に内閣の傾向も憲政贊成者が多數と認めて居る故何を苦しんで今更民間黨と通じて、自己の基礎を轉覆しやうなどゝ企てませう。予は民間黨と結ぶよりは、却つて現内閣にあつて、進んで行く方が憲政の實現に、便宜でもあり、また容易でもあらうと考へて居つた』と云つて居る。

國會開設の意見書が大隈失脚の原因と見るのは眞相を得たものでない。それは後に大隈排斥の口實に用ひられたのみと見られる。北海道開拓使の問題も亦然りで、此官有物拂下に反對したのは大隈派、福澤派、民間政客に限られてゐない。長州閥の三浦觀樹の如きは三條公に會つて『薩長共謀して斯くまで天下の事を私するを閣下は如何に御覧なされますか……朝廷ぐるみ薩長籠絡の中にお這入りなさるゝ積りであるか、決して左にあずとの御一言を承はらぬ上は、將來御奉公の道も相立ちませぬ』と云つた。三條が早速此事をお上へ奏上せられた、と見へて、其事がチャンと御膝下の御日誌に記してあると『觀樹將軍回顧錄』に出てゐる三浦にはこれが祟つて西部監軍部長から士官學校長に左遷せられたのである。

國會開設、開拓使問題共に十四年の政變の核心ではなく、其中心の處は伊藤井上の率ゆる長州閥が大隈を捨てゝ、薩摩と連合した故に、大隈と其一黨は政權より離れたのである。五十年後の今日は薩州人の床次が土佐人の濱口を捨てゝ、長州人の田中に付く。半世紀間同巧異曲の合從連衡を繰り返してゐる如く見へる。日本の政黨らしき政黨は十四年の政變後に、初めて政黨として名乘りを上げたのではあるが、其前に藩閥として存在したる薩長土肥も個々別々の一種の政黨であり其後に政黨として生れたる自由黨、改進黨は又一種の藩閥であつた。だから日本の政黨はそれを藩閥の搖籃から出たものとして見る外はなく、そして其藩閥的の氣風は今日も尚完全には拔け切らないでゐる。

十四年の政變に於て薩長の連合は大隈黨を政府から放逐した。それと同時に薩長とても必ずしも國會開設に反對するものでないと云ふ事を示さんが爲めに、國會開設の勅諭を發布した。

だから大隈等は二十三年に國會の開かれるやうに運動したのは自分等の奮鬪の結果だと誇る。

（三）初代の自由黨

國會開設の勅諭は十四年十月十二日に發布された。愈々國會が開かれる。國會に臨む準備として政黨を組織せねばならぬと、此氣運に乘じて、自由黨は十月二十九日に結成された。此結黨の仕事に於ては後藤象二郎、河野廣中、板垣退助が重もなる役者であつた。板垣は東北遊說中であつたが黨首に推された。自由黨は初めよりルーソー流の天賦人權を主張し、自由の獲得を高唱してゐた。當時の左翼である。大隈は翌年改進黨を組織した。合法的の進步主義を唱へる處は當時の右翼であつた。尤も同時に官製の帝政黨が組織されたが故に、改進黨は極右翼ではなく、寧ろ今日の無產政黨中の右翼、と云ふ如き立場を取つてゐた。

　自由黨が政黨として組織される迄には、政社としての種々の變遷を經て來た。それは何日も板垣を中心として行はれた。板垣は征韓論に賛成して、西鄕等と政府を退き、土佐に歸つては立志社を興した。西鄕の私學校に似た學校を行つてゐた。明治七年に板垣が後藤、江藤新平、副島種臣等と組織した愛國公黨は民選議院設立の運動をしたが、それが後に國會期成同盟となり、終に自由黨となつたのである。

　自由黨は一時天下を風靡する勢を示した。自由黨の結成を見て其別働隊と云ふべき地方政黨が到る所に組織された。大阪の立憲政黨、九州の九州改進黨が其重たるものであつた。翌年三月板垣は岐阜の難に遭つた。彼れを國體破壞者だと思つた刺客に依つて負傷せしめられたのである。其時後藤象二郎は板垣が死んだと思つて、「是から岐阜に行つて、板垣の屍を櫃上に橫へ、板垣の爲めに弔演說をする」と激昂した。シーザーの死骸の上で弔演說をしたアントニーを氣取つたのであらう。後藤と云ふ男は機略縱橫機を見るに敏、生涯を通じて花々しき政治家であつたが、其野心の强さ、心の變り易き點など聊かアントニーに似て居る。

　自由黨の結成される前にも、後藤は福澤に說かれて、英國流の政黨を組織せんとした。後藤が首領となつて、貴族、資產家、學者などの階級を入れる計畫であつた。此計畫は河野廣中等が反對した爲めに中止された。かうした心持ちの人は自由黨に採つては危險な道伴れと云はなければならぬ。

　自由黨結成の際にも、板垣が不在なるにも關らず、後藤が結黨準備大會の議長となつて、急速に黨を結成せんとした。後に

河野廣中は「民權運動の殊勳者たる板垣や、及ばずながら、明治十三年十月愛國社總會に於て政黨組織の事を決し、之が一切の準備を依囑されてより以來、東奔西走其活動を續け、あらゆる困苦と戰ひ、眞個に有力なる政黨を組織せんと努力して來た余等に何等諮る所もなく、又た其臨席を待たずに、急遽大會を開いて自由黨組織を決定し、而かも板垣を排して他の人物を總理に推さんとする如き狀態を目擊し、予は其輕佻浮薄なる態度に呆然たらざるを得なかつた」と憤慨してゐる。

河野等の主張に依つて、自由黨結成の大會は板垣を總理に推した。板垣は此電報を仙臺で受取つたが直ちに承諾せず、歸京の後後藤に總理になれと薦めた。後藤がそれを辭して、板垣は初めて總理になる事を承諾した。

併し初期の自由黨の破滅は後藤の手を通して來た。板垣遭難の直後に、板垣は後藤と共に洋行すると云ひ出した。自由黨が結成して間もない今日、洋行は絕對に不可であると云ふのが黨內の輿論であつた。殊に洋行費が何處から出たかと云ふ事が疑問の中心になつた。約五十年後の今日でも其洋行費の出所が問題になつてゐる。

自由黨結成の時、其中心になつて働いた大石正巳、馬場辰猪等は、此洋行に反對して自由黨を脫黨したのである。其大石氏は最近に私に語つた。「此洋行費は伊藤博文が宮內省から引き出して、それを後藤象二郞に渡し、後藤が板垣を誘つたのである。それはよく判つてゐた事である。此事に關して馬場と自分が高輪の後藤邸で、後藤に談判した事がある。後藤は初め金は阿波の蜂須賀家から出たと云つた。馬場は蜂須賀茂韶と懇意だから、直ぐに聞き合はせると、そんな事はないと云ふ。すると後藤は實は大和の土倉庄三郞から出たと云ふ。それも聞き合はすと噓であつた。だから我々は云つた。そんな事を云つてもしやうがない。皆んな判つてゐるのだから洋行は止めにしたらよからうと、それでも聞かないから、我々は自由黨を出たのだ」と。板垣は後藤の金には手を觸れず、洋行中も不自由を忍んだと云はれるが、兎も角も此洋行問題が祟つて、自由黨の不評が募つた。それが二年後に黨を解散する重もなる原因の一つになつた。

今一つの原因は馬場、大石、末廣重恭、田口卯吉などが、自由黨の機關であつた自由新聞から退いて、古澤滋、星亨などが其後を引き受けた。板垣の洋行中、自由新聞は三菱と大隈との關係を書き立てゝ、海坊主退治、僞黨(改進黨)撲滅を絕叫した。所でそれが裏面に於て、薩長政府の指金であつた。當時の政府は三菱を潰さんが爲めに、農商務大輔であつた品川彌二郞などが自から先頭に立つて共同運輸會社を立てゝ、それをして三菱の

抗[illegible]に對抗せしめた。これは後に共同運輸の基を作つて、三菱に併合されて、今の郵船會社になつたのである。自由新聞は三菱の方を攻擊して、共同運輸には觸れない。古澤滋は後に井上馨部下として相當に用ひられるに到つた。それは後の事であるが、自由黨の一部が藩閥政府と氣脈を通じてゐた事が、自然に黨の幹部をして政治改革に向つて突進する氣魄を失はしめる。それが益々自由黨を不評ならしめる。自由黨が板垣の歸朝後の十七年十月二十九日に、大阪で地方團體の代表者百餘名を集めて解黨式を擧げたときは、黨は自然崩壞の有樣であつた。板垣は解黨式の演說に『自分は鄕里に歸つて午眠をする。然し死生常なく旦夕を計るべからず、不幸にして自分が死んでも、諸君、乞ふ我墳墓をして秋草茫々の中に湮滅せしめよ。寸功なくして石碑のみが立派なのは都會の汚風』だと云ふのであつた。

此最後の幕は悲壯であるが、此運命に到つた原因は、後藤が伊藤から金を引き出し、自由新聞が政府の手先きになつた事である。政黨は金なくして廻り、金が出來て滅びる。

自由黨は金なしの政黨であつた。大石正己は其當時を私に談つた事がある。彼れは十四歲の時伏見鳥羽の戰に出た。十四では戰に出られないが、彼れの身體が大きかつた故に、十六歲だと僞つて太鼓叩きとして從軍した。戰爭が始まると太鼓を捨てゝ、鐵砲を打つた。板垣に從つて、[illegible]が土佐に立志社を建てたとき大石も亦其所で働いたのである。

大石が曰く『立志社は公有地の山林を拂下げて、其收入でどうかこうか會計を立てた。板垣は征韓論で參議を罷めて土佐に歸つたが、其時は一文なしであつた。それ以來政治運動を續けて來たのだが、始終金のない事を原則としてゐた。例へば地方の遊說に行くとすると、其地方の有志が其費用を請持つと云ふ規則にした。大低どの地方にもそれ位の費用を出し得る篤志家が居つた。其篤志家の家に泊められるから、遊說に行く者は別に金を費ふ必要がなかつた。其地方に行く旅費は仲間が出し合せて行く。仲間になければ、知つた人から借りて行く。それも出來なければ、辨當を持つて草鞋掛けで行つた。』

かうして、金を持たずに全國を行脚してゐる間に日本の憲法政治の氣運が作られた。土佐派の政治的信條とする所のルーソーの天賦人權、自由の權利などは、理論としては其根據に疑はしき點が多い。しかし理論などは實はどうでもよかつたのである。彼等は自由を求めた。『我に自由を與へよ、然らざれば死を』と、十代の青年が口癖のやうに叫んだ。そして彼等を彈壓したる薩長政府を自由の仇敵として憎んだ。金はなけれど、反抗の意氣には富んでゐた。政黨は反抗の意氣に生きる。だから自由

黨の生長する期間は確かに政黨としての意義があつた。

自由黨幹部が政府に依つて懐柔せられた時、自由黨の形骸は存して其意氣は滅んだ。其形骸も三年の命を保つたのみで解體された。だが自由黨の意氣は他の方面で勃發した。

明治十五年以降二三年の間、地方の自由黨は絶望的の暴動を各地に起した。例へば土木好きの福島縣令三島通庸が若松から新潟と米澤に行く道路を三十七萬圓で作らんとしたとき、自由黨の河野廣中が議長であつた福島縣會が之を否決した。三島は原案執行權を笠に着て工事を進める。耶麻郡民一萬人が喜多方警察署を襲つて之を破壞する。三島は自由黨撲滅の好機會だと思つて河野等自由黨員を捕縛した。河野は喜多方署襲撃には無關係であつたが、「我黨は自由の公敵たる擅制政府を顛覆し、公議政體を建立することを以て任となす」との誓約を結んでゐた爲めに、内亂陰謀罪に問はれ、河野は七年、同志五名は六年の輕禁獄に處せられた。

新潟縣頸城郡の自由黨員赤井景韶と云ふ青年は高田天誅組を組織した。當時の政府大官を除くにあらざれば二十三年の國會開設も疑はしいと思つたからである。これも内亂陰謀罪に問はれ、九年の刑で石川島の監獄に入れられた。破獄して逃去の途中、千住で自分の乘つた俥の車夫を斬つた。甲斐、駿河を逃け廻つて大井川を渡らんとするとき、警察に捕へられ、後に死刑になつた。

明治十六年十月三島通庸が栃木縣令になり、其所でも土木狂を發揮して縣民の反抗を買つた。河野廣中の甥河野廣體は土地の有志鯉沼九八郎等と爆彈製造法を研究して居り、栃木縣廳落成式に大臣參議の來る機會を待つて、之を暗殺せんとした。其軍用金を得る爲めに河野及數名の同志は東京神田の質屋に強盗に入つた。素人の強盗だから僅に十圓を得て、同志の一人は却つて捕縛されるやうな目に遭つた。後に同志十六名加波山に立籠つて莨弱敗の檄文を散布した。其中に「玆に革命の軍を茨城縣眞壁郡加波山上に擧げ、以て自由の公敵たる專制政府を顛覆し、而して完全なる自由立憲の政體を造出せんと欲す。」とある。彼等は附近の富豪を威嚇して軍資金と武器を徴發した。加波山に居る事三日、彼等は宇都宮襲撃の目的を以て山を下りたが、途中で爆彈を運ぶ人夫がゐなくなつた。其爲めに一時解散したが、後に諸所で悉く捕へられ、死刑、重刑に處せられた。

靜岡名古屋でも自由黨が暴動を起した。此時は、彼等は政府を倒す爲めには軍資金が入用だ。それには切取り強盗は武士の習ひであると云つて、實際に強盗の眞似事をやつた。皆途に失敗したが一時は天下を騒がした。

革命を起さざる政黨、若しくは遂行なき事の政黨は、かうして發動的になる必要性がある。併し自由黨は此新局面の中に死んだ意氣は、かうした自由黨の地方支部の中に生きてゐた事を認めてやらなければならぬ。板垣は岐阜の遭難の際「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだ。板垣洋行して自由新聞が政府と氣脈を通じても、自由黨の地方有志は褒むべき事ではないが、絶望的な暴動を起して、政府反抗の旗を守つてゐた。それが皮肉にも、板垣死すとも自由は死せずと云ふ事ではないかと思ひ合はされる。政治運動に金は必要だ。併し人の方が一層必要だ金よりは人だと云ふ確信が痛いほど胸に燒け付く。

（四）初期の改進黨

自由黨を壯士の集團とすれば、改進黨は紳士の集團であつた。黨首大隈重信は明治初年以來十四年の政變迄は政府の當局者で最後には首席參議であつた。改進黨の中樞人物は十四年の政變に大隈と共に政府から追出された所の農商務卿河野敏鎌、驛遞總監前島密、判事北畠治房、農商務大書記官牟田口元學、太政官大書記官矢野文雄、統計院權少書記官犬養毅、同尾崎行雄等檢査官小野梓、文部權大書記官島田三郎、大藏權少書記官森下岩楠等であつた。官僚民衆の思想が強烈であつた時代であるから、改進黨は其の上流を以て自から任ずる者も少なくはなかつた。實際に於ても輿論以上で、彼等は社會の指導者であつた。それだけ彼等には高踏勇退の氣分があつて、民衆の中に飛び込んで民衆と共に動くと云ふことに缺けてゐた。彼等は自由黨の輕躁矯激を笑つた。併し一面から云へば、彼等は輕躁矯激になるだけの元氣がなかつたのである。十五年四月十六日の結黨式で河野敏鎌は演說して、「自由黨は正義を標榜し、剛正にして不羈を唱ふるが故に、自から貧民の味方たらざるを得ない、而して氣節を負うて實行を主とする。從つて富者學者の之を快とせざるものあるべく、改進黨は此等殘存の分子を糾合し、他日合同の素地を作るものである。」こんな演說を見ると、改進黨の何處に鬪志があつたかを疑はざるを得ない。鬪志のない政黨は辛くない鹽と同じだ。

其指導方針も穩健着實であつた。大隈が小野梓をして書かしめた「改進黨に告ぐ」の中に「政治の改良前進は我黨一致の冀望で、私が平生の所志である。……けれども道理の極所を查用するに及んで、直行之に至らんことを冀ふのはチヤンチヤク・ルウソウの餘流で、その極は社會の秩序を紊亂し、政治の改進を妨碍するに終るであらう。……故にルウソウの餘流を汲み、「ジャコビン」者流の二の舞を演じ、躁急激昂以て過激の變革をしやうと冀ふものがあるなら、私は之を斥けて、その進路を與

にする事を欲しない』と云つて居る。

改進黨は意識的にブルジョアに基礎を置いてゐるかの如く裝つた。そして實際に於てもブルジョアの集團であるかの如く信じられた。大石正已氏は私に語つて、改進黨は自由黨とは異つて、金には困らなかつたらしい。黨に前島密とか牟田口元學と云ふやうな金持ちが居て、運動費を出したのであらうと云つた。

併し實際金があつたか、それは疑問である。佐々木高行の手記してゐる所に、『改進黨は「フワイナンス」にて餘程困難の色あり、併し今の處では澤山ある樣言觸し居る也』とある。金があると云ふ事を以て黨に人材を集める手段に供してゐる。だが此戰術は時には今日の既成政黨に依つてすら用ひられる。

大隈の政黨運動の兵站部を勤めたのは朝吹英二であつた。朝吹は初め三菱に居り、後三井に入つて實業界の大立物になつた男である。明治十五年頃は貿易商會を經營して財政的に四苦八苦の狀態にゐた。『朝吹英二君傳』に大隈との關係を叙して、

『大隈侯が明治十五年改進黨を組織して政治運動をした頃、表面の參謀は初めは矢野文雄氏であり、後に犬養氏も加つたが、裏面に股肱の働きをしたものは實に英二君であつた。政黨の財源を得る爲め兩潤社を起して筑前の大辻炭坑を經營し、更に福岡に金山、北海道千島に硫黃礦を手に入れたが、金山と硫黃は不成績で間もなく賣却して了つた。後に借區してゐた田川炭坑を平岡浩太郎と安川敬一郎氏に五萬圓で賣り、内三萬圓を延べ拂の約束であつたが、牟田口元學等の社員連が催促して早く入金させよと喧ましく云ふので、英二君は中に立つて「安川は君等の見るような屑人間ではない、まあ今少し待つてやるさ」と執成してゐた。其中三萬圓を受取り、大隈侯と相談の上、政黨費へ振り向けて費消したところ、總會の席上前島密、牟田口等の追窮烈しく、英二君も說明に困つた揚句、大隈侯から暗に使途を匂はせてやつと無事に收まつた事もある』とある。

これ丈けを見ても、改進黨は自由黨に比し富裕であつたと云へる。それ丈けに政黨として活動が溫和であつた。

自由黨が解黨したのは十七年十月廿九日であつた。同年十二月十七日には改進黨總理大隈、副總理河野敏鎌、前島密、牟田口元學等が脫黨した。山路愛山は『現代金權史』の中に之を解釋して

『其表面の理由は沼間守一、島田三郎の兩氏を始め黨員三十四名連署して地租輕減の建議を元老院に出さんとしたるに大隈伯はかゝる消極論を以て國家の長計に非ずとして却つて積極論を唱へて之に反對したるに在りと云ふ。さりながら是は世間體をつくらうまでの言譯にして其實は世間一般不景氣となり。黨派の運動甚だ困難なり、かゝる困難の内に在つて空しく孤城に

喫い若等するよりは寧ろ政府と大同一致をなし、當選目的の敵軍の隙に乘ずるに如かずと云ふ說あり、河野廣中氏等專ら此說を唱へたる結果、此に及びしなりと云へり。然らば則ち地租增減の建議をなして人氣を取らんとするもの、民間の不景氣に基きたるものなるは云ふ迄もなく、解黨論を唱へて分離の機を促したるも亦不景氣に苦しみたるものなり。此點より云へば米相場の高下は實に日本の一大政黨を翻弄して其運命を支配したるものなりと云ふべし。』

これは運動費が乏しきが爲めに、政黨の分裂を來たしたと云ふ說である。併しそれは金の力を過大視する態度だ。改進黨の分裂の場合に脫黨したるは比較的に金のある大隈、河野、前島、牟田口と云ふ如き紳士閥である。平生から金なしを標榜してゐた尾崎行雄、島田三郎、沼間守一、藤田茂吉、箕浦勝人、角田眞平、岡山兼吉、肥塚龍等は頑强に踏み止まつて改進黨の孤城を守り、翌年二月十一日の紀元節には淺草井生村樓に改進黨の演說會を開いてゐる。聽衆千二百と云ふから意氣尙盛んであつた。政黨は金があつて起るのでなく、反抗の意志の盛んなるに依つて起る。其意志は金のない所に盛んになる。

(五) 資本家と政黨の交涉

明治初期の政黨を見れば、政黨に於ける金の力を過大視する[illegible]でもあり、其自由主義[illegible]其門閥が鳴らされた。政黨は金でなくして人に[illegible]個人が有する鬪志の熾烈さと反抗の意志の強固さに依る。それが分らずして金の萬能を信ずる政黨は今日も尙存在してゐる。既成政黨が犯罪の危險を冒しても、尙ほ黨費を集める爲に汲々としてゐるのは、只一つ此迷信に囚はれてゐるからだ。勿論彼等が金の力で議員と選擧民を動かし、一時の多數を作り上げる事はある。併しさうした政黨はそれが爲めに他の方面で比較にならぬ程大なる損害を負ふ。三四の議員を買收した爲めに、輿論の總攻擊を招き、一人の資本家を助けた爲めに、國民全部を敵とする。金の力で國內の民衆を征服せんとするのは、餘りに人間の反撥力を見くびつた行き方である。

若し金が政黨運動に萬能なるものならば、武藤山治氏の實業同志會などは今少しく大きくなつたであらうと思はれる。武藤氏の政治上の意見は自由主義ではあるが傾聽すべきものがある。其下に豐富なる運動資金を有するが故に、彼れの政黨は金の力を信ずる者から云へば盛大になるべき筈だ。然るに事實はそれが金があると事ふ事に禍されてゐる。來る者の中には其金を目當にして來るものもあり、來らざる者は其金に對して呪咀の聲を放つ。實際に於て此團體は金に祟られたと云つてよい。

だから實業同志會は國民同志會とか名を改めた。併し此黨派は金が全然無くなる迄は、政黨らしき政黨にはなり得ない。それは局外から見れば明白過ぎるほど明白だ。

　それは如何なる時代の、如何なる立場の政黨に試めして見ても同じ結果を生む。無産政黨と云へども其例外にはならない。前に纒つた金が政黨に來る。其時は直ちに其分配に預からんとする者、それを分配せざらんとするもの、間に對立抗爭が始まる。所謂分裂主義や指導權獲得の爭はさうした事情から起る例を見る。政黨の資金は初期の自由黨、若しくは英國の勞働黨の如く、黨員の持ち寄りの外に正當に作るべき道はない。外部より注ぎ込む資本は忽ち其政黨に分解作用を起し、それを無力にし、それを死滅せしめる。だから資本は一時は政黨を支配し得ても永久には支配し得ない。それが永久に政黨を支配するかの如く云ふのは、金の力を過大視し民衆の反撥力を過少視するものだ。

　だから、吾々は政黨に對する資本家の勢力を恐れる怯懦に陷つてはならない。資本家が政黨に延ばす手は其政黨に採つては一種の呪いの手だ。其呪いの手の影が映るとき、其政黨には分烈抗爭が初まり、民衆は其政黨を呪咀する。それは初期の自由黨の解散、改進黨の分烈が證明する。資本家が政黨を通して政治を支配するかの如く云ふのは一つの幻想に過ぎない。それは專制政治の時代の政府を通じて、或は極端に幹部專制の利く黨を通じてならば、一時は資本家が政治を支配するであらう。だがそれもホンの一時である。軈てはさうした政府若くは政黨は天下の怨府になつて沒落する。殊に黨内に民主々義の確立した政黨に於ては、政黨が資本家の指揮命令に從つて動くと云ふ事は到底行はれない、健全に組織されたる政黨は資本家の注入する毒素に對して自働的にそれを排斥する所の抗毒素を有してゐる。それは其黨の分裂抗爭となつて現はれる。それでも、若し又政黨が資本家に支配さるゝに至るならば、其政黨は民衆の不信用を買つて、速かに沒落の運命を辿る。それがさうならないと云ふのは民衆の健全性を否定する事になる。吾々は民衆は根底に於て健全だと信ずる。民衆は欺され易く見へて實は欺されず、柔順なる如く見えて實は頑強、弱きが如くして實は無限の底力を有つてゐる。それは恰も大洋の水の如く常に動搖して、何の抵抗力もなきかの如く見へて、そして遂に何物にも征服されない。

　民衆は歩武堂々と進んで行つて、そして常に最後の勝利者となる。だから資本家に近づく事に勉める既成政黨を見るとき、吾々はそれが沒落の運命を辿りつゝある事を氣の毒に思ふ。同時に資本家が政黨を支配し得るかの如く思つて、徒らに恐怖の念を起すのは、恰かも水鳥の羽音に驚いた平家の公達の眞似をする事だ。吾々はそのやうな臆病な態度を採り度くない。

日本浪漫派思想興亡の跡

――高山樗牛を中心として――

平林初之輔

一

西洋の十九世紀末までの近代文學は、大體に於いて、古典主義、浪漫主義、自然主義の三つの發達の階段を經過して來てゐる。この發達の段階は、國によつて、その時期にも遲速があるし、その變遷のしかたが急角度を描いて鮮明な對照を作つてゐるものと、比較的ぼんやりとぼかされてゐるのとの相違はあるにしても、この段階そのものはヨーロッパの近代文學に、普遍共通のものであつた。

所が日本の近代文學、卽ち明治以降の文學は、どういふ發展の段階を經て今日に至つてゐるかといふことは、從來の文學史家によつても、まだはつきりと斷案を下されてゐないし、私自身も、いま大まかな概括を試みるべき適確な材料をもつてゐない。といふのは、日本の近代文學は、ヨーロッパ諸國のそれとは、全くちがつた特別の事情のもとに發達して來たものだからである。日本に近代文學の曙光がはじめて現はれたのは明治二十年前後であつた。坪内逍遙の「小說神髓」が出たのが明治十八年であり、二葉亭四迷の「浮雲」の上卷の出たのが明治二十年であつた。ところがその頃は、ヨオロッパではすでに自然主義の文學がその終末に近づいてゐる時期であつた。しかもそれ以前のヨオロッパの文學は、たゞ斷片的に日本へ紹介されてゐたばかりで、日本國民の思想の主流と十分に同化してゐたわけではなかつた。すべての物質文明が、日本の封建文明の廢墟へごちや／＼に移植されたと同樣に、文學に於いても、いろ／＼な時代の、いろ／＼な傾向の作品が、日本の土壤に適するか否かには論なしに、手あたり次第に移入されたに過ぎなかつた。

坪内逍遙の「小說神髄」は、なる程、徳川時代からの惰性としてのこつてゐた馬琴系の文學に鐵槌を與へて、新文學のための地ならし工事をした。しかし逍遙自身まだ江戸末期の戯作者文學の影響からは十分に脱してゐなかつた。したがつて「小說神髄」そのものも、その神髄に於いては、新時代の精神のはじ〴〵まで漲つた革命的主張ではなく、主として形式的に勸善懲惡に代ふるに寫實をもつてせねばならぬ所以を說いて、新文學はかくあらねばならぬことを主張したものにとゞまつてゐた。

だから「小說神髄」の影響は、舊文學に再起の餘力なからしめたには相違ないが、それから新しい戰鬪的な文學を育て、行くには、十分の熱と力とを缺いてゐた。そのために、馬琴系統の勸善懲惡文學は屛息したけれども、それに代つて復興したのは元祿時代の特に西鶴の流れをくんだ寫實文學であつたに過ぎぬ。先進國の文學にしても、矢張り、いろ〳〵な傾向の文學が、無秩序に移入、紹介されつゞけるより外はなかつたのである。

かういふ狀態は自然主義の全盛時代までつゞいた。自然主義によつて、日本の近代文學は、後ればせにではあつたけれど、世界的潮流の中にやつと合流するに至つたのである。

だから自然主義以前の明治の文學の時代を一つの名稱であらはすことは、あまりに複雜なものを強いて統一しようとするいふ非難をどの道まぬがれまい。だが一見混沌無秩序に見えるこの時代を、たゞ表相のまゝに見てゐるのではしかたがない。さういふ方法では、どの時代の特色だつて理解できるものでない。どんなに單純なやうに見える時代でも、近よつて見れば、到底一語や二語でその特色を言ひ表はすことのできない程、複雜で混沌としてゐるのが常だから。明治中期の新文學を、その個々の作家や、小さいグループの特色によつて、寫實派とか、觀念派とか、心理派とか、その他々々のイズムに分類して、それを統一的に理解しようと試みないことは、結局、ばら〳〵の事實を蒐集したゞけで、決してこれを十分に把握したことにはならない。

そこで、私は言ひたい。明治三十年代の中頃までの日本の近代文學は、それが如何に多樣な外觀を呈してゐようとも、本質的には、矢張りロマンチシズムの時代であつたと。たゞヨオロツパ諸國のロマンチシズムと異つてゐたのは、舊文學に對する破壞と反抗の熱意が不十分で、弱かつたといふ點である。そのためにロマンチシズムの色彩が、強烈鮮明ではなくて、多分に鈍色を呈し、新文學の舊文學に對する戰ひの鋒先が尖鋭さを缺いてゐたのである。

それには理由がなかつたのではない。日本に於ける資本主義の發達、特に資本主義とゝもに生れた政治上の自由主義の發達過程が、著しく文學に於けるロマンチシズムの發達を條件づけてゐるのである。といふのはロマンチシズムはユゴオが言つたやうに文學に於ける自由主義に外ならぬのだから。

徳川末期に於ける日本の社會は、經濟的には既に革命を孕んでゐた。商工階級の富は十分に蓄積されて、事實上武士階級を支配し得る力をそなへてゐた。それにもかゝはらず、古い生産關係を打ち破るに足るやうな技術的進歩と、商工階級の階級的自覺を促すに足るやうなイデオロギーとを缺いてゐた。

かういふ事情のもとに日本は横あひから開國を迫られ、無理矢理に資本主義國の仲間へひきずり出されて、鎖國の日本ではなく、世界の日本として爾後の生存を營まねばならなくなつたのである。そしてこの突嗟の場合に封建制度を破壊し得たものは、舊支配階級に對立する商工ブルジョアジイではなくて、舊支配階級の内部の反抗分子、——公卿と浪人と下級武士とであつたのだ。

かくしてでき上つた藩閥政府は、彼等の當初の意志には頓着なく、いやが應でもブルジョア化しなければならぬ事情にあつた。徳川幕府を打ち倒したあとに、別箇の封建制度をうちたてることはあらゆる事情がゆるさなかつた。そこで日本では、大急ぎで先進資本主義國の政治形態をそつくりそのまゝ模倣するより外はなかつたのである。

かゝる事情のもとでは、商工ブルジョア階級の政治的位置は妙なものにならざるを得ない。彼等は、明治政府の四民平等の原則によつて、戰はずして自己の地位を與へられたのである。勿論それは十分な位置とは言へなかつた。だが、この出來事は、先づ彼等の出發をくじくことによつて鬪志を弱める上に效果があつた。丁度現在の場合でも、デモクラチックな國家に於いて、プロレタリアが戰はずして或る程度の自由を與へられてゐるところでは、その國のプロレタリアは多く革命的にならないで、改良主義的になつてゐると同じである。

商工階級が、その階級的自覺を獲得するまでにはこの變態的な政治革命から十年以上の日子を經過しなければならなかつた。明治十年代から憲法發布に至るまでの自由黨をはじめとする政黨運動がそれである。だが既にして、その出發點に於いて出鼻をくじかれたブルジョアジイの運動は、遂に全國的な、猛烈な國民運動に發展する機會をもたずして、日清日露の二戰役を經て、デモクラチックな國内的要求よりも、國家主義的な對外發展、國威發揚の聲に押されて、帝國主義的反動の時代が迎

へ、世界の潮流と同化合流するに至つたのである。

この政治的發達の樣式が、そのまゝ文學に反映してゐると私は觀察したい。從つて、自由黨の運動よりも稍々おくれて、文學に於いてロマンチツクの運動が起り、それが、對外戰爭を契機として、國家主義的色彩を强烈にし、資本主義の成熟、ブルジョアジィの完全な勝利とゝもに自然主義に移つて、遂に、高速度をもつて、世界的潮流に合流するに至つたのである。

ロマンチシズムの特色は、文學史家によつて種々に解釋されてゐる。だが、最も本質的な特色は、文學に於ける凡ゆる拘束の破壞であるといふことができる。この意味に於いて「小說神髓」は、日本の文學に於ける「クロムウエル」の序文に比することができる。だが「小說神髓」の著者は、前にも言つたやうに、情熱をもつて、身をもつて舊文學と戰ふ戰士の氣慨を缺いてゐた。諄々として新文學のかくあるべき所以を敎へはしたが、當時の知識人の肺腑にせまり、心臟を打つ力を缺いてゐた。從つて彼はロマンチシストとなるかはりに、早くから沒理想主義者となり、舊文學の支配を上着を脫ぐやうにきれいさつぱりと脫するかはりに、戲作者文學の要素を多分に次の時代へ傳承する役割をさへ演じた。「小說神髓」と前後して出た「當世書生氣質」はこのことを立證してゐる。

坪內逍遙が、理論に於いて說明した、舊文學の破壞の事を、情熱をもつて實踐し、自而の青年にして、當時の諸大家を向ふにまはして、舊文學に對して猛烈な戰ひをいどもうとしたのは、少しくおくれて明治二十年代の中期に論壇にあらはれた北村透谷であつた。彼は日本に於けるロマンチシズムの代表者として、最もふさはしい資格をそなへてゐた。彼は詩人であり、ドラマチストであり、評論家であつた。その多角的才氣が、彼にロマンチシストとして潑剌たる未來を約束してゐるやうに思はれた。だが彼は、そのうちの一つをも大成せずして、忽然として斃れた。彼の事業はどれもこれも悲しい未成品であつた。だがこの未成品のうちから、私たちは、彼にかすに何年かの餘命をもつてしたならば、燦然たる光輝をはなつたであらうと思はれるやうな寶玉の破片を拾ひあつめることができるのである。少くも樗牛ほどの壽命を彼に與へたならば、彼の光の際に樗牛の光は非常にうすれてゐたであらうと思はれる。

批評家としての北村透谷の最も大きな仕事は元祿文學の排擊であつた。當時の元祿文學復興の機運は、新文學の幼芽を踏みにじらうとするものであり、文學に新鮮な空氣を流通せしめないで、重くるしい傳統の中へこれをおひやらうとするものであつた。彼が粹を排斥し、西鶴系統の文學を不眞面目な遊廓的戀

受の文學としてしいでは、技巧の必要を認めて、定型の韻律の必なべきを主張したのは、幾分自然的要素はあつたとしても、かうした事情の下に於ては、この要素そのものすら必要であつたのだ。彼が最も純粹なロマンチシストであり得たのはそのためであるといへる位である。

とはいへ、北村透谷ですらも、ヨオロッパ諸國のロマンチック運動の尖端を歩いた人々に比べては、その熱意に於いて、舊文學に對する鬪志に於いて、著しい遜色をもつてゐたと言はねばならぬ。それは前に述べたやうな、日本の政治的事情によつて、一般に當時の日本の進歩的青年の反抗的精神が鈍磨されてゐたからに他ならない。透谷の政治的見解も、微温的な自由民權主義にとゞまり、デモクラシイとアリストクラシイとの境界に右顧左眄する折衷主義に外ならなかつた。これはあたかも、當時の日本の尖端的政治運動を特色づけたのと同じ特色である。

二

北村透谷と殆んど前後して論壇に現はれ、透谷の死後は、批評界に於けるロマンチシズムの總帥として、文壇を指揮してゐたのは高山樗牛である。

樗牛には、透谷に於ける如き内面の一面はなく、さういふ深さ、而して鋭リーヤな洞察力とはなかつたが、その情熱と向上と、而して理想の高さとに於いては遙かに透谷にまさつてゐた。そのために、透谷が比較的じみに短かい生涯をおはつたに反し、樗牛は、透谷に比べるとずつと長かつたが、矢張り短かい生涯を最も華やかにおへた。透谷はその天分を十分に果さずして夭逝したが、樗牛は、同じ夭逝したにしても、その天分を十二分に發揮することができた。

透谷も樗牛も、自らロマンチシストと名のつて、一定の文學上の原理をかゝげて舊文學に對して戰を挑んだわけではない。たゞ彼等の主張、彼等の憧憬、彼等の情熱が、ロマンチシストのそれであり、彼等が日本の新文學に於いて占めた位置が、ヨオロッパの新文學に於いてロマンチシストの占めた位置と極めて類似してゐるために私はさう呼んだに過ぎないのである。

樗牛がロマンチシズムの名稱によつてロマンチシズムを主張してゐる文章を求むれば、「煩瑣學風と文學者」といふ短文の如きはその代表的なものであらう。

「學術上に於ては煩瑣學風行はれ、德教上に於ては形式主義行はる。正しく是れロマンチック運動が思想感情の自由の爲に興るべき秋ならずや。今の世にバイロンあらば、其惡罵の如き

を提げて起つべき筈也。もしハイネあらば、其の毒蛇の如き舌を揮つて罵るべき筈也。今の時勢に於て一人の文學者らしき文學者、詩人らしき詩人を有せざるは日本國民の大不幸と謂ふべき也。」（樗牛全集改訂版、第二巻六六二頁）

「明治の小說」といふ比較的まとまつた史的述作には次の如き一節がある。

「フランスの大革命、及び之に續きたるナポレオンの併呑主義に反對して、各國民族が、その團結と平和を維持するの必要に迫りたるや、そが保姆となりて安慰と奬勵とを與へたるものは、所謂ロマンチック文學なりき。」それから彼はヨーロッパ諸國のロマンチック運動を略述し、日本にもそれと同樣の暗流が流れてゐることを指摘して、「似而非寫實小說衰へて撥發小說起り、次いで歷史小說の出場を望みたるは、小說其物の性質自然の變遷なるべしと雖も、そも〳〵又是の懷古的風潮の暗流に乘じたるものに非ざるか」と述べてゐる。

この引用でもわかるやうに、彼のロマンチシズムに對する理解は甚だ不十分であつたと言はねばならぬ。ヨーロッパのロマンチシズムを、フランス革命、ナポレオン戰爭に反對して、各民族が平和と團結を維持する必要のために生れたものであると解してゐるが如き、また、ロマンチシズムの特色の一つに過ぎない中世時代の懷古といふ一點を誇大して、日本の歷史・撥發小說が、懷古的なるが故にロマンチックであると斷定してゐるが如きはその一例である。

果してこれ等の小說にはヨオロッパのロマンチシズムの文學に見られるやうな熱と力と舊文學に對する鬪爭的精神とは遂に見られなかつた。彼はその理由を深く究めようともしないで漫然と言つてゐる。

「これ時か、勢か、又は機の未だ熟せざる爲か。吾等つら〳〵我邦の狀態を察するに、後年に至りてロマンチク文學思潮が土を捲いて再來するの時あらんか。明治文學の最盛期は蓋し其後に來らん。」（同上三六〇頁）

だが、彼が言つてゐるやうに日本のロマンチック文學は、後年に至つても黃金時代を現出することなく、却つて、益々生々潑溂の趣きを失つて、末期の弊害を著しく發揮しはじめ、やがて自然主義に席を讓らねばならなくなつたのである。彼自身、ロマンチック文學を提唱しながら、確乎たる原理をかゝげず、從つて、その主張が漠然としてゐて、力強い迫力をもたなかつたことは已むを得なかつたのである。

高山樗牛に烈々たる情熱を與へたものは、日清戰爭によつて俄然として眼ざめた日本國民の國民的自覺であつた。國家統一

の思想、對外的國民國家の思想であつた。

　透谷と樗牛との間には、はつきりとした斷層が横たはつてゐた。それは日清戰爭である。透谷も樗牛も、明治末期の文學者のやうに、國家に對して冷淡ではなく、國家の問題に對して常に精神をなやましてゐた。だが、透谷の住んだ時代の國家はまだ生成の過渡にある國家であり、從つて透谷の國家に對する關心は内に向つて、國内の政治的改造の問題に燃え上つた。彼の政治的見解は、明確な原則にもとづいたものではなかつたゝめに、折衷主義的要素を多分にもつてゐたが、それにも拘らず、當時の日本の、最も進歩的な見解を代表するものであり、多分にデモクラチックなものであつた。

　ところが樗牛に於いては事情が一變する。彼がその短い生涯の晩年に住んだ日本は日清戰爭によりて勝利を占め、世界列國の中に於いて判然たる獨立國たることを示し、且つ自らも自覺した國家であつた。從つて彼の國家に對する關心は當然外に向ひ、對外的國家主義の色彩を濃厚にしたのであつた。

　樗牛は、早くから文學のための文學を排してゐた。たとへば「社會的立脚地よりの文學論」の一節に於いて「社會的立脚地よりの批評の標準は道義なり。道義は凡てのもの丶最高の判官にして、又絶對の標準也。今や吾等は現代作家に對して、社會[illegible]に[illegible]其の批評を下すことを[illegible]。凡ての藝術は[illegible]道義の批評を[illegible]、[illegible]群少作者をして遂に不義[illegible]の[illegible]せしむるに[illegible]し。……吾等は敢て、社會的道義を標準とする嚴正なる文學批評の、盛に世に行はれむことを希望す。」（同上四六頁）と主張してゐる。

　この見解はその後國家主義と緊密に提携し、文學者が國家に對して冷淡なことを痛烈に指彈するに至つてゐる。彼のロマンチシストとしての情熱は、國家といふ對象を得たとき、はじめて炎々として燃え上つたのである。

　彼は「小說革新の時機」と題する論文に於いて、寫實主義の文學獨立論の弊害を縷述したあとで、絢爛たる文辭をもつて次の如く叫んでゐる。

「是の弊害の最も明晰に表はれたるは日清戰爭の當時にあり。王師海を越えて西に動き、國を擧げて國家的精神の大潮動に熱中せし時、我が濟々たる小說家は果して何事を爲したりしや。我が國家が國命をかけて東洋の平和を爭ひし時、彼等はその戀愛談に苦心するを以て文士の本分を知れりとなしたりき。兵は戰に臨んで生還を期せず、而して國民の民唯ゝ其の兵たらざるを恨みとし、一朝命の下るを待ちて、商は其業を捨て、農は[illegible]

鋤を抛ち、學者は其の書と筆とを擱きて、共に銃劍を握らむことを期せし時、彼等小説家は、冷眼にして世上を看過し去り、一人の其の筆に火して愛國義勇を唱へたるものあらざりき。偶々二流以下の小説家が戰爭談を著すあれば、彼等は却て際物師として擯斥し去りたるに至りては、吾れは殆ど彼等小説家に國家觀念の存否を疑はむと欲する也。勢ひ是の如きを以て、戰爭と文學と殆んど相知らざるまねして通過し去りたりき。想ふに當時の小説家は、不幸にして我が國家の沒落に遭遇するも、尙ほ其の戀愛談の補綴に日も亦足らずとせしならん。否らざれば中夜月明に乘じて亡國の殘府を訪ひ、是の好詩的題目を與へたる上帝の惠を感謝せしならん。あゝ國民は是の如き文學者と何の爲す所ぞ。」(同上四四一頁)

かくて彼は明治三十一年頃から、熱心な日本主義の鼓吹者としてあらはれた。彼の唱道した日本主義の根本原則は、「日本國家の繁榮進步を以て國民倫理の規準となす。實踐の規準としては、國家以外に求むる所なし。」といふにある。「國民的特性に基ける自主獨立の精神に據りて、建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、卽ち是れなり。」といふにある。

日本主義の鼓吹者であつた彼は、當然世界主義の反對者であつた。世界主義と祖國主義とはブルジョア・イデオロギーの兩極である。樗牛はその一極を最も極端に、狂信者に近い程にに代表した。そして、「日本の文明は西洋流ならざるべからざる」ことを語つた西園寺文相をなじり、六合雜誌、國民新聞をはじめ、世界主義を主張する進步的自由主義的思想に對して、狂犬のやうに喰つてかゝつた。

日本主義は、神の前に世界萬民の平等を說き、博愛を說く宗敎を必然に排擊する。樗牛が先づ基督敎に對して猛烈な戰端を開始し、續いて佛敎を排斥するに至つたのは偶然でないのである。「けだし基督敎徒の眼中には世界ありて國家なし。個人ありて家族なし、人類ありて國民なし。人類は國家君父に反きても神に從はざるべからず。基督敎史中の新謂血說死は所謂國家の叛逆のみ。……之を要するに國家の前途に關して忠誠なる國民の有すべき信仰は、國家主義あるのみ。日本主義あるのみ。あゝ國家主義なる哉、日本主義なるかな」と基督敎に一矢を酬ひた彼は、轉じて、「淨土眞宗撲滅論」に共鳴し、東本願寺の腐敗を糾彈し、「佛敎全部が如何に君父國家を無視するの精神に充滿せるかは大乘戒律を收めたる一梵網經を繙かば昭々乎として明なるべし」と斷じ、更に儒敎に轉じて「儒敎は退嬰主義なり、進步とは儒敎の解せざる所なり」と叫んで、生々主義の神道、それより流出する日本主義――ブルジョア的國家主義こそ唯一

の宗教たらざるべからざることを力說してゐる。

だがこれ程辭を涸らして宗教を攻撃しながら、「宗教の主性は迷信なり」と斷じ、「人心の病的現象なり」と罵り、「今の我邦に宗教なるもの存在せず、既に存在せざる宗教に滅亡もなく、未來も無し、其の前途を論ずるの要なき也」と駄目をおしてゐるのは、樗牛の思想の隨所に見られる矛盾の一つの現はれであつて、或るときはバイロンを讃美し、或るときはバイロンを罵り、或る所は紅葉を稱揚し、或る時は紅葉を罵倒してゐるのと同型である。そしてこの筆法は、理論に窮した論客が、相手の存在を無視することによつて、自己の勝利を自ら信じて慰むる場合の筆法と同じものである。それ程に、樗牛の日本主義は理論的基礎が薄弱であり、それ程に彼の日本主義の主張は狂熱的であつたのである。

三

高山樗牛が、何故に、かくの熱狂的な國家主義の使徒となり、他に對する冷靜な批判を失ひ、殆んど盲目滅法に日本主義をかつぎまはるに至つたかといふ事情は、彼自身の次の如き說明によつて一番はつきりとわかる。

「日清戰爭によりて獲たる勝利は、一部國民の自負心を鼓舞し、排外自尊の病的思想を惹起したるが如き結果ありき。然れども遼東半島の抛棄と共に、東洋の形勢、世界の大勢は、是の戰爭によりて初めて國民の間に知られたり。戰に勝ちたる國民は、世界に於て最も危殆なる位置にある國民なることを覺りたり。黄白人種最後の大格鬪は、如何にその千年の歴史を紡ぎて、將に絕東の風雲を捲かんとするか、黄人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に漸々として眉睫の間に近づきつゝあるか、日本の戰勝は如何に外邦の猜忌を增し、如何に國民の前途に一層の險峨を加へたるか、戰勝の祝宴に醒めたる國民は、悚然として怖れ、猛然として省みたり。是に於て、世界に於ける日本の位置てふ觀念は、國民の間に最も痛切なる疑問として提供せられぬ。日本主義は是の疑問に答へむが爲に起りたるものなり。」(同上第四卷四〇九頁「國粹保存主義と日本主義」)

こゝで私たちが見逃してならないことは、日清戰爭といふ事件を、彼が庶民の側にたつて受け入れないで、支配階級の側にたつて受け入れてゐるといふ事實である。一代のロマンチシストとしての樗牛の情熱は、かくてはやくから、上から下へ放射された。下から叫ぶ民衆の聲とならないで、上から民衆を指揮する支配者の號令となつた。こゝにも遊佐と樗牛との、特

的ロマンチシストと、繼承者的ロヤンチシストとの對照を見るのである。そしてかゝる對照をつくつたものは、日清戰爭に外ならなかつた。

日清戰爭の洗禮を受け、支配者の側にたつて「國民」を見おろした時、彼の心頭に熱を與へたのは、國民精神統一の必要であつた。外來思想の氾濫の中にあつて、よく日本の獨立を維持し、その國勢を伸張してゆくためには、日本國民の精神を統一して外にあたらしめるより他はない。爲政者が軍備擴張、諸々の國家施設の完備に沒頭しつゝあつたとき、彼は、帝國憲法と教育勅語と日本主義とのトリニチイによつて、國民精神の統一をはからうとしたのである。

しかも彼の主張は「國民精神の統一」といふやうな漠然たる抽象的な主張にはとゞまらなかつた。進んで彼は、具體的に國民的歌謠の必要をといて、これによりて、國民の思想を國家主義的に統一しようとし、「國民的哲學」といふ一文に於いては、哲學は數學や物理學のやうに超國家的な學問ではなくて、「世に世界の哲學なるものなく、只々國民の哲學あるのみ」といふ結論に達し、各國の哲學に國家的刻印が附せられてゐることを傍證して、日本も亦、ヨオロツパの哲學の支配から脫して國民的哲學を樹立しなければならぬことを切言してゐる。

「國民的哲學」の必要を感じた彼が、「國民的文學」の必要を感ずるのは自然の數である。「日本主義と大文學」といふ論文の中で、彼は、當時の日本に大文學のないことを慨して、「大文學の勃興は時代精神の統一に伴ふこと、換言すれば、時代の精神定まらざれば其の文學も亦雄大なるを得ざる事是れ也」と前提し、「吾人は是の點より見て今の我邦に大なる文學の產出せられ難き一の理由を見る也。今の我邦にありては、時代の精神未だ統一せられず、隨つて一般社會は未だ一定の理想を有するに至らず」と說明し「大なる文學の出づるを望むもの、先づ時代精神の統一を望まざるべからず。而して時代精神の統一は、必ずや教育道德の主義の統一より初まらざるべからず。是に於てか大公至正なる日本主義の必要起る」と最後には日本主義による國民精神の統一こそ一大國民文學の母胎である所以を力說してゐる。

彼が「時勢と詩人」といふ文中で、イギリスの帝國主義詩人キツプリングを稱揚して、「帝國主義が近年俄然として英國の人心を司配し來りしことは、隱れもなき事實也。卽ち是れ現代英國の勢ひ也、時代精神也。キツプリング氏は、偶々是の勢に乘じて一代民衆の渴仰に明晰なる發辭を與へたるものに外ならず」と言ひ、更に、世人が同じく帝國主義詩人テンスンを忘却してゐるのに不平を洩らしてゐるのは、彼の心中に、帝國主義

への憧憬が火のやうに燃えてゐたことを評してゐるのがある。彼が英國の帝國主義に陶醉してゐた時、その犧牲となつて、愛蘭の民衆は光をもとめて絶叫し、印度の民衆は搾取の痛苦に呻吟し、更に英本國のプロレタリアの間から反帝國主義の叫びがあがりつゝあつたことなどは、樗牛の眼に映ずる由もなかつたのである。彼は骨の髓までの支配階級のイデオローグとなつてしまつてゐたのだから。

樗牛のイデオロギーが、完全に支配階級の範疇中のものになりきつてゐたことは、彼の國家觀に於いてよりも、一層はつきりとその社會觀に於いて見られる。

支配階級的イデオロギーに完全に征服せられてゐた樗牛は、その脚下に澎湃として起つて來た新興勢力、彼の日本主義、國家主義、乃至帝國主義への憧憬とは、正に對蹠的に相反する原理によつて動きつゝある一つの勢力を見まいとしても見ないでゐることはできなかつた。彼が大童になつてこの新興勢力と取り組んでドンキホーテの如く戰つてゐた姿は、このロマンチツク思想家の晩年のいたましい悲劇であつた。

凡ゆる宗教特にキリスト教を迷信なりとして蛇蝎の如くに排斥した彼が、舊約聖書の創世記に理論的支持をもとめて、ヘブライの經典の冒頭に晝夜の別があるやうに、社會の進歩にも差別が大小さまざまのあるのに有產者と無產者とのあるを當然なりと考へてゐるのには、理論的缺陷おほふべからざるものがある。

だが支配階級にとつては理論の辻褄のあはないところは、權威をもつておし通すことが出來る。樗牛の社會問題觀は、正にその好標本である。

「社會問題の最後の解釋は遂に教育問題に歸着すべし」と彼は言ふ。「貧富の懸隔を以て社會の體制上免るべからざる結果なりとすれば、是の如き自然且つ正當なる發達を阻遏することは、取りも直さず社會的體制の破壞を以て目せざるべからず。所謂る社會主義の如きは天理人道に背戾せるものなり。」

「……然らば如何にして貧民を教育せむか。彼等をして社會の體制を解せしめ、自己の位置を改良する永遠の方策は、社會制度に對する正當の服從の下に、自動的事業に依らざるべからざることを認識せしむるにあり。天賦人權の妄想を打破し、服從の必ずしも羞恥にあらず、強力の遂に權利の所依たる所以に對して、正當なる觀念を有せしむるにあり。」（同上第四卷六四九―五〇頁）

社會主義を排斥した彼は、進んで民主主義をも排斥し、「民主思想はその如何なる假面を被りて來るを問はず、須臾も我が國體と相容れざる也……我邦にありては、文明の進歩は民衆の個

達にあらずして寧ろ臣民の義務を明確に理解するにあり」と言ひ、國民が權利思想の影響を受けてだんく生意氣になつて來たのは、民主的教育の過ちであるとして「已むを得ずんば夫れ民を愚にせん乎」と宛然、古昔の暴君の口吻を繰り返してゐる。

　社會主義と民主々義とを排した彼は、なほも論陣を進めて、國家による一切の社會政策的施設に對しても反對してゐる。

「吾等は毫も國家事業として常に社會の劣者弱者を保護すべき何等の理由を見ざるのみならず、社會進化の必然なる結果として、國家的活動の勢力となる能はざるが如き不能者に向つて、彼等に値せざるの利益を虫與するは、國家全體の幸福の上に於て斷然有害無益なりと思惟するものなり。」(同上、六四三頁)

　かやうな社會觀をもつてゐた彼は、文學も亦この社會觀と抵觸することを許さなかつた。當時、反支配階級的小ブルジョア作家の間に勃興しつゝあつた「社會小說」に對して、彼が敢然として反對したのは當然であつた。社會の不幸な階級に同情したり、不幸になつた理由を外圍の境遇に歸したりする小說は、彼によれば小說として價値のないものであつて、個人たると階級たるとを問はず、それが不幸であるのは、幸福になる能力のないためであるから、それ自身で甘受しなければならぬといふのである。何となればさうしなければ社會の（ブルジョア社會の）體制が破れるからである。

「今の所謂る社會小說は、貧弱者に訓ふるに服從をもつてせずして反抗を以てし、犯罪者に訓ふるに悔悟を以てせずして遂非を以てし、不幸者を導くに救濟の法を以てせずして破壞の道を以てす。之れ實に社會道德に裨益するところなきのみならず、又彼等の爲に眞摯なる作俑と稱するを得ざるなり。」(同上、六四七頁)

　これが彼の結論である。

　かやうな思想の持主が、ニイチエの超人道德に共鳴し、平凡人はたゞ一人の巨人を生むためにのみ意味を有する存在であるとする說に隨喜したのは當然である。樗牛の思想をニイチエの影響に歸するのは不當である。彼は自己の思想の最も尖銳な表現をニイチエに見出したのだ。

四

　以上私は、イデオローグとしての高山樗牛の特性の若干を分析した。そしてそれによりて得た結論は、彼が日本の初期資本主義の代表的イデオローグだといふことである。

　北村透谷にあつては、舊い勢力の殘存物に對する戰ひ、この障害物の中を道をきりひらいて進んで行く戰士の悲愴な面影が

或る程度までふさはるものたるに從ひ、常に時代と[illegible]イの尖端的イデオロギーを代表し得たのである。そして彼の思想は水晶のやうに純一に澄み渡つてゐる事ができたのである。

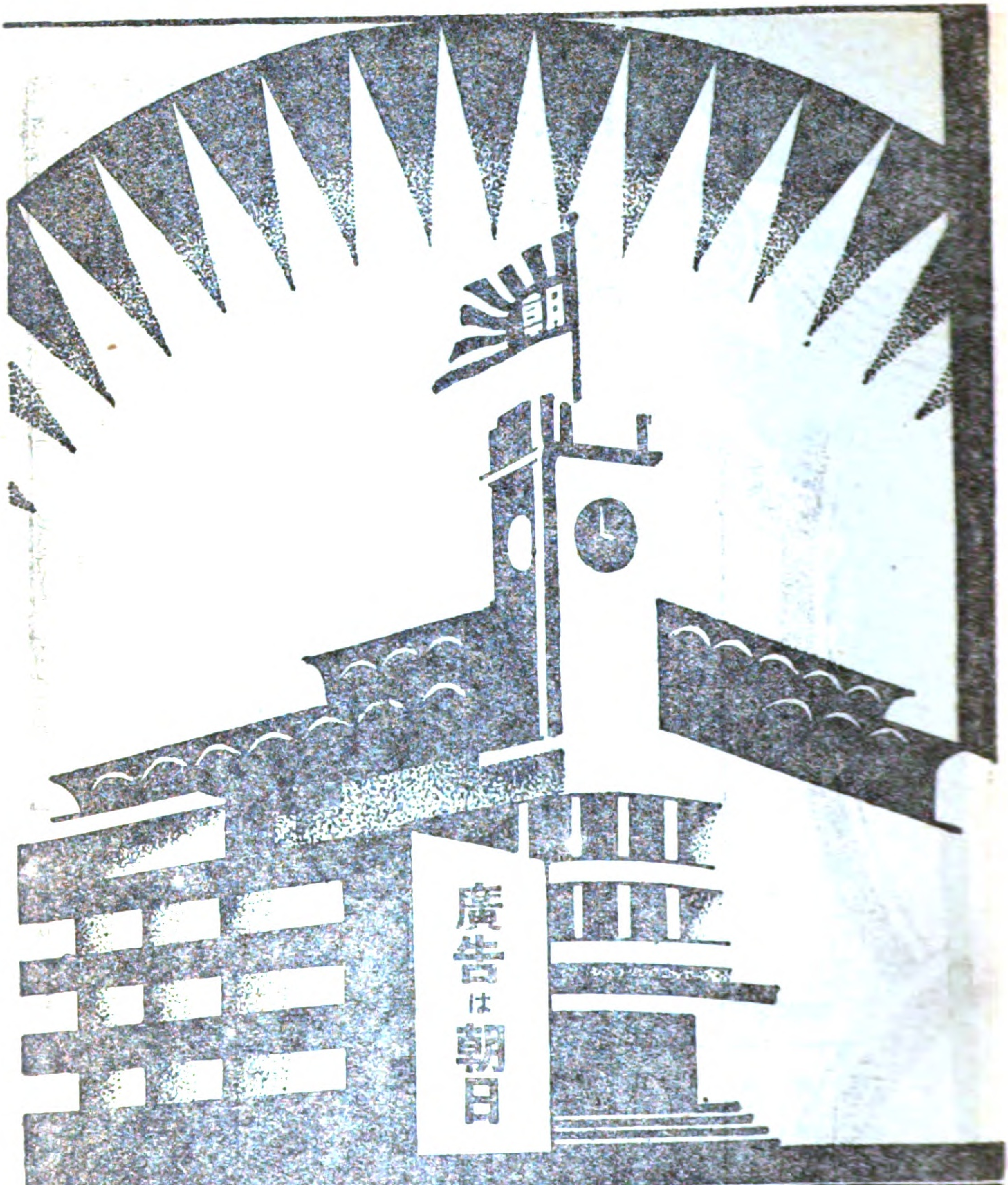
これに反して高山樗牛の眼を眩惑したのは、日清戦争によりて、世界に於ける獨立國としての地位を獲得した日本の國家であつた。この國家にとつては、戰ふべきものは、國外に對立する諸外國であり、國内に於いては、古い障害物ではなくて、むしろ、新しく支配階級の面前に勃興しかけて來た、新勢力であつた。そのために、樗牛の地位は反抗的戰士のそれではなく、それを抑壓し、撲滅せんとする支配階級の番犬のそれでしかあり得なかつたのである。

同じく日本に於けるロマンチック文學の代表的評論家であつた透谷と樗牛との間には、これだけの差があつた。彼等は等しく情熱家でありながら、その情熱の源泉となつたものはちがつてゐた。前者に於いては反抗的精神がそれであり、後者に於いては支配的精神がそれであつた。透谷は強者に向つてとびかゝつた。樗牛は弱者をなぎたふした。彼が先輩大家に戰ひをいどむ場合でも、さながら支配的位置から敵を見下してゐるやうな風貌があるのはそのためである。

この二人は同じ一つの陣營にありながら、異つた方向をむい[illegible]にまとまるであらうか。まとつて、日清戦争の前には[illegible]の日本國家の情勢の變化が、彼等の役割をかくの如く決定したのである。

しかし、支配階級としての、日本のブルジョアジーは、その後日露戦争を經て、益々世界的規模に成長し、其的な成長は質的な變化をも伴つた。それはもはや、樗牛を代辯者とするには不適當な存在となつた。樗牛はちようどその時に、短い生涯をおへたのであつた。私が彼がその天分を十二分に發揮して死んだと言つたのは、彼がその後生きてゐたとしても、日本のブルジョアジーは彼を必要としなくなつた程變質してゐたからである。日本主義や、國家主義や、宗教の排斥や、社會政策や、民主々義や政黨内閣すらもの排斥は、その後に進歩した日本の社會の段階には全く不必要な、障害的な要素と化了したからである。

新しい時代は新しい代辯者をもたねばならない。樗牛に代つて文學界に於ける指導的位置にたつたイデオローグは、島村抱月を代表とする自然主義の使徒たちであつた。樗牛とゝもに日本のロマンチシズムは死んだ。反抗の戰の中に戰死したのではなく、祖國主義と超人思想との頌歌のうちに衰滅して、最期をとげたのだ。樗牛の最後の叫びはいたましい悲鳴であつた。


朝
廣告は朝日

北海タイムス

京城日報

河北新報

新愛知

名古屋新聞

日本プロレタリア作家論

石濱知行

一、プロレタリア文學發展の歴史的過程

プロレタリア文學は、ブルジョア階級と對立するプロレタリア階級の文學である。プロレタリア文學は、ブルジョア階級と對立し闘爭し、それを克服することによつて珍らしき歴史の進行を擔任することを意識するプロレタリア的階級意識のうへに基礎をおく。從つて、プロレタリア文學は、當然の歸結として、階級としてのプロレタリアの量的及び質的の一定の限度への發達を前提とする。乃ち量的に言へばプロレタリアの數の増加、質的に言へばかゝる多數のプロレタリアの階級的意識の發達及びそれを紐帶とするプロレタリアの階級としての團結の必要の認識把握を前提とする。しかして、プロレタリアの階級としてのかゝる發達は、他面より言へば、また、ブルジョア階級の階級としての、プロレタリア階級に對立するものとしての、一定の限度に於ける發達と照應するものである。プロレタリア及びブルジョアの階級としてのかゝる發展は、一般的に言へば、先づ第一に産業革命を前提とする。しかし、産業革命は、生産手段の變革を基礎とする資本主義制度の發生、從つてまた、兩階級の發生を意味するだけである。兩階級が階級として相對立する階級意識が明確となるがためには、資本主義制度の更により高度への發展がなければならない。乃ち兩階級の經濟的利害關係が明確に正反對の地位にたつものであり、從つて兩階級はその對蹠的地位に立つて必然的に闘爭すべきものであるといふ意識が發生することは、産業革命直後における資本主義の一層の發展の段階に入ることを必要とする。

日本に於ける産業革命は、明治二十七八年の日清戰爭をその起點とする。しかして、日本の資本主義的發展は、日露戰爭を經てヨーロッパ大戰（一九一四―一九一八）前後に至るまでの間において高度なる發展を示した。日本のプロレタリアートが階級意識の上に立ち結成して闘爭の途上に上りはじめたのはこの時期以後のことである。從つて、日本に於けるプロレタリア文學も、この時期以後の時代に屬するものと言はなければならない。日本プロレタリア文學の濫觴ともいふべき「種蒔く人」の創刊は、實に一九二一年の秋であつた。

しかし、日本の經濟的發展は、他の大資本主義諸國とは異つた一つの特徴をもつ。それは、日本の經濟的發展が、他の資本主義諸國よりもおくれてゐたといふことである。日本が明治維新の政治革命を經て、廣く門戸を開放して、世界の空氣を吸ひ入れんとした時代には、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ等の諸國は、すでに産業革命を經過し、資本主義制度が確立し、勞働運動、社會運動が發生し、發展しつゝあつたのである。資本主義的に發達のおくれてゐる國家が先進資本主義國と接觸するときには、その經濟的方面および觀念的方面に於いて、影響をうけて、急激に資本主義化する傾向のあることは、歴史の實證的原則である。日本も亦その原則には洩れなかつた。産業革命を經過する資本主義的發展は、日本に於いては前に述べたやうに、日清戰爭後の時期に屬する。しかし、それより以前の時期に於いても、先進資本主義諸國との接觸によつて、産業革命後に發生する經濟方法、政治方法、觀念形態等が、未だ産業革命を經ざる日本の國土にすでに産業革命を經過した諸國から移入されてゐた。例へば、明治維新から明治十三四年までに、政府は、その政策として機械による工場制度の設立、鑛山開發、企業經營形態としての銀行、會社制度の移植、鐵道、汽船等の交通機關の移入につとめた。また、それから日清戰爭までの間には、民間産業の補助金給與による奬勵等を行つた。法律の移入、立憲制度の移植も行はれた。思想方面に於いても、後年日本初期の社會主義者を雛出せしむる母胎となつたところのフランスの自由民權論、キリスト教思想、その他イギリスのマルサス、スミス、ミル、ベンタム、スペンサー等の個人的自由主義思想、ドイツの專制的思想等が、すでに明治六年頃に日本の思想界に支配的な地位をうちたてゝゐた。したがつてまた、産業革命後のヨーロッパに行はれた廣い意味の社會主義的思想、社會運動もまた、早くから日本に移植されてゐた。明治八年に創立された同志社に經濟學を講じてゐたラーネッドが、その講義中に社會主義なる語を使用したことは、木村毅氏（社會

[illegible]、社會主義史」「隠れたる偉人」[illegible]堺[illegible]治氏（雑誌[illegible]）、ラーネッド先生によつて譯刊されてゐる。その他、社會黨、社會黨主義、コムニスト、ソシアリズム、ニヒリズムなどの言葉は、明治十二三年頃には、日本學者によつて移入されてゐた。また社會運動としても、東洋社會黨、車界黨、東洋自由黨、社會民主黨、勞働組合等が計畫され、實行された。かゝる傾向は、日清戰後、日本産業革命の進展とゝもに、ます／＼盛となつた。平民社の活動、日本社會黨、赤旗事件、大逆事件等々、かゝる運動はます／＼××となつた。平民新聞、光、直言、新紀元、大阪平民新聞、社會新聞等の社會主義傾向の諸新聞が刊行された。また、民友社、萬朝報なども、社會主義的の傾向をもつてゐた。經濟、政治、法律、その他思想方面に於いてかゝるヨーロッパの風潮が移入され育成されたと同樣に文學方面に於いても、廣い意味での社會主義的性質を有するものが、移植または育成された。明治十二年―十四年の間に刊行された虚無黨文學の譯出のごときはその最初のものであり、十五年には、トーマス・モーアのユートピアが譯出せられ、それに模したユートピア物語が一時簇出した。二十年代には民友社によつてユーゴーの諸作等が輸入された。三十年代の初期には、所謂社會小説なるものが、内田不知庵、後藤宙外等によつて[illegible]して實際活動の事情を[illegible]にするに[illegible]主義小説と目さるべきものは出てゐない。日露戰役に於ける[illegible]は、日本の資本主義的發展を更に躍進せしめた。從つて、それ以後の時期に於いては文學方面に於いても、社會主義的傾向を有する文學も出版された。矢野文雄の「新社會」、德富蘆花の「黑潮」、木下尚江の「良人の自白」以下數個の小說、堺利彦氏による飜譯社會主義小說、島崎藤村の「破戒」、石川啄木のニヒリズム的傾向を有する詩、平出修の「逆徒」（大逆事件を取扱へるもので發賣禁止）[illegible]は、その主なるものである。新社會は明治三十五年の出版にかゝるユートピア物語であり、出版後間もなく三版をかさねたと言はれるほど一般によく讀まれた。尚江の「良人の自白」以下數篇の社會主義小說は、當時に於ける平民社の運動を素材として取扱へるもので、今日から見れば、我國初期の社會主義運動史とも見得る。宗教的色彩がつよく、殊に最後の小說の如きは、彼が社會主義運動より遠ざかり行く傾向を示してゐる。彼の著作は最近、木下尚江全集として出版された。堺利彦氏には小說としてはすぐれたものはない。だがその隨筆に於いては、かゝる方面では正に天下一品であらう。飜譯としては前後を通じて、ゾラのジェルミナール、[illegible]

アル・ソシアリスト、ロンドンのコール・オブ・ゼ・ワールド、ホワイト・ファング等がある。——序だから、こゝに一寸ふれて置くが、社會主義的隨筆家として今日まですぐれたものとして私は、堺利彦、荒畑寒村、田口運藏の三氏を擧げたい。堺氏の『樂天囚人』、寒村氏の『ロシアに入る』、田口氏の『赤旗の輝くところ』等の隨筆集は、非常に興趣に富んでゐる。田口氏はその後小説方面にすゝまれたが、その出來榮は未だ隨筆には及ばない、と私には思はれる。——藤村氏の『破戒』は、明治三十九年に發刊された緑蔭叢書の第一册で、丑松と云はるる水平社同人を主人公としたものである。石川啄木の詩は、窮境にあつた氏のニヒリスティックな傾向を帶びたもので、『果しなき議論の後』他數篇があり、その中には、後年、しきりに言はれたヴ・ナロード（人民の中へ——といふ意味で、ロシアの青年が農民の間に散つて主義の宣傳につとめた時代のスローガンであり、日本では新人會機關紙にこの名が附せられたことがある）といふ言葉がすでに使用されてゐる。また彼の小説のうちにも學校ストライキをテーマとせるもの、『彼とその一團』？といふニヒリスティックな傾向を帶びたものがあつた。平出修氏の『逆徒』は幸徳事件に關するもので、たしかスバルに掲載されたものと記憶してゐる。この外に尚ほ一篇同じ事件を取扱つたものが當時の太陽に掲載されてゐたのを記憶してゐるが、その題は殘念乍ら忘れて終つた。私は當時、中學生として、この禁止本が、友達の間に祕密に廻されて讀んだことを憶えてゐる。

——以上が、大正三年のヨーロッパ大戰までに於ける、大體の日本に於ける狀態である。經濟的に進歩のおくれてゐた日本が、明治の變革により世界に門戸を解放したがために、諸般の文物が、滔然として移植された。そして社會主義的の思想も、産業革命を經驗せざるうちに、早くも日本に將來されてゐた。日清戰役前後より初まつた日本産業革命——それも主として外國よりの生産手段、方法の移入による——後は、かゝる思想も當然漸次[illegible]なり來つたことは疑ふべくもない。だが、しかし、ヨーロッパ大戰以前に於いては、勞働者數も少なく、また階級對立の意識も明確とは言はれなかつた。社會主義的名稱を有する政黨、團體も存在したが、その勢力も一般的に云へば弱く、勞働大衆のうへに、支配的なる勢力を有してゐるとは言はれなかつた。また同じ社會主義的團體と言つても、中にはマルクス主義者もあれば、キリスト教社會主義者もあり、サンヂカリストもあればアナーキストもあり、ニヒリストもあると言つた調子であつた。思想界に於いてもこれら、各自異なれる主義についての明確なる區別が立つてゐなかつた。要するに、ヨーロッパ

大戦前に於いては、日本にはまだ明確なる階級意識の上に立つても確固たるプロレタリアの陣營を結束するといふ傾向はさかでなかつた。從つて文學方面に於いても、今日言はるゝが如き明確なるプロレタリア理論の上に立てるプロレタリア文學といふものは確立しなかつたと言つても大過なからうと思はれる。たゞヨーロッパ大戦勃發後一年たる大正四年末に宮島資夫氏の『坑夫』が出版せられたことは、プロレタリア文學史上劃期的なことである。主人公石井金次の不平と反抗心を著者のアナーキスティックな筆をもつて描寫したものである。同書には、堺利彦、大杉榮兩氏の序文が載せられてある。いま、そのうちの二三の點を摘記してみやう。——

『篇中の主人公石井の人物性情に對して君が如何にも善くそれを理解し、如何にも深くそれに同情してゐる點に敬服した。尤も世間からは只兇暴の一語を以て評し去らるべきあの人物の、不平と反抗心との由つて來る所を解剖し直感して、其の煩悶と鬱勃と焦燥と憤怒とを描寫するのは、アナーキストをもつて自ら任じてゐる君として、さして六かしい事ではないかも知れぬが、その謂ゆる兇暴なる人物の、他の一面の、時として現はれ來る、柔かな情緒をも、善く具さに躍動せしめたのは、僕の稍意外とする所で、從つて又大いに敬服する所である。……

一僕は「坑夫」を讀んでゐる中、[illegible]の記憶を喚起しつゝ、[illegible]を比較して考へた。[illegible]に於いて君の作は決して多くゾラに劣らぬとさへ思はれた。勿論ゾラの作は君の作に比べてその規模はるかに雄大で、その内容が幾倍豐富である。しかし、それは主として、フランスの大炭坑と日本の小鑛山との差異、及びフランスの（數十年前の當時においてすら猶[illegible]）進歩せる勞働者と、日本の（今日に於いてすら猶[illegible]）無知なる勞働者との差異から生ずる差異である。……

『とにかく僕の今後に望む所は、日本の坑夫たり一般勞働階級たり、更に大いに自覺の域に進んで、同時に之を描寫する君の筆が、更に大いに生氣を帶び光彩を増すに至らん事である。……要するに君の「坑夫」は、大正五年の文壇に於ける、少くとも一種特異の産物たることを僕は確信する』——

（堺氏序文）

『宮島君と「坑夫」の主人公石井金次との間には、強烈な生活本能と叛逆本能とを持つてゐるその氣質に於いて、甚だしく相似てゐる。又君の放浪の間の行爲に於いても、隨分とこの金次のそれに似た事が多かつたらうと思はれる。そして、

この事は、金次の心理解剖に於いて、君が直寫に成功した原因だらうと思はれる。……

「この「坑夫」は坑夫の生活といふ背景、金次と云ふ特殊の人物、そしてその間にいろ〳〵と暗示される現代社會の缺陷等の點に於いて、確かに日本の創作界に於ける唯一の產物である。宮島君の筆致にはゴリキイ程の、貫徹的な太い強さはない。……しかし、ゴリキイの初期の作物に現はれて來る一種の叛逆者、習俗や權威に對する盲目的叛逆者の面影は、この「坑夫」の中に十分見ることが出來る」――（大杉榮氏序文。）

宮島氏の「坑夫」一篇は、たしかに、堺氏の言つたやうに、日本の一種特異の一產物であり、また大杉榮氏の言のやうに、日本の創作界に於ける唯一の產物であつた。私はこの作品をもつて、ヨーロッパ戰後の日本に於いて勃興したプロレタリア文學の先驅をなすものであると考へる。たゞ、この作品の內容が背後に大衆の背景を帶びぬ從つて自然發生的な反抗――大杉氏の言を借りれば盲目的叛逆者――である點に於いて、乃ち堺氏の言葉を借りると、日本の坑夫なり一般勞働階級なりが、未だ充分自覺の域に達せざる時代の反抗である點に於いて、今日のプロレタリア文學とはすこし遠い距離にある。だが、この作は、今日讀んでも尚ほすぐれた多くの點を有してゐる。私は以後も宮島氏の創作を愛讀してゐるが、正直のところ、この坑夫一篇にまさるものを見ない。坑夫一篇は、たしかに、今日のプロレタリア文學の先驅たる點に於いて、日本プロレタリア文學史上に一地位を要求する權利を有するものであると思ふ。

ヨーロッパの大戰は、日本の資本主義的發展を更に盛ならしめた。參戰諸國への商品輸出等のために、日本の企業界は空前の好景氣を見せ、所謂成金を發生せしめた。しかし、ヨーロッパの大戰は、ヨーロッパに於いては、資本主義沒落の徵候を見せ、幾多の矛盾を發生せしめた。そのうちでも、プロレタリアートの手になるサヴェート共和國の成立、及びその他諸國のプロレタリアートの攻勢は、一時は、資本の牙營に迫らんとさへした。かゝる形勢は、世界經濟の一環としての日本へも當然の結果として影響を與へた。大正七年八月には米騷動が富山を始として日本の各地に勃發して、富豪連を縮み上らせた。新人會が設立せられて學生の社會運動が始まり、黎明會による進步的學者が街頭に出たのも正にこの時である。森戶辰男氏のクロポトキン事件もこの時代の產物である。吉野博士が民本主義を稱へて、神田の一集會場で、佐々木照山、內田良平等の浪人會と立會演說會を行ひ、鈴木文治氏がバルコニーから、一々それを戸

外の思索に終始した個人的シーンがきたこの時代の一局相を示した。このヨーロッパ戰後の日本はまさに思想界の大轉換期であつた。大正八年(一九一九年)に至つて、社會運動も空前の活氣を帶び、勞働組合數の如きも、前年の十一に對し、大正八年に入るとともに七十一の多數となり、勞働者數は增加し、こゝに社會運動も、從來に見ざる階級的のものとなり來り、階級的對立は明白となり、マルクス主義的思想が、勞働運動のうちに深く喰込むに至つた。かゝる時代に日本のプロレタリア文學はその勇ましき門出をなしたのである。

これより先き、明治四十一年(一九〇八年)發刊せられた「白樺」は、人道主義の旗幟をかゝげて自然主義に對立し、大正七年(一九一八年)十週年紀念號を出した。この「白樺」は勿論それ自體決してプロレタリア文學といふことは出來ないが、過去の文化的傳統(主として自然主義)を破壞し、未來のプロレタリア文學への道を幾分たりとも開拓したことは容認せられ得ることゝ思はれる。また大正元年(一九一二年)大杉榮、荒畑寒村兩氏によつて創刊された『近代思想』もまたプロレタリア文學への一つの階梯をなしたものである。寒村氏の小說「逃避者」はたしか、これに登載せられたもので、後、生活と藝術叢書の一篇として發刊せられた。(大正五年と記憶する)私は福岡の古本屋で、氏の[illegible]してゐる。氏にはこの外、[illegible]ある。「近代思想」は一時廢刊せられたが、(それ[illegible]による運動は一種の啓蒙的手段たりとして大正[illegible]年一時廢刊)、その後、大正四年には、すべての發表機關を奪はれたので、再び近代思想を刊行した。この「近代思想」は、前記の白樺、及び、石川啄木、土岐哀果兩氏による「生活と藝術」等とともに、今日のプロレタリア文學發祥の一土臺をなした。啄木[illegible]の西村陽吉氏の短歌集が「生活と藝術叢書」の一篇として發刊されたのも大體この時期であると思はれる。また大正六年には、民衆藝術論が稱へられ、大杉榮氏は、ロメーン・ロランの『民衆藝術論』『Théâtre du Peuple』を譯述した。富田碎花、白鳥省吾氏によるホイットマンの『Leaves of Grass』の翻譯も、この時代であつたやうに記憶する。

資本主義內部の矛盾の發生、階級鬪爭の激化、デモクラティック思想の瀰漫、社會運動の旺盛、ロシア、ドイツ、ハンガリー、バイエルン等の革命の報道の到達、大正九年の日本社會主義同盟の成立(この同盟に參加した文學方面の人として加藤一夫、秋田雨雀、江口渙、藤森成吉、小川未明、後には小牧近江、佐々木孝丸、前田河廣一郎、平林初之輔、等の諸氏がある)

これら、つぎつぎにおこつた一聯の社會事象は、そこに、プロレタリア文學を發生せしめ、育成せしむる溫床をなしたのである。しかして、その第一歩をなせしものは、實に『種蒔く人』の創刊である。(一九二一年)。――

『種蒔く人』はそれより前に、第一次のものとして同年春、小牧近江、今野賢三、金子洋文三氏の手によつて秋田で發刊されたが、これは三册位で、第二次『種蒔く人』となつた。この『種蒔く人』は、その標題通り、既成文壇の上に、プロレタリア文學の種子を蒔く役目を勤めた功は大なるものがあつた。今日、偉大なる社會的勢力となつたプロレタリア文學のために、處女地を開拓した功績は十分認められなければならない。これに加はり又は、それに執筆した文士としては、第一次種蒔く人同人外に、有島武郎、秋田雨雀、藤森成吉、長谷川如是閑、平林初之輔、加藤一夫、宮地嘉六、宮島資夫、百田宗治、小川未明、白鳥省吾、富田碎花、吉江孤雁、馬場孤蝶、松本淳三、山川亮、青野季吉、前田河廣一郎、中西伊之助、山田清三郎その他の諸氏があつた。これらの顏觸れを見ても判る通り、『種蒔く人』そのものは、一定の思想的立場に立つものではなく、社會主義、無政府主義、ニヒリズム、自由主義、人道主義等、廣い意味での資本主義、軍國主義に反對する人達の寄合であつたのだから、今日のプロレタリア文藝雜誌のごとく、明白なる一定の理論的基礎の上に立つものではなかつた。その點に、この集團の弱味があつたが、しかし、當時の如き、ヨーロッパ戰後の社會的條件のもとに、各種の思想が一時に發生した當時に於いては、仕方もなかつたし、また、それら各種の思想をとも角散在させることなしに、一つのフォーカスに集め得たのは『種蒔く人』の功績と言はねばならなかつた。『種蒔く人』は、その後期に於いて、やゝセクト的存在となり、アナーキスト一派の不平、門戸縮少等の結果をもたらした。そして、大正十二年(一九二三年)の關東大震災及びそれと同時になされた大反動政策のために、この歴史的役割をつとめた『種蒔く人』も廢刊するの餘儀なきに至つた。

この『種蒔く人』發刊前後に於いて、プロレタリア文學にとつて注目を要すべきことは、二あつた。その一は、宮地嘉六、内藤辰雄、宮島資夫、細井和喜藏諸氏のごとき勞働者出身の文士が續出して活動したことである。その二は、プロレタリア文學の既成文壇への進出であり、解放、改造、中央公論、新潮等の從來ブルジョア文學の鐵壁たりしものも、プロレタリア文學の勃興に際して、それらにも門戸を解放せざるを得ざるに至つたこと、それと同時に、ブルジョア文學の陣營よりするプロレ

タリア文學への前衛、同志が核となつたことの一つは、既成文壇に活躍した人達が、轉向を行つてプロレタリア文學の陣營に加はつたことである。ネオ・ロマンチシストとして暗い北國の風景を叙して一時文壇から遠ざかつてゐた小川未明氏、「波の上」等のロマンティシズムの上に立つた創作を書いてゐた藤森成吉氏が、突然プロレタリアの生活に投入して勇敢なるプロレタリア作家となつたこと、「埋れた春」のごときネオ・ロマンティシズムの作品を書いてゐた秋田雨雀氏が、「第一の曉」（一九一〇年）頃から漸次プロレタリア文學に近づき、この頃に至つてますますその傾向のつよくなり來つたこと、中村吉藏氏が「剃刀」以下數個の社會問題を取扱つた戲曲を發表したこと。（秋田氏、小川氏、中村氏のために長い間社會主義的傾向の作家として文壇に奮鬪して來たのを祝して、大正十二年「三人の會」が開催せられ二百餘名が出席したことは當時を知る一つの事件として注目に價する）などはその例證である。右の内、小川未明氏はその後プロレタリア文學内の鬪爭盛となるに從ひ戰線より引退し僅かに童話作家として存續し、中村吉藏氏もまた「大隈重信」等の偉人劇に蹈晦し去り、僅かに秋田翁のみがプロレタリア文學の長老として健在であることは人の知る通りである。また白樺派の一人たる人道派作家有島武郎氏が、その財産及び田地を抛棄し、プロレタリア文學に近づき[illegible]

しかし、氏はその貴族的出身と人道主義的思想のために、完全なる轉回をすることが出來なかつたことは、當時問題となつた「宣言一つ」を見れば判る。

「宣言一つ」は、有島氏が自殺した大正十二年の約一年半以前に執筆せられ、「改造」紙上に登載せられたものである。有島氏の思想のうちに、資本主義に對する憎惡と叛逆が多分にあり、從つてこの資本主義打倒のために發生した社會問題に、當時の文藝家には珍らしく、大なる理解を有してゐたことは、すでに、多くの人達によつて指摘されてゐる。

この意味に於いて、「宣言一つ」は、晩年に於ける社會問題に對する氏の見解、乃至態度を知るうへに貴重なる文獻と言はなければならぬ。

「宣言一つ」はごく短い感想ではあるが、そのうちには、一つの問題を提出し、それに對する氏の宣言を發表してゐる。それは、「宣言一つ」が示すやうに、先づ、社會問題の、問題としての解決としての運動が、所謂學者若しくは思想家の手を離れて、勞働者そのもの丶手に移らうとしてゐる事、を指摘し、勞働者は人間の生活の改造が生活に根柢を有した實行の外でしかないことを覺り、かくして思慮深い勞働者は、自分達の運命を、自

分達の生活とは異つた生活をしながら、而かも自分達の身の上について彼れ是れいふ所の人々——學者、思想家——の手に託する習慣を破らうとしてゐる。」ことを述べ、『勞働者はクロポトキン、マルクスのやうな思想家をすら必要とはせず……第四階級はかゝるものゝ存在なしにでも進むところに進んで行きつゝあり』とし、從つて第四階級以外の階級に生れ、育ち、教育をうけた氏は『新興階級者になることが絕對に出來ぬから……第四階級のために辯護し、立論し、運動するそんな馬鹿け切つた虛僞も出來ない。……從つて私の仕事は第四階級者以外の人人に訴へる仕事として終始する外はあるまい』「第四階級的な勞働者たることなしに第四階級に何物かを寄與すると思つたら、それは明かに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によつて亂される外はあるまい」と結んでゐる。

氏のかゝる說がなされた大正十一年(一九二二年)は、歐洲大戰の戰後好景氣が、漸く世界的の不景氣によつて代替せられ、資本主義の諸矛盾が發生し、勞働者階級が資本の攻勢に對して果敢なる闘爭を開始しはじめた時だ。またその少し前には、勞働者内部から知識階級排斥の聲が叫ばれ、棚橋、麻生氏等の知識階級出身の勞働運動家が指導者の地位から退くことを餘儀なくされた事件が起つてゐる。

これらの社會的背景を一瞥するとき、有島氏の所論にも一脈の適確さがある。また、勞働運動の勃興とともに、それを利用せんとする勞働ブローカー、勞働貴族が飛出したことに對する非難として、有島氏の所說は正當性を有してゐる。だがしかし、これを一般論とする場合、氏の所論は、貴族階級出身の氏の思想の單なる潔癖性を示すもので、社會問題の實際としての現實に頗る遠い議論と言はねばならぬ。

社會運動は、自然發生的な過去の運動より脫却して、意識的な計畫的な組織的なものとなつた今日、決して『第四階級はかゝるものゝ——學者思想家——存在なしに進むところに進んで行く』樣な、反對的な、自然成長的な進み方をするのではないし、また進ませてはならぬものである。今日の社會運動は、世界經濟の動き、各國に於ける特殊狀態、勞働團體の現實等に對し明確なる認識を有し、その認識に基いて、運動の方針に對する理論を立てることを必要とする。この意味に於いて、第四階級と知識階級との共働、交互作用を必要とする。有島氏の議論はこの點を無視してゐる。從つてその議論のうちには多くの誤りを犯してゐる。例へば、『マルクスの資本論でもさうだ。勞働者と資本論の間に何のかゝはりがあらうか。マルクスの功績は、マルクス同樣資本王國の建設になる大學でも卒業した階級

の人々を吟味して自分達の立場に對して[illegible]の根本因をなす所以であるといふ點に於いて最も苦るしいものだつたと云つたり、フランス革命が民衆のための革命として勃發したにかゝはらず、ルーソーやボルテールなどの思想が緣になつて起つた革命だけに、その結果は、第三階級者の利益に歸して、實際の民衆乃ち第四階級は以前のまゝの状態で今日迄取り殘されて終つた」と述べたりしてゐるのでも明かである。これらの、有島氏の所論は、「宣言一つ」に示されたやうな氏の社會觀より發生したものである。

以上のべた、秋田、小川、中村、有島諸氏のプロレタリア文學への轉向に續いて、その後、人道主義作家として「受難者」を發表した江馬修氏、細田源吉、細田民樹兩氏、かつては渡邊けめと氏と一緒に少女讃美論を唱へた片岡鐵兵氏、花嫁小說家今東光氏等も、後の時代に至つて、プロレタリア文學の陣營に投じた。

――一時非常なる勢をもつて發展しかゝつたプロレタリア文學も、大正十二年の震災とともに一時全く鋒先をおられて終つた。社會運動も大杉事件、龜戸事件等打つゞく○○の嵐のため、一時閉塞するのやむなきに至つた。が、しかし、時代の必然はやがて政治研究會の發生をうながし、プロレタリア文學の方面では大正十三年、文藝戰線は[illegible]く人々に延長であり、[illegible]創刊八ヶ月にして一時休刊した。その後、半ヶ年にして文藝戰線は再び復活し、復活以後は頗る振ひ、葉山嘉樹、林房雄、黒島傳治氏等の新進を文壇におくり、青野季吉氏は、目的意識論を提げて評論壇に活躍した。そして、「文藝戰線」及び「戰鬪文藝」が主體となつて日本プロレタリア藝術家聯盟を形成せしめた。が、その後、無產政黨内部に於ける紛爭は、文學方面にも影響を及ぼし、抗爭の結果、日本プロレタリア藝術家聯盟は分裂して、文藝戰線派はこの聯盟を脫退して、勞農藝術家聯盟を作つた。後者は文藝戰線によつて前者を小兒病、公式論者と痛罵し、前者は新に雜誌「プロレタリア藝術」を發刊してその第二號に勞農藝術家聯盟に關するテーゼを發表し、その排擊の宣言をした。その後福本イズムの論爭を中心として、勞農藝術家聯盟は再び分裂を來し、さきに日本プロレタリア藝術家聯盟を脫退した林房雄、山田清三郎氏等は、前衛藝術家同盟を結成した。かくして、プロレタリア文學の分野は三分されたが、その後、日本プロレタリア藝術家聯盟と前衛藝術家同盟は合體して全日本無產者藝術聯盟を結成し、雜誌「戰旗」を發刊した。從つて現在に於いては、マルクス主義文學の分野は戰旗と文藝戰

線兩派に分れてゐる。

これらの兩派の以外に、プロレタリア文學の範疇内には、アナーキスト系の『黑色戰線』及び『農民』がある。また、武田麟太郎、藤澤恒夫、長沖一氏等の「十月」は、學生より成るマルクス主義文學の集團である。またかつて、プロレタリア文學創成期に於いて、勞働者出身の作家として一時活躍した内藤辰雄氏一派は日本勞働藝術家聯盟を組織して雜誌『勞働藝術家』を刊行してゐる。

――以上が、今日に至るまでの日本プロレタリア文學の歷史的發達過程のごく概觀である。始めは、もつと詳細に、その歷史的過程の展望を行ふつもりであつたが、時日と資料の蒐集が不十分のために、これ丈にとゞめた。尙は、諸者のために、日本プロレタリア文學の史的發展をより詳細に知るための參考書として、次の如きを擧げておかう。

一、木村毅著、文藝東西南北。及び社會小說硏究（日本文學講座第十二卷）

一、平林初之輔、プロレタリア文學運動の理論的及び實踐的展開の過程（社會科學第四卷第一號）

一、山田淸三郎、日本プロレタリア文學運動史的概觀（國際文化、第二年第八號以下）

一、靑野季吉、プロレタリア文藝理論の展開（改造、第十一卷第七號）

二、文藝戰線に屬する作家

今日の文藝戰線は大體に於いて『種蒔く人』の正系に屬する人達より成り、勞農藝術家聯盟の主體をなし、政治的には、日本大衆黨中の舊無産大衆系を支持する。同派に於いて今日、創作方面で最も活躍してゐるのは前田河廣一郎氏であらう。氏はアメリカより歸り、アメリカに於ける勞働の體驗を基礎として初期のうちは多くの創作を造つた。そのうちでも出世作とも言はるゝ「三等旅客」、「マドロスの群」は傑出せるものであらう。氏の最近に於ける創作は「賴朝から貰つた島」であるが、これはあまり感心しなかつた。むしろ數ケ月に亘つて中央公論に連載された「支那」の方を採る。氏はまた戲曲方面に於いても「ラスプーチンの死」「クレオパトラ」以下十數個を發表してゐる。氏の長所はその勢力的なることと創作の規模の大なることにある。彼の全創作集とも見らるべき前田河廣一郎氏集及び同續篇に盛られた尨大なる作を見よ。この外に氏には又アプトン・シンクレアの譯もある。とも角、日本人としては珍らしく勢力的で大規模である。氏が、これらの才能によつて、更に優秀たる

作品を世に問ふことを期待する。氏の短所とも見らるべきものは、氏の作品の背後にあるプロレタリア的理論の把握不十分なことにある。從つて氏の作品にあるプロレタリアの不平反抗も自然發生的のものが多い。この弱點が作品にあらはれて、全體に於いてまとまりのない、ピントの合はない、作を生ずる惧がある。氏の代表作と見らるべきものは、三等旅客、太陽の黒點、長篇としては大暴風雨時代であらう。極く短いものとして故郷のことを書いた作品故郷?(名前を逸した)は昔讀んだものとして私の頭に殘つてゐる。葉山嘉樹氏は文藝戰線の新らしく生んだ作者であり、文藝戰線第一號に載つた「淫賣婦」は當時頗る好評だつたものである。私は、氏の作としては初期のもの、乃ち「淫賣婦」、「セメント樽の中の手紙」、「海に生くる人々」を取る。最近殆んど氏は創作を見せないが、どうしたのであらう。黒島傳治氏はじみな作家である。また他の諸氏に比して寡作であるが、氏の作「豚群」、「彼等の一生」等は、私の記憶に殘つてゐる。氏はまたアンチミリタリストとしてシベリア出兵問題を素材とした二三の作品がある。金子洋文氏は、劇の實際方面の演出に忙がしい關係か、最近よき戯曲を提供しないやうである。その他、「暗に蠢くもの」の作者今野賢三氏、婦人作家平林たい子氏、このごろは顔張り作品を見せない小堀甚二氏、「苦力頭の表情」の[illegible]里村欣三氏等、共に[illegible]。[illegible]文藝戰線[illegible]、[illegible]氏[illegible]の活動せず、文藝戰線に生氣すくなきに至つたのはどういふわけか。思ふに、文藝戰線を成立せしめた人達にあまり有名になりすぎ、世間的となり、それに續いて新生氣を躍動さす新作家がすくない關係からではないであらうか。この點で、岩藤雪夫氏の「鐵」は、それ自身すぐれた作品であつたのみならず、文藝戰線に一味の清鮮さを送つて蘇生せしめたものである。讀賣新聞に連載した氏の「山のロマンス」に於いて氏は描寫の巧妙さを見せてゐる。「調べた藝術」、「目的意識論」によつてプロレタリア文學の理論的發展に貢獻した青野季吉氏は、この派唯一の理論家であらう。氏に次ぐ評論家としては青木壯一郎氏があるが、未だまとまつたものを見ない。ともあれ、文藝戰線は、創作方面でも、戯曲方面でも、評論方面でも、新人の活躍がすくない。これ、紙上に生氣の潑剌さを缺ぐ主たる理由である。

三、戰旗に屬する作家

戰旗は、全日本無産者藝術聯盟(ナップ)に屬し、我國最左翼のプロレタリア文藝雜誌である。政治的には、勞農同盟を支持してゐたが、最近大山氏一派が合法政黨組織を提唱して、勞農

同盟は形式上分裂したが、戰旗はおそらく大山氏の提唱に反對の地位に立つであらうと思はれる。戰旗九月號は發賣禁止となり筆者の手に入らない爲、判らないが、友誌『國際文化』等は反對聲明としてゐるから、戰旗も恐らく反對の立場であらう。戰旗は最左翼の立場として鬪爭意識が頗る旺盛であり、頗る活氣に富んでゐる。藤森成吉氏は、轉向以來多くの短篇、戲曲を發表してゐられるが、創作よりもむしろ、戲曲の才にすぐれたものが多い。「磔茂左衞門」、「何が彼女をさうさせたか」、「光と闇」等は乃ちそれである。しかし、氏の作品には、どこか理論と創作の間にギアップがある樣に感ぜられる。そして、理論をどこかにくつゝけた樣なところがある樣に思はれる。「光と闇」の後半のごときである。しかし、氏のひたむきな眞摯さは、プロレタリア文學が一定の地位を占めたと同時に發生したプロレタリア文學內部のだらけさを克服する大きな力とならう。片岡鐵兵氏も轉向以來、「綾里村快擧錄」のごときすぐれた作品をつぎつぎに出した。林房雄氏は、「林檎」、「繪のない繪本」等により漸次才能をあらはし、寓話作家として特異のタレントを示した。近來のものとしては、「シンビルスク號事件」をとる。片岡、林兩氏は、その出身がインテリゲンチヤであり、かつ、今日では既成文壇に一定の地位を獲得したゝめ、乃ち氏等の言葉を借りれば、「無產階級運動の特等席」に座するに至つたゝめ、その作品には、一方にプロレタリア的傾向があるとゝもに、他方プチ・ブル的な危險性をも多分に含んでゐる。資本主義末期の末梢的感覺であるモダーニティーへの適應性のごとき兩氏共多分に有してゐる。「斷髮の社會學」、「生ける人形」のごとき兩氏の作品はこの危險性を語つてゐる。江馬修氏は轉向以來、注目すべき作品はない。村山知義氏は、「暴力團記」に於いて始めてすぐれたプロレタリア作品を提示した。山田清三郎氏も、私の知るかぎり、「幽靈讀者」、「紙幣束」以後あまり作品を見せて吳れない樣である。江口渙氏も然りである。この間にあつて、小林多喜二、德永直、橋本英吉氏等の後より來つたものが、默々としてよき作品を示しつゝある。小林氏の「一九二八年三月十五日」、「蟹工船」のごとき、德永氏の「太陽のない街」のごとき、橋本氏の「一九二七年の事件」のごときその代表である。これらの若き人々及びそれにつぐ後より來るものが、ジャーナリズムに毒せらるゝことなく、新らしき鬪爭意識と感覺と形式をもつて、プロレタリア文學に第二の革變をもたらし、プロレタリア文學の既成文壇占領以來、とかく偸安的にありつゝある傾向を打破せられんこと希望にたへない。戰旗における評論家としては藏原惟人氏、中野重治氏をもつ。前者が、マルクス主義文

興理論のための健闘しつゝあることは人の知る通りである。

四、その他のプロレタリア作家

「十月」による作家、武田麟太郎、長沖一、藤澤桓夫の三氏は、將來を持つ期待すべき作家である。かつて「坑夫」一篇の傑作を示した宮島資夫氏、「放浪者富藏」と書いた宮地嘉六氏は、その後、注目すべき作品を示さない。かつて「我等」に「馬を洗ふ」をかき、長篇「空を指して語る」をものした内藤辰雄氏は、現在、堀江かど江(文藝戰線復活號に執筆してゐる)氏とともに雜誌『勞農藝術家』を發行し、日本勞働藝術家聯盟を組織してゐるが、この派からは未だ注目すべき作品はあらはれない。アナーキストの雜誌としては、「黑色戰線」があるが、創作方面よりもむしろ、詩の方面にすぐれたものが多い。『農民』に犬田卯氏、和田傳、相田隆太郎氏等がある。アナーキストの加藤一夫氏は金がたまり、靑井繁治氏は戰旗の同人となつてゐる。松本淳三氏は日本大衆黨の日勞黨系の人として實際運動に沒頭してゐる。

五、評論その他

プロレタリア文學評論家としては、その先驅者として、「第四階級の文學」を大正九年に發表した中野秀人氏を有つ。しかし、今日に至るまで出づる[illegible]大なるものがある。氏の「第四階級の文學」、[illegible]「無產階級の藝術」、「民衆藝術の理論と實際」等、一九二〇年前後に發表せられた評論は、プロレタリア文學の發展に對し貢獻する所が大であつた。最近に至つて、「政治的價値と藝術的價値」で評論壇を賑かしたことは、衆知の通りである。靑野季吉氏・藏原惟人氏についてはすでにのべた。新居格氏はアナーキスト系の評論家であるが、氏の評論がプロレタリア的基礎の上に立論せるものなりや否やは大たる疑問である。大宅壯一氏は戰國時代の梟雄のごとく、無遠慮と直截とをもつて、馬觸るれば馬を切り、人觸るれば人を切るの慨を示せるは正しく壯觀である。しかしあくまで亂世の雄であつて、さて一定のプロレタリア的意識の上に立つて新らしき理論を建設するだけの才能と勇氣ありや否やは少しく疑問である。人呼んで彼を蜂須賀小六といふ。自らも自認せるがごとし。

創作の方面のみならず、文學の他の分野に於いてもプロレタリア的變革が行はれつゝある。詩壇に於いてもプロレタリア詩が提唱されつつある。詩の方面ではかつて兒玉花外が「社會主義詩集」(一九〇三年)を發刊し、石川啄木等もプロレタリア的傾向を有する詩を示したことは前に述べた。最近再び、プロレタリア詩の作品が盛となり、戰旗(三好十郎、上野壯夫、辻恒

彦諸氏)、文藝戰線(今村恒夫氏等)、黑色戰線(丹澤明氏等)には無號、詩が發表されてゐる。昨年發刊せられた、勞農詩集(全日本無產者藝術聯盟發行)は、この方面で一時期を劃せるものであらう。

短歌方面に於いてもプロレタリア短歌が提唱されてゐる。『短歌戰線』はその主唱者の一である。『經濟往來』の短歌壇の選者たる石榑茂氏は、アララギの重鎭齋藤茂吉氏と短歌の論爭をなし、プロレタリア意識による短歌の變革を提唱し、最近、石榑茂歌集を日本評論社から出版した。

六、結論

資本主義の一定段階への發展は、プロレタリア階級の發生と發展を促し、更にその內的矛盾の擴大は、階級意識の明白化と、鬪爭の劇化を伴ひ來ることは必然の過程である。プロレタリア的『感情の整理』であるプロレタリア文學が、かゝる過程の發展に伴ひ、一大勢力となり來ることは當然である。プロレタリア文學は、『種蒔く人』以來、幾多の苦鬪を經て、幾多の既成文壇よりする痛罵と嘲笑の聲を浴びて、今日に至つた。今日、既成文壇が行づまり、既成文壇を引つぐべき中堅作家がスランプに陷りつゝある時、ひとり潑溂たる躍進振りを示せるものはプロレタリア文學である。『戰旗』、『文藝戰線』の活動、プロレタリア作家の既成文壇への侵入等の事象はこれを示してゐる。

だが、かゝるプロレタリア文學の發展は、かゝる發展を示したるが故にこそまた、一面危機に面しつゝある。プロレタリア文學作家の社會の地位獲得に伴ふ偸安性の發生、從來のプロレタリア作家が主としてインテリゲンチャ出身のものたりし關係より生ずる當然の歸結たる社會との妥協、ジャズ的モダーニテイーへの苟合、――かゝる危險性は、現在のプロレタリア作品のうちに多分に認め得られる。かゝる危險性は、プロレタリア文學の向後の發展のために斷然揚棄されなければならぬ。しかして、かゝる役目はすでに名を成せる作家の手によつては決してなされない。このプロレタリア文學第二の變革は當然新しき作家の手によつてなされなければならぬ。すでに、その萠芽を示せるこれら新人は、ジャーナリズムに煩ひさるゝことなく、獨自の道を深く堀り下げることによつて、更にすゝまなければならぬ。後より來るものは、先にあるものを排除して、プロレタリア文學をその歪曲より救ひ、更に猛進すべきである。(妄評多罪)

(附言)、筆者の豫定では、資料を多く集め、作品も再讀して執筆する筈であつたが、匆忙たる筆者の生活はそれをゆるさず、主として記憶によつて書いた。思違ひや、洩れたものもすくなくないと思ふ。

モダン・日本の近景

モダン日本とは

片岡鐵兵

ビルディングの中は忙しい事それ自身が快樂である。無數の人間は、コンクリイトで仕切つた巨大の空間の中の、オルゴオル仕掛けのやうに動いてゐる。エレベータアは息をつく暇もなかつた。エレベエタアから吐き出される人間は、廊下の何所で吸ひ取られ、消えたのか？　事務所に入つて來るのは、月賦洋服の集金人めだ。

街角の赤いガソリン塔に、少女が立つてゐる。フォードが通ると、彼女の眼が貪慾を以つて見送つた。空は濁つてゐる。ビルディングは聳えてゐる。地上は動く風景の唸りだ。だがこれらは都會の描寫にすぎない。

驛前では、三十人の圓タク客引きが、一人の客を取りかこんで鬪つた。客は毆られた。ナッシュ、シボレエ、新ビュイック、新フオード、ハドソン、オークランド、街は美しい圓タクの交錯。

緊縮だ。金解禁だ。如何にしてこの緊縮の資本部面を、勞働者に對するより大なる搾取によつて穴埋めせんか。

露支風雲急なり。如何にしてサヴイエットを惱ましながら支那を付け上らせぬやうに處置せんか。

滿洲は我が富源。これを失ふと日本は劣等國に成り下る。

青年訓育、治にゐて亂を忘れず、金持ちが指導して貧乏人の子の思想惡化を防げ。

滿洲は富源だ。然し、滿洲があるために貧乏人の生活が少しは良くなつて行つてゐるか？

冗談でせう。

日本は煙突の森林地帶だつた　日本航空會社の旅客機が毎日それを實感した。

ドイツから來たツエッペリンは、それ程にも思はなかつた。

カフエは大阪の享樂のモオタアだ。

紅い電燈、紫の電燈。酒の味はウエトレスの哄笑で消された。ジヤヅは盃の運びにリズムを與へた。女給の哄笑、開く紅の唇、サキソホーンが汗ばんだ。半裸體の踊り子が、三日の訓練で、テルミイを踊る。踊りを見ないで拍手する。入り口では白い服を着たボオイが、恭々しく頭をさげて、

「商工會議所のお方は入場お斷り」

「澤正が死んで、新國劇も駄目でございますわね」

「今度歌舞伎座にお作いたしませうか」

「大賛成　レヴユウのない所なら、どちらへでもお作いたしますわ」

息子は部屋の隅でラヂイオを聽いてゐた。野球早慶戰の全國中繼放送だ。

だが、レヴユウは流行つてゐる。學校を卒業した青年は、大會社に就職出來るまで、いつ潰れるか分らぬ怪しげな會社に腰掛ける。就職までがレヴユウ化だ。

唯一のプロレタリア劇場、左翼劇場は公演毎に滿員。

トオキイが流行つて來はじめた。日本の映畫トラストは惱む。トオキイ撮影に十分な資本は持合はせない彼らだ。

邦樂座は、ウエスタアン・イレクトリツク社の映寫機を、松竹座はヴイタフオン式を、パラマウントとフオツクス社との競爭は日本と云ふ小さな舞臺にも反映する。

日本の活動屋たちは話題を得た。

「アメリカぢやトオキイにのぼせて、無聲映畫にろくなのは作りますまい」

「さうですな、その間に、僕たちが面白い無聲映畫を作るんですな　輸入物がトオキイばかりとなると、無聲映畫を供給するのは日活と松竹とマキノと東亞と――つまり日本映畫に限るやうになりますな。お互ひに儲けるのはこれからですぜ」

自然を模倣した公園には次第に人が行かぬやうになつた。近代人工の美を取集めた大百貨店こそ、都會の魅力ある公園だつた。

デパアトメントストアにこそ、近代生活の美が渦卷いてゐる。

デパートを見物しよう。花やかな模樣が、荒い線が、着物の山の上を動いてゐる。高貴な好みや澁い柄は、ひつそりと片隅に沈んでゐる。

十年保つ地質は要らぬ。今日着て明日は捨てる彩りこそ欲しい。

緊縮は勞働者と農民とがちゞこまるだけ。デパアトの寶石部の陳列棚から、ダイヤモンドを引込めはしない。

名と實と對立すると思ふ勿れ。勳章に就いて金儲けする奴もあるのだから。七萬圓どうとかかけた何とか納鑑の話から、公娼廢止論が連想される。和歌山に遊廓が出來るとか。澁澤。

モダン、モダアン、モダン！　何も彼もモダンでなくては夜も日も明けぬので、老人連は不機嫌らしい。だが、これ程モダン的なるものがみんなの氣に入るといふのも、別に氣紛れな趣味からではない。趣味は生産手段の進化に支配される。

もう一度思ひ出す、日本は煙突の森林地帶だと。

機械は合理的な存在だ。それは計算され得る組立てになつて、何ら神秘的な敎說を背景とせず、從つてそれは明るく、それの動くや、速度と威力とあつて美しい。

我々はもはや何の神秘說も、宗敎も信じない。我々の信仰は科學である。我々はあらゆる不合理なるものを排斥する。あらゆる神秘の假面に美を感ぜず、これを科學の明るみに曝して眞理に照らす。

モダン趣味もこの表れだ。宗敎のない我々に悟道への精進、死への憧憬れはない。我々の憧憬れるのは生である。生活である。精神主義でなく物質主義である。だが價値があるのでなく、この浮世に生き、浮世に働き掛け、いかに浮世に貢獻するかに價値をおく。

意氣な遊好みは、手工業時代の超俗趣味である。モダン的とは、およそこれらの物の反對だ。清貧に何のたのしみがあらう？　貧乏すれば社會から踏んだり蹴られたりするのだ。帝國主義日本がモダンな生活樣式を國民に強ゐる。この段階にあつて、享樂的頽廢風潮が、文化の花として爛爛と咲かなかつたら不思議であらう。

遁世に非ず、街に生きるのだ。女も街に生き出して來た。ステッキとなつて生きる者もあらう。職業婦人と云ふ名はあらゆる婦人に魅力を持つて來た。婦人の自覺だ！　婦人の自由は婦人の經濟的獨立がない所には花咲かぬ。婦人の經濟的獨立は社會の立て直しがなくては在り得ない。智識婦人は、工場の女工よりおくれてゐるのを口惜しがりながら、家の封建的遺風と闘つてゐる。

「先生、私どうしたらいいでせう」

プロレタリア文學者の所へは、こんな悩みを綿々と披瀝したブルジョアのお孃さんの手紙が毎日のやうに來る。だが、結局、彼女らは實生活の上で何程の進歩も出來ない。戀愛至上主義でのみ、彼女らはやゝ進歩した。

おゝ、滔々たる戀愛流行！

「プラトニック・ラヴですつて？　あなた、ずゐ分センチね」こゝまでの進歩。

然し、職業婦人に、マネキンと云ふのがある。或る美容術師が、マネキンの親方となり、諸方へマネキンガールを供給した。ところが間もなく、この美容術師が、配下のマネキンたちから多大の上前をはねる吸血鬼であつたこと、女郎屋の女將に等しかつた次第が暴露された。だのに、搾取されてゐたマネキンたちは、「先生がこれだけ上前をはねなさるのはちつとも惡いことぢやありませんわ」と云つたさうだ。頭腦の惡いこと夥しい職業婦人もある。

斷くも華々しく展開するモダン・ライフ。然しながら、日本のこのモダン・ライフを享樂して居る者は誰か？　勿論、日本人であらう。だが、斷じて日本人ではない。いや、十分の九の日本人は、モダン的なる明るき享樂に、何らあづからないのだ。

そこで、歴史は進んでゐる。モダン的享樂にあづからぬ者の力が、モダン文化の花園の地下で、むく／＼と成長しつゝある。

去年の三月十五日、今年の四月十六日。

この二つの日附けを界ひに滅ぼされる力では斷じてなかつた。

「先生、妾はどうしたら好いでせう？」

令孃たちをさへ斯く叫ばしめる。これこそ歴史の波動である。歴史を動かし行く力、それを、日本に見ないか？　目前の現實を見ないか？　では、日本はどうなるか。その答への代りに次の事實がある――

今年一九二九年八月、大山郁夫氏らは合法黨結成の提唱をした。

然しながら、全國の勞働者農民大衆は合法黨を要望しなかつた。戰闘的大衆の意志を反映して、全國組合協議會先づ大山氏らの提案を一蹴し、「裏切者大山一派を粉砕せよ」の叫びが、工場と農村の隅々から湧き上つた。

この事實！

カクテル日本の遠景近景

室伏高信

一

「カクテル日本」といふ言葉は、中央公論の編輯部から自分に與へた言葉だ。

カクテル日本！　これはいゝ言葉だ。日本の現狀――現狀といつては甚だしく非現代的だ、なぜなら今日の日本はもつと遙に流動的な言葉によつてのみ表現することができるからだ。

だから、次のやうにいひかへよう、カクテル日本！　これは日本の現在通過しつゝある過程に甚だ適切な言葉だと。

日本は一個のカクテルだ。新日本とわれわれの名づけたものは一個のカクテルだ。開國以來、われ／＼はカクテルをつくつてきた。

カクテルとは何か？　昔はラム酒と蜂蜜との混合酒、今ではブランデエ、ウイスキイ、もしくはジンに、苦味、香料、砂糖などをまぜた混合酒とある。

日本のカクテルの基本となつてゐるものがラム酒か、ジンか、ウキスキイか、もしくはブランデエであるかはこゝには問はない。われ／＼にとつては、今日では問題は次の一點におしつめられてきた、そのカクテルにはラムが、ジンが、ウキスキイか、もしくはブランデエがどこにあるのかといふの。

世界大戰前までの日本、少くとも丸ビル以前の日本は、西歐化の日本といつてよいだら

う。そして西歐化の時代には、名に西歐化といつても、まだどこかに日本が殘つてゐた。洋行とか、洋畫とか、原書とか、舶來とか、ロイド・ヂヨオヂとかいふ言葉が用ゐられもし、また女のそれはもちろん、男の洋服もまだ地につかなかつただけに、日本はまだ「發見」するほどに珍らしいものではなかつた。

この時代の日本に對する最も深刻な批評は「哲學者の旅日記」のうちに聽くことができる。曰くゼエレンロオズ、そしてスチルロオズ―― 先づ型の喪失のことだけをいつておこう、あのぶざまな洋服や建築やが示したやうに、西歐化の日本は型の喪失といふ一語によつて喝破することのできたものだ――靈魂喪失を證明するものとしての。

この時代の最後の過程を自分はカクテル日本と名づけたらよかつたと思ふ。

二

自分の見るところではカクテルの時代は過ぎた。

日本は西歐化の時代からアメリカ化の時代にはいつた。モダン日本とかれ／＼のいつてゐるのはこの過程だ。

むろん日本人はアメリカ人のやうにカクテルを愛好もしないし、チユウインガムをなめずつてゐるほどの下品な人間は滅多に見られないし、そして後に述べるであらうやうな、アメリカ的ペアパリズムなもつてはゐないが。

しかし、先づ復興東京といはれるものを見よ、これは「復興」どころか、昔の東京――太田道灌の江戸はもちろん、地震前の面影さへも今や何處にもない。地震前の東京は全的に否定されて、地震前に新しい東京の萌芽として生れてゐた丸ノ内三菱ケ原の東京が「新東京」の基調となつた。

東京は生れ代つた、西歐化の東京からアメリカ化の東京となつた。――岩見銀山が猫入らずとなつて、猫入らずからカルモチン、ジアフル、ベロナアルとなつたやうに。

型は統一された。女の洋裝さへも地についてきた。日本は日本を止揚したばかりか、ヨオロッパをも止揚した。凡てのものがアメリカ・ラインに勢揃ひをした。

洋行歸り――今でも洋行といへば主としてヨオロッパへ向けて出發する日本の留學生たちの時代錯誤振りを見るがいゝ――の相場ががた落ちしたのは、單にセキセイ・インコのそれのやうに殖えたからといふやうな寄せ算的經濟學からきたのではない。

見よ、洋行歸り――そして最上の洋行歸りが何をお土産にもつてくるかを。

曰くミニヨンヌリイの日本が戀ひしい、曰く「日本の發見」と。

日本を發見するのに、わざ／＼多年の歲月と、それから郵船會社への多額の御奉公とをしなくてもいゝではないかといへばそれまでであるが。

しかし、これをカントや、リッカアドや、フッサルや、もしくはスタリンや、ブハリンや、それからプレハアノフ柿木塞岩までもつれてくるものに比べたなら、日本發見への方向は、遙に高い叡智でもあり、鋭い天才でもあり、またたしかに一歩を進めた時代感覺でもある。

三

日本はヨオロッパよりも文明化したのだ。倫敦よりも、伯林よりも、巴里よりも、あらゆる西歐文明の中心よりも、日本は一足お先きへと進み出た。――ロシヤのやうな野蠻國なぞはもとより問題ではない。

ロシヤから學ぶべき何ものもないといふのでないことはもちろんだ。だが、ロシヤから野蠻をでなくして、文明か學ぶことのできるやうに考へてゐる滔々たる流行思想のごときものは、認識喪失といふこと以外には、何も意味がない。

ヨオロッパがまだ半ばヨオロッパである間に、日本はアメリカとなつた。

丸ビルを、セエラア・ズボンを、ポップを、ニユウ・フオオドを、ジヤズを、チヤルストンを、トオキイを、ラヂオを、大量生産を、速度の崇拜を、擧げるまでもない、アメリカでない日本がどこに殘つてゐるかと問ふても――そうだ、洋行の十年もした天才的な詩人ででもなくては「發ち」することもできなくなつたまでに、日本はわれ〳〵から遠くへと去つてしまつた。

型は統一された、――アメリキヤン・タイプに。ジンも、ウヰスキイも、ブランデエも匂ひを失つた。カクテルの時代さへも過ぎ去つた。日本は縹渺たる地平線の彼方にとその姿を消した。

だが、この時ではなかつたか、眞に日本が戀ひもとめられるに至るのは。

四

日本は遠くへと去つた。そして日本への情熱がその距離に逆比例して起つたことは、最もありうべきことの、ありうべきことだ。

今日は日本喪失の時代でもあるが、また日本「發見」の時代でもある。日本抹殺の時代でもあるが、また日本崇拜の時代でもある。

日本がカクテルを製造しつゝある時代のことであつた。日本といふ言葉が保守主義の音調をもつてゐたのは。――實際に、日本主義といはれたものは時代錯誤といはれるもののほかの何ものでもなかつた。

だが、こうした時代は過ぎた。そしてきこうした日本主義も過ぎ去つた。

日本主義は――少くともわれ〳〵の直覺にのぼつてきた日本なるものは、時代の最先端にあらはれてきた。モボも、モガも、一切のアメリカ的なものが超克したところに。

一番古いものが一番新しいものとしてあらはれてきたのだ――價値の轉換が既にはじまつたといつてもよい。

五

日本は幾度か若返つた。一度行詰まつた日本は西歐化によつてそれ自身を若返らせた。それから、西歐化からアメリカ化へ――日本はアメリカ化のほかに何ものもないと自分はいふた。

だが、問題は最後に殘つてゐる。日本は眞にアメリカ化することができたか、そしてまたできるかといふことの。

アメリカ的野蠻性が今日の日本に缺けてゐるのを見るがいゝ。――見よ、この力のない日本を、痩せこけた日本を、型ばかりのモダ

ンを、生命の樹が失つた新日本を。

ウルワアスには生命があるが、丸ビルには生命のないことを。――ジヤズは眞實には日本化することはないであらう、キネマのために日本人が一週のうち一日を費す時はこないであらう。モダン・ガアルとセエラア・ズボンとは間もく時代後れ――最も滑稽な時代後れとなるであらう。

アメリカ的大量生産、單純化、合理化が、日本の經濟を支配する時がきたるといふの如何なる理由もない。日本はその生活形式においてアメリカ化したにかゝはらず、その經濟生活の根本組織はヨオロッパのそれであり、ヨオロッパ的生産並に消費様式の行詰まりとともに行詰まり、そして今日は正にその絶頂に近づいてきた。

日本はがた落ちだ。量から質へといはれる流行のセリフは、宛かも日本の現狀のために發明されたものであるかと思はれるほどに、われ／＼は今や眞に量から質への、――カタストロフエの時がきた。

アメリカ的日本からして、われ／＼が日本と名づけるものへの間は、決して一筋のなめらかな道ではない。超えがたい斷崖がこゝにある。

今日のアメリカ的量的日本の過程は、正にかくのごときカタストロフエの、辯證法的な準備だ。

準備はできた。――政治が時代に働く力は極めて限られた範圍にとおしこめられた。如何にしてこの巨大な[illegible]ふの不可抗な命運に[illegible]一一[illegible]することは[illegible]かには

辯證法的哲學の代りに、ベシミズムが時代の哲學となるに至るであらう。――ベシミズムは今日は遠く見る哲學であるばかりではなしに、既に實に、それ自身な時代の表現者にまでもちきたしてきたのである。

百パーセント・モガ

大宅壯一

一

A夫人は、日本に於けるモダーン・ガールの元祖である。原型である。少くとも『モダーン・ガール』といふ言葉は、最初、彼女一個人を形容するために、私の友人N君によつて發明されたものである。さすがに尖端的文明批評家であり、又文藝批評家でもあるところのN君によつて見出されたゞけあつて、數年前における彼女の存在は、極めて新奇であり、特異であつた。

今でも、容貌や風采の點では反動的なとまでいはれるほど時代おくれの私などは、たま／＼銀座か新宿あたりで彼女に會つたり出逢ひでもすると、挨拶をするのでさへ、少々てれるくらゐである、まして一緒に散歩したり、

お茶をのんだりする勇氣は出て來さうにもない。

第一、彼女の顏からして日本人ばなれがしてゐる。何でも、一代か二代前は混血兒だつたさうであるが、よく働く大きな眼や、すつきりした鼻筋などを見ると、和服を着てゐても、これでも日本人かと一應は疑ひたくなる。

頭は、もちろん斷髮で、近頃は大抵和服を着てゐるやうであるが、その和服がまた、普通の日本女の洋裝よりも、よほど毛唐くさく出來てゐる。

化粧は恐ろしく念入りで、どういふ過程を經て、あんなにまで微に入り細にわたつてやれるものか、私には見當がつかぬ。實際は案外簡單なのかも知れぬが、眉の引き方から爪のみがき方まで、一分の隙もないまでに技巧的である。

技巧といへば、單に化粧ばかりでなく、彼女の全存在が技巧的である。心の隅々から言葉の端々にまで、彼女獨特のメーキ・アップがほどこしてゐるかのやうに見える。表情や動作はもちろんのこと、脈搏の振動回數にまで、細心の工夫を凝らしてゐるかのやうに見える。

從つて、彼女は非常に理智的である。だが、その理智は感覺化した理智である。刻苦的な努力や深い思索に耐へ、それを通じて現れる理智ではなくて、刹那的に、突發的に、花火線香のやうに出て來る理智である。この理智でもつて彼女は、接する人々に鋭角的な印象を與へ、氣の弱い男性の機先を制して、ひそかに痛快がるのである。

彼女の近代性は、對話の場合に百パーセントに發揮される。彼女は女性らしいつゝましさといふものを全然もつてゐない。決してお愛想をいはない。まづ第一に、相手に向つて、殊にその弱點に向つて、よほど厚顏な男性をも辟易させるやうな、端的な批評を浴びせかける。そしてそれでもつて相手の度膽を拔くのである。

彼女は、一面において、極めて複雜で技巧的であると共に、他面において、頗る單純で率直である。常に文化の最尖端をとび廻つてゐるやうに見えて、實は非常に野性的で、ときにはヴァルガーで、ときにはハーバリスチックでさへあるのである。

彼女の日常生活は、完全に自由である。少くとも有夫の婦人としては、ほとんどマクシマムに近い自由を得てゐる。

彼等の夫婦生活には、嫉妬らしいものが少しもない。少くともないかのやうに見える。お互に、外出はもちろん、外泊でさへ自由である。

果して彼女が、彼女の男を訓練して自分の欲する型に入れてしまつたのか、それとも元來さういふ男であつたればこそ彼女が妻として選んだのか、そこのところは私にはわからないが、彼女の家庭では、夫婦喧嘩といふものがほとんどないといふことだ。

この前、私の友人が彼女と飛び廻つて夜更かしをしたゝめに、彼女は風邪をひいた。翌日、彼女の夫は勤めを休んで彼女を看病しながら、呟いたさうだ。

「この奴はけしからん、Ａ子を引つぱり廻して風邪をひかせておいて、石炭だけ俺にさせるなんて――」

萬事かういつた調子である。彼女は、自分の「お友達」（もちろん異性の）の一人を家へつれて來て、夫と三人で仲よく眠ることがある。「夫」、「愛人」、「お友達」等々の區別を、彼女がどういふ風につけて、どういふ風に使ひわけてゐるのか、私にはさつぱり見當がつかない。

明るくて、朗らかで、感覺的で、理智的で、技巧的で、野性的で、複雜で、單純で、卒直で――たしかに彼女は、典型的な「モダーン・ガール」であらう。

だが、彼女は、眞の意味の新時代の女たるべく、重大な要素を一つ缺いてゐる。即ち、彼女のモダーニズムは徹頭徹尾消費的で、生産的なところは少しもない。夫に寄生して、その寄生生活において許される範圍内で、自由を樂んでゐるにすぎない。寄生者が、被寄生者を逆にコントロールして、異常な寬大さを獲得したにすぎない。彼女の美も、彼女の理智も、彼女の感覺も、籠の中の鸚鵡のそれを想はせるのみである。

そもそも最近流行のモダーニズムそれ自體が一種の消費哲學である。最少の努力と費用とをもつて、最大の刺戟と享樂とをうるために發明されたものである。「能率第一（エフイセンシー・フアースト）」主義の消費生活における適用である。從來の「モダーン・ガール」とは、身をもつてそれを宣傳するところのマネキン的存在である。

二

私はまた、Ａ夫人とは全く反對の型の一女性を知つてゐる。

彼女は、裏日本の一寒村に生れ、小學校の代用教員をしてゐたが、結婚問題で國を飛出して上京した。そして型の如く生活に窮してカフエーの女給になつた。

その頃、今は社會運動の鬪士で當時左傾學生であつた私の友人が、一眼見て彼女に戀をした。だが、二度目に行つてみると、彼女はもうそのカフエーにはゐなかつた。

逢ひたさに友人達が手分けして探し廻つたところ、彼女は或る貧しい[illegible]で間借りをなしてゐた。間もなく二人は結婚した。

それから彼女は、内職をしたり、ショップ・ガールになつたりして夫の運動を扶けながら、自分も婦人鬪士として、多くの女工達の信頼を得た。

數年後、彼女は將來自分の片腕になつてくれさうな有望な婦人を見出して、自分の傍において訓練してゐるうちに、彼女の家庭で三角關係が生じた。

だが、それは彼女の心づかひのお蔭で、少しも外へもれることなく、極めて平和に續けられて行つた。けれども、さすがの彼女も、遂にさうした生活に耐へることの出來ないときが來た。

彼女は、二三ケ月歸郷するからといひおいて、家を出てしばらく私の家に身をかくしてゐた。そのとき彼女は私にいつた。

「家庭を破壞することはちつともかまひませ

んが、今妾達は、妾達の組合の刷新運動をやつてゐる折なので、かういふ關係が外にもれると、折角の運動を停滯させる恐れがあります。だから、この際妾一人が默つて身をひいて、あの人達に反省する機會を與へる外はありません。」

その後間もなく、彼女の夫は、彼の新しい愛人と共に彼女を訪れ、深く詫びて、再び以前の生活にかへつた。

かういふ風に簡單に筋だけ書くと、まるで「キング」式の貞女物語のやうに見えるが、最初からこの事件に接してゐる私には、この三角關係が發生した過程や、その解決法や、解決後の彼等の生活に、今まで全然知らなかつたところの「新時代」を見出すことが出來るのである。

彼女の容貌、服裝、言葉、動作等を外から觀察しただけでは「モダーン」なところは少しも見當らない。彼女が化粧してゐるのを私は見たことはないし、衣類なども人からもらつた地味なものばかりつけてゐる。だが、それにもかゝはらず、私は彼女の性格や生活において、A夫人に見られない何物かを感ずる。

その「何物か」とは何であるか？　それは何から生れるか？

彼女の生活を律してゐるものは、多年の寄生々活によつて慣らされた個人主義的、消費中心的、趣味本位的な生活指導原理ではなくて、集團主義的な、生産的な、意志的な、彼女のいはゆる「運動本位」の生活指導原理なのである。

三

最後に、私はもう一人別な新しい型の女性を、私の親しい友人を通じて知つてゐる。

彼女はまだ十七八歳の少女である。だが、この資本主義末期の社會に、既に數十年若くは數世紀後の生活を生きてゐるやうに、私には見える。

彼女は、西田天香氏よりも早く、更に徹底した「無我の愛」を生きてK地方の聖人とまでいはれたT氏を父とし、わが國のプロレタリア解放運動に於けるもつとも古いもつとも勇敢な婦人鬪士の一人で、目下××黨の被告として未決監に收容されてゐるF女史を母とし、同黨の巨頭の一人を義父として成長した。

彼女は、幼少の頃から、しば／＼母や義父の檢束に伴うて、保護檢束を受けた。この前の大檢擧の際には、六十日ばかりも北海道の某警察署で養はれた。

從つて、彼女には「家庭」といふ觀念がほとんどない。いはゞ、警察や監獄や街頭が彼女の家庭なのである。

「モダーン・ガール」の存在理由は、因襲的な婦人道德や、男女關係や、生活樣式を具ひきつて破壞したところにある。だが、彼女は生れながらにしてさういつたものから自由なのである。

從來の「モガ」の大部分は、模倣か、然らずんばメッキで、つきつめて行くと、どこかで舊時代のぼろを出すものである。だが、彼女は私の知つてゐる唯一の「百パーセント・モガ」である。言葉動作からイデオロギーにいたるまで、極めて自然に、百パーセントに新時代を露出してゐる。

陣痛期のプロレタリア音樂

兼常清佐

私は書齋の中に住んでゐる。そして時にはこの小さな窓から遠く街頭の風物を眺める事もある。生きた街頭の風物は、或は私を喜ばせもするし、また或は私を悲しませもする。しかし喜ばせるにしても、悲しませるにしても、ともかくもそれは遠い窓外の風物である。私はいつもたゞ一人の小傍觀者である。

この雜誌のこの欄の讀者諸君に、はたして小傍觀者のいさゝか眞面目すぎた言葉を聞いてみるだけの寛大さがあるであらうか。——

藝術は大衆のものであるとレニンは考へた。もちろんその考へは正しい。今の世に、藝術は或る特種階級の人だけが獨占すべきものだと主張し得る人は恐らく一人もあるまい。そして音樂も藝術の一つである以上は、言ふまでもなくそれも一般の大衆に開放されなくてはならぬものである。今までは音樂は明かに或る特種階級の專有物であつたであらうが、これからは音樂も、他の藝術と共に、プロレタリエルの手に收められなくてはならぬものである。

今の日本の社會で、この問題がはたしてどの程度まで考へられてゐるであらうか。たゞ一般の理論として、音樂を大衆の手にうつせといふことは誠にたやすい。しかしそれを實行しようといふ事になれば、そこには多くの困難がある。その困難を征服するには、かへつて非常に大きな天才の出現をまたなければならぬかも知れない。その事が私を人事ならず憂慮させる。

私は『日本プロレタリヤ音樂同盟』といふ一團體をきいてゐる。またその團體の宣言なども讀まない事はない。それは作品としても、また考へとしても、正にかくあるべきものである。たゞ早くその實行に取りかゝつて貰ひたい。或はもう少し詳しい實行方法を早く天下に發表して貰ひたい。文學ではすでに澤山の試みが試みられた。戲曲でも小說でも、或は短歌のやうな傳統的な色彩の甚だ濃いものまでも、みな新しいプロレタリエル作家の手にかけられた。そして試みの時代としては、その作品はみな相當に大きな成功を收めた。たゞ音樂だけはまだそのやうな藝術的な試みの試みられた事を聞かない。

今までの音樂の大組織はみなブルジョア階級の音樂であつた。しかしそれに對して何がプロレタリエルの音樂であらうか。音樂はどの點に文藝に表現されてゐるやうな問題な階級意識を表現し得るであらうか、今まで發達して來た音樂の組織や樂器はそのまゝ用ゐてたゞこれを使ふ人、演奏する人、聽く人がプロレタリエルであればいゝのであらうか、それならば或る勞働者の一團が管絃樂隊を作り

同じ勞働者の一人が指揮棒を執つて、勞働者の團體のために例へばベートーヴエンのジムフオニーを演奏したとする。その時我々はそれをプロレタリエルの音樂といふことが出來るであらうか。もちろん、さういふ事も出來るではあらうが、しかし我々の心はそれだけで悉く滿足したとは言ひにくい。

その中から、從來のブルジョア音樂の代表だと思はれてゐるベートーヴエンのジムフオニーをやめて、勞働者の一人がジムフオニーを作つたとしたら、それこそプロレタリエルの音樂だと言はれるであらうか。しかしジムフオニーはたゞジムフオニーである。たゞ音樂器の音の大塊である。樂器の音そのものでは、何の意味も言ひ現はすことは出來ない。それに意味をつけやうと思へば標題を書き入れるだけのことである『階級爭闘のジムフオニー』『社會革命のジムフオニー』といふやうなものである。もしそんなものが出來たとするならば、それは或は極めて痛快なことであらう。しかしそれはたゞ標題だけのことである。それほどならば、ベートーヴエンの曲を初めからこれは階級爭闘の曲であると解釋して聞いても、その差は實質的にはたゞ五十歩百歩の差である。それでも私共の心は到底滿足しきらない。

音樂で意味のあることを言はうと思へば唄より外に方法はない。それならばプロレタリエルの詩人の詩をジムフオニーの中にとり入れて、例へばベートーヴエンの『第九』のやうなものを作つたならば、それこそプロレタリエルの音樂といふことが出來るであらうか。もちろんそれは或る意味でプロレタリエルの音樂といふことが出來るであらう。それは前のどの試みよりも、遙かに多く私共を滿足させるであらう。しかしそのやうなものを作りあげることは決して容易でない。そしてもしそのやうな曲が從來の樂器と、從來の音樂の組織の上に書かれたものならば、やはりその曲は從來の美さの標準と、從來の藝術の價値の標準から批評されるかも知れない。それは新しいプロレタリエルの藝術としては甚だ意味のないことのやうに見える。またそのやうな曲は長い間專門的に音樂上の教育を受けた人でなくては作られない。その上そのやうな組織の音樂ならば、聞く方にもやはり相當の音樂上の素養がいる。それなら今までのブルジョアの音樂と實質上全く同じものになる。作る方にそれだけの素養なしに、しかも從來の音樂組織を使つて、たゞ無暗に自分勝手なものを作り、聞く方もたゞ自分勝手に享樂して、これがプロレタリエルの音樂であるといふわけには行かない。それはたゞ自棄自棄のめちやくちやである。プロレタリエルの音樂は、どうしても從來の音樂の美さと價値とを正々堂々と根本的に置き換へたものでなくてはならない。しかし從來の樂器や樂式を使つて、それで全然價値を置き換へたものを作らうといふ事は、アイスクリームの製造器をまはして汁粉を作らうといふ事に類しはしないであらうか。こゝにもまた私共の人事ならぬ大きな憂慮がある。そして私共は、恐らくまたそれに對して完全な答案は得てゐまい。

私共は今世に行はれてゐる勞働歌や組合歌といふものをよく知つてゐる。私共傍觀者が

それを聞くと、文章がみな昔の軍歌風の文章體で書かれてゐる事がまづ気になつてならない。日本語そのものはやめる事が出来ないにしても、今私共が日常話してゐる言葉のまゝで、どうしてこれだけの考へが言ひ現はせないであらうか。そしてその歌は大抵昔からありきたりの譜を使つてゐる。曲の巧拙は論外だとしても、よく知られた唄の節には必ずその文句が同時に人々の聯想にのぼつて來るものである。一高の寮歌の節を聞く時にはどうしても一高の寮歌の文句も頭の中に浮んで來る。その一高の寮歌の節で、例へば農民歌やメーデーの歌を聞くのは、私共に取つて必ずしも滿足な感情を與へると言はれない。あの歌には是非ともあの歌固有の節が作られなくてはならぬ。そして今は流行小唄が全盛である。あの歌に簡單な譜を置くくらゐは、それこそ誠に容易な事ではあるまいか。少なくてはならない勞働歌や組合歌のやうなものでさへも、まだこのやうな未完成の時代にある。全く新しい美しさの標準の上に、大きなプロレタリエルの音樂の藝術が作りあげられるまでには、まだかなり長い時間が必要であらう。

數年前のドイツには、すでにプロレタリエル音樂大會といふやうなものがしばしば催されてゐた。しかしそれもやはりほんの試みに過ぎないものであつた。諸君の参考のためにその一つの有様を簡單に話してみよう。その會でも音樂はモーツアルトやシユーベルトの様な全く古典的なものを演奏した。そしてその演奏は職業的な管絃樂團に依頼した。それは他のブルジヨア音樂會と全然同じ事であつた。たゞこの會で最も新しかつたのは、大勢の人々が聲を合せて、そのために特に編輯されたいろいろな詩を朗讀した事であつた。朗讀は合唱ほどに技巧がいらない。つまり大聲で文句を言へばそれでいゝ。これは確にプロレタリエルの手によつて發達させられていゝ藝術の形式だと思はれた。殊にその朗讀の最後の節は誠に見事なものであつた。強い照明がだんだんにホリツオントの上に投げられた。それは私共に美しい夜明けの感じを與へた。そして大きな赤旗がその下に押し立てられた。勞働服を着た逞しい男が一人現れて、[illegible]『プロメトイス』[illegible]して叫ばれた力強い反抗の叫びは、完全に聽衆の心を捕へてしまつた。そして聽衆の感激の中にインテルナチオナールが合唱して閉會した。私はこの會場から出た時は、私の感情は疑ひもなく甚だ昂奮してゐた。

しかし私がこの會場から出てシユプレーの河岸を歩く間に、私の心の中にはだんだんと不滿足の影が廣まつて來た。私は結局、これも一つの芝居に過ぎないと思ふやうになつた。第一に貴族ゲーテの詩は、あの勞働者諸君に取つてはあまり關係が薄すぎる『プロメトイス』は古來のドイツの名詩の一つではあるがしかしたゞそれを例へにした時に初めて階級[illegible]の意味が出て來る。それには多少のこじつけの感じをまぬかれない。それにその詩を朗讀した人は、誰もよく顔を知つてゐる國立劇場の俳優であつた。今晩は彼はあの勞働服をぬぎ捨てゝ、國立劇場できらびやかな衣裳で何か流行の芝居でもしてゐるであらうと思ふと、あの[illegible]『プロメトイス』の詩の朗

吟から來た感激も多少割引がしたくたつた。私が家まで歸りついた時には、プロレタリエルの藝術もまだ完成の域から遠いといふ氣持ちだけが殘つてゐた。プロレタリエルの音樂藝術は、數年前のドイツではまだこの樣な有樣であつた。たゞそれに將來の大きな希望が輝いてゐるといふだけであつた。

私は一小傍觀者にすぎぬ。そして傍觀者の言葉は、たいていはいつも甘たのんきである。汗を流し、命をかけて本當に仕事をする人々にとつては、たゞ癪の種になるばかりである。

しかしプロレタリエルの大きな音樂藝術といふ事については、日本ではまだその第一歩さへも確實には踏み出されてゐない。そして今自らその第一歩を踏み出して見ようといふ人があつても、恐らくどうしてその第一歩を踏み出すかをまづ考へるであらう。その考へるといふ事だけをとれば、傍觀者も當事者も同じである。この傍觀者ののんきに見える言葉も、その點でどうかあまり癪にさへずにゐて下さい。——

カクテールの構成分

林房雄

日本のモダニズムは一種漠然としたカクテール文化である、といふ通り相場が今日ではたつてゐる。——だが、私はさう思はない。

それは決して混合酒ではなく、純粹の生一本の文化でもある。もし濁つてゐるとすれば、それは生のまゝで濁つてゐるので決して諸要素の複合ではない。結論を先きにいへば、日本のモダニズムとは、日本の資本家文化の最近相に與へられた「モダンな名稱」に外ならないのである。

つい十年ほど前には、日本は世界の田舍であつた。田舍でないにしても、せいぜい眞中に封建的な古城をもつた、街並の狹い、壁と唐紙の黑い煤けた小都市にすぎなかつた。

世界大戰を通じて、日本は一躍、映畫的なテンポで、世界の都會になつた。所謂六大國から、三大國の列に入つたのだ。アメリカ、イギリスと肩を並べ得るやうになつた。——アメリカと共に、日本は資本主義がまだ登り坂にある國だ、と第三インターナショナルの綱領が指摘する「繁榮(プロスペリティ)の國」になつた。

技術、經濟、社會的生活樣式、政治、の各分野に於て、日本の資本家階級は、漸く帝國主義段階のブルジョアジーとして、一人前の門構と形式をもち得るやうになつた。「合理化」の世界的潮流に乘つて、日本の資本家階級の、少くともその前衛的要素は、最近十年間に急速に近代化したのである。

簡單な例が建築である。帝國ホテルのライト式はもう一時代前のものである。現在は東京朝日、白木屋、北千住の川端に聳える「モダン刑務所」等が、日本の資本家の建築樣式

な代表する。それは、アメリカ資本に次いで強大と、少くとも質に於ては肩を並べ得る。武林無想庵は、フランスから歸つて來て、朝日新聞の建築を見て、その「突飛」さに膽をつぶしたといふ。新興する日本のブルジョアジーは、沒落するフランスのブルジョアジーより遙かに「突飛」であり、しよう洒とし、當世なのである。

　そして、あらゆる時代の文化は支配階級の文化である。——このマルクスの提言は、宇宙の如く常に新しい新時代の日本の怪物としてのモダニズムの底に横たはるものが、近代化した日本の資本家階級であることを知るためには、資本家階級の歴史をモダニズムの歴史とちよつと照し合せるだけで充分である。前者が帝國主義ブルジョアジーの諸特徴を充分な形に於て具へ始めたのは、世界大戰後である。モダニズムもその後の十年間に、急速に芽を出し葉を繁らせた。

　帝國主義ブルジョアジーの特徴は、反動的武裝と寄生的消費生活である。國民總動員國防演習の司令服と、モナコ式祕密クラブの夜會服とだ。彼の表情は何の内容もないだ

　空虚な紳士は、彼の享樂的目的を遂行するためには、決して夜會服の一面を大衆の前に示さない。彼等の標語は「勤儉尚武」であり、「産業と生活の合理化」であり、濱口内閣流にいへば、「緊縮政策」であり、「緊縮生活」である。人民の大衆は、この政策の名に於て俸銀を下げられ、職を奪はれ、支配階級の利權の歩合を高めることの名譽を與へられてゐる。

　そして、この國民的名譽のお陰で、資本家階級の祕密クラブの密室では、アメリカ映畫そのまゝの、そしてトルコの王様のやうな高度の消費生活が繁榮する。

　しかし、今一度、あらゆる文化は支配階級の文化である。——支配階級の密室の中のひそやかな生活は、いつの間にか水の如く街頭に流出し、空氣の如く時代の上空に彌漫して、そこに新しい消費生活、消費文化の雰圍氣をつくる。この雰圍氣が、所謂日本のモダニズムである。だから日本のモダニズムは、その本質に於て決してカクテール文化ではない。特權に惠まれたブルジョアジーの消費文化の反映であり、それは今日では、大衆化である。

　そして、「街頭のジャズ氣分」といふ言葉によつて現はされるあの混亂と奇矯は、近代資本家の消費様式を渇望し、憧憬し、その財布の底の輕さにかゝはらず、兎も角もこれに追隨し、兎も角もこれを模倣しやうとする小ブルジョアジーの同情すべき狂態によつて醸し出されたものに外ならない。——小ブルジョアは常に、だから、こゝでも、卑屈な追隨者であり、才能なき亞流であり、不徹底な實踐者なのだ。帝國主義資本家文化としてのモダニズムは、小ブルジョアの參加によつて、歪み、濁り、奇矯になり、甘つたるい場末の酒場の安カクテールの如き觀を呈してゐる。

　更に眼を轉じてモダニズムの「精神的方面」を見る時、それが近代資本家の生活原理であるといふ私の提言は、一層明かになる。

　教授ゾムバルトは、一九〇〇年に、各國の、就中ドイツ、アメリカの資本家階級を材料とし

して、「資本主義の精髄」といふ本を書いた。その中の第十二章は、「近代の實業家」といふ題目の下に、近代的資本家（十四世紀から十九世紀末に至る舊式資本家に對する意味）の精神的特徴の研究に捧げられてゐる。

近代資本主義の特徴の一つは、高度の科學と精巧な技術を基礎とする大量生産であり、莫大な利潤の「合理的」な追求である。そこで、先づ資本家の心を、先づ絶對的な理智主義が支配する。冷かで非妥協的な理智、一切の情實と傳統とを殘酷に破壊し去る鋭い理性、非人情さ、どんなに新奇でもそれが利潤のために有用でさへあれば、あらゆる犠牲を無視して、彼は古きものの一切を捨てて、新しきに就く。

第二に量の讃美。――お伽噺の巨人のやうに大きくなりたいといふ少年の夢を、資本家の心は持つてゐる。すべて量に於て大きいものが禮讃される。人口、記念碑、ビルディング、飛行船、鐵道の乘客數、そして自殺者の數までが、資本家の精神にとつては、大きい方が美しく、快いのである。カーネギー氏の五十萬圓の快走船は、レンブラントの五萬圓の繪の十倍だけの價値をもつ。

同じ理由から、速力と速度が愛せられる。商品の運搬と交通に於ける高度の速力、勞働と作業に於けるなだらかな速度、それは、近代の資本家にとつて快い。百馬力の自動車、時速三百哩の飛行機は、近代的理想の一つである、自分で乘ることの出來ない連中は、速力の記錄を讀んで樂しむ。「ツエッペリン伯爵」は、豫定よりも一時間早く目的地に着いた。入江水泳選手は、無慮三十二秒世界記錄を破つた。郵便配達が三十分早くなつた。A新聞の支那出兵の號外は、B新聞のよりも十分だけ早かつた。……

ゾムバルトはいつてゐる。――「なんでも大きなことに熱狂する、速力のあることに夢中になる、なによりもまづ記錄破りである。思ふに後世の歴史家は、現代を指して、記錄破りの時代と名付けるであらう。」

同じ原理が、新奇さと煽情性の追求を生む。「未曾有の出來事」とさへいへば人々は有頂天になる。有頂天になるばかりでなく、資本家は、自分でこの「新奇なるもの」と「未曾有の出來事」を人工的製造さへする。商業の必要がそれをさせるのだ。近代的廣告法が登場する。同じ品物を長く使はれては、商賣はなり立たぬ。そこで、「流行」が轉變する。電氣廣告のやうに、フラッシュ・パックのやうにまさに「近代的テンポ」をもつて變色し、轉變する。

資本家はまた「力」を愛する。巨大で丈夫な起重機の腕を愛し、がつしりと實用的な工場を愛し、それに適應して「健全」な勞働者の肉體を好み、そしてムッソリーニの如く「剛膽」な政治家に喝采する。近代の美男が、ジョーヂ・バンクロフトでなければならぬ所以である。

近代資本家は、また自然をもおそれない。自然の支配者の地位に自らをおく。利潤とビジネスの前には、一切の「自然的なるもの」を犠牲にしてはゞからない。例へば、男と女の自然的關係の如きも、彼等にとつては無意味である。彼等は兩性間の「微妙な情緒」をむしろ輕蔑する。そんなものを享樂してゐる

暇なもたぬ。「深刻な」または「甘く若かつた―」戀愛なんぞは、飛行機にさらはれろ！　戀愛や結婚は、必要な時にちよつと金を出せば、どこにでも買つてゐるのである。ビジネス、ビジネス！――近代資本家にとつては、戀愛も結婚も、それがビジネス化した場合にのみ、僅かに存在をゆるされる。

ゾムバルトによつて指摘されたこれらの近代實業家氣質は、現在日本でいはれてゐる所謂モダニズムの基調、その根本思想と正確に一致してゐるではないか。――だから吾々は次のやうに結論することが出來る。帝國主義の寄生生活を背景として、とするが故に、實務的であると同時に華美な近代資本家の生活原理が、廣汎な小ブルジョア層に影響を及し、彼等の熱心な追從者として從へ、社會の各消費面にその姿を現した時、それを日本に於ては、モダニズムと呼んで、謳歌したり、眼をむいたりしてゐるのである。だから、例へば、新居格氏のやうな批評家が、眞のモダニズムは、より高級なる場所に存在することを主張して、世のモボ氏及びモガ嬢の低級さを嗤つても、これは大ブルジョアの近代主義の見地から、その貧弱な模倣者としての小ブルジョアの近代主義を嗤つたのであつて、別に純正モダニズムの積極性と未來性を證明することにはならない。

もちろん、私としても資本家の生活原理であることを認めつゝ、モダニズムが、尚その中に、次に來るべき時代、卽ちプロレタリアートの見地から見て、積極的なるものが全くないことを主張するものではない。例へば、スターリンも、「レーニン主義の基礎」の中で、プロレタリアートの前衛が、ロシヤ人の革命的活力と共に、アメリカ人の實務性を學び取ることを奬めてゐる。

理智主義そのもの、事務性そのもの、尿の讚美、速度禮讚そのものが惡ではない。惡は「道德と傳統に拘泥せず、敢へて千人の犧牲者を殺し得る人物があつたら、百萬弗の月給を拂つてもいゝから雇ひたい。」と公言したジヨン・ロックフエラー的理智主義の中にある。「ツエッペリン伯爵」の飛來に、次の世界戰爭を豫想しなければならないその帝國主義的侵略文明の中にある。

プロレタリアートは、少くともその技術的環境に於ては、近代的ブルジョアジーに最も近接した階級である。高度の科學、精巧な機械、高速度の交通機關、近代的な建築、及び服裝は、現在の不要なる虛飾と奢侈を除けば、ことごとくプロレタリアートの友である。プロレタリアートはこの意味で、（日本人的な誤解を怖れずに敢へていへば）最もモダンで、ハイカラな階級とさへいへるのだ。

日本の現在のモダニズムは、決して一部の評論家のいふやうに、アメリカニズムとルシアニズムの混淆ではない。それはアメリカニズムそのものである。そして、アメリカニズムの實務性を最に繼承し得るものは？――それはスターリンに聞き、ソヴエート・ロシアの現在について見ればいゝ。

そして、日本。――そこではブルジョアジーの徒らな追隨者、無批判な模倣者としての小ブルジョアジーのモダニズムが、都會の十字街にガソリンの如くに匂ひ、農村の白い小路の上にさへ、砂埃りの如く舞ひ上つてゐる

る。——そして、その効用の第一は、漫畫家に對して無限の材料を供給することであり、効用の第二は、支配階級をして、自己の文化的影響の偉大さにほくそ笑ませることであり第三は、かうした祕密を知らない愛國者諸君に、ダンス・ホール撲滅のビラを撒く愛國的機緣を與へることである。——踊るものをして踊らせておけ。

現代アナクロニズム情景

村山知義

ダンスガールが直接嘗間で、働きのない仁丹（映畫館の樂師のこと、小さな穴から一粒づゝ出て來るから）に仕へてゐるとアナクロニズムだといふ。

アスフアルトの上に牛の糞がころがり、はやろ海水浴場でじゆばん腰卷姿の女が水につかつてゐるとアナクロニズムだといふ。

団太郎の車掌さんのスカートの下から赤腰卷の覗ける、新進實業家夫人がチースを食へざる、ジヤズバンドの親方が親孝行なる、バアのマスターが子持ちになる、タイピストが重役と引つつかざる、モダーン・マダムが一ト月一冊以上の讀書をする、モガが早起きなる、モガの亭主が米の炊きやうを知らざる、洋畫家が巴里の流行を追はざる、田中義一が講談雜誌以外の書物を擴げたる、活動屋が映畫を藝術だと思へる、等々のコマゴマしたアナクロニズムを並べた日にはキリがない。

何しろアナクロニズムといふ言葉が單に時代錯誤といふことをしか意味してゐないのだから、見る人の立場に依り、切るべき社會相の斷面に依り、無限のアナクロニズム的情景があり得るわけだ。それに、中世紀のやうな——芝居に例を取れば——マリアの衣裳がただの眞白から、赤や青の色物の衣裳に變る迄に一世紀を費やしたといふやうな悠長極まる時代と異つて、進んでゐる者と遲れてゐる者とのあらゆる程度が同時にあり、仕事の分化が發達して、その程度にまたあらゆる種類がある時代に於いては、アナクロニズム情景も大概の眼ならくらんでしまひ、大概の顏面神經なら怒つたり笑つたりの結果、ボイコットな起こしかねない程フンダンにあり、しかもそれがまるで鼠を保護獸にした時のやうに刻々に後から後から生み出されてゆくのである。

仕方がない。その中のホンの二三を、並べて見よう。

演劇はやる人間と見る人間とから成り立ち、やる人間が偉くて、見る人間は遲れてゐると演劇學の本には書いてゐる。これは藝術至上主義時代の演劇學で、今では觀客こそが演劇を作り上げて行く。藝者とその取卷階級があるからこそ歌舞伎劇が存在し得、封建的な縮木に締められつぱなしの女中さん小僧さん階級があるからこそ日本映畫が存在し得、プロ

レタリアートの強力な後援があるからこそプロレタリア演劇の目覺ましい發展がある。

所で、演劇の發展に不必要な二つの要素があつて、これが遅れた分子、反動的な分子の跋扈となつて、演劇界に於けるあらゆるアナクロニズム情景の生みの親になつてゐる。それは、演劇資本家と政治的壓迫である。

左翼的演劇を支持する層が急激に擴まつたのに驚いた演劇資本家が、これで一儲けしようと目をつけ初めたのはごく最近のことで、こゝから珍奇なアナクロニズム情景が澤山に群がり出す事は充分豫想出來るし、既に二三面白い例もないではないが、こいつはこの次のお樂しみとして置かう。水谷八重子が婦人闘士に扮して歌舞伎座の舞臺から、「無産階級のために」獅子吼する日も遠いことではないのだ！

昇進の途中、何かの都合で、さういふ椅子に腰掛けたお役人、柔道と撃劍と警察新聞で育てられた警察官諸君の、權力を背景にした自由意志がどんなにアナクロニズム情景であるかは誰でも想像出來る。

新宿附近の一段格で我々が芝居をやつた時狂人の譽れ高い警察署長がゆかた掛で舞臺にすわり込んで臨檢し、臺本で許可した芝居の途中で突然立ち上つて中止した際の情景などといふものは並の情景ではない。最近東京での事であるが、或る場所迄來ると初日も二日目も客が興奮して騒ぐので、臨檢の警官はきつとこゝは何か惡い事を云つてるのだらうと察して劇場側に抗議を申し込んだといふ。この間淺草の常盤座での高田保作の「父」の上演は非常な興行成績を收めたが、妙な取り合はせで、井上正夫、河原崎長十郎、川田芳子に左翼劇場や新築地の連中といふ混合一座だつたが、捕手に扮した新劇の大部屋連が井上等一揆の首領者を捕縛して花道を引き上げて來ると、毎日のやうに客席から罵聲が飛ぶ。遂にはすぐ足元から「犠牲者を釋放しろ！」といふ物凄い吐鳴り聲が起つたので、眞蒼になつて大部屋へ驅け込み、「わあああ、日本ももう眞赤になッちやッたア」と泣聲を出したといふ。これが權力を持つと、「理由なんかあるか。斷じてイカーン！」と云ふことになるのである。

「暴力團」などといふ怪しからん芝居を上演してゐる左翼劇場へは何の挨拶もなく、築地小劇場に木刀をかしたとか云つて松竹本社に吐鳴り込んで金一封を頂戴して引きさがつてくる暴力團なるものゝ存在は好個のアナクロニズム情景である。

私の今迄知つてゐた所では、左翼的演劇の削除を命じるものは警視廳と所轄署だけだつたが、聞く所に依ると、最近新派の某名優は「前には社會主義者なんか殺してもあきたらないと思つたが、今となつて見れば、社會主義者の云ふことは本當だ云々」といふセリフを初めとして一頁以上の削除をしてくれなければ役を返上すると云ひ出し、結局、警視廳と興行者の協力の結果、その望は實現したと云ふ。これからこんな役者が段々出來ることだらう。

私は最近ボクシングに興味を持つて、試合があるたんびに見に行く誘惑を感じ、事實見に行くことも少くない。

これは團體的な競技ではないが、體重に依つて階級がわかれ、從つて力の強いことよりも科學的な技術と鬪士に依つて勝負が決しられる。この點非常にいゝスポーツだ。一騎打の勝負だが時間に依つてラウンドに區切られてゐるので、氣分の轉換や、力の節約集中やが複雜に行はれ、しかも結局は相手を立つ能はざる迄にブッ倒すといふことに目的があるのだから、此の種スポーツの最上位に位ゐする資格を持つたものだといふことが出來、從つて近代的なスポーツである。所が、このボクサー諸君が、封建的な意識しか持つてゐないとしたらばどうだらう。これは立派なアナクロニズム情景である。

私はボクシングの試合を初めて見に行つた時、黑シャツ組スポーツ團といふやうな印象を受けた。これは私の僻目である事を斷る。どんなアナクロズニムでも、アナクロニズムは有難たいものではない。

電車の中でよく若いサラリーマンが、謠ひやそれに類するものゝ本を擴げて小聲で練習してゐる光景にぶつかる。大學を出て二年目、胸のポケットからは間違ひなくハンケチを覗かせ、靴下には派手な模樣がついてゐる。これが謠ひを練習してゐようといふのだから一見すぐにアナクロニズムだと感じる。だが、ジャズを口笛で吹きながら、靴の光で小さくステップを踏んでゐたらアナクロニズムでないのだらうか？　どつちも道同じではないか。サラリーメンの中間層的悲哀が東洋的解決に走つたのが謠ひであり、アメリカ的のそれに赴いたのがジャズなのだから。

ツェッペリン飛行船が大變な宣傳と一緒に東京に飛んで來た時、私は或るしらべ物のため上野の圖書館にゐた。上野の圖書館と云へばあそこも隨分長い間罪を犯して來たもので、その時も私は滿員で二時間も待たされた揚句やつと這入れた。せめて千人位ゐは收容出來る圖書館には十年も前にしてゐなければならない事で、今時奇特な讀書子を二時間も三時間もボンヤリ待たせて置く圖書館なんてものはアナクロニズムの權化である。話がそれたが、その上野の圖書館で本を讀んでゐると、サイレンが三度鳴つた、ツェッペリン來るの警報である。ギッシリ部屋につまつて鉢卷で勉强してゐた讀書子も流石に顏色を變えて窓に驅け寄つた。三分の一程は泰然として讀書を續けてゐたが、それも異樣なプロペラの音が頭上に響き初めると腰を上げずにはゐられなかつた。銀色の怪物は何新聞にか書いてゐた谷讓次の描寫とそつくりの愛國的熱情と近代性――科學的重さと遊戲的輕佻さ――を以つて現れて來た。誰も彼も窓から乘り出して、それが後になつて問題になつた航路の方へ去るのを見送つた。所がその時たつた二人だけ、依然泰然たること磐石の如く讀書を續けてゐた二人の男があつた。一人は老ひ一人は若い。彼等は窓の方をさへ見なかつた私はその二人が何を讀んでゐたかを探つて見なかつたのをいまだに悔んでゐる。

劍劇流行の結果、子供達がチャンバラをやりたがつてこまるとは、到る處の家庭で聞く言葉だ。大體この劍劇の流行なるもの、お白

粉を塗つて、眼を釣り上げて、幕府乃至朝廷のために矢鱈と人を切るカテゴリーがアナクロニズムの尖端なのだが、健全な快樂を知らない大人共が之を見て樂しんでゐるといふなら自業自得だが、無邪氣な子供迄が一トふり三十錢の刀を青眼に構えて「ヤアヤア」とか「御用だ」とか云つて人殺しの眞似をする以外に快樂を見出せないといふことになると甚だおだやかでない。

所が外人も外人、或る露西亞人の五つになる子供がその患者となつて、朝から晩まで日本刀を持つて、廻らぬ舌で「ヤアヤア」と叫ぶといふ淺間しい事になつたのである。或る日見兼ねた母親が、そんな人殺しの眞似などするものではないとたしなめた所、子供言下に答へて曰く「フアシストを殺すんだい。日本にはフアシストが多勢ゐるんだもの。」

私は日本の藝術家の中では音樂家と彫刻家が一番アナクロニズム的存在だと思つてゐる。兩方ともただ娯樂のためにあるからだ。音樂家の方は長い間の練習が必要で、しかもこれには相當の金と時間をつぎ込まなければならぬ。そこでひどく値がつちまふ。一番のお得意がブルジョアのお嬢さんと來てゐる。古い曲を弾いてりやあ藝術家でお金になる。お邸廻りをしたり、演奏會で主催者と喧嘩をしたり、そんな事をして日を暮してれば大概アナクロニズム的存在になるのはあたり前だ。

私は或る音樂家で、或るソプラノ歌手が——この女はオキヤンで美人だといふ評判でフアンになる馬鹿も仲々多いさうだ——ステージに立つて唄をうたつたが、その出から引つ込みまでの態度といふもの、唄のうたひ方といふものに、氷のやうにつめたいものを感じた。私は今迄に凡そ舞臺の上で行はれるもののうちで、こんなに冷いものを見たことも聞いたこともない。屍體に觸れたやうな氣持だ。何しろ異常な光景だつた。彫刻家の方はかういふ冷たさはないが、大體愚かしさを發散してゐる。十年一日のやうに裸ん坊を拵えて、ヴオリウムだの面だのと獨りで悦に入つて、センチメンタルな男は「法悦」だとか「幸福なる一瞬の幻想」だとかいふ題をつけ、それがいつた男と女「對作」とでもする[illegible]會の會場なるものは甚だ[illegible]超越した[illegible]であることに相場がきまつてゐる。尤も今年の陳設のやうに、西洋風のも日本風のもみんな小さく置物見たいな風になつてくると、これは工藝品展覽會に近づくから殘念ながらアナクロニズム情景の一方の雄たるわけには行かなくなる。

建築では百貨店や劇場の鐵筋コンクリートの大建築の屋上に何といふ神樣を祭つたのか知らないが木で拵えた神社の模型見たいなものが置いてあるのが甚だ變な具合式だ。尤も某劇場の如きはそいつが屋上で雨ざらしになつてゐるので、それで神樣がお怒りになつたのだといふので、何處か別の處へ遷座させようと云つて騒いでゐるさうだが、新派の不人氣の責任を自らしよはうといふのだから此の神樣餘ッ程犠牲的精神に富んでゐる。

地下鐵道の近代的な上野の停車場のハヂつこに朱塗の御神棚みたいなものがあるのは何のおまぢなひか知らないが、感覺をみだすこ

とおびただしい。

お役人のやることがアナクロニズムの標本に富んでゐることは勿論だが、就中文部省の思想善導案とかいふものは恥しい代物である。明治維新直後の歌舞伎劇は自分の地位を高め、新しい權力者を觀客層に獲得するために絶對權力と結びつかうとしたが、今の映畫會社や演劇會社は別の意味から、即ち、御機嫌をとつて成可く檢閲をお手柔かにして貰ふためと、宣傳映畫や宣傳劇をやつて各省の豫算のお裾分けにあづかるために政府と結びつかうとしてゐる。從つてアナクロニズムの映畫の生れるのも非常に多いのだが、就中教育映畫といふものに至つては甚だしい。科學映畫などはそつちのけで戰爭讃美、孔孟的道德の鼓吹、排外的愛國心の涵養にこれ努めると云つた有樣である。

二三年前迄は子供の意識にさう大きな差異はなかつた。日本中隅から隅迄、國定教科書に書かれ、二十年も停滯してゐる老校長や尋常師範出の教頭や中學出の代用教員やに教へられたまゝの事を有難たく幼い腦髓に疊み込んでゐたものだ。それが最近には勞働者農民の子供の意識と、ブルジョアジーや小ブルジョアージーの子供の意識の間には千里の相異がハッキリと現はれ初めた。小學校教育がアナクロニズム的存在だといふことは三尺の童兒も亦認め初めたのである。

老記者の新聞物語

蘇峰　徳富猪一郎

此度『中央公論』が五百號の記念刊行をなすに就き、島中社長より予に新聞に關する事に就き寄稿を需められた。予は恐らくは最も古き『中央公論』の寄稿者の一人であらう。前社長麻田君、又た『中央公論』編



輯長として、『中央公論』を押しも押されもせぬ日本の大雜誌とするに、與つて最も力の多かつた故瀧田君とは、單に寄稿家と云ふ資格のみでは無く、種々の意味に於て親しき間柄であつた。予が實際政治に若干の關係を持つてゐた明治四十年代に於ては、無名氏の名に依つて屢ゝ予の論評が本誌に掲げられた。而してモーレー卿に關する予の長篇の寄稿は、瀧田君が予の爲に筆記し呉れた最後のものであつた。予は斯る過去を考ふれば、今更島中社長の需めに應ぜずして止む能は無い。

予の先輩記者

草の葉の動くを見ても風の方向を知る事が出來、藁屑の流るゝを見ても水の方向を知る事が出來る。まして新聞の變遷ほど世態の變遷を知るに便宜なるものは無い。新聞紙そのものが毎日世の中の鏡であるが、その鏡の年代的に累積したる變遷は、更に歴史の實物資料とも云ふべきものであらう。即今予が偶ゝ新聞記者仲間の集會などに顏を出すことあれば、知人と云ふ知人はほ

んの指折り數へる程も無い。それ程予は昭和の現代に於ては尊き記者であるが、その予が未だ知るに及ばず、縱令知りても詳かに知る能はざる先輩記者も亦決して尠くなかつた。

× × ×

予の生立つ頃には『日々新聞』『朝野新聞』『報知新聞』これが三大新聞であつた。其後『横濱毎日新聞』が東京に移轉し、『東京横濱毎日新聞』となり、又た『時事新報』が出で來りたる爲に、併せて五大新聞となつた。恐らくは明治二十年頃迄は、五大新聞が東京と云はんよりも、全國の新聞紙界を支配してゐたものであらう。その中で最も有力であつたのは、云ふ迄もなく『東京日々新聞』であつた。これは福地櫻痴居士が社長でもあり、主筆でもあり、所謂る吾曹子の名に依つて、天下の論壇を風靡して居た。此の新聞の背後には、明治十年以前までは、日本に於ける最も穩健なる立憲政治家木戸松菊先生が居た。少くとも福地君は岩倉、木戸、大久保、伊藤其他の諸公に隨行し、米國から歐洲を巡遊した際、多分彼地に於て木戸松菊先生と申合せでもしてゐたものであらう。尤も福地君の記者生活は、戊辰の當時『江湖新聞』なる雜誌を發刊し、其の記事が端なくも東征中の官軍を攻擊したとか何とか云ふことにて、日本の新聞、雜誌界にて、君は筆禍を買ふたる唯一で無くとも、最初の一人であつたかと思はるゝ。

併し『日々新聞』をして有力ならしめたる他の原因は、岸田吟香翁であらう。吟香翁は幕府の末期、柳河春三氏と與に横濱に於て『もしほ草』を發刊したる一人で、記者としての履歷は櫻痴居士よりも、寧ろ舊いと云はなければならぬ。曾ては中江兆民居士は、福地君の文を評して『恰も黑紋付、仙臺平の袴にて押出したるが如し』と云ふたが、全くその通りであつた。如何にも上品であり、明麗であり、立派なものであつた。

岸田吟香翁は、寧ろ軟文學者側であつたが、しかも敍事や記事の文にかけては、天下一品と云ふても宜かつたかも知れない。明治七年臺灣從軍記事の如きは、當時の紙面に於て獨特の光彩を發揮した。

予が福地翁と相知りたるは、翁が『日々新聞』を罷めて、有名なる千葉勝と共に、歌舞伎座を始める際に、若干の同業者と築地の某樓に案内せられた時に始つた。其の後櫻痴居士をして不朽ならしめたる著述『幕府衰亡論』の題目を提げて、予が君を隱家たる築地の某所に訪ひ、其の後數回往來し、又た書信を往復したことも度重りたるが、併し個人的には何等深く交渉は無つた。但だ君は英文にてはギボンの『ローマ衰亡史』日本文では『太平記』新井白石の『藩翰譜』等を賞してゐた。多分そ

の力を得たるものが、是等の本であつたらう。併しながら程の堂々たる大家の風も無く、白石ほどの光焔、氣魄も無つた。併し兎に角新聞記者の文としては上品であり、莊重であり、人を心服せざる迄も、決して反撥せしむるが如き心配は無つた。

岸田翁には遂に言葉を交したことは無つた。翁はヘボン先生直傳と云ふ名義にて、目藥の精錡水を賣出し、それが大いに當り、銀座に樂善堂なる藥店、及び支那書籍輸入業を創め、又た上海にも樂善堂なる藥舖を設け、當時支那の官吏登用試驗に必須なる四書五經などの豆本を銅板にて作へなどして居た。予は銀座の樂善堂にて、支那から輸入せられたる元遺山の詩集を購買したる際、店先きに幕内の角力取りの如き大入道が坐つて居たのを見て、これが有名なる岸田吟香翁であらうと考へた。

× × ×

『朝野新聞』は總ての新聞が五號文字であるのに、單り四號文字にて時代遲れの印刷であつたが、其の時代遲れの所が却つて又た或種の愛讀者を得たる所以であつた。『朝野新聞』の社說は專ら末廣鐵腸君が擔當し、成島柳北君は專ら雜錄なる欄內を擔當して居た。而して末廣君のことを上戸局長と云ひ、自分のことを下戸局長と稱してゐた。雜錄の文には大概濹上漁史のペンネームを以つてした。而して其の題目は、隅田川に於ける燈籠流しとか、或は當時專ら流行する[illegible]、又は伊香保の入湯と云ふ類のことやら、その他雅俗混淆れ有る戲文、戲作の類であつた。恐らくは讀者の多數は、眞面目なる末廣君の論說よりも、此の雜錄の文により多く惹きつけられたものであらうと思はれた。

柳北君も遂に筆禍に罹つた。それは當時井上毅、尾崎三良の二氏が讒謗律、新聞條例などを作りて其筋に言論界に脅威を與へたが、柳北君が殊更に井上三良、尾崎毅と兩人の姓名をチャンポンに綴りて攻撃したことが、忽ちその所謂る讒謗律に觸れた。此の裁判には當時の裁判官も餘程手古摺つたものと見えて、最後には鎌田景弼の手に渡つた。鎌田は熊本の學者にて醉石と號し、なかなかの詩人であつた。而して腹も出來た漢にて成島に對し、言葉を恭々しくして「御身も名高き學者であれば、今度此節は立派に首伏せられては如何」との相談づくにて、流石の柳北翁も我を折つて、そこで其の裁判は落着した。

先年故大倉鶴彦翁が予に話つて申すには、

「木戸サンに就いては面白き話がある。曾つて成島が讒謗律に觸れ、愈々入獄せんとするに先立ち、予の處に來りて云ふには「君も承知の通り予は蒲柳の質である。若き時から乳母日傘で成長したものである。今更ら獄に投せられてはとても生きて

居る望はない。おはれ此際何んとか予が一命を助くると思ふて盡力して呉れまいか」とのことであつたから、予は密かに木戸サンに見え云々の話をしたら、木戸サンが申さるゝには、「歸へりて成島に告げよ。今後は餘り小兒らしき惡戯はするな」と。其後成島は獄に投ぜられたが、幾何もなく放免せられたるを見れば、木戸サンが冥々の裡、救護の爲に骨折つて呉れたものであらうと思はるゝ』と。果して然るや否やは知らぬが、唯だ聽いた儘を此に書いて置く。

×　×　×

予は不幸にして成島翁には面會したことも無きのみならず、他所目で見たことさへも無かつた。唯だ彼の顔が馬の顔の如く極めて長かつたことだけは聽いてゐる。曾つて君の碑を向島に建つるに際し、その選文を信夫恕軒翁に依頼したが、その文に『面長きこと三尺』とか『胸中城府を設けず』とか云ふ句があつたそうだが、例の大槻如電翁がそれを見て『いくら長くとも三尺では餘り酷い。且つ城府を設けずなどゝ云ふが、成島はなか〳〵城府を設けたる漢にて、一見舊の如しなどゝ云ふ事は、とても彼には望まれなかつた。』と云ひ、それから號は恕軒でも、世間では怒軒先生と云はれたる程の信夫翁は、其の批評を聞いて大いに怒り、遂に兩者の葛藤となつたと云ふ評判であつたが、それもたゞ聽いた丈のことであつて、眞僞の程は保證する所ではない。

×　×　×

『報知新聞』では矢野文雄、藤田茂吉、箕浦勝人等の諸氏が專ら論説を書いてゐたが、その以前には古澤滋氏などが影武者として書いてゐたこともあつたと云ふ。兎に角御用新聞であり、且つ漸進主義である『日々新聞』に對し、『報知新聞』は反對新聞であり、且つ急進新聞である。板垣伯などとも或る期間には若干の緣故があつたらしく思はるゝ。而して論説の方では專ら藤田君がその任に當つてゐた樣である。

當時世間では『報知新聞』は俗に云ふ姑の如く、一から十まで政府のすることを鵜の目、鷹の目で見て非難攻撃するが、併しこれは概して政府の病所に當つてゐる、と云ふ評判であつた。併し『報知新聞』をして重からしめた一は、栗本鋤雲翁の筆であつた。翁が當時の『報知新聞』に書かれたるものは悉くとは云はぬが、多く『匏庵遺稿』に掲げられてゐる。鋤雲翁の筆は柳北翁程の輕妙、滑稽、機智、流麗を持たないけれどもが、隨筆體の文としては上乘のものである。翁は詩文は固より、舊幕の典故にも通じ、おまけに本草などにも精しかつた。

翁は舊幕の頃は外國奉行までも勤め、小栗上野介の仲間で

に、最も優ぐれたる一人であつた。されば翁が最も嫌ひの人間が、勝海舟であつたことは、決して不思議では無かつた。翁は佛人レオン・ロセスなど、昵懇の間柄であり、小栗など、深く謀るところありて、恐くは佛國の力を假るべく巴里に赴いてゐた際に、本國では遂に幕府が顚覆して、今更ら爲すべき様も無く、手を空しくして歸つて來たものにて、翁の詩に『白髪遺臣讀禁辭』と云つたのは、陶淵明を藉りて自ら例へたもので、其の心事は寔に悲しむべきものである。

予は栗本翁の文は今も愛誦してゐる。而してその記事中には、史料として參考になるものが、甚だ尠く無い。犬養木堂君などが、自ら門人と稱してその遺稿に序を書いて居たのを見れば、翁は報知社に於ける少壯論者から先生扱ひを享られてゐたものであらう。予は何事であつた乎想起せぬが、翁が親しく日吉町の民友社に予を訪問せられ、二疊敷きばかりの狹き應接間に、翁と對して語つたことがある。予の記憶に依れば、翁は額が秀でておでこであり、何となく煙草屋の看板である達磨さんを聯想せしむるものがあつた。又た翁から書簡を貰つたが、予は大切にそれを保存してゐたが、餘り大切に保存し過ぎて、深く藏めて何處に在る乎一寸見出すことが出來ない。

翁は今申す通り外國奉行であり即ち舊幕末路の外務大臣である。成島君は奧儒者の家にて、[illegible]、當人も騎兵頭を兼ね、瓦解の頃は陸軍總裁であつたかと聞いてゐる。幕府に於ては立派な家柄であり、而して維新後は東本願寺の新法主と相伴ふて海外に赴きたるが、風流の才氣は少壯より甚しく、曾つて『柳橋新誌』を著はし、又た十年の役の際には軍事通信の名義で京都に赴いたが、その方はお留守となり、盛んに橋東の消息を傳へ、それが『京猫一班』として著れた。君は『朝野新聞』の續録ばかりで滿足せず、傍ら花月新誌と稱する雜誌を作り、專ら風流文雅の鼓吹に勗めた。

×　×　×

『時事新報』の根元は、大隈、伊藤、井上、福澤四人の相談にて、いよ〳〵日本に立憲政治を敷くに就いては、適當なる言論機關の必要を認め、福澤翁が自らそのことに當るべく支度最中に、大隈對伊藤井上の間に葛藤生じ、遂に大隈侯は野に下ることになり、その爲に福澤先生も豫期せざる逆境に立たねばならぬことゝなつたが、乘りかゝつた船にて、今更ら已むべくもなく發行されたるが『時事新報』であるとの話を、故早稻田の老人から承りてゐる。

×　×　×

『東京横濱毎日新聞』は、沼間守一君が社長で、島田三郎、肥

堀龍などといふ人々が専ら筆政を司つてゐた。法律家らしき口吻は、此の新聞の特色であつた。

福澤翁も舊幕時代には幕府の俸給を貰つてゐた一人である。沼間氏は最後迄幕府の爲に戰ひ、今市の戰爭などには、頗る土佐兵を惱ましたる幕府側の雄將である。何れにしても當時の所謂る五大新聞なるものは、舊幕出身者、然らざればその緣故者に依つて作られたる如き趣があるのは、不思議に似て不思議で無い。彼等は世間の功名に屈してゐたが、却つて言論世界に於いて、大いに伸びたのであらう。（昭和四年九月二日、民友社に於て）

世界巡禮中に見たる新聞記者と新聞

予が歐米漫遊は今から見れば二た昔、前世紀の末、明治二十九年から三十年にかけ、卽ち一八九六年から一八九七年にかけての事で、飛行機、飛行船は勿論、自動車も活動寫眞も殆んどこれ無き時節であつたから、新聞なども今から云へば全く舊式であつたが、しかも新聞記者たる予は専らとは云はぬが、出來得る程度に於て新聞社及び新聞記者を訪問することを忘れなかつた。最近訃報を傳へられたるサー・アーネスト・サトー氏が、當時英國の公使として東京に居る頃にて、予は大隈侯爵の紹介にて、同氏より先づ『ロンドン・タイムス』のキャッパー氏に紹介せられた。キャッパー氏は當時『タイムス』に於て、サブエデター（Sub-Editor）卽ち副編輯長の役を勤めてゐたが、今日の日本の新聞の組織から云へば、先づ編輯局長と整理部長との混血兒位の處であらう。キャッパー氏の仕事は午後の九時頃から始り、午前の三四時頃に終るものにて、一年の中日光を見て暮すのは、唯だその休暇時間に過ぎなく、その他は全く夜の勤務であつた。氏は英國流の紳士で、當時その夫人と共にクイン・アンス・マンションと云ふ先づ高等下宿屋とも云ふべき所に住してゐた。その同宿の中には有名なるサー・ドナルド・マッケンジー・ウオレス及び有名なるチロル、又た少壯記者としては他日ヂスレリー傳の作者として有名なるモンプニー氏——該書は未了の儘氏が死去したる爲、其後は曾つて『タイムス』主筆であつたバックル氏に依り完成した——等にも紹介せられた。サー・ドナルド・マッケンジー・ウオーレス氏は露西亞通として有名であり、氏が露西亞に關する著作は、予も氏を見る以前に既に一讀して居たから、氏の名は日本に居る時から知つて居た。當時氏は『タイムス』の外報部長であつて、しかも氏の交友は、所謂る雲の上に最も廣く、殊に當時の皇太子、他日のエドワード七世皇帝とは、極めて親密の間柄であつた。固より世界的知名

の記者で、一寸指目たる者では、如何にも老練なる人の後に日受けた。而してその寄宿所には、氏専用のライブラリーもあつたが、詳しくそれを觀るの遑なかつたが、なかなか立派なものらしく思はれた。氏は後に『タイムス』に於て増補したるエンサイクロペヂヤ・ブリツタニカの總裁となり、外報部長の位置をチロル氏に譲つた。

當時チロル氏は旅行中であつたが、しかも氏が東西兩洋を驅廻つて自ら描きたるスケッチの水彩畫は、長き廊下の壁に隙間も無く掛け連らねてあつた。予はチロル氏とは當時面會の機を得なかつたが、日露戰爭後氏が日本に來た際に、屢々會見し、且つ書翰の往復もし、物品の贈答もした事がある。チロル氏は『タイムス』がノースクリッフの手に移るや罷めて、今はナイトの爵を賜り、サー・ヴァレンチン・チロルと云つてゐる。

近年新聞記者としての回想錄なども出版してゐる。其中には東洋及び日本に關することも若干ある。チロル氏は倫敦に來る前には、伯林駐在の『タイムス』通信員であつたが、その時から既に獨逸の野心、獨逸皇帝ウィルヘルム二世の油斷ならぬ氣質など克く洞察して居た。殊に氏は東洋問題に最も注意し、極東問題、印度問題、埃及及び土耳古問題に付き、それぞれその論文若くは著書もある。その文章は名文と云ふ程では無いが、新聞記者の文として最も穩健にして、讀むに堪ふるものである。

予が倫敦にて『タイムス』新聞社を訪問したる時に、當時の社主とも云ふべきウォーター氏は、予に小さきステロ版を出し示し、新聞なるものは活字から直きに刷るものでは無く、紙型を取り、鉛版を取り、しかしてするものであるとて、事珍らしく講釋したが、予はその講釋を聽いて實に啞然たらざるを得なかつた。當時の『タイムス』はバックル氏が主筆で、モーベリー・ベル氏が支配人であつたが、勢力は主筆よりも寧ろ支配人にあつた。予は同氏には面會しなかつたが、キッパー氏其他の人々から彼に就いて屢々聽いた。

× × ×

當時の『タイムス』は記者では立派な人々が揃ふてゐたが、社運は何れかと云へば追々左前になつてゐた。その左前になつて來た主なる理由の一は、モーベリー・ベルの前にマクドナルドと云ふ支配人があつた。彼はピゴットなる風來者から愛蘭黨首領パーネルの書翰を買受けた。これはパーネルが政治的暗殺者に宛てたる手紙で、若しその手紙が眞實であれば、パーネルは全く暗殺の教唆者となり、その連累者となり、彼の政治的立場は全く失墜するもので、小にしてはパーネルに取りて、中にしては愛蘭黨に取りて、大にしては愛蘭自治案を主張する英國自

由黨に取りて、多大の打撃を與へるものであるから、『タイムス』でも固より愼重に吟味したに相違は無つたが、愈々信實と認めてそれを買受け、それを證據にして『パーネルズム、エンド、クライム』なる題目の下に連日引續いてパーネル及び其の黨與の罪惡史を掲げ、又たその手紙の筆蹟を其儘寫眞に撮して、掲載することゝした。然るに世論の囂々の爲にパーネルも餘儀なく『タイムス』を相手取つて訴訟を起したが、訊問の結果、愈々その手紙はピゴットの贋作であることが明白となり、ピゴットは良心の呵責に堪へず自殺するに至つた。これが爲にパーネルがその失つたる信用を回復する利得よりも、『タイムス』が失つたる信用及び有形、無形に受けたる損害は、頗る多大のものであつた。而してマクドナルドもやがて慚愧して病死した。『タイムス』はこれが爲に多大の賠償金、訴訟入費等を拂つたが、その以外に廣く社會に向つて不信用の責を拂はねばならぬものが多かつた。此の如くにして『タイムス』のケチがつき始めたのである。

× × ×

予は又た倫敦に於て、デーリー・ニユース社を訪問した。『タイムス』以外に『デーリー・ニユース』『スタンダード』『モーニング・ポスト』『デーリー・テレグラフ』『デーリー・クロニクル』は、先づ當時倫敦では大新聞と云ふ格であつた。

予が倫敦滯在中は卽今二百萬の紙數を唱ふる『デーリー・メール』も漸く發刊して成立したる迄のことゝて、纔かに中以下のサラリーマンとかの家庭に愛讀せられた位であつた。恐らくは未だ二十萬には達しなかつた。當時『デーリー・ニユース』の支配人は、サー・ジョン・ロビンソンと云ひ、此人が普佛戰爭に際して、アルキバルド・フォルブスなる軍事通信員を用ひ、その爲に大いに聲價を擧げたと云ふことは、有名なる噺である。これが當時に於ても正統なる自由黨の機關新聞であつた。氏は老人にて、社務は氏が總裁してゐた樣であつたが、主筆はクック氏であつた。予はブライス卿の紹介狀を持つてクック氏に面會したが、氏は予をその編輯机案の傍に座せしめ、何やら編輯に、従事しつゝ、予と話をした。氏は牛津大學に於て、そのユニオンのプレシデントに選ばれたる人にて、何人でもユニオンのプレシデントに選ばれたる者は、後來概して立身するものであつた。卽ちその例を擧ぐれば、首相アスキス、外相カルゾンの如きも亦た學生時代に、その位置を占めたる面面であつた。

しかも氏は有名なるラスキンの秘藏弟子の一人であつた。當時『ウエストミンスター・ガゼット』から『デーリー・ニユー

ス』に移り來て未だ幾何もならざる頃であつたと思はるゝ。如何にも見すぼらしき風采にて、口數も尠く、愛嬌も無かつたが、南阿戰爭の爆發したる前後、自由黨には帝國主義派と否帝國主義派との葛藤が生じた。氏は帝國主義派で、その爲に『デーリー・ニユース』を去り、一時は『デーリー・クロニクル』の主筆となつたが、世界大戰當時は、新聞檢閲官として大いに力を揮つた。氏の著作にはラスキン傳、『タイムス』主筆のヂレン傳、ナイチンゲール孃傳等あり、殊に氏の最も大なる勞力は、ラスキン全集の編纂刊行であつたらしく思はるゝ。

× × ×

記者は大陸にも大概ね『タイムス』の系統を辿つて歩いた。『タイムス』の通信網は巴里を本部とし、歐洲に於ける通信の主なるものは、巴里に集め、巴里から更にこれを倫敦に送る仕組であつたらしかつた。而して巴里では世界的知名の老記者ブロウイッツ翁が『タイムス』支局長であつた。翁が伯林會議の時に、その條約文を『タイムス』紙上に素破抜いた話は餘りに行き渉つて、今此に繰返へす必要もあるまい。兎に角伯林では國際的仲買の成功者がビスマーク、外交の成功者がヂスレリーで、新聞の成功者がブロウイッツであるほど事程左樣に有名であつた。

併し予が面會したる時には、ブ翁も最早や當時の元氣は無かつた樣である。氏の助手としては亞米利加人フルラルトン氏が專ら働いてゐた樣だ。ブ翁は頭大に、顔はテラ／＼光り、脚から下は極めて短く、一寸異形に見受けられた。人各々吾が主とする所に偏屓があつて、ブ氏は英佛の間を成可く圓滿にせんことを欲してゐたが、これに反して羅馬に駐在するスチールマン氏は伊太利のビスマルクと稱せられたるクリスピーの肩を持ち、頻りに佛蘭西を攻撃し、その爲にブ氏の巴里からの通信と、スチールマン氏の羅馬からの通信は、常に紙面の上にて決闘してゐる趣があつた。而してブロウイッツ氏はスチールマンを評して、『彼はスチールマン（靜かなる人）で無く、マッドマン（狂漢）である』と罵つてゐた

× × ×

話代つて佛蘭西でも巴里やリオンにて、夫々新聞及び新聞記者を訪問した。その中にて猶ほ記憶に殘つてゐるのは、シエークルと云ふ新聞社にイフス・ギヨー氏を訪問した事である。氏は既に老體であり、しかも地下室らしき薄暗き室に、當時は電氣を使用しなかつたから、多分瓦斯の光であつたらうが、その燈光の下にてコツ／＼論説を認めてゐた。彼は曾つて内閣に入つたが、餘り地方巡察を好むが爲に旅行大臣と綽名さるゝに至

つた。彼は死に抵る迄自由貿易説の雄將として奮鬪した。

又た當時最も發行高多きを誇つてゐた―百萬以上と稱してゐた―『プーテー・ジョルナル』社を訪問し、其處にて今日の所謂る新聞、雜誌社で營む代理部樣の仕組、若くは廣告の標本室などを見た。又た發送する地方に依つて版を取換へる仕組みなども見た。予が歸朝以來、各社に率先して地方版を『國民新聞』にて發行したのは、これが爲であつた。

× × ×

伯林では『タイムス』の支局長はサンダースであつたが、不在の爲に、その助手なるスチード及びベル兩氏に面會した。

ベル氏は上海の『ノルスチャイナ・デーリー・ニュース』の主筆となり、其の歸途日本に立寄りて、東京にて面會し、舊交を溫めたることがあつた。氏はモーベリー・ベル氏の親類で、その姪であつたと云ふ。スチード氏は羅馬の支局長から、維也納の支局長となり、ノースクリッフ卿が『タイムス』を主宰したる際には、遂に『タイムス』の主筆として、頗る羽振がよかつた。今日ではステッドの『レビウ・オブ・レビウスス』を讓受けて、その持主兼主筆となつてゐる。彼は現在英國に於いて、押しも押されもせぬ記者の一人である。

× × ×

予は當時伯林に駐在したる靑木子爵の紹介にて『ベルリーナーターグブラット』の記者ステルクと云ふ漢に、獨逸の新聞に就いて講義を聽いた。これは別段予には有益とも思はれなかつたが、その後ブレスラォに於ける獨逸陸軍大演習の宴會に於いて、獨逸皇帝と露西亞皇帝とが、互に祝辭を交換したるに際し、ステルクが通信員として何れかの祝辭を贋造したと云ふことで、物議を釀し入獄したと云ふことを聽いた。

× × ×

維也納ではラウィノ氏に面會した。これはブロウィッズに次ぐ老大家で、歐洲大陸の政治に就いては、殆んどこれを掌上に運らす如く克く知つてゐた。併し彼の自惚れの程度は、その實力より更に一層の火を加へてゐた。誰でもラウィノ氏に逢ふたと云へば、それではきつと當てられたであらうと云ふことが挨拶であつた。曾つて予がウインに居た頃、同行の深井君と共に、或所で牡蠣を食つたが、一人前七グルデンづゝ取られた。グルデンは先づ、一圓內外であらう。餘りに法外に貪られたが爲に、予は深井君に向つて、

『予は獨逸語は解らぬが、御身は達者であれば、代價づけ位は見て注文されてはよいではないか』抔と苦情を云つたが、扨ラウィノ氏に招かれて、御馳走になつた時、又た牡蠣が出たが、主

人は吾等に向ひ、「君達は此の社説を何處から來たる乎と云ふことを知つてる乎」との言にて、固より知るべき筈も無いから、その旨を答へたれば、氏は長々と社説の講釋をし、「これはベルギーのオステンドから來るものにて、なか／＼その代價も安くは無い」などの講釋が始まり、恰も予等の爲に前日の迷ひを解き呉れたる様な心持がして、深井君と相顧みて苦笑したることがあつた。

× × ×

露西亞では「ノオウレミヤ」のスオリン翁は、猶ほ健在で當時は專ら短評、隨筆の類を「ノオウレミヤ」紙上に掲げて居たが、予は唯だその社を訪問して、其處から刊行物を購ひ來つた。予が爾後民友社から出版したる『露國事情』は即ちその一であつた。今日のレニーグラード即ち當時のセント・ピータースブルグに於ける「タイムス」の通信員は、ドブソン氏であつた。氏は曾つてカルゾン卿と共に、中央亞細亞を旅行したる經歴を持つてゐたが、通信員としての技倆は、氏よりも寧ろ美にして且つ賢きドブソン夫人の方が勝つてゐたといふ評判であつた。兎に角外務省あたりでは、氏よりもその夫人の方が受けがよかつたらしく、夫婦共稼ぎであつた。

× × ×

但し予が大陸旅行中に記者として最も興味を感じたことは、スチールマン翁であつた。スチールマン翁は當時既に古稀を過ぎてゐたか、或はそれに庶幾つたかも知れぬが、皤然たる一個の老翁であつた。その夫人はギリシャ人で年齢も若く、美人であつて、又た畫家としても一通りの腕前は具備してゐた。翁自身も若き時には畫家ともなつて、前ラファエル派などゝも交際があり、殊にラスキン氏とは懇意の間柄であつたらしく、ラスキン氏に關する文字なども、翁から予に與へられたる翁の雜文集にあつた。翁は美術家たることを以つて足れりとせず、或は合衆國の領事となり、或は伊多利及び希臘等に於ける革命的冒險の運動にも加わり、種々様々の生涯を送つた人らしく覺えた。所謂新英州のエマースン、ローウエル、ロングフエーロー、ノルトン教授等は、何れもその親友でなければ、先輩若しくは知己であつた。

翁は一見親の如く、或は議會に伴ひ、或は政黨員が種々畫策するカフエーに伴ひ、或は新聞記者團體の集會若くはピクニック等にも伴ひ、種々の方面に紹介した。翁は何れかと云へば面性男子であり、天才肌の人であつた。他人が燕尾服を着て晩餐に赴く際にも、自分は平氣でフロックコートで濟してゐるといふ風であつた。文章の上手は勿論、辯舌にも玄人の腕前があつ

たから、寫眞なども最も巧みで、予は翁から手寫にかゝる、その政友であるクリスピーの寫眞を貰ひ受けた。予は又た翁の家にて當時ウイリアム・モリスに依つて出版せられたるケルムスコット版のチョーサー詩集等も見ることを得た。爾來翁から或る新聞記者の自傳と題する新刊二册を送り來つたが、やがて恩給を取つて『タイムス』を罷めたものと思はるゝ。翁には美なる娘が二人あつたと云ふが、その一人は彫刻家として倫敦に住し、予もその習作室を訪ねたが、其處にて米國大使ベアルド氏にも面會した。併し其時に他の來客が予に向つて、『御身はサイアムから來た乎』と、予をサイアム人として取扱つたことは、當人としては何等惡意が無つたにしろ、予に於ては尠からざる不快を感じたことを覺えた。（昭和四年九月三日、民友社に於て）

日本に於ける外國新聞記者

日本に來た新聞記者と云ふよりも、寧ろ主なる文士としては、露國使節プーチャチンの書記として長崎に來た者に、露國文學者のゴンチャロフがゐる。又た英國のエルジン卿の隨員として來た者にローレンス・オリンファントがゐる。氏は當時の英國公使館、高輪東禪寺に居て、浪人の斬込み及び其の防禦の現場に於ける活躍中の一人であつた。これ等の古き話は暫らく措き、予が知り得る限りに於ては、米國人ハウス氏、英國人、否な寧ろ愛蘭人ブリンクリー氏を擧げねばなるまい。ハウス君が『東京タイムス』を刊行して、盛んに英國公使パークス氏にあたつたのは、未だ予が書生時代のことにて、予が君を知るに至つたのは、その晩年で、臺灣從軍の結果リユマチスにて步行自由ならず、室内でさへも安樂椅子に車を附けてゐた程であつた。新聞記者としての活動期は、既に過ぎてゐたが、併し其時でも死せる噴火山では無かつた。君は飽迄日本の味方で、條約改正の急務を論じて止まなかつた。而して列國が日本に對する態度の公平と正義とを失つてゐた事を頗る慷慨して居た。君は新聞記者として論說を書くばかりで無く、小說等もよく作つた。又た音樂に造詣があつて、晩年は自らオーケストラを組織して居た。兎に角多材多能の人であつた。

×　×　×

ブリンクリー氏は砲兵大尉であつたが、予が知る頃の彼は『ジャパン・メール』の持主でもあれば、主筆でもあり、又た日本に於ける『タイムス』の通信員でもあり、新聞記者としては殆んどユニックの位置を占めて居た。殊に日本語が堪能で、日本語に關する著述などもあり、骨董などにも大なる趣味を持ち、種

々のコレクションをなし、集めては散じ、散じては集むる間に於て、鮮からざる利益を得たと云ふ評判であつたが、そのことは予の知る所で無い。

當時横濱には『ガゼット』『ヘラルド』などの外字新聞があり、何れも英人の手に在り、吾が當局者も治外法權の時節で頗る困つてゐたに相違は無い。而してブリンクリー氏は、一口に云へば日本政府の御用記者として、なかなか重寶であつたらしく覺える。併し故陸奥伯は曾つて予に語つて、『ブリンクリーは吾等とも關係があるが、李鴻章とも滿更らでは無い。なかなか利き漢である』との意味合を話されたが、予は唯だそれを聽き流してゐたばかりで、李鴻章との關係が如何なるものであつたかは知りもしなければ、知ることも求めなかつた。兎も角も新聞記者として、大記者と云ふ事が出來なかつたとするも、名記者であつたに相違はあるまい。

ハウス君は眞向に太刀を翳し、快劍陣を斫るが如くあつたが、ブリンクリー氏の方は蛇が兎を卷くが如くジリジリと卷付け、動きのとれぬ樣に相手をしめつけた。痛快と云へば勿論ハウスの方であつたが、えぐいと云へばブリンクリーの方であつた。ブリンクリーの文は言葉は何處迄も穩當らしく見えたが、底意地が惡るく、何んとなく恐ろしくあつて、相手としては何人にも苦手であつたに相違はあるまい。しかもなかなか執拗いこく、執念深く、議論でも吹き掛くれば、何時迄でも、彼は御相手に罷り成り、この方が參る迄は止めないと云ふが如き執着力を持つて居た。

× × ×

日露戰爭以前に於ては、我が日本人として、北京駐劄の『タイムス』通信員ドクトル・モリソンの名を知らないものはあるまい。彼は『タイムス』の通信員として、露西亞が滿洲に野心のあるのを嗅付け、その眞相を素破拔き、これを世界の輿論に訴へた。若し我が國民として日露戰爭以前、外國新聞記者に感謝すべき一人あらば、その人はドクトル・モリソンであつたかも知れない。

予は明治三十九年の夏、北京に於て彼を訪ひ、當時名高きモリソン文庫なるものも見、又は彼とも意見を交換した。當時彼の日本贔屓の熱は既に冷却し、日本が露西亞に代つて滿洲に野心を逞しくしはしない乎と云ふ猜疑の念を持ち、予が當時滿洲を經て北京に入りたるを知つて、頻りに滿洲のことに就き予に質問した。爾來彼は英國の味方として日本に對すると云ふよりも、寧ろ支那の味方として日本に對するが如き態度となつた。此に於て恰も佛國の『タイムス』通信員ブロウィッツ、伊太利

に於ける「タイムス」通信員スチールマンとが、「タイムス」紙上に於て、互に反對の意見、反對の行動にて相爭ふたる如く、日本のブリンクリー、支那のモリソンは、又た同樣の葛藤をタイムス通信紙上に於て、繰返した。

當時「タイムス」外報部長たるチロル氏は、兩者の葛藤を調停し、併せて極東の形勢を自ら視察すべく日本に來り、東京に於てブリンクリー、モリソンを會し、三人會議を開いた。其の會議の結果は知らぬが、寧ろブリンクリーに利にして、モリソンに不利ではなかつた乎と思はるゝ。

予は當時三人の會合の席上を撮したる寫眞を貰受け、これを國民新聞社の別館樓上に掲げて置いたが、大正十二年大震火災に燒失した。幾もなくドクトル・モリソンは『タイムス』通信員を罷めて、支那政府の顧問となつた。其後英國に歸へり議員に出る積りであつたと聞いてゐたが、間もなく死んだ。

×　×　×

今日に於ては唯だチロル氏が居るばかりであるが、しかも彼は七十を過ぎて今猶ほ東西南北の人となり、過日は印度のカイロにて病に罹り、一時は危篤を傳へられたが、又た恢復したと云ふことである。彼と同じく英國に於ける老記者の一人スペンダーが彼を評して、

「サー・ワレンチン・チロルは七十六歳の老齢に關らず、その頭腦は依然新鮮にして、其の興味は世界問題に亙り、老軀を挺して、印度及び東洋に長途の旅行に出掛け、自ら實地を檢分してその天職を盡さんとするのは、實に後進の記者に向つての善き模範である」と云つたことは、予も又た同感である。予の書棚には彼の自署して贈りたる書籍がある。彼は新聞記者としては實に驚入りたる忠實の一人にて、曾つて予と新橋から横濱迄同車したが、其間に予に種々のことを質問し、それを小さき手帖をポケットから出し、自ら書留めてゐたのには、予も實に感心せざるを得なかつた。

昔の新聞人と今の新聞人

昔は書くことが主なる新聞の仕事で、今は賣ることが主なる新聞の仕事となつた。昔は主義主張の爲に新聞を作り、それを頒布する爲に餘儀なく賣ることゝしたが、今は賣ることの爲に新聞を作り、賣る爲の引札や看板として、最も多數に好まるゝ主義主張を紙面の上に取込むことゝした。從つて昔は記者あつての經營者であつたが、今は經營者あつての記者となつた。

×　×　×

今日では新聞事業が一種の大なる營利事業となり、電燈會社

や、瓦斯會社や、或は自動車會社、電氣鐵道會社等と何等異る處は無い。公利公益の機關と云ふが、それにしても電氣でも、瓦斯でも、自動車でも、電車でも、何れか公利公益の機關たらざるものある可き。

斯る次第で何れの國も新聞は資本家に依つて支配せられないものは殆んど無い。さりとてその新聞が悉く資本主義を主張すると云ふ譯では無い。持主は極めて少數であるが、購買者は多數である。若し百萬二百萬の購讀者を得んとせば、生一本の資本主義では到底得らるべき途は無い。それで夫等の新聞は、恰もデパートメント・ストアの如く、その紙面に凡有るものを掲げてゐる。統一とか、一致とか、一貫とか、徹底とかいふことは大禁物である。總ての人が讀んで差支へない樣に、即ち下戸も上戸も、金持も貧乏人も、各々紙面の或る部分に滿足する處を見出す樣に作るのが、即ち商品としての新聞であらねばならぬ。されば寧ろその紙面の矛盾、撞着の方が商賣繁昌の方から云へば、却つて仕合せであると云ふ如き趣が無いでもない。

× × ×

英國に於いてチヨコレート・ニユースと綽名を付けられたる『デーリー・ニユース』及び夕刊の『スタール』等は、何れもチヨコレート王キヤドバリー一家が重なる持主であつて、今ではさうでもあるまいが、此頃迄はキヤドバリー家は、クエカー宗徒にて、嚴正なる信者であるから、競馬とか、其他賭事等に關する記事は、一切『デーリー・ニユース』からは禁じてあつた。然るに夕刊新聞の『スタール』は、寧ろ競馬其他賭事に關する記事がその特色の一とも云ふべきものにて、それで實用してゐたのである。そこで反對黨は『同じ持主でありながら、雪と炭、鷺と烏の如き相違をなし、しかも濁りたる記事に依つて實用したる新聞でしこたま儲けつゝ、知らぬ顔して吾等の新聞は淸き新聞であると、聖人振つてゐるのは、僞善の骨頂である』など〻攻擊してゐたが、實際を云へば、斯く攻擊する者こそ、却つて野暮の骨頂とも云ふべきものであらう。

× × ×

何れの新聞も五十歩、百歩で、今日の世間で商品でない新聞は、絶無とは云はぬが、甚だ尠い。何れの國も皆な然りと云つても、大いなる差支はあるまい。英國などでは、新聞で金持となつた者もある。ノースクリツフ、ロサミヤの同胞二人の如きは、其の著しき標本である。而して彼等は新聞に依つて金持となり、又たその金に依つて新聞持ちとなり、又たその新聞に依つて金持になるといふ如き順序にて、自然新聞トラストが出で來る譯となつて來た。

例へば一つの新聞に大なる利益がある場合には、それを株式會社として高く賣りつけ、而して增資する。增資する時には幾多のプレミアムが附く、それは悉く前の持主たる彼等の手に入る。而して彼等は何も知らぬ世間から株金を募集し、その新なる資本に依つて又た新聞を擴張し、若くは他の新聞を買收し、更に又た增資する。又たプレミアムが付く、又た儲けると云ふ如く、殆んど今日は際限も無くなつてゐる。

現に英國の如きは、ロサミヤ子爵、ビーバーブルツク卿、ベーリー兄弟、ハリソン組合等と云ふ仲間に、總ての老舗も新店も專斷せられて居る。此の如くにして新聞は立派な營利事業として成立つてゐる。成立たないものは、唯だ資本の力の弱きものばかりである。（昭和四年九月四日、民友社に於て）

新聞の分業

新聞に關する事業には、自ら三つの分業がある。第一は新聞經營者である。第二は新聞作者である。第三が所謂る記者である。經營者なるものは謂はゞ大なる銀行業者、大なる會社の社長とか云ふが如き特出せるビジネスの才幹を有する者であらねばならぬ。今日世界で新聞の成功者と云ふ人は、新聞を作る人でも無く、新聞を書く人でも無く、謂はゞ新聞を賣る人である。第二の作者と云ふ側には有名なる「タイムス」の主筆チレーンなどがその標本であらう。彼は自己の論文若くは作物としては、殆んど何等後に殘さなかつた。恐らくは、彼が如きが書かない主筆であつたらう。併し「タイムス」の全紙面は、殆んど彼の意の儘に支配し、意の儘に作上げた。即ち「タイムス」のチレーンで無く、彼の在任中はチレーンの「タイムス」であつた。彼は適當なる題目を選んで、適當なる人に申付けた。而して彼は自ら檢閱して、彼の意の如くそれを修整した。彼の在任中有名なる人の傳記抔は、いざと云ふ場合に役に立つべく、悉く出來上つてゐたが、しかも彼はその原稿を屢々には自ら檢閱し、それを常に修整して止まなかつた。

× × ×

第三は書く記者であつて、已れ自ら社說も書けば、雜錄も書くと云ふ類である。斯る者を是迄は所謂る新聞記者と云ひ、その方に飛拔けたる伎倆を持つてゐた者を、世間では大記者と云つてゐた。併し今日では斯る大記者の存在を無用とは云はぬが、寧ろその必要の程度が減殺されて來た。例へば米國のゴツドキン、ギヤリソン抔と云ふは書く記者であり、書く記者の最も秀でた者である。露國に於けるカトコーフ、獨逸に於けるハルデン、佛蘭西に於けるロシフオール、英國に於けるモーレー

杯と云ふ人々は、何れもそれであらう。

併し凡そ新聞人と云ふ仲間には、その要素の分量は異るが、一人にて三者を兼ねたる者がある。例へばノースクリッフ卿の如きもその一人である。彼は賣ることが最も上手であつたが、作ることも上手であつた。而して書くことも向ふ所可ならざるなしといふ程ではなかつたが、彼の書いたものは、決して拙くはなかつた。兎も角も生きてゐた。緊張してゐた。面白く讀ましめた。又た三者を兼ねたる者としては、ステッドの如きが、それであつたかも知れない。

併しステッドは賣るよりも作ることが上手で、作ることよりも書くことが上手つたかも知れない。モーレー卿が『ペルメル・ガゼット』の主筆であつた時には、ステッドは助筆であつた。モーレー卿が休暇を取つて旅行する際には、ステッドが留守師團長を承つて、常にモーレー卿から見れば、脱線的の新聞を作つた。モーレー卿は旅行先から手紙を書いて、『お前の作つた新聞を見れば、予の髮の毛は眞白になる。』とまで云つて寄越したが、まもなくモーレー卿去り、ステッドが主筆の鞍に跨つてよりは、『ペルメル・ガセット』は縱横無盡に驅けまくつて、遂に一個の大勢力となつた。彼は賣る新聞人としては、近代的に於て最も抽んでたる成功者ではなかつた。然も彼は新聞人として新しき問題を發見し、殉教者の氣分で問題を取扱つた。彼は英國海軍の腐敗を曝露して、これが爲に英國海軍の新紀元を開かしめた。彼は又た倫敦に於ける少女賣買の醜怪なる事實を曝露すべく、自ら少女の購買者となつたが爲に、遂に法網に掛つて入獄した。しかも彼の同情者はこれを以つて一種の殉教者的行爲とし、彼の獄を出るや相率ゐて驩迎し、感謝狀を捧げた。彼は英國の輿論に反して露國と提携すべきことを主張し、「露國の眞相」なる著述をなした。

× × ×

英國の新聞界に所謂るニュー、ジャーナリズムを輸入したのは、彼であると云ふも差支へあるまい。併し彼は決して米國の摸倣者ではなかつた。彼は自らその新なる領分を開拓した。彼の得意とする處は、何人も接近することを得ざる人と接近し、何人も口を開かしめ得ざる人に、その口を開かしめて、堂々と天下にこれを公布することであつた。これが卽ち彼の有名なるインタービューであつた。彼の筆は上品ではなかつた。學問の匂も無ければ、詩人の香もなかつた。教養の痕跡、審美的趣味などゝ云ふものは、聊かにてもこれを見出すに難かつた。併し彼の文は新聞記者の文として、實に明白であり、氣焰があり、熱情があり、正義の焰が燃えてゐる如き感を讀者に與へた。予は

英國に於て遂に彼と相見るの機會を失つたが、後に東京に於て彼の子アルフレッド・ステッドと相見るを得た。彼も又た水平を下らぬだけの新聞記者であつた。日本の爲には若干の役目を勤めたものと思はるゝ。

憐むべき新聞記者

新聞が愈ゝ商品化し、新聞事業が愈ゝ資本化し、新聞の支配者がビジネスマンの手に移るに從ひ、記者の立場は追々怪しくなつた。今その一例を物語るであらう。

英國の近代に於て唯一とは云はぬが、重なる記者の一人に、マッシンガムその人を擧げねばなるまい。文章も彼が如く書いて、初めて新聞が文學であり、文學が新聞でありと云へるであらう。ステッドやノースクリッフ等の文は、所謂る新聞記者の文であるが、マッシンガムの文に至つては、實に上品である。而して更に鋭利である。彼は決して鐵腕を天鵞絨の手袋で包むと云ふのではなく、恰も鋭利なる鋼鐵の刄を以つて、他人の見る能はざる早業を以つて斫捲くるが如き概があつた。贊成とか反對とかは讀者の勝手であるが、何人も彼の文には嗟嘆せざるを得ないものはあるまい。彼は大學の教育を受けた者ではない。謂はゞ獨學自習の人であつたが、如何なる大學の名擧ある門戸を潛つたる者も、筆を取つては彼の向ふに立ち得る者はあるまい。予が英國に在る頃は、彼は『デーリー・クロニクル』の主筆で、時恰も希臘と土耳古の間に鬪諍があり、彼はその助筆ヘンリー・ノルマンを希臘に特派し、盛んに英國の輿論を煽りて、希臘を後援し、謂はゞ希臘をけしかけて土耳古と喧嘩をせしめた時であつた。併し希臘と土耳古との喧嘩は、何時でも希臘の負で土耳古の勝となつた如く、その時もその通りであつて、流石のマッシンガムの花火も、消て痕もなかつた。

自由主義『デーリー・クロニクル』が帝國的自由主義に變じ『デーリー・ニユース』が帝國的自由主義より、本來の自由主義に立ち反るや、彼は『デーリー・クロニクル』を罷めて、『デーリー・ニユース』に入り、論説記者となり、若くは議會記者となつてゐた。併し其處も久住の地で無く、やがて週刊新聞『ネーション』の主筆となり、其處にその同志を集めて立籠つてゐた。彼が『デーリー・クロニクル』に居る時分は、政治家を生すも殺すも彼の筆にて自由自在であつたらしい。ロズベリー卿などがメキ〳〵と自由黨の中で頭を擧げ、遂に他の老輩、先輩を押除けて、一時首相にまでなつたのは種々の理由があるが、ロズベリー卿が倫敦市會の議長となつて、その成績が甚だ良く、その時分にマッシンガムがロズベリー卿の肩を持つて、頻

りにこれを書き立て、囃立てたことも與つて力多きにをるといはねばなるまい。彼はその筆にて人の運命を支配する程の力を持ちつゝ、自己の運命を支配することが出來なかつたのは、如何にも同情に堪へぬ次第である。

予はマッシンガムが創刊以來の『ネーション』の愛讀者であるが、當時の『ネーション』は寧ろ否帝國主義の急先鋒にて、自由主義とは云ひつゝも、後には勞働黨に傾いてゐた。但しマッシンガムは社説も書けば、書物の評論もなし、殊に觀劇記事などは、最も手に入つたものであつた。

然るに秋風は此の小なる城にまで吹來つて、彼はその孤城を開渡さなければならぬこと〻なつた。爾來彼は全く三界に家無き漂浪者であつたが、意外にも主義主張に於て相反し、營業の立場に於て相反する『スペクテーター』は、彼に紙面の一隅を借すこと〻した。マッシンガムの文を、總ての點に於て相反したる『スペクテーター』の紙上で見るのは、基督教の説教を阿彌陀樣の前にて聽くよりも意外であつたが、それも長くは續かずして、遂に彼は不歸の客となつた。

× × ×

序ながら話して置くが、先きのヘンリー・ノルマンなる漢は、『デーリー・クロニクル』にゐる前には、『ペルメル・ガゼット』の記者として日本に來た。當時井上侯は之を鳥居坂邸に招待し、凝り屋である井上侯は、柿右衛門とか、鍋島とかいふ貴重なる皿を出し、ナイフやフォークには後藤家の名作たる小つか笄などを適用し、珍らしき馳走であつた。當時予も招かれたが燕尾服着用とのことにて、予は持合せがなかつたから、五十錢を出して赤坂田町の或處からボロ／＼の燕尾服を借受けて出掛けたが、燕尾服に用ゐる白きネクタイも持合せがなく、出掛けて見れば胸に黑色の飾りをしてゐたのは、予と大隈侯だけであつた。尤も大隈侯は燕尾服では無つたかも知れない。當時その會に連つた一人は、先頃不歸の客となつた箕浦翁であつたことを記憶してゐる。今日その會に列した生存者の一人は、多分關直彦翁であらうと思ふ。扨そのノルマンは後には議員となり、如何なるわけであつたかナイトの爵を賜り・サー・ヘンリー・ノルマンと云ひ、自動車流行の初期には、頗るその擴張宣傳に骨折つた樣だつた。其後の消息は聞かない。

現代新聞界の完人

最近世界に於ける新聞界に於て特筆大書しても差支へ無いと思ふことがある。それは本年七月、五十七年間『マンチエスター・ガーデアン』の主筆であつたスコット翁が愈々隱退したこ

とである。固より隠退と云つても翁は其子に跡を譲り、自らも又た取締役の一人として残つてゐるから、全く縁故を絶つたと云ふわけでは無い。唯だ現役から退いたと云ふまでである。翁は本年八十三歳、日本齢で云へば八十四歳であらう。

× × ×

『マンチエスター・ガーデアン』は地方新聞であるが、併しその品位に於ては『モーニング・ポスト』を凌ぎ、『タイムス』と雁行する程である。何人もこれを地方新聞として取扱ふ者は無い。固よりその新聞には地方的色彩は最も濃厚で、常にマンチエスターのチャンピオンを以て任じてゐるに關らず、その視野は實に世界的であつて、或る意味から云へば、その愛國心は寧ろ地方心とも云ふべき狹き地點に固着しつゝ、その眼界は殆んど世界的とも云ふべく廣く、且つ遠く亘つてゐる。

スコツト翁は曾つて議會にも出たことがあつたが、しかもそれもやがて罷め、五十七年間の努力を以つて『マンチエスター・ガーデアン』を盛り立てた。翁は實に賣ることも上手、作ることも上手、書くことも上手、三者に於て可ならざるはなかつた。しかも翁は賣る爲に書かず、作る爲に書かず、書く爲に書かず、その新聞は信念を以つて始終し、主義を以つて一貫して居た。翁は反對黨に向つて辛くあたるばかりでなく、自黨に向つても遠慮はしなかつた。『マンチエスター・ガーデアン』は政治に於てはリベラルであつたが、決してリベラル・パーテー・機關では無つた。リベラル・パーテーは常に此の新聞に依つて教導せられ、啓發せられ、刺戟せられ、誘掖せられた。

翁はビジネスの點に於ては蛇の如く敏くあつたかも知れない。併しその道に非ざれば、一毫もとらなかつた。英人は一體に妥協家であるが、翁は未だ曾つて理由なくして妥協したことは無い。南阿問題に際しては、英國の輿論は七八分通り當時の政府を助けた。然るに『マンチエスター・ガーデアン』は、所謂るプロボアの率先者であつた。新聞の同情は征伐する英國よりも、征伐さるゝボア人に向つて注がれた。されば英國の輿論は『マンチエスター・ガーデアン』を以つて、日本語で云へば、賣國奴と云ふべき程に非難攻撃した。若し新聞を商品とすれば、プロボアの看板を出すなど、は、自滅破産の最大妙策と云はねばならぬ。然るに翁は平氣であつた。此の一事を見ても、翁の信念が如何に牢固であつたかゞわかる。

× × ×

翁は一人自ら然るのみならず、その適材を天下に求めた。即ちアーノード氏の如き、モンタグ氏の如き、何れも比類稀れなる秀逸の記者をして、死に抵る迄、その力を致さしめた。翁の新聞に於ける訓言に曰く、『批判は勝手である。しかも事實を事實とせよ』と。されば『マンチエスター・ガーデアン』は、如何

なる場合にも、議論の爲に事實を曲げず、事實の爲に議論を曲げず、反對の記事であらうが、贊成の記事であらうが、事實は事實として、公平に、確實に、周到に、これを報ずることに勗めてゐた。而して彼はマンチエスターの大市民として、敵味方の差別なく總ての人から尊敬せられた。

× × ×

一九二六年十月には、彼の五十五年間の『マンチエスター・ガーデアン』の主筆としての祝賀、又た八十歳の誕生日の祝賀の爲に、政治、宗教、藝術、文學、科學、實業、其他の方面に於て、凡有る名士からの祝賀狀を捧げられ、又たその胸像を贈られた。これは當時に於て實に稀有の美談であつた。しかるに本年功成り名遂げて去るや、天下を擧げて彼に向つて敬意を表せない者は無つた。その中に於ても、英國皇帝ジヨージ五世陛下は、文事祕書官長をして、左の電報を賜つた。

『陛下は貴下が『マンチエスター・ガーデアン』の主筆を罷められたことを聞召食された。五十七年間貴下は大なる新聞の指導に於て責任を持たれた。陛下は貴下の辭職を歎惜せらるゝも、しかも新聞の歴史に於て未曾有の功勞に對し欣賀在らせらる。』

しかもこれは英國皇帝のみでは無かつた。英國は勿論、有りと凡有る世界の同業者は、皆な彼に向つて感謝し、彼の祝福を祈つた。（昭和四年九月五日、民友社に於て）

老科學者の手記

石川千代松

蛙が好きだつた子供

私が幼少であつた時の記憶は——誰れも恐らくは同じであらうが——誠に不完全で、本當に其當時の事が記憶に殘つて居るのか、又は後になつて誰れかから聽いた事を、自分の記憶の樣に思つて居るのか、夫れは判らない。少なくとも科學的に夫れが何れであるか、證明する事は出來ないのである。例へば私は萬延元年一月八日に本所の緑町で生れたのであるが、二三四歳の頃から蛙が大層好きで、保姆に負さつて合羽乾場に住んで居る知人の家に行き、蟾蜍を貰つて來て、宅の庭で能く遊んだものである。その事は、私が大きくなつて動物が好きになつてから、母が能く話した事だが、夫れを私は自分でも覺えて居る樣に思ふ。併し、それが私の記憶にある筈はないと今では私は考へて居る。又私がチヨロチヨロ歩き初めた頃、父が大事にして居た茶呑茶碗を投げて毀した事も覺えて居る樣に思ふが、これも私が多分後になつてから、母からでも聽いた事であるだらう。

併し、私の頭に深く浸込んで居る事で、今でも思ひ出すと明かに腦裡に現はれるものが一つある。夫れは私が四歳の時、私の大きな兄が死んで、棺桶で宅の門から出て行つた時の事である。其時まだ兄の死んだ事は良く解らなかつたが、今迄床に居た兄が桶に入れられて、何處へか連れて行かれるのだと云ふ事丈けは私は知つて居た。此兄は當時十六歳だつたが、私を大層可愛がつて呉れ、自分が古に出かける前毎朝私に三字經を教へて呉れ、歸つて來て夫れを覺えて居ると、何にか玩具を下さつたのが大層嬉しかつたので、私は今でも夫れを覺えて居る。

夫れから少々前の事だと思ふが、私の兄や姉が痲疹にかゝつたので、私丈け別の部屋へ入れて置かれた處、私も直きに感染したので、兄妹ともう一緒に遊んでも宜しいと云はれても、私は感染るのがいやだと云ひ張り、元の一室に這入つて居て家人を困らし、又自分も困つたのである。

私の父は當時杉田玄伯、玄端兩先生とも懇意にして居たので、私は當時既に種痘をさせられた。其跡が今でも右の二の腕に二つと左の二の腕に三つ殘つて居る。今日では二の腕に種痘はしない樣だが、當時はこれに植えたものと見える。

又當時私は虚弱だつたので、杉田先生の御勸めに依り、毎朝未明に井戸端に行き、釣瓶で一杯ぐらゐ頭から冷水を浴び、夫れから裸體の儘五六間の處を十回位走らされたが、夫

れが私の健康に大層好い結果をもたらした様である　此水を浴びることは其の後二十歳頃迄續けたけれども、走る事だけは止めた。但し冷水浴は始めドイツに留學した時分まで續けてゐたものである。處がフライブルグの水道の水は冬になると餘りに冷いので、或時ウホーデルシヤイム先生から、餘り冷い氷の様な水を浴びるのは宜しくないと聽かされたので、冬の内は水浴を止め、冷水摩擦だけを行つて居たのだつたが、明治二十二年に歸朝してから、又井戸水の冷水浴を始めた。併し、それも私が四十歳になると再び冷水摩擦に變へ、五十歳位の時二度目にドイツへ行つた頃から、夫れも上半身丈けにして、今日でもまだこれを續けて居るのである。

少し話が飛んだが、私が六七歳の時漢學の先生の處へ通つた頃は、徳川の代も末になつたので、世の中が頗る殺伐で、子供の喧嘩などが能くあつたものである。私は兄や兄の友達の爲めに能く囮に使はれた。此囮と云ふのは、宅の門の内に兄や其他のものが、石灰など澤山持つて隱れて居て、私丈け門前で立つてたり、他の子供等が通るのを待つてゐて、惡口を云つたものである。向ふの者が夫れを怒つて私を擲りに來ると、大勢門の内から出て來て、戰ふのである。斯様な時に私は大概頭の一つ位は擲られたものである。私も五才になつた時、父から拔ける刀を渡されたので、夫れでもつて他の子供の頭を打つたため、前額に大きな瘤を出さしたので、宅へ歸る事が出來ず、晩になる迄父の知人の家に隱れて居た處、母が來て連れて歸らされ、大層叱られた事を覺えて居る。又正月であつたが、私が門前で凧をあげて居た所へ裏金の陣笠を被つた立派な侍が馬丁を連れて通りかゝつた時、凧の糸が折惡しく其侍の首に引つかゝつた。處が其侍は靜かに凧の糸を首から取り除したにも係らず、後から附いて來た馬丁が糸を引いて凧を滅茶苦茶に毀して仕舞つた。其の後その馬丁が私の宅へ來て、自分は今日此家の子供の凧が殿様の首に引つかゝつたため、屋敷から放逐されたので、どうかして呉れと云つて、怒鳴り込んで來たけれども、宅の用人のために散々擲られて逃げて行つた。その當時、私の父は可成な役人であつたが、家が貧かつた爲め、誠に見すぼらしい屋敷に住んで居たので、馬丁は知らずに怒鳴つて來たのだつた。けれども私の父の事を其侍も知つて居たので、翌日向ふの用人が詫びに來た。

當時私の父の家は高田早苗君の伯父である高田さんの屋敷の一隅にあつたので、高田君とは其當時から知り合つてゐた。それ故に今日居る友人の内では同君が一番古いのである。其後英語學校で高田君は私より一級上に居たが、明治九年に開成學校へ入り、科は違つたが、明治十五年に東京大學も一緒に卒業したのである。

勝安房と私の父

話は又後へ戻るが父は明治の直き前に御目附けと云ふ役に成つて、勝安房さんの下で働いた事がある。當時同役には加藤弘之先生も居られた。此の勝さんとは父は以前から知つて居た。夫れは如何なる關係だか、私は能くは知らなかつたが、勝さんが或る時私に話して下さつたのによると、勝さんと父とは子供

の時から、私の母の伯父の朝川善庵先生に漢學を學び、又劍術も柔術も相弟子であつたとの事である。夫ればかりでなく父の母の里の大塚の事を勝さんは大層能く知つて居られて私に話して下さつた事もある。これにも面白い事が澤山あるが、玆には書くまい。父は若い時から病身であつたので、夫れ程出世しなかつた代りに、又御維新後迄生きて居たのであると父は常に話して居た。私の覺えて居たのでは父は大概床の上に居た。夫れから父の柔道の先生は誰れであつたか知らないが、劍術は小谷下總守と云ふ當時將軍御指南番であつて、しかも父は其高弟であつたと云ふことである。父の學問や武藝に付いては、勝さんが面白い事を私に話して下さつた。夫れは嘉納治五郎先生が講道館を開かれた時、品川、勝と云ふ様な方々が來て居られた。其時私も御招待を受けて行つたが、或る一室に嘉納先生が勝、品川、其他二三の方々と話して居られた。私が偶然其室の前を通り、勝さんに挨拶をした處、まあ這入れと云はれたので、私は勝さんの前に坐つた處、勝さんは私を他の方々に紹介して下さつて、此男の父は自分と文武の道を一緒に學んだけれど、何れの點に於ても自分より一段上であつた。ただ病身であつたので、出世しなかつた事は惜しかつたと申された。

勝さんの事を云つた序に、今少し話を續けるが、私の宅には、今でも勝さんの書いた、半切の掛物がある。これは勝さんが若かつた時、三崎で書かれたものだと私は父から聽いて居る。その話に因ると、私の父は或る時長崎の傳習所の長が缺けたので、其代理を勤めた事があつて、其頃勝も傳習所に居て、以前から父と懇意であつた故、その時に書いて貰つたと云ふ話である。斯様に父は勝さんとは御懇意にして居たので、御維新の時には無論御一緒に働くべきであつたが、前にも云つた様に病身であつたので、維新の前年に隱居願ひを出して、當時巣鴨の大根畑と云ふ處へ引き移り百姓になる積りであつた。處が上野の戰爭が始まり、官軍は四方から續々江戸へ攻め寄せて來た。宅では兄は家を繼ぐべきものであるからと云ふので、讃岐の伯父に托して高松へ連れて行つて貰つた處大根畑の家も危險なので、妹は牛込の親戚へ行き、當時八歳の私が父母と一緒に大根畑の家に殘つた。處が或る日父が床に居た時勝さんが見え、板橋へ來た官軍に應待する人がないから、是非行けと云はれた。併し父は病床にあるし、又自分は既に隱居したからとて斷つて見たが勝さんは中々聽かれず、遂に出かける事とはなつた。父の持病と云ふのは痔で、其翌日から病を押して乘馬で行く事になつた。此時勝氏は供の者を幾人でも連れて行つたならどうかと云はれたけれど、父は斯様な事には單馬で行くのが宜しい。ただ馬丁を一人連れて行けば澤山だと云つて、無理でもあつたが、翌日から數日間乘馬で板橋へ通つたのである。當時板橋へ來られた官軍の大將は誰れであつたか、私は知らない。(歷史を調べたら直ぐに解るだらう)それは私が僅かに八歳であつたから能くは覺えて居ないのである。夫れからと云ふものは父の病氣は日毎々々に惡くなつてゆき、數日の後には病床から起きる事も出來なかつた。それが勝氏に通じたのであらうか、

或る夜母さんは一人の醫師を連れて、宅へ來られ、醫師に診察せしめた後、これではトテモ駄目だと云ふので、夫れから後は父は板倉へ行かなくなつた。父が官軍の大將と應待した様子などは、子供だつた私には何にも話されなかつたが、或る時父が母に話したのを私は聽いて夫れが非常に怖ろしく感じたのを今でも覺えて居る。夫れと云ふのは、官軍の大將は、遙か向ふの牀机に腰をかけて居て、夫れから七八間の路筋には中央を一間位明けて兩側に拔刀の兵士が十人位も直立して居た其間を、單身で進んで行くのは餘り良い氣持のものではないと父は云つて居たものである。

私が自然に親んだ動機

併し、此巣鴨へ引き移つたことが、私を自然に親しませると云ふ深い印象を與へた。夫れ迄は本所の家込みの處に居て草や木の若々しいものを見た事がなかつたのに、巣鴨へ來てから、野に咲く草花や、花に來る蝶や、蜂だの又大根畑に居る井守などを見て大層面白く感じたのである。殊に私の父はフランツ・フォン・シーボルト先生を知つて居たので、博物學にも興味を有つて居て、宅にも大和本草だの、本草綱目などもあつたし、又地球説略と云ふ漢文の譯書も、圖譜もあり、博物や地質に關するものもいくらかあつたため、之れ等に依つて私も子供ながら、自然を見て樂しんだものである。

此の自然に親しむ事が、夫れからまもなく父に連られて駿河へ行つたため一層深くなつた。夫れと云ふのは、父母が巣鴨へ移つてから翌年だと思ふが、私と父と遠い親戚に當る人と一緒に母と妹とを殘して一足先きに駿河へ行つたのである。

其頃の旅であるから、第一日には巣鴨から徒歩で、神奈川迄來て一泊し、翌日宿を出た時、私は石に躓いて轉び、膝を怪我したので、駕籠に乘つて大磯迄來たが、平塚と大磯の間に見える山を駕籠屋が、坊ちやんアノ山は山の字の山だと教へて呉れたのを此一週間計り前汽車で通つた時にも思ひ出した。それで三日目には大磯を立つたが、私の膝の痛みも良くなつたので、又歩いて箱根の宿で一泊し、其翌日の晝過ぎ狩野川の岸の戸倉村に着いた。此戸倉村は、天城山の直ぐ南で狩野川に面し、當時は鮎狩の名所であつた。此鮎狩と云ふのは舊の十一月末頃に村の者共が大勢出て、川の上下から網を寄せて來て、一ヶ處に鮎を追ひ集めるのである。之れが大概午前の仕事で、晝飯を濟ませて後、銛の付いた長い桿を持つて船の上から水底に居る鮎を突くのである。これが中々六づかしい業で一番巧みなものは其脊筋の處に突き當てるのだが、斯様にして突かれた魚は、延髓を傷けられるから、運動力を失ふその鮎を早速笹に包んで、馬で東京迄運んでも、まだ生きて居るとの事である。

何れにせよ、此鮎狩は此邊の村では其當時は全村の老若男女總出で、まるで御祭騷ぎの様であつた。

私共が此戸倉村に居る間にも、父は病氣に悩まされて居たので、毎朝早く起きて、或は野原に、又は山林を散歩して、色々の草物を集め、庭に植えたり、又は押葉を造つたものである。之れ等が又私に動植物の趣味を有た

せたものであると私は思つて居る。

戸倉に一二ケ月居る間に母も妹も弟も來たのでやがて東海道筋にある長澤村の貸川五兵衛と云ふ名主の家へ移つた。

其の當時の私の教育の事を話して見ると、無論小學校はなかつたので、色々の先生に別々に教はつたものである。夫れより前江戸に居た時も同樣であつたが、長澤村に居る頃には漢學、習字、劍術等も色々の先生に習つたが、夫れから直きに、父は相州橫須賀へ行く事になつた。

此橫須賀行は父が小笠原郡の助役を勸むる事になつたからで、其時の郡長は前に云つた小谷下總守の養子であつた。此橫須賀では直ぐ裏の山に松茸が澤山生へるので、之れを狩るのが面白かつた事は今でも記憶して居る。父は此橫須賀に半年余り居た後、駿東、富士兩郡の郡長となつて今度は元の長澤付の隣村の八幡村に引き移つた。八幡村の此家は水野下總守の陣屋で、夫れが郡役所の官宅になつて居たと思ふ。此陣屋の一隅には賴朝が旗をかけたと云ふ杉の古木があつたし、又賴朝と義經とが對面したと云ふ石が二つあつて、其の傍に拗れた柿の樹が立つて居た。此木の拗れて居るのは當時賴朝と義經とが、柿を食べて其種を拗つて棄てたので、それから拗れた樹が生へのだと云ふ。ヴイスマン先生に御聽かせしたらばさぞかし悦ばれる事であらう。

八幡村の陣屋に居た頃、私は漢學を小林と云ふ先生に教はり、習字を有坂先生(今の工學博士有坂鉊藏君の御尊父)に、又英語を三谷と云ふ先生と、沼津に居られた乙骨先生とに教はつたのである。

當時石井郁齋と云ふ醫師が近くに居て、此人は魚を捕る事が大層好きで、私も能く、連られて鮎捕りなどに行つたが、其頃狩野川の大瀨の下で秋に卵をもつた小さな雌魚の居るのを見た事があつた。これは今になつて考へて見ると、琵琶湖の小鮎と同一物である。又其頃から私は少しづつ蝶々を集めて居たのであるけれ共無論それを整理する事は知らなかつた。

下妻金八氏の武勇談

水野の陣屋に居た頃に面白い話が一つ二つあつた。其一つは、父の下にゐて、郡役所に勤めて居た人で、下妻金八と云ふ人が居た。此人は其頃二十七八歲の青年であつたが、容貌から體格迄まるで、婦人の樣であつた。夫れでありながら、劍道は榊原鍵吉の一番弟子で私の父より一段上であつた。處が當時前に云つた貸川五兵衛の宅に彰義隊の負け武者が十四五人も居て、其の頭のものは、たしか、榊原と云つたと思ふが、彼れは父と同じく小谷先生の門人で父から見ると遙かに下の方に居るものである。彼れ等は今日の主義者が政府の者を怨む樣に父を怨んでは居たが、父には決して手を出さなかつた。處が下妻君は大層弱さうに見えるので同君が五兵衛の家の前を通ると、色々な事を云つて、からかつたのである。併し下妻君は何時も靜かにあしらつて決して相手にしなかつた。

一日五兵衛氏が父の處に來て云ふのに、昨日は大層心配をしましたが、下妻さんは實に偉い。夫れは昨日丁度宅に居る彰義隊の者共が劍術をやつて居る處へ下妻さんが通りかゝ

つた。すると、頭の榊原が出て下妻さんを捕へて、否應なしに引きずり込み試合をするようにと强要し、下妻氏は再三斷つたけれど、聞き入れぬため遂に一二本やつた處、榊原迄が酷くやられて仕舞つた。すると卑怯にも今度は繩がゝりでやろうと云ふので、面の上に竹を付け、これを割られたものは負け、夫れに又竹刀を打ち落されたものも負けと云ふ約束で、裏の廣場に出てはじめた處、夫れは實に武勇傳にでもある樣に、瞬く間に何れも皆下妻さんの爲めに、或は面の竹を割られ、又は竹刀を打ち落されたが、隊長の榊原と今一人の强い者とを殘して置き、しまひに此二人をもしたたか擲り倒したのであると、五兵衛は父に話した。序に云ふが私は此の下妻氏に約一年程劍術を習つたが、不思議な事には明治十五年に榊原鍵吉先生を東京大學で招聘した時、私は初めてであると云つて、先生の竹刀を十本計り打つた處、貴公が初めてだとは噓言だ、何處でも構はず打つて來いと云はれ、稽古が濟んだ後、誰れに敎つたかと申されたので、下妻先生に少し敎りましたと申し上げた處、さうであるだらう、貴公の打ち方がヲシの流儀だからと申されたのには驚いた。

今一つ面白い事は、彰義隊の内には、父の預かつて居る郡内で强盜、强姦等あらゆる惡事を働くものがあつたので、父の家には毎日早朝から夜中まで郡山の百姓達が訴へて來るので、夫れ等惡人等を捕縛して、罪の明かなもの二三十人を沼津の役場で死刑に處した。無論其の前には彰義隊の取締の某氏には一應かけ合つて見たが、一向構はないため、彼等を死刑に處したのである。處が大いに物議を起し、此の取締りの人(歷史では實に偉い人の樣になつて居るが)の所へ怒鳴り込んで來て、遂に果し合迄する處になつて逃げて行つた事があつた。

工學寮入學の失敗

これ等の事から父も其後再び隱居して暫く長澤村の一隅に一家を構へて居たが、明治六年だと思ふ頃、私達を勉學の爲め東京へ出して呉れ、翌七年に父も母も東京へ來たのである。

私が東京に來た時には新橋と横濱間の汽車が出來かゝつて居たので、妹と二人で、六鄕の橋を人力車で渡る時に、車夫がおれが今度出來る汽車の橋だと云つて敎へて呉れた事を今でも覺えて居る。

東京へ來てから叔父が開いて居た進文學社へ入學したが、其後一度工學寮の試驗を受けたけれどこれは失敗した。此の失敗の事で一寸變な事があつたのは、私は答案を大概出したのに隣席に居た一人のものは、白紙同樣のものを出したのに此白紙を出したものが及第して、私も、私の反對の隣りに居たものも落第したので、此の男と話し合ひ學校の方へ八釜しくかけ合つたが、無論御上の威光で叱り飛ばされて仕舞つた。併し或はこれが私には反つて幸ひであつたかも知れない、當時は何も知らず、ただ命が無くても學問が出來ればと思つてゐたのだつたが、自分が工學の樣な學問に適して居ない事は確である。此試驗が斯樣にして駄目であつたから、今度は外國語學校へ試驗を受けに行つた。此時は早く死んだ法學士の井原君と一緒に行つた。其の途中

井原君が、ただ開の一字が欲しいものであると云つた事を覺えて居る。無論私が說明する迄もなく、此開の字は開成學校の生徒の帽子に附いて居た徽章であつた。私も井原君も此試驗に及第して、私は外國語學校の六級下と云ふ級へ入れられた。併し、當時は誠に自由なもので、何んでも成績が良いと思はれると學期の眞中でも何んでも構はず教師の考へ次第で上の級へ上げても吳れたし、又其反對に出來ないと思はれると、下の級へ落される事もあつた。私の級の教師がフリーマンと云ふ人で、通譯が森梓吉先生であつた。或る時リーダーの譯の時、クリケットの事を森先生が變な名前を云はれたので、私は夫れを質した事があつたのと、ミスとミセスとを森先生が如何なる譯かアベコベに考へて居られたので、私が間違ひであることを指摘した處、翌日の晝だと思ふが森先生が一寸教員室へ來いと云はれたので、必ず叱られる事と思ひ、怖々先生に付いて行くと、君は今の級には少し出來過ぎるから、教師と相談の結果上の級に上げる事にしたと申され、大層嬉しかつた事があつた。それから直きに英語の方が外國語學校から別れて英語學校となつたが、別にこれと云つて書く事もない。ただ上の級にフイリップと云ふ眞紅な顏の教師が居て、毎朝先生が教室へ入つて來ると生徒達がグウド・モーニング・サルと云つた。先生は之れを聞いて氣持を惡くしてゐられる處へ飯島君が、後から一人でグウド・モーニング・サルと云つて叱られたのと、私の下の級の教師のマク・アーサーと云ふ亂暴な教師が私の級の佐久間君を擲つて大騷ぎをした位の事であつた。

蝶の採集とミスジ蝶の發見

當時父母の家は巢鴨にあつたので、私は毎日其處から一つ橋迄通つたが、夏は午過ぎに歸つて來ると直ぐに出かけて蝶々の採集をしたものである。實際其頃巢鴨は本當の田舍で近處に密林も澤山あつたし、又野原も多かつた。であるから昆蟲の採集には大層都合が好かつた。併し本當に、又幾らか學術的に昆蟲の採集を始めたのは私が四級を終つてからである。當時四級の受持教師がモンタギユウ・フーサー・フエントンと云ふ先生で、此先生は當時の外國教師としては實に立派な人であつた。其頃の他の教師の内には隨分いかゞはしい人も居た樣で、今云つたフイリップの如きは英國でフエントン先生の屋敷へ來た事のある大工の小僧だつたと先生が憤慨されて私に語られた事がある。處が此のフエントン先生は其の後歸國されてからもケンブリッヂ大學でプライベート・チウターをして居られた位であるから、大工の小僧とは餘程違つた人であつたに相違ない。

夫れは兎も角、先生の級を終つて夏休になる前、先生が我々に少し遊びに來ないかと云はれた。私は其翌日早速先生の御宅へ伺つた處、澤山の蝶蛾が箱の内に列べてあつて、又夫れに一々學名迄書いてあるのを拜見した。此時私は飛び付きたい樣な感がして、先生私も蝶々を集めて居ますと申し上げた。之れには先生も一寸驚かれた樣で、どうしてお前はそんな事をして居るのか、蝶々が好きなのか、では自分に一つ考があるが、どうだらうか、自分は夏休みには方々へ蝶々を集めに行く其

の都度通辯を雇つて行くが、通辯の内には中々悪い奴が居て困る事が多い。お前が蝶々が好きならば、自分と一緒に行かないか。旅費は無論自分が出すが、夫れでも通辯を傭ふよりは安い。其上同じ種類のものを五疋捕つたら一疋か二疋お前にやる。斯様にして約束が直きに出來、其の夏から先生と一緒に行く事になつた。併し其翌日には自分の集めた蝶々を先生の御宅へ持つて行き、終日夫れに名を付けたが、其内に一疋珍しいものがあつて、フエントン先生も持つて居なかつたので、先生は此の蝶は珍しいからバットラー氏へ送り度いが、僅かに一疋ではお前も手放すのは嫌だらうから、お前は一つ此の蝶を寫生してくれて、其間に又本物が捕れたならばそれを送る様にと云はれた。無論私は悦んで御請け合ひをして歸宅して早速寫生に取りかゝり一日位でそれを濟ませ、其後方々を探して、又新たに一疋捕へたので寫生圖と一緒に先生にあげた。

採集旅行と盤梯山登り

夫れから私は其夏先生のお供をして、奥羽地方へ行つた。初日は餘り面白いものも捕れまいと云ふので宇都宮迄は馬車で行つたが、當時（明治七年だと思ふが）、宇都宮行きの馬車は淺草から出たもので、隨分酷いものであつた。

夫れに先生の荷物も中々多かつたので、宇都宮からは馬を傭つて之れに乘せ、私達は採集し乍ら行くのだから徒歩で行つたものである。たしか宇都宮へ泊つた初めの晩だと思ふが、宿の主人が私に異人さんの宿賃は倍にして置くが、其代りあなたに一圓あげると云つた。これは私を通辯と思つたからで、今ではどうだか知らないが、當時は一般にさう云ふ風であつた。此旅でも中々面白い事はあつたが、一番困つた事は白河に泊つた時、先生のポッケットに旅行免狀が這入つて居たのに氣付かず、洗濯に出したゝめ、免狀が目茶苦茶になり、其の爲め警察に相談して東京から新しい免狀を取り寄せたので、五六日の間白河に滯在した事があつた。夫れから、白河を出て猪苗代湖畔の舟津で舟に乗り、猪苗代町へ行く積りであつたが、途中急に暴風が吹き初めたので、湖岸の東にある小さな村で暫く休み、日暮に猪苗代町へ着いた。處が茲で又一つ困つた事が起つたのは、先生は翌日盤梯山へ登り度いと申された處、御山へ登るには二三日前から肉食を止めて、身を清めなくてはと宿の者共が云ひ、かつ案内する者もないとの事であつたが、警察の巡査と小學校の校長さんとが來て呉れて、やつと案内者を一人納得させて、翌日早朝出かけ、頂上まで、今一息と云ふ處で、一休みした處、折惡く、私が急に腹痛を起した。すると案内者は青くなり、これは確かに御山の祟りだ。異人さんは知らないがお前さんは日本人で知つて居ながら無理に登つたためだと云つて、辨當も何にもかも置いて逃げる様に下りて仕舞つた。先生も之れには大層困られ、私を脊負つて、やつと町迄歸られたが、先きに歸つた案内者が、大袈裟に觸れ廻つたので、町中大騒ぎで、宿屋でも私どもを家に入れないと云ふ始末であつたが、又々、巡査と小學校の校長さんとの盡力でやつと二三日泊めて貰ひ、私の腹が少し

落付いたので、其後大噴火で滅茶になつた檜原村に一泊し、翌日は牛の背に乗つて米澤の方に向つた。序に此旅で弁津から噴火前の磐梯山を寫した寫生が面白かつたので、大森付へさしあげた。多分東大の地震學教室に仕舞つてあるだらう。

フエントン先生見世物となる

それから段々と北へ進み、六十里越と云ふ峠を越して月山に登り、次ぎに鳥海山から最上川を下つて酒田に出て、秋田迄海岸に沿ふて行き、秋田から中央山脈を越して盛岡へ出た。此路で、今は忘れたが、山間の或る村の宿に着いた。その宿は小綺麗な家で、不思議な事には奥の一室にテーブルやチェアがある。私たちは此室に通されたが、夏の事であつたから、一家中開け放ちになつて居る。處が旅客でもない樣な人たちが澤山來て居たとは思つたが、何にも氣付かず寢具なども中々綺麗で愉快に眠つた。翌朝になつて勘定をと云ふと、主人が云ふには、私は土地のものではあるが、久しく横濱に居て、西洋人の事など村に歸つてから能く話してゐました處へ昨夜突然にも貴方がたがお泊り下さつたので、村の者に知らせて、實は拜見させていただいた譯でございます。ですから、御勘定はいただかなくともよろしいと云ふのである。これではフエントン先生は志道軒の樣に見世物になられた譯だが、それはそれとして一文も拂はない譯には行かないので、先生にお話して、少しばかり紙に包んで無理に置いて來たが、後で先生と大笑ひをした。

それから宮城縣境近くに來ると山伏峠と云ふ處があつて、それに着く前に、溪流の斷岩をあたかも蜘蛛が這ふ樣な格好をして攀り付いて渡つた事がある。此間は五六間もあつたかと覺えて居るが、其時にはそれは實に危險な感じたものである。少し委しく、夫れを説明すると、深い急流から垂直に立つ崖に二三尺位置いて足の入る樣な穴があつて、上には手で捉まる事の出來る樣な石が出て居るので、下の穴へ足を入れ上の石に捉まつて身體を横にして行くのだ。併し土地の者は馴れたもので重い行李さへ脊負つて巧みに渡つて行くに、空身でも我々には中々困難であつた。斯樣にして此時には陸奥の福岡迄行き歸りには私丈け斷岩から所謂川蒸汽で[illegible]まで來たのである。

此の旅行から歸つて見ると、旅行前にバットラー氏へ先生から送られた、私の蝶と繪との返事が來て居たが、それによると私の繪が大層能く出來て居ると云ふので、これにエキセレンスと云ふ名前をバットラー氏がつけたのであつた。此の蝶の邦名はミスヂテフと云ひ、學名は Neptis excellens Butler である。これも私の繪がそれ程よかつた譯でもあるまいが、當時半開の日本の子供が畫いたにしては上出來だと云ふのであつたらう。何れにしても私が捕へた蝶に新しい學名が付けられたのは當時の私には鬼の首でも取つた樣に嬉しかつた。

併し、これで私は始めて本當に蝶を調べる事も覺え、其後夏休みには殆んど皆フエントン先生について採集に行つたものである。それから、私の蝶の標本も段々增して來たのである。

丁度其頃であつたか、或は夫れより少し後であつたか、横濱の商人でヘンリイ・プライヤーと云ふ人が居て、此人も盛んに蝶蛾の類を集めたが、此人は唯それを集めた許りでなく、ワイスマン先生の進化論研究の英譯を讀んで、本邦産の色々の蝶を畜養箱で養ひ、蝶の氣候上の變異を調べて居た。又フエントン先生は日本の夏が暑いためでもあつたか、夏休みには大概北の方へ行かれ二三回も田中館君の福岡の御宅へ行つて御世話になられたと思つて居るが、田中館君も其頃又蝶の採集を致された事がある。それから後モールス先生が來られてからだと思ふが、岡山兼吉君も蝶を採集された事があつたのは面白い事ではあるまいか。

人造木ツスガヒ

フエントン先生とは蝶蛾の採集ばかりでなく、江の嶋とか鎌倉とか其他諸方の旅にも御供をしたが、江の嶋へ行つた時に一寸した面白い話があつた。これは先生が或る人から頼まれて拂子貝を買ひ度いと云はれるので、貝細工を賣る店へ入つたが見せて呉れた標本が長い根部はかりで肝心の體部が付いてゐないから、それがついた完全な標本が欲しいと云つた。すると店の主人が云ふには、今夜お泊りならば明朝迄につくつて置いて上げますとの事だつたが外國人が江の嶋で買つて行くものには斯樣なものが多く夫れも上につけてある體部が本物ならば、まだ宜しいが、まるで違つたスポンヂをつけたものがよくあるのだ。一九〇九年に私がヘッケル先生の陳列室で見たものも斯樣なもので、先生に敎へてあげて大笑をした事がある。

其頃私はオウレース先生の「マレー群島」を買つて、大いにそれを勉强し、愈々博物學の面白い事を知つた。併し當時はまだ蝶々を集める位の他に何も出來なかつた。

モールス先生の來朝と進化論

私は明治九年に開成學校へ入學したが、此の時の入學者は英語學校の一級と二級のもので、其內札幌の農學校へ行つたものもあつた。今の北海道大學總長佐藤昌介君などは當時札幌へ行つた仲間の一人である。我々開成學校へ入つたものは七十八人であつたかと思つて居るが、其翌年我々の級は大學豫備門となつて、我々は、マカーテーと云ふ先生に人身生理學と云ふ講義を聽いて居た。其の講義の終りに先生が我々に向つて、此頃英國でダーウキンと云ふ人が居て、人間はサルから進化したと云ふ樣な事を云つてゐるが、お前達もこれからまだ學問をするだらうと思ふがお前達は斯樣な說を聽いても夫れを信じてはならぬし、又さやうな事の書いてある書物を見ても決して讀んではならぬ。實に馬鹿な說であるからと、云つて、我々を戒めて呉れたものである。

處が此年にかのモールス先生が來朝せられ、マカーテー先生が馬鹿な說だと云はれたダーウキン說の講義を始められた。私は當時動物學が學び度くて堪らない處であつたから、直ぐに先生にお目にかゝつて自分が集めた蝶々の事などの御話もしたところ、夫れは面白いお前の家へ行つて見ようと云はれて、私の蝶々を見られ、ではニウヨークにヘンリ

ー・エドワードと云ふ有名な役者で蝶々の大家が居るから、その人に紹介してやると申され、私の事を委しく書いてやられたのだつた。夫れで此のハーリイ君（役者としてはハーリイと云はれて居た）と蝶々の交換をする様になつたしその上ニウヨークの昆蟲學會でパピリオと云ふ雑誌を發行して居るから、夫れに何にか日本の蝶の事を書いて送れと云はれたので、一寸した論文を送つた處、同學會の通信員にして吳れた。これは明治十一年で一八七八年であつた。

モールス先生の事に就いては本邦の學者で知らない方はあるまいから、私が今更委しく書く必要もあるまいが、日本の學會は先生の御蔭で本當に學問らしくなつたと云つても間違ひではないと思ふ。夫れは先生が來られる前迄は醫學部と工學部とは専門の學校であつたから初めから専門の先生達が居たが、大學三學部（法理文）の方には、當時學術の専門でない宣教師が多かつたのである。先生がそれらの人達を段々専門家の教師と代へられた丈けでも先生の效績は大したものである。

生物學科の設置と動物進化論の出版

夫れから又生物學科を大學に置かれたのも先生である。私は今も云つた樣に當時は豫備門生であつたから、先生の本當の弟子ではなかつた。併し、色々の事から先生の教室へ出入する事を許されて居たばかりでなく、又本科生の佐々木君などと一緒に動物の解剖などをする事を許されたのである。當時モールス先生の弟子は、今日の佐々木理學博士と松浦佐與彦と云ふ兩人であつた。（この松浦君は惜しい事に早く死なれた）飯島君と岩川君とが、第二回目の弟子である。

處が此の三君は本當の學生であつたから、熱心に研究をされて居たが、私は豫備門生の事故、閑暇もあつたので、先生が諸方でされた進化論の通俗講演には大概御供をさせていたゞき、先生の講演の通譯も致したり、又は前座を勤めた事もある。今になつて考へて見ると未だ二十歳にもならない青二才で斯樣な事を敢てしたのは實に無謀と云つてよいのか誠に恥入る次第である。

そればかりでなく、我々は又先生に頼つて進化論の特別講演をしていたゞいたが、これを願つた者は何れも皆我々仲間の豫備門生であつた。其の人々が誰れであつたか、今日ではよく覺えて居ないが、故人となつた有賀長雄君は其の一人であつたし、又今日早稲田大學に居られる平沼淑郎君も其一人であつた。此の先生の講義は九回で、之れを聽いた我々は一生懸命に夫れを筆記した。

明治十五年先生が三度目に來朝された時、平沼淑郎君等と相談して、之れを集め、私の名前でそれを出版する事の許可を先生から得、動物進化論と云ふ名前で出版した。これが明治十六年二月で、邦語の進化論書としては多分最初のものであらうと思ふ。

大森貝塚の發見

又モールス先生は誰れも知る通り初めて横濱から東京に來られた時大森停車場附近で、線路の傍に貝殻が澤山落ちて居るのを見られて、すぐに夫れが太古人が遺したものに相違

ないと考へられて、大森の貝塚を發見せられたのである。これが本邦に於ける此種の研究の最初のもので、坪井君の人類學もこれが根本である。此貝塚は其後内務省で木を立てゝこれを知らせてあつたが、此の棒が地震後失せたので今度大森の本山氏が、少し立派な記念碑を立てられる事になつてゐる。

先生科學研究の自由を叫ぶ

私が正式に動物學を始めたのは明治十二年で、此年米國のチヤーレス・オーチス・ホヰットマン先生が來られたので、私は此先生に就いて動物學を學ぶ事になつた。先生は元ドイツ國ライプチッヒでロイカート先生に學ばれた爲めか、先生の教授法は全くドイツ風で、其時二年生の飯島、岩川、佐々木の三君にも一年生の私にも、同じ樣に研究問題を與へられ、講義も何にも皆同一であつた。此三君は既に二年生であつたから動物以外の學科も少なかつたが、私はまだ一年生で、動物學の外に地質學だの生理化學其他色々の學科があつたのであるが、毎日教室で顯微鏡を覗いて居ないと先生の御機嫌が惡いので、時々滑らされた事もある。殊に他の學科の試驗でも、ある時に私が顯微鏡を前に置いてノートなどを見て居ると、お前はまだ地質學者になる氣なのか、若し自分がお前であるならば總て他の仕事は止めて、エビの發生だけを研究する。此のエビの發生は先生が其時私に與へて下さつた研究事項であつたからである。併し先生私には今地質學の試驗がありますのでと申し上げると、先生は必ず、そんな事は構はないで居れと云はれるから、試驗に落第する事を話すと、動物學以外の學科で落第しても宜いではないかと云はれるので、さうすると學校を放逐される樣になると大變ですと申し上げた處、そうした事は絶對にないし、心配する必要もないと申され、私が學校の規則にある事を申し上げると、そうした馬鹿げた規則にはこだわらぬ方がいゝと云つた調子で形に塡つた教育は根本から嫌ひであられた。誠に好い先生で實に親切な先生であられた

であるから、當時飯島、岩川の兩君が書かれた論文を大學のメモアーに出す事に就き、大學の或る大官が拒んだ時にも、亦同じ大官が先生が研究して畫工に描かせた蛭の繪を大學で傭つた畫工に描かせたので大學の所有物で先生の自由にすべきものでないと云つた時にも先生は非常に立腹され、斯樣な事は學問の自由を束縛するもので、大道で强盜を働くのと同一であると叫ばれたのである。併し、斯樣な御役人が居た御蔭で、飯島、岩川兩君の論文は英國のクオータナリイ・ジヤーナル・オブ・マイクロスコピカル・サイエンス雜誌へ送られたので兩氏の爲めには反つて好都合であつたに相違ない。又先生のヒルの繪は夫れを云つた御役人が餘りに非常識であると云ふので、遂に先生のものになつた。

此二つの事柄は一寸聞くと先生が如何にも頑固の樣ではあるが、先生は心の底から學問の自由を重んじてあられたからである。其證據には、先生が其後米國へ歸られて、今日では世界一と誇つて居る、ウーツホール臨海試驗所長を勧められた時、米國の或る大きな財閥から莫大の金を寄附せんと申し込んで來たが、併し、夫れが條件附きであると云ふので、

先生は極力これを受ける事を拒まれたのである。當時此實驗所は極めて貧弱であつたので、夫れを受けたら宜しからうと云つた人も澤山あつたが、學問は自由を尊ぶものであるから幾ら僅かでも、さうした束縛を意味する金は、受けるべきものではない、と云つて拒絶せられた。

併し、其の爲め、此の實驗所には、其後無條件で自由に使用する事の出來る金が、澤山入つて來たので、今日の隆盛を見る事が出來たのである。これは私が先年ウーヅホールへ行つた時、其事務官のマクノウト氏が私に話された事であるし、又ウーヅホールの何年かの祝の時に、コンクリン教授も大ひにホヰットマン先生の此の擧動を譽めて演說した事がある。

當時の東京大學では一方には斯樣な事があるかと思ふと、又一方には明治十四年の夏ホヰットマン先生が歸られた後、動物學科に先生がなかつた事がある。尤も飯島君は助教授と云ふ名前で大學に殘られたが、君も直きに歐洲へ行く事になつて居たし、それに又昨日迄私と一緒にホヰットマン先生の下で勉强して居たのであるから、飯島君も私に敎へると云ふ事も致されなかつたし又私としては、飯島、岩川、佐々木の三君と同じ樣に試驗も受けたのであり、又私が三年になつても先生の無い事だから、私は毎日加藤總理先生の處へ出かけて、私も他の三人と同じ樣に試驗を受け、其の外何れも彼れ等と同じ樣に仕遂げたのだから、彼れ等と同じ樣に卒業さして吳れと迫つた事がある。それで私は當時前原一誠と云ふ名を取つて居た。之れは云ふまでもなく、不平黨として前原一誠が名高かつたからである。

次ぎにさうした望みを達し得なかつたから、今度はウオレース先生の眞似をして伊豆七島から八丈島、小笠原島迄も行つて見度いと加藤弘之先生に願つて見たが、それも先生に說き伏せられて成功しなかつた。先生が云はれるのには、お前は今折角、エビの發生を研究して居るのだから、なにも好んで、伊豆の七嶋へ行く必要はあるまい。ウオレース先生がやつた樣な事も宜しいだらうが、又顯微鏡で、エビの卵子の研究を仕遂げるのも宜しい事ではあるまいか、大事な體を持ち乍ら何も好んで、そうした危險な事をしないでもと申された。

箕作佳吉先生の御歸朝とスッポンの研究

それから、其年の十二月であつたか、或る日、加藤先生が飯島君に一寸來いと云はれたので、飯島君が、總理室へ行くと、誰れか知らない日本人が居て、總理はこれは箕作佳吉と云ひ、歐米で動物學を修めて來た人であるが、此人を先づ講師として、動物學を擔當させる積りだと申された。飯島君は直ぐ實驗室へ歸つて來られ、夫れを私に話され、箕作と云ふ人が米國で動物學を修めて居た事はまるで知らなかつたがと云はれた。それから直きに箕作先生も敎室に來られた。これが今も云つた樣に十四年の十二月で、先生には翌年の一月から正式に來られるとの事だつた。此時飯島君が箕作君は前齒が突出して居るから、これから山櫻と云ふ渾名を付けやうではない

かと云はれたが、先生も其後これを知られたのだつたか、御自分でも山櫻と云つて居られた。であるから動物學の先生で日本人では先生が始めてゞある。

斯様なわけで明治十四年の後半期には、私は先生なしに濟ました大學の學生であつたが、斯様な事は今日の學生諸君は夢にも思はない事であるだらう。併しそれが事實なのである。

處が先生は十五年の春から私の沼蝦の研究が、進歩して行くのを悦んで見て下さつたのと同時に又私に云はれるのに、此節ヘッケルのガストレア說に對し、ヘルトウキッヒが盛んに研究されて居るが、何にか爬蟲類で夫れを研究する様な材料があるまいかと。夫れで私は下谷萬年町邊の金魚屋で龜の卵が得られないかと探したが、どうも思ふ様に行かないので、今度は本所深川邊を歩いて見た。其結果深川の十萬坪に服部と云ふ大きな金魚屋があつて、そこへ行けば、スッポンの卵が幾らでも得られると云ふ事を聽いた。私は行つて見ると、十萬坪の服部の家はスッポン屋としては三代も續いた家で、主人の倉太郎君は私の云ふ事を聽いて、これは實に氣持よく受け合つて與れ、母屋の奥にある物置を直して實驗室と爲して與れた。で、其の夏の末から箕作先生と二人で行く事にして、私は其頃毎日未明に起きて、牛込の東五軒町から徒歩で通つたものだ。倉太郎君の弟の今の秋山吉五郎君も尚ほ一緒に居たが、此の吉五郎君はまだ若くて、大層脚が長かつたので、先生はロング・ルヤンクと云ふ名を付けて居られた。其頃の事だつたか、或る暑い日に先生と元八君と私と三人で竪川をボートで下つた事があつた。先生が後で舵を取られ、私がオーアで漕ぎ、元八君は船頭に坐つて居られた。處が元八君は暑くて堪らないと云はれたので、先生が、お前ばかり暑いのではない。石川さんは漕いでゐるから尚ほ暑いさ。でも石川さんもお前さんも太陽から遠いから、自分に比ぶれば幾らか涼しい譯だと申された。

ニウトンが大小の猫の通るために、部屋の隅に大小の穴を明けて置いたと云ふ噺に比べて面白く感じた。

大隈伯の失敗と早稻田專門學校の創立

明治十五年の夏、私は大學を卒業をしたが、先生の御世話で準助教授となり、大學の教室に勤むる事になつた。此年の春であつたか、モールス先生が三度目に日本へ來られ加賀屋敷の教師館に住んで居られたが、或る日、私が先生を御訪問した處、お前はよい處に來て與れた。これから大隈さんの處に陶器を見せて貰ひに行くのだから、一緒に行つて通辯をして與れないかと申された。直ぐに先生と御一緒に牛ケ淵の大隈さんの御宅へ伺つた。すると、伯爵(當時は)には先生を立派な洋室に通され、陶器が山の様に積んで見せられた。私が通辯をして御話をしてゐる内、伯は何を思はれたか、左様に珍しいものならば此陶器を皆獻じませうと申され、其晩、先生の御宅へ車に山の様に積せた瀬戸物が送られた。尤も斯様な事は大隈伯計りでなく、其頃では誰れも先生に何にか御目にかけた時、ほめられたならば、あげたものと心得ると云ふ

て居た。夫れは先生の讃め方が如何にも上手なので、此時でも先生は伯爵に向つて、一言も吳れろと云ふ樣な事は言はれなかつた。して其相手が又大隈さんの樣な方だから殊に面白い。それから同年に早稻田專門學校の開校式の時、モールス先生に進化論で開校演說をして貰はうと云ふ事になつた。專門學校には英語の達者な人達は、高田君其他幾人も居られたが、進化論の演說だと動植物の名などが出て來て解らないと困るから、一つ通譯をして吳れないかと私が頼まれたので、それを勤めた。式後宴會の席に伯爵の側にモールス先生が居て、私も通譯者として、先生の直ぐ側に居た。色々話しがあつた間に伯爵は傍に居た田尻さんに向ひ、此のモールスと云ふ人は實に偉い人だ。斯樣な人が外交官にでもなつて來た時には中々油斷は出來ない。又橫目で私の方を一寸見られて、先日お前が通辨として宅に來られた時に見せた陶器は大事なもので、あれ等は決して先生に上げ度くはなかつたのだが、話して居る内にどうしてもあげなくてはならぬ樣になつたのであるんだ。其辭先生は一言も吳れろなどとは云はれなかつたと申された。

話しが知らない内に又モールス先生に移つたが、先生が此時に來られた目的は、本邦の陶器を集める爲めであつた。して此時に集められたものは御歸國後ボストン博物館へ賣られたが、此等は多分日本の陶器では世界一のコレクションであるだらう。又これを研究して出版されたキヤタローグも此道では最も尊いものであるだらう。

本邦初めての臨海實驗所とクラカタウの爆發

併し、先生の話は此の位にして置き直接自分に關係する事になると、其内沼蝦の研究も一先づ終つたので、箕作先生が手に入れて下さつて、論文を前述、飯島、岩川兩君の論文が出た英國の雜誌へ送つて下さつた。夫れから先生と一緒に研究して居たスッポンの胚葉も先生が書いて下さつて、私の名も入れて、又同じ雜誌に出して下さつた。夫れから又一寸書いて面白いと思ふ事は當時世界を驚かせた、クラカタウの大爆發であるが、これは、明治十六年の八月廿六日で、私は箕作元八君と菊池松太郎氏と三人で三崎町の奥の方の北條に小さい一家を借り、夫れを臨海實驗所として居た時であつた。たしか此の日の夕刻からだと思つて居るが、三尺位の高波が土手の樣に沖の方から押し寄せ、海岸に打ち上げた。

多くの漁夫等は之れを見て大いに驚き、小舟を引き揚ぐるやら大騷ぎをしたが、我々が雇つて居た八十歲だと云ふ老人の漁夫は平氣な顏で、何あに、此の波は二三時間位に規則正しく來るのだから、これは餘程遠い沖に大嵐があつたのだと云つて居た。處が、其頃は通信などもまだ遲かつたもので、本邦では兩三日の後に本當の事が解つたのである。私等は其翌日實驗所を引き揚げ、元八君は東京へ歸られ私は浦賀に出て房州へ渡つた。其後一週間位は太陽が煙ガラスで見る樣に見えた。夫れは空中に飛び揚つた煙や灰であつたのだ。

今此の實驗小屋の事を書いたのは、それが、本邦では一番始めの臨海實驗であつたからだ。箕作先生は御歸朝の時ネープルスの實驗

所に立ち寄られ、ドルンとも懇意になられ、駿州江の浦へも行つて見られたが、當時は交通がまだ不便であつたので、矢張三崎が宜しからうと思はれたので、其後三崎町に出來た大學の實驗所も今云つた北條が元で、後に出來た海に突出した實驗所の地面も私が先生の命を受けて、神奈川縣から貰つたものである。

ドイツへ留學

それから、又自分の事を云ふと、明治十八年の十二月に任官の儘留學と云ふ事で、ドイツへ行く事になつた。此時の同行者は北里柴三郎、中濱東一郎、と大竹多分の三君であつた。三君は官費留學生であつたから、船も二等で行かれたが、私は貧乏生で三等で行つた。

當時歐洲行きの船は横濱迄は來なかつたので、香港まで百トン位の小さな船で、それからメセザリイ・マリチームのメルボンと云ふ六千噸の船に移つた。當時の客船としては恐らく一番大きいものであつたゞらうと思ふ。香港で上陸すると日本人に似たものが澤山居るので、何にか尋ねると少しも解らない。あの山にはポルトガル人だのスペイン人の合ひの子で本邦人に能く似た奴が澤山居る。處が晩方船へ歸る時、今度は本當の日本人がゐた。これは日本人でも私の親戚にあたる、當時日本銀行總裁の吉原氏で、何處へ行くのか自分の宿に一晩泊れと申され晩食の御馳走になつた上に立派な宿屋で一夜を過ごした。これは小さな船の三等室で苦しんで行つた後だつたから殊に嬉しかつた。翌朝今度は船へ歸つて見ると、私の室は九人入りの三等室だが、スコットランド人だと云ふ男が二人居た。一人は太つた六十歳近い老人で、一人はまだ四十歳にもならない位の人であつたが、此二人共船のエンジニアーで、此邊を航海する船の船長も事務長も殆んど皆知つて居るし、此船の船長も事務長も懇意だから、若しお前が一人なら、これからマルセーユ迄三人で此室を占領しようではないかと云つて、何れへか行つた。暫くたつて歸つて來て、うまく出來た。これから自分達はシーツや枕を持つて來るからとて、色々の物を運んで來て三等室ではあるが九人の處に三人で大變立派な部屋が出來た。又彼れ等が菓子や酒などを時々買つて來たので、これは一等四人の室に三人で居る北里君などに比べると大いに樂なので、君は半分位の料金を拂つて樂な事をしてゐると云つて北里君などが羨しがつたものである。

船中でも一つ二つ面白い事があつて、シンガポールから乘つて來たオランダ人は日本人なあの邊の土人と同等視して居たので、私がスケッチをするのを見て、カン・ユウ・メーキ・エー・スケッチと云つたり、又私が何にか英語で書くと、ユウ・カン・ライト・オルソーと云つて驚いて居たが、或る朝飯の時私が日本の浴衣で食事をなして居ると、此男が私の側に來て、アイ・ドント・ライク・ツウ・シー・ユウア・パデーと云ふから、あの掲示を見ろ、朝食は寢衣の儘でも宜しいと書いてあるではないか、お前は文字が讀めないだらうと云ふと、此男は怒つて私を突き飛ばさうとする。丁度其時甲板で羊が鳴いたから、貴樣の腦はあの羊の腦と同じ位だらう、早く甲板へ上つて羊と一緒に居れと云ふと、今度は私の頭を打ちにかゝつて來るので、私は此男を板の上へ敲

き付けてやつた。傍で見て居た、私と同室の二人の男は大層悦んだが、オランダ人は逃げて行き、其後は私に向ひ頻りに世辭を述べて居た。

それから又アレキサンドリアで上陸した時にも一寸武勇傳にありさうな事をして同行人を悦ばせたが、シシリイ島の海峡では丁度夜間でエトナの噴火が能く見へた。

夫れからネープルスに着いた。私は日本を出る前、ドルン先生から頼まれたので日本の蛙類の子供を顯微的の標本として持つて行つたが、それを澤山の管に入れて、上陸せんとすると、税關の役人が蝌斗は宜しいが、アルコホールに入つて居るから、いけぬと云ひ、上陸するなら、捨てゝ行けと云ふので、それは困るからと、一時預かつて呉れないか、歸りに貰つて行くからと云ふと、一時税關吏が預つて呉れた。それから馬車で急いでドルンの處へ行き、其の事を話すと、リンデンと云ふ片眼の少し惡い事務員を呼んで相談をし、では晩にお前が船へ歸つた頃、實驗所の船で此のリンデンがお前の處へ行くから標本を渡して呉れ、すれば何にも面倒はないからとの話で蝌斗は無事にドルンの手に渡つたのであつた。これが私が税關をスマッグルした初めでもあり又多分終りでもあるだらう。夫れからマルセーユとリオンで一晩づつ泊り、大竹と巾濟の兩君には早々別れ北里君と一緒にストラスブルグ迄來た。此途中北里君の仕込杖の事で、バーゼルで乘り換へる時一寸した事があつたが、これは書く程の事でもない。

フライブルグとワイスマン先生

ストラスブルグでは久し振りで藤澤利喜太郎君に會ひ、色々の話もし、確か其翌日同君がフライブルグへ連れて行つて呉れ、直ぐにワイスマン先生の敎室へ行つた。

私がワイスマン先生の處へ行く事になつたのは、前に云つた樣にブライアーの處で先生の書物を讀んだのが一つと、箕作先生も勸められたし、又少し前にライプチッヒから歸つて來られた飯島君も大いにそれを勸められたからである。それに又ライプチッヒで飯島君が一緒に居たコルシエルト氏が講師としてワイスマンの處へ行つたから、萬事好都合だらうと云ふのであつた。であるから飯島君が私をコルシエルト氏に紹介して呉れたので、下宿の事迄同君が世話をして呉れた。

ワイスマン先生の實驗室

藤澤君に連れられて行つた時の先生の實驗室は舊い大學の三階で、此建物は元はカトリックの寺院であつた。實驗室は四つの部屋からなり、三階の一隅の下の左側に細長い特別室が一つあつて、これに向つて右に入口があるが、これを入ると直ぐに小さい一室がある。

これはグルーバー先生の部屋で、次ぎに少し大きな室がある。此室は一般實驗室とでも云ふもので、茲に四五人の學生の机と、コルシエルト先生の机とがある。それから次ぎの室がワイスマン先生の室で此二室の間は大きな硝子の戸で、先生の机は一般實驗室の方へ向つて居た。であるから先生は何時でも學生の樣子を見る事が出來る樣になつて居た。併し、先生の眼は非常に惡かつたので其實先生

には殆んど何にも見ては居られなかつたのである。

先生の室後の奥に又二つの室があつて、其前の方の小室は先生がプローテウス・ネズミ・昆蟲等を飼養するのに使はれ、次ぎの大きな室は物置兼博物場になつてゐた。

私が藤澤君に連れられて先生に初めに會つた時には如何にも恐ろしい様な感じがした。其時先生には五十六歳であられたかと思ふが、體格は偉大で、前額の大きな實に立派な學者らしい容貌をして居られた。初對面の時二つ三つ私の考へなどを問はれたが、翌日又來いと云はれたので、二度目に一人で行つた處、先生には昨日出した私の沼蝦の發生の論文について色々委しく問はれ、殊に、先生が特別に興味を有せらるゝ極體の有無なども問はれた。

肉蠅の眼其の他の研究

これは後に考へると試驗の様なもので、それが濟んだ後　私に一つの問題を與へると云はれ、近頃八釜しい問題になつてゐる事だが動物體は一生中に外因の影響で、變つた事が遺傳するや否やを實驗で證明して見るのだ。それは肉蠅が一番よろしからう。肉蠅が蛹から出たらすぐに何にか黑いものを眼に塗つて物を見る事の出來ない様にするのである。第一この様にして久しく養なつて置いたらば、一生中に何にかの變化が生ずるかを見るので、又若し一生中に變化が現はれないとしても斯様に見る事の出來ない様にした蠅を幾代も續けたならば、如何なる結果を生ずるか、これを研究するのである。斯様な試驗は無論隨分時がかゝるだらうし、又結果が如何であつても、それが非常に大きな問題に關聯して居るから一つやつて見ないかとの事であつた。無論これは先生が當時八釜しく唱へられて居たラマーク說の可否に關する試驗で面白いものには相違ないのであるから、翌日肉屋へ行き、三四疋の肉蠅を求めて來て、それを養ひ、數日の後にはそれが四五百の數になつたが、それらが蛹から出て來るものを取つて一々眼に墨を塗つたものである。こうした蠅を一週間、二週間と云ふ様に一週二三十疋づつ殺して行き、プレパラートを造つて見ても眼の變化は中々見えなかつた。で又斯様なものを三代續けたが、それでも見える様な變化はなかつた。

併し、澤山の内にはと思ひ、何千と云ふ程の蠅を養ひ八代目迄になつたが、心の中では百代目までも續けて見る考へだつたところ、一夜試驗器に鼠が這入つて五六千疋の蠅を皆喰つて仕舞つた。此試驗は中々長くかゝつたが、少しも結果が見えなかつたので、先生が申さるゝには此試驗は或は無駄に終るかも知れないから、一先づ止めにして、次ぎに自分がやつた、ヒドラクラゲの生殖細胞の研究中でまだ能く解つて居ないものがあるからそれをやつて見たらばと申され、材料は自分がナポリで取つたものが澤山ある。夫れを使へと云はれ、アルコールに漬けた標本を澤山下さつたがそれを出して研究して見ると、材料が能く出來て居ないけれど、先生が折角良い材料だと申さるゝのをいけないと云ふのもと思ひ、コルシエルト氏に相談すると、自分もゲハイムラートの材料は良くないと思ふが、

生が氣を惡くするといけないから、段々プレパラートを見せて話したら宜ろしからうし自分が云つてあげてもよろしいが、あなたが云つた方がよろしからうと云はれた。併し、其内でエウデンドリウムの材料は良かつたので、一寸したものを見つけて、之れを書き、先生に話して雜誌へ出した。

此の問題で一ヶ月餘の間、こうした研究に從事して見たが、先生も、材料の悪い事を承知せられたので、又別の問題を與へて下さつた。此第三番目に下さつた問題から私が偶然に發見したものがあつて、夫れ以來私は先生と一緒に研究する事になり、後三年半の間は朝八時から晩の四時頃迄は先生の室に居て研究を續けて居たのである。

此の發見と云ふのは、單性生殖をする卵にも極體があるだらうと云ふのが先生の考へであつたが、それが見つからなかつた。處が私が偶然にミジンコの一種でそれを見つけのである。

斯樣に久しい間、先生と接して居た者は先生の家族の外には多分ない筈だから、從つて他人としては私位先生を知るものはないと私は思つて居る。

何んにせよ十九世紀の終り、二三十年間、ダーウキン論者をしてヘッケルと竝び立つて、學界に雷名を轟かされた先生の事であるから、其の性格等に於ても後の人の大いに學ぶべき所がある。併しそれは、またの機會に讓ること丶する。

風俗變遷史話

三宅雪嶺

明治の始めから、日本の風俗に最も著大なる影響を及ぼしたのは、維新の變動であり、世界の風俗に最も著大なる影響を及ぼしたのは世界大戰である。それが如何に日本最近史に現れたかを陳べようと思ふ。

こゝに斷はつておくのは自分が明治元年九歳で加賀金澤に居り、八年二月尾張名古屋に移り、九年七月東京に移つたのであつて、それまでのことは中央での目撃者ではなく、地方の一部で見たに過ぎない。中央のことは、書物で讀んだり、人に聞いたりしても、自身で證人となるわけにゆかぬ。然し加賀は謂ゆる百萬石の大藩であつて、それで相應に他の地方を推察し得ると思はれる。且つ東京は中央とすべきも、明治の始め、京都の勢力に押され、東京より京都に重きをおくべきこともあり、地方割據の勢も強く、東京に居るのみで事情を知ることができず、餘り東京に居りがひがなかつたらう。維新の變動に關し、自分は金澤で見聞したに止まるも、或程度まで全國に大差ないとしてよからう。

(上)

明治元年舊政府が倒れ、新政府が起つたので、一般人心に大衝動を與へた。前に天下を取れる公方を貴んだのが、一天萬乘の天子を奉戴し、王政復古又は王政維新といふを標語とすることになつた。標語は簡單なやうで、復古と維新とが並行しがたく、動もすれば矛盾に陷り、元年から六年まで矛盾の調和及破綻に忙がしく、辛うじて纏まりがつき、その勢で新たなる風俗が定まらうとした。

元年に新舊政府が交替し、四年七月十四日廢藩置縣が決行さ

れ、封建制度が根柢より破滅したが、既に諸大名に於て祿を十分の一にしたのが多く、孰れも生活狀態を十分一に切詰めねばならぬ。大祿の徒は上屋敷より下屋敷に移り、或は家來の家に移り、小祿は足輕の家に移り、何でも住宅を小さくすることが行はれた。(自分の家は賢者なれど、やはり御多分に洩れず、父の詩に「移居」と題し「避他喧鬧地、就此靜閑鄉、客去香烟細、冬暉也覺長」といふのがある。)

廢藩置縣で大名が華族として東京に移り、士族の祿が金にかへられることになり、士農工商平等といふので、士族の商法に手を出すのが多く、大抵慣れぬ商法で失敗し、「士族の商法」と云へば「失敗」を意味した。落語家の語る所の「御前汁粉」の如き、一概に造りごとと云へぬ。それに似たことが到る處にある。煙草屋をはじめたり、豆腐屋になつたり、需要供給も何も考へず、中には商人になつて腰の邊がさびしいとて脇差をさしたのがある。脇差をさしてトウフィと言つた。祿が金になるに乘じ、俄銀行が續出し、これに金を預け、銀行がつぶれて丸損になるのが數へ切れない。家を小さくし、道具を賣ることが流行し、一時に道具が出るので、道具屋が踏倒し、二束三文になつたが、誰が企てたことか、何でも銀の器にしておくに若くはないと云はれ、我も我もと銀の器を求めた。その頃は銀の價が高く、銀が結構のものとなつて居り、銀の茶道具を備へるものが多かつたが、そのうちに銀の器が贋物と知れ、そのために尠なからぬ損失を招いた。是は他の地方に何程行はれたか、恐らく何處ぞで多量に贋物を製造し、盛んに儲けたのであらうが、割合に知る者が無い。調べたならば面白いことがあらう。

加賀は一萬石以上が十家もあり、何千石から何百石と云ふまで、隨分多かつたが、萬石以上は家來の力で何とか維持し、百石以下は自身の腕で生計をたて、その中間は大部分沒落した。他の藩はこれより小さいにしても、何程か似て居らう。東京のことは、人に聞いた話なれど、前將軍に從つて駿遠參に移住したのが約六千五百戶、その一部が富士の麓に新部落を作り、原野の開墾に從事したが、一年で離散したとかで、是は當時の子供で現に生存するのがある。六千五百戶の立退いた跡は勿論、他に無住の家多く、五年七月、千坪に付十五圓乃至二十五圓で處分された。當時百圓二百圓を出した者が後に大地主となつて居る。

舊藩時代の支配階級なる士族が各地方で沒落し商工農が頭を擡げたのは、歷史上の著しい變革に屬する。藩によつては、士族が前から半農又は半工の姿で、別段に窮しないのがあるけれど、一般に士族は悲慘な境遇になつた。然し舊政府に屬したも

のがたの倒れると共に窮地に陷るのであつて、新政府に位置を得るものは、幅が利き、中に飛ぶ鳥を落すかに見えるのがある。其頃、最高官が八百圓、普通の閣員といふべき者が五百圓で、圓價が今より五六倍し、隨分贅澤にするを得た。新政府の要路者が薩長土肥の功臣を始め、之に準ずるのであつて、前の大名にこそ及ばね、祿を失つた士族の、思ひも及ばぬ贅澤をした。

江戸では遊廓が大名の忍んで來るのに適するやうにし、花魁に勿體をつけ、一の花魁を引き出しに多くの藝者を伴にするを要し、宛も大名に家來の從ふが如くした。富豪で花魁を相手にするは大名氣取の滿足を買ふを得た。封建破滅後、さういふ事は興味うすく、直ちに藝者を相手にし、藝者時代となつた。新政府が東京に移つた當初、要路者は年が若くもあり、續々吉原にくりこみ、或は吉原から役所にかよつた。官の役名が正と權とに分ち、縣令、權令、大書記官、權大書記官、小書記官、權小書記官、大屬、權大屬、等とするので、妾を權妻と稱することが行はれた。是には法律で妾を妻と同じく二等親とすることも與つて居る。官吏は權妻をおくのが普通であつて、内に權妻が居り、外に藝者と呼ぶことが當然とも必然とも思はれた。藝者を猫と云ひ、猫と云へば世間で面白がられたのも之に伴ふて居る。亂品といふ論も維新に始まつた。要路者が京阪に奔走の韻雅を謀つた頃、藝者となじみ、後にも藝者こふきけなので、書生が「醉眠藝妓美人膝、醒握堂々天下權」と詠ひ、之を將來の理想らしく心得た。大隈は伊藤井上等と相應に遊び、道樂よりも、負け嫌ひで張合つたが、或る日、二人に言ふやう「お互に高官に登つて居り、藝者遊びは餘り體裁がよくない、もうよさうぢやないか」と。二人は素直に承知したもの、、大隈はそれから遊ばず、他の二人は一年ほど經て、もとのまゝになつた。

新政府の要路者は官に就くと共に、位に應じて衣冠束帶し、或は長袴をはくので、奇談を殘した。慣れぬ冠をかぶつて、玉座に近く机に向つて字を書き、冠が落ちさうになり、顎で紐を引き、その落ちるのを防ぎ、顎がのびて如何にも可笑しく見え、左右で笑ふに笑はれず、實に困つたと云ふやうなことがある(佐々木高行談)。長袴でころぶのは珍らしくなかつた。

それほどまで舊禮を守るに務めながら、五年十一月十一日新たに大禮服通常禮服を制定し、舊禮服を廢し衣冠を祭祀に限ることにした。禮服は佛國の式によつたのである。一度昔に歸つて、急に西洋に飛んだ。洋服は維新前から幾らか行はれ、將軍慶喜もフロツクコートで馬に乘つたこともある。それは大會の

フロックコートなるが、明治元年に行はれたのは、種々の洋服の型を混ぜ合はせて居る。陸軍服と海軍服と燕尾、フロック、背廣等と、まちまちに型をとり、出來のよいのもあり、頗る奇怪なのもある。ポッケットは三日月の形にし、雲のやうに縫ひをしたりした。金釦を澤山附ければ、附けるほどよいとし、何十個とつけたのがある。それを着て人だかりのする處に終日立つて居つた者があり、自分も之を見た。

四年八月九日散髪脱刀を許すとの布告があつて、散髪脱刀が盛んになつた。學校の寄宿舍で人の睡眠中に髷を斬ることが行はれた。散髪は割合に早く廣まつた。(五年に十パーセント、八年に二十五パーセント、十年に六十パーセント、十四年に八十パーセント、十六年に九十パーセントといふ説があり、當てにならぬけれど、大體さういふものであつたらう)。牛肉鍋の擴まつたのも隨分早く、大抵散髪の行はれる程度で牛肉が入込んだ。ランプも之に伴つた。學校で生徒が悉く石版を持たねばならなかつたのは、命令に依つたらうが、全國にわたつて夥しい量に上つて居る。赤間石のやうに赤味のかゝつたのが澤山出たけれど、それは種切れになつた。

(下)

岩倉大使一行百餘人が四年に出發し、六年に歸朝し、重なる目的の條約改正に少しの效能なかつたにせよ、舊大名だの、婦人だのが加はり、それが却つて洋風を鼓吹するに與つて力がある。帝國大學の前身なる開成學校及び工學寮は、最初のほど、官費で學生の教養を殆んど悉く純洋式にした。教師は大抵外國人であり、服裝も食事も洋風にした。後に官費を廢し、制服もなく、食事も粗末になつたが、始めは外國人の感化が強く、中にも工學寮に強かつた。是について思ひあはすことは、幕末に伊藤井上等長州人五人が脱走して英國に赴いたとき、倫敦大學教授アレキサンダー・ウイリアムソンが面倒を見て呉れ、その後新政府が出來上つてから學校へ教師の傭聘に世話した。孰れも良い教師であつて、感化がよかつた。他にも北海道帝大の前身なる札幌農學校にクラークが感化を與へた。陸軍士官學校、海軍兵學校にも外國人が盡力した。外國人で言ふに足らぬのもあるが、中に人品の稱揚に値ひするのもある。一面に外國人は貪慾で、自分勝手で、案外知識に乏しいと思はすと同時に、一面に眞の君子とはあゝいふ人かと思はすのがある。次第に外國の缺點を知り、その一概に學ぶに足らぬのみか、事に依つて大に警戒すべきを認めつゝ、物質的に、精神的に、優秀なるもののあるを許さずにおけぬとなつた。

國力が增進し、二十七八年役に勝ち、三十七八年役に勝ち、世界の一等國に列するに至つたが、國内で整ふべきを整へながら、服裝となつて男は英國に則り、女は佛國に則らねばならぬ。是は日本に於てゞなく、世界の相場である。服裝に伴ふて、氣風をも重んずることになる。女は服裝に限るにしても、男は英國の紳士を模範とするに傾く。獨逸が佛國に勝つたのは、從來の趨勢を變じ、種々の點で日本に影響し、特に政治軍事及學術に著しく、佛國に對してナポレオン時代ほどに重きを置かぬけれど、何としても英國の紳士に倣ふを禁ずることが出來ない。英國の紳士は如何にもゼントルメンらしく、ゼントルメンライクである。大陸諸國でも服裝を吟味するとき、倫敦に註文し、倫敦ならば大丈夫とする。日本でも稍々氣取つた人は、英國の紳士風を學ばねば、人として耻づべきかに感じ、フロック・コートにシルク・ハット、革の手袋にステッキを持ち、對話に大きな聲をせず、落付いて悠々迫らなくする。是は英國の長い歷史でつくり、特にヴィクトリア朝で磨き上げて來たことに係る。

日本内地で種々の變遷を經、大小の出來事があつたにしても、大體に於て維新の變動に隨ひ、順次整ひ來つたのであつて、如何にすれば何處へ出しても申分ないことになるかと云ふ場合、英國の紳士の如くせよと云ふ事になる。世界に種變動ありながら、その點で特別の變りがなかつた。獨逸が全盛を鳴らし、英國の向ふをはつても、紳士の相場を動かすことが出來なかつた。日本で漸次服裝が整ひ、二重生活でも、三重生活でも、外國人に交はつて耻づかしくないやうにするには、英國の紳士の如くすべしとし、之に近づいて來た。英國に似而非紳士が多いが、やはり模範的紳士と稱すべきもののあるに相違ない。英國の紳士の如くなれかしとて、頭の天邊から足の爪先まで之に背かないのがある。風俗の改善はなるべく斯かる人物の多くなるのを指すに外ならない。

所が世界大戰が勃發し、一九一四年から同一八年、即ち大正三年から同七年まで、絕大戰亂が續き、戰死一千萬人、戰費四千億圓、三大帝國を覆へして共和政治にし、大西洋を隔てた米國をして富を以て世界に冠絕せしめた。世界の金貨の大半が米國に流れ込んだ。前に殖民地風として輕んじた所のものが世界の權威視せらるるに及び、そこで多年英國にて紳士の服裝をフロックにシルクハットとしたのが滑稽に感ぜられ、モーニングにソフトを普通とし、モーニングも仰山、脊廣で結構、夏はチョッキなしでよいとし、ステッキなど餘計なものとなつた。談話に聲を低くするにも及ばぬとなつた。加ふるに英國に勞働黨

が起り、その首領が内閣組織の大命を拜したりするので、折角紳士風を學ばうとしたものが戸惑ひせずに居れず、何が何やら分らない。それでも日本で大抵世界の人の到達すべき所を知つたことになり、本年新宿御苑の御召にモーニングを許され、その他の方面は尙更自由。一般に脊廣で差支ない。

婦人の洋裝も、廣いスカーツになれて來たのに、前と逆になつた。前には日本の女裝を物理的に論じたものがある。廣い重い帶を中程にしめ、裾を細く縛くするのは、中心を失ふと云つた。所が今のスカーツは細く輕くなり、中心が危くなつた。前のピラミッド式なのは消滅し、偶々ピラミッド式に町をあるけば、人が驚きの眼をみはる。他の事も總じて改まりかゝつて、一進一退の形になつて居るのは、未だ世界の狀勢が定まらないのに因る。

米國は世界に冠絕し、全國の人が悉く自動車に乘り得るまでになつたけれど、何處となく落着がない。嘗て世界を威嚇した露西亞帝國は、勞農聯邦として特殊の制度を敷き、それで果して民衆の幸福を期待し得るやが分らぬ。獨逸が戰敗して亡國に瀕し、却つて軍備縮小を幸ひにし、工業立國の實を擧げつゝあり、如何なるが眞に幸福なるか、見當がつかぬ。然し一時動搖したけれど、紳士らしい紳士は比較的英國に見ることが出來る。前の貴族的紳士が勞働者に近づき、勞働的紳士を見るにつた。現内閣の首相を始め、閣員が之を示す。フロックにシルクハットが衰へても、紳士が衰へると云へぬ。將來米國に特殊の紳士を見出し、或は他に之を見出すかも知れんが、今なほ英國に標本を見る。秩父宮殿下が嘗て英國に留學されたのも直接に思召しあつてのこと、察せられる。イギリス男にフランス女と云ふは、もはや前ほどのことがなけれど、全く過去に屬したと言へない。

王政復古と王政維新とが矛盾しつゝ、調和し、明治六年に略々方針が定まり、時に右し時に左し、數十年を經、漸く完成に近づいて俄然大戰亂が勃發し、世界の標準に狂ひを生じ、一時停頓の姿になつた。世界は何處へと疑はれた。然し分らぬやうでなほ世界の何處かに良いことがあり、良いことに於て之に劣つてならぬと云ふのが向上心の聲である。日本の國內で維新の變動を以て大勢を作り、それが大成に近づく頃、世界大戰の變動で停頓し、如何になるべきかが疑はれて居り、過去の例に徵すれば、幾度か障碍物を越え、或は潜り、よりよき境地に到達するを信じて誤ることがない。

創立　明治二十年十一月

資本金　七千七百七拾萬圓

一ケ年製紙高　五億六千萬封度

東京市京橋區三十間堀壹丁目壹番地

富士製紙株式會社

主要製品

各種印刷紙	唐紙類
模造紙	色紙類
新聞用紙	板紙類
ロール半紙	加工紙
燐寸用紙	クラフトペーパー
包紙類	グラウンドパルプ
連史紙	サルファアイトパルプ

工場

富士第一工場	静岡縣
〃第二工場	
〃第三工場	
芝川工場	
神崎工場	兵庫縣
京都工場	京都府
熊野工場	和歌山縣
千住工場	東京府
江戸川工場	東京府
中川工場	〃
江別工場	北海道
金山工場	〃
池田工場	〃
釧路工場	〃
落合工場	樺太
知取工場	〃

内地雜居物語

尾佐竹　猛

外國人に土地を賣るといへば、それこそ文字通り賣國奴だといつて青筋を立てた。といふことは、今では下手なユーモアにしか響かないが、このやうな思想はなか〳〵力強いものであつた。領土權と所有權との區別……今の進んだ經濟學説では同じようなものであるが……をゴッチヤにした頭は舊幕時代の敬愛すべき我が攘夷家諸君ばかりであるかと思つて居つたが、焉んぞ知らん明治大正の聖代にもこの種の優秀民族が少からずあつたことには聊か面食つたのであつた。

外國人に土地所有を許されたのは大正も末期の大正十五年十一月十日からであつた。しかもこの法律案は議會を通過してから約十年を經て始めて實施せられたといふ法律案のレコード破りであつた。法律案としての議會へ出る迄の悩みと、議會通過の苦みとは隨分あることであるが、議會は通過しながら法律となる悩みに多年かゝつたといふことは恐らくは憲法史上空前で、また絶後であらう。勿論その永くかゝつたことに付てはいろ〳〵の事情もあつたようであるが、右に述べた思想が黒き背景となつて居つたことは想像に難くはない。

大正時代既に然りであるから、その以前は此思想がまだ〳〵甚しかつた。明治三十年に東京商業會議所が、外國人に土地所有を許されたいとの建議をしたときには世論は囂々たるものがあつた。日本弘道會長文學博士西村茂樹氏は商壇上に滔々として、斯る非國民的思想は死を以て爭はねばならぬと覺悟したのであつた。最も事理に明かなる田口鼎軒は經濟的にその當否を論じたのであるが、それでも所謂賣國論は有力な反對論であるから斷還せなくてはならぬと論じた程であつた。

これが、ツーッと遡つて幕末となると多分の滑稽味を帯びて居る。文久二年に竹内下野守一行が和蘭へ行つたとき、アムステルダムで珍問答が始まつた。

使節「このアムステルダム府の土地は賣買勝手なるか」

和蘭人「固より自由自在」

使「外國人へも賣るか」

蘭「値段次第、誰にでも」

使「さればこゝに外國人が大資本を投じて廣く土地を買占め、これに城郭砲臺でも築くことがあつたら、それでも勝手次第か」

蘭「そんなことはこれまで考へたことはない。如何に英佛その他の國々に金滿家が多いとて、他國の地面を買つて城を築くやうな馬鹿氣た商人はありますまい」

といふやうなことで双方共に要領を得ない。随員で新智識の福澤諭吉先生はこの問答を見て、日本の外交政略は凡そこの邊から割り出したのだから、たまらないと慨嘆して御座るが、福澤先生の慨嘆されるやうな頭の持主はこの後何十年間も幅を利かして居つたのだから愈たまらない。

しかしこれ等は幼稚なる世相を物語る一場の挿話として濟むが、こゝに明治劈頭に外交上の大問題となつた外人の權利關係がある。

明治元年閏四月、朝廷函館に裁判所(裁判所といふのは府縣廳の意味で法衙では無い)を置き清水谷公考を總督とし今の北海道を管轄した。この時は新政府の方針として北海開拓が重要なる政綱の一つであつた。この時横濱に居つた普魯西人ガルトネルといふものが豫て北海の富源に目をつけて居つた際だから、函館在勤の參與内國事務局判事井上長秋（今の浮世繪研究家井上和雄氏はその令孫である)はガルトネルと相談し、年俸四千弗で同人を傭入れ七重村の土地三百萬坪の開墾を爲さしむることに約束した。がその本契約を締結するに至らずして長秋は行衞不明となつた、といふのは出張の途中難船したので生死不明といふことになつたのである。眞に惜しいことで、この人の識見といひ、その岩倉公に信任せられたことゝいひ、今少し長命であつたならば大に榮達したことゝ思はれる。がこれは本稿に關係が無いからこれを略するが、こんなことで話が立消えとなつた處へ、舊幕臣榎本武揚、大鳥圭介等の軍隊が破竹の勢を以て攻め來り、北海全道を平定し政令を布いた。

そこでまたガルトネルは函館に出掛け、函館奉行永井玄蕃、同並中島三郎助と驚くべき契約を結んだ。これは前の分よりは進んで七重村の近傍畑地三百萬坪を九十九ヶ年借受けることゝした。これは開拓の爲めといふことであるが、今の言葉でいへば租借である。獨逸は膠州灣租借に先つこと五十年前にこの魔手を伸ばして居つたのである。危いかなである。

この契約は長文だから之を省略するが、明治二年二月十九日締結せられ、總裁榎本武揚はこれに承認を與へて居る。

然るに時勢は走馬燈の如く、間も無く大舉して攻め來り、榎本以下降り北海平定し、清水谷公考は再び知事となり、外國官判事南貞助がその下に在りて外交關係の事務を取扱つて居つた。この南も明治文化史上種々なる經歴のある男であるが、今はこれを略す。さて右のガルトネルはまたこの南に取り入り、前約通りの約束をねだり、終に同年六月十六日、十九箇條の契約を爲し、清水谷南の兩名花押し、時恰も弟のシ・ガルトネルが函館に領事として駐劄して居つたから、コンシユル・シ・ガルトネル立會アル・ガルトネル氏日本政府と左の條約を名判すといふ公文書を取替して仕舞つたのである。

かゝる大事があらうとは知らぬ中央政府は、北海經營も漸次緒に就き八月十五日を以て、蝦夷地を改めて北海道と稱し十一ヶ國に分ち、開拓使を置き中央の大官東久世通禧を開拓長官に任じた。

斯くて東久世は赴任して、右の條約あるを知り大に驚き、朝廷にその不可なるを上申し政府もこれに驚き速に右の土地を還納せしめ

よとの命令があつた。

そこで東久世は領官宮木經吉をしてその事務に當らしめたが、相手はなか／＼に承知せない。榎本時代の契約なら新政府は知らぬといひ得べきも、新政府の役人が新に契約し、その上領事の立會があつては、新政府は知らぬといへない。よしやそれが係り役人の專擅とあつたとしても、こちらからはこれを主張出來無い立場である。

そこですつたもんだの末、金六萬貳千五百弗にて右の契約書を買上げることゝし、從つて土地も返納することゝなり後禍を殘さなかつたのは何よりであつた。

後年東久世はこの事を語りて、在任中この事件程の難件は無かつた、といつた。眞にそうであつたらう。

事件はこれで片付いたが掛り役人はその儘には濟まされず、當の責任者たる南は杖八十の處二等六十日の謹愼、清水谷は一等減五十日の謹愼、其他堀眞五郎、河野良藏、福地林橘等の同僚もそれ／＼處分を受けた。

この連中はいづれも相當の人物で、また開術の功もあつたのであるが、その前にいづれも不遇であつたのは種々の原因もあつたのであるが、この事件も確にその大なる累を爲して居るのである。

この事件程大きく物にならなかつたのであるが、略ぼ同樣の狀態にならうとしたのがウエンリードの一件である。

この男は早くから日本へ來て、明治以後にもいろ／＼よからぬことを遣り、現に高橋是淸氏を奴隷に賣つたのもこの男であるが、またそれ丈け非常の日本通であり、彼の生麥事件の際にも被害外人よりは一時間前に、島津の行列に遭ふたのであるが、この男は馬より下り、脱帽して道の傍らに居つたから無事であつたのである。それから岸田吟香等と共に新聞「もしほ草」を發刊したり、いろ／＼のことをして居たが、長州再征が失敗と見るや、長州侯は馬關を開港すべしとの見込をつけ、馬關附近一千町歩の地所を拂下げの運動をしたのである。これは成功しなかつたから幸ひであつたが、若しその約束が出來たらガルトネル以上に厄介な問題だつたらうと思はれるが、まづ／＼結構であつた。

こんな風にいろんな問題が起きたから、政府は明治六年に法律を以て外國人の土地所有を禁じたのであつた。それ迄は明かに禁じた法律が無かつたから、といふよりはこの頃になりやつと法律的秩序が定つたからである。即ちその前年の明治五年に地券制度が出來、始めて四民に土地賣買の自由を許し、所有權を認めたのであつた。それ迄は日本人でも土地の所有權が無かつた……勿論法制史上の嚴密なる議論に依れば所有權は有つたのであるが……況んや外人に於てをやである。こゝでキッパリと外人の所有を禁じたのであつた。

爾來五十年、この禁が解けなかつたのは所謂鎖國論の賜であるが、その永き禁制も漸次その效果が薄くなつたのである。

それは外人の避暑避寒地に於ける別莊の敷地は單純なる借地であり、或はコックや妾の名で買つたりして居つたのであるが、それでは滿足出來ず、こゝに六百年の地上權といふものが出現したのである。

彼の外人に依つて開かれ、外人の好みの如

く發展した輕井澤の高原に點々たる外人家屋い敷地は實にこれである。六百年の借地權にしてその借賃は前拂一時拂ひである。

六百年といへば何代くらゐかゝるか、一寸急には勘定は出來無いが、マア源賴朝時代から今日迄といふのであるから大したものだ。

これに面食つたのは登記所であつた。そこで上司に伺を立てるやら、法律學者にも聞いて見るが、上官といひ學者といひこんな例は始めて故これまた面喰つたのであるが、なにしろ外人樣々の時代でもあり、强いて無效とするにも及ぶまいといふ議論でそれで宜しいとなり、これが先例となつたのである。

一說には輕井澤よりも以前に函館に四百年の借地權があつた。これは鳩山一郎氏の先代和夫博士の案であるといふ說である。果してさうとすれば函館はガルトネル以來、土地と外人とはいつも問題を起す因緣のある所であるといはねばならない。

それから追々時勢も進み、さしも雜鬧たりし條約も改正せられ、內地雜居、治外法權となつたときどきに、いろんな悲喜劇もあるが、土地問題としても珍談がある。それは現代の大政治家某氏の先代は下級の役人であつたが、內地雜居となれば外人は盛んに地所を買ふだろう、そうすれば地價が暴騰して濡れ手で粟の大儲けと目論見、無理算段して地所を買込み、雜居を待つて居つたが、條約改正になつたからとて、外人がその日から無暗に雜居する筈も無く、また右の六かしい土地所有の禁の解けなかつたのであるから、外人は急いで土地を買はなかつた爲め、この先生大損をして晩年不遇に終つた。こんな例はこればかりで無く、いくらでも似たような例があつたのである。

それから明治三十一年には、多年の懸案たりし民法が實施せられ、我國も文化國の仲間入が出來たのである。これは現行の民法であるが、當時は歐米に劣らぬ最新の立法として內外人に適用されたのであるが、勿論所有權の規定もあるが、例の外人所有禁止は特別法として效力を有して居り、また多年居留地內に於ては所有權同然に扱はれて居つた權利の種目が無いから、外人連は騷ぎ出した、そこで外交團から種々の抗議が出て、外交では人に頭の上らぬ當局はこゝに、永代借地權といふ變挺な權利を認めたのである。これは居留地內に於ける權利であるが、所有權と同じ性質作用を有するが、日本人には與へられずに、外人にのみ與へられ、若し日本人がその權利を買へば所有權となるといふのである。山の芋が鰻になるよりも變な話であり、日本の土地に對する權利でありながら日本人が有することが出來ずに、外人のみ有することが出來るといふ不都合千萬な權利である。といつて怒るにも當らないといふのは、これは條文丈け讀むから、そうなるので、實をいへば外人には土地所有を禁ずる法律があり、これを廢止する譯にも行かず、さりとて外人の抗議にも頭が上がらぬから、永代借地權などゝいふ苦しい名を案出して、その實外人にも土地所有權を許したのである。つまり政府自ら法律を以て、外人土地所有の禁止を潛つたのであるが、恰も幕府の當局者が國內の攘夷論に恐れるが、さりとて外人の高睨にも恐しいから、その日限りの矛盾撞著の政治を執つたと同じ状

想であつたといふも、强ち過言であるまい。これも畢竟するに、例の所謂鎖國論の祟りである。鎖國論は禍なるかなである。

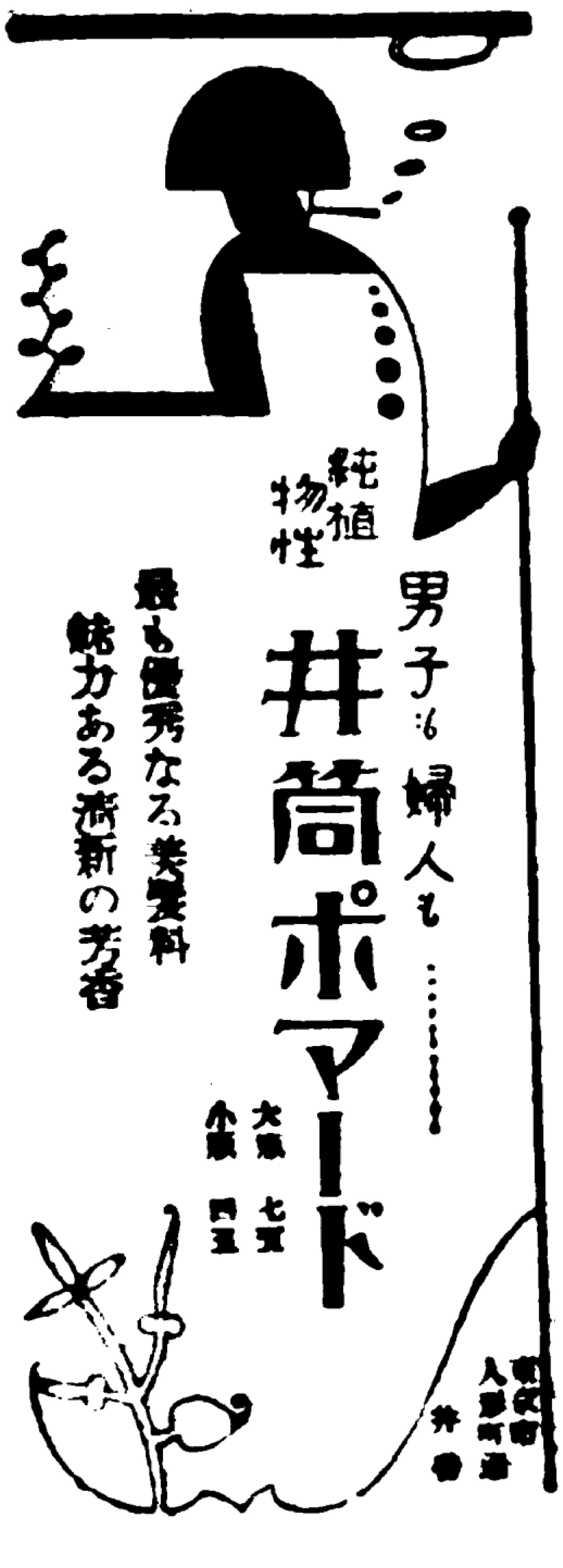
さてまた、こゝにニコライ會堂なるものがある。今でこそ御茶の水から見た東京の風景として、一名所であるが、これが永く愛國家諸君の癪に觸つたといふのは、あの高臺にあの大建築で人目を聳てたところへ、あのテッペンで鳴らす鐘が素敵も無い大きな音であつた。その爲め實際あの近邊の地所の價が下つたといはれたのであるが、ところで攘夷思想は無くなつたとはいへ、動もすればその分派たる耶蘇嫌に……卽ち耶蘇は我國體に反する……の念が幾分色濃くあつた豪傑連には、何かしら癪に觸はつた。そこであの建物は宮城を見下ろすから怪しからんといふ流言まで飛んだがさりとて、どうとも手の下しやうは無い。志賀矧川が明快なる筆を以て、ニコライ會堂を罵し、東京の高所に築き無遠慮に鐘を鳴らすのは以てスラブ魂を見るべし、といつたのは褒めたやうであるが、それでも腹の底には右の豪傑連の息がして居るような氣がする。矧川にして既に然りである。以てその他を知るべしである。

然るに日露戰爭の酣なるの時、議會に於て少壯代議士たる花井卓藏氏より質問が出た。曰く、ニコライ會堂の所在地は露國公使館の附屬地としてのみ許されて居るのである。今や日露の國交斷絶したのであるから、宜しく右の會堂の所在地を我政府に於て囘收すべしといふのである。今の花井氏ならば眞逆こんな質問も出すまいが、その時はなか〳〵元氣があつたのである。

その法律的なるは流石は花井氏であると、豪傑連は喜んだのであるが、この問題はそれ以上發展せずに濟んだ。これも外人土地所有禁止に伴ふ一の挿話である。

小泉八雲や石井ブラック等の如き歸化人は土地の所有に妨はなかりしなるべきも、果して土地を買ひしや否やは聞き洩らした。その昔三浦按針の屋敷を賜はりしは今でいへば歸化であつたのであらう、安針町の名も區劃整理で無くなりさうなのを惜しむは我等の如き物數奇ばかりではあるまい。シーボルドの鳴瀧の家屋敷は確か妾の名義であつたと思ふ。舊幕時代なればこれは止むを得ない方法であつたらう。

永き〳〵禁制の解けた我國の法制も夫れ迄は隨分變なものであつたが、その頃より海の彼方では反つて日本人の土地所有を禁ぜしと聞く。それでは矢張り外人の土地所有禁止は文化國の法律であつたかな。



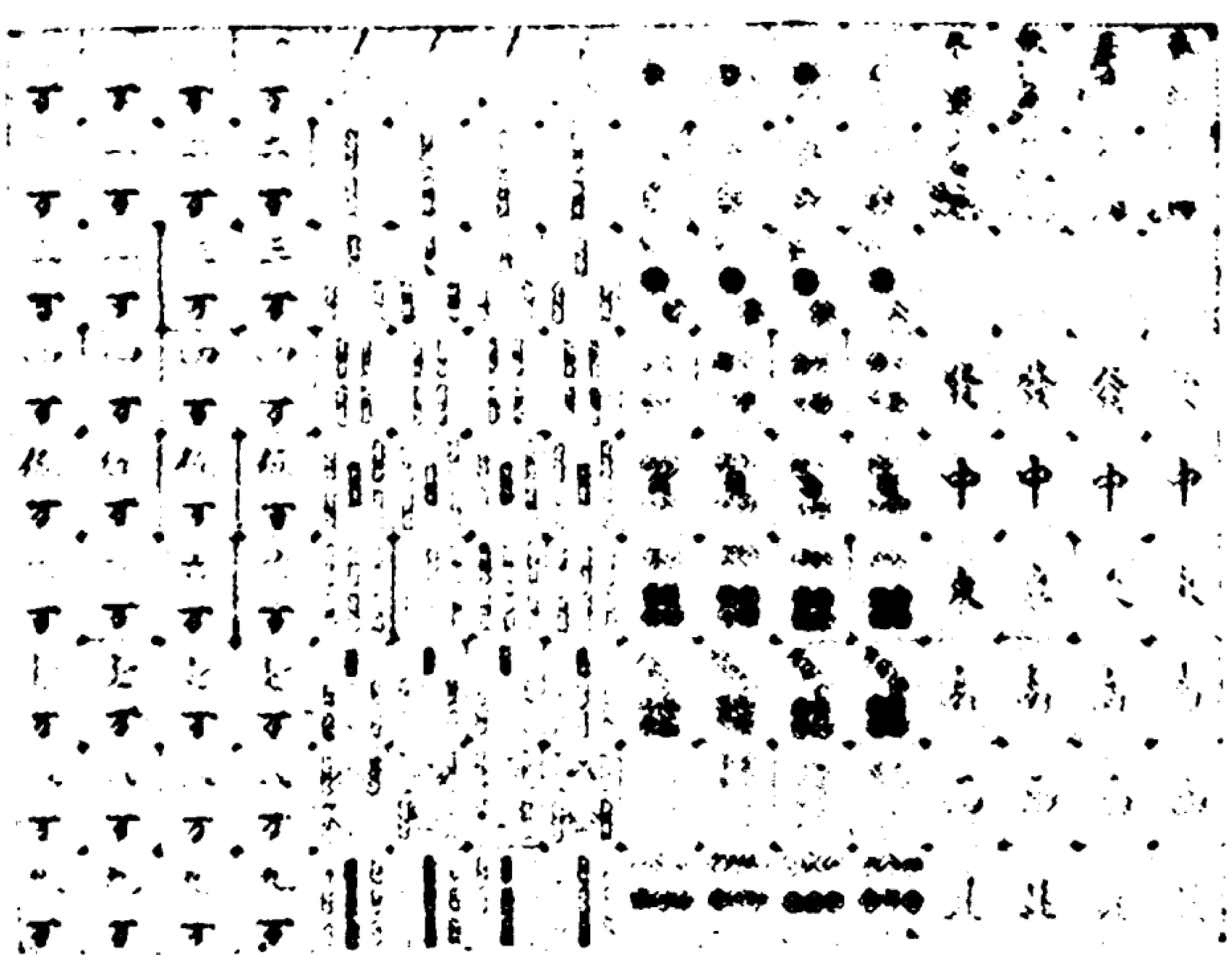
中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

麻雀牌の廉價販賣

◆麻雀は元來支那のものですが、現在では全く世界の社交界を風靡する勢で、我が國でも近來急速に大衆の迎へる所となりました。
◆從來非常な高價で、到底限りなき需要を滿たす事は不可能とされてゐた麻雀牌を十二圓以上六十圓までの廉價でお頒ち致します。
◆秋の長夜を、内には一家の和樂に、外には社交の要術として、麻雀は重大な役目を持つこと、信じます。
◆先づカタログを御請求下さい。



古書賣買のお取次

主として地方在住の愛讀者諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案內係」を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。
古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。
お問合せだけで御返事致しかねる樣な種類のものならば、一應御送附下されば早速市內一流の專門家に囑して正確迅速に評價して、お返事を差上げます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。随つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知置きを願ひます。
D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。但古文書、錦繪等の如きは、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御紹介の宛名は「中央公論社代理部古書案內係」と明記して下さい。

スプリングコート兼用

新バーバリーレインコート

新バーバリーレインコートは、従来のものに一層の改良を加へた本年の新製品です。

純国産品の故に多額の運賃と少からぬ関税の負担が無いだけ、それだけ品質にも仕立にも非常に吟味されたものを、特に本誌愛読者諸氏のために、昨年より一層低廉な特価でお頒ち致します。

これならば晴天の日にはスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。



色は茶系統の最も斬新な流行色を選び、寸法は襟下鯨二尺六寸以上約二寸毎に取揃へてあります。

定価　一着　十六圓

尚従来バーバリーレインコートと共にお取次致しました第二種の純良レインコートも、左の特価でお頒け致します。

折畳んでサックに入れゝば、ポケットに入る軽便さで、色はネズミ、茶、テツ系統の最も斬新なもののみです。

特価　一着　十一圓

送料　東京市内十二銭　内地二十七銭　領土五十五銭

経済と実用を兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も経済的実用的な替ズボンを左記の特価で提供致します。

上等黒セル	五圓五十五銭
優等黒絹セル(甲斐絹膝裏附)	六圓七十銭
霜降・黒メルトン	四圓八十銭
上等ウーステッド	五圓六十五銭
黒サージ	四圓八十銭
上等黒サージ(甲斐絹膝裏附)	六圓八十五銭
優等黒サージ(甲斐絹膝裏附)	七圓八十銭

寸法	腹廻 鯨	股下
大	約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

御註文には必ず大中小の御指定を願ひます。

送料　東京市内十二銭　内地十八銭
領土四十五銭

強精ニンニク剤

浩壮

ニンニクの強力は昔人のよく知る所、唯しその臭気は十人が九人まで厭やがります。

精力は誰も求むるが、臭みを厭ふ人や、飲み難いが飲めないと云ふ人はこのニンニク錠浩壮をお用ひ下さい、ニンニク特有の臭気を無くした所が本剤の特徴で、飲んだ後も何等口中に臭気を残しません。

原料にはニンニクの成分そのまゝに、[illegible]の滋養分を配し、神経衰弱、肋膜炎、気管支加答児、喘息、胃腸病、神経痛、貧血症、寄生虫による諸病、病後衰弱の恢復等には驚く程の効力を持つてをります。

定価　十日分二圓　三十五日分五圓

送料　東京市内十二銭　内地十八銭
領土四十五銭

脚気特効

純良胚子

脚気はヴイタミンBの欠乏によつて起るもので、随つて迅速にヴイタミンBを補給する事によつて治療も豫防も意のまゝであると云ふのが今日の學説とされてをり、米の胚子の中には多量のヴイタミンBを含んでゐると云はれながら、従来純良な胚子を手に入れる事が出来なかつたために、非常に不味い米糠を服用するのでなければ、高価な製剤に頼るより外に道がない状態に鑑み、特別な方法で、胚子ばかりを集める事に成功致しました。

脚気豫防には晒布の袋に入れて毎日の飯と共にかき込めばよく、脚気に罹つた場合は、一日十匁以上をなるべく少量の水に溶じ、其煎汁を一日数回食間に飲めば、大抵二週間位で全治致します。

定価　半ポンド罐入　六十銭

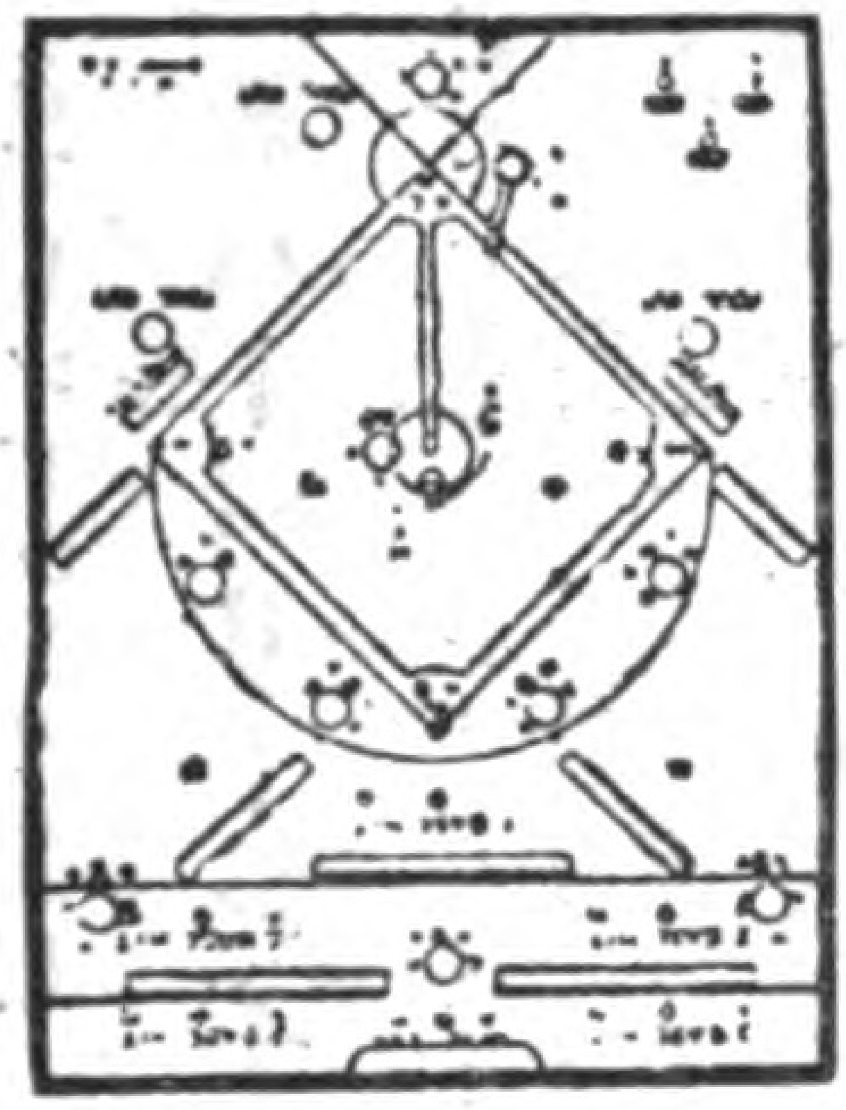
送料　東京市内十二銭　内地十八銭
領土四十五銭

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に優る國產第一の優秀品です。

定價　三圓五十錢　四圓　四圓五十錢
(回轉吸入式)　三圓五十錢
送料　内地　十八錢　領土　四十五錢

誰にも愉快な
野球競技盤



約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高桑式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボックスに立つた時以上の緊張した氣分で、バットの振り方で美事本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。

實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戲として、一般の家庭におすすめ致します。

定價　小　型　一圓三十錢
　　　中　型　三圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地小型は十八錢、中型は二十七錢、領土小型は、四十五錢、中型は五十五錢

ユトマポマード

毛髪の學叢を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は、蓋をとつて、容器から直接に毛髪に塗りつけるだけで、少しも手に脂がつかず使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない至極重寶な殊に外出前の急がしい髪の手入れや旅行先での使用には一層便利を感じます。

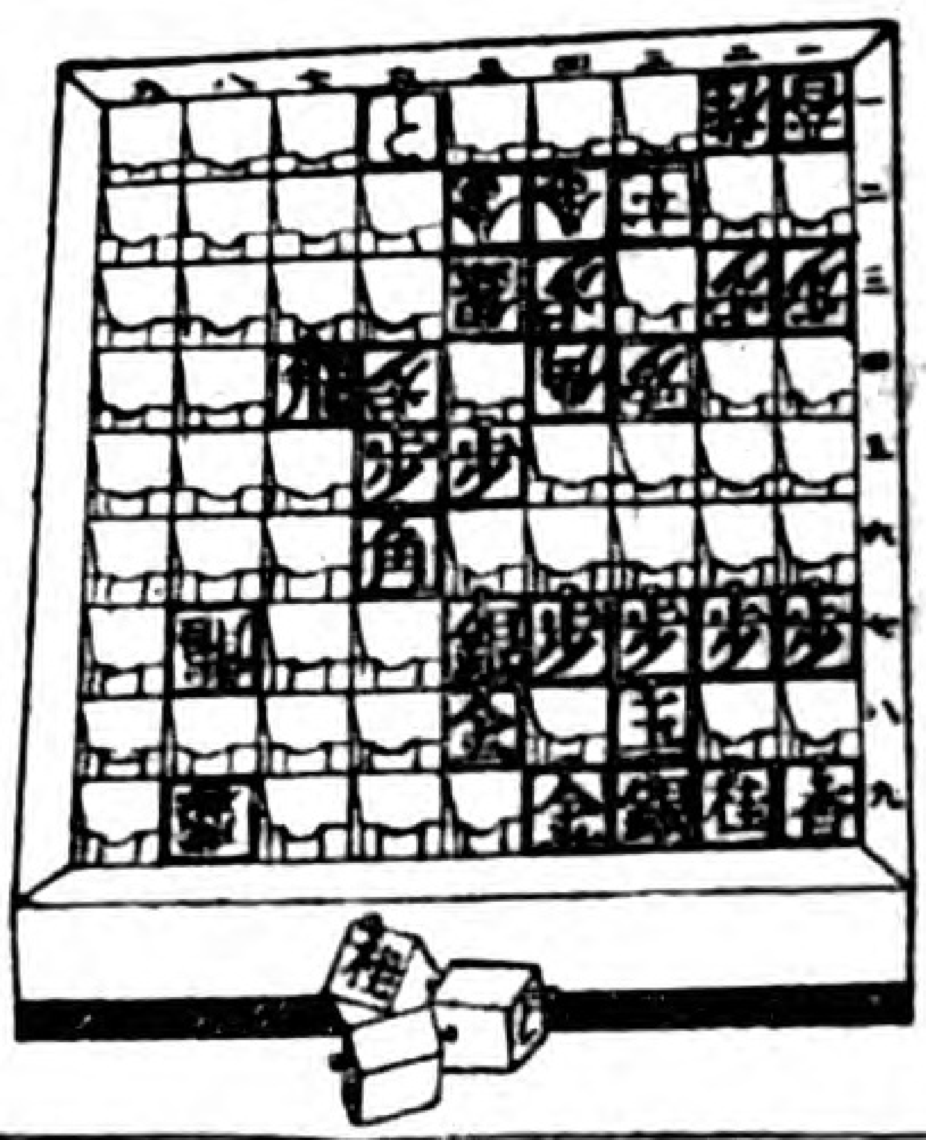
定價　六十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

最小型將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。



其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價(駒全部附)　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

除毛劑タキー



顏に危險な剃刀を用ふる時代は過ぎました。このタキーは、手足、腋の下、襟髮等任意の所に塗つて五分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかりと除毛する事が出來ます。

これを何回か繰返へして使用する間に次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまい、又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せをよく受けますが、一個毎に添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。

定價(マスクリーム付)二圓二十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土　四十五錢

新發明の産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿樣纖維質の部分と絕對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄から成つてゐる新發明の產兒調節器です。

このオクルサトルに添附の殺菌用錠劑を挿入して使用すれば、錠劑は内部で溶解してカーボニツクホームを形成致します。この泡は隙間なく擴り、細菌はみな殺されて了ふもので、オクルサトルの海綿樣部分はこの殺菌錠溶液を吸收して約一ケ月間保存いたします。

オクルサトルは、非常に簡單で且巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも、本人自身氣が附きません。これは永久的使用に堪へるものですから、二回目からの御註文のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

一度お產した人までは　〇番
三度お產した人までは　一番
四度以上の人は、二番を使用
定價(錠劑十二錠附)　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓
送料東京市内十二錢　内地十八錢
領　土　四十五錢。

最も安全な 電氣湯たんぽ

電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに四時間毎に湯を取換へる手數もいらず、故障を用ふる危險もなく、常に攝氏七十度内外の快い温度を保つ、絶對安全、使用上簡便、堅牢な、經濟に、保健に、ぜひ家庭に備へねばならぬ重寶な品です。

定價(二燈用ソケット及びカバーつき)四圓二十錢。

送料　東京市内十二錢　内地四十五錢　領土七十五錢



洋服カバー

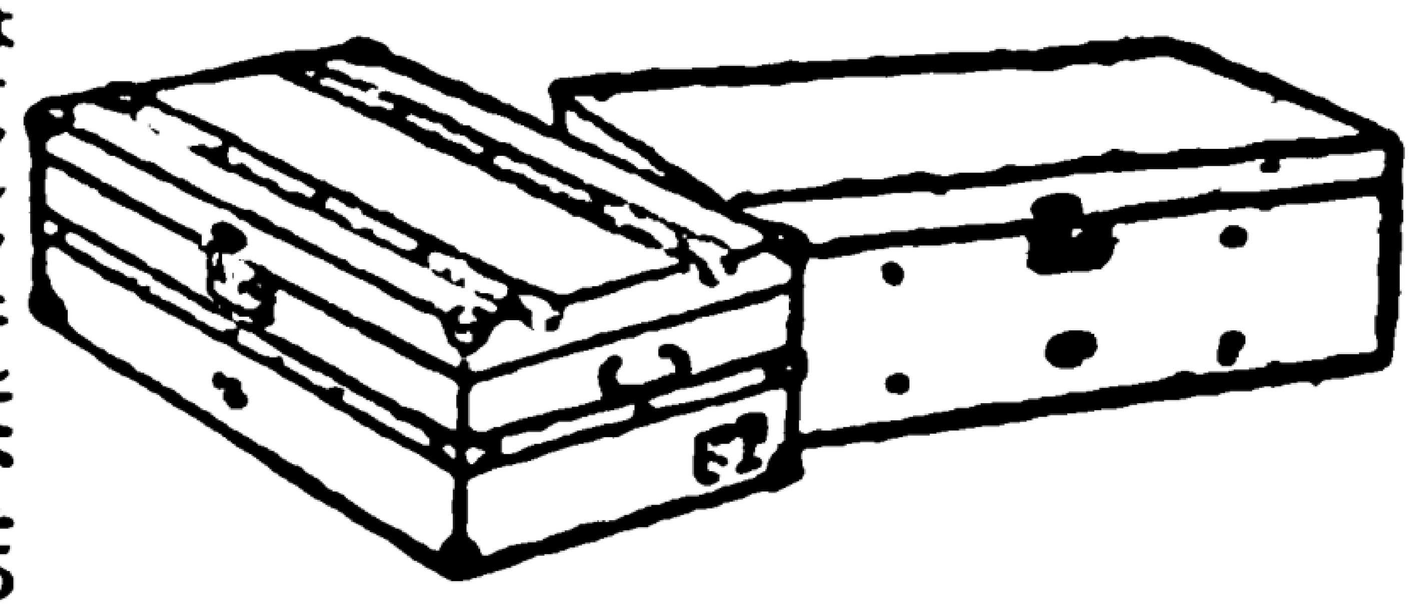
防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗ふ事が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大一圓　小六十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

昭和文庫

厚い桐板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な品で、内部の一方を丈夫な板で囲み、中にナフタリン函臨入れを備へ、外面には[illegible]の金具附けを施して立派に仕上げ、絶對に外部の侵入を防ぐ様工夫された、貴重品衣類等をしまつておくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、滿洲や支那輸より遥かに便利です。

定價　特製　九圓八十錢　並製　六圓八十錢

送料東京市内二十錢　地方運賃先拂

最新艶出布

このフレッシュマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に從來的工程と化學的處理とを施したものでありますから、著物の色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りもとり、しかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。塗物類、殊に高級の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、このもので拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製函入)　一圓

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に使用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには梢も云はれぬ香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は[illegible]の様に軟くなり、日々濃艶の美を増します。

定價　小人形　紳士用特大瓶各二圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢

領土四十五錢

スマドレ シャンプー

理想的洗髪液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな香のある美しい髪にする一方、ふくれ毛やちゞれ毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニューヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる好評品です。

口々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な髪儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、而もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ちよく會談する事をおすゝめ致します。

定價　特大瓶　二圓

送料　東京市内十二錢　内地十八錢

領十四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本時代理部特有の四季の香水の中、春の梅と夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘクオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも用に用意してありますから、お好みのまゝにお注文下さい。

定價(春、夏、秋、冬)各二圓

(四季組合せ、又八四[illegible])圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢

領土四十五錢

オプチサナ

國通の品の能力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナにせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので、口せきの子供も喜んで呑み、週間服用すれば必ずや治られ、殊にぜんそくのせきも止めるには[illegible]れてゐます。

[illegible]から感謝の禮つた[illegible]文がありました故、今後も[illegible]以上に努力致る[illegible]多少の[illegible]引いたします。

定價　二圓　送料東京市内十二錢

内地十八錢　領十四十五錢

新聞鳩便

小野賢一郎

東京日日新聞社に宿つてゐて、ほとゝぎすの聲をきいたことがある、鐵筋コンクリートの中で、ほとゝぎすを聽く――何だかくすぐッたいやうな氣がしました。

東京の空に鳶の姿が見えなくなつた――といふつぶやきをきく。鳶の餌が東京になくなつた、煙突やビルディングの林立に鳶が恐れをなすのであらう――さういふ話題も涼み臺を賑はす今日。

ところもあらうに、丸の内の日比谷公園近く巨大な脚をふンばつてゐる海軍省の大アンテナ――何百尺ありませう、あのアンテナの頂天（らつぺん）から、血がボタ〳〵垂れるといふ――怪談めいた慘虐な事件は今年になつて二三回起りました。それは鷹です、鷹が新聞社の通信鳩を鷲づかみ――いや鷹づかみしてボリ〳〵食つてしまふのです。それをたゞ、あれよ〳〵と見てゐなければならない辛さ――と鳩係が泣きます。そのアンテナは天を摩するかに突立つてゐる高塔のうちの日比谷寄りのあの鐵骨です。丸の内の空を機嫌よく運動してゐる鳩の群、その群の中心をはなれた鳩をサッと鷹が浚へて海軍省の上空へ、そして高塔の上で血をすゝり肉を食ふので、白日下、高塔上の慘事、これが丸の内の新風景です。

どこの鷹でせう、上野の森か宮城の森に棲むのでせうか、まだ鷹匠の昔の風があつて、時々鷹を放してゐる人があるとすると堪りませんが、新聞社の鳩は、しよつちう鷹の禍にかゝつて居ります。

○

今年の五月廿二日のことです。米國ステト社のケンタッキー

號が横濱に向けて急いでゐました、午後四時銚子の沖合にかゝつた時です、一羽の鳩が鷹に追はれてゐました。船長はロバート・ウヰルソンといふ人でした、船客も船員も空を仰いで追はるゝ鳩をいとほしがつたもので――何でも、二時間も追はれてゐたといふことです。船長は鳩が逃げ疲れさうな樣子が見えたので、直ちにストップを命じました、巨船は一羽の鳩を救ふために、大洋上にエンヂンのひゞきをゆるめて停船しました。この時です、鳩は「助け船」とばかり船のマストの上にとまりました、それから人なつかしさうに甲板に飛び下りました。鷹はさも殘念らしく船の上空をぐる／＼廻つてゐたが、諦めたのか遠くへ去つた。船は又もエンヂンの音を立てゝ、横濱への航海をつゞけたのであります。

その鳩の脚輪には「東日・121」と標示してありました、私の勤めてゐる東京日日新聞の通信鳩で、聖上陛下が八丈島に行幸になるといふので、八丈島東日間の飛翔訓練中、廿一日午前八丈島から放したのが、途中でこんな危難に遭つたのです。

鳩は無事に東日屋上の鳩舍――鐵筋コンクリートづくり、二棟で五千圓ばかりかゝつた建物――の自分の巣にかへりました。何にしてもケンタッキー號の船長はゑらい、ＳＯＳの遭難信號を受信しても、ドウかすると知らぬ顔をして通過し問題を起す船舶がある今日です、船にストップを命ずるといふことは費用の點からも、また船のならはしからいつてもたいしたことです、それを一羽の鳩のために敢然とやつたウヰルソン氏は偉らいと思ひます。餘りうれしい話なので、六月六日ＪＯＡＫで子供の時間に私が放送したことです。

○

鳥も通はぬ八丈ヶ島から繁に鳩が通ふことになりました、鷹の禍などの犠牲もありますが、多くの鳩は八丈島東京間二八五キロメートルを四時間四十五分――から五十分の間に飛んでまゐります、それも寫眞を持つてゞす。新聞にのせる寫眞のフヰルムを一枚づゝ背負つて飛ぶのです。寫眞は名刺版でも手札でもいゝので、未現像のまゝでも運びます。ちようど萬年筆の軸のやうな形の軽い容器を背に負つて――恰も武者修業者のいでたちで、鳩君は勇敢に敏速に飛翔をやつてくれるのです。このケースとフヰルムの重量は二匁五分から三匁ありませう。

○

ニュース第一。新聞は廣く、遠く、深く、正しく、早く、ニュースを得るのに懸命ですが、電信、電話、汽車、自動車、電

車・郵便、等、等、ニュースを運搬する機關にも細かい注意と、多くの費用がかけてゐます。寫眞ニュースは、ある場合記事のニュース以上の大きなニュース價値をもち、讀者の目や胸を捕へます。そこで寫眞を運搬するのにも、いろ〳〵の機關がありますが、遠距離の場合は、早くて正確なのは汽車便によることです。着驛と本社との間はオートバイを使へばいゝ。次ぎは飛行機です、これは汽車以上に早い、その代りに着陸場を要する、多くの費用を要する、天候が惡ければ中止しなければならぬ場合がある。そこで電送寫眞です、電話線を繼ぎ枠れば、カビネ版が、僅か四五分の間に東京大阪間で送られる、原板よりやゝ鮮明は缺くけれども、大阪から東京へ、東京から大阪へ、五分以内で寫眞が受送されるといふことは全く科學の力で、早いも早い、こんな早い輸送方法はないが——ないが實は器械のある場所と場所の間に限られるので、器械のないところでは送ることも受けることも出來ません。

こゝにおいて、わが鳩君に生彩があります、自由な場所から送ることが出來ます。但し速力において、電送寫眞機や飛行機には及びません、しかし急行列車よりは早い、天候が險惡な時には鳩も困りますし、又未知の世界を飛ぶことも困難ですが、大體勝手のわかつた土地からなら勇敢に、不平もいはず、(いつてゐるかもしれないが)途中で水も呑まず、一氣に、ひたむきに寫眞を背負つて飛びます。そしてドウでせう、一ケ月の食糧三十錢、一日一錢あれば飲食に滿足してくれるのです。これほど忠實で而して勞銀の安い、空中の勞働者、空中の通信者は外にありますまい。

○

外國では有史以前から空中通信に利用されたらしい、日本では八幡樣のお使ひとかお使はしめなどいつて、箱崎八幡の鳩など日清戰爭の話題になつたものですが、例の土鳩で、德川時代には商人が使つたことがあると聞いてゐます。

傳書鳩の原産地は、埃及、伊太利等のやうですが、今日の傳書鳩の基礎的種類をつくつたのは白耳義人です。そして佛國で改良され、今日のいろ〳〵の種類が出來たわけです。

日本では德川時代は土鳩、明治三十二年頃支那から支那種を三百羽輸入し、同三十四年白耳義から三百羽輸入したことがある。明治三十五年獨逸から五十羽輸入したのを、日露戰爭で臺灣の澎湖島で使つたが、うまくゆかなかつたさうで、そこへもつてきて明治四十二年、マルコニーの無線電信が發明されたものだから、「非科學的通信法」は全滅してしまひました。

ところが、何といふ皮肉でせう、あらゆる科學の力を活用して相戰つた世界大戰爭で、科學的通信機關が使用不可能に陷つた時、神の使の如く活動したのは鳩でした。鳩は毒ガスの中をくゞりぬけて活動しました。目をたゞらしても活動しました。ベルダンの要塞にゐた一羽の鳩は、援軍を求むる通信をもたらして、砲煙彈雨の間を飛びました、そして此の大使命を果してから、「非科學通信法」も亦絶大なる力をもつことを認められ、大正八年、日本陸軍でも佛國から鳩を輸入し、將校一名下士二名を招聘して、今の中野電信隊のところで、訓練を開始したのであります。

この頃です、陸軍々用鳩調査委員の菱田少將が將校や技手連と東日へ見えまして、この屋上から鳩を放つと五分かゝらぬうちに中野へ着く――といはれるものですから、通信用紙に何か書いて放ちますと、四五分して中野から電話で、そして私どもが書いた通信文をそのまゝ讀みあげられたので、ホヽウと驚いたものです。

その頃、私は小動物を多く飼つてゐました。犬、猫、小鳥、猿山羊、七面鳥、まるで動物園のやうだと友人に笑はれたものですが、この鳩をみてむやみに飼つてみたくなつたのです。そして新聞通信に必らず使へるといふ確信もついたので、自分でも飼ひ新聞社の方へもすゝめました。本山社長は前から傳書鳩に通で興味をもつてゐられたので、話はずん〳〵と進行しました。それにはモット鳩を研究しなくてはイケないといふので、私は菱田少將と共に水戸に、前橋に、宇都宮にいつては講演し鳩を放ちました。前橋の公園で放鳩する時には二萬人からの人出で、私は紀念碑の上に立つて講演しましたが、二萬の人、おまけに野天演說ですから三十分位でへと〳〵になつたのを記憶してゐます。兎に角前橋から東京に鳩が手紙を持つてゆくといふので、二萬からの人が集まつたのですから――全く隔世の感があります。

○

民間の放鳩熱も盛になりました、大阪、京都、奈良、名古屋地方が盛んです。仙臺から大阪へ第一着で飛んだ鳩など、千圓の市價を唱へてゐるさうです。東京方面にも全關東傳書鳩聯盟が出來て、なか〳〵メートルをあげてゐます。

水産試驗場では魚群發見の消息や、魚がとれた量を舟がつく前市場へ知らせるなど、いろ〳〵使つてゐるやうですが、北海道の王子製紙苫小牧工場でも、木材伐出しなどの通信を工場と山の間でしてゐるといふことをきゝました。また新冠種馬所で

は馬の精液を鳩に運搬させて札幌で人工受胎をやる研究をしてゐるといふこともきゝました。新冠と札幌間は一二〇キロメートルですが精蟲は適當の濕度を與へてみれば二十四時間は生活してゐるさうですから、種馬所で精液を採つてブドー糖溶液に混ぜ、硝子瓶に入れて、さらに鳩のケースに入れて運搬させるのださうです。これがうまくゆけば大變な費用が助かります。

鳩の實用方面を話しかけて、話が飛んだ方へ脱線しましたが、新聞のニュース、又はニュース寫眞を運搬する上において、今日鳩は重大な役目をもたされ、毎日活動して居ります。

東京の新聞、通信社は五十羽以上三百羽位飼養してゐます、時事新報の鳩は數も三百からあり訓練が熱心ですから、私ども實は時事の鳩の將來を恐れてゐます。全く訓練次第で、訓練には鳩に對する興味と愛情が必要です。たゞ看板に鳩舍と鳩があつて、實際の通信は民間の優良な鳩を借用するやうでは、いつまで經つても鳩使は上達しません。いづれの社も熱心ですが、時事のは訓練に熱心だから特にいゝ、將來をもつと思ひます。

○

東日では大正十三年五月から正式に飼鳩と訓練を始めました。飼鳩に勝れた川中君に中野の陸軍の方から來てもらひ、後に訓練に馴れた山川君がくるし、今日ではその外に助手が一人ゐて約五百羽の鳩を世話して居ります。私が初め計畫して陸軍から拂ひ下げて貰つたのは三十羽(一羽五圓)でしたが、翌年更に三十羽の拂下を受け次第に殖えて今日では五百からの數になりました。通信區域は、西は東海道舞坂まで(二一五キロ)海上は伊豆大島、八丈島から東京灣一帶(二八五キロ)中央線方面は日本アルプス以東各地(二〇〇キロ)銚子外房州一帶(一〇〇キロ)常磐線方面では仙臺まで(三〇五キロ)東北本線方面では會津若松、郡山、以西各地(二〇〇キロ)信越方面は輕井澤以東各地(一二五キロ)です。

通信に使つた數は

大正十三年	二二一羽	
同　十四年	一、二五八羽	(一日平均四羽)
同　十五年	三、一七二羽	(同　九羽)
昭和　二年	二、二七五羽	(同　六羽)
同　三年	一、三三六羽	(同　四羽)
同　四年(上半期)	一、一[illegible]羽	(同　七羽)

鳩の飛ぶ距離と時間の關係は一分間一キロメートル、四分間に一里ですから一時間に十五里飛びます。陸軍(中野)で一番遠く飛んだのは青森縣野邊地と廣島縣福山から來たもので、どれ

ち六〇〇キロ位です。遠距離になると、一キロ一分といふ基準時間が少しちがつてきます。

東京日日の鳩は何れも通信か寫眞を持つてゐますが、仙臺から四時間四十分(三〇五キロ)八丈島から四時間四十五分(二八五キロ)日本アルプスから三時間五分(二〇〇キロ)會津若松から三時間廿分(二〇〇キロ)碓坂から三時間三十分(二一五キロ)のレコードです。

○

神宮外苑をはじめ近郊の野球場やテニスコート、陸上競技場から、頻々と鳩の放たれるのを見らるゝでせう、あれが鳩便で、二三分から五分の間に新聞社の屋上の鳩舎にかへります。鳩係が脚につけてあるアルミニユームの通信筒から原稿をとり出してベルを押す、編輯でベルが鳴ると屋上から針金傳ひに原稿が屆きます。原稿は薄い紙に書いてありますが、新聞一段の行數を鳩三四羽で運ぶことはわけもないことで——モシ〳〵モシ〳〵早慶戦第一回の裏、モシ〳〵——など電話でやつてる間に、鳩ならもう原稿を持つてきます。電話ですと一度速記にとり、それを日本字に飜譯するのですが、鳩のは直ぐ工場へ出せる日本字の原稿ですから早くて便利です。

横濱と米國から名士が來る、沖で檢疫が濟み次第、記者團はランチから本船に乗り込む、インタービユーをやる、寫眞を撮る、船はゆる〳〵と岸壁に着く、記者は下船する、支局へゆく、電話で原稿は送り寫眞は電車便で送る——これおや遅い、鳩を持つていつて、船がまだ岸壁へ着かない前にニユースも寫眞も鳩に託すと二三十分で本社へ屆く。

秩父宮殿下が日本アルプスを登破される、小槍にお登りになる、奥穗高の嶮を極められる、かういふ時には鳩は多忙です。飛行機便だと、アルプスから人夫が大町まで持つてきて、それから汽車便にして松本へ着く、松本からヤツト飛行機に積むのですが、鳩なら山の頂天から飛ばすことが出來る——三時間、アルプスの山頂から三時間で本社へとゞきます。

千葉縣の鬼熊事件——あの騷ぎの現場は人里はなれたところ、郵便局には東へいつても南へいつても遠いところですが、鳩ですと原稿を書くそばから送られます。

○

昭和三年十二月十二日、東京市の御大典奉祝會が上野で催されました。勅語が賜はるので、これを號外にしなければならぬ、市民へ賜はるのですから一刻も早く有難い御勅語を傳へや

判検事が自動車で出動した、そのあとを自動車でついてゆく何處へゆくやらわからない；さういふ場合に判検事の行先（即ち事件の發生場所）を本社へ知らせるには自動車上からポケットの鳩を放てばいゝわけです。一羽づゝ入れる網があります、網の中から首を出して、親愛なる鳩は記者のポケットに目をクル〳〵させてゐます。

鳩には水が大切です。水だけやつてをいても一ヶ月位は大丈夫生きます。

脚輪はアルミニユームで出來てゐる。生れて十日目位の間につけてしまふ。社名、鳩の番號、生年の刻が脚輪に入れてあります。

訓練は當歳鳩は一〇〇キロから一五〇キロを完全にやる。二歳は二〇〇キロ、三歳は三〇〇キロまでといふ標準ですが、東日で當歳鳩が三〇五キロ、即ち仙臺から飛んでかへりましたが、これなどは珍らしいレコードでせう。

鳩通信の方法には、片道通信法、往復通信法、夜間通信法など、いろ〳〵ありますが、餘り専門的になるからやめます。

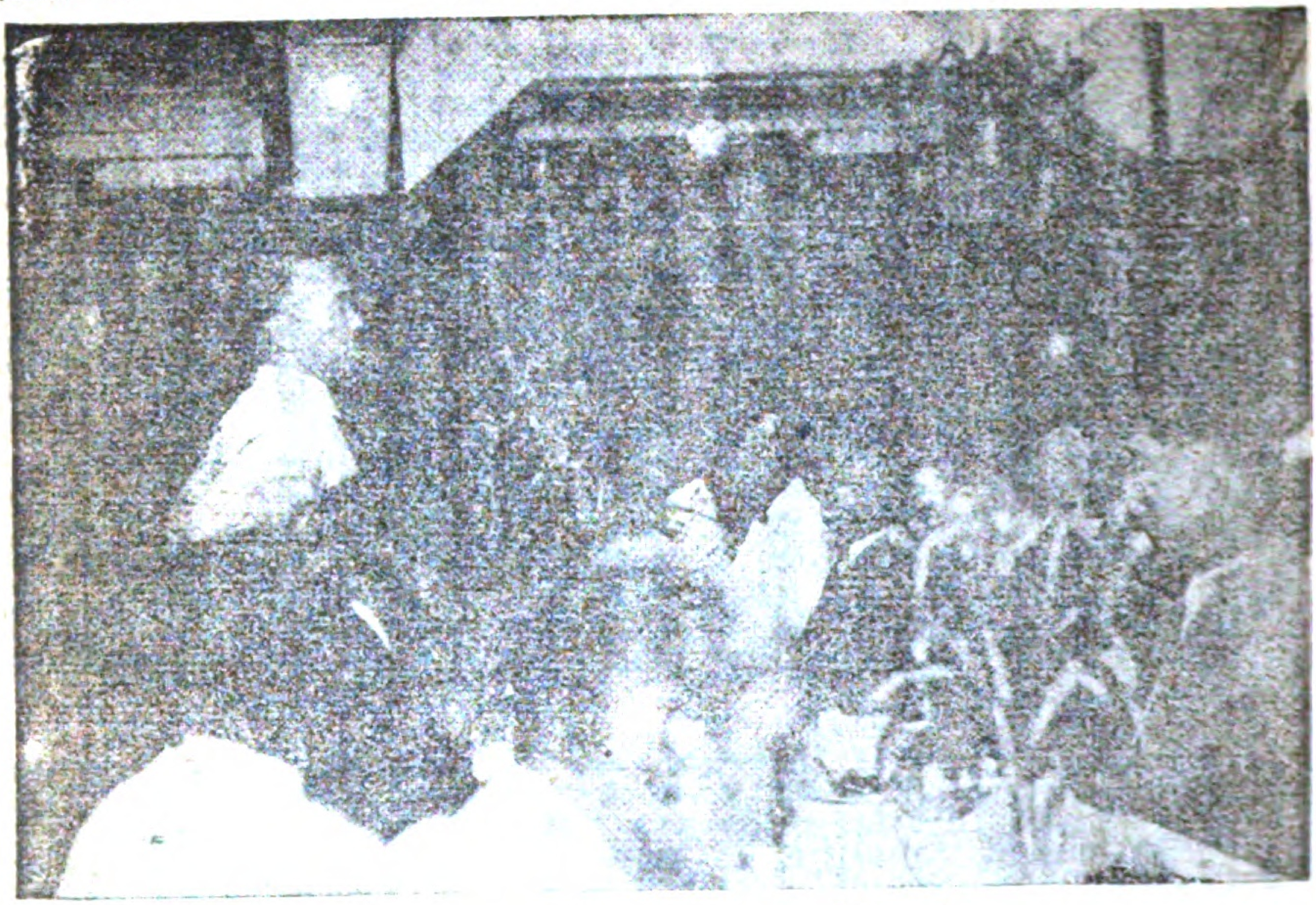
鳩にはミユーゲといふ傳染病がある、人間でいふと梅毒のやうなもので、これを鳩係は恐れてゐますが、概して鳥のうちでも健康な鳥です。

鬼熊事件の時に一羽の鳩が鶴見驛で省線電車に轢かれて死にました。東日へゆく通信原稿を持つたまゝ線路に血を流したわけ、驛の助役さんが原稿を社へ屆けてくれ鳩の死骸は埋葬してくれました、かういふ親切な方もあれば傳書鳩としりながら不獵の腹いせにズドンと撃つへッポコ狩獵家もゐます。

鶴見で死んだ鳩は腹痛か何か異常を起して、飛ぶことが出來ず、方向を間ちがへ線路のあたりをひよろ〳〵してゐたものと見えます。

隼や鷹にやられたり、電線の針金に羽を引かけて負傷したり、病死したり、鳩の殉職難も隨分あります。そこで永年私は唱へてゐることですが、春か秋のお彼岸に鳩祭をやりたい、この日は鳩を祀るばかりでなく、子供にも鳩を愛する情操を培ひ、一種の法樂日をつくりたいといふのでした。

幸ひ中野の隊の方で世話をして、民間の飼鳩家、團體も一しよになり、陸軍用地を分けて貰つて「鳩魂塔」を建てることになり、醵金も豫定以上に集まつて、今春見事な塔が竣工しました。その日は、いろ〳〵の催しもありましたが、東日の鳩も一羽づゝ筒をつけて、上空に時ならぬ筒の音樂を奏しました。日頃おもふてゐた事だけにうれしい日でした。



清澤氏送別の宴

船中より

本社特派員　清澤洌

船が横濱を出ると、もうアメリカが横になつてゐた。

長い間新聞記者をして、最後の締切りでどうにか間にあはせて來た私は、いつもの癖で今度のアメリカ行きにも、その日まで殆んど何の準備もしなかつた。

『いゝよ、足らないものがあつたら先方へ行つて買ふから。ゴビの砂漠に探險に行くんじやあるまいし』

私はかういつて、心配する家族の者を押へて、隣りへ行くよりも、もつと心安い氣持ちでゐた。

そこへ一つの事件が起つた。その朝、簡閲點呼があるから横濱に出頭しろといふのだ。朝七時半の參集で、午後までかゝるかも知れないといふのだから、準備の時間のないのはまだいゝとして、もしかしたら午後三時出帆の三島丸に乗りおくれないとも限らない。役場へ電話をかけると、他のことゝ違ふから、是非共當人が出頭しなければいけないといふ紋切り型の返事だ。

かういふ時には、どんな問題についても、まづ輕視してしまふ私の癖が非常に役立つて來る。『なにどうかならア、船に乗りおくれたら、またその時のことさ』と最後の腹をきめると、案外氣が落ちついてしまふ。幸ひに今度の

判檢事が自動車で出動した、そのあとを自動車でついてゆく何處へゆくやらわからない、さういふ場合に判檢事の行先（即ち事件の發生場所）を本社へ知らせるには自動車上からポケットの鳩を放てばいゝわけです。一羽づゝ入れる網がありますが、網の中から首を出して、親愛なる鳩は記者のポケットに目をクルくさせてゐます。

鳩には水が大切です。水だけやつてをいても一ケ月位は大丈夫生きます。

脚輪はアルミニユームで出來てゐる。生れて十日目位の間につけてしまふ。社名、鳩の番號、生年の刻が脚輪に入れてあります。

訓練は當歳鳩は一〇〇キロから一五〇キロを完全にやる。二歳は二〇〇キロ、三歳は三〇〇キロまでといふ標準ですが、東日で當歳鳩が三〇五キロ、即ち仙臺から飛んでかへりましたが、これなどは珍らしいレコードでせう。

鳩通信の方法には、片道通信法、往復通信法、夜間通信法など、いろくありますが、餘り專門的になるからやめます。

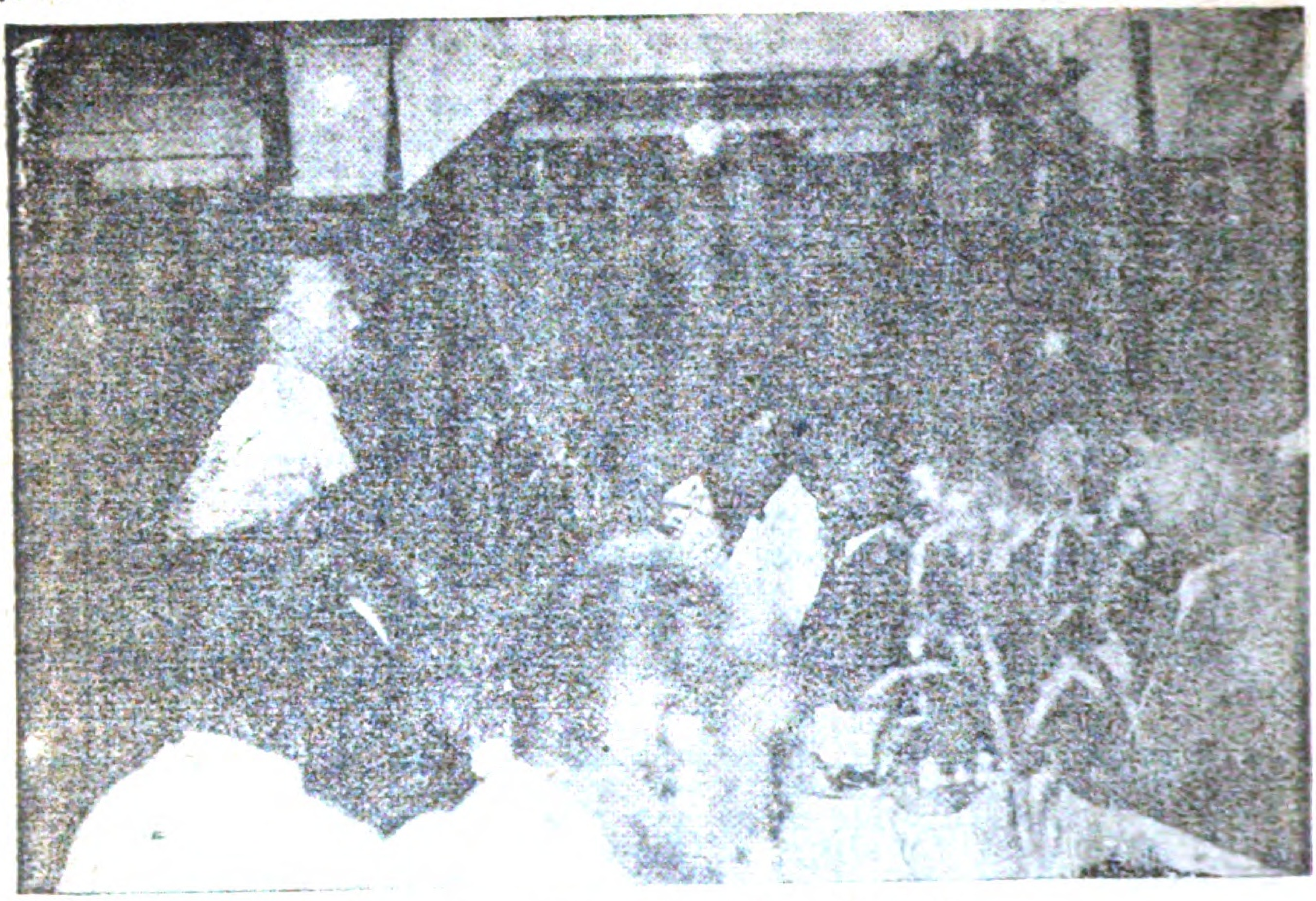
鳩にはミユーゲといふ傳染病がある。人間でいふと梅毒のやうなもので、これを鳩係は恐れてゐますが、概して鳩のうちでは健康な鳥です。

鬼熊事件の時に一羽の鳩が鶴見驛で省線電車に轢かれて死にました。東日へゆく通信原稿を持つたまゝ線路に血を流したわけ、驛の助役さんが原稿を社へ屆けてくれ鳩の死骸は埋葬してくれました、かういふ親切な方もあれば傳書鳩としりながら不獵の腹いせにズドンと擊つヘッポコ狩獵家もゐます。

鶴見で死んだ鳩は腹痛か何か異常を起して、飛ぶことが出來ず、方向を間ちがへ線路のあたりをひよろくしてゐたものと見えます。

隼や鷹にやられたり、電線の針金に羽を引かけて負傷したり、病死したり、鳩の殉職難も隨分あります。そこで永年私は唱へてゐることですが、春か秋のお彼岸に鳩祭をやりたい、この日は鳩を祀るばかりでなく、子供にも鳩を愛する情操を培ひ、一種の法樂日をつくりたいといふのでした。

幸ひ中野の隊の方で世話をして、民間の飼鳩家、國體も一しよになり、陸軍用地を分けて貰つて「鳩魂塔」を建てることになり、醵金も豫定以上に集まつて、今春見事な塔が竣工しました。その日は、いろくの催しもありましたが、東日の鳩も一羽づゝ笛をつけて、上空に時ならぬ笛の音樂を奏しました。日頃おもふてゐた事だけにうれしい日でした。



清澤氏送別の宴

船中より

本社特派員 清澤洌

船が横濱を出ると、もうアメリカが横になつてゐた。

長い間新聞記者をして、最後の締切りでどうにか間にあはせて來た私は、いつもの癖で今度のアメリカ行きにも、その日まで殆んど何の準備らしなかつた。

『いゝよ、足らないものがあつたら先方へ行つて買ふから。ゴビの砂漠に探險に行くんじやあるまいし』

私はかういつて、心配する家族の者を押へて、隣りへ行くよりも、もつと心安い氣持ちでゐた。

そこへ一つの事件が起つた。その朝、簡閲點呼があるから横濱に出頭しろといふのだ。朝七時半の參集で、午後までかゝるかも知れないといふのだから、準備の時間のないのはまだいゝとして、もしかしたら午後三時出帆の三島丸に乘りおくれないとも限らない。役場へ電話をかけると、他のことゝ違ふから、是非共當人が出頭しなければいけないといふ紋切り型の返事だ。

かういふ時には、どんな問題についても、まづ輕視してしまふ私の癖が非常に役立つて來る。『なにどうかなるア、船に乘りおくれたら、またその時のことさ』と最後の腹をきめると、案外氣が落ちついてしまふ。幸ひに今度の

私の旅行は、中央公論社だけに責任を負つてゐるので、大して先を急がぬ自由旅だ。軍隊、自由人の渡航をおくらす——なども却つて變化があつて面白いかも知れない、と不屆きな新聞心すらも頭を擡げた。

併し世の中はそう意地惡くばかり出來てをらない。その前の晩、私の留守に來て家族の者からこの事を聞いた横濱で有力者の倉田君が、吞氣者の私に委せてをいては危險なりとみて、自分で朝から自動車で奔走して、私だけを早くすましてくれることになつてゐた。

『これだから吞氣者は商賣としても算盤珠にのるよ、あれは吞氣者だぜといふレツテルがつくと、みんな寄つて集つてやつてくれるからな。おれはまだ自分で引越しの荷物を運んだことがないぜ』

私はそう冗談を云ひながら、その朝、友人の手を握つた。

補充兵步兵二等卒としての私は、自分で考へても笑ひ出すほど不手際だつた。私は名を呼ばれて司令官の前に出て默つて突立つてゐた。普通の場合には、先に話しかけるのは呼ばれた方でなくて呼んだ方である。

『先刻の模範兵がやつた通りにやるんだ』

下士官にそう注意されて、私はバタン／＼と足を強く踏みつけながら、二歩進んだ。

『ボタンが外れてゐる』

私は遑てゝ上衣のボタンをかけた。

肩書きの問題でまた間違つた。『陸軍步兵補充兵』といつたら『補充兵步兵二等卒といはなくちやいかん』といふ。

『一度、君は軍隊に這入つたのじやないか』

余りの不手際に驚いたか、司令官がそういつて聞いた。併しそれでも直ぐ許してくれて『君、米國に行くんだつてネ、御無事に』と小さい聲でいつた。こんな頭の惡い男が、アメリカに行つて一體何をするんだらうとこの陸軍大佐は思つたかも知れない。

私は身體一杯の汗をふいた。それはたゞ暑いばかりの汗でもないやうであつた。

それから私は東京に行つて、中央公論社に行つたり、買物をしたりして、一應自宅に歸つた。横濱の三島丸に行つたのは、もう二時を過ぎてゐた。

『遲いですネ、みなさんが大變お待ちかねですよ』

親類のものが、そうなじるやうにいつた。いかにもスモーキング・ルームには、私の親しい顏が一杯ゐた。

『ヤア、ヤア』

かういふ場合には禮式ばつた言葉は不用である。嚴めしい肩書を持つて居る人なら、部下や同輩の儀式的な見送りが澤山あらうが、私のやうな浪人の見送人に心から許す友人の外に、横濱まで來てくれる物好きがあらう道理はない。それでもその頭數は數十に上つてゐた。ドラが鳴つて下船の合圖があつてから、中央公論の島中氏も社員を率ゐて汗をふきながら來てくれた。

虹のやうにあまれた美しいテープの綱が、船の動くに從つてポツリ／＼と切られていつた。私の身體に幾十の眼が集中して、船腳と共に私を追ふてゐるのを感じた。

『……萬歲！』

始めの發聲が私に對するものであつたかどうか知らないが、私を見送つてくれた人は、手をあげて一齊にそれに和した。

私は杭のやうに並ぶ見送人の群を分けて、

一つの小さい姿を捜した。そしてそれが最後まで私の眼の底に殘つた。小さい姿とは今年一年八ケ月になる私の男の子である。まだ口のきけないかれは、それでも何かが分つたか、叔父にだかれて船の上の方をみてゐた。

船が沖合に出ると、私は淋しい、併し救はれた氣持で甲板の方へ引きかへした。無風帶の世界に來たやうな暑い日であつたが、それでも船の進む速力で、涼風が心地よく流れ去つた。

わたしが船の上でアメリカを發見したといつたのはこの時である。

船には上海から乘つたであらう多數の外人客が居つたが、その眞中の籐椅子に寢そべつてゐた若い婦人が、強く私の注意をひいた。かの女は大根のやうな脚を出して、その末端に靴下と靴を引つかけてゐた。赤と白を思ひ切つて大きく元祿模樣にしたやうな服を着、眞赤な帽子を被つて、それが如何にも粗雜な趣味を現はしてゐた。かの女は新しい乘客が乘り込んだのも知らぬ氣に、平氣で仰向けに横になつてゐた。頭の近くに男の連れが二三人控えて、獨逸語に話してゐた。

私はドイツの哲人カイセリンク伯が『アメリカはアメリカ印度人を科學的にした人種だ』といつた言葉を思ひ出した。アメリカ人は土人を征服した。併し大地は常に人間よりも強い力を持つてゐる。勝つた人種は、いつの間にか無意識的に大地に化されて、土人と同じ標準に引きさげられるの外はない。印度を征服したアリアン人種がいゝ例だ。機械文明に打ち勝つて、世界一を誇る彼等が、その趣味と、その文化と、その性格において、アメリカ印度人になつてゐるのだ。

『なんといふ原始人の趣向だ』

私はその婦人を横目で見ながら、そう獨り言をいつた。この原始人を取り卷きながら、男が輪になつて踊りまはるやうな文明が、米國の文化の特長ではないか。

寢そべつてゐるアメリカを、私は横濱の埠頭でもう發見したのだ。

船にはシカゴの學校の先生だといふ七十二歳になる婦人もゐた。暑中休暇を利用しての世界漫遊の旅で、一人で神戸から京都を見物し、一人で富士に上り、それから一人で日光に行つて來たそうだ。

『あのお婆さんはこの獻立を頭から下まで一つ殘らず食つて、その上にパンを四つばかり食ふんですつて』

と、私の食卓の女學生が目を圓くして話した。

それから三等にはシアトルの學校の女教師の七人組がゐた。三等といへば日本人の勞働者でも一寸考へる待遇であるのに、二十歳から二十五六歳までの婦人が、荒削りの三等室で香港まで行つて、上海、神戸、横濱と船の寄港するところを視察して歸つて來たのだ。

『この航路のお客様は英國人などゝ違つて、少し待遇が惡いと、すぐブー／＼いつて攻撃する代りに、少し待遇をよくすると、直きに喜んでくれます。米國人は却つて取扱ひようございます』

と今まで歐洲航路に行つてをつたらしい三等客係りのスチユワードが話してゐた。

それにしても女文化の世界、女がドミネートする社會、それが日本の船にまで延長されてゐるのだ。男が一生懸命にかせいで機械の

奴隷のやうになつて働いてゐるのに、この婦人たちの冒險精神はどうだ。ギリシヤやローマの文明が奴隷の上に咲いた花なら、米國では男の勘定において、女の新しい文化が芽生へつゝあるといつてよかろう。男を倹しばりにしてをいて！

男の日本から行つて、われ等はどれだけ女の世界に窮屈を感ずることか。女がゐるからわれ等はキチンとして食堂に出ればならぬ。女がゐるから話しの調子も謹しまればならぬ。女がゐるから、日本に居れば勞働服であるところの準服と襟を、起きるから寢るまで、着てゐればならぬ。米國といふ國は換言すれば女で氣のつまる社會のことである。

……が、かういつてしまつては論理が餘りに簡單すぎる。

米國はパラドックスの國である。繁榮天下に並ぶことのない金持國でありながら、失業者の多い國。女が威張つて居りながら、社會の中樞は依然として男が運轉してゐる國。自由を看板にして居りながら、メンケンやシンクレアー・ルイスの著書の發賣禁止をして居る都市の多い國。教育が盛んで學校の數や設備においては、各國が束になつて行つてもかなはないほど發達してゐるが、それでダーウインの進化論を教へることを禁止してゐる州の多い國。デモクラシーといふ言葉を攻擊されると自分の國を攻擊されたと考へて憤慨するほどデモクラシーの本家と信じながら、それでゐて案外富豪政治の國。禁酒國でありながら、酒が幾らでもある國。

バーナード・ショーは何回も傳へられる渡米說を否定しながら『米國では善人は、みんな牢屋の中に居るよ』といつたことがある。眞理の發表を憚れない思想家は、あらゆる迫害を免がれないといふほどの意味であろう。それほどアメリカの法律は曲げられて居るが、併しそれでをつて案外秩序の保たれて行くところにパラドックス國の本領がある。

そういふ不思議な國轉換期の絕頂に立つ國に、私は今、中央公論に特派されて、その文化を觀に行くのだ。一應はその國狀や社會を新聞や雜誌で心得てゐるから、アトモスフエアーを嗅ぎに行くといつた方がいゝかも知れない。

船はもう二日經てばヴイクトリアにつき、その日の内にシアトルにつく。十年振りのこの國が、東洋の巡禮客に何を見してくれることであらうか。

――八月廿日、三島丸にて――

世界怪奇實話

實話、小說を驅逐すべき聲を聞く。この實話の流行は、すべての流行とくらべてきまつてゐるやうに、何についても、門外漢のほうが一足さきである。僕は、昨年から今年へかけて歐羅巴を旅行中、この實話なるものに事實は小說よりも奇なる興味と、血の通つてゐる把握力を感じて、あらゆる方面と種類のものを研究して來た。そのなかから精選して、材料の續く限り連載したいと思ふ。そして、材料は無限につゞくから、したがつて無限に連載するわけである。あへて犯罪のみとは限らない。呼んで「世界怪奇實話」の所以である。

怪奇實話といふ。怪奇は、言はゞ犯罪である。同時に、實話は、文字どほり嚴正に事實である。故に、荒唐さと事實と——この表面相背馳する二つの概念が混然一致するところに、「世界怪奇實話」の核心が潜んでゐはしまいか。實話をして小說を驅逐せしむる勿れ。但し、面白い實話をして、自由に、面白くない小說を驅逐せしめよ。

女肉を料理する男

——世界怪奇實話(一)——

牧逸馬

1

人氣が荒いので世界的に有名な倫敦の東端區(イースト・エンド)に、ハンベリイ街といふ町がある。門內の激しい、固い石疊の間を粉のやうな馬糞の藁屑が埋めて、襤褸を着た裸足の子供達が朝から晩まで往來を騷いでゐる、代表的な貧民窟街景の一部である。兩側は、アパアトメントをずつと下等にした、いはゆる「長屋」といふやつで、一樣に同じ作りの、汚點だらけの古い煉瓦建てが、四六時中細長く街に並んだ、あの、物の

饐えたやうな、甘酸つぱい濕つた臭ひを發散させて、暗く押し默つて並んでゐる。No. 29 の家もその一つで、圓門(ドウム)のやうな正面の入口を潜ると、直ぐ中庭へ出るやうに出來てゐた。この中庭から、一つ建物に住んでゐる多數の家族が銘々の借部屋へ出入りする。だから、庭の周圍に幾つも戸口があつて、直接往來に向つてゐる表ての扉は、夜間も開け放して置くことになつてゐた。

この界隈は、勞働者や各國の下級船員を相手にする、最下層の賣春婦の巣窟だつた。と言つても、日本のやうに一地域を限つてさういふ女が集まつてゐるわけではなく、女自身が單獨ですることだから、一見普通の町筋と何らの變りもないのだが、言はゞ辻君の多く出沒する場所で、女達は、芝居や寄席のはじまる八時半頃から、この附近の大通りや横町を遊弋して、街上に男を物色する。そして、相手が見つかると、大概そこらの物蔭で即座に取引きしてしまふのだが、契約次第では自宅へも伴ふ。ハンベリィ街廿九番の家には、當時この夜鷹が大分間借りしてゐたので、それらが夜中に客を啣へ込む便宜のために、おもての戸は夜ぢう鍵をかけずに置くことになつてゐたのだ。つまり、中庭までは誰でも自由に出這入り出來たわけである。

九月八日の深夜だつた。

秋の初めで、倫敦はよく通り雨が降る。その晩も夜中にばら〳〵と落ちて來たので、三階に住んでゐる一人のお神さんが、乾し忘れたまゝになつてゐる洗濯物のことを思ひ出した。洗濯物は、東端區(イースト・エンド)では何處でもさうやるのだが、窓から窓へ綱を張つて、それへ乾すのだ。で、お神さんは、雨の音を聞くと周章て、飛び起きて、中庭に面する窓を開けた。小雨が降つてゐたくらゐだから眞闇な晩だつたが、庭へ這入らうとする石段の上に、二つの人影が何か爭つてゐるのを認めた。それは戲け半分のものらしかつた。女の低聲で、笑ひながら「いゝえ、いけません。嫌です。」と言ふのが聞こえた。相手は男で、異樣に長い外套を着てゐるのが見えた。が、前にも言ふとほり、この邊は風儀の悪いところで、眞夜中にこんな光景を見るのは珍しいことではなかつた。また誰かこの家に部屋を借りてゐる女が男を引つ張つて來て、歸る歸さないで入口で言ひ爭つてゐるのだらう。かう思つて、お神さんはべつに氣に留めなかつた。暫らくして、爭ひも止まつた樣子である。翌早朝、デエヴィスといふ男が、中庭の隅の共同石炭置場へ石炭を取りに行つて、あの、二眼と見られない慘屍體を發見したのだつた。

被害者は、ハニィ・チャプマン。廿九番の止宿人ではなかつたが、やはりハンベリィ街の賣春婦で、一思ひに咽頸部を掻き

斬つてあつた。餘程の腕力と熟練を併行する者の仕業らしく、殆んど首が離れんばかりになつてゐて、肉を貫いた刃先の痕が頸の下の敷石に殘つてゐた。が、これは單なる致命傷に過ぎない。屍體の下半身は、慘鼻とも殘虐とも言ひやうのない、まるで猛獸が獲物の小動物を食ひ散らした跡のやうな、眼も當てられない暴狀を呈してゐた。屍體の下腹部に、被害者の女袴(スカート)が掛けてあつた。それを除去して見て、檢屍の醫師はじめ警官一同は慄然としたのである。××から下腹部へかけて二つに切開してある。のみならず、鋭利な刃物で×××を刳り脫つて、××を載せた一片の肉塊が、傍らの壁の根に落ちてゐた。そればかりではない。×××××個所から手を××して臓腑を引き出したものとみえて、まるで玩具箱を引つ繰り返したやうに、そこら一面、赤色と紫とその濃淡の諸器官がごつちやに轉がつてゐたが、唯一つ、子宮が紛失してゐた。

當時、自他ともに「斬り裂くジャック」と呼んで變幻きわまりなく、全倫敦を恐怖の底に突き落してゐた謎の殺人鬼があつた。これが彼の、またもう一つの挑戰的犯行であることは、誰の眼にも一瞥して判つた。最近、續けさまに三度、この近隣の東端區に、これと全然同型の慘殺事件があつたあとである。被害者は常に街上の賣笑婦、現場はいつも戸外、ちよつとした横町の闇黑か、又はこのハンベリイ街のやうな中庭(コート)で、夜中とはいへ、往來を通る人の跫音も聞こえれば、比較的人眼にもかゝらない場處で平然と行はれる。致命傷は決まつて咽喉の一劃き、鋭いて、解剖のやうな殘虐か屍體の下部に加へられて、判で押したやうに、必ず××がなくなつてゐる。同一人の連續的犯行であることは明白だ。人心は戰き、新聞はこの記事で充滿し、話題はこれで持ち切り、警察を焦(あせ)しとする素人探偵が其處に飛び出し、其筋は加速度に躍氣になつてゐる矢先——言ふまでもなくこの九月八日の夜は勿論、その以前から、東端區全體にわたつて緻細な非常線が張られ、櫛の齒を梳くやうな大捜査が行はれてゐた。その網の眞ん中で、人獸「斬裂人(リッパア)のジャック」は殺數的に活躍し、又またこのハンベリイ街のアニイ・チャプマン殺しによつて、もう一つその生血の滿足を重ねたのである。およそ出沒自在を極めること、これほど玄妙なやつは前後に比を見ないと言はれてゐる。いはゆる無技巧の技巧、何ら策を弄さないために、却つて一の手懸りすら殘さなかつた。

個々の犯行を列擧することは、いたづらに繁雜を招くばかりだから避ける。たゞ、そのなかで、何らかの點で有名になつた

事件のみを摘出しても、いま言つた九月八日ハンベリイ街のアニイ・チャプマン殺し、バックス・ロウ街事件、同月三十日にはバアナア街でエリザベス・ストライドを、その四十五分後にミトル廣場(スクエア)でキャザリン・エドウスとを一夜に二人殺し、十一月九日にはドルセット街でケリイ一名ワッツを殺してゐる。この他同じやうな賣春婦殺しがその間に挾まつてゐるのだが、恥部の××、×××斬り取られてゐること、臓物を弄んで變態的な悦樂に耽つた證跡等、屍體の慘狀と犯行の手段、殘虐性はすべて同一である。

名にし負ふ倫敦警視廳(スカウトランドヤアド)は何をしてゐたか?

正直に言へば、まさに手も足も出なかつた。相當手掛りがあるやうで、實は、何一つ信據するに足る手掛りがないのだ。バアナア街の場合など、運送屋の下請けのやうなことをしてゐる男が、小馬車を自宅の裏庭へ乘り入れて、其處に、血の池の中に仆れてゐるエリザベス・ストライド――綽名を「のつぽのリッツ」と言つて脊が高かつた。あとから出て來るが、この女は死の直前に無意識に一つの重大な役割を演じてゐる――の屍骸を發見したのだが、その時は犯行の直ぐあと、ほんの數秒後のことで、屍體はまだ生血を噴いて、その血の流域が見る見る擴がりつゝ、あつたくらゐだから、發見者の到着が今一足早かつたら彼は間違ひなく「解剖」の現場と犯人を目撃したことだらう。事實、ジャックが、近づく馬車の音に狼狽て、屍體を離れ、最寄りの暗い壁へでも身を貼り付けた途端に、發見者の馬車が這入つて來たものに相違ない。異臭に驚いて急止した馬は、もう一歩で屍骸を踏みつけるところまで接近してゐた。この發見の光景を、犯人は傍で見てゐたのである。そして、騷ぎにならうとするところで、闇黑に紛れて靜かに立ち去つたのだらうが、現場はバアナア街社會黨支部の窓の直下で、兇行時刻には、支部には三四十人の黨員が集つてゐたにも係らず、誰一人物音を聞いた者はなかつた。これは無理もない。只さへ喧々囂々たる政黨員のなかでも、殊に議論好きで聲の大きい社會黨員が三四十人も寄り合つてゐたんだから、耳の傍で爆彈が破裂しても聞こえる筈はない。あとでみんな惡口を言つた。とにかく、かうして屍體にばかり氣を取られてゐた發見者の横を、影のやうにするりと拔け出たであらう「斬り裂くジャック」は、直ぐその足でアルドゲイトのミトル廣場(スクエア)へ立ち廻り、四十五分後には、また一人キャザリン・エドウスといふ淫賣を殺害し、矢張り×から腹部を××して子宮を×つてゐる。このキャザリン・エドウスをはじめ多くの被害者が、如何に哀れに貧困な、下層の賣春婦であつたかは、キャザリン・エドウスが、炊事に汚れた前掛(エプロン)姿で

男」——犯人——と他人の家の軒下で×××し、そのまゝ殺されてゐた一事でも判る。犯人はこの前掛けの端を捩り取つて、それで手とナイフを拭いた。拭きながら歩いたものとみえる。さして遠くないグルストン街の角に、その、血を吸つて重くなつたエプロンの切布が落ちてゐた。そして、このグルストン街の角で、犯人はあの、有名な「殺人鬼ジャックの宣言」を共同の壁へ白墨で書いたのである。

The Jews are not the men to be blamed for nothing.

これは、考へやうによつて二樣に取れる文句である。「猶太人はたゞ譯もなく糺彈される人間ではない」——糺彈されるには、糺彈されるだけの理由がある。とも、解釋すれば出來ないことはないが、勿論さうではない。「たゞ譯もなく糺彈されて引込んでゐるもんか。この通りだ」の意味で、味はへば味はふ程不氣味な、變に堂々たる捨て科白である。

この樂書は實に惜しいことをした。書いて間もなく、密行の巡査が發見して、驚いて拭き消してしまつたのだ。附近には猶太人が多い。反猶太の各國人も、英國人をはじめ勿論少くない。この文句が公衆の眼に觸れゝば、場合が場合だけに群集が殺倒して、忽ち人種的市街戰がはじまる。實際さういふ騷動は珍しくないので、それを避けるために獨斷で消したのだと言ふ。氣を利かした心算で莫迦なことをしたもので、後から種々の點を總合して觀ると、この壁の文字こそは、それこそ千載一遇の好材料だつたのだ。これさへ消さずに科學的に研究したら、必ず犯人は捕まつてゐたと言はれてゐる。その出しやばりな巡査は恐らく罰俸でも食つて郡部へ廻されでもしたことだらうが、言ふところによると、この樂書の書體は、これより以前、二回に亘つて中央新聞社（セントラル・ニュウス）へ郵送された、一通の手紙と一葉の葉書の文字に酷似してゐた。否、紛れもなく同一のものであるとのことである。

その、新聞社に宛てた手紙と葉書は、風俗兩說。當時大問題を醸したもので、葉書のはうは、明らかに人血をもつて認め、しかも、血の指紋がべたべた押してあつた。兩方とも「親愛なる親方（ボス）よ」といふ亞米利加風の俗語を冒頭に、威嚇的言辭を用ひて新しい犯行を揚言し、手紙には「賣俗婦でない婦人には何らの危害を加へないから、その點は安心してゐて貰ひたい」といふ意味を附加して、ともに「斬裂人（リッパー）ジャック」と署名してあつた。後からも續けて來たことを見ても、多分實際の犯人が執筆投函したものかも知れない。が、何處の國にも度し難い馬鹿がゐる。この「斬り裂くジャック」が現下の視聽を集めてゐるので、何か素晴しい人氣者かなんぞのやうに思違ひし、さうでな

いまでも、一つ面白いから騒がして遣れなんかといふ好奇な閑人があつて、かゝる不屆きな惡戯を組織的に始めないとも限らない。大いにありさうなことである。警視廳へも、これに類似の投書が山のやうに舞ひ込んでゐた最中だ。したがつて專門家は、この中央新聞(セントラル・ニウス)の受信にも大した信を置かずに、むしろ頭から一笑に附してゐた。しかし、グルストン街の壁の文字だけは、最初のそして最後の、純正な犯人の直筆である。この唯一の貴重な證據が、心ない一巡査の手によつて無に歸したのは、返す返すも遺憾の極であつた。

2

一般には知られてゐないが、この時、警視廳は、露西亞政府から一つの情報を受け取つて、それに或る程度の重要性と希望を繋いでゐた。數年前、莫斯科にこれと同じ事件が頻發して、矢張り賣笑婦のみが排他的に殺され、切開手術のやうな殘虐が各屍體に追加してあつたが、この犯人は捕縛されて、精神病者と判明し、同地の癲狂院に收容された。ところが、その春病院を脱走して、爾來行衛不明になつてゐるといふのである。この狂人はもと相當な外科醫で、英國に留學してゐたこともあるから、ことによると、逃走後ひそかに倫敦へ潛入したものかも知れない。人相書も附隨してゐるので、一時警視廳は、それに該當する人物の探査に全力を傾注した。莫斯科の犯人の動機は、宗教上の狂信的な妄執からだつた。すなはち彼は、かういふ方法で殺害されることによつてのみ、この種の穢れた女は天國の門を潛り得ると信じ、つまり濟度のために殺し廻つたのだつた。宗教的迷執云々は第二にしても、いま倫敦を震慴せしめてゐる「斬裂人(リッパア)のジャック」が、可成り適確な解剖學的知識の所有主であり、また經驗ある執刀家であることは疑ひを入れない。彼は確實に××の位置を知り、且つ如何にしてそれを傷つけずに××××その最善の方法をも專門的に心得てゐた。バックス・ロウ街の屍體からは左の腎臟が見事に除かれてあつたが、この機官を摘出することは、外科學上至難の業と看做されてゐて、それには餘程の實際的手腕を必要とする。これらの諸點を歸結して、莫斯科の犯人と同一人であるか否かは兎も角、この「ジャック」なる人物も狂醫師の類ではあるまいかと云ふ當然の結論が生れ、それが最高の權威をもつて警視廳内外の專門家を風靡したのだが、その問題の腎臟は、該事件の二日後、新聞紙で綺麗に包裝して小包郵便で警視廳搜査課へ配達された。附手紙はなく、たゞ上包みの紙に例によつて血の指紋が押してあるだけで、些さか注意する必要を感じたものか、署名もなかつた。

しかし、中央新聞社(セントラルニユース)に宛てた通信を犯人から出たものと假定すれば、この露國渡來の狂醫師說は直ちに粉碎されなければならない。何故ならば、その文章が、まるで亞米利加人の書きさうな俗語の英語で、決して外國人の綴つたものとは思考されないからである。文句は實にきびきびして、下等な言葉ながらに、いや、下等な言葉なればこそ、一層效果的な表現に成功してゐた。これは、搜査の方向を捻ぢ曲げるために、故意にさういふ書き方をしたものと觀ることも出來ないわけはないが、到底外國人――正規の英語の敎養があればあるほど――の手に成つた文面とは首肯されないし、また如何に狂人であつても、醫者ならばあれほど無學な手紙は書かない、いや、いくら書かうと努力しても決して書けないに相違ない。殊に驚くべき一事は、新聞社へ來た血書の葉書が、次ぎの「ジャック」の犯行時日を豫言して、見事に適中してゐることである。十一月九日と葉書にある其の日に、スピタルフヰィルド區ドルセット街ミラア・コウトで、ケリイこと別名ワッツが殺された。これも或ひは、單にその葉書を投じた惡戲者の出鱈目が偶然當たつただけのことかも知れないが、あのグルストン街の壁の字さへ遺つてゐたら、兩者の手段を比較研究することによつて、變裝の秘密を露出することは容易だつたのである。

この、世界犯罪史上にも他に類のない兇惡不可思議な人格――彼を取り卷く闇黑の恐怖と戰慄すべき神祕、それらはもう、いまとなつては闡明のしやうがないのだ。「斬裂人(リッパア)のジャック」と呼ばれ、また、自分でもさう名乘つてゐたこの男は、いつたい何者であつたか？　ある種の女達に何か特別の遺恨を藏してゐた殺人狂だつたのか。それとも、やはり倫敦警視廳(スコットランドヤード)の一部が見込みを立てたとほりに、狂へる醫師でもあつたか。或ひは一說のごとく、宗教上の妄信を抱く狂信者か、これらはすべて彼の正體、現實の犯罪手段、その動機等に關する世人の臆測を殘したまゝ、彼が、世間の表面から埋め去つた永遠の謎である。ことによると、すでにその一切は、彼とゝもにいま何處かの墓穴に眠つてゐるかも知れない。事實、これほど連續的に行はれ、これほど社會を震撼し、しかもこれ程、事件當時のみならず長く以後にわたつて、警視廳(ヤード)內部は勿論、あらゆる犯罪學者、あらゆる私設探偵局、凡ゆる新聞社の專門的犯罪記者等から、種々雜多の理論、推定が呈出されたに係はらず、實際の犯行に

關しては、只一筋の光明さへも投げられなかつたといふ不可解きわまる事件は、ちよつとほかに比較を求め難いのである。「斬り裂く(リッパアゼ)ジャック」と言へば、倫敦では、いや、英國では誰でも知つてゐる。およそ何らかの關係で、世界中の血腥い出來事に興味と注意を向けてゐる人なら、必ず聞いたことのある名に相違ないだらう。

依然として全倫敦を、名物の濃霧にも比すべき恐慌が押し包んでゐた。

現場は、前から言ふとほり、この尨大な都會のなかで、世界の塵埃棄場と呼ばれる細民街東端區(イーストエンド)、そこへ踏み込まふとするアルドゲイトと、多く猶太人が住んでゐるので有名なホワイトチャペル街との間の、あの、暗い小庭(コート)と不潔な露路が網の目のやうに入り込んでゐる、陰慘な一劃である。滯英中、筆者は特に護衛者を雇つて、日中と深夜、前後數回にわたつてこの邊一帶を探險したことがある。全くそれは、探險といふ言葉が何らの誇張なく當てはまるほど危險な、乃至は危險を感ずる、都會惡の巣窟なのだ。社會事業視察、都市經營の研究といふやうなことで、自身警視廳へ出頭してよく頼めば、その方面に通ずる私服刑事をひとり附けて呉れる。が、私はいま、このロンドン東端區における私の經驗や觀察を述べたり、こゝの夜で私に直面した様々の光景を描いたりしやうとは思つてゐない。只しかし、實際の場處を知つてゐる私は、この兇猛な犯罪實話を書くに當つて、特種の個人的感興を覺えるのである。そしてそれは、幾分の現實性をもつてこの物語を裏打ちするに相違ないと信ずることが出來る。

ロンドン人は、何人も新たなる戰慄なしには、あの晩秋を回顧し得ないであらう。

最後のリッパア事件として今だに記憶されてゐる、十一月九日、金曜日の夜だつた。

もうすつかり冬の化粧をした倫敦である。一日ぢう離れなかつた霧が、夕方ちよつと氷雨に變つたりして、その晩はことに黒い液體が空間に流れ罩めたやうな、濕つた暗夜だつた。が、新聞町フリイト街からは、深夜の電話によつて召集された各社社會部記者と通聯記者(ユナテッドプレス)の全部が、沈默のうちに續々とこのアルドゲイトに向つて繰り出されつゝある。「血の脅威(テラア)」――ジャアナリズムは逸早くこの連續的犯行をかう命名してゐた――が、又もやこの夜、貧窮と汚毒と邪惡の東部區(イーストエンド)を訪れたのだ。白い霧に更けた街路に、蟻も逃さぬ非常線が張り詰められて、濡れた舗道を踏んで、人の跫音は秘めやかに鳴つた。通行人のうち、男はすべて巡査か密行刑事か新聞記者だつた。女は、この界隈

につきもの、賣笑婦だつた。この、街の女達も、流石に一人で歩くことを恐れて、商賣にはならなくても、三四人づつ、霧に遭つた羊のやうにかたまつて、霧の中から出て霧へ消えた。漂白したやうな蒼い顏と、躊躇く跫音だつた。彼女らは、街上に會ふ人毎に殺人狂ではないかとおびえて、聲を上げたりした。

再び言ふ。「斬り裂くジャック」は、職業的に、或ひは趣味的に、この、賣春婦といふ社會層に屬する女だけを選んで、斬り裂くのである。斬り裂く――文字通り、×××から上部へかけて外科的に切開し、引裂(リップ)するのだ。

この眞夜中の怪物の横行に對して、警察の無能を責める一般公衆の聲は極點に達してゐた。が、素人の市民たちが騷ぎ出す前に、其筋の活動が疾うに白熱化してゐたことも私は前言した。しかし、それは、犯人逮捕の段取りに到らない何らの辯解にはならないとあつて、この時すでに、警視廳部内には、チャアルス・ウオレン卿が責を負つて辭職するやら、幾多の悲壯な場面が作られてゐた。このウオレン卿の辭職演説は非常な刺激となつて管内の全警察官を鼓舞した。倫敦中の警官が新しい力を感じてこのテロリスト・ジャックの捜査に勇躍した。當局のみならず、市民の有志も協力して、この街上の女の屠殺者、闇黑を縫ふ夜獸を捕獲しやうと狂奔し、ありとあらゆる方策が案出され實行された。徹夜の自警團も組織された。夜間は交代で要所に配されて出動を待つてゐた。すべての暗い辻、街燈の乏しい光線には、そこに面する家の二階に刑事が張り込んで窓から眼を光らせた。特志の警官隊が女装して、囮として深夜の町に散らばつた。ホワイトチャペル街の夜の通行人は一人殘らず不審訊問を受けた。擧動不審の廉で拘引された嫌疑者・浮浪人、外國人等は全國で夥しい數に上つた。手頼りらしく思はれる事物は、如何に些細なことでも一々究極まで手繰つた。が、その結末に待つてゐるものは、何時も必ず逃路と失望だつた。この怪異な狂鬼(マニアク)が住んでゐるかも知れないと思はれる町は、片つ端から戸別に家宅捜索した。かうして何時しか、人狩りの網は自然と縮まつてゐた。事實、一度ジャックは、現實に目撃され、會話を交し、しかも多分の疑惑をもつて仔細に觀察されてゐる――――が、惡運はつねに彼の上にあつた。苦心惨憺して集めた手掛りと報道の上に立つても、つひに彼の正體と所在へは法の手が屆かなかつたのだ。それも決して廣い區域ではない。この一町内の住民の一人が確かにそれであるとまで判つてゐても、要するにそこで、神秘の壁が犯人を庇つて、すべての探偵を嘲笑してゐるのだつた。迷信的な人々のあひだには、早くもジャックに超自然的屬性を與へて説明し去るものさへ出て來た。曰く、

この犯人は喰屍鬼か吸血鳥か、とにかく、人間の眼に觸れずに自在に往來する、他界の變怪であらうと。この中世紀めいた物語説は、今でこそ誰でも一笑に附すが、あの恐怖と祕異感の最中には、冗談どころか、一部の人々によつて大眞面目に唱道されたものである。これで觀ても、如何に全事件が怪奇を極め、犯人「斬裂人のジャック」の行動が、全く探偵小説的に神出鬼沒そのものであつたかゞ推測されやう。

狹い區域内で、連續的に街上で辻君を虐殺する。虐殺といふ言葉は足らない。その屍體の狀態は、一々重要な犯行とゝもにあとで説明するが、檢屍の醫師が正視に耐へないくらゐ實に慘鼻をきわめたもので、たうてい普通の神經機能所有者の所業とは思考されない。その、言はゞ常人でない犯人が、これほど巧みに尻尾を掴ませないのである。精神病者は勿論、すこしでも特異性の見える人間なら、この際すくなくとも近所の評判に上つて、疾うに密偵の耳に這入つてゐなければならない筈だ。殊に細民街の特徴として、隣近處はすべて開放的に交渉し合つてゐる。その何處かに、一つでも「見慣れぬ顏」が潜在してゐるとしたら、それは早晩誰かの好奇眼に觸れて、何らの形で、せめて居酒屋會議――日本なら井戸端會議といふところだが、英國では、ことにこの倫敦の東部區あたりでは、山の神連が自畫居酒屋へ集まつて、一杯やりながら亭主をこき下ろして怪氣焔を上げてゐるのは、珍しい圖ではない――その居酒屋會議の噂の一つ位ゐには正にのぼりさうなものである。然るに、さういふ聞込みの絶えてないことが、警察の第一に不審を置いたところだつた。と言つて、この、人の形を採つてゐる妖鬼は、格別犯跡の隱滅とか足跡の韜晦を計つて、ことさらに屍體の發見を遲らしたりして捜査を困難ならしめてゐるわけではない。否、それどころか、殆んど意識的にとしか思はれないほど、彼は大いに不注意であり、時としては、挑戰的態度をすら示してゐるのだ。例としては、先に記したごとく、そのうちの一つ、バアナア街事件の場合、發見された女の身體は、斬り開かれた××から中庭の石に臟腑が掴み出されてゐたに係らず、どくつどくつと、死直後の惰力的動悸を打つて、あたゝかい血を奔出させてゐた。最後の一刃を加へてからまだ數秒しか經つてゐないのである。數秒である。最初の發見者が駈けつけた刹那に、ジャックは屍體を離れて、その時は靜かに、其處らの暗い一隅に立つて人々の驚愕を見てゐたに相違ない。

私は、個々の犯行を最初に報告して、それによつて讀者に先づ探偵小説的興味を與へるやうな平凡事はしたくない。止むを得ない場合以外は、たゞ忠實に記錄を辿つて、はじめに大體の事件を圍る内外の情況に諸君を完全に親しまして置きたいと企圖してゐるのである。

猫一匹、犬一匹殺しても、殺した人には相當の血が附着する。いはんやこの犯人は、女を殺害したうへ、ほとんど解剖のごとき行爲をその死屍に施してゐるのである。犯行ごとに手足といはず着衣と言はず、全身血達磨のやうに生血を浴びてゐなければならないことは、第一に誰でも考へるところだ。先づ屍體をずたずたに斬つたのち、彼は何處へ行つて手や兇器を洗ふか。如何にしてその血だらけの着衣を始末するか。何人が彼を庇護してそれらの便宜を呈供してゐるか。そも何んな家にこの殺人鬼は善良な市民のやうな顔をして住んでゐるのか。これらが、當時謎の中心であつたごとく、今日なほ謎の中心である。實際の殺人は、度々言ふたやうだが、その狂暴殘虐なこと言語に絶し屍體はすべて野獸的に切斷され、支離滅裂をきわめてゐた。しかも、犯行が重なるにつれてその度を増し、つひに如何なる鋼鐵製心臓の持主をも一瞥驚倒せしむるに充分であるに到つた。その悉くを詳述することは印刷物の性質上許されないが、各犯行を通じて、その方法經過は大同小異だつた。ことにそれが、或る超特恐怖の狀態において終つてゐることは、すべて一致してゐた。言ふまでもなく一特定人——リッパア・ゼ・ジャック——の所業である。そして彼が左手利きであることも、種々な場合の刀痕を總括して、動かぬところと專門家の間に斷定されてゐた。被害者は、夜の巷をさまよふ賣春婦に限られてゐるのである。それも、さういふ階層のなかでも最も低い、もつと貧困な、最も不幸な女達に排他的に決まつてゐるのである。その一つ一つの屍體に、紛れもない「恐怖の商標(トレードマーク)」がほどこしてあるのである。いづれもその××部が斬り剕かれ、剔出され、そこから手を××して大腸、内部生殖器官、その他の臓物が×××してあつて、眞に正視に耐へない光景を呈してゐるのである。

ドルセット街の場合など、檢屍に立ち會つた警官をはじめ、警察醫まで、いきなりこの凄絶な場面に直面したため皆室の片隅に走つて嘔吐したと言はれてゐる。この、被害者の×××にかゝる殘虐を加へる一事こそは「斬り裂くジャック」の全犯行を貫く共通な大特徴で、また一世を怖慄せしめたセンセイションの眞因でもあつた。彼は、街路の賣春婦である限り、犧牲者を選びはしなかつた。夜の町で女に話しかける。或ひは、女のはうから話しかける。交渉は直ちに成立する。この界隈のことだから代價はしごく低廉である。あはれな女はその僅少な金を獲るために、自分の意志で、男と同伴して行く。そして、多くは直ちに其處らの暗い横丁などで、自ら石壁に××して×の下に身を擴ける。これは、男が×××になつて、女の咽喉を一刷きするのに何よりも都合のいゝ、まるで兇刄を招待するやうな姿態である。下部の切開がそれに續いた。だから、被害者は、性行爲の以前に殺されたのか、以後に刄を受けたものか、いづれ

も下半身が滅茶々々になつてゐるので判斷の下しやうがなかつたが、行爲の直後に行はれたものと見るべきが至當であることに、專門家の意見は一致してゐた。

連續殺人のうち、その多くは戸外で行はれた。あの迷園のやうな東端區（イーストエンド）を構成する暗い四つ角。年中じめじめと惡臭に濕つてゐる小路（アレイ）、黑い低い建物に取り卷かれた中庭（コウト）。それらが慘劇の舞臺だつた。バックス・ロウ街の時には、屍體は或る一軒の家の表階段に倚りかゝつてゐた。一つの例外は、慘劇中の慘劇と言はれた、スピタルフヰイルド區、ドルセット街ミラア・コウトの、納屋のやうな見る影もない自室におけるケリィ又はワッツの慘屍體であつた。

この人妖「斬り裂くジャック」は、前後を通じて、たつた一度一人の人間に顏を見られて話しをしてゐる。

當時——今でもあるが——バナアア街四四番地に、さゝやかな果物屋があつた。マシウ・パッタアといふ男が、細君相手に小さく經營してゐる。狹い土間に果實が山のやうに積んであるので、店へ客が這入つて來ると邪魔になる。賣る方も買ふはうも身動きが取れなくなつてしまふ。そこで一策を案出して、表での戸を締め切り、それに小窓を開けて、丁度停車場か劇場の切符賣場のやうな特別の設備をし、自分は內部に納まつて、こゝから客とを覗いてゐる。客には窓を通じて應對し、品物も窓から出してやらうといふ一風變つた人物だ。

九月三十日、土曜日の午後十一時半頃だつた。

このパッカアが、もうそろそろ店を閉めやうとして仕度してゐるところへ、窓の向うに男女二人作れの客が立つた。男は、見たことがなかつたが、女は、パッカアもよく知つてゐた。のつぽのリッツ——エリザベス・ストライド——で、この附近で名打ての不良少女だつた。

パッカアは妙にこのリッツの同伴者が氣になつたとみえて、それとも、人物それ自身が印象的な風貌を備へてゐたのか、實に詳しくその人相服裝を覺えて、後日逐一申立てゝゐる。

年齡卅歲前後、身長約五呎七吋、肩巾廣く、身體全體が四角い感じを與へる。淺黑い皮膚。綺麗に鬚を剃つて、緻捷な顏付きをしてゐた。長い黑の外套に、焦茶色フエルト帽。きびきびした早口だつた。

そのきびきびした横柄な早口で、エリザベスの同伴者は、窓の向うから言つた。

「おい。其處の葡萄を半封度見れ。三片だな」

物價の安かつた頃である。

——本稿次號完結——

新著月評

限り[illegible]
であり推[illegible]である

貨幣學の實證的研究

牧野輝智著

五十嵐直三

自分は元來本は好きであるが、寧ろ讀むより買ふ方が一層好きである樣にも、自分自身で思つて居るのである。勿論時には本を讀むこともあるが、根が町人のことであるから、讀むにしても何か自分の仕事上に役に立つ點を其本の中から求めんとするにあるので、其以上六ヶ敷深遠の理論は、兎角一瀉千里で讀むと言ふよりも、實は飛ばせながら、若しあつたなら、役に立つものを見付け出さんとするに過ぎない。併し讀みさへすれば、屹度役に立つ程のものを見付け出し、裨益する所尠からざるが故に、本は常に讀むべきものであると、常住痛感して居る次第である。殊に自分の仕事に密接の關係ある、貨幣とか、金融とかに關する本は、其說く所、實際から出た理論であるとか、或は理論丈であつても、讀過後が實際に役立ち得るものであつて、即ち說く所の理論と實際問題との間に、殆んど間隙のない節合のものを、多く含んで居る次第であるから、此種の著述には一層不斷の注意を拂ひ、常に讀み漏らしのなきことを、期せねばならぬ譯であるが、自分の無精から、希望丈で實行之に伴はず、此點私に忸怩たらざるを得ないのである。

却說表題の牧野博士近著は、發行後間もなく、著者から態々惠贈に預かつたので、早速精讀し、先づ第一に驚いたのは、博士が東都大新聞の經濟部長と言ふ、非常に多忙極まる地位を占めながら、能くも此の如き大部のものを書き遂げられた點であり、次には行文頗る流暢にして、殊に難解と稱せらるゝ貨幣理論を、最も平易に說明せらるゝのみならず、貨幣史上多難の時代たる、大戰開始後に於ける、世界の諸事情をも、幾多豐富なる材料を擧げて、諄々と說き去り說き來り、讀む者を倦ませず、厭かせず、不知不識の裡に、あの大部のものを讀み了らせる所、流石專門學者たるは言へ、自ら實業界に立ちつゝある者にして、一般の讀者に訴へざる所である。由來牧野博士は丁度理論と實際との間に介立する地位に在り、從て其著述も、此等兩者間の調和融合を宜敷、自分の仕事上に敎へらるゝ所亦尠からず、眞に近來の快著なりと斷言して憚らない。

本書に對する自分の所感は、一言にして言へば、右で盡きるのである。素より自分には、本書の批評などゝ言ふことを企つる資格はない。併し本書より受けたる、所謂役に立つ種々の點の中、博士の說明が今少し詳細であつたならば、自分に取り一層役立ち易く、大に仕合であつたらうと思はれる一二の疑點を、次に掲げて博士の敎を乞ふことゝし度い。

第一の疑點は、貨幣の對外價値なる文字である。此語に付ては從來其意味を知るに苦んで居つた次第であつたが、本書を讀んだ後も尚其意味を了解することが出來なかつた。元來貨幣の價値とは、所謂對內價値を意味するものに非るや、而も何が故に强て相對的の名稱を用ゐる必要ありやを疑はざるを得ない。能く世間で

「對內價値は物價に依り現はさるゝが如く、

對外價値は爲替相場に依りて現はさる」

と言ふ様な意味のことを、言つて居る如くであるが、自分の觀る所にては、名稱は相對的なるも、兩者の概念は其軌を一にせずと思考し度い。蓋し一國の對外價値とは、他國の貨幣を通して見たる、其國に於ける購買力を言ふにあるが如きであるが、其議論は貨幣のみに限られたる譯に非ずして、他の商品にも同樣適用され得る樣に思はれる。若し然らば、對內價値と言へば、單に貨幣のみに限られるのに反し、對外價値は貨幣獨占のものに非ずと言ふ矛盾を生ずることゝなる。寧ろ對內對外の語を廢し、所謂對內價値の代りに、單に貨幣の價値と稱し、所謂對外價値に對しては、爲替相場なる語を用ゆる方、筋道の立ち居る樣思考さるゝのであるが、意味は同じで只名稱の差丈であるから、どうでもよしと言ふことならば、我又何をか言はんやである。

第二の質疑は、國際貸借說、並に購買力平價說に就てゞある。博士は此等兩說共缺點ありと言はれ、自分も同說であるが、國際貸借說は金本位國間に限り、購買力平價說は、紙幣國間にのみ限らるゝ如き、前提の下に論議せられるのは、果して其當を得て居らるゝや疑無き能はずである。兩說共に缺點あるは事實なりとするも、兩說は單に特種の場合にのみ局限され居るに非ずして、總ての場合に適用出來得るものである樣思考さるゝ。自分の觀る所によれば、國際貸借說即ち需要供給說なり、從て爲替相場は、爲替の需給により變動し、爲替の需給は、國際收支の如何に依るとなすものであつて、概念として同說は總ての幣制に適用せられ得べき譯である。唯金本位國間に在りては、正貨輸送點間と言ふ確然たる範圍があるに對し、銀本位國間にては、概念としては、同じく正貨輸送點內を限り變動すると言ひ得るも、銀塊相場の變動の爲、金本位國間の如く、確たる目標を得ないと言ふ差がある丈のことであり、更に紙幣國間にては、より一層何等の目標を見出し難いと言ふに過ぎない。而して購買力平價說が、其目的の一として、此等の缺點を補はんとすることに在るは無論であるが、同說の理想とする所は、單に夫丈に止まらず、凡ゆる幣制に適用せんとするにある樣思考出來るのである。

此等の諸點は、既に從來世間で繰り返し論議せられ、敢て自分が蛇足を加ふる迄もないと信ずるが、博士の經濟力信認說の如きも、落ち行く先は、結局國際貸借說と同一となる樣思はれるので、自分の疑問を述べて、博の教を乞ふ所以である。

以上の疑問も、或は自分の讀み方が悪い爲に起つたのかも知れない。從て謂はゞ爪の端で金剛石を引掻くに等しく、何等本書の光明には無關係である。本書收むる所、五篇二十四章、一として金玉の文字ならざるはなく、殊に著者の所謂貨幣購買力信認說の如き、貨幣理論として、積極的に終始一貫せらるゝ點、又紙幣史、並に在外正貨史の詳細なる說述等興味津々として盡きず、益々博士に對する敬意の深きを覺ゆる次第である。

松村武雄著　神話學論考

西村眞次

松村武雄博士の『神話學論考』が同文館から美裝して出版された。それの一讀後の感じを書けと中央公論社から賴まれたが、或意味に於いて學恩を著者から受けてゐるが故に、快く引受けて見る氣になつた。しかし、同書は論文集で、最近の神話學史と、日本神話、希臘神話、北歐神話の考察とが其內容をなし

て居り、一々それらを批評することはペーヂが許さないから、私はこゝに日本神話に關することを主として述べて見たい。

イサナミの神が地の母神であり、從つて生産の神であると同時に、冥府の神でもあることは必然的運命であるといつた點、讓國神話に於けるタケミカツチの手捫みをクカタチと同種の慣習であるといつた點などは、論證が精細で多少の新味にも富んでゐる。トヨウケビメが稻穀として崇拜せられたのは、古代日本民族の食料中、稻がヴアルー・センタアであり、それが同食物を代表したからであると說いてゐるが、私達史學派から觀れば、其稻穀崇拜が日本で起つたか否かといふことが大問題で、多分インドネシヤのサニング・サリに似たやうな信仰が印度支那から日本に傳はつたものと思つてゐる。然るに論者はさうした問題には觸れず、文化獨立起原を信ずるものゝやうな取扱ひをしてゐる。

又此論文中で、カヤが屋蓋の材料として價値中心であつたから、それに草を代表せしめて、カヤノヒメを草神、野神としたとあるが、鮮語 kal は狹義では蘆、廣義では草の意で、其子音語尾を日本化して kala→kaya としたものであることは疑ひの餘地がない。小さいことだけれども、立論の根本が搖いで議論がこわれてしまふ。これと同様の間違をしてゐるのはチについての論述であるが、鉤のチはまだしも、サチのチは [illegible] 或は [illegible] が語根であつて、サとチとの複合語ではあるまい。

ウズメの命の陰物露出についての考へは、かねて伊波普猷氏からも聞いたが、論者はそれを事新らしく何の證據もなしに論斷してゐた。日本神話のウズメに陰物露出の證據がどこにあるか、邪眼厭勝の手段を列擧して、好奇心、笑、不快の念を起さしめるものとしたが、女陰は果してそれらに當るだらうか、此點にも疑ひがある。

次ぎに論者はペアリイのエジプト文化移動說を否定してゐるが、論者の丹塗矢についての立言、ヒコホホデミの鉤についての呪術、三輪山式傳說などの比較は、獨立發生說では受取られぬことになる。眞に獨立發生說を信ずるものには、神話の比較は殆ど全く無用である。私達は神話の第一次的、第二次的傳播を信じ、傳播と同時に變化、展開することは認めるが、全然、獨立の發生を信ずることが出來ない。一例すればキサギヒメとウムギヒメとがオホナモチを蘇生せしめたのを、論者は單に兩者は貝の人格化であり、兩者には或神祕的功能が內在すると信じられたとしか云つてゐない。が、ペアリイやスミスの論述で、貝類が生命賦與の力を有つといふ信仰が世界的に播布したことは爭はれない事實で、それについて私は既に詳細に論じたことがある。

經驗を超越してはどんな想像も湧いて來るものでない。祖先以來の經驗と自己の經驗とが人類の觀念、思想を造就してゐる。或民族が時を異にし、處を異にして、類似の神話を造るといふやうなことは受取れない。人類の體質が祖先の遺傳であるやうに、文化、從つて神話も皆祖先の傳承である。日本神話は日本に於ける祖型の異化に過ぎないものである。そこでの自發がどれだけ有り得ようか。

論者は時々妙な註をして、人にすぐつたい思をさせる。カガシを毛や肉を燒いて臭氣で鳥獸を追うたものである、即ちカガセであるなどと、中山太郎君の說にかぶれたのでもあらう、いつてゐるが、廣い田圃の鳥獸を追ふほど毛や肉を燒くのは不經濟なことだ。ソホドは添水だといふが、それで鳥獸を追ふ方法を敎へてもらひたい。カガシがクグツと同

源で、ゲツツが個人であることは殆ど決定的の事だ。

もつと細論したい事が數々あるが、時と紙とがない。大綱については神話傳播の點だけに留め、極めて小さい問題のみを思ひ出すまゝに率直にいつて見たまでゝある。專門家の立派な論述に對して、妄言多罪。（同文館）

エフ・アー・ランゲ原著　川合貞一譯補　唯物論史卷中

高橋文雄

ランゲの唯物論史が公にされたのは一八六六年であつた。十九世紀の中葉と云へばかのヘーゲルの死後を受けて哲學思想界は思想的分裂瓦解の混亂の時であつた。卽ち一方ヘーゲルの理想主義の高潮と共に、他方に於ては唯物論的思想の興起が思想界の一面を力強く支配した。この兩思想に對して此處に一の新なる思想運動があつた。其れはオツトー・リープマンとそしてこのフリードリツヒ・アルベルト・ランゲとによつて投げ與へられた「カントへ歸れ」の所謂新カント運動であつた。嘗て十八世紀の終にカントによつて示された思想の批判的精神は、十九世紀の初めに頂點に達したヘーゲル哲學の理想主義と而して其後に勃興したシユトラウス又はフオイエルバツハ等によつて代表せられる唯物論的思想とによつて、メフイストフエレスの如くに暗黑の裡に葬り去られ忘却されてしまつたかの樣な狀態にあつた。この時期に際して明晰な頭腦と溫純な心情の所有者であつたランゲがかの尖銳的な兩思想に對して新カント運動を起したことは蓋し偶然のことではなかつた。彼にとつてヘーゲル流の理想主義は「ある神祕的な深みの側に同時に空想に馳せる危險を殆ど其の原理に於て既に包含してゐる」ところの一つの世界觀であり、「精神と自然との和解をばあらゆる批判的媒介なく、創作する理性の職命によつてこれを遂行する」思想であると考へられた。而して彼は言ふ、「吾々に於て理想主義の陶醉は今や經過してしまつた——恐らくその跡方もないといつてもよからう——而してツオイスの天に精神的に留まるといふことが最早吾々に滿足を與へないといふことは眞である」と。コーエンの言を藉りて言へば「唯心論の美名を以て綺麗に見えるかの感激的な形而上學」はランゲにとつては惜し氣

新刊紹介

大アマゾンを探る（山屋敬忠著）實地探査による簡要の大アマゾン眞相記、而もエロチカルな部分と冒險味とを含ませた點は、レター・シネマそのものだ。四六版四〇八頁定價一五〇、東京麴町內幸町一の六・タイムス出版社）

東西素描大成（安田・小杉・和田・山本四君共編）第五卷東洋山水篇（上卷）及第十二卷西洋風景動植物篇。何れも興味深く網膜を刺戟するもの（共に菊大グラビヤ版二十葉、豫約品、東京牛込喜久井町三四・アトリエ社）

えすぱにや・ぽるつがる記（木下杢太郎著）嘗て大每に掲載せられた「西葡記」「えすぱにや記」と「思想」にのつた「ぽるつがる記」及その間に蒐集せられた日本に關しての貴重なる西葡文獻の飜[illegible]數篇を收む。（四六版五三五頁、定價三・〇〇、東京神田南神保町一六・岩波書店）

實用經濟學（高橋龜吉著）本書は、青白い頭の黑い理論だけの經濟書と對照的な立場にたつそれだ。讀者は、現實日本の重要なる各種經濟問題についての綜合的理解を是によつて得るであらう（四六版四九六頁、定價一・八

もなくカント的批判的精神によつて斥けられればならなかつた。然しランゲがこれにも增して反對したのは矢張唯物論であつた。彼にとつて「唯物論」は唯物論史の終に於て言つてゐる如くに「最初の而して最も低い哲學であるが又同時に、比較的に最も確實なる段階である。唯物論は自然認識と直接に結合し、自然認識の限界を無視する處の體系として成り了る」ものであつた。かくて彼にとつて唯物論は哲學的世界觀としては不充分なものとなり而も唯物論が世界を以て物質的全體と見る限り、その全體の考へは矢張思惟の所產としてこの唯物論的思想を推し進めれば結局は觀念論となるか又は自滅するの外なきものと考へられたのであつた。此處に於てランゲは兩思想の拒斥と共に再び在りしカントの批判的精神に立ち歸つて世界の存在の基礎を人間精神內（但しランゲは精神を精神物理的に即ち心理的に解した）に批判的に究來しつゝ又實踐的にも神の信仰に於て批判的にその中心的眞理を求めて行つたのであつた。かの唯物論史は實にこの不充分なる世界觀を構成する唯物論を究めることによつて再びカントの批判的精神に復歸することを求めたランゲの研究の結晶であつた。さればこそこの唯物論史が古代原子論時代のデモクリートスの唯物論から十九世紀に至るまでの凡ての唯物論的思想を含み而もそれ等が綿密に批判されてゐるのも當然である。それは得難き唯物論の歷史と云つてもあながち過言ではないであらう。而し又この價値ある文獻が川合教授によつて飜譯され、既に去年その卷上の出版に續いて今その卷中が公にされたことは誠に喜ばしい事である。飜譯卷中に含まれてゐる部分は原著第一卷の終篇第十八世紀の唯物論（英・佛のそれ）及び原著第二卷に於けるカント以後の唯物論史の中のカントと唯物論、カント以後の哲學的唯物論、デュ・ボア・レーモンの自然哲學、近世自然科學史にはダーヴィニスムスの部分が飜譯敍述されてゐる。川合教授の飜譯に關しては今速急に原著と對照して吟味する餘裕を持たないが既に卷上に於て證明されてゐる如くそれは信頼されるに足るものなることを明言しても宜いと思ふ。この飜譯の卷中は吾々唯物論研究者にとつての最重要な部分をなすものと思ふ。それは既述の如く十八世紀の英佛の唯物論及びカント以後の唯物論を含むからである。十八世紀から十九世

し、[illegible]）

シイニオア「經濟學」（[illegible]譯） [illegible]構成せられた經濟學中の一部の飜譯である。名著のかくして譯出せらるることは大いなる喜びであらねばならぬ（菊版四九七頁、定價五・八〇、岩波書店）

股旅草鞋（長谷川伸著） 戲曲十四篇を收む（四六版四〇七頁、定價一・二〇、東京麹町下六番町一〇・平凡社）

Uncle Sham (K. L. Gauba) 世界力としてのアメリカニズムと云ふよりはむしろ、アメリカの現實姿態例へばデモクラシイ、タマニイホール、KKK、ネグロ、ガング、リンチ、處女、試驗結婚などを面白く取扱ふて居る。動態アメリカを知るに便利である（菊版 P. 213, Rs. 6, The Times Publishing Company, Lahore, India)

商法研究 第一卷（田中耕太郞著） 本書に於ては商法內に於ける特殊問題が主題として取扱はれて居るが、之等を通じて一般私法及法律哲學上の諸問題との關聯が見出される。力著として推擧するに値すると共に、續卷の出來を待望する（菊判七一八頁、定價四・八〇岩波書店）

日本經濟政策論（吉野信次著） 常に

紀へかけては所謂かの大産業革命の時期（一七六〇——一八三〇）即ち歐洲に於ける近代ブルヂョアジーの勃興時代であり、又ロマンテイシズム沒落後に於ける獨逸にあつてはかのマルクス、エンゲルス等社會革命者の活躍時代としてフォイエルバッハの唯物論が如何に彼等社會運動者の理論闘爭の基礎を形ち造る哲學として役立つたかを考へる時吾々はこの文獻を無視することは出來ない。然し十八世紀並びにそれ以前の唯物論は既に古典的となつてしまつてゐる。それ等は形而上學的唯物論として、在りし時代の思想的必然性を吾々に示すものに過ぎないが、十九世紀後半より二十世紀にかけて現在進步的思想の基礎をなす現代唯物論（辨證法的唯物論）はかの形而上學唯物論の單なる觀念的踏襲ではなくして歷史的實踐の決定方向を示す生きた實踐の理論としての哲學として正に眞摯に把握されねばならないものである。この自覺的イデオロギーに立つて觀る時吾々は又この價値ある有名な唯物論史が矢張一つの單なる古典そのものなることを明かに理解する。而してそれは全く完全なる唯物論思想の年代的排列と及びその諸思想間の類似點の關係の叙述に止まるものである。蓋し歷史は自覺的イデオロギーからすれば吾々人間の生活によつて造られるものである。空想的ならざる一切の思想は生活を基調として展開するものである。生活を、言ひ換れば經濟的諸關係を無視しては一切の歷史は成り立たない。成り立ち得ると考へるのは誤謬であつて、成り立ち得たと考へられた歷史は只觀念の年代的排列と其の關係の叙述のみである。それをしも歷史と名付けるのは思惟の獨斷的僭越的作爲である。かくて自覺的イデオロギーからすればランゲの唯物論史も亦それが社會狀態と即ち經濟的諸關係との聯關に於て叙述されて居らない限り完全な歷史とは言ひ得ないのである。然し斯る完全なる歷史の叙述は現在一つの大なる課題である。吾々はかゝる課題の解決へ進まればならない。而もこの解決によつて從來の一切の歷史は全く廢棄せられて新な而し完全な歷史は生み出されるのである。吾々はかゝる完全なる歷史によつて如何に吾々の生活が誤りと僞りとのない途に導かれることであらうか。（丸善、定價五圓參拾錢）

にして的確、誰人をも推服せしむべき史を、公にせられて居る著者が、無産政黨史に關し大正十四年秋より昭和三年暮に至る三有餘年間に發表せられた論文集である。一種の史論であると共に、又是によつて無産黨發展の經過を知る事ができる。附錄として「學生と思想犯」が收められて居る。（四六版三六五頁　定價一・八〇、東京本郷弓町一ノ二五、一元社）

國民經濟の立直しと金解禁（井上準之助著）　附錄として勝正憲氏の「金解禁問題の解説」を收む（四六版九〇頁、定價三〇、千倉書房）

石榑茂歌集（五島茂著）　闘爭的な抒情的な尖端的な無産派短歌を主張せる著者の作集（四六版二二〇頁、定價一・二〇、東京丸ノ内昭和ビル・日本評論社）

美しき喪失（西條八十著）「砂金」「見知らぬ愛人」についての著者の第三詩集。大正十一年以後の哀美な諸作を收む。（菊版二一八頁、定價三・五〇、東京牛込新小川町二ノ四・神谷書店）

英國の田舍

正宗白鳥

英國では、劇場でも、學校の講堂らしい感じを與へるところがある。ホテルの部屋でも、事務室らしい感じを與へるところがある。堅苦しい、ギゴチない、氣の利かない點が、どこにも見られるこの國の特徴のやうである。新畫の展覧會を見ても、貴族の肖像などが、特別待遇をもつて陳列されてゐる。鈍重な作品が多い。しかし、トラフアルガル・スクエアーにある國立美術館に蒐集されてゐる古畫には逸品が多い。金の力だけで世界の美術品を集めようとしてゐるニューヨークの美術館は、まだ及ばないやうである。國の古いお蔭である。

そのうちの多くの宗教畫のうちで、私は、「キリストとピラト」の繪畫を、非凡の作品として注視してゐる。作者は我々の耳に新しい人で、案内書を見ても、この繪は重要視されてゐないらしい。しかし、この作品は、數世紀前、宗教畫全盛の時代につくられたのにかゝはらず、様によつて枯淡を描いてゐないのである。「キリストの磔刑」「マドンナのアンヌンシエーション」「最後の晩餐」「庭園にてのキリストの煩悶」など、宗教畫は、大體極つてゐたのであつて、この・・・・がキリストを取調べるところのやうな近代的妙味のある面白い畫題を捕へたものは、私は伊太利ででもフランスででも、

一つも見なかつた。あの時代でありながら、この畫家は、ピラトを侮蔑して書いてゐない。座せる老ピラトは、卓を隔てゝ、若きキリストを見上げてゐる。卓上には一卷の書とインキ壺とがあつて、一本の蠟燭の光がピラトの、生けるが如き口を照らしてゐる。卓の後には數人の男女が不思議さうに樣子を見てゐる。キリストは首垂れてゐる。一本の指を擧げてゐるピラトは、多分「眞理とは何ぞや」と、キリストに訊ねてゐるのであらう。「眞理の結晶體」である神の子、キリストと相對しながら、「眞理とは何ぞや」と訊くのは、愚昧の至りであると、基督教國では、千年の昔から信じられてゐたのであるが、今我々が見てゐると、こゝに人間の永遠の疑ひが存じてゐるのである。そして、この畫家は、ピラトを愚少視して描いてゐないのである。薄暗い中に、一本の蠟燭の光が、ピラトとキリストとを、ほのかに照らしてゐる。私には、人間界に起伏するいろ〳〵な問題について連想された。

この美術館で、も一つ特に私の注意を惹いたのは、ターナーの「霜の朝」といふ英國の田舍を描いた繪である。「霜の朝」その二三の自然の描寫は、フランスのミレーなどの比ではないと思ふ。ミレーのあるものには、ある概念を現はさうとしてゐるところがあるが、「霜の朝」には、英國の田園がそのまゝに描かれてゐて、のんびりしてゐる。

私は英國の田舍を旅して、このターナーの畫樣の眞なることをいつも感じてゐる。スコットランドの湖畔に於てさへさう感じた。

朝ロンドンを立つて、東海岸を北行すると、夕方、エヂンバラーといふ、スコットランドの都會に着く。人石の町といつたやうに、全部がゴツ〳〵した感じのする都會であるが、北國の光の薄い淋しさが街上に漂つてゐる。古城には、方々の城砦にあり勝ちの、女王の悲話が傳へられてゐる。この都會から一時間ばかり汽車に乘ると、カレンダーといふ小都會に着く。スコットの「湖上の美人」の物語は、この町の古い城からはじまるのである。私の此處に着いた時には、七月のはじめであるのに、小雨がふつて、初冬の寒さが襲つた。停車場の内の茶店に休んでゐると、若い女が來ては、どれも、ウ

ヰスキーを飲んでゐる。かういふ英國では、必要上強烈な酒が醸造され愛用されるやうになつたのであらうが、伊太利でゝも、フランスでゝも、若い女や子供が、葡萄酒や麥酒をよく飲んでゐるのを見ると異様に感ぜられる。フランスでは、親達が五六歳の幼兒にビールを飲ませてゐるのが、よく目についた。少年に禁煙禁酒を強いるのが、文明の一特色なら、日本は歐洲以上に文明國である譯だ。日本では、劇場でゝも活動小屋でゝも喫煙を禁じてゐるが、ロンドンやパリでは、喫煙自由の劇場が少くない。

カレンダーの町から、乘合自動車で三十分ばかり行くと、トロサックスといふ所に着く。途中、湖水のふちを通つて、景色は中禪寺から湯本へ行くのと似通つてゐる。トロサックスには、現代風のホテルがあるだけで、他には殆んど人家がない。

ホテルは、「アーケー」とかいふ、小さな湖水に面してゐる。「湖上の美人」に唄はれてゐて、スコットの想像中では、勇士が鹿を追つたり武器を揮つたりしたところであるが、靜寂無比の仙境である。榛名の湖畔に多少類似してゐるが、あれよりも遙かに和かくつて、のんびりしてゐる。

山の頂きまで柔い芝生に蔽はれて、羊が遊んでゐたが、太古から人工を加へないで、自からの庭園になつてゐるのであらうか。日本なら、ホトヽギスが鳴き鶯が鳴き郭公が鳴くであらうが、こゝでは、時々海鷗が變な聲を出すだけである。

ライチングルームでは、夜は、ストーブが燃やされた。夜と云つても、緯度は樺太の北端に等しいこの地では、十時になつても、戸外がまだ明るいのである。そのストーブの側に、いろ〳〵な國からの遊覽客が集まつて來た。鷲のやうな鼻の形で猶太人を説明してゐるある男は、私に向つて、「先日汝等をエヂンボローの町で見たり」と云つた。伊太利旅行中、ローマからナポリまでの汽車の中で、ある伊太利人が、「先日、フレンチエからローマまでの汽車で汝等を見たり」と云つたことがあつたが、私達が歐洲のあちらこちらをうろついてゐるのが、歐洲人の目には珍らしく映つて記憶に留るのであ

らう。私が彼等の口にする you といふ言葉を、「汝等」と翻譯するのは、譯語の正確を期するためである。「あなた」と譯しても、「君」と譯しても、「お前」と譯しても常を得ないやうである。

ある夫人は、「私の父は貿易商で、二十年前から日本へ行つてゐる。それで、今日此處であなた方に會つたのはうれしい。早速父に手紙を出して、二人の日本人に會つたといふことを知らせよう」と、うれしさうに云つた。

ある巨大な米國人は、日本を知つてゐると云つて、高慢な口を利いたが、側の若いイングランドの男が、彼れと私とに、煙草を出して勸めると、彼れは、それを斥けると、もに、喫煙の害を說いた。彼れは宣敎師らしく、頻りに飮酒喫煙の不道德たることに、話を進めた。イングランド人は、それを否定して、詰らない論戰が永く續いた。米國婦人どもが米人の肩を持つて、米國の禁酒令を讚美した。しかし、米國の禁酒の實況を知つてゐる私は、馬鹿らしさを感じながら、默つて聞いてゐた。

私は、この「ライチングルーム」で、つれ〴〵のあまり、ホテルで賣つてゐる小型の「湖上の美人」を買つて少し讀んだ。昔、黑井雨江氏(?)の翻譯で、一度通讀したことがあつたが、それはすつかり忘れてゐる。今讀むと、少しも興味がない。高田早苗先生が、このスコットランドを旅された時、「懷舊の情に堪へない」と云はれたと、シカゴで橘君に聞いたのであつたが、明治十年代、高田先生の學生時代にこそ、「湖上の美人」などが、異國の文學趣味をはじめて日本の青年に傳へたのであつた。先生はまた、「もう十五年早く西洋へ來たかつた」と云はれたさうである。これには、私も同感だ。私はこのくどい長つたらしい「湖上の美人」のところ〴〵を讀みながら、さういふことを思出した。

スコットの詩は古くなつても、湖水の眺めは、永へに新しい。

諸國を渡つて、英吉利の田舍にまで入つて來て、ます〳〵深刻に感ぜられるのは、西洋の食物のまづさである。變な味がするのなら、そこには、我々東洋人の味ひ得ない西洋特有の味ひが存在してゐるのであらうと、讓歩して考へられるのだ

らうが、鳥類や牛肉には、いゝ味も悪い味も、殆んど味のないものが多い。只口の中に何かの品ものを入れてゐるに過ぎないことが多い。このホテルなどでも、タキンードやイブニングドレッスを着て、威儀を正して、食卓の行儀作法を守りながら、まづい物を食べてゐる食堂の有様が、私の目には滑稽に見える。食を樂む點では、支那人が徹底してゐるらしい。

それに、英國など、ホテルの宿料も食物も極めて高い。スコットランドでは、鮭だけはいゝ味を有つてゐるが、滅多に食堂のメニューに出てゐない。をり／＼特別に註文すると、一皿で、日本金の二圓も取る。それについて屢ゝ思出されるのは、輕井澤の物價の廉さである。あんないゝ避暑地は、世界に類が少いだらうと思はれるが、物價だつて、スイスやスコットランドのやうな避暑地とは比較にならぬほど廉いのだ。西洋にゐたらあんないゝ所には行かれないやうな貧乏な宣教師などが、わが輕井澤を我物顔に占領して、物價の高さを誇張するのは蟲がよすぎるのである。それを眞に受けて、商人に干渉する警察も人がよ過ぎるのである。

トロサックスのホテルから半マイルほど小丘を上下すると、「湖上の美人」の本場であるロック、カトリン（ロックとは湖水を意味す）に着く。エレン島やベニユー山には、スコットによつて美人や勇士が出沒さゝれたのである。兩岸の和かい芝生の山には、果しない羊が遊んでゐる。それ等の羊は、小さく、蟲のやうに見える。

カトリン湖の向ふ岸に着くと、馬車が待つてゐて、我等を、ロック・ロマンといふ、二十哩餘の長い湖水の側まで運んで呉れるのだが、この途中が、スコットランド旅中、最も旅客を喜ばせるところとなつてゐる。馬車は高いベンチを五六列も並べた舊式の乘合馬車で、目の小さい鼻の高い老いたる馭者は、赤いモーニングを着て、灰色の山高帽子を被つてゐた。ヂッケンスなどの小說に出てゐるのがこの馬車だ。自動車のはびこる前には、ロンドンにでも、こんな馬車があつたのであらう。この馬車が、ある湖畔を通つたり、淋しい丘陵を上下したりする。丘陵の路傍には、馬車の通るのを待つて、笛を吹き唄を唄つて、合力を乞うてゐる男女があつた。馬車の上から、一ペンニーか二ペンスを、彼等の捧げてゐる帽子

の中に投げてやるものもあつた。たまに人家があると、子供や老人が手を擧げて馬車に向つて、親みの言葉を掛ける。馬車の上からも、それに答禮する。人間の稀れなこの淋しい土地では、人間の顔が懐しいのであらう。ホテル滯在中、近所を散歩してゐると、身容らしい服裝をしてゐる男女でも、すれちがひに、私などに向つても、挨拶の辭を掛けて行く。

スコットランドにつゞくカンバーランドの高地も、草の色の美しいのんびりしたところである。これ等の土地を見るにつけて、私は、英國にゴルフの盛んになつたのは當然だと思ふ。英國の田舍は人工を加へなくつても、おのづから、ゴルフ場になつてゐるのだ。かういふ土地柄に適する遊戯は何がいゝかと考へて、ゴルフが起つたのである。日本のやうな土地でそれを眞似をするのは間違ひである。強いてゴルフ場をつくるために多額な經費を要して、普通人の遊戯には相應しからぬことになるのだ。

スコットランドの歸り途に通つた、グラスゴー、リバープール、バーミンガム、その他の英國西部の大小の都會は、悉く工業地で、油煙で町中が汚れてゐる。汽車の窓から見ても、英國の田舍は、全部ゴルフ場で、羊牛の遊んでゐる以外、農産物は絶えてないらしいので、工業立國の所以が感ぜられた。

英國の保守的なことは、田舍を旅して、一層明瞭に察せられる。どの町のホテルも、すべて舊式で、氣が利かなくつて、アメリカとは大違ひである。部屋の中に水道を引いてあるところは一軒もなかつた。洗面用の水は、どこでも、女中が水差しで運んで來るのだ。簞笥と衣裳戸棚がギゴチなく置かれて、事務所然たるところが多い。その點、アメリカに習ふに急なる日本の方が進んでゐる。しかし、グラスゴーの古いホテルの玄關で、「午後七時以後には、御婦人の方がお一人で入らつしやることは、この食堂ではお斷りいたします」と注意書を出してゐるのを見て、私は、英國の田舍氣質の一面を察した。それからまた、リバープールのあるキャッフエーで、十數人の娼婦が食卓に列をなして、客を待つてゐる盛んな光景を見て、表面嚴格らしい英國の裏面をのぞいたやうな氣がした。（七月十六日　ロンドンにて）

秋宵雜記

佐藤春夫

日本文學と星

星辰の美觀を說き或は描き、或は歌つたものが、日本文學史中にはその例に乏しい事は、曾て新村博士もこれを言つてゐられる。だから自分が今これを斷言しても自分の無智のせゐだといふ譏は幸に免れ得るであらう。何人も知つてゐるものでその例を舉げよと言はれると、先づ、佐渡に橫たふ天の川ぐらゐなものである。その外、七夕を歌つたものは澤山あるが、それは言ふまでもなく星の美を直接の題目としたのではなく、主題は寧ろ戀愛だと言はなければならない。

又、星の名稱に於ても、純然たる大和言葉で、例へばあけ星すばる星からすき星などの如く、普ねく呼ばれてゐるものは決してさう澤山はなからうと思ふ。この事は文學に於けると同樣に我々の民族が生活に於ても星には親しみが少なかつたことを證するものである。さもあるべき事である——生活で重要であつた筈のものが文學だけで疎外されるなどゝはどうしても考へられ得べき事ではない。

こゝまでは、幸に誰にでも直ぐ同感して貰へるべき事實であるらしい。さうしてこれから後が、私の空想的獨斷である。

さてその問題といふのは、それでは我々日本民族が、その他の自然に對して決して冷淡ではない日本民族が、あれほど無數に空一ぱいにある星を、どうしてそんなに無關心であつたらうかといふ點にある。

或る人々の言ふが如く、此の國土に於ては空氣の濕度の關係上、星そのものが西歐その他の諸地方で見るが如くに美しくないといふのも確に事實ではあらう。しかし、それにしても我國土に於てだつて星は見えないものではなく、また見て美しく不可思議でないものでは決して無い筈である。もしこれに注目しさへしたならば、充分に詩題たるだけの魅力は我々の國土の空の星にだつて無いわけでは決して無い。私は先づこの淺薄な俗說をあまり重大に見ない事にしよう。

そこで私は考へるのであるが、我々の祖先が星とそんなに親密でなかつたといふ理由は、主として我々の國土がこんなに狹く、又その民族が游牧を事としなかつたことに起因してゐるかと信ずる。私は先に空一ぱいにある星と云つたが、この狹いその上に山嶽の多い我々の國土では、實は空は半分しか無いわけである。又游牧の民ではなかつたが爲めに、星を仰いで方向を見定めるやうな必要も少くなかつたであらう。又、海上に於ても遠洋に出て航海する習慣をあまり持たなかつたらしい我々の祖先は、陸上に於けると同樣に海上に於ても星を注意する機會が澤山にあつたらうとは思へない。翌日の天氣を卜するには夕方の豐旗雲だけでも事足りたであらう。さうして山地に近いがために、大神(おほかみ)と呼ばれた小さな猛獸の來襲をおそれて、恐らく早くから屋内に閉ぢ籠つたであらう。かうして必要もなく注意する機會にも乏しければ、親しみは自づと薄い結果になる。親しまないものから、その美を發見することはむづかしい。就中、星夜の美觀の如きものは、最初には先づ深刻な驚異を味ふものであるが爲めに、この驚異にすつかり慣れ親しまないうちは、それは單に一つの氣味惡さであつて、美として味はふことはなかなかむづかしい種類のものである。

天體に對する觀察の必要及びその結果から來る趣味は、蓋し恐らくは廣茫たる平原や沙漠などの地方の游牧する住民が、最も早くから最も多くこれを持つやうになつたであらう。さうしてそこでは、確に天は無限に廣く、また乾いた空氣のた

めに星の光も亦わけて美しいでもあらう。

國土の地勢が民族性を作ることは爭ふべからざる眞理であらうが、同時に亦、かくして與へられた民族性によつて、森羅萬象のなかから、自己の必要として嗜好とするところのものを選み出すこともまた事實でなければならない。さうして星辰の美觀は、我々の民族には必要もなかつたと同じく、その嗜好にも適するに到らなかつたのではあるまいか。同じく夜間の天體のものではあつても月夜の美と星月夜の美とは、全然その趣を別にしてゐるものである。月夜の美の陶醉的で抒情的で清朗で純粹神的であるに比べて、星月夜のそれは瞑想的であり哲學的であり、晦澁で複雜で魔的でさへある。前者の溫雅な情緒にくらべて後者はむしろ戰慄の快感に近い。月夜の美感に對しては決して盲目ではなかつた我々の民族が、星辰の美の發見に對しては殆んど無關心であつたといふ事實は、我々の民族性を發見する上に於て、尠少ならぬ暗示があると私は考へるのである。

事の序に、それでは日本民族によつて、最も愛好された自然物は何であらうか。言ふまでもなくそれは諸々の草や木と鳥及び蟲であらう。さうしてそれは平和な溫厚な自然であるとも總括することが出來るであらう。

再び事の序に、私は我々の民族が公共生活に於て拙劣な生活者である重大な理由をも亦、我々が游牧の民族として生活した傳統を持たないことに歸することは出來ないだらうかと考へてゐる。

「あきらめ」

日本人の唯一の哲學ともいふべきものは「あきらめ」であつて、この思想や態度は佛教から來た影響であるといふ事は、誰しも云ふところの事である。日本人が「あきらめ」を持つてゐるといふ事實は、私も之を認め得るのである けれどもそれが果して佛教思想の影響なりや否やは、これを疑ふものである。佛教は言ふまでもなく、印度から支那を通つて我

が國土に來た。「あきらめ」がもし佛教思想とそれほど密接な關係があるものならば、印度や支那の人々の間にも、我々と同じやうな「あきらめ」のせめてはその片影でも認め得べき筈である。國民としては爛熟して頽廢し切つた支那人にも印度人にも、國家としてはかくの如くでありながら、個人或は民族としてこれを見る時、彼等は頗る根强い生活力と生活欲望とを持ち、決して「あきらめ」的な何物をも發見しがたいのである。これに反して隆々たる國家を持つてゐる我々日本民族が、個人としまた民族として「あきらめ」を持つてゐるといふ事實は、それがもし單に佛教思想といふならば、佛教が印度や支那では作用しなかつた仕事を、何故にわれ／＼日本の民族にだけ成したかを、疑ふのは當然であらう。

「あきらめ」といふ一種の民族心理に就て、私は又しても同じやうな獨斷を披露しようと思ふ。私は「あきらめ」をも亦一種の地理的産物と心得てゐるのである。その地底には地震を藏し一面には最も氣まぐれな大洋をひかへて自然の暴虐の威力を、屢々最も痛感せざるを得ないこの國土は、その住民にむかつていかなる自然に對しても、その力には屈服するより方法のない事を、最も持續的に不斷に教へたに違ひない。しかもこの教へは決して我々をさう絶望的なものにはしなかつた。何故かといふに、自然は一面に於て最も暴虐ではあるが、彼の暴威は瞬時に去つてしまつて、すぐその後には思ひがけない程溫和なその別の姿を、われ／＼に見せるからである。我々の國土が島國でありながら海洋の美を文學とし得なかつたことの祕密も亦これらの點に關聯がある。それは只あまりに怖ろしかつたのである。我々の民族が平和な溫厚な自然に對して敏感な發見をしてそれを享樂したのは、その反對の恐怖すべき自然にむかつてはどれだけ惱まされ威嚇されたかの反證とも見ることが出來るであらう。あまりに强い暴力に對して我々はその防備を失ひ、從つてこれを味ふなどの餘裕は寸毫も與へられず、只たゞその後に現はれるであらうところの平和な姿をのみを恃みにして、しばらくこの暴虐の下に屈從したのである。さうして彼等は崩壞しても決して命を失はないやうな家屋を工夫し、また自然の威力を防ぐためには同じく自然にすがつて山ふところを愛した。怒つた自然が一過し去つてその笑顏が現はれた時には、格別に深い歡喜

を持つて更に新鮮にせられた自然を驚き且つ親しみながら眺めたに違ひない。これらの活躍的な自然現象と住民との生活を仔細に空想する時に、私は「あきらめ」を教へたものは外來の佛教思想など、稱するものでは決して無く、それは寧ろこの國土の土產の代物だと私は信ずるのである。

それにしても佛敎も亦、この國土に來て適當な土質を見出たのであらう。――この民族のなかで特別な解釋を得て、さうしてそこで根を張り榮える事はしたであらう――風土に適するところに或る植物が榮え、又その風土に從つてその植物が多少はその形態を變へると同じ道理である。人間の思想など、いふものもそれらの點に於ては、植物など、一向變りのないものである。否、人間それ自身にしたところが他の動植物と同じやうな自然の方則で支配せられてゐるのである。たゞ人間は他の自然的同胞よりは複雜であるがために、その父母である自然からもその影響を複雜に反映するだけの用途である。――こんな事は誰しも言ふことであらう。それにしても先づこれをしみぐ\と悟るに非ざれば、人間の人間のよろづの營みをも眞に知ることは出來ないであらう。

附言。星に對しては注意を向けなかつたけれども、我々の民族は天氣の豫告者であるところの雲と風とには必ず多分の注　を拂つてゐるであらう。私は小閑を得て、日本文學に現はれた雲と風とに就て考へたい意嚮を持つてゐる。

婦人公論

定價七十錢

十月特輯

時評

賠償會議の成功——緊縮ごつこ——教化總動員に反對せよ——思想善導屋・山川菊榮

破婚への批判（最初の夫大宅壯一に與ふ）・山本和子

蘇生の日まで（私娼生活の思ひ出）・藤澤彩子

彼等はニヤ〳〵と女給に向つて責任のない享樂を取引してゐるやうです。妻や子供や地位などはちやんと「据置き」にして而も變つた色情をもつことが出來ればオールド・ボーイにとつてこれ位愉快なことはないでせう。家にゐる妻にはこれが恐るべき暗礁なのです…記事一節

妻のカフエ見學

戀愛、殉死未遂記・木島郁子

殉死行路・藤瀬雅夫

戀愛と死……………賀川豐彦

性愛淨化新道……醫博 福井正憑

私の結婚破産に省みて世の若き女性に寄す・伯爵 大木喜福

大衆小説と戀愛相・安成二郎

戀愛事件年代記・美里重子

寺内毅雄君を憶ふ・邦枝完二

戀愛を清算せよ・下村千秋

發賣中・東京丸ビル中央公論社發行

「戀愛殉死號」

戀愛殉死論…………らいてう

殉死を否定する…………高島米峰

マネキン自殺事件

マネキンの自殺未遂、何が彼女をさうさせたか？囂々たる世評を超えて本誌のみが報じうる眞相です。　畠山清行

露支國境日誌・三好ゆり　味覺の秋・有本、堀内、梶原、三澤

大阪三越と女學生店員　季節の手藝・男洋服の常識

同志社大學評判記　美容相談・今秋の流行品

上野の美人藝術・永見德太郎　等々々權威ある實用記事滿載！

ツエ伯號と朝日・日日特ダネ競爭の內幕・岡田松夫

空路四千哩の挿話・園地與四松

ツエ伯號への常識・原田三夫

生み捨てられて（竹中英太郎畫）　沖野岩三郎

木がくれの巣（山六郎畫）　小島政二郎

花はくれなゐ（村山知義畫）　池谷信三郎

虛無の顏（遺稿）　鴇田英太郎　戲曲一幕

婦人公論推奬　問題の映画鑑賞會

懸賞近代美人投票　第二回寫眞發表

新長篇大衆小說

江戸巷塵譜

林不忘　画 木村荘八

新版　大岡政談の內

婦人公論推奬

問題の映畫鑑賞會

第一回　九月二十四日（火）午後六時開演

於　朝日講堂

佛國ソシエテ・ジエネラルド・フイルムス社作品
ヤマニ洋行提供

一、ジヤン・ダーク

説明　徳川夢聲

カール・ドレイエル氏監督・脚色
ルドルフ・マニー氏撮影

ジヤン・ダーク……ファルコネッティ孃
コーシヨン……シルヴイン氏

この映畫はアメリカの映畫檢閲局が世界の四大作品の一として極力推奬した傑作であります。監督カール・ドレイエル氏は驚嘆すべき手法によつて、かつての映畫藝術に企て及ばぬ深い心理描

よい映畫を靜かに鑑賞する會

いよ〳〵來る九月二十四日、第一回映畫鑑賞會を開催します。已に會員になられた方は本社からお送りした會員證を持つておいで下さい。また會員にならない方は、此際至急御申込み下さい。收容人員には制限あり、殊に今度の映畫は、本誌に對する映畫館の特別の好意で、特に封切前のものを貸して下さる事になつた關係上、觀覽席に人員を制限されてありますから、あとになるとお氣の毒でもお斷りせねばならぬかも知れません。

映畫の選定には十分自信があります。恐らく皆さまを滿足せしむる以上に狂喜せしむるでありませう。内容はプログラムについて御覽下さるとわかるやうに、本誌の絶大な信用を以てするにあらざれば到底爲し能はざるものと深く自負してゐます。

順序

一、開會の御挨拶　社長兼主幹　嶋中雄作

一、映畫漫談　森岩雄

を
實を試みて成功したものです。ジャン・ダークに扮するファルコネッティは舞台俳優であるのを、ジャン・ダーク扮装に最も適材として望まれて演出し而も驚嘆すべき、天才的演技を発揮したものと言はれてゐます。此映畫は封切前已に異常のセンセーションを捲き起してゐる映畫でありまして、映畫鑑賞家批評家の間に無條件讃辭を浴びてゐます。これが一度び市上に出れば何等かの意味で映畫ファンを熱狂せしめ、惱殺せしめ、こゝ暫しはジャン・ダークの話で鳴り止まぬ反響を喚び起すでありませう。

一、舞踊　　石井小浪

一、女の一生

パラマウント特作

（レナ・スミスの問題）

説明　松井翠聲

原作者……………サミユエル・オルニッツ氏

監督……ジョセフ・フオン・スタンバーク氏

レナ・スミス…………エスター・ラルストン孃

フランツ・ホルツ中尉……ジエームス・ホール氏

母性愛のためにその半世を最も勇敢に闘ひ續けた一女性の崇高な生活記録。而も味氣なき女の一生。涙と共に語らるべきその半生を極力安價なセンチメンタリズムを排して、大膽に、力強く、率所に、テンポよく纏つて行く手法は、嘗ての「救ひを求むる人々」に斬新的手法を用ひて一躍斯界に重きをなしたスタンバーグ氏の監督だけあつて、テンポの素晴しさと劇全體の迫力とは吾等の心血を絞り取らうとする。誠に推奨するに足ると信じます。

入會規則摘要

△本會は婦人公論愛讀者を以て組織し、會員には會員證を交附す。

△入會希望者は愛讀者券（本誌口繪に印刷しあり）に會費を添へて申込まるべし。

△會費拂込者には別に受領證を送附せず、會員證を以て之に代ふ。

△映畫鑑賞會は毎月一回（當分東京に於てのみ開催）開會。日時、映畫の種類等はその都度前以て婦人公論誌上に發表す。

△鑑賞會には會員以外の入場を許さず。但會員の同伴者五人以内に限り特に之を許す。此場合會員以外の入場者には一人臨時會費として金八十錢を申受く。但し滿員の節はお斷りすべきに付き、同伴者も前以て申込まるゝ方便利とす。

△會費は一ケ月六拾錢、半ケ年分三圓、一ケ年分五圓とす。拂込みは振替又は爲替を以てせられたし。

△會費は事情の如何に拘らず返戻せず。

△會員證について

一、入場者は會場入口において會員證をお示し下さい。

一、本券は記名本人一名に限る。

一、裏面に會費領收の捺印ある月に限り有効。

一、本券は再發行せず。

編輯者雜記

×

とにも角にも、御覧の如き體裁で五百號記念號を諸彌の前に提供し得たことを喜ぶ。顧みて不満の點無きにしもあらずだが、それは多くの場合に已むを得ない。意餘りあつて、否、意餘りあればあるほど不満は附き纏ふものだ。

×

永い間に築きあげて來た信用の然らしむるところとはいへ、五百號記念號を出すことになつて世間の信頼と期待とがわが中央公論社の上に重なり合つてゐるのを痛感して、われらは感泣してゐる。同時にイヤといふほど責任の重大さを感ぜしめられてゐる。

×

美術界諸大家の筆を揃へて本誌の五百號記念を祝して下さつたのもその一つだ。時は秋、上野の杜に妍を競ふ美術シーズンだ。日本一流の各派諸大家が一堂に會して期せずして一大紙上展覧會を開催し得たことは欣快に堪へない。本誌の德望を以てせざれば能はざるところだ。尚その他に現内閣各大臣前内閣各大臣を始め政界實業界の巨頭が筆を揃へて本誌五百號を祝福されたことなど、恐らく他雜誌の夢想だにし得ざるところであらう。

×

記念號の意味からゆくと、在來中央公論に何等か密接の關係を有せらるゝ諸家の高論卓說は擧げて網羅したいのは山々であつたが、紙數の許さない關係上、割愛せざるを得なかつた。その代り、何等かの意味で本誌との友好關係を示したいと思つて、一筆を煩はしたのもそれである。字と性格との關係も面白いが、それよりも文藝家、思想家、各個人々々の面目と立場とが、その一言一句にほとばしつてゐるのは、尚更面白い。珍重せらるべきものだと思ふ。

×

明治、大正、昭和の三代を通じ一、發達して來た中央公論の文化的背景は、徳富蘇峰氏、三宅雪嶺氏、石川千代松氏、吉野作造氏、馬場恒吾氏、尾佐竹猛氏、小林澄兄氏等の、それぞれ違つた立場の研究によつて網羅し盡されてゐると思ふ。殊に新聞界の第一人者蘇峰先生の新聞物語は特異とすべきものである。前號大山河上兩氏によつて提唱批判せられて讀書界を震憾せしめた新勞農黨の合法化運動は、本號に於いて猪俣、赤松兩氏の異つた立場からの突込んだ批判によつて局を結んでゐる。

柳澤健氏、高橋龜吉氏、牧野輝智氏の論文は共に超力作たる點において片々たる他雜誌のそれとは自ら選を異にする。

×

創作欄は例によつて文壇第一の島崎藤村氏の「夜明け前」、殊に本號に入つて作者の苦心と自信とを織り成せる名編百枚。珍らしや老大家坪内逍遙氏の百四十枚の大作。谷崎、菊池、佐藤の諸名家も轡を列べて第一戰に立たれる筈であつたのを、菊池氏は原稿間に合はず、殘念だつたが、その代り谷崎氏の雄篇と

佐藤氏の随筆を載せることを得たのはうれしい。これも兩氏の本誌に對する特別の好意の表れに他ならない。序に徳永直氏のプロレタリア作品を此際極力推奨したいと思ふ。

×

たゞ遺憾に堪へないことは、應募原稿中特に採録すべきもの丶無かつたことである。入選圏内に入つた作品もないではなかつたが、殊に中央公論として江湖に推薦すべく、躊躇せざるを得なかつたのは淋しい。今後勇躍的努力を希望しておく。

×

さういふ譯で本號は斯くの如く尨大な雑誌として現れたが、この尨大は單なる尨大ではない。一粒選りに選つての尨大である。本號に限つては讀者平素の眷顧に酬いる意味で、初めから算盤玉を超越しての奉仕的廉價版である。われらの誠意を酌んで頂きたい。

×

世は綱紀弛廢して賣勳事件の醜臭鼻をつく。而も時は燈下親しむべきの秋だ。世の汚濁と蟬噪をよそに、われらはわれらの大道を濶歩して行かう。何といつても公明は天下の支持だ。出版事業も緒についた。出版前から異常のセンセーションを捲き起した「西部戰線異常無し」と、本誌に連載されて谷讓次宗の超絶大的喝采を博した「新世界巡禮」が「躍る地平線」と題して十月市場に運ばれる。本誌と共に本社の公明と信望とを支持せられよ。

×

本誌特派員清澤洌氏は巳にアメリカに着いた。次號からアメリカ通信によつて諸兄に見えるであらう。

×

正宗白鳥氏は久しぶりで原稿を送つて下さつた。記念號に間に合つてうれしい。同氏は九月中旬ロンドンを立つて歸朝の途に着かれる由。

×

本號から掲載されてゐる「世界怪奇實話」を愛讀されたい。材料は無限にあるさうだから、面白いものを無限に提供してゆく考へである。牧逸馬氏とは谷讓次氏の別名であることは巳に御承知だらう。

×

本誌の姉妹雑誌婦人公論で、良き映畫を、靜かに、そして安く見せるために「同嗜の映畫鑑賞會」なるものを組織して前月その企を發表したところ、時代の要求に投じたと見えて申込者が殺到してゐる。諸君の子女、姉妹、愛人にして、常設館に送り込むの危險と不潔を感ぜらる丶方は入會せしめられたい。五名以内に限り同伴者を許す。映畫の選定については自信を以て受合ふ。本誌本號にも第一回のプログラムを發表しておきましたから、ついて御覽ありたい。

東洋紡績株式會社

大日本紡績株式會社

福島紡績株式會社

關東水力電氣株式會社

社長 淺野總一郎



夜明け前（第一篇）

島崎藤村

第二章

一

十曲峠の上にある新茶屋には出迎へのものが集まつた。今度いよ／＼京都本山の許しを得、僧智現の名も松雲と改めて、馬籠萬福寺の跡を繼がうとする新住職がある。笹屋の庄兵衛はじめ、組頭仲間、その他のものが新茶屋に集まつたのは、この人の歸國を迎へるためであつた。

山里へは舊暦二月末の雨の來る頃で、年も安政元年と改まつた。一同が待ち受けてゐる和尚は、前の晩のうちに美濃手賀野村の松源寺までは歸つて來てゐる筈で、村からはその朝早く五人組の一人を發たせ、人足も二人つけて松源寺まで迎へに出してある。そろ〳〵あの人達も歸つて來ていい頃だつた。

『けふは御苦勞さま。』

出迎への人達に聲をかけて、本陣の半藏もそこへ一緒になつた。半藏は父吉左衛門の名代として、小雨の降る中をやつて來た。

かうした出迎へにも、古い格式のまだ崩れずにあつた當時には、誰と誰は何處までといふやうなことをやかましく言つたものだ、例へば、村の宿役人仲間は馬籠の石屋の坂あたりまでとか、組頭仲間は宿はづれの新茶屋までとかといふ風に。しかし半藏はそんなことに頓着しない男だ。のみならず、彼はかうした場處に來て腰掛けるのが好きで、ここへ來て足を休めて行く旅人、馬をつなぐ馬方、または土足のまま茶屋の圍爐裏ばたに踏込んで木曾風な『めんぱ』（木製割籠）を取り出す人足などの話にまで耳を傾けるのを樂みにした。

村の百姓總代とも言ふべき庄兵衛は茶屋を出たり入つたりして、和尚の一行を待ち受けたが、やがてまた仲間のものの側へ來て腰掛けた。

御休處とした古い看板や、あるものは青くあるものは茶色に諸講中のしるしを染め出した下げ札などの掛つた茶屋の軒下から、往來一つ隔てて向ふに翁塚が見える。芭蕉の句碑もその日の雨に濡れて黒い。

間もなく、半藏のあとを追つて、伏見屋の鶴松が馬籠の宿の方からやつて來た。鶴松も父金兵衛の名代といふ改まつた顏付だ。

『お師匠さま。』

君も來たのかい。御覧、爺様の好くたのたこと。あれは君のお父さんの建てたんだよ。」

「わたしは覺えがない。」

半藏が少年の鶴松を相手にこんな言葉をかはしてゐる、と庄兵衞も思ひ出したやうに、

「さうだらず、鶴さまは覺えがあらつせまい。」

と言ひ添へて見せた。

小雨は降つたり休んだりしてゐた。松雲和尙の一行はなか／＼見えさうもないので、半藏は鶴松を誘つて、新茶屋の周圍を歩きに出た。路傍に小高く土を盛り上げ、榎を植ゑて、里程を示すたよりとした築山がある。驛路時代の一里塚だ。その邊は信濃と美濃の國境にあたる。西よりする木曾路の一番最初の入口でもある。

しばらく半藏は峠の上にゐて、惠那山の麓の方に展けた廣い盆地に思ひを馳せた。今更關東關西の諸大名が一大合戰に運命を決したやうな關ヶ原の位置を引合に出すまでもなく、古くから東西兩勢力の相接觸する地點と見做されたのも隣の國であつた。學問に、宗教に、商業に、工藝に、いろ／＼なものがそこに發達したのに不思議はなかつたかも知れない。すくなくもそこに修業時代を送つてさういふ進んだ地方の空氣の中に僧侶としてのたましひを鍛へて來た松雲が、半藏には羨ましかつた。その隣の國に比べると、この山里の方にあるものはすべて遲い。あだかも、西から木曾川を傳はつて來る春が、兩岸に多い欅や雜木の芽を誘ひながら、一ヶ月もかかつて奧へ／＼と進むやうに。萬事がその通り後れてゐた。

その時、半藏は鶴松を顧みて、

「あの山の向ふが中津川だよ。美濃は好い國だねえ。」

と言つて見せた。何かにつけて彼は美濃尾張の方の空を戀しく思つた。

もう一度半藏が鶴松と一緒に茶屋へ引き返して見ると、ちやうど伏見屋の下男がそこへやつて來るのに逢つた。その男

山里へは舊曆二月末の雨の來る頃で、年も安政元年と改まつた。一同が待ち受けてゐる和尚は、前の晩のうちに美濃手賀野村の松源寺までは歸つて來てゐる筈で、村からはその朝早く五人組の一人を發たせ、人足も二人つけて松源寺まで迎へに出してある。そろ〱あの人達も歸つて來ていい頃だつた。

出迎への人達に聲をかけて、本陣の半藏もそこへ一緒になつた。半藏は父吉左衞門の名代として、小雨の降る中をやつて來た。

『けふは御苦勞さま。』

かうした出迎へにも、古い格式のまだ崩れずにあつた當時には、誰と誰は何處までといふやうなことをやかましく言つたものだ、例へば、村の宿役人仲間は馬籠の石屋の坂あたりまでとか、組頭仲間は宿はづれの新茶屋までとかといふ風に。しかし半藏はそんなことに頓着しない男だ。のみならず、彼はかうした場處に來て腰掛けるのが好きで、ここへ來て足を休めて行く旅人、馬をつなぐ馬方、または土足のまま茶屋の圍爐裏ばたに踏込んで木曾風な『めんぱ』（木製割籠）を取り出す人足などの話にまで耳を傾けるのを樂みにした。

村の百姓總代とも言ふべき庄兵衞は茶屋を出たり入つたりして、和尚の一行を待ち受けたが、やがてまた仲間のものの側へ來て腰掛けた。

御休處とした古い看板や、あるものは青くあるものは茶色に諸講中のしるしを染め出した下げ札などの掛つた茶屋の軒下から、往來一つ隔てて向ふに翁塚が見える。芭蕉の句碑もその日の雨に濡れて黑い。

間もなく、半藏のあとを追つて、伏見屋の鶴松が馬籠の宿の方からやつて來た。鶴松も父金兵衞の名代といふ改まつた顏付だ。

『お師匠さま。』

「君も來たのかい。御覧、翁塚の好くなつたこと。おれは君のお父さんの建てたんだよ。」

「わたしは覺えがない。」

半藏が少年の鶴松を相手にこんな言葉をかはしてゐる、と庄兵衞も思ひ出したやうに、

「さうだらず、鶴さまは覺えがあらつせまい。」

と言ひ添へて見せた。

小雨は降つたり休んだりしてゐた。松雲和尚の一行はなか／＼見えさうもないので、半藏は鶴松を誘つて、新茶屋の周圍を歩きに出た。路傍に小高く土を盛り上げ、榎を植ゑて、里程を示すたよりとした築山がある。驛路時代の一里塚だ。

その邊は信濃と美濃の國境にあたる。西よりする木曾路の一番最初の入口でもある。しばらく半藏は峠の上にゐて、惠那山の裾の方に展けた廣い盆地に思ひを馳せた。今更關東關西の諸大名が一大合戰に運命を決したやうな關ヶ原の位置を引合に出すまでもなく、古くから東西兩勢力の相接觸する地點と見做されたのも隣の國であつた。學問に、宗教に、商業に、工藝に、いろ／＼なものがそこに發達したのに不思議はなかつたかも知れない。すくなくもそこに修業時代を送つてさういふ進んだ地方の空氣の中に僧侶としてのたましひを鍛へて來た松雲が、半藏には羨ましかつた。その隣の國に比べると、この山里の方にあるものはすべて遲い。あだかも、西から木曾川を傳はつて來る春が、兩岸に多い欅や雜木の芽を誘ひながら、一ヶ月もかかつて奧へ／＼と進むやうに、萬事がその通り後れてゐた。

その時、半藏は鶴松を顧みて、

「あの山の向ふが中津川だよ。美濃は好い國だねえ。」

と言つて見せた。何かにつけて彼は美濃尾張の方の空を戀しく思つた。

もう一度半藏が鶴松と一緒に茶屋へ引き返して見ると、ちやうど伏見屋の下男がそこへやつて來るのに逢つた。その男

は庄兵衛の方を見て言つた。

『吾家の旦那はお寺の方でお待ち受けだげな。和尚さまはまだ見えんかなし。』

『俺は先刻から來て待つてるが、なか／＼見えんよ。』

『辨當持ちの人足も二人出掛けた筈だが。』

『あの衆は、いづれ途中で待ち受けてるずらで。』

半藏がこの和尚を待ち受ける心は、やがて西から歸つて來る人を待ち受ける心であつた。彼が家と萬福寺との緣故も深い。最初にあの寺を建立して萬福寺と名づけたのも青山の家の先祖だ。しかし彼は今度歸國する新住職のことを想像し、その人の尊信する宗教のことを想像し、人知れずある豫感に打たれずにはゐられなかつた。早い話が、彼は中津川の宮川寛齋に就いた弟子である。寛齋はまた平田派の國學者である。この彼が日頃先蹤から敎へらるることは、暗い中世の否定であつた。中世以來學問道德の權威としてこの國に臨んで來た漢學び風の因習からも、佛の道で敎へるやうな物の見方からも離れよといふことであつた。それらのものの深い影響を受けない古代の人の心に立ち歸つて、もう一度心寛かにこの世を見直せといふことであつた。一代の先驅、荷田東麿をはじめ、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤、それらの諸大人が受け繼ぎ／＼して來た一大反抗の精神はそこから生れて來てゐるといふことであつた。彼に言はせると、『物學びするともがら』の道は遠い。もしその道を追ひ求めて行くとしたら、彼が今待ち受けてゐる人に、その人の信仰に、行く／＼反對を見出すかも知れなかつた。

こんな本陣の子息が待つとも知らずに、松雲の一行は十曲峠の險しい坂路を登つて來て、豫定の時刻よりおくれて峠の茶屋に着いた。

松雲は、出迎への人達の豫想に反して、それほど旅窶れのした樣子もなかつた。六年の長い月日を行脚の旅に送り、更に京都本山まで出掛けて行つて來た人とは見えなかつた。一行六七人のうち、こちらから行つた馬籠の人足達の外に、中津川からは宗泉寺の老和尚も松雲に附添つて來た。

『や。これは恐れ入りました。ありがたうございました。』

と言ひながら松雲は笠の紐をといて、半藏の前にも、庄兵衞達の前にも御辭儀をした。

『鶴さんですか。見ちがへるやうに大きくお成りでしたね。』

とまた松雲は言つて、そこに立つ伏見屋の子息の前にも御辭儀をした。手賀野村からの雨中の旅で、笠も草鞋も濡れて來た松雲の道中姿は、先づ半藏の眼をひいた。

『この人が萬福寺の新住職か。』

と半藏は心の中で思はずにゐられなかつた。和尚としては年も若い。まだ三十そこ〳〵の年配にしかならない。さういふ彼よりは六つか七つも年長にあたるくらゐの青年の僧侶だ。取りあへず峠の茶屋に足を休めるとあつて、京都の旅の話なぞがぽつ〳〵松雲の口から出た。京都に十七日、名古屋に六日、それから美濃路廻りで三日目に手賀野村の松源寺に一泊——それを松雲は持前の禪僧らしい調子で話し聞かせた。ものの小半時も半藏が一緒にゐるうちに、とてもこの人を憎なことの出來ないやうな善良な感じのする心の持主を彼は自分の側に見つけた。

やがて一同は馬籠の本宿をさして新茶屋を離れることになつた。途中で松雲は庄兵衞を顧みて、

『ほ。見ちがへるやうに道路が好くなつてゐますな。』

『この春、尾州の殿樣が江戸へ御出府だけな。お前さまはまた何も御存じなしか。』

『その話はわたしも聞いて來ましたよ。』

『新茶屋の境から峠の峯まで道普請よなし。尾州からはもう宿割の役人まで見えてゐますぞ。道造りの見分、見分で、みんないそがしい思ひをしましたに。』

噂のある尾張藩主の江戸出府は三月のはじめに迫つてゐた。來る日の通行の混雜を思はせるやうな街道を踏んで、一同石屋の坂あたりまで歸つて行くと、村の宿役人仲間がそこに待ち受けるのに逢つた。問屋の九太夫をはじめ、桝田屋の儀助、蓬萊屋の新七、梅屋の與次衛門、いづれも裃着用に雨傘をさしかけて松雲の一行を迎へた。

當時の慣例として、新住職が村へ歸り着くところは寺の山門ではなくて、先づ本陣の玄關だ。出家の身としてこんな歡迎を受けることはあながち松雲の本意ではなかつたけれども、萬事は半藏が父の計らひに任せた。附添として來た中津川の老和尚の注意もあつて、旅姿の松雲が法衣裝束に着更へたのも本陣の一室であつた。乘物、先箱、臺傘で、この新住職が吉左衛門の家を出ようとすると、それを見ようとする村の子供達はぞろ〳〵寺の道まで附いて來た。

萬福寺は小高い山の上にある。門前の墓地に茂る杉の木立の間を通して、傾斜を成した地勢に並び續く民家の板屋根を望むことの出來るやうな位置にある。松雲が寺への歸參は、沓ばきで久しぶりの山門をくゞり、それから方丈へ通つて、一禮座了で式が濟んだ。わざとばかりの饂飩振舞の後には、隣村の寺方、村の宿役人仲間、それに手傳ひの人達なぞもそれ〳〵引取つて歸つて行つた。

『和尚さま。』

と言つて松雲の側へ寄つたのは、長いことここに身を寄せてゐる寺男だ。その寺男は主人が留守中のことを思ひ出し顏に、

『よつぽど伏見屋の金兵衛さんには、お禮を言はつせるがいい。お前さまがお留守の間にもよく見舞ひにお出でて、本堂の廊下には大きな新しい太鼓が掛つたし、すつかり屋根の葺替も出來ました。あの萱だけでも、お前さま、五百二十把か

らかかりましたよ。まあ、俺は何からお話していいか。村へ大風の來た年には鐘つき堂が倒れる。その度に、金兵衛さんのお骨折りも一通りぢやあらすか。」

松雲はうなづいた。

諸國を遍歴して來た眼でこの境内を見ると、これが松雲には馬籠の萬福寺であつたかと思はれるほど小さい。長い留守中は、ここへ來て世話をして呉れた隣村の隠居和尚任せで、何となく寺も荒れて見える。方丈には、あの隠居和尚が六年も眺め暮したやうな古い壁もあつて、そこには達磨の畫像が歸參の新住職を迎へ顔に掛つてゐた。

『寺に大地小地なく、住持に大地小地あり。』

この言葉が松雲を勵ました。

松雲は周圍を見廻した。彼には心に掛るかずかずのことがあつた。常時の戸籍簿とも言ふべき宗門帳は寺で預かつてある。あの帳面もどうなつてゐるか。位牌堂の整理もどうなつてゐるか。數へて來ると、何から手を着けていいかも分らないほど種々雜多な事が新住職としての彼を待つてゐた。毎年の獻鉢を例とする開山忌の近づくことも忘れてはならなかつた。彼は考へた。兎も角も明日からだ。朝早く身を起すために何かの目的を立てることだ。それには二人の弟子や寺男任せでなしに、先づ自分で庭の鐘楼に出て、十八聲の大鐘を撞くことだと考へた。

翌朝は雨もあがつた。松雲は夜の引き明けに床を離れて、山から來る冷い清水に顔を洗つた。法鼓、朝課の勤めは後廻しとして、先づ鐘楼の方へ行つた。惠那山を最高の峯としてこの邊一帶の村々を支配して立つやうな幾つかの山嶽も、その位置からは隠れてよく見えなかつたが、遠くかすかに鳴きかはす鷄の聲を谷の向ふに聞きつけることは出來た。まだ本堂の前の柊も暗い。その時、朝の空氣の靜かさを破つて、澄んだ大鐘の音が起つた。力を籠めた松雲の撞き鳴らす音だ。その音は谷から谷を傳ひ、畠から畠を匍つて、まだ動きはじめない村の水車小屋の方へも、半分眠つてゐるやうな馬小屋

の方へもひゞけて行つた。

二

ある朝、半藏は妻の側に眼をさまして、街道を通る人馬の物音を聞きつけた。妻のお民は、と見ると、まだ娘のやうな顏をして、寢心地の好い春の曉を寢惜んでゐた。半藏は妻の眼をさまさせまいとするやうに、自分獨り起き出して、新婚後二人の居間となつてゐる本陣の店座敷の戸を明けて見た。

舊暦三月はじめのめづらしい雪が戸の外へ來た。春から例年にない暖かさだと言はれたのが、三月を迎へて反つてその雪を見た。表庭の塀の外は街道に接してゐて、雪を踏んで行く人馬の足音がする。半藏は耳を澄ましながらその物音を聞いて、かねて噂のあつた尾張藩主の江戸出府がいよ／＼實現されることを知つた。

『尾州の御先荷がもうやつて來た。』

と言つて見た。

宿繼ぎ差立てについて、尾張藩から送られて來た駄賃金が馬籠の宿だけでも金四十一兩に上つた。駄賃金は年寄役金兵衞が預かつたが、その金高を聞いただけでも今度の通行のいかに大袈裟なものであるかを想像させる。半藏はうす／＼父からその話を聞いて知つてゐたので、部屋にぢつとしてゐられなかつた。臺所に行つて顏を洗ふと直ぐ雪の降る中を屋外へ出て見ると、會所では朝早くから繼立てが始まる。後から／＼と坂路を上つて來る人足達の後には、鈴の音に歩調を合せるやうな荷馬の群が續く。朝のことで、馬の鼻息は白い。時には勇ましい嘶きの聲さへ起る。村の宿役人仲間でも一番先に家を出て、雪の中を奔走してゐたのは問屋の九太夫であつた。

前の年の六月に江戸灣を驚かしたアメリカの異國船は、また正月からあの沖合にかかつてゐる頃で、今度は四隻の軍艦

を八九隻に增して來て、武力にも訴へかねまじき勢で、幕府に開港を迫つてゐるとの噂すら傳はつてゐる。全國の諸大名が江戸城に集まつて、交易を許すか許すまいかの大評定も始まらうとしてゐるといふ。半藏はその年の正月二十五日に、尾州から江戸送りの大筒の鐵砲や、軍用の長持が二十三棹もこの街道に續いたことを思ひ出し、一人持ちの荷物だけでも二十一荷もあつたことを思ひ出して、眼の前を通る人足や荷馬の群を眺めてゐた。

半藏が家の方へ戻つて行つて見ると、吉左衞門はゆつくりしたもので、爐邊で朝茶をやつてゐた。その時、半藏はきいて見た。

『お父さん、今朝着いたのはみんな尾州の荷物でせう。』

『さうさ。』

『この荷物は幾日ぐらゐ續きませう。』

『さあ、三日も續くかな。この前に唐人船の來た時は、上のものも下のものも大狼狽さ。今度は戰爭には成るまいよ。何にしても尾州の殿樣も御苦勞さまだ。』

馬籠の本陣親子が尾張藩主に特別の好意を寄せてゐたのは、ただあの殿樣が木曾谷や尾張地方の大領主であるといふばかりではない。吉左衞門には、時に名古屋まで出張して、藩主が御勝手元の仕法立てに盡力し、その經濟を助けるほどの親しみがあつた。半藏は半藏で、『神祇寶典』や『類聚日本紀』などを撰んだ源敬公以來の尾張藩主であるといふことが、彼の心をよろこばせたのであつた。彼はあの源敬公の仕事を水戸の義公に結びつけて想像し、『大日本史』の大業を成就したのもさういふ義公であり、僧の契沖をして『萬葉代匠記』を撰ばしめたのもこれまた同じ人であることを想像し、その想像を儒佛の道がまだこの國に渡つて來ない以前のまじりけのない時代にまでよく持つて行つた。彼が自分の領主を思ふ心は、當時の水戸の青年がその領主を思ふ心に似てゐた。

その日、半蔵は店座敷に籠つて、この深い山の中に住むさみしさの前に頭を垂れた。障子の外には、塀に近い松の枝をすべる雪の音がする。それが恐ろしい響を立てて庭の上に落ちる。街道から聞えて來る人馬の足音も、絶えたかと思ふとまた續いた。

『こんな山の中にばかり引込んでゐると、何だか俺は氣でも違ひさうだ。みんな、のんきなことを言つてゐるが、そんな時世ぢやない。』

と考へた。

そこへお民が來た。お民はまだ十八の春を迎へたばかり、妻籠本陣への里歸りを濟ました頃から眉を剃り落してゐて、いくらか顔のかたちはちがつたが、動作は一層生々として來た。

『あなたの好きなねぶ茶をいれて來ました。あなたはまた、何をそんなに考へておいでなさるの。』

とお民がきいた。ねぶ茶とは山家で手造りにする飲料である。

『俺か。俺は何も考へてゐない。唯、かうしてぼんやりしてゐる。お前と俺と、二人一緒になつてから百日の餘にもなるが――さうだ、百日どころぢやないや、もう四ケ月にもなるんだ――その間、俺は何をしてゐたかと思ふやうだ。阿爺の好きな煙草の葉を刻んだことと、祖母さんの看病をしたことと、まあそれくらゐのものだ。』

半蔵は新婚のよろこびに醉つてばかりもゐなかつた。學業の怠りを嘆くやうにして、それをお民に言つて見せた。

『わたしはお節句のことを話さうと思ふのに、あなたはそんなに考へてばかりゐるんですもの。だつて、もう三月は來てゐるぢやありませんか。この御通行が濟むまでは、どうすることも出來ないぢやありませんか。』

新婚のそもそもは、娘の昔に別れを告げたばかりのお民に取つて、むしろ苦痛でさへもあつた。それが新しい歡びに變つて來た頃から、兎角店座敷を離れかねてゐる。いつの間にか半蔵の膝はお民の方へ向いた。彼はまるで尻餅でもついた

やうに、後ろ手を疊の上に落して、それで身を支へたから、妻籠から持つて來たといふ記念の雛人形の話なぞをするお民の方を眺めた。手織縞でこそあれ、常時の風俗のやうに割合に長くひいた裾の着物は彼女に似合つて見える。剃り落した眉のあとも、青々として女らしい。この雪に燃えてゐるやうなその娘らしい手だ。彼は妻と二人ぎりでゐて、その手に見入るのを樂みに思つた。

實に突然に、お民は夫の側で啜り泣きを始めた。

『ほら、あなたはよくさう言ふぢやありませんか。わたしに學問の話なぞをしても、ちつとも譯が解らんなんて。そりや、あのお母さん（姑、おまん）の眞似はわたしには出來ない。今迄、妻籠の方で、誰もわたしに敎へて呉れる人はなかつたんですもの。』

『お前は機でも織つてゐて呉れれば、それでいいよ。』

お民は容易に啜り泣きを止めなかつた。半藏は思ひがけない涙を聞きつけたといふに、側へ寄つて妻をいたはらうとすると。

『敎へて。』

と言ひながら、しばらくお民は夫の胸に顏をうづめてゐた。

ちやうど本陣では隱居が病みついてゐる頃であつた。あの婆さんも最早老衰の極度にあつた。

『おい、お民、お前は祖母さんをよく看てお呉れよ。』

と言つて、やがて半藏は隱居の臥てゐる部屋の方へお民を送り、自分でも氣を取り直した。

いつでも半藏が心のさみしい折には、日頃慕つてゐる平田篤胤の著書を取り出して見るのを癖のやうにしてゐた。「靈の眞柱」、「玉だすき」、それから講本の「古道大意」なぞは讀んでも讀んでも飽きるといふことを知らなかつた。大判の薄藍

色の表紙から、必ず古代紫の絲で綴ぢてある本の製幀までが、彼には好ましく思はれた。『靜の岩屋』、『西籍概論』の筆記錄から、三百部を限りとして絶版になつた『毀譽相半ばする書』のやうな伊吹の舍の深い消息までも、不便な山の中で手に入れてゐるほどの熱心さだ。平田篤胤は天保十四年に歿してゐる故人で、この黒船騷ぎなぞをもとより知りやうもない。あれほど異端とし邪道として中世以來支那や印度から渡つて來たものを極力排斥した人が、嘉永安政の代に生きるとしたら――すくなくもあの先輩はどうするだらうとは、半藏のやうな青年の思ひを潜めなければならないことであつた。

新しい機運は動きつつあつた。全く氣質を相異にし、全く傾向を相異にするかに見えるやうなものが、殆んど同時に踏み出さうとしてゐた。長州萩の人、吉田松陰は當時の嚴禁たる異國への密航を企てて失敗し、信州松代の人、佐久間象山はその件に連座して獄に下つたとの噂すらある。美濃の大垣あたりに生れた青年で、異國の學問に志し、遠く長崎の方へ出發したといふ人の話なぞも、決してめづらしいことではなくなつた。

『黒船。』

雪で明るい部屋の障子に近く行つて、半藏はその言葉を繰り返して見た。遠い江戸灣のかなたには、實に八九艘もの黒船が來てあの沖合に掛つてゐることを胸に描いて見た。その心から、彼は尾張藩主の出府も容易でないと思つた。

本陣寄せの人足七百三十人、伊那の助郷千七百七十人、この人數合せて二千五百人を動かすほどの大通行が、三月四日に馬籠の宿を經て江戸表へ下ることになつた。宿場に集まつた馬の群だけでも百八十四、馬方百八十人にも上つた。

松雲和尚は萬福寺の方にゐて、長いこと留守にした方丈にもろく〱落ちつかないうちに、三月四日を迎へた。前の晩に來たはげしい雷雨もおさまり、夜中頃から空も晴れて、人馬の繼ぎ立てはその日の明け方から始まつた。

尾張藩主が出府と聞いて、寺では徒弟僧も寺男もぢつとしてゐない。大領主のさかんな通行を見ようとして裏山越しに近在から入り込んで來る人達は、門前の石段の下に小徑の續いてゐる墓地の間を急ぎ足に通る。

「お前達も行つて殿様をお迎へするがいい。」
と松雲は二人の弟子にも寺男にも言つた。
　旅にある日の松雲はかなりわびしい思ひをして來た。京都の宿で煩ひついた時は、書きにくい手紙を伏見屋の金兵衞に宛てて、餘分な路銀の心配までかけたこともある。もし無事に行脚の修業を終る日が來たら、村のためにも役に立たう、貧しい百姓の子供をも敎へよう、さう考へて旅から歸つて來た。周圍にある空氣のあわただしさ。この動搖の中に僧侶の身をうけて、どうして彼は村の幼く貧しいものを育てて行かうかとさへ思つた。
「和尚さま。」
と聲をかけて、裏口から入つて來たのは、日頃寺へ出入の洗濯婆さんだ。腰に鎌をさし、藁草履をはいて、男のやうな頑丈(がんぢやう)な手をしてゐる山家の女だ。
「お前さまはお留守居かなし。」
「さうさ。」
「俺は今まで畠にゐたが、俳草どころぢやあらすか。けふのお通りは正午つ時だけな。殿様は下町の笹屋の前まで馬に騎(の)つておいでで、それから御本陣でお歩行(ひろひ)だけな。お前さまも出て見さつせれや。」
「まあ、わたしはお留守居だ。」
「こんな日にお寺に引込んでゐるなんて、そんなお前さまのやうな人があらすか。」
「さう言ふものぢやないよ。用事がなければ、親類へも行かない。それが出家の身なんだもの。わたしはお寺の番人だ。それで澤山だ。」
　婆さんは鐵漿(おはぐろ)の剝(は)げかかつた半分黒い齒を見せて笑ひ出した。庭の土間での立ち話もそこ／＼にして、また裏口から出

て行つた。

やがて正五つ時も近づく頃になると、寺の門前を急ぐ人の足音も絶えた。物音一つしなかつた。靜かだ。何もかも鳴りをひそめて、沈まりかへつたやうになつた。ちやうど例年より早くめづらしい陽氣は谷間に多い花の蕾をふくらませてゐる。馬に騎りかへて新茶屋あたりから進んで來る尾張藩主が木曾路の山ざくらのかげに旅の身を見つけやうといふ頃だ。松雲は戸から外へ出ないまでも、街道の兩側に土下座する村民の間を縫つて御先案内をうけたまはる問屋の九太夫をも、まのあたり藩主を見ることを光榮としてありがたい仕合だとささやき合つてゐるやうな宿役人仲間をも、定紋付の裃でうやうやしく大領主を自宅に迎へようとする本陣親子をも、ありありと想像で見ることが出來た。

方丈もしんかんとしてゐた。まるでそこいらは空つぼのやうになつてゐた。松雲は唯一人默然として、古い壁にかかる達磨の畫像の前に座りつづけた。

三

何となく雲脚の早さを思はせるやうな諸大名の往來は、それからも續きに續いた。尾張藩主の通行ほど大がかりではないまでも、土州、雲州、讃州なぞの諸大名は西から。長崎奉行永井岩之丞の一行は東から。五月の半ばには、八百人の同勢を引き連れた肥後の家老長岡監物の一行が江戸の方から上つて來て、いづれも鐵砲持參で、一人づつ腰辨當でこの街道を通つた。

仙洞御所の出火の噂、その火は西陣までの町通りを燒き盡して天明年度の大火よりも大變だといふ噂が、京都方面から傳はつて來たのもその頃だ。

この息苦しさの中で、年若な半藏なぞが何物かを求めて止まないのにひきかへ、村の長老達の願ひとしてゐることは、

結局現狀の維持であつた。黒船騒ぎ以來、諸大名の往來は激しく、伊那あたりから入り込んで來る助郷の數もおびただしく、その弊害は覿面に飲酒賭博の流行にあらはれて來た。庄屋としての吉左衛門が宿役人等の賛成を得て、賭博厳禁といふことを言ひ出し、それを村民一同に言ひ渡したのも、その年の馬市が木曾福島の方で始まらうとする頃にあたる。

『あの時分はよかつた。』

年寄役の金兵衛が吉左衛門の顔を見る度に、よくそこへ持ち出すのも、『あの時分』だ。同じ驛路の記憶につながれてゐる二人の隣人は、まだ／＼徳川の代が平和であつた時分のことを忘れかねてゐる。新茶屋に建てた翁塚、伏見屋の二階に催した供養の俳諧、蓬萊屋の奥座敷でうんと食つたアトリ三十羽に茶漬三杯――『あの時分』を思ひ出させるやうなものは何かにつけて戀しかつた。この二人には、山家が山家でなくなつた。街道は厭はしいことで滿されてゐる。もつとゆつくり隣村の湯舟澤や、山口や、あるひは妻籠からの泊り客を家に迎へ、こちらからも美濃の落合の祭禮や中津川あたりの狂言を見に出掛けて行つて、すくなくも二日や三日は泊りがけで親戚知人の家の客となつて來るやうでなくては、どうしても二人には山家のやうな氣がしなかつた。

その年の祭禮狂言をさかんにするといふことが、やがて馬籠の本陣で協議された。組頭庄兵衛もこれには賛成した。ちやうど村では金兵衛の肝煎りで、前の年の十月あたりに新築の舞臺普請をほぼ終つてゐた。附近の山の中に適當な普請木を求めることから、舞臺の棟上げ、投げ餅の世話まで、多くは金兵衛の骨折で出來た。その舞臺は萬福寺の境内に近い裏山の方に造られて、最早樂しい秋の祭の日を待つばかりになつてゐた。

この地方で祭禮狂言を興行する歷史も古い。それだけ土地の人達が歌舞伎そのものに寄せてゐる興味も深かつた。當時の南信から濃尾地方へかけて、演劇の最も發達した中心地は、近くは飯田、遠くは名古屋であつて、市川海老藏のやうな江戸の役者が飯田の舞臺を踏んだこともめづらしくない。それを聞く度に、この山の中に住む好劇家連は女中衆まで引き

連れて、大平峠を越しても見に行つた。あの清内路あたりから伊那の谷の方へ出る深い森林の間も、好い芝居を見たいと思ふ男や女には、それほど遠い道ではなかつたのである。金兵衛もその一人だ。彼は秋の祭の來るのを待ちかねて、その年の閏七月にしばらく村を留守にした。伏見屋もどうしたらう、さう言つて吉左衛門などが噂をしてゐるところへ、豐川、名古屋、小牧、御嶽、大井を經て金兵衛親子が無事に歸つて來た。その折の土産話が芝居好きな土地の人達を羨ましがらせた。名古屋の若宮の芝居では八代目市川團十郎が一興行を終つたところであつたけれども、橘町の方には同じ江戸の役者三桝大五郎、關三十郎、大谷廣右衛門などの一座がちやうど舞臺に上る頃であつたといふ。

九月も近づいて來る頃には、村の若いものは祭禮狂言の稽古に取りかかつた。荒町からは十一人も出て舞臺へ通ふ村の道を造つた。かねて金兵衛が祕藏子息のために用意した狂言用の大小の刀も役に立つ時が來た。彼は鶴松ばかりでなく、上の伏見屋の仙十郎をも舞臺に立たせ、日頃の溜飲を下げようとした。好ましい鬘を子にあてがふためには、一分二朱ぐらゐの金は惜しいとは思はなかつた。

狂言番組。式三番叟。碁盤太平記。白石噺三の切り。小倉色紙。最後に戻り籠。このうち式三番叟と小倉色紙に出る役と、その二役は仙十郎が引きうけ、戻り籠に出る難波治郎作の役は鶴松がすることになつた。金兵衛がはじめて稽古場へ見物に出掛る頃には、兎も角も村の若いものでこれだけの番組を作るだけの役者が揃つた。

その年の祭の季節には、馬籠以外の村々でもめづらしい賑ひを呈した。各村は殆んど競爭の形で、神輿を引き出さうとしてゐた。馬籠でさかんにやると言へば、山口でも、湯舟澤でも負けてはゐないといふ風で。中津川での祭禮狂言は馬籠よりも一月程早く催されて、その折は本陣のおまんも仙十郎と同行し、金兵衛はまた吉左衛門と揃つて押し掛けて行つて來た。眼にあまる街道一切の塵埃ツぽいことも、この賑かな祭の氣分には埋められさうになつた。

そのうちに、名古屋の方へ頼んで置いた狂言衣裳の荷物が馬で二駄も村に屆いた。舞臺へ出る稽古最中の若者等は他村

されるであらう。涙と憤激なしに讀み了せる人があつたらお目にかゝりたい。

大戰の審判書

◆獨逸では一月發賣して八月末迄に八十萬部を賣り盡し、英國で二十萬佛國で三十萬米國で二十二萬部賣れた、西から東へ疾風迅雷的に押し擴まり此上尚いくら賣れるか見當もつかない。

◆今や歐洲はもとより世界を擧げて此の書の噂で持ち切つてゐる。

◆譯者秦豐吉氏は獨逸文學紹介者として定評ある人、特に今回は古今の名譯。

◆作者ルマルクは此の作によつて次回ノーベル賞金の受領者に擬せられてゐる。

◆中央公論社は獨逸ウルスタイン社より、直接本書の日本に於ける飜譯權を獲得した。

ルマルクが學生生活の途中から驅り出されて戰線に立つたのは十九歳の時である。幾度も幾度も死線を潜つて不思議に生きのびた。血と爆彈と毒瓦斯とは此の青年の心理をさういふ環境に相應はしく荒ませた。然し、戰が濟んで暖かい母の膝下に歸ると其處には全く別な世界があつた。彼は昨日の惡夢を想ひ出す如く自分が馳驅した戰場の光景を頭に浮べた。軍鍬で頭を三つに割られた佛蘭西兵、首がケシ飛んで血を噴きながら走る獨逸兵、一瞬間前まで語り合つてゐた戰友がもう一片の肉塊だけを殘して消え去つてゐる……。さういふ中を平氣で笑ひながら踊り狂つてゐた幽靈のやうな自分の姿が顧みられた。砲彈の唸りに怖れて小便を垂れる新兵を嘲弄つたり河を渡つて佛蘭西の女と媾曳した想ひ出など……想へば想ふ程それは人間の良心と平和の理解からは隔絶された光景であつた。それから今日までの十年間、彼は毎日〳〵此の惡夢に瘦せ細るまで責め苛まれた。思ひ餘つて其苦惱から逃れんために此の本を書いたといふのである。彼の見て來たもの、して來た事が僞りのない事實であると同時に、記述の動機が母性愛の影響を受けてゐるのも事實である。此の書物が恐ろしい戰爭の罪業を知らしめると同時に、其戰爭から遁れるためにひたすら愛と平和の方向を指し示してゐるものである事も見のがせない。

發行所 東京驛前 丸ビル五階 中央公論社 振替口座 東京三四番

滿天下の讀書子から
熱狂的聲援を受けて

中央公論出版部は誕生した

出版部開設の豫報が傳はると同時に我々は實に澤山の手紙を既知未知の方から戴いた。それは申合せたやうに『ナゼもつと早くやらなかつた？』といふうらみ、『今でも遲くない、待つてゐたのだ』といふ激勵、『ゼヒしつかりやつて呉れ』といふ期待を、吐き出すやうに熱烈な口調で申述べられたものばかり、實申せばこんなにまで強い反響があるとは思つてゐなかつた。中には縷々數千言所感や希望を巨細に書き込まれた封書が斤量超過で不足郵税を徴されるのがあつたり、東京を距ること僅かな近縣からわざ〳〵激勵電報を寄せられた人があつたり、ものずきでなければ半ば狂氣じみてゐるとさへ思はれる、かうした御聲援振りも今の我々には嬉しい極みである。

さて出版部は誕生した、勇ましくスタートを切つた。愈々十月初旬を期して左記の書物を大衆諸兄の前に捧げる。

一、秦豐吉譯 **西部戰線異狀なし** （またゝく間に百六十萬部を賣りつくし、今、全歐羅巴を沸き立つやうに騷がしてゐる問題の戰爭實記。）

一、谷讓次著 **踊る地平線** （一世の才筆ジョウジ・タニーが世に問ふ新しき文藝陣。）

一、**中間物選集** （第一篇 巴里を語る——柳澤健／第二篇 近代明色——新居格／第三篇 山へ入る日——石川欣一） ——詳細は別項廣告欄參照——

十月以後のものに就ては尙暫らく言はない、いづれも選りに選りすぐりにすぐつたプランばかりである。熱と意氣に於ては斷じて誰人にも讓らない。たゞ早々の事で何分行き屆き兼ねる節もあるでせう、此上一層の御鞭撻をお願ひする次第である。

に敗を取るまいとして、振付は飯田の梅蔵に、唄は名古屋の治兵衛に、三味線は中村屋鍵蔵に、それぞれ依頼する手筈をさだめた。祭の樂しさはそれを迎へた當日ばかりでなく、それを迎へるまでの日に深い。淨瑠璃方がすでに村へ入り込んだとか、化粧方が名古屋へ飛んで行つたとか、さういふ噂が傳はるだけでも、村の娘達の胸には歡びが湧いた。かうなると、金兵衛はぢつとしてゐられない。毎日のやうに舞臺へ詰めて、桟敷をかける世話までした。伏見屋の方でも鶴松に初舞臺を踏ませるとあつて、お玉の心づかひは一通りでなかつた。中津川からは親戚の女まで來て衣裳ごしらへを手傳つた。

『今日も好いお天氣だ。』

さう言つて、金兵衛が伏見屋の店先から街道の空を仰いだ頃は、舊曆九月の二十四日を迎へた。例年祭禮狂言の初日だ。朝早くから金兵衛は髪結の直次を呼んで、年齢相應の髷に結はせた。五十八歳で年寄役を勤續して、村の宿役人仲間での年長者と言はれる彼も、白い元結で堅く髷の根を締めた時は、さすがにさはやかな、祭の日らしい心持に返つた。剃り立ての腮のあたりも青く生々として、平素の金兵衛よりも反つて若々しくなつた。

『鶴、うまくやつてお呉れよ。』

『大丈夫だよ。お父さん、安心しておいでよ。』

伏見屋親子はこんな言葉をかはした。

そこへ仙十郎もちよつと顏を出しに來た。金兵衛はこの義理ある甥の方を見た時にも言つた。

『仙十郎もしつかり頼むぜ。式三番叟と言へば、お前、座頭の勤める役だぜ。』

仙十郎は美濃の本場から來て、上の伏見屋を繼いだだけに、斯うした祭の日なぞには別の人かと見えるほど快活な男を發揮した。彼はこんな山の中に惜しいと言はれるほどの美貌で、その享樂的な氣質は造り酒屋の手傳ひなぞにはあまり向かなかつた。

『さあ。けふは、うんと一つ暴れてやるぞ。村の舞臺が拔けるほど踊りぬいてやるぞ。』

仙十郎の言草だ。

まだ狂言の蓋も開けないうちから、金兵衛の心は舞臺の樂屋の方へも、棧敷の方へも行つた。だんだら模様の烏帽子を冠り、三番叟らしい寬濶な狂言の衣裳をつけ、鈴を手にした甥の姿が、彼の眼に見えて來た。戻り籠に出る籠かき姿の子が杖でもついて花道にかかる時に、棧敷の方から起る喝采は、必ず『伏見屋』と來る。そんな見物の掛け聲まで、彼の耳の底に聞えて來た。

『ほんとに、俺はこんな馬鹿な男だ。』

金兵衛はそれを自分で自分に言つて、束にして掛けた杉の葉のしるしも酒屋らしい伏見屋の門口を、出たり入つたりした。

三日續いた狂言はかなりの評判をとつた。假令村芝居でも假借はしなかつたほど藩の檢閲は嚴重で、風俗壞亂、その他の取締りにと木曾福島の役所の方から來た見屆け奉行なぞも、狂言の成功を祝つて引き取つて行つたくらゐであつた。到るところの圍爐裏ばたでは、しばらくこの狂言の話で持ち切つた。何しろ一年に一度の樂しい祭のことで、顏立ちから仕草から衣裳まで三拍子揃つた仙十郎が三番叟の美しかつたことや、十二歳で初舞臺を踏んだ鶴松が難波治郎作のいたいけであつたことなぞは、村の人達の話の種になつて、そろ〳〵大根引きの近づく頃になつても、まだその噂は絶えなかつた。

舊曆十一月の四日は冬至の翌日である。多事な一年も、どうやら滯りなく定例の惠比須講を過ぎて、村では冬至を祝ふ

までに漕ぎつけた。そこへ地震だ。あの家々に簾を掛けて年寄から子供まで一緒になつて遊んだ祭の日から數へると、僅か四十日ばかりの後に、何時止むとも知れないやうなそんな地震が村の人達を待つてゐやうとは。

吉左衛門の家では一同裏の竹藪へ立ち退いた。おまんも、お民も、皆足袋跣で、半藏に助けられながら木小屋の裏に集まつた。その時は、隱居は最早この世にゐなかつた。七十三の歳まで生きたあのおばあさんも、孫のお民が帶祝ひの日に逢はず仕舞に、ましてお民に男の兒の生れたことも、生れる間もなくその兒の亡くなつたことも、そんな慶事と不幸とが殆んど同時にやつて來たことも知らず仕舞に、その年の四月には既に萬福寺の墓地の方に葬られた人であつた。

「あなた、遠くへ行かないで下さいよ。皆と一緒にゐて下さいよ。」

とおまんが吉左衛門のことを心配する側には、產後三十日あまりにしかならないお民が青ざめた顏をしてゐた。また搖れて來たと言ふ度に、下男の佐吉も二人の下女までも、互ひに顏を見合せて眼の色を變へた。

太い青竹の根を張つた藪の中で、半藏は帶を締め直した。父と連れ立つてそこいらへ見廻りに出た頃は、本陣の界隈に住むもので家の中にゐるものは殆んどなかつた。隣家のことも氣にかかつて、吉左衛門親子が見舞に行くと、伏見屋でもお玉や鶴松なぞは舞臺下の日刈小屋の方に立ち退いた後だつた。さすがに金兵衛は沈着いたもので、その不安の中でも下男の一人を相手に家に殘つて、京都から來た飛脚に駄賃を拂つたり、判取帳をつけたりしてゐた。

「どうも今年は正月の元日から、いやに陽氣が暖かで、をかしい〳〵と思つてゐましたよ。」

それを吉左衛門が言ひ出すと、金兵衛も想ひ當るやうに、

「それさ。元日に草履ばきで年始が勤まつたなんて、木曾ぢや聞いたこともない。おまけに、寺道の向ふに椿が咲き出す、若餅でも搗かうといふ時分に蓬が青々としてゐる。あれはみんなこの地震の來る知らせでしたわい。なにしろ、吉左衛門さん、吾家ぢや仙十郎の披露を濟ましたばかりで、まあお蔭であれも組頭のお仲間入が出來た。わたしも先祖への顏が立つ

た。さう思つて祝ひの道具を片付けてゐるところへ、この地震でせう。」

「中年の善光寺の地震が大きかつたなんて言つたつてとても比べものにはなりますまいよ。ほら、寅年六月の地震の時だつて、こんなぢやなかつた」

「いや、こんな地震は前代未聞にも、なんにも。」

取りあへず宿役人としての吉左衛門や金兵衛が相談したことは、老人女子供以外の町内のものを一定の場所に集めて、火災盗難等からこの村を護ることであつた。場所は問屋と伏見屋の前に決定した。そして村民一同交替でつとめることに申し合せた。天變地異に驚く山の中の人達の間には、春以來江戸や浦賀港を騒がしたアメリカの船も、長崎から大阪の方面にたびたび押し寄せたといふオロシヤの船をも、さては仙洞御所の出火までも引合に出して、この大地震を何かの前兆に結びつけるものもある。夜一夜、誰もまんじりともしなかつた　半藏もその仲間に加はつて、徹夜の[illegible]に身を投じたり、竹藪や背戸田に野宿する人達のことを思つたりして、太陽の登るのを待ち明した。

翌日は雪になつたが、搖り返しはなかなか止まなかつた。問屋、伏見屋の前には二組に分れた村の者が動いたり集まつたりして、美濃の大井や中津川邊は馬籠よりも大地震だとか、隣宿の妻籠も同樣だとか、どこから聞いて來るともなくいろいろな噂を持つては歸つて來た。惠那山、川上山、鎌澤山のかなたには大崩れが出來て、それが根の上あたりから望まれることを知らせに來るのも若い連中だ。その時になると、稀に見る賑ひだつたと言はれた祭の日の歡びも、狂言の評判も、すべて地震の騷ぎの中に浚はれたやうになつた。

搖り返し、搖り返しで、不安な日がそれから六日も續いた。宿では十八人づゝの夜番が交替に出て、街道から裏道まで

を警戒した。祈禱のためと言つて村の代參を名古屋の熱田神社へも送つた。そのうちに諸方からの通知がぽつ〳〵集まつて來て、今度の大地震が關西地方に殊に劇しかつたことも分つた。東海道岡崎あたりへは海嘯がやつて來て、新井の番所なぞは海嘯のために浚はれたことも分つて來た。

熱田からの代參の飛脚が村をさして歸つて來た頃には、怪しい空の雲行きもおさまり、そこいらもだいぶ穩かになつた。吉左衛門は會所の定使に言ひつけて、熱田神社祈禱の札を村中軒別に配らせてゐると、そこへ金兵衛の訪ねて來るのに逢つた。

『吉左衛門さん、もうわたしは大丈夫と見ました。時に、明日は十一月の十日にもなりますし、佛事をしたいと思つて、お茶湯の仕度に取りかかりましたよ。御都合が好かつたら、あなたにも出席して頂きたい。』

『お茶湯とは君も好いところへ氣がついた。こんな時の佛事は、さぞ身にしみるだらうねえ。』

その時、金兵衛は一通の手紙を取り出して吉左衛門に見せた。舌代として、病中の松雲和尚から金兵衛にあてたものだ。それには、伏見屋の佛事にも弟子を代理として差出すといふ詫びからはじめて、こんな非常時には自分のやうなものでも村の役に立ちたいと思ひ、行脚の旅にある頃からそのことを心がけて歸つて來たが、生憎と病に臥してゐること[illegible]の[illegible]ないのが殘念だといふ意味を書いてある。寺でも經堂その他の壁は落ち、土藏にもエミ(縫裂)を生じたが、お陰で一人も怪我もなくて濟んだと書いてある。本陣の主人へもよろしくと書いてある。

『いや、和尚さまもお堅い、お堅い。』

『なにしろ六年も行脚に出てゐた人ですから。旅の疲れぐらゐは出ませうよ。』

それが吉左衛門の返事だつた。

『お宅では。』

「まだみんな裏の竹藪です。ちよつと、おまんにも逢つてやつて下さい。」

さう言つて吉左衛門が金兵衛を誘つて行つたところは、おそろしげに壁土の落ちた土藏の側だ。木小屋を裏へ通りぬけると、暗いほど茂つた竹藪がある。その邊に假小屋を造りつけ、戸板で圍つて、大切な品だけは母屋の方から運んで來てある。そこにおまんや、お民なぞが避難してゐた。

「わたしはお民さんがお氣の毒でならない。」と金兵衛は言つた。「妻籠からお嫁にいらしつて、翌年にはこの大地震なんて全くやり切れませんねえ。」

おまんはその話を引き取つて、「お宅でも、皆さんお變りもありませんか。」

「ええ、まあお蔭で。たつた一人面白い人物がゐまして、これだけは無事とは言へないかも知れません。實は吾家で使つてる源吉のやつですが、この騷ぎの中で時々どこかへゐなくなつてしまう。あれはすこし足りないんですよ。あれはアメリカといふ人相ですよ。」

「アメリカといふ人相はよかつた。金兵衛さんの言ひさうなことだ。」

と吉左衛門も傍にゐて笑つた。

こんな話をしてゐるところへ、生家の親達を見に來る上の伏見屋のお喜佐、半藏夫婦を見に來る乳母のおふき婆さん、いづれも立ち退き先からそこへ一緒になつた。主從の關係もひどくやかましかつた封建時代に、下男や下女までそこへ膝を突き合はせて、目上目下の區別もなく、互ひに食ふものを分け、互ひに着るものを心配し合ふ光景は、こんな非常時でなければ見られなかつた圖だ。

村民一同が各自の家に歸つて寢るやうになつたのは、漸く十一月の十三日であつた。はじめて地震が來た日から數へて實に十日目に當る。夜番に、見廻りに、極く困窮な村民の救恤に、その間、半藏もよく働いた。彼は伏見屋から大阪地震

の繪圖なぞを借りて來て、それを父と一緒に見たが、震災の實際は噂よりも大きかつた。大地震の區域は伊勢の山田邊から志州の鳥羽にまで及んだ。東海道の諸宿でも、出火、潰れ家など數へきれないほどで、宮の宿から吉原の宿までの間に無難なところは僅かに二宿しかなかつた。

やがて、その年初めての寒さも山の上へやつて來るやうになつた。一切を沈默させるやうな大雪までが十六日の暮方から降り出した。その翌日は風も立ち、すこし天氣の好い時もあつたが、夜はまた大雪で、およそ二尺五寸も積つた。石を載せた山家の板屋根は皆さびしい雪の中に埋れて行つた。

四

『九太夫さん、どうもわたしは年廻りが好くないと思ふ。』

『どうでせう、馬籠でも年を祭り替へることにしては。』

『そいつはおもしろい考へだ。』

『この街道筋でも祭り替へるやうな噂で、村によつてはもう松を立てたところもあるさうです。』

『早速、年寄仲間や組頭の連中を呼んで、相談して見ますか。』

本陣の吉左衞門と問屋の九太夫とがこの言葉をかはしたのは、村へ大地震の來た翌年の三月である。

流言。流言には相違ないが、その三月は實に不吉な月で、惡病が流行するか、大風が吹くか、大雨が降るか乃至大饑饉が來るか、いづれ天地の間に恐しい事が起る。もし年を祭り替へるなら、その災難から逃れることが出來る。こんな噂が何處の國からともなくこの街道に傳はつて來た。九太夫が言ひ出したこともこの噂からで。

やがて宿役人等が相談の結果は村中へ觸れ出された。三月節句の日を期して年を祭り替へること。その日及びその前日

は、農事その他一切の業務を休むこと。かうなると、流言の影響も大きかつた。村では時ならぬ年越しの支度で、霰のやうな餅搗きの音が聞えて來る。松を立てた家もちらほら見える。「そへご」と組み合せた門松の大きなのは本陣の前にも立てられて、日頃出入りの小前のものは勝手の違つた顔付でやつて來る。その中の一人は、百姓らしい手を揉み〳〵吉左衛門にたづねた。

『大旦那。ちよいと物を伺ひますが、正月を二度すると言へば、年を二つ取ることだずら。村の衆の中にはそんなことを言つて、魂消てるものもあるわなし。俺の家ぢや、お前さま、去年の暮に女の兒が生れて、まだ數へ歳二つにしかならない。あれも三つと勘定したものかなし。』

『待つて呉れ。』

この百姓の言ふやうにすると、吉左衛門自身は五十七、五十八と一時に年を二つも取つてしまう。伏見屋の金兵衛なぞは、一足飛びに六十歳を迎へる勘定になる。

『馬鹿なことを言ふな。正月の遣り直しと考へたらいいぢやないか。』

さう吉左衛門は至極眞面目に答へた。

一年のうちに正月が二度もやつて來ることになつた。まるで嘘のやうに。氣の早い連中は、屠蘇を祝へ、雜煮を祝へと言つて、節句の前日から正月のやうな氣分になつた。當日は村民一同夜のひきあけに氏神諏訪社への參詣を濟まして來て、先づ吉例として本陣の門口に集まつた。その朝も、吉左衛門は麻の裃着用で、にこ〳〵した眼、大きな鼻、靜かな口に、馬籠の驛長らしい表情を見せながら、一同の年賀を受けた。

『へい、大旦那、明けましてお目出度うございます。』

『あい、目出度いのい。』

これも一時の氣休めであつた。

その年、安政二年の十月七日には江戸の大地震を傳へた。この山の中のものは彦根の早飛脚からそれを知つた。江戸表は七分通り潰れ、おまけに大火を引き起して、大部分燒失したといふ。震災後一年に近い地方の人達に取つて、この報知は全く他事(ひとごと)ではなかつた。尤も、馬籠のやうな山地でもかなりの强震を感じて、最初にどしんと來た時は皆屋外へ飛び出したほどであつた。それからの晝夜幾回となない微弱な搖り返しは、八十餘里を隔てた江戸方面からの餘波と分つた。

江戸大地震の影響は避難者の通行となつて、次第にこの街道にもあらはれて來た。村では遠く江戸から燒け出されて來た人達に物を與へるものもあり、またそれを見物するものもある。月も末になる頃には、吉左衛門は家のものを集めて、江戸から屆いた震災の繪圖をひろげて見た。一驚齋國周畫、あるひは芳綱畫として、浮世繪師の筆に成つた悲慘な光景がこの世ながらの地獄のやうにそこに描き出されてゐる。下谷廣小路から金龍山の塔までを遠見にして、町の空には六ケ所からも火の手が揚つてゐる。右に左にと逃げ惑ふ群集は、京橋四方藏から竹河岸あたりに續いてゐる。深川方面を描いたものは武家、町家一面の火で、煙につつまれた火見櫓も物凄い。眼も眩(くら)むばかりだ。

半藏が日頃その人達のことを想望してゐた水戸の藤田東湖、戸田蓬軒なぞも、この大地震の中に卷き込まれた。過去の壯大なことにかけて、おそらく水戸ほど當時の青年少年の心を動かしたところはなかつたらう。彰考館の修史、弘道館の學問は言ふまでもなく、義公、哀公、武公、烈公のやうな人達が相續いてその家に生れた點で。御三家の一つと言はれるほどの親藩でありながら、大義名分を明かにした點で。『常陸帶』を書き『回天詩史』を書いた藤田東湖はこの水戸を支へる主要な人物の一人として、少年時代の半藏の眼にも映じたのである。水戸も内輪もめが多いと知るやうになつてから、半藏のこの人を見る眼も以前のやうではなくなつたが、あの『正氣の歌』なぞを暗誦した時の心は變らずにある。さういふ藤田東湖は、水戸内部の暗鬪抗爭が漸くしげくならうとする頃に、開國か攘夷かの舞臺の序幕の中で、倒れて

行つた。

『東湖先生か。せめてあの人だけは生かして置きたかつた。』

と半藏は考へて、あの藤田東湖の横死が水戸に取つても大きな損失であらうことを想つて見た。

やがて村へは庚申講の季節がやつて來る。半藏はそのめつきり冬らしくなつた空を眺めながら、自分の二十五といふ歳も空しく暮れて行くことを思ひ、街道の片隅に立ちつくす時も多かつた。

十二月に入つても、江戸から焼け出されて來た人達はまだぼつ／＼この街道を通つた。その中には江戸吉原の揚屋のもので、これから上方をさして行くと言つて、二人連れで馬籠の旅籠屋に泊つたものもある。寒いあられの降る晩に、蓬萊屋の座敷を借りて、旅の揚屋連の咄が一席あるなぞも、震災の名殘をとどめてゐた。

この周圍の空氣の中で、吉左衛門と金兵衛との間には、意外な出來事が絡んで來た。吉左衛門から言へば、あの仙十郎にめあはせたお喜佐は、彼とおまんの間に出來た一人娘である。金兵衛から言へば、わざ／＼美濃の緣家から呼び迎へて上の伏見屋を相續させた仙十郎は、義理ある甥にあたる。事の起りは、すでに一人の男の兒まであるこの若夫婦が激しい爭ひにもとづく。長いこと隠されてゐた仙十郎の浮氣沙汰も、お喜佐が中津川の齒醫者へと驅けつけたことから、ばれて來た。

半藏は腹ちがひの妹のことを心配して、父や繼母のゐないところへお民を呼んで言つた。

『お前も聞いたかい。お喜佐は口惜しがつて仙十郎さんの腕に噛りつく。仙十郎さんも堪らないから、足でお喜佐の腮を蹴飛ばす。すると、お喜佐の前齒が一枚缺けてとれたなんて。えらい喧嘩もあるもんぢやないか。』

『なんでも去年のお祭からだそうですよ。あの狂言の晩に、お喜佐さんは仙十郎さんを探して歩いたそうですよ。』

『狂言も祟るなあ。』

『さう言へば、お喜佐さんもどうなさるでせう。』

『どうしようもあるまい。結局、吾家へ戻つて來るものと俺は見てる。』

街道へは毎日のやうに雪がちらついた。半藏夫婦は親達の顔を見るに見かねて、蔭ながら二人で心配してゐる間に、お喜佐は中津川で入歯の療治をすまして來て、それぎり夫の許へは歸つて行かなかつた。仙十郎は仙十郎で、組頭のつとめもうつちやらかして、しばらく村から姿を隱すなぞのごた／＼が續いた。この解決はどうつく。さう思つて半藏が氣をもんでゐると、上の伏見屋の土藏の二階にあつたお喜佐が衣裳から諸道具まで、荷物は一トまとめにして本陣の方へ引き渡されて來た。

『まあ、お喜佐さん達はそれでいいとしても、子供はどうなるでせうねえ。』

とお民は半藏に言つた。第三者の仲に入つたことや、美濃から人の出て來たことやで、上の伏見屋の關係は斷ち切られた。親としての吉左衛門が多くの望みをかけた一人娘の結婚生活も短い終を告げた。お喜佐夫婦は全くの赤の他人となつた。しかし二人の間に生れた子供の問題は依然としてそこに殘つてゐた。

その年も押し詰まる頃には、仙十郎は馬籠の組頭を辭し、上の伏見屋をも辭し、義理ある叔父の金兵衛にも別れを告げ、幼い男の兒を一人連れて中津川の方へ去らうとする人であつた。

『お喜佐さん、どこへ行くの。』

とお民が聲をかけた時は、日はとつぷり暮れてゐた。お喜佐はろく／＼返事もしなかつた。本陣の門口を出ると直ぐ、お喜佐は尻端折りになつて、下駄も脱ぎ捨てた。深い雪は街道を埋めてゐた。お喜佐はその雪の道を足袋跣で踏んで、上の伏

見屋から出た三挺の駕籠のあとをつけた。石屋の坂から橋詰まで追つて行つて、夜道の雪に映る提灯のあかりに近づいた。到頭、荒町のはづれまで行つて、その駕籠に追ひついた。

『その子供はやりません――中津川へはやりません――このわたしが承知しません。』

幼兒を取られまいとする母の一心から、お喜佐は子の乗物に取り縋つた。その中津川への一行が途中で駕籠を停めるまでは、ある木挽の家の戸を開けて貰つてそこで談判を始めるまでは、お喜佐は一歩も譲らうとしなかつた。兎も角も子供は來この事が伏見屋へ聞えて、一切の取扱ひを蓬萊屋の亭主に任せたのは、その夜の四つ時頃であつた。仙十郎その他を載せた駕籠が中津川の年の正月までお喜佐の方へ引き取ることになつた。そこまで手ひを持つて行つて、方へ行き着くまでには同じ夜の八つ時までかかつた。

二人の隣人――長い間の友達同志であり、相談相手ででもある吉左衛門と金兵衛に取つても、この事はなか〳〵笑つて濟ませなかつた。

『お民。』

半藏は、翌朝妻と共に眼をさましてから、先づその事を言ひ出した。

『金兵衛さんもひどい立腹だと言ふぢやないか。本陣夫婦の量見が解らん、どうも殘念至極だなんて、お隣ではそんなことを言つて、中津川から來た親類の女の人まで立腹してると言ふぢやないか。どうして本陣ではお喜佐を呼び留めによこして吳れなかつたらう。それがお隣の言ひ分らしい。』

『あのお喜佐さんが、そんなことを聞く人ですかい。』

若い夫婦は顔を見合せて、互ひにはら〳〵した。たつた一人の子供のために、これほどの氣まづさが二軒の家庭の内部へ侵入して來ようとは。何十年となく互ひに助け合つて來た村の二本の大黒柱を揺り動かすやうな力が、又、あんな幼くか

よわいものの手にあらうとは。おまけに、お喜佐はお喜佐で、あれほど激しい夫婦喧嘩はしても、その癖、仙十郎にホレてゐるなぞと、そんな餘計なことを觸れて歩く物數奇な手合もある。

吉左衞門は半藏を見て、子の側で嘆息するやうに言つた。

「仙十郎は浮氣者、お喜佐は燒餅やき——どうなるものかい。」

五

安政三年は馬籠の萬福寺で、松雲和尚が寺小屋を開いた年である。

江戸の大地震後一年目といふ年を迎へ、震災の噂もやや薄らぎ、この街道を通る避難者も見えない頃になると、何となくそこいらは嵐の通り過ぎた後のやうになつた。當時の中心地とも言ふべき江戸の震災は、たしかに封建社會の空氣を一轉させた。嘉永六年の黒船騷ぎ以來、續きに續いた一般人心の動搖も、震災の打撃のために一時取り沈められたやうになつた。尤も、尾張藩主が江戸出府後の結果も明かでなく、すでに下田の港は開かれたとの噂も傳はり、交易を非とする諸藩の抗議には幕府の老中もたゞ〳〵手を拱いてゐるとの噂すらある。しかしこの地方としては、一時の混亂も沈まりかけ、街道も次第に整理されて、米の値までも安くなつた。

各村儉約の申渡しとして、木曾福島からの三人の役人が巡廻して來た頃は、山里も震災の後らしい。土地の人達は正月の味噌搗きに取りかかる頃から、その年の豐作を待ち構へ、あるひは杉苗植付の相談なぞに餘念もなかつた。

正月のある晩、お民は本陣の家のものも皆寢沈まる頃に、お喜佐の寢部屋の方で聞きなれない物音を聞きつけた。暗いところで男女の鬪ふ音が起つた。眼をさまして泣く子供の聲もその間にまじつて聞えた。お民は直ぐその意味を讀んで、半藏を呼び起し、親達にもそれと知らせた。中津川の方から忍び込んで來て、子供を奪ひ返さうとした仙十郎の逆襲であ

った。

隣家の伏見屋で、殊に昔氣質の金兵衞として、これが默つて視てゐられる筈もない。夜中に人をよこして、仙十郎を連れに來た。その時、吉左衞門も仙十郎の心持を汲んで、兎も角も子供は男親の方へ引取らせることにお喜佐を言ひなだめた。こんな人騷がせな仙十郎の態度から、暮以來吉左衞門を見ても好い顏をしなかつた金兵衞の心もとけるやうになつた。

『正月早々、緣起でもない。』

いまいましさうな吉左衞門の言草だ。

ある一轉機が半藏の内部にも萠して來た。その年の二月には彼も父となつて居た。お民は彼の側で、二人の間に生れた愛らしい女の兒を抱くやうになつた。お粂といふのがその兒の名で、それまで彼の知らなかつたちひさなものの動作や、物を求めるやうな泣き聲や、無邪氣な欠びや、無心なほほ笑みなぞが、何となく一人前になつたといふ心持を父としての彼の胸の中に喚び起すやうになつた。その新しい經驗は、今迄のやうな遠いところにあるものばかりでなしに、もつと手近なものに彼の眼を向けさせた。

『俺はかうしちやゐられない。』

さう思つて、淺間な山の中の寂しさ不自由さに突き當る度に、半藏は自分の周圍を見廻した。この街道に荷物を運搬する牛方仲間のやうな、最下層にあるものの動きを見つけるやうになつたのも、その彼の眼だ。

『おい、皆の牛方衆――中津川の荷物がさつぱり來ないが、どうしたい。』

『當分休みよなし。』

「とぼけるなよ。」

「俺が何を知らすか。當分の間、角十の荷物を附け出すなと言つて、仲間のものから差留が來た。俺は一向知らんが、仲間のことだから、どうもよんどころない。」

「困りものだなあ。荷物を附け出さなかつたら、お前達はどうして食ふんだ。牛行司に逢つたらよくさう言つて呉れ。」

往來の眞ン中で、尋ねるものは問屋の九太夫、答へるものは峠の牛方だ。

最初、半藏にはこの事件の眞相がはつきり摑めなかつた。今まで入荷出荷とも附送りを取扱つて來た中津川の問屋角十に對抗して、牛方仲間が團結し、荷物の附け出しを拒んだことは彼にも分つた。角十の主人、角屋十兵衛が中津川からやつて來て、伏見屋の金兵衛にその仲裁を頼んだことも分つた。事件の當事者なる角十と、峠の牛行司二人の間に立つて、六十歳の金兵衛が調停者として起つたことも分つた。双方示談の上、牛馬共に今迄通りの出入りをするやうに、それにはよく双方の不都合を問ひたださうといふのが金兵衛の意思らしいことも分つた。西は新茶屋から東は櫻澤まで、木曾路の荷物は馬ばかりでなく、牛の背で街道を運搬されてゐたので。

駄賃、送り荷の書き替へ、駄賃の上刎ね——驛路時代の問屋の弊害はそんなところに潜んでゐた。角十ではそれがはなはだしかつたのだ。その年の八月、小草山の口明けの日から三日に亙つて、金兵衛は毎日のやうに双方の間に立つて調停を試みたが、紛爭は解けそうもない。中津川からは角十側の人が來る。峠からは牛行司の利三郎、同じく桂治、それに十二兼村の牛方までが、呼び寄せられる。峠の組頭、平助は見るに見かねて、この紛爭の中へ飛び込んで來たが、それでも埒は明きさうもない。

半藏が本陣の門を出て峠の方まで歩き廻りに行つた時のことだ。崖に添うた村の裏道には、村民の使用する清い飲料水が樋をつたつて溢れるやうに流れて來てゐる。そこは半藏の好きな道だ。その邊には好い樹蔭があつたからで、途中で彼

は峠の方からやつて來る牛方の一人に行き逢つた。

『お前達もなか〳〵遣るねえ。』

『半藏さま。お前さまも聞かつせいたかい。』

『どうも牛方衆は苦手だなんて、平助さんなぞはさう言つてるぜ。』

『冗談でせう。』

その時、半藏は峠の組頭から聞いた言葉を思ひ出した。いづれ中津川からも人が出張してゐるから、篤と評議の上、隨分一札も入れさせ、今後無理非道のないやうに取り扱ひたい、それが平助を通して聞いた金兵衛の言葉であることを思ひ出した。

『まあ、そこへ腰を掛けろよ。場合によつては、吾家の阿父に話してやつてもいい。』

牛方は杉の根元にあつた古い切株を半藏に讓り、自分はその邊の樹陰にしやがんで、路傍の草をむしり〳〵語り出した。

『この事件は、お前さま、昨日や今日に始まつたことぢやあらすか。角十のやうな問屋は斷りたい。もつと他の問屋に頼みたい、そのことはもう四五年も前から、下街道の問屋でも今渡の問屋仲間でも、荷主まで一緒になつて、みんな申し合せをしたことよなし。ところが今度といふ今度、角十の遣り方がいかにも不實だ、さう言つて峠の牛行司が二人とも怒つてしまつたもんだで、それからこんなことに成りましたわい。伏見屋の旦那の量見ぢや、「俺が出たら」と思はつせるか知らんが、この事件がお前さま、さうやす〳〵と片付けられすか。そりや峠の牛方仲間は言ふまでもないこと、宮の越の彌治衞門に彌吉から、水上村の牛方や、山田村の牛方まで、その他アンコ馬まで申し合せをしたことですで。まあ、見てゐさつせれ——牛方もなか〳〵粘りますぞ。一體、角十は他の問屋よりも強慾すぎるわなし。それがそも〳〵事の起りですで。』

半蔵はいろ／＼にしてこの牛方事件を知ることに努めた。彼が手に入れた「牛方より申し出の箇條」は次のやうなものであつた。

一、これまで駄賃の儀、すべて送り状は包み隠し、控への付にて駄賃等書き込みにして、別に送り状を認め荷主方へ送附のこと多く、右にては一同掛念止み申さず。今後は有體に、實意になし、送り状も御見せ下さるほど萬事親切に御取計ひ下さらば、一同安心致すべきこと。

一、牛方共のうち、平生心安き者は荷物もよく、又駄賃等も御贔屓あり。しかるに向きに合はぬ牛方、並に丸總屋出入りの牛方共には格別不取扱ひにて、有合せし荷物も早速には御渡しなく、願ひ奉る上ならでは附送りの方に御廻し下さらず、是も御出入り牛同樣に不憫を加へ、荷物も早速御出し下さるやう御取計ひありたきこと。(尤も、寄せ荷物なき時は據なく、その節はいづれなりとも御取計ひありたし。)

一、大豆賣買、並に駄賃のこと、一駄規定の利分をとり、その餘は牛方共に駄賃として下されたきこと。

一、運上は、一駄何程と御定めもあることなれば、その餘は牛方共へ殘らず駄賃に下さるやう、今後御取極めありたきこと。

一、通し送り荷駄賃、名古屋より福島までの運上引去り、その餘は御刎ねなく駄賃に下されたきこと。

一、荷物送り出しの節、心安き牛方にても、初めて參り候牛方にても、同樣に御取扱ひ下され、すべて今渡の問屋同樣に、依估贔屓なきやう願ひたきこと。

一、敗金荷物の儀は、銘々の了簡にあることなれば、此段は思召しに御取扱ひ下されたし。この儀は一言も申し上げず

一、すべて荷物、問屋に長く留め置き候ては、荷主催促に及び、はなはだ牛方にて迷惑難澁仕り候間、早速附送り方、御取計ひ下され候やう願ひたきこと。

一、このたび組定とりきめ候上は、双方堅く相守り申すべく、萬一問屋無理非道の儀を取計ひ候はゞ、その節は牛方共に於いて問屋を替へ候とも苦しからざるやう、その段御引合ひ下されたく候こと。

これは調停者の立ち場から書かれたもので、牛方仲間がこの箇條書をそつくり認めるか、どうかは、峠の牛行司でも何とも言へないとのことであつた。果して、水上村から強い抗議が出た。八月十日の夜、峠の牛方仲間のものが伏見屋へ見えての話に、右の書付を一同に讀み聞かせたところ、少々腑に落ちないところもあるから、いづれ仲間共で別の案文を認めた上のことにしたい、それまで右の證文は二人の牛行司の手に預かつて置くといふやうなことで、またく〵交渉は行き惱んだらしい。

ちやうど、中津川の醫者で、半藏が舊い師匠にあたる宮川寛齋が桝田屋の病人を見に馬籠へ頼まれて來た。この寛齋からも、半藏は牛方事件の成り行きを聞くことが出來た。牛方仲間に言はせると、兎角角十の取扱ひ方には依估贔屓があつて、駄賃書込み等の態度は不都合もはなはだしい、このまま双方得心といふことにはどうしても行きかねる、今一應仲間のもので相談の上、伏見屋まで挨拶しようといふ意向であるらしい。牛方仲間は從順ではあつたが、決して屈してはゐなかつた。

到頭、この紛爭は八月の六日から二十五日まで續いた。長引けば長引くほど、事件は牛方の側に有利に展開した。下海道の荷主が六七人も角十を訪れて、峠の牛方と同じやうなことは何も言はないで、今まで世話になつた禮を述べ、荷物問屋のことは他の新問屋へ依頼すると言つて、御辭儀をしてさつさと歸つて行つた時は、角屋十兵衞も呆氣に取られたといふ。その翌日には、六人の瀬戸物商人が中津川へ出張して來て、新規の問屋を立てることに談判を運んでしまつた。

中津川の和泉屋は、半藏から言へば親しい學友蜂谷香藏の家である。その和泉屋が角十に替つて問屋を引受けるまでも半藏に取つては不思議な緣故のやうに思はれた。揉みに揉んだこの事件が結局半方の勝利に歸したことは、半藏にいろいろなことを考へさせた。新しい機運は遠方からでなしに、むしろ彼の足許から——そんな最下層にあるものの方から動いて來てゐた。唯、彼等、名も無い民は、それを意識しなかつたまでだ。

六

『御免下さい。』

馬籠の本陣の入口には、作を一人連れた訪問の客があつた。

『妻籠からお客さまが見えたぞなし。』

といふ下女の聲を聞きつけて、お民は奥から圍爐裏ばたへ飛んで出て來て見た。兄の壽平次だ。

『まあ、兄さん、よくお出掛けでしたねえ。』

とお民は言つて、奥にゐる姑のおまんにも、店座敷にゐる半藏にもそれと知らせた。廣い圍爐裏ばたは、臺所でもあり、食堂でもあり、懇意なものの應接間でもある。山家らしい焚火で煤けた高い屋根の下、黑光りのするほど古い太い柱の側で、やがて主客の挨拶があつた。

『これさ。そんなとこに腰掛けてゐないで、草鞋でもおぬぎよ。』

おまんは本陣の『姉さま』らしい調子で、壽平次の供をして來た男にまで聲を掛けた。二里ばかりある隣宿からの訪問者でも、供を連れて山路を踏んで來るのが當時の風習であつた。ちやうど、木曾路は山の中に多い栗の落ちる頃で、妻籠から馬籠までの道は樂しかつたと、供の男はそんなことをおまんにもお民にも語つて見せた。

間もなくお民は明るい仲の間を片付けて、秋らしい西の方の空の見えるところに席をつくつた。馬籠と妻籠の兩本陣の間には、宿場の連絡をとる上から言つても絶えず往來がある。半藏が父の代理として木曾福島の役所へ出張する折などは必ず壽平治の家を訪れる。その日は半藏もめづらしくゆつくりやつて來て呉れた壽平治を自分の家に迎へたわけだ。

『先づ、わたしの失敗話から。』

と壽平治が言ひ出した。

お民は仲の間と囲爐裏ばたの間を往つたり來たりして、茶道具なぞをそこへ持ち運んで來た。その時、壽平治は言葉をついで、

『ほら、この前、お訪ねした日ですねえ。あの歸りに、藤藏さんの家の上道を熊野へ出ましたよ。いろ〳〵な細い道があつて、自分ながらすこし迷つたかと思ひますね。それから林の中の道を廻つて、下り坂の半藏さんの家の前へ出ました。狸にでも化かされたやうに、ぼんやり妻籠へ歸つたのが八つ時頃でしたさ。』

半藏もお民も笑ひ出した。

壽平治はお民と二人ぎりの兄妹で、その年の正月に漸く二十五歳厄除けのお日待を祝つたほどの年頃である。先代が木曾福島へ出張中に病死してからは、早く妻籠の本陣の若主人となつただけに、年齢の割合にはふけて見え、口のききやうも大人びてゐた。彼は背の低い男で、肩の幅で着てゐた。一つ上の半藏とそこへ對ひ合つたところは、どつちが年長か分らないくらゐに見えた。年頃から言つても、二人は好い話相手であつた。

『時に、半藏さん、今日はめづらしい話を持つて來ました。』と壽平治は眼をかがやかして言つた。『どうもこの話は、ただぢや話せない。』

『兄さんも、勿體をつけること。』とお民は側に聞いてゐて笑つた。

『お民、まあ何でもいいから、お父さんやお母さんを呼んで來てお呉れ。』
『兄さん、お喜佐さんも呼んで來ませうか。あの人も今、家にゐますから。』
『それがいい、この話はみんなに聞かせたい。』

『大笑ひ。大笑ひ。』

吉左衞門はちやうど屋外(そと)から歸つて來て、先づ半藏の口から壽平治の失敗話といふのを聞いた。
『お父さん、壽平治さんは雛野から下り坂の方へ出たと言ふんですがね、どこの林をそんなに歩いたものでせう。』
『きつと梅屋林の中だぞ。壽平治さんも狸に化かされたか。そいつは大笑ひだ。』
『山の中らしいお話ですねえ。』
とおまんもそこへ來て言ひ添へた。その時、お喜佐も挨拶に來て、母の側にゐて、壽平治の話に耳を傾けた。
『兄さん、すこし待つて。』
お民は別の部屋に寢かして置いた乳吞兒を抱きに行つて來た。眼をさまして母親を探す兒の泣聲を聞きつけたからで。
『へえ、粂を見てやつて下さい。こんなに大きくなりました。』
『おお、これは好い女の兒だ。』
『壽平治さん、御覧なさい。もうよく笑ひますよ。女の兒は智慧のつくのも早いものですねえ。』
とおまんは言つて、お民に抱かれてゐる孫娘の頭を撫でて見せた。
その日、壽平治が持つて來た話といふは、供の男を連れて木曾路を通り過ぎようとしたある旅人が妻籠の本陣に泊り合

せたことから始まる。偶然にも、その客は妻籠本陣の定紋を見つけて、それが自分の定紋と同じであることを發見する。窠に木瓜がそれである。客は主人を呼びよせて物を尋ねようとする。そこへ壽平治が挨拶に出る。

客は定紋の暗合に奇異な思ひがすると言つて、まだこの外に替へ紋はないかと尋ねる。丸に三つ引がそれだと答へる。客はいよ〳〵不思議がつて、ここの本陣の先祖に相州の三浦から來たものはないかと尋ねる。答は、その通り。その先祖は青山監物とは言はなかつたか、とまた客が尋ねる。正にその通り。その時、客は思はず膝を打つて、さて〳〵世には不思議なこともあればあるものだといふ。さういふ自分は相州三浦に住む山上七郎左衞門といふものである。かねて自分の先祖のうちには、分家して青山監物と名のついた人があると聞いてゐる。その人が三浦から分れて、木曾の方へ移り住んだと聞いてゐる。して見ると、われ〳〵は親類である。その客の言葉は、壽平次に取つても深い驚きであつた。到頭、一夜の旅人と親類の盃までかはして、系圖の交換と再會の日とを約束して別れた。この奇遇のもとは、妻籠と馬籠の兩青山家に共通な窠に木瓜と、丸に三つ引の二つの定紋からであつた。それから系圖を交換して見ると、二つに割つた竹を合せたやうで、妻籠の本陣なぞに傳はらなかつた祖先が青山監物以前にまだ〳〵遠く續いてゐるといふ。

『これにはわたしも驚かされましたねえ。自分等の先祖が相州の三浦から來たことは聞いてゐましたがね、そんな古い家がまだ立派に續いてゐるとは思ひませんでしたねえ。』と壽平治が言ひ添へて見せた。

『ハーン。』吉左衞門は大きな聲を出して唸つた。

『壽平治さん、吾家のこともそのお客に話して見れましたか。』と半藏が言つた。

『話したとも。青山監物に二人の子があつて、兄が妻籠の代官をつとめたし、弟は馬籠の代官をつとめたと話して置いたさ。』

何百年となく續いて來た青山の家には、もつと遠い先祖があり、もつと古い歷史があつた。しかも、それがまだまだ立

話に生きてゐた。おまん、お民、お粂、そこに集まつてゐる女達も皆何かなしに不思議な思ひに打たれて、壽平次の話を見まもつてゐた。

「その山上さんとやらは、どんな人柄のお客さんでしたかい。」とおまんが壽平治にきいた。

「なか／＼立派な人でしたよ。なんでも話の様子では、よほど古い家らしい。相州の方へ歸ると直ぐ系圖と一緒に手紙を呉れましてね、是非一度訪ねて來て呉れと言つてよこしましたよ。」

「お民、店座敷へ行つて、わたしの机の上にある筆と紙を持つといで。」半藏は妻に言ひつけて置いて、更に壽平治の方を見て言つた。「もう一度、その山上といふ人の住所を言つて見て呉れませんか。忘れないやうに、書いて置きたいと思ふから。」

半藏は紙をひろげて、まだ若々しくはあるが見事な筆で、壽平治の言ふ通りを寫し取つた。

相州三浦、横須賀在、公郷村

山上七郎左衛門

「壽平次さん。」と半藏は更に言葉をつづけた。「それで君は——」

「だからさ。半藏さんと二人で、一つその相州三浦を訪ねて見たらと思ふのさ。」

「訪ねて行つて見るか。えらい話になつて來た。」

「實は君に相談しようと思つて、今日はわざ／＼かうしてやつて來たところさ。」

しばらく沈默が續いた。

「山上の方の系圖も、持つて來て見せて下さると好かつた。」

「後から届けますよ。あれで見ると、青山の家は山上から分れる。山上は三浦家から出てゐますね。つまりわたしたちの

遠い祖先は鎌倉時代に活動した三浦一族の直系らしい。

『相州三浦の意味もそれで讀める。』と吉左衞門は言葉を挿んだ。

『壽平次さん、もし相州の方へ出掛けるとすれば、君は何時頃のつもりなんですか。』

『十一月の半ばあたりはどうでせう。』

『そいつは俺も至極賛成だねえ。』と吉左衞門も言ひ出した。『半藏も思ひ立つて出掛けて行つて來るがいいぞ。江戸も見て來るがいい――つひでに、日光あたりへも參詣して來るがいい。』

その晩、おまんは妻籠から來た供の男だけを歸らせて、壽平次を引きとめた。半藏は店座敷の方へ壽平次を誘つて、昔風な行燈のかげで遲くまで話した。青山氏系圖として馬籠の本陣に傳はつたものをもそこへ取出して來て、二人でひろげて見た。その中にはこの馬籠の村の開拓者であるといふ祖先青山道齋のことも書いてあり、家中女子ばかりになつた時代に妻籠の本陣から後見に來た百助といふやうな隱居のことも書いてある。道齋から見れば、半藏は十七代目の子孫にあたつた。その晩は半藏は壽平次と枕を並べて寢たが、父から許された旅のことなぞが胸に滿ちて、よく眠られなかつた。

偶然にも、半藏が江戸から横須賀の海の方まで出て行つて見る思ひがけない機會はこんな風にして惠まれた。翌日、まだ朝のうちに、お民は萬福寺の墓地の方へ壽平治と半藏を誘つた。壽平治は久しぶりで墓參りをして行きたいと言ひ出したからで。お民が夫と共に看病に心を碎いたあの祖母さんも最早そこに長く眠つてゐるからで。

半藏と壽平治とは一歩先に出た。二人は本陣の裏木戸から、隣家の伏見屋の酒藏について、暗いほど茂つた苦竹と淡竹の藪の横へ出た。寺の方へ通ふ靜かな裏道がそこにある。途中で二人はお民を待ち合せたが、煙の立つ線香や菊の花なぞ

を家から用意して來たお民と、お粂を背中にのせた下女とが細い流れを渡つて、田圃の間の寺道を踏んで來るのが見えた。

小山の上に立つ萬福寺は村の裏側から淺い谷一つ隔てたところにある。墓地はその小山に添うて山門を見上げるやうな傾斜の位置にある。そこまで行くと、墓地の境内もよく整理されてゐて、以前の住職の時代とは大違ひになつた。村の子供を集めてちひさく寺小屋をはじめてゐる松雲和尚の許へは、本陣へ通學することを遠慮するやうな髮結の娘や、大工の伜なぞが手習草紙を抱いて、毎日通つて來てゐる筈だ。隱れたところに働く和尚の心は墓地の掃除にまでよく行き屆いてゐた。半藏はその邊に立てかけてある竹箒を執つて、古い墓石の竝んだ前を掃かうとしたが、僅かに落ち散つてゐる赤ちやけた杉の古葉を取り捨てるぐらゐで用は足りた。和尚の心づかひと見えて、その邊の草までよく芟らせてあつた。すべて淸い。

やがて壽平治もお民も亡くなつた隱居の墓の前に集まつた。

『兄さん、おばあさんの名は生きてる時分からおぢいさんと竝べて刻んであつたんですよ。たゞそれが赤くしてあつたんですよ。』

とお民は言つて、下女の背中にゐるお粂の方をも顧みて、

『御覽、ののさんだよ。』

と言つて見せた。

古く苔蒸した先祖の墓石は中央の位置に高く立つてゐた。何百年の雨にうたれ風にもまれて來たその石の面には、萬福寺殿昌屋常久禪定門の文字が讀まれる。靑山道齋がそこに眠つてゐた。あだかも、自分で開拓した山村の發展と古い街道の運命とを長い眼でそこに眺め暮して來たかのやうに。

壽平次は半藏に言つた。

『いかにも昔の人のお墓らしいねえ。』

『この戒名は萬福寺を建立した紀念でせう。まだこの外にも、村の年寄の集まるところがなくちや寂しからうと言つて、藥師堂を建てたのもこの先祖ださうですよ。』

二人の話は盡きなかつた。

裏側から見える村の眺望は、その菜場の前の位置から、杉の木立の間に展けてゐた。半藏は壽平次と一緒に青い杉の葉のにほひを嗅ぎながら、しばらくそこに立つて眺めた。さういふ彼自身の内部には、父から許された旅のことを考へて見たばかりでも、最早別の心持が湧き上つて來てた。その心持から、彼は住み慣れた山の中をいくらかでも離れて見るやうにして、あそこに柿の梢がある、ここに白い壁があると、壽平治に指して言つて見せた。惠那山の麓に隱れてゐる村の眺望は、妻籠から來て見る壽平治をも飽きさせなかつた。

『壽平治さん、旅に出る前にもう一度ぐらゐ逢へませうか。』

『いろ／＼な打ち合せは手紙でも出來ませう。』

『なんだかわたしは夢のやうな氣がする。』

こんな言葉をかはして置いて、その日の午後に壽平治は妻籠をさして歸つて行つた。

長いこと見聞の寡いことを嘆き、自分の固陋を嘆いてゐた半藏の若い生命も、漸く一歩踏み出して見る機會を捉えた。その時になつて見ると、江戸は大地震後一年目の復興最中である。そこには國學者としての平田鐵胤もゐる。鐵胤は篤胤大人の相續者である。かねて平田篤胤歿後の門人に加はることを志してゐた半藏には、これは得がたい機會でもある。のみならず、横須賀海岸の公鄕村とは、黒船上陸の地點から遠くないところとも聞く。半藏の胸は踴つた。

――第二章をはり、次回は來る新年號に(この稿、年四回――正月、四月、七月、十月に亙り本誌に分載の筈)――

附記――『店座敷』とは『表座敷』の意。店といふ言葉は商家にのみ用ゐられたのではなく、單に表といふ意味で、一般の家庭にも廣く用ゐられた時代があつたと考へていい。



三人法師

谷崎潤一郎

世に「三人法師」と云ふ物語がある。いつの時代の誰の作かは明かでない。萬治二年の版があるさうだが、作者はこれを國史叢書の中に收めてある活字版で讀んだ。さしたる名文と云ふのではなく、たどたどしい稚拙な書き方であるけれども、南北朝頃の世相が窺はれる上に、第一の法師から、第二、第三の法師になるほど話が複雜で面白く、組み立てもまとまつてゐるし、哀愁の心が全篇を貫いてゐるところは文學的に相當の價値を認めていい。ちやうど秋の夜の讀み物には適してゐると思つたので、くどい所や假名書きのために分らない所は省略もしたし、多少は手を入れたが、大體原文の意を辿つて成るたけ忠實に現代語に直してみた。もしいくらかでも古い和文の文脈と調子とを傳へることに成效したら作者としては滿足である。

上

高野の山へ集まつて來たからにはどうせ世をいとふ人人ではありながら、同じ厭

願の願ひを遂げるにも座禪入定の法もあれば念佛三昧の道もある。山はひろいので思ひ思ひの半出家たちが彼方此方に宿を求め、めいめい已れの性にかなつた教へについて行を修めてゐるのであるが、或る晩さう云ふ人たちが或る宿房へ寄り合つた時だつた。一人の僧が、見わたしたところ、われわれはみんな半出家ですが、いづれも遁世なされたのにはそれぞれの仔細があることでせう、座禪をするのも悪くはありませんけれど、懺悔の徳も罪をほろぼすと云ひますから、今夜は一つ皆の衆で懺悔物語をしてはどうですかと云ひ出して、それをしほにいろいろな若い頃の思ひ出話が一座のおひだにはずんだ折。年頃は四十二三でもあらうか、ほころびだらけの衣を着て難行苦行に見るかげもなく、瘦せおとろへてゐるものの、鐵漿をふかぶかとつけて何處かに尋常な佛のある僧の、さつきから隅の方に引つ込んでじつと考へ込んでゐたのが、ふと、ではわたしの身の上を聞いて下さいますかと云つて、しんみりした口調で語り始めた。——

都のことは定めし方方も御存知でせうが、わたしはもと、尊氏將軍のおん時に、糟屋の四郎左衞門と申して近侍に召し使はれてゐまして、十三の年から御所へ參り、禮佛禮社、月見花見の御供にはづれたことはなく、まめに仕へてゐますうちに、或る年のことでした、二條殿へお成りになる御供に附いて行きましたら、折節朋輩共が寄り集まつて遊んでゐましたものと見え、わたしのところへも使ひをよこして、早く來ないかと云つて來ましたので、まだお歸りには間があるかしらと思ひながらお座敷の簾をのぞいて見ますと、ちやうど御酒が二三獻過ぎた時分らしく、一人の女房が引出物に、廣蓋の上へ小袖を載せて持つて出て來るところでしたが、その女房と云ふのが、二十にはならないほどのうら若さで、練衣の肌小袖に紅花緑葉の單衣をかさねて、くれなゐの袴を蹈んで、長い髮を振りかけてゐる姿の美しさ、染殿の妃、女御更衣と申してもきつと此れほどではあるまいと思はれて、おお、人間に生れたからには斯う云ふ人と言葉を交し、枕を並べたいものだが、それにしても今一度出で來てくれないものかしら、せめてもう一と目とつくり顏を見たいものだと思ひましたら、その時からあくがれ心地が胸をとざして、忘れようとしても忘れられず、うつつともない戀になつてしまひました。

それから宿へ歸つても上﨟の姿が眼の前を去らないので、食ふものも食はずに打ち伏したなり四五日のあひだも出仕しなかつたものですから、近頃精屋はどうしてゐるかと云ふお尋ねに、病氣のことを申し上げると、それなら藥師をつかはすから療治をするがいいと云ふ仰せがあつて、間もなく宿へ藥師が參りましたので、起き直つて、烏帽子直垂をつけて對面しましたところが、ちよつと脈を取つてみて、どうもおかしい、別に病氣があるやうでもない、何か人を恨んでもをられるか、又は大事な訴訟でも持つてをられはしないかと云ふのです。私はさあらぬ體を裝つて、子供の時からこんな工合にをりをり煩ふことがありますが、半月も養生すればいつも直つてしまひますから、今度も日數を待つてをりませう、何も大事なことなんぞ思つてはゐませんと云ひましたけれど、藥師は御前へ出て、あれは病氣とは覺えませぬ、身に大事を持つてゐる人か、さもなかつたら、昔ならまあ戀とでも云ふ煩ひでございませうと申し上げたと見えるのです。すると、戀なら今の世にだつてないことはあるまい、精屋の胸の内を探り出したいものだと云ふ將軍の仰せに、それなら佐佐木三郎左衞門が一番親しくしてをりますから、あれをおつかはしになりましたらと申し上げる者があつたりしまして、やがてその佐佐木が御前へ召されて仰せを受け、見舞ひにやつて來ましたが、わたしの寢てゐる枕もとへすわると、恨みを含んだ口ぶりで、日頃から朋輩の多い中でも兄弟のやうに契つてゐたものを、これほどの煩ひだつたらなぜ知らしてくれなかつたと云ひますので、なあに、心配をかけるやうないたつきではない、ただ一人ある母にさへ知らせないくらゐだから、お恨みは御尤もだけれども、惡く思つてくれては困る、此の上重くなるやうな時には御知らせするから、さうことごとしく云はないで歸つて下さい、私の身よりは御所の勤めが大切ではないかと云ひますと、まあ看病させてくれと云つて、四五日傍を離れないで、心の中を尋ねるのです、私も暫くは包み隱してゐましたが、あまり親切にしてくれますので有りのままを打ち明けましたら、佐佐木は聞いて、さては御分は戀をしてをられるのだな、それなら譯はないと云つて、御所へ參つて申し上げると、成るほどさうか、そんな事なら容易いことだと仰つしやつて、忝くも御所樣が御自身で御文をお書

きになり、佐佐木を御使にして二條殿へ申し送つて下さいました。ところが二條殿の御返事に、あれは尾上と申す女房ですから地下へ下す譯には行かないが、その男を此方へ寄越して下さいと云ふお文があつて、それを御所から私の宿へわざわざ屆けて下すつたのです。ほんたうに何と云ふ有り難いことか、その時の御所樣の御恩は報じやうもありませぬ。それにつけても浮世はあぢきないものだ。たとひ尾上殿に逢ふことが出來ても、わづか一と夜の夢のやうな情にあづかるのに過ぎないものを、今こそ遁世をする時だと、その折わたしはさう思ひながら、又考へ直してみますと、糟屋と云ふ男は二條殿の女房を戀ひ申し、將軍のお聲がかりでやうやう願ひがかなふやうになつたと思つたら、急に氣が臆して世を遁れたと云はれるのも生涯の恥だ。せめて一と夜逢ひさへしたら、それから後は兎も角もならうと思ひ定めて、或る晩のこと、別に際立つてどうと云ふ身じまひもしませんけれど、少しはなりふりに念を入れ、若黨を三人つれて、案内者を立てて、夜の更けた時分に二條殿の御所へ參りましたら、結構なお座敷を屏風や唐繪で飾つてある中に、同じ年頃の女房たちが五六人花やかに立ち出でてをられる所へ通されたのです。先づ御酒が出る、茶や、香や、さまざまの遊びが始まる。けれども孰れが尾上殿やら、何しろ一と目見ただけですし、いづれもいづれも美しい人ばかりですから、迷惑してゐますと、一人の方が聞し召した盃を持ちながら、私の傍へちかぢかと寄つて來られて、人一人をへだてゝ、おもひざしを賜はつたので、ああ、これが尾上殿だなと、はじめて合點してそのお盃を頂いたことでした。さて夜の明け方になつて、八聲の鳥の啼く音、寺寺の鐘のおとにきぬぎぬの別れを惜しみつつも、行くすゑ變らぬ約束をして、まだ暗いうちに女房は立つて行かれましたが、寢亂れ髪の隙から匂ふ艶なかほばせを見送つてゐますと、妻戸をあけて、縁へ出られて、

ならはずよたまにあひぬる人故に
今朝はおきつる袖のしらつゆ

と遊ばしたので、わたしも直ぐにお答へしました、

こひえてはおふ夜の袖の白露を
　　昔が形見につつみてぞおく

さう云ふことがあつてからは、始終御所へ參りましたが、時には忍んで私の宿へ入らせられることなどもあり、御苦労なことだと仰つしやつて、將軍からその女房へ、近江の國のうちで千石千貫の土地を差し上げたりなさいました。さうかうするうち、私はその時分北野の天神を信じてゐまして、毎月廿四日には參籠をするのが常でしたのに、その女房のために近頃とんと怠りがちになつてゐましたものですから、ちやうど十二月の廿四日のこと、歳の暮でもありますし、日頃の懈怠をお詫びしなければならないと思つて、お堂へ參つて、夜どほし念誦してゐますと、ほかにもお籠りをする人たちがあつて、話してゐるのを聞いてゐましたら、ああ可哀さうに、いつたい何處の人だらうと、さう云ふ言葉が耳に這入りましたので、ふつと氣にかかつて、何の話ですと尋ねてみると、たつた今しがた、都はかやうかやうの所に、年十七八ほどの女房を殺して、衣裳を剝ぎ取つた者があると云ふのです。聞くと私は胸騒ぎがして、氣になつて氣になつて、取る物も取り敢へず走つて行つて見たところが、やつぱり蟲が知らせた通りあの女房ではありませんか。それがむごたらしく殺された上に、何一つ殘らず、髮の毛までも切り取られてゐる有樣に、夢とも現ともわきまへかねて、ただぼんやりしてしまひました。まあ、ほんたうに、こんな憂き目を見ると云ふのは如何なる罪の報いかしら。逢ふのを嬉しいと思つたのが今では却つて恨めしくなり、先だつて行つた人のために何しに心を盡したことか、我れ故に君は、まだ二十にも足らない年頃を女房の身として邪見の劍にかかられるとは。その時の私の心の中をどうぞ思ひやつて下さい。どんな鬼神が向つて來ようと、又は五百騎三百騎の敵陣の中へ割つて這入らうと、思ふがままの働きをして捨てる命なら、露ほども惜しくはないと覺悟してゐた私ですけれど、知らない間に起つた事ではどうにも力が及びませなんだ。さう云ふ譯で、その夜のうちに髻を切つて僧となりましたが、それから此の御山に最早や二十年のとしつきと云ふもの、その女房の菩提を弔つてゐる

のです。

――さう語り終つたその僧は、はんくわい入道と呼ばれてゐる半出家であつたが、一座がしばらく今の話にしんと靜まり返つてゐたとき、やがて又一人の僧が前の方へにじり出た。見ると年は五十ぐらゐで、身の丈は六尺もあらうか、のどの骨が突び出し、おとがひが反り、頰が高く、唇が厚く、目鼻がすごく、顏の色が黑く、いかさま逞ましさうな體つきで、次ぎには私が話しませうと云ひながら、破れた布衣の袂のかげで大きな珠數をつまぐつてゐるので、さあ、では早速に願ひませうと皆が促すと、不思議なこともあればあるものです、その上﨟を、私が手にかけて殺したのですと云ふ言葉に、樊噲はきつとなつて眼の色を變へたが、此方は落ち着いて、まあまあ、これから委しく事の仔細を申しますから一と通り聞いて下さいと云ふ。そしてはんくわいが氣を押し鎭めて固唾(かたづ)を吞んでゐるのを見ながらおもむろに語り始めるのであつた。

中

都の方だつたら大方お聞きになつたことがあるでせう、わたしの名は三條の荒五郎と云つて、九つの年に盜みを始め、十三の年に人を斬り始め、その上﨟までに三百八十餘人の人を斬りましたので、夜討ち強盜を身についた能(のう)と心得てゐましたが、宿執因果の積り積つたせゐでせうか、今お話のあつた年の、何でも十月頃からでしたか、盜みをしても一向にうまい仕事がなく、山賊をしても獲物がなく、今度こそはと思つてかかつても見込みが外れることばかり。そのためにたいへん難澁しまして、朝夕のけぶりも立てかね、妻子の者もみじめなざまになりましたので、自然面白くないものですから、十一月頃からふつつり家へ寄りつかず、此處や彼處のお堂の庇(ひさし)、社の拜殿の床下などに夜を明かしては日を送つてゐたのでした。さうするうちに、或る晩のこと、あまり久しくなりましたから、さすがに家が案ぜられて歸つて來てみますと、妻なる女が袂をとらへてさめざめと泣きながら云ひますのに、そなたは何と云ふ恨めしい人だ、つれない人だ。夫婦の仲

がうまく行かないのは世にありがちのことだから、さうならさうで私もあきらめやうがある、もう緣がつき、心が變つたと云ふのだつたら、なんと怨ひ悲しんだところで無駄でせうから、どうぞ直ぐにも暇をください。かうして女の身一つで捨てておかれてはとても佗びしくてたまりませんし、それに、正月も近くなるのに、幼い者どもを何とか扶持してやらなければなりません。そなたは所領があるのでもなければ、あきなひも、農作もなさらず、ただ一向に人の物を取つていらしつたのが、今はそれさへも叶はなくなつたのに、子供の行く末も考へては下さらず、家を外にしていらつしやると云ふのはきつと私が厭になつたからなのでせう。それも仕方がありませんけれど、子供の消え死ぬのをはふつて置く法がありませうか。此の二三日は家ぢゆうの重寶も盡きてしまひ、あの幼い者どもがひもじいと云つて泣くのを見ては、どんなに辛い悲しい思ひをすることかと、さまざまに搔き口說きますので、いや、私だつて御前(ごぜ)たちを疎んじるのではないが、前世の因果が報いて來たのか、今度こそはと見込みをつけて懸る仕事がみんな外れてしまふものだから、何がな目ぼしい獲物はないかと此のあひだぢゆうから外を漁つて步いたために、つい家を留守にしてしまつたのだ。それでもお前たちの顏を見たいと思へばこそかうして戾つて來たではないか。何もやきもきすることはない、安心して待つてゐるがいい、けふあすにも必ず吉左右を聞かしてやるからと、さう云つて妻をなだめて、心のうちでは、今宵はどんなことがあつても逃(のが)すものかと覺悟をきめながら、日の暮れるのを待つてゐました。すると、やがて寺寺の鐘が鳴り、たそがれごろになりましたので、いつもの車と太刀を持つて出て、とある古い築地(ついぢ)のかげに身をひそめ、いかなる張良韓信が來ようともただ一と討ちに斬つてやらうと手に汗を握つてうかがつてゐますと、程なくそこへ腰取(註、屋根のなき輿の一種也)が一挺通りかかつて、若い者たちが、がやがやしやべりながら來ましたけれど、そんなものは仕樣がないのでやり過しました。それから又暫くたつて一丁ばかり上の方から、何とも云へない香が薫じて來ましたので、さあ、今度こそは餘程の人が來ると見える、我が身の運も盡きないのだと思つて、その時の嬉しさと云つたら、ぞくぞくしながら待ち構へてゐましたら、それが

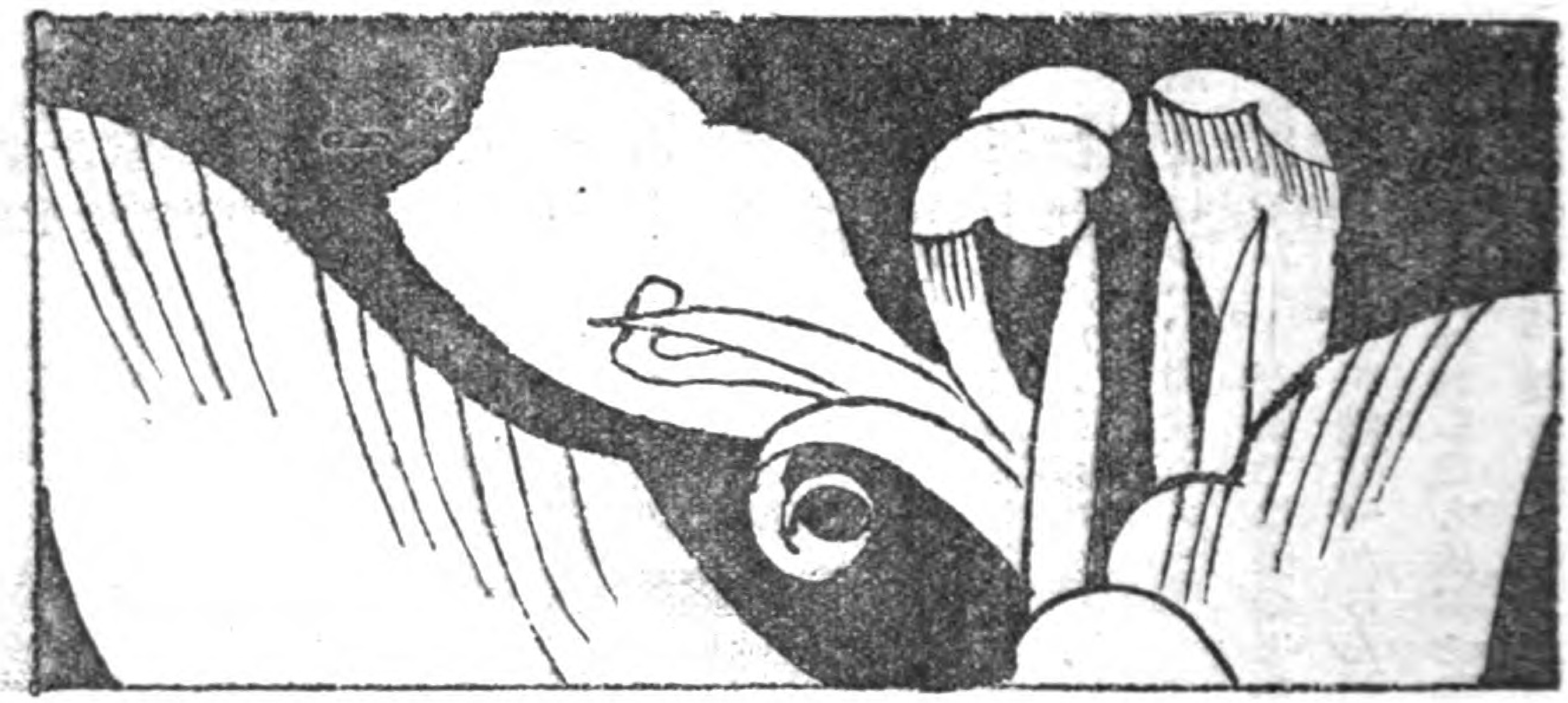
あたりもかがやく程の上﨟の、きらきらしい衣をさやさやと鳴らして通るのではありませんか。召し使ひの女を二人つれて、一人を先に立て、一人を後ろに、上刺袋を持たせて、私のゐるのを見ないやうにして通り過ぎようとなさるのを、わざとやり過しておいてから跡を追ひかけますと、前に立つてゐた女房はあれと云つたなり忽ち姿が見えなくなり、後ろにゐたのも袋を捨てて、助けてくれと云ふより早く逃げ失せてしまひましたけれど、その上﨟は別に騒がれるけしきもなく、聲もたてずにいらつしやるので、太刀をはきそばめて詰め寄つて行き、なさけ容赦もなく衣裳を剝ぎ取つて、しまひに肌小袖を取らうとしました時でした。まあ、なんとする、肌小袖ばかりは女の恥だから許して下さい。その代り此れを上げますからと仰つしやつて、おん守りを取つて投げ出されましたが、無道の者の悲しさには、なかなかそれを聽き入れようとも思ひませなんだ。いいえ、これだけでは叶ひませぬ、是非ともおん肌小袖を頂かせて下さいまし、と、さう云ひますと、肌着を脫がされては生きてゐられぬ、そのくらゐならいつそ命を取つてほしいと云ふ仰せに、よろしうございます、それこそ望むところですとお答へ申して、ただ一刀に刺し殺して、血を附けてはなりませんから慌てて小袖を剝ぎ取りました。それからほつと一と息して、さつき召し使ひが捨てて行つた袋を拾つて、やれやれ、これだけあつたら女子供も嘸かしよろこぶことだらうと獨りごとを云ひながら、急いで我が家へ立ち歸つて表の戶をたたきますと、こんなに早く戾つて來たのは今夜も仕事がなかつたんですかと、中から妻が叱言を云ひますので、なんでもいいから戶を開けろと申して袋を內へ投げ込んでやりましたら、おや、いつの間に稼いだんですと云ひ云ひ、袋の口をあけるのも遲しと連鎖の紐緒を引きちぎつたところが、それはそれはおびただしい異香が薫じて、出て來たのは十二單衣の御裝束なんです。こうくわりよくえふのおん衣、くれなゐの袴、その一つ一つに滿ち滿ちてゐる匂ひと云ふものは、小路を行く人もあやしんで立ち止まり、隣りあたりの家までも花のやうにかをつたくらゐで、女子供の喜びかたと云つたら、申すまでもありません。妻は勿體なくも、おん肌着などと云ふものを見るのは生れてこのかた始めてですから、これほどの裝束を召していらつしやる方

だつたら、年もお若かつたでせう、いくつぐらゐに見えましたかと尋ねますので、やはり女は女同士、私のやうな者の妻でもやさしい心根はあるものよと思つて、夜目に見たのだからはつきりしないが、よもやまだ二十二三にはおなりになるまい、十八九ぐらゐな方だつたと申しますと、きつとさうですねと云つたなり物をも云はずに外へ飛び出して行くのです。何の用事で出かけたのかしら、と、さう思つてゐますうちに、程へてから歸つて來まして、まあ、呆れた、そなたは大名の氣でゐるんですか、とても罪を作る程なら少しでも得のあるやうにと心がけて下さればいゝものを、わたしは現在屍骸の傍へ行つて、髪を切り取つて來たんです。こんなにふさふさしてゐるから鬘にひねつたらどんなに見事になるでせう、常日頃から髪がうすくつて困つてゐましたのに、ほんたうにいゝものが手に入りました、小袖どころではありませんと云つて、茶碗に湯をうめてその髪を振りそゝぎ、竿にかけて乾したりして、踊り跳ねてうれしがるのでした。私はその女の有樣をつくづくと見るにつけ、あゝ、淺ましい、前世に佛法の結縁があればこそ人とも生れたのだらうが、たまたま人間を受けた時に佛の道を修行して善人とまではならなくとも、せめて世の中の情をでも知つてゐることか、こんな大惡人になつて、夜晝思ふことは人を殺し物を盜む巧みより外にはなく、つひには因果が廻つて來て無間地獄へ墮ちるのは分つてゐるのに、惡業を作つては露の命をつなぎ、夢を夢とも知らないと云ふのは我が身ながらあいそが盡きる。そればかりでなく、妻なる女の心の中の無慈悲なことはどうであらう、かう云ふ女と枕を並べて契りを結んでゐたかと思へば返す返すも口惜しい、どれほど恐ろしい女の了見かと氣がつきましたら、あゝ、飛んだことをしてしまつた、何しにあの上﨟を殺したのか、お痛はしいことをしたものだと、消えも入りたい心地でしたが、いやいや、ただ歎いてゐる場合ではない、これを菩提の善智識として髪を切り、あの上﨟のおん跡を弔はう、そして我が身の菩提をも願はうと、急に決心がつきましたので、その夜のうちに一條北小路へ行きまして玄惠法印の御弟子になり、名を玄竹と附けていただいて、間もなく此の御山へ上つたと云ふ譯なのです。

――さあ、一分始終は唯今申し上げた通りですがと、その僧ははんくわいの方を向いて、さぞさぞ無念に思し召すでせう、いかやうにも愚僧を殺して下さいまし、身をずたずたに斬つて下すつても更にお恨みとは思ひませぬ、ただし愚僧をお斬りになつたら、あの上臈のおん爲めには却つて業因をお作りになるやうなものかと思ひます、命が惜しくてかやうなことの申すのではないことは、三寶も御覧になつていらつしやるでせう、兎に角申して上げてしまつたからには、どうなりともお計らひにお任せします、と、さう云つて衣の袖をしぼるのであつた。その時糟屋の入道が云ふのに、たとひ尋常の發心であつても互ひにかう云ふ姿になつて何の憎しみがありませう、ましてあの人故の御發心と聞きましては、殊更おなつかしい氣がいたします、今こそ思ひあたりましたが、あの人は菩薩の化身なのです、あゝ云ふ女人の姿に顯はれて無緣のわれらを救つて下さる大慈大悲の御方便かと思ひましたら、ひとしほあの頃のことが忘れがたく覺えます、あんなことでもなかつたらどうして私たちは浮世をいとひ、無爲の樂しみを享けるのは煩ひの中のよろこびであると云ふ道理を悟ることが出來ませう、今日より後はきつと御同心いたします、返す返すも嬉しう存じます、と、これもさう云つて墨染の袖を濕らすのであつた。

さてもう一人の僧を促がして、發心の由來を承はりたいと云ふと、やはり年老いた入道で、衣の破れたのに七條の袈裟をかけて看經してゐたが、道行に痩せて顏の色は黑く、哀れなさまをしてゐるものゝ、さすがに由緒ある人の果てなのであらう、まことの道者らしい風采で、こくりこくり居眠りをしてゐたのを、「今度はあなたにお願ひします」と云つて搖り起して責めると、かたがたの御發心の模樣を伺ひますのに、何とも申しやうもありませぬ、前世の宿執かと思はれます。私の遁世はそれほどの仔細がある譯ではなく、お話し申しても格別面白くはありませんが、二人の方がお話しになつたのに私一人が申し上げないのも失禮ですから、工夫の暇が惜しいと思ひますけれど、委細を聞いて頂きませうと云ひながら、しづかに下のやうに語り出した。――

（次號完結）



能率委員會

徳永直

一

「アララララッ……」

K印刷工場構内の、中間通路を、輪轉機室へ原紙を運搬するトロが、弾みをつけてすつ飛んで來た。タヽキのトロ路は辷りがよく、況して歸りの空トロである。

「アの阿魔ッちよ共を、仰向にひつくりかへしてやるかな……」

若い雜夫は、十間ばかり向ふに、かたまつてゐる女工達を見ると、急に威勢が出た。

「アララララッ……」

十人あまりの、若い女工達は、「ザツ選り」の仕事を抛つたらかして、いま紙飛び

をやつてゐる……。
「ヨツチヨイ、ヨツチヨイ、三度目の夜道……」
彼女達は、各自にゲラ(組版を入れる箱)をトロ道の傍に置きつ放したまま、すつかり夢中になつてゐるのだ……。
だんだん繩が急速に廻轉するにつれて、彼女達は息を彈ませながら、飛鳥のやうに跳ねあがる……。
「あラツ、あぶないッ」
すぐ足許に、トロが突進して來た。背後向に繩のはしを廻してゐる女が氣が注いて、金切聲で叫びながら、眞中に抱き合つて押し閙まつてゐる女達の、胴や、足や、赤い腰卷まで、繩にひつかけたまま、引摺つて逃げ出した。
「きやつ……」
逃げおくれた女の二三人が、トロのレールに躓いて、俯向けに轉ろんだ。
「まーあ、ひどいッ」
トロは豫定のやうに、際どいところで急停車した。
「なんて……なんて……」
女達はびつくりしておき上りながら、言葉を塞らせてゐるのを、若い雜夫はすぐおつかぶせた。
「氣を付けろい、間拔めッ」
と怒鳴つた——が眼では笑つてゐた。逆に劍突を喰つたので、彼女達は眞赤に怒つてしまつた。
「なんて、ひどい惡戯しやがるんだい、この赤ッ鼻……」
「赤ッ鼻」と云はれることは、この若い雜夫にとつては痛手である。眞ッ先に進み出た、作業服の胸に赤い工場協議員のマークを付けた、銀杏返しの女は、その效目をよく知つてゐた。

「ほらッ、見とくれ、こんなに血が出てるぢやないかッ」

跛ひきひき起き上つた、羽織の上から前垂を締めた肥つちよが、摺り剝いた膝小僧を捲つて、雑夫の足許へ突き出した。

「この男は、いつもこんな悪戯するんだよ」

「そうよ。そうよ。」

「赤ッ鼻の田舎ッペ」

彼女達は、多勢を恃んで、雑夫をおつ取り捲いた。

「コン畜生ッ……」

縄のはしを持つてゐる眼玉の大きい娘が、ソッと背後へ廻ると、雑夫の頭を、縄で引ッぱたいた。

「オウッ、痛てえ——」

雑夫は、縮くれた掌で、頭部を抑へながら大袈裟に叫んだが、心の裡で、少し怒らせ過ぎたかナと考へて、ニヤニヤしてゐた。

「あやまんなさいッ」

「あやまれッ」

彼女達は、勝ち誇つて、澤山の手で、雑夫の肩を小突いた。雑夫はそんとき思ひ出したやうに、頓狂な聲で怒鳴つた。

「退け、退け、お前らみたいに、作業時間中に遊んでるから、「能率委員會」なんて出來るんだ。退け、退けッ」

彼女達は、一せいに笑ひ出した。

「能率委員會……、アハハハハ。」

彼女達が笑つてゐる間に、隙を見出したトロは威勢よく走り去つた。そして、彼女達の笑ひが止まらぬうちに、そのうちの一人が慌てて工場協議員のマークを付けた女の腕を引つ張つた。

「ちよいと君ちやん、おやぢ(職長)が、二階から覗いてるわよ。」

成程、眞上の工場窓から、禿頭のおやぢが夕立を喰つたとうがんのやうに、膨れたつらで睨んでゐた。

「いい加減で始めんかッ」

——はい、はい——彼女達はてれ氣味に、各自の仕事場に蹲んだ。

「おやぢめ、妾達を不良分子にして、毎日屋外追放で、こんな仕事ばかりやらせるんだもの、少し位サボるなア、あたりまへよ。ねえ君ちやん……」

膝小僧を摺り剝いた肥つちよが、銀杏返しの方に振り向いて云ふ。

「やけに、パタパタはたくぢやないの、ブツ……」

眼玉の大きい娘が、怒つて立上つた。一人がゲラごと煽ふるたんびに、塵埃がサツと頭髮へ舞ひ落ちる。

「でも君ちやん、ほんとに「能率委員會」が出來上つたら、こんな呑氣にやつてられないわね!?」

髮をちぢらした洋髮が、覗き込んで訊いたが、しかしお君は生返事である。彼女は彼女の戀人のことを考へてゐた。

「びくびくしなくつたつていいわよ。いざとなりや……」

お君に隣り合つてゐる肥つちよが、それを引取つた。彼女は、女に似合ぬ太い聲である。

「いざとなれば、S勞働組合の全力を擧げて闘ふんだ。レーニンは云つた……」

肥つちよは、益々の太い聲を出しながら、選り別けた活字を、一減箱にあける拍子に、ゲラをトンとはたいて

「吾々のレーニンは云つた。——得るものは全世界にして、失ふものは鐵鎖のみ……」

「騒々しいわね、このひとは……」

傍の、耳の少し遠い娘が、肥つちよの脇腹をつついた。

　晝でも夜で——も、部屋は暗い——。

お君が、頭髪を振つて唄ひ出した。他の女達も、一緒に聲を合せた。

　いつでも、鬼めが窓から覗く。

　のぞかうと、ままよ——お。

これは、彼女達が、おやぢに對する示威運動の一つである。

中間通路の兩側の、各科、工場の入口には、赤、黄、綠、色々のビラ、傳單が、何十枚となく貼られてあつた。「單一無産政黨を支持せよ」「日刊無新輪轉機購入基金募集」等等等。左側の第一から第四までの平版印刷室、同じく右側の第一から第四までの凸版室の各入口が、物々しい光景を描き出してゐた。

そして突き當りの、輪轉機印刷室のいかつい煉瓦建物の入口に、特に大きく「資本の攻勢に備へよ」と書いたのが貼られてある。まさしくこれは特異な光景であつた。

工場の家根にある窓から、午後の秋陽が流れ込んでゐて、高速度の輪轉機の廻轉と共に塵埃が、煙のやうに舞ひ上つてゐた。そしてその騒音の合間を縫つて、××歌が晴れ晴れしくひびいて來る。

告　示

來る×月××日、鑄造科第一工場に於て「能率委員會」を開催する。各科工場協議員は、同日作業終了後、同工場に參集せられたし。

庶務課

この告示の貼り出されてある輪轉機印刷室の掲示板の下には、七八人の男工達が、ゴロゴロしてゐた。彼等は交替時間

までまだ間があつた。

「われわれは……………」

黒、赤などのインクで汚れたスポーツシャツを着た、色の黒い若者が、卷取紙の上に跳び上つて、大きく手を振りながら、怒鳴り始めた。この虎公と云はれる男は、いま演説の稽古をするところだ。

しかし、他の男工達は、紙の上に寢そべつたり、腰掛けたりしたまま、可愛想に振向いても見れない。

「われ、われは………」

彼は、工場協議員であるところから、「能率委員會」では、一席喋べらなければならないのだ。彼は昨夜、組合の能率委員會對策協議會で、執行委員長の永井の演説を聞いて來たのである。

「われわれ……がどうした？」外ッ方向いたまま彌次る奴がある。

「われわれは工場管理權を要求するッ」

彼は、彼等の親愛なる闘士、眞柄眞吾張りで、右手を肩から股のところまで振下ろして一氣に云つて了つたが、すぐ次の言葉が發見からない………。

「が……しかし……」

漢語がうまく出て來ない。製版課の協議員に比べると彼等は漢語を數多く知らないのだ。永井の云つた言葉の意味はよく判つてゐるのだが——現在の狀勢に於て、工場管理權を獲得したところで仕方がない。勞働階級はその經營の技術に於て比較にならない。吾々はそれに代へると、工場協議會若くは能率委員會に於て、會社の資本主義的伸長性、營業上、若くは利益配當上の決定權を牽制しうるほどのものを握ることが肝要である——といふのだが…………。

「が、われわれが工場を……」

虎公は、右手を高くあげたまま眼を白黒にしてゐる。

「しつかりやれ、協議員」

腰掛てゐる年老つたのが煽てた。

「工場を貰つたところで、仕様がない……」

思ひ切つて、眼を瞑つた勢ひで虎公はたたきつけた。

「大きなこと云ふなッ」

寢そべつてる奴が、足許で怒鳴つたので、虎公はすつかり怒つてしまつた。他の男工達が一度に失笑した。

「おい虎公……」

其處へ、「父つちやん子供」みたいな勞働服が入つて來た。悪戯ではしつこさうなこの小柄な男は、熟く見ると卅位かとも思へる。

「一寸降りて來い！」

虎公はまだ膨れてゐた。件の男は虎公の胸を引ッ張つた。彼は工場聯絡係である。

「耳を貸せよ……」

工場外へ、つれ出した聯絡係は、足を爪立たせて、虎公の耳に囁いた。終ると虎公が云つた。

「糺察隊つて何だ？」

「いまいつた右翼の奴をよ……」

聯絡係は、鼬のやうに四邊を見廻してから「例へば、遠山のやうな奴をよ……行動を監視するんだ……」

「遠山を！？」

「さうだ、彼奴は過去に於てこそ、吾々の輝ける指導者だつたんだ。が今は奴はすつかり立ち止まつてゐる………」

聯絡係が、セカセカした調子で續けた。

「今は非常に危險な時機だぞ、いいか、吾々はS勞働組合の締付工場だと思つて安心しちや不可ない。會社は財界不況に尻をつつかれて狂犬みたいになつてゐるんだ。今度の「能率委員會」は二三の右翼のヘッポコ共をあて込んでうまくゆけば分裂を覘つてるんだ。其處で、この危險な時機に於て、遠山が反動となるかも知れないんだ」

虎公は默つて聽いてゐた。

「で……だ。お前の方の科で、そんな分子が幾人あるか、五時間内に、本部永井宛に知らして與れ、いいか「能率委員會」は必度決裂だぞ――」

「すると、爭議の準備か？」

「さうだ！　會社側の能率委員會提案は、爭議を覺悟しての提案だぞ」

××歌が、輪轉機の騷音に雜ぢつて流れて來た。

虎公は、吼えるやうに答へた。

「ようし、來い！！」

二

晩秋の朝空に、始業の電氣ベルが、鳴りひびいた。

二千の彼等は、元氣よく、南北の兩通用門から雪崩れ込んで來る。此の工場では、通用門のあたりの何處にも、守衛の姿は見られなかつた。

その代りに、組合のビラ撒きが、毎朝のやうに立つてゐて、赤や、黄やの紙片を撒き散らす。

「おい、おいッ、お前、このビラが眼に入らねえかッ」

慌てて素通りしやうとした奴が、呼び止められると、そそくさと、背後から押して來る職工達に突當りながら取つて逃す。

「讀まねえ——ホイ來た……」

ビラは、「能率委員會」に對する組合の態度を聲明してゐた。

——吾々は、故意に生産能率を低め、會社側をして、窮鼠の如き逆襲に出でしめる事は、敢て避けなければならない。此の意味に於て、吾々は會社側の提案「能率委員會」を或程度迄支持することを聲明する。——しかしだ。財界はいま大戰後の胃擴張から、急速に胃痙攣に進みつつある。吾々は全身の注意を「能率委員會」提案の背後に向けなければならぬ——。

彼等はビラを、ポケットに押し込み、女達は羽織の袖にしまひ込んで、工場に流れ込んだ。

男達は皆、一寸垢拔した勞働服を着て居り、女達は幾らか顏色に、血色をとり戻してゐた。それこそ彼等が、大正十三年の大爭議以來、彼等が自身の力に依つて獲得した賜であつた。

彼等は自分の力を知つてゐた。左翼勞働組合の揺籃の中にまる二年を訓練され、印刷産業勞働者一萬を擁するS勞働組合員として、彼等は二年間の過去に於て、まさしく天下の常勝軍であつた。

「いざ、起て友よ……」

彼等は晴れ晴れしく唄ひながら、工場入口のタイムレコードの前に殺倒する。巨大な電氣時計のライチングに、交互に出勤簿を差上げながら、唄聲が波のやうに擴がる。

「いざ、闘はん……」

モーターのベルトが羽ばたきを始め、各科十二工場は、瞬間に騒音の中に溺れて了ふが、元氣な唄聲は、合間合間を縫ふて流れるのだ。

それと反對に、この十二工場の中心に聳えてゐる三階建の事務所だけが、泥棒猫のやうに、ひそまり返り、息を凝らしてるかに見えた。

社長室に六人の洋服が居た。經理、營業、工務、庶務の各課長と、專務及び副社長。

大きな綠色の、社長用の安樂椅子の脊後に「生產高指數表」が、佛壇のお繪像のやうに懸けられてあつた。本年度上半期から、まるで、彈丸を喰らつた鳩のやうに、生產價額の赤線は、急角度に落下してゐるのに反して、賃銀青線はスタートを切つた飛行機のやうに跳ね上つてゐた。

六人の洋服の中で、副社長の瘦ぎすと、ずんぐりの赫ら顏に肥つてゐる專務とが、一等明瞭な對照をしてゐた。而も、それは外型ばかりでなく、現在の二人の立場も、それに酷似してゐた。

正午には、最後の方針を決めるべく、社長が來る筈である。有島副社長に與へられた最後の期間は、それだけである。「能率委員會」を、徹頭徹尾支持するところの、右翼の二三の分子、彼の勞資協調に贊成する分子を纏めて一勢力とすることが、彼の現在の立場を救ふ唯一の道であつた。

副社長と雖も、社長と僅かの姻戚關係だといふことを除けば、ホンの日傭人足にしか過ぎなかつた。この洋行歸りの坊つちやんの、頭の惡さと、氣弱さとは、過去二年間に於て、まだいくらか餘裕のあつた財界の、ちよつぴり殘された自由主義の脊景で、獨り善がりの勞資協調主義者となつてしまつてゐた。

それで專務に云はすれば、S勞働組合が、當會社にこれまで巢喰つてしまひ、會社がかかる悲境に陷ち込んでしまつた

ことも、一に、副社長の罪に在る、といふのである。

「どうです？　遠山を呼んで見ては？」

不眠症の青白い顔を、卓子の上に、兩手で支へて考へ込んでゐる副社長へ、專務が云つた。體驗主義で今日まで成上つた專務は、如何なる場合も、「實權は社長一人に在る」ことを忘れなかつた。

「儲かるうちは、社長だつて、例へ勞資協調が、共産主義だつて、文句は云ふまいが、サテ、今度ばかりは……」意地悪い眼で、副社長の横顔をチラと掠めながら、專務は心の裡で呟いてゐる。「お氣の毒だ……」

副社長は、卓子の上にある、今朝勞働組合で撒いたビラを拾ひ上げて弄くつてゐたが、それにも望みは薄かつた。彼は思ひ切つたやうに呼鈴を押した。

「第二製版工場の遠山を、階下の應接室へ呼んで呉れ」

顔を出した女給仕は、すぐ降りて行つた。副社長は、モウすつかり自信を失つてしまつた。勞資協調の地上の樂園は、彼の今日迄の必死の努力にも拘らず(彼はそう自惚れてゐる)足許から崩れ落ちやうとする。深夜業廢止も最低賃銀の制定も、工場協議會の設置も……樂園の肥料のために、彼の權力の許すかぎりを盡してみた筈であつたが、而も樂園の花達は、逆に棘の葉を持ち、劍の芽を萠いたのだ……。

眼先が眞暗になつて了つた。彼はこれ以上現在の椅子に止まることは不可能である。今これを救つて呉れるものは、唯一に「能率委員會」の成立一つである。が、然し、組合が急速に右傾でもしなければ到底望みはなかつた。

「遠山が來ました。」

ハッとした調子で、副社長は顔をあげた。遠山！　彼は幾らか明るい氣がした。そうだ、この男がウンとさへ云へば――この男と右翼分子を結びつけることが出來さへすれば必度能率委員會は成立する。そうだ！

副社長は立上ると階段を降りて行つた。――あの男は、最近、組合の仕事を抛つてゐる。あの男は左翼の連中と面白くない間柄になつてゐるといふのだ。

應接室の固い椅子に、作業服のままの、廿六七の鬚ッ面の男が、冴えない顔色で腰を下ろしてゐた。

「遠山君……」

副社長は、無理に笑顔を作つて、すぐ傍へ腰掛けた。

「能率委員會は、旨く成立しさうかね？」

遠山の顴骨の出ッ張つた九州人らしい鬚ッ面は、他の職工達に比べると、ひどく生氣がなかつた。

「さア、譯りませんね」

この職工は、ぶつきら棒に答へた。曾て十三年爭議の指導者として、從業員中に重きを爲したこの男を、元氣のいい若者達は、もう今日、すつかり立止まつてしまつた用のない指導者として、その屍の上を踏み越えて歩いてゐるのだ。

「何とか、君の力で、成立さして貰へないかね？」

辭の調子に哀願的な響きさへ持つて、副社長は覗き込んだ。若し此男が叛旗を翻せば！ 少くとも望みはあるのだ。

「僕が、君達の要求を支持して來たことは君は熟く知つてゐるだらう。ね、僕の今の立場は君も察しがつくだらう。ね」

先刻の女給仕がお茶を持つて來た。遠山は疲れ切つてゐるやうに、ぐつたりしてゐた。

「モウ、僕の云ふことなんか、皆がききませんよ。」

遠山は、何も彼もが臆劫であつた。

「それに第一、能率委員會の内容だつて、從業員にはホンの輪廓だけしか知らしてないぢやありませんか？」

副社長もそれきり默つてしまつた。遠山自身に組合の例へば永井達が、どんな腹でゐるか譯らぬやうに、副社長にだつ

て、原案が破れたならば、どの程まで懸引があるか、それは一切、社長と專務にだけしか分らなかつたのだ。

彼等は、お互ひが既に、勞資兩方の主流から遠ざけられてゐるのを自覺しなければならなかつた。遠山と副社長とは朽ち腐れた蛤殼よりも脆く、離れ別れた。

檢束、亂鬪、貧乏、投獄、逃亡、病氣……遠山は、モウ何も彼も厭であつた。小僧のときから習熟した勞働だけを、コツコツやつて、靜かな日が送りたい……。神經衰弱の焦立つ頭部を抑へて、彼は工場の廊下へ出た。

すると、つい眼前に、四五人の若いやつが彼の方を向いて立つてゐた。

彼は氣が注かなかつた。スツと通り拔けやうとする彼の左側から、突如、ドンと打つ衝かつた若い作業服があつた。

「ナニをしやがんだ。富公!?」

遠山は振返つて、この小生意氣な若僧を怒鳴りつけた。流石に面と向つて怒鳴られると富公は、笑止な顏で退ッ込んだ。

「おい、遠山君、今誰と合つて來た?」

見覺えのない、多分は組合書記かなんかの學生らしいのが、ヅッと彼の傍へ寄つて來た。

「なにい?」

遠山は、むつとした調子で睨みつけた。

「誰と會つて來たら、何うしやうつてんだ? てめえは一たい何だ?」

騷ぎが大きくならうとした。兩側の工場から、何も知らない連中が、ドヤドヤ出て來た。「どうしたんだ?」

「喧嘩は誰が相手だ?」

一しよくたになつちまつたので、尻も頭も譯らなくなつてしまつた。

「てめえら、永井の間諜だらう？　馬鹿野郎」

彼は、ぷりぷりしながら、工場へ入つてしまつた。

三

「能率委員會」を直前に控へて、××のクーデターが始まつた。

資本の攻勢に迎合せんとする廿人足らずの右翼分子が、工場近くの蕎麥屋の二階で、糺察隊に襲撃されて、蹴散らされた。もうらうアナキズムの一派が、組合脫退を聲明すると同時に、糺察隊に覘はれて、翌日から工場に顏を現はさなかつた。

糺察隊は、疾風のやうに、工場の塀外、長屋の隅々まで、荒れ狂つた。K印刷工場の周圍は、夜になつても、殺氣を含んでゐた。

「お止しなさいつてば………」

女は必死になつて、猛りたつ男の腕に縋つて離さない。

「馬鹿め………」

男は、女を剝ぎ離さうとするのだが、案外女の力が強かつた。

「俺を毆らうつてえのか……生意氣だ。糺察隊だなんて、離せッ」

男は、女の片手を突つ離したが、その拍子に下駄が辷つて脫けた。

「怒らないで、モウ少し話を聽きなさいよ」

女は前へ廻つて、下駄を拾つてやりながら男をベンチに押し据へた。

「あんた、どうしてそう怒りつぽくなつたんでせう………」

女も、息を切らしながら、男の横に坐つて云つた。

四邊は暗かつた。此邊は工場裏の空地にある小さい神社の境内であつた。女は、あの「どん底」を唄つてゐたお君であり、男はその戀人の遠山である。

「ぢや、俺が家を留守にしてゐたら、奴ら、俺が風を喰らつて逃げたとでも云ふんだらう………馬鹿な」

「そうすぐ感情的になるもんぢやないわよ」

お君は、飽迄落ち付いてゐた。

「馬鹿ッ、これが感情的にならずにゐられるかッ、間抜め」

女は慌てて、また立ち上らうとする男の腕を抑へて、

「大きな聲を出すのはお止しなさいよ。人が寄つて來るわよ」

尤も、内容はともあれ、他から見れば、たしかに媾曳に違ひなかつた。

「バタバタしなくつたつて、事によると探し當てて此方へやつて來るかも知れないわ………

少しばかりの立木の向ふの灯明りを、お君は振り返つて云つた。

「仕方がない、そんときあ妾も、一緒に毆られるわ」

「お前をか？」

男は皮肉な調子である。

「そうよ………」

女が眞面目に頷くのを、男は信じなかつた。

「冗談云ふない。お前なんか、あの小兒病どもにとつちや、信頼すべき同志(タワリシチ)ぢやねえか……笑はせやがらあ。」

遠山は、自棄氣味で當り散らした。そして自分の言葉に、沁々孤獨を感じてゐた。

「まあ、あんた!?」

お君は、そう云つたきりむつとしたらしくしばらく黙つてしまつた。——此の人は、自分の戀人にすら、信用が置けなくなつてるんだわ——。

「ねえ……」

一寸間をおいて、優しく云つた。

「あんた、疲れてんだわ!」

「俺がか?」

「そうよ、すつかり疲れてしまつて、怒りつぽくなつてんだわ」

お君は落付いた調子で、男とは外(そ)つぽの方を向いて云つた。

「俺あ疲れてなんかゐねえ、奴らの仕打が癪に障るんだ!」

「あんたは、貧乏と、鬪爭と、それに工場勞働とで、頭腦も身體も疲れ切つてんだわ」

二人は、各自に違つたことを云つてゐた。しかし、昂奮してゐる男の心は、少しづゝ落付いて來た。

「俺ら疲れてなんかゐねえ。だけど小兒病どもが、あんまり生意氣だ……考へても見ろよ。糺察隊なんか、こさへあがつて、何でもねえのに、俺を跟け廻る……馬鹿野郎め」遠山は、ペッと唾を吐いた。

「そりやそうよ。個人的に云へば、あんたなんか毆られたり跟け廻されたりすることはないわ。糺察隊の連中だつて、そんな義理ぢやないわ、だけど!」

「何うなんだ？」

「だけど、運動全體から云へば、そうはいかないんぢやない？（お君は、はら〳〵した調子で）早く云へば、現在のままでは遠山といふ存在が、問題に、なるんだわ……」

男は默つて聽いてゐた。

「あんたは、十三年爭議以來の指導者として工場生え拔きの鬪士として、S勞働組合の基礎を作つた功績は、誰もが、例へば永井さんだつて充分認めてるわ……、それだけに今日、役目をすつかり拋ち、理論的にも組合幹部と衝突したまま、依然と突立つてゐることは、今日のやうな場合、組合として非常に危險がるのも無理ないぢやない？」

「それで、俺を毆らうつてえのか？」

「そうムキにならないで頂戴。あんたさつきお前をか？　つて皮肉つたけど、大勢を決するには、そんな細かいこと云つてゐられないんぢやない？　妾だつて今の場合あんたとこうしてりあ、毆られるわ、必度……」

「だつたら、さつさと、俺から離れつちまつたらいいぢやねえか！」

「まあ……」

お君は、口惜しさうに、男の横顏を睨んだが、ちつと堪らへた。

「妾はね、信じてゐるわ。あんたが反動なんかなる人でないと……だけど」

「だけど？」

「現在のあんたには、まだ勢力があり過ぎる……。あんたが右翼的な理論でも握つちあげて、叛旗を翻へしたら、時機が時機だけに組合は半々位に引裂けるわ！！」

遠山は苦笑しながら呟いた。

「買ひ被るなよ。俺アもうそんな氣力はない。」

「そう、そうよ。いゝいゝ、あんたは疲れてるわ。おけすけに云つたら、あんたは休養が欲しい……。そうよ。誰が何てたつて妾にはよく判るわ。………しかし………」

お君は語尾を濁した。

「しかし、運動するものに休養はないつて云ふんだらう!? ハハハハ」

遠山は力なく笑つた。

お君は、俯向いてしまつた。

しばらくしてから、遠山が欠伸するやうに呟いた。

「突進するか、でなきあ、亡びるかだなア………」

凉しすぎる風が、少し小高くなつてる境内を通り抜けた。お君は、この男に何と云つていいか、言葉が發見らなかつた。

遠山が、フイと立上つて云つた。

「よし、永井に會はう!!」

「まあ、よかつた」噪いだ聲で女は喜んだ――感情を捨ててね………永井さんとだつて舊い親友だつたぢやないの――。

しかし、遠山は矢張り怒つた聲で、つゞいて身體を起こさうとするお君にたたきつけるやうに云つた。

「俺ア、一人で行く………」

組合本部の、玄關の障子を、遠山はアリ〳〵した調子で引き開けた。

取つつきの八疊に、ガヤ〳〵押し固まつて何か相談してゐた若い連中が、遠山の顏を見ると凝つとした樣子で、一度に立ち上つた。

「永井は居るかッ?」

遠山は「何しに來た?」と云つた顏付の、若い連中に云つた。

「二階だ。」

一人が不精々々に答へた。

遠山は、默つて二階へ、どん〳〵上つて行つた。廊下に沿つて二つ目が、幹部室であつた。彼は荒々しく扉を叩いた。

「誰だ?」

「遠山だ。永井に會せろ!」

「えつ、遠山?」

扉は開かれずに、二度目は永井の聲がした。

「…………」

扉が半分開いて、痩せぎすの、ひよろ高い男が首を出した。黑つぽい單衣を着たそれが永井であつた。

「話がある、顏を貸して呉れ!」

永井は、やはり默つて、靜かに遠山の顏色を讀んでゐたが、

「うん…………」

と背づくと、室を出て來て、先に立つて隣りの室へ入つた。室内には謄寫版や紙片がいつぱい散らかつてゐた。

むつつりした調子で、二人共、ひつちらかした紙片の上に向き會つた。

どつちからも、言葉が出なかつた。

彼等は半年來、睨み合つた立場に在つた。しかし、實に幾年振で、かう膝突合したことだらう。七八年もの親友が、而も今は或ものに隔てられてゐた。

變な空氣が續いた。

脊後の障子が、ガタリと動いて誰か入つて來やうとした。

「入つちや不可ねえツ」

永井が、顏をあげて怒鳴つた。神經質な青白い顏が、遠山より老けさせて見えた。重苦しい空氣の中へも、他人を入れさせまいとする、永井の氣持がいくらか沁みたが、遠山の頑くなな氣持は動かなかつた。

「糺察隊つて何だ？」

嗄れた聲が遠山の口から出た。しかし相手は默つてゐる。

「俺を毆らせる筈だつたのか？」

遠山の聲は充分に怒氣を含んでゐた。

「…………」

しかし、永井の青い顏は、默つたきり、動かない。

「貴樣は、年來の友を毆らせようつてえのか？」

遠山は、ジリ〳〵膝を寄せて行つた。そのとき永井は昂然として答へた。

「さうだ！　君が俺等の陣營の者でなくなる限り、俺達には敵だ！」

「何だと?」

遠山は、ぶる／＼拳をさせながら、詰め寄つた。

「ハツキリ云つておく、貴樣が右翼に陷沒する限り、俺の友ぢやねえんだ」

永井が云ひ終らぬうちに、遠山の拳が、永井の顔面を掠めた。痙攣する永井の口邊に、絲のやうに鼻血が流れた。

が、而し、遠山は拍子拔して了つた。永井はそれでも靜かに動かなかつた。

そして、幾らか震えてゐる手付ではあるが傍の紙片を拾ひあげて、鼻血を拭いた。遠山は急に氣崩れがした。昂奮した呼吸づかひが、吾ながら慘めになつた。遠山はふいと立上らうとした。

「待て……」

そのとき、永井が呼び止めた。

「貴樣――まるで火取蟲見てえだな!!」

永井は、驚くほど落付いて云つた。青ざめた頰に笑ひさへ含んでゐた。

「お前は、いま沒落しやうとして足掻いてゐるんだ。どうだ遠山!!」

どきんと來た言葉が、急所を刺した。しかし遠山は、強情に突立つたきりである。

「貴樣は、曾て俺達の輝ける指導者だつたんだ。呑んべで始末に終へなかつた俺たんかを、今日迄導いたなあ、いつたい誰だつたんだ……。」

遠山にとつて、過去を憶ひ出すことは、億劫だつた。

「坐れ、坐れつてば……」

遠山は、無理に坐らせられた。

「おい、有島副社長は、今日の重役會議で辭職させられたんだぞ！」

「え？」

遠山は、驚いた。

「愈々、資本の攻勢が、その假面を剝いで、はつきり正體を現したんだ。これッぽつちの自由主義も、もう存在餘地がなくなつたんだ。來る、必度來るぞ！」

青ざめた永井の顔に、少しづつ血が潮して來た。

「貴樣は疲れて、まるで火取蟲見てえになつてゐる。しかし、今お前なんぞを休養さしとく餘裕がないんだ。引ッ張り出すか、でなきあ、たたきつぶすかだ。十二工場全體にそう云ふ奴らを手配したんだ。」

遠山は、しだいに顔を俯せた。

「さあ、握手しやう。明日の能率委員會のために、遠山……以前の元氣のよかつたお前になつてくれ。なあ兄貴……」

永井は、遠山の手を探ぐつた。

「さあ、手を出してくれ、手を……」

遠山は、片手を委せながら、顔を反向けた。

「有難え！！　さあこれでいい、お前と握手すれあな、ナァに怖いものはねえ……」

眞正面に顔を合せれば、氣弱な涙がこぼれ出そうだつた。永井も、顔を反向けたまま強い調子で云つた。

「なア、お互けえの屍を置くところあ、戰場でより他にねえ！！」

五

終業の鈴が鳴り熄むと、第一棟から第二棟へと、ベルトの音が、ヒタ／＼と止まつて行つた。「規定時」の札が、各科工場に掲げられ、従業員達は元氣よく歸り支度を整へて、入口へ溢れて行つたが、鑄造科第一工場の前まで來ると、雪崩れは氾濫して、幾つものコースを作り、やがて、その平家建の工場の周圍を、列を作つてめぐり始めた。

愈々、一時間後に、「能率委員會」が開かれるのだ。行列は次第に昂奮し、××歌が彼等の足音を消して了つた。「おい止めろ、此處を取り捲いちや不可ん。」守衛達が、遠くから怒鳴るが、彼等は彼等の代表を、この會場へ送り込んでしまふまでは止めなかつた。

瓢簞から振り出される胡麻粒のやうに、各科工場協議員達は、行列の中から飛出して來て、濶い會場の椅子を、瞬く間に埋めていつた。

工場協議會に於ける、従業員側の代表者数は各科工長、事務所長を合せた會社側代表者数と同一であつた。四十八名の四十九名。そのうち一人が決議權を持たない議長一人。

遠山は早くから、最前列から二番目の椅子に頑張つてゐた。そして定刻七時カス／＼に永井がグット後方へ、ひよろ高い姿を現した。會場外の行列は止まり、唄聲も止まつて靜かになつた。その行列の中に關東地方評議會代表で來た皆見が、圓らな眼をキヨロ／＼して場内を覗き込んでゐた。

「おや？」遠山は、最右端に事務所川の椅子を並べた席に、副社長の他にモウ二つの顔がなくなつてゐるのに驚いた。右鳴副社長系だつた經理課長と會計課長――。

永井もそれに氣付いてゐた。――哀れな自由主義の壊滅――。彼も、そして俺達も、その陣營内を、精算し、整備し終へたんだ――。

定刻のベルが鳴り終ると、スッと工場右端の扉が開いて、社長の肥つた顔が見えた。三四人の洋服に取巻かれて、物々

しい容子でその巨軀を現した。

「ヨウ高嶋屋――」工場協議員席の一隅で、床板を蹴りながら、笑聲が起つた。

「靜かに願ひます……」

中央の壇上に、ずんぐり脊の專務が、屹とした調子で口を切つた。その間に、各二枚の印刷物が、會場全員に配られた。會社側の腹を割つた提案及び、本年度上半期からの收支決算竝びに、各種の一人當り平均生產統計表……。

「ただ今から、能率委員會を開催します。」

嗄がれたの、太い專務の聲が、瞬間は、最後方から窓を越えた闇の中まで透つて聞へた。從業員側の代表者達は、印刷物に急いで眼を通しながら、第九條の能率委員會の構成員數に氣が注いて驚いた。各科工長次長廿四名、從業員代表廿四名、そして新に事務所側十二名とあつた。明らかに會社側の絕對多數である。會社が旣に聲明した決議權割當とは全然別物ではないか……。

「いま諸君の手許に配付した統計表乃至は、收支決算表を御覽になつても判るが、會社はいまやまつたく窮境にある。大震火災當時に、非常に膨脹した財界は、いま急速に收縮しつつあつて、當會社の受ける影響もまた莫大なものである。いま大正十二年下半期の決算表と十五年度上半期の決算表を比較にすれば、すぐ明瞭になることですが……」

專務は、力を籠めて數字を竝べ始めた。――出鱈目を云ふない――從業員代表側は、お互ひの尻をつつき合つて笑つた――自分の嬶や小學生の倅や、生れたての赤ん坊までが、大株主ぢやないか。世間體の數字なんざあ、どうだつてならアね――。

しかし兎に角、十二年度下半期は、純利益十七萬九千餘圓といふ小數字があり、繰越金を差引いて一割の配當が出來てゐるに比較して、十五年度の上半期は前期繰越金を埋合せて、辛つと三分の、しかも專務の言に依れば、名前だけの賠配

當だと云ふのだ。

「それでまた、半請負制度を復活して、吾々職工を軍鶏みたいに蹴合せやうつて云ふんでせう」

前列に五六人固つてゐる女工代表席で、お君が、邊りに聞えるやうに云つた。——馬鹿にしてるわよ——。

「而も、夏枯れの時期を含む下半期に於て、それを埋合せる等は、到底不可能であります。」

營業課長や、工務課長達は責任を顧みて、社長の前に蕭然としてゐるが、從業員代表席は依然ガッチリしてゐた。彼等は事實、昔に比べれば、幾らか仕事を怠けた。半請負制度（歩増し、或は蹴出しといふ）が撤廢されたればこそ、彼等はいくらか人間らしい顏色をとり戻せたのだ——。

そして、會社が提案してゐる條件は、第一條、工場協議會の撤廢、第二條、半請負制度の復活、第三條、深夜業の復活、等、等。

「何だこれは？　十三年爭議前に立戻ることになるぞ！」

「さうだ。挑戰だ!!」

ギロリと鋭い眼を、絶えず從業員代表席に送つてゐる社長の顏へ、幾十の尖つた眼が、針のやうに刺さつた。

「その統計表に見らるる通り、生産價額はまるで彈丸を喰つた鳩みたいに、ガタ落ちしてしまつた。從業員諸君は、會社の作業能率よりは勞働組合の發展能率のために、努力してゐられたからだ……」

聲を高くして、眞正面から專務は皮肉つて來た。中央の席に竝んだ各科工長席から、拍手が起つた。同時に從業員代表席が、蜂の巣をつついたやうに騷ぎ出した。

「默れッ、禿ッ」

「詭辯だッ」

「戸外へ出ろい」

專務は立往生してしまつた。「議長ッ」「議長ッ」從業員達の例の奥の手が出た。完全に專務は口を封じられてしまつた。

坊主頭の、呑栗みたいな男が立上つた。第一印刷室の近藤といふ協議員である。

「專務は、會社の最近の不振を、一から十まで、從業員にその責任を押しつけてゐるが、印刷、整版の各單價は、十二年當時も今も同じか？」

美事に、專務は受身に立たされた。

「いや、その當時からは、約三割位低落してゐる。」

呑栗坊主はすぐ追掛けた。

「では、會社の事業不振は、決して吾々の作業のせいではないぢやないか？」

「しかし、諸君の給料は少しも下りません。早く云へば、諸君の能率を、諸君の給料とバランスがとれるまで引上げるか、でなければ給料を引下るかです……」

從業員代表達は眼を瞠つた。――この野郎、突けば突くほど怪しげな事を云ふ――。

「俺達の給料を下げる？　でも、生活日用品の價格は少しも下らないぢやないか？」

近藤は眞赤になつて怒鳴つた。

「それは、當會社の責任ではありません――」

專務は、得意になつて突つ放した。まさしくこれは名答辯であつた――。しかし、今度は他の連中が承知しなかつた。

「馬鹿野郎ッ」

近藤がまだ突立つて怒鳴つてるのに、背後の方から幾つもの聲が飛び出した。「議長ッ」

「議長ッ」……。

「工場協議會は、何故廢止しなければならないのだ？」

今度は、遠山が突立つて云つた。專務は坐つたまゝ答へやうとするのを、彼は抑へた。

「俺達は、嘘吐きの專務は信用しない。幸ひ其處に社長がゐらるゝから、直接に聞かしてもらひたい……」

「そうだ、社長に喋べらせろ！」

「社長どういふわけだ！」

眞暗になつた窓外でも聲がした。從業員達はまだ會場のまはりを、追拂はれながら去らずにゐたのだ。

「それはね、遠山君！」

重々しく立上つた社長は、演壇の下へ歩いて來て、仇同志のやうにジッと遠山の顏を睨んで云つた。

「能率委員會とダブルからだ……」

そう云つて縞ズボンの折目を見せながら、社長は歩み去らうとした。

「ぢや、能率委員會の決議權は、何故工場協議會と同樣にしないのです？」

しかし、社長の態度は、平常と違つてすつかり假面を脫いでゐた。歩みを止めて、首だけを捻ぢ向けながら、強いて落付いてはゐるが、昂奮した聲で、全然他のことを云つた。

「此の會社は、君達のものぢやない。從つて何時迄も、S勞働組合の巣にしておくわけにはゆかんからナ……」

「なニッ？」

遠山は嚇とした。

「默れッ」

「社長ッ横暴だッ」

從業員代表席は、再び騒然となつた。遠山は破けるやうな聲で怒鳴つた。

「ぢや俺達も、能率委員會に不贊成だッ」

が、社長は振向かなかつた。從業員代表達は足踏み鳴らして叫んだ。窓外では罵聲が嵐のやうに昂まつた。

「能率委員會不贊成だッ」

「深夜業復活反對だッ」

「半請負制度復活反對だッ」

怒號と喧噪の中に、永井は眼を光らして、冷靜を失はなかつた。――來たッ、しかも正面だ、しかし、何が、あれほど社長を勇敢にしてゐるのか？　危いッ、此までは不可ない――彼は立上つて發言を求めた。

「緊急動議ッ」

從業員代表側七名。會社側七名の小委員會を、即時、此問題をよりよく討議するために開催せんことを提案した。そして瞬時の間も社長の顏色から眼を離さなかつた――畜生ッ、何う出て來るのだ。

動議は、多數を以て通過した――。

六

昂奮した混亂の裡に、選拔された小委員會の委員達が、事務所二階の會議室に入つて行つた。從業員代表側は、永井、遠山、高木、近藤、他三名――。

彼等は會議室へ入るドァの傍で打合せした。「いいか決して焦つては不可ないぞ。俺達は、奴等の内幕を見破るために

も、努めて冷靜でなくちやならない……」

「おや？　彼奴は何だ？」そのとき不偶氣が注いた近藤が、永井の脊を突ついた——見ろ今あの室へ入つたなア、たしかに正服だぞ、俺あサーベルを見た！」

しかし、皆が振返つたときには、指ざされた社長室へ通ずる、黑い把手の付いた扉は、堅く閉つてゐた。

「恐れることはない！」永井は、反對側の扉を開いて眞先に入つた。會社側の委員は、各課長に專務を加へて七名、既に社長室を脊に並んでゐた。從業員代表等は、反對の窓際に……。そして、社長と、も一人の見知らぬ若い紳士が、少し離れて、並んで腰掛てゐる……。

「その紳士は誰ですか？　關係がないんならば退席してもらいたいですが……」

遠山は、坐つたまゝつゞけ云つた。するとその紳士は無遠慮にも、自分で立上つて云つた。——僕は印刷同業組合副組長の鈴谷です。傍聽さして貰います——。

皆は驚いた。そうか、これが十二社協定案を持廻つてる例の男か！」遠山はまた云つた。

「では、吾々の組合を代表して傍聽者を一人呼びますから……」

すると、件の紳士が、無氣味なニヤニヤ笑ひをしながら言つた——いいでせう。それは合法的です——。

皆見がのつそり入つて來た。獰猛な面構のこの百姓男は、永井を蔭へ呼んで云つた。

「鈴谷が居たらう、萬事は明瞭だ。モウ躊躇するな!!」

十二社協定——東京市を中心とする十二大印刷會社の聯合協定——職工標準賃銀の引下、製品單價の標準協定、深夜業割增手當の撤廢等々、彼等職工が、工場のタヽキの上に、十時間乃至十五時間を縛りつけられてゐるその背後で、この十二大會社の紳士達は、もう半年も以前から……殆んど調印するまでに、協定を進めてゐたのだ……。

「わかつた……」背いた永井の頭腦に、「何が社長を勇敢にさせたか？」が、ハッキリと、スクリーンのタイトルのやうに映つた。

從業員達は何時の間にか、事務所の周圍に押寄せてゐた。——深夜業復活反對だッ——半請負制度復活反對だッ——叫び聲が、また窓から飛込んで來た。途端、ワァッといふ叫喚と共に、激しく揉み合ふらしい物音がつづいて起つた。

「何だ？」

皆見を始め窓際の二三が振り返つて覗くと、五六人の正服巡査を中心に、檢束者爭奪が始まつてゐるではないか！

「無法だ!!」

年若い近藤が、顏色を變へて飛出そうとした——。

「待て！　早まつちや不可ない！」

大力の皆見が、杉山の左腕を緊り抑へて、低い聲で止めた。「騷ぐな、これからだ！」

永井は、ジリジリ腹底に燃え上つて來る憤りと、焦燥をガッシリ抑へて、靜かに云つた。

「專務、吾々の意見は次のやうに一致してゐます。吾々は會社側の提案する能率委員會を支持することに異議はない。但し、能率委員會に於ける決議權の割當は、工場協議會に於けると同樣のものであること。二、工場協議會の廢止、半請負制度の復活其他はその能率委員會成立後、該委員會に於て協議の結果決定すること。以上です……」

專務は、默つて社長の方へ顏を向けながらその顏色をうかがつた。すると、意外にも、社長の隣りの紳士が、徐ろに首を振つた。まだ三十そこそこの瀟洒たる洋服の男を、遠山達は驚いて見戍つた。

「そりァ結局同じこつた……」

專務が云つた。遠山は片手をテエブルに支へながら、顏を突出して云つた。

「どうして同じこつた？　俺達は能率委員會の趣旨を支持してるんだ……」

妥協をするなッ！　不意に窓下から、怒聲が飛び込んで來た。——請負制度復活反對だッ——また押し寄せて來た從業員達の聲が、嵐のやうに捲き起ると、續いて騷然とした小競合が始まつた。

「社長ッ」

永井が、立ち上つて呼び掛けた。

「社長は、會社が不振に陷つた罪の全部を、吾々從業員になすりつけやうとしてゐる。この會社の提案は、正しく吾々に宣戰を布告するものだ。例へば請負制度の復活は、すぐ近い將來に人員過剩問題を捲き起すだらう。……………社長ッ、俺は從業員二千名を代表して君に訊ねるッ、君は締出(ロックアウト)をやる氣かッ」

永井の語尾に顫えを帶びた聲が、室中にひびき渡つた。課長連の二三が慌てて椅子から離れると、庇護するやうに社長の周圍に立つた。

しかし、直に社長の口から言葉が洩れなかつた。專務は腰を浮かして口をモグモグした。そのとき、例の紳士が、徐ろに立ち上つて、威嚇するやうな調子で社長と專務へ云つた。

「遺憾ながら、この會社の原案が駄目になるやうでは、僕として、十二社協定から、當社を暫らく除外するやう、組合に報告するほかありません。」

社長は愕然として身を起した。そして蒼白な顏面を痙攣させながら、嗄れた聲で從業員代表達へ怒鳴つた。

「この會社は俺のものだ。いいか、あの會社の原案はちよつとも引つ退(こ)めることは出來ん、わかつたか……」

「ナニ？」

遠山と、近藤が自制しきれずに、社長の前へ突進すると、拳を突き出して怒鳴つた。

「ようし、ストライキだ!!」
途端、專務が、バアーンと卓子を叩いて喚いた。
「明日から直に臨時休業だ!!」
そのとき、皆見が、ヅツと例の紳士の前に進んだ。
「よろしい。ぢや俺も君と同樣に、全國評議會廿萬の組合員に、報告しやうぜ……」
從業員代表達は席を蹴つた。そして次の部屋へ雪崩れ込んだとき、眞ツ先の永井が不意に仰向に倒れかかつた。おゝ!!皆は思はず叫んだ。弓なりに反つた永井の咽喉を、太い手が摑んでゐた――。
「うツ、暴、暴力團だ――」
きれぐに叫ぶ永井の咽喉を締めた太い手へ、ゴム毬のやうに脊を丸くした皆見が、彈丸のやうに飛びかゝつた。「畜生ツ――」
遠山は上被を脱ぎながら、窓へ駈け寄つて聲を絞つた。
「けつ――いれつ――だア」
窓下の、眞暗な構內中間道路を、粘つこい液體のやうになつて、揉み合ひながら押して來る從業員達の中から、それに應ずる喊聲が跳ね返つて來た。
「けつ――れつ――だア」
モ一度怒鳴つておいて、飛鳥ののやうに身を飜へすと、遠山は、暴力團に取り捲かれ揉み合つてゐる仲間の委員達の亂鬪の中へ、まつしぐらに躍り込んでいつた。

（一九二九、九、二）



變な村

武者小路實篤

百姓。
和尚。
村長。
校長。
その他。

（變な村の强兵衛の畑、百姓一人働いてゐる、學生登場）

學生。一寸おききしたいことがあるのです。

百姓。なんでがす。

學生。ここの小作料はいくらですかね。

百姓。そんなものはないでがす。

學生。ない。あなたはそれなら地主なのですか。
百姓。地主は心中してしまつたのでがす。
學生。地主が心中した。それは愉快ですな。
百姓。あんまり愉快ではないでがす。
學生。それで、小作料がいらなくなつたのですか。少しへんですね。
百姓。いらなくなつたのでがす。地主の遺言で和尚さんが、この土地をもらつたのでがす。その和尚さんが、ただでもらつたものだからただでかしてやると云つてただでかしてくれたのでがす。
學生。へんな和尚ですな。
百姓。へんな和尚でがす。
學生。それで君達の生活は樂になりましたか。
百姓。あまり樂にもならないでがす。だが昔よりは之でもいくらかいいでがせうが、何しろここは土地がよくないのでがすから、中々大へんでがす。
學生。和尚さんはなにしてゐるのです。
百姓。ねたり起きたりしてゐるでがす。
學生。病人なのですか。
百姓。病人ぢやないでがす。
學生。なまけものなですね。
百姓。中々本をよく、よんでゐるでがす。

學生。どんな本をよんでゐるのですか。
百姓。知らないでがす。又へたな畫をかいたり、若いものを集めて、馬鹿氣た話をしてゐるでがす。
學生。利口な人ではないのですか。
百姓。馬鹿でがす。
學生。馬鹿なのですか。
百姓。自分でさう云つてゐるでがす。
學生。君の云ふことはどうもよくわかりませんね。君は和尚さんを馬鹿だと思つてゐるのですか。
百姓。馬鹿だと思つてゐるでがす。ですが知事さんや、村長さんは和尚さんには頭が上らないでがす。和尚さんは知事さんをつかまへて、貴樣は馬鹿だなーと時々怒鳴りつけます。
學生。それで知事は怒らないのですか。
百姓。怒りましねえ、この氣ちがい坊主なんかと云つて笑つてゐるでがす。
學生。その和尚さんに逢へますかね。
百姓。逢へますとも、和尚さんは別に用がないので、お客が大すきでがす。喧をしたらやつて來たでがす。あの男がさうでがす。
學生。貧相な男ですね。
百姓。さうでがす。
學生。この村はどうも少しかはつてゐますな。
百姓。さうでがす。かはつてゐるでがす。皆さう云ふでがす。市兵衛村のものは皆氣が少しへんだと云つてゐるでがす。

學生。さう云はれても腹は立たないのですか。
百姓。腹は立ちましねー。實際さうでがすからなー、頭の足りないものは許りゐるでがすからなー。
學生。そんなことはないでせう。
百姓。いや、本當でがす。

（和尚登場）

和尚。彌兵衛さん、相變らずよく御精が出るな。
百姓。出やしねえでがす。お袋の奴に、働かねーとお天とう様にすむめーと云つて、おいだされて來たでがす。働かねーと飯を食はさねーと云ふでがす。
和尚。あはゝゝゝ。それで働きに出てゐるのか。
百姓。さうでがす。
和尚。お前のお袋は中々しつかりものだな。
百姓。怖いでがすよ。
和尚。あはゝゝ。お前でも怖いことがあるかな。
百姓。和尚さんは怖いことがないでがすかな。和尚さんは大こくさんに頭を打たれたことはないでがすかな。いつか、頭にたんこぶをつくつてゐたのは、どうしたのでがすかな。頭に歯のあとがついてゐたのは、自分でかんだのでがすかな。
和尚。あはゝゝ。餘計なことは云ふな。
百姓。嘘ではねーでがしやう。
和尚。嘘だと云ひたい所だな。だがかゝゝーていいものだらう。

百姓。いいものですが、怖いもんでがすよ。
和尚。君の處には子供は何人ゐる。
百姓。九人ゐるでがす。又おなかが大きいので、又一人生れるでがせう。
和尚。にぎやかでいいな。
百姓。ちつともよかありましねー。和尚さんの處は何人でしたかな。
和尚。俺の處は一人もゐねーのだよ。
百姓。遠慮せずにつくるといいでがすよ。いくら頭がすつてあつても、大黒がゐれば子供位い五六人位いはつくつてもいいでがす。
和尚。出來ないのだよ。
百姓。さうでがすか。和尚さん。
和尚。なんだ。
百姓。さうぢつとしてゐても、つまらないでがせう。話てゐる間でも、草でもとつたらいいでせう。
和尚。本當にさうだな。どこの草が一番とつてほしいのだな。
百姓。あの大豆のなかの草をとつてほしいでがす。
和尚。さうか。
百姓。之からも用のない時は、時々手つだいに來てもらいたいでがす。
和尚。さうしやう。
百姓。本當ですぞ。

和尙。よし、よし。
百姓。又嘘をつくと承知しねーでがすよ。
和尙。いつか嘘ついたかな。
百姓。この前、あとで手つだいに來てやると云つて、すかしたことがあるでがす。
和尙。さうだつたかな。
百姓。ごまかしても駄目でがす。おゝあすこから村長さんと、校長さんとが一緒に來たでがす。
(和尙、手ぬぐいでほうかぶりをする)
百姓。和尙さん。氣まりがわるいでがすかな。
和尙。めつかると、うるさいからな。
百姓。本當にうるさい奴でがすね。
和尙。默つてゐろよ。
百姓。承知したでがす。
(和尙とうもろこしのうしろにかくれる。村長、校長登場)
村長。彌兵衞さん。彌兵衞さん。
百姓。なんでがす。
村長。和尙さんは見へなかつたかね。
百姓。知らないでがす。
村長。それは困つたな。

百姓。何か用でがすかな。
村長。一寸相談したいことがあるのだがな。
百姓。なんの相談でがす。
村長。お前はおしやべりだからな。
百姓。しやべらしないでがす。
村長。どうせわかることだから云つてもいいでせう。
校長。かまいません。
村長。私の娘と、校長さんの太郎どんとが、かけおちしたらしいのだよ。もしかしたら又心中でもしやしないかと思つて心配してゐるのだよ。和尚はきつと知つてゐるにちがいないと思つてゐるのだよ。
百姓。それは知つてゐるでがせう。
校長。そらごらんなさい。私がわるいのぢやないでせう。私は息子に自由結婚なんか奨励したことはないのです。
村長。君をうたがつたのは悪かつた。さう云へば、私の娘は和尚の所へよく出かけてゆきました。私は和尚を見つけ次第、きつと頭を三つなぐつてやります。
校長。さうですか。君が三つなぐれば、僕も三つなぐります。
村長。しかしまさか、死にはしないでせうね。
百姓。死んだでがせう。
村長。え、それは本當かい。
百姓。死んだでがせう。

校長。ええ、それは本當ですか。
百姓。死んだでがせう。昨晩、月のいい夜、あの川のふちで、二人立つて川を見てゐただから。
村長。本當か、それは、そして君はそれを見てだまつてゐたのか。
百姓。和尙がわきにゐたので、わしは安心したのでがす。
村長。和尙がゐたか。
百姓。ゐたでがす。
校長。本當ですか。
百姓。本當でがす。
村長。いよ〳〵けしからん。わしは和尙にあつたら、十なぐらないでは氣がすまない。
校長。わしも、十なぐらないでは氣がすまない。
百姓。本當でがすか。本當になぐるでがすか。
村長。なぐるよ。
百姓。それは面白いでがす。
村長。ちつとも面白かねー。本當に君は和尙を知らないのだね。
百姓。知つてゐるでがす。
村長。どこにゐるのだ。
百姓。あすこにかくれてゐるでがす。
和尙。や、おそろいで、よくいらつしやいましたね。

村長。和尚さんあなたはひどい人ですね。私の娘をかへして下さい。
和尚。へんなことを云ひますね。村長さん。あなたのお孃さんは立派な方ですな。
村長。何が立派なのです。私の娘は生きてゐるのですか、死んでゐるのですか。
和尚。私は知りませんよ。
村長。本當に知らないのですか。
和尚。昨日の十時半まではたしかに生きてゐらつした。その後のことは知りませんよ。諸業無情ですからな。
校長。死ぬやうなことを云つてゐましたか。
和尚。中々、あなたの息子さんも立派な方ですね。
校長。そんなことはきいてはゐません。私の息子は何處へ行つたのです。
和尚。何處かへいらつしたのですか。私は昨日家にお歸りになつたことと思つてゐましたよ。
村長。それは本當ですか。出る時から今日一晩は友達の處へ泊るからと云つてゐたさうですよ。
和尚。それならお友達の所へお泊りになつたのでせう。若い方はまだ嘘をつくことになれる必要がありませんからね。
村長。死ぬやうなことは云つてゐましたか。
和尚。まだ死なないでせう。私は昨日逢つて、もう二三日は生きてゐたらいいでせうと云つておきましたよ。あの尾澤君のやうなことがあると、あとに殘つたものが寢ざめがよくありませんからね。
村長。それでなんて云つてゐました。
和尚。どうもうちの爺はわからずやで困ると云つてゐましたよ。
校長。そんなことを云つてゐましたか。

和尙。云つてゐました。自分は勝手なことをしながら息子のことだとやかましく云ふ。本當にわけのわからない親爺だと云つてゐましたよ。

百姓。本當にさうだね。村長さんあなたも耳がいたいでがせう。

校長。そんなことを云ふ奴はカンドウする。

和尙。今の若いものは勘當されればなほよろこびますよ。名譽と心得ますからな。

校長。飯が食へなかつたら困るだらう。

和尙。わしが食はして上げると云つておきましたよ。

校長。和尙さん。あなたはよけいなことをする人ですね。

和尙。それならあなたの息子さんは死んでもいいのですか。

校長。私の子はそんな馬鹿氣たことで死ぬやうな子ぢやありません。

和尙。本當にさうですかね。それは誰が見ても、村長さんの前で云ふのはわるいが、あんな娘さんのために死ぬなんて馬鹿なことにちがいありませんがね。相手にもよりますがね。だがあなたの息子さんは利口でないことはたしかです。たしかに死ぬと云つてゐましたよ。この話が駄目になれば、生きてゐるのがいやだつてね。

校長。そんな馬鹿なこと。

和尙。本當によりもよつてあんな娘さんのためにね。

村長。和尙さん、あなたは私の娘を侮辱しますね。どうせ私の娘だから器量はよくありませんがね。しかし、十人並にはつくつてあるつもりですよ。

和尙。さうですかね、親てありがたいものですね。

村長。あなたは私を侮辱するのですか。

和尚。いや本當のことを云つてゐるのです。世の中にはすたりがないとは、よくしたものです。あなたの娘さんにしろ、校長さんの息子さんにしろ、心中する顔ぢやありませんがね。

校長。君は失禮なことを云ふね。

和尚。彌兵衛さん、私の云ふことは本當だらう。

彌兵衛。本當でがすよ。村長さんの娘さんは、村長さんそつくりだし、校長さんの息子さんは校長さんそつくりでがす。鳶の子は鳶でこんな目出たいことはないと皆、云つてゐるでがすよ。

村長。僕達は君達に侮辱されるわけはない。

校長。本當にさうだ。親の口から云ふのはおかしいが、私の息子は頭だつてわるくはないつもりですよ。第一君はさつき、立派だと云つてほめてゐたぢやありませんか。

村長。本當にさうだ。

和尚。それはお世辭と云ふものですよ。

村長。それなら君はなぜ僕の娘を君はいつもおだてて、この私に反逆させるやうなことをしたのだ。親のきめた、立派な許嫁があるのも忘れて。君が一番けしからん人間なのだ。

百姓。村長さん、それはあなたの云ふことは本當でがす。和尚さんはたしかにあなたの娘さんをおだてたでがす。

和尚。彌兵衛さん、君はどつちの味方なのだ。

百姓。どつちでも惡口の方へ味方するでがす。どつちもあまり利口ではないでがすからな。

村長、和尚さん。ここに出ていらつしやい。

和尙。なぐりたいのですか。

村長。君のやうな人間とは口をきくのはいやだ。頭をなぐつて正氣をつけて上げるから、ここへ出ていらつしやい。

和尙。それぢやなぐられにゆきますかな。だが、村長さんも校長さんもよく覺えておきなさい。私が生きてゐる間は、あなたのお子さん達は殺しはしませんからね。私は君達から三拜九拜されていい人間だと思つてゐるのですよ。それなのに怒られてはつまりませんな。それとも社會のためにはあなたのお子さん達は、死ぬ方がいいと云ふお考へなら、私は別に反對はしませんがね。しかしまあ、生かしておいてやつたらいいでせう。その内には殺つぶしでもなくなつて、少しは利口になるでせうからな。

村長。結婚したければ死ぬと云つて、おどされると、私が折れるとでも思つてゐるのですか。

和尙。あなたが折れなくつても、娘さんは生きてゐると思つてゐるのですか。

村長。私の娘はあんな男と心中なんかしません。

校長。あんな男、君は一たいそれは誰のことを云つてゐるのだ。

村長。いや誰のことか僕は知らないがね。

校長。君は僕の息子に不滿足なのだね。君の娘こそたんだ。人三化七のくせして。

村長。なんだつて。君の息子は、出來損ないの女たらしぢやないか。

校長。何が女たらしだ。

村長。君はあの君の息子の母が誰だと云ふことを僕は知らないと思つてゐるのか。

校長。君の娘さんをうんだ人は誰だつけね。だから僕は君の娘を僕の大事な息子のよめにはしたくないのだ。

村長。それは僕の方で云ふことだ。誰が自分の娘を君の息子のやうな男にやるものか。

校長。もう一度云つて見ろ。

村長。なんどでも云ふぞ。

彌兵衛。面白い。面白い。

和尚。彌兵衛さん、この狂犬の喧嘩はどつちがかつか。かけをしやうかね。

村長。人のことを狂犬だとは何んだ。

和尚。狂犬と云つたのは君達のことぢやないよ。今、あの木の下で二疋の犬が喧嘩してゐたのさ。面白かつたね。

彌兵衛。本當に面白かつたね。白が頭と、はげ頭の狂犬の頭から湯氣がのぼつてゐるのなぞは見物でがしたね。

和尚。本當だ。

校長。村長さん。あなたは私の息子が、あなたの娘をもらう資格がないと云ふのですか。

村長。それはさうぢやないか。

校長。よろしい。しかし誰が見たつて、あなたの娘さんを嫁にもらつては私の息子が可哀さうだと云ひますよ。

村長。嘘つきなさい。あなたの息子さんがすつぽんで、私の娘がお月さまの事は誰だつて承認してゐる事實ですよ。

校長。あなたの娘が提灯なら、私の息子は釣鐘です。

和尚 百姓 ｝あはゝゝゝ。

村長。君達は何がおかしいのだ。

校長。この眞面目な話を笑ふとはなんだ。

村長。私達にとつて眞劍な話をしてゐるのに君達はそれを笑ふのか。

校長。神聖な話をしてゐるのに、笑ふとは何事です。それで君はこの結婚に反對なのは許嫁の人があるからではなくつて、

僕の息子がいやだから斷るのだね。

村長。それはさうさ。本當は許嫁なんかないのだが、まさか君の處の息子はモボで信用が出來ない男だからやれないとは言へないからな。

校長。それはこつちで云ふ話さ。君の處の娘なんか、モガも、モガも、しやうがないモガの化物だ。だから僕はそんなものを死んでも家には入れたくないのだ。神聖な息子の嫁になんか出來ないと云ふのだ。始終私の息子をおつかけまわして、誘惑し、一日に三通も四通も手紙をよこすやうな娘を僕が信用すると思ふのか。

村長。それはこつちで云ふことだ。やせ犬見たやうに、私の家のまわり許りうろついて、口笛ふいたりうたをうたつたりして、私の大事な娘を誘惑したのは誰だ。一日に一番多い時は十通も手紙をよこして、歯のうくやうな、とても見てはゐられない手紙をかいてよこしたのは誰だ。

校長。君の娘の方がさきに、手紙をよこしたのだぞ。

村長。馬鹿なことを云ふな。君の息子の方がさきだぞ。

百姓。和尚さん、本當はどつちがさきなのでがす。

和尚。同時なのだよ。だがもう少し狂犬をかみあはしておかうよ。いまにくたびれると云ひすぎたことに氣がついて、仲なほりしないとも限らないからな。あるだけの毒をはかす方がいいだらうからな。

百姓。本當にさうでがんすね。

村長。どうしたつて貴樣の息子には俺の大事な娘はやれないからね。

校長。私の方でおことわりだ。私の息子には嫁に來たいと云ふ女はいくらでもある。

村長。それは本當だらうよ。私の娘こそ、何處でもよろこんでもらつてもらへるのだ。何も好んでお前さんの息子さんに

なんかやる必要はない。

校長。それをきいて私も安心した。もらつてくれつてたのんだつて、誰がもらつてやるものか。

村長。くれつていつたつて誰もやるものか。

校長。くれつて誰が云つた。

村長。內々あとおししてゐたくせして。

校長。何をあとおししてゐたのだ。

村長。君の息子が私の娘を誘惑しにくるのをよろこんで見てゐたのは誰だ。

校長。それは君だらう。

村長。なんだと。

校長。もてあましてゐる娘なので、私の息子がいつたらちやほやして御馳走したのは誰だ。

村長。私の娘に上等な襟をくれたのは誰だ。

校長。君の娘が、あんな女だとは思はなかつたからさ。まさか私の息子を誘惑に來たのだとは思はなかつたからな。

村長。よくも云つたな。(なぐる)

校長。なぐつたな。(なぐる)

百姓。之は面白いでがす。面白いでがす。村長さんしつかり、校長さんまけるな。さうだ、とつくめ、とつくめ、さうだ。ころげろ、ころげろ、どつちも弱いぞ、しつかりしつかり。村長さんのまけだぞ。おや、今度は校長さんが下になつたぞ。だめだ、だめだ。そんな喧嘩の方法があるか。いくぢなしだな。もう息をきらしてゐる。ふだんの心がけがわるいから、すぐ息が切れるのでがすよ。村長さんが勝つたぞ、偉い、偉い。

校長。和尚さん、見てゐないで助けて下さい。
村長。降参か。
校長。誰が、降参するものか。
村長。よし。（くみふせたまま又なぐる。校長をおこしてやり）和尚さん。あなたは人がわるい。見てゐないで、仲さいするものですぞ。
和尚。さうかな。わしは武士の一騎打は默つて拜見してゐるものかと思つてゐました。はゝゝ。おかげで隨分面白い處を見せていただいた。近頃こんな面白いものを見たことはござらん。おかげで生命の保養になりましたぢや。
村長。何がなりましたぢや。
和尚。村長さん、あなたは少し若いだけにかちましたな、いくつにおなりです。
村長。五十六ですよ。
和尚。そんなになりますかな。校長さん、あなたはいくつになります。
校長。私は六十だよ。もう少し若かつたら、負けはしないのだがな。齡には叶はんよ。
和尚。いや／＼中々の御奮鬪でしたよ。あなた方に、まだこの位いの勇氣があるのはたのもしい。若いもののいい手本になりますよ。
校長。いや、どうか、このことは皆にだまつてゐてもらいたい。
百姓。それは駄目でがすよ。わしや、こんな愉快なことを話さない位いなら死んだ方がましでがすよ。今晩中には村中のものが知つて大よろこびをするでがせうよ。あなた方は今日程、皆をお喜ばせになることは一生ないでがせう。
村長。どうも彌兵衞さんに逢つては叶はない。私が勝つたことをよく話しておいておくれ。

百姓。話しておきますだ。あなたがこんな格好のへつぴり腰してなぐりあいしてゐた所はとくによく話しておきますだ。
村長。馬鹿な奴だな、貴樣は。
百姓。利口ですな、あなたは。
和尚。あはゝゝ。本當におかげで生命がのびました。本當に愉快だつたな、彌兵衞さん。
百姓。本當に愉快でしたな。和尚さん。
和尚。おとしよりに似合はない、お二人(ふたり)の御奮鬪には、ほとほと感心いたしましたよ。ね、彌兵衞さん。
百姓。本當に感心しましたな、和尚さん。
村長。そんなことを云ふなら、和尚さんと彌兵衞さんと一つなぐりあいをやつて見たらどうです。
校長。それは見もので、せうな。
和尚。お氣の毒ながら、わしは腹が立つてくれないたちなのでね。
村長。さうですかね。乞でもですか。（和尚をなぐる）
和尚。こいつめ、よくなぐつたな。もう一度なぐつて見ろ。
村長。よし。（打つ）
和尚。もう一度なぐつて見ろ。わしは小僧の時、いつも頭をぶたれてゐたので、時々頭をぶつてもらはないと、頭のこりがなほらないので困つてゐる。どうかもう一つなぐつて下さい。もつと力を入れてた。
村長。この和尚、人をあんまだと思つてゐる。それなら今度は力一杯なぐつてやるぞ。
和尚。どうか、こゝまで來てなぐつて下さい。彌兵衞さん、なぐられてたほれると困るから肩を一寸かしてくれ。
百姓。ようがす。

（和尚、彌兵衞の肩に兩手をかけその上に頭をのせる）

和尚。之でよろしい。どうか力一杯、なぐつて下さい。

村長。よし來た。和尚さん、あなた馬鹿になつても知りませんぞ。

和尚。よろしいとも、村長さんにぶたれて馬鹿になれば本もうです。

村長。よろしい。そのかくごなら、そのつもりでなぐりますぞ。

和尚。よろしいとも、どうぞこのわしが正氣になれる程なぐつて下さい。

村長。承知しました。

（村長力を入れてなぐる。和尚よける、彌兵衞肩をぶたれてよろける）

和尚。あはゝゝゝ。之で公平ぢや。

百姓。あゝ痛かつた。和尚さんあなたはひどいですな。

和尚。人のなぐられるのをよろこんで見てゐた見物賃だよ。肩のこりがなほつてよかつたらう。

百姓。ちつともよかありましねーよ。

（皆、笑ふ）

和尚。時に冗談はやめて、村長さんも、校長さんもよくきいて下さい。あなた達は、娘や息子を可愛いゝとは思ひませんかね。

村長。それは思ひますよ。

和尚。校長さんは。

校長。それは私だつて思ひますよ。それは親の身になつて見れば、出來損ひの子程可愛いゝものですからな。

和尚。いや、あなたの息子さんは實に立派な方ですよ。私達はいつもほめぬいてゐます。この村で、村長さんのあとつぎの出來る男は、あなたの息子さんだと皆云つてゐますよ。彌兵衛さん、さうだらう。（目で合圖する）

百姓。本當にさうでがす。皆ほめてゐるでがす。本當によく勉强をし、よく働くでがす。あれで女のことに夢中にならなければ、申し分はないのだがと、皆云つてゐるでがす。

和尚。よけえなことは云ふものぢやないよ。だが校長さん、あなたよりは少し利口なようですね。あなたも勿論、立派な方ですがな。村長さんをぬかせば、あなた位い立派な人はこの村には居ませんからな。

校長。和尚さん。いやに今度はおだてるね。氣味がわるいよ。

和尚。それに、村長さんの娘さんと來たら村一等の美人。他の村のことは知りませんが、私達の村では誰が見ても、最上の美人。私は七十三になるが、まだあんな美しい方にお目にかゝつたことはない。尤も村長さんの奥さんのお若い時は綺麗なものでしたがな。それとうり二つ。

村長。どうもすこし、くすぐつたくなつて來ましたよ。

和尚。いや、お世辭ぬきの話ですよ。尤も、腹はちがつてゐたかも知れませんがね。だから私の考へでは、どうしても、このお二人ほど似あいの夫婦はないと思ふのですがね。それでどうしてあなた達はこの結婚に反對なさるのです。

校長。私は自由戀愛は大嫌いなのだ。

村長。私もさうだ。自由結婚は必ず不幸な結果になる。今の若いものゝ風儀が亂れてゐるのを、私は見てはゐられないのだ。

和尚。あなた方の若い時は、隨分いゝ風儀でしたね。よばいなぞと云ふものはありませんでしたね。あなた方は結婚する前はかたすぎて困つたものでしたね。私はこの村のやうに木石のやうな男女が集つてゐたら子供が出來なくつて困りは

しないかと思つて内々心配してゐましたよ。どうですかね。出はいたくありませんかね。それとも正直に何にもかも云つて見ませうかね。もしお忘れなら。

村長。それにはおよびません。

和尚。校長さん。今から四十年程前に私の處へ來てこう／＼云ふ女のことが忘れられない。どうにかしてもらへないかと、私の處にたのんだ人がありましたが、あなたは、その人を御存知ありませんかね。風儀は近頃、少しよくなりすぎたと私は思つてゐますがね。あなた方も少し昔のお若い時のことを思ひ出して見なさるがいゝと思ひますね。

村長。和尚さんにあつてはかなはない。舊惡をのこらず知つてゐられるからな。

校長。本當に思ひ出すと、穴のなかに入りたくなることがあるね。

和尚。賛成です。私なんかもありすぎる方で。

村長。和尚さんでもさうですかね。

和尚。自慢ではないが、勿論さうです。だが思ひ出して悪いものぢやない。

百姓。和尚さんは特別圖々しいからでがんすよ。

（皆、笑ふ）

和尚。君は圖々しくないからね。あはゝゝ。

（皆、笑ふ）

和尚。時に、村長さんも校長さんも馬鹿な見得をはらずに、二人の結婚をゆるしてやる方がよろしいよ。それは私達にとつては馬鹿氣ても見へるし、同感も起りませんがね。當人にとつては、それはムキなのですからね。それにもしかしたら子供が出來てゐるかも知れませんからね。

村長。それはけしからん。

和尚。それなら、二人を殺しますか。心中させますか。私の一言で二人のお子さんを殺すことは出來ますよ。そしたら
さぞ名譽なことでせうね。

校長。どうもけしからん。

村長。どうもわしの娘はそんなわからずやにはそだてなかつたはづだ。

和尚。よろしい。それなら私の云ふことが、嘘か本當か見せてあげませう。私と一緒にゐらつしやい。本當に二人の方は死ぬ覺悟でゐらつしやいますから。しかしそれは二人の方が馬鹿なのぢやなくつて、自然がたちがわるいのですよ。赤の他人を無理にも結びつけて、いやおうなしに子供を生まさうと云ふのですからね。その位いの力がなくつては、誰も細君なんかもつ氣にはなれませんからな。愛しないで見たら、どの男も女もあんまり取り柄があるとは思へませんからね。そのとり柄のない男と女を一緒にしやうと云ふのですから、藥が少し強すぎて、死よりも強いと云ふやうなことになるのですからね。仕方がありませんよ。はたで見てゐては馬鹿々々しすぎる程、私は感心するのですよ。自然と云ふ奴はぬけめのない奴だ。なぜそんなにして迄人間をふやしたがつてゐるのだらう。物ずきな馬鹿もあるものだつてね。本當に人間て云ふものはへんなものですな。それでは一つ私と一緒に來て下さい。面白いものをお目にかけます。

(和尚、百姓に囁く)

和尚。君はあとで近か道をしてね。私達三人が隣りの家にゐるから、心中の相談をするやうに二人に云つてくれないか。二人とも私の家にゐるからね。あんまり呑氣なことを云つてはいけないつてね。僕達はゆつくり行くからね。

百姓。承知しました。

和尚。それなら彌兵衛さんさよなら。今の話のことをたのんだよ。

百姓。承知しました。
和尚。それぢやおともしますかな。
村長。おともしませう。
（三人退場）
學生。本當にこゝはへんな村ですね。こんな村に長居すると私も馬鹿になりさうですよ。それぢや私も失禮しますよ。
百姓。いやこつちがさきに失禮すますだー。
（走けて學生をおいこしてゆく。その格恰のまぬけさ）

第二場。

（和尚の家の二つの室）
和尚。丁度よかつた。二人とも何處かへ行つてゐます。こゝで靜かにきいていらつしやい。二人に氣どられてはいけませんよ。
（隣りの室に村長の娘と校長の息子と彌兵衛來る。彌兵衛もかくれてゐる。見物からは見へる。和尚手眞似で村長や校長に默つてゐるやう合圖する。あと二人の話をきゝ、和尚時々手眞似で二人に合圖をする）
息子。和尚はまだ歸つて來ませんね。
娘。本當ね。何處へ行つたのでしよ。
息子。あの和尚は氣まぐれだから、何處かへ行つたのではないでせうか。

娘。本當に、あの人少しへんね。

息子。あの人は人はわるくはありませんか、頭がわるいやうですね。

娘。本當ね。少しへんね。

息子。大いにへんですよ。

娘。昨日私達が心中しさうに(ふき出しさうなのをこらへる)なつた時、あの人が通らなかつたら、私達は今時分極樂往生してゐる時ですわね。

息子。本當にさうですね。そしたら二人は今時分極樂で夫婦になれたのですがね。和尚にだまされてこんな所へつれて來られて、僕は本當にがつかりしましたよ。

娘。私も本當に腹が立つたわ。死なしてくれゝばよかつたのにね。

息子。死んだら、さぞいゝ氣持ちだつたでせうね。おやぢの顔も見ずにすみますからね。うちの親爺ときた日にはやかましいのですからね。あの顔を見ると三年壽命がちゞまりますよ。

娘。いゝ方ぢやありませんか。(ふき出しさうになる)

息子。あなたのお父さんこそ、本當にいゝ方ですね。

娘。どうしまして。實に頑固親爺で困つてゐるのですよ。やさしいことは隨分やさしいのですがね。

息子。それは僕の父だつて心はやさしいのです。僕だつて親はよろこばしたいのです。昨日死んでゐたらいくら僕の頑固親爺でも泣いてはくれたらうと思ふのです。人の見てゐる前では親不孝めがなぞと怒鳴つても見るでせうが、一人になれば泣いてくれて、とり返しのつかないことをしたと位いは思つてくれるでせう。まさか死んでくれてよかつたとも思ひますまい。

娘。私の親爺だつてさうよ。きつと私が死んだら泣いてくれるわ。あの顏でないたらどんな顏になるかと思ふと、一寸見たいやうに思ふわ。
息子。あなたもそれを見たら一緒に泣くでせうよ。
娘。それは泣くわ。私、之でも親はありがたいものだとは思つてゐるのよ。だけど、あなたとわかれなければいけないなんて云はれたら私、死んでやるわ。いくら親だつてあなたの惡口を云つたら、私は我慢出來ませんわ。
息子。私だつてさうです。あなたの惡口を云ふものは誰だつて用捨はしません。いくら私の生命より大事な親の云ふことでも、之許りは許せません。
娘。本當ね。いくら親が大事だつてあなたにはかへられないわ。私いつでもあなたとなら死んでよ。
息子。僕だつてさうです。あなたのためなら、二度でも三度でも死んでおめにかけますよ。
娘。ありがたう。さうまで云つて下さると、私うれしくつて、ありがたくつて淚が出ますわ。
息子。僕もあなたが居てくれたので、本當に生きるよろこびを得たのです。僕程仕合せものはありません。今日までいゝ親のおかげで、無事に生きてこれ、そしてあなたを知ることが出來たのですからね。
娘。私だつて、本當にありがたいと思ひますわ。あんないゝ父をもつてゐるのですからね。
息子。僕だつてあんな立派な父をもつてゐることを名譽と思つてゐます。
娘。私だつて、父をいつも自慢に思つてゐましたわ。たつた一つのことをのぞいてはね。
息子。一つのことゝは。
娘。あなたとつきあつてはいけないと云つたことです。その時だけは本當に腹が立ちましたわ。今思つても腹が立ちますわ。あの白髮頭にかみついてやりたく思ひますわ。

息子。僕だつてさうです。あなたの惡口を云つた時、僕は親爺のはげ頭をこのゲンコでいやつて云ふ程どやしつけてやりたく思ひましたね。

娘。あなたのお父さんの頭をなぐつたら、隨分いゝ音がするでせうね。

息子。死ぬときまつたら、一つなぐつてお目にかけませうかね。

娘。まあ、勿體ない。死ぬときまると私は親の方に足をむけるのさへ、なんだか勿體ない氣がしますわ。

息子。本當にさうですね。さう云へば、あの時程、親がありがたいものだと思つたことはありませんね。先だつ罪をおゆるし下さい、と本當に云ひたくなりますね。二人で親のことを思つてあの時泣きましたね。

娘。本當ね。あの時泣いたので、おくれたばかりで、和尚さんに見つかつたのですわね。矢張り親の威光で私達は生きることが出來たのですわね。之でも、うまくゆきましたら、私はどんなにうれしいでせう。父や母を神さまのやうに思ひますわ。

息子。僕もさうです。本當にうまくいつたらどんなにうれしいでせう。さうなつたら父の頭がます／＼光つて見へるでせう。親程ありがたいものはないと思ふでせう。

（村長と校長泣き出す）

娘。私は昨日からお父さんのことを思ひ出すと、本當に涙が出て困るの。私は父のありがた味が本當にわかりましたわ。だけど、許してくれなかつたらね。

息子。いえ、それはきつと許して下さいますよ。僕達の誠意がとゞかないと云ふことはありませんからね。

娘。それはさうですね。もし許してくれたらね、私達は泣き出すでせうね。

息子。その時はどんなにうれしいでせう。僕はさうなつたら本當に親孝行ものになつて、そしてうんと心がけをあらため

て働いて見せますよ。

娘。私ももしさうなつたら、本當に親孝行するわ。そしてい丶およめさんになるわ。

和尙。(小聲で)どうぞ二人を許して上げて下さい。

村長。許しますとも、許しますとも。

和尙。あなたは。

校長。許しますとも、許しますとも。

和尙。それでは二人に氣どられないやうにこの場はお歸りになる方がよろしい。あとは私がい丶やうにしますから。

村長
校長　どうぞよろしく。いろ〳〵ありがたう。

和尙。それでは又。

(和尙、二人をおくつてゆく)

娘。もう、歸つたやうね。

息子。しつ、聞へるといけませんよ。

娘。大丈夫よ。うまくいつたでせうか。

息子。それはうまくいつたでせう。

(和尙、襖をあける)

娘。どうだつて。

和尙。上首尾、上首尾。二人とも泣いてゐました。

息子。泣いてゐましたか。

和尙。泣いてゐましたよ。親つて見かけによらない。ありがたいものですね。
娘。さうですか、私の父も泣いてゐましたか。
和尙。え〻、泣いてゐましたとも。
娘。さうを。さう云はれると私も泣きたくなるわ。
和尙。泣いたらい〻でせう。
娘。泣きたくつても泣けないわ。なんだか嬉しくなつて來たのですもの。
息子。本當にうれしくなりましたね。人間つて馬鹿見たやうなものですね。
和尙。たしかにあんまり利口ぢやないね。彌兵衛さん、彌兵衛さん。ねてゐるのかね。泣いてゐるのか。
百姓。恥かしくつて、顔が上げられないでがす。何んだかわけわからずに涙めが出て來たのでがんす。
和尙。鬼の目にも涙か。愉快々々。
百姓。鬼の目ではないでがす。
和尙。何の目だ。
百姓。佛の目でがんす。
和尙。ふん、之が佛の目か。へんな目だな。あは〻〻〻。

（幕）（二九・九・二）



マクダレナ

池谷信三郎

幼女

その幼女が初めて感じた色は、煤けた竹の色であつた。それは天に向つて消えてゐた。茫漠とした空間の中に、古びた竹の存在が、どこから入つて來るとも解らない幽かな外光を反射させてゐた。

幼女はいつも南枕に寢かされてゐた。それで首が曲つて了つたのだ。大きくなつてからの彼女の、最も自然な姿態(ポーズ)は、心持顏を右へ傾(かし)げた、雲のやうに無心の姿であつた。それは光に吸はれた幼女の習性であつた。

幼女の網膜には、あらゆる物體が、丁度寫眞のピントグラスのやうに、逆さまに映つた。お酒を飲むと、父親は彼女の顏を覗き込み乍ら、色々の新しい色

彩な彼女の視覺の中へ振り撒いた。するといつも幼女の手は反對の方に心持動いて行つた。お酒の匂ひとざらざらする髭の感觸が、幼女に父親を感じさした。丁度お乳の匂ひと乳房の彈力のある壓力が、母親を彼女に感じさせたやうに。

彼女が初めて感じた音響は、濕つた露路に敷かれた亞鉛を踏む跫音と、それから毎日定つた時間をおいて走り過ぎる汽車の響とであつた。ずうつと後になる迄、彼女はそれを何か自然界の現象だと思つてゐた。丁度毎日夜が明けて、又日が暮れて行くのと同じやうに。

父親は掏摸であつた。母親は踏切小屋の番人であつた。父親は殆んど家にはゐなかつた。

彼女が這へるやうになると、母親は、彼女の腰によれよれの兵子帶を結びつけて、その端を部屋の隅の柱に結びつけた。幼女はひとりでその周圍の中を這ひ廻つた。壁の上に黒い汚點のやうなものがあつた。彼女はそれを捉へやうとした。するとそれは忽ち消えて了つた。又二三尺向ふに見つけ出す。這つて行くと又消えて了ふ。彼女にはそれが面白かつた。汚點は蠅であつた。蠅が彼女のたつた一つの遊び相手であつた。

パガニニの作曲に、Perpetual Motion と云ふ曲がある。子供は丁度その音樂のやうに、少しの休みもなくよく動くものだ。手足が疲れて了ふと、彼女は顏の筋肉を動かし初めた。その動かし方に依つて、涙がこぼれたり、笑顔になつたりした。感情がそれに伴つて生れて來た。

その日も幼女は腰に兵子帶を結びつけられたまま、誰もゐない部屋の中を、ぜんまい仕掛の玩具のやうに、敏捷に這ひ廻つてゐた。

ふと隣りの部屋の中で、こそこそと話し合ふ人聲が、彼女の耳に傳つて來た。その中に母親の聲を聞き分けた。もうその頃の彼女には、父親と母親の聲を知る事が出來たのだ。

母親の聲にまぢつて、もう一つの低い濁聲が、彼女の柔い鼓膜に、今迄感じた事のない新しい震動を傳えて來た。それが何んとも云へない苛立たしい不安を、幼女の心に浸みこませて行つた。すると、やがて聞き慣れた響が、快く響いて來た。露路の亞鉛板を踏む跫音だつた。

突然隣りの部屋で複雑な音響が爆發した。急に合ひの襖が倒れて來た。いきなり明るくなつた世界の中に、幼女は敏感に父親と母親の姿を認めた。それから、もう一つ、それによく似た形の物體を見た。それは急速の勢ひで、今倒れた襖を踏みつけて、彼女の頭に激しい震動を與へ乍ら、裏口の方へ走り過ぎて行つた。幼女の瞳はその黒い過ぎ去つた影を追つて、覺つかなく動いた。彼女の瞳がこんなに速い速力で運動した事はなかつた。それでひどく疲れて了つた。とろんとした瞳が又もとの方に反動的に戻つて行つた。

汽車が通る時一緒に鳴らして行く、あの汽笛のやうに高い震動が響いた。逃げ去つた男を追はうとしてゐる夫の足にしがみついて、長々と疊の上に引ずられてゐる母親の裂けた叫び聲であつた。

父親の手が慄え乍ら廻轉してゐる。鋭い光線が高い所から疊の上に流れ落ちた。すると父親が吐き出すやうに呶鳴つた。

『こいつだつて、誰の子だか解りやしない。』

勿論幼女にその言葉の意味が解る譯はなかつた。ただ、さう云ひ乍ら、彼女の方を睨んだ父親の激しい憎悪に充ちた眼光が、幼女の心に芽生えて來た本能の中に、初めて恐怖と云ふ不吉な感情を植ゑつけたのだつた。

幼女は火のつくやうに泣き出した。

その日からと云ふもの、父親も母親も殆んど口を利かなくなつて了つた。兩人が家にゐる時は、默りこくつて、ぢいつ

と陰鬱な感情を投げ合つてゐた。

家の中には不吉な憎惡が擴がつて行つた。そして幼女はいつもこの感情の具象物として、冷たい眼付にさらされなければならなかつた。

兩人がたまに口を開けば、それは激しい罵詈であつた。そしてその終りには、いつも父親の嗄聲が、『こいつだつて、……』と云ふのだつた。

幼女にはこの耳馴れた音律が、恐ろしい呪咀の間投詞であるやうな氣がした。彼女は時々夢の中にもその音律を耳に浮べて、眞夜中に急におびえ出す事があつた。

兩親の間に投げ合はされてゐる感情の本質が、彼女には勿論、解る譯はなかつたのだが、大人の不機嫌さと云ふものは、幼女の神經に、鳥の羽根を濡らす夕暮の波の飛沫のやうに作用して行つた。

暗いつめたい家の中で、彼女は細長い蔓のやうに伸びて行つた。丁度何か一つ肥料の足りない植物のやうに、彼女の伸び方には頑なな不自然さがあつた。

色のない硝子の壜のやうに神經質な小供に生長して行つた。羚羊の耳のやうにおどおどとしてゐた。霙のやうにむつつりとしてゐた。

幼女はもう歩けるやうになつてゐた。今迄見上げてゐた彼女の世界が、二尺程低くなつて行つた事は、兎に角彼女にとつては大きな變化であつた。幼女は光を慕つて、今迄の黝んだ眞四角な壁の世界から出て行つた。

彼女は緑の色を見た。無限に擴がる空を見た。犬を見た。自分が立つて歩けるやうになつたのに、犬がまだ這つてゐる

のを見ると、彼女は不思議な氣持がした。若しそれをさう名づけていいのならば、幼女はその時新しく、優越感と侮蔑の感情を培つたのかも知れない。

彼女の六つの年が轉つて行つた。

彼女はどちらかと云ふと身長の高い方だつた。顔の色は陽のさしこんだ水のやうに、透き通つて白かつた。大きな眼の中には黒い瞳がいつも潤んでゐた。

彼女は赤い鼻緒の下駄を穿いて、ちよこちよこと露路を歩いたりした。時たま近所の子供達の遊んでゐる所へ行つて見る事もあつた。彼等は一様に明るく激しかつた。その中にぽつんと動かずにゐる自分の姿が餘計彼女を暗くした。

彼等は何かと云ふと大聲に面白さうに笑ふ事があつた。それがとても樂しさうであつた。彼女もその眞似がして見たかつたのだ。そこで彼女は、彼等の顔を凝視め乍ら、その通りに顔の筋肉を動かして見るのだが、その度に涙が流れて來るのだつた。

子供達は、この顔の蒼白い泣蟲の幼女に、どうしてもなづめない。少し經つと直ぐ、意地惡るをしたり、彼女を殘して、さつさと他の遊び場へ移つて行つて了ふのだ。

皆んな仲良さうに、手をつないだり、唄を歌つたりし乍ら、向ふの原の方へ馳けて行く子供達の後姿を眺め乍ら、取殘された彼女は、いつも干枯らびた淋しさを感じて、くるりと踵を返すと、そのまま、しよんぼりと家へ歸つて來るのだつた。そんな時、彼女は自分が可哀さうでならなかつた。彼女が憐れみの感情を感じたのはかうやつて、先づ自分に對してであつた。するとその後で嚴しい反抗心が燃えて來た。いつも涙をとめる事が出來るやうにつとめた。彼女が負けず嫌ひ

な意地つ張りになつて行つたのは、かうした自己擁護の後の果て鋳た反抗心の堆積であつた。

彼女はいろいろの事に好奇の眼を向け初めた。ただ、誰も彼女に知識を與へてくれる者は居なかつた。彼女が何を訊いても、受取る言葉は『うるさい！』と云ふ吐き出すやうな一言であつた。まるで、それがあらゆるものの代名詞ででもあるかのやうに。

そこで彼女は何事も自分で考へなければならなかつた。彼女がぢいつとひとりで物を考へ込んでゐる時の顔付の中には、早熟の子供に特有な、歪められた美があつた。

もう永い事父親の姿が、見えなかつた。

彼女は勿論知らなかつたけれど、それは彼の第何回目かの入獄であつた。

するとまもなく、見慣れない男がやつて來た。初めのうちは時々であつたが、それが段々と泊りこんだりするやうになつて行つた。時には玩具などをくれる事があつた。

幼女はいつものやうに、ぼんやり客を眺め乍ら、この變つた事實をひとりの心の中で考へた。彼女の頭には、いつも父親が憎惡に充ちた眼で彼女の方を見下し乍ら、母に向つて投げかける、あの定つた呪咀の文句が甦つて來るのだつた。

彼女はその言葉の意味の中に朧ろげ乍ら、一つの事實を感じ出した。彼女は父親の顔の中に他人を想ひ出した。それから、嘘と云ふ感情を身體一杯に感じた。彼女の身體がそれ自體嘘を現してゐる。この恐しい事實から逃れるには、何かもつと小さい嘘を吐くより他に仕方がなかつた。彼女はつとめて嘘を吐くやうに努め出した。

父親がゐなくなつてから、彼女の食卓は目に見えて淋しくなつて行つた。だが、彼女は默つて箸を動かしてゐた。母親

が珍らしく優しい言葉を掛けた。

『ちい坊、お菜が欲しいだろ？』

『ううん』

彼女は、箸の先でぼそぼその御飯を、小さい口の中に押しこみ乍ら、首を振つた。

『お菜が欲しいだろ？』

母親がもう一遍訊いた。彼女は今度は默つてゐた。母親は彼女の手をとつて臺所の方へ連れて行つた。露路を越して向ひの家の勝手口が見えた。母親はそこを指さして、それから小さな聲で彼女の耳に囁いた。

『ちい坊はいい子だから、あすこへ行つてね、何か食べるものを盜つておいで。そをつとだよ。人に見付からないやうにね。いいかい。』

彼女は默つてうなづいた。それから、そをつと足を忍ばせて歩み寄つた。そこの臺所の蠅張の上に、目笊に入れて魚の干物が置いてあつた。彼女はそれをとると、大急ぎで引返して來た。人に見付からないやうに、そをつと行動する事が、彼女にその事が悪い事なのだと云ふ感じを與へたが、それにうまく成功すると、不思議な快感が幼女の胸にあふれて來た。それに何よりも、久し振りで食べられた干物の味が嬉しかつた。

その翌日は露路に荷を置いて、笛を吹きに行つた飴屋の隙を見て、旗のついた飴の棒をとつて來た。

三日目に、裏の廣場で遊んでゐた子供達の所から、そつとゴム鞠をとらうとして、男の子に見付かつて了つた。男の子は手に持つてゐた竹の棒で、いきなり彼女の頰を打つた。打たれた所は紫色に脹れ上つて、薄い血が滲んで來た。だが、彼女は涙もこぼさなかつた。大きな眼でぢいつと男の子の顔を凝視めてゐた。そのうちに彼女は段々その男の子が好きになつて行つた。

だから、子供達が、口々に罵り乍ら、彼女を殘して向ふへ馳けて行つて了ふと、彼女は急に悲しくなつて了つた。廣場を外れて行くと、細い道がだらだらと下りてゐて、そこが線路になつてゐた。つめたい色をした四本の軌道が、鈍い夕方の光を浮べて、秋の中に冷え冷えと續いてゐた。

彼女は珍らしさうに一本の軌道に觸れて見た。それから、線路に沿ふてとぼとぼと歩き出した。暫く歩いて行くうちに、直ぐと疲れて了つた。彼女はそこへ横坐りに坐つた。

枕木の間を埋めた小砂利の中に、彼女は眞白なすべすべとした小石を見付け出した。二つ三つと拾ひ出した。彼女はそれを積木細工のやうに枕木の上に積み初めた。

後ろの方で、大きな響が聞えて來た。だが、赤子の時から聞き慣れてゐる彼女には、それがただ音だけを殘して消えて行く一つの現象としか思はれなかつた。

機關手は行手の線路の上に幼女の姿を認めてびつくりした。初めのうち、彼はそれを犬かと思つてゐた。汽車が行けばそのまま線路の脇へ逃げ出して了ふのだらうと思つてゐた。だから彼の眼が、線路の上で小石を積み乍ら遊んでゐる無邪氣な幼女の姿を認めた時には、汽車はもう可成りの所へ接近してゐた。彼はあわててブレーキへ手をやつた。それから鋭い汽笛を鳴らした。汽車は激しい軋音と、不自然な震動を起し乍ら危い所で急停車した。機關手と車掌と火夫が續いて飛び降りた。兩側の窓からは一齊に恐愕した乘客の顏が覗いた。その顏の一つが急いで引込むと、線路に飛び下りて車掌達の後を追つかけるやうにして一人の男が飛んで來た。

新聞記者である。行方をくらましてゐる或る疑獄事件の中心人物を探訪しに、數日來苦心を重ねてゐたのだ。彼にとつて今日のこの事件は、その徒勞に終りかけた苦心に對するせめてもの慰藉であつた。彼の鋭い注意力は、そこにきよとんとして彼等を見上げてゐる、いたいけな幼女の頰に、生々しい打傷の痕を見逃しはしなかつた。

彼は素速く幼女の顏を、手に提げて來たカメラに納め乍ら、身體を屈ませて訊いた。

『誰に打たれたの？』

『……』

彼女は默つて、彼の顏を見上げてゐた。本當の事を言ふと、あの男の子が、何かひどい目に會ふのではないかと思はれたからだ。

新聞記者が又訊いた。

『坊やのお母アさんはほんとのお母アさんぢやないんだろ？』

『うん。』

彼女はうなづいた。

『やつぱりさうなんですな。繼母にいぢめられたんでせう。』

車掌達が話し合つた。

もう動きかけた汽車にあわてて飛び乘り乍ら、新聞記者は、いろいろと效果的な見出しを考へてゐた。

翌る日の新聞には、繼母にいぢめられた六歲の幼女が、つめたい家庭を逃れて自殺を計つたと云ふ記事が、寫眞入りで發表された。『家庭愛の缺乏』だとか、『死を想ふ心の本能』だとか云ふ言葉が、某々敎育家の談として勿體らしく掲げられた。

新聞社の受付には態々人がやつて來たり、郵便で送つて來たりして、『同情金』と云ふものが集つて來た。

その記者は集つた金や玩具を持つて幼女の家を訪ねなければならなかつた。

彼女はいつもの部屋の中に閉ぢこめられてゐた。彼女は昨日竹の棒で頬を打つた男の子の事を考へてゐた。兎に角自分を相手にしてくれたその子供の事を考へてゐた。彼女が感じた初めての愛情であつた。

隣りの部屋では、母親が新聞を擴げて讀んでゐた。記者がその前に坐つてゐる。母親は甘酸つぱい顏をし乍ら、繼母と云ふ見出しの活字を眺めてゐた。

『あの兒がさう云ひましたんですか？』

『ええ。おや、違ふんですか？』

『いいえ、いいえ。』

と母親はあわてて打消し乍ら、それから、作つたやうな聲で、世間樣とか、つくづく改心致しました、とか云ふ事をくどくどと繰返した。

幼女はその部屋へ呼ばれた。それから、人形やキヤラメルを渡された。

『他の小父さんや小母さん方が下すつたんだよ。この方によくお禮を申し上げるんですよ。』

と母親が云つた。彼女は、線路で石を積んで遊ぶと、どうしてこんなものが貰へるのか解らなかつた。だが、彼女には朧ろげ乍ら、この小つぽけな家の外に、廣い世界のある事を感じた。

少女

幾つかの年月が波のやうに打つて行つた。

十八の彼女はしみじみと、人間に忘却と云ふ機能のある事を感謝した。彼女が一つ嘘を吐く度毎に、それ等の少女時代の雜色の、それでゐて一樣に灰色の想出の情景を、一つ一つ消して行く事が出來るのだ。

彼女が明るくなれるたつた一つの道は、嘘を吐く事であつた。寢言の中でも嘘を吐いた。嘘を吐く事に依つて、過去の鎖から解放され、いつも環境の中に落着いた姿を示し得た。彼女はどんな額縁にも納る術を知つてゐた。

彼女は寢る時に細く眼を開けて眠る癖があつた。それに彼女の指は複雜な表情を持つてゐた。だから彼女が無心に寢てゐる姿を見てゐると、古い昔の活動寫眞によく使はれたトリックのやうに、そのまゝ、彼女の姿がいろいろの過去の姿に變つて行つて、それぞれの背景の中に納つて行つた。

小學校をもう直き卒業すると云ふ頃、父親が出獄する前の日に、母親は彼女を連れて、男と家を出て了つた。彼女は箱のやうな動いて行く家に乘せられて、運ばれて行つた。明るい街をいくつも通つた。そしてその裏の急に薄暗い木賃宿に入つて行つた。

そこで彼女は朝から晩迄、踊りを習はせられた。メリンスの派出な模樣の袖の長い着物を着せられた。それから彼女の放浪が初まつた。薄い雪の消え殘つた山路を越えて、溫泉場から溫泉場へと流れて行つた。母親が三味線を彈いた。彼女は長い袖を振り乍ら、渡る世間に鬼は無い、想ふゝには實がない、私は子供で金がないと、何度も何度も同じ言葉を繰返して唄つた。男は溫泉場の盛りの場所で、詰將棋を出してゐた。

宿屋の欄干に竝んだどてら姿の浴客、白粉を厚く塗つた湯の町の女等が、紙に包んだ金を投げてくれた。或る時は、地味な着物に着更えさせられて、母親の後に從ひ乍ら、油光のする宿屋の長い廊下を歩いて行つた。それから薄暗い電燈の

點いた部屋の中で、見知らぬ男の人と向ひ合せに坐つたまま、遠ざかつて行く母親の跫音に耳を傾けてゐた。

すると男はきまつて訊くのだつた。

「恐くないのかい？」

「何が？」

「私がさ。」

「どうして？」

さう云ひ乍ら、少女は穏やかな微笑を浮べ乍ら男の顔を見上げるのだ。その微笑に會ふと、男は又きまつてどぎまぎとあわて乍ら、

「もういいよ。お歸り。お前のおつ母さんはひどい人だね。」

と云ふのだつた。さう云ひ乍ら、男がお金を出しに立上つたりするひまに、彼女は素速く、そこの机の上に置いてある萬年筆だとか、時計だとか、何んにもない時には、旅行案内の本等をそつと懐ろに入れて了ふのだ。

そのうちに、或る秋の終りの頃、母親が病氣になつて了つた。すると男は他に女を拵えて、將棋盤を抱えてさつさと逃げて行つて了つた。そこはどこか信州の方の山の中の、小さな温泉場であつた。お湯の煙とも霧ともつかぬ小雨の中に、町外れの汚ない木賃宿の一部屋で、母親はぜんまいの斷れた時計のやうに死んで行つた。

取り殘された彼女は、客の少なくなつたこの温泉場の同情を一身に集めて了つた。

ここに別莊を持つてゐる東京の或る大きな商人の隠居が、彼女を引取る事になつた。庭先で秋の最後の落葉を焚き乍ら、老人は、自分の生活に飛びこんで來たこの最後の色彩を眩しく感じてゐた。

だが、それも永くは續かなかつた。東京からやつて來た老人の孫の學生が、忽ち彼女を東京へ連れて行つて了つた。

もう焚火をする落葉もない庭に下り立ち乍ら、老人が遠い山を眺めてゐる頃、彼女の都の生活は急に目まぐるしい速度を以つて展開して行つた。今迄一枚々々ゆつくりと擴げて行つた繪本を、急にばら〳〵とめくり出したやうな生活であつた。

學生は彼女の爲に部屋を借りてやつた。彼は青年らしい純情で、この可憐な少女を立派に自分の妻に仕立てて見せると云つた。その上で自家の方へも話をすると云つた。毎日のやうに來ては彼女に英語を教へたりした。だが、彼女は彼の帽子の裏に押された Made in England と云ふ文字が發音だけ讀めるやうになると、もう彼に退屈して了つた。

その翌日いつものやうにやつて來た青年は、がらんとした部屋の中に、彼女の溫かみさへも感じなかつた。壁に鉛筆で Made in England と覺つかない字で樂書がしてあつた。私は子供で金がないとも書いてあつた。

百貨店でショールを首に捲きつけた彼女は、それを見てゐた不良少年に後をつけられてゐた。

雜草の茂つた空家の西洋館に彼女は入つて行つた。扉を後ろに閉めやうとすると、そこに見知らぬ男が月光の中に立つてゐた。

——何んだつて、こんなとこへ從いて來たの？

——……………

——ちよつといい家でしやう。

彼女はさつさと中へ入つて行つた。

燐寸を擦る音がした。蠟燭の火がゆら〳〵と揺れて、壁に彼女の影を大きく落した。部屋の隅には、物置からでも持つて來たのであらう、ビールの空箱が置いてあつた。その上の棚の缺けた白粉の空壜には、名も知れない白い花が、無雜作に活けてあつた。

前に住んでゐた人が空家と共に棄てて行つた大きな安樂椅子が、壁に凭つて置いてあつた。ロココ風の薄綠の絹の布がぼろ〳〵に破れてゐた。彼女はその上に、毛布を素足に卷いて、小さく蹲つてゐた。

後から入つて來た男は、この奇妙な部屋の中に漂ようてゐるひつそりとした女らしさに包まれて、幾年にも想ひ出した事のない、古い昔の愛情を想つた。椅子の中に蹲つて、ぢいつと彼の顏を凝視めてゐる少女の姿に、丁度水の澄んだ後の川底の小石のやうな淸らかさを感じてゐた。

霧のかかつた街の底を影のやうに動いて行く彼女の姿。

丘の上の感化院の塀を、運動會のやうに、陽氣に越えて行く彼女。

かうやつていろ〳〵の姿をした彼女の影が重なり合つて消えて行くと、そこに細く眼を開けて、かすかな寢息をかいてゐる十八の彼女の寢姿があつた。

彼女は充分寢足りた後の快い感覺の中で、この間から一緒にゐる男の事を考へてゐた。こんな窮屈な部屋の中をどうしても見棄てて行つて了へないこの頃の自分を想ふと、彼女は不思議な氣がするのだつた。

彼等を一人づゝ、別に見てゐると、いかにも淋しさうな存在だつた。だが、兩人が默りこくつて、一緒にゐる所を、わきからぢいつと凝視めてゐると、これは又、何と云ふ幸福さうな氣易さであらう。

男は『腦髓の季節に就いて』と云ふ論文を、どこへ出すと云ふあてもなく、もう百枚近くも原稿紙を机の上に積み上げてゐた。彼女は曇つた日でも、緣側へ古ぼけた籐の椅子を持ち出して、露路に脊中を向けたまま、編物をしてゐた。絲がなくなつて了ふと、彼女は又それをほぐして、初めから編み初めるのだ、

かうやつて、兩人(ふたり)は大方默り合つてゐた。男は疲れるとペンを置いて、バットの箱を、散らばつた原稿紙の下から引張り出した。女は疲れるとちよつと伸びをして、編棒で脊中の奥を掻き乍ら、薄れ陽のさしてゐる男の頭の頭垢(ふけ)を見てゐた。

——あなた。

——何んだい？

——あたし、洋服を着やうと思ふのよ。どう？

——ああ、そりやね。

——女學校にゐた頃、あたし、洋服がそりやよく似合つたのよ。水色の緣のついた水兵服なの。

——お前は女學校にゐた事があるの？

——ええ。

——だつて、そんな事ちつとも云はなかつたぢやないか。永い事女優をやつてゐたつて、この間そ云つたぢやないか。

——ええ。

——お前、嘘吐いてゐるんぢやない？

——いいえ、あたし、あなたにだけは嘘を吐かないのよ。ほんとよ。

——ぢや嘘吐く人があるんだね。

――あたし、自分にはよく嘘を云つてきかせる事があるの。時々、自分があんまり可哀さうな氣がするんですもの。

――……

――ね、いいでせう？

――何が？

――だから、洋服よ。

――だつて、お前、……

――だから、いいのよ。その布で拵えるの、あたしは。

――困るなあ、そいつあ。西陽がさしてやり切れない。

――机の向きを變へたら？

――いいよ、いいよ。だけど、作れるの、自分で？

――ここに出てるわよ。

彼女は何か婦人雜誌を擴げてゐた。

――これ似合ふかしら？

――少し默つててくれないか？

と男が云つた。

――僕の論文は今、腦髓が秋の始めにかかつてゐるんだ。靜寂が必要なんだよ。古池に落葉が沈んで行くやうな、……。

――だつて、あたし、明日からお芝居へ通ふのよ。

――お前は、お金貰へるの、少しは？

――いいえ。……まあ、おかしい。おかしいわ。あなたがお金の事なんか仰言つて。

そして、彼女は瓶が破れたやうに笑ひ出した。すると不思議な事に、彼女の瞳から、はらはらと涙が落ちて來た。

男は今、机の上に紙を擴げて、生活の爲に書く、ある童話雜誌の原稿に、重いペンを走らせてゐた。――この寢靜まつた部屋の中の寒さつたら。

男は激しい咳の發作に襲はれた。胸の中で虚ろな音が木魚をたたいてゐた。女の寢てゐるのを氣兼ねして、彼が苦しさうに口を抑え乍ら、そつと女の方を盜み見た時、女は寢床の中で、ぱつちりとした眼を開けて、ぢいつと男の方を凝視めてゐた。

――お前、まだ寢なかつたの？

――あたし、寢てるのよ。あたしは眼を開けたまんま眠るのが癖なの。

――だつて、お前、口を利いてるぢやないか？

――これは寢言よ。

――ぢや、俺も寢言だ。

――あなたは、お腹が空いてるのね。

――ああ、空いてるよ。それがどうしたい。

――まあ、あなたはどうしてそんなにつつかかつてゐらつしやるの？　餘つ程苛々してるのね。

――フンだ。

――あなたのお顔つたら。……あたしがお稽古に通ひ出してから、あんたは毎日、電車賃だけ、お飯を減らしてゐらつしやるのね。

――お前は昨日どこへ行つた？

――昨日？　お稽古よ。

――嘘吐き！

――まあ！

――昨日、友達が來てさう云つたぞ。お前を動物園で見かけたつて。お前が象にパンをやつてたつて。

――ええ。動物園へも行つたわ。あたし、悲しくなると、時々あすこへ行つて見たくなるのよ。

――なぜ默つてた？

――いいぢやないの、そんな事。それよか、あんたは葡萄酒を飲まなくつちや駄目ね。あんたの咳を聞いてゐると、あたし、まるで空の葡萄酒壜を、こつこつぶつけてゐるやうなそんな氣がするの。そのままぢや、あんたは、丁度生き殘つた秋の蠅のやうに、この冬が越せるかどうだか。

――寒いね。

――もう、おやすみになつたら？

――もう少しだよ。後五枚も書けば夜が明けるよ。お前はおやすみ。

――ええ。寢ますわ。眼を開けたまんま。

――ぢや、おやすみ。

窓を飛び越えて、庭の上を走つて來た濡れた芝生の感觸が、彼女の眞白な素足につめたい記憶を印してゐた。その男の部屋に汚れた靴下を殘して來た事が氣になつた。固く握り締めた手の中に一枚の紙幣が汗ばんでゐた。潛門を出ると、高い塀に沿つて露路を步いて行つた。賑やかな街に出る角の下駄屋で赤い鼻緖のついた安下駄を買つた。それから食料品屋の店でフランスの葡萄酒を一本買つた。街を行く人々は、奇妙な形の洋服に下駄を穿いて、葡萄酒の瓶を抱えて行く彼女の姿に、好奇的な一瞥を投げ與へて、又そのまま、さつさと行き違つて行つた。

軋む梯子段を上つて行くと、電燈も點けない暗い部屋の中に、男は置物のやうにひつそりと坐つてゐた。

――まあ、どうしたの、こんな暗い？

――電燈が切れちまつたんだ。

――階下から借りて來ればいいのに。

――さう云つたんだけど。

――まあ！　意地惡る。間代を拂つてないからよ、きつと。

彼女はぎしぎし云はせ乍ら、又梯子段を下りて行つた。

再び明るくなつた電燈の下で、女が紙に包んだ買物を擴げた。

――何んだい？

――葡萄酒よ。

――お前、どうして、……？

――今日お給金頂いたの。

男はぢいつと女の顔を見てゐた。彼女は男の視線を避けるやうにして、ひとりではしやぎ出した。男は彼女の殺書茶になつた洋服を凝視めてゐた。

——お前は、お前は、……

男の眼の中には激しい感情が燃えてゐたが、言葉は芒のやうに力が無かつた。

——もう少し、もうほんの少し待てなかつたのかね。僕の論文はもう脳髄が冬の半を越してゐたのだよ。直ぐと雪解の水が温んで、小鳥の聲が聞えて來る。春が、俺達の上に、今にも訪れて來るんだのにね。お前は、お前は、……

——あなたはまだそんなのんきな歌を唄つてらつしやるのね。こんな小つぽけな部屋の中に閉ぢ籠つて、ちつとも表へお出にならないからなのよ。

——畜生！　この蠅の奴め！　うるさい奴だ。

男はいきなり立上ると、身體ばかり大きい癖に、力のない聲を立てて、悲しげに飛んでゐる一匹の蠅を追つかけまはした。

女は葡萄酒の瓶を電燈に透かせて見て、

——いい色でせう、ね、これ。ボルドウよ。

と云つた。

男はやつと、本で蠅を叩き伏せて了ふと、籐椅子の後ろで突然大聲に笑ひ出した。

——馬鹿！　俺の御機嫌なんかとるのは止せ！

——あたし、ほんとはこの葡萄酒人に貰つたの。

——嘘吐き！

――ねえ、あたし、……あたし、一生懸命なのよ。そりや一生懸命にやつてるのよ。

彼女が寄つて行くと、男は力一杯押し返した。彼女はそこの柱に頭を打ちつけて、そのまま壁にぺつたり凭つかかるやうにして、坐つて了つた。

――こりや、可笑しい。こりや可笑しい。

笑ひ聲がいつの間にか激しい咳と變つてゐた。頬に眞赤な血が上つて、苦しさうに、彼は敷つぱなしの蒲團の上に突つ伏して了つた。彼女がいつも不用意に吐いてゐた無邪氣な嘘言が無數にこんがらかつて、彼女の眞實の姿を掩ふて了つてゐた。

涙が出切つて了ふと、彼女はけろりとした氣持になつてゐた、それから立上つて、幸福がどちら側にあるのか、それを探るやうに椽側の欄干に跨つて、ぼんやりと爪を剪り初めた。

お金の無い爲に今迄受けて來た無數の屈辱が、後から後からと波頭のやうに殺到して來た。

飽滿と退屈に感覺の麻痺し切つた男達は、しほらしい女を求めてゐた。Kカフエの中で、彼女はその清らかな無邪氣さに依つて、忽ち人氣者になつて了つた。朋輩達の刺々しい眼付すら、彼女の無邪氣な微笑に出會ふと、仕方のないやうにほぐれて行つて了つた。

彼女はお金持を待つてゐた。金さへ出せばどんな女でも自由になると思つてゐるやうな人達を待つてゐた。そしてその人達の前に、お金でも決して動かないやうな自分の擬體を示してゐた。

「貴夫人」と云ふ言葉が、彼女の毎夜の祈りであつた。そしてその些やかな事件は、彼女の思つたよりも早くやつて來た。

その男はお金で解決の出來ない事に對してはひどく臆病であつた。實際、彼女は自殺でもし兼ねないやうに、男の眼には映つたのだつた。社會の眼を恐つて、その男を、親類達の狹い範圍の思惑を殺すより他はなかつたのだ。

夫人

それにしても、何んと彼女の姿のよく似合ふ事であらう。彼女は又この額椽の中にもきちんと納つて了つた。黑地の薄い紗の羽織りを輕快な肩に羽織つて、細い指には寶石が澄み切つた高原の空を映してゐた。どこから見ても瀟名夫人であつた。

彼女は女中を連れて、ずうつとこの夏を輕井澤の別莊に來てゐるのだ。夫は時々來ては歸つて行つた。夫が又他の女に關係つてゐる事は、彼女にもよく解つてゐた。だが、夫の品行などと云ふものは、彼女の『貴夫人』にとつては何んの關係もなかつた。彼女が要るだけのお金を、夫はちやんと用意して來た。何んと申し分の無い夫であらうか。彼女にはこの何んにも働かずに、無限のお金を持つて來る夫が、素晴らしく偉大な人間に見えてゐた。

彼女は今、町の本通りを靜かに歩いて行つた。ホテルの方へ曲る道から、見知り越しのB夫人が、劇場の廊下を歩くやうな盛裝を凝らして現れて來た。

——あら！

——御機嫌よう。

と彼女達は、誇張した表情で挨拶を交した。

——どちらに？

——今ホテルに居りますの。蒲團を盗まれましたもんでね。

——まあ！

——かうなんですのよ。一昨日參りまして、別莊を開けさしたんですの。方々掃除させて、それから蒲團を干しませうと思ひましたらね、まあ、どうでせう、綺麗に皮が剝いてあるんですの。綿だけが、それが又御叮嚀に、元の通りにきちんと疊んで、押入れの中に藏つてあるんですの。驚きますわね。そりや器用な事するもんですわ。あれぢや時々見廻りに行つたつて、留守番の男も氣が着きませんわね。

——驚きましたわね。

——東京から新しい布地を取寄せる迄、當分ホテル住ひでございますわ。

さう話し乍ら、兩人(ふたり)は路を外(そ)れて踏切を渡つて行つた。ゴルフリンクへ行く道が長く續いてゐた。落葉松の木立の蔭に、洋館がぽつんぽつんと建つてゐた。

暫く歩いて行くと、向ふの道から一隊の朝鮮人の工夫の群が出て來た。ゴルフ場の手入れに行くのであらう。その中に誰かの妻と見える日本の女も混つてゐた。背中には赤子を背負つてゐた。その女の後に從(つ)いて、八才位を頭に、男と女の兒が三人、一列に身長(せい)の順に竝んで、何か唄を歌ひ乍ら歩いて行つた。

それを見ると、B夫人は、あら！　と輕い驚きの聲を擧げて立止つた。

——まあ！

——どうかなすつたの？

——まあ、驚いた。あれですわ。あれですのよ。

——何んでございますの。

——自家の諸園ですの。まあ、呆れた。何んて圖々しい！　私は直ぐ歸つて巡査にそたつてやりますわ。

——お止め遊ばせ！

引返しかけたB夫人の背中に、命令するやうに強く、瀬名夫人の聲が響いた。その中には限りない侮蔑と、無意識的な憤激が籠つてゐた。B夫人はびつくりしたやうに立止つて振返つた。だが、瀬名夫人は忽ち現在の自分を取返してゐた。

——可哀さうですわ。又おれが使へる譯ぢやなし。

——それもさうですわね。

B夫人は、そんな事にむきになつた自分を恥じるやうに、如何にも寛大な鷹揚さを以つて、その事を一場の笑話にして了はうと試みた。

——でも呆れますわね。あの貧い緋天迄さうですのよ。話の種ですわね。

瀬名夫人は別の事を考へてゐた。恐らくは何んにも知らないあの妻が、働きのある夫に感謝し乍ら、子供達に揃ひの着物を縫つてやつてゐる、小屋のやうな彼等の住居を想つてゐた。そこの道を、身長の順に並んで、唄を歌ひ乍ら、父や母の後を従いて行く活潑な子供達の後姿を、いつ迄も見送つてゐた。

彼女の隣りの別荘に若い夫人が、やはり一人で來てゐた。この頃にお産をしてその赤子をとられたと云ふ事だつた。人のゐない時など、椽先の籐椅子に凭つて、張つて來る奢乳を紅茶の茶碗に受けてゐた。

瀬名夫人は垣根越しに、ふとその乳を絞る寂然とした音を耳にして、秋を感じるのだつた。庭の雜草が亂れてゐた。霧に追はれた赤蜻蛉の群が、風のやうに流れて行つた。この高原の避暑地にも、秋の氣配が感じられて來た。

荷物を纏めて歸る日、彼女は請求したよりずうつと少い爲替を受取つた。峠を越えると、それでもまだ殘りの暑さが西陽の車窓に蒸れてゐた。

郊外の家の門を入つて行くと、玄關の脇には、何か荷造りをしたらしい、木片や藁繩の切れ端などが散つてゐた。家の中はひつそりとしてゐた。彼女は自分の部屋に入つて行つた。隅にあつたピアノが見えなかつた。そこの下に埃が薄く積つてゐた。

夫の書齋へ入つて行つた。がらんとして、殆んど何んにもなくなつた、だだつ廣い部屋の眞中にたつた一つ取殘された椅子に埋つて、ワイシャツを着た夫が坐つてゐた。

――只今。

――お歸り。

それきり兩人とも默つて了つた。暫く經つてから、夫が獨り言のやうに話し出した。

――前からお前に云はうと思つてたんだが、……俺もいろいろあせつて見たんだが、……

彼女は一言も口を利かなかつた。何んにもしないでお金が無限に入つて來るものだと思つてゐたこの家が、どうしてかう云ふ事になつて了ふのか、彼女にはそこの所の、世の中の仕組みと云ふものは、まるで解りはしなかつた。ただ、彼女に解つてゐる事は、彼女の「貴夫人」が、砂の上の文字のやうに消えて行つて了つた事だつた。これから當然やつて來る窮乏の生活は、彼女にとつて少しの苦痛でもなかつた。ただ、今迄申分のない男に見えてゐた自分の夫が、全く無價値な輕蔑す可き存在に見え出した事であつた。

女中は暇をとつて行つて了つた。

夫は、この家が賣れさへすれば、と口癖のやうに繰返した。だが、それは嘘であつた。家は二番にも三番にもの抵當に入

つてゐた。初めのうちはよく外出して何か奔走してゐるやうであつたが、この頃はずうつと家に閉ぢ籠つて了つた。

家が賣れないうちに、殘り少なになつた家の中の品物が、ちようど年を老つて齒の缺けて行くやうに亡くなつて行つた。電燈さへも止められて了つた。

毎日夜になると、廣い洋間の眞中の、丸い卓子の上に、蠟燭の火が眞直ぐにゆらめいてゐた。蒼白い顔をした妻と夫は、まるで作りつけの像のやうに、一言の口も利かずに、ぢいつと向ひ合せてゐた。バタがなくなると、角砂糖を擦り合せてぼそぼその麵麭の上にふりかけた。

秋が更けて行つた。冬がやつて來た。

彼女は黒いショールで顔を掩ひ、こつそりと家を出て行つた。その晩とうとう彼女は歸らなかつた。

翌日、霧が一面に庭を掩ふてゐた。運ばす時には一つ千圓も運賃のかかつた庭石を、出入りの植木屋は一つあたり三圓なら引取ると吐した事を思ひ出し乍ら、瀨名氏はぼんやりと部屋の中で深呼吸をしてゐた。玄關の鈴が錆びたやうな響を傳えて來た。電燈會社の人がやつて來たのだ。今朝方使ひの方が見えて、電燈料をお納めになつたので、電流を入れに來たのだと云つた。瀨名氏はいいやうにしてくれ給へと云ひ殘して引込んで來た。

突然天井の扇風器が、軋むやうな音を立てて廻轉し初めた。殘暑の日に電流を切られて以來、そのままになつてゐたのだ。

卓子の上の埃が舞ひ上り、濁つた部屋の空氣が、窓を洩れる薄れ陽の中に、ゆるい渦を捲いて動いて行つた。

賑やかな街の食料品屋の店先で、彼女は硝子に入つた果物の瓶詰を買つてゐた。屆先を書きつけると、一通の手紙を手

渡した。

「このお金は、あなたが昔お使ひになつたお金を、私が同じ方法で取返したのです。」

と、初め彼女はさう書かうと思つたのだつたが、ペンをとるとまるで違つた事を書いて了つた。

「これはあなたに買つて頂いた最後の指輪を賣つたお金です。」

彼女はこの噓を美しいと思つた。

彼女は横濱行の電車に乘つた。

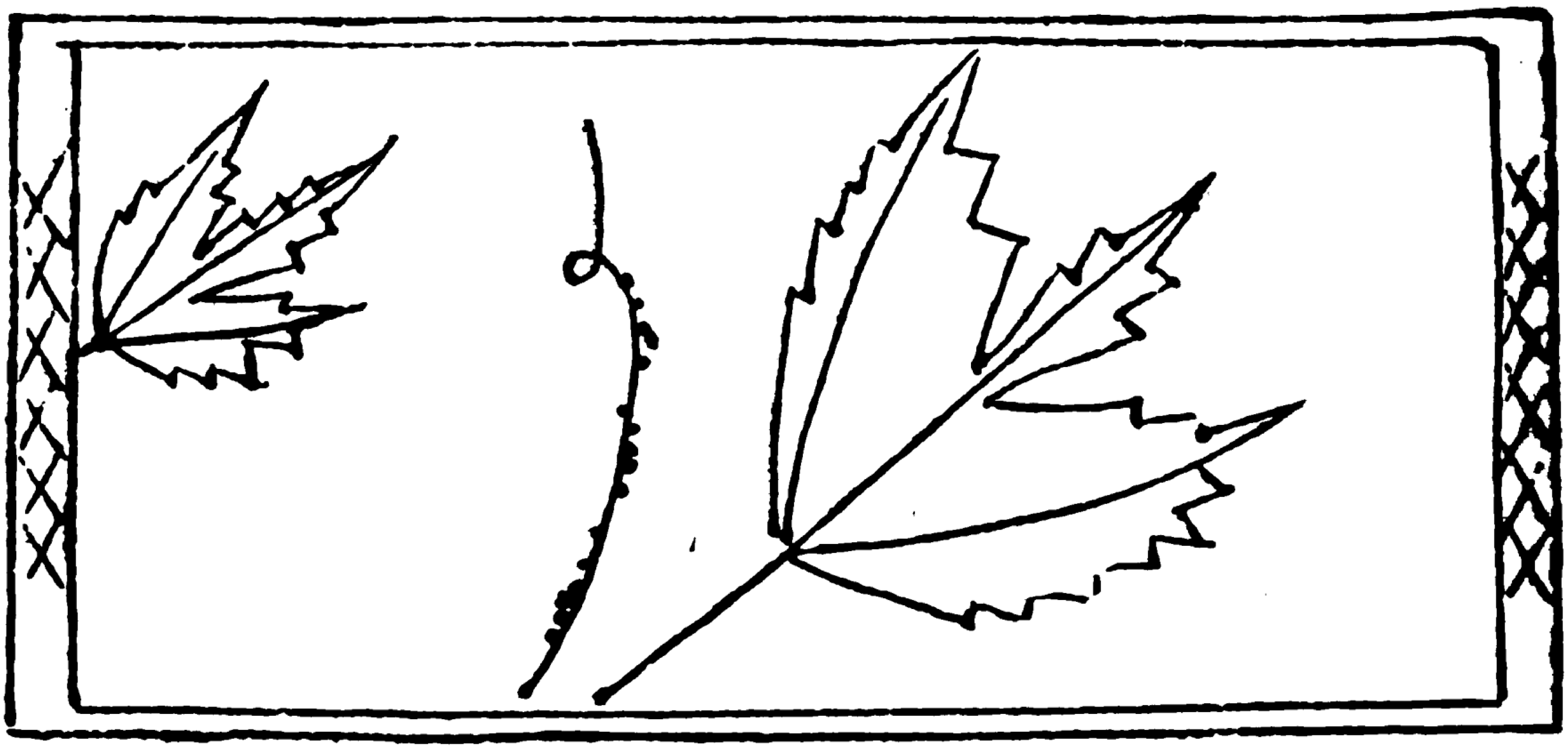
昨日の一夜を明した港町の丘の上の洋館が、頭の中に浮んで來た。窓を開けると、霧のかかつた港一面に、それぞれの方向を向いた船の灯(ともしび)が、いろいろの人の想ひを籠めて溶(と)けてゐた。

彼女はすつかり敬虔な氣持になつてゐた。あの船のどれかに乘つて、遠い國から不思議な眼の色を持つた聖僧が現れて來て、竹の棒でこの頰を打ち、私に善と惡とを敎えてくれますやうに！　と彼女は眞面目に祈り度いやうな氣持であつた。

霧の底から低い汽笛が響いて來た。

橋を渡ると脇眼もふらずに、彼女は、曲つた坂道を上つて行つた。

―一九二九・九・九―



巴板額時代（歴史喜劇）

中村吉藏

登場人物

巴

和田左衛門尉義盛

朝比奈三郎義秀

板額

阿佐利與一義遠

内田三郎家吉

侍女 渚

その他、和田一族、郎黨、捕吏等多勢

時

元暦、及建暦、

場所

近江及鎌倉

第壹場

近江國、粟津附近。

背景、正面に、琵琶湖が淺黄色にひろがり、渚には老松の幹がくねつて並列んでゐる。

陣鐘、陣太皷の音が遠く近くひゞき渡つてゐる、日も落ち、鎧もちぎれ、さん〴〵に負傷した木曾方の敗兵を、範頼方の軍兵が鬨を揚げながら下手から上手へ、上手から下手へと追まくり、追落して行く。觸れ合ふ劍戟の音、馬蹄の地響きが邊にもの〳〵しく聞えてゐる。

上手から内田三郎家吉、札堅の鎧、鐵甲にひしと身を堅め、黒駒に跨り二三十人の郎黨を從へて馳出る。

内田。(手をかざして、向下手を眺め入つてゐたが)……オヽ、天晴れな敵の若武者が、こゝへ落ちて來よるぞ、髪の樣子は女のやうでもあり、童のやうにも見えるが？

(郎黨等めい〳〵伸び上つて見る)

郎黨。童のやうだ。

○　イヤ、女らしいぞ。

○　たしかに女ぢや……美しい女武者ぢや。

内田。(頷いて)ア……さういへば木曾殿には、音に聞えた葵と巴と、二人の天晴れな女武者が隨身してゐる筈ぢや。木曾の荒駒を乘りこなして十丈の湟をも躍り越へ、松、檜を根こぎにして、如何なる金城鐵壁をも突き破る大力無双のくせ者だとの噂で、鎌倉殿も一目、見たいものぢや、ぜひ共、その女たちを虜にして召連れいとの仰せであつたが、ウカと立

向つて、萬一不覺を取つては末代までの男子の恥辱にもなる。(思ひ惱む體)

(郎黨等の中にも恐怖の色が動いて來る)

郎黨。折角の勝ち軍で、殿も御恩賞に預られる幸先が見えて居ますのに、こゝで女武者と渡合つて、萬一仕損じられては取返しが附きますまいが……

○……ぢやと云つて、向つて來る女武者に、後ろを見せてをめ〳〵引返したと知れては猶更始末が惡からうぞ。

○……遠目に見ればなか〳〵美しい、優さしさうな女ではないか？噂は當てにならぬ、强いと云つても、百人力はよもあるまい。

内田。(頷いて)たとへ百人力あるとしても、この家吉の體には六十人が力はある、みんなの頭數が三十人……四十人の餘もあらうから、百人力にもあまる筈ぢや、よし……みんなが一時に左右から打かゝつて、がむしやらにあの女武者の兩手にむしやぶり附け、家吉はいきなり、胴體に組附いて、生捕りにしてくれやう、ぬかるな。

郎黨。これはうまい計略でございます。

○たしかに、善い思附きぢや。

○きつと苦もなく生捕れませうぞ。

内田。(考へながら)。イヤ、……待て……强い、强いと云つても相手はタカが女ぢや、こんな計略を使ふのは、男子らしくない……男の體の恥辱ぢや、生延びても三十年か、五十年、人間何うせ死ぬものと定つてゐる、恥辱丈は殘したうない、まして後陣に控へた甲斐の一條や、和田左衛門尉の目が光つてゐる……よし、覺悟した、みんな一人も手を出すな、家吉一騎打の勝負するぞ。

郎黨。御尤ぢや、恥を知る武士らしい。

○　男子らしくもある。

○　噂程強い女武者なら、みんなが手出ししても、駄目だらう。

○　無駄な殺生は眞ッ平ぢや。

内田。……オヽ、もう間近く來たぞ。(武者振する)

○

巴、二十八歳、つや〱した漆黑の髪をサッと後へ流し、額に金光りする天冠を當て、紫色の直垂に、萠黄絲威の腹卷、三尺五寸の大刀を帶び、眞羽の矢の射殘したるを負ひ、白駒に跨り、長卷をりう〱と揮つて、二三の軍兵と刄先を合せながら馳け出る。

手向ふ軍兵をそこらに薙ぎ倒し、内田をキッと見て、聲をかける。

巴。天晴れな武者ぶり！　東國に聞えた小山どのか、宇都宮どのか？　千葉、足利、三浦、鎌倉の一黨の中の何人で御座するか？　かく云ふ妾は木曾殿の乳母子、中三權頭兼遠が娘巴、主の名殘を惜んで御行向を見屆けうため、御供に參つたものに侍る。

内田。(高聲に)さては音に聞く巴御前でござつたか？　それがしこそは、この度鎌倉殿の仰せを蒙り、勢多の手の先陣に進んだ遠江國住人内田三郎家吉でござる……。

(互に寄合つて、戰ひ始める、内田はダンダン受太刀氣味になる、「いざ組まう」と聲をかけ、武器を棄てる、二人は馬から飛下りて、力づくで必死とねぢ合ひもみ合ふ、その間に内田は巴の黑髮に手をかけて、きりきりと卷き、腰刀引拔いて首を掻きにかゝる、巴は、ハタと、その手首を押へる。

巴。(怒つた調子)汝は内田三郎左衛門と名乘つたが、男子らしくもない、その卑しい振舞は何事ぢや？　内田でなうて、

内田の下郎であらうか?

内田。(息ぜわしく) イヤ、それがしは内田ぢや、下郎ではない……何故そんな事を云はれる?

巴。 女に組まうほどの男が、中途で黒髪にさわり、刀を抜くとは卑怯千萬ぢや、相手を見られい、故實も辨へぬ内田三郎め……。

(拳を固めて、刀持つ臂のかゝりを打つ、内田、刀を取落す。巴は、そのまゝ、内田を膝の下に組しく)

巴。……内田とやら、日本一と聞えた木曾の深山の里で育つた檜の精、杉の精、山々のこだま渓々のこだまを身一つに受けた女の強い力を知れッ、ひよろ／＼男子が傍に寄つて來たのは、不運とあきらめるが善い。(内甲に手を突入れ、七寸五分の腰刀を閃めかせて首をかき切る。)

(郎黨等は恐れ慄えて、チリヂリと退散する)

巴。 (起上つて)……ア、見かけほどにもない男、こんなやくざ首は烏でもつゝくが善い、(投げ捨てる) つい手間取つて木曾殿を見はぐらかせた、……何處へ落ちられたのであろう?……最後に女を引つれて、先陣をかけさせたとあつては朝日將軍の耻辱ぢや、暇をやると先刻、云はれたが、こちらは幼少の時から召仕はれ、野の末、山の奥まで一つ道と思つめてゐたに、やはり男子の心の底は、木曾の溪川の水よりも冷たいのか? 御嶽の斑山の燒原の石よりも粗いのか?……あれ程盡しても、働いても、女は武士の眼には乘る駒と同じくらゐのものぢや、弓矢や太刀ほどにも大切がられぬのぢや、弓矢や太刀は死ぬまで身に附けてゐられるに、私はもう見放された、さう思ふと、力もぬけ、張もぬけた、今まで何んともなかつた薄金が、肩を引くやうぢや (くづをれ泣く)

(俄かに勝鬨の聲が上る、巴は、ハッとして耳をそば立てる)

和田左衛門尉義盛、木蘭地の直垂、黑絲威の鎧、黑布鑑の矢負ひ、黑漆の弓を手にし、數人の郎黨を從へて松木立の陰から現れて來る。

郎黨等と耳語き〳〵、巴に近寄る。

和田。（聲をかける）、そこにゐられるのは木曾殿の身内に聞えた巴どのではござらぬか？　かく申すそれがしは鎌倉殿の幕下にその人ありと知られた和田左衛門尉義盛でござる。勝負いたさうか？見れば酷くお疲れのやうでもあるが、いさぎよく虜になられるか？

巴。（はツと面を上げ、髮をふり捌いて起上る）さては東國無双の勇士と聞及ぶ和田義盛どのか？　いかにも妾は木曾殿の隨身、巴にござりますぞ。

和田。（惚々と見入つて）…聞くにも優る美しい天晴な武者ぶりぢや、…そのふくやかさうな體に何十人が力があるとは何うも噓らしいわい、御身が鬼神と唄はれた木曾殿を手の中に丸められるので、それを傍から强力の女ぢやと囃やし立てるのではあるまいか？　義盛は何んだかいたいたしうて、手ごめにする氣にはなれぬ。

巴。（血走つた眼附で）木曾殿は妾の力を……天然に授つてこの體からわき上る强い力を愛でゝ下さつたのぢや。

和田。その木曾殿も、もう首になられた、誰のために軍をせられるのぢや、大人しく降參されたが善い、義盛よきに計らひますぞ。

巴。（驚愕の色）エ、木曾殿が？……それは眞實か？

和田。今し方、そこの先の粟津ヶ原で、深田に馬を乘入れて、身動きならぬ處を、飛んで來た流れ矢で、のど首深く射貫かれて、そのまゝ果敢ない御最後ぢや。

巴。エ…では先刻の勝鬨がそれか？…ア、木曾殿…木曾殿…アゝもう二度と再び此世では御目にかゝれぬか…。

和田。行つたものは、悲しんでも、悔んでも歸らぬ、だが御身のやうな美しい、天晴れな武者ぶりの女は何んな男でも珍重がる、捨てゝはをかぬ、捨てゝをくのは勿體ない、一たん、虜となつて鎌倉へ下られては何うぢや？　義盛誓つてお引受けせうが……？

巴。（歯がみする）エ、何の男も何の男も、人を乘る駒のやうに、道具のやうに扱はうとするのか？……無禮ぢやぞッ。

和田。イヤ、タヾの駒ではない、道具ではない、寶扱ひにするのぢや、義盛もこの寶なら手に入れたい所望ぢや。

巴。無禮者ッ。

和田。寶と云つて惡ければ、宿の妻にでも申受けたいと云直さう、妻を亡くして私も獨身ぢや、御身のやうに美しうて、強いで通つた女を女房に持ち、強い子供を設ければ、朝廷御守護にも、將軍家御奉公にも、代々御用に立ち、家は末永く榮えて行く、何うぢやな？

巴。いよ〱無禮ぢや、勝負せう（と大刀を振放つ）

和田。……こうなつては仕様もない……では勝負せう。だが刄物は止めて、組合ふ。

巴。組まう……。

和田。こゝらは物の具が散らばつて危い、そこの平地へ出やう。（組合つて、松原の蔭へ入る）

（郞黨等は、見入つてゐる）

○……ア、力が互角らしい、轉ろげ合つてゐる……。

○……ウム、轉ろげ合つてゐる。

○……ア、殿が上になられた、巴は地びたへ押へ附けられたぞ。

○……ウム、巴は、土を嘗めてゐるぞ、

(郎黨等互に苦笑)
○……ア、こん度は、殿が投げ出された……材木のやうに……。
○……成るほど、巴が馬乘になつた。
○……勇士もざまァないな。
○……殿が手を合せてゐるぞ。
○……そんな事はない……巴がヘンにニヤ〳〵笑つてゐるぜ……。
○……それは見違ひぢや。
○……イヤ、何んだか色目を使つてるやうだ……。
○……馬鹿もの、色目ぢやない、疲れて息をしてゐるのぢや。
○……ヤ、こん度は殿が見事にはね返された。
○……ア、殿が兩手で巴を抱き起して、黑髮の土を拂つてやられる。
○……何んだか變だな。
○……變だなァ。
○……ア、とう〳〵巴を縛られたぞ、やつぱり男が强い。
○……成る程な……
(巴、虜になつて出て來る)
和田。和田左衞門尉義盛、木曾殿の隨身、巴を生捕つたッ(高聲に叫ぶ)。

第二場

和田義盛館。

正面、壁代、衣桁、武具など飾る。廊下の突當りに杉戸、庭前には植込、飛石、倒れた石燈籠など、上手奥に、厩の棟など、土塀をめぐらせる。

朝比奈三郎義秀、烏帽子、狩衣、指貫で、廊下から入つて來る。廿歳餘、顔色赤白く、凛とした武張つた表情の美丈夫。體に肉の盛上つた樣子が、衣服の上からも目に附く。後から十七八歳の美しい侍女渚がついて來る。

義秀。母上はまだ弓場に居られるか？

侍女。ハイ、何時もの通り家中の若い姫御前たちをお相手に、弓術のお稽古をなさつてゐられます。

義秀。イヤ、御根氣の善いには、義秀恐れ入つたな、花合、扇合、香だの、雙六だの、自だらくな京都風が、鎌倉の女子供の身節に泌んでは、今にとんだ事になると、俄かのお思ひ立ちだから、何時までつゞくかと危んだがこの樣子ぢやモノになるかも知れんな？

侍女。御自分で汗を搾つて御手本をお見せ遊ばすのでございますから、教はる方もダン〳〵實が入つて參るやうでございます。

義秀。ウム、これからの女子は、何時も男子に負を取らぬだけの心構、身構が要ろうといふものぢや、母自慢をするではないが、巴御前と世に唄はれた丈の事はある。

侍女。お力にかけては、鎌倉中の男子方にも、前に立つ方はあるまいとかお噂して居ます。

義秀。近年、囚はれて阿佐利の妻になつた越後の板額どのも、評判の大力者ぢや、歳が若い丈に、母上よりも強いか知れぬ。

侍女。ア、あの板額さま？お強いよりも、お化のやうに醜いが評判でございます。

義秀。何時、戰爭が起るか知れぬ物騒な當世では、女も器量より力量ぢや、汝もチと弓術なり、馬術なり、習つては何う

ぢや？

侍女。ハイ……お館の御用を勤める妾風情にはそれ程の暇もございませず、それにあの、妾は……あの……（羞恥を含んで俯向く）。

義秀。（顔をのぞき込んで）あの？　何うしたといふのぢや？

侍女。……妾などはもう、……勿體ないが若様のやうなお強い、お立派な男子の方のお側にさへゐられますれば、外に何んにも……（そつとながし目に見る）

義秀。汝は何を云ふのぢや？

（侍女、俯向いてゐる）

義秀。用はない、下つて居れツ。

（巴が、タテ附袴をはいて、弓を片手に奥庭から現れる、侍女はあたふた急いで退場）。

義秀。母上、よく御精が出ますな、もうお稽古は終へましたか？

巴、オヽ義秀……一わたりは濟ませたが、後程他の番手の方が入代つて見える筈ぢや、日に日に形は附いて來るが、何を云うても、弓を射るなら空飛ぶ鳥や野を走る猪、鹿を的に、追ッ駈けうちにするでなうては、しんから汗が出ぬ、血がわかぬ。馬に乗るにも、芝生の馬場での鎧ぜめは曲藝めく、裸馬で裾野の原を横飛に飛び、丈より高い熊笹の中を篩ぬけにくゞり抜けるのが、身にもなり、力にもなる、やはり木曾が戀しい。（憧れの眼色）

義秀。（も憧れるやうに）私も母上の話に聞く木曾の奥へ一度行つて見たいと思ふて居ます。斧の目も入れぬ千年の杉栂の深う茂つた森や、水晶が溶けて流れるやうに透き通つた深い溪々や、それに御嶽が雲霧の中に突入つて聳り立つた眺めは何んとも云へぬ素晴らしさでございませうな？

巴。……オヽ、さういへば、私にはその懐かしい眺めが眼の前に浮んで來る……女童の唄ふ木曾節までが、耳の奥で鳴つてゐる、……そして二三十年の昔の何も彼もが……（眼中がうるんで來る）

義秀。（慰めるやうに）木曾の話が出ると、母上は始めは喜んで、後にはふさぎ出される、いつもの型通りぢや、もう止めませう、……先夜の地震で倒れた石燈籠が、まだあのままになつて居ますな？

巴。五十人か、百人の人夫を入れねば動かせまいと云ふ事なのでまだあのままぢや。

（義秀。身輕になつて、石燈籠を引起し、元の如く組立てる）

巴。（笑顔で見て）フーム……やはり私の子ぢや……巴の子ぢや……。

義秀。母上にも、これくらゐなもの……？

巴。（悲み喜びの交入つた表情）實をいへば昨夜もそつと一人で動かして見たが、足元が危ぶない。アヽ、私の力も衰へたと泣きましたぞ……けれども母の力は、子の力が受けついでゐる、うれしい……。

義秀、何に……母上がほんとうの元氣を出されたら、これくらゐの石塊は何んでもありませんぞ。

巴。さうかも知れぬ……父上は何處へ行かれたのか？　安念法師の謀反が曝露れてから、鎌倉中がとかく騒がしいに、舞とか蹴鞠とか、云うて毎日お行れるのは、腑に落ちぬ、私に隠してゐる事があるなら打ちあけてくれ。

義秀。イヤ、そんな事は……この間にも弓場で一稽古したい、母上も？

（巴、默つて頷く、二人連立つて入る）

（義盛半白髪、狩衣の端をふらつかせ、醉しれた體で、侍女諸に手を引かれながら、小唄口吟んで入り、倒れるやうに坐る）

義盛。アヽ、眞ツ晝間、チと、喰べ過ぎて醉うて了ふたぞ、何の一升や二升の酒で髪毛一すじの狂ひもなかつた義盛程の勇

士も、やはり蔵にはかなはぬのかな……冷水一つ持つて來いッ。

(侍女、渚、立ちかゝる)

義盛、(流眄にかけ)……ハハヽヽヽ、スラリとした後姿、バカに氣に入つたぞ……まア坐れッ……傍へ坐れ。

(と引よせる)

侍女、お冷水をと仰いまして……。

義盛。(髯の立つた頰をすり寄せて)まア善い、こゝに斯うして居れ、若い者の精氣を受けて、己も水々しく、も一度骨のずゐから若返つて來たいんだ。義盛このまま老ぼれて何うする? これから彼奴等を打倒すか? こちらが打倒されるか、二つに一つの生死の戰をやらうといふんだ、戰の首途ぢやぞ、汝の精氣を吸ひ取つてやりたい。

侍女。(顏色を動かし)エ……戰と仰ッると?

義盛。イヤ汝などの知つた事ぢやない、こつちの腹にある……女童の知らんでも善い事ぢや……。

侍女。殿樣、何卒お放し遊ばして……

義盛。年老だから嫌ふのか? 和田別當義盛も、老ひては、いゝ、はしたない女にまで恐毛を立てて、逃げられるのかな?

侍女。人目もございます、お許し遊ばしませ。

巴。(すつくと、庭前に立つ)何事でございます? 見てはゐられませぬ。

義盛。(振り向いて)ア、巴……そこに居たのか?

(侍女渚は逃るる如く退つて行く)

巴。(坐に上つて正面に坐る)そこに居たかでもございますまい? 故右府公の幕下にその人ありと知られた和田別當義盛ともあらう御方が、晝日中、酒に醉ひしれて館に歸られ、しかも相手もあらうに召使風情にしなだれかかるとは、氣で

も狂はれたか？　歳にお恥ぢなさるが善い、名にお恥ぢなさるが善い。

義盛。(肩肱張つて)汝などには、男子の胸の中が眞實に分らぬのぢや。外へ閾を跨げたら七人の敵どころではない、何千何百の敵が、今この鎌倉に鵜の目鷹の目でゐるか知れぬぞッ、曲つた事の嫌ひな和田一族は、曲つた鉤爪で引つかき廻して飽く事知らぬ慾の熊鷹、北條一門から睨まれ通しぢや、何時、喉骨に爪を立てられるか油斷はならぬ、こつちも手を拱いてヂッとしては馬鹿を見るが、迂濶に手出しするのはわなにかかりに行くも目前ぢやし、一族の頭領たる義盛は、酒を飮んでも熱鐵を呑む苦みぢやぞッ。

巴。では、昨日は荏柄の館、明日は土肥の館と、日々毎日の御會合は、たゞのお遊びで無うて、北條家へのお巧らみでもなさつてるのでございますか？まさかの時には私も力になりませうに、何卒打明けて云つて聞かせて下さいまし。

和田。シーッ……そんな事を大聲で怒鳴るから、談相手には出來ぬといふのぢや、女童の知る事ぢやァない。

巴。女童と一口に仰つても、今、鎌倉中の武士は、誰一人、尼將軍の前に頭が上らないのぢやございませぬか？

和田。(苦り切つて)さ、その尼將軍も、やつぱり相模守等におやつられてゐる傀儡ぢや。

巴。ア、さう聞けば口惜しい、女は賢さうでも、強うても、みんな男の手掌で弄ふ傀儡同前に見られてゐるのか？けれどもさう云ふ殿方が、敵の日に日に增長するのを眼前に見ながら逡巡許りなさつて、見て見ぬふりなさらうといふのは、餘程意氣地なしでございます、木曾殿は、えらいお方であつた、京都では亂暴な眞似もなされたが、それは京都のイヤに優しい腐れ切つた氣風が、木曾育ちの木曾殿の深山の中から生れたままの地肌に合はなかつたからでございます、院も右府公も眼中には置かれなかつた。

和田。(いきり立つて)いや、をけ〳〵、木曾殿木曾殿と、のろけを、今更ここへ持出す奴があるか？　二十年も三十年もの昔話ではないか？

巴。（若やいだ表情）私はいつそ、その昔が懐しうてなりませぬ、一しよに黒駒に跨つて、荒野原を馳けくらべした事もあつた……月の冴えた夜、お供をして、嶮はしい岩角で抱合つて、向の峯で羚羊の鳴く聲を聞いた事もあつた……。

和田。（慣れ上つて）ヤ、をけ〳〵……氣色が悪くなるわい……子供等に聞かれたら善い耻ざらしぢやらうが？

巴。（構付けず）木曾殿も京都では、色の生白い、爪紅さして綾錦にふわ〳〵と包まれた殿上方の姫をあれからそれへと追ッ馳け廻られた……口惜しいと思つたが、それでも直ぐに私を元のやうに可愛がられて、あの姫たちは京雛ぢや、見た目はチョッと綺麗でも、體に血が通うて居らぬ、ひどくさわればバラ〳〵に壊れさうだ、やつぱり汝は生きてゐる、木曾の檜のやうに、身から火を出す女ぢやと仰やつて。

義盛。（耳をふさぎながら）エ、をけといふに……やかましい……胸唾が走るわい。

巴。（獨語するやうに）……けれども戰の相談丈はなさらなかつた。唯何處へ行け、彼處へ行けと命けばかりなさつた……しまひには暇をやると仰つて乗る駒のやうに道具のやうに思はれたのは怨めしい……そればかりは口惜しい……。

義盛。（苦笑）女は、やはり乗る駒ぢや、道具ぢや、……汝なんか力が少しばかり強かつたといふ丈で、他の女と變つた事はないわい。

巴。イヤ、女を道具扱ひにするのは、今の世の男の邪見ぢや、それで通るものなら、女もやがて男を道具扱ひにしませうぞ。それはお互ひこぢや、若し女が居なかつたら子供は生れぬ。子供が生れねば人種は盡きる、男同士が慾を渇いて勝つた、負けたと戰をしても、後に人種がつづかねば何になりませう？馬鹿らしいと思ひます。

義盛。だから子を生む道具ぢやといふのぢや。三郎義秀のやうな勇士を生んだので、汝も役に立つてゐるわい。

巴。（誇るやうに）義秀の力は、私の力……母の力が傳はつたのでございます、殿こそ私のため、義秀のためには、道具ぢや。

義盛。(眞赤になつて)な？なにを申す？義秀の力は私の力‥‥父の力を傳へたのぢや。

巴。イヤ、巴の力が傳はつたのぢや、

義盛。私の力ぢや。

巴。イヤ、私の力ぢや。

義盛。(苦笑)汝は粟津の事を忘れたか？　歳の老り樣が強いわい。

巴。殿も昔話をなさる氣か？

義盛。(頷いて)ウム、いかにも斯うなつたら昔話もせにやならぬ。粟津ヶ原の一騎打ちで、手もなく取つて押へ附けられ、をめ〳〵と虜となつて鎌倉へしよつ引かれたのは誰ぢや？何んでも巴とかいふ女だつたと憶えてゐるが‥‥。

巴。(ふき出し笑)ホヽヽヽヽヽ、まア可笑しい‥‥可笑しうてならぬ‥‥男子といふものは甘いもんぢや。

義盛。(むつとする)何を無禮な？甘いとは何んだ？

巴。(顏を正面に見込んで)あの時の勝が、ほんとの勝と思ふて居られるのか？

義盛。(苦々しげに)女といふものは、腕で勝てねば口先で勝たうとする、今更何と云つてもダメな事ぢや。

巴。今までは默つて居たが、もう斯うなれば申します、‥‥あの時、私はいかにも疲れてはゐたが、殿くらゐの男にやすく〳〵組敷かれる程弱つては居ませぬ、一たん組敷かれたのをはね返すは何の苦できなかつたが、殿の顏の何處かに木曾殿の顏と似たところを見附けたので‥‥

義盛。(髪を逆立て)何をぬかし居る？

巴。木曾殿程の大將らしさとは似もつかぬが、内田の下郎根性とは違ふて、男子らしい男子といふものがみんな持つてゐる強さとでも云はふか、そんな強さが頰の肉置に、油切つて光つて出てゐた‥‥それについ魅かれたやうになつて、

いつそ縛られて上げやう——一しよに行かうといふ氣持で……。

和田。(苦が甘い表情)何に？頰の肉置？……油ぎつて光つて居た？馬鹿々々しい、負惜みを云ふな。

巴。負惜みではございませぬ、ほんとうの力づくなら、何時でも殿風情にひけは取りませぬ。

義盛。(片膝立て)何……いよ／＼無禮ぢや……堪忍ならぬ。

巴。(微笑)ほんとうの事でございます。

義盛。(起上る)さァ來い……腕で來いッ……。

(いきなり掴みかかる……)

巴。では御免……(ねぢ返して、暫らくの間からみ合ふ、義盛やがて巴に首根子を取つて押へられる)

巴。いかがでございまする？

義盛。馬鹿めッ(はね返さうとする)

巴。動けまするか？

義盛。馬鹿めッ(はね返さうとする)

義秀。(急いで馳寄る)これはまァ何うなされました？

巴。(手を放して)何んでもない……あの、昔話に身が入り過ぎて……

義盛。(居直りながら)義秀見たか？

義秀。何んでございます？

義盛。(わざとらしく笑ふ)何んでもない……何んでもない……武術の型を取らせて見たんぢや。

義秀。何事かと思ふて、あわて丶飛んで來ました。……ア、母上、何うなされました？泣いてゐられるではありませんか

か？

義盛。何を泣く事があるか？

巴。 あの時より、殿の力がぐつと弱つたのがつい悲しうなりました。…もつと、もつと、お強かつたと憶えて居ます
のに…

義盛。今のは、負けてやつたんだぞ。

侍。(入來る)阿佐利殿が御夫婦で御越しでございまするが…？

義盛。何？ 板額どのも見えたか？ 通せッ。

侍。は——…(退く)

義秀。(耳語するやうに) 阿佐利殿も味方に附けられては？

(義盛頷く)

巴。 味方に附けるとは…何事でございますか？

義盛。イヤ、女童の知る事ぢやァない。

巴。女童でございますつて？

義秀。いづれ母上にも打明けられませう。

(阿佐利與市義遠、顔の醜い、偉大な體格の妻板額を連れて入つて來る)

義遠。暫らく甲斐國に行つて居ましたが鎌倉とかく物騒の様子で急いで立歸りました。お館の前を通りかかると、つい足
が寄つたわけで。

義盛。それは〳〵…近頃の鎌倉は、今日は人の身、明日は誰が身、何時誰が何うなるか、チツとも氣は許せませぬ故、

唯チッとして居るのは、馬鹿か、それとも世捨人でござらうな。

義遠。それもさうぢやが、ウツカリ一方に味方したら拔差しならぬ酷い目に逢ひさうぢや、まァこんな時には落着いて殊更に引込んで居るのがましでござらう。

義盛。日和見か？それもりこうのやうだがしまひには一番馬鹿を見て、武士が戰場に屍をさらす事もならず、後架で首吊る恥を見る事にならうも知れませぬぞハヽヽヽ。

板額。全く仰る通りにございます、今日のやうに、權勢を笠に着て、仕たい三昧、やりたい放題を勝手氣まゝに振舞ふ一黨が蔓り切つてゐるのを、默つて見てゐるのは臆病武士、腰拔武士、でございます、イヤ、私はそんなものは武士ではない、男子でもないと思ひまする。

義盛。さすがは謀反人。城資永の伯母御であられるわい、ハヽヽヽ。

巴。眞實でございます、太平がつゞくにつれて、鎌倉武士も次第に骨がなまり、腕が鈍つて意地さへも無うなつて行くやうでございます、このまゝでは、今に男が男でない、女が女でない事になりませう。

義秀。(苦笑) 義秀がこゝにゐる事を忘れて下さいますな、チッとしては居れぬ、御免。

(退場)

板額。善い御子樣を御持ちでございます、お羨ましい。

義遠。イヤ、實にお羨ましい事ぢや、それがしも御存の通り、貴殿御夫婦にあやかつて、力の強い女房に力の強い子寶を設けやうために、選りに選つて、この板額を申受けましたが、まだ子供も生れず、何うした事かと思案して居まする。

義盛。(苦笑) 今に、お望み通りになるでござらう。

板額。(膝のり出し) まァ聞いて下さいませ。阿佐利殿は故賴家將軍のお前で、あれ程立派な口を利いて、私を引取つて置

きながら、三年立つても子寶が出來ぬと、それを口實にこの頃は白拍子風情にうつゝを拔かして始末に了へないのでございます。甲斐國にはその白拍子と一しよに行つてゐたとかの噂を聞きました、こなたのやうに二十年も三十年も、夫婦喧嘩一つなされず立派に添遂げてゐられるのに、阿佐利殿は何んといふ不實ものでございませう、子寶のないのはどちらの科か分りませぬ、私は腹立たしうて‥‥。

義遠。あの事は一切素つぱぬかぬ約束だつたに、女といふものは何處までも猿の智慧才覺ぢや、巴御前と汝と一つ口に云へるか、鏡を見ぬ汝でもあるまいに‥‥‥？

板額。（つんとして）ハイ、私の不器量は知れて居ます、それで私は弓矢神を一生の夫と誓を立て、獨身で暮し通す覺悟で、甥の資永の城に栖籠つて居ました。藤澤四郎といふ卑怯な武士が、城の後ろへ廻つて遠矢で兩の股を射貫いた爲めに、私は恥しい囚はれの身になつて鎌倉へ引かれて來ました。この上生耻をさらすが忌さに若し殺されねばいつそ自害せうとまで、思ひきめてゐると、阿佐利殿が強つての願ひで‥‥。

義遠。コレ〳〵、どつちが恩に着せれば善いのぢや、和田公も御存じの通り、それがしが將軍家にお願ひしたればこれ、汝の生命も助かつたのぢや、汝の生命の恩人を誰だと思ふのか？

板額。（冷やかに）助かり度うもない生命を助けたからとて恩人とは云はれませぬ、唯縁あつて、妻となり、夫となつたら、善う仕へ、善ういたはり、恩をかけ合ふても、互に恩ぢやと云はぬのがほんとうの夫婦の道でございませう。その時こそ私は默つてゐても殿に助けて貰ふた、ほんとうに生甲斐があつた、二つとない恩人ぢやと心の中で拜みもしませう、それに何ぞや殿は、私を生殺し同樣な目に逢はせて、勝手な眞似ばかりやつて？

巴。ほんとうに、板額樣の仰る通り、男ほど身勝手なものはございませぬ、こちらでわざと負けて上げても、それも知らんでほんとうに勝つたやうに自惚れる、力の強い子が生れると、産みの苦も知らぬ男が、自分の力ばかりで、出來たやう

に思上る。

義盛。コレ〳〵阿佐利殿の前で何をほざく、女ほど身の程も知らんで、チョッとした事も、餘程大手柄でもやつたやうに慢心するものはないのぢや、謹めッ。

義遠。全く仰せの通りぢや、それも巴御前程のお容貌で、又義秀殿のやうな優れたお子資を持たれゝば、申分もありませぬがそれがしのは、鵜のまねをした烏で、自分ながらみじめなやうな仕末になつたものだと悔んで了ひまして……

巴。まアあんまりな事を仰います?

板額。(決日立つて)人様の前で、こんなにまで云はれては、私はこのまゝ生きては居られませぬ。しかし私が死ぬ時は殿も生かしてはをきませぬぞ、私の不器量は始めから知れてゐると、何度申したら善いのでございます。……

義盛。少々の不器量は、お強い力の方で埋め合せがついて居る、それを今更かれこれ云はれるのは、阿佐利殿にも似合ひませぬな。

巴。　容貌よりも心、今時は心よりも力が出世の資でございませうに……。

義遠。イヤ、ウツカリさう思うて、とんだものを背負込んだのでござる、窘めるには、こんな時でなければ善い折がないから申すのぢやが、前將軍家頼朝卿も、この女を御覧あつて、力量は恐ろしいが、無双の朝敵で、無類の醜女ぢや、契を結ぶものもあるまいに、義遠は蓼くふ蟲ぢやと、から〳〵お笑ひ遊された……

義盛。昔の事はあまり云出さぬが善うござる。

板額。(悄として)、白拍子の、くね〳〵した蛇のやうな細腕に卷かれて寢るのが、ひよわい男子には似合うて居ませうぞ。

義遠。白拍子などの事を、かゝるお館で口へ出すものではないといふに?

板額。蓼喰ふ蟲ぢやもあんまり無禮ではございませぬか?自分の恥をしら〴〵しい。

義遠。ひよわい男子などとは、無禮千萬ぢや。
板額。殿の欲しがられる力の强い子寶が設けられぬのも、やつぱり殿がひよわいからぢや。
巴。板額樣が惡いとも定まりますまい。
義盛。さア、どちらが惡いのか？
義遠。イヤ、この女が石女なのぢや。
板額。殿がひよわいからぢや。
義遠。又してもひよわいとは無禮至極な、それがしも鎌倉の勇士と唄はれてゐる男ぢやぞ。（立ちかゝる）
板額。何んな勇士でございますか？（腕を掴む）
義遠。馬鹿…放せ…放せッ（振切らうとする）
板額。動けますまいが？
義遠。…止めろ…放せッ…和田殿の前で何をする？
巴。何處の夫でも、みな同じ樣な事を申します、男子は口でいふほどの勇士でもないやうでございます。
義遠。コレ…まだ放し居らんか？
板額。白拍子なら何時までも默つてゐられやうに…（いよ〳〵堅く兩腕をつかむ）
義盛。もう許して上げられい、女がさう强く出ては大變ぢや、女は男の前では謙下つてゐなければ、天下の事は治まつて行かぬ。
巴。でも世の中は强い者勝ちなのに、何故女は强くても、ひよわい男の下に屈み込んで居なければならないのでございませう、道具扱ひにされねばならないのでございませう？

板額。このまゝでは堪へられませぬ、今に、私たちは一しよになつて、男士を道具扱ひにする世の中にしたいものでござゐます、斯のやうに…（義遠をからかふ）

義遠。和田殿、助けて下さい――…・殺されさうぢや。

義盛。放されい…放されぬか？　武士を…、男を馬鹿にされ過ぎる、斯うなれば腕づくぢや（起つて板額の腕をつかむ。）

巴。　男子が男子同士なら、女も女同士じや。殿、お控へなされい。

義盛。武士は相見互ぢや。

義遠。助けて下されい――殺されさうぢや。

義盛。鎌倉の勇士、和田義盛を忘れられたか？

（義盛、板額を取つて押へやうとする、巴は義盛を引別けやうとする、暫らく四つ巴のからみ合が始まる、男二人がだん〳〵女二人に壓迫されて行く珍な光景）

義秀。（忙しげにかけ來る）父上…・父上…・とう〳〵大事になりましたぞ、如何なされました？

（四人は活人畫の如く暫らく立すくむ）

義秀。もう一刻もウカ〳〵しては居られませぬぞ、安念法師の謀反に一味の嫌疑で、四郎義直、五郎義重始め、和田平太胤長の館へまで手が入つて、唯今、みな、鎌倉御所へ引立てゝ行かれました、大事を聞附けて兄常盛、朝盛、一門一族がここへ馳附るけにございます。

義盛。（驚いて）何に？それはいよ〳〵大事になつたな。

巴。　エ…・では、あの安念法師の謀反にかゝり合ひがあつたのでございますか？　少つとも打明けて下さらんで…・

（怨み顔）

義遠。（あわてゝ）これは斯うしては居られぬ。早速、館へ歸らう。こんな時には汝が傍にゐれば心丈夫ぢやぞ。

板額。（勇氣づいて）斯うなつては、飽くまで權勢を笠に着て、人を人とも思はぬ北條一黨を打滅ぼす時が來ましたのぢや、逡巡してはゐられぬ。殿も御一しよに……。

義遠。（逡巡して）イヤ〳〵、ウッカリ此處にゐてはかゝり合ひにならう。さア一しよに歸れッ（寄つて來る）

板額。（振切つて）、私は歸りませぬ。こゝが死場所だ。

義遠。夫のいふ事を聞かぬ氣か？

板額。私は再び弓矢が取りたい、暗い館の隅で、日々毎日くよ〳〵思うて暮らすのは死ぬより辛い。

義遠。我儘を申すな？

板額。腰ぬけ武士は嫌ひぢや、ひよわい男子は白拍子に介抱させるが善い。

義遠。（憤激）何、何を申す？……まア勝手にするが善い、緣は切るぞ。（退く）

板額。私はやつぱり、弓矢神を一生の夫に持つ運命に生れ附いた女だつた。一時でも弓矢神との誓を忘れたのが惡かつた、こん度こそほんとうに一身を犧牲に捧げます……一しよに戰ひませう。

義盛。（感激）忝い……斯うなつては軍は避けられまい、板額殿に助けてもらへば千人力ぢや。

（常盛、朝盛、義信、秀盛、土屋大學、澁谷次郎、中山四郎、土肥惟平、梶原朝景等、一門一族十數人、ドヤ〳〵と庭先から入つて來る）

常盛。委細は義秀が申上げたでございませう。卽刻、御所へ參向して、四郎義直・五郎義重、竝に從柄平太織長を貰ひ受けねばなりますまい。それとも、まつしぐらに、北條の館へ亂入いたしませうか？

朝盛。最早のつぴきならぬ場合、何分の御差圖を願ひたい。

義秀。(輕やかに、鐵撥棒をついて出て來る)魁して北條館の鐵門を打破りませうぞ、戰は機先を制するにある。

義盛。(凛然たる口調)いやいやまつてはならぬ、とにかく一應は御所へ參向、一同をもらひ受ける嘆願をして見やう、場合によつてはその機を外づさず、彼奴の館へ亂入するか、或は、一先づこゝまで引上げて歸るか……すべては己に任せい。

義秀。いづれにしても、一刻も猶豫なりませぬぞ。

義盛。では皆、門で待て……直ぐさま參向する、義秀その鐵撥棒を持出すのはまだ早いぞ……

巴。私が預つてをきませう(取上る)

(板額。弓に矢を番へて身構へする)

義盛。何をせられる?

板額。鼠が居ます(杉戸に向つて矢を放つ、キヤツと叫ぶ聲、走つて行つて胸を射貫れた侍女諸を引ずつて來る、一同驚く)

板額。私は先刻から、この隅がコトコトと音がするので、氣にかけて居ました。美しい鼠とは思ひがけなかつたが……

巴。では北條の間諜でございましたか?(懐をさがすと、密書が現れる、一同に示す)

義盛。ウム、首途の血祭ぢや……

(庭に立つた一同退場)

義盛。(身支度して)……二度歸るか、何うか分らぬ。今までは何んとも思はなかつたが、別れるとなると、汝に心から禮が云ひたい、何度禮を云つても云足らぬ氣がする。よく仕へてくれた、よく盡してくれた……淋い……

巴。(涙ぐんで)……さう仰られると、云ひ度い事も云へなうなります……

義盛。さらばぢや……後を頼んだぞヲ。

巴。御心置なく行つて來られませへ。

（義盛、退場）

巴。　ア・・・木曾殿とも別れ、今又義盛殿とも別れるのか？　人の世は何んといふ果敢ないものであらう、恋とは何んと云ふ不甲斐ないものであらう。　ア・・・私はいつそ木曾の深山の檜が羨ましい、默つて火を出して、默つて身を焼いたがましぢや。

板額。　けれども生涯にたつた一度でもアヽして、やさしい言葉をかけてくれる夫があるのは、私、羨ましい、巴御前、私は越後の城の隅の石になりたかつた、叩かれても、蹴られても、何んとも思はずにゐられませうに・・・・

巴。　（元氣づいて）ア、お互に、弱い女氣を出してはなりませぬぞ、お互に强い力のある女ぢや、男よりも强い女でございますぞ。

板額。（頷いて）ア、さうでございました・・・私たちは、これから憎い敵を相手に・・・男を相手に戰はねばならなかつた。

侍。　（飛んで來る）やつて參りました・・・北條方の軍勢が、家さがしだと云つて亂入いたしました・・・

（二人身構する、板額は長卷、巴は鐵撮棒を取つて立つ）

北條方の軍兵頭。　家さがしぢや、どけ／＼。

（數十人が我がちに狼藉を始めかける）

巴。　（聲高く）家さがしされる覺はない、靜かに引取られぬか。

軍兵頭。　御所方からのお言附ぢや、無禮されるな。

巴。　御所方とは名ばかり、北條の手先であらうが？

軍兵頭。　イヤ。　尼將軍のお言附ぢや。

巴。　その尼將軍も、相模守義時の手先であやつられる傀儡（でく）であられる、女の智慧や力が何時までも、男の我儘勝手に使

はれては、世の中は暗ぢや、今こそ巴は起つてこの敵と戰ふのぢや、男と戰ふのぢや。

板額。この板額も巴御前と一つ心で戰ふのぢや、寄るものは目にもの見せやうぞ。女のほんとうの力が知りたくば寄せて來いッ。

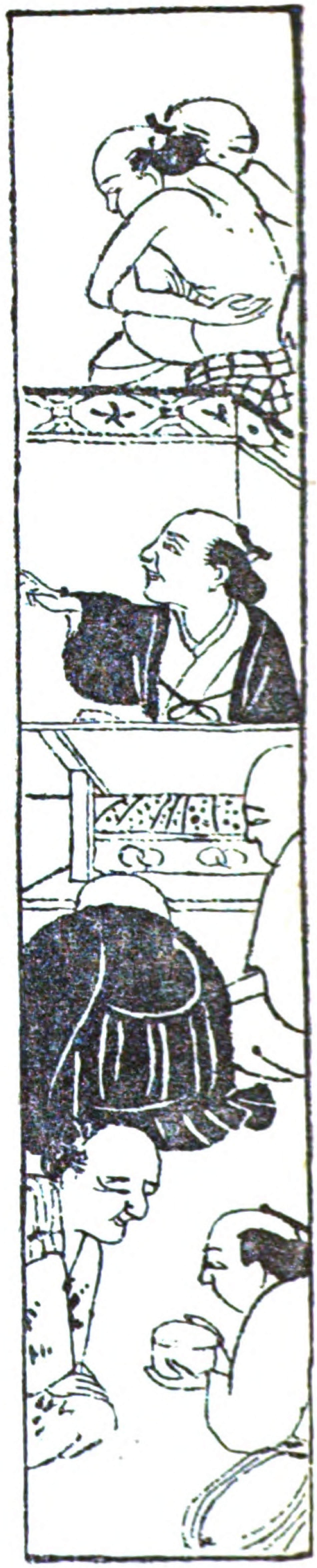
巴。世の暗を明るくする天照皇大神は我等女の先祖神ぢや、犧牲になりたくば來いッ。

軍兵頭。ほざくな、ほざくな…からめ取つて手柄にするんだ、かゝれ〱。

軍兵等恐る〱打ちかゝる。巴は鐵撮棒を輕々と揮ひ、板額は長卷を閃めかせて、多勢の軍兵を上手と下手との土塀の壁際にヂリ〱と壓迫する、軍兵等は戰き慄えてバタ〱と地上に平伏する。

巴、板額は二人の女王の如く靜かに笑つて舞臺に立つ。

――カーテン――



近世畸人傳

逍遥

登場人物

柳澤權太夫（里恭、號淇園）五十四歲
同　夫人　八重、四十歲以上
同　第二女（小孃）きみ、十歲ぐらゐ
同　妾　つや、二十五六歲
同　侍女　さよ、十七八歲

同　侍女　甲、十八歳以上
同　侍女　乙、同　前
同　侍女　丙、同　前
同　門人　石澤郡次兵衞、六十二三歳
同　若黨　作藏、三十歳以上
同　仲間　良助、四十歳以上
同　小野郎、林彌、十三四歳

池野大雅堂(通稱周平、別號待賈堂)、三十四歳
同　妻　お町(號玉瀾)、三十歳

柳澤家食客、浪人相良東馬、四十五六歳
同　江戸呉服屋富田屋の勘當息子惣治郎、二十五六歳
同　三代目都一中の三味線彈き新六の弟庄八、三十歳位
同　或表具師の三男文三、二十歳
同　老舗家由直瀬僻堂、六十歳位
同　狂歌師茶樂、七十歳位
同　江戸の大工入れ墨の勘太、三十歳以上

同　もと手品師の内弟子チボ鶴、十三歳
同　版木師某、五十歳位
同　跛足の輕業師某、五十五六歳
同　其小倅某、十一二歳
同　鑄物師某、四十五六歳
同　力士讃岐、三十歳以上
同　力士中國、二十八九歳
江戸の骨董商近江屋久右衛門、六十歳以上
同　女　くめ、十八歳
油ノ小路家の青侍、宮原房之進、四十歳以上
紙問屋野田新の丁稚由松、十二三歳
もと舞の師匠、乞食婆、小勝、七十歳以上

以上　三十三人

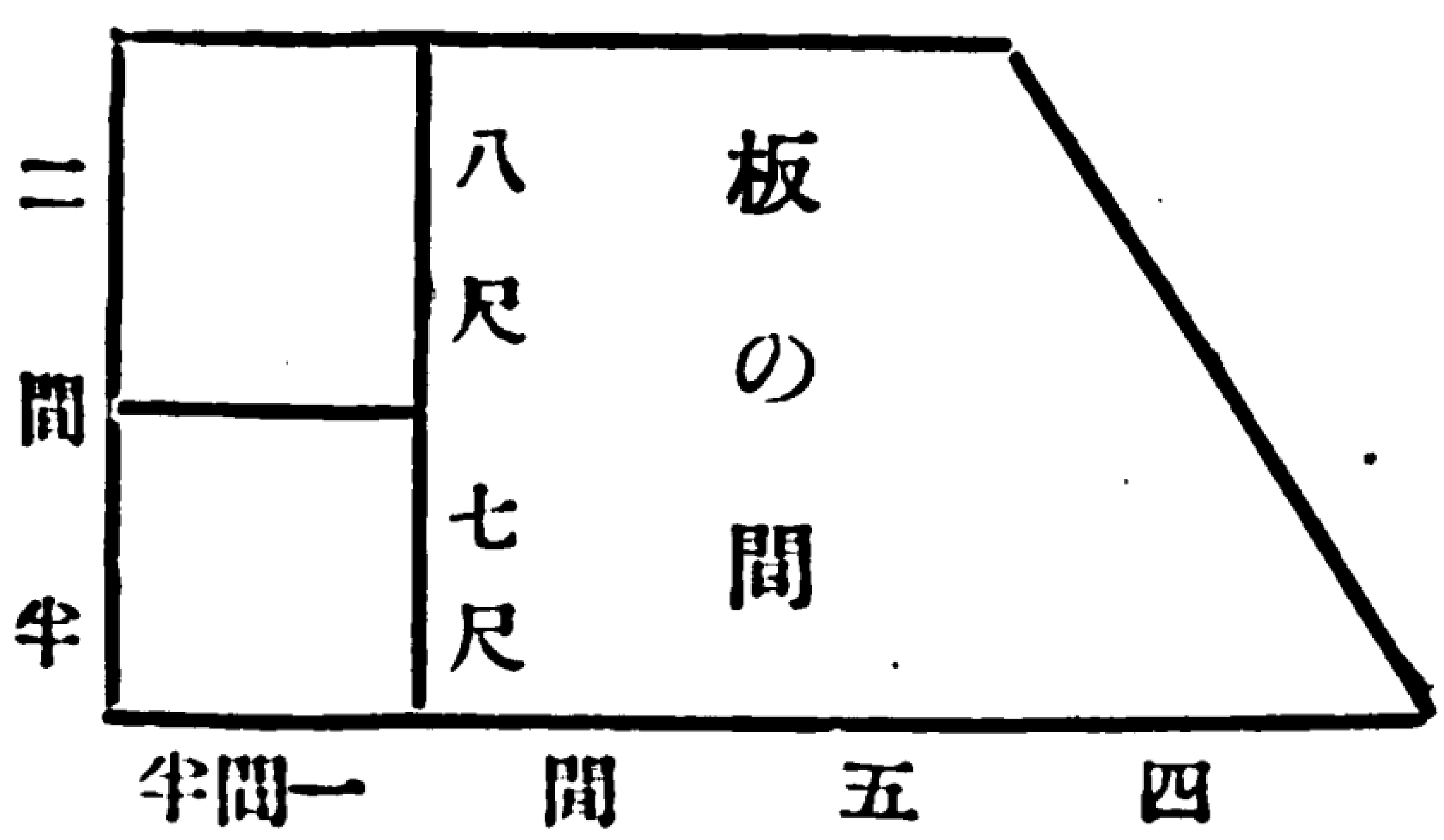
時代　寶曆六年三月六日より十日まで

實傳に依ると、此年、妾三代の腹に四男昌浦生まるとある。

序幕

其一　柳澤家後園內、武藝道場の場

舞臺や、上手寄り、四五間の間の、正面と上手とを板羽目にて見切る。すべて平舞臺。處々に高窓を取り附ける。下手には八尺に九尺の常足の二重を附け添へる。その二重には柱を立て、正面に肱掛け窓を取り附け、薄縁りを敷き、綟子張りの障子を隔てゝ、其前七尺に一間半の處を土間の心。其下手に出入口、引戸附き、但しいつも明け放したまゝ。此建物の上下及び奥の方は當邸の後園の心。カキワリの植ゑ込み。丸物の立木も一二本。



右をざっと平面圖にすれば上の如し。

すべて大和國、郡山城主、柳澤家の國家老、同姓權太夫里恭（號淇園）邸內の武藝の道場。撃劍、槍術、柔道、いづれにも共通と見え、正面の上手寄りの羽目に、ボタン槍だの、木刀だのが幾本も掛けてあり、尚ほ上手の羽目にくッつけて五六疊敷きほどの處へ、柔道用の疊を約十餘疊分や、不規則に二疊づつ積み上げてある。

右の疊の上に當家の食客五人が、車座になつて、オランダ骨牌で、勝負事をしてゐる。

其一人は自稱劍客の九州浪人、名は相良東馬（齡四十五六）、小男だが頰髭はいかめしい。額に刀創がある。第二は體はよぼついてゐるが、口は達者な狂歌師茶樂（七十位）、羽織、

着流し、坊主頭。其三は半病人らしい錺物師(四十五六)。其四は板木師(五十位)、是れも病弱さうな男。其五は元は手品師の内弟子、チボ組、狡猾さうな小僧(十三歳)。此五人は端下錢ではあるが、賭け錢をしてやつてゐるので、めい／＼眞劍である。「チョッ！　しもた！」とか、「や、こんどはえいぞ。」とか、「や、わいどんの手にそいがあつたか？」とか、「お、ポントでポーンとやられたかいな！」とか、稀に捨ゼリフをいふこともあるが、概して無言で、カルタを抛げる音のはうが寧ろ耳立つて聞える。

中央の板敷きに居る三人も同じく當家の食客。其一は江戸の富田屋といふ相應な身代の呉服商の勘當息子、惣治郎(二十五六)と三代目都一中の三味線彈き新六の弟庄八(三十歳ぐらゐ)と或表具師の三男文三(二十歳)とである。庄八は兄貴が一中に附いて江戸へ下つた不在中に大ぶ不しだらがあつて、兄に勘當され、喰ひつめて、こゝへ來てゐるのであり、文三とても似た經歴。此三人は來る十日に、當邸で妾腹の四男の誕生祝ひがあるので、其餘興に素人歌舞伎を一幕出して、女中連をアッといはせようといふ魂膽。で、江戸上りの中村七三郎の當り藝「傾城淺間ヶ嶽」の稽古最中。惣治郎が巴之丞、文三が逢州の寢、小唄は庄八。

下手の二重(渡縁り敷き)の肱掛け窓の際にも同じく當家の食客が三人。一人は江戸の喰ひ詰め大工、入れ墨の勘太(三十歳以上)、二は跛足の輕業師某(五十五六)、三は其小倅某(十一二歳)。三人とも見物に後ろを見せて立ちかゝりをり、庭のはうを見てゐる心で、時々「おッと／＼！」とか、「殘った／＼！」とか、「はッけよんや！」とか、「讃岐、負けるな！」とか、「中國々々！」とか彌次つてゐる。見物には見えぬが、すぐ向うの庭内で同じく食客の力士二人(一人は呼び名讃岐、一人は中國)が相撲を取つてゐるのである。さうして當家の曲直瀨僻堂といふ老人が、物好きにも、其行司をしたり世話をやいたりしてゐる。

時は寶暦六年三月六日(上巳の節句の後三日)である。

木がはひると、幕のあかぬうちに、次ぎの小唄「問うてたもつて嬉しやな、云々」を「いとしき殿のいとしぼく」のカヽりまで聞かせて、あとは木なしにて幕をあける。

ト文三はぞろりとした着流し、傾城逢州の鬘が火鉢から出た、例の書面通りのポーズで立身。すぐ其前に銅の獅嚙火鉢が置いてある。惣治郎は其下手よきところに折り敷き、片膝を立てゝ、刀の柄に手を掛けて見あげてゐる。庄八少し離れて上手に坐り、彈き語り。

庄　（小唄）「……いとしき殿のいとしぼく、たんと心を盡したわいの。」

惣　「むゝ、さては逢州か？　何とて迷うて、是れへは出た？」

文　「そなたいとしさに。逢ひたうて、見たうて、語りたうて、來たわいの……」

文三しきりに科をして、大間延びにセリフをいふ。

惣　あゝ、いけない〳〵！　さうへな〳〵と、色ッぽくシナをしちゃ駄目だよ。いけない〳〵。幽靈だよ。怨んでゐるんだよ。……やり直し〳〵！

カゲを彈いてゐた庄八が、又改めて「問うてたもつて嬉しやな」と彈きかける。

ト惣治郎とめて

惣　まつたり〳〵！　おれのセリフからやり直さう。……い、かい？　……「やア、何者ぢや〳〵？」

庄　（小唄）「問うてたもつて嬉しやな！　問はれて今の恥かしや。浮名にも換へ、身に換へて、いとしき殿のいとしぼく、たんと心を盡したわいの。

惣　〈むゝ、さては遠州か？　何とて迷うて、是れへは出た？」

此間に下手の肱掛けの三人、上手のカルタの五人、それ〴〵捨ぜりフをいふこと。

文　〈そなたいとしさに。迷ひたうて、見たうて……

ト のろいチンボでいひかける。此以前、下手の奥から當家の小野郎林彌(十二三歳)が手に狀箱を持ち、出で來り、開け放してある入り口で呼ぶ。

林　惣治さん〳〵……あんたのとこへ狀！……狀や〳〵！……あんた聾かいな？……どうつんぼう！

惣　(やつと聞きつけて)うるせえなア！　用ならこゝへ來ていひなよ。

林　あんたのとこへ狀や。

惣　なに？　狀？……こゝへ持つて來てくれたまへ。

林　無精者やなア！

ト内に入りて狀を渡す。惣治郎は折り敗いたまゝ、すぐ狀箱をあけ、驚く思入れ。あわたゞしく讀み了つて

惣　使ひはまだ待つてるかい？

林　うん。返事が貰ひたい言うてまんのや。

惣　よし。今すぐに返事を書く。

ト庄八、文三にはかまはず、そは〳〵して小野郎と共に出ていつてしまふ。殘つた二人は呆れて見送つてゐる。

此間に下手肱掛けの三人は「殘つた〳〵！」「まだ〳〵！」などと捨ぜりフをいふ。

文　どうしたんやろ！　あほらしい！　辨慶の立往生いふことは聞いてまんけれど、幽靈の立往生はわてが皮切りや。何

でまアあないにそは〱しなはるのやろ？

庄　(考へて)事によると、お的から旨い返事が來たのかも知れん。

文　お的とは何や？

庄　ほら先度話したやろ、江戸の道具屋のいとはんの事。

文　うん。稽古所とやらで、あの勘當はんと出來あうて、それが原で、内が揉めて、初手はえいとこのボンチであつたあの勘當はんが、江戸にはをられんやうになつて……、

庄　勘當々々と、さう大きな聲で當て附けずにおいてや。つい御近所にも兄者に勘當された若いお方はんがゐやはるよつてなア。

文　ほんまに其いとはんから文が來たのやろか？

庄　きつと來たのや。先度出しなはれたあの文の返事が來たのや。

文　して見ると、惣治さんは巴之丞そこのけの色男やなア！

庄　時に、きた〱いうてゐたら、どうやら腹がちィとばかり北山しぐれになつて來たがな。町へ往て、何かくうて來やないか？　まだ晩まゝにはよつぽど間があらうさかい。それにあの吝い御用人のおあてがひぢや、不味うて〱、けふは迚も辛抱出來へん。

文　そやなア！　お節句に貰うた御祝儀の殘りがあるさかい、何ぞ旨い物二人して奢ろか？

庄　二人で出しあうたら、この町でなら、お大盡や。さ、はよ往こ。

二人はそこ〱に三味線其他を方附けておいて出てゆく。

此途端、肱掛けの三人は、大きな聲でしゃべり出す。

小作　やア、讃岐がえらい大けな物持つて來よつた！

輕　ありやお庭の石燈籠の脚やないか？

勘　わかつた〱！　今度は力持をしようてんだ。

輕　どえらい力や！　五十貫目ぢやきくまいに、平氣で持つて來よつた。

勘　僻堂さんも、いゝ年をして、いゝ氣なもんだ。行司になつたり、頭取になつたりだ。はゝゝゝ！

此うち上手のカルタ連中が何かいさかひをはじめる。

浪、相　こら、チボッ、なでそぎゃんわるか事すッか？　不正な事すッな。

チボ甲　不正な事なんかしやしまへんがな。

浪、相　何せんことがあるかッ！　此狡猾奴！

ト出しぬけに横面を一つぶつ。他の三人が中へ入る。

チボ　あ、いた！……えい、いたいがな！　亂暴な事しやはる。何でわしをぶちなはるのや？　不正な事なんかしやへんのに。

浪、相　だまれ！　先刻からいぶかしゆ思うて、注意しとるとも知らんで、今も又やりをつた。この盗人丁稚め！

チボ　盗人とは何やい？　證據もないのに、いひがかりしやはるあんたこそゆすりや！

浪、相　なにを！

ト浪人は立ち上る。皆々も立ちて双方をなだめる。

チボ　(逃げ腰になりながら)腰拔け侍ひの喰ひ詰め浪人め！

浪、相　くひつめ浪人？　おどれ、腰拔けとぬかしをつたな！

ト逃げるチボを追ッかけて引ッ捕へる。皆々とめる。

狂、茶坊　まアく！　そんな手荒な事をなさるな。……チボ公もどうしたものぢや。早すなほにあやまるがえいわな。

浪、相　くやつは、以前は品玉つかひの内弟子ぢやつたばッてん、手癖がわるかけん、チボになり下りをつたちふを、こゝの主人公に救はれをつたやつぢや。いまだに詐欺を働きをる。盗人根性がなほりをらんかッ、おどれ！

ト又一つぶつ。チボも負けてゐず、相良の手へ喰み附く。アッといつて手を離す。トすぐに相良の股の間へ飛び込んで急所を掴まうとする。立廻りになる。皆々取りさへる。

此うち賄掛けの連中も騒ぎを聞きつけて取りさへに來る。

皆々　まアさく！

勘　(相良をおしへだてゝ)これさ、まア、お待ちなせえ。何をしたんだか知らねえが、お前さんもあんまり大人氣ねえぢやねえか？　赤んぼ同然な者を相手に暴力三昧をするなんざ、大人氣ねえにも程があらア！

相　何があんまりぢや？　大人氣ないとは何ぢや？　不正な事しをつたけん、以後の見せしめの爲に、折檻しちよるんぢや。……(チボに)こん不正奴！

ト又チボにかゝらうとするのを押戻しながら

論　こうく、不正々々とおいひなさるけれどね、洗ひ立てをすりや、此邸に食客ッてる者に、不正でねえ者は、只の一人だつておりやしねえよ。お前さんだつて、あんまり不正ばなれのした人間でもあるめえ。

相　や、何ちふか？　おいを不正な人間ちふか？　忝くも鍋島さま御分家に於て劍道の師範番仰せ附かつちよつた相良東馬ちふことを忘れをつたか、おどれ？

論　へん、人間の四半分が聞いて呆れら！　相良東馬なんて、名前が職過ぎらア！　根から頓馬とでも改名すればいゝ。

……な、な……

皆々氣を揉みはじめる。

皆　これさ／＼！

勘　なま兵法が大恥の元、それを遺恨に、兄弟子とやら、蟹弟子とやらを騙し打にして逃げて來た間抜とおかしくて腰拔け侍ひめ！　昔の芝居なら、きつと大詰めで「おのれ、敵、思ひ知つたか」か何かで以て、見物に嬉しがられて、なーなきめる玉だ。

皆　これさ／＼！

相　なに。腰拔け侍ひちふか？　生兵法ぢやッ？　そぎやんいへば。もはや堪忍相ならん！

ト羽目に掛けてある木刀を取らうとする。皆々とめる。

勘　か、か、堪忍が出來ざア。どうする氣だ？　しやらくせえことをぬかすない！

トいきなり鉢卷をして兩肌をぬぎ、自慢の入れ墨を見せる。

茶　まア、これさ／＼！

勘　(とめ手が多いので、いよ／＼猛り立つて)やい、へちやもくれ、おれをだれだと思やアがる？　憚ンながら、お粗末ながら、入れ墨の勘太だ。チヨチ／＼アワヽの時分から、公方さまのお膝元で、うぬらの背めて見たこともねえ玉川上水ッてやつをふんだんに召し上つてお育ち遊ばした特製別誂への東ッ子様だ！……ひや……

茶　これさ／＼！　仲裁に入りながら、下手な按摩取りになつちやア困るぢやないか？　まアさ／＼！

勘　ひやく／＼、ひやく年ばかしも前に生れてりやア、憚ンながら幡隨院の親分の三とは下らねえ子分になつて、唐犬の權兵衞や夢の市郎兵衞を兄弟扱ひにしてるようて大工にやをしいお兄イさんだ！

此うち相良は止める皆々をおしのけて、とう〳〵木刀を取りおろして來て

相　こン氣ちぎやい、まだそぎやん事いふかッ！

ト立ちかゝる。

皆々　まアさ〳〵！

勘　さ、矢でも鐵砲でも持つて來い。倂ンながら、氣が早くッて、向う見ずで……

茶　これさ〳〵！

勘　ち、ち、ちッとばかしそゝッかしいのが、き、き、疵に玉ぢやアねえ、玉に疵だが……

皆々　まアさ〳〵！

勘　其代り、喧嘩となりや、いゝ、いつも先手だ。だから、去年の神田祭りにや、相手の腦天を薪雜ぽうでガーンとくらはせたもんだから、うんとのけぞッちまやアがつたから、アゝしまつた、人殺しをしッちまつたかと早合點をして、ッイこんなけちな上方くんだりまで遠ッぱしりをして來て、ツイその食客になッちまつたんだけれども……

トちよつと行きつまる。皆々とめる。このうちに

相　こンつくしやう！

ト打つてかゝる。

勘　なにを！　この唐變木！

ト目つぶしにカルタを摑んで投げつける。相良がたじろぐ。とチボがだしぬけに其足をすくふ。其隙に勘太が飛び込んで拳固で一つ見舞ふ。大立廻りになる。一同總がかりで引き分けようとするが、中々手に負へない。此騷ぎを聞きつけたと見えて、窓の外で力持をしてゐた力士二人――讃岐（三十歲以上）と中國（二十八九）

——と老書家の曲直瀨僻堂とが、下手の肱掛け窓から首だけ出して覗く。

僻　(大きな聲で)こら〳〵、何をおッぱじめたのだ?

讚　やい、何しとんや〳〵?

中　あゝ、又あの浪人と江戸の入れ墨との喧嘩らしいわい。

茶　(下手に向ひ)はよ來て取りさへておくれんかいな。迚もわしらの手には負へん。

僻　(力士らに)あいつらは、二人とも見かけ倒しだ。早く往つて、とッちめてやるがいゝ。

これにて力士らはすぐ下手の入り口から急いで入つて來る。二人とも肌ぬぎのまゝ。筋骨逞しく、見るから、如何にも强さう。一人は胸元に熊毛が生えてゐる。曲直瀨は拔け上つた惣髪をチヨン髷に結ひ、無紋、無地の羽織、着流し、齡は六十以上、少しおくれて悠々と入つて來る。

輕　(力士らに)あんたゝちの力でなら、あの人たちを抱きすくめるのはお茶の子やろ。

茶　はよ引き分けて下さい。ぶつからせたら、火の粉が出さうぢや。

讚　よし來た!

中　合點ぢや。

二人は左右に分れ、中國は浪人相良を、讚岐は勘太を何の苦もなく羽がひじめにして、もがくを委細かまはず、ひッかついで、下手の入り口から出てゆく。それを見送つて皆々大笑ひ。

皆々　はゝゝゝゝ!

輕　はゝゝゝ!　十人力に逢うては、佛の御器や!　二人とも手も足も出やへんわ。

茶　あの阿呆力が何の役に立つかと思うてたが、さすがは御家老さまのお目がね。えらいもんや!　けふ先づ一つ役に立

つた。

餅　(せゝら笑つて)ヘッ！　鷄鳴狗盜といふ役どころだ。

輕　へ？　ケイメイ、クトウとは何の事でおます？

餅　さア、鷄は庭鳥、狗は犬。つまり、鳥のこわいろ使ひとコソ〳〵どろぼうの事さ。

諂　なるほど、あの二人は犬と猿や。すぐといがみあひをはじめをる。

板木　生兵法どんも困りもんやが、あの入れ墨めも氣が短かうて、口がわるうて……

輕　此邸にゐるもんは、みんな人殺しか盜人のやうにけなしくさる。

此うちチボと輕業師の小倅とは、いつの間にか、上手の積み疊の上へ離れて、兩肌ぬぎになり、中國と讃岐の眞似をして相撲を取つてゐる。

諂　しかしなア、お互ひに、あの入れ墨めがいひをつた通り、どこかに幾らかづゝヒヾの入つとるからだやけん、あんまり大きい聲も出來んぞな。

茶　さア、それをば初手から御存知の上で、かうして養うておいて下さる御家老さまは、えらい御大量なお方や。どう考へても孟嘗君さんの生れ變りや。

餅　(せゝら笑つて)その孟嘗君でせへ、三千人の食客にやア食ひつぶされ、さすがの大身代も左り前の火の車、とゞのつまり、食客殘らずお拂ひ箱。況んや、たかゞ二千五百石に於てをやだ。おまけに、大將はあの通りの遊び好きの端手好きの女好きだ。此邸内にすら妾が二人もゐる。人の師たるに足る藝能が十六といふのが大自慢で、苟も一藝ありや、前科者でも何でも只くはせといて、公務の餘暇にや、何かにつけて無禮講の藝くらべだ。やれ、誕生、やれ、五節句、やれ、年越しと、立てつゞけの大盤振舞。其たびに餘興騷ぎだ。去年は能舞臺までも出來た。

茶　いや、その磊落が旦那のえらいところぢや。ちつとも物事に拘泥しやはらんで、而もお勤め事はきつとなされる。迚も凡人には出來んこッちや。學問は和漢兼帶、詩も歌も俳諧もなさる。書畫はもとより、佛典、醫術、天文、易占、音樂……

板木　わしには、外の事は解らんが、篆刻は唐人も跣足やと、どなたもいやはります。

俳　それから武藝と來たら、弓でも馬でも槍でも、劍術でも、柔道でも……

輕　遊藝は三味線、尺八、箏、胡弓……

茶　何一つ知らはらんいふ事はない。乞食同然なもんでも、一藝があれば、同輩あつかひ。誰に向うても横柄らしい素振はしやはらん。

輕　ほれから、そやつらが御恩を忘れて、沙汰なしに出てゆきをろとも、拾うた猫めが往によつた程にさへ思やはれへん。迚も凡人には出來んこッちや。

俳　ほんにえらいお方や。お慈悲深いお方や。

俳　ヘッ、何のお慈悲！　人間道樂といふやつなんだありや。石円盤でも、藝でありやまだしも。筋の立つた幇間のやうな野良息子共を何の爲に飼つておかれるか？　所謂婦人の仁だ。却つてやつらの爲にならん。

茶　野良息子と言や、あの三人は、いつの間に、どこへいきよつたか？

輕　節句に貰うた御祝儀で、ちイと懐ろが温いよつて、どこへかいやしんぼうしに出掛けくさつたのやろ。

板　いやしんぼうといや、もう夕飯時ぢやらうになア！

俳　やつらが間食に出かけたのも無理はないわい。あの吝嗇者用人のいつもの賄ひぢや。飢に恐れるからなう。

輕　ほんに御用人と旦那とでは、まるでお月さまと泥龜やがな。

茶　しかし、あゝした約しい御用人でもゐやはらなんだら、とうに此お邸はつぶれてしまうてゐたであらう。

錦　全くや。

叔　(窓外を見て)噂をすれば影や。あそこへ御用人が來やはる。……や、だれや！　石燈籠の笠を破つてしまひよつた。

錦　力持の競爭から、つい讃岐めが取りはづして、胴石にぶッつけたから、眞二つになつてしまつた。あれを見附けられたら、又しわんぼ老爺めの小言がうるさい。さ、早くひッぱづして夕飯をくひにゆかう。さ、早く／＼！

ト先きに立つ。皆々つゞく。輕業師は小倅とチボがまだ相撲を取つてゐるのをやめさせ、びッこを引きながら、つゞいて下手へと出てゆく。

しばらく空舞臺。夕暮の鐘。

ト下手の奥から當家の用人石澤郡次兵衞(六十以上)羽織なし、袴姿、出て、入り口に近づき、内部をずつと見渡し、苦々しげに

石澤　ひとりもゐをらん。實にはや困つたやからぢや。

トいひすてゝ、又下手奥へ入る。舞臺だん／＼昏くなる。庭の方で鴉の聲が聞える。

ト下手から惣治郎と庄八が出て來る。惣治郎は緩く卷いて端をだらしなく長くたらした書狀を手に持ち、思案にくれた體で出る。

庄　では、おくめはんは、あんたがこゝにゐやはる事が知れたんで、それでお父さんをだまくらかいて、吉野の花見をかこつけに、この郡山へ來やはつたのかいな？

惣　此文面で見ると、まだ其外に、親父が、仔細あつて、京の大雅堂さんに會ひたがつてゐたのを幸ひ……

庄　うまアく仕組んで、關西漫遊いふ段取にしやはつたんやな。おくめはんも中々の狂言作者やな！

惣　で、まア、そこまでの筋は通つたとして、此大詰はどうしたらよからう？

庄　きまつてる。こゝの大將へ泣き附くんや。

惣　ぢや、あれを此邸へ駈け込ませろッてのかい？

庄　外には法も策もありやへん。あゝいふ大量な御ン大將ぢや。お助け下さい言うて泣いて縋るもんを、見殺しにしやはる氣づかひはありやへんがな。

惣　さうか知ら。だが、まだ斯ういふ事がある。君、ちよいと妾のとこを讀んで見てくれ。

ト しやがんで手紙を繰り延べて見せる。庄八もこゞみながら

庄　色ぶみのお裾分けかいな。こりやきつい。ほん辛いお相伴やなア！

ト いひながら手紙を薄明りにすかしつゝ讀みかける。

此以前、文三入り口へ來て覗いてをり、此時拔き足して二人のうしろへ廻り、氣取つて突立ち、やがて薄ド口の口眞似。これにて二人は驚き、見返る。

惣　あ、びツくりした！　文三か？　何してるやがるんだ？

文　(逢州の身振、こわいろ)「その文があやしさに、見たうて、知りたうて……」

惣　よせッ！　ふざけるな！

ト 突きとばす。文三そばの柱にぶッつかつて

文　あゝ、いた！　ま、ひどいことしやはる。

惣　いゝ氣味！

庄　まだしも、馬に蹴られいで仕合せや！　はゝゝゝゝ！

此雛壇廻る。

一

其二　夫人の居間

舞臺や、上手へ寄せて、六間の間を常足の二重、廻り縁附き、それを襖にて二間にしきる。上手は主人公の居間の心。襖のこなた、中央の一室は夫人の居間。一間の床の間、それに相應した床脇、つゞいて一間の襖、こゝから奥へ出入り。其下手にずッと奥へ下げて、廻り縁側につゞく一棟。これは召使ひなぞの控への間。縁側の突當りには袖戸。別棟の下手に板塀と中門。其前にも、上手にも、ところどころに植込み。飛び石、つくばひなどよろしく。

中央の二重の上手に夫人八重（四十五六）茵の上に住ひ、其すぐ傍に二女おきみ（十歳）が裸人形に著物を著せてをり、下手には妾おつや（二十五六）、小間使ひさよ（十七八）がうつむいて手を突いてゐる。

夫人　おゆるしが出ての無禮講ですから、餘興の手傳ひをば、決しておしやるなとはいひません。しかし先後本末というて、何事にも順序のあるもの。武家に仕へては、主人の申し附けが第一ぢやによつて、其間を缺かぬ程々に、下々の者の面倒をも見たがよい。四男の誕生祝ひも此十日と言や、もうあと四日ほかありません。小孃の小袖と旦那のお羽織が間に合はんやうではならんよつて、わざと注意しときますのや。叱るのではありませんぞ。

つや　はい〳〵。恐れ入りました。これから注意いたしまする。ついアノお三人の衆にくどう頼まれましたよつて、斷りかねまして、旦那さまのお仕立物をおくらかしまして、大きに濟みまへんこッてござりました。

まよ　小孃さまのお小袖は、夜明しをいたしましても、かならずお間に合せますよつて、御勘辨遊ばして下さいませ。

夫人　間に合ひさへすればよろしい。夜明しするにも及ぶまい。ついでぢやよつていうておきますが、長屋へは、おいひつけの外は、自分用では決して參らんやうになう。男女七歲にして何とやらと、むづかしういふのではありませんが、世間の口の端はうるさいもの。寬濶な旦那樣は、御任俠から、いかがはしい者をも、あゝして御扶助してお〻き遊ばすもの〻、拭けば元の通りに、きつと淸淨になられるといふ水晶でもないわたしたちは、用心せにやなりませんぞよ。……さ、もうよろしい。おさがり。

小孃　なア、お母さま、わたしのお雛様も、もうけふはしまうて欲しい。

夫人　あれ！　まだあのまんま飾つてあるのかいな？　（トおつやらに）では、それも二人して今宵のうちに。

二人　はいく、かしこまりました。

つや　小孃さま、さ、御一しよに參じませう。

小孃　あい。

めいくよろしく會釋して正面の襖をあけて入る。

此以前、下手の袖戸から用人石澤郡次兵衞出掛け、一旦緣側まで進んだが、二人へ何か說諭中と見受けて、退き、此時また袖戸をあけて出で來り、緣側に平伏する。

石澤　御免下されませ。

夫人　お〻、石澤かい？　何ご用ですか？　こちらへお入り。

石　はい、御免を蒙ります。

ト室内に入り、下手に住ひ、又改めて辭儀をする。

夫人　まだ歸られませんか？

　はい？

　ト いつたきり默つてゐる。此男齢の割には耳が遠いのであるが、此日は別けて屈托があるため、きよとんとしてゐる。それと氣が附いて夫人は聲を高めて

夫人　旦那は、まだ、歸られませんか？

石　はい、はい、まだ御歸邸に相成りません。

　この時、下手からさよとは別の小間使ひ(甲)が遠州好みの丸行燈を持つて入つて來て、室内よき處において入る。その間双方無言。川人はやがて口を切る。

石　えゝ、折入つて奧さまへ、お願ひ申し上げたい儀がございますが……えゝ……

　ト いひかけて言ひ淀んでゐる。

夫人　何か知りませんが、遠慮なういうて下さい。

石　えゝ、先だつても申し上げましたお内の御財政に關する儀でございますが、實にはや、本年は、是非ともはや、何とか御整理遊ばされませいではと、實にはや、心痛いたしをりまする次第で。えゝ、既に昨秋お能舞臺御新築の際にも、せめて食客共なりと、何とかはや、御處分遊ばされまするやうにと、たつて御諫言申し上げました次第でございましたが、お聽き入れ下さいませんで、お物入りは嵩みまするばかり。將又、お借財は依然としてお据ゑ置きのまゝ。随つて債主共は、何かとはや、お内の事をあしざまに申し觸らしをりまするやうな次第で。實にはや、心外千萬の儀で……

　ト いひかけて、目を伏せて言ひ淀んでゐる。

夫人　困つた事です。お前さんの心勞は蔭ながら十分に察してをります。……食客共は今は何人をりますか？

石　へえ？

夫人　(聲を高めて)今ゐる食客は何人ほどです？

石　はい〳〵、一時は四十名にも及びましたが、無斷で立去りました者が十名、外出中御用になりました者が、えゝと……三名、……手前から强て申し上げて、手當を遣はし、立去らせました者が五名。えゝ、病死が二名。只今でもまだ二十名ほどをりまする。

夫人　まだそんなにゐますか？

石　右のうち過半數はいかゞはしい經歴のともがら。其他は一藝ありとは申せ、ぬらくら者、擬人同樣の喰ひつめ者。實にはや、お内は風がはりの養老院、道樂者の合宿所、前科者の避難所も同然でございます。將又、莫大の御憐愍が、要するに、彼等の爲に相成りません。年が年中ぬらくらいたし、それが習ひと相成り、自活の氣力を亡失いたしをりまするのみならず、御高恩に狎れ、增長の餘り、陰では「王の噂をも」とやら、實にはや、けしからん下馬評をもいたしをりまする。只今では御道場は無賴漢の集會所、よからぬ手遊び、河原乞食の眞似、相撲、輕業、力持。實にはや、さん〴〵でございます。將又、女中たちに惡感化を及ぼしまするよつて、段々御家風の紊れとも相成りまする。えゝ、彼等を御一掃遊ばされません以上、どう御財政を緊縮仕りまする心算もございません。なれども、手前からは、もはや數度の御諫言、お耳胼胝が出來て、更にお聽き入れになりません。でございますから、此上は、えゝ、ひとへに奥樣にお縋り申しまして、篤と右事情の御諒察を相願ひまするより外に、實にはや、何ともはや……

ト又言ひ淀んで、うつむき、竊かに目尻を拭つてゐる。

夫人　もつともです。嘸お困りだらうと察します。實は、今も今とて、其事で、女共に何かと申し聞かせてゐた處でおりました。それも、これも、ことしは是非何とかせねばなりますまい。殊に、借財は、たとひ家寶を手離し爲てなりと、一

應方附けねばなりません。近く折を見て、わたしから篤と旦那へいうた上、改めて實地の相談に與つて貰ひませうが、尙ほ別に（ト少し言ひ淀んで）心配な事があります。これだけは――どうもわたしの口からは言ひにくい――お前さんから屹度旦那へ御異見して貰ひたいものです。

石　へえ？

夫人　（聲を少しく高めて）旦那の近ごろの健康をどう思ひます？　目立つて衰弱せられたとは思ひませんか？

石　はい、大ぶ御疲勞とお見受け申しまする。

夫人　其原因は？……どうしてあゝなられたと思ひます？

石　（考へて）あまりに公務御多端のゆゑかと考へまする。

夫人　いゝえ、さうではありません。かういふと（トいひかけて聲を落し）どうやら悋氣嫉妬のやうに聞えて、いひにくいが、つまり、女共におやさしさが過ぎるからであります。

石　へえ？

夫人　お三代さへあるに、おつやまでも……つまり、あんまり御多情過ぎるよつて……

トいひかけて又淀む。

石　へ？　では又御誕生のお物入り？　では、おつやどのも御妊娠で？

夫人　いゝえ、さうではない。お好きごゝろが過ぎるので。

石　へえ？

夫人　（困つて、切り口上式に）あまり女共を……お好き……なされるので。

石　（小聲で）女中がお好き……（考へて）は、なるほど、御多情……（大きな聲で）御好色……

夫人　あゝ、これ！（トあたりへこなし）。

ト石澤氣が附いて、大きに恐縮する。

夫人　（しづかに）好色は、殊に、五十を過ぎての好色は命を縮める斧とやら劍とやらいひますけな。あんまり健康でもない御身體、そのために御短命といふやうな不祥事になりやせんかと案じられて、近ごろは、夜もおちおち眠られません。（ト落涙しつゝ）というて、此事ばかりは、どうもわたしの口からはいひにくい。どうかこれは、お前さんから、立入つて御異見して貰ひたい。幸ひ、お三代は産後の日立ちがようないゆゑ、暫く里元へ下らせて、養生させ、又おつやは、いかゞはしい噂もあり、かたがた此春限り暇を遣はすことにお勸めしてはどうであらう？　よう其邊の利害を考へて見て下さい。

石　は、は、は。如何にもはや、御もつとも千萬な儀で。實にはや、手前は迂濶で、只もう目に見えまするお物入り、おむだ費えの事にのみ屈托いたしをりまして、目に見えませんお物減りを、とんとはや、失念いたしをりましたる段、何ともはや、申し譯がございません。しかしながら、實にはや、かやうな儀は、手前の不調法は口上では、何ともはや……

ト困却の思ひ入れ。

夫人　いゝえ、こればかりは、是非ともお前さんに言うて貰はねばなりません。わたしの口からは、誤解の虞れがありますから、どうしても言はれませんよつて。

石　どうもはや、これははや、何ともはや、實にはや、困却いたしまする次第で。

夫人　たとひあの二人を下けるとしても、同時に財政の緊縮いふことを強調して貰ひませんと、又忽ち別の女子をお抱へになるのは知れた事でありますよつて、先づ、わたしから、けふ、あすにも、家政改革の事を言ひ出します。お前さんも、それを理由に、食客共を、少くも半數に減じること、次ぎに、あの二人を、ともかくも、一時里元へ下けるといふ

事、どうかそれをお前さんから……

トいひかける途端、下手中門から仲間良助（四十歳以上）が急いで入つて來る。

やがて緣端近くへ來て、しやがみ

良助　へい、奥様へ申し上げます。旦那さまのおいひつけでございます。御歸邸早々女物のお小袖が御入用との事でございます。

夫人　え、女物の小袖が？　まア、何の爲に？

良助　只今、お歸りのお路筋で、俄かにお抱へになりました舞ひの師匠にお着せ遊ばされるのでございませう。

夫人　まア！

石　なに？　又何か俄かにお買ひ入れ！

夫人　いゝえ、お買ひ入れではない。舞ひの師匠とやらがお目にとまつて、お抱へなされたといひます。……（良助に）

これ、どうして其の女子がお目にとまつたのぢや？

良助　へい、あのお歸り途で、舞ひを舞うてをりますのが、ふとお目にとまりまして、落ちぶれてはをるが、人品といひ舞ひ振りといひ、こやつ並々の者ではないと、かやうおほせられまして、すぐお馬からお下り遊ばし、しばらく其者と御問答なされてゞございましたが、御定例の通り、「やい、此者を邸へ連れて參るから、辻駕籠を僦うて參れ。それから邸へ往て、着替への小袖の川意をさせい。風呂の支度をもさせい」。といふお仰せつけでございます。で、伴藏どんはお駕籠の御用、手前はお先き觸れかた〴〵、右の御用命をお傳へ申しに參じました。

石　（呆れて）はてさて、お物好きな……下樣の者にお駕籠までも！

夫人　してその女子の齡は幾つぐらゐ？

良助　そこどころは、よくは解りかねまするが、もうよつぽどふけてをりまする。が、いかにも上品な女子さんでございます。

石　(獨り言のやうに)では旦那樣のはうがお先手であつたか？　(夫人を見返つて)もうお手おくれになりましたかなア！

此時、中門のあちらで、小野郎林彌が「お歸りッ！」と叫ぶ聲が聞え、小野郎は程なく走つて出て、緣端まで來て

林　お歸りでございます！

ト夫人へ會釋する。

ト褄戸口からおつやが先きに手燭を持つて出る。つゞいてさよが火の點いてゐない燭臺を持つて出る。

ト程なく中門から若黨の伴藏(三十歲以上)が定紋附きの提灯を持つて先きに立ち、つゞいて主人公柳澤權太夫(里恭、洪園、五十四歲)が手に馬鞭を持つたまゝ、羽織、袴、私用外出の服裝で入つて來る。小野郎と仲間はしやがんで、手を突いて迎へる。

石澤は緣側からおりる。夫人も緣端まで出迎へる。

此以前、おつやは手燭の火を燭臺へ移して、それをよきところへ直し、やはり、緣端に出迎へる。

里恭　けふは變つた拾ひ物をして來たわい。風呂の支度はえいかの？　吩咐けた若替への用意は？

トいひながら緣端に腰を掛ける。此時夫人はおつやとさよとに何事かいひつける。二人は急いで奥へ入る。

えらう落ちぶれてはをるが、大柏の正統ぢやといふわい。名は小勝。舞ひはさすがに堪能なものぢや。

これにて皆々顏を見合ひ、よろしく思ひ入れ。

(若黨らに)やい、駕籠はどうした？　伴藏、良助、かまはんから、あのまゝこゝへ舁き入れい。

伴蔵 長助　かしこまりました。

ト二人は中門外へ出てゆく。程なく中門から垂れをおろしたまゝの辻駕籠を二人で手昇きにして持ち込む。

里都　それ、そのまゝ、縁側へ〳〵。

トいひつゝ室内へ上り、設けの茵にすわる。夫人も室内へ戻る。石澤は縁側の上手に佇ふ。

其うちに駕籠を縁側へ寄せる。

垂れを上げい。

此時、後戸口から、さよは手燭を、おつやは端手な着替への女小袖を持つて出る。

若黨作蔵が垂れを上げる。中から七十ばかりの、腰の曲つた、繼ぎはぎだらけの襤褸――チャン〳〵子式に五色斑らに綴くつたやつ――を着た、物貰ひにしては品のよい乞食婆が出る。夫人をはじめ石澤も、女どもゝ、おの〳〵驚きの目を見張り、呆れ果てゝゐる。

乞食婆もあたりを見廻して、驚き、思はず縁にペタリとなつて

婆　はれ、まア、これは！　お勿體もない〳〵！

里都　それ、女共、すぐ湯殿へ案内してやれ。はやう、はやう！

トおつや、さよ立寄り、老婆に「立て」とこなし。婆はペコ〳〵とお辭儀をしつゝ、やつと立つ。腰は海老のやう。さよは、如何にも汚なさうに、其手を取る。おつやは介添へになつて、後戸の方へ二三歩進む。

里都　(それを見送り)こりや〳〵！　その襤褸は其お婆の記念品ぢやによつて、決して捨てまいぞ。よう洗うてしまうておけ。

皆々呆れる。

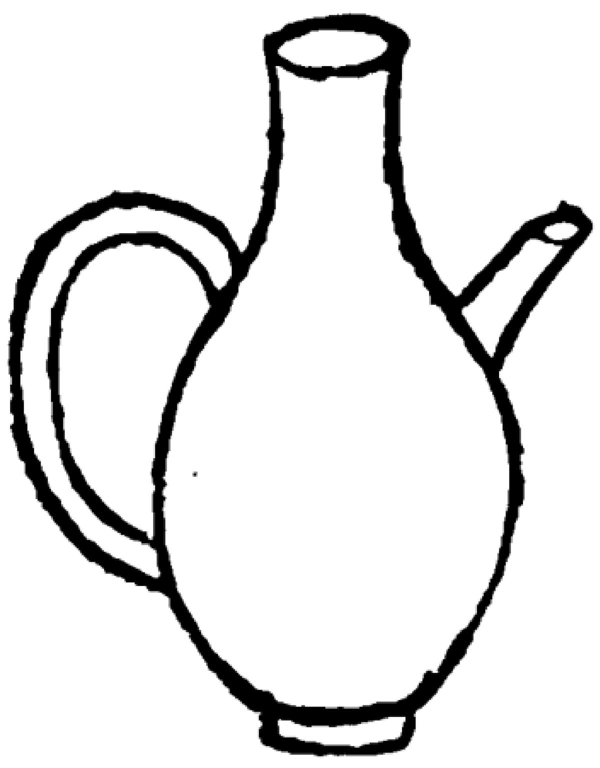
里恭はさも心よげに
里恭　はゝゝゝ！

幕

第二幕

眞葛ヶ原、大雅堂詫び住居の場

舞臺中央に六疊の一室、其上手に四疊半、共に常足の二重。屋根は草葺き、ところ〲草生え、壁には雨漏りの跡。障子、襖はどれも目立つて破れてゐる。上手に竹藪、二三の立木。下手には田畑、農家。遠近の山々。いつもの處には大ぶ破れた柴垣、小さな枝折戸。



四疊半は書齋の心、丸竹の濡れ緣附き。室には一寸した床の間、明製らしい赤繪の酒瓶の蓋も折れ、口も缺けたやつに滿開の櫻の一枝が無雜作に刺してある。一方に圓窓。その左右前後一ぱいに、机やら、本箱やら、書きかけの畫やら、首ばかりの石佛やら、ヒゞの入つた阿彌陀像やら、其他、何か知ら疵のある骨董類、和書、唐本、法帖等、或ひは積み重ね、或ひは擴つたまゝ、雜然と足の踏みどもないやうに取り散らしてある。

破れ障子を界のこなたの六疊にも、緣側があり、脊ぬきがある。室の正面、上手の一

間だけは式の如く、上半分が壁、下は押入れ。其下手一間は破れ障子、其奥にちよつとした臺所のある心。此の一間は大物を畫く時の畫室でもあり、客間でも、寢室でもあり、妻女お町（玉瀾）の居間でもあり、玄關でもある。で、四枚折の破れ屛風もあれば、鐵瓶を掛けた縁の取れた火鉢もあり、茶道具なぞもある。やはり、こゝにも畫きかけの畫、卷いた畫絹、唐紙のいろ〳〵、硯、繪の具皿、帙入りの大きな唐本、臨本類が取りちらしてある。又、壁には三味線が掛かつてをり、八雲琴が立てかけてあり、古びた菅笠がぶらさげてある。まるで古道具屋の店先といふ有樣。疊は赤らんでゐて、うつかり歩くと、足にひッかゝるほど、ところ〴〵破れてゐる。

すべて大雅堂（池野周平、三十四歳）と其妻お町（玉瀾、三十歳）の詫び住居の體。

右の大亂雜の六疊の間のやゝ上手寄りに靑毛氈を敷き、畫筆を執り、大雅堂は今何か大物を描きかけてゐる。其鼻の先きにやゝ大きな筆立、それに水引のかゝつた包みが、お神酒德利にさした奉書紙といふ風に筆と一しよに刺し込んである。やゝ離れて、下手、火鉢のそばに、お町が忙しさうに仕立物をしてゐる。

時は舊曆三月七日、今の午前十時ごろ。

幕があくと、大雅堂は溜息と共に繪筆を投げ出す。

大雅　あ、あかん〳〵！　あゝ、やッぱり吉野へ往つて來たいなア！　お町、如何にかして、吉野へ往く旅費の工面してんか？

お町　（針をとゞめて）ま、おほらしい！　それが出來んさかい、花見はやめて、せめてもの氣晴らしに、きのふあのよな新曲をお作りやしたやないか？　ほして、花までも、あれ、あないにお活けやしたやおへんかいな？

大雅　あ、さうか？　ではやッぱり金はないか？

お町　あるものかいな！　こなひだ盜人が入りよつた時、先きが出せともいへゝんのに、一張羅の着る物まで、こちから

持ち出してやつておしまひやしたので、二人とも着た切り雀。まさか斯うしてもをられんさかいに、あのわていの簞笥を質屋へ持つていて、それで間に合せ物を買うて、今大急ぎで縫うてるとこやがな。

大雅　あの時はなア、大事の臨摸物を紙屑扱ひにされさうやつたよつて、急いで鼻薬をかうてやつたのや。……では、錢はないか？

ト歎息して

でもなア、昔、瀬多の橋から、どうしても賣れんあの仰山の扇面をはうり込まうとした頃に比べりや、まだましや。さ、さう諦めて、せめて此一枚だけ描いてこまそか？（ト描きかけて）あ、やッぱりあかんわ！　吉野へ往きたいなア！　お町、あの阿彌陀さんはどうや？　あれを持つてつて見てんか質屋へ？

お町　（縫ひながら）あないな疵物は何ぼにも取りやへんわいな。（ト尙ほ縫ひながら筆立の奉書包みへ顧でこなし）いつそあれをお使ひやッせ。五枚入つたるいひましたやろ。

大雅　駄目や！　七里けつぱい！　あんまり思ひがけんとこにあつたよつて、盗人めも氣が附かいで、おいて往によつた。が、あれは使へへん。あれを使ふと、あの大嫌ひの、横柄づらからの頼み物をも描かにやならん。

お町　それがあんたのわるい癖や。頼まれた畫をお描きやせば、お金は何ぼでも入りまんがな。

大雅　それが一ち嫌ひや。金の事思ふと、筆がとんと鉛のやうに重たうなるがな。（聞き耳を立てゝ）や・だれやら來よつた。又催促やろ。わしは急病人になるさかい、頼む、あんじよう斷つて。

トいひつゝ、四枚折を持つて上手の四疊半へ逃げ込み、屛風の陰へかくれる。

ト油ノ小路家の靑侍ひ宮原房之進（四十以上）向うから出る。やがて枝折戸口へ來て

宮原　頼まう〳〵！

お町　(坐つたまゝで)　おいでやす。どうぞおかまひなうお入りやして。

宮原　(内に入りて)　これはお内儀、御機嫌よろしう。

お町　はれま、あんた樣は油ノ小路樣の御家來さん、宮原樣でおいでましたなア。ま、ようこそ。(ト立上りて出迎へ)　こないなむさい處へ。さ、ま、こちへ……といふても、ほんにまア、こないに取り散らして、お通しするお席とてもありまへんけどなア。

宮原　いや〳〵、これでけつこうでござる。おかまひめさるな、おかまひめさるな。(ト緣側に腰をかけ)　時に、早速ながら、來る十日は、豫て申し入れおいた主人方の新築祝ひ、洽く御別懇の方々を招かれまするに就いては、是非とも例の櫻の獻立をそれまでにお間に合せ下さるやう、强てお賴み申して來いとの主命によつて、參上いたしてござる。先生は今日は御不在でござるか?

お町　へい、つい、あの、二三日前方から、きつい腹痛で、引籠つてをられまして、御挨拶にもよう出られまへん。ほんにまア濟みまへんこツて。

宮原　いや、それはお氣の毒な儀で。では、どうか、只今申した儀を、しかとお傳へ下されたうござる。寄り道もござれば、これにてお暇申す。御大切になされい。

お町　大きに。どうぞお上へよろしく。

房之進入る。お町、枝折戸口まで見送る。大雅堂、屛風から首を出し

大雅　お町!……池田の奉書包みめかと思うて、ひやりとして、へツこんだんやが、ま、よかつた。けどもなア、まだあの野田新いふやかましい賴まれ物があるさかい、よう氣イ附けて、見張つてゝや。

トいひ〳〵又六曲へ戻つて來て、氣がなさゝうに畫筆を取りあげる。此うちお町も戻つて來て、又仕立物に

かゝりながら

お町　でもなア、油ノ小路さまのだけは、どうかなして十日のお祝ひの間に合ふやうにお描きやしな。さうせんでは、ほんまに濟まんがな。

大雅　わしもさう思うとる。けどもなア、どうも一遍吉野へでも往てこんでは興が沸かん。お町、何とか法はないか？

お町　又かいな。今いうた外に爲樣も模樣もありやへんがな。（トいつたが、少し考へて）ほしたらなア、せめて氣晴らしに、きのふお作りやしたあの小唄でもお彈きやしな。

大雅　せうむない！　ほんなら、合奏でもせうか？　その八雲琴を彈いてや。……が、又だれか來をるとわるいさかい、枝折戸に鍵を掛けとき。

トこれにて大雅は壁の三味線を取りおろして調子を合せる。お町は下におり、枝折戸に掛け金を掛けて戻り、八雲琴の調子を合せ、合奏にかゝる。（次ぎの小唄は大雅堂の頓作の心。都合により、はじめの一句だけはみづから歌ふことにする。いづれにしても、唄も絃も下座にて合奏する事。）

（唄）本調子〽あかつきと思はまほしき入相の、鐘に暮れゆくよしの山、今を盛りと開く日より、あこがれごころ遣る瀬なや　二上り〽せめて歌聖が白川の、其梢ともおもひ出に、手折りて、生けて、わびしさを、暫し忘れむ床の一枝。

二上りにかゝつた時分に、紙問屋野川新の丁稚由松（十二三歲）畫の催促に來た心にて、向うから出て、枝折戸に近づき、二三度押して見たが、あかぬので、ちよつと考へ、柴垣の隙間から內部を窺ひ、「手折りて、

牛けて」の邊で、けたゝましく枝折戸を叩く。

と四疊半へ逃げ込みて、屏風を引き廻す。

大雅　(三味線の手をとゞめて) や！　又だれやら來よつた。(ト三味を下におき) 又急病人や！

お町　どなたや？

由松　わていや！　急用でおます〳〵！

お町　だれやいな？

ト下におりて枝折戸をあける。

おゝ、おまはんかいな。ぬしはなア、此ごろは、えらい、手重い腹痛をおこしてゐやはるさかい、あの書の催促ならなア、どうかなア、もうこゝ十日ほどの間、御猶豫しておくれなはるやう、おまはんからあんじようなア、おうち方へ斷りいうておくれやす。

由松　(口をとんがらして) えゝ加減なうそつきなはれ。今門で聞いてゐたら、三味の音色がしてまッたがな。腹痛はんが三味彈きやはりまッか？

お町　おゝやわしが彈いてたのや。

由松　ほんなら、三味はあんたとしまほ。琴はだれや？　三味と琴とが一しよに彈けまッか？

お町　ひける。右の手で斯う琴を彈いて、左の手で、ほれな、斯う三味を……

由松　阿呆かいなあんた！　わてい、あの垣根の間さから覗いてゐたさかい、證據はとうに上つてまんがな。

お町　あれ、ま、覗いてたのかいな？

由松　(足摺りをして) えイ、おどれ、うそつき繪かきめ！　何遍わていに無駄足さすのや！　えイ、腹が立つ〳〵！

（ト地輪を踏みながら）木の葉天狗め！　なまけ者め！　そないになまけたいなら、なんで一枚一萬兩にも賣れる繪を一息に描きくさらんのぢやい？　ところが描けんやろ。描けんさかい、わざと見識ぶつて、えらい顔しくさつて、氣に入らんさかい描かんといひくさる。けども、ほんまの事をいや、根が無器用なんや。無器用が生來や。物草が本性や！　そら見識をやめくされ、生半著のおほ繪かきめ！　この通り旦那にいうてこます。おぼえてけつかれ！

トいひすてゝ行かうとする。

大雅堂、急に屏風の上へ首を出し

大雅　お町！……その丁稚、とめてや／＼！

お町　これ／＼、丁稚さん、待ちいな。待つていな。

由松　何か用でおますか？

大雅　（一枚の繪を持つて出て來て、由松に）わしがわるかつた。堪忍してくりや。なるほど、わしの本性は無器用と物草でもあろかい？　見識はまだほんの附け燒刃かも知れん。負うた子に淺瀬とは是れや。そやよつてなア、こりやほんの延引のいひわけまでやが、これでもまア持つていんで、旦那さんに詫びといてや。そのうちきつと勉強してお誂へのを描いときますいうたいうてなア。

由松　しめた！（ト思はず口走つて、頬をつねり）ほんなら是れ貰うて往にまッせ。（ト繪を受け取り、よろしく畳いて、二足三足花道へかゝり、そつと舌を出し）あゝ、内の旦那はんは偉いもんや。をそはつた通りにいうたら、あんじよう當つた。（トいつたが、まだすぐそこの室内に大雅堂夫婦のゐたのに氣が附き、一寸まごつきながら、眞面目くさつて）へい、さいなら、大けに！

ト向うへ入る。見送つて

大雅　ほんなら、ありやみんな指金か？　ほい！

お町　ま、あんた、力負けおしやして、乗せられはつたのかいな。あほらしい！　ほゝ、ほゝ、ほゝ！

大雅　あゝ、こりやいよ〳〵氣がめいつて叶はん。あゝ、せめて酒でも欲しいなア！　あゝ一つ飲みたいなア！

お町　ま、そないに飲みたいかいな？　ほんならなア、此八雲を持つていんで、酒だけは買うて來まつさ。でも肴は買はれんかも知れんぞえ。

大雅　そないな榮耀はいはん。酒だけ買うて來て。

お町　あい〳〵。

ト八雲琴を抱へて下へおりる。

大雅　嗅、大明神、さま〳〵〳〵！

お町　舊式な紋切形をおいひやッすな。あほらしい！

トいひつゝ枝折戸から出て、下手へ入る。

大雅堂、獨りになり、手持無沙汰さう。で、そこにある以前の三味線を、如何にも氣が無さゝうに引きよせて、又二上りのつゞきを彈きかけたが、ふと氣が附いたらしく、あわてゝ、下におり、枝折戸に掛け金を掛けようとする此途端、向うから江戸の骨董商、惣治郎の情婦おくめの父、近江屋久右衛門（六十五六）羽織、着流し、大黒頭巾、手に風呂敷包みを持つて出て來て、枝折戸口へ近附く。それと大雅堂が枝折戸を閉めようとしたのとが恰も同時であつたので、はたと顔を見合せる。久右衛門は大雅堂の顔をじッと見詰めたが、急には口を開きかねてゐる。大雅堂は一目見るより、ハッと驚いた思ひ入れ、物をもいはず引返し、室に上り、筆立の例の水引の掛かつてゐる奉書包みを取り、枝折戸口へ取つて返す。（年配、顔立、頭巾まで、そツくり池田

の酒造家某（奉書包みの贈り主）に似てゐるので、てッきり頼まれ物の催促と思ひちがへたのである。）

　此間　久右衛門は家内の模様を見廻してゐる。

大雅　（奉書包みを差出しながら）濟みまへんけどなア、いろんな差支へがおましてなア、迚もことし一ぱいは描くひまなんかありまへんよつて、これは、まア、お返ししておきます。受け取つておくれやす。

久右　（呆氣に取られて）ま、何をおッしやります？（トいひつゝ頭巾をぬぎ）手前は今日初めておたづね申しました者でございます。先生は御有名な池野大雅堂さまでいらッしやいませうな。もうお見忘れでございませうが、手前は、八年以前、瀬田の橋で圖らずお近附きになりました近江屋久右衛門でございます。

　これにて人ちがひであつたと知り、大雅堂は頭を掻き、持つてゐる包みのやり場に困りながら

大雅　や、これは！　頭巾から、鼻附きまでが、あんまりよう似てましたよつて、或人と見ちがへたのでおます。……頭巾が無いと、まるで禿げ具合がちがふ。……なるほど、あの晩、瀬田の橋でお世話になつたお人や。……ま、ま、こちへお上りなされ。

　ト室内へ請ずる。久右衛門は頻りに辭儀をしつゝ、足の踏みどもないやうに取散らしてある二重の一隅（お町が坐つてゐた邊）に住ふ。大雅堂は上手の座へ戻る。

久右　さて、どうもお久し振でございます。實はとうからなア、是非一度おたづね申したいと存じてはをりましたが、實はなア、あれからずうッと關東に居附きましてなア、とかく貧乏はひまなしとやら、故郷の近江へさへも歸る折がない程でございますのでなア、つい、その、御無沙汰ばかりいたしてをりましたが、其うち、先生には、忽ちのうちに御高名におなりなされまして、さて、どうもおめでたい儀に存じ上げます。

大雅　いや／＼、此通り相かはらずの貧乏絡かきや。しかし瀬田で投げ込んでしまう筈の、あの扇面の殘りの三本を買

うて買ひましたのが不思議なよすがになつて、今も尚は斯うして描かきでやつてゐます。あんたは今でもやッぱり小間物屋さんどすかいな？

久右　いや〳〵、手前もなア、實はなア、あなたさまに、あの折、讓つていたゞきましたあの御扇面がなア、不思議な御緣故になりまして、さる鑑定家の方のお勸めで、道具屋の店を開きましたところ、それがなア、案外に當りまして、今ではなア、あなた樣の前でございますが、下谷界隈では、まア相應に店名をば知られるやうにもなりました。あの御扇面には「價を待つ」いや、「買を待つ」、待買堂と御落款なされてゞございましたが、それが近ごろは關東までも御雷名の大雅堂先生ぢやと承りました時のわしの嬉しさ！　あなた樣の前でございますが、いや、斯ういうては失禮でございますが、わが子がえらい出世でもしたやうになア、有りがたいやら、嬉しいやら……

大雅　（頭を掻いて、獨りごとのやうに）名は雷かも知れんが、ねつから光りやはらん。つまり、きた鳴りや！

久右　へえ？

大雅　いや、あんたこそ出世をしやはつたらしい。お祝ひ申しますぞ。しかしまア遙々のところを、ようまアお出掛けやしたなア。

久右　實はなア、獨りむすめに吉野の花見をねだられましたのでなア……

　　吉野の花見と聞いて大雅堂思ひ入れ、おもはず、床の間の活け花を見返る。

ところが、實はなア、手前はなア、あなた樣の前でございますが、花よりも、何よりも、あなた樣にお目にかゝりたうて、かゝりたうてなりませんのでなア、ねだられるのを幸ひ、急に思ひ立つて、先づ奈良まで上りましたところ、實になア、思ひがけない、えらい災難に出逢ひました。

大雅　え、災難とは？

久右　吉野の花をというたのは、娘めがペテンもペテン、豫定の行動。それを眞に受けたのはえらい親馬鹿。恥を申さねば理が聞えません。あなた樣の前でございますが、娘めの情夫で、今は親から勘當の呉服屋の息子で、去年の秋以來、郡山樣の御城代、柳澤樣のお邸に御厄介になつてをります者がございます。それとなア、娘めはとうから打合せて親をだまし、奈良へ着くやいな、どッかへ拔け出してしまひました。てッきり柳澤樣のお邸へと、仔細あつて月星は附きましたもの丶、手がかりはなし、何の御縁故もない素町人の手前から、下手な事を申し入れる事もならず。不孝者でも母のない一粒種。（ト目をしばた丶き）とんともう途方に暮れはてました。とんでもない御無心でございますが、先生は柳澤樣とは御別懇ぢやと承はりをりますゆゑ、御歎願申します。ともかくも一應娘めに會ふことをお許し下されますやう、平にお取做しを願ひまする。

　トいひつ丶涙を拭うてゐる。

大雅　はてまア、それはお氣の毒な事や、外ならんあんたの頼みやさかい、成るか成らんかは受けあへまへんが、隨分談判しにゆきもしませうが、困つたことには（トちよつと手に持つてゐる包みを見ながら）郡山へは十三里、今は少し都合がわるいで……

　ト頭を掻く。此うち久右衛門は持つて來た風呂敷包みから淺草海苔の包みを取り出し、其上へ水引を掛けた一封を載せて、前へ出し

久右　え丶、失禮ではございますが、これはつい近ごろ江戸で新發明の淺草海苔と申しますもの。ちよッと變つた風味の物でございます。お粗末樣ながら、ほんの手土產。お納め下されますやう。

大雅　これはおかたじけ。いたゞきます。……が、その上の包みは……

　ト取り除けて戻す。

久右　いや、これはほんの當座の、お禮と申すほどではございません、どうぞお納めなされて下されませ。

大雅　昔の御恩返しのためにするのや。禮は貰ひまへん。

久右　さうおつしやられては困ります。せめてお駕籠代になりと。

大雅　いや、それも面白うない。かうしましよか？　實は、わしも、吉野へ往きたうてならなんだところやよつて、あんたの用を兼ねて大和へ往くことに定めるさかい、郡山までの宰領は、一切あんたに頼みましよか？

久右　それは願うたり、叶うたりでございます。で、御都合はいつがよろしうございませう？

大雅　今から出掛けましよ。

ト手に持つてゐた以前の奉書包みを、元の通り、筆立へ無雑作に突き刺し、立ち上り、押入れから小脇指と古袴とを取出し、袴を穿き、脇指を差す。

久右　(始終を不審さうにながめてゐたが) へ、今からすぐに？……で、もうお支度は濟みましたか？

大雅　さ、出かけましよ。

ト壁の菅笠を取りおろす。

久右　(呆れながら) へい／＼、お供いたします。いや、どうもとんだ御厄介を相掛けます。え、時に、申しかねましたが、宿元に手荷物がおいてございます。御迷惑樣ながら、ちよと四條へお寄りなされては下さいませんか？

大雅　よろしい、さ、さ。

ト菅笠を提げて、無雑作に先に立つ。久右衛門は頻りに首を振り、感心しながら其後に附いて向うへ入る。

ト下手からお町、右に備前燒きの壜を抱へ、左の手に一寸した竹皮包みを提げて歸つて來て、内に入り、あちこちを見廻し、そこにある淺草紙の包みに不審さうな目を向けたが、そのまゝ奥へ入り、いさゝか筆立を

しで戻つて來て、竹皮包みの肴を皿へ、堺の酒を銚子へ移しながら

お町　どこへゆきなはつたやろ？　歸りやはるまで、燗はせずにおこか？……（又淺草海苔に目を附けて）お客さんがあつたのかしらん。……折角急いで買うて來たものなア！

ト辛氣さうに坐わる。ふと三味線が手に觸るので、心ともなく取りあげて爪ではじいて見る、ト調子が合つてるので、つい二上りのかゝりから爪彈き。

唄へせめて歌聖が白川の、其梢ともおもひ出に、手折りて、生けて、わびしさを、しばし忘れむ床の一枝。

爪彈きしてゐるうちに　幕

第三幕

其一　柳澤家後園能舞台裏の場

舞臺正面は一面の植込み、其中には大ぶ櫻の木がまじッてゐる。其木の間に去年新築の能舞臺の背面が見える。（すべてカキワリ）。上、下に、やはり、滿開の櫻（丸物）の相應に大きな立木が二三本。下草は山吹など。

舊暦三月の九日の宵の口。朧月が樹上に高く出てゐる。

こゝへ入れ墨の勘太とチボ鶴があたりを見い〳〵下手から出て來る。

勘　內證話にやア此能舞臺裏は持つて來いといふ處だ。……チボ、今いつた事はほんとか？

チボ　ほんまや。油斷すると、あぶないぞな。なんぼ腰拔けやいうても二本ざしやさかい。それに人殺しの經驗があるよつて……

勘　(內心びくりとしながら、平氣を裝つて)なアに、あんな三ピンなんか、たゝ束になつてかゝつて來やがつたつて、びくともするこッちやアねえ。憚ンながら、い、い、入れ墨のお兄イさんに齒が立つもんけい？

チボ　でもなア、あいつには、助太刀するもんがあるぞな。

勘　(ぎよつとして)えッ！　助太刀が？……(下手を見て)おや、だれか來たらしい。ちよいと待ちな。

ト上手の木陰へ隱れる。チボもかくれる。

ト下手から惣治郎と庄八が出る。

惣　だつて、君、心配になるだらうぢやないか？　ま、ともかくも早く一度會はせてくれたまへ。口から耳へでなきや通じないことがあるのだよ。

庄　へッ、口から口へぢやおまへんか？

惣　じやうだんどころぢやないよ。賴むから、早く連れて來てくれたまへな。會つて樣子を聞かないうちは、氣が揉めてならないから。

庄　ぢや、なんやな、若しや……レコが手ェ出しやはりやせんかと……

惣　なアに、さういふわけでもないけれど。とにかく早く顏を見ないぢや……

庄　こりやきついわ！　近所へは御遠慮なしの、手放しといふやつや。はい〳〵、呼んで來まほ。

　　ト庄八は下手へ入る。此時、入れ墨とチボが木蔭から顔を出し、又ひッこめる。

惣　レコは名代の女好きなんだから、油斷が出來ん。萬一さうだつたら、どうしたらよからう？　駈落ちしようにも旅費はなし……どこといつて頼むところもなし……

　　下手から庄八が、泣いてゐるおくめの手を引き、急いで出る。

庄　それ、あそこにゐやはる。……さ、たんと積る話をしなはれ。(空を見上げて)月もまだ宵やが、仲人も宵のうちや。はよ往にまひよ。

　　トすぐ下手へ入る。

　　ト娘は

おくめ　惣さまッ！

　　ト一聲、飛び附くやうに走り寄る。

惣　おゝ、おくめさん！

　　二人ともあとは無言、抱き合つて泣く。

惣　(娘の背を擦りながら)何もかもよう察してゐます。何よりも先きに聞きたいのは、此邸へ來てからの事だ。この旦那さんに會つたのかい？　え、たび〳〵？　それから奧さまには？　まだ一度も會はない？　で、あの、旦那が、何かその、變な事をいやしないかい？

おくめ　變な事？　變な事ッて、どんな事？

惣　何か、斯う、その、變な、いやらしいやうな事を。

おくめ　いゝえ、何にもいやらしい事なんか。只ね、辿もおやさしい、御深切な、ほんとにお武家さまのやうぢやァないことよ。ほんとにお情け深い、わけの解つた……

惣　おい〳〵、そ、それが手だよ。あんたは知るまいがね、こゝの旦那は、辿もその、女好きで有名なんだ。口前のうまい、油斷のならん、一寸まア、その、狒々のやうな人なんだよ。

おくめ　えッ、狒々ッ！

惣　現に若いお妾が二人もゐるんだが、一人は產後の日立がわるくて、一昨日だつけか里へ退つたといふから、事によると、あんたを、當座、其代りに可愛がる積りかも知れないよ。

おくめ　えッ！　わたしを？　あら、わたしこわいわ。ねえ、若しさうだつたら、どうしませう？

惣　だから、氣を揉んでゐるんだよ。でなくつてもねえ、こゝには、その、女旱りのしてる碌でもない人間ばかりうようよしてゐるんだからね、けんのんで、辿も、その、長くはゐられやしない。早く逃げ出さなきやいけないんだけれども、只困る事にや、ほんの旅費だけさへも、今こゝにやないんだから、その……

　　トしをれる。

おくめ　そんな事ちッとも心配は要らなくつてよ。わたしちやんと用意して來てますの。

惣　え、ぢや、金を？

おくめ　わねえ、少いけれど、三十兩だけは（ト懷ろから財布を出して見せて）そら、ね、この通り持つて來てるのよ。もう少しと思つたけれど、人目があつて思ふやうにならないもんですから。

　　チボ龜が木蔭から又首を出す。

惣　（喜んで）それだけありや大丈夫だ。ぢや、すぐ逃げよう。……が、まさか、このまゝぢやいけない。脇指とそれか

ら、あの、何を持つて來るから、一寸待つてゐてくれたまへ。

ト駈けて下手へ入る。九日の宵月が雲の中へ隠れる。

おくめ　(小聲ながら)よう、惣治さん、早くね。早く歸つて來て頂戴ね！

ト財布をすぐ傍の木の股へ載せておき、一旦帶を解き、しめ直す。

チボ鮑がそッと木蔭から這ひ出して來て、木の股の財布を攫ひ、こそ〳〵と下手へ横切り、やがて一さんに向うへ走つて入る。

此うちに娘は帶をしめ了り、財布を取らうとして無いのに驚き、若しや落ちたかと。あちこちと木の根がたを捜す。

ト惣治郎が落人の勘平式に風呂敷包を斜にしよつて、小脇指を一本きめ込み、とつかはと戻つて來る。

又。月が出る。

惣　おい〳〵。何してるんです？

おくめ　(泣き聲で)惣さん〳〵！　大變なのよ！　大變なのよ！

ト縋りついて泣く。

惣　え、どうしたんです？……どうかしたの？

おくめ　(泣きながら)お金がなくなつてしまつたの！

惣　えッ！　どうして？

おくめ　今こゝへおいたばかりしたのに、財布ごとなくなッちまつたのよ。……どうしませう〳〵！

ト泣く。

惣　えッ！　あの金がなくッちゃア！……

ト途方に暮れたる體。

入れ違の勘太が木蔭から飛んで出る。

勘　わかつた〳〵！　チ、チ、チボめがやりやアがつたんだ。……(二人に)こう〳〵、何もさう悲觀することアねえよ。わッしが今すぐ取返してあげまさア。き、き、きつと、あのチボめが持病を出しやアがつたんだ。すぐ追ッかけてつて取戻してあげますからね、駈落ちの支度せへ出來てるなら、あとから大急ぎで附いておいでなせえ。……たしかにあつちへいつた足音がした。一筋道だ。迯がしッこはありやしねえ。

ト尻ひッからげて、向うへ一さんに走つて入る。

これに勵まされて、惣治郎はおくめを促し、同じく急ぎ足で向うへ入る

ト上手から相良東馬が着流しに一本ざし、のそ〳〵と出て來て、頻りにあちこちと見廻してゐたが、當がはづれた思ひ入れ。

相　能舞臺裏に往ッちよるて聞いたけん、一つおどろかいてくれしう思うとつたに、どッこへ退りよつたか？　あゝ、殘念な事したばい！

ト向うを見込んで失望の思入れ。

ダーク・チエンヂ。

其二　柳澤家客の間の場

一面の平舞臺。正面に一間半の床の間、左右に一間の床脇、一方は違ひ棚、一方は書院窓、造作、飾り附けよろしく、下手に二間半四枚の大襖。床には置き物があり、大形の薄端があれ、それに半分以上落花した櫻の枝が生けてある。上手と下手とは、次第に舞臺端へと斜に開いた間取り、共に大襖、定紋附き。室内上手よき處に銀燭臺一基。

前の場と同日、午後九時ごろ。

こゝに中央の上手に大雅堂、前幕の服裝、手に菅笠を持つて立身」すぐ其前の下手に用人石澤郡次兵衛、これも前幕の通りの裝(羽織なし、袴)にて同じく立身。「まァ〳〵」と留めてゐる體。

石澤　まァ〳〵、ともかくもお席におつき下さい。おすわり下さい。

これにて大雅堂、餘儀なげに、下にゐる。石澤も其下手に住ふ。

大雅　(少しせいた調子で)昨朝は折あしく御出勤の間際でござりましたよつて、只ちよと御挨拶申したばかり。萬縷は夕刻歸邸の上とのお言葉。で、餘儀なくお待ちしてをりましたところ、御歸邸早々間斷なき御來客。是非暫時御對談をと申し入れましたなれど、いや、何分にも此體、萬縷は明朝とのお言葉。餘儀なく今朝まで延引の上、是非御面晤をと申し入れますと、折あしくお城から急のお召、俄かに御登城、萬縷は午過歸邸の後とのお言葉」で、只今までお待ちしてをりましたのやが、今以て御歸邸の御模樣もござりません。で、もう手前はお暇します。頼まれた仁にも斷りをいはねばならず(トいひつゝ、床の間の生け花へ思ひ入れ)吉野の花も氣がかり。いづれ又、明後日參上。御免下され。

トすぐ立つて下手へ行かうとする。入れ代り、石澤は其袖をひかへて

石　ま、ま、ま、お待ち下され。不在中には決してお返し申すことは相成らんぞといふ主人の申し付け。手前、主人に對

し、何ともはや、申しわけがございませんよつて、やがて程なく歸られませうよつて、ともかくも今暫く、實にはや、何とぞはや御迷惑とはぞんじまするが、將又、折入つてそこもと樣へ、お哀願申し上げたい儀がございまするよつて、

今暫くの間、ま、ま、お下にく！

ト泣かんばかりの懇願。大雅堂、餘儀なく、又元の座へ戻る。

右　實にはや、何ともはや、申し憚りまする儀でございますが、かやうな儀は、そこもと樣より外に、打明け御依賴申し上げまする方もございませんよつて、折入つて御懇願申し上げまする次第で。右は、實にはや、當家の浮沈、主人の一命にもかゝはりまする儀、何とぞはや、お聽き入れ下されまするやう、平にはや、そこもと樣にお縋り申しまする次第でございまする次第で……

ト一心籠めたる體にて言ひ淀む。

大雅　御當家の浮沈？　御主人の御一命にかゝはる？　(おぼえず膝を進めて)どういふ仔細で？

右　え、これはもはや、どうもはや、手前からは主人へは申しにくい儀で、なれども主人は、全くこれがために、昨年以來、身神共に衰弱せられまして、醫師に承はりましても、きつと警戒を要するげに申し聞けまするが、隨つて醫師からもさやう申し上げたでございまするが、御自身醫道に御精通であらせられまするよつて、却つて醫師をおひやらかし遊ばされ、ねッからお聽入れございません。なれども、そこもと樣の御直諫なれば、——實にはや、あなた樣をば奧さまよりも、おてかけよりも、お子たちよりも大事がり、あこがれてをられまするよつて——十の九までは承服せられることゝ、ぞんじまする。平にはや、手前の苦衷を御諒察下されまして、何とぞはや、御盡力下されまするやう……

ト思ひ入つたる體。

大雅　(呑込みかねて)では、何か近來、わるい御病癖でも？

石　はい、いかにもはや、御病癖とでも申しませうか？　主人は、え、、とかく、その、好き過ぎまするので。

大雅　はて、數寄の道はお持前。しかしなア、それはお氣晴らしにこそたれ、御健康のさはりにはなりませんわい。

石　いや、違ひます。そのお數寄ではございません。あまりはや、とかく、その、お情けがお濃やか過ぎさするよつて、或ひは、それが、御短命のもとゐではないかなぞと、奥様はじめ、手前ども一同……

ト又いひ淀む。

大雅　これは又異な事。仁者は壽し。御仁慈の應報によりまするだけでも、御長命は疑ひない。

石　（額の汗を拭ひながら）いや、なに、主人は、既にはや、五十四歳。しかるに、兎角はや、女中を多く近附けられまして、とかくその、何がその、餘りに過ぎまするのみならず、實にはや、申し憚りまする儀ながら、近年は財政も甚だ逼迫、何とかはや、此際はや、妾共をせめて一人だけは暇を遣はしませいではと、心痛いたし罷りをりまするが、此儀ばかりは、何ともはや、手前からは申しかねまする儀で、平にはや、そこもと様に……

トいひかけて、汗と涙とを一しよに拭つてゐる。

大雅堂やっと呑込み、氣の毒になつて

大雅　いや、わかりました。手前も心附きませなんだ事ではない。……が、こりやまアひよんな、思ひがけんむづかしいお頼み……

ト迷惑の思入れ。

石　御迷惑の段、實にはや、お察し申し上げまする次第で。

大雅　よろしい。成るか成らんかは受けあひかねますが、ともかくも申して見ませう。

石　（喜んで、何度も辭儀をして）何分はや、平にお願ひ申しおきまする。

トよろしく會釋して、下手へ入る。

大雅　こりやえらい事を頼まれてしまうたわい！

此途端、下手に大勢の若い女の聲々が聞える。ト「その大枝をそのまゝ床の間へ立てかけておけい。池野に見せて喜ばせう。」といふ主人公の聲が聞え、下手の大襖が颯とあく。ト侍女甲、乙が銀燭臺を一基持つて出で、室内よきところに置く。で、室内がパッと明るくなる。

ト主人公柳里恭が微醺を帶び、ちよッと七段目の由良ノ助を連想させる羽織、一本ざし、着流しといふ裝で、妾おつや、侍女さよに介抱されて出る。侍女丙は、大きな滿開の櫻の枝を重さうにかついで、附いて出で、それを命の通り、床の間へ立てかける。

里恭　(大雅堂を見て)や、大雅堂そこにか？　から下戸同然のわしに、けふは無理やりに飲ませをつたによつて、こりや此通り由良どのぢや。君が吉野々々といふによつて、きのふから言ひつけておいて、あの通り、本場から大きな枝を取り寄せた。(トよろめく。女共さゝへる。それを手で制してペタリと坐り)若しこれでも足らんならば、邸内にも櫻はたんとある。月もまだ落ちかた。どうぢや？　庭へ出て、一つ飲まうか？　……女ども、酒、肴の用意をせい。

ト妾おつやの膝にもたれて、いつにない醉態。城から歸つたばかりとは思はれぬ取亂した振舞に、大雅堂少々むつとした思ひ入れ。此うちおつやとさよとだけ殘り、甲、乙、丙の三侍女は奥へ入る。

大雅　御登城とばかり思うてましたんやが、では、どこへかお立寄り。……(ト改まつて)時に、折入つて申し上げたい事がござります。しばらくお女中たちをばあちらへ。

トこれにて柳里恭けゞんな顔。

里恭　ほゝう！　改まつて？……よし／＼。……女どもはみな、あちイけ／＼！……あゝ、それから、今申した酒肴の

用意を。……

ト肱を突いて、枕にして、横にねころび

あゝ、たつた三杯の酒に、あゝ、醉うた〱。

大雅　(大まじめで)是非ともお聽き入れを願はねばならん事が二ケ條ござります……。

里恭　二ケ條！

大雅　先づ、一つは、あなた樣お身の上の事。……

里恭　はゝア、君も易占をはじめたと見えるの？

大雅　お齡ももう知命以上。ちと過ぎまするぞ。おつゝしみなされませ。

里恭　過ぎるとは？　けふの、この三杯が？

大雅　いや、酒とても多飲は有害でござりますれど、程々は血を和らげ、神を壯んにしまする百藥の長。が、蛾眉は伐性の利斧、明眸は腐腸の毒藥。近頃はめッきり御衰弱ぢやとやら承はりました。ちと御遠慮なされませ。

里恭　や、こりやきついわ！　(トちよツと起き直りながら)單刀直入ぢやなう。遠慮せいとは女の事か？　色事か？　いや、こりややめられぬわ。……

大雅堂があまり生まじめなので、少々茶化して見たいやうな微醺氣分で

夫れ、人としてはぢや、若うして色氣がないと、いかう武骨になる。年を取つて色氣がないと、慳貪で、慾ばかり深うなる。農、工、商、いづれも同理ぢやが、取りわけて武士はぢや、此道に通じてこそ文武兼備。いや、天地の間、古今東西、何事にも此色氣めが伴はいでは立ちゆかんのが通理ぢや。慾も、望みも、奮勵も、企業も、藝術も、宗教も、政治も、和衷協同、何もかも、つまるところ、この色氣めが基礎でもあり、利器でもある。世が進むのも、開けるのも、

要するに、これが動機ぢや。ぢやによつて、あの鹿爪な孟軻さへも、「大王色を好む、何とやら」といひなつた。とかく人生は是れ沙汰！　是れ沙汰！　君もせいぐ\玉瀾を可愛がつてやつたがよい。は、、、、！

大雅　(茶化されて、いよ／＼ムキになり)なるほど、色は好まざるべからず、が又、太だ好むべからず。お釋迦に說法ではございますが、金玉のお身ぢやいふ事を、お考へなされませ。

里恭　いや、金も玉も、紕物は永うは持たんて。人間のからだは器具、調度と一般、手荒う使へば損じる、が、使はいでおいても損じる。人生の正味はたかゞ五十年。六十以上は生きたところが乾物も同然。わしはニユー入りの上に、もう先きが幾らもない。稼ぐ筈ぢや。は、、、、！　今更緊縮して見たところで、どういふ經濟にもならんわい。でもわしは「見過しにけり末二年」と書きをつた粹作者めに比べると、もう既に二年ほど丸儲けぢや。は、、、、！

大雅　(我を折つて)お聽入れがなければ、是非がございません。お暇いたします。

ト立ちかける。

里恭　い、や、ならぬ。あすは内の祝ひ日。是非、とまつてゐて貰はう。

大雅　實は、まだ特に折入つて申し入れたい事がございますが、それは明後日の事といたし、今晩は一先づお暇……

ト少しむくれて、立ちあがる。

里恭　(とめて)なんでさう急ぐのぢや？

大雅　吉野の花がもう散りませうによつて。

里恭　花は吉野に限らん。邸の花ですましておきやれ。

大雅　では、只今申した事をお聽き下されますか？

里恭　いや、あれは聽かれん。

大雅　では、お暇(いとま)……

里恭　いや、やることもならん。……ともかくも、まちつと〳〵。

　　トいひつゝ手を叩く。

大雅　(口のうちで)こりや理不盡や！

　　トいひつゝ突ッ立つたまゝでゐる。下手(しもて)から林彌が出る。里恭は何か林彌の耳に口。林彌急いで奥へ入(はい)る。

　このうち大雅堂こらへかね、無言で下手(しもて)へ去らうとする。

里恭　どこへ〳〵！

大雅　はて、知れた事をおほせられる。これから宿元(やどもと)へ參り、すぐ吉野へ。

里恭　吉野へ何(なに)しに？

大雅　はて、只今も申した通り、花を見に。

里恭　花が見たいか？　では、すぐ今こゝへ、吉野山を移して見せうわ。

大雅　何をたわいもないことを！

里恭　(又手を叩き)林彌々々！……今いひつけた通り、吉野山を〳〵！

　　トこれにて上、下の襖が颯と開かれる。

　トばら〳〵と上手(かみて)からは妾おつやとさよと甲の侍女とがおの〳〵五六尺の櫻の枝を重さうにかついで出る。

ト又下手(しもて)からは林彌を先きに、乙、丙の侍女が同じく一間餘の櫻の枝をかついで出て、それを天井へつかへる

　やうに押し立てゝ、聲を揃へて

一同　池野さま、……どッこい！

ト大雅堂を取巻いて、片手をひろげ、よろしく歌舞伎式のポーズ。

大雅堂呆れる。

黒助　どうぢや？　何と、内の櫻も斯うして見ると、萬ざら捨てたものでもあるまい。これで足らずば、仲間共にいひつけて、外廻りのをも取入れさせうか？……さ、さ、女ども、酒ぢや〳〵！　酒をもて〳〵！

ダーク・チェンヂ。

其三　暗越街道の場

舞臺一帶榎樹林。中にも中央の一本は目立つて太い。（此太い一本だけが用道具。あとはすべてカキワリ）。他の木は殆ど無い。此榎林の間に街道が通じてゐる心。それが即ち郡山から奈良へ通ふ暗越街道なのである。

九日の月はもう落ちかけてゐる。ふくろうの聲が聞える。

こゝへチボ龜が前の場で攫つた財布を手に持つたまゝ、一さんに駈けて來る。舞臺へ來ると、立ちどまつて喘ぎ、一息ついでゐたが、忽ち聞き耳を立て、急に、猿公のやうに、すばやく中央の榎へ攀ぢ登り、二股になつてゐる處に身をひそめてゐる。

ト向うから入れ墨の勘太が、これも前の裝のまゝで、追ッかけて來て、舞臺まで來ると、不審の思ひ入れ、あちこちと見廻しながら、上手へ入る。

すぐ又向うから相良東馬が、同じく急ぎ足で出て來て、舞臺へ來り、これもあちこちを見廻し〳〵、同じく上

手へ入る。

ト時の鐘。(今の十時ごろ)。

下手のカキワリの一部が前へぶッかへると、それが山台で、そこに常磐津連中が居並び、次ぎの淨瑠璃になる。(これは淸元の「落人」をそッくりそのまゝ常磐津で彈きもし語りもして貰ひたい。)

淨へ途中から合すッかり末を悲觀して合生きた心はなけれども、只錢かねの無いばかり合めぐりあうたる嬉しさに合いよ〳〵困るそれまでは合さすがに心うはの空合手に手とりあふ夜半の道、よれつもつれつ合さゝめごと合人目のないをさひはひに合チボ追ふことは餘所にして合どういふ當も奈良の路、戀路の暗に緣深き、くらがり街道を辿り來る。

(めぐりあうたる嬉しさ」のカヽリで、向うから、前の裝のまゝ、惣治郎とおくめとが、新婚旅行氣分八分、心中道行氣分二分といふ思ひ入れよろしく、文句の通り、甘ッたるい振事、よれつもつれつして舞臺へ來る。

トおくめ木の根につまづいた心で、式の如くころぶ。

おくめ　あゝ、いたゝ!

惣　あ、あぶない! 怪我しやしませんか?

おくめ　いゝえ、どうもしやしません。……どこでせうこゝは? くらくッて、何だかこわいわ!

惣　こわいよりも、何よりも、考へて見ると、困るのは金。金がなくちやどうにもかうにもしやうがないよ。事による

と、あの人れ墨めもグルなのかも知れない。かうしてこゝまでは來たけれども……

おくめ　江戸でなら、何とかしやうもあるけれども……

惣　賴る處はなし……今更あの邸へ歸られもせず……

おくめ　お金はなし……今更おとうさんにお詫びも出來ず……

惣　おくめさん！

おくめ　惣さん！

惣　どうしよう？

おくめ　どうしませう！

ト互ひにしをれ

クドキ〽めぐりあうたも今の先き㊇うまい手管の逃げ支度㊇〽あのお金さへあるならば㊇二川や三月は遊山旅㊇この近邊ぢや無い邊に㊇ちよとした家を借りずまひ㊇(中略)〽うれしくと思うたは、とんだ氣早のあてはづれ、悲しい破目ぢやないかいな。

よろしくありて、地びたに二人抱きあひて泣く。ト山台を消す。(カキワリ元の通り)。月が落ちてしまふ。

惣　かうなりやもう死ぬより外にしやうがない。

おくめ　あなたと一しよなら、わたし死んでもいゝわ。

惣　ぢや、どこ此處といつてゐるより、すぐこゝで死ぬことにしようよ。……鷄が知らしてか、脇指をさして來てよかつ

た。

ト脇指を鞘ごと拔く。おくめあわてゝとめて

おくめ　刃物はいや、刃物はいや！　痛さうだからいやよ。

惣　どうせ苦しいんだから、おんなじですよ。

おくめ　いゝえ〳〵。いやよ〳〵！　身を投げたはうがいゝわ。

惣　だつて此邊にゃ川も池もありゃしないもの。ぢや、首をくゝつて死ぬことにしよう。

おくめ　いやよ！　鼻水なんか垂らして、ぶらさがつてる姿は見ッともないもんだといふから。（頻りに首をふつて）わたし、いやよ〳〵！

惣　そんな（ト泣きながら）わがまゝを言つちや困ッちまふぢやないかねえ。……ぢやァあんたはお父さんのところへお歸りなさい。わたし獨りで死ぬから。

ト刀に手を掛ける。おくめ止めて、泣きながら

おくめ　ぢや、しかたがないわ。お刀で死ぬわ。けどもねえ、痛くしちゃいやよ。

惣　（泣きながら）お念佛を唱へていらつしゃい。

おくめ　よう、わたし取亂すといけないから。（トしごきを解き）これで膝を縛つて頂戴、しッかり。

惣　よし〳〵。

ト緋縮緬のシゴキで坐つたまゝのおくめの膝を縛ること。

此以前チボ總、木の股の上から顔だけ出し、あゝわるい事をした、氣の毒な事をしたといふ思ひ入れあり、此時財布を取り出し、紐の端を手に持つて、そろ〳〵財布を繰りおろす。下では、惣治郎泣く〳〵脇指を拔き

放し

惣　い丶かい、おくめさん？　覺悟はい丶かい？

トいひかける途端、突とおろした財布が惣治郎の頭へコツーン！

あ丶、いたツ！　（ト覺えず大きな聲）。

おくめびツくりして

おくめ　あれ、もう切つたの！

トいざり寄るおくめの頭へ、惣治郎の鼻の先きへ、再び樹にへ繰り上げた財布をチボ總が、わざと其口をあけたま丶逆さにして、紐もろともに投げ落したので、三十兩の小判が、一度期にチヤラ〳〵〳〵、チヤラン、チヤラン！

惣
おくめ　おやツ!!

此途端、向うから玉瀾のお町が、前の幕の不斷着のま丶、旅駕籠に乘つて出て來る。其駕籠が七三に來るのと財布が落ちるのとが全く同時。ト上手から入れ墨の勘太が一さんに逃げて來て、ちようど本舞臺へ入つたばかりのお町の駕籠にぶツつかる。

先棒　えイツ、何をしくさるンぢやい！

トいふ間もなく、上手から相良東馬が拔刀で追ツかけて來て、勘太に切りかける。勘太はすばやく右から駕籠の後棒へと避ける。先棒は駕籠に吊した提灯で白刃を見附け

先棒　や、出くさつたな！

トいふやいな、息杖を持つたま丶棒を放し、下手へ逃げ込む。後棒も同時に手を放し、これは、息杖をも抛

げ出しておいて、向うへ逃げて入る。斯うして、ばッたりと駕籠をおろした途端に提灯の火は消える。眞の暗。此間たかゞ十數秒。

これより先き、(提灯が消えた途端に)勘太は後棒の捨てゝいつた息杖を取るやいな、すばやく左から前へ廻つて出て、見當を附けておいた相良の眞額へ力一ぱいに打ちおろしたが、それがそれて右の肱を手ひどく打つた心。相良は刀を取りおとす。

これよりダンマリ模様。

同時に、本舞臺では、惣治郎とおくめとが落ちて來たのを小判だと知り、驚き怪しみながら、掻き集めようとする。途端にチボ鍋が木から飛びおりる。はずみでおくめにぶッつかると、膝を縛られてゐるおくめは仰向けに轉ぶ。容易に起き得ない。

おくめ　あれイ……惣さん〱！

チボ鍋は、一さんに下手へ逃げようとして、お町に突き當る。

これより六人の漫畫式ダンマリよろしく、トヾ鍋が向うて逃げて入るのをキッカケに　幕。

第四幕

其一 柳澤家後園能舞臺裏の場

第三幕其一と同じカキワリ。但し此場は三月十日の午後二時(白晝)。出道具の櫻の立木二三本も以前の通りながら、見事に花の咲いてゐた其大きな枝々は大抵無慚に切り取られ、ほんの幾枝かゞ見すぼらしく殘つてゐる。

こゝに狂歌師の茶樂と三味線彈きの庄八と表具屋の文三とが、見物にうしろを見せて、立ち、櫻を見上げてゐる。

文　えらうむごたらしう切つたもんやなァ！

茶　大雅堂さんの御馳走に、仲間衆にいひつけて、切らせなされたけなが、相變らずえらい氣前ぢやなァ！

文　そないに優待しやはつても、氣に入らんかして、池野はんは、ゆんべ塀を乘り越えて、どこへか逃げてゆきやはつて、今に行方不明や。

庄　大かた吉野へでも行きやはつたんやろ。

文　ほんまにあの畫かきはんは、一調子變はつてまんな。

庄　一調子どころかいな、まるで調子はづれやがな！

　書家の僻堂が下手からのそ〱と出て來る。

僻　果して、大雅堂脱出の立談會をやらかしてるな。……時に、脱出といや、チボも入れ墨も野良息子も浪人も、ゆうべ

から影を見せない。

茶　あのボンチの情婦とやらが、つい此間此お邸へ駈け込み訴訟したいふことを聞いてましたんや。庄八さん、あんた何か聞いてゐやはらんかな？

庄　いゝえ、わてまだ根ッから……(トわざと知らぬ顔)。

僻　けちんぼ用人め、頻りに緘り策を献議中であつたといふから、偶然に人口が減少したのを、やつ蓋し天佑だとでも思つてるだらう。

茶　なんぼ、今の世の孟嘗君さんぢやかて、あの手合ばかりは持て剰しものにしてゐやはれたであらう。

僻　ふッ！　鶏鳴狗盗以下といふやつか？　況んや財政緊縮第一義の際に於てをやだ。はゝゝゝゝ！

文　惣治郎さんがゐやはらんとなると、「淺間ヶ嶽」はお流れやな。

庄　噴火山やさかい爆發したんや。

文　折角あないに苦心して、稽古したものをなア！

僻　すると、けふの餘興は、主として相撲と力持で市が榮えることになるな。文弱に代る武強か？　取りも直さず、平家亡びて源氏興るといふ格だ。へゝ、世話燒きがひがあつた。

此時上手から林彌が出て來る。

林　僻堂さん、讃岐と中國が土俵の鹽梅を見て下さい言うてまんの。

僻　よし〳〵。今往く。……どうだ、君たちも飛び入りをやらかす氣はないか？　といつたところで、色男、金も力もなかりけりか？　はッはッはッ！

ト高慢笑ひをしながら、林彌と共に上手へ入る。

文　だれの事をもけなしくさる死にぞこなひの惡たれ爺め！

茶　これさ、聞えるがな、耳は存外近いさかい。

ト文三を制しつゝ、三人とも下手へ入る。

ト此道具引いて取る。

其二　柳澤家奥座敷の場

一面の本舞臺。（但し第三幕其二の客の間とは別）。正面一帶、大障子、すぐ其向うに緣側のある心。上手、下手は第三幕其二と同じ式に、斜に、やゝ漏斗形に舞臺端へと開いた間取り。上手は半分は壁、半分は襖。下手は悉く襖。

床の間はなし。

やはり九日の午後二時前。次ぎの問答の間に時計が八つを打つ。

こゝに柳里恭、羽織、着流し、中央よき處に脇息を右にして茵にすまひ、一通の書狀を繰り延べつゝ讀んでる。其下手の茵には夫人八重と小蝶おきみとがすまひ、夫人と里恭との間には古風な大形の煙草盆が、長煙管を二本添へて、置いてある。

里恭　では、大雅めは此書面をばそなたへ、尙ほ別に其久右衞門とやらへも置き手紙をして行きをつたか？　さうしてそのまゝ、昨夜、吉野へ？　はて、どこまでも變つたやつの！　面白いやつぢやなう！

夫人　ひたすらわたくしを頼りに、あなたへ御歎願申すがよいといふ其置き手紙の趣意により、つい今がた、作左衛門が參いまして、何とぞ當家の御威光とお情けを以ちまして、情夫惣治郎と娘との緣の切れますやう、當人へも惣治郎へも御説得遊ばされ下されますやうと、涙を流してのくれ〴〵の頼み。聞きますれば、双方とも一粒種の獨子にもくれず、嫁にもやられぬといふ餘儀ない事情。とはいへ、肝腎の當人どもの行方が知れぬ以上、旦那のお考へはどうあらうと、先づそれが當惑、と只今申し聞けてをりましたとこでございます。

里　(尚ほ讀みながら)此書中にも其事は書いてある。(ト手紙を卷き收めつゝ)とにかく、其親父に一應あうて、とくと事情を聞くことにせう。

ト手紙を懷中して席を立つ。夫人も共に立たうとするのをとめて

いや、そなたは來ずともよいわ。

ト上手の襖をあけて入る。

ト下手から妾おつやと侍女さよが出る。

おつや　奥樣、八つの時計が打つたら、餘興をはじめい言ふおいひつけでございましたけれど、番組が狂うてしまひました。一番先きが「淺間ヶ嶽」いふことにきまつてをりましたのやが、肝腎の役者衆が揃やはりません。

さよ　僻堂はんは、もうすぐ力持かお相撲をはじめたらどうやいうてゐやはります。

おつや　どないにいたしましたら、ようございませう?

夫人　ま、お待ち。旦那に何やら御趣向がある筈。第一番が歌舞伎、その次ぎが其御趣向。この二つは能舞臺で、といふ豫てのお指圖。やがて、又こゝへお見えであらう。承はつてからにおしや。

おつや　かしこまりました。

此時又下手から侍女甲が出て

甲　申し上げます、只今大雅堂さまのおかもじが見えまして、奥樣にお目にかゝりたい申されてゞござります。

夫人　おゝ、お町どのが？　ま、めづらしい！　こちへお通し。

ト甲又下手へ入る。

おつや　お町さんとやらは、あの祇園で評判の高いお百合さんの娘さんでござりますかいな？

夫人　歌人で知られたお梶さんの孫さんほどあつて、歌もよめ、書もかけ、琴、三味線も堪能ちやと聞いてゐます。

おつや　嘸まア粋な方でおますやろな。

さよ　髪かたちから、裝ふりもなア！

ト此うちお町下手から侍女甲に案内されて出る。

服裝は第二幕の不斷着のまゝ、一寸した手土産(鷄知らず?)を提げ、其不斷着を裾短かに無雜作に著こなした樣子といひ、髪かつこうといひ、すべてが大原女よろしくといふ風體。おつや、さよ、侍女甲、互ひに顔を見合せて、案外といふ思ひ入れ。

お町　奥樣、久しう御無沙汰いたしました。おかはらせもなうおめでたうぞんじ上げまする。

夫人　おゝ、お町さん！　ようこそ。さ、まちつとこちへお進み。……どうしてまア、この遠々のところへ？

お町　(侍女甲へ)これはお粗末な、お珍らしうもないもの。お臺所へ。

ト手土産を出す。

夫人　ま、お氣の毒な。

ト甲へこなし。これにて甲は其手土産を持ちて下手へ入る。

お町　實は、奥樣へ折入つてお願ひの事がござりまして……

トいひさしておつやはじめへ思ひ入れ、ちよツと躊躇する。

夫人　(察して、おつやらに)お前たちは暫くあちらへ……小孃も一しよに。

トこれにておつや先きに立ち、小孃おきみの手を取り、さよ、その後に附き、よろしく會釋して、上手へ入る。

夫人　何かは知りませんが、遠慮なういうて見て下さい。

お町　では、お聞き下されませ。此七日このかた、御當地へ旅行してをりまする筈の夫周平へ、さるお方様からお賴みの急の御用がえらうさし迫りましたので、心ならず、通し駕籠で、急いで參じまする其途中、ゆんべひよんな事が起りました。

夫人　ひよんな事とは?

お町　こなた様に長い事お世話になつてゐたとやらいふ若いボンチと其深まの娘さんとが、まちつとで心中せうとしてゐやはりますところへ折よう行き合せ、いろ〳〵せつない經歷を聞き、あまりの笑止さに、奥様にお縋りして、二人の衆が首尾よう夫婦になられますやう、粋な旦那さまへお取做しをお願ひ申したさ、あまり御無遠慮とはぞんじながら、實は、其二人の衆を、只今引連れて參じました。

夫人　まア、不思議な廻り合せもあるもの! 今も今とて、其二人の事で、旦那と相談してゐましたところ。實は、其娘の父御が今ちようど郭へ來てをられます。そしてわしへ、又旦那へ、どうぞ二人の手を切らせてと、是も又せつない賴み。(お町よろしく思ひ入れ)でも、すべて訴訟事は片口ではいづれとも定められぬもの。ともかくも、ま、一應、其若い人達に會ひませうか?

お町　それはまア〳〵おかたじけにござります。さぞ喜ばれますことでござりませう。では呼んで參じまする。

ト お町下手へ入る。

上手からおつやとさよが笑ひをこらへつゝ出る。

おつや　奥樣、あれが有名なお町さんでござりますかいな！

さよ　まるで八瀨からでもおいでやしたやうな……ほゝゝゝ！

夫人　(目で叱つて)はしたない。あちへ〳〵！

ト 二人下手へ思ひ入れ、急いで又上手へ入る。

ト お町が惣治郎とおくめをつれて出る。

お町　このお二人でござりまする。盜られたとばかり思うてゐやはりましたお金だけは、不思議にまア戻りましたもの、所詮晴れては添はれん仲やよつて、死んだはうがましやと無分別。やう〳〵の事で、異見して、連れて參じました。(ト二人を見返り)なア、一應はわたしからお願ひしておきましたさかいに、くはしい事は、改めて、あんたがたから、なア、奥樣へ……

ト よろしくこなしにて呑み込ませ

奥樣、ほん濟まんこつてござりますけれど、只今あちらで承はりますれば、ぬしはこなた樣に御厄介になつてなられましたところ、ゆんべお斷りも申さいで、お邸をぬけ出で、吉野のはうへ參じましたとやら。實は、梅ノ小路さまいふお方樣の急ぎの御用が氣になつてなりまへんさかい、ほん失禮ではござりますが、お暇をいたゞきます。何分にも奥樣にお縋り申しまする、此二人の先の事を、旦那さまへ、どうぞよろしうお願ひ申しまする。

夫人　承知しました。……さ、さ、心おきなう。

お町　御免遊ばしませ。……お二人さん、ではなア、よう奥座へ。

トこなしよろしく、改めて夫人へ會釋して下手へ入る。

惣治郎とおくめは恥ぢ入り、きまりわるげに、うつむき、黙つてゐる。

夫人　お前がたの身の上の事は、お町どのから一通り聞きました。何も恥かしい事はない。くはしう打明けていうたがよい。

此時上手から

里恭　いや、それは聞くに及ばず、いふにも及ばん。何もかも聞きもした。もう分つてゐるわい。(ト襖をあけ)さ、さ、親父どの、遠慮せずに、こちへ／＼。

トこれにて近江屋久右衛門ペコ／＼辞儀をしつゝ附いて出て、下手へ廻り、かしこまり

久右　奥様、だん／＼とのお肝煎。ありがたうございまする。お禮を申し上げまする。

ト會釋しつゝ、惣治郎とおくめを見返る。二人はいよ／＼しよげる。

里　(茵にすまひ、煙草を吸ひながら)いや、なう、親父どの、今もいうた通り、愛着はだれにもある。又無うてはならぬもの。われ以外の人間に愛着すればこそ人倫もはじまる、浮世の交りに光も出る、潤ひも生じる。我慾にこだわつたら、禽獸も同然。戀ひせずば人は心のなからまし、物のあはれは是れよりぞ知る。ところがぢや、愛着にもいろ／＼。命を捨つるまでに愛着するのが所謂仁の端ぢやが、たれしもそこまではよう行かんで。わしがさう。おぬしもさう。わしを任俠ぢやの、慈悲深いのといふは買ひかぶり。おぬしの骨董いぢりに似た趣味道樂。つまり、生れ附きぢや。一生やめられさうにないわるい病ひ。しかし其わしも、大雅堂だけにはぞッこん惚れた。おぬしもあの男に首ッたけぢやといふだ、わしの惚れたはあの男の人柄ぢやが、おぬしは只もうあれの畫名の高い事ばかりいふ。はて、惚れたに僞りはない

にせい、何やらと二人づれではないか？ はゝゝゝゝ！

久右（頭を掻きつゝ）へい、どうも恐れ入り奉ります。全く慾と二人づれに相違ございません　今度、池野さまをおたづね申しましたも、實のところ、八年前のお馴染がひに、せめて半截の二三枚も、割安に描いていただかうといふ慾心からでございました。

里　いや、無理もない。わしとても大雅に命までははやりかねる。又、大概の雅人、茶人が口には立派さうな事をいうてもぢや、其實は利慾、名聞。命がけの風雅は一萬人にたつた一人あるかなし。いや、治國平天下の大責任を負うてゐる手合とてもぢや。仁義道徳の問屋顔をする儒者とてもぢや。僧侶とても、武士とてもぢや。それに比べると、命をすてゝまでと思ひつめた若い者共の愛着は混物なしの生一本。ちようど自然や藝術に身をも世をも忘れをるあの大雅堂と似たともいへる。古今の心中、大概は金中ぢやと貶す者もあるが、金中にしてからが、命がけとは嬉しい惚れ方。どうぢや？ そこを買うて、氣前よう手を打ちやらぬか？

久右　へえ？ 手を打てとおつしやいますは？

里　はて、何にもいはず、二人を夫婦にしてやるのぢや。

久右　へえ。（ト考へ込んでゐる）。

夫人　かう見たところ、人柄もおとなしさう、年ごろもよう似あうた二人の衆。

里　さア、手を打つた／＼！

久右　先刻よりの御理解、もう何も申しません。此上は惣治郎の親共へ、あなた様から何分よろしう。

里　それも心得た。（ト惣治郎、おくめを見やり）どうぢや？ 嬉しいか？ 二人とも、本望であらうの？

惣治郎とおくめは、何にも言ひ得ないで、猿公のやうに、只もうペコ／＼とお辭儀をして、ト、聲を出さん

ばかりに嬉し涙に暮れてゐる。

里　めでたい〳〵！　斯うめでたう納まつた上は、けふの邸の誕生祝ひは、内親王といふ景物が附いたといふものぢや。……早速餘興をば始めさせう。

ト手を叩く。トおつやとさよとが上手から出る。

里　餘興をはじめさせい。序開きは何ぢや？

おつや　(惣治郎らへ思ひ入れあつて)歌舞伎狂言の筈でござります。

里　さう〳〵、「淺間」が序開きの筈であつたなう。(トまだ泣いてゐる惣治郎らへ思ひ入れ)。でも、こりや今すぐといふわけにはゆくまい。……では、おれの趣向したのを先きにせうわい。さよ、石澤をはじめ、女共も、男共も、食客共も、皆こゝへ、呼べ〳〵。(惣治郎、おくめに)お前たちは疲れてをらう。退つて休むがよい。

これにて惣治郎とおくめは會釋をして、さよと共に下手へ入る。

里　つや、囃子方に用意をさせい。

おつや　かしこまりました。

ト上手へ入る。此うち下手より侍女さよが小孃おきみの手を引いて出る。ト侍女甲、乙、丙の案内で、次ぎの者共が入つて來る。用人石澤、茶樂、庄八、文三、鑄物師、板木師、輕業師、其小倅、力士讃岐、闘中國、若黨伴藏、仲間良助、小野郎林彌等。やがて一同よろしくすまふ。

里　石澤々々！

石　は、は。

里　曲直瀬が見えんが……僻堂はどうした？

石　速かに參りますやう申し聞けてはおきましたが……(ト懸念の思入れ、こなし)。

里　（思ひ入れあつて）よしく〵。すておけく〵。

ト木が入る。途端に、正面の障子を殘らず取拂ふ。ト向うに縁側、尚ほ其向うには中庭がある心、其向うに所作舞臺を敷き、それを庭前の能舞臺と見せた裝置。式の如くの破風造り、古カブキ式の橋がかり。能舞臺の正面の奥には長唄連中及び囃子方が烏帽子、素襖、袴の姿にてよろしく住ふ。ト里恭は次ぎの――ウタヒの次第だけをみづから扇拍子にて謡ふ。此唄は里恭の自作といふ心。「なきこそ悲し云々」から長唄連中へ取る。

次第〵身は浮き草をさそふ水、身はうき草をさそふ水〵なきこそ悲しかりの世に、われ驕慢のいにしへは、面に紅粉の媚びを飾り、羅綾のたもと幾重ね、年返るとも面影の、かはらで春の花の色、その願ぎ歌の夢消えて、積るや雪の九十九髮、つく息もたえぐ〵の、つゞれ衣手、やぶれ笠、きたなまれてもまだ死なぬ、おいぼれ姿はづかしや。

「なきこそ悲し」のかゝりで橋がかりから序幕の乞食姿が、かの折の繼ぎはぎだらけの襤褸着物のまゝ、杖な突き、破れ笠を持ち、卒塔婆小町にて出で、すぐ能舞臺の中央へ來り、文句の通り、よろしくある。繼ぎはぎの切れの斑らなのが、遠目には、不思議に美しく、ちようど能衣裳のやうに見える。皆々「これは!」とばかり、互ひに顔を見合せ、呆れ驚く思ひ入れ。婆が橋がゝりへ出ると

里　どうぢや、石澤? あの衣裳を見やれ。只もんめぢやぞよ。財政緊縮の第一歩として、何と妙案であらうがの! ははゝゝゝ!

ト愉快さうに笑ふ。皆々、又互ひに顔を見合せて思ひ入れ。乞食婆の振のまだ全く終らぬうちに　幕。

お断り

前號前田河氏の長編小説「支那」(創作欄八十頁)

『君は、誰か！――』

王賓平は、しばらく人間の言葉に不感性になつたやうに、この質問に對して、白い眼を瞬るだけだつた。やゝあつて彼は長定至の引金に指をかけたピストルに、その視線を轉じた。

『ここは、いつたい、何處なのか？　わしはホンコンには居ないのか？　わしの名は王賓平だ。燕飛芳は何處にゐる？……』

この時、部下の一人が、小隊長の傍らへ立つた。

『小隊長、あの一人が自白するところによれば、これは雲南軍系の殘黨の陰謀團らしいのです。恐らく、この男を人質にして、大金をでもせしめやうとする誘拐團の一味なのでせう。――只今、本部の方からは、一大隊の剿察隊が至急こちらへ特派されるさうです。』

『ははあ、さういふことなら、尚更、この男は檢擧してやる必要がある。事件の發展によつて、こりあ、我々一小隊がウイスキーよりも大物を捕つたことになるぜ！』

このドラマを、大部分は無智と放心から、口を開けて見戍つてゐた棺舁ぎや、泣き男、泣き女の一群があつた。それか

の以下一頁を、校正及印刷の不注意から脱落させました。筆者並びに讀者に對して誠に申譯ありません。左にその脱落した一頁分を掲載して置きますから、御面倒でも併せ熟讀されんことを御願ひ致します。(編者)

ら、障碍物がなくなると流れて來る殘潮のやうな群集も、この光景を取卷き始めた。そして、その中から、最も熱心な目擊者の一人であつた、汚ならしい苦力に扮した李刀達が、抑へきれぬ昂奮から、突然幕を上げさせる登場人物のやうに酋友長定奎の前へ步み出た。

『長君、この人攫ひ團の内幕は僕がよく知つてるよ！』

『おお、李刀達か？ ——どうして、今、君は、また廣東へ歸つて來てゐるのか？』

『譯はあとから話す。——あの飛行機に氣を付けろよ！ ひよつとしたら、あの女め、爆彈でも投下しあしないかと、それが心配だ。——あすこに停つてゐる帆船、あれには軍閥の古手が五六十人の勢力團を率ゐて乘つてるだけだ。おれは、大きい聲ぢあ云へないが、ホンコンの王英先生の吩咐(いひつけ)で、こいつ等一行を尾行して來たんだ！』

かう云つて指した空の上には獲物を見付けてきりきり舞ひをしてゐたやうな、さいぜんの飛行機は、俄かに方向を轉換すると、けたたましい唸りを擧げて、はるかに河南の方へ、蜻蛉の翅を伸したやうに逃げ延びるのであつた。

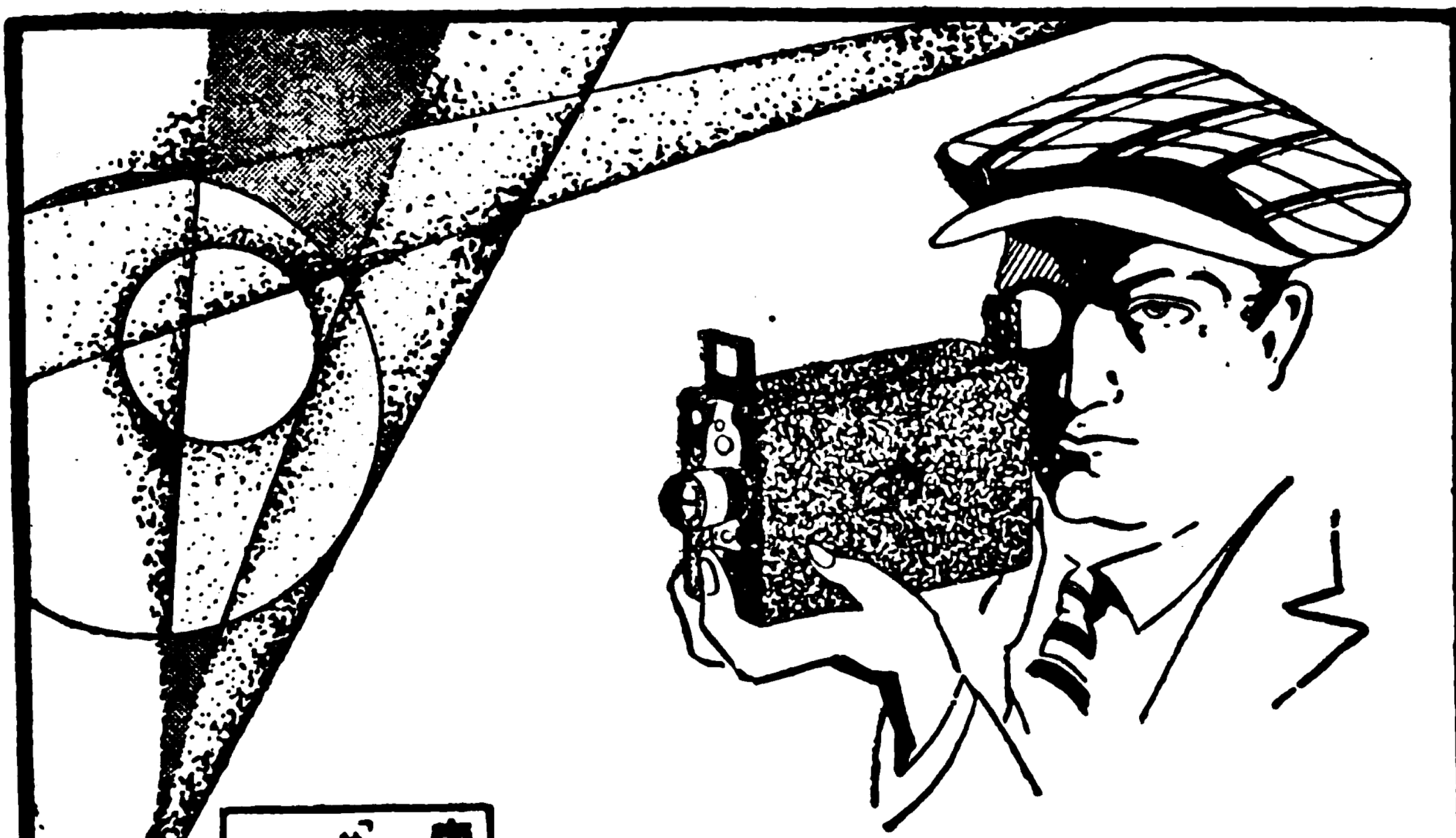
『畜生、あの女賊めを捕りそこなつた！ ——この野郎があいつ等の五千萬弗の强請の身の代(しろ)さ！ 見ろ、金持ちといふ奴は、かうもたわいのない馬鹿なのかな！……』

李刀達の煤黑くなつた顏から、眼を檻の中の富豪に轉ずると、長定奎は、長いこんぐらがつた絲の兩端を、始めて發見した人間のやうな表情でかう訊ねた。

『すると、奴等は、また廣東政府を乘取るつもりででもあつたかな？……』

李刀達は、樂器を鳴らすやうに兩手を敲き合せた。

『雲南軍系の古手が、やはり、ホンコンの英國人に傭はれてゐたのだよ。そいつ等と、南軍の殘黨どもが、しきりに通謀しては、我々の新らしい民衆運動に妨害しようとしてゐあがつたんだ！ ——いけ圖々しい奴等さ！』



家庭用活動寫眞

シネーコダック

學徒に告ぐ

貴下はシネコダックを使用して貴下の研究を無限に增進せしむることを考へられしや。コダスコープと併用して貴下研究の對象を如實に——すべての運動及動作を記錄し得ることは、此驚異すべき近代寫眞術の「天才」が完成せらるゝ迄嘗つて夢想だにせざりし所なるべし。

先づ最寄の寫眞材料商につき御相談せられよ。

東京方面の
シネコダックフィルムは
「特別四十八時間サービス」現像
御用は
東京市[illegible]區[illegible]二十[illegible]三丁目
[illegible]

現像無料

大阪市北區堂島、堂ビル
日本シネコダツクサーヴィス社へ

EASTMAN KODAK COMPANY, *ROCHESTER, N.Y., U.S.A.*

CKF-287

古河鑛業株式會社

株式會社

古河銀行

東京府南葛飾郡隅田町

鐘淵紡績株式會社

取締役社長　武藤山治

株式會社大林組

大阪市東區京橋三丁目

定價			
定價	一冊 八十錢	六冊 四圓八十錢	十二冊 九圓六十錢
送料	参錢	送料共	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年九月十八日印刷
昭和四年十月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　竹内喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三三四番
同長野三二〇五番



黒い瞳に
映るのは
冷たい眞珠か
白薔薇か

黒い瞳に
香るのは
捧げたカルピス
夢の味

一壜が七壜にな

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

